

バカとオタクとリーゼント

あんどろーサンシャイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立文月学園

オカルトと科学と偶然が融合し、召喚獣という試験の点数で強さが決まる存在を用いて戦い、それぞれのクラス設備を奪い合う疑似戦争、又の名を試召戦争と呼ばれるシステムを採用した世界初の進学校である。

そんな文月学園が、素行不良等で学校に通えない子供に教育の場を提供させ、更正を計る為の試案・青少年更正プロジェクトを実行した。

そんな初の試験生として選ばれたのは、かつてとある理由から事件をおこし、少年院に服役していた経歴を持つ男、岡崎大悟（おかざきだいご）だった。

しかし、彼は見た目は完全なる不良であるにも関わらず、根っからのアニメオタクだった。

これはそんな訳ありの男とFクラスの馬鹿共によるハチャメチャ満載な青春物語である。

今さらですがノリと勢いで書いていきます。

4 / 21 少しモチベーションが下がったのと、展開が思い付かないので更新休憩。ですが失踪はしないので気長にお待ち頂けると幸いです。

5 / 1 再開

※報告 逃走中編、コミックマーケット編は作者のネタ切れが激しい為、不定期更新とさせていただきます。

目次

	プロローグ	1
	オリジナル登場人物紹介	21
	打倒Aクラス編	
33	第一問 馬鹿の周りにはバカが集う	
	第二問 ヒロインは遅れて登場する	
56	第三問 男はエロが大好きだ	70
	第四問 クソ雑魚なめくじ	89
114	第五問 対Dクラス 〓開戦〓	
	第六問 対Dクラス 〓決着〓	139
	第七問 終わりは新たな始まりの糧となる	158
	第八問 女の子の手料理は男をイチコロ（物理的）にする	183
	第九問 対Bクラス 〓開戦〓	
211	第十問 対Bクラス 〓作戦〓	
230	第十一問 対Bクラス 〓勝機〓	
254	第十二問 対Bクラス 〓決着〓	

第十三問 俺の彼女は次元が違うわ!!

311

第十九問 三次元なんて嫌だ |

444 424

第二十問 必殺料理人姫路瑞希

第十四問 対Aクラス戦 〱前編〱

462

333 第十五問 対Aクラス戦 〱中編〱

第二十一問 食い物粗末にすんじゃね

354 第十六問 対Aクラス戦 〱後編〱

え! | 第二十二問 子は親に似る、また親は

479

379 第十七問 恋のミルクィ☆打法

子に似る | 第二十三問 実妹が可愛いのは二次元

502

清涼祭編

ただだ! | 第二十四問 いけいけ僕らの可愛いア

523

402 第十八問 三次元のオンナノココワイ

キちゃん☆ | 第二十五問 幼女の笑顔こそ明日への

544

活力

571

第二十六問 必要な犠牲となったのだ

番外編その1 如月ハイランドパーク編

第三十二問 現実のヤンデレはおっか

ない

740

第二十七問 悪鬼羅刹と閻魔王

第三十三問 俺達は逃げられない？

621

755

第二十八問 馬鹿の底力を見せてやろ

第三十四問 本当に怖いのはお化けで

う

649

はなく人間

775

第二十九問 馬鹿と雑魚は違う

第三十五問 三次元に見惚れるなんて

670

……

794

第三十問 終わり良ければ総て良し！

第三十六問 乙女よ、大志を抱け

695

823

第三十一問 清涼祭編 エピロー

強化合宿編

グ 722

第三十七問 盗聴なんて頭にきますよ

！
——
844

第三十八問 女子の裸になんぞ興味は

ない！
——
865

第三十九問 女子風呂へ突撃せよ！

第一夜目
——
888

第四十問 推しの為なら死ねる！！

912

第四十一問 女子風呂へ突撃せよ！

第二夜目
——
939

第四十二問 めるたんに嫌われるとか

自殺モンに決まってるダルオ!?
——
956

第四十三問 女子風呂に突撃せよ！

第三夜目
——
976

第四十四問 試してみな
——
996

第四十五問 送り間違いはらめえええ

ええ！
——
1021

第四十六問 ヤンデレな幼馴染みに死

ぬほど(ガチ)愛されて眠れない

1053

第四十七問 学力強化合宿最終戦

前哨
——
1082

第四十八問 学力強化合宿最終戦

開戦
——
1103

第四十九問 学力強化合宿最終戦

リベンジ戦
——
1136

第五十問 学力強化合宿最終戦
結

末	—	1157
番外編その2	プール編	
第五十一問	俺とプールと水着回ツツ	1178
！	〜前編	
第五十二問	俺とプールと水着回ツツ	1201
！	〜中編	
第五十三問	俺とプールと水着回ツツ	1223
！	〜後編	
修羅場と第二次Dクラス戦編		
第五十四問	正義、執行	1243
第五十五問	リア充は死ね!!!	1261
第五十六問	エロが好きです。でもエロい年上の先輩はもつと好きです。	

1284	第五十七問	今日も今日とて作戦会議
	第五十八問	演技って難しいんだな
…	…	
	第五十九問	エロゲと取引と殺人ゼ
リ	リ	1360
	第六十問	暗殺と死にかけと巧みな罠
	第六十一問	第二次Dクラス戦
幕	幕	1401
	第六十一問	第二次Dクラス戦
結	結	1424
	終	

逃走中編

期末試験&吉井玲襲来編

幕間	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1450	第六十二問	男の携帯電話はプライバシーの宝庫だ！ 誰も触れてはならぬ！！	1594
幕間	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1479	第六十三問	些細な違和感ほど気にし	1617
式	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1501	第六十四問	吉井玲登場	1641
幕間	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1525	第六十五問	宇宙一のバカ	1667
参	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1550	第六十六問	V a m o s !!	1689
幕間	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1571	第六十七問	アイニードエン	1721
肆	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1571	第六十八問	ドスケベなことをするん	1721
幕間	俺とハンターと地獄の鬼ごっこ	1571	でしよう!?	エロ同人みたいに！	

- 1746 第六十九問 Let's ガサ入れ
- 1767 第七十問 宴(オトリー)を始めようか
- 第七十一問 終わりと始まり |
- 1826 第七十二問 灼熱の攻防 | 1794
- コミックマーケット編
- ようこそ、実力主義のお祭(コミケ)へ
- その1 | 1839
- ようこそ、実力主義のお祭(コミケ)へ
- その2 | 1860
- 二年生VS三年生 肝試し編
- 第七十三問 召喚獣の変化 | 1902
- 第七十四問 貧乳と肝試しと新たななる
- 能力 | 1930
- 第七十五問 TOSATU行進曲♪
- 1950 第七十六問 Shall we シャルピー?
- 第七十七問 肝試し開始と不穏な気配 | 2016

プロローグ

――半年前、如月少年院 正門前――

「岡崎、この半年間良く頑張ったな。」

「いえ、全て貴殿方刑務官さん達の指導のお陰です。本当にお世話になりました。」

「いいんだ。しかし、半年前の面影はすっかり無くなったな。手もつけられねえ程の悪
餓鬼だったのがまさか院一の模範囚にまで成長するとはな。」

「はい、俺もこの場所で過ごして、改心することが出来ましたから。」

「ま、唯一変わらないのが、その独特のヘアースタイルじゃねえか？俺の学生時代に流
行った髪型だぜ？」

「はは、こいつは俺のポリシーなんす。それに、昔の俺のダチが誉めてくれた髪型なんで
ね。そう易々と変えるわけにはいきませんよ。」

「そうか・・・そういや、お前はこれからどうしていくつもりなんだ？どこかで働くのか？」
「ああ・・・本当は俺もそうしようと思ってたんすけど、こんな物を貰ったんす。」

『文月学園高等部 編入試験要項』

「文月学園・こりやあ驚いた。文月つていやあ最近話題になつてる学校じゃねえか。岡崎、編入試験つてことは・・・ここに行くつてことなのか？」

「ええ。ちよつと前に院長から呼ばれました。そしたらそこにこの文月の学園長つて名乗る婆さんに言われたんす。『このまま中卒の肩書きで残りの人生を過ごすか、それとも、アタシの学校でもう一度学生をやり直すか、好きな方を選びな。』つて。」

「んで、後者を選んだと？でも何でそんな事するんだらうな？」

「何か、素行不良少年の為の更正プロジェクト？とか言つてましたね・・難しい話っぽかったから途中から聞くの止めましたけど。ま、あの婆さんの上から目線な態度は気に入りませんでしたけど、こんなゴミクズ当然の俺に高校に通える機会をくれたんすよ？なら、こんな誘い断る理由は無いでしよう？」

「そうか・人生何が起こるか分からねえなあ。だけどな岡崎、機会を貰つたつてことはそれ相応の態度で応えなきゃあならないという事だ。少なくとも、相手方を失望させるような真似は何かあつてもしちやならねえぞ。」

「はい、もう暴力沙汰は起こさねえ様努力します。刑務官の皆さんも、お体に気をつけ
て。」

「ああ、そつちこそもう二度と戻ってくるんじゃないぞ。お前が楽しい青春を送れる事を祈ってるからな。」

「ありがとうございます。それじゃあ。」

そうして、再び刑務官に頭を下げ、俺は身を翻して歩き出した。

ああ・・漸く、ようやく辛かった少年院生活が終わった。これにて俺は晴れて自由の身となった。この半年間・・長かった。

血の滲むような生活環境、刑務官達の地獄の扱き、厳しい規則やスケジュール。そして同じ院の奴等からされ続けた陰湿なイジメ・・そんな苦行を俺は全て乗り越えた。最早今の俺には怖いものなど何も無い様に感じる。

そして更に、俺は絶望的だった高校への進学の切符も得た。この文月学園ってえのはどんな所なのか・・うちは特別なシステムを取り入れた最先端の学校だとあの婆さんは言ってたが・・まあそれは行ってみれば分かるだろう。

・・と、その前に一つ、俺にはやるべき事があった。

「この半年間溜まりに溜まったアニメを網羅しなくて
はあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

――

「・・・ふむふむ、今季のアニメは中々の豊作だな。PVを見る限り面白そうな物ばかりだ。」

俺はあのまま近くのアニメショップまで赴き、店頭に所狭しと並べられているグッズを眺めていた。これは俺が少年院に入る前からの日課であり、こうして念入りなチェックを行っている。

何せ、アニメというのは流行の入れ替わりが激しい。自分の見ていたアニメが気づけば過去の産物と化しているなんて普通の事。だから常日頃からの確認は必要不可欠なのだ。

さて、ここまで来れば大抵の人はお気づきだろう。この俺・岡崎大吾は、れつきとしたアニメオタクだ。

「・何い!? 『魔法少女の弟子めるたん』の二期が放送されていたのかあ!? しかも劇場版公開決定だとお!? ・なんて事だ・俺がムシヨに入ってる間にこんな重要な事があったなんて・・!」

俺は劇場版の予告映像を見ながらその場で落胆する。『魔法少女の弟子めるたん』といえばかつては最高の神アニメと評された伝説の作品・・! この俺も毎週の視聴、録画は勿論、DVD & Blu-ray Boxも全て購入し、イベントにも必ず訪れる程だった! 当事の俺は全てをめるたんに捧げたといっても過言では無いっ!!

理由にはならないもん！どれだけ転んでも、躓いても・道を踏み間違えてもっ!!目標とする人がいる限り、アタシは諦めない事を止めないっ!!!」

俺の気持ちに応える様に画面の向こうでめるたんが此方を見てそう言い放つ。ありがとう！めるたん！俺、必ず君のもとまで辿り着いてみせる！だから待つててくれ！君に相応しい男になって、もう一度君に会いに行くよ！

大 好 き だ!! め る

たああああああああああああああああああああああんんんんん!!!!

「・・・今度はテレビ画面の前で土下座してますけど?」

「なんて事だ・・・この国の若者はこんな状態になってしまうほど追い詰められているというのか・・・!?!」

「いや、ただの不審者だと思えますよ?」

さて、本来ならここで売っているグッズを全て購入し、家で視聴するところではあるが、生憎今は手持ちどころか金銭すら持ち合わせていない。まあ、先程まで少年院にいたので私物なんて持っている筈は無いのだが。

あるのは文月学園編入試験の要項と連絡用の携帯電話のみだ。

「仕方ない、めるたんはまたの機会にするか・取り敢えず今日は家に帰って明日の準備をするとするか・母さんと天にもただいまって言わねえとな。」

そう言って俺は立ち上がりシヨップを出ようと出口へ向かったとき、ある一つの光景が目に見え込んだ。

「……………」

丁度出口からすぐの道を右側から歩いてきた二人組の男女のカップル。どちらも俺と同じくらいか少し年上に見え、今時の若者といった派手な格好をしていたのだが、女の方は大きな青いキツネっぽいぬいぐるみを二つも抱えていた。

「随分そのナリに似合わねえ組み合わせだな．．．にしてもあんなもん二つも買ってやったのか？しかも片方．．妙に手作り感があるが．．。」

ま、どうでもいいかと思ひ、俺は家がある反対方向へと歩き出した。クソ．．今季のアニメはどれもこれもが興味をそそられる内容ばかりだ．．考えるだけでワクワクするな！そしたら一刻も早く家に帰り、母親と妹に挨拶と謝罪をして、テレビの前で全裸待機しなくてはな。

『うう．．えぐ．．ひぐつ．．．』

と、道の向かい側からそんな嗚咽が聞こえてきた。何かかと視線の先には、一人の女の子が泣きながら歩いているのが分かった。

ううむ．．流石にあんな小さな女の子が悲しそうに泣いている横をそのまま素通りするのは精神衛生上よくないだろう。

「どうしたお嬢ちゃん。何で泣いてるんだ？」

そう言うのと、その女の子は顔をあげたのだが、瞬間驚きの表情を浮かべる。まあ、いきなりガタイのいいリーゼントの男に急に話しかけられれば怖がるのも無理は無いだろう。

おつと、勘違いしないでほしい。おれはあくまで善意でやってるんだ。俺は三次元の女の子には興味が無いからな。

「う、うう…実は、さつき男の人と女の子の人が来て、葉月の持っていたぬいぐるみを取っていったんです…。」

「ぬいぐるみ…まさかそれって、すげえ派手な格好した奴等じゃなかったか？」

「はい、そうです。でも…それはお姉ちゃんにあげる物だから返して下さいって言ったら…お前みたいな餓鬼より俺の彼女が持ってた方が良くんだよ！　って言われて…二つとも無理矢理…。」

おいおい、さつきの奴等マジか。幾らそのぬいぐるみが欲しいからってこんな小さな女の子から奪ったってのかよ。人間性の欠片も無い真似をしやがって…これだから三次元は…！

「・・・ん？ちよつと待て、その右頬・・・どうしたんだ？」

よく見ると、女の子・・・葉月ちゃんの右頬が少し赤くなっていた。それはまるで何かに強く当たった事で出来た感じだ。

まさか・・・と思い俺は恐る恐る葉月ちゃんに尋ねた。

「・・・殴られたのか。」

俺の質問に葉月ちゃんはこくりと頷いた。

「あのぬいぐるみは、葉月のお姉ちゃんにあげる筈だったんです。ドイツから引越してきたから、お姉ちゃんずっと元気が無くて・・・それでお姉ちゃんが欲しがってたぬいぐるみをあげれば、元気になると思ったんです・・・。」

「・・・。」

「でも、葉月のお小遣いじゃぬいぐるみは買えなかったんです。そしたら、馬鹿なお兄ちゃんがああぬいぐるみを持ってきてくれたんです。それに、もう一人綺麗なお姉ちゃんからもぬいぐるみを貰ったんです。『一つは貴女のお姉ちゃんの、もう一つは貴女のもの』って・・・！」

「とつても嬉しかったです。これでお姉ちゃんも元気になるって思ってたのに・・・折角馬鹿なお兄ちゃんと綺麗なお姉ちゃんが葉月の為にくれたものだったのに・・・うう、え

ぐつ。」

話しているうちに感極まったのか、葉月ちゃんは目を潤ませていた。成る程な……この子は自分の為じゃなく、姉の為に何かをしてあげたいという優しい心の持ち主だ。つまりさっきの奴等は自分の欲を優先し、こんな年端もいかない女の子に手をあげたと、成る程成る程……。

「……葉月ちゃんと言ったな。状況はよく分かった。それ以上泣かなくていい。お兄ちゃんがそのぬいぐるみ、取り返してきてやる。」

「……本当ですか?」

「おう、男に二言はない。」

「……ありがとう!リーゼントのお兄ちゃん!」

涙を拭い、嬉しそうに笑みを浮かべる葉月ちゃん。ふむ、三次元の女の子にお兄ちゃんと呼ばれるのも案外悪くないかも知れないな。てかりーゼントのお兄ちゃんって……

「おし、じゃあ葉月ちゃん。俺はさっきの人達ぬいぐるみを返して貰うように話しているから、ここで待っててくれるか?あ、後これを持っておいて欲しい。」

「う、うん。大丈夫だけど・・・」

「なあに、すぐに戻ってくる。葉月ちゃんは何も心配しなくていいから。じゃ！行ってくる！」

そう言って、俺は来た道を引き返し、あのカップルを追いかけた。

――

ずっと道を早歩きしていると、数分もしないうちに例のカップルを見つけた。幸いな事に通行人もいない。状況的には大助かりだ。

すると、カップルの話し声が聞こえてくる。

『いやー！ラッキーだったな！お前の欲しがってたぬいぐるみが二つもゲット出来てよ！』

『うんうん！しかもさ、さっきのガキの態度マジウケたしね！お願いします・・・それは大

切な物なんです・・返してください・・だつてさ!」

『ギャハハ!そんな俺等に関係ねーからつての!しかもアイツ俺にしがみついてきやがつてよ。思わず殴つちまつたぜ!』

『アハハ!アイツ泣いてたねー、ザマーミロつての!』

成る程な。さて、それじゃあとつとと用件を済ませるか。俺はゆっくりと歩み寄つて、男の方に声をかける。

「すみません、ちよつと宜しいでしょうか?」

『ああ?なんだお前。』

二人組が揃つて顔を此方に向けてくる。

『うーわ、何コイツの髪型、いつの時代かつての。』

『古臭えし、だつせえな。んで、俺等に何の用だよ?』

男の方が一歩前に出て、俺に対して威嚇するように詰め寄ってくる。なんだ、そつちから来てくれるのか。なら話は早いな。

「いえいえ、そんな大した事では無いんですよ。すぐ済みますから。」

その瞬間、俺はその男の顔面に拳を叩き込んでいた。

「テメエ等・・・子供に手えあげやがって。生きて帰れると思うなよ！」

――

「お待たせ、葉月ちゃん。」

事を済ませた俺は、葉月ちゃんの待っている場所へと戻った。

「あつ、お兄ちゃん！お帰りなさいですっ！」

俺の姿を見つけた葉月ちゃんがトコトコと歩いてくる。

「お兄ちゃん・・・大丈夫だったですか？」

「大丈夫だ。ちよつと軽く『お説教』してただけで、もう解決したから。ほれ、約束通りに返して貰ってきたぜ。これでいいのかな？」

俺は両手に抱えていた大きなぬいぐるみを二つ、葉月ちゃんに渡す。彼女の体にはその大きなぬいぐるみは持ちづらそうだったが、とつても嬉しそうな表情をして受け取っ

てくれた。

「ノイちゃん・・良かったですつ・・ありがとう！リーゼントのお兄ちゃん！」

「はは、どういたしまして。それよりも、もう日も沈みかけてる。早く家に帰ってお姉ちゃんに渡してやりな。」

「はいっ！あ・・でもお兄ちゃん、その手・・怪我してるです・・。」

葉月ちゃんが不思議そうに俺の右手を見詰める。そういえば、あのときにどうやら付いてしまった様だ。

「ああこれか。気にしないでくれ。ちよつと途中で擦りむいただけだから。じゃ、俺はもう行くね。」

「あつ！待ってください！えつと・・お兄ちゃん、ちよつと持っていて欲しいですつ。」

俺は葉月ちゃんから一旦ぬいぐるみを受け取り、持っていた鞆から何かを取り出した。何だ？お礼でもしようというのか？

「これ、お兄ちゃんにあげるですつ！」

葉月ちゃんの掌には、青いローブを着た金髪の女の子のキーホルダーがあったのだ
が・・

「……これは！めるたんのキーホルダー!？」

そう、それは先程までかじりつく様に眺めていた『魔法少女の弟子めるたん』の主人公、めるたんだったのだ。

「お兄ちゃん・見た目はちよつと怖いですけど、とつても優しいです！さつきの馬鹿なお兄ちゃんと同じくらい好きですつ！だからこのキーホルダー、貰つて欲しいですつ！お兄ちゃんがずつとめるたんの売り場にいたので、好きだと思つたんです！」

「おお・い、良いのかい？こんな宝物を貰つちやつても・!？」

「はいっ！是非お兄ちゃんに受け取つて欲しいですつ！」

葉月ちゃんがそこまで言うのだ。ここで受け取らないのは彼女の誠意を傷つけてしまふ、そんな事は俺には出来ない！という訳で、俺は葉月ちゃんからキーホルダーを受け取つた。

ありがとうございます葉月様！この御恩は一生忘れませぬ！ひやつほう！めるたんめるたん！

「それじゃ、葉月はお家に帰るです！リーゼントでオタクのお兄ちゃん！バイバイですっ!!」

そう言つて、葉月ちゃんはパタパタと駆け出していった。まさか俺があんな小学生に感謝されて嬉しく感じるとは・・・どうやら俺は少し三次元を侮っていたのかも知れないな。

何はともあれこれで一件落着か。お姉ちゃんの為と聞いたか、ドイツつていやあ日本からかなり距離がある。ただでさえ国内の引っ越しでも相応だというのに、海外からもなればそりゃあ寂しさや孤独感は相当だよな。元気になるばいいが。

「・・・さて、俺も帰るか。さて・・・まずはこのアニメから見るとするか、丁度今日から一話目だしな。」

そして、俺はその場を後にした。だが帰路についている途中でふと思った。

・・・あの子の言っていた馬鹿なお兄ちゃんつて、どんな奴なんだろうか。ま、小学生に馬鹿といわれてる位だから余程のヤバい奴なんだろう。ま、別にどうでもいいか。

「学園長、本当によろしいのですか？」

「ん？ああ、高橋先生かい。何のことだい？」

「今回の更正プロジェクトの事です。確かにこれが成功すれば我が校はかなりの知名度と評判を得ることが出来ます。」

「その何が不満なんだい？」

「その対象の人物です。私も彼についての経歴を見させて貰いましたが・・・正直に言いますと、彼を文月に入れるのは危険ではないでしょうか？」

「・・・。」

「一応少年院でちゃんとした訓練を受けてきた様ですが、だからといって安全かと言われるればそうではありません。うちの生徒に危害を及ぼす可能性も・・・」

「高橋先生、アタシだってそれくらい理解しているさね。だけど、それを踏まえた上でアタシはコイツを選んだのさ。」

「・・・と言いますと？」

「ま、それは追々わかるさね。コイツはね・・・根っからの悪人でも、不良なんかでもない

のや。」

――

「お姉ちゃん！ただいまですっ！」

「お帰りなさい、葉月・・それ、どうしたの？」

「これ、お姉ちゃんへのプレゼントですっ！」

「あつ、これ・・ウチがずっと前から欲しかったノイちゃんのぬいぐるみ・・ウチの為に？」

「はいっ！お姉ちゃんが最近元気が無いから、葉月が元気になってほしくて用意したですっ！」

「葉月・・・ありがとうね。お姉ちゃん、すっごく嬉しい！」

「喜んでくれて良かったです！それに、今日葉月、いい人に会ったんですっ！」

「いい人？」

「はい！とっても大きくて・・顔がちよつと怖くて・・・」

「リーゼントでオタクのお兄ちゃんなんですっ!!」

オリジナル登場人物紹介

岡崎大悟（CV 玄田哲章）

性別 男

身長 187cm 雄二よりも少し高く、鉄人とほぼ同じ位

体重 95kg 太っているわけでは無く、筋肉があるため

どんな人間か？

リーゼントヘアが特徴の、何者にも恐れずに自らの信念に従い行動する性格の持ち主。しかしその見た目から、初対面の人物からは不良と勘違いされやすい。

『二次元を愛し、二次元の為なら死ぬる』を座右の銘としており、れっきとした二次元オタク。校内放送でアニソンやエロゲのドラマCDを平気で流す、授業中だろうと堂々と漫画やラノベを読む、反省文にオリジナルのラノベを書いて提出する等、行動が逸脱しており、鉄人からは『吉井達とは違うベクトルで厄介』と言われた。

しかし本人曰く、「俺は二次元を人より愛しているだけの普通の高校生」とのこと。

独特の感性や哲学を持ち、物事に対して結果よりも『どれだけそこに情熱を注げるか』を重視する。その為、あまり対象の知識に乏しくてもそれが好きであるなら良いと思いい、アニメ初心者を『にわか』と貶す害悪オタクなどを死ぬほど嫌っている。

性癖は二次元限定ならばかなり広く、女子高生はもちろん、幼女、小中学生、人妻、外国人、獣人等の人外でもイケると公言していて、ムッツリー二とは意外にも波長が合い、共にお宝を共有しあう仲となる。

幼い頃にとある深夜アニメを見た際、画面の向こうに広がる三次元では到達出来ない美しい世界に感動し、オタクの道を歩き始めた。

最近のお気に入りには「魔法少女の弟子めるたん」の主人公めるたん。

秀吉や優子とは中学時代から付き合いがあり、秀吉とは互いに親友と呼びあう仲。

しかし、とある事件がきっかけとなり大悟は警察に逮捕され、半年間少年院に服役する事となってしまふ。そして退院後は「素行不良少年改善育成プロジェクト」の試験生に選ばれ、文月へと編入する。そこで秀吉と再開し、彼の紹介で明久達と出会う。

前科持ちという異端な経歴を持つ自分を差別せず快く受け入れてくれる明久達に感謝しており、また彼等も自分と同じく変わり者だった為、クラスは違ったがよくなるようになった。

義理人情に厚く、一度ダチと認めた者には自分の全てをさらけ出す。また自分より下

の人間や子供を苛めたりする奴は絶対に許さない不良とは真逆の性格。しかし根っからのロリコンであり、特に葉月にデレデレである。

特技

「神の右手」と「無限の妄想力」を持つ。

その為、どんなジャンルや人物、アブノーマルプレイだろうと関係なく、すぐさま二次元のイラストや文章、漫画に変換する事が出来、その腕前はプロのイラストレーターや作家顔負けのレベル。

またそれを派生させたオリジナルグッズを作ることも出来る。

その特技を生かし、現在は文月の裏経済を支配する二大巨頭の一つ「ダイゴブックス」を経営している。もう一つはムッツリ商会。

顧客は多く、明久、ムッツリーニ、姫路、美波、久保、清水、霧島、玉野、高城等

また喧嘩もかなり強く、中学時代は広く名を馳せていた。「二次元の女の子に愛されるためには自分がそれに相応しいぐらい強い男にならないといけない」と本気で思っており、小さい頃から筋トレや格闘技で体を鍛えに鍛えまくっている。

その結果、並大抵の相手なら病院送りにし、「悪鬼羅刹」と恐れられていた雄二さえも

凌ぐ強さを手に入れた。ついた異名が「鬼を振り伏せた男」「閻魔大王」

家は中華料理店を営んでおり、大悟もよく手伝いをしていたおかけか、料理の腕はピカイチ。得意料理は中華だが、和食もそれなりにできる。最近の流行は寿司修行（見よう見まね）。

得意教科 社会科目全般

苦手科目 理数系、英語

各科目の成績

科目ごとにSS、S、AA、それぞれのクラスレベル、FFにランク分けされる。

SSランク：担当教師や高橋主任を上回るレベル

Sランク：高橋主任や担当教師レベル

AA：霧島や姫路、久保レベル

A：Aクラスの平均レベル

B：Bクラスの平均レベル

以下略く

F F : : : 明久、または一桁レベル

現在の岡崎大悟の成績

現代国語 B

あまり得意ではないが漫画や小説を読みまくっているため、読解力や小論文系の問題なら高得点を出せる。

古典 B

歴史科目の副産物で調べるうちに覚えていった。紫式部とか清少納言とか二次元にしたら可愛いのでは？

数学 F F

物理 F F

地学 F F

生物 D

化学 F F

理数系は大嫌いだし苦手。基本的に明久やムツツリーニレベル、またはそれ以下。というよりも、「分からねえし楽しくもない」という理由で授業もテストも聞き流している。

けど、ケモ耳キャラなどの動物の擬人化キャラを見てから少し生物は勉強した。

英語 F

英語は、「俺は日本人だから覚えなくても何とかなる！」という理由であんまり勉強してない。

けど島田と知り合ってから少しだけドイツ語のアニメに興味がある。

世界史 SS

日本史 SS

地理 AA↘SS

現代社会 AA↘SS

大悟の主力とも言える得意科目。理由は二次創作活動で歴史ものを取り扱う際、覚えるうちに面白くなってきて調べまくったから。地理はあちこちにライブや聖地巡礼に行っているうちに身に付いた。

現代社会は少年院に服役時、法律や国の仕組みについて嫌というほど覚えさせられた為、点数が高い。またお金の動きや仕組み、経済はダイゴブックスを運営するにあたり

必要と思った。

保健体育 B

ムッツリーニといえるうちに点数が伸びていった。けど別に三次元の体になんて興味がない！

召喚獣

髪型は本人と同じくレーザーセントヘアーに紫の和装束。巨大な金棒を武器にして戦う。スピードはあまりなく、ムッツリーニのような加速型とは相性が悪い。しかしそれを補える程のパワーを備えており、攻撃が当たれば相手の召喚獣の点数に関係なく吹っ飛ばせる。

また遠距離にいる相手には、金棒をぶん投げて攻撃することも出来る。ソースは某有名漫画のあの最強の生物と呼ばれる海賊。

腕輪

日本史、または世界史で400点以上を取った時に能力が発動する。

変身：……発動時の点数×一秒につき、巨大な龍に変身できる。変身中は自身の変身前の点数以下の召喚獣の攻撃を超激減させ、高い場合でもそのダメージを軽減する。

龍化時の攻撃方法（暫定）

恋のバーニング☆ブレス：：：：巨大な熱線を口から勢い良く発射する。

恋のクリスタル☆ブリザード：：：：上空から巨大な氷塊の数々を降らせる。

恋のシャイニー☆ボルテック：：：：辺り一面に雷鳴を降り注がせる。

恋のスピニング☆ハリケーン：：：：その巨大な体躯をうねらせるように回転させ、竜

巻を起こす。

隠し技：：：：???

学園長曰く「あれは特別で岡崎のような相当な体力の持ち主じゃないと例え点数が高くても使えない」とのこと。

ただし、使用後は点数が超激減（ほぼ戦力外レベルにまで）してしまい、使用者自身もその反動としてとてつもない疲労感に襲われる、まさに一戦に一回の諸刃の剣。

所持品

作品（同人誌やグッズ等の依頼品）

漫画、ラノベ、ゲーム機、仕事用ノートパソコン

使う用の二次元グッズ（シャーペンや筆記用具入れ、クリアファイル、キーホルダー、財布）など

岡崎凜花（CV 日笠陽子）

性別 女

年齢 29歳

どんな人間か？

赤い髪と鋭い目付きが特徴の、細かいことは気にしない竹を割ったような性格の女性。大悟と天の実際のシングルマザー。

かなり自由奔放な性格をしており、息子達ですら予想しきれない程の行動に出ることもしばしばな為、子供の大悟や天はかなり苦労している。また子煩悩なところもあり、冷蔵庫にとっておいたプリンを大悟に食べられた時にはアイアンクローからのバックドロップをかけるなど実の息子にも容赦ない一面を見せる。

また、仁義や人道を欠く行為を絶対に許さず、『喧嘩は何度でもしたっていい。けど弱いものイジメは何があろうとするんじゃないやねえ』と大悟に教育してきた。

大酒豪であり、よく朝まで居酒屋で呑んでいる姿を目撃されている。大悟曰く『秀吉が鉄の胃袋の持ち主ならあの人は鉄の肝臓の持ち主』

これまでの軌跡。

一般家庭の一人娘として生まれる。地元では相当な悪戯鬼だったらしく、男顔負けの

腕つぶしを誇っていた。しかし、中学二年生の時に当時付き合っていた男に突然レ○プされ、その時に大悟を身籠ってしまふ。そして妊娠が発覚した後には相手の男は姿を消し、両親からは絶縁宣言をされた。その後は親戚に引き取られることとなり、周りからは中絶を勧められるも『自分達の勝手な都合で罪の無い命を奪うなんて出来ない』と突っぱね、後に大悟を出産する。

その後は子育てをしながら定時制高校に通い、その時に今度は長女である天を出産（？）した。卒業後は昔からの夢であった『料理人になる』ことを目指し、大悟と天を親戚に預けて東京の調理師専門学校へと入学し、卒業したら、そのまま中国に飛び立って、本場の高級料理店で修行を積み、腕を磨いた。

そして、二十五歳の時に帰国し、そのまま自分の店『中華料亭 劉玄』を開く。最初こそ経営は苦しかったものの、今では雑誌やグルメ番組などで紹介される人気店となった。

岡崎天（CV 小澤亜李）

性別 女

年齢 14歳

どんな人間か？

ふわふわした雰囲気と幼い顔立ちをした女の子であり、大悟と二つ違いの実妹。地元
の学校に通う中学三年生であり、同級生にはムツツリー二の妹の陽向や久保の弟、良光
がいる。若干ブラコン気質。

大悟や凜花と違い、性格は温厚かつ人懐っこい。しかし、脅しや脅迫などに一切ビビ
らない大悟譲りの度胸の強さと、凜花譲りの自由人さも兼ね備えている。また、『別に全
裸じゃないから』という理由で何の躊躇いもなく明久達の目の前で着替え始めたりと
中々の強者。

その為通っている中学校では男子から絶大な人気を誇り『彼女にして守ってあげたい
ランキング』にて常にトップになっている。ちなみに二位は何故か秀吉。

しかし、彼女は大悟と同じく興味のないものにはとことん無頓着であり、自分に告白
してきた男子に対して『私は好きじゃないから無理』『どいて、通行の邪魔』などと冷た
い態度をとりがち。これによって何人もの男子が人間不振になったとかならないとか。

大悟ほどではないが二次元が好きであり、特にコスプレをしたりさせたりするのがお
気に入り。またイラスト技術も大悟に引けを取らない腕前。

よく大悟をいじったり茶化したりしているが、本心では大悟のことを心から尊敬して
おり、彼が兄であることを誇りに思っている。その為兄妹での喧嘩や思春期にありがち

な冷えた関係という事はただの一度もなく、大悟が少年院に入っている間も、妹として一途に兄の帰りを待ち続けた。

また、拗ねるとウザ可愛くなる。

打倒Aクラス編

第一問 馬鹿の周りにはバカが集う

俺が文月学園に編入してから初めての春が訪れた。

校舎へと続く坂道を俺は悠々自適に歩き、その両脇には桜が満開に咲き誇っている。いやー、これこそ春って感じだな。

アニメやゲームならここら辺で曲がり角から女の子とぶつかって「いたた・ごめん なさい」という台詞と転んだ拍子にその女の子のパンツを見てしまうというラッキーな展開がお約束なんだがね。

「岡崎、遅刻だぞ」

と、校門の玄関の前で低い声で止められた。女の子なんていなかっただんや。

「おはようございます。西む……あ、鉄人先生」

「おい、何故逆に言い直したんだ。ちゃんと名前と呼べいつも言っているだろう」

「おっと、これは失礼しました。西村鉄人」

「違う、訂正はしろと言ったがそういう事じゃない」

浅黒い肌に筋肉質な体つき、短髪といかにもスポーツマンといった風貌をしたこの男は西村教諭、通称鉄人。由来は彼の趣味がトライアスロンなのと、人間離れした生命力かららしい。

まあ、確かに冬でも半袖でいたときはマジかと思っただけ。

生徒指導ということもあり、生徒からは恐れられているが俺は別にそうは思わない。むしろ学校にはこんな先生もいても良いと思ってる。ま、何度も色んなモン没収されるけど。

「いやー、すみません。昨日はどうしても徹夜で……」

「なんだ、また夜更かししてアニメを見ていたのか。お前のその趣味を否定はしないがな、学業に支障が出る様では困るぞ」

「大丈夫ですよ先生。そのメリハリはきっちりつけているつもりですから。勉強と趣味を両立させてこそその学生でしょ」

「そう思ってるなら遅刻の常習犯になるな。俺の教師生活の中で遅刻届の数が三桁を超

えた奴はお前だけだ」

「成る程、つまり俺はオンリーワンな存在という事ですね？悪い気はしませんな」

「どや顔で言うな馬鹿者。一応お前は『特別監視対象生』なんだからな。まあいい……ほれ、振り分け試験の結果だ。受けとれ」

「あざっす」

西村教諭が箱から封筒を取り出し俺に渡す。その宛名には『岡崎大悟』と名前がでかでかと書いてあった。

この文月学園にはクラスがそれぞれAからFまで六クラスあり、二年生からは成績順でクラスが分けられる。アルファベットの早い所から段々と振り分けられるので、頭が良ければAクラス、悪ければFクラス。

つまり、Aクラス⇨天才、Fクラス⇨馬鹿という方程式になっているのだ。まあ、流石にFクラスは無いだろう……。

「でも、わざわざこんなやり方しなくても張り出すなり一斉に渡すなりしてもいいんじゃないっすか？そっちの方が先生も楽でしょう？」

「そう思ってるのなら騒ぎを起こすな。確かにお前はこの半年間ちゃんと学校に通って

勉強もしつかりやっている様だが、何度も生徒指導室に呼ばれる様な真似はするんじゃない。只でさえ吉井と坂本という悩みの種があるというのにお前まで加われれば面倒なんだ」

「え？俺ってアイツ等と同じ部類なんすか？」

なんて失礼な。と思いながら俺は封筒をあける。ここには自分がこれから一年間所属するクラスが記されている。さてさて、俺はどのクラスになるのやら・

「……岡崎、今だから言うがな。この半年間お前の事を見てきて『ひよつとすると、岡崎はオタクなんじゃないか』という疑いを抱いていたんだ」

「まあ、何を言うんですか先生。俺はごく普通の学生じゃないっすか。ここに来てから問題事も騒ぎも起こして無いですよ？」

「ならお前の今までの行動はなんだ。突然校内放送でアニソンを流したりテストの裏にアニメのイラストを書いてそのまま提出したり反省文は何故かオリジナルのライトノベルになってたり猥褻な本や映像を作って生徒に販売したり勝手に体育館で男女コスプレコンテストを開催したりとな。その質実剛健とした見た目から想像もつかん事をやらかしてくれたものだ。正直吉井達よりも酷いんじゃないかと思っていた」

なんという事だろう。まさか俺があの馬鹿の代名詞と呼ばれる明久以下の存在と見られるとは。訴訟も辞さない。

「先生、それは心外ですよ。これらはあくまでも皆に二次元の良さを理解して欲しいが故の行動なんです。決して皆に迷惑はかけていませんし、一部の生徒からは大好評なんですよ?」

「その発言が正にそうだろうが……はあ、だが悲しいことにお前のそう言った所は認めている、俺を含めた教師全員がな。そして今回の振り分け試験の内容を見て、俺はようやく理解したよ」

開いた封筒の中に入っていた紙には、Fという文字と、めちやくちや頑張りましょうという印鑑が押されていた。

「岡崎大悟……お前は紛れようも無い真性のオタク馬鹿だ」

こうして、俺の最低クラスでの生活が幕を開けた。

「な、なんだこの教室は……」

二年生のクラスがある三階へと向かった俺は唾然とした。何故ならすぐ目の前にあったのは普通の何倍もあろうかという教室だからだ。

「こ、これがAクラス、天才達の集う場所か……」

黒板の代わりにあるのは大きなプラズマディスプレイ、ノートパソコン、個人用のエアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、そして天井にはバカでかいシャンデリア：もうここ教室つてよりホテルだろ。

くそう……ここならのんびり紅茶を飲みながら優雅な一時（アニメ観賞）も可能じゃないか……羨ましすぎる。

「でも、Aクラスでこの設備なんだ。幾ら最低クラスとはいえ、普通の学校よりは設備は整っているんじゃないか？」

そんな若干の期待を抱え、俺は自分のクラスへと向かった。

『大悟、Aクラスじゃなかったんだ……』

——Fクラス前

………嘘やろ？

二年F組と書かれたボロボロの木製プレートの前で俺は戸惑っていた。いや、なんだこの外観は？ボロボロじゃねえか、本当にここさっきのAクラスと同じ施設なの？家畜小屋かな？気づかぬ内に俺は空間転移でもしたのかな？

「幾ら馬鹿が集まるクラスとはいえ……ここまでかよ」

中に入ると、もっと酷い光景だった。

かび臭い教室、薄汚れたちゃぶ台に継ぎ接ぎだらけの座布団、隙間風が吹きまくる窓。ここは江戸時代か？もうこれ教室じゃなくて廃屋だろ。マジか、この一年間ここで過ごさなきゃならないのか。まあ、俺は拾って貰った身だからな、そんなはずかかと文句は言えない。

「よう、お前もFクラスか、大悟」

「あ？ああ……雄二か」

教壇に立ち、俺に話しかけてきたチンピラ風の見た目をしたコイツはダチの一人、坂本雄二だ。

「そう言うお前もFクラスなのか、意外だな。てか何で教壇に立ってんだよ？」

「ああ、俺がFクラス代表だからな。試しに立ってみた。宜しくな、大悟……いや『兄貴』って呼んだ方がいいか？」

「やめろ、お前はそんなキャラじゃねえだろうが。あと俺を兄貴と読んでいいのは俺を慕う幼女か女子中学生（二次元に限る）だけだ！悔るな！」

「そう照れるなって——ん、大悟、何か落としたぞ」

雄二はそう言つて俺の鞆から落ちた物を拾い上げる。

パサツ

『坂本雄二が霧島翔子に獣のような表情で襲いかかろうとする表紙の同人誌』

「……おい大悟、なんだこれは？」

「ん？おおそれか。どうだ雄二、これはまだどこにも出回っていない出来立てほやほやの新作でな。中々の出来だと思わないか？ 特にこの霧島がアへ顔でよがってるシーンなんかはおすすめで——」

スツ……

ビリビリビリビリツ!!↑雄二によって同人誌が破かれた音

「なんて恐ろしい物を描いてやがんだお前はあああああ!!!」

「ノオオオオオオウウウ!!!?」

雄二は無情にも、俺が端正込めて造り上げた代物を目の前で破り捨てやがった。

「貴様アアア!!よくもこの俺の至極の逸品をおおお!!」

「黙れ!大悟テメエ!!俺の知らねえとこでとんでもねえモン作りやがって!!」

とんでもない物だ?!?これは俺が書いた中でもかなりの傑作『雄二×翔子　く獣と化した幼なじみく(本人からの依頼作)』だぞ!しかも今回は今までよりもかなり濃密な内容に仕上げてきたというのにつ……!!

「何故だ!俺の作品のどこが気に入らないというんだ!?!」

「全部だ!もうどつから説明していいのか分からねえぐらい全部だ!しかもヤケに上手く描きやがって!それが更に拍車をかけて腹立たしいんだよボケ!」

「だからといって破くこたあねえだろ!!人のモン破り捨てるなんてお前は鬼か!?!悪魔か!?!それともなんだ!?!やっぱり明久とのカップリングの方が良いってのかこのホモ野郎!!」

「おい待て!何でそこで明久が出てくるんだ!?!どつちも嫌に決まってるだろうが!悪寒と吐き気と嫌悪感しか感じねえよ!」

そう言つて俺と雄二は互いに胸ぐらを掴んで睨み合う。この野郎……!! こうなつたら本当に明久×雄二で描いて全クラスにばら蒔いてやろうか。そして女子間でのコイツの渾名を『攻めの坂本』にしてやる!

「全く、お主等は朝から騒がしいのう。雄二、大悟」

「おお、秀吉じゃねえか。お前もFクラスか?」

俺と雄二の間に入つてきた可愛いコイツは木下秀吉。男子でもなく女子でもない新たな性別、『秀吉』『男の娘』という部類に属する稀少な存在だ。そして何気に俺とは中学からの付き合いがあつたりする。俺とは違い華奢で綺麗な声と見た目をしているが、一番仲が良い奴だ。可愛い。

そして、岡崎大悟主催『男女混合コスプレコンテスト』において男子部門、女子部門、秀吉部門において三冠を取つた逸材でもある。

「うむ、大悟と同じクラスになるのは中学以来じゃの。俺も嬉しく思うぞ。これから一年間宜しく頼むぞい」

「おう、宜しくな相棒！これでより一層お前を題材にしたエロ同じ——作品が捗るぜ！」

「待て、早速聞き捨てならない言葉が聞こえたような気がするのじゃが」

「気にするな。それより秀吉、ムツツリーニはいないのか？」

「ムツツリーニならそこにおるぞ？」

秀吉が指差した先には、黙々と一眼レフカメラを操作している小柄な男子生徒がいた。俺はそいつのもとへ向かう。

「よお、お前もFクラスだったみてえだな。ムツツリーニ」

「……………大悟」

カメラから俺へと視線を変えたこの男は、俺の悪友の一人、土屋康太。またの名を寡^{ムツツ}黙^{リーニ}なる性^ニ職^者者。その名の通り寡黙で無愛想だがその膨大な知識量と行動力からエロに関して右に出る者はいないと称される程のムツツリスケベ野郎だ。

「……………流石に、保健体育だけじゃ無理だった。」

「だろうな。ま、今年から一緒のクラスになれて俺は嬉しいぜ。宜しくな」
「……………こちらこそ、宜しく（コクリ）」

さて、軽い挨拶を終えたところで本題に入るとしよう。

「早速だがムツツリーニ、約束のブツだ。きつちり耳揃えて用意させて貰ったぜ」

「……………流石大悟。相変わらずの良質さ。それで——」

「おう、今回は新春特別価格で三割引だ」

「……………承認（ニヤツ）」

俺はムツツリーニにアキバで収穫したメイドのオリジナル写真集を袋に閉じて渡し、報酬金を受け取った。

「……………ちなみに、次回はいつ頃になる？」

「すぐ——といきてえ所だがそうもいかねえ。何せこれまでに製本の依頼が殺到しててな。出来るのは早くても一週間はかかりそうだ」

「……………仕方ない。大悟の作品にはそれほどの価値がある。それまでにこつちも相

応の物を用意しておく」

「サンキュー、お前のその秀逸な写真が俺の作品製作の原動力だからな。それに俺はあくまで金や名声が目的じゃねえ、皆に二次元の素晴らしさを知って欲しいからやってんだ。そこでその実現にはお前の存在が必要不可欠なんだよ。これからも頼むぜ、ムツツリーニ」

「……………こちらこそ。大悟……………お前は最高だ」

そして、俺とムツツリーニは固い握手を交わす。やはり持つべきものはダチだな。

俺とムツツリーニは協定を結んでおり、俺がコスプレイヤーやメイド等の写真、オリジナルの二次元の女の子のイラストを提供する代わりに、ムツツリーニの自慢の写真を安く買い付ける。そして俺がそれを元にイラスト集やその人物をモデルとした同人誌を作り、販売する。その売上げの何割かをムツツリーニに譲渡する。

これが、ムツツリーニが運営する『ムツツリ商会』と俺の『ダイゴブックス』間で行われている取引の内容だ。

「なんじゃ？またいやらしい事でも企んでおるのか、お主等」

「……………いやらしい事なんて何もない」

「そうだと秀吉。これは男同士の会話なんだから秀吉が聞いては駄目だ」

「大悟、昔からずつと言つとるが儂は男じゃぞ。お主のよく言う男の娘なんぞではないからの？」

「何いってんだ！それはあくまでも戸籍上の話だろ！」

「いや待て大悟！事実でも儂は男じゃからな!？」

と言つて俺の言葉を否定する。全く、どうしてそこまで自分を男と言い張るのだろうか。そろそろ本当の自分に気づいてもいい頃だろうに。

どうやら秀吉には親友として後で男の娘についてのレクチャーをする必要があるらしい。うだ。

「全く……大悟は良い意味でも悪い意味でも昔から変わつておらぬの」

「コイツは妄想力と二次元に対する執念はムツツリーニ以上だからな。とても少年院帰りとは思えねえ」

「……………人は見かけによらない。」

「そう褒めるな褒めるな、照れるだろ？」

「ま、要はただの馬鹿なアニメオタクだけだな」

「おう雄二、俺の必殺恋のミラクル☆ボディブロー受けてみるか？」
「やめい大悟。む、そういえばまだ明久が来とらんようじゃが・・。」

秀吉の言葉に俺も気づく。よくよく見ればまだ俺達を軽く凌駕するほどのバカ野郎、吉井明久の姿が無いじゃないか。奴がFクラス以外に配属される事は絶対に無いので、多分まだ来ないだけだろう。

全く、進級初日から遅刻なんてしようがない奴だな↑遅刻回数三桁の男

「…………お、あれは明久じゃねえか？」

雄二が窓の外を見てそう言った。見てみると明久が鉄人に振り分け試験の結果を貰い、地面に伏せている姿があった。

「あの調子じゃ、アイツもFクラスだな。」

「俺は信じてたぜ。明久はここ以外ありえねえ」

「……………流石、馬鹿の象徴」

「まあ、予想通りじゃの」

確かに俺達はFクラスの人間、つまり馬鹿だ。だが、どんなものにも優劣があるように上には上がいる。

馬鹿の中でも馬鹿キング・オブ・バカの最上位、それが吉井明久なのだ。

暫くすると、ガラツと扉が開いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

「……なにやってんの、雄二？」

「先生が遅れているらしいから代わりに教壇に立ってみた」

そんな茶目つ気のある声で入室してきたのは、文月においての馬鹿の象徴であり代表格の男、吉井明久だ。

「おせえぞ、明久」

「大悟！ 大悟もFクラスだったんだね？」

「おう、宜しくな明久……そんでだ」

『秀吉が『ピー！』して『バキューン！』して『自主規制』してるイラスト（R18）』

「価格は半額にするが？」

「買ったアアアア!!!」

俺は明久に写真を渡し、五百円を受け取った。

「おおお……流石だよ大悟！なんて素晴らしい作品なんだ！僕は君と同じクラスになれることを誇りに思うよ！」

「俺もだ明久。これからも御鼻根に頼むぜ」

「大悟!?!さらつと今とんでもない物が見えたのじゃが!?!」

そして俺と明久がお互い笑顔でサムズアップをしていると、不意に後ろから声が聞こえてきた。

「えーと、ちよつと通して貰えますか？それと席について下さい。ホームルームを始めますので」

そう言われ、俺と明久は席？につく。

「えー、おはようございませう。F組担任の福原慎です。宜しくお願ひします」

先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、やめた。え？ チョークもねえの？

もうそれ学業に支障出るだろ。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい」

すると、クラスメートの不満が一気に飛び出す。

「せんせー、俺の座布団に綿が殆ど入ってないですー」

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください」

「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

何これ、さっきのAクラスとの差が絶望的過ぎて笑いも起きないんだが。俺の行った少年院でも流石にここまでじゃなかったぞ。

でも、あの婆さんが言つてたな。ここはどれだけ勉強を積んだかで学生生活の良し悪しが決まる場所だと。確かに、努力して結果を出した奴にはそれに見合つた環境が与えられるのは至極当然だ。それをしなかつた俺等にはこの程度が相応しいという事か。

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします。」

指名を受けて、生徒達が次々と自己紹介を始めた。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

俺の親友であり絶世の美人こと木下秀吉。

「……………土屋康太」

趣味は盗撮と性教育の参考書採集。ムツツリーニこと土屋康太。

にしてもここは男ばかりか。畜生！これじゃ俺が長年追い求めてきたハーレム学生生活なんて夢のまた夢じゃねえか！

「島田美波です。ドイツ育ちなので日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。趣味は……………吉井明久を殴ることです☆」

「誰だっ!?恐ろしくピンポイントかつ危険な趣味を持つ奴は！」

「はろはろー。吉井、今年もよろしくね」

おっと、どうやら女子がいたようだ。ドイツ育ちの帰国子女である島田美波だ。去年

野太い声で最愛の男性という単語の大合唱。想像以上に不快だな。

「失礼。忘れてください。とにかく宜しくお願い致します。」

作り笑いをしながら席につく明久。……今のお前の心情が手に取るように分かるぞ。そうだよな。大勢の男共にマジな声のトーンで『ダーリン』なんて言われりゃあ吐きたくもなるわ。Fクラス恐るべし。

その後も自己紹介は続く。やがてもうすぐ全員の紹介も佳境に差し掛かろうという時——

ガラッ

「あの、遅れて、すみま、せん……」

『え?』

教室の扉が突然開き、息を切らしながら一人の女子生徒が入ってきた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしている所なので姫路さんお願いします」

「は、はい！あの……」

「姫路瑞希といます。宜しくお願いします……」

……うっそーん。

第二問 ヒロインは遅れて登場する

「あの、姫路瑞希といえます。宜しくお願ひします……」

縮こまるように自己紹介をする姫路。その時に彼女の胸部にあるもの（デカイ）がブルンと揺れるのが目に入った。

学園ものには必ず明らかに人間離れしたモノを持つ女の子がいる……あるあるだな。うん、素晴らしい。これはまた製作が捗りそうだな。

そして、思いがけない人物の登場にクラス中が喧騒に包まれた。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒が高々と右手を挙げる。それに驚きつつも応える姫路。

「あ、は、はいっ。な、何ですか？」

「何でここにいますか？」

聞き方によってはイジメとも取れる質問が浴びせられる。だがそれは俺を含めこの

クラス全員が思っていることだ。何故なら、彼女は一言で表すなら頭脳明晰なのだ。

俺は転入生だが、一年の頃は姫路と同じクラスだった為、彼女の頭の良さは知っている。常に上位一桁以内に名を刻むほどであり、明久に聞いた話によると入学して最初のテストでは学年二位を記録したとか。

頭が良くて可愛い、小動物のような守ってあげたくなる性格、そしてたゆんたゆんなおっぱい・・・そう、姫路は勉強が出来るだけでは無く、二次元のメインヒロインに必要な条件を全てクリアしているという稀少な存在でもある。

そんな彼女がこんな掃き溜めみたいなFクラスにくるなんてことはどう考えてもあり得ないことだ。本来なら彼女の居場所はAクラスが妥当な筈なのだが：

「そ、その・・・実は振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました・・・」

その言葉を聴いて、クラスの奴等は『ああ、なるほど』と頷いた。

この学校は試験途中で退席するとどんな理由があっても0点扱いになってしまうというルールがある。それで彼女は無得点になってしまい、Fクラス行きとなってしまうのだろう。

しかしまあ、よく考えてみればだよな。体調なんてのは誰にも予測出来るものじゃな

いし、誰が悪いなんてのも存在しない。特に姫路のように体が弱い奴はいつ体調を崩すかなんて常人に比べ分かりにくい。

俺としては、後日再試験を行うなりしても良いと思うがやはりそこは文月。そんな甘つちよろい考えは持っていないのだろう。

「……っ」

後ろにいる明久が何ともいえない表情をしている。

そういや、明久はこの時姫路の隣にいたって言ってたな。いくら振り分け試験とはいえ具合が悪くなって退席して無得点はあんまりだと教師に抗議したとか。

自分よりも姫路の心配をするとは……馬鹿だけど優しい奴だなと思う。

『そういえば、俺も熱の問題が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

それに比べてここの連中は予想以上の馬鹿まみれな様だ。

「で、ではつ、今年一年宜しくお願いしますっ!」

そして、逃げるように俺の後ろで明久の隣の空いている卓袱台につく。

「き、緊張しましたあゝ…」

「あのさ、姫—」

「よう、姫路。まさかまた同じクラスになるとはな、宜しくな」

「あつ、岡崎君!こちらこそ、また宜しくお願いしますね」

「大悟!今の絶対僕の発言に被せてたよね!」

横で明久が何かブーブー言ってるな。まいつか。

「にしてもよ、姫路はもう体調は良いのか?」

「あ、それは僕も気になるな」

「ふえっ!?よ、吉井君!」

明久の顔を見た途端驚く様子 of 姫路。ま、俺は彼女が吉井に対してどう思っているかを知っているのでも思わないが。

「姫路。明久がブサイクですまん」

驚かれたことにショックを受けている所に雄二の容赦ないフォローが入る。

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃ無いですよ！その、むしろ…」

「だろうな。何せ姫路は俺のお得意様だからな。それも全部が明久とのせ」

「きゃああ!!岡崎君ちよつと来てください!!」

姫路はぱつと立ち上がり俺の髪の毛を掴んで教室の隅っこへと連れていく。待て待てリーゼントが崩れるから止めてくれ！見かけによらずかなりの力で引きずられた。

「? 姫路さんも大悟に何か頼んだの?」

「え!?あ、あの…いえ!そんなことないですよ!」

「でも、さつき僕の名前が聞こえた」

「違いますっ！…その、本当に何でもありませんから！」

そして、俺と姫路は隅っこで丸くなるようになり、姫路はコソコソと俺に耳打ちする。

「(岡崎君!その事は内緒にしていって下さいっていったじやないですか!)」

「(あ?そうだったか、そりやあ申し訳ねえ。でも意外だぜ。姫路は清纯系ヒロインだと思ってたがムツツリーニとタメ張れる位の脳内ピンク色だったとはな)」

「(ピ、ピンク色!?そ、そんな事ないですっ!私はただ純粹に吉井君を…って何言わせるんですか!とにかく皆の前ではトツプシークレットなんですからねっ!)」

「(分かった分かった。それで姫路、依頼の品だが、受け渡しは何時の何処にする?)」

「(あつ、出来上がったんですね!それじゃあ:放課後の教室でお願いします。お金の方は:)」

「(今日は新春キャンペーンで割引だ。更に姫路はまとめ買いだからもつと安くなるぞ)」

そう、姫路は俺が去年この商売『ダイゴブックス』を始めてからのお得意様だ。主な

活動としては二次元、三次元のキャラ問わずイラスト、同人誌の販売やムッツリ商会と協定してのグッズ製作だ。依頼者の希望に合わせ、全年齢向けも書くし、成人向けも書く。BLや百合、ロリシヨタ、果ては近親相姦や人外もの、ふたなり、リヨナ等のアブノーマルなシチュエーションでも請け負う。グッズもキーホルダー、クリアファイル、ポスター、Tシャツ、枕カバー、タオル、マグカップ等様々なものに対応している。

これがムッツリ商会と並ぶ程の人気を博し、中でも姫路は事あるごとに俺やムッツリーニの所に来て、明久の写真や同人誌（成人向け）、グッズを買っているのだ。

そして、姫路はようやく俺を解放した。すると、先程の俺と姫路の様子を見ていた雄二が姫路に声をかける。

「そういえば、大悟と姫路は元々同じクラスだったんだよね？」

「はい、その時に親しくなりました。えっと…」

「坂本だ。坂本雄二。宜しく頼む」

「あ、姫路です。宜しくお願ひしますね」

ペコリと雄二に頭を下げて挨拶する姫路。

「だが、姫路の言うことも間違いじゃないかも知れないな。確かに明久は見てくれは悪くない顔をしている。俺の知人にも明久に興味を持つてる奴がいたような気もするし」

雄二の言葉に明久と姫路が興味津々といった態度を見せる。まあ、バカでモテない明久と、そんな明久に好意を抱いている姫路からすれば是非とも知りたい事だろう。

「え？それは誰ー」

「そ、それって誰なんですか!？」

「オイ雄二、それ言っつていいのかよ」

「大丈夫だろ。別に隠すもんでもないしな」

「え、大悟も知ってるの!？」

「教えて下さい、岡崎君！」

明久と姫路が聞いてきたので、俺はいいぞと言っつて話した。

「確か・・久保ー」

「久保？どの久保さんなんだろ？」

「利光だろ」

久保利光 ↓ ♂ (性別／雄)

「……………」

「おい明久。声を殺してさめぎめと泣くな」

「良かったな明久。お前を好いてくれる奴がいてよ」

「僕もう、お媚にいけない……」

ちなみに何故俺が知っていたかというところ久保とも一年の時に同じクラスであったのと、彼も俺のお得意様の一人だからだ。ま、まあ奴は純粹な好意を持つてみたいだし、明久の同人誌を受け取ったときの嬉しそうな表情が……な。

「ね、ねえ大悟。さっきの話嘘だよね？」

「おっと、予約者からのメールだ。ふむふむ：追加のグッズ依頼か」

「あ、岡崎君、私もアクリルキーホルダーが欲しいんですけど。」

「ねえ大悟!!お願いだから嘘だと言ってよ!大悟おお!!」

思わず大きな声を出した明久に対して、福原先生が教卓を叩いて警告した。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

「あ、すいませ」

バキイツ バラバラバラ：

教卓は音と共に瓦礫と化した。え？あの程度で崩れたんか？

「えー……替えを用意してきますので、少し待っていて下さい」

福原先生は足早に教室を出ていった。

先生がいなくなったことでクラスの奴等はそれぞれ勝手な事を始めた。ゲームを取り出す者や寝始める者、挙げ句の果てにはエロ本を読み出す者まで……ってあれ俺の作品だわ。

「……雄二、ちよつといい？」

「ん？ なんだ？」

「ここじや話しくいから、廊下で」

「別に構わんが」

突然、明久と雄二が教室を出ていった。

なんだ？二人きりで出ていくなんて何かあったのか？まあいいか。じゃあ俺も自分の時間を楽しむでしょう。昨日買ってまだ開けてない『魔法少女の弟子めるたん』 第9

巻』を読むとしよう。

前巻はめるたんのライバル、あるたんとの対決直前だったからな！オラわくわくすつぞお！

そして、俺が漫画を開こうとすると、突然俺の席まで島田が歩いてきた。

「ねえ、岡崎。聞いたんだけど岡崎って本を売ってるのよね？」

「あ？ああ：そうだが」

「あ、あのさ：：それって、どんな内容でもオツケーなの？」

「おう。客のニーズや希望に応えるのが俺のモットーだからな。それがどうした」
「そうなんだ：じゃあさ、岡崎。ウチにも描いてくれない？その：同人誌っての」

— side 明久

雄二との話を終えて、僕達は教室へと戻った。それに続いて福原先生が別の教卓（それでも壊れそう）を持ってきて

再び退屈な自己紹介が開始される。

「それじゃ坂本君。君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて雄二がゆっくりと教壇に歩み寄る。その表情は自信に道溢れている様に清々しかった。

そして、教壇に上がった雄二は僕等の方に向き直る。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれて構わない。早速だが皆に一つ聞きたい」

皆の視線が雄二に向けられた所で、雄二は教室内の各所に移り出す。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

それらの備品を順番に眺めていった。改めて見ると本当に酷い設備だよな。

「さて、Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがー」

「――不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

Fクラスの皆の魂の叫びが教室中に響き渡った。

「だろう？俺だつてこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する!』

『そもそもAクラスだつて同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる!』

皆それぞれ腹の中に溜め込んでいたであろう不満を次々と飛ばす。だがそれは僕とて同じだ。幾ら僕達が最低クラスだからってこんな扱いは酷すぎる。

「皆の意見は最もだ。そこで俺はFクラス代表として提案したい！俺達Fクラスは――」

「――Aクラスに対して『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

こうして、Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を抜いた。

第三問 男はエロが好きだ

— side 明久

突如雄二の口から告げられた、Aクラスへの宣戦布告。それを聞いたFクラスの皆が
しーん：と静まり返る。

何とか姫路さんをもっと環境のいい教室で過ごさせてあげたいと雄二を説得してき
たはいいものの、今のFクラスにとってはAクラスに勝利するなんてのは現実味に乏し
い。

自分から戦争を仕掛けようと言ったのにも関わらず、本当にそんな事が出来るのだろ
うかと不安が募っていく。

『勝てる訳が無い』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいれば何も要らない』

そんな悲鳴があちこちから上がる。確かに誰から見てもAクラスとFクラスとの戦力差は一目瞭然、格闘技の世界チャンピオンに初心者が挑むくらい無謀といえる。

この文月学園のテストには、一時間という制限時間内であれば幾らでも問題を解くことが出来るというルールがあり、個人の能力次第でどこまでも成績を伸ばせる。

そして、この学園が生み出した『試験召喚システム』。テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出し、教師の立ち会いのもとに行われるクラス単位の戦争：それが試召戦争だ。

そして、戦争の勝敗の鍵を握るのが召喚獣の強さ：つまりテストの点数だ。Aクラスは天才や秀才といったエリートが集まったクラス。対してこっちは馬鹿の集まり。力の差は歴然だ。

「そんなことは無い。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

こんな絶望的な状況なのに、雄二はそう高らかに宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『出来るわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な意見が教室中に響き渡る。だが雄二の表情は変わらない。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことの出来る要素が揃っているからな！それを今から説明してやる」

雄二の自信に溢れる言葉にクラスの皆が更にざわついた。得意の不適な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす。

「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路さんがスカートの裾を押さえて遠ざかると、アイツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。

流石だ。まさか恥も外聞も捨ててあんな低い姿勢から覗き込むなんて。手鏡を使うくらいしか思い付かない僕とは格が違う。

「土屋康太。コイツがあのある有名な、寡黙なる性職者だ」

「……………!! (ブンブン)」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃないが、ムツツリーニという名前は別だ。男子からは畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を以て挙げられる。同学年の生徒で、彼を知らない人はいないだろう。

『ムツツリーニだと……?』

『馬鹿な、奴がそうだというのか……?』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』
『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……』

「???’

姫路さんは分かっているのか、頭に疑問詞を浮かべているみたいだけど。

「そして、そんなムツツリーニと双壁を成すあの男もここにいる。おい、大悟」

「……」

「聞こえないのか、大悟」

「……」

「おいキモオタ」

「なんだと雄二ゴラア!!」

卓袱台に読んでいたであろう漫画を置き、雄二に視線を向ける大悟と呼ばれたその男子生徒。

その怒りの表情はまるで鬼のような怖さと威圧感を放つ。

身長はあの雄二よりも高く、鉄人に負けない位のマツチヨ体型をしている。髪型は一昔前の不良みたいなヘアスタイル：：所謂リーゼントであり、その見た目は完全にドラマや漫画で見る不良学校の番長にしか見えない。

「岡崎：アンタ学校で何読んでるのよ：」

大悟が読んでた漫画の表紙を見て呆れ顔をする島田さん。そこには小学生位の魔法使いの様な格好をした可愛い女の子のイラストが描かれていたのだが、相変わらずだなあ：。

「テメエ雄二：俺の優雅なめるたんタイムを邪魔するとはいい度胸じゃねえか」

「何がめるたんタイムだ。ただ漫画読んでただけニヤけてただけじゃねえか。いいから前へ出てこい」

大悟はチツと舌を鳴らしながら壇上へと歩いてくる。

「さて、もう皆はコイツの存在を知っているだろう。コイツこそ、お前達が尊敬する『兄貴』こと岡崎大悟だ」

雄二の言葉にクラスの皆が一気にざわめきだす。

『嘘だろ!?!あの伝説の男がFクラスにー』

『二次元愛において右に出るものはいないとされるー』

『あの文月最大のイベント。男女コスプレコンテストの主権者ー』

『神の右手と無限の妄想力を持つー』

『『『『あの兄貴だというのか!!』『』『』』』』

「おい、だから俺を兄貴と読んでいいのは幼女と妹属性のある女子中学生だけだつってんだろ！」

兄貴。本来なら兄弟間で使われるべき言葉だが、この岡崎大悟という人間には、最上級の尊敬と畏敬を込めて使われる言葉だ。

ムツツリーニが三次元のエキスパートなら、この岡崎大悟は二次元のエキスパート。自分の二次元愛を隠さず、欲望に忠実に従い生きる存在。その行動は正気の沙汰ではなく、急に校内放送でアニメソングを流したり、教室のど真ん中で急に「全く、小学生は最高だぜ！」とか言っちゃう位には頭のネジが外れた人間だ。

そんな彼の二次元に対して猪突猛進な行動力に加え、元来の性格である人当たりの良さと性欲を満たしてくれる作品の数々は僕達男子にとって敬うべきものとなり、いつしか大悟は『兄貴』と呼ばれる様になった。

本人自体は「俺は二次元の良さを広めたいだけだ。好きなものを好きと言って何が悪い」って言うてるけど、それにも限度とか節度があると思う。

「さて、この岡崎大悟という男、噂は知っているだろうがその実力を見たことはないという奴も多いだろう。それにお前達の事だ。ただ戦えといつてもモチベーションは上が

らないだろう。そこでこの男の出番だ」

すると、雄二は大悟にまだ比較的使いそうな一本のチョークを渡した。大悟は最初何の事だと思っていたようだが、直ぐに雄二の考えに気づいたらしい。

「景気づけに一発頼む」

「フン、良いだろう。」

大悟はそれを受け取り、慣れた手つきで黒板に何かを描き始めた。

「さて、お前達も薄々気づいてはいると思うが、コイツは厳つい見た目に相反して引くほどのキモオタだ」

「雄二、テメエ殴るぞ？あと俺はキモオタじゃなくてただ二次元を愛してるだけだ」

「同じだろうが。だがコイツは俺達には無いものを持っている、それがコイツの真骨頂でもあるんだ」

「コイツは『無限の妄想力』と『神の右手』を持つ男だ。イラスト、同人誌、小説、果て

はアニメ映像まで。どんなシチュエーションだろうが人間だろうがその右手で全て表現する事が出来る。しかもそれらは時に三次元を凌駕し、プロ顔負けの腕前を誇つているときだ。その実力は俺が保障しよう。それにコイツは少年院帰りの男だ。いざというときの腕つぶしもある」

そう、この男。岡崎大悟は二次元を描く天才であると同時にかつて問題を起こして少年院に服役していたという過去を持つ。

前に秀吉から聞いた事があるが、大悟は昔から二次元オタクだったのは変わらないが、中学時代は喧嘩の強さから広くその名を轟かせていたらしい。僕も名前だけは聞いた事があり、大悟に喧嘩を吹っ掛けた相手はほぼ病院送り。その時のトラウマから不良を辞めて改心する程の強さだったみたい。

しかも中学時代の全盛期だった頃の雄二すら圧倒し、他校の生徒からは『悪鬼を振じ伏せた男』『閻魔大王』という異名までついたとか。

正直最初知り合った頃は確かに見た目から怖かったし、何で秀吉は大悟とこんなに仲良く出来るのかなとも思ったけど、いざ話してみると大悟は全然不良なんかじゃなく、気の良い性格で友達思いの優しい奴だった。今でもどうして大悟が少年院に入る事になってしまったのかと疑問に思う。

秀吉はその理由を知っているみたいだけど『済まぬ。これは儂等だけの秘密なのじゃ。』と言つて中々教えてくれない。

『坂本、でも喧嘩や同人誌なんかじゃ幾ら兄貴でもAクラスには勝てないだろ』
クラスメートの一人が至極当然な質問をする。

「そうだ。だが、別に大悟の力はAクラスの為の物じゃない。俺達Fクラスの為の物だ。大悟、まだか？」

「おう、完成だ。中々の出来栄えになったぜ」

「よし、これならいける」

黒板を見た雄二がニヤリと笑い、皆に向き直る。

「野郎共！刮目しろ！！試験召喚戦争で功績を挙げた者には——この報酬を約束するぞ
!!!」

「テメエ等目に焼き付けやがれ！これが俺の一作だ!!」

女子達の甲高い悲鳴。

『……………!!!』
（ブツシャアアアア）』

噴水のごとき溢れるムツツリーニの鼻血。

「これが兄貴ごと岡崎大悟の力だ！だがこれはあくまで肩慣らし程度：こんなもんじゃ終わらねえ！もし戦争で戦果を挙げた者……勇者には岡崎大悟の本気のエロ同人誌をカラーで贈呈するぞ!!それでどうだ、皆!」

『兄貴イイイイイイイイイイー!!!』

『何だよありやあ：あれが兄貴の凄さなのか!』

『俺、今なら胸を張って言えるぞ！Fクラスで良かった!』

『エロいぞ！いや：もうあれはエロなんていう単語で表せるものじゃねえ!』

『俺！兄貴に一生ついていきます!』

「畜生！なんでこんなむき苦しい男共に兄貴なんて呼ばれなきゃならねんだよっ!! 助けてめるたあぁん……」

皆がさつきまでのテンションが嘘だったかの様子上がっている。当然だ。あんな最高なイラストを見て大人しくなんて出来る訳も無い。それほどまでに大悟によつて生み出されたイラストは純粋にエロかった。

一人は後ろから女の子の胸を生で揉みしだき、もう一人がそれに興奮しつつよがっているというイラストなのだが、その艶かしい体つきに豊満な胸、麗しいながらも幼さを残した妖艶な表情。いい感じにはだけた水着。そしてそんな二人の感情を完璧に表現した台詞。ボロボロの黒板に描かれた尊き光景は二次元なのに完全に僕達思春期高校生を驚かした。

黒板にチョークで描いてこの破壊力だ。もしちゃんとした紙にカラーで描いたものなら、大悟のクオリティと合わせてとんでもないものが出来るのは想像に難くない。取り敢えず、これは僕がしっかりと写真に収めておかないと！

「ちよ！ちよつと岡崎！アンタ何とんでもないもの描いてるのよ!?!早く消しなさい！」
「そうですよ！そんなの……は、破廉恥ですっ!! えっちなのは駄目ですっ!!」

女子二人が大悟に対して猛抗議する。確かに女性からみたらかなりキツイよね。

「心配するな。島田と姫路にもちゃんと用意はしてある」

雄二がそう言うと、大悟は二人のいる席へ歩いていく。そして一人ずつにコソコソと話を始めた。

「島田、なら明久のエロイラストでどうだろうか？勿論これは報酬だからタダだし、シチュエーションも二人の要望があれば聞こう。」

「えっ!? 本当!? じゃ、じゃあ：ウチはそれでも：いい、かな」

「(姫路はどうだ?)」

「(えっと、あのっ！ 本当に何でもいいんですか!? 吉井君の『ピー』や『バキューン』や私との『ズギユギユキューン』でも大丈夫なんですか!?)」

「(お、おう：：：)」

そして、話を終えて大悟は壇上へ戻ってきた。何を話したんだろうか。

「ねえ大悟。姫路さん達と何を話したの？」

「……明久。お前：これから色々苦労すると思うけど、気を強く持てよ」

「え？それってどういうー」

「さ。ムツツリーニが出血多量で死なねえうちにこれは消しておこう」

「ちよつと待って!?!さっきの何!?!凄い気になるから教えてよ!」

僕の言葉を無視して、大悟は皆がイラストを写真に撮ったのを確認して消した。

「次に姫路だが、これはわざわざ説明する必要も無いだろう」

「え？わ、私ですかっ？」

「ああ。うちの主戦力だ。期待しているぞ。」

確かに、今の戦力的に姫路さんほど頼りになる人はいないだろう。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けを取らない』

『兄貴。姫路さんと俺のイチャラブ成人向け同人誌をー』

誰だ。大悟に姫路さんのエロ同人誌を依頼している奴は。僕も後でお願いしよう。

「木下秀吉だっている」

「む？ 儂か」

『おお……!!』

『ああ。アイツ確か演劇部のホープで木下優子の双子の弟……』

『兄貴。木下秀吉のエロイラストはあるか?』

ちよつと待て。秀吉のエロイラストだ?!是非僕にもその話を詳しく聞かせて欲しいっ!

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかったか?』

『それじゃあ、坂本の实力は姫路さんと同じくらいかも知れないってことか!』

『つまり、実力がAクラスレベルが二人もいるってことだよな!』

いけそうだ。やれそうだという雰囲気段々と出てきた。そう、クラスの士気は確実に上がったいき---

「それに、吉井明久だっている」

……シン---

そして一気に下がった。

畜生っ! 僕の名前はオチ扱いか! というかどうして僕の名前を挙げる必要があるんだよ!?

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ほら！折角上がりかけてた士気が一気に急降下してるじゃないか！僕は雄二や大悟や姫路さんと違って普通の人間なんだから、普通の扱いを——って、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「何いってんだ明久。お前にもちゃんとした肩書きがあるだろ」

「えっ？」

「ああ：あれか。確かにあるわな」

「じゃがあれは、あまり人前で誇れるようなものではないじやろ」

「……不名誉に等しい」

「知らないようなら教えてやる。コイツの肩書きは……『観察処分者だ』」

あ、言っちゃった。

第四問 クソ雑魚なめくじ

— side 大悟

《観察処分者》。それは学生生活を営む上で成績が悪く、学習意欲の欠ける問題児に与えられるペナルティを表す名称だ。又の名を——

『……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ?』

「ち、違うよっ!ちよつとだけお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。バカの代名詞だ」

「しかも聞いた話だと学園初らしいじゃねえか。流石明久。馬鹿の体現者に相応しい称号だな」

「黙れ大悟!あと肯定するな、バカ雄二!」

すると、小首を傾げた姫路が手を上げた。

「あの、それってどういうものなんですか？」

「そうか、今まで姫路は学年トップクラスの頭脳の持ち主だ。観察処分者なんてもの間違ったことすら無いんだろうな。」

「具体的には教師の雑用係だな。特例として物理的な干渉が可能になっている。それで力仕事といった類いの雑用をさせられるんだ」

「ま、要は教師のパシリってことだ」

「大悟！一言余計だよっ！」

「そう、召喚獣というのは物に触れることは原則不可能。しかし明久の召喚獣だけは別。雄二の言う通り物に触ることが出来る。」

「それでよく明久は鉄人に雑用をさせられているのをよく見かける。」

「そうなんですか？でも召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんな事が出来るならとても便利ですね」

「あはは。そんな大したものじゃないんだよ。」

手を振って否定する明久。だが姫路の言うことには俺も賛成する。いくら教師の雑用係とはいえ、物理的干渉が可能ということは戦いにおいてはかなり有利となる。物を使った攻撃が可能になるし、壁を破壊して退路を作る事だつて出来る。つまり観察処分者という肩書きを持つ明久の召喚獣は戦況によつては重要な役目を補うかも知れない。

「それに、僕の召喚獣は何故か受けたダメージや疲労の何割かがフィードバックされちゃうんだ。しかも教師の許可が無いと呼び出すことは出来ないからね。だからそんなに僕に対してのメリットは無いんだよ」

「だからこそその《観察処分者》だ。生徒はコイツを見てああはならない様にしないとという戒めの役目もあるつてこつた」

『おいおい。《観察処分者》つてことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいつてことだろう?』

『だよな。それならおいそれと召喚できない奴が一人いるつてことになるよな』

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね？」

全く雄二は、それがダチにかける言葉か。仕方ねえ、俺がフォローしてやるとするか。

「明久。気にすんな。お前は雑魚なんかじゃねえし、いてもいなくても同じなんかじゃねえ」

「大悟……」

「お前は正真正銘のクソ雑魚なめくじだ。だからお前は囷として俺達の勝利の為に死ぬるといふ重要な役目を果たせるんだ。誇りに思え」

「大悟、凄いい清々しい口調で言ってるけど全くフォローになってないからね!? 君は友達を盾にするっていうのか!? なんて最低な奴なんだ君は!」

声を荒げて俺に文句を言う明久。

「成る程……それが明久の使い道か。流石だ大悟」

「褒めるな雄二。お互い様だ」

「………明久は戦いにおいて必要な犠牲」

「クソっ！ここに僕の味方はいないのかよっ!?」

「兎に角だ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

そう言つて、雄二は教卓を叩いていい放った。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『おおーっ!!』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！』

『うおおーっ!!』

「我々は最下位だ!!学園の底辺だ!!誰からも見向きもされないこれ以上下の無いクズの

集まりだ!!!」

『うおおおおー!!!』

「つまりそれは!もう失うものは無いということだ!!なら、ダメ元でやってみようじゃないか! 試験召喚戦争を!!!」

『うおおおおおおー!!!』

「お、おー……」

雄二の力強い言葉に鼓舞され、全員が声を上げて拳を高く掲げる。流石雄二。こんなやる気のない奴等をここまで纏めあげその気にさせるとは、かつて神童と呼ばれた男は伊達じゃないってことか。

姫路もそんなクラスに圧されたのか、小さく拳を作り掲げていた。

「それじゃあ明久。お前にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たしてこい」

「……普通下位勢力の宣戦布告って、大抵酷い目に遭うよね？」

「何言ってるやがる明久。んなもん映画やドラマの話だろうが。大事な大使様にそんな失礼な真似をするわけがないだろ？」

「……本当に？」

「勿論だ。俺がお前に今まで嘘をついた事があるか？」

不安そうにする明久に雄二が力強く激励する。確かに雄二は冗談は言うが嘘は言わない男だ。

「……分かったよ。それなら使者は僕がやるよ」

「ああ、頼んだぞ！」

「明久。いいか。喧嘩でもそうだが自信に溢れてる奴ってのは妙な威圧感があつてな、相手は自然と臆するモンだ。だから男らしく胸張って行ってこい!!」

「大悟……ありがとう！僕頑張るよ！」

そして明久は、クラスメートの歓声と拍手に送り出され、使者らしく毅然とした態度

「大悟！雄二！言つてたことが全く違うじゃないか！Dクラスの皆、物凄い勢いで僕に掴みかかつてきたんだけど！」

「やはりそうきたか」

「Dクラスも侮れねえな」

「ぶち殺すぞコラ」

明久はリンチされたのか、顔面に青いアザを作り、制服は破かれたのか袖から先が無い。おまけに顔には油性マジックでバカだのうんこだの落書きをされていた。幾ら下位勢力からの宣戦布告とはいえここまでやるとはな……

ただ俺としてはこの額に肉つて書くとかこの口のあたりに『ぶ』自由にお使ください』とか書くとかした方がいいと思う。

「やはりつてことはやっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！」

「当然だ。じゃなきや代表なんて務まるわけ無いだろ」

「少しは悪びれろよ!!」

「だったらやり返せばいいじゃねえか？それなら正当防衛だ」

「無理だよ！三十人以上を相手にどうしろっていうんだよ！」

三十人？んなもん余裕だろ。不良ならまだしも、相手は喧嘩の素人なんだから。

「吉井君、大丈夫ですか？」

明久の有り様を見て姫路が心配そうに駆け寄る。

「あ、うん。大丈夫だよ。殆どかすり傷だから」

「吉井、本当に大丈夫？」

すると島田まで吉井のもとに来た。うむ、二人のヒロインに心配される主人公か……王道ルートだな！

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

急に腕を押さえて転げ回る明久。そのまま一回死ねばおりこうさんに生まれ変われるかもな、と俺は思った。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

他の場所で話し合いをするつもりなのか、雄二は扉を開けて外に出ていった。

「あの、痛かったら遠慮せず言ってくださいね？」

そうやって雄二の後を追うようにでていった。

「大変じゃったの」

「……………(サスサス)」

「ムツツリーニ。覗いていた時の畳の跡ならもう消えてるよ？」

「……………!!(ブンブン)」

「いや、今さら否定されても、ムツツリーニがHなのはもう知ってるから」

「……………!! (ブンブン)」

「ここまでバレているのに否定し続けるなんてある意味で凄いや」

「……………!! (ブンブン)」

「——何色だった？」

「みずいろ」

即答か。流石はムツツリーニ。見るところはちゃんと見ているな。

「ほら吉井。アンタも来るの」

「あー、はいはい」

ぐいっと吉井の腕を島田が引つ張った。仕方ねえ。俺もぼちぼち行くとするかな、と思ひ引つ張られていく明久に着いていった。

「返事は一回！」

「へーい」

「……一度吉井には、Das Brechenーええつと、日本語だと……」

「……調教」

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教つて。せめて教育とか指導って言ってくれない？」

「じゃ、中間とつてZ・c h t i g u n g ー」

「……それは分からない」

「折檻だろ？」

「それ悪化してるから。というか何で大悟もムツツリーニもそんな『調教』とか『折檻』つていうドイツ語を知ってるの？」

「『一般教養』」

「なんて嫌な教養なんだ」

ま、俺はただ同人誌作家にドイツ人の知り合いがいてその人に教えてもらっただけだが。

そんな会話をしているうちに、先頭の雄二が屋上の扉を開けて、俺達は太陽の下に出た。

余談だけど、学園もののアニメのオープニングやエンディングでよく主要キャラが屋上で空を見上げるシーンが多いけど実際はそんなこと無かったりするよな。そんな現状は実に甚だしい。

そして俺達は屋上の床に腰を下ろす。

「取り敢えずは、この七人で作戦会議を行うつもりだ。明久、宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うならパンでも奢ってくれると嬉しいんだけど」

ああ、思い出した。コイツはそんな奴だった。

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

姫路が驚いたように明久を見る。ああそうか、姫路は知らないんだったな。コイツが普段どんな食生活を送っているのかを。

「いや。一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食ってよー水と塩だろうが」

「失礼な！ きちんと砂糖だつて食べているさ！」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

皆が妙に優しい目で明久を見つめる。

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

「し、仕送りが少ないんだよ!」

「……明久。俺はお前の気持ちに分かるぜ。趣味つてのはよ、金がかかるもんだよな」

明久は今、両親が仕事の都合で海外にいるらしく、独り暮らしをしているのだが、コイツはその仕送りを全て漫画やゲームに費やしている。

俺もかなり趣味（アニメグッズ、同人誌、グッズ製作）に金をかけているため、明久を責めることはしない。けどよ……人間にとって食は必要最低限の行為なんだからもうちつと考えて金使えよ。

だから明久の家に遊びに行くときは決まって食材を持っていくのが俺の定番となっている。明久は料理は出来るのにな……宝の持ち腐れだ。

「でも!僕の食費が少ない原因の一端は大悟とムツツリーニにもあるんだよ!」

「ああ?何でだよ」

「……説明を求む」

「毎回ムツツリ商会とダイゴブックスが素晴らしい商品を取り揃えているから僕がついつい買ってしまうんだ!そのせいで僕の秘蔵コレクションが増えてきているんだよ!」

なんだそりや。追い詰められた犯人の言い訳より酷いぞそれ。

「……………言い掛かり」

「……………あのなあ明久。別に俺等はお前に買ってくれなんて一言も言った覚えはねえ。悪徳商法やつてる訳じゃねえんだから、そっちが希望するものを用意してるだけだ。しかも値段も良心的に抑えてるし、最終的に買うのはそっちの自己判断な筈だぜ？それとも……………俺のやり方にケチつけようつてのか？」

「……………業務妨害」

「ぐっ！正論過ぎて何も言い返せないっ……………！」

明久が悔しそうにしていると、突然姫路が声をかけてきた。

「……………あの、吉井君。良かったら私がお弁当作ってきましようか？」

「あ？？」

姫路の優しい心遣いに明久はポカンとなる。ふむ、手作りのお弁当を好きな男子に

…やっぱり姫路は二次元におけるヒロインの要素がこれでもかと詰め込まれた貴重な存在だ！

そしてそんな存在から好意をもたれる明久…うん、やっぱり死ねばいいと思う。

「本当に良いの？ 僕、塩と砂糖以外以外の物を食べるなんて久しぶりだよ！」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うん！」

喜ぶ明久。だがその横で面白くなさそうな表情をする奴が一人いた。

「……………ふーん。瑞希って優しいのね。吉井だけに作ってくるなんて」

棘のある言葉でそう言った島田の顔は何か不満げだ。

「あ、いえ！その、皆さんにも…………」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい。嫌じゃなかったら」

嫌な顔一つせずに承諾する姫路。オイオイ。全員分の弁当って自分の分も合わせたら七人分だぞ？それを朝早くから作ろうってのか？

なんて良い子なんや。明久ごときにはマジで勿体無さすぎるぞ!!

「それは楽しみじやのう」

「なら、お言葉に甘えるとすつか」

「……………（コクコク）」

「……………お手並み拝見ね」

姫路の手料理か。同じクラスでそこそ付き合いがあつたとはいえ、手料理を作ってくれるなんてことは無かつたから楽しみだ。島田は何か腑に落ちない様だつたが。

「姫路さんって優しいね」

「そ、そんな…：優しいだなんて」

「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好きー」

「おい明久。今振られると弁当の話は無くなるぞ」

「ーにしたいと思ってました」

.....

明久の一言で変な空気が流れる。

「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

「.....それはちよつと引く」

「明久。それは二次元だから許される事だ。現実でやったら大問題だからな？」

「違うよ！別にそんなつもりで言ったんじゃないんだ！これは生きる為の行動で、全て貧乏が悪いんだ！」

「そーかそーか」

「クソツ！その抜けた返事、全然信じてないな、大悟！」

ーーー

「さて、話が逸れたな。試召戦争に戻るとしよう」

「雄二。気になっていたのじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階的にするならEクラスじゃろうし、勝負をかけ？ならAクラスが妥当じゃろう？」

「そう言えば、確かにそうですね」

「どうなんだ、雄二？」

「まあな。当然考えがあつての事だ」

雄二が説明を始める。

「色々理由はあるが、Eクラスを責めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「あ？だが俺達よりはクラスが上だろう？」

「ま、振り分け試験の時点では確かにそうかもしれないな。けど、実際のところは違う。周りの面子をよく見てみる。」

「えーつと：：美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人とオタクが一人いるね」

「誰がオタクだこの野郎！」

「ええ!?!雄二が何で反応するの!?!どう考えたって大悟の事じゃないか!」

なんて事を言うんだこいつは。俺はオタクじゃなく二次元を愛する普通の男子高校

生だというのに。解せない。

「ま、要するにだ。内には幸運にも姫路という最大戦力がある。姫路に問題の無い今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いということだ」

「わざわざ分かりきつてる勝負を敢えて避けることで、無駄な労力を使わなくて済むつて事か。」

「? それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確実に勝てるとは言えない。そこで姫路の出番という事だ。」

ふむ……姫路をどう使うことでDクラスへの切り札とするか……確かにクラス替えをしてまだ一日目だ。クラスの情報なんて出回つてる可能性は限りなく低いし、あの姫路がFクラスなんてのは誰も思わないだろう。

馬鹿ばかりと油断しきつている所に姫路をぶつけて確実に仕留める……それは分かった。

「……だが雄二。確かに姫路を最後の砦として起用するのは分かったが、確か召喚獣の

点数つてのは最後に受けたテストの点数がそのまま召喚獣の強さになるんだろ？」

俺の言葉に雄二以外の奴等があつ、とした表情になる。

「そう言えば、姫路さんの点数つて……」

「はい。私は試験を途中退席してしまつて0点なんです……」

そう、俺達が最後に受けたのはクラス分けの振り分け試験。姫路はその途中高熱を出して退席してしまつた為、無得点扱いになつてしまつているのだ。

「大丈夫だ。試召戦争にはテストを受け直して点数を補充できる回復試験というルールがあるからな。これなら姫路も戦争に参加できる様になる」

「成る程な。それなら問題はねえか」

「でも雄二、だつたら最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気づけにしたいだろ？ それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

言いかけた？　そういやさつき教室を出ていったが雄二の奴、明久と何か話し合ってたのか？

「俺達なら勝てる。いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

雄二の言葉には、根拠が無いにも関わらず、何故かその気にさせる力があつた。何か……いける気がする！

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「Fクラスの喧嘩の華、派手に咲かしてやろうじゃねえか！」

「……………(コクツ)」

「が、頑張りますっ」

打倒Aクラスという荒唐無稽に等しい目標。だが人生というのは何が起こるか分からない。俺が文月に編入出来たように、この世には不可能に近いことはあつても不可能なんざありはしない。

今ここに、俺達の戦いが幕を開けたのだった。

「そうか。それじゃあ今から作戦を説明するぞ」

第五問 対Dクラス 〱開戦〱

— side 明久

「吉井！ 木下達がDクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながら駆けてきたのは同じ部隊に配属された島田さん。こうして改めて見ると背も高くて美脚なのにごどこか女性としての魅力に欠ける。何が足りないのだろうか。

「ああ、胸か」

「アంతアの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に」

ヤバい。何か踏み込んじゃいけない領域に踏み込んだみたいだ。

「そ、それよりほら！今は試召戦争に集中しないと！」

「――島田さん、中堅部隊全員に通達」

「ん、なに？ 作戦？ 何て伝えんの？」

「総員退避、と」

「この意気地無し！」

島田さんの強烈なチョキが僕の目に深く突き刺さった。

「目が、目があつ！」

「この馬鹿！ アンタは部隊長でしよう！ 臆病風に吹かれてどうするのよ！」

「その覚ますべき目に激痛があつ！ そういうことはせめてグーかパーで殴った後にいうべきじゃないかっ！」

僕は目を押さえながら島田さんにそう抗議した。

「いい、吉井？ ウチらの目的は木下の前線部隊の援護でしよう？ アイツらが戦闘で消耗した点数を補給する間、ウチらが前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給が出来ないじゃない。それにこうしてる間にも、瑞希や岡崎も頑張っているのよ」

確かに島田さんの言う通りだ。僕らは今擬似的なものとはいえ戦争の真つ最中だ。働き次第では戦況を大きく左右させてしまう。

そういえば、前に大悟も言ってた。

『いいか明久。戦争だろうが喧嘩だろうが、負ける奴つてのは共通点がある。それは弱い奴でも俺達Fクラスみたいな馬鹿でもない。臆病者だ。勝つか負けるかっつう状況で、ちよつとでも敗北に臆した奴からやられんだよ。』

今の僕は、大悟の言葉通りの奴になっていた。幾ら状況が厳しいからって、戦死ペナルティの補習が怖くて逃げようだなんて……！！

島田さん！大悟！間違いに気づかせてくれてありがとう！ 何故だか涙が止まらな
いよー！

「ごめん島田さん。僕が間違っていたよ。そうだよね！今はこの戦争に勝利する事だけを考えよう！」

「その意気よ、吉井！」

「島田！吉井！前線部隊が後退を開始したぞ！」

「総員退避よ」

島田さん!? さっきと言ってる事が全然ちがうじゃないか!

「吉井、それで問題は無いわね?」

うーん、何か大きく問題がある気がする。けどきつと気のせいだろう。

「よし、逃げよう。僕らには荷が重すぎた」

「そうね、ウチ等は精一杯努力したわ」

そして僕らはクルリと方向転換すると、本陣に配置されている筈の横田君がいた。

「代表より伝令があります」

メモを見ながら横田君はハキハキと告げた。

「『逃げたらダイゴブックスの契約を取り消す』」

「『全員突撃しろおーっ!!!』」

気がつけば僕達は戦場に向かって全力ダッシュをしていた。それもこれもFクラスの勝利の為だ。決してメチャクソ可愛い秀吉が『ピー』してる同人誌の為なんかじゃないからね!

でも、どうして島田さんまで僕と同じような反応をしているんだろうか。

| | |

「島田、明久！ 援護に来てくれたんじやない！」

前方から美少女がこちらに向かつて走ってくるのが見えた。おっと、よく見たら秀吉だった様だ。なんていうか、いつ見ても可愛いなあ……。

「秀吉、大丈夫？」

「うむ。戦死は何とか免れておるが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい。召喚獣も疲労困憊でこれ以上の戦闘は無理じゃ」

「そっか。それなら秀吉達は一旦下がろう。早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科は無理でも、一、二教科でも受けてくるとしよう。済まぬが二人共、少しの間任せたぞい」

言うや否や、秀吉達先行部隊は教室に向かつて走っていった。出陣した人数が前より少ないのは戦死して補習室へと連行されてしまったのだろう。

「吉井、見て！ 五十嵐先生と布施先生よ！ Dクラスの奴ら、化学教師を連れてきたわね！」

島田さんに促された方を見ると、二学年化学担当の五十嵐先生と布施先生が渡り廊下
にいた。現在は総合科目での勝負だけど、立会人が学年主任だけだから勝負に時間が
かかる。だから立会人を増やして一気に片をつけるつもりか！

秀吉達が予定よりも早く撤退したのも納得だ。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

うーん、流石はFクラス。お世辞にも良い点数とは言えないな。

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任の
ところに行こう」

「高橋先生の所ね？ 了解」

僕らは目立たない様に渡り廊下の端つこに移動する。よし、このままー

「あつ、そこにいるのはもしま、Fクラスの美波お姉さま！ 五十嵐先生、こつちに来て

下さいー！」

ーーと思つたらDクラスの一人に見つかつてしまった。

「げっ!?美春!マズイわよ、吉井!」

「分かつてるよ。島田さん、ここは君に任せて僕は先を急ぐから!」

「ちよつ……:……!そこは普通『ここは僕に任せて先を急げ』じゃないの!?!」

「そんな台詞はアニメや漫画の中だけで、現実世界じゃ通用しない!」

「よ、吉井!このゲス野郎!」

僕はそう吐き捨ててその場を離れた。くそ!クラスメートを置いていかなくちやならないなんて!戦争とはなんて残酷なんだ!

「お姉さま!逃がしません!」

既に召喚獣を召喚していた相手が島田さんに迫る。

「くつ、今はやるしかないようね……:……!」

「——試^サ獣^モ召喚^ンつ!」

島田さんの喚び声に応えて彼女の足元には幾何学的な魔方阵が現れる。教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。

そこから姿を現したのは、身長は80センチ程度の軍服にサーベルを持っているという点以外は、ポニーテールと気の強そうな目の島田さんにそっくりな召喚獣だ。

「もう！ いい加減ウチの事は諦めてよ！」

「嫌です！ お姉さまに捨てられて以来、美春はこの時をずっと待っていたんです！」
「来ないで！ ウチは普通に男が好きなの！」

「嘘です！ お姉さまは美春の事を愛している筈です！」

「このわからずや！」

そして、二人の召喚獣の距離が詰まる。

「はあああつ！」

「やあああつ！」

二人の気合いと共に、召喚獣が正面からぶつかり合い、力比べが始まった。

――

――side 秀吉

「雄二、今戻ったぞい」

儂ら先行部隊は本陣であるFクラスへと戻ってくる。そこには儂らの代表である雄二と近衛部隊のクラスメート何人かが待機していた。

「秀吉か。戻ってきたってことは点数の補充だな。戦況はどうなってる？」

「うむ、Dクラスは化学教師を連れてきたようじゃ。恐らく一気に勝負をつけるつもりなのじゃろう。今は明久達が応戦してくれておるが、そう長くは持たんじゃろう」

「ま、Dクラスの方が実力は上だからな。長期戦になるよりはそうした方が手っ取り早

く片がつく。」

召喚獣の強さはテストの点数がそのまま反映される。加えて儂らFクラスとDクラスとは大きくはないにしろ実力差がある。ならば長い戦闘で無駄に点数を消費するよりも短期決戦で一気に叩いた方が効率的じゃろうし、儂らにとつては苦戦となる。

「取り敢えず、目的の時間まで明久達がなんとか堪えてくれるのを期待するしかねえ。こつちも策はある。秀吉達は早くテストを受けてきてくれ」

「了解じゃ」

「(だが驚きだ。まさか大悟が、あれほどやる奴だったとは。能ある鷹は爪を隠すとはよく言ったもんだな……)」

そして、儂らはテストを受けるためにクラスへと入る。すると教室内には既に回復試験を受けておる者が二人いた。一人は此方の切り札とも呼べる存在である姫路。もう一人は兄貴こと儂の親友の岡崎大悟だ。

「……………」

「……………」

二人とも此方には目もくれず、真剣な表情で解答用紙と向き合っている。クラスが違ったというのもあるが、姫路は兎も角、昔から付き合いがあるとはいえ、大悟がここまで何かに集中して取り組むのは二次元以外で見たことがなかった為、少し驚きだ。

「(流石、やるべき時はやる男じやのう。さて、儂も早く前線に復帰しなくてはの)」

「(早く点数を稼いで、私も参加できるようにならないとっ!)」

「(…:やっぱり姫路と島田か? いや、秀吉も組み合わせた3Pでもイケるか!?)」

———

——— side 明久

「このっ!」

「負けませんよお姉さま!」

鏢迫り合いを繰り広げる二人の召喚獣。

しかし、向こうはDクラス。点数はこっちの方が不利なので真正面からぶつかれば勝ち目は低くなる。しかも初めての戦争だ。観察処分者の僕とは違って召喚獣の扱いは慣れていない。

そう思っていると、島田さんの召喚獣が押し倒されてしまう。

Fクラス 島田美波 53点

化学 VS

Dクラス 清水美春 94点

召喚獣の頭上には二人の点数が表示された。ていうか島田さん、60点にすら届いていないじゃないか。

そして、刀を喉元に突き付けられる島田さんの召喚獣。召喚獣の体は人間と同じであり、腕や足を攻撃された位ではダメージを負う。点数が減るだけだけど、首や心臓をやられれば即死だ。

「さ、お姉さま。勝負はつきましたね？」

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

「補習室？ ……フフツ」

清水さんは楽しそうに笑いながら島田さんの手を引っ張る。あれ？ そつちには補習室は無いよ？ あるのは保健室だよ？

「ふふつ。お姉さま、この時間ならベッドは空いていますからね。大悟さんから色々なプレイを学んでおいて正解でした……」

「よ、吉井！早くフォローを！ なんだか今のウチは補習室行きより危険な状況にいる気がするの！」

何故清水さんの口から大悟の名前が出たのかはさておき、僕も同感だ。

「殺します……美春とお姉さまの邪魔をする人は、誰であろうと殺します……」

けど、僕はソコに飛び込む勇気はないっ！

「島田さん、君の事は忘れない！」

「ああっ！ 吉井！ なんて戦う前から別れの台詞を！」

「邪魔物は……抹殺します!!」

そして、清水さんは召喚獣と共に此方に向かってきた。ヤバい！ このままじゃ僕の命まで危ない！

「吉井、危ない！ —— 試^サ獣^モ召喚^ンつ」

と、脇から割り込んできた声と共に、クラスメートの須川君が召喚獣を呼び出した。

Fクラス 須川亮 76点

化学 VS

Dクラス 清水美春 41点

須川君の召喚獣が敵を斬り倒す。それにより清水さんの点数は0点になった。

ありがとう須川君！ 今の君はまるで救世主の様だよ！

「ありがとう、助かったわ須川。西村先生、早くこの危険人物を補習室へお願いします！」

「おお、清水か。たつぷりと勉強漬けにしてやるぞ。こっちに来い」

清水さんは鉄人に担がれ、補習室へと連行されていった。これが『戦死』といわれる状態だ。

「お、お姉さま！ 美春は諦めませんか！ このまま無事に卒業出来るなんて思わないで下さいねえー！」

とても危険な捨て台詞を残して、清水さんは補習室へと連行されていった。

「島田さん、お疲れ。取り敢えず一旦戻って化学のテストを受けてくるといいよ」

「吉井」

「須川君、行こう。戦いはまだ始まったばかりだから」

「吉井いつ!!」

「は、はいっ!？」

「…………ウチを見捨てたわね？」

「…………記憶にございません」

「……………」

「死になさい、吉井明久!! 試験召ー」

「誰か! 島田さんが錯乱した! 早く本陣に連行してくれ!」

「島田! 落ち着け! 吉井隊長を殴るのは別に構わないが今は戦争中だ! 後にしてくれ!」

「違うわ! コイツは敵! ウチの最大の敵なの!」

「…………どうしよう、否定が出来ない。取り敢えず、今彼女と一緒にいると危険なので須川君に連れて行って貰おう。」

「早く連れて行って! その禍々しい視線だけで殺されるっ!」

「こら、離しなさい須川! 吉井! 絶対に許さないからね! 殺してやるんだからあー!」

物騒な捨て台詞と共に、恐怖が遠ざかっていった。これでひとまず僕の身の安全は確保されただろう。

「よし、とにかく秀吉達が補給をしている間、前線を維持するんだ！ もうすぐ僕達の『最終兵器』も動き出す！ 絶対にここを死守するぞ！」

『『『うおおおおおっ!!!』』』』

「いいか皆！ この戦争に勝利した暁には、ダイゴブックスのお宝がタダで手に入る！

そんな尊い目的の為に、死ぬ気でいくぞおおお!!!」

『『『ダイゴブックス！ ダイゴブックス！ よっしやあああー!!!』』』』

僕の怒声に男達が気合いの入った声で返す。

さあ！ここが僕達の正念場だ。気合いを入れていこう！

――

「吉井隊長！ 横溝がやられた！ これで布施先生側は残り二人だ！」

「五十嵐先生の通路もまともに戦えるのが俺一人しかない！ 援軍を頼む！」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！ 助けてやってくれ！」

想像以上に劣勢を強いられる僕達。やはりいくら士気が上がったとはいえどもDクラスとでは実力に差がある。

けれど本陣に応援を要請すれば作戦につき込む時間が無くなってしまふ。ここはなんとか僕らだけで持ちこたえるしかない！

「布施先生の人達は防御に専念して！ 五十嵐先生の人達は総合科目の人と交代しながら効率よく勝負をするように！ 藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！」

『『了解！』』』

皆が僕の指示に従い陣形を組み始める。

「Fクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「何を待っているんだ!？」

ヤバいな……向こうがこっちの意図に気づき始めている。流石に防御に重視させ過

ぎたか。

「大変だ！ 斥候からFクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」

「世界史の田中だと!? 田中は採点に時間が掛かる代わりに採点が甘い……Fクラスの奴等、長期戦に持ち込む気か！」

すると、先程島田さんを連れていった須川君が戻ってきた。

「吉井、本陣からの情報だ。Dクラスは数学の木内を連れ出した様だ」

木内先生か……採点は厳しいけどその速さは群を抜いている。どうやらこちらとは対称的に一気に仕留めに掛かりに来ているみたいだ。

でも、そう易々と突破される訳にはいかない。僕らはこの前線を長く保たなくちゃならない。

「須川君！」

「なんだ？」

「偽情報を流してほしいんだ。時間を稼ぐ為に」

それにはまず、有利な状況を作らないといけない。

――

「……何？ 偽情報だと？」

「ああ。それを流して先生達を他の場所に向かわせるように隊長からの指示が出た」

「成る程な……明久も中々頭が回るじゃねえか。それでどんな内容を流すんだ？ 生半かなモンじゃ教師陣を騙すことは出来ねえぞ？」

「分かっている。だからその道のエキスパートに聞きにきたんだ。何か妙案は無いかな……兄貴？」

「……ほう、面白えじゃねえか。ならあの先生の性格と立場を利用するか。絶対に騙せる筈だ、が、明久にやあ悪いがな」

「よし、内容は大悟に任せて、それを放送で流してくれ」

「分かった」

そこには、怪しい笑みを浮かべ何かを企む三人の姿があった。

――

『塚本、このままじゃ埒があかない!』

『もう少し待っている! 今数学の船越先生も呼んでいる!』

なっ……船越先生だと!?

僕らにとつて好ましくない会話が聞こえた。船越先生（45歳♀独身）を呼んだのは恐らく、採点目的じゃなくて立会人になつてもらおう為だろう。けどこれ以上相手に戦線を広げられると更に実力差が表に出る。けど肝心の須川君もまだ動きを見せない。

くそ! どうすればいいんだ――

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

聞き覚えのある声で校内放送が流れた。

「この声は須川君！ そうか！ 職員室じゃなくて放送室に向かったのか！ それならDクラスの生徒に見つかる可能性も低い！ ファインプレーだよ須川君！」

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出し相手は話題に上がった船越先生。いいぞ！

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

……ん？ 須川君？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の話があるそうです。最後にこれは吉井君からの伝言です》

『僕はもう、船越先生に対する想いを押さえきれなくなりました。もし船越先生が許してくれるなら、僕の全て（意味深）を捧げても構いません。先生……どうか僕が大人の階段を昇る為のエスコートをして下さい！』』

ひいひい!!! なんて危険な事を言うんだ須川君!!! 相手はあの船越女史だよ？ わかつてる？ 婚期を逃しに逃しまくって遂には生徒に単位を盾に交際を迫るようになったあの船越女史だよ？ 確かに確実に体育館裏に向かつてくれるだろうし、僕が来るまで何時間もその場を離れないだろうけど、その分僕の貞操が大変な事にいい!!

「吉井隊長……アンタあ男だよ！」

「ああ。俺達の勝利の為にそこまでやってくれるなんて……感動したよ！」

「ち、違うんだ！ 僕はそんな指示を出した覚えはない！」

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。Fクラスの連中、本気で勝ちにきてるぞ』

『あんなに確固たる意思を持つ奴等に勝てるのか……？』

ああっ！ 誤解が益々広がっていく！ お願いだから本気にしないで！ 戦場に良

い影響を与えている分否定がしにくくなってるじゃないかあつ！

「皆！ 吉井隊長の死を無駄にするな！絶対に勝つぞーっ!!」

「隊長の分まで俺達が戦うんだーっ!!」

「……」

「隊長、いけますよ！ この勢いでDクラスを押し返しましょう！」

「……」

「……隊長？」

「……すす」

「す？」

「須川ああああああああつ!!!」

どうやら僕は、この手でクラスメートを葬らないといけないようだ。

第六問 対Dクラス 〱決着〱

——side 明久

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合科目残り僅か！」

「森川が戻ってこない！ やられたか!？」

まずい。段々とDクラスとの戦力差が広がっていく。工藤君と森川君が戦死になったという事は今把握している人数だけでも残り五人。

「くっ、もう限界か……なら撤退するしか——」

「明久！ あと少し持ちこたえろ!!!」

すると、後ろから櫓が飛んできた。見ると遙か後方から雄二が近衛部隊を引き連れてやって来た。良かった！ 援軍に来てくれたのか！

「援軍だ！ 合流される前に吉井達を全滅させろ！」

Dクラス前衛部隊指揮官の塚本君の声が聞こえる。

確かに、ここと雄二達との距離は随分とある。合流前に全滅なんてさせられたら作戦は台無しになるし、僕らは全員纏めて補習室送りになる！

「西村雄一郎、戦死！」

「五十嵐先生、Dクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！ Fクラス田中も行きます！」

まずい、これで残りは四人だ。田中君も恐らく時間の問題だろう。雄二達は……駄目だ！とてもじゃないけどまだ遠い！間に合わない！けどこのままじゃ僕まで戦死だ。

どうする……考えろ吉井明久！

『明久。喧嘩つてのはな、何も正面から馬鹿正直に突っ込んでいくだけじゃない。その場の環境や物を上手く利用するのも勝利に近づく為に必要だ。後は相手を上手い言葉

で挑発したり動揺させたりするのも一つの手なんだぜ。』

……そうだ、一つ方法を思い付いたぞ。これなら僕達の戦力を減らすことなく相手部隊を混乱させられる。大悟の言葉が今ここで役に立った！

もう迷っている時間は無い！　ここでやらなきゃいつやるんだ！

「先生、Dクラス笹島圭吾が吉井明久に——」

「ああっ！　霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『なにいつ!?!』

僕はDクラスの背後を指差して名一杯叫んだ。するとDクラスの男子はおろかFクラスの皆や女子までもが勝負の途中にも関わらず振り返っている。

流石Aクラス代表——学年首席の才色兼備の霧島翔子さんだ。あの三次元に興味があるが殆ど無い大悟に『彼女は姫路とは違った魅力のある逸材だ』と言わしめた程はある！

そして、皆の注意が逸れた一瞬の内に、僕は近くの窓に思いつきり上靴を投げた。

ガシヤアアン！

『な、なんだ!? なにごとだ!?』

「うわっ! 島田さん! そんな物をどうする気だよ!」

僕は小芝居をうちながら壁に備え付けられている消火器を掴み取り、思い切りその場に放射した。

ブシャアアツ!

「う、うわっ! なんだ!」

「ぺっぺっ! これ消火器の粉末じゃねえか!」

「前が見えない!」

景気の良い音と共に溢れ出る消化薬の粉末。これで相手の視界は遮ったから戦闘は困難な筈だ。

「皆! 島田さんが消火器をぶちまけている間に撤退するんだ!」

『了解!』

「くっ! 逃がすな! 戻られれば本隊と合流される! その前に吉井達に止めを指すんだ!」

「島田さん! 助かったよ! でもそういう事はやつちや駄目だと思うんだ!」

念の為にもう一芝居打っておこう。これでDクラスの皆はこれを島田さんの仕業だと思っだろう。

「Fクラスの島田め！　なんて卑怯な奴なんだ！」

「許せねえ！　彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

「そうだ！　在学中には彼氏の出来ない状況にしてやる！」

「……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……」

……何だか、骨の一、二本じゃ済まない様な事態を引き起こしてしまった様な気がする。

す、すまない島田さん！　君の犠牲は無駄にはしないから！

そして、僕達は雄二達本陣と合流し、Fクラスへ撤退していった。

――

教室に戻り、化学のテストを受け直した後、

「明久、良くやった」

「流石は明久。お前ならやれるって信じてたぜ」

と、総大将の雄二と回復試験を受けていた大悟がらしくもない言葉を口にした。その顔はメチャクチャ晴れやかな笑顔だった。それはもう、ムカつくくらいに。

「二人とも校内放送、聞こえてた？」

「ああ。バツチリな」

やっぱりコイツら僕の不幸を笑っている！ 許せない！

今すぐにもコイツら仲良く窓からぶん投げてやりたいけど今の僕は二人に構っている暇はなかった。

「雄二、大悟。須川君がどこにいるか知らない？」

「あ、須川？　そういや放送室に行ったんだったな」

「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

そうか！　もうすぐ戻ってくるのか……僕の貞操を危険にさらし、学校全体に誤解を広げてくれたクラスメートの須川君には直接お礼をしないとイケない。

大丈夫、大丈夫。包丁は家庭科室からパクってきたし、靴下には砂も詰めた。いざとなれば大悟を懐柔して協力させられる。準備は万端だ。

「やれる、僕なら殺れる……!!」

「殺るなつての」

「止めないでくれ雄二。僕にとつての最優先事項は——」

「ちなみに、あの放送を指示したのは俺で」

「内容を考えたのは俺だ。バツチリだったろ？」

「貴様等だあああつ!!!」

僕は鋭く踏み込み、まずは大悟に向かって包丁を——

「あ、船越先生」

「チイイイツ!!」

クソツッ! 撤退だ!

僕は卓袱台を蹴散らして掃除用具入れに飛び込んだ。これで僕の姿は見えない筈だ。

「さて、馬鹿は放つておいて、そろそろ決着をつけに行くか」

「そうだな。俺もそろそろ派手に暴れたいと思つていた所だ」

「ちらほらと下校している生徒も出てきたし、頃合いじやろう」

「……………(ココココ)」

教室から皆が出ていく気配がする。

本来なら僕も行くべきなんだろうけど、外に船越女史がいる以上出られない。でも、このままじゃ雄二と大悟を取り逃がしてしまう！

「あー……明久、最後に言っておいてやるがな——」

「船越先生が来たってのは嘘だからな」

………嘘？

恐る恐る覗くと、そこには船越女史どころか、誰もいなかった。

「騙したなあああ!!雄二いいーっ!!大悟おおーっ!!」

——

——side 大悟

明久を置いていき教室から渡り廊下へと向かうと、そこは既に戦場と化していた。
下校を始めた他のクラスの奴等

HRを終えて職員室へと戻ろうとする教師達

そしてそんな教師を立会人として召喚獣を出して戦うFクラスとDクラス。

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

「そつちから回り込め！ 俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を——」

「日本史で——」

俺らのクラス連中がDクラスの連中を取り囲んでいる。下校中の生徒に紛れてDクラスの生徒を多数数で仕留める作戦、どうやら上手くいっているようだ。

『Dクラス塚本、討ち取つたり！』

一際大きな声上がる。この怒号と悲鳴が飛び交う状況……懐かしいな。昔の喧嘩

の光景を思い出させる。

「大悟、秀吉、お前等の役目は分かっただろうな!？」

「おう。要はここで暴れまくって全員ぶちのめせばいいんだろ！ 任せておけ！」

「よし、それじゃあ行くとするかの、大悟！」

「ああ、やってやろうぜ！ 兄妹！」

「字面がおかしい気がするのじゃが!？」

そして、俺と秀吉は一目散にDクラスとFクラスがひしめき合う戦場へと駆けていった。

「おい！ あのリーゼント……間違いはない、岡崎大悟だ！ アイツもFクラスだったのか!？」

「岡崎大悟って……あの『兄貴』か!？」

「それに隣にいるのは木下秀吉だ！ アイツら一直線に本陣まで向かってくるぞ！」

「怯むな！ いくら相手があの兄貴や木下の妹でも所詮はFクラスだ！ 落ち着いて対処すれば倒せる！」

『了解!!』

すると、俺と秀吉をDクラスの奴等が俺と秀吉の行く手を阻む。やっぱりそう易々と攻めさせてはくれねえか。

しかし、所詮はFクラスか……随分と言ってくれるじゃねえかコイツら。上等だ。

「……大悟、まさかこうしてお主と肩を並べて戦える日が来るとは思わなかったぞ」

「俺もだ秀吉。まさかあの秀吉に背中を預けるなんてな。試験召喚システム……楽しんでやってくれるじゃねえか！ 気合い入れてけよ相棒!!」

「そう言うお主もな。来るぞ！」

すると、Dクラス達は召喚獣を俺と秀吉の前に立ち塞がらせた。

「木下秀吉！ 岡崎大悟！ お前達二人に鈴木一郎が勝負を申し込む！」

「Dクラス、山田美香も行きます！」

試召戦争のルールでは勝負を申し込まれたらそれを必ず受けなければならない。だ

が元より俺達はそのつもりだ。

「いいぜ。この岡崎大悟、売られた喧嘩は買わせて貰う。試獣召喚っ!!」
 「試獣召喚っ!!」

叫んだ直後、足元に現れる魔方陣。

そこから現れたのは、注連縄の様なものを腰に巻き、紫色の和装束を着た俺と同じくリーゼントヘアの召喚獣だ。

そして武器としてその体躯と同じくらい大きな金棒を持っている。
 秀吉の召喚獣は俺と同じく上が白で下が藍色の和装束に武器は薙刀。
 正にどっちも、『和』を全面的に押し出したスタイルの召喚獣だった。

そして、召喚獣の頭上にそれぞれの点数が表示された。

Fクラス 岡崎大悟 & 木下秀吉 447点 & 83点

日本史 VS

Dクラス 鈴木一郎 & 山田美香 82点 & 76点

「はああああ!! な、なんだあの点数は!? どうみたってFクラスレベルじゃねえぞ!」
「447点なんて……ほぼAクラスと同じくらいの数じゃない!!」

表示された俺の点数を見て明らかに狼狽える相手。まあ、当然っちゃあ当然の反応だわな。だってFクラスの間人だもん、俺。

けど、俺は別にカンニングや不正行為をしてこの点数を取った訳では無い。正々堂々自力でテストを受けてこの点数を掴み取ったんだ。まあ、社会科が俺の得意教科というものもあるのだが。

「それじゃあ——行くぞゴラアアアアアア!!」

俺の気合いに応じるように召喚獣が金棒を強く握り締め、相手に向かって走り出す。

「恋のっ!! マジカル☆プリティぶん殴りいいいいいい!!」

そして、そのまま相手の召喚獣二人ともめがけて金棒を叩きつける。それは床を叩き

壊さんとする勢いと轟音を生み出し、相手の戦士達を一撃で葬った。

Fクラス 岡崎大悟 447点

日本史 VS

Dクラス 鈴木一郎 & 山田美香 DEAD & DEAD

「0点になった戦死者は補習うーーーーー!!!」

「な、なんだあの召喚獣は!?!」

「一撃で倒されただど!?! なんつう強さだ!?!」

相手のDクラスの生徒達は瞬く間に混乱に陥った。まさかFクラスに一撃で召喚獣が倒されるとは思っていなかったのだろう。

「相変わらずの点数の高さじゃのう、大悟!」

「それが大悟の召喚獣か! キモオタの癖にやるじゃねえか!」

テンションが上がっているのか、興奮ぎみにそう言う秀吉と雄二。

「はっ！ オタクが馬鹿だと誰が決めたんだよ！ オラア！ こんなもんじゃ俺達ア止まらねえぞ!!」

「ふむ、大悟を見ておると、儂も高ぶってくるのう！」

そのまま俺達はそれぞれの召喚獣を連れて別の生徒の所へ向かう。そして再び召喚獣の金棒が猛威を振るった。

秀吉も明久程では無いにしろ召喚獣を上手く扱い、上手く俺のサポートにまわってくれている。正に阿吽の呼吸といったコンビネーションだ。

Fクラス 岡崎大悟 & 木下秀吉 311点 & 41点

地理 VS

Dクラス 中野健太 & 笹島圭吾 DEAD & DEAD

俺と秀吉は短時間で一気に相手の戦力を減らすことに成功した。

「何なんだあのコンビは!? 正に美女と野獣だああああ!!」
「あんなのに勝てるわけ無いじゃない!」

「このままいけば押しきれぬ! Dクラスには負けない!

「皆! 援軍に来たぞ! もう大丈夫だ!」

あれは確かDクラスの代表の平賀! ということはDクラスは遂に本隊を動員したということか。これでこの場所には双方の主戦力が揃ったことになる。

「くっ! まさかあの兄貴がここまでやる人物だったとは! 本隊の半分は岡崎大悟と木下秀吉を足止めだ! その間にもう半分でFクラス代表の坂本雄二を潰しに行くんだ!」

『了解!』

平賀の号令のもと、俺と秀吉の召喚獣を取り囲む。

「木下秀吉はともかく、岡崎大悟はかなりの強敵だ！ 必ずここで食い止めるぞー！」

「……秀吉、今ここに何人くらいいるんだ？」

「うむ、ざっと見ても相当な数じやろうな。それこそ『今ある戦力の半分』ぐらいではないかの？」

「そうか……。なら——」

「——お前（お主）等の敗けだ（じゃ）」

俺と秀吉はDクラスの奴等を指差してそう言い放つ。

俺と秀吉が雄二から託された役割は二つ。とにかくここで暴れまくって敵の戦力を減らすこと。もう一つはそうすることで出てくるであろう本隊の奴等の意識を向けさせることだ。

現に代表の平賀は戦力を削られたことで自分が援軍に出ざるを得ない状況になった。そして自身の近衛部隊の殆どを俺達と雄二に向けた。

それはつまり……平賀の周りには邪魔物はいなくなる。なんか明久がいるけど無視だ。俺達は『彼女』の出番を作るための前座……アニメというなら『主人公が駆けつけ

るまでのサブキャラ』に過ぎないのだ。

「あ、あの……」

平賀の後ろから、我らFクラスのメインヒロインこと姫路が申し訳無さそうに平賀の肩を叩く。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

「いえ、そうじゃなくて……」

もじもじと言いつらそうに身体を小さくする姫路。

「Fクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「その……Dクラス平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「……はあ。どうも」

「あの、えっと……さ、試^サ獣^モ召^{セン}喚^ンです」

Fクラス 姫路瑞希 339点

現代国語 VS

Dクラス 平賀源二 129点

姫路の魔方陣から現れた召喚獣は背丈の倍はあろうかという大剣を所持していた。
うわあ強そう。

「え？ あ、あれ？」

「ご、ごめんなさいっ！」

姫路の召喚獣は素早い動きで平賀の召喚獣を真つ二つに斬り捨てた。

相手の反撃を許さず、一撃でクラス代表を倒し、この戦いは決着した。

第七問 終わりは新たな始まりの糧となる

— side 大悟

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

その報せは瞬く間に戦場にいる生徒達の間を駆け巡り、Fクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混じりあつた大音声が目撃を襲う。

FクラスとDクラスの試召戦争。誰もがDクラスの勝利を思っていただろう。俺も正直に言えば勝てると思つてなかつた。

この文月学園では学力が全てを左右する。学力こそが力であり、弱い奴は何もかも失う。絶対的格差社会の縮図なのだ。

勝ちたければ勉学に励み、それだけの戦力を身につける必要がある。

だが、それは不利とは言えども負けではない。馬鹿には馬鹿なりの戦い方次第でどう

にもでなる。それが今回Dクラスに勝った事で証明されただろう。

「凄えよ！ 本場にDクラスに勝てるなんて！」

「これで昼や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。あれはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「それに、やつぱ兄貴はすげえよ！ あんなAクラス並の点数を取るなんて！」

「俺、これから一生兄貴についていくぜ！」

「やつぱりアイツらは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛してます！」

Fクラスの奴等が俺と雄二を褒め称える。だが今回は姫路が相手の総大将を討ち取った事は確かだが、その全ての作戦は雄二によるものだ。

奴の知恵や言動。クラスを纏め上げる指導力、カリスマ性。それらが無ければ今回の勝利は無かつただろう。それはクラス全員が分かっているようだ。俺はただそれに従っただけ。

全く、神童というのは恐ろしいな……

「あー、まあ。何だ。そう手放して褒められると、なんつーか」

「なんだ？ 照れてんのか？」

「べつ、別に照れてなんかねえよ！」

「坂本！ 兄貴！ 握手してくれ！」

「俺も！」

「待て！ 俺が先だ！」

はは、もう英雄扱いだな。流石の雄二も大人数に褒められるのは慣れてないのか頬をぼりぼりと搔いている。しかしアイツが照れるなんて意外だな。

すると、その人混みを押し退けて明久が入ってきた。

「雄二！ 大悟！」

「ん？ 明久か」

「僕も二人と握手を——ぬおおつ!? 雄二……大悟……！ どうして握手なのに手首を

押さえるのかな……！」

「押さえるに……決まってるだろうが……！ フンッ！」

「ぐあつ！」

俺は雄二と明久の両手首を捻り上げる。するとそこから包丁が一本ずつ落ちた。やつぱり殺しにかかってきたか。普通握手は両手同時に求めたりしねえからな。

「お前の考えなんざ、お見通しなんだよ明久あ……！」

「……………」

「……………」

「雄二、大悟。皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

「……………」

「……………」

「僕、仲間との達成感がこんなにいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

「も、勿論喜びを分かち合う為に握手を手首がもげるほどに痛いっ！！」

「おーい、誰かペンチを持ってきてくれー」

「後そこにつける塩もたっぶりなー」

「ス、ストップ！ 僕が悪かった！ だから僕の生爪を剥いでそこに塩を塗りたくるのはやめてほしいっ！」

仕方ない、と俺と雄二は手首を離した。

「チツ、あと少しだったのに……………」

「俺も参考資料として明久が爪を剥がれる所を見たかったんだがな」

「大悟！ 君は一体何てグロテスクなものを参考にしようとしてるんだ！」

何を言う。生爪剥ぎなんてリョナものの拷問プレイに必要なんだぞ？

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

声が出たので振り向くと、そこには愕然とした表情の平賀がいた。

「あ、その、さつきはすいません……」

別の所から姫路も駆け寄ってくる。どうやら彼女には不意打ちをしたという罪悪感があるのだろう。

「いや、姫路さんが謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。それに、まさか岡崎があれほどの点数を取っていたのも驚きだよ」

「そ、そうだよ！ 大悟、なんだよあの点数は!? あんな点数、姫路さんレベルじゃないか！」

「落ち着け明久。ま、そこは俺も知りたいところではあるけどな」

「何言ってるやがる。いいか？ 二次元界じゃあ歴史上の人物を起用するのは珍しい事じゃないんだぜ？ それにアニメじゃ実在する街や土地をモチーフにしているのも結構あるんだ。それで実際モデルとなった人物は場所はどうなのか？ そう思ったら勝手に興味が沸いてきた。それだけだ」

つまり、俺は最初から社会科目が得意なのでは無く、歴史上の人物や場所を二次創作したりモデルとしたアニメや漫画から知識を得て、そこから原物を調べに調べてたら知

識がついていたという訳だ。

だって二次創作なら史実はオツサンでも性別転換して可愛いロリ顔巨乳の女の子になつたりツンデレ貧乳の同級生キャラの女の子にしたり出来るんだぜ！

だがその為には本質を隅々まで理解しなきゃならねえ。アニメの二次創作だつてまずはそのアニメを見て情報を得てから作るだろ？ つまりそういうことだ。

「じゃ、じゃあ……大悟は二次元が好きすぎて逆に勉強しまくつてあの高得点をとつたつてこと……!?!」

「二次元オタクもここまできると尊敬に値するな……」

「おいおい、そう持ち上げるな。三次元の男に褒められても全然嬉しくねえ」

どうせならめるたんに『大悟お兄ちゃんはとつてもがんばつたのでご褒美になでなでしてあげちやいますっ!』つてならねえかなあ。

「成る程……流石『兄貴』と言われるだけはあるな。よし、約束通り俺達はルールに則つてクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日でも良いか？」
「うん、僕は構わないよ。雄二も大悟もそれで良いよね？」

「おう、俺は良いぞ、雄二もー」

「いや、その必要は無い」

俺の言葉を断ち切り、雄二は平賀の提案をバツサリと断った。

「え？　なんでだよ、雄二？」

「Dクラスを奪う気は無いからだ」

「どういふことだよ？　折角Dクラスの設備を貰えるんだぜ？　断る理由なんか無えだろ？」

「二人とも忘れたのか？　俺達の目標はあくまでもAクラスだろう？」

「それならなんでわざわざDクラスを相手にしたのさ？」

「少しは自分で考えろ。そんなんだからお前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！　そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「なんだ？　それとも小学生だったか？」

シーン……………

「……………人違いです」

「まさか、本当に呼ばれたことあるのか……………?」

「貴方……………怠惰ですねぇ……………?」

「なんだよ! 大悟だつて小学生に『オタクのお兄ちゃん』つて呼ばれてる癖に!」

「なっ!? 明久テメエなんでその事知つて……………あつ」

シーン……………

「大悟……………お前もか?」

「……………誤解だ」

「お主ら一体何をしたら小学生にそういう風と呼ばれるのじゃ?」

「……………同類(コクコク)」

「オイオイ、ムツツリーニ。俺をこんな馬鹿の代名詞の明久と一緒にされちゃあ困るぜ」

「全くだよ。こんな二次元キモオタの大悟と僕が同列なんて失礼極まりないじゃないか」

「……………」

「お前ら、とりあえずその互いに持つてる包丁を置け。とにかく俺達は、Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。その代わりに、一つ条件があるんだ。」

ううむ……仕方ない。明久の始末は後回しにして、雄二は一体何を条件にするんだ？
「一応聞かせてくれないか？」

「なに、そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるあれを動かなくして貰いたい」

雄二がそう言って指差したのはDクラスの窓の外に設置されてるエアコン室外機だった。でもあれはDクラスのものじゃなくて別クラスの物だった気がする。なんだかスペースが足りないとかそんな理由でここを間借りしているんじゃないだろうか。

「Bクラスの室外機か」

「おい雄二。あれをぶっ壊そうってのか？　なんでわざわざそんな事を？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんだ。当然学校の設備を壊すわけだから、教師陣にある程度は睨まれるかも知れないが、そう悪い取引じゃないだろう？」

雄二はそう怪しく笑う。コイツ、今さっき戦いが終わったばかりだというのにもう次の戦争の事をかんがえているとは……流石神童だな。

「……………分かった。それで設備を交換しなくて済むなら、こちらはありがたくその提案

を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行つていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つているよ」

そして平賀はその場から去つていった。平賀のやつ……本当はそんなこと思つてない癖にな。

「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰つてゆっくり休んでくれ！ そして皆が期待している大悟のエロイラストは完成次第俺の方から報告する！ それじゃあ解散！」

雄二が号令をかけるとクラスの奴等は雑談をしながらFクラスへと戻つていった。

「大悟、農らも帰るとしようかの」

「あ……秀吉。悪いが校門の前でちよつと待つてくれ。俺はちつと用事がある」

「なんじゃ、また生徒の誰かに本を売る約束でもしとつたのか。了解じゃ」

放課後。

俺は誰もいなくなった教室で、とある人物と二人きりでいた。

目の前には座布団に行儀よく正座をして座るクラスメート……姫路がいる。

「ごめんなさい、岡崎君。わざわざ私の為に帰りが遅くなってしまつて……」

「別に姫路が謝る必要はねえ。時間を指定したのはこつちだし、これなら他の奴等に見られる事もないからな。」

既に時刻は午後の4時過ぎ。校舎にはもう殆どの生徒はおらず、新学期というものもあつてか普段なら聞こえてくる部活動中のグラウンドからの生徒の声もない。

俺と姫路が放課後まで残っている理由はただ一つ、契約の満了の為だ。

「ほれ、これが今回の例のブツだ。」

「あ、ありがとうございますっ！」

俺は鞆から一冊の本と抱き枕カバー、そしてクリアファイルのセットを取り出して姫路に手渡す。そこには明久（を限りなく再現した二次元風イラスト）が制服を着崩してエロい表情で何かによがっている姿がでかどかと描いてあった。

「う、うわああ……明久君が……、今回も素晴らしい出来映えですね。」

「当たり前前だ。俺は仕事に関しては一切の妥協も許さない。受けた仕事はどんな内容だろうと全力で取り組む。『全てはお客様の笑顔と二次元の貢献の為に』それがダイゴブックスの経営理念だからな。最新作『姫路×明久』くお馬鹿な恋人にお勉強のお時間ですっ♪ vol. 13』、おきに召すと嬉しい」

「は、はい！ こちらこそ、いつも私のお願いを聞いてくれてありがとうございます。じゃあ、これは約束のお金です」

そして、俺は姫路から報酬金を受け取った。

渡した時の姫路はとても嬉しそうな顔をしていて、三次元には興味の無い俺でもそんな姫路の表情は可愛いとさえ思わせるのだから他の奴等が見たら一撃だろう。

ただ、姫路の要求する内容が段々とアブノーマル化しているのはどうしてだろうか。

「……なあ姫路？ いい加減行動してみたらどうだ？」

「え……？ どういう事ですか？ 岡崎君」

「何言つてやがる。明久の事だよ。姫路、明久の事好きなんだろう？」
「ふええっ!？」

俺がそう切り出すと姫路は分かりやすいくらい狼狽えていた。

「や、やっぱり岡崎君には見抜かれていたんですね……」

「そりゃあこんな明久関係の注文を受けりゃあ嫌でもわかる。それに前から姫路は明久の話をすると態度が変わるからな。あの野郎……メインヒロイン属性の姫路に好かれるなんて羨ましい限りだぜ」

「う、うう……恥ずかしいです。」

「ま、向こうは全然その事には気づいてないっほいけどな。」

「そ、そうなんですか!？ それはそれで少し残念です……」

明久は見る限り学園ものに出てくる主人公男性キャラの典型的存在だ。誰もが憧れる学園のマドンナ級の女子の方からは好意を持たれる癖に当の本人は全く自覚が無い。あくまでも『仲の良い友人』として接している。そして最終回辺りで告白されて……その後は想像に任せる。

悪い奴じゃないのは分かってるけど明久は一回死ねばいいと思う。

「けど、アイツも少なからずは姫路の事を考えてるみたいだけどな」

「え? それってどういう……」

「後で雄二から聞いたんだがな。今回の試召戦争は明久が持ちかけた話なんだとよ」

流石にこの戦争の発端の原因について何も知らないというのは姫路が気の毒だ。ま、俺にとつちや理由なんてどうでもいいことなだけだな。

「まあ、雄二は初めから試験召喚戦争に興味があつたみたいで、いずれは自分から行動を起こすつもりだつたみたいだが、新学期初日からやる気は無かつたらしい。けど明久がいきなりAクラスに戦争をやるうと言ひ出してきたんだとよ。」

「なら、吉井君がそんな事を提案した理由つて……」

「オイオイ、なんでもかんでも俺に聞くなよ。姫路は頭が良い。なんで明久がそんな無謀ともいえる事を言ひ出したのか……その理由は姫路、お前が一番分かっている筈だ」

「……振り分け試験」

「ご名答。だがアイツは振り分け試験の結果に納得がいかないからつて勝ち目の低い戦争を起こそうとか、あの豪華な設備が欲しいからなんて簡単に浅はかな考えをする程、小せえ器の人間じゃねえ。つまりは『自分以外の誰かの為』なんだ。後は分かるだろ？」

「……っ！」

姫路はどうやらその真実に気づいた様で、顔を真っ赤に染めた。そして目尻には涙を浮かべていた。姫路にとっては『自分が好意を抱いている人が自分の為に戦つてくれて

いる』のだから。嬉しかったんだろうな。

そう、明久は姫路の為に試験召喚戦争を持ちかけたのだ。姫路は振り分け試験を体調不良で途中退席してしまったことでFクラスになってしまった。本当なら、姫路はAクラスの整った設備でのびのびと学校生活を送れる筈だったのに。でも自分の体調というの自分で管理しなくてはならない。それを怠ってしまったから姫路はこうなった。だからこれは誰のせいでもないし、姫路の自業自得とも言える。

けどそれで、はいそうですかとなるほど明久は非情な男じゃない。現にアイツは振り分け試験で必死に教師に対して『いくら試験とはいえ途中退席で0点扱いなんて酷い』と抗議してみたいだからな。成績がかかった中で普通ならそんな真似は中々出来ない。アイツはたった一人の女の子の為に自らを擲つてでも行動できる優しさで誰もが不可能と諦める事にも決して折れず立ち向かう芯の太さを持っている。だからこそ姫路は、そんな明久の強さに惚れたんだろうと思ってる。

「アイツはな、俺みたいに喧嘩が強くもねえし、雄二みたいに頭が切れる訳でも無い。秀吉の様な特技もムツツリー二の様な並外れた行動力もないただの馬鹿だ。だが……アイツは自分よりも他人の為に体を張れる事の出来る男の中の男だ。だから姫路。お前の気持ちは……間違いじゃないと思うぜ」

そう言って、俺は立ち上がる。ここまで言えば後は当人達次第だ。流石にそこまで踏

み込む義理も資格も俺には無いからな。

「岡崎君……私、書きます。吉井君に……手紙を書きます」

「……ラブレターってことか？」

俺が聞くと、姫路ははい、と頷いた。

「私……今まではずっとこうして吉井君の事を影でずっと見ていただけでした。でも……吉井君が私の事を想って頑張ってくれているのを知って、私も頑張ろうって思うんです。だからこの気持ちを形にして吉井君に伝えます。嘘偽りの無い……この気持ち」

そういう姫路の表情は、彼女らしい照れさや純粹さを見せながらも何かを決心したような晴れやかなものだった。

うん、俺も明久に対してこの沸き上がる気持ちを伝えようと思ったぜ。心底ムカつくから殺ってやりたいっていう気持ちを。

「そうか。ま、精々頑張るこつたな。じゃ、俺は帰るわ。今後もダイゴブックスを御鼻根に」

そう言って、俺が帰ろうとした時だった。

「あ、岡崎君！ ちょっと待ってください。」

「ん？　まだなにかーって、なんだそれ？」

「実は、いつも岡崎君にこうして本を作って貰っているお礼として、ドーナツを作ってきたんです。でも失敗しちゃって、一個しか作れなかったんですけど……」

「え、マジで？　貰っていいのか？」

「はいっ！　勿論ですっ。」

「ははっ。なら遠慮なく貰っておくぜ。後で明久に自慢してやるとするか！」

――

—— side 明久

「ど、どうして姫路さんと大悟が……」

僕は雄二と帰宅中、教科書を忘れた事に気づき、急いでFクラスへと戻ってきた。

そしたら、教室内で姫路さんと大悟が親しげに喋っている姿を目撃してしまったのだ。

「ほ、放課後二人つきりなんてまるで恋人同士……い、いや！大悟と姫路さんは同じクラスだったみたいだし、仲の良い友達だよね！」

僕はそう自分に言い聞かせて教室へと入った。

「たっだいまー」

「よ、吉井君!? どどどどうしたんですか!?!」

「やあ、姫路さん。ちよつと忘れ物をしちやつてね。姫路さんこそこんな遅くまでどうしたの?」

なにやら慌てている様子の姫路さん。どうしてだろうか?

姫路さんが座っている席(?)を見ると、卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。あとにか小さなバスケットがある。何も入ってないけど、大悟に中身を

あげたのだろうか。

「あ、あのつ、これはっ」

何をしているんだろう。まるで大悟に対してのラブレターに使うような便箋と大悟に対してのラブレターに使うような封筒を用意しているみたいだけど、使い道がわからない。

『現実を見る。明らかにラブレターだ』

黙れ僕の中の悪魔！ 僕はそんな虚言に騙されはしない！ だいたいそこまで言うならこれがラブレターだという証拠は——

「これはですね、そのつ、えつと——ふあっ」

コテン、と卓袱台につまずいて転ける姫路さん。

その拍子に隠そうとしていた手紙が僕の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》

「……………」

『……………これ以上ない物的証拠だと思うが』

「……………」

『わかっただろう？　これが現実だよ。さ、諦めて認めようぜ？』
「ち、違うんですつ。これは、その……なんていうか……」

僕は飛んできた手紙を綺麗にたたみ、姫路さんに返してあげる。

そして笑顔で一言。

「変わった不幸の手紙だね」

『コイツ認めない気だ！』

いい加減にしろこの悪魔め！　お前の言葉は僕をいつも不幸にする！　もう騙されない！

「あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

「そんなことをしないで、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。ああ大丈夫。スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくるから」

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ！　それは不幸の手紙だ！　実際に僕はこんなにも不幸になっているじゃないか！」

クソ！　百歩譲って雄二ならまだしもどうして大悟なんだ！　ゲームセンターで女の子にアーケードゲームのカードを交換してもらったために土下座までした挙げ句防犯ブザーを鳴らされたあんな奴のどこに魅力を感じるんというんだ……！！

「その手紙、やつぱりウチのクラスのー」

「はい。クラスメートです」

「……そつか。でも、そいつのどこがいいの？ そりや確かに、外見はそれなりだとは思うけど」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あつ、勿論外見も好きですけど！」

「憎い！ あれ（大悟）が心底憎いつ！」

「そうですか……？」

「うん、外見に自信のない僕には羨ましくて」

「え？ どうしてですか!? とつても格好良いですよ！ 私の友達も結構騒いでましたしー」

「え？ 本当？」

「はい。よく分からないですけど、坂本君と二人でいる姿を見ては『たくましい坂本君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言っていました」

「良い友達だね。仲良くしてあげてね」

「『明久が受け、雄二は攻め、これ前提』って言っていました」

「前言撤回。すぐに距離を置くべきだ」

「そう言ってたんです。岡崎君が」

「大悟おおお!!」

後でアイツの上靴に画鋏を仕込んでおいてやろう。

「それにしても、外見もつてことは、中身が良いの?」

「あ、えーつと……はい……」

「そうだね。肝臓とか頑丈そうだもんね」

大悟はオタクの癖に鉄人に匹敵する程の筋肉の持ち主だから、肝臓も高く売れそう
だ。

「それは身体の中身です」

「じゃ、まさかあり得ないとは思うけど、そいつの性格が?」

「あり得なくありませんっ」

姫路さんにしては珍しく大きな声。ちよつとびっくり。そこまで大悟に好意を寄せ
ていたなんて。

「……そいつの性格のどこがいいの?」

「や、優しいところとか……」

優しい?

雄二と組んで僕を騙してDクラスにボコらせて、生爪を剥いだ後に塩を塗ろうとし
て、僕と雄二が絡んでいる成人向けの同人誌を秘密裏に売って、小学生に平気で土下座

た。

――

でも……

「それじゃあ、僕は先に帰るね」

「はい、それではまた明日」

ガラガラ………ボタンッ

テクテクテク………

『職員室』

「失礼します」

「あら、吉井君じゃない。どうしたの？こんな遅くまで？」

「いえ、実は――」

「船越先生に、大悟と雄二から預かった伝言を伝えに来たんです」

その前に大悟、ついでに雄二。お前達二人には僕と同じ気持ちを味わって貰うからな

！

――

「おい大悟！ 急にどうしたのじゃ!? しっかりするのじゃ!! 大悟!!」

「……来世は……ギャルゲーのハーレム系主人公として、生まれ変わりたい……」
「何を馬鹿な事を言っておるのじゃお主は!?!」

「そして……二次元の女の子達とイチャラブドキドキ学園生活を、遅れますように……」

「大悟!! 気をしっかり持つのじゃ!! 目を覚ますのじゃ!! 大悟――!!」

第八問 女の子の手料理は男をイチコロ（物理的）にする

— side 大悟

「ああ……くそつたれ、頭が痛え……」

Dクラス戦の翌日、俺はいつも通り学校に向かっていた。珍しく普通の時間での登校だ。

だがいつもと違うのは朝から妙な頭痛と倦怠感に襲われているという事だ。

何故だろう。意識を奪われる程の綺麗な川に自分が立っていて亡くなった婆ちゃんに会ったような気がする。まさかとは思うがあれは三途の川だったのか？ てことは俺は一度死んでたつてこと？ 待てよ……なら異世界ハーレム系主人公になって美少女達とイチヤイチャするチャンスだったじゃん!! どうして生き返ってしまったんだ！ クソツ!! 神様はなんて残酷なんだ!!

「一体昨日は……何してたんだったけな……?」

イマイチ昨日の出来事が曖昧だ。覚えているのは俺が昨日、目を覚ました時には近くの病院のベッドの上だった。一緒に帰っていた秀吉の話によると、俺は急に倒れ、前世

での罪を懺悔し来世への戯言を吐きながら泡を吹いて気を失い救急車で運ばれたという。そして何とか救命措置により意識を取り戻した。医者の話によると心肺停止寸前だったとか。よく生きてんな俺。

「確か昨日は……試召戦争が終わった後に、姫路とブツの取引をして……そんなでラブレター……ドーナツ……チツ、駄目だ。思い出せねえ」

まるで思い出そうとすると脳がそれを拒否するかのようには記憶がぼやける。

「……まあいいか。過ぎたことだしな」

今日の予定は、確か雄二の話だと1日テストの点数の回復試験なようだから、行かなくても別に何かペナルティがあるという訳では無い。けれどすぐにBクラスとの戦争に踏み切る様だから、取り敢えず文系だけはちゃんと受けて後は寝てよう。

母さんからは「今日は休んだらどうだ？」といわれたがそこまででも無いので断った。

勝利品の約束のイラストは後はコピーするだけだから図書室のコピー機を借りるか

……

「おはようじゃ、大悟」

突然声がかけられたので振り返ると、そこには俺の親友の絶世の美女こと木下秀吉がいた。

「おっす、秀吉。今日も可愛いな」

「もうそのお主の挨拶にも慣れたわい。それより大悟、もう体の調子は良いのか？」

「ああ、ちよつと臨死体験をしただけだ」

「世間一般ではそれはちよつとは言わんと思うのじゃが……」

うむ、確かに秀吉の言う通りかもしれん。

「けど秀吉。お前が救急車を呼んでくれたんだろ？ 済まなかつたな」

「何を言うのじゃ大悟。儂らの仲じやろうが。友達を助けるのは当然の事で、お主が礼を言うことでは無い」

えっ……？ 何この子凄く男らしい。ヤバい、惚れそう。

「秀吉、もし俺が三次元の人間と恋をするなら真つ先にお前にプロポーズしようと思う」

「真剣な目で何馬鹿な事を言っておるのじゃお主は」

「そんなつ！ 秀吉は俺の事が嫌いなのか!?」

「誰もそんな事言っておらぬじやろ!? 第一儂は男じや!」

「振られた……秀吉に振られるって、ギャルゲーの選択ミスでバッドエンドになるよ
り辛い……泣きそう」

「……その調子なら大丈夫そうじやな」

神様、俺が一体何をしたと言うのですか。貴方は俺の事が気に入らないのですか。

——Aクラス——

「ふ、二人とも、一体どうしたの？」

「許さない………雄二は誰にも渡さない」

「へえ………随分とふざけた事をしてくれるじゃない。大悟………」

——

——side 明久

Dクラス戦の翌朝、僕はいつも通り学校へ向かう。

今日は試召戦争で消費した点数を補給する為にテスト漬けの筈だ。頑張らないと。

「おはよー、皆ー」

「明久アアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

教室の戸を開けた途端、僕は二つの大きな腕に顔面を捕まれた。

「えっ! ちよっ、何!? いきなりなんなの!」

「やってくれたなあ明久アア……」

「まさかこんな形で返してくるとはなあ……」

「え……一体何のこと?」

「とぼけんこの馬鹿野郎!」

随分と怒り心頭の様子の雄二と大悟。

「お前が下らねえデマを広げやがったせいで、朝から船越女史に追いかけられる羽目になつたじゃねえか!」

「そうだ! おかげで俺達ア連絡先を交換させられそうになるわ、デートの約束をさせられそうになるわ、「親御さんへの挨拶はいつ頃がいいかしら?」とか言われるわ散々だったんだからな!!」

そう言えば、僕は昨日姫路さんと別れた後、職員室に言つて先生にデマ情報を流したんだつた。「実は同じクラスの坂本君と岡崎君に『船越先生は俺の女だから手を出したら許さねえぞ』つて言われたんですけど」つて。

だからか、ここまで来る途中に他の生徒が「アイツら……可哀想に。きつと単位を落としてしまったんだな……」ってひそひそ話してたのは。仕返しのつもりだったけどまさかここまで広まるなんて思ってた。

「なんだ、良かったじゃないか二人とも。船越先生なら多分浮気もしないと思うし、家事もしつかりこなしそうだし、なんなら夜の相手もリードしてくれそうで僕の頭蓋骨が握り潰される様に痛い……！！ 出る！ 出ちゃう！ 脳みそがグロテスクな形になつて飛び出るうううう！！」

「おい。誰かペンチと釘を持ってきてくれー」

「塩とライターもなー」

ヤバい！ このままだと僕は生爪を剥がされて釘を打たれて塩を塗りたくられた挙げて句傷口を焼かれる！！

「ス、ストップ！！ 僕が悪かった！ もう二度とこんな事はしないと未来永劫に誓います！ だから離してええええええええええ！！」

「……チツ、仕方ねえ」

「船越先生にはあれは誤解だつて分かつて貰えたからな」

そう言つて、二人は渋々手を離して僕を解放する。た、助かった……尋常じゃない程痛かった。僕の頭、形変わってないよね……？

やっぱり僕が間違っていた。復讐なんて、悲しい結果しか産まないんだ。

「いって……そう言えば雄二、Dクラスの設備のことは皆には何も言われなかったの？」

「ああ。理由をきちんと説明していたからな。問題ない」

「ふーん」

皆が素直に言うことを聞いたのは雄二の動きを評価してのことだろう。

「それより、お前はいいの？」

「何が？」

「昨日の後始末の事だ」

はて、昨日の後始末……。ああ、雄二と大悟を殺ることか。

「何言ってるの？ 僕の仕返しは既に済んでいるじゃないか」

「いや明久。俺達の事じゃねえ。お前にはもう一人、始末をつけなきゃならねえ奴がい

るだろう？」

「大悟まで……。一体何が言いたいー」

その瞬間、僕の言葉は顔面にめり込んだ突然の拳で遮られた。

「吉井っ!!」

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！ アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽きたらず、消火

器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね……!」

……おお、そういえば。

「おかげで彼女にしたくない女子ランキングが上がっちゃったじゃない!」

まだ上がる余地があったことが意外だ。

「ーと、本来なら掴みかかっているんだけど、アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

「うん。さつきから鼻血が止まらないんだ」

「いや、そうじゃなくてね」

「ん? それじゃ何?」

島田さんが楽しそうに、本当に心から愉しそうに告げる。

「さつき船越先生が吉井の事を探してたのよ。「坂本君と岡崎君が私を取り合って喧嘩してたのを『ふざけんな! あの人と結婚するのは僕だ!』って言って二人を止めたって聞いて、我慢出来なくなつて自分から話をしたいんだって」

……え?

「な、なにそれ？ 僕そんな事言つてな……ハッ!!」

バツツ!!!

「……………」

「……………」

見ると、雄二と大悟は此方を見ながら怪しい笑みをこれでもかと浮かべていた。

そして一言。

「俺達がいつ、お前を許すと言つた？」

聞いた瞬間、僕は扉を開けて廊下を疾駆した。

——

—— side 大悟

「ぬおおお……終わつたー」

俺は疲れのあまり卓袱台に突つ伏す。

取り敢えず午前中の4教科が終了。Fクラスの奴等に渡すエロイラストの配布も終わった。皆よろこんでくれたようで何よりだ。

これで午後は殆どが理数系の教科だけだから昼寝に時間を費やせる。だがまさかの1時間目の数学の監督の先生が船越先生だったとは思わなかった。

ちなみに、船越先生には明久が近所に住んでいるらしいお兄さん（39歳 独身……お兄さん？）を紹介したらしい。

婚期を逃した男女の熟した恋愛劇か……うーん……売れそうな気はしないでもないが、流石に船越先生をモデルにするのは色々と難しいかも知れんな。俺も人妻はイケるがロリババアじゃない熟女はちよつと……

「うむ。疲れたのう」

俺の席の隣にいる秀吉がそう答える。

「……………（コクコク）」

いつも無口で存在が薄く思われがちなムッツリーニもいる。

「よし、昼飯食いに行くぞ！ 今日にはラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな」

「全然疲れてないみたいだね雄二。全く……一体どんな体の構造してるのやら」

「なら、俺も同行させて貰うかの。大悟とムッツリーニも来るじやろ？」

「おう。こここの所、売上が上がって財布が暖かいからな。たまには贅沢するのも悪くね

え」

「……栄養補給」

「じゃ、僕も今日は贅沢にソルトウォーターあたりにしようかな」

「明久。言い換えて格好良くしてつけど、それただの塩水だろうが」

「ん？ 吉井達は食堂に行くの？ だったら一緒にいい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜて貰うね」

そして俺達は立ち上がり、学食に行こうとした所で姫路に声をかけられた。

「あ、あの。皆さん……」

「うん？ あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えつと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

姫路はもじもじしながら俺らの方を見ている。

「おお、もしかや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そう言つて、身体の後ろに隠していたバッグを出している。そう言えば、昨日のDクラス戦の作戦会議前にそんな話をしてたな。けど本当に作ってきてくれるとはな。自分の分合わせても7人分。しかも俺や雄二はその体格通り結構食べる方だ。バッグの

大きさもそれなりにある。つまりそれも考慮して作ってきたのだろうか。

「迷惑なもんか！ ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ よかったあゝ」

ほにやつと嬉しそうに笑う姫路。本当なんてこんな二次元メインヒロイン系キャラの姫路がこんな主食が水と塩と砂糖というベジタリアンもドン引きの食生活を送ってる馬鹿野郎を好きになったのだろうかと常々思う。

「むー……っ。瑞希って意外と積極的なのね……」

そう言つて明久を親の仇のように見る島田。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室では無くて屋上でも行くかのう」
「そうか。ならお前らは先に行つててくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

「あ、それならウチも行く！ 坂本一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む。お前から、俺達の方まで食うんじゃねえぞ」

「大丈夫だよ。あまり遅いと分らないけど」

雄二と島田は財布を持って出ていった。多分一階の売店にでも行つたんだろう。

「僕らも行くかうか」

「そうですね」

そして俺達も屋上へと向かう。しかし、メインヒロイン最有力候補の姫路の手作り弁当か……これは味も期待でき……

「……ん？ 姫路の手作り？ なんだ？ 今一瞬妙な寒気がしたような……それに、何か思い出しかけたんだが……」

「どうしたのじゃ？ 大悟」

「……いや、なんでもねえ」

「……気のせいか。」

「……」

—— s i d e 明久

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空が広がり、日差しと風が気持ち良く絶好のお弁当日和だ。しかも屋上には僕達以外人はおらず僕らの貸切状態だ。

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうだな。天気の良い屋上に、皆が集まるのは学園アニメのお決まり展開と言えよう」

「……………（ココココ）」

「お、分かるのか同志ムツツリーニ？」

「……………少し勉強した。二次元も……………悪くない……………」

「おお！ 流石だぜ同志！」

「……………（グツ）」

「ふふっ。皆さん楽しそうでした。それじゃあ準備しますね」

そう言って姫路さんは、バッグからビニールシートを取り出しその場に広げる。流石姫路さん、準備も万端だ。ピクニック用のセットだったりするのだろうか。

そして僕らはビニールシートの上に足を広げた。

「あの、あんまり自信は無いんですけど……………」

姫路さんが重箱の蓋を取る。

『おおっ！』

僕らは一斉に歓声を上げた。重箱には唐揚げやエビフライ、おにぎりやアスパラ巻き

などお弁当の定番メニューが綺麗に並べられていて、凄く美味しそうだ。

夢にまでみた姫路さんの手料理、しかも僕にとっては久しぶりの食事だ。

「姫路さん、料理も上手なんだね」

「そ、そんな！　上手だなんて……そんなこと……」

「うむ、色合いも綺麗じゃし、これはさぞ美味な事じゃろう。大悟もムツツリー二もそう思うじゃろ？」

「……………（コクリ）」

「……………」

すると、秀吉の言葉にムツツリー二は頷くけど、大悟は何か神妙な面持ちをして姫路さんのお弁当を見詰めている。

しかも何故か手がプルプルと震えていた。

「どうしたの、大悟？　そんなに震えて。寒いのか？」

「いや……そうじゃねえんだが、何故か悪寒がな……さつきから何なんだこりやあ？」

ふーん、こんな筋肉ダルマの病気とは無縁そうな大悟でも寒気とか感じるんだ。

「ま、いいや。それよりも、姫路さんのお弁当を早速——」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムツツリーニっ」

動きの素早いムツツリーニがエビフライを一本つまみとった。

「……………（パク）」

そして、流れるように口に運び——

「……………っ!?!」

バタン!! ガタガタガタガタガタ……

その瞬間豪快に顔から倒れこみ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

その様子を見て、僕と秀吉と大悟は顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!?!」

「……………（ムクリ）」

「ど、どうしたんですか、土屋君？」

「……………（グツ）」

「た、多分『凄く美味しい』って伝えたいんじゃないかな？」

「あ、そうだったんですね。良かったですっ」

でも、ムツツリーニは目を虚ろにしながら足をガクガクさせている。まるでKO寸前のボクサーみたいだった。

ちよつと待つて？ まさかとは思うけど、ムツツリーニがこうなったのって、姫路さんのお弁当？ いやいや、こんなにも美味しそうなのに、そんなわけがー

「……………あ、俺急用を思い出したわ。ちよつと行ってー」

「まあ待ちなよ。大悟」

一瞬で何かを察したのか、大悟は立ち上がって屋上から出ていこうとする。けど逃がすものか！

「おいおい、離せよ明久。早く行かねえと先生を待たせちまうことになるだろうが。」

「何を言ってるのさ。まだ昼休みは始まったばかりだし、先生達もお昼を食べている筈だよ。用事はそれが済んでからでも問題ないでしょ？」

「いやいや、早めに行った方が先生も用事を済ませられてゆっくり昼飯が食えるじゃね

えか。そっちの方が効率もいいだろう？」

「大丈夫だよ。少しくらい遅れたって先生は怒りはしないさ」

「はっはっは、ああ言えばこう言うな、明久は。……いいから離せやボケナスが

……っ！」

「そんな事無いさ、もう大悟ってば。……そっちこそ大人しく座れやキモオタが
……っ！」

おのれ……自分だけ助かろうという魂胆だろうけどそうはいかないぞ大悟！こ
の手は何があろうとも絶対に離さない！

「岡崎君も吉井君も、遠慮なく食べてくださいね？」

「……そ、そうだな。せっかく姫路が作ってきてくれたんだもん……」

「じゃ、じゃあ僕も遠慮なく……」

引きつった笑顔で答える大悟。姫路さんの笑顔に断りづらくなってしまったのか、観
念して再び腰かけた。

そして僕達は姫路さんに聞こえないくらいの声で話す。

（大悟、まさかこの事を知ってたの？）

（いや、俺もこんな事実を今知ったんだ。ムツツリーニの様子を見て全部思い出した。
俺は秀吉と下校の時に昨日姫路に貰ったドーナツを食ったんだ。そしたら記憶がな

……)

(大悟が昨日泡を吹いて倒れたのはそれが原因じゃったのか……)

確かに昨日大悟は姫路さんにお菓子らしき物を貰っていた。けどまさかあれがあの大悟を気絶させる程のものだったなんて……

(明久。お前、胃袋に自信はあるか?)

(うーん、正直自信ないよ。食事の回数が少なくて退化してるからね)

(ならば、ここは儂に任せてもらおう)

(そんな、危ないよ！ 大悟は別にどうでもいいけど、秀吉を危険な目に合わせる訳にはいかないよ！)

(明久。お前には後で俺の恋のマジカル☆タコ殴りをお見舞いしてやる)

(大丈夫じゃ。大悟は知っておると思うが、儂は存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの芽程度なら食ってもびくともせん)

(確かに……一回演技の内つつつてバッタを焼いて食ったこともあるしな、お前)

見かけによらずタフな内蔵だ。でもジャガイモの芽って毒だったと思うし、バッタつてそもそも食べて大丈夫なの？

(でも……)

(安心せい。儂の鉄の胃袋を信じてー)

「おう、待たせたな！　へー、こりや旨そうじゃないか。どれどれ？」

「「あつ」」

雄二登場。

パク　　バタンーーガシャガシャン！　ガタガタガタガタ

そしてジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本!?　ちよつと、どうしたの!？」

遅れてやって来た島田さんが雄二に駆け寄る。

……間違いない。コイツは、本物だ……。

すると、雄二は倒れたまま僕の方をじつと見て、目でこう訴えていた。

『毒を盛ったな』と。

それに対して『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』と、僕も目で返事をする。

「さ、坂本君まで、どうしたんですか!？」

「あ、足が……攣ってな……。」

「あはは、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかな」

「うむ、そうじゃな」

「全く、準備運動を怠るからだ」

「そうなの？ 坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど」

そしてよろよろと立ち上がる雄二。だけどもツツリー二同様足が生まれたての小鹿の様にガクガクしている。

そんな二人に何があつたのか分かっていない様子の島田さん。取り敢えず彼女は一旦退場させた方が良いかも知れないな。

「ところで島田さん。その手をついてるあたりにさ」

「ん？ 何？」

「さつきまで虫の死骸があつたよ。だから手を洗ってきたら？」

「ええっ!? 早く言つてよ！ ちよつと行つてくる」

席を立つ島田さん。やっぱりそこら辺は女の子だから気にするんだな。

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」

「全くだね」

「実に勿体無いなあ、せつかくの姫路手製の弁当なのにな」

はっはっは、と男四人で朗からに笑う。

一方その裏側では壮絶な作戦会議が行われていた。

（明久！ 今度はお前がいけ！）

（そうだ！ お前が全部平らげれば綺麗さっぱり収まるってモンだぜ！）

（む、無理だよ！ 雄二や大悟でも無理だったのに僕だったらきつと死んじやう！）

（流石に儂もさっきの姿を見ては決意が鈍る……）

（大悟がいきなよ！ 姫路さんは大悟に食べてもらいたいはずだよ！）

（はあ!? なに馬鹿な事言ってるんだお前は！ 俺にもう一度あの三途の川を拝めつての
か!?!）

（お主……本当に死ぬ直前までいっとなつたのか……）

（だが、姫路はどちらからというとお前に食べて欲しそうだな）

（そんなことないよ！ 雄二は乙女心を分かってないね!）

（いや、分かってないのはどちらかと言うとお前のことじゃー）

（ええい、往生際が悪いぞ！ こうなったらー）

「あつ！ 姫路さん、アレはなんだ!?!」

「えっ? なんですか?」

（おらあつ!）

（馬鹿が！ そんなわかりやすい手に引つ掛かると思ってたもごああつ!?!）

（悪いな大悟！ これも俺達が助かる為だ!）

その隙に雄二が大悟の動きを封じてその口の中に弁当の中身をこれでもかと押し込んだ。

目を白黒させているので、顎を掴んで咀嚼するのを手伝ってあげる。ご飯はよく噛みましよう。

「ふう、これでよし」

「……お主、案外鬼畜じゃな」

秀吉が何か言ってるけど気にしない。大悟が焦点の合わない目をして泡を吹き始めたけど気にしない。

「ごめん、見間違いだったよ」

「あ、そうだったんですか」

こんな古典的な手にひつかかってくくれる姫路さんありがたい。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様」

「うむ、大変良い腕じゃ」

大悟の大活躍によつてお弁当は無事始末完了。僕らの気持ちはこの青空のように晴れやかだった。

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に大悟が『圧倒的美味……っ！』って凄い勢いで」

「そうですかー。嬉しいですね」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、大悟？」

「……ああ……旨すぎて、昇天しそうだ……」

ヤバイ。本当に逝きかけてる。

「あ、そうでした」

姫路さんがポン、と手を打った。

「ん？ どうしたの？」

「実はですねー」

「ごそごそ、と鞆を探る。そしてそこから取り出したのはタツパーのようなー」

「デザートもあるんです」

「ああっ！ 姫路さんアレはなんだ!？」

「やめろ馬鹿！ 次やったら完全に俺は亡き者になっちまう！」

大悟が命がけで僕の作戦を止めにかかる。くっ、反応のいい奴め。

（明久！ テメエには血も涙もねえのか!？ ダチを殺そうとしやがって!）

（仕方ないだろ！ こんな任務は大悟にししか出来ない。それに君はどんな壁も乗り越えてめるたんの彼氏に相応しい男になるんだろ!？）

（確かにその通りだ！ だがそれとこれとは話が別だ！ こんな下らない死に方したら

めるたんに笑われちまうだろうが!!)

(この意気地なしっ!)

(んだとコラア!! だつたらこれ以上手加減はしねえからな!)

(ちよつ! なんでファイティングポーズを取ってるの!?)

(今度こそ俺の恋のマジカル☆タコ殴りを打ち込んだ後でお前の口の中にたつぷり詰め込んでやる!!)

(いやあー! この人でなしー!)

(もう遅いわ!! 恋のっ!! マジカー!)

あわや大悟にリンチをくらおうというところで、秀吉がすつと立ち上がった。

(……儂が行こう)

(秀吉!? 無茶だよ、死んじやうよ!)

(おいコラア! 俺との扱いの差ア!)

そりやそうだ。見た目が美少女の秀吉の方が大悟なんかよりも遥かに重要度は高いんだから。

(大丈夫じゃ。儂の胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう)
確かに毒や昆虫までも無効化する秀吉の胃袋なら大丈夫かもしれない。

「……………秀吉、お前はやっぱり俺の親友だ」

「……すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「別に気にするでない。死ぬわけではないのじゃからな」

「そ、それもそうだね！」

「ああ！ 秀吉、頼んだぞ！」

「うむ。任せておけ。姫路よ、貰えるかの？」

「はい、どうぞっ」

そして、秀吉は一気に姫路さんのデザート（見た目はとっても美味しそうなフルーツミックスヨーグルト）をかきこんだ。

「むぐむぐ。なんじゃ、意外と普通じゃゴぼあつ!!」

バタッ！ ガタガタガタガタガタ

また一輪、花が散った。命という儂い花が。

「……大悟」

「……………なんだ？」

「……………さつきは無理矢理食べさせてごめん」

「……………俺も、謝る」

「……………分かってくれたんなら、それでいい」

「あ、あれっ？ 木下君、どうしちゃったんですかっ？」

「……………多分、腹一杯になって眠いんじゃないかな？」

「ふふっ。食べてすぐ寝ると牛になっちゃいますよ？」

「そ、そうだね……………あははは……………」

自称『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いていた。

「……………一同!! 英雄木下秀吉に、敬礼っ!!」

そして大悟の号令に従い、僕達三人は秀吉に尊敬と懺悔の念を込めた敬礼をした。

第九問 対Bクラス 〱開戦〱

—— side 大悟

「なあ雄二。次はどこを攻めるつもりだ？」

激動の昼食タイムが終わって、今は午後のティータイム中。

特に俺と秀吉は皆以上にお茶を飲む。なんかお茶には殺菌作用が含まれてるらしいからな。クソツタレ。まさか完璧ヒロイン系美少女だと思ってた姫路がまさか必殺仕事人だったとはな……。

ちなみに昼食を食べられなかった島田と姫路にはジャンケンで負けた明久がおにぎりを奢ってた。ざまあみやがれ！

「次は、Bクラスを攻める予定だ」

一息ついた後、雄二はそう言った。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

「正直に言おう。どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

「はつきり言うんだな。雄二」

とはいえ、無理もないだろう。俺も雄二の意見には賛同する。

文月学園はAからFの6つのクラスで構成されているが、その中でもAクラスは別格だ。奴等は勉強という人間が忌み嫌うものに対して血の滲むような努力を重ねてきた。そして今の豪華設備を手に入れている。

つまり俺達、何の努力もしてなかった馬鹿の集まりであるFクラスとは勉強にかける熱意や取り組み方が違いすぎる。まさに天と地ほどの差とっていいだろう。

「じゃあどうすんだ？　まさか今更無理だからやめようなんて舐めた真似はしねえよな？」

「当然だ。確かにクラス単位ではどうやっても勝てない、それは明白だ。だから俺達は、Aクラスとの一騎討ちに持ち込むつもりだ。」

「一騎討ち？　でもそれとBクラスがどう関係するのさ？」

明久が首を傾げる。でもそれは俺も聞きたい。

「明久。試召戦争で負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？　も、もちろん！」

「なら言ってみろ」

顔を見ると「ヤバい、どうしよう」といった表情をする明久。やっぱり知らなかったのか……俺もだけど。

すると、姫路がこそっと明久に耳打ちするのが見えた。助け舟のつもりだろう。

「設備のリンクを落とされるんだよね？」

「……まあいい。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ」
「そうか、覚えた」

「お前も知らなかったのか……なら、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

「ムツツリーニ、ペンチ二つ」

雄二がムツツリーニにペンチを要求。何故だ？ 間違つてはいないだろう？

「吉井君。岡崎君。負けたら相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

姫路のフォローが入った。

「つまり、俺達に負けたクラスは最低設備になるってわけか」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。まずうまくいくだろう」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合

にな」

「成る程。それならAクラスには一騎討ちを断ることは出来ないってことになるな」

一騎討ちを断ればBクラス、Fクラスと連戦をしなければならなくなる。いくらAクラスでも二クラスを連続で相手取るのはキツイだろう。それに奴らにとつては格下との戦い、Bクラスはまだしも、俺達ごときを相手にするのかと思つて戦闘意欲は下がる筈だ。

反対に俺達は不満という原動力を糧にし、体力と行動力にステータスを全振りしてるような人間の集まり。モチベーションの差は歴然だろう。

なんせ勝てばあの豪華な最新型のノートパソコンが手に入るんだ！ うっひょう！
これでダイゴブックスは更なる発展を遂げる事間違いない無しだ！

「でも雄二、そもそも一騎討ちでAクラスに勝てるの？ いくらこつちには姫路さんがいるっていつてもさ」

「恐らく、姫路がFクラスという情報は既に出回ってるだろうな。」

「そのへんに關しては考えがある。心配するな、明久、大悟」

随分と自信満々だが雄二。そう言う奴つてのはな、大抵予想とは逆の運命を辿るんだぞ？！

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告してこい」

「断る。次は大悟が行けばいいじゃないか」

流石にDクラスの時の二の舞は踏みたくないのか、きっぱりと断る明久。だが悪いな。俺だっってお断りだ。

「やれやれ、なら三人でジャンケンして決めないか」

「おい、なんで俺まで」

「ジャンケン？ OK。それなら乗った」

「チツ……：しゃあねえな」

「よし、負けた奴が行く、で良いな？」

雄二に俺と明久はコクリと頷いて返した。

「ただのジャンケンでもつまらないし、心理戦ありでいこう」

「わかった。それなら、僕はグーを出すよ」

ジャンケンの構えを取りながら雄二と俺に告げる。成る程……：心理戦か……：心理戦……：心理戦……

「そうか、それなら俺は——明久がグーを出さなかったら、明久をぶち殺す」
「えっ!？」

「ほほう、じゃあ俺は明久がグー以外を出したら、明久の顔面を蹴り潰す」

「ちよっ!？」 ちよつとタンマ！ なにその心理せー！」

「行くぞ、ジャンケン」

「わああっ!」

パー（雄二） パー（俺） グー（明久）

「決まりだな」

「明久、任せたぜ」

「絶対に嫌だ!」

「なんだ？ まさか明久、Dクラスの奴らにボコられた事を引きずってるのか?」

俺がそう訊くと、明久は頷く。やれやれ、しょうがないやつだ。

「あんな明久。ここだけの話だが、Bクラスには美少年好きが多いんだ。なんせ明久関係のグッズ依頼の約半数の割合がBクラスの奴らで占められてる。つまり何が言いたいか分かるな、オーケー?」

「オーケー! それなら確かに大丈夫だねっ!」

前々から思ってたけどコイツホントちよろいな。

「でも大悟、コイツ不細工だぞ？」

溜め息混じりに雄二がそう呟いた。前々から思ってたけど雄二って明久に対してドストレートに暴言吐くよな。

「失礼な！ 365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「やーい！ お前の顔面、おっ化け屋敷っ！」

「3人なんて嫌いだった！」

結局、明久が宣戦布告をすることに決定し、昼休みの会議はお開きとなり、再びテスト漬けの午後が始まった。

「岡崎君。さっきの吉井君のグッズがBクラスで人気って本当なんですか？」

「あ？ そんなもん嘘に決まってるだろ。ま、あんなものに騙されるのなんて明久ぐらいだろうがな」

「そ、そうですか……（ホッ、よ、良かったですっ。）」
「？」

――

「……言い訳を聞こうか」

午後のテストも無事終了し、放課後。

Bクラスに宣戦布告をしに行っていた明久がDクラスの時よりもポツコポツにされ

て帰ってきた。結果は……まあそうなるわな。

「予想通りだ」

「騙されたお前が悪い」

「くきいー！ 殺す！ 殺しきるーっ！」

そう言つてまずは俺に飛びかかってきた明久。

「マジカル☆アタック」

「ぐほおっ!」

そんな明久の鳩尾に、軽くパンチを入れてそのまま地に沈めた。

「俺は先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃない

ぞ」

そう爽やかに言い残して教室をさっさと出ていく雄二。

「じゃ、俺も帰るかな。お前ら、帰りにラーメンでも食つていかないか?」

「うむ、今日はうちの親も用事で家におらぬからの。たまにはいいじやろう」

「……………(コクツ)」

「うう……………腹が……………」

「悪かったから早く立てよ明久。ラーメン奢つてやるからさ」

「言つたな大悟! こうなったら腹いせに大悟の財布を空にするまで食べまくつてや

るっ！」

明久はそう言ってふらふらと立ち上がる。ま、今は財布は暖かいし、それくらいならやってやるとするか。感謝しろよ明久。

すると、まだ姫路が教室に残っているのが見えた。なにやら周りをキョロキョロしている。

「姫路、どうした？ 無くし物か？」

「え？ あ、ちよつとどこかにいってしまつて……」

「なら、俺達も手伝おうか？」

「い、いえ……大丈夫ですよ。ありがとうございます、岡崎君」

「そうか、ならまた明日な」

そう言つて俺達は、姫路を残して教室を後にした。

――

「……だあ、眠い」

俺は猛烈な睡魔に襲われ、卓袱台に突っ伏していた。

「どうした、寝不足か、大悟？」

「ああ……昨日は色々やることがあつてな。あんま寝てねえんだ」

「ちなみになにしてたの？」

「エロゲの攻略。後もう少しでメインヒロインとのイチャラブハッピーエンドだったんだ」

「うん。僕の予想よりだいぶ下らない事だった」

下らないとは失礼な。『Blood school』は僕の学園生活がハーレムと血みどろだった件々』はエロゲ界限の中でもトウルールエンドまでの道のりが最難関と言われた作品だぞ。

何度俺がゲームの中でヒロインの女の子達に、選択肢をミスって惨殺されたと思ってるんだ。一晩であんなに死ぬとは思わなかった。全くヤンデレって怖いよね。

それに他にも依頼品の仕上げや結局昨日の昼間に出来なかったDクラス戦の報酬のエロイラストのコピー、録り溜めしておいたアニメの観賞、筋トレもしてて実質寝てなに等しい。それに昨日の夜から何故か腹が痛むんだ。姫路の弁当のせいか？

それに加えて今日は朝からずっと補給試験。ただでさえ睡眠不足と腹痛でヤバいの更にテストという追い討ちをかけられ、もうクタクタだ。

「だが、大悟のイラストのおかげでクラスの士気は確実に上がってるぞ」
「当たり前だ。俺を誰だと思ってる」

見ると、俺のイラストを持っている連中の目は闘志に道溢れていた。もちろん全員に描いた訳ではなく、Dクラス戦でちゃんと結果を残した奴限定だ。そういう約束だからな。そのため持っていない連中は悔しさに涙を流してる。

ちなみに姫路には平賀を倒したMVP賞として明久の特製タペストリーを無償でプレゼントした。その隣で島田は不満げな顔をしている。

「この調子で、Bクラスの時も頼むな」

「ああ、分かったよ」

「ねえ大悟、僕の分は？」

「あ？ 雄二、コイツなんかしたっけ？」

「勝利の為に船越女史に貞操を捧げようとしたな」

「それは違うだろ！ 全部二人と須川君が仕組んだことじゃないか！」

「つたく、しゃあねえなあ……」

俺は鞆から一枚の紙を取り出して明久に渡す。

「ほらよ」

「やったー！ありがとうー」

予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

一向に下がらない皆のモチベーション。こんな狭く汚い教室に押し込められた男達の気概は生半可じゃないという事のようなのだ。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。もし負けたら連帯責任として今回の大悟のイラストは無しだと思え！」

『おおーっ！』

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらおう。野郎共、きっちり死んでこい！」
「が、頑張りますっ」

『うおおーっ！』

姫路と戦えるのもあつてか、野郎共の士気は最高潮に達しようとしていた。

今回は廊下での戦闘で勝ちにいくつもりらしいから、戦力もFクラスの51人中40人を注ぎ込む。つまり大規模な戦いが待っている。

キーンコーンコーンコーン

そして、昼休み終了のチャイムが鳴り響いた。

「よし、行つてこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエツサー！』

「今回も魂のこもった力作を用意して貴様らの帰りを待つ！ 野郎共！ 敵に向かって全速前進だああああ!!」

『ヒアー、ウイーゴー!!』

そして、明久と姫路、島田を含むクラスメート40人は教室から勢いよく飛び出している。

「さて、俺は少し暇だから漫画でも読むか……」

『いたぞ、Bクラスだ！』

『高橋先生を連れてるぞ！』

『生かして帰すなあーっ！』

なんか廊下から物騒な台詞が聞こえるが、まあ大丈夫だろう。俺は敵から雄二を守ることが役目だから。暫くはここに敵が来るなんてことは無いからな。

『み、皆さん、頑張ってくださいー』

『やったるでえーっ!』

『姫路さんサイコーっ!』

暫く漫画に集中しているとそんな声が廊下から聞こえてくる。向こうはどうやら頑張っているようだ。だが俺にとってはそんなことはどうでもいい!

そんな……まさか新たな敵の生き別れのお姉さんだったなんて……!
!? クソツタレ! 家族思いの優しいめるたんにとってそれがどんなに衝撃で苦痛なことか……作者は一体何を考えているんだ! この鬼畜め!

しかも正体がわかった所でページが終ってやがる!

「グググ……楽しませてくれるじゃねえか。これだからめるたんはやめられねえなあ!」

そう言つて俺は漫画を閉じる。今教室に残っているのは俺、雄二、ムッツリーニ、他Fクラス数名だ。雄二曰く、俺は完全なる護衛、ムッツリーニは作戦においての重要な要らしい。そして今ムッツリーニは戦場の様子を監視カメラと盗聴機で監視していた。

「ムッツリーニ、戦況はどうよ?」

「……こちらが優勢、戦力は減っているが、順調に進んでいる」

「だが、やっぱり実力が違いすぎるな。いくらこつちに姫路がいるとはいえ、このままじゃ他連中が戦死になるのは時間の問題か。一度点数の少ない前線部隊の奴らを下がらせて補充試験に当たらせる。その間は中堅部隊が前線に立って持ちこたえさせる。それに、出来るだけ採点が速い先生を連れてくのを忘れるなど通達しろ」

「分かった！」

ふむ、確か前線部隊には明久と島田がいた筈だ。今回はFクラスは数学を主力を武器にしているから、勉強が出来る姫路と数学が得意な島田はそう簡単にやられはしないだろう。明久は……ああ、まあ頑張れ。

「そういや雄二。Bクラスの代表ってどんな奴なんだ？」

「ああ、それなんだがな、あの根本らしい」

「根本……チツ、アイツか」

その名前を聞いた途端に俺は舌打ちをして拒否反応を示す。根本恭二という男は良い評判を聞かないことで有名だ。カンニングの常連だとか、勝負事で卑怯な手を使いまくるとか……とにかくズル賢くて陰湿、目的の為なら手段を選ばないなんとも聞くだ

けでムカつく男だ。

一度アイツに言葉巧みに色々誘われたが『俺はお前みたいに自分の欲だけで人を顎で使おうとする奴が一番嫌いなんだよ、とつとと失せろ』って追い返してやった。

「なんだ、何かあつたのか？」

「別に何もねえよ。ただ奴が代表をやつてるクラスとなりやあ、このままともに勝負をするのかと思つただけだ」

俺がそう言うと、Fクラスじゃない誰かが教室に入ってきた。

「ここにクラス代表の坂本雄二はいるか？」

「俺ならここにいるが、どうした？」

「BクラスとFクラスで協定を結びたいという申し出があつた。近くの空き教室まで来てくれるか？」

「協定か……分かつた。だが念のため何人かを一緒に連れていく」

「いいだろう、じゃあ案内するからついてこい」

「ああ。ムツツリーニ、大悟、行くぞ」

「……………(コクリ)」

「分かつた」

そして、俺は重たい腰を上げて、雄二達と共にそいつの後をついていった。

第十問 対Bクラス 〱作戦〱

— side 大悟

「……………」

俺達はBクラスからの使者と名乗る生徒に、協定を結ぶ為の空き教室へと案内されている。俺とムツツリーニは代表である雄二の護衛だ。

今現在、Fクラスの戦況は芳しくない。前線部隊の奴らは戦争開始から僅かな時間で何人も補習室送りになっている。流石にBクラスというだけあって点数の差が圧倒的。Dクラス時よりも苦戦を強いられていて、いくら姫路や島田が頑張ってくれてるとは言えども多勢に無勢。やがては点数を失い戦死するのも時間の問題だ。だからこの協定は今の俺達にとっては好都合といえる。

だが……………なんかどうにも怪しいな。協定を結ぶなら別にFクラスの教室でもいいだろうに。何故わざわざ空き教室なんだ？

(……………大悟、ちよつといいか)

Bクラスの使者は見た途端に叫び声をあげ、そのまま近くの男子トイレへと駆け込んでしまった。顔が青ざめていたから恐らく吐き気に襲われたのだろう。けどこれで戻るタイミングは出来た。

「よし、じゃあ俺は戻る。後は任せませ」

「おう、けど大悟。お前こんなのよく描けたな……」

「……流石にキツイ」

「ああ……俺も描いてる途中で何度か吐きかけたよ……今思うとなんでこんなもん描いたんだろうな……」

そう言つて俺はFクラスに向かった。もうあんなの二度と描かない、無理。

――

ガラガラッ

「だ、誰だ!？」

教室に戻り、扉を開けるとそこには数人の生徒達がいた。知らない顔だから多分Bク

ラスだろう。

そしてその連中は、俺達の卓袱台や筆記用具を酷く荒らしまくっていた。穴だらけになった卓袱台や折られたシャーペンなどが足元に転がっている。

「ほほう……成る程な。協定を結ぶつてのは建前で、本当は俺達を教室から遠ざける事が狙いか。そしてその間に俺達の教室を荒らして、補給試験もまともに受けられなくする。実に根本らしい陰湿なやり方だな」

「オイ！コイツ、例の男だ！ あの岡崎大悟！」

「なんでだ!? コイツは協定の為に井村が連れて行ったんじゃないのかよ!？」

「話がちげえじゃねえか！ アイツ何やってんだよ！」

狼狽えるBクラス生徒達。残念だったな、井村は今絶賛ゲロってる最中だ。

「チツ！ だったら、ここで岡崎大悟を仕留めるぞ！」

「そうだな！ 幸いこつちには人数がいる！ 袋叩きにしてやれ！」

『試獣召喚《サモン》っ!!!』

Bクラス生徒達の足元に幾何学模様が出現。そこから現れた召喚獣は皆強そうな武器を携え、俺を逃がさないよう取り囲む。

そして科目は……世界史か。

「コイツを倒せば、あとは厄介なのは姫路瑞希だけだ！ 必ず補習室送りにするぞ！」

『了解！』

「……はっ、面白え。試獣召喚《サモン》っ!!」

Fクラス 岡崎大悟 501点

世界史 VS

Bクラス 芳野孝之 195点

&

加賀谷寛 179点

&

田中玲 207点

&

井川健吾 210点

&

鈴木二郎 180点

&

小野明

199点

召喚獣の頭上に、それぞれの点数が表示される。

「はああ!!? 501点だとお!?!」

「あんなの担当教師レベルじゃねえか!」

「どうしてこんな奴がFクラスにいるんだ!?!」

「馬鹿め! Fクラスだと侮ったな! 俺に世界史で挑んだのが貴様らの運の尽きなのだよ!」

「クソツッ! キモオタのくせして!」

キモオタとか言うな! まあいい。今回俺は500点以上を取ったから腕輪も装備してる。まだ初めてだからどんな能力かは分からんけど、使ってみれば分かること!

「いくぞ雑魚共! 精々俺を楽しませられるような戦いをしてみせろよな!!」

そして、戦いは始まった。

「能力……発動っ!!」

Fクラス 岡崎大悟

40点

世界史 VS

Bクラス 芳野孝之

DEAD

&

加賀谷寛

DEAD

&

田中玲

D E A D

&

井川健吾

D E A D

&

鈴木二郎

D E A D

&

小野明

D E A D

ものの数分で、決着はついた。

「0点になった戦死者は補習ううううー!!!」

「クソオー!! 勝てるわけねえだろおー!!」

「化け物にも程があるうー!!」

「あんなのアリかよおー!!」

「「イヤだあああー!!」」

Bクラスの生徒達は戦死になったことで、鉄人に連れていかれた。ひとまず戦いが終わり、俺はその場に座り込む。

「だああ……まさか俺の腕輪にあんな特殊能力があったとは……だが、その代わりに大幅に点数が減つちまつてるな……しかもフィードバックまで付くとは……」

俺の腕輪の能力、確かにこれはかなり強いが代償が大きい。現に今の俺は大幅な点数ダウンととてもない疲労感に襲われている。これも明久の様なフィードバック機能の一種なのだろうか。だがどちらにしてもこの能力は諸刃の剣だ。一戦に一回きりしか使えないと考えた方がいい。

「そうだ！俺のお宝物達はっ!？」

俺は急いで飛び上がり、自分の持ち物の様子を確認する。卓袱台は使い物にならないほどこわされているが、幸運にも鞆の中身の物は全て無事だった。

「あつぶねえー、もし傷でも付いてたら発狂ものだったぜ。ごめんよめるたん！そして俺の宝達！危険な目に合わせてしまったね！でも大丈夫！絶対に俺が必ず君達を守るから！」

俺がホツとしていると、秀吉達が教室に戻ってきた。

「大悟！今の鉄人に連れていかれた人達は……」

「ああ、Bクラスの奴らだ。多分根本の指示で来たんだろう」

「てことは、大悟。一人でBクラス生徒を複数人相手にしてたの!？」

「運よく向こうが得意科目を選んでくれたからな。ただこつちも深手を負つちまつた。」

また補給試験を受けねえとな……」

「さ、流石大悟……」

「しかし、まさかこうくるとはのう……」

秀吉がFクラスの惨状を見て言葉を漏らす。

「すまん、俺が来たときには既にこの状態だった」

「いや、大悟のせいじゃないよ。けど酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

俺がそうだな、と返すと、雄二達が教室に戻ってきた。

俺は雄二にあつた事を全て説明すると、「やっぱりそうだったか」と納得した。

「だが、修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない。ひとまず大悟は使えそうな卓袱台で消費した科目の回復試験を受けてくれ。」

「分かった」

「雄二、なんで大悟を一人にしたの？ 大悟は社会科目以外じゃ負け確実なのに」

「Bクラスは文系が主力だからな。だからここにもその担当教師を連れてくるだろうと踏んで、文系が得意な大悟に任せただ」

「え？ 大悟って文系科目全部出来るの？」

明久の問にああ、と頷く。といっても現国は小論文とか読解とかだけだ。古典も社会

科目並にに出来るわけじゃない。精々Bクラスレベルだからな。

「なら、その間雄二達は何処に行ってたの？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に少し教室を空にしていたんだ。」
「どうやら本当に協定を結んだらしい。話によるとその内容は二つ。」

・四時までには決着がつかない場合は、戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。

・その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

「あ、そっか」

姫路はウチの主戦力だが、俺達と違って体がそれほど強くない。点数的にも体力的にも連戦はさせられないのだろう。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「だから協定を受けたのか。姫路が万全の状態で勝負出来るように」

「そういうことだ。この協定は俺達にとつてかなり都合が良い」

「そう言う雄二。だが妙だ。何故わざわざ俺らに対等な条件の協定を提案したんだ？ Bクラスの実力なら姫路の対策さえすれば真つ正面から叩き潰せるだろうに。」

あの根本が俺達の事を考えての協定？ そんな善意、アレにあるとは思えない。

「明久。取り敢えず俺らは前線に戻るぞい」

「分かった。雄二、あとよろしく」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう」

「俺にはめるたんの限定シャープペンシルを頼むぞ」

「自分で買えキモオタ」

そして、明久達は戦場へと戻っていった。俺も適当な卓袱台を探して消費した世界史の試験を受け直す。

まだ戦いは始まったばかりだ。それによく疲労感も少し良くなった。休戦時間まで油断禁物、気合いを入れ直すとしてよう。

Bクラスめ……俺のめるたんに手え出そうとした罪は、しっかりと償ってもらう。

「いやあああああ………っ!!」

回復試験中、何かを殴るような音と明久の悲鳴が聞こえたがスルーした。

――

「……………ここはどこ？」

「あ、気がつきましたか？」

「ようやく目え覚めたか。ここは教室だ」

「姫路さん……………大悟……………」

「心配しましたよ？ 吉井君つてば、まるで誰かに散々殴られた後に頭から廊下に叩きつれられたような怪我をして倒れているんですから」

「さつき島田が滅茶苦茶不機嫌そうに帰ってきたんだが……………お前、アイツにリンチでもされたのか？」

回復試験を一通り終えてのんびりしていると、鬼のような顔をした島田と共に、ボロ

ボロで死にかけの明久がクラスメートに担がれて帰ってきた。

おそらく明久が島田に対して何かやらかしたのだろう。あと島田の明久の呼び方が『アキ』に変わってたな。

「ちよつと色々あつてね。それより試召戦争はどうなったの?」

豊から身体を起こしてそう明久は言う。

「今は協定通り休戦中じゃ。続きは明日になる」

「戦況は?」

「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もつとも、こちらの被害も少なくはないがな」

雄二がこちらの被害を書いたメモを読み上げる。予想してたとはいえ、Fクラスの大
半の戦力をぶつけ、廊下での戦いは圧勝に見えても、全体的にはあまり芳しくない結果
といえる。やはりBクラスの壁は厚いな。一筋縄じゃいかなそうだ。

「ハプニングはあつたけど、今のところ順調ってわけだね」

「まあな」

すると、教室に戻ってきたムツツリーニが雄二の側に来た。

「……………(トントン)」

「お、ムツツリーニか。何か変わったことはあつたか?」

「……………Cクラスの様子が気になる」

「ん？ Cクラスだと？」

今日のムツツリーニは情報係として戦いには参加せず、相手の動きを逃さずチェックし、Bクラスを含めた他の周囲を警戒していた。

「……………恐らく、試召戦争の用意をしていると思われる」

「まさか、漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だな」

「戦いに勝った方にすぐさま仕掛けようって腹か。確かに戦争直後で弱ってる状態なら簡単に勝てるだろうからな」

「雄二、どうするの？」

時計を見ると時刻はまだ四時半、そこまで遅い時間じゃない。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言ってる脅しておけば俺達に攻め込む気も無くなるだろ」

「それに、向こうも僕らが勝つとは思ってもないだろうしね」

「よし。それじゃ今から行ってくるか。大悟、お前も来い」

「なんで俺まで？」

「脅すわけじゃないが、お前のその厳つい見た目なら黙ってるだけでも威圧感があるからな。一緒にいてもらった方が、事が有利に運ぶ確率が上がる」

「じゃあねえな。分かったよ」

俺はそう言うって立ち上がる。うん、もう疲労感是完全に無くなったようだ。

「秀吉は念の為にここに残ってくれ」

「ん？ なんじゃ？ 俺は行かなくて良いのか？」

「お前の顔を見せると、万が一の場合にやろうとしている作戦に支障があるんでな」

「よく分からんが、雄二がそう言うのであれば従おう」

ん？ 秀吉の顔がCクラスとどう関係があるんだ？

「じゃ、行こうか。早くしないとCクラスの人達も帰っちゃうだろうしね」

こうして、秀吉を除いた俺、雄二、明久、ムツツリー二というメンバーでCクラスへと向かった。姫路は少し疲れているみたいだったので秀吉と一緒に残らせる事にした。

――

―― s i d e 明久

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。

Cクラスの教室にはまだかなりの人数が残っていた。ムツツリーニの情報通り漁夫の利を狙って試召戦争の準備をしているのだろう。

「私だけど、何か用かしら？」

そう言つて僕らの前に出てきたのは、黒髪のペリーシヨートの女子生徒。確か小山さんだったのかな？ バレー部で結構活躍している人だったと思う。

すると、隣にいた大悟が僕でも分かるぐらい嫌そうな顔をしていた。

「げっ……代表つて、コイツかよ……」

「なっ！ アンタ……岡崎……」

小山さんも大悟を見るなり顔を歪めた。

「えっ？ 大悟、知ってるの？」

「ああ、一応な。だがまさかCクラス代表がああ時のヒステリー女だったとはな」

「なっ!? 誰がヒステリー女よ! アンタみたいなキモイオタクに言われたくないわ
!」

いきなり互いを罵倒してバチバチと火花を散らす大悟と小山さん。大悟の事をオタクと呼んでたから多分そこまで知らない間柄ではないんだろうけど、明らかに仲は良くない。何か二人の間に因縁でもあるのだろうか？

「よせ、大悟。俺達は喧嘩しに来たんじゃない。Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……」

雄二の言葉を聞いてなんだかいやらしい笑みを浮かべている小山さん。あまり女子の悪口は言いたくないけど、小山さんは優しく穏やかな性格とはかけ離れているようだ。

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

え？ 根本？

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

そう言って小山さんの奥から取り巻きを連れて現れたのは、短く刈り揃えられた黒髪にどこか陰湿さの感じる目つきの男。

僕達の敵であるBクラス代表の根本恭二だった。

「なっ!! 根本君！ Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？」

「な、何を言ってるー」

「先に協定破つたのはソツチだからな？　これはお互い様、だよな！」

根本君が告げると同時に取り巻きが動き出す。そしてその背後には先ほどまで戦場になっていた、数学の長谷川先生の姿が隠されていた。

「待ってくれ！　僕達は協定違反なんてしていかない！　これはCクラスとFクラスのー」

「無駄だ明久！　根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まってるー！」

「ま、そゆこと♪」

「へ理屈だ！」

「へ理屈も立派な理屈の内ってな」

マズい。僕らじゃBクラス相手に勝負になるわけないし、頼みの綱の姫路さんも今は教室だ。いや、姫路さんがいたとしても彼女は点数を消費している。きつと根本君はそれを知っていてわざと長谷川先生を呼んだのだろう。

汚いやり方だけど、効果的だ。

(……おい、明久、雄二)

すると、僕と雄二にだけ聞こえる様に大悟が耳打ちしてきた。

(ここは俺に任せろ。確実にこの場から全員を逃がしてやる)

(えっ? でも、大悟は数学が出来ないじゃないか!)

(馬鹿、正攻法のわけないだろ。こつちには秘密兵器がある。もう使うつもりはなかったが、向こうがそういうやり方ならこつちも手段は選んでられねえ)

(……本当に出来るのか、大悟?)

やけに自信満々の表情で頷く大悟。けれどこんな状況で、コイツは冗談や空威張りをするような男ではないことを知っている。何をするつもりかは知らないけど、今は大悟を信じてみよう。

(……分かった。お前に任せろぞ)

(僕も、頼んだよ。大悟)

(ああ。見てな、コイツらに岡崎大悟という人間の真骨頂を見せてやる)

そして、僕は再び目の前に意識を向け直した。

「よし! このまま坂本を討ち取れ!」

目の前で根本君がそう指示し、一斉に取り巻き達が動き出した。

「長谷川先生！ Bクラス芳野が召喚をー」

「ちよつと待ったああああ!!!」

大悟が急に声を上げて芳野さんの宣言をカットした。それにより全員の視線が大悟に集中する。

「お前らに俺からのプレゼントだ！ ありがたく受け取りやがれええええええええええ!!!」

バサアツ！ バサバサバサ……

大悟は制服の懐から紙束を取り出したかと思うと、それをいきなり空中に向かってぶちまけた。よく見るとそれは白紙じゃなくてイラストが描かれていた。

「……っ!? 大悟！ まさかあれ！」

僕はその時、それが一体何なのかを理解した。

「な、なんだこりゃあ……紙？」

根本君も取り巻き達も一気にダウン寸前まで追い込まれる。どうやらこれが大悟の策みいだ。

「お、お前ら!?! 一体何を見てーぎやあああーっ!」

「も、もう無理……おろろろろろ」

「助けてくれえ! それが駄目なら殺してくれええ!!」

最早吐き出す者まで現れ、收拾のつかないカオスともいえるべき状況。一度見た僕でさえもキツイのに、恐らく彼らは当分船越先生が夢に出てきて激しくうなされることであらう。

「よし! 今のうちに逃げるぞ!」

「ま、待ておかぎーぎやあああーっ!」

そして、僕達はなんとかCクラスから脱出することが出来た。背後からはちよつと酸っぱい匂いがしたけど。

――

Fクラスに戻ってきた僕達は、秀吉達にCクラスであったことを話し、その場に残る全員と今後について考えていた。

「さて、こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にCクラス戦はキツイ」

向こうもそれが狙いなものだから、僕らが勝ったとしたら間違いない息つく暇を与えずに攻め込んでくるだろう。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな。こちらに姫路がいるとはいえ、勝てる見込みは限りなく低いじやろうな……」

僕らが頭を悩ましていると、雄二が野性味たつぷりの活き活きとした顔で告げる。

「心配するな。向こうがそう来るなら、こつちにだつて考えがある」

「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。さつき大悟がやってくれたように、目には目を、だ」

この日はそれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しになった。

ちなみに大悟は猥褻なイラストをばらまいたことで長谷川先生によって通報された後に補習室送りになった。

第十一問 対Bクラス 〱勝機〱

— side 明久

対Bクラス戦に突入してから翌日。

「昨日言っていた作戦を実行する」

教壇に上がった雄二が開口一番そう告げた。

「作戦？ でも、開戦時刻はまだだよ？」

「Bクラス相手じゃない。Cクラスの方だ」

そう言う雄二。確かに昨日の感じからするとCクラスの存在は厄介だ。Bクラスに勝利した直後に攻め込まれれば、こつちにはほぼ勝ち目は無い。だから雄二はBクラスとの戦いの前に対処しておくつもりだろう。

「でも、何をするの雄二？」

「やり方は簡単だ。秀吉にコイツを着てもらおう」

そう言つて雄二が鞆から取り出したのはうちの学校の女子の制服。他校にもオトナのおトモダチにもかなり人気がある垂涎の逸品だ。

「……ねえ雄二。どうして君はそんなものをもっているんだい？」

「心配するな。これは大悟に特別に用意してもらったものだ」

「もれなく秀吉の身体のサイズの全てに合わせてある。ぬかりは……無いっ！」

隣を見ると、大悟がやりきったような顔で僕にグーサインをする。どうして本来男子が持つてない筈の女子の制服を大悟が持つているんだろうか。

多分大悟のことだから徹夜でもして拵えたのかな？ 多分コスプレイヤーの人にも教えてもらったとかだろうけど、ホント見た目に反してムツツリー二並に器用な奴だなあ。

「それは別に構わんが、儂が女装してどうするのじゃ？」

「秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおうなるほど。それが狙いか。」

秀吉にはAクラスに所属する双子のお姉さんがいる。見分けがつかないくらいよく似ていて、違う箇所なんてテストの点数と話し方くらいしか思い付かない。

彼女に化けてAクラスとして圧力をかけるといふことか。

「とういうわけで秀吉。用意してくれ」

「う、うむ……分かったのじゃ」

雄二から制服を受け取り、秀吉はその場で生着替えを始める。

な、なんだろうこの胸のときめきは。相手は男なのに目が離せない!

「……………!! (パシヤパシヤパシヤパシヤ!)」

ムツツリーニは指が擦り切れるんじゃないかというくらいに凄い速さでカメラのシャッターを切っている。

良かった。ときめいているのは僕だけじゃなかった。

「ふん。三次元ごときで取り乱すとは、二人ともまだまだだな」

大悟。そういう君も凄い速さで秀吉そつくりの美少女生着替えイラストを描いているじゃないか。強がりには良くないよ?

「よし、着替え終わったぞい。ん? 皆どうした?」

「さあな? 俺にもよくわからん」

「おかしな連中じやのう」

いや、絶対におかしいのは秀吉の外見だって! どうしてそんなに色っぽいんだよ!

「さあ! このダイゴブツクスの新商品、二次元美少女風秀吉の生着替えイラスト! 初期価格は10000円からだ!」

「1200円!」

「いや、俺は1500円!」

「何をう!? ならこっちは20000円だ!」

そして向こうでは既に先ほどの大悟のイラストがオークションにかけられている様だった。

フツ……皆血眼になってイラストを買おうとしてるけど甘いな。もう少し待てばそれが大悟の『神の右手』と『無限の妄想力』によって完璧な同人誌に生まれ変わって販売されるというのに。

「しかし、本当に似てるな……まるで見分けがつかん」

「そうかの？ 儂はあまりそう思わぬが……」

いや、どこからどうみても木下優子さんそのものだ。何も知らない人が見たら騙されてもおかしくない。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「あ、僕も行くよ」

「はい！ この商品は須川亮が4000円で落札！ これにて閉廷！ というわけで俺も行くぞ」

そして僕達は雄二のあとをついていき、Cクラスへと向かった。

そして、Cクラスの前で立ち止まる僕達。

「さて、ここからは悪いが一人で頼む」

Aクラスの使者になりすます以上、Fクラスの僕や雄二が同行するのはまずい。それに昨日の大悟が起こした行動のせいで特に小山さんなんかはすつごい僕達を敵視してると思うし、見つかると面倒だ。

よって、僕達は離れた場所から様子を窺うことになる。

「気が進まんのか……それになんかこの教室からやけに酸っぱい匂いがするのじゃが………」

それは僕も思った。けど秀吉には真実を伝えない方が良いだろう。これ以上犠牲者を増やす訳にはいかない。

「そこを何とか頼む」

「そうだけ秀吉。それに俺が考えたこの台詞なら必ず成功する。お前の特技をCクラスの奴らに見せつけてやれ」

「むう……。仕方ないのう………」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達人だったりする。勉強は苦手だけど、他の面に抜群に秀でているのだ。

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ……。」

溜息とともに力なくCクラスに向かう秀吉。はたしてうまくいくだろうか……

ガラガラガラ

『静かになさい、この薄汚い豚ども!』

……うわあ。これ以上ないくらいの挑発だ。

『な、何よアンタ!』

この高い声はCクラス代表の小山さんだろう。

『話しかけないで! 豚とゲロの臭いが移るじゃないっ!』

自分から来たくせに酷い言い様。けれどゲロに関してはおながち間違いないと思う。

『アンタ、Aクラスの木下ね? ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないやな

いわよ! 何の様よ!』

『フン! 弱い豚ほどよくブーブー鳴くものね、滑稽で不快だわ。私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの! 貴女達なんて腐った豚小屋で充分だわ』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですってえ!』

別にFクラスとは言っていないぞ小山さん！

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。ちょうど試召戦争の準備をしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから!』

そう言い残し、秀吉はCクラスから出てきた。その顔はやけにスッキリとしていた。

「これで良かったかのう?」

「ああ。素晴らしい仕事だった」

「俺はお前のその才能が恐ろしいぜ」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ! Aクラス戦の準備を始めるわよ!』

Cクラスから小山さんのヒステリックな叫び声が聞こえてくる。

「はっ、ざまあ見ろってんだよ」

「ねえ大悟、昨日といい大悟は小山さんと何かあったの?」

大悟はああ、と頷く。

「アイツは一年の頃、俺のやつてるダイゴブックスに対して散々難癖をつけてきてな。やれキモいだの友達を巻き込むなどの不快だの色々言われたよ。けど俺は好きでやつ

てることだし、その友達も好きで買ってたんだ。テメエの我が儘で他人の趣味にまでケチつけんじやねえ、分かったら帰れヒステリー女って言い返したら、なんか逆ギレされて、敵視されるようになったんだよ……」

ため息を吐く大悟。まさか小山さん、大悟にそんな事言ってたんだー

「つたく、ああいうやつはな、ファンタジーもののエロゲーによくある『くつ……殺せ！』って属性の女主人公と一緒になんだよ！」

「え？ どういうこと？」

「分かりやすく説明するとだな、とある王国の騎士として育てられた小山は世界を征服しようとする魔王を倒すための旅に出る。だがしかし魔王の力は凄まじくあつけなく敗北。そして小山は捕らえられ、魔王の性欲の発散の為に若干未発達の身体を使われそうになるが『体は好きに出来ても、心まで好きに出来ると思うな』と必死に抵抗する。しかし行為を重ねるごとにやがてはその快感と快楽に溺れてしまい、自分から『魔王さまあ……早くその極太○○○で気持ちよくしてえ』と身を振らせー」

「大悟、少し黙ろうか」

これ以上は色々たまずい気がするので、大悟の口を封じた。一切の羞恥心もなくこんな事を饒舌に話すとは、流石オタクの中のオタクだ。

けれど知り合いの女子を平気でエロゲーの題材にするあたり、やっぱり大悟は頭がお

かしい。

「よし、作戦も上手くいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「ーそして魔王の部屋から聞こえてくるのは人としての羞恥心を完全に捨て去り、魔王の黒光りする○○○から噴水のように溢れ出る白濁液を全身で受け止めた小山の喜びに満ちた声が部屋いっぱい響き渡りー」

隣でまだ馬鹿がなにか言ってるけど、余計なことに気を取られている暇は無い。あと十分で今日の戦争が始まる。

僕らはとりあえず大悟を黙らせつつ、Fクラスへと向かった。

——

—— s i d e 大悟

Cクラスへの対策も終わり、Bクラス戦の二日目に突入した。

今日の雄二の作戦は『とにかく敵を教室内に閉じ込める』とのこと。昨日と同じ場所からスタートし、姫路を再び総司令官として明久達が動いている。

俺は昨日と同じく、雄二の護衛だ。その為今は教室にいるのだがー

「暇だー」

暇だった。教室には今俺と雄二、そしてFクラスの何名かだけだ。雄二は今俺達と敵の現在の勢力をノートに記している。ちなみにムツツリー二は本隊とは別行動を取っている。

「なあ雄二ー、俺も戦いに行きてーよー」

「駄目だ。お前は確かに文系科目、特に社会科目ならAクラス以上の力があるだろうが他がクソレベルだ。しかも向こうは既にお前の実力を分かっているからな。当然対策も講じられてるに決まっている。だから今の戦況でお前を易々と出陣させる訳にはいかない。戦死にでもなられたら困る」

「それはそうだけだよー……」

「お前はいざというときの隠し手だ。万が一の時には遠慮なくお前の力をふるってくれ構わない。だから今は我慢しててくれ」

確かに俺の召喚獣なら社会科目という条件下ならかなりの力を持っている。もし姫

路がピンチになったりムツツリーニが失敗した時に俺を投入しようと考えているのだから。

そうすれば相手は文系科目を中心に勝負しているし、点数を消費している。そこを一気に殲滅し、根本の首を取るようになるんだな。それに最悪、腕輪の能力も使わざるを得ないか……。

「お前が理数系もまともに取れば、もつと早く勝負がつけられるんだけどな……」
「はっはっは、無茶言うな。ま、しゃあねえ。なら俺はまた漫画でも読んで暇をー」

バァン!!

突然、教室の扉が乱暴に開かれた。

入ってきたのは明久だった。

「うん? どうした明久。脱走か? チョキでシバくぞ」

「それとも、俺の恋のマジカル☆金的潰しでもー」

「話があるんだ」

そう言う明久は、雰囲気がいっつもとは違っていた。俺と雄二のジョークにも応えない

し、やけに目つきが鋭い。

つまり今一ー明久は怒っていた。それもマジおこ、ガチギレ状態だ。

「…………随分と訳ありみてえだな、明久」

「…………とりあえず、聞こうか」

俺と雄二は様子を察した。

あの温厚な明久がここまでキレるとはな、まさか根本がまた何かやらかー

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

…………は？ コイツ今なんて言った？ 確か根本の制服が欲しいって言ってたよう
な。

「明久、もう一度言ってくれ」

「根本君の制服が欲しいんだ」

「お前に何があつたんだ？」

思わず雄二とハモってしまう。

「ああ、いや、その。えーっと……」

「まあいいだろう。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう」

「そうだな、それに人の趣味ってのはとやかく言うことじゃねえし」

なんだろうな。明久が段々遠い存在のように感じる。

「で、それだけなのか？ 明久」

「もう一つある。姫路さんを今回の戦闘から外して欲しい」

「姫路を、だと？ 何でだ」

「理由は言えない」

俺の問いにそう返した明久の表情は真剣そのもの。冗談の類いではないみたいだ。

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。どうしても」

雄二は顎に手を当てて考え込む。

おそらくどうやって姫路抜きでBクラスの壁を突破するか考えているのだろう。

このまま姫路を外すのは俺達にとってリスクしかない。最悪そのまま敗北に繋がる可能性大だ。それを明久は分かかってー

「頼む、雄二ー！」

雄二に深く頭を下げる明久。まさか明久がここまでするとは、よっぽど根本の制服が

欲しいのかーいや、明久の性癖を俺は知っている。少なくともコイツは男、しかも根本なんかの制服を欲しがるようなアブノーマル人間じゃねえ。

おそらく明久が欲しいのは、制服自体じゃなくて、根本の制服にある『何か』。そして姫路を戦闘から外してほしいという頼み。

この二つから分かるのは、根本が持っているその『何か』が姫路に関係しているという事。そしてそれが姫路にとって枷となっている事だ。

「明久……お前」

「……条件がある」

「条件？」

「姫路が担う予定だった役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ」
「もちろんやってみせる！ 絶対に成功させるさ！」

「良い返事だ」

明久の言葉にふっと口の端を上げる雄二。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ」

今はBクラスの前後の扉の二ヶ所で行われていて、これは雄二曰く時間稼ぎと作戦に必要な行動との事。その為教室の奥でふんぞり返ってる根本に接近する為には姫路レベルの火力が必要だ。

俺ならそこを突破出来なくも無いが、その前に理数系科目で戦死になる確率が高い。つまり、実質明久だけでやれっつてことか。

「もし、失敗したら？」

「失敗は出来ない。必ず成功させろ」

いつになく強い口調でそう言う雄二。

「じゃあ俺はDクラスに例の件で指示を出してくる。大悟、明久についてやってくれ」
「分かった」

Dクラスに向かおうとした時、雄二は扉の前で振り向かずにごう言った。

「明久。確かにお前は点数は低いが、秀吉やムツツリーニ、大悟のように、お前にも秀でている部分がある。だから俺はお前を信頼している。うまくやれ」

「……雄二」

「大悟、お前もだ。明久のこと、頼んだぞ」

「ああ、任せておけ」

そう言い残し、雄二は教室を後にした。

「さて……………どうする？明久」

「……………」

明久は下を向いて何か考えて込んでいた。すると小声でこう呟く。

「……………痛そうだよなあ」

「あ？」

俺が聞き返すと、明久は急に頬を叩き、自分を奮い立たせるような仕草を見せる。

「……よっしゃ！ あの外道に目に物見せてやる！」

「……………何か思い付いたようだな、明久」

「うん、だから大悟。頼みがあるんだ、君の力が……必要だ」

「……」

—— s i d e 明久

「…………お前、本気か？」

僕が考えた作戦を大悟に伝えると、大悟は真面目な顔で聞き返してきた。

「本気も本気、ガチ本気だ」

僕は一切の迷いもなく頷いた。

「…………確かにお前の召喚獣の特性と俺の力があれば、お前の作戦は成功するかも知れねえ。だがこれを相当なリスクが伴うぞ。お前は戦死——補習室送りは確実だ。それに加えて明久にはフィードバックがある。痛みつてのは人間が受けられる限界つてものがあるからな、運が良くて気絶だ。それでもやるつてのか？」

「上等だ。やってみせるさ」

方法があつて、勝算がある。気合いと根性さえあればやれるのだとしたら、やらない理由はどこにもない！

なにより姫路さんが味わった痛みに比べたら、フィードバックなんて大したことじゃない！

「…………覚悟は出来てる様だな。良いだろう、やってやるよ」

「ありがとう、大悟」

「ただし、一つ教えてくれ」

「なに？」

「姫路に何があった。どうして根本の制服が姫路に繋がるんだ？ ヤツは姫路の何を握ってる？」

大悟の質問に、僕は言葉を濁す。

「そ、それは……」

「答えろ。お前にはその義務がある。俺は隠し事が嫌いだぞ」

「どうやら大悟には話さないといけないようだ。僕は観念して答える。」

「……僕が本当に欲しいのは、制服じゃなくて、そこに入ってる手紙なんだよ」

「なんだと？ 手紙がなんだってんだよ。それは姫路が書いたヤツなの……」

「……そういう事から」

大悟は僕の考えに気づいたらしく、納得した様子を見せた。そして天井を見上げてふう……と深呼吸をする。表情は変わっていないけれど、大悟の大きな拳は硬く強く握られていた。そう、根本恭二が奪ったのは姫路さんの好きな人である大悟に渡す為のラブレターだったのだ。

言おうかどうか凄く迷ったけど、この際どうでもいい。だって大悟は姫路さんにとって大切な人なんだから。

「あの野郎……随分と舐めた真似してくれんじゃねえか」

「僕は絶対に根本恭二を許さない。けれど僕は無力だ、一人じゃ何も出来ないー！だから大悟！ 僕に力を貸してくれ!!」

僕は今度は、大悟に深く頭を下げてお願いした。この作戦にはどうしても大悟の力が要だ。だから僕は断られたとしても何度でも頼み込む。なんだったら土下座だつてしたつて構わない。

姫路さんの為なら、僕のプライドなんてズタズタに引き裂いてやる!

「……明久。知つてると思うが俺は二次元を愛する男だ。けどそんな俺でも、人として超えちゃならねえ領域ぐらいは理解してる。そして俺には、絶対に許せねえ人間つてのがある。それはなーー」

「……根本のような、テメエの都合だけで女を傷つけるような野郎だ!!」

「大悟……!!」

「いいぜ! やつてやろうじゃねえか明久。あのクズ野郎に、正義の鉄槌つてのをお見舞いしてやろうぜ!」

「ああ! 上等だ! 何だつてやつてやる!」

そして僕らは強い握手を交わす。大悟もどうやらやる気満々のようだ。

待つてろよ根本恭二、目にもものを見せてやる!

――

「えつと……これはどういう状況かな？」

Dクラスに召喚獣勝負の立会人として呼ばれた社会科の落合先生が僕らにそう尋ねる。

「落合先生、これは僕と大悟の決闘です。どうか許可を下さい」

「俺からも頼みます。コイツとはここでケリをつけなきゃならねえんです」

向かい合う僕と大悟。そして他に補給テストを受けていた美波と武藤君、君島君を連れてきていた。

「アキも岡崎も、本気でやるの？」

「大丈夫だよ美波。何も心配しなくていい」

「これは俺達の喧嘩だ。手出し無用で頼むぜ」

「でも、それならわざわざこんな所でやらなくても……」

「先生。コイツは《観察処分者》だ。あんなボロつちい場所で暴れたら本当にぶつ壊れち

まいますよ」

「友達同士で喧嘩はいけないことなんじゃ……」

「いえ。やります。大悟には常日頃から色々やられましたから。ここで礼をしてやらな
いと僕の気が済まないんです」

「はっ！ 弱い犬程よく吠えるな」

落合先生に有無を言わせぬ強い口調で言い切る。

「わ、分かりました。確かに喧嘩するほど仲が良いってことわざもあるもんね。それな
ら、承認します！」

これで召喚が出来る。

大きく息を吸って、腹の底から声を出した。

「試獣召喚《サモン》っ!!」

僕と大悟は同時に召喚獣を呼び出した。

Fクラス 吉井明久 70点

世界史 VS

Fクラス 岡崎大悟 598点

点数の差は絶望的、そして僕の召喚獣は学ランに木刀という弱そうな装備。反対に大悟の召喚獣は和装束に巨大な棘のついた金棒。普通なら勝てる訳が無い。しかも僕は《観察処分者》としてこきつかわれた時はほとほと嫌になったけど、今はその肩書きに有り難さを感じる。これで僕は根本に一泡ふかせられるのだから。

「かかってこいや明久!」

「行けっ!」

大悟の召喚獣目がけて駆け出す僕の召喚獣。壁を背にした相手に対し、勢いを乗せて大きく拳を振るった。

ドンッ!

「ぐーうっ!」

しかしその動作はあっさりとかわされてしまい、壁を殴り付ける。

そしてその拳の痛みが僕にフィードバックする。

「甘えんだよ明久あ!」

すると、背後から大悟の召喚獣が大きく金棒を振り上げ、僕の召喚獣に向かって攻撃をしかける。

ドゴオオン!!

「があああつ?!」

僕の召喚獣は金棒の威力に耐えきれず音をあげながら壁へと叩きつけられる。そしてフィードバックによる想像を絶する苦痛が僕の全身を襲った。

「まだだあつ!!」

立ち上がり、更に力を込めた一撃を放つ。

しかし今度は金棒で防がれてしまい、再び金棒でぶん殴られて同じ壁に打ちつけられる。

ドゴオオオオン!!!

「ぐううううううう……っ!!」

その威力は教室を大きく揺るがせる一撃だった。その反動も凄まじく、言葉では言い表せない程の激痛が走り、ふらつく。

流石大悟の召喚獣、手加減してくるとはいえ強すぎる。少しでも気を抜いたら痛みで気絶しそうだ。

「明久ア! 氣いしっかり持ちやがれ! それとも姫路の為になりたいっていう、お前の気持ちはその程度か!!」

「ま……っ! まだだ! こんなものじゃ、僕は負けない!」

「二人とも、もう時間がないわよ」

現在時刻は午後2時57分。作戦開始まであと僅かだ。

『お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』

『なんだ？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？』

遠くから根本君と雄二の言い合いが聞こえる。姫路さんが戦闘に参加出来ない分、本隊まで出動せざるを得なかったのだろう。

『はあ？ ギブアップするのはそっちだろ？』

『無用な心配だな』

『そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

『……お前から相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお』

『負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

何とか雄二達が時間を稼いでくれてる。この機会を無駄にするわけにはいかない！
「歯ア食い縛れやあっ!!」

三度目の攻撃。今度は頭から壁に叩きつけられる。

最早痛みで意識が朦朧としてきて、口からは血を流し、全身には軽く痣までできていた。

そして壁には大きな亀裂が生まれている。

「はあ……はあ……」

「そうだ……耐えろ明久。お前の根性は、こんなもんじゃねえ筈だろ！」

「当たり前……前だっ！」

『……さつきからドンドンうるせえな。何やってんだ？』

『さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？』

『けつ。言つてろ。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！』

『……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！』

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

きた、このタイミングを待っていた。雄二達率いる本隊がBクラスから遠ざかり、それを追いかける向こうの戦力。

それはつまり、代表である根本君の防衛力が激減したということ。

本来なら姫路さんが請け負う筈だったこの役割。でも僕には、悔しいことに姫路さんクラスの点数を取れる教科はない。けれど目の前の大悟なら、それが出来る。だから僕達は、大悟の得意科目の社会科の担当である落合先生を呼んだんだ。

そして僕に出来ることは……その為の道を作ること。物理干渉能力を持つ《観察処分者》という立場を利用して、根本君に奇襲をかけられるように。

「明久、そろそろ決着だ」

「うん。分かってる」

周りに集まっている皆にも目配せをする。

「えっ？ 岡崎君、吉井君。何をしているの？」

状況が分からずオロオロしている落合先生が僕らを交互に見る。このままだと怪しまれて承認を取り消される可能性があるため、一気に決める。

「……明久、本当に良いんだな？」

「……もうその質問は聞き飽きたよ、大悟。さあ来い！ 君の全力、僕が全て受け止めてやる!!」

もう覚悟は決まった。僕は抜けない痛みを根性で押し込め、全身に力を込める。

「いいぜ!! お前のその覚悟、俺も全力で答えてやらあ!!!」

そして、大悟の召喚獣が、金棒を野球のバッターの様に構えた。
来る、大悟の全力の攻撃が。

「おおおおおおおっ!!!」

ここで耐えなければ僕達は負ける。この先は——無い。

壁の向こうから、敵の本隊を引き付けた雄二の声が聞こえてきた。

『あとは任せるぞ、明久』

「恋の!!! スペシャル☆ぶん殴りiiiiiiiiiiiiっ!!!」

瞬間、僕の召喚獣は、持てる全てのパワーが込められた金棒によって、壁に叩きつけられた。

そして召喚獣が受けた痛みがフィードバックされる。

「ぐあああああ————！！！」

全身に走る激痛に、僕はとうとう断末魔と共にその場で倒れる。けれど、これでいい。僕の役目は果たされた。

ドゴオオオオオオオオツ
!!!!

大悟の召喚獣の凄まじいパワーによって、Dクラスの壁は豪快な音をたて、崩壊していった。

途切れ途切れになる視界の中で僕は眩いた。

「やつ……た……作戦、成功……だっ」

——大悟、皆。あとは——頼ん——だ——

Fクラス 吉井明久 DEAD

第十二問 対Bクラス 〱決着〱

——side 大悟

「よっしやあ！ 成功だ！」

破壊音と共にBクラスとDクラスを遮る壁は取っ払われ、向こうへと繋がる道が生まれた。

これで明久の役目は終了。ここからは俺の仕事だ。

「明久、良くやった。後は俺に任せろ」

その言葉に返事は無い。どうやら想像を絶するフィードバックによる苦痛に体が耐えきれなくなつて気絶したのだろう。

そして明久は点数が無くなり、予想通り戦死になった。

「島田、明久を頼む。鉄人には上手く言っておいてくれ」

「分かった。けど岡崎、折角アキが身体張つてくれたんだから、失敗なんてしたら許さないわよ！」

「ああ！ 当たり前だ！」

明久を島田に任せ、俺は残りの二人と立会人の落合先生を連れてBクラスへと乗り込んだ。

「ンなっ!?! 岡崎っ!?!」

「よお根本。また会ったな。そう！俺こそが二次元を愛し、二次元に生き！二次元の為に死ねる男おおおー」

「――岡崎大悟！ド派手に参上っ!!」

崩れた壁の向こうにある、驚きの表情をした根本。雄二達本隊がBクラスの戦力の大半を引き付けてくれている為、だだっ広い教室の割には人が少ない。いるのはせいぜい根本の近衛部隊だけだ。

「壁ぶっ壊すとかコイツ何考えてやがる!! 馬鹿なのか!?!」

馬鹿……か。確かにこんな『壁を壊して突入する』なんて普通なら考え付かないような作戦を立てた男は、自分の身も満足に守れねえ癖して他人の為ならどれだけ自分が傷ついても構わないとか抜かしやがる、正義感丸出しの真正正銘、大馬鹿野郎だ。

けどな、女の子が好きなヤツの為に一生懸命書いたモンを利用する、テメエみてえなゲス野郎に比べりゃあ百倍マシだ！

俺は自慢のリーゼントヘアを整え、言い放つ。

「さて……テメエだけは許さねえ。覚悟しろよ……根本おおお!!」

俺達は呆気にとられている根本をぶちのめす為にBクラスに突撃し、ヤツに向かつて駆け寄った。すると俺達の前に、残っていた根本の近衛部隊が行く手を阻む。

「『試獣召喚《サモン》っ!!』」

「兄貴! 近衛部隊だ!」

「関係ねえ! 邪魔するってんならここでぶちのめすだけだ! 試獣召喚《サモン》っ!!」

Fクラス 岡崎大悟 572点

&

武藤啓太 67点

&

君島博 72点

世界史 VS

Bクラス 山本鈴華 169点

&

吉田卓夫 190点

&

金田一裕子 172点

&

里井真由子 180点

そして俺達も召喚獣を呼び出し応戦する。幸いにも教科は世界史だ、余程のことが無い限りは負けることはないだろう。だが、根本はその間に落合先生の試験召喚フィールドから外に出てしまった。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ そいつらが足止めしている間に本隊を呼び戻してやる！ お前らの奇襲は失敗だ！」

「くっ、どうする！ 兄貴!？」

「……」

取り繕うように俺らを笑う根本。

確かに、このまま雄二達を追いかけていった本隊を呼び戻されればかなり厄介だ。いくら点数の高い俺でも、流石にBクラスの大半を相手に出来るほどじゃない。どんなに

強いヤツでも数の暴力で攻め込まればいずれはやられるからな。

だからコイツらをとつとぶつ倒していかなくてはならないのだがー

ニヤリ：……。

「残念だど？ いいや、これで充分だ。何故なら俺の役目は根本！ お前を倒すことじゃねえからな！」

ーそんなことをする必要はなかった。姫路がやる筈であった、明久が俺に託した役割。それは根本の打倒じゃなく、Dクラス戦の時と同じ『敵の最終防衛ラインを崩すこと』だ。だから奇襲というのは根本に攻撃を仕掛ける為と見せかけて、本当はわざと派手な登場をすることで、残った近衛部隊を俺達に向かわせ、足止めさせることに意味があるからな。

そう、全ては雄二と明久の掌の上だった。

何故雄二がわざわざ扉の前まで出向いたのか。それは本隊をこつちに引き付けて教室から逃げられなくするため。

あの時、何故雄二が室外機なんてものを壊すよう言ったのか。それはこの教室の窓を全て開けさせるため。

何故明久は自分でじゃなく、俺に突入させたのか。それは向こうの近衛部隊によってこちらが全滅する可能性を無くすため。そして万が一感づかれた時に根本の所へ戻らせないため。

そしてこれらは全て、根本を丸腰にさせて『アイツ』に倒させる為の布石に過ぎなかったのだ——

「教えてやるよ！ 主役ってのはな！ いつでも遅れてやって来るモンなのさ!!」

ダン、ダンツ！

その音と共に俺が見たのは、窓からロープを使って侵入するという並外れた行動力を持つ——

体育教師を引き連れて参上した、ムツツリーニの姿だった。

「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……!!」

「後はお前の出番だぜ、同志」

「任せろ、同志……Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「ムツツリイニイーツ！」

過信、軽率、傲慢。それがお前の敗因だよ、根本恭二。

「――試獣召喚《サモン》」

Fクラス 土屋康太 441点

保健体育 VS

Bクラス 根本恭二 203点

最早ヤツに逃げ場は無い。ムツツリーニの呼び出した召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で根本の召喚獣を葬り去った。

こうして二日間に渡る戦いは、俺達Fクラスの勝利という幕引きに終わった。

――

―― s i d e 明久

「あ、あれ……………ここは?」

「目が覚めたか、明久」

「大丈夫、アキ?」

「大悟……美波……」

目を覚ますと、どうやらここはBクラスの教室みたいだ。目の前には僕の顔を覗きこむ大悟と美波が見える。

「大悟……僕達はどうなったーっ!?!」

「馬鹿野郎、あまり無理すんじゃないねえ。」

身体を起こそうとすると、とてつもない激痛が身体中を駆け巡る。

そういえば、僕は大悟の召喚獣に思い切りぶん殴られたんだ……流石高得点所有者の一撃だ。僕の召喚獣が受けたダメージは本体の僕にもフィードバックで返ってくる。全部が返ってくるわけじゃないけど、流石にやり過ぎたか。

「戦いは俺達の勝利だ。見ろよ、あの外道。ざまあ見ろってんだ」

大悟がそう言っ指差した先には、さっきまでの強気な態度が嘘のように大人しく項垂れる根本だった。

そして僕はようやく状況を理解した。そうか……本当に、勝てたんだ。

「そっか……僕達が勝ったんだ」

「ホント、壁を壊して突撃しようだなんて、アキは無茶するんだから」

「けど、俺達はこれで仲良く職員室行きだな。仕方ねえけどな! ワハハハ!!」

大悟が大口を開けて笑う。確かに、僕達の一連の行動は全て落合先生に見られている。学校の壁を破壊するなんて問題にならない訳がない。大悟の言葉通り、僕達はこれから職員室で事情聴衆という名のハートフルコミュニケーションタイムだ。

しかも僕は観察処分者、大悟は特別監視対象生徒だ。多分相当しごかれるのは間違いない。

「明久。大悟から訊いたぞ。全くお主は随分と思いきった作戦を考えたのう。」

「秀吉……はは、でしょ？ もっと褒めてもいいよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、実に男気溢れる作戦じゃな」

……それ遠回しに馬鹿って言ってない？

「ま、それが明久の強みだ。あんな真似、このバカにしか思い付かねえよ！ な！」

大悟がバンバンと肩を叩いてくる。馬鹿が強みとはなんて不名誉な！

「やつと起きたか、明久」

すると、僕が目を覚ましたことに気づいた雄二が声をかけてきた。その表情は機嫌がよさそうだ。

「雄二……」

「良くやったな。今回のMVPは間違いなくお前だ。それで、これから戦後対談といくんだがどうする？」

「うん、分かった」

「アキ、あんまり痛いなら保健室で休む？」

「ううん、大丈夫だよ。心配してくれてありがとう、美波」

確かに今は休みたい気持ちはあるけど、流石に雄二にばかり任せるとはいかないからね。

そう思い、僕は覚悟に肩を貸してもらいながらゆっくり立ち上がった。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「……」

床に座り込んでいる根本君。その周りをBクラスと僕達Fクラスの生徒が戦後対談を見守るように取り囲んでいた。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。まあ、普通なら設備を好感するのは当たり前要求する事だしね。そうなるのも無理は無い。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと思う」

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。Dクラス戦でも言ったことだし、皆雄二の性格を少しずつ理解し始めているのだろう。

「……条件はなんだ」

力なく根本君が問う。

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」
雄二の言葉に誰も何も言わない。けれどそうやって言われるだけのことを彼はやっている。根本君自身もそれは理解しているみたいだ。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスをやろう。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ると宣言して来い。そうすれば設備については見逃してやつてもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本君の視線。

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃そう」

そう言つて雄二が取り出したのは、大悟が製作し、秀吉が着ていた女子の制服だった。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを！」

根本君が慌てふためく。そりや嫌だよね。

「ちよつと待てよ、雄二」

すると、大悟が突然口を開いた。

「おめえよお、そんなつまらねえ真似してんじやねえよ。笑い話にもなんねえぞ」

大悟が鋭い視線でそう言う。その予想外の反応に僕も雄二も驚いた。

一体どうしたんだ？ まさか根本君を庇うつもりなのか？ いや、大悟は根本君が

やった行いを知ってる筈だからそんな真似をするとは——

「やるんならもつとレベルをあげなきやなあ？ オイ！ 例のヤツ持つてこい！」

「はい！ 兄貴——」

すると、合図に合わせてFクラスの一人が何かを持ってきた。どうやらそれは大悟の

通学用の鞆のようだけど……。

「なあ根本よ。俺が裏で何をしているか分かってるよなあ？」

「……ああ」

大悟の質問にコクリと頷く根本君。

「雄二は制服で良いって言ってるけどな。それじゃあ俺の気が治まらねえ。お前には少し『人としての領域』が欠落してるからな。仕置きも兼ねてテメエには、もつとお似合

いな格好があるぜえ？」

そして大悟は、鞆に手を突っ込んで何かを取り出して根本の前に突き出した。
大悟、一体何をしてー

バサツ ↑（フリフリがいった黒のゴスロリ衣装）
「俺の自信作だ。どうだ、可愛いだろう？」

大悟が取り出したものーコスプレ衣装を見た瞬間、教室内の空気が凍りついた。
いや、君は学校に何でそんなものを持ってきてるんだ。

「おっと、これだけじゃあ無いぜ？ ええと後はー」

大悟はまた鞆から何かを取り出そうとする。その様子は至極冷静で、明らかに皆の雰囲気が変わったのに全く気にも止めていなかった。

今度は一体何をー

バサツ↑（メイド服）

バサツ↑（ビキニアーマー）

バサツ↑（巫女服）

バサツ↑（園児服）

バサツ↑（スクール水着）

バサツ↑（ウエディングドレス）

「ふう……こんなもんだろ。ダイゴボックスオリジナル、どれも至極の逸品だ」

机の上にならずりと並べられた大量のコスプレ衣装。しかも見た感じ全部が根本君のサイズに会うように作られていたみたいだった。

それに唾然した表情を浮かべるBクラスの生徒。いや、もう一度言うけど大悟は一体学校に何を持ってきてきているんだい？ 流石の雄二も笑顔が引き曇っていた。

「ムツツリーニ、撮影の準備だ。出来るだけ高画質な写真に仕上げたい」

「……………了解した」

すると、いつの間にかムツツリーニが大悟の隣に立っていて、大型のカメラや撮影用の機材を準備していた。

「お、岡崎……………お前、俺に何をさせるつもりだ？」

その光景を見て、青ざめた根本君が震えた声で大悟に問う。その声色は明らかに怯え

ている感じだった。

「なあに、お前には少し乙女の気持ちつてもんを味わってもらおうと思つてな。お前は今からこの全部のコスプレ衣装に着替えて写真に写つて貰う。そうすりゃあBクラスの設備は見逃してやる。雄二、それでいいだろう？」

「ほう、なるほどな……俺は構わねえぞ」

「どうやら雄二は大悟の考えに同調したようだ。なんとなく雄二の個人的感情も入っている気がするけど、まあ、結局はどっちも女装することには変わりないしね。」

「タイトルは……そうだな。『生まれ変わった私を見て！ 男子高校生のひ・み・つ！』にしよう！ これは流行るぞ！ 俺は二次元を愛する男だが、たまにはこういったジャンルに触れるのも悪くねえ。後で同人活動の資料にも出来るし、そっち系の人達や腐女子の皆さんにも喜ばれて2度美味しい！」

「……こつちも売り上げの増加が見込める」

「よし、ポーズや表情の指示は俺がやる！ 同志ムツツリーニ。お前の技術力で素晴らしい写真が出来る事を期待するぜ！ 売上はダイゴブックスとムツツリ商会で分配な！」

「………任せろ、同志大悟」

ニヤリ

悪者がするような笑みを浮かべ握手をする大悟とムツツリーニ。

僕は心の中で思った。この二人が味方で本当に良かったと。

「……まあ、という訳だ。んじや、早速着替えて貰おうか？ 負け組代表」

そう言つて、雄二がゴスロリ衣装を根本君に渡す。それを暫く虚ろな目で見てみると、やはり女装で、しかもその姿を写真に撮られるという恥辱が嫌なのか抵抗の声をあげる。

「ふ、ふざけるな！ 百歩譲つて制服ならまだしもこんなみつともねえ格好が出来るか！ こんなことするぐらいなら設備を交換した方がマシだ！」

根本君が慌てふためく。そりや嫌だよね。

けど、君はそれでいいかも知れないけれど、他の人達は違うようだ。

『岡崎！ 坂本！ それで教室を見逃してくれるのなら、Bクラス一同、協力します！』

『そうね！ それだけで教室を守れるなら喜んでやるわ！』

『よっしゃあ！ そうと決まれば善は急げだ！ Bクラス全員で必ず実行させよう！』

『それに負けたのはコイツのせいなんだ！ だから責任とつてコスプレしろ！』

『そうよ！ 折角岡崎君が作ってくれたんだからありがたく着なさい！』

『『『そうだそうだ!! コスプレしろーっ!』』』

Bクラスの仲間達の温かい声援。これを見るだけで根本君のクラス内での評価が分かった気がした。

「んじや、決定だな。ほら、早く着ろよ。兄貴サマが待つてるぞ?」

「くっ! よ、寄るな! 変態ぐふうっ!」

一瞬で見限られたBクラス代表は、呆気なく腹パンによってノックアウトした。

「兄貴、取り敢えず黙らせました」

「よし、それではこれより着付け作業に入る。明久、来い」

「了解」

ぐったりと倒れている根本君に近づき、制服を脱がせる。男の服を脱がせるなんてこの上ない苦痛だけど、仕方がない。

「う、うう……」

「恋のマジカル☆チヨップ!」

「がふっ!」

大悟による追撃。これなら暫く根本君は起きないだろう。

「うーん……。これ、どうするんだろう? 流石にゴスロリ衣装なんて着せたことも

自分で着たことも無いしなあ……」

「私がやってあげるよ、吉井君。岡崎君もいいかな？」

「む？ Bクラスか、助かる。じゃあ頼むぜ」

「おっけー」

「それじゃ、どうせなら折角だし可愛くしてあげてよ」

「それは無理。土台が腐ってるから」

酷い言いようだ。

「じゃ、よろしく」

僕はその女子と大悟に根本君を託し、手に彼の制服を持ってその場を離れた。

多分、この辺に……。

「(そ)そ……。

「あつ。あつたあつた」

見覚えのあるその封筒を取り出し、自分のポケットに入れる。

さて、この制服はどうしようか？ ーよし。捨てちやおう。折角だから根本君には

ゴシッククロリータの衣装の着心地を家まで楽しんでもらおうとしよう。

きつと気に入ってくれると僕は信じているさ。

「お前、それどうするつもりだ？」

いつの間にか隣にいた大悟が言う。

「姫路さんのもとにこつそり返しておくよ」

「いいのか？ 自分が取り返したって言えば姫路からの株もあがるだろうに」

「僕は姫路さんに喜ばれたくてやったわけじゃないからね。それとも大悟は、僕がそんな小さいことであんな真似をするヤツだと思つてたのかい？」

「……いいや、思わねえな」

大悟はそう言つて、僕に拳を突きだす。

「この喧嘩は……俺達の勝ちだ」

「ああ……ありがとう、大悟」

僕は同じく拳を合わせ、互いに笑いあつた。

「兄貴！ 撮影準備が整いました！」

「……カメラの調子も絶好調。いつでもいける」

「兄貴！ 衣装の着付け、全身の無駄毛の処理、化粧も滞りなく終わりました！ 最終チェックをお願いします！」

「分かつた！ 今行こう！ さあ！ 俺の腕の見せ所だぜ！」

そして僕達はそのまま別れた。

その後、ダイゴブックスとムッツリ商会が協同して作り上げられた根本君の女装写真集は一部の方々に大変好評だったらしい。更には大悟が持つ多くの同業者やその手の

人達との太いパイプもあつてか、一躍、根本君はそつちの界限で広く名が知られる存在になったとか。

――

皆より先にFクラスに戻ってきた僕は、姫路さんの席に置いてある鞆に、例の封筒を入れておいた。

「これで作戦完了つと」

「吉井君！」

「ふえっ!？」

慌てて振り向く。するとそこには、姫路さんがいた。

「吉井君……!？」

「ど、どうかした？」

勝手に鞆を弄っている姿を見られてしまい、慌てる僕。すると、そんな僕に姫路さんはあるうことか正面から抱きついてきた。

「ほわああっつと!？」

「あ、ありがとう、ごさいます……!! わ、私、ずっと、どうしていいか、わかんなくて……!!」

「と、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ」

「は、はい……」

精神の安定を図る為に姫路さんを引き離す。

「……しまった! 引き離してどうする! こんなチャンスは二度とないだろうが!

「いきなりすいません……」

涙目をこする姫路さん。

「ああっ! 言いたい! もう一度抱きついてお願いしたい!

「も、もう一度……」

「はい……」

「もう一度壁を壊したい!」

「……って馬鹿あつ! お前はどこのテロリストだよ! もう一度壁を破壊してなんになるって言うんだよ!」

「あの、更に壊したら留年させられちゃうと思いますよ……」

「うん。分かってる。だからそんな気の毒そうな目で僕を見ないで。」

「……それじゃ、皆のところに行くかうか」

「あ、待ってください！」

「な、なに？」

まさか、良い病院を紹介してくれる気だろうか？ くっ！ 前に僕が言った台詞がそのまま返ってくるなんて、こんな屈辱はいつも通りだ！

「手紙、ありがとうございました」

うつむきがちに小さな声で言う彼女。

「別に、ただ根本君の制服から手紙が出てきたから戻しただけだよ」

「それってウソ、ですよね？」

「いや、そんなことは——」

「やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席した時だって『具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい』って、私の為にあんなに先生と一言い合いをしてくれていたし……」

そういうえば、そんなこともあったなあ。あの時は先生に冷たくあしらわれたから、つい熱くなっちゃったっけ。

「それに、この戦争って……私の為にやってくれてるんですよ？」

「え!? あ、いや！ そんなことは！」

「ふふつ。誤魔化してもダメです。だって私、岡崎君から全部聞いちゃいましたから」

何っ!? そんな馬鹿な! だってあの時の事は僕と雄二しか知らないはずー
まさか雄二のヤツ! 大悟に喋ったのか! これじゃあ誤魔化しようがないじゃないか!
いか!

「岡崎君も言っていました。『明久は馬鹿だが、人間として大切なものをちゃんと持つてるヤツだ』って。私もそう思います。優しくて、小学生の時から変わってなくて……」
驚いた。まさかあの大悟がそんな事を言うなんて。な、なんだろう。今までに経験した事のないむずがゆさを感じる。よく分からないけど、僕はこの雰囲気になんて耐えられそうにない!

「そ、その手紙、うまくいくといいね!」

「あ……。はいっ! 頑張りますっ!」

そんな僕の言葉に応えたのは、姫路さんの満面の笑み。その笑顔を見て思う。

この子は本当に大悟のことが好きなんだな。わかっていたことだし、僕は大きに敵わないと実感している。悔しいけどしょうがないか。けど向こうは二次元の女性にしか興味ないとかって公言してるヤツだからなあ……。

「で、いつ告白するの?」

「え、ええと……全部が終わったら……」

「そっか。けど、それなら手紙より直接言った方がいいかもね」

「そ、そうですか？ 吉井君はその方が好きですか？」

「うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ」

手紙は根本君のせいで嫌な記憶になっていそうだし、姫路さん自身にとつても、きつとその方がいいだろう。

大悟も多分、今の僕と同じ立場にいたら同じ答えを出すと思うしね。

『お、おい！ なんだこのフリフリのスカートは！ 歩きにくいぞ！』

『いいからキリキリ歩け！ 言っておくが少しでも衣装を汚したら兄貴が怒るから気を付けろ』

『お、岡崎め！ よくも俺にこんな辱しめをー』

『無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！』

『き、聞いてないぞ！ 大体何でカツラと化粧までされてるんだ！ それにお前達、下の毛も剃ったのか!？』

『兄貴の指示だ！ 例え三次元だろうと、作品として残す以上決して妥協を許すなつてな！ どうせ後にスクール水着も着て貰うんだからな！』

『ま、待て！ スクール水着!?! 止めてくれ！ それだけは勘弁してくれええええ!!』

と、いきなり廊下から響いていた言い争い。どうやら始まるみたいだ。きつと根本君は一生忘れられない思い出を背負うことになるだろう。

「じゃあ姫路さん。頑張つてね。僕も応援してるから」

「はいっ！　ありがとうございます！　それに、岡崎君も応援してくれていますしねっ！」

元気にそう返事をした姫路さん。そっかそっか。大悟も応援してくれてるのか——

——え？

——

「……雄二、私と付き合ってほしい」

「カーツト!! ダメダメ! まだ瞳にハイライトが灯ってる! 頭の中を完全に邪念まみれにするんだ! もつと貴方の事しか考えられませんかという雰囲気を出すんだ!

それがヤンデレ属性の強みであり、武器なんだ! それを活かさなきゃ雄二はふりむいてくれねえぞ!」

「分かった、頑張る。……雄二、私と——」

「カーツト!! 笑顔にまだ爽やかさが残ってる! もつと——」

第十三問 俺の彼女は次元が違うわ!!

—— side 大悟

激戦を繰り広げたBクラスとの戦争、そして根本の撮影会も無事終了した。

その後俺と明久は壁を破壊した罰として職員室で教師陣から親身な指導を受け、その後はまさかの補習室送りにされ、鉄人監修のもと、問題集をひたすらにやらされるという苦行をさせられた。

おかげでまた今期覇権アニメを見逃した……もう俺、メンタルズタボロです。

「大変だ！ 兄貴がまた泡吹いて倒れたぞ！」

「急いで魔法少女の弟子めるたんのドラマCDを耳元で流せ！」

「ああ……見えるぜ。ガキの頃に亡くなったお婆ちゃんが手招きしてらあなあ……」

「駄目だ！ ドラマCDが無いぞ！ ああ！ 兄貴の顔がみるみるうちに真っ青に!?」

「来世は……めるたんの息子として、生まれてきますように……」

「兄貴いいいいいいー!!」

— —

そんなこんなで点数補給の為のテストを受け終え、更に二日後の朝。

いよいよ俺達は最後の砦であり最大の難敵、Aクラスとの戦争を残すのみとなった。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。感謝している」

雄二は壇上に上がり、開口一番にそう礼を言った。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

確かに雄二の作戦や戦略はとても良かった。だが、チームというのは司令塔だけでは動かないように、Fクラス全員が団結し、断固たる決意を持つて挑んだからこそ、ここまで来ることが出来た。雄二もそれは分かっているようだ。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ!」

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

雄二の言葉に、皆の気持ちが一つになっている。昔ながらのスポ根漫画のようではないか。

「皆ありがとう。そして残るAクラスだが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

今回の戦い方は少し特殊で、クラス単位ではなく、一騎討ちによる勝負。

俺や明久達は事前にそのことを聞いていたから驚かないが、他の連中はかなり驚いていた。

『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島とFクラス代表の雄二。クラスを代表して戦うのだから当然といえば当然だろう。

だが相手は学年主席、二学年トップの成績を誇るヤツだ。正攻法じゃ勝ち目は無いに

等しい。だが雄二の顔は至極普通だ。何かいつも通り策でもあるんだろうか？

「いやいや、霧島さんに馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!？」

明久の頬を雄二が投げたカッターの刃がかすめた。

「次は耳だ」

友達に向かって平気で……坂本雄二、恐ろしい子!!

「まあ、確かに明久の言う通り確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかも知れない」

「なら別にカッター投げなくても良かったじゃないか!」

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにやりあえば俺達に勝ち目は無かった」

確かに、常識的に考えれば勝ち目は無い。だが俺達Fクラスはそんな当たり前な事を全て打ち破ってきた。学力が無いからこそ、知識や戦略を張りめに張り巡らせ、勝利をもぎ取る。それがFクラスの戦い方であり、強みなのだ。

それに、どつかの可愛い巫女さんもこう言ってただろ? 「ここでは常識に囚われてはいけないのです!」ってな!

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちを揺るがない。だから俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に

見せてやる」

『おおおーっ!!』

皆の考えは一つのようなのだ。全員が雄二を信じている。勿論俺もな。

「それで、具体的なやり方だが……一騎討ちではフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

「日本史だと？ 霧島は日本史が苦手だとしてもいいのかよ？」

「いや、そうじゃない。敢えて内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

ふむ。小学生程度で上限がありときたか。そうするとどちらも満点は確定だから、注意力とケアレスミスの有無がかなり重要になってくるな。

それならあの学年主席の霧島にも勝てる可能性があるわけか。

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルもあげられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼りきったやり方

を作戦などと言うものか」

「?? それなら、霧島さんの集中を乱す方法でも知っているとか?」

「いいや。アイツなら集中なんてしていなくとも、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

「そりゃあそうだろう。そんなもんで集中力が途切れるようなら学年主席になんぞなれるわけがないからな。」

「雄二、いい加減くどいぞ。そろそろ理由を教えろ」

「おっと、済まないな。俺がこのやり方を選った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある間違える問題だと? なんだそれは?」

「その問題は――『大化の改新』」

「大化の改新……日本史を勉強する上では基本中の基本とも言えるべき出来事だ。分かりやすく説明するなら、当時莫大な権力を握っていた豪族、蘇我氏。そしてその時の大臣であった蘇我蝦夷・入鹿親子を中大兄皇子と中臣鎌足が殺害し、その後彼等が中心となって始められた改革の事を指す。」

「大化の改新か……誰が何をしたのか説明しろ、とかか?」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純にいうと――何年に起きた、とかかのう?」

「おつ。ビンゴだ秀吉。その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号ねえ……そんなクソ簡単な問題をあの霧島が間違えるとは思えねえがな。

「大悟。大化の改新が起きたのは何年だ？」

「645年だろ？ 覚え方としては『大化の改新 虫殺（645）し イルカ（入鹿）を先に殺しちゃう』だな」

周りからおお……、という声上がる。

「そう、645年だ。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

「ま、基礎的な問題だしな……って明久。何でお前下向いて涙流してんだ？」

「お願い……僕を……見ないで……」

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」

ふーん。そういうことね。理解した。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲間が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼なじみだ」

「総員、狙ええっ！」

「なっ!? 何故明久の号令で皆が急に上履きを構える!?!」

「黙れ、男の敵! Aクラスの前に貴様を殺す!」

「俺が一体何をしたと!?!」

あーあ。このクラスでそんな事言ったらこうなるのに。雄二は馬鹿だな。才色兼備で誰もが憧れる女子が実は幼なじみだったなんて、全男子が一度は夢見るシチュエーションだというのに。

それに俺は霧島とは多少付き合いがあるからな。だから雄二と幼なじみだつてことも知ってる。

「遺言はそれだけか? ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

「ちよつと待て! だったら大悟も同じだ! コイツは秀吉と同じ中学出身だ! とうことは姉の木下優子とも繋がりがあるぞ!」

雄二が俺を指差すと共に一斉に俺に視線を向ける馬鹿共。チツ、俺を巻き添えにする

つもりか。

「成る程、確かにそれも一理ある。大悟、そうなの?」

「フツ、確かに俺は秀吉とその姉、優子と同じ中学だ。けど甘いな雄二ー」

「サツ! ↑ (制服の中に着ていたためたんのTシャツをさらけ出す)

「バツ! ↑ (鞆から美少女アニメのグッズを取り出す)

「ー何故なら! 俺は二次元を愛する男! 俺の彼女はお前らとは次元が違うわああつ!!」

「二「無罪」二」

「何いいっ!」

そう言つてカッターやシャーペンを収める明久達。残念だったな雄二よ。お前の企みは失敗に終わったようだぜ。

「あの、吉井君」

「ん? なに、姫路さん」

「吉井君は霧島さんが好みなんですか?」

「そりゃあ、まあ。美人だし」

「.....」

「え? なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの!? それと美波、どうして君

は僕に向かって教卓なんて危険なものを投げようとしているの!」

うん。島田も姫路も、段々とFクラスの雰囲気にも馴染んできているようで良かった。

「まあまあ。落ち着くのが皆の衆」

「む。秀吉は雄二が憎くないの?」

「冷静になつて考えてみるが良い。相手はあの霧島翔子じゃぞ? 男である雄二に興味

があるとは思えんじやろうが」

……お、おう。そう……だな。まあ、教える必要はねえか。

「むしろ、興味があるとすれば……」

「……そうだね」

「な、なんですか? もしかして私、何かしましたか?」

明久達の視線が姫路に集中する。ふむ、『姫路×霧島』か……イケるっ!

「とにかく、俺と翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ。アイツは一度覚えたことは忘れないほど頭が良い。だから今、学年トップの座にいる」

一度覚えたことは忘れない超記憶力。だが今回はそれが逆に足枷となる。

「俺はそれを利用して勝つ。そうしたら俺達の机はー」

『システムデスクだ!』

| | |

「すっげえ……」

Aクラスに入って一番最初に出たのがその言葉だった。俺は一度Aクラスの中を外から眺めたことはあるが、やはり実際に入ると迫力が違う。

まるで高級ホテルのロビーのような内装に豪華なシャンデリア。黒板の代わりに設置されていた巨大スクリーン、こんなばかでかい画面でアニメなんて見たら何倍も楽しめるだろうな。羨ましいっ!

そして生徒一人ずつに並べられたシステムデスクに最新型のノートパソコン。高級リクライニングシート。小型冷蔵庫まで……もうここ勉強するところじゃねえだろ。

「これがAクラス……凄すぎない?」

「うむ。まさに高級ホテルと言っても過言では無いのう……」

「……………（コクコク）」

やはり皆、この教室に驚きを隠せないようだ。無理もない。

「ふつ、僕が学園生活を送るには、相応しい設備じゃないか」

「そうだな。俺の青春が薔薇色学園生活まっしぐらだぜ」

「お前ら、よくそんな馬鹿丸出しな発言が出来るな」

失礼な。明久はともかく、この俺がこんな素晴らしい教室に相応しくないヤツだともいうのか？

「見てよアキ！ フリードリンクにお菓子が食べ放題よ！」

興奮が抑えきれないのか、子供のようにはしやぎながらそう言う島田。それを見た明久は全く……………、とため息を吐いた。やれやれ、島田もまだまだ幼いな。

「ふつ、美波。駄目じゃないか。そんなことでいちいち驚いているようじゃ、足元を見られるよ？」

もつと僕達みたいに堂々としていなきや、ねえ大悟？」

「その通り。人間は常に平常心、何事にも動じない強い心を持つべきだ」

「お菓子をポケットに詰め込みまくってるヤツとさつきからウエハースチョコを食べまくってるヤツが何言ってるのよ」

「つくづく発言と行動が伴わぬ男達じゃのう……………」

い、いや違うぞ? これはちよつと腹が減っただけで別に『魔法少女の弟子めるたん
くウエハースチョコ イチゴ味』に付いてくるオリジナルプロマイドカードが欲し
いわけじゃないんだからなっ!

……ああつ! 畜生! またシークレットじゃないっ!

「おい、その馬鹿共。いい加減戻ってこい。本題に入るぞ」

雄二にそう言われて、俺と明久は渋々ヤツのもとまで戻った。

仕方ない。残りは責任をもつて俺が処分することにしよう。決して泥棒とかじゃな
いからな?

「というわけで、俺達Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」
「一騎討ち?」

試験召喚戦争恒例の宣戦布告。

今回は代表である雄二を筆頭に俺、明久、姫路、島田、秀吉にムツツリー二とFクラ
スの主戦力陣が揃い踏みしていた。

ちなみに毎回こんな感じだったら明久はボコられずに済んだのでは? と思つたの
は内緒な?

「うーん、何が狙いなのか？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉の双子の姉であり、俺もよく知ってるヤツ、木下優子だ。

見た目はまんま秀吉を女にしたような感じで、こんな事を言うのもあれだが滅茶苦茶可愛い。ま、性格は若干癖があるんだけどな。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

そう言う雄二に対し、訝しむ優子。まあ無理もない。

優子達からしたら俺達は下位クラス、それも最底辺のFクラスの俺達が、二学年のトップに君臨する霧島に挑むなんてまずあり得ない事だからな。絶対何か企んでいると思われても何も不思議じゃない。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言つてわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明な判断だな」

予想通りの返事が返ってきたところで、ここからが雄二の交渉術の見せ所だ。

優子はちよつとやそつとじゃぶれないヤツなんだが、お手並み拝見だな。

「ところで、Cクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったよ？ 何の問題もなし」

秀吉の挑発に乗って、Aクラスに乗り込んだCクラス。その勝負は半日で決着がつき、今CクラスはDクラスと同等の設備で授業を受けているらしい。はっ！ ざまーみろ小山！ テメエの悔しそうな顔が面白くてしようがねえぜ！

「なら、Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来てたあの……」

Bクラスと聞いて、分かりやすく拒否反応を示す優子。大方根本のゴスロリ姿を想像したんだな。

俺とムツツリーニ監修の下、素晴らしい出来に仕上がったと思ったんだが、優子には喜んで貰えなかつたようだ。

「ああ。アレが代表をやっていたクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだよな？」

優子の言葉通り、戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ないと宣戦布告が出れない。これは試召戦争の泥沼化を防ぐ目的があるらしい。

「知ってるだろ？ 実情はどうあれ、あの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約的にはなんの問題もない。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

何故雄二が戦いに勝っても設備をそのままにしていたのか。それは相手を自分達にとつて有利な状況に置かせる為だ。もしAクラスがこの申し出を断れば、すぐさまBクラスとDクラスに攻め込ませるよう仕向ける。そうなればいくらAクラスとて立て続けに戦えばいずれ敗北するからな。

つまり雄二は、否応なしにAクラス一騎討ちを受けさせようとしているのだ。

「……………それって、脅迫？」

「人間が悪い。ただのお願いだよ」

いや、今はお前が悪役だ。雄二よ。

「うーん……………わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてあり得ないからね。その提案受けるよ」

「え？ 本当？」

「だって、あんな気持ち悪い格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……………」

「なんだと!? 優子お前！ 俺とムツツリー二が吐き気を堪え、端正込めて作り上げたモンに対するその侮辱！ 許せん！」

「大悟。少し黙ってろ」

雄二にあつさり止められた。やはり、真の芸術というものは一般人には理解されないものなのか……………大悟さんシヨック。

「その代わり、こっちからも提案させて? 代表同士の一騎討ちじゃなくて、そうだね、互いに七人ずつ選んで、一騎討ち七回で四回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいっよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな?」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんの調子が良かったら、つてことも考えられるし……それに、そっちにはある意味姫路さんよりも注意しないといけないヤツがいるもん」

そう言つて優子は今日初めて俺と視線を合わせた。俺は正直この優子の目が苦手だ。まるで俺の考えや本心を全部見透かされるような感じがしやがるし、ずっと見詰められると妙な悪寒が走るんだよな……何なんだろうな。

「大悟。アンタの社会科目の成績の高さは中学時代から私が一番よく知ってるわ。今までの戦いも大健闘だったらしいじゃない」

「別に、大健闘つてほどもねえよ。全部俺だけで出来たんじゃねえ。明久や雄二、それに他の奴等がいなきや成し遂げられなかったもんばかりだからな」

「謙遜しなくて良いわよ。大悟は強い。正直大悟がFクラスにいるなんて思わなかったもの……」

「……ホント、なんで大悟がFクラスなんか……っ!」

優子がボソツと何か呟いた様だが、何を言ったのかよく聞き取れなかった。

「あ？　なんか言ったか、優子？」

「な、なんでも無いわ。とにかく、そつちに大悟や姫路さんがいる以上、用心するに越したことはないのよ」

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ない。これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それならその条件を呑んでも良い。けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」

「え？　うーん……」

悩むように考え始める優子。クラスを代表しての交渉だからな。この会話によっては仲間全員の立場が一変しちまう可能性があるからな。それに優子はかなりの慎重派だ。こうなるのも無理はない。

流石に科目選択権はこちらが欲しいところだが、果たして承諾を得られるか。

「……受けてもいい」

突如聞こえた、静かで澄んだ声色。

その声の主はAクラス代表、学年首席の霧島翔子だった。

物静かなヤツだとは思っていたが、まさか気配すら感じさせずに近くまで迫るとは……コイツ、出来る!

「……………雄二の提案を受けてもいい」

「あれ? 代表。いいの?」

「……………その代わり、条件がある」

「条件?」

「……………うん」

雄二がそう訊き返すと、霧島は突然隣に立っている姫路を値踏みするかのようじつくりと観察し、再び雄二に向かって言い放った。

「……………負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

……………ほほう? 何でも、だと?

「……………(カチャカチャ)」

「……………(バサバサツ)」

「ムツツリーニ、大悟！ まだコスプレと撮影の準備は早いよ！ とうか、負ける気満々じゃないか！」

明久が通用しながら俺とムツツリーニにそう言う。おっと、俺としたことがつい早とちりしてしまったようだぜ。

「……………岡崎」

「よっ、霧島」

ふと、霧島と目が合う。

俺は霧島とは初めましてでは無く、そこそこの付き合いがあり、よく彼女の手助けをしたりもする。

その報酬として、コスプレのモデルやらなんやらをやってもらっているんだよな。だって清楚系黒髪美人だぜ!! 二次元じゃマイナーだけど三次元じゃ絶滅危惧種なんだぜ!! ならほつとかない理由がねえよなあ!?

「あれ? 代表。大悟のこと知ってるの?」

「うん……………岡崎は私のことを手伝ってくれる、オタクだけじゃない人」

「……………ふーん。ま、いいや。じゃ、こうしよう?」

勝負内容は七つの内四つは、そっちに決めさせてあげる。三つはうちで決めさせて?」

優子からようやく妥協案が得られた。

どうやらコイツは相手が俺達Fだろうと、一切手を抜く気は無いらしい。こうなつてくると優子はこれ以上の妥協は許してくれないだろうな。ここらで話を纏めた方が良さそうだ。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！ 何を勝手に！ まだ姫路さんが了承してないじゃないか！」

「心配すんな。絶対に姫路に迷惑はかけない」

自信満々な雄二の台詞。そこまで勝利を確信してるのか。

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでいいか？」

「……分かった」

霧島は静かに頷いた。

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に帰るぞ」

「おう」

「……………」

そして、俺達は教室に戻ろうとする。さてと、余ったウエハースをクラスの奴等にも分けてやるか……………。

「…………ちよつと待つて」

「ん？　なんだ、木下姉」

「さっきの代表の条件…………そこにもう一つ加えて貰いたいことがあるの」

「…………優子？」

「…………負けた方は何でも『一つ』じゃなくて『二つ』、いうことを聞いて貰うわ」

第十四問 対Aクラス戦 〔前編〕

— side 明久

交渉を終え、約束の十時前になり、いよいよ待ちに待ったAクラス戦がやって来た。戦いの舞台は勿論Aクラス。置いてあつたシステムデスクや高級ソファ等は場所を確保するために移動させてある。そして巨大スクリーンには、それぞれの出場生徒の名前が表示されていた。

僕達Fクラスからは、僕、雄二、姫路さん、美波、大悟、秀吉、ムッツリーニの七人が代表として戦う。

そして、他にも試合を見届げるためにAクラスとFクラスの生徒全員が教室内に集まつており、それぞれ敵クラスに敵意のこもつた視線を向けていた。

まさしく一触即発。僕も思わず緊張してしまふ。

「おーおー。いい雰囲気になつてきたじゃねえか」

大悟が笑いながらそう言う。けど少し気になる点が一つだけあつた。

「……大悟。いつまで君はそんなもの食べてるつもりなんだい？」

「あ？ しょうがねえだろ。食い物粗末にするわけにもいかねえし、もう！ なんで

シークレットが出ねえんだよ！」

そう言つて大悟は持つていたものを口に運ぶ。

さつきからコイツはずっとAクラスから持ち帰つてきたウエハースチョコを食べていた。クラスの皆にも分けてたし……どれだけ持ち帰つてきたんだろうか。

「お前も食うか？」

「うん、ありがとう」

大悟からウエハースを一つもらい、口に入れた。あ、結構美味しいな。

「お前ら、いよいよだ。気合い入つてんだろうな？」

「うん。大丈夫だよ」

「当然だ。俺を誰だと思つてーあーあ！ シークレットやつと出たあああ!! ひやつほおおおおーめるたんきやあわいいいいいい!!」

「……大丈夫そうだな」

そして約束の十時になり、遂に開戦となった。

「では、両者共準備は良いですか？」

今日の立会人はここ数日の戦争で何度もお世話になつている、Aクラス担任かつ学年主任の高橋先生だ。知的な眼鏡とタイトスカートから伸びる脚がとても綺麗だ。

(……なあ明久。高橋先生のキャラつてさ。表ではああやつてびしつとデキる女を決

めてても、裏では結構チエリー狩りとかしてるのがセオリーなんだぜ。『さあ、貴方には私が直々に特別講義をしてあげよう』みたいなな)

早口で何を言ってるんだこのキモオタは。

「ああ」

「……問題ない」

雄二と霧島さんが向き合う。ついに始まるんだ。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「分かりました。僕から行きます」

向こうからは栗本雷太君。

「それじゃあ、行ってくるね」

「頼んだぞ、島田」

対するこちらは美波。最初だからここで勝ってスタートダッシュを決めたいところだけど……どうかな。

「科目は何にしますか？」

「数学でお願います」

美波の唯一といって言い得意科目が選択された。最初の選択権は僕達だから雄二は敢えて美波を先鋒に置いたんだろう。

「早くして欲しいわね。どうせ勝負にならないんだから」

後ろで秀吉の姉、木下優子さんがそう挑発するような言葉を発した。まあ、向こうからしたら当たり前前の考えだからそう思うのも無理はないよね。

「ふん！ Fクラスだからって舐めないでよね！」

そう言い返す美波。

「では、召喚を開始してください」

「分かりました。試獣召喚《サモン》！」

「試獣召喚《サモン》！」

そして、二人の足元に見慣れた幾何学的な魔方陣が出現し、それぞれの召喚獣が呼び出された。

けど、向こうの召喚獣は明らかに島田さんのより強そうな見た目をしてる。

「数学に関しては、ウチはBクラス並の学力があるんだから！」

そう自信満々に言う美波。そう、彼女はドイツ育ちだから古典や日本史といった文系科目が出来ないかわりに、数学ならFクラスで姫路さんに次ぐ実力の持ち主。

だから、彼女の言葉に嘘偽りはない。けど——

Fクラス 島田美波 182点

数学 VS

Aクラス 栗本雷太 377点

「えっ?」

美波の召喚獣は、あつさりと相手の召喚獣に真つ二つにされた。

そりゃそうだよね。美波はBクラスレベルでも、相手はAクラスレベルなんだから。

「一回戦、勝者はAクラスです」

「「うおおおーっ!!」」

高橋先生が淡々と告げると同時に、壁一面の大きなディスプレイに結果が表示された。それを見てAクラスの皆が勝利の声を上げた。

「……まあ、なんとなくだろうなとは思ってた」

隣で大悟が静かにそう告げた。僕もそう思う。

「……ごめん、負けちゃった」

そしてしょんぼりしながら自分達の場所へと戻ってくる美波。確かに最初に相手に勝利を与えてしまったのはこちらとしては痛い結果だけどまだ負けたわけじゃないし、ここは僕が彼女に労いの言葉をかけてあげよう。

「仕方ないよ。Bクラス並じや、Aクラスに勝てないことも分からないくらいの程度しか頭がああああ!! 死ぬ!! 死ぬううう!!」

な、なんでだ! どうして僕は美波に頭を握り潰されそうになってるんだ!? 励まそうとしただけなのにいいいい!!?!!?

「み、見え……見えそうで…… (パシヤパシヤ)」

「ほお……右手の握力だけで一般男子を持ち上げるとは……大したものですねえ」

「ム、ムツツリーニ! 大悟! 二人とも普通に見てないで美波を止めてええええ!! 僕の頭蓋骨がミシミシってなってるからああああ!!」

――

「では、二回戦を始めます」

やつと美波から解放された所で、高橋先生がそう宣言した。うう……まだ美波の手の感触が残ってる。

「私が行きます。科目は現代国語でいきます」

向こうからは森兵恵さん。対するこちらは、

「儂の定番じゃな」

Fクラスの美少女こと、木下秀吉だ。

「それでは、始めて下さい」

「あ、高橋先生。ちよつといいですか？」

一二回戦が始まる、という所で突然木下さんが待ったをかけた。

「ねえ秀吉。一つ聞いても良いかしら？」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

ん？ なんかマズいことが起きている気がする。だって隣にいる大悟が『あ、やべつ』
て顔してるし。

「はて、誰じゃ？」

「じゃーいいや。その代わりに、ちよつとこつちに来てくれる？」

「うん？ 儂を廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

木下さんはニコニコと笑顔を崩さぬまま、秀吉を廊下まで連れ出してしまふ。小山さん
んって確か、秀吉が木下さんのフリをして罵倒しまくった相手だったような……。

『姉上、勝負はーどうして儂の腕を掴む?』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら? どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっていいのかなあ?』

『はっはっは。それはじゃな、大悟の考えた台詞をもとに姉上の本性を儂なりに推測してーあ、姉上っ! ちがっ……! その関節はそつちには曲がらなっ……!』

『戦争に犠牲はつきものなんだから仕方ないよね?』

ガラガラガラ

戻ってきた木下さん。けど何故か頬には誰かの返り血らしきものが付着していた。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる?」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

にこやかに笑いかけながらハンカチで返り血を拭う木下さん。さすがの雄二も何も言えないみいだ。

「そうですか。それではAクラスの二勝目、と」

Aクラス 森兵恵 WIN

生命活動 VS

Fクラス 木下秀吉 DEAD

いやいや、まだ生きてますよ……多分。

「……さらば秀吉。せめて安らかに眠ってくれ……」

『悲しみのく、向こうへとく、辿りくつけるなぐらぐら♪』

隣では、大悟が凄く哀愁漂う表情をしながら手を合わせ、合掌のポーズを取っていた。やめてよ。その曲流すと余計不安になるじゃないか。

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスからは佐藤美穂さん。Fクラスからは、

「よし。頼んだぞ、明久」

「え!? 僕!?」

「どうしよう! クラスを代表して勝負なんて! ここで僕が負けたら後がないのに!

「大丈夫だ。俺はお前を信じている」

自信たっぷりの雄二の言葉。

「明久。テメエの強さは俺が一番良く知ってる。だから自分を信じて行ってこい」
大悟も僕に激励の言葉をかけてくれる。

「そうか。雄二も大悟も……つまり、そういう事だろ?」

「ふう……やれやれ、僕に本気を出させてこと?」

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」
「能ある鷹は爪を隠す……それがお前だろ? 明久」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか?』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ?』

味方であるはずのFクラスの皆の声。

「ま、仕方ないか。今までの僕を見ていたら普通そう思うよね。でも、

「吉井君、でしたか? あなた、まさか……」

対戦相手の佐藤さんが僕を見て何かに気付いたかのように戦く。へえ、良い観察眼をしているなあ。

「あれ、気付いた？」ご名答。今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない。戦闘の為に袖をまくり、手首を振る。軽い準備体操だ。

「それじゃ、あなたは……！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕……！」

「……左利きなんだ」

Aクラス 佐藤美穂 389点

物理 VS

Fクラス 吉井明久 62点

「勝者、Aクラス佐藤美穂！」

おかしい。本気を出したのに負けるなんて。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！ フィールドバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！」

やっぱり六倍以上の点数を相手に慣れだけで勝てるわけないよね。

「よし。勝負はここからだ」

「そうだな。まさに背水の陣。だが主人公はピンチの時にこそ真価を發揮する！」

「ちよつと待った雄二、大悟！ 貴様等僕を全然信頼してなかったでしょう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

本気を出した左手で殴りたい。

——

—— side 大悟

「では、四人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリーニが立ち上がった。ここで科目選択権が始めて活きてくる。

何故なら我が同志、ムツツリーニは総合科目の点数のうち、実に80%を保健体育で獲得する野郎。社会科目で勝負する俺と同じようなもので、単発勝負に関してならAクラスと互角以上の実力の持ち主だ。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。誰だ？ 見たことねえ。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

ほう、俺と同じ転校生か。身体の凹凸も少なくてぱつと見美少年みてえだな。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

同志にとつて唯一の武器である保健体育が選択される。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意なんだってね？」

なんだ？ 転校生だからなのかムツツリーニのことをあまりよく知らない態度を見せる。それに随分と余裕に見えるな。

「でも、ボクだっけかなり得意なんだよ？ ……それもキミと違って、実技で、ね♪」

「……………実技。っ、っ、っ……………!? (ブシャアアアッ!!)

「ムッツリイーニーツ!!」

「同志いいいいー!!」

な、なんてヤツだ! 妄想力なら俺に負けず劣らずのムッツリニにそんな意味深な発言をするなんて! そんなもんに同志が冷静でいられるわけがないだろう! はっ!? まさかこれがヤツの狙いなのか! おのれ! 可愛い顔して、なんて出来る女よ

……………っ!

「よくもムッツリニに! なんて酷いことをするんだ! 卑怯だぞ!」

「あはは♪ なら君が選手交代する? でも勉強苦手そうだね。保健体育でよかったら、ボクが教えてあげるよ。それももちろん、実技で、ね♪」

「ブハアッ!!」

「明久アア!!」

くっ! ムッツリニに続いて明久まで彼女の毒牙に……………っ!

「フツ。工藤さんだったね? 僕は望むところー」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ!」
「そうです! 永遠に必要ありません!」

「……………」

姫路、島田。お前らは善意で言ってるかも知れねえけど、明久が死ぬほど哀しそうな顔をして泣いてるのに気づいてやれ。

そう思っていると、突然工藤が俺の方を向いた。

「君が噂の兄貴って呼ばれてる岡崎大悟君だね？ なんでも二次元が凄く大好きなんだって。けど、ボクは三次元にも少し興味を持った方がいいと思うんだ……だから、一緒に保健体育の勉強をしない？ もちろん、実技で、ね♪」

「何だと……？」

からかうように工藤が俺にそう言う。ほほう……：二次元を愛する俺にそんな真似をするとは面白い。しかもコイツ、よく見てみると『彼女』にそっくりじゃあないか。これはまたとない好機!!

そう思い、俺は工藤のもとへ歩み寄った。

「いいだろう。工藤愛子といったな。お前のそのご厚意に最大限の感謝の意を評そうじゃねえか。オイ！ あれ持ってこいや！」

「はい！ 兄貴！」

俺はそうFクラスに指示を出す。ざわざわとなるAクラスのヤツら。そしてクラスメートの一人が俺のもとまで走ってくる。その腕の中には俺の鞆が抱き抱えられていた。

「兄貴、どうぞ」

「ご苦労」

そう言つて俺は鞆を受け取る。そして中身をガサゴソと漁る。えーと、あ、あつたあつた。

「工藤……いいや、工藤さん。俺からのお願い、聞いて頂きますでしょうか？」

「うん？ なにかな？ 保健体育のことだったらなんでもー」

バサッ！ ↑（体操着&ブルマ）

「このお召し物にお着替え願えますでしょうかお嬢さん。きっと貴女のその美しさが更に輝くことでしょう」

俺はそう言つて、工藤の前で土下座した。

『いやお前は何をしてるんだっ!?!』

少しの間を置いて、四方八方から聞こえるツツコミ。

流石の工藤も俺の行動に予想の範疇を超えていたのか、反応がない。

「え、ええつと……岡崎君？ これは……何かなあ？」

「おつと。私としたことがつい説明の程を省いてしまったようだ。申し訳ない。こちらはエロゲ界限で知らぬ者なしと言われる程の名作中の名作『青色スプラッシュサマー』に登場するメインヒロイン、柿崎みるくちゃんのコスチュームにございます。工藤愛子さん。貴女を一目見て私は思った！ 貴女様のその容姿！ 凹凸の少ない健康的な身体！ 幼なじみ属性！ ボクっ娘！ そのすべてがみるくちゃんと完全に一致しているのです！ 後はこのみるくちゃんのメインコスチュームを着ていただくことで、現実世界でみるくちゃんと邂逅するという私の長年の悲願が叶うのです！」

「え……エロ、エロゲ!? ほ、ボボっボクが!？」

おつと、つい早口になってしまったぜ。だが俺のこの思いは伝わった筈だ。その証拠として声色だけでも明らかに動揺している工藤の様子が分かる。まさか自分がエロゲのキャラクターと瓜二つとは夢にも思わなかったのだろうか。そのウブな感じもみるくたんそのものじゃあないか!! あともう少しで墮とせる！ ここで畳み掛けるぞ！

「お、岡崎君。流石にそれは出来ないかな、なんて」

「お願いしますー！」

「い、いや……だからそれは」

「なら靴を舐めます!!」

「だから……」

「靴を舐めますっ!!」

「でも」

「靴を綺麗に舐めますからああああっ!!」

「大悟、それ以上はやめとけ。工藤がもうオーバーヒート寸前だ」

雄二がそう言っただけで俺を止めようとする。

「止めるな雄二! これは俺の長年抱いた夢が叶うかどうかの瀬戸際なんだ! 邪魔をしないでくれ!」

「だからって初対面の女いきなり『コスプレして下さい』なんて言うヤツがあるか。しかも体操着とブルマって、難易度が高すぎるだろ」

何をいうか。体操着とブルマのコンビ。これはコスプレ界限においてベタ中のベタだぞ。体操着を制するものはコスプレを制するといつても過言ではないんだ。

「大体、お前は二次元派だろ。どうしてそこまでコスプレなんかに入れ込むんだ?」

「なん……だと? 雄二……お前には分からないのか」

俺はバツと立ち上がり、声を大にして言い放った。

「ギャルゲー世界を現実で味わう！ それは我々人類にとつての夢だということを!!!」

『……………』

それによつて静まり返る教室内。だが俺の演説は止まらない。

「あんなに原作と瓜二つな女性に出会ったら、その作品のシチュエーションを期待するのは我々二次元派の人間にとつて当然のこと！ あのシーンは!? あの名言は!? 画面の奥でしか感じることもなかった感動が今まさに手の届く場所にいるんだぞ！ つまりそれは！ 絶対に叶うことのないと思われていたあのイチャイチャラブシーンや甘酸っぱい青春劇ですらも！ 現実のものとなつて味わえるということなのだあああああ!!!」

『な、何だつてえええええ!!!?』

Fクラスのヤツらが一斉に叫んだ。

『ということは、俺達も漫画みたいな青春が送れるってことなのか!?』

『そうか！ ギャルゲーにはそこまで夢と希望が詰まっているんだな!』

『流石兄貴だ！ そんなところに気づいていたなんて!』

『こうしちゃいられねえ！ 俺達も兄貴に続くんだ!!!』

『『『おうっ!!』』』

すると、一齐に俺のもとまでダツシユで駆け寄ってくる二年Fクラスの生徒達。その目は全員、キラキラと輝きを発していた。

フツ……お前ら、俺はそう来るって信じてたぜ。

「よっしやあ野郎共!! 俺についてこい!! 今こそ俺達の夢に向かつて全力で駆け抜けるんだ!!」

『『『おう! 兄貴!!』』』

「お願いします! このコスチュームを身に纏い、本物のみるくたんになってくだぶべらあっ!!」

再び土下座しようとした瞬間、俺の台詞は突如顔面にめり込んだ拳と共に遮られ、そのまま同時に視界もプツリと途切れてしまった。

唯一最後に目の前に見えたのは、秀吉を連れ出したときと同じ笑顔をした優子だった。

「……………さ? 三回戦の続き、始めよっか? アンタ達、早く戻ってくれと嬉しいな

『……………すいませんでした!!』
?』

第十五問 対Aクラス戦 〈中編〉

— side 明久

木下さんの鉄拳によって動かぬ屍と化した大悟。それを踏みつける木下さん。あの
大悟を一撃でノックアウトするなんて……とても秀吉のお姉さんとは思えない程の
豪腕だ。

けどあれは完全に大悟の自業自得だし、文句どころか同情の念も沸かない。

「ごめんね愛子。この馬鹿が迷惑かけて」

「ううん。ボクは大丈夫だよ。けど……予想以上の人で驚いたなあ、あはは……」

見てみると、被害者である工藤さんはまだ若干の苦笑いを浮かべている。そりやあ初
対面の相手にいきなり土下座されて体操着を着てくださいなんて懇願されれば誰だっ
てそうなるよね。

それにしても、肉食系女子をも黙らせる程の大悟の二次元愛……恐ろしい。流石は
女子小学生に防犯ブザーを鳴らされるほどの男だ。

「……明久。取り敢えずあのキモオタを回収してきてくれ」

「了解」

僕は試合場所の中心で寝っ転がっている大悟を自陣まで引きずり、適当なところにぶん投げておいた。白目剥いてるけど、しばらくすれば目が覚めるよね。

「……………（ムクツ、ドバドバ）」

すると、今まで鼻血を出して倒れていたムツツリーニがよろよろと立ち上がった。顔を血で真っ赤に染めながら。

「大丈夫なの？ ムツツリーニ。その鼻血の量……………」

「……………このくらい、同志の二次元イラストの破壊力に比べれば……………」

確かにそれは僕もそう思う。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい……………試獣召喚《サモン》っと」

「……………試獣召喚《サモン》」

召喚呪文に合わせて、二人に似た召喚獣が、それぞれ武器を手に持って出現する。ムツツリーニはBクラス戦でも見せた小太刀の二刀流。一方工藤さんは、

「なんだあの巨大な斧は!?!」

見るからに破壊力抜群の巨大な斧。オマケに例の腕輪までしている。ヤバい！ かなり強いぞ！

「こほん……気を取り直して、実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんが艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードでムッツリーニの召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん！」

そして、豪腕で斧を振るう。これはとても避けられる攻撃じゃない！

「ムッツリーニっ！」

斧が召喚獣を両断する———と思った直後。

「……………加速」

突如ムッツリーニの腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え？」

工藤さんの戸惑う顔。僕にも状況がよく分からない。気がついた時にはムッツリーニの召喚獣は相手の射程外にいたのだから。

「……………加速、終了」

ボソリと、ムッツリーニが呟く。

一呼吸置いて、工藤さんの召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

Aクラス 工藤愛子 446点

保健体育 VS

Fクラス 土屋康太 572点

つ、強い！ 下手をすると僕の総合科目並の点数だ！

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな」

雄二が驚く僕に説明してくれる。本気を出せばこんなに凄かったのか！

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」

工藤さんが床に膝をつく。相当ショックみたいだ。

「これで三対一ですね。次の方は？」

高橋先生は淡々と作業を進める。自分のクラスが負けても気にならないのかな？

「あ、は、はいっ。私ですっ」

こちらからは当然姫路さんが出る。唯一Fクラスにいながら、Aクラスとまともに戦える人材だ。

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出たのは——久保利光！

「やはり来たか、学年次席」

そう。彼の名は久保利光。

姫路さんに次ぐ学年三位の実力の持ち主で、振り分け試験を姫路さんがリタイアした今、彼は僕らの学年で次席の座にいる。

「……」が一番の心配どころだ」

雄二がそう言ったのには理由がある。久保君の実力は姫路さんとほぼ互角。総合科目の点数差にして20点程度しかない。

姫路さんが連戦で疲れている今、負ける可能性は否定できない……！！

「科目はどうしますか？」

高橋先生が二人に声をかける。もちろん、次の科目選択権は僕らにある。

「総合科目でお願いします」

すると、勝手に久保君が答えていた。

「ちよつと待った！ 何を勝手に——」

「構いません」

「姫路さん？」

クレームをつけようとする僕を止める姫路さん。大丈夫なんだろうか？

「それでは、試合開始！」

高橋先生が同じように操作を行い、召喚フィールドが展開される。

そして、それぞれの召喚獣が喚び出されー速攻で決着がついた。

Aクラス 久保利光 3997点

総合科目 VS

Fクラス 姫路瑞希 4409点

「マ、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!？」

教室の至る所から驚きの声がある。点数差400オーバー!？ 姫路さんが強いのは知ってたけどこれは尋常じゃない!

「ぐっ……!？」 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……?？」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。つい最近までは互角に等しかった実力がここまで差がついているのだ。気になるのは当然だろう。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、このクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんの優しい台詞。

そっか。姫路さん、Fクラスが好きなのか。こんな頭の悪い男だらけのクラスが。その中には僕も含まれているわけで、そう思うととても温かい気持ちになってくる。

「これで三対二ですね。次の人どうぞ」

高橋先生にも若干の表情の変化が見られた。多分僕達FクラスがAクラスとここまですり合っていることに戸惑いを感じているのだろう。

そして、いよいよこの時が来た。召喚獣を用いての最後の戦い。Fクラスからはあの男が――

「……………(チーン)」

あ、そういえばまだ気絶してたんだ。試合展開が早すぎてそのことをすっかり忘れてた。

「おーい、大悟。次は君の番なんだから起きて」

「……………」

「大悟！ 大悟ー!!」

「……………」

駄目だ。体を揺すつても顔にピンタをくらわしても全く起きる気配がない。けれど大悟が試合に出ないところらの負けはほぼ確定だ。どうすれば…………

「どうした？ 明久」

「あ、雄二。それが大悟が気絶したまま起きないんだ。どうしよう？」

「なんだと？ しゃあねえなあ…………」

すると、雄二が大悟の耳元に顔を近づけた。何をするつもりだろうか？

「起きろ大悟。めるたんが『大悟お兄ちゃん頑張つて!』つて言つてたぞ」

「何いいいいっ!!」

雄二の言葉と共にバツと目を覚ました大悟。あれで起きるんだ…………でも前に比べであんまり不思議に思わなくなってる自分がいる。慣れてきたのかな？

「雄二！ どこだ!!? めるたんはどこにいる!!」

「めるたんなら魔法の国に帰ったぞ。ほれ、次はお前の番なんだからとつと行つてこい」

「何!? まさか! 俺なんかの為にわざわざ魔法の国から来てくれたのか!? なんて健気で優しい子なんだ……よっしやあ! そう思ったら断然やる気が出てきたぜええええ!!!」

……最近雄二も大悟の扱いに慣れてきているなあ。まあ、元に戻ったんならそれでいいんだけど。

「頼んだよ、大悟」

「任せとけ! 俺のハートは今!! 愛の力で真っ赤に燃えあがっているぜ!! 見ていてくれ!! めるたああああん!!!」

そして、大悟は戦いの場へと向かっていく。

現在の戦況は三対二。最後の雄二に繋げる為にはこれ以上の負けは許されない。思わず僕にも緊張感が走る。

「大丈夫かな、大悟……」

「心配すんな明久。アイツは普段はキモオタだが、いざというときはやる男だ。俺達は黙ってヤツの戦いを見届ければいい」

「雄二……」

雄二の力強い言葉。

そうだ。雄二の言う通りだ。大悟はこんな大事な場面で負けるようなヤツじゃないことは、これまでの戦いを見ていれば一目瞭然じやないか。これまで何度も大悟に助けられたし、大悟がいなかったら乗りこえられないことだってあった。彼の強さは僕達Fクラスが一番よく知っている。

なら今の僕達に出来ることは、彼の勝利を信じて待つことだけなんだ。ムツツリー二と姫路さんが繋いでくれたバトンを、大悟は必ず雄二へと繋いでくれる。

「頑張れ……大悟……」

――

―― side 大悟

「しゃあっ!! 行くぜ!!」

俺は気合いの声を上げて戦いへと臨む。最早一敗も許されない状況。いつも以上に

気を引き締めて挑まなくてはならない。ここまで繋いでくれた明久達の為にも、応援してくれてるFクラスの為にも、そして……めるたんの為にも！ 俺は負けられねえ!!

「じゃあ、アタシが行くわね」

そう言つてAクラスから現れたのは、

「やつぱりお前か……優子」

「ええ。まさかFクラスがここまでやるとは思わなかつたわ。大悟」

秀吉の姉であり、俺の腐れ縁でもある女、木下優子だった。

「それでは、科目は何にしますか？」

「そうねーそれじゃあ、世界史で勝負しましょう?」

「何だと?」

優子の言葉に俺は疑問を覚えた。本来ならこっちの科目選択権なのだが、わざわざ向こうから提案してきたのはありがたい。どっちみち世界史を選ぶつもりだったからな。

だが社会科目、特に歴史は俺の得意分野だ。それは中学からの付き合いがある優子も当然知っている筈。そして俺が理系科目がクソ雑魚ナメクジなことも知っている筈だ。

なのに何故俺の得意科目を選択したんだ? そう思っていると、

「勘違いしないでね、大悟」

優子が俺の名を呼ぶ。

「貴方が社会科目が得意なのは知ってるわ。けどね、私達Aクラスには、学園の治安と品格を守る義務があるの。一学期早々、なんの努力もせずに試験召喚戦争をやらかして、その上Aクラスに挑もうとした馬鹿への制裁措置よ。大悟達にとつては、豪華な設備を奪う為の戦いなのだろうけど、私達は違うわ」

成る程な。世界史を選んだのは敢えてこっちの得意科目で勝負して圧倒的な力の差を見せつける。そうして自分達は最強なんだと知らしめるつもりー所謂『見せしめ』ってやつか。

「ほう……相変わらず責任感の強えヤツだな。でも一つ、お前の言ってる事には間違いがあるな、優子」

「……間違い？」

俺の言葉に疑問を持つ優子。やれやれ、と俺は溜め息を吐く。

「別に俺達は、なんの努力もしてこなかった訳じゃねえ。確かにお前達Aクラスに比べりゃあ学力は低いかも知れねえな。けど、それならそれなりの戦い方つてもんがあるんだよ」

現に俺達は、普通に考えれば勝てないと言われてきた上位クラス二組を降している。それは雄二の知略が、ムツツリー二の行動力が、秀吉の演技力が、姫路の努力が、明久のど根性があつたから出来たこと。決して戦争とは、学力だけでは決まらないことを俺

達は証明して見せてきたのだ。

「ふん、言つてなさい。どつちにしろ、私がここで勝てば良い話だもの」

「ハハッ！ 言うじゃねえか。お前が俺に今までこの科目で勝った事があるか？」

「それはどうかしら？ 貴方が少年院に入ってる間に私は努力を重ねてきた。疑うなら、自分の目で確かめて見ることね」

随分と余裕な態度を見せる優子。余程自信があるのか。

「それでは、召喚を開始してください」

高橋先生がそう言つて、世界史の召喚用フィールドを展開する。

「いくわよ……試獣召喚《サモン》！」

優子が召喚獣を喚び出す。頑丈そうな銀の鎧に大きなランスを持った、西洋の騎士を思わせる見た目だ。オマケに腕には金の腕輪を装着していた。

「……試獣召喚《サモン》！」

続いて俺も召喚獣を喚び出す。大きな金棒に和装束と、最早見慣れたスタイル。そして左手首には例の腕輪を装着してる。

そして、少し時間を置いて、召喚獣の強さを表す点数が表示された。

「優子。どうせだから教えてやるぜ。お前のその台詞なあー」

Aクラス 木下優子 418点

世界史 VS

Fクラス 岡崎大悟 607点

「ー負けフラグそのものだって事をよお！」

『な、なんだあの点数!!?』

『Fクラスにあんな点数が取れるヤツがいたのか!?』

『もう、霧島翔子以上……いや、担当教師並じゃないか!?』

『オタクの癖に!』

Aクラスの方から驚きの声があがる。オタクは余計だこの野郎!

「凄い! 倍近い点数差があるよ!」

「ああ、これなら間違いなくいける」

まあいい。この点数なら勝てる。早速暴れるとするーって何いつ!?

「先手必勝よ!」

召喚獣が金棒を振り上げた瞬間、優子の召喚獣がランスを構え、物凄いスピードで迫ってくる。

「くそつたれ!」

「まだよ!」

ランスが突き出されるも間一髪金棒で防ぐ。しかし優子の召喚獣は再びランスで攻撃を仕掛けてきて、俺の召喚獣に反撃に転じる隙を与えてくれなかった。

チツ……これじゃあ防戦一方になっちまう。

「クソツ……離れろやあ!!」

俺は何とか金棒を振り上げ、優子の召喚獣を吹っ飛ばそうとする。しかし、

「甘いのよ!」

ヒュンツ!!

「んだとっ!?!」

驚いた。なんと優子の召喚獣は、素早いスピードで俺の召喚獣の金棒を避けたのだ。

これがAクラス……エリートが操る召喚獣の力だったのかよ!?

「言ったでしょ……努力を重ねてきたって！」

「やるじゃねえか！ 優子！」

そして、遂に優子の召喚獣のランスが俺の召喚獣の肩辺りに直撃した。

Aクラス 木下優子 418点

世界史 VS

Fクラス 岡崎大悟 501点

くっ！ 致命傷じゃないが、肩に当たっただけでこの威力か。侮れねえなあ……。

「ゆ、雄二！ なんで!? 大悟の方が点数は高い筈なのに!？」

「チツ……木下姉め。大悟の召喚獣の弱点を的確に突いてきてやがる」

「弱点……?」

「そうよ。大悟、アンタの召喚獣の戦いは見させてもらったわ」

俺の召喚獣に連続で攻撃を与え続けながら、優子は不敵な笑みを浮かべる。

「アンタの召喚獣。確かにとてつもない力を持っているわね。一気に敵の召喚獣をまとめて倒す程の威力に加えて軽々と敵を吹っ飛ばせるパワー……けどその代わりス

スピードと精密な動きが出来ていなかった。しかも攻撃は大振りな金棒によるもの。なら、その間を狙っていけばいいだけの話よ」

成る程……確かに俺の召喚獣は近距離パワー型だ。ごり押しだけならあの姫路をも圧倒出来る力を持つ。

だが俺の召喚獣はスピードも遅い上に小回りが効かない。だから金棒を構えてから攻撃に転ずるまでに数秒のタイムラグがある。つまりその間は無防備状態になってしまふ為、相手の行動を許してしまうという欠点があったのだ。

「大悟。アンタは今まで格下の相手とばかり戦ってきたから、その弱点に気づけなかったのでしょう?」

「……………」

「その表情、凶星みたいね」

優子の言葉に間違いは無かった。

言われれば確かにDクラス戦の時は相手がびびっていたのと秀吉のフォローがあったからだし、Bクラス戦の時には相手のチームプレーが出来ていなかったからこそ俺は難なく勝ってきた。

けど今はそうはいかない。冷静になって、的確に俺の召喚獣の弱点を突いてくるとは……皮肉にも俺が先程優子に言った『それなりの戦い方』を逆にされるなんてな——

「――油断していたのは、俺の方だったのか。」

「いくら強大なパワーでも当たらなかつたら意味は無いわ。その隙を狙っていけば、いずれ崩れていくわ!」

「……やつぱお前はすげえよ。流石Aクラスだけのことはある! 認めるぜ! お前は……強い!」

ガアアン! ドオオンツ! ブウウンツ!

力任せに金棒を振り回すが、優子の召喚獣には全く当たらない。先程からずっと空を切っている。

しかも優子の召喚獣のランスは射程距離が長く、確実に隙を突かれて攻撃をくらい続けていた。

「あら、大悟にそんなことを言われるなんてね。なんならこのまま負けを認める?」

「ふざけんな。お前は知ってんだろ? 俺は絶対に、敵にへりくだるような無様な真似はしねえヤツだつてな」

「……そうね。アンタは昔から、そういうヤツだったわね。なら、ここで終わりにしましよう!」

優子が叫ぶと同時に、召喚獣のランスが突き出される。狙いは俺の召喚獣の胸元。召喚獣とて人間と根底は同じ、心臓部位をやられれば即死まっしぐらだ。

だが、優子は知らない。いや、この場にいる全員が知らないだろう。俺の腕輪の——『能力』をな。

「見せてやるぜ……俺の、切り札っ!!!」

そして、優子の召喚獣が、俺の召喚獣を胴体を貫く——

「変身っ!!!」

瞬間、掛け声と共に俺の召喚獣の腕輪が光る。すると、俺の召喚獣が巨大な咆哮をあげた。

『グウウウウウオオオオオオオオオオッ!!!』

それは凄まじい衝撃波を生み出し、優子の召喚獣を吹っ飛ばした。
「えっ!?!」

勝利を確信していたであろう優子が、間の抜けた声を出す。

当然だ。とどめに行ったつもりが、逆に押し返されてしまったのだから。

しかし、これでは終わらない。俺の召喚獣は咆哮をあげながら巨大化していき、その

姿を変えていく。

虎の様に鋭い爪と幾重にも生え揃った牙、大蛇の様な巨大な体躯に美しい碧鱗。見るものを全て射殺すかのような恐ろしい眼。神々しさを感じさせる角と髭。

そう、俺の召喚獣は空想上の怪物——巨大な龍の姿へと変貌した。

『ヴオオオオオオオオオオオオッ………!!!』

『な、なんだありやああ?!?』

『ば、化け物だあああああつ!!!』

Aクラス、Fクラス関係なく、教室中から聞こえる悲鳴に近い声。そりやあ、いきなり召喚獣が龍になったらそりやそうなるわな。

「な、何が起こってるの、大悟!」

「こ、これは……まさか、大悟の腕輪の能力なのか!」

後ろで静かに戦いを観戦していた雄二と明久も思わず驚きの声を出す。

「ああ。これが俺の腕輪の能力——『変身』だ」

そう。俺だけに与えられた腕輪には、世界史で500点以上を取ったときに発動できる特殊能力が備わっており、変身前の点数分の秒数だけ、召喚獣が龍に姿を変える事が

出来る。その代わりに時間切れになると大幅に点数を消費し、使用者自身の俺もフィードバックとして立ち上がれない程の疲労感に襲われる。

この能力を使ったのはBクラス戦の時以来だ。あの時は多人数だったのと、腕輪の能力を試す目的で使ったがな。けどこれ副作用もかなりあるから、正直あんまり使いたくねえんだよな。けどそうもいってられねえか。

「す、すげえ……」

「これが大悟の召喚獣の本当の力……」

「ま、その代わり、本来の腕輪と違って一戦に一回しか使えねえけどな。諸刃の剣ってヤツだ」

「な、何よこれ……こんなのアリ!?!」

龍に変わった俺の召喚獣を見てそう声を荒げる優子。明らかに狼狽している様子が一目瞭然だが、だからといって手加減は出来ない。

ここで負ければ今までのことが全部水の泡になっちゃうんだ。卑怯とでもチートでも何でも好きなように言いやがれ! これが俺のー岡崎大悟が勝ち取った力だ!

「それじゃあいくぞおお……優子お!!」

すると、龍となった俺の召喚獣は大きく口を開いた。そしてその中から巨大な火の玉が燃え上がる。後は……放つだけだ!

「なっ何?！」

！
優子は急いで召喚獣を操作しようとするが、時すでに遅し。こっちはもう準備完了だ

「恋のっ!! バーニング☆ブレエエエエエス!!」

俺の合図と共に、龍はその火の玉を思い切り火炎放射の様に吐き出し、優子の召喚獣を包み込む。

教室が一瞬、強い光で満たされる。圧倒的火力で放たれた炎は容赦なく優子の召喚獣を焼きつくし、やがて灰すらも残さない程に消し去った。

Aクラス 木下優子 DEAD

世界史 VS

Fクラス 岡崎大悟 217点

ふう……大分削られたな。優子のヤツ、本当に強かった……。

「勝者、Fクラス！」

高橋先生が俺の勝利をコールすると、世界史の召喚フィールドと共に龍も消えていった。

『うおおおーっ!!』

『すげえよ兄貴!!』

『やっぱ俺達の兄貴は最強だあぁー!!』

『兄貴バンザーイ!!』

そして一気に沸き立つFクラス生徒達。これで三勝三敗。俺の役目はこれで終わりで。

「ははっ、やったぜ……下克上、成功だ……やったよめるたんっ！」

腕輪の能力の副作用により、全身に疲労感がフィードバックとして現れる。それにより俺はその場に倒れ込んでしまった。

「大悟!?!」

「どうした、大悟!?!」

「……………!! (タタタッ)」

突然俺が倒れたことに驚いたのか、明久と雄二、ムツツリーニが俺のもとまで駆け寄ってきた。

「はあ……はあ……心配すんな。これは腕輪の副作用なだけだ。そのうち元に戻る……」

「そうか、それならいい。けど……よくやった大悟。まさかあんな能力があつたとはな。流石は兄貴と呼ばれるだけの男だ、お前は！」

「うん！ 雄二の言う通りだよ、大悟！ 本当にお疲れ様！」

「………大健闘（グツ）」

「言つたろうが、俺に……任せろつてよ。雄二……後は、頼んだぞ」

「ああ。任せろ」

ぐつと互いに手を握り、戦いのバトンを託す。

そして俺は、そのまま明久とムツツリーニに肩を担がれながら、自陣へと戻つていった。

——

「…………ごめん、代表。負けちゃった…………うぐっ！」

「…………優子。大丈夫。泣かなくていい」

「でも…………っ！」

「相手が悪かっただけ…………だから気にしないで。優子の分まで、私が頑張るから——」

「——私の望みも、優子の望みも絶対に叶えてみせるから」

第十六問 対Aクラス戦 ～後編～

——side 明久

「それでは最後の一人、どうぞ」

先程の試合は見事大悟の勝利に終わり、いよいよ最後の戦い。一騎討ちのラストバトルだ。互いの戦績は三対三のイーブンであり、泣いても笑ってもこれで勝負が決まる。

僕らはこの日を、この瞬間を迎える為に戦ってきたのだと言っても過言じゃないだろう。

「……はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子さん。そして、ウチのクラスからは当然、俺の出番だな」

坂本雄二。コイツしかいない。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけがないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いだりしない。

試合の時の様子が、まるで嘘のように静かだ。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ………！ ざわ………！

雄二の宣言で、Ａクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ………』

これで僕らに可能性が出てくる。絶対に勝てるわけがないと散々言われ続けてきた僕達にも僅かに勝利の確率が芽生えたのだ。

それを理解したから、Ａクラスはざわついているのだろう。

「分かりました。そうなると問題を用意しなくてはなりませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋先生は教室を出ていく。教育熱心な高橋先生のことだから、小学生レベルのテストも資料として持っていたりするのだろう。

そんな先生の背中を見送り、雄二に近づく。

「雄二、あとは任せたまよ」

ぐつと雄二の手を握る。

「ああ。任された」

ぐつと力強く握り返された。

「……………(ビツ)」

隣で僕と同じように大悟の肩を担いでいたムッツリーニが、ピースサインを雄二に向ける。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………(フツ)」

ムッツリーニは珍しく微笑を浮かべ、すぐに元の表情に戻った。

「坂本君、あのつ、ありがとうございました」

「ああ、今までのことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

姫路さんの元気な返事を聞いて、雄二は楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべた。

「大悟、お前もだ。ありがとうな」

「……………ああ。こつちこそな。派手にぶちかましてこいよ」

「勿論だ」

二人は互いに笑いあい、拳を合わせた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「……はい」

短く返事をし、霧島さんが教室を出ていった。

「じゃ、行ってくる」

そして雄二も、そう言い残して戦場へと向かっていった。

――

『では、問題を配りますね。制限時間は五十分。満点は100点です』

モニター画面の向こうで社会科目担当の落合先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『不正行為等は即失格になります。二人ともいいかな？』

『……はい』

『わかってるさ』

『それじゃあ、試験開始っ』

今、二人の手によって問題用紙が表に出される。

「吉井君、いよいよですね……！」

「そうだね。いよいよだね」

「これで、あの問題が無かつたら坂本君は……」

「集中力や注意力で劣る以上、延長戦で負けるだろうね。でも」

「はい。もし出ていたら」

「うん」

もし出ていたら、僕らの勝ちだ。

誰もが固唾を飲んで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

流石は小学生レベルの問題。僕でもわかりそうだ。

これなら、出ているか……！

() 年 鎌倉幕府成立

() 年 大化の改新

「あつ………!!」

出て、いた………。

「よ、吉井君っ」

「うん」

「これで、私達っ………!!」

「うん! これ僕らの卓袱台が」

『システムデスクに!』

揃ったFクラス皆の言葉。

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ!」

『うおおおーっ!!』

教室を揺るがすような歓喜の声。しかし、隣にいる大悟は何故か静かに俯いていた。

「……………」

「どうしたんだよ、大悟! これ僕たちは勝ったんだよ! もつと嬉しそうにしなよ

！」

「……明久。俺、気づいちゃったんだわ」

「？ なにが？」

「雄二の誇らしげな様子でむかっていったのと、さっきの会話。そして勝利を確信して喜ぶお前達……これが、何を表すかっていうとなあー」

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》
《Aクラス 霧島翔子 97点》

V S

《Fクラス

坂本雄二

53点》

「こうなっちゃうんだよおおおおお!!!」

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった。

――

「四対三でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ僕らに対する高橋先生の締めめの台詞。ええ、わかっています。ぼくらの負けです。完膚なきまでに。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る。

「……殺せ」

「よおし!! 潔い覚悟じゃねえか!! 望み通り地獄に送ってやらあ! 全隊! 構

えええい!!」

「「「「イェツサー!!」」」」

復活した大悟の号令により、僕を含めたクラスメート全員が靴下とボールペンを取り出す。雄二め! 今度こそFクラス男子の靴下をとくと味わわせてやる!!

「吉井君、落ち着いてください!」

「止めなさいこの馬鹿!」

「ぶべらっ!!?」

雄二を始末せんと飛びかかろうとした瞬間、僕は姫路さんに抱きつかれ、大悟はいつ

の間にか来ていた木下さんに飛び蹴りをくらっていた。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だとー」

「いかにも、俺の全力だ」

「この阿呆があーっ！」

まさか、雄二が普通に頭が悪いとは思わなかった。小学生レベルの問題であの程度しか解けないなんて、神童の異名の欠片もない結果じゃないか！

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！ なぜ止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路さんが身体を張って必死に僕を止める。

「ちっ。姫路の優しさに救われたな、雄二」

木下さんに背中を踏んづけられた大悟がそう言う。鼻血出てるよ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

ということとは凶星だな。

「……………ところで、約束」

あ。そう言えば、なんでも言うことを聞くって約束したんだった。

「……………！！（カチャカチャカチャ！）」

流石はムツツリーニ！ もう既に撮影の準備を始めている。こうしてはいられない。

僕も撮影の準備をしないと！

「わかってる。何でも言え」

潔い雄二の返事。自分のことじゃないくせに格好つけて！

「……………それじゃー」

霧島さんが姫路さんに一度視線を送り、再び雄二に戻す。そして、小さく息を吸っ

てー

「…………雄二、私と付き合って」

「…………はい？」

霧島さんの言葉に思わず間抜けな声が出してしまった。

「やっぱりか。お前、まだ諦めてなかったのか」

「…………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「…………はっ、告白シーンを間近で見れるたア嬉しいねえ」

「え？ え？ どういうこと？ 何が起きてるの？」

「霧島はな、最初から雄二の彼女になるつもりでこの条件を提案したんだよ」

「そうなの!! ていうか、大悟は知ってたの!!」

「おう。霧島はダイゴブツクスの超お得意様だからな。ちよこちよこ相談にも乗ってた

ぞ」

ええ!? 全然知らなかった……。

「その話は何度も断っただろ? 他の男と付き合う気はないのか?」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない」

つまり、霧島さんが異性に興味がないっていう噂は、一途に雄二を想っていたからってこと?

姫路さんを見ていたのは、雄二の近くにいる異性が気になったから?

「拒否権は?」

「……ない。約束だから、今からデートに行く」

「ぐあつ! 放せ! やっぱこの約束は無かったことにー」

「待ってよ。代表」

すると、突然木下さんが霧島さんを止めた。

「……そうだった。優子、頑張って」

霧島さんは、木下さんが何を言おうとしているのか分かっていそうな様子を見せる。頑張って? どういうことだろう?

「忘れてないかしら？ 約束は二つって言ったわよね？」

そうだった。確か話し合いの時に霧島さんの条件に木下さんが『負けの方は一つじゃなくて二つ、言うことを聞く』ってつけ加えたんだった。

そして、木下さんは大悟の背中から足を退ける。けど、優子さんの要望ってなんだろう？ 特に変な噂も聞いたことも無いし、全く想像がつかない。

「……やつと、この時が来たんだ。ずっと……待ってた」

そう言うのと、木下さんは何を思ったのか、大悟の方に視線を向ける。その顔は今までの仏頂面とは違い、どこか照れくささを感じさせる様な可愛らしい表情に変わっていた。

「あのね、大悟……」

カチャリ ジャラジャラ ↑（大悟の首に鎖付き首輪がつけられる）

「貴方は今から、私のものになりなさい♪」

……え？

「じゃ、行こっか。大悟……いえ、ダーリン♪」

「は？ いや、お前急に何言ってやがががががっ!!?」

そのまま大悟を引きずるように引っ張っていく木下さん。

え？ え？ ちょっと待って。私のものになりなさいって、どういうこと？

「ぬ、ぬう……騒がしいと思ったら、皆ここにおったか……」

すると、今までどこにいらたのであろう秀吉が戻ってきた。やけにボロボロだけど。

「皆の衆、何をしておるのじゃ?」

「あ、秀吉。それが……」

僕が事情を説明しようとすると、秀吉は首輪に繋がれている大悟と鎖を持つ木下さん

を見て、何かを察したかのように溜め息を吐いた。

「成る程のう……とうとう姉上も行動に出たのじやな」

「え？ どういう事、秀吉？」

すると、秀吉はこつそりと僕に耳打ちしてきた。

（今まで黙っておったが、姉上はずつと大悟の事を好いておったのじや）

……はい？ え？ いやいや、嘘でしょう？

あの秀吉と同じくらい的美貌を持つ才色兼備の木下さんが？

あんな馬鹿でキモオタで筋肉ダルマで公衆の面前で小学生相手に平気で土下座する
ような男を？

（今まではずつとその気持ちを押し込んでいたようじやが、遂にそれを解放したのじや
ろうな）

（信じられない……どうしてよりもよって大悟が？）

（……姉上。恐らく『あ的事』がきっかけなんじやろうな……無理もないのう）

（あ的事？）

（うむ？ いや、いや、なんでもない。とにかく、姉上には大悟に惚れた理由がちゃんとあ

るのじゃ)

(そ、そうなんだ……)

「……おめでどう、優子。とつても、お似合い……」

「ありがとう、代表。でも、そつちも負けなくらいベストカップルよ?」

「ベスト……カップル。嬉しい……」

二人は照れ臭そうに笑みを浮かべながらそう言う。けどその目はどこか寒気を感じさせるようにドス黒く濁りきっていた。

僕はあの目をした女性を何て言うか知ってる。一度大悟に借りた大人の参考書(成人向け同人誌)に同じ目をした女性が描かれていたから。

あれは俗にいう……ヤンデレというやつだ。

「おい! どういう事だ大悟! なんてお前が木下姉と!」

「俺が知るわけねえだろ! おい優子! ちゃんと説明しやがーガフオツ!」

「大悟、どうしーゲフツ!」

霧島さんと木下さんの目にも止まらぬ速さの手刀が、雄二と大悟の首元に命中する。

その一撃で二人とも意識を刈り取られた二人をずるずると引きずり、恐ろしい笑みを

浮かべたまま二人は教室を出ていった。

『……………』

教室にしばしの沈黙が訪れる。僕を含めた全員が、突然の出来事に言葉が出ないようだ。

「さて、Fクラスの諸君。お遊びの時間は終わりだ」

呆然としている僕らの耳に野太い声がかかる。

音のした方を見ると、そこには生活指導の西村先生が立っていた。

「あれ？ 西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようと思つてな」

「え？ 我がFクラス？」

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだから一年、死に物狂いで勉強出来るぞ」

『なにいつ!?!』

クラスの男子生徒全員が悲鳴をあげる。

その理由は、生活指導の鉄人といえ、『鬼』の異名を持つほどの厳しい教育で有名だ

からだ。

特に僕や雄二、大悟なんかはよく問題を起す為、鉄人に深くマークされている。そんな鉄人がFクラスの担任——残念！僕の青春はここで終わってしまった!?

「いいか。確かにお前らはよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てではないからといって、ないがしろにしていいものじゃない」

くっ！ 雄二が必要最低限の学力を身に付けていれば、鉄人にこんな説教臭いことをいわれなくてもよかったのに、

「吉井。お前と坂本と岡崎は特に念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯、そして特別監視対象生徒だからな」

「そうはいきませんよ！ なんとしても監視の目をかいくぐつて、今まで通りの楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「……お前には悔い改めるといふ発想はないのか」

溜め息混じりの台詞。でも、僕は少しだけ勉強をする気になっていた。

「取り敢えず、明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろう」

何故なら、三ヶ月後にまた試召戦争を起こして、この教師から逃れるために。

よしっ！ 生まれて初めてやる気が出てきた！ 人生を渡る上での強力な武器ってヤツを身につけてやろうじゃないか！

「さあ〜て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましようか？」

「え？ 美波、それって週末って話じゃ……」

「だ、ダメです！ 吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ!? 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!？」

ま、マズい！ 二人からの誘いは嬉しいけど、このままじゃ僕の主食が公園の水道水決定だ！ なんとか見逃して貰わないと！

「に、西村先生！ 明日からと言わず、補習は今日からやりましょう！ 思い立ったが仏滅です！」

『吉日』だ、バカ

そんな些細なことはどうでもいいんだ！

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいがー無理することはない。今日だけは存分に遊ぶといい」

鉄人は僕と美波と姫路さんを見て、ニヤニヤと嫌な笑顔でそう言った。

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！ こうなったら卒業式には

伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

積もり積もった今までの恨み、まとめて晴らしてくれ！」

「アキ！ こんな時までやる気を見せて逃げようたつて、そうはいかないからね！」

「ち、違うよ！ 本当にやる気が出ているんだつてば！」

「吉井君！ その前に私と映画ですつ！」

「いやああつ！ 生活費が！ 僕の栄養源があつ！」

こうして、僕達の数日間に渡る下克上は終わりを告げた。

はあ……明日からは公園の水が僕の主食だな。

――

――放課後 映画館――

「……雄二、どれが観たい？」

「大悟の好きなを選んで良いわよ？」

「早く自由になりたい！」

ガチャリ ↑（手錠に繋がれた雄二）

ジャラジャラ ↑（首輪に繋がれた大悟）

「じゃあ……これにする」

「あつ、気が合うね、代表」

『地獄の黙示録 く完全版く』

「オイ待て！ なんだその聞いただけで禍々しさを感ずるタイトルは！」

「しかもそれ三時間二十三分もあるぞ!？」

「二回見る」

「それも連続でね♪」

「一日の授業より長いじゃねえか！」

「アニメでもねえのに七時間近くも座って見てられねえよ！ おかしくなるわ！」

「授業の間、雄二に会えない分の……う・め・あ・わ・せ♪」

「そよ その代わりに今日はたっぷり楽しませてもらわないとね、大悟よ」

「ふぎけんな！ こんな茶番付き合ってるか！ 帰ろうぜ雄二！」

「ああ！ 全くだ！」

ジャラツ テクテクテクテク……

「大悟？ どこへ行くこうとしているのかしら？ 帰さないわよ？」

「今日は……逃がさない」

ビリッ、ビリビリ……

「ーは？ オイ！ 優子待て！ なんでそんなの持ってーーーぎやああああああめるたああああん!!!」

「ーーオイ！ なんだ翔子!! それーーーあばああああああ!!!」

バタツ……プス、プス……

「学生二枚、二回分」

『はい。学生二枚、気を失った学生二枚、無駄に二回分ですね』

清涼祭編

第十七問 恋のミルキイ☆打法

なあ皆、突然だが、一つ質問させてほしい。皆は『文化祭』という単語についてどう思う？

学生生活で最大のイベント？ クラスの催し物が楽しい？ 気になったあの子に勇気を出して告白する為の絶好のチャンスの場？ それぞれ思ったことはあるだろう。

けどな、この岡崎大悟から言わせれば、あれほどしようもない学校行事がほかにあるだろうか？ まず想像してみてください。

体育祭はどうだろう？ クラスが一丸となって優勝という確固たる目的に向かって汗を流して戦い合う。いいじゃないか。

修学旅行はどうだろう？ クラスメイトと未開の土地へと赴くワクワクさがあり、同じ釜の飯を食い同じ布団で寝ることで友情が深まり、班行動では強調性やチームをまとめあげるリーダー能力が培われる。素晴らしいじゃないか。

いやいや、卒業式はどうだろう？ 立つ鳥跡を濁さずという言葉があるように、お世話になった学校に今までの感謝の意を評し、新たな旅立ちの門出を祝う。感動的じゃな

いか。

このように、学校行事というのはそれぞれ何かの『目的』があり、それによって得られる『経験値』が確立されているものであるのが普通だ。

だが……文化祭に関してはそれがない！

なんか目的も曖昧なまま行われ、中途半端な出し物の為に夜遅くまで残って準備をし、かといつていざ始まってみるとやっつてることは祭の outlet と変わらない！ 大学の学祭なら有名人とか来るからまだしも、高校の文化祭なんて来るのはせいぜい友達くらいだ！ 友達と遊びたいけど自分は店番をやらなきゃいけないからそれも出来ない！

そんでよく分からんうちに終わって、残ってるのは疲れきった後の大片付け！ しかも儲けは全部学校に徴収される！ 自分達が限られた準備時間でどれだけ成果を残しても、最後に笑うのは学校の偉いヤツだけなんだ！ これを理不尽と言わずなんと言う!? けど、俺だって思ったさ！ いや！ もしかしたら学園アニメでよくある、滅茶苦茶可愛い女の子とあんなことやこんなことが起きるんじゃないかって！ でもそんなこと全然ないし、仮にいたとしてもそいつはリア充かヤリオンだ!! 何が青春だ！ 下らねえ！

つまり、文化祭とは『過程に対しての結果が伴わな過ぎる時間の無駄とも言える行事』だと俺は断言する！ それかりア充どもの楽しそうな光景を見させられる地獄の時間

でもいいぞ！

だから俺は、文化祭なんて行事に全く興味も熱意も無い。そう——

「行くぜえ！ 明久！」

「勝負だ、大悟！」

「見せてやるぜ！ 俺の恋のミルキイ☆打法！」

——だから俺達Fクラスは、文化祭の準備もせずに校庭で野球をして遊んでいる。

「八月のシン○レラインを完走したこの俺に勝てると思うなよ！」

「言ったな！ こうなれば意地でも打たせるもんか！」

そして俺は、バッターボックスに立ちバットを構える。明久の投球の速さはそこそこだが、変化球が上手い。だから馬鹿正直にストレートを投げてくる確率は低いな。

ここはカーブを警戒して打つ位置をもう少し——

「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしているか！」

「ヤバイ！ 鉄人だ！」

校舎の方から、そんな怒声と共に俺達の担任である鉄人が俺達目掛けて走ってくるのが見えた。瞬間、俺達は捕まらないように一気にバラバラになって逃走した。

「吉井！ 貴様がサボりの主犯か！」

「ち、違います！ どうしても僕を目の仇にするんですか!？」

「おー、流石趣味がトライアスロンの人間だ。段々と明久との距離を詰めてきている。この隙に俺はさっさと逃げー」

「アイツらなんです！ あの坂本雄二と岡崎大悟が野球を提案したんです！」

「なっ！ あの野郎！ 俺達を売りやがったな！ まあ野球をしようって言ったのはホントだがな。だって八月のシンデレラナオン見てたらやりたくなっただもん。」

すると、雄二が俺に視線で何かを訴えてきた。ええとなになにー

『明久に 伝えろ フォークを 鉄人の 股間に』

俺はそのサインに頷き、明久に同じように目で訴えた。

『明久を 鉄人の 股間に』

「どういうこと!? どうして鉄人の股間にダイブしなきゃいけないの!? 単純に僕がそっち系なヤツだと思われるだけだよね!？」

わり、間違ったわ。てへへろ。

「とにかく、即刻全員教室へ戻れ！ この時期になってもまだ出し物が決まっていな

なんて、うちのクラスだけだぞ！」

鉄人の耳に響く恫喝によって、俺の恋のミルキイ☆打法のお披露目はお預けとなった。

——

「さて。そろそろ春の学園祭の出し物を決めなくちゃならない時期が来たんだが——」

Fクラスに戻り、教壇に立った雄二が、床にござを敷いて座る俺らを見下ろしてそう宣言してきた。

「取り敢えず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後はそいつに任せる」

心底どうでも良さそうな態度を取る雄二。多分学園祭に全く興味も無いんだろうな。

けど、正直なところ俺だって興味どころかやる気など全く無い。だいたい学園祭でやる催し物なんざたかが知れてる。そんなところに時間を割く位なら溜まりに溜まってやる依頼品をやった方が断然良い。

「吉井君。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

「うーん、見た感じ楽しみにしているってことは無さそうだね。興味があるならもつと

率先して動いている筈だから」

「そうなんですか……寂しいです……」

隣からそんな明久と姫路の会話が聞こえる。どうやら姫路は学園祭を楽しみにしているみたいだな。

「大悟よ。お主は学園祭は楽しみではないのか?」

そう思っていると、別のところから声が。その方を振り向くと、Fクラスのアイドルこと俺の相棒、木下秀吉が俺にそう言っていたのが見えた。

「ああ。雄二と同じく、面倒くせえの一言に尽きるよ」

俺はそう言って大きい欠伸をする。授業が潰れるのは単純に嬉しいが、学園祭で特にやりたいこともないしな。

「むう……大悟は昔から興味の無いことにはとことん無頓着じゃのう」

「まあな。やりたきや勝手にやってくれて感じだ。それによお、その日は俺の崇拜する『アニソンのクイーン』こと、水樹カヤ様のライブがあるんだよお!! 畜生めえ……カヤ様のライブを見逃さなくてはならないなんてファンとして、いや! 人間として未代までの屈辱だつ!!」

「大悟。段ボールが潰れておるぞ」

おっと、つい感極まってミカン箱を殴って潰してしまったか、後で段ボールを申請し

とこう。

「じゃが、大悟は高校生活初の文化祭じゃろう？ 儂は大悟とようやく学生としての思
い出作りが出来ると思つて楽しみにしてるのじゃがな」

「えつ……それつてまさか、遠回しに俺に対する告白!?」

「そんな訳なからう。話が飛躍しすぎじゃ」

「ほらあー！ また振られたあー！ やっぱり学園祭なんぞ録なことがねえ!!」

「振られたつてなんじゃ!? 儂は男じゃと言つてろが！ ミカン箱を無理矢理引きち
ぎるのをやめい！」

母さん。俺は人生で二度も秀吉に振られました。もう生きていける気がしません。

「はあ。とにかくせつかくの学園祭なのじゃから、大悟も楽しんではどうじゃという話
じゃ」

「楽しむねえ……」

「それに、お主は料理の腕も服飾技術も高いのじゃから、それを遺憾なく披露する絶好の
機会じゃと思うぞ?」

「……何だかなあ。いまいち気乗りしねえなあ」

それに、現在のFクラスはAクラスとの試召戦争に負けたおかげで前より設備が更に
ボロくなっている。卓袱台はミカン箱に、座布団は傷んだごぎに交換されていて、もう

教室って言わなきゃ分からないレベルにまで下げられてしまった。

そんな環境の中で、まともなクラスの出し物が出るとは思えないのだ。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？ ウチがやるの？」

不意に耳に飛び込んできた雄二の台詞。それに目を白黒させている島田。

「う〜ん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

ここ文月学園には、『試験召喚システム』という世界的にも注目されているシステムを導入している。それで今年はその試験召喚システムを一般的にお披露目する場を設ける企画として『試験召喚大会』と呼ばれるイベントを発案したらしい。

けどそれって要は俺達みたいな馬鹿な生徒にとつては、自分の低い点数を見せ物にされた挙げ句、高得点者の引き立て役にされるだけだから何の得も無いんだよな。

「雄二。実行委員なら美波より姫路さんの方が適任じゃないの？」

「え？ 私ですか？」

「いや、姫路には無理だな。多分全員の意見を聞いているうちにタイムアップになる」
「だろうな。俺もそう思う。」

「それにね、アキ。瑞希も大会に出るのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

「へえ。学校の宣伝みたいな行司なのに。二人とも物好きだなあ」

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言つて聞かないんだから」

「お父さんを見返す?」

「うん。家で色々言われたんだつて。『Fクラスのことをバカにされたんです! 許せません!』って怒ってるの」

ほお。あの姫路が怒るほどとは、どれだけ俺達は酷い言われ方をしたんだろうか。

だが、その父親の気持ちも分からなくはない。客観的に見れば、俺達は学生において必要不可欠な勉強を疎かにした連中ばかりで構成されたクラスだからな。しかも姫路は本来Aクラスにいる筈の人間だから、父親から見て余計に良い印象は抱かないだろう。

「だって、皆のことを何も分かってないのに、Fクラスっていう理由だけで馬鹿にするんですよ? 許せませんっ」

「……………」

いや、姫路すまん。皆をよく知ってる俺でも、Fクラスは馬鹿の集まりだと思う。

「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

「そうだったんだ。確かに姫路さんと美波が組めば、優勝もあり得ない話じゃないもんね」

「三人とも。こつちの話が続けていいか？」

話の路線が逸れてしまいそうなるのを、雄二が止める。

「あ、ゴメン雄二。美波が実行委員になる話だったよね？」

「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」

「なら、サポートとして副実行委員を選出しよう。それなら良いだろう？」

そう言つて、雄二がチラッと明久の方を見る。ああ、アイツやっぱり明久に面倒事をやらせようとしてるな。

「んく……そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……」

「そうか。では、皆に候補となるヤツを挙げてもらおう。その中から島田が二人を選んで決戦投票にすればいいだろう」

皆もいいな、と雄二がクラスの連中に告げると、教室内からちらほらと推薦の声が聞こえてきた。

『吉井が適任だと思ふ』

『坂本がやるべきじゃないか?』

『いや、ここは我らが兄貴の出番じゃないか?』

『姫路さんと結婚したい』

『ここは須川にやつてもらった方が』

誰だ、俺を推薦しようとしているヤツは。それといい加減姫路にラブコールを送つて
るヤツ、諦めろ。

「儂は明久が適任じゃと思ふがの」

すると、隣で秀吉が明久に一票を投じた。

「つて、秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいなくなつて」

「それは大悟含め皆が思っていることじゃ。ならば適任の者がやつてくれた方が良い
じゃろう?」

「むう……。それはそうだけど……」

明久は何か言いたそうな表情をしていたが、秀吉の的を得た発言に言い返すことが出
来なかつた様だ。

「よし、じゃあ島田。今挙がった連中から二人を決めてくれ」
「そうね。それじゃ……………」

『候補①……………吉井』

『候補②……………明久』

「さて、この二人からどちらが良いか、選んでくれ」

「ねえ雄二。明らかに美波の候補の挙げ方はおかしいと思わない?」

全くだ。やれやれ……………ここは俺が助言してやるか。

「島田、それは間違っているぞ。俺が書き直してやる」

俺はよっこらせ、と立ち上がり、教壇に向かい島田からチョークを借りる。

そして、島田の書いた所に新たに付け加えた。

『候補①……………吉井(バカ)』

『候補②……………明久(アホ)』

『候補③……………観察処分者(よしいあきひさ)』

「これでよし」

「あ、確かにそうね。ありがとう、岡崎」

「なに、気にするな」

「ねえ？ 僕には余計に間違いが増えたように思えるんだけど？」

明久が何か言ってるが無視し、俺は自分の席に戻った。

『どうする？ どれが良いと思う？』

『そうだなあ……。全員クズには変わりないんだが……。』

「こらあつ！ 真面目に悩んでいるフリをするんじゃない！ あと、平然とクラスメートをクズ呼ばわりするなんて、君らは人間のクズだ！」

という訳で、結局多数決関係なく、副実行委員は明久に決定した。

「ほらほら、アキ。前に出て議事をやらないと」

「なんだか僕はいつもこんな貧乏くじを引かされている気がするよ……」

そして、明久は渋々席を立てて前に行く。それと入れ替わりで全身から面倒臭いオースラを発した雄二が気だるげに席へと戻っていった。

「それじゃ、ちゃつちやと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえん？」

島田がそう告げると、数人が手を挙げた。

「はい、土屋」

「……………（スクツ）」

立ち上がったのは、三次元のエキスパートこと俺の同志、ムッツリーニだ。

「……………写真館」

「…………土屋の言う写真館って、かなり危険な予感がするんだけど」

島田が思い切り嫌そうな顔をする。

確かに女子から見ればムッツリーニの写真は好まれるものではないが、男子にとつてはその写真館は宝の山だろうな。ま、俺は二次元派だから何とも思わないがな！

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー」

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

いや、書き方よ。

「次。はい、横溝」

「メイド喫茶ーと言いたいけど、流石に使い古されているし、兄貴の前でそう易々とメイドをやるワケにはいかないので、ここは斬新にウエディング喫茶を提案します」

ほほう、横溝よ。よくわかっているじゃないか。勿論俺は学園祭程度でやるメイドな

ど認めるつもりはないからな。アキバの本物のメイドさん達とたかが思い出作りでやる似非メイドではご奉仕の精神が違うのだよ！ご奉仕の！

「ウエディング喫茶？ それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウエイトレスがウエディングドレスを着ているんだ」

ほー、なかなか面白いじゃないか。つまりウエディングドレスを着た秀吉が接客をしてくれるのか……イイネ！

『斬新ではあるな』

『憧れる女子も多そうだ』

『でも、ウエディングドレスって動きにくくないか？』

『流石に兄貴やムッツリーニでも調達は至難だと思うぞ？』

『それに、男は嫌がらないか？ 人生の墓場、とか言うくらいだしな』

そんな意見に、クラスの中が少しざわめく。確かにウエディングドレスは作れないこともないが今からだと間に合うかどうか分からない。何せ女性が最も輝くとされる衣装だからな。ムッツリーニと協力しても人数分は厳しい。

「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いて」

「あ、うん」

【候補② ウエディング喫茶 『人生の墓場』】

いやだから書き方よ。

「さて、他に意見はーはい、須川」

「俺は中華喫茶を提案する」

「中華喫茶？ チャイナドレスでも着せようって言うの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉からもわかるように、こと『食べる』という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものはー」

やけに須川が熱弁を振るっているな。中華に対して相当なこだわりがあるのだろうか。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「りよ、了解」

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパアン』】

オイ。明久のヤツ、話理解出来てないだろ。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

教室の扉がガラガラと音を立てて開き、筋骨隆々のチンパンジーこと鉄人が現れた。
「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです」

島田がそう言うのと、鉄人はゆっくりと黒板に視線を向けた。

【候補① 写真館『秘密の覗き部屋』】

【候補② ウエディング喫茶『人生の墓場』】

【候補③ 中華喫茶『ヨーロッパ』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

呆れながら鉄人がそう呟いた。あ、これ俺達完全に馬鹿だと思われたわ。

『せ、先生！ それは違うんです！』

『そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

「馬鹿者！ みつともない言い訳をするな！」

鉄人の一喝で、思わず背筋が伸びる連中。流星に鉄人といえども、明久だけに責任を押し付けようとするヤツらを見て怒って――

「先生は、バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行動だと言っているんだ！」

「……どうしよう。反論の余地もない。」

「まったくお前らは……。少しは真面目にやったらどうだ？ 稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういうった気持ちすらないのか？」

その鉄人の一言を聞いて、クラスの連中の目の色が変わった。

『そうか！ その手があつたか！』

『なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！』

『いい加減この設備にも我慢の限界だ！』

一気に活気づいた教室内。そして様々な意見が飛び交う。

『やつぱり、中華喫茶の方がいいんじゃないか？』

『お化け屋敷の方が絶対ウケると思う』

『簡単なカジノを作ろう』

『焼きとうもろこしを売ろう』

『こうなったら兄貴に頼み込んでダイゴブックス主催の同人誌即売会はどうだろう』

流石はFクラス。個性派集団の集まりだけあってどんどん意見がバラバラになっていき、島田が苦い表情になる。

本来ならクラスを纏める役目を持つ雄二の出番なのだろうが、ヤツは全く学園祭に興

味が無いからな。現にそこでミカン箱に突っ伏して寝てるし、期待は出来ないな。

ああ、俺も早く帰ってエロゲー攻略の続きやりてえな。

「ああ！ もう！ とにかく静かにして！ このままじゃ決まりそうにないから、店はさつき拳がった候補の中から選ぶからね！」

やがて業を煮やしたのか、島田が無理矢理話を纏めた。そして手早く多数決を取っていく。

結局、俺達の出し物は中華喫茶に決まった。

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！ 全員、協力するように！」

『はい』

気の抜けた返事が響く。これで一応学園祭の方向性は決まっただろう。

「秀吉。俺は便所に行つてくる。なんかあつたら教えてくれ」

「む？ 分かったのじゃ」

そう秀吉に告げて、俺はFクラスの教室を出ていった。

——

「あー、すつきりしたー」

便所を終えて、Fクラスへと戻ろうとすると、

「……………岡崎、ちよつと」

「んあ？」

丁度Aクラスの前を通りかかろうとした所で、誰かに呼び止められた。誰だ、と思い振り向くと、そこには学年首席の霧島翔子が立っていた。

「なんだ霧島。俺に何か用か？」

「……………実は、岡崎にお願いがある」

お願い？ また雄二とのいちやラブ同人誌を描いてくれとかか？

そう思い、俺は霧島に内容を問い質した。

「お願い？ なんだ？」

「実は……………清涼祭の出し物で、Aクラスはメイド喫茶に決まった」

「メイド喫茶だと？ それがどうした」

「でも……………クラス内であまりメイドについて詳しい人がいなくて困ってる。そこで、

岡崎にメイド喫茶について教えて貰おうっていう話になった。だから岡崎ー」

「ー私達に、メイド喫茶というものを教えてほしい」

なん……だと？ 俺に……メイドを教えてください、だと？

「……予算は？」

「全部、学校が負担してくれる」

「……時間は？」

「高橋先生にお願いして、六時間目の時間を空けてもらった。だから今からFクラスに行くつもりだった」

「……報酬は？」

「……用意してある。もし必要なら岡崎の要望にも応えるつもり」

……ほう？

「……良いだろう。案内したまえ」

「分かった……こつち」

そして俺は霧島に連れられ、Fクラスに戻ることは無くAクラスへと向かい、六時間目の時間を目一杯使って俺は、Aクラス生徒全員の前でメイド喫茶とは、そしてメイドとは何かという特別講義を行うこととなった。

え？ 中華喫茶？ 知らんなあ！ それよりもこつちの方が大事だ！

第十八問 三次元のオンナノココワイ

——明久視点——

「アキ、木下、ちよつといい？」

帰りのHRも終わって放課後。特に予定も無いので秀吉と一緒に帰ろうとしたところ、美波に呼び止められた。

「ん、何か用？」

「なんじゃ、島田よ？」

「用って言うか、相談なんだけど」

「相談？ 僕たちで良ければ聞かせてもらおうけど」

「うん。多分、アキと木下が言うのが一番だと思うんだけど——その、やっぱり坂本と岡崎をなんとか学園祭に引つ張り出せないかな？」

どうやら美波は、Fクラスの成功には雄二の先導と大悟の統率力が必要だと判断したようだ。

「うーん、それは難しいなあ……。さつきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね」

「済まぬが大悟も同じじゃ。あやつをやる気にさせるのはかなり至難の技じゃぞ?」

「多分雄二の方はクラスの出し物が何に決まったかさえ知らないだろうし、大悟はどうか行つたきり帰つてこないし、どこに行つたんだらう?」

——

ダダダダダダツ!!

「俺は無実だあああああ——!!!」

「畜生おおー! なんてこんなことになるんだあー!!」

ダダダダダダツ!!

「雄二……逃がさない」

「大悟ー? どうして逃げるのかな? カナア?」

——

……ん? 今なにか聞こえたような。気のせいかな?

「でも、二人が頼めばきつと動いてくれるよね?」

美波の何かを期待したような眼差し。

「え？ 別に僕らが頼んだからって、二人の返事が変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。木下と岡崎は付き合いが長いみたいだしー」

「そりや確かに、僕らはよくつるんではいるけど、だからと言って別に」

「ーアキと坂本は、愛し合っているんでしよう？」

「もう僕お婿にいけないっ！」

一体美波は僕と雄二をどういった目で見ているのだろうか。

「誰が雄二なんかと！ だったら僕は断然秀吉の方がいいよ！」

「……………あ、明久？ そ、その、お主の気持ちは嬉しいのじやが、そんなことを言われても、僕らには色々と障害があると思うのじや。その、ホラ。歳の差とか……………」

隣にいる秀吉が顔を赤らめてたじろぐ。あれ？ なんだか妙な雰囲気になつてない？

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ もの凄い誤解だよ！ さっきのはただの言葉のアヤで！ それと、僕らの間にある障害は決して歳の差じやないと思う！」

ど、どうしよう！ 秀吉ならいいかも、って思えてきた！

「それじゃ、坂本と岡崎は動いてくれないってこと？」

「え？ あ、うん。そういうことになるかな」

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

目を伏せ、沈んだ面持ちになる彼女。確かに、どうにか雄二と大悟を引つ張り出した
いとは僕も考えている。

この喫茶店が成功したら、Fクラスの設備を良い物に換えられる。そうしたら姫路さ
んの身体の負担も少しは減るだろうし。

「じゃが島田よ？ どうしてそこまで喫茶店を成功させたいのじゃ？」

秀吉がそう彼女に尋ねる。確かに、美波はそこまで設備に対して不満があつたわけ
もないのに随分と熱心だ。何か事情があるのかな？

「……本人には、誰にも言わないで欲しいって言われたんだけど、事情が事情だし
……。けど、一応秘密の話だからね？」

「う、うん。わかった」

美波の真剣な表情に少し気圧される。

「実は、瑞希なんだけど」

「姫路さん？ 姫路さんがどうかしたの？」

「……あの子、転校するかもしれないの」

……ほえ？ 姫路さんが転校？ そんな馬鹿な。

折角同じクラスになっていよいよこれからって時に転校しちゃうなんて。まだ楽しい思い出も作ってないし、膝枕も耳掃除してもらってない。だいたい、彼女が転校しちゃったらこのクラスはどうなる？

もし、唯一の清涼剤である彼女がいなくなったら――

『お主ら、こんなことはやめるのじゃ！』

『げへへっ！ これからは俺達が可愛がってやるぜえ！』

『やめろ！ その汚い手で僕の秀吉に触るなあ！』

『お前だけに良い思いはさせねえぜえ！』

『や、やめろおおおー!!』

「む。マズい。明久が処理落ちしかけてるぞ」

「このバカ！ 不測の事態に弱いんだから！」

「明久、目を覚ますのじゃ！」

……あれ？ 誰かが僕の肩を揺すっているな。ああ、秀吉か。今日も可愛いなあ。

「秀吉……、モヒカンになった僕でも、好きでいてくれるかい……？」

「……………どういふ処理をしたら、瑞希の転校からこういふ反応が得られるのかしら」
「ある意味、稀有な才能かもしれないのう」

……………はっ?! いけない、ちよつとトんでた!

「美波! 姫路さんが転校つて、どういふことさ!」

気を取り直して、微妙な目付きで僕を見る美波に詰め寄る。

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は転校しちゃうかもしれないの」

「このままだと……………?」

「島田よ。その姫路の転校と、さっきの話が全然繋がらんのだじやが」

「それでもないのよ。瑞希の転校の理由が『Fクラスの環境』なんだから」

「つてコトは、転校は両親の仕事の都合とかじゃなくてー」

「そうね。純粹に設備の問題つてことになるわ」

そう言われて、僕は思わず納得してしまった。

姫路さんにとつてこのクラスの設備はとてもとつていいほど相応しくない。ござにミカン箱という設備の上に、周りの人間はバカだらけ。本人に非がないのにこんな環境では、普通の両親なら誰もが転校させようと考えるはずだ。

「それに瑞希は、身体も弱いから……………」

「そうだよ。それが一番マズいよね……………」

美波の言う通り、この劣悪な環境では姫路さんの健康に害を及ぼす可能性がある。このままではいざれ体調を崩すのも時間の問題だ。

「なるほどのう。じゃから喫茶店を成功させ、設備を向上させたいのじゃな」

「うん。瑞希も頑張つて『召喚大会で優勝して両親にFクラスを見直してもらおう』とか考えているみたいなんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

確かに、姫路さんの頑張りは無駄とは言わないけど、問題は姫路さんの健康状態だ。それを何とかしない限り、両親の気持ちは揺るがないだろう。

「……アキはその……瑞希が転校したりとか、嫌だよね……?」

「もちろん嫌に決まってるさ！ 姫路さんに限らず、それが美波や秀吉であつても！」

「そっか……。うん、アンタはそうだよね！」

美波が嬉しそうに頷く。

ちなみに、雄二や大悟だつたらどうでもいいというのは秘密だ。

「そういうことなら、なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！」

「そうじゃな。ワシもクラスメートの転校と聞いては黙つておれん。これなら大悟も協力してくれるじゃろう」

「それじゃ、まずは二人に連絡を取らないとね」

ポケットから携帯電話を取り出し、雄二の番号を呼び出す。まだ鞆はあるから学校内

のどこかにいるはずだ。

『ーもしもし』

「あ。雄二。ちよつと話がー」

『明久か。丁度良かった。悪いが俺の鞆を後で届けにーげっ！ 翔子！』

「え？ 雄二。今何をしてるの？」

『くそっ！ 見つかつちまった！ とにかく、鞆を頼んだぞ！』

「雄二!!? ももしし！ もしもーし！」

すると、プツリと通話が途切れてしまった。どうしたのだろうか？
仕方ない。次は大悟にかけてみるかとするか。

『ーもしもし?』

「あ、大悟？ 一体どこにいるー」

『済まねえ、理由は後で話す。その前に頼みがあるんだ。俺の荷物をーなっ！ 優子

!?!』

「だ、大悟？ どうしたの？」

『待て優子！ それは人に向けていいものじゃない！ 明久、悪い！ また後でかけ直す！』

「大悟?! ちょっと待ってよ！ 大悟ー!」

大悟も同じように、一方的に電話を切ってしまった。携帯電話からはプー、プー、という無機質な音しか返ってこない。

「二人はなんて言ってた?」

「えっと、雄二は『見つかった』とか『鞆を頼む』とか言ってる、大悟は『それは人に向けていいものじゃない』とか言ってた」

「……なにそれ?」

美波が『使えないわね』といった目で睨んでくる。酷い扱いだ。

「大方、二人は霧島翔子と姉上から逃げ回っているのじやろう。あやつらはああ見えて異性には滅法弱いからの」

秀吉が腕を組んでうんうんと頷いている。

むう。なんで逃げ回る必要があるんだ。相手が霧島さんや木下さんだったら、逃げ回るどころか追い回すのが普通の男の反応なのに。雄二と大悟のくせに贅沢な!

「そうすると、坂本と岡崎は連絡を取るのが難しいわね」

「…………いや、これはチャンスだ」

「え？ どういうこと？」

「雄二と大悟を引つ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちよつと二人とも協力してくれるかな？」

「それは構わぬが…………二人の居場所はわかっておるのか？」

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃないから」

「なにか考えがあるみたいね」

「まあね」

ニヤリと笑って、僕は二人を連れて教室を後にした。

――

「やあ雄二、大悟。奇遇だね」

部屋の物陰で大きな身体を小さくしている雄二と大悟に話しかける。

「…………お前は一度奇遇という単語を国語辞典で調べてこい」

「それと、どういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせするのか教えてくれ」

そう。雄二の言う通り、ここは体育館にある女子更衣室。二人のことだから素直に女子禁制の男子トイレや更衣室に行くとは思えない。むしろ裏をかいて男子禁制の場所に逃げてると思つたけど……まさかここまで簡単に見つかるとは。

まあ、あの霧島さんと木下さんなら女子禁制の場所にも容赦なく突入しそうな気がするけどね。

「やだな。ただの偶然だよ」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケがないだろう」

「そうだ。お前はもつとちゃんとした嘘のつきかたというのをだな」

ガチャツ

突然音を立てて扉が開かれると、その向こうには体操着姿の女子生徒の姿があった。

「えーつと……アンタ達、Fクラスの問題児トリオ？　ここ、女子更衣室なんだだけ？」

「やあ、確か小山優香さんだったね。奇遇じゃないか」

「Cクラス代表か。奇遇だな」

「ああ、小山か。奇遇じゃねえか」

「あ、うん。そうね」

あつはつは、と爽やかに笑ってみせる。うんうん、これは偶然だなあ。

「先生！ 覗きです！ 変態と変態とキモオタです！」

「逃げるぞ明久！ 大悟！」

「御意っ！」

「了解っ！」

更衣室の小さな窓から表に飛び出す。やっぱり誤魔化すのは無理だったか！

『吉井と坂本に岡崎だど!? またアイツらかつ!』

「マズい！ 鉄人の声だ！」

「んだど!? やべえな、捕まれば夜までワンツーマン補習コースまっしぐらだぞ！」

「とにかく走れ！」

大悟の言う通り、捕まったら最後だ。上靴なのを気にせずに僕らは外を突っ走る。

「見つけたぞ！ 三人とも逃がすか！」

後方から野太い声が聞こえてくる。くそっ！ もう追いついてきたか！

「明久！ 大悟！」

隣を走る雄二の声。その視線は、前方の新校舎二階にある開け放たれた窓に向いていた。なるほど、あそこから逃げ込もうってワケか。

「オーケー！」

雄二からの合図を受け、走りながら上着を脱ぐ。そしてその間に雄二と大悟が僕より先行する。

「そつちは行き止まりだ！ 観念して指導を受けろ！」

どンドン近づいてくる鉄人の声、はつきりいつて怖い。この前大悟の家でやった○鬼のような感覚がする。

「よし、準備万端だ！」

「行け、明久！」

「あいよっ！」

雄二と大悟が手を組んで作った踏み台に両足を乗せ、その瞬間に二人が勢いよく腕をはねあげたので、僕はなんなく開いている二階の窓に飛び付くことが出来た。

校舎の中に入った僕は脱いでおいた制服を窓から垂らす。

「あらよっ！」

今度は雄二が壁を蹴って跳び、空中で僕の制服を掴んで、そのまま一本釣りの要領で持ち上げた。

「くっ！ このバカども！ こういう時だけ無駄に運動神経を發揮するとは！」

舌打ちでもしそうな鉄人の雰囲気によそに、僕と雄二は窓から身体を出して手を伸ばす。

「どりゃあつー！」

最後に大悟が思い切り壁を蹴って飛び上がり、そのまま僕と雄二の手を掴んで引き上げた。制服は少し破けたけど、僕らは無事に校舎内に侵入することができた。

『吉井！ 坂本！ 岡崎！ 明日は逃がさんぞ！』

「はっ、流石の鉄人も二階までは来れなかつたか。助かつたぜ」

「はあ……。また要らない悪評が増えていく……」

脱いだ制服を着直しながら、思わず溜め息が出てくる。やれやれだよ。

「それはこつちの台詞だ。いらねえ手間かけさせやがつて」

「大悟の言う通りだ。お前が来なければこんなことにはならなかつたのに」

二人とも、自分に非はないとでも言わんばかりの態度だ。

「なんだよ。そもそも雄二と大悟が女子更衣室なんか隠れていたのが悪いんじゃないか」

「し、仕方ないだろ！ 相手はあの翔子だぞ！ 普通の場所なんかで逃げ切れるか！」

「そうだ！ 明久は他人事だからそんなことが言えんだよ！」

そう言う二人。雄二はともかく、大悟がここまで動揺するのは珍しいな。

「ところで、どうしてそんなに霧島さんと木下さんから逃げてるの？」

「……ちよつと、家に呼ばれていな」

「…………俺もだ」

雄二が苦々しい表情を浮かべる。そのどこが嫌なんだろう？

「僕から見れば両方羨ましいけど？　霧島さんと木下さんの部屋でしょ？　入ってみた
いけどな」

「…………明久。お前はそれを本気で言ってるのか？」

「え？　どうして？」

だつてあの霧島さんと木下さんの部屋だよ？　ああ見えて、実は可愛いものが大好き
でぬいぐるみでいっぱいだとか？

「……………家族に紹介したいそうだ」

「……………タキシードの採寸をしたいと言われた。断ったら『浮気？』ってエス○リボ
ルグを突き立てられた」

「……………まだ付き合ってるわけじゃないんだよね？」

彼女達は若干思いが強すぎるのかもしれない。特に木下さんはそんな物騒なもの
を持つてきてるあたり、相当なものなんだろう。

でも木下さんはどうやってエスカ○ボルグなんて手に入れたんだろうか？

「それにな…………明久。お前はあの後俺達に何があつたと思う？」

「あの後？」

大悟の言葉に僕は首を傾げる。

あの後って言うとは……：Aクラス戦の時かな？ 確かあの時は霧島さんと木下さんが雄二達を無理矢理どこかに連れ去ったんだっけ。そういえばどこに行っただろう？

「あの後、俺と大悟は映画館に連れてかれたんだ」

「映画館？ なんだ、普通にデートじゃないか、そのどこがー」

「いや、俺達は逃げ出そうとしたんだ。そしたら電気ショックを喰らってな。目が覚めたら……繋かれた牛が殺されるシーンだった」

「……は？」

なにその映画。違う意味で怖いんだけど。

「隙を見て逃げ出そうとしたら、また電気ショックを喰らって二人とも仲良く気を失い……目が覚めたらまた牛が」

しかも二回見たんだ。

「また逃げようとしたらまた気を失って……永遠に牛を殺すシーンで目覚め続けるんじゃないかと脅迫観念に襲われて……逃げられなくなった……！」

「なるほど……じゃあ、永遠に映画の最初は観れないんだね……」

何だろう。雄二達にちよつとだけ同情心が湧いてきた。でも、残念ながらこつちの用

件にそんな事情は関係ない！

「さて雄二、大悟。そんなキミ達に朗報ですっ」

「そうか。嫌な報せだったら殺すぞ」

「恋のマジカル☆ボコ殴りも合わせるからな」

「……………」

本気っぽい雄二と大悟の台詞に一瞬言葉を失う。

けどとりあえず、僕は携帯電話を取り出し、美波の番号を呼び出して雄二に渡す。

「ここ、こちらの携帯電話をどうぞ」

「まったく、何の真似だ？」

雄二は訝しみながらも携帯電話を受け取り、耳に当てた。

『もしもし？ 坂本？』

「島田か。一体何の真似だ？」

『ちよつと待って。今替わるから』

「替わる？ 誰とーおい。もしもし？」

『…………雄二。今どこ』

「人違いです」

プツッ。

「クロス」

凄い判断力だ。咄嗟に『人違いです』なんて切り返せる人間はそうはいない。そして片言の日本語が異様に怖い。

「まあまあ。じゃあ次は大悟ね」

僕は雄二から携帯電話を受け取り、再び美波の番号にかけた。

「はい、大悟」

「……何だつてんだよ」

大悟も同じように怪しい視線を向けながらも受け取り、耳に当てた。

『あ、もしもし、岡崎?』

「何だ島田。用があるなら早くしてくれ」

『待って。ある人が用事があるみたいなの。今替わるから』

「ある人? 誰だーもしもし?」

『大悟? どうして逃げ』

「間に合ってます」

プツッ

「……恋の」

マズい! このままじゃ僕はボコボコに殴られる!

「ちよつと落ち着いてよ。お願いを聞いてくれたら悪いようにはしないからさ」

「お願いだと？ よし、撃つて燃やして裂いて壊して絞めて縛つて吊るした後でゆつくりと聞いてやろう」

「まで大悟。明久、どうせ学園祭の喫茶店の事なんだろう？」

「こういう時、雄二が本当に神童だったと認識させられる。頭の回転がとても速いから。」

「やれやれ。こんな回りくどいことをしなくても、お前が『大好きな姫路さんの為に頑張りたいんだ！ 協力してください！』とでも言えば、面倒だが引き受けてやるというのに」

「ああ、そういうことか。まあた姫路絡みか。ホントお前は姫路のこと好きだよな」

「なっ!? 何を言ってるのさ二人とも！ べ、別に、そんなことは一言も……!」

「あー、はいはい。話は分かった。仕方ないから協力してやるよ」

「つたく。しゃあねえな。不本意だが、ダチの頼みってんならこつちも引き受けざるを得ねえな」

一瞬にして二人の表情が楽しげなものになる。どうしてコイツはいつもいつも

……!

「まあとにかく、引き受けてくれてありがとう」

「気にするな。それより、島田と翔子は親しかったのか？」

「そういや、島田と優子に付き合いがあるなんて聞いたこともねえしな」

と、探るような雄二と大悟の目つき。Aクラスの霧島さんと木下さんがFクラスの美波と一緒にいたことが気になるらしい。

「うーん。聞いても怒らない？」

「バーカ。どうせ引き受けたんだ。今更怒ってどうすんだ」

「そうだけ。それにそんな程度でいちいち腹立てるほど俺達は小せえヤツじゃねえよ。」

それもそうか。確かに引き受けてくれたことだし、もうネタをバラしてもいいか。

「それじゃ、教えてあげよう。実は電話の向こうにいたのは、霧島さんと木下さんの声真似をした秀吉で」

「明久、言い残すことはあるか？」

「目を瞑って歯を食い縛れ」

嘘つき。

第十九問 三次元なんて嫌だ

——大悟視点——

「そうか。姫路の転校か……」

「そりやあまた、難題だな」

俺と雄二は、何とか鉄人とヤンデレシスターズの追撃を振り切り、Fクラスへと戻ってきた。そして島田から詳しい事情を訊いて言葉を漏らす。

「そうなるよ、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？ どうして？」

明久がそう尋ねると、雄二は姫路の父親が転校をさせようとしている要因は三つあると告げた。

それが以下の三つだ。

- ・ござとミカン箱という快適な学習環境とはほど遠い設備
- ・老朽化した教室での健康被害の恐れ
- ・レベルの低いクラスメートによって姫路の成長が望めない

「まあ、たかだが学園祭の売り上げなんざたかがしれてる。ござとミカン箱なら何とかなるかもしれないが、学校の設備の改修となると相当難しいな」

「ああ。それに学力つてのは同級生との切磋琢磨によって向上するといっても過言じゃない。能力を伸ばす為には姫路と同等の成績を持つヤツが必要なんだが……このクラスじゃあ無理だ」

「社会科目や保健体育だけなら俺やムツツリーニがいるが……流石にそれだけじゃ不十分だしな。」

「参ったね。随分と問題だらけだ」

「そうじゃな。一つ目だけならともかく、二つ目と三つ目は厳しいのう」

もういつそのこと姫路の父親に『姫路さんの転校を考え直して下さい』って頼み込むのもアリだな。そうなったらこの俺の自慢の伝統的懇願方法『DO☆GE☆ZA』をお目にかけてよう。

まあ、それで小学生に通報されたんだけどな。

「いや、そうでもないさ。三つ目の方は既に姫路と島田で対策を練っているんだろう?」
「? そうなのか?」

聞くと、どうやら姫路と島田で組んで召喚大会での優勝を狙うつもりらしい。確かにそれが出来れば姫路の父親に『Fクラスでもここまでの成績を残せる』という結果を突

きつけることが出来る。それなら競争相手の件は無事解決というワケだな。

「ああ、だからさつき『お父さんの鼻をあかしたい』とか言つてたのか」

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。『どうしても転校したくないから協力して下さい』って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

成る程な。それなら断れないのも無理は無い。

「翔子や木下姉が参加するようだと優勝は厳しいが、アイツはこういった行事には無関心だしな。そうだろ、大悟？」

「まあ、そうだな。優勝賞品でもありやあ別だが……優子はちよつとやそつとのモンじゃ動かされねえと思うし、姫路と島田でも十分優勝を狙えるぜ」

「そうだね。二人ならきつとなんとかなるよ」

「本当なら姫路抜きで優勝するのが好ましいけどな」

「それは言いっこなしだよ」

他の連中なら速攻負けるな。なにせ馬鹿の集まりだから。

それに姫路達が優勝すれば喫茶店の宣伝効果にも繋がるし、一石二鳥だな。

「で、坂本。それはそうと、二つ目の問題は どうするの？」

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだけだろ？」

「おいおい雄二。学園長つてあの婆さんだろ？ アレが素直に受け入れてくれると思つてんのかよ？」

あの婆さんの事だ。例え雄二や明久が頼んでも『ガタガタ抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども』とか言われて終いだらう。

この学校の方針は、学力が全て、その一つのみだからな。教室の設備を良くしたいんだつたら勉強して力をつけ、戦争に勝つのみしか方法は無い。いくら成績優秀な姫路の為とは言つても、よし、それなら分かった、と二つ返事で了承するほど、あの婆さんは甘くない。

「あのな。ここは曲なりにも教育機関だぞ？ いくら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼす状態であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。大悟も来るか？」

「あー……いや、やめとくわ。大人数で行つたつてしょうがねえ」

それに、あの婆さん苦手なんだよな。妙な威圧感があるつつうかよ……伊達にこの文月のトップはやってねえつて感じなんだよな。

「じゃあ、三人は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」

「分かった。鉄人には見つかなよ。それと、もし途中で優子を見つけたら俺は先に

帰ったと言っておいてくれ」

「分かった。伝えておこう」

「アキ、坂本。しつかりやってきなさいよ」

「オツケー。任せといてよ」

そして、明久と雄二は立ち上がり、教室を出ていった。

はてさて、あの婆さんをどう言いくるめるか、雄二の交渉術がどこまで通用するかね。

――

放課後。すっかり人のいなくなったFクラス教室で、俺、秀吉、島田、ムッツリーニの四人は学園祭の出し物である中華喫茶店についての準備計画についての会議を行っていた。

どうやら既に役割と人選は決まっているらしく、客の接待をするホール班と料理をする厨房班の二つがあるとのこと。

そして、姫路と島田、秀吉の三人がホール班で、須川とムッツリーニが厨房を担当す

るらしい。取り敢えず言えることは姫路をホール班にしたヤツ、よくやった！

だが、発案者の須川はともかく、同志ムツツリーニが料理が出来るとは思わなかった。訊くところによると『紳士の嗜み』らしい。まあ同志のことだ。チャイナドレス見たさに中華料理店に通っているうちに見よう見真似で覚えたんだらうな。流石同志だ！

「で、俺は何をしたらしいんだ？」

「それなんだけど、岡崎には喫茶店の料理長をやってほしいの」

「料理長？」

島田の言葉に俺は思わず聞き返してしまった。

「何故俺が料理長なんかを？」

「木下から訊いたの。なんでも岡崎って料理も出来るらしいじゃない。しかも実家が中華料理屋さんなんでしょ？」

「どうやら秀吉が俺のことを結構喋ってしまったようだ。ヤツの方を見ると『済まぬ』といった表情をしていた。」

島田の言う通り、俺の家は中華料理店を経営している。でもそれは代々続いてきたとかそういう訳じゃなく、俺の母さんが最初に店を開いたのが始まりだ。小さい店だが味は評判が高く、しかも母さんが一人で切り盛りしているということもあり、結構な人気店として地元でも有名らしい。

そんな俺も小さい頃から店に出て厨房での手伝いをしていた為、自然と料理の腕が上達していったのだ。だから何度かは秀吉や優子、明久達にも手料理を振る舞ったこともあり、その時は全員が口を揃えて旨い、と言っていた。

「勝手に喋ってしまったことは謝る。じゃが大悟の腕はかなりのものじゃ。儂が保証しよう」

「……………流石同志（コクリ）」

「ホント凄いわよね。その見た目で絵も上手いし料理上手っていうんだから驚きだわ」

三人が俺を称賛する。全く、コイツらは何を言っているんだか。

「チツチツチツ。お前らは何も分かっているかい。いいか？ 料理上手はハーレム系主人公にとっての基本スキルだぞ？ 幼なじみの同級生やツンデレの先輩、ちよつと小生意気な後輩にヤンデレの妹…………その対象は様々であり、その全てを満足させるレベルの腕前を持っていることは当然と言えよう。そして『お、美味しい…………』って照れながら彼女達は言うわけですよ！ そんなん見たらもう辛抱たまりませんわ！ そしてその後は念願のお楽しみタイムに突入するワケだ！ 場所は浴室か自分の部屋のベッドの上だ！」

「……………成る程（ダラー）」

「そ、そうなのね。よく分からないけど…………あと土屋、鼻血出てるわよ？」

それに、いつ俺の所に妹属性を持つ女の子が現れて『大悟お兄ちゃん、お腹空いた!』と言われるかも分らないからな。準備に越した事は無いだろう。早くそんな子が来てくれることを心から願います。

「じゃあ、引き受けてくれるってことでいいかしら、岡崎?」

「良いだろう。この俺に任せておけ。やるぞ、同志」

「……………(コクリ)」

そんな感じで、俺が厨房班のリーダー兼料理長へと任命された。となると、まずはメニューを決めないといけないな。後で須川も呼んで三人でじっくり話し合うとするか。

「そーいや、明久達はまだ帰ってこないのか?」

「そーいえば、行ってからだいぶ経つわね。もうすぐ戻ってくるんじゃないかしら?」

姫路の転校を何とか食い止めるため、教室の設備の改修を頼みに学園長室へと向かった二人。もうあれから結構な時間が過ぎていくにも関わらず、まだ帰ってきていない。交渉が難航しているのだろうか?

「ま、目的が教室の修繕だからな。あの婆さんもそう簡単に首を縦には振らねえんだろ
うよ」

ここの学園長はそういった規則に対しては人一倍厳しい人間だ。しかもわざわざ学力最底辺のFクラスの生徒一人の為に教室の設備を良くしようなんてことは、あの婆さ

んに限っては望みは薄いと言っても良いだろう。

「そこは雄二の交渉術に任せるしかないじやろう。あやつはそういったことに関しては頭一つ抜き出てるからの」

「そうね……」

そう言っていると、廊下からこちらへと向かってくる足音が聞こえ、教室の扉が開かれた。入ってきたのは明久達だった。

「皆、今戻ったぞ」

「おう、二人ともお疲れさん」

「それで、話はどう纏まったのじゃ？」

「うん、それなんだけどねー」

——

「——ってことなんだよ」

明久は学園長との交渉結果を俺達に話した。その内容というのがまあ特殊で、学園祭で執り行われるイベント『試験召喚大会』にて、学園長が知らない間に優勝者には賞品が与えられるらしかった。そしてそのうちの一つ『如月ハイランドパークオープンチケット』を明久達で回収してくれば、設備の件をなんとかするといったものだった。

それも優勝者から奪ったり譲ってもらうのでは無く、自分達の力で優勝して勝ち取らなくてはならないと。

「成る程な。話は大体分かった。それで……なんで雄二はさつきから教室の隅っこでブツブツ独り言呟いてんだ？」

「それが雄二のヤツ、霧島さんと約束してたみたいなんだ。もし如月ハイランドパークのチケットが手に入ったら一緒にやってやるってさ」

「……もし破ったら？」

「霧島さんと結婚だつてさ」

どうやら明久曰く、この如月ハイランドパークのチケットには、来場してきたカップルを半ば強引に結婚までプロデュースするという企業の力が働いているらしい。如月ハイランドパークに来たカップルには必ず幸せな未来が訪れるというリンクスを作れば集客効果にもなるし、試験召喚システムという話題性たつぷりの文月からカップルが出来れば文月にとつても如月グループにとつても利益には申し分ないということか。

「……おい、それって優勝したら結婚。でも約束破ったら罰として結婚。優勝出来なかったら設備の改修は白紙だろ？ もう雄二に逃げ道ねえじゃねえか」

「そうなんだよね。全く……雄二はすぐに安請け合いするからこんなことになるんだよ」

「………自業自得」

残念ながら今回に関しては完全に雄二自身が招いた種だ。俺達がどうするべきことではない。

「ま、雄二には諦めて結婚してもらおうか。そうだ、どうせなら友人代表のスピーチを俺が考えてやってもー」

ピピピッピピピッ

と、突然に俺の携帯からメールの着信音が鳴った。

誰だ？ また迷惑メールかな？ と思い俺は携帯電話を取り出してメールを開く。

【Message From 木下優子】

来週の日曜日、空けておいてね？ 今日逃げた罰も兼ねて一緒に如月ハイランドパークにデートに行つて貰うから♪

なんでもそこに来たカップルは幸せになれるらしいの。私達にピッタリじゃない？

それに、チケツトなら当てがあるから心配しなくていいわ。というわけだから、よろしくね、ダーリン♪

P. S もし約束を破つたら……どうなるか分かつてるわね？

ーーーええ？

「そういえば、そのチケツトつて二組分あるらしいんだ。良かったね大悟。もし雄二と同じような真似してたら木下さんに連れていかれる所だったもんね」

「そうじゃのう。姉上はおそらく大悟を縛り付けてでも連れていくと思うしのう」

「………危機一髪」

ーーーええ？

あはは、おかしいなあ。俺はどうやら疲れが溜まっているようだ。だってメールの送信元の名前が俺の親友の姉と同じ名前をしているように見えるんだからな。全く、最近俺も睡眠時間が減っているもんな。まさか迷惑メールの送信元の名前が優子と瓜二つに見えちゃうんだもんなあ。

でも、ちゃんと深呼吸をしてみよう。そうすれば大丈夫に決まってー

【Message From 木下優子】

「ウエエイトオオオー!!」

俺は変な声を上げながら口からなんか出した。

「うわっ! ビックリした!」

「なんじゃ大悟、いきなり大声を出しおって?」

落ち着け。落ち着くんだ岡崎大悟! 冷静に考えろ。よくみればごくごく普通の内容だろう? それに優子がそんな危険な匂いのするメールを打つわけが無いじゃないか。ほら、よく目を凝らせばわざわざそこまで取り乱す程でもー

【もし約束を破ったら……どうなるか分かってるわね?】

ご覧ください! なんて可愛らしい脅迫文でしょう!

「三次元なんて嫌だああああああああ!!」

「えっ!? 何!? 大悟が急に叫びながら壁に頭を打ち付け始めたんだけど!」

「よく分からないけど、早く岡崎を止めるのよ!」

そして、発狂しながら壁にガンガン頭を叩きつける俺を明久達が止めようとする。

「大悟落ち着くのじゃ! そんな早まった真似をするでない!」

「そうだよ! 一体君に何があつたっていうんだ!」

「離してくれお前ら! 三次元に人生を狂わされるぐらいなら、今ここで俺は命を絶つ

「やる！」

そして俺は死後の世界で可愛い女神様に会って異世界に飛ばされてその世界の女の子達といちやラブしながら魔王討伐の旅に出るんだああああ!!

俺はそう自分に言い聞かせながら、ひたすら壁に向かって頭を打ち付け続けた。

――

「……成る程のう。大悟はこれを見てあんな真似をしおったのか。しかし、姉上の執着っぷりも筋金入りじゃのう……」

「なんていうか……良かったね。木下さんに好かれてるみたいで」

「……………恋は盲目」

秀吉達が俺に送られてきた携帯のメールを見て納得したような表情になる。俺はというと、暴走を止めるために明久とムツツリーニが取り出したスタンガンを数回くらったことよってどうにか落ち着きを取り戻していた。痺れで体動かねえけど。ちなみに島田は夕飯の支度があると先に戻った。

「ちつとも良くねえ！ ヤンデレなんて二次元の中だけで十分間に合ってたんだよお

……」

さて、こうなつてはもう他人事では無くなつた。優子のメールにあるアテというのは恐らく試験召喚大会の優勝賞品のチケットのことだろう。しかもご丁寧にカップル二組分あるということは、同じ目的を持つ霧島と組んで出場するのは間違いない。

「絶対にアイツは参加してなにがなんでも優勝を狙つてくるに違えねえ……そんな最強コンビに勝てる奴らなんぞそうそういねえ……。行けば間違いなく人生の墓場まつしぐら、行かなかつたら罰として……。結婚？ 軟禁？ それとも心中？ どう転んでも俺の人生はバッドエンドしかねえ……」

いや、もうこれバッドエンドつてよりデッドエンドに近いかもしれない。身体的にも、社会的にも。

「もうさ、大悟も雄二も諦めて結婚を受け入れたらどう？ 二人ともいいお嫁さんになつてくれると思うけど」

「恐ろしいことを言うな！」

明久の言葉に思わず雄二とハモってしまった。

「結婚なんぞ冗談じゃねえ！ 俺は二次元を愛する男だ！ 三次元なんぞに人生メチャクチャにされてたまるか！ 俺の親友が義理の弟になるとか耐えられねえ！」

「そうだ！ 俺だつてまだもつと自由に生きたいんだ！ 翔子と結婚なんぞやつてられ

ねえ！」

「雄二！ 今ならお前の気持ち分かるぜ！ 今まで済まなかった！」

「分かってくれるんだな、大悟！」

「雄二！」

「大悟！」

「うおおおおおおっ!!」

俺と雄二は互いに抱き合い、感極まって涙を流した。やっぱり持つべきものはダチなんだな！

「なんとというか、二人とも色々と難儀じゃのう……」

「……………でも、学園長にとつては悪い話じゃない」

「うむ。しかし、何故学園長はわざわざ明久達にチケットを回収させようとするのじゃろうな？」

「うーん…………、それは分からないなあ」

どうやら学園長は、チケットの回収自体が目的では無いようだ。だが秀吉の言う通り、何故わざわざ明久達にそんな任務を課したのだろうか？ 確実に目的を果たしたいならFクラスの二人じゃなく、Aクラスにでも頼みそうなものだが。それに聞いたところ、どうやら譲歩として対戦科目の決定権は明久達が持っているらしい。普通ならそん

なことをあの婆さんが呑むとは考えにくい。

つまりどうしても学園長は明久達に優勝して欲しいのと、この条件の達成には頭の良
い悪いは関係なく『明久と雄二』じやなきやいけない理由があるのだろう。

「だが、こうなつちまったら仕方ねえ！ 俺と雄二の貞操と明日への自由を守るため、喜
んで協力してやる！」

「本当か!? 助かるぜ大悟！」

「馬鹿野郎！ ダチが困ってんなら助けるのがダチつてもんだぜ！」

「流石大悟だね！ 兄貴と呼ぶに相応しいよ！」

「なら、儂も手伝わせて貰うぞい。霧島はともかく、姉上のことは儂にも責任があるから
の」

「……………(グツ)」

「秀吉にムツツリーニまで……………友情って素晴らしいね！」

そして、俺達五人は肩を組み合う。

「いいか野郎共、こうなつたら俺達が目指すのはただ一つ、大会での優勝だ！ その為には
どんな手を使つても勝ちにいくぞ！ 最悪相手をボコしてでも、絶対に俺達は優勝
を掴み取る！ いくぞ野郎共！ 姫路の転校阻止、そして俺と大悟の未来の為にだ！」

「「「おおっ!!」」」

雄二の宣言に全員が大きな返事をする。ヤツの目はマジだった。言葉通りどんな卑怯で汚い手を使ってでもやる気だろう。だが今回だけは俺もそのつもりだ。綺麗事？ 正々堂々？ それがどうした？ 最終的に――勝てばよからうなのだあああああ！！

「…………まあ、雄二も大悟も、そのうち霧島さんや木下さんと一緒になる気がするけどね」

「確かに、お主らは女子にはとことん弱いからのう…………」

「……………同意（コクリ）」

「『どういう意味だオイ!』」

解せない。その幻想をぶち殺す！

第二十問 必殺料理人姫路瑞希

——明久視点——

「兄貴！ このテーブルの場所はここでもよろしいでしょうか!？」

「待て！ そこは窓から日光が当たって客の目が眩しくなっちゃう！ もう少し右にずらすんだ!」

「了解!」

「兄貴！ 教室内の飾り付けも完了しました！ チェックをお願いします!」

「おい！ 壁の装飾の位置が左右非対称になってんぞ！ これじゃあ見映えが悪くなっちゃうだろうが！ やり直せ!」

「すいません！ すぐやり直しますつ!」

清涼祭初日の朝、クラスメートの皆は大悟の指示のもと、あわただしく教室の内装準備に取り掛かっていた。

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力と岡崎の指導力って凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

隣で美波が感心したようにそう言う。それに僕もうんうん、と頷いた。

僕らの教室はいつもの小汚ない様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた。

「それに、テーブルだつてちゃんとした物が用意出来たしね」

そう、教室内のいたるところに設置されているテーブル。その上に秀吉が演劇部から借りてきた綺麗なクロスをかけるとたちまち立派なテーブルに大変身。

更に周りには龍の置物や掛け軸、観葉植物や提灯などの装飾が施され、どこからどうみても立派な中華風の内装になった。

「ありがたいね、岡崎。こんないい設備まで用意して貰っちゃつて」

美波がそう言う。

この立派なテーブルを全て用意したのは、我らがFクラスの兄貴こと、岡崎大悟だった。

「気にするな。どうせ総取っ替えする時に邪魔になるし、母さんも自由に使ってくれて構わねえよつて言ってくれたしな」

「でも助かったよ。もうこれが僕達のクラスだとは思えないぐらい豪華な店内になったじゃないか！」

大悟はそう言うけど、本当に凄いと僕は思っている。

最初はテーブルを用意するだけの予算が無いので、教室のミカン箱を積み上げてその上からクロスを掛けて誤魔化そうとしたのだが、「待て。いくら学園祭とはいえ食品を扱うんだぞ？ そんな不衛生な真似は許さねえ。やるんなら……徹底的にだ！ それこそが、プロフェッショナルの心意気！」と言った大悟がわざわざ実家の中華料理店から使わなくなったテーブルやインテリアを持ってきてくれたのだ。なんでも店内の内装を一新するらしく、その為に古くなったテーブルを棄てなくてはならないが、それにも金がかかるのでタダで譲ってくれたとのこと。けれど、それらをトラックに積んで持ってきてくれたあの顔の厳ついオジサン達は誰だったんだろうか？ やけに大悟や秀吉と親しげだったけど……。

「ああ、あれはうちの店の常連のおっちゃん達だよ。近くに運送会社やら土建会社があつてその社長だかをやっててな。今回学園祭をやるんだって話したら協力してくれるっていうから持ってきて貰ったんだよ」

「あの人らは見た目は厳ついが中身は気の良いお父さんって感じじやからな。儂も親しくさせて貰つてるのじゃ」

「でも、本当に綺麗ね……もうここがFクラスって言われても信じられないわ」

美波が内装を見渡してそう言葉を漏らす。テーブルは若干使い古されたような感じはするものの、まだ全然使えるほど綺麗に磨かれていて、提灯の灯りや昇り龍が描かれ

ている掛け軸が更に中華といった雰囲気演出しており、最早喫茶店というよりも高級料理店に近いかもしれない。

「流石過ぎる作りじゃの。これなら評判に関しては問題はないじやろうな」

「そうね。どうせ棄てるものだったんだし、本物の中華料理店のものを使っていますって宣伝すれば、十分過ぎる集客効果になるわね」

確かに、これなら中華喫茶店のイメージアップは間違いなさだ。ホント、大悟と大悟のお母さんには感謝してもしきれないなあ。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ」

いきなり後ろから響くムツツリーニの声。いつもながら存在感を消すのが巧いなあ。そう思っていると、

「……………味見用」

そう言って差し出してきたのは、木のお盆。その上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わあ……………美味しそう……………」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では、遠慮なく頂こうかの」

姫路さん、美波、秀吉の三人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです!」

「本当! 表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし!」

「甘すぎないところも良いのう」

と、大絶賛。やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、三人とも。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

姫路さんと美波の目がトロンと垂れる。トリップ状態だ。そんなに美味しいんだろ
うか?

「………材料とレシピは全部同志が用意してくれた」

「えっ!? このレシピ岡崎が考えたの!」

「す、凄いです。専門店に負けないくらいに美味しさなのに……」

「あやつは料理も相当の腕前じゃからのう、母親譲りというか、流石は中華料理店の息子
だけあるわい」

三人がムツツリー二の言葉に驚く様子を見せる。大悟が料理が上手いのは僕も実際

にヤツの手料理を食べたから知っている。それにあそこの店は、材料も本場の中国などから取り寄せてるものもあると聞いたから、本格的な味わいなのは確実だろう。

「ま、最初は店のレシピをそのまんま使おうとも思ってたんだがな。けど人様の考えたモンよりも自分で一から考えた方が売り切った時の達成感が違えと思つてな。苦労したぜ、その為に今季アニメを全部録画に頼ったんだならな……」

「へえ。じゃあ僕も貰おうかな」

「……………(コクコク)」

ムツツリーニが残りの二つを僕に差し出す。その内の一つをつまんで一口だけ頬張つてみた。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘過ぎず辛すぎる味わいがとつてもーんゴパっ」

僕の口からあり得ない音が出た。

「さて、俺も最後の味見チエツクといこうか……。ほうほう。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘過ぎず辛すぎる味わいがとつてもーんゴパっ」

隣では、大悟が僕と同じように胡麻団子を一口食べ、口からあり得ない音を出していた。

そして目に映るのは僕の十六年間の人生の軌跡。ああ、あの頃は良かったなあ

……つて、これ走馬灯じゃないか！

「あ、それはさつき姫路が作ったものじゃないか」

「……………!! (グイグイ)」

「ど、同志！ 止めるんだ！ そんな切羽詰まった顔で俺にそれを押し付けなくてくれ！ それは臨死体験の出来る一般人には耐性のない特殊な飲茶なんだ！」

ムツツリーニが大悟に胡麻団子の残りを押し付けている。大悟はそれを全力で拒否していた。

恐らく前回（ドーナツ&お弁当）のことがかなりトラウマになっているのだろう。

「うーっす。戻ってきたぞー。おお、豪勢な内装じゃないか」

と、そんなところに雄二が帰ってきた。

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

そして、何の躊躇いもなく僕の食べかけのバイオ兵器を口に運ぶ。

「……………たいした男じゃ」

「雄二。キミは今、最高に輝いてるよ」

「俺、お前と過ごした日々をぜってえ忘れねえからな」

「……………ズツ友」

「？ お前らが何を言っているのかわからんが……………。ふむふむ。表面はゴリゴリであ

りながら中はネバネバ。甘過ぎず、辛すぎる味わいがとってもーんゴパツ

あ、なんかデジャブ。

「あー、雄二。とつても美味しかったよね？」

床に倒れ伏した雄二にそう投げかける。

まさか姫路さんがいる前で酷い言葉なんて言わないと思うけど……。

「ふっ。何の問題も無い」

床に突っ伏したまま、雄二が返事をしてきた。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

「ゆ、雄二！ その川はダメだ！ 渡ったら戻れなくなっちゃうー！」

それはきつと三途の川だ。まさかあの一口で致命傷だったなんて。

「え？ あれ？ 坂本君はどうかしたんですか？」

「あ、ホントだ。坂本、大丈夫？」

まともな方の胡麻団子を食べてトリップ状態になっていた二人がようやくこつちの様子に気がつく。見られていなくて良かった。

これはもしかすると、失敗していない方の大悟が考えたレシピの胡麻団子は僕の予想以上にイケているのかもしれない。売り上げへの期待大だ。

「大丈夫だよ、ちよつと足が攣っただけみたいだから。おーい、ゆーじー、おしろー」

「そうだな。全く、ちゃんと常日頃から鍛えていないからそうなるんだ。はっはっは」
とりあえず、おどけた口調で雄二を起こす仕草を試してみる。ただし、手は必死に心臓マッサージをしながら。大悟はこつそりとAEDのセッティングを始めようとしていた。こうなると生死は五分五分だ……!」

「六万だど? バカを言え。普通渡し賃は六文と相場が決まってーはっはっは!」

よしっ、蘇生成功。これで、人知れず尊い命がまた一つ救われたのです。

「雄二、足が攣ったんだよね?」

「足が攣った? バカを言うな! あれは明らかにあの団子のー」

「……もう一つ食わせるぞ」

「足が攣ったんだ。最近運動不足だからな」

雄二が頭の良い奴で本当に良かった。

(……明久、いつかキサマを殺す)

(……上等だ。殺られる前に殺ってやる)

笑顔を貼り付けて小声のやり取り。こんな僕らは仲良し二人組。

「ふーん。坂本ってよく足が攣るのね?」

あ、美波がまた怪しんでいる。ここは上手くフオローしておかないと。

「ほら、雄二って余計な脂肪がついていないでしょう? 大悟みたいにゴリゴリに筋肉

がついている訳でもないからそういう身体って、筋が攣りやすいんだよ。美波も胸がよく攣るからわかるとぐべあっ！」

グーで殴られた。

「……俺が手を下すまでもなかったな」

そんな僕に、雄二が哀れみの視線を送ってくる。なんだか最近こんなのばかりだ……。

「……おい、姫路」

「は、はいっ」

「何勝手に厨房に入ってたんだ？」

そう言つて姫路さんに詰め寄る大悟。その表情が朗らかなのが怖かった。

「俺ア言つた筈だぜ？ 姫路は可愛いさがウリだからそれを最大限活かせるホールだけで頑張ってくれてよ？ そして調理場は料理長の俺が許可しねえ限り調理班以外のヤツラは入るなつてな？」

「あ、あの……そ、それは……」

「まさか……聞いてなかったワケじゃあるめえな？」

大悟の威圧的な言葉に、姫路さんは気まずそうに視線を逸らしながら冷や汗をかいていた。

「……………うう。ごめんなさい、岡崎君……………」

「ちよ、ちよつと岡崎。あんまり瑞希を責めないであげて。この子だって悪気は無いんだから……………」

見かねた美波がそう姫路さんをフォローする。

「別に怒つっちゃあいねえよ。材料はたんまり用意してつから少しくらいなんてことはない。けど、一度交わした約束を破ったってことは、それに対しての『落とし前』を付けないとちやあな、姫路?」

「は、はい……………」

「ま、別に暴力とか無茶ぶりとかはさせねえから。というワケでちよつと姫路、こつち来てくれ」

大悟は姫路さんを連れて教室の隅へと移動し、何かひそひそ話を始めた。一体何を話しているんだろうか?

「……………夏のこの日に……………エルちゃんのコスプ……………報酬は明……………」

「……………当ですかっ!? なら……………頑張りま……………」

何だろう。ちらちらと姫路さんが僕の方を見てくるけど?

「ところで、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

「ああ、ちよつと話し合いにな」

秀吉がそれとなく話題を逸らしてくれた。そして雄二にしては珍しく歯切れの悪い返事。

実は学園長室に行つて例の試験科目の指定をしてきたところだ。でも、フェアなことではないので正直には話せず、雄二が適当に誤魔化していた。

「それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ」

「……………お茶と飲茶も完璧」

「よし、少しの間、喫茶店は秀吉とムツツリーニと大悟に任せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな」

そう言つて秀吉とムツツリーニの肩を叩く雄二。

「あれ？ アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？ あ、うん。色々あつてね」

適当に言葉を濁す。学園長から『チケットの裏事情については誰にも話すな』と言われているので、下手なことは言えない。けど、どうして話しちやいけないんだろう？

「もしかして、商品が目的とか…………？」

美波の探るような視線が刺さる。

「うーん。一応そういうことになるかな」

詳しく言うとう商品と設備の交換が目的だけだね。

如月ハイランドパークのチケットは雄二と大悟に渡すとして、もう一つの賞品の白金の腕輪ってどんなものなんだろ？ 噂だと召喚獣を二体同時に喚び出せるタイプと、先生の代わりに立会人になれるタイプの腕輪があるらしいけどね。

「……………誰と行くつもり？」

「ほえ？」

美波の目がスツと細くなった。こ、これは……………攻撃色!?

「だ、誰と行くって言われても……………」

きつと美波が言っているのはペアチケットのことだろう。

困った。誰と行くも何も、学園長に渡すだけなんだけどな。でも、約束したからには正直には言えないし……………。

「明久は俺と行くつもりで、もうワンセットは大悟と木下姉に渡すつもりなんだ」

答えに詰まっていると、すかさず雄二のフォローが入った。すると向こうの方で大悟がビクツツとなっているのが見える。

それを聞いて目を丸くしている美波。ふふつ。驚くのも無理はない。

「え？ 岡崎は分かるけど、アキは坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの……？」

なぜなら、僕自身ですら驚きの新事実——ってバカあつ！ 誰が雄二と幸せになりに行くんだよ！ 誤解だ！

（明久、堪えるんだ。事情を知られたら、ババアに約束を反故にされるぞ）

雄二から小声のメッセージが届く。くっ！ これ以上ないくらい不本意だけど、これも姫路さんの為。雄二も我慢するみたいだし、ここは僕もグツと堪えて……

「俺は何度も断っているんだがな」

え？ 何？ 裏切り？

「アキ。アンタやっぱり、木下よりも坂本の方が……」

「ちよつと待って！ その『やっぱり』って言葉は凄く引つかかる！ それと秀吉！ 少しでも寂しそうな表情をしないでよ！」

マズい。このままだと同性愛の似合いそうな生徒ランキングがまた上がってしまう！

「ねえアキ？ アンタも一応男なんだから、できれば女の子に興味を持った方が……」

「それができれば明久だって苦労はしてないさ」

「雄二、もつともらしくそんなことを言わないで！ 全然フォローになってないから！」

コイツとはいつか決着をつけねばなるまい。

と思つてみると、話し合いが終わったのか、大悟と姫路さんが戻つてきた。

「大悟、姫路さん。何の話をしたの？」

「ん？ ああ、ちよつと姫路に頼み事をな。な、姫路？」

「はいっ！ 岡崎君には迷惑をかけてしまったので、頑張つて夏に本を売りたいと思ひますっ！」

夏に本を売る？ それが大悟の言う落とし前つてやつなの？ でもなんでそんなことわざわざ姫路さんに頼むんだらうか。

「つと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」

「うん、分かった。それと美波！ さっきのは誤解だからね！」

まるで小悪党の捨て台詞のように弁明し、僕と雄二は教室を後にした。

「……………げっ！ 嘘だろ……………!？」

「どうしたのじゃ？ 大悟？」

「……………何かあった？」

「……………やべえぞ。秀吉、ムツツリーニ。とんでもねえ事態が起こっちゃった……………」

「……………母さんが、来る……………!」

「!?!」

――

『おい、見ろよあの人。すっげえ美人じゃねえか？』

『多分ウチの生徒の姉かなんかかな？ にしても大人びてて綺麗だな……………』

『でも凄い目つきが鋭いね……………まるで岡崎君みたい』

「……ああ、クソが。頭痛え……流石に朝までは飲み過ぎたか……」
「んで、ここが文月学園か……噂には聞いてたがでけえ校舎だな。確か……アイツ
はFクラスって言ってたよな……さてと！」
「うちの『馬鹿息子』の頑張りを見に行くとすつか！」

第二十一問 食い物粗末にすんじやねえ!

——大悟視点——

「兄貴! 二番テーブルに肉まん和餡まん、それと胡麻団子が二つずつ注文入りました!」

「大悟よ! 四番テーブルにも胡麻団子を三つ追加で注文じゃぞい!」
「分かった! 同志! 蒸しの残り時間は!」

「……………あと三分四十二秒、胡麻団子の方は丁度揚がった」

「サンキュー! 須川! 烏龍茶の方はどうだ!」

「こつちも今淹れ終わった! 任せてくれ兄貴!」

厨房では次々と注文が舞い込み、俺、ムツツリーニ、須川が忙しく動いていた。

遂に清涼祭が始まり、明久達と姫路達が試験召喚大会に向かった後、俺達Fクラスの中華喫茶店は瞬く間に賑わいを見せていた。

『ねえねえ！　ここの胡麻団子めっちゃ美味しくない!』

『うん！　肉まんもスツゴくジューシーだし、餡まんも適度な甘さだし、まるで本場のお店みたい!』

『烏龍茶も本格的だし、内装も綺麗だしね。Fクラスの設備は酷いって聞いてたけど、そんなこと全然ないじゃん!』

『しかもあの接待してくれた娘、すっげえタイプだぜ!』

『けど、ここって中華喫茶だよな？　ヨーロピアンってなんだ?』

ホールから聞こえてくる客の声。どうやらお気に召してくれたようで良かった。

まだ大盛況というワケでは無いが、中華喫茶という物珍しさと腕によりをかけて用意した設備や飲茶と烏龍茶、オマケに秀吉という看板娘による接客が評判を呼んだのか、結構な数のテーブルを用意したにも関わらず、ほぼ満席状態だ。

ムツツリーニと須川は、流石発案者と立候補者ってだけあって腕前は申し分ない。決して俺の邪魔をしないようにしながらも、的確なサポートをしてくれている。おかげで仕事もスピーディーだ。

「よし！　出だしは順調だ！　どんどん作って運べよ!」

「うむ。これなら口コミで集客もバッチリじゃの」

「ま、ホントなら姫路達にも手伝って貰いたかったがな。けど、秀吉というFクラスのアイドルこと秀吉がいりやあどうってこたあねえさ! ガツハツハ!」

ま、ホントなら秀吉にチャイナ服でも着て貰いたいところなんだがな。

「……大悟よ。どうしてお主といい明久達といい、儂を女扱いするのじゃ?」

「「……………??」」

「いや、どうしてそこで全員が『何かおかしいのか?』みたいな顔をして首を傾げるのじゃ……………」

そう言つて溜め息をつく秀吉。全く、秀吉も少しは鏡を見て自分の容姿を確認しろつてんだ。

もう姉の優子よりも可愛ーおっと、寒気がしたのでこれ以上はやめとこう。

「心配するな秀吉。お前のことを女なんて思つてる筈かねえだろう? 何年お前の親友やつてると思つてんだ?」

「大悟……………」

「お前は…………『男の娘』だぜ☆」

「そ、そうか。ならよいーってじゃから! 儂はそんな新しい性別でも無いと言うとろうが!」

「……………(キラーン☆)」

「お主らも笑顔でグーサインをするでない！」

秀吉のノリツツコミ、可愛い。

「まあそう怒るなつて。ほれ、胡麻団子出来たぞ。持つてつてくれ」

「むう……まだ納得がいかがぬが、仕方あるまい……」

「しつかし、案内客は来るもんなんだな。まだ一日目だつづうのによ」

「そうじゃの。じゃが、この調子ならかなりの売上が期待出来るぞい」

「これなら少しは設備の改修費用にもなるかもしれねえな。うし、ちよつとトイレに行つてくら。少し持ち場を離れるがいいか？」

「大丈夫じゃ。おそらく明久達ももうじき戻つてくると思うしの」

「ま、何かあつたら呼べよ。つつても、まさか一日目早々に問題なんて起きるワケでもねえよな」

「そんなワケなからう。心配しすぎじゃ」

俺と秀吉はアツハツハ、と笑う。ま、今の所厨房にもホールにも問題はねえし、大丈夫だな。

——男子トイレ——

「大悟よ。早速問題が起きてしもうた」

「えっ!?! ちよつと秀吉! 　ここ男子トイレだぞ!?!」

トイレで用を足していると、秀吉が慌ててやつて来た。

「秀吉、人が用を足してる時に急に扉を開けるなんて失礼だぞ?」

「あ、それは済まぬの——つて儂は男じゃ! 　いや、そんなことはどうでもよい。トランプ
ル発生じゃ」

「ええ……早すぎなあい?」

俺は用を足し終え、手を洗う。

「んで、なにがあつたんだ?」

「うむ、少々面倒な客がおつての、いわゆるクレーマーというものじゃ」

「そうか。んで、どこのどいつだ?」

「それが、うちの学校の三年なのじゃ」

「おいおい、よりもよって三年かよ。わぎわぎこんな所まで来てなんのつもりだ？」

「分かった。俺が何とかしよう。相手が手を出してくる場合もあるから、クラスの連中は下がらせとけよ」

「うむ、了解した」

「それに、最近こつちの準備が忙しくてろくにアニメも見れなかったからストレス溜まってんだ。いいサンドバッグにでもなつてくれつとありがてえな」

「……あまりやり過ぎるでないぞ？」

「まったく、開始早々これとは、先が思いやられるぜ。」

——

「オイオイ！ 何だよこの烏籠茶、虫が入ってんじやねえかよ！」

「まったく、責任者出てこいよ！ この店は客に虫入りのモン出すつてのかわか！」

廊下にまで響く程のデカイ罵声が聞こえる。扉を開けて中に入ると、椅子に偉そうにふんぞり返って騒いでいるヤツらがいた。

「む。あの連中じやな」

「アイツらか。ったく、絵に書いたような小物だな」

騒いでいるのは文月の制服を着た男二人組。

一人は普通の体型をしたモヒカン頭、もう一人は丸坊主の男だ。そして周りの床には割れた陶器が散らばり、胡麻団子や烏龍茶が無惨な姿と化している。そしてそこにはこつからでも見えるほど大きな虫の死骸が落ちていた。

「ムツツリーニ、どういうことだ?」

厨房から何事かと出てきたムツツリーニに詳細を訊く。

「本当に虫が入っちゃったのか?」

「……………いや、アイツらがこつそり入れていた。証拠のカメラもある」

やっぱりな。ただの難癖野郎共だったか。大体そんなデケエ虫が入ってりやこつちも気付くには決まってるだろうが。

『うわ……………マジで虫が入ってんじやん……………』

『学園祭とは言っても、一応食べ物のお店なのに……………』

『食欲無くなっちゃったね……………別のところ行こう……………』

しかし、客はそれを見て次々と席を立ってしまふ。マズいな。一刻も早く手を打たねえと。

「まあいい。んじや、ちよつくら黙らせに行つてくるか。秀吉は他の客の対応を頼むぜ」
「うむ、承知した」

そして、準備運動とばかりに首と拳をポキポキと鳴らしながら、そいつらの下へ歩み寄ろうとすると、

「うるせえな糞餓鬼共。折角の飯と茶が不味くなるだろうが」

と、そいつらに一言発して立ち上がった一人の女性客がいた。

「さつきから猿みたいにギヤアギヤア騒ぎやがって。他の客に迷惑かかってんのがわかんねえのか、ああ!？」

そう言つてズンズンと二人の目の前に歩みよつたその女性。

年は二十代前半くらいで赤い髪を後ろで一つに縛り、二人の先輩に対して全く臆する様子を見せず、逆に鋭い眼光で睨み返し、煙草を加えながら三年共を見下ろしていた。

「ーあれ? あの人つて……まさか。」

「? どうしたのじや、大悟ーーあつ」

「……………っ、(ピクツ)」

「どうやら秀吉もムツツリーニも気づいたようだ。よし、俺の出番は要らなくなったな。」

「ああ? なんだよアンタ! 関係ねえだろ!」

「喚くな。テメエらこそ折角いい気分でティータイムしてたつてのにその雰囲気を台無しにしやがって、何様のつもりだよこのカス野郎共」

「か、カスだどっ!? こっちはその食い物に虫なんて入れられたんぞ! 黙ってられるワケねえだろうが!」

「……………」

「とまっていると、怒鳴り散らす三年共を他所に、その女性は床に落ちていた虫をしゃがんで観察するようを見る。どうやら烏龍茶に入っていた虫は作り物では無く、本物らしかった。」

「…………ちよつと取り除きさえすれば、この胡麻団子も烏龍茶も飲めたんじやねえのかよ」

「ああ!? 何言つてやがる! んなもん食えるワケブゴオツ!」

「黙れハゲ」

その坊主頭の先輩は、言い終える前にその女性から思い切り股間を蹴り飛ばされてい

た。うわあ痛そう。

「なんだ、餓鬼の分際でアタシに文句でも垂れようつてののか？ こつちは二日酔いでイラついてんだよ」

「いや……文句も何も、今ツレが金的攻撃をされたんだが……」

蹴られていないソフトモヒカンの先輩が女性の突然の行動に驚いている。無理もない。いきなり友人の股間が女性に蹴りつけられれば誰だつてそうなる。

「おい、立てよ。まだ話は終わってねえぞ」

「ふ、ふぎけんなよこのアマ……！ 女だと思つてつけあがりやがふぎやあつー」

「それが年上に対する口の聞き方か？ 教育がなつてねえんだなあ？」

股間を押さえて悶絶しているところに容赦なく、今度は顎に向かつて蹴りをぶちこんだ。

「ま、待つてくれ！ 謝ります！ この夏川を好きただけボコつて構わないので俺は勘弁して下さい！」

「ちよ、ちよつと待てや常村！ お前、自分だけ助かるうつてののか!？」

慌てている坊主頭の夏川と呼ばれた男。ソフトモヒカンの常村つて方は勝ち目が無いことを悟つたのか、必死に頭を下げていた。覚えにくいから常夏コンビとでも呼ぶとするか。

「ハア? そつちから吹っ掛けといてなんだそりや? イキつてんじゃねえぞ糞餓鬼風情が」

そう言つて、坊主頭の夏川の胸ぐらを掴んで捲し立てた。その様子に他の客もビビつているのが分かる。

「……くつ、こんなこととして、ただで済むと思うなよ。すぐに教師陣に全部報告して……」

「やってみろよ。そつちがそうであるなら、アタシもコレ、そんな時に先公共に伝えさせて貰うわ」

と言つて、女性が手に持っていた物、携帯電話を見せつける。

「悪いけど、テメエ達がここに入ってきた時からの行動、全部録画させて貰ったから」「なっ!」

常夏コンビが目を見開く。

「ま、お前らが本当に『何もしてない』ならこんなもん録られたところで問題はねえなあ? なんてそんなに動揺してんだ? それとも……ここに見られたら困る映像でも入ってんのかなあ?」

「……………」

「おい、さつきまでの威勢はどうしたコラ? 違うんだろ? ほら、アタシに言い返して

みろよ。まさかとは思うが……ここまで騒ぎ立てといて『今までの事は全部僕達がやりました』なんて……今更舐めた真似ほぎきやがるワケはねえんだろうなあっ!!」

「……………っ!!」

女性の迫力ある言葉に常夏コンビは悔しそうに押し黙る。反論は無く、気まずそうな表情をしている、つまりそれは女性の言葉通りであり、その携帯のカメラには自分達にとつて不都合なものが映っていることを示す決定的な証拠に他ならない。

そんな様子から、他の客も段々と感づき始めていた。

『確かに……………あそこだけ虫が入ってるなんて、おかしいよね……………』

『それにこんなに綺麗に掃除されてるんだもん、虫が出るなんて信じられない……………』

『じゃあ、あのお姉さんの言う通り、やっぱりあの二人が……………?』

『うーわ、しかもあれ三年生だろ? 信じらんねえ……………』

客の疑いの目は次々と常夏コンビに向けられる。

「テメエら、見たところ三年だろ? つてことは今年大学受験か。じゃあこんなもんが学校側に出回ったらよお、立場的にも色々やべえんじやねえのか? それとも、これを動画サイトにでも載つけて拡散させるのも面白えなあ?」

「……………アンタ、いい大人の癖に脅しかよ?」

「先にカマかけてきたのはどっちだよ? それに脅し? 違うな。これは『勧告』だ。お

前から餓鬼共とは『行動力』も『言葉の責任力』も『経験』も違う。大人舐めてんじゃねえぞ」

女性の力強い言葉に再び黙り込む常夏コンビ。

それほどまでに、残された映像というのは時に大きな抑止力となる。

少なくとも、今回の件を学校側に報告されればヤツらは、自分達より下の学年にわざわざ喧嘩を吹っ掛けたのにも関わらず撃退されたというなんとも情けない事実によって狭い立場を強いられるだろう。

そしてこのネットワークが普及した現代なら、こんな行為はすぐに日本、いや、世界中にすぐさま広まり、炎上は勿論のこと、個人情報の特定までされるだろう。そしたらヤツらの人生はバッドエンドだ。

「……ま、別にアタシにとっちゃテメエらの人生なんざどうだっていい。けど、そっちが大人しく引き下がって周りの客に不快な思いさせたこと謝罪するってんなら、こっちもこの映像は消してやるよ。どうする?」

につこりと笑みを浮かべながらそう二人に訊く。

もちろん、常夏コンビには残された道など一つしかないし、立場的にも向こうの方が上なのは流石に分かっているだろう。

「……分かりました」

モヒカンが観念してそう言い、坊主頭もそれに頷く。

そして女性はそれを見て、携帯電話をポチポチと操作した。恐らく動画を削除しているのだろう。

「……うし、削除完了つと。よし、お前らー」

ガシツ

「え？」

「死ねゴラアアアアアアッ!!」

「げぶるあう!!」

女性は常夏コンビの腰をそれぞれの腕で抱え込み、勢いよくジャーマンスूपレックスを決めた。

脳天から叩きつけられた為、そのまま常夏コンビは物言わぬ屍になったのでした。

「馬鹿が……アタシは一度も、許すなんて言った覚えはねえぞ。食い物粗末にしゃがつて……料理人の前でそれをするって事が、自殺に等しい行為だつてことをよく覚えておきやがれ、イキリ小僧共が……ヒツク」

そう気絶した常夏コンビに吐き捨てる。そしてその女性は他の客の方を向き、ペコリ

と頭を下げた。

「あー……一般の皆々様、生徒の皆々様。このような騒動とお目汚し、大変申し訳ございませんでした。ですがご覧の通り、原因は彼らの自作自演である事が判明致しましたので、ご安心してお食事の方を引き続きお楽しみ頂けると幸いです」

先程とは打って変わって丁寧な言葉で謝罪する女性。すると、一部始終を見ていた客達は一斉にその女性に向かって拍手と声援を送った。

『すーごーい! かっこよかったよー!』

『こつちこそ、ありがとうございます!』

『しかもよく見たら、すっげえ美人ですね!』

『抱いてほしい……』

「あー、ども、どうもー。畜生……酔いざめが悪いな。また後で家に帰って呑み直しだ」

まあ、これなら客も減ることは無いだろう。一安心といったところか。

しっかし、あの人は本当に容赦なくやるよな……そう思いながら、俺は溜息をついてその女性のもとまで歩き出す。それに秀吉とムツツリー二も続いた。

「つたく、相変わらずやり方が無茶苦茶なんだよー母さん」

「これはまた随分と、ド派手な登場の仕方じゃのう、凛花さん」

「……………流石としか言いようがない」

「おお、アタシの可愛い息子の大悟！ それに秀吉！ ムツツリーニもいるじゃねえか！ なんだよもう、いるんなら早く教えろよ！ こちとらお前らが何処に居るのかつてずつと探してたんだからよ！ アツハツハ!! ヒック！」

そう言ってその女性——いや、俺の母さんこと『岡崎凜花』は加えていた煙草をふかしつつ、大きく口を開けて笑った。

ああ、来ちゃったか…………ウチのトラブルメーカーにして最強のお人が。こりやまた一段と騒がしくなりそうだなあ…………。

(ていうか母さん、酒臭っ！)

(さつきまで呑んでたんじゃろうな…………)

(……………大酒豪)

——

——明久視点——

「さっきの決着をつけるぞクソ野郎!」

「それはこっちの台詞だよバカ野郎!」

召喚大会の一回戦。試合は無事に僕らの勝利に終わり、今は雄二と友情の確認という名の殴り合いをしていた。

「明久に雄二。殴り合いなぞしておらんで、急いで教室に来てくれんかの?」

「あれ? 喫茶店で何があつたの?」

「いや、単純にかなりの客が入ってきて人手不足なのじゃ。まあ、少しいぎこぎさもあつたがの」

「いぎこぎ? クレームでもきたとか?」

「左様じゃ。三年の生徒が難癖をつけてきての、まあ、それは何とかなつたのじゃがな」
何とか? 大悟がぶちのめしでもしたのかな?

「難癖か……教室の設備が汚いとかはないだろうし、多分料理か茶の中に異物が入つてるとかそんなモンだろ」

「雄二の言う通りじゃ」

「ま、大方Fクラスの出し物程度で人気が出ることが気にくわないとかだろうな」
全く、学校の中じゃ一番大人の癖に、やってることが小さいなあ。

「そういうことなら雄二や大悟にお任せだよな。目には目を、チンピラにはチンピラをだね！」

実際に雄二と大悟は腕つぶしもあるし、こういう場合にはうってつけだ。

「ま、大悟がぶちのめしたんだつたら、もう二度とそんな真似はしねえと思うが……」
「そうだね。仮にやり返してきたとしても、またブツ飛ばされるだけだもんね」

あつはつは、と雄二と笑いあう。全く、大悟にやられるなんて可哀な先輩達だなあ。

「いや？　大悟はなにもしとらぬぞ？」

「……えっ？」

秀吉の言葉に思わずポカンとなる僕と雄二。

「大悟は何もしてないって……どういうこと、秀吉？」

「実はのう……三年生達を蹴散らしたのは、大悟じゃなくて、その……凛花さんなんじゃ」

「え？　凛花さんって、まさか……」

「うむ、大悟の母親じゃ」

「何いいいいいい!!!!?」

僕と雄二は同時に驚愕の声を上げた。な、何故凜花さんがウチのクラスに? い、いや、確かに清涼祭は一般解放だし、設備を提供してくれたのはあの人だから来てても何もおかしくはないけど、よりによって何故凜花さんが!?

「ま、まずいよ雄二! 早くFクラスに戻らないと!」

「分かつてる。けどまさか、よりにもよって中華喫茶にあの凜花さんが来るとはな……このまま何も起こらねえ筈がねえ」

雄二が珍しく焦燥感を漂わせた表情になる。それは僕も同様だ。何故なら秀吉を含め僕達は、あの人がどんな人間かを知っているから。

「あ、アキ、坂本。どうしたの?」

そんな時、後ろから女子の声が聞こえてきた。

「あ、おかえり。美波に姫路さん。一回戦はどうだった?」

「はいっ。なんとか勝てました」

姫路さんがVサインをしている。そんなに勝負にこだわる性格じゃなかったと思う

けど、今回は場合が場合だ。勝ちにこだわるのは当然だろう。

「そんなことより、何かあったの？ 随分焦っているみたいだったけど」

「ああ、うん。それなんだけどねー」

僕は二人に、今あったことを全て話した。

――

「――ってことなんだ」

僕はFクラスに向かうため歩きながら、美波と姫路さんに説明した。

「へえー、岡崎のお母さんが来てるんだ」

「でも凄いですね。三年生の先輩方を倒しちゃうなんて、凄い腕っぷしです」

それぞれの反応を見せる二人。

「まあ、伊達に大悟っていう男を育て上げた人間じゃねえんだよな、凜花さんは」

「それに……あの人を見れば、ああ……子は親に似るんだなあ、って思うよ」

「どういうこと？」

「実は……大悟のお母さんは、かなり特殊でね、なんていうか……珍妙というか、自由人というか……いい意味でも悪い意味でも行動が読めない人なんだよね……」

「大悟の奇行が可愛く見えるぐらい、カオスな人なんだよな……」

なにせあの人が『あの人は色んな意味でイカれてる。デカイ人間ってのは常識はずれて言うだろ? まさに母さんがそれなんだよ』って言うぐらいだから。僕もそう思うし。

でも根本的には、面倒見のいい姉御肌って感じなんだけどね。

「あ、アキと坂本がそこまで言うなんて、どれだけヤバイ人なの……?」

「お、恐ろしくはありますけど、とつても気になります……」

「あ……、なんだ。姫路と島田が思ってるよりも相当な人だからな。つと、着いたか」

「うおっ! 凄い盛り上がりてるね!」

廊下からでも分かるくらい賑わい。まだ清涼祭がスタートしてからそんなに時間は経っていないにも関わらず、凄い数のお客さんが入ってるのが分かる。

どうやら、綺麗な店内と飲茶と烏龍茶の美味しさが評判になったからなんだろう。

「どうやらかなり口コミで広まったようだな。さつきからずつとこの調子じゃ。それで流石に人手が足りなくての」

「うん、分かった。次の試合までまだ時間はあるから僕達も手伝うよ」

「ああ。それに、凜花さんの行動も気になるし……何も起こってなきやいいが」

「う、ウチ、ちゃんと挨拶出来るかな……?」

「怖い人じゃないと良いんですけど……き、緊張します……」

そして、僕らはFクラスの店内へと入る。すると——

「おらホールの餓鬼共! 客を長く待たせるのは店としての恥だからな! スピー

ディーかつ正確に動きやがれ!!」

『はい!! 姐さん!!』

「大悟お! ムツツリーニイ! テメエらもてきばき動けよ!! ミスしたらまとめて

ブツ飛ばすかなな!」

「んなこと分かってるよお!! 母さん!」

「……………承知っ!」

——何故か凜花さんが、厨房に立ってクラスメート達を叱咤激励していた。

「——ん? おお、明久ア! 雄ニイ! テメエらもこつち来て手伝いやがれ! 人

手が足らねえんだ! モタモタすんじゃねえ!!」

「え? あっ、はい! 今行きます!」

「わ、分かりました!」

そして僕らも、凜花さんに言われて急いで厨房へと向かった。秀吉も急いでお客さんの接待に行った。

「あ、あれがまさか……」

「岡崎君の、お母さん……?」

第二十二問 子は親に似る、また親は子に似る

——明久視点——

『いやー、美味しかったねー』

『うん、また明日も来ようかなー?』

『値段もリーズナブルだし、学園祭のレベルとは思えなかったもんなー』

『ありがとうございましてー』

そんな感想を次々に言いながら、帰っていくお客さん。満足してくれたようで何よりだ。

ピークが過ぎたのか、息つく暇もなかった程に忙しかった僕らFクラスの中華喫茶も徐々に落ち着きを取り戻し、店内にいるお客さんもまばらになっていった。

「だあー……疲れたぜコンチクショー……」

「まさか、ここまで客が来るとはな……」

「……………予想外」

厨房では、大悟、雄二、ムツツリーニが壁にもたれかかっている。あの体力自慢の雄

二や大悟がここまてになるとは思わなかつたけど、想像以上の集客にずっと僕を含め皆、動きっぱなしだから仕方ない。

でも、初日からこの盛況ぶりなら、総合売り上げにもかなり期待が出来ること間違いないな。

「おう！ お前らお疲れさん！ ほれ！ なんとここで突つ立つてねえでこつち来い！

どうせ材料の仕込みしないと店開けられねえからもう休憩でいいだろ？ 大悟？」

「まあ、そうなるな。ていうか、一日分の材料を用意するのに数時間で使いきるか？」

「何言つてんだ。余るより使いきつちまつた方が良いに決まつてんだろ！ それに、後でまたあの親父共に持つてこさせつから構わねえだろ？」

「そう言つてあつはつは、と豪快に笑う凜花さん。その表情と態度からは疲れといった様子が全く見られない。」

息子の大悟でさえあんなのに……鉄人に負けない位の体力の持ち主だな。

——

「さて、Fクラスの生徒諸君！ 知つてるヤツは知つてると思うが殆どが初めましてだろうから、改めて自己紹介させて貰うよ。アタシの名前は岡崎凜花、この大悟の母親さ。」

よろしく頼むよ！ あっはっは！」

椅子に座って足を組み、笑いながらクラスメートに挨拶をする凜花さん。その男勝りな態度と言葉づかいは真逆に、アイドルやモデル負けの美貌とスタイルの持ち主で、そこに限っては大悟と血の繋がりが全く想像出来ない人だ。

そして、凜花さんを初めて見たら、誰もが思うであろうことが一つある。

『お、おい……あれが兄貴の母親だつて……!?』

『な、なんだあの美貌は!? 学年首席や木下姉妹に匹敵するぞ!』

『しかもスタイル抜群だなんて……惚れるっ!』

『お、岡崎のお母さんつて、若すぎない!?』

『と、とても子供を産んでるなんて思えません……!』

皆の言う通り、母親というよりは年の離れた姉……いや、大悟の妹と言っても不自然に思えないほど、綺麗かつ可愛さのある風貌をしているのだ。

「あ、あのっ！ すいません!」

そんな中、クラスメートの一人が手を挙げる。

「ああ？ なんだ?」

「年はおいくつなんです?」

流石欲望に忠実な連中だ。普通そんな質問を初対面の女性にはしない。けれど、恐ら

くそれは姫路さんや美波含め全員が思ってることだろう。

「あつはつは！ いきなりそこ突いちやうかう、大悟から聞いてた通りFの連中だな！」
けど、そんな聞き方によっては失礼ともとれる質問に対しても全く物怖じせずに笑い飛ばしている。そんな器量のデカさは大悟そっくりだ。

「えーつと……アタシの年齢か。大悟、アタシ何歳だっけ？」

「今年で三十路だろ？」

「つてことは、今は二十九だな！」

『……………えええええええええええーっ!!!?』

その衝撃の事実には、全員が驚愕の声をあげる。

『嘘だろ！ てことはまだ二十代!?!』

『う、うちの母親と全然ちげえ!』

『俺の姉と歳が一緒だなんて…………』

「ちよ、ちよつと待つてください！ それじゃあ、岡崎君のことを何歳で出産されたんですか!?!」

「あ？ あー……確か、アタシが中一か中二の頃だから……十三歳の時だな」
『何いいいいいいいいいい！！！！？』

再び声をあげるFクラスの連中。けど、僕も凜花さんから初めてその事を聞いた時には思わず思考が暫く停止してしまった。

だって普通に考えれば、凜花さんは中学生にあがったばかりの頃に妊娠と出産というものを経験している。中学生といえれば思春期真っ只中で青春を謳歌している筈なのに、子供を産んであまつさえそれを自分の力で育てるなんてのは普通に生活してればまずあり得ないし、並大抵の精神力と度胸がなければ無理だろう。だからああやってずっと笑顔でいるけど、凜花さんは僕らが思っている以上に壮絶な人生を歩んでいるのは明白だ。

「だから、アタシがお前らぐらいの時にはばっちし子育てしてたってことだ！ 中学生にして母親ってどこのアニメの話だっつんだよ！ あっはっは！」

『さ、流石兄貴を産み出した人だ……レベルが違いすぎる』

『最早尊敬の域に値するぜ……』

「いやー、にしてもあん時は大変だったなー。相手の男はビビって逃げちまうし、親からは勘当されちまったしなー。ま、妊娠しちまったもんはしゃあねえし、アタシが男を見る目が無かったっつただけの話だ！ だからお前らも、アタシみたいにならねえように、

もし彼女とやる時にはちゃんとゴムつけろよ！ 万が一って時もあるからな！」

凧花さん。このクラスはその行為どころか、その相手すらもない連中の集まりなのでその心配は無いと思います。

でも、思春期の男達に対してよくなんの恥ずかしげもなくそんなことが言えるものだ。やっぱり大悟に似ているなあ。

「……あ？ よく見りや女子もいるじゃねえか。男ばつかだと思つてたが、意外だな」
そう言つて、美波と姫路さんの方に視線を向ける凧花さん。

「お前ら、名前はなんてんだ？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。岡崎君とは一年生からのクラスメートです」

「ウチは島田美波です。岡崎とは今年からクラスメートです」

「ほー、瑞希に美波か。はじめまして、これからよろしくな」

終始笑顔で応対する凧花さん。こういう友好的なところはちゃんとしてるのに、それが霞んで見える程の性格の強さがあるんだよな……。

「そういや、母さんは何しに来たんだ？ 今日店は休みじゃないだろ？」

「おう。だからこれからアタシは店に戻らなきゃならねえ。けど、そういやアタシ今まで文月の行事になーんも参加してなかったからな。大悟がちゃんと学校生活を送れて

んのか様子見も兼ねて来たんだよ。でも、見た感じ心配はねえみたいだな。安心したよ」

「そうだったのか。わざわざありがとな。てか母さん……まさかとは思うけど、さっきまで呑んでたのか?」

「おう。ほんの小一時間前まで居酒屋で酔い潰れてたよ。んで着替えんのもめんどくせーし、長居するワケでもねーからこのまま行っちゃえ! って思ってたな——あ、そうだ! 大悟お!!」

すると、突然凛花さんが血相を変えて大悟の顔面を鷲掴みにした。

「えっ!? ちよっ! いきなりなんだよ!」

「お前よお! アタシが楽しみに冷蔵庫にとっといたプリン食っただろお!」

「はあ! プリンってなに——あ、あれ母さんのだったのか!? ご、ごめんなさい! まさか母さんの物だとは——」

「ほお……? おもわなかつたとしても言うのか?」

「いや、ちよっとは思ったけどよ、『どうせ酔い潰れて忘れてるだろうし、まあ大丈夫だろ』と思ってああああ嘘です!! 待つてくれ母さん! 死ぬ! 頭蓋骨が死んじゃう! 土下座でもなんでもするからアイアンクローは止めてくれええええええ!」

「黙れこの馬鹿野郎! 人の楽しみ奪いやがって! 歯あ食い縛れやあっ!!」

そのまま凧花さんは大悟の腰に両腕を回して抱え込み、そのまま勢いよくバックドロップを決めた。

「げぶるおっ?!」

大悟はそのまま気を失ったのか、その場で動かなくなつた。けれど、まさかプリン一つで実の息子に対してあんな大技を容赦なくかけるなんて、流石凧花さん。

大悟の化け物じみた生命力の強さは、ここにあつたんだなあ、と思わざるを得ない。

「全く、相変わらず賑やかじゃのう。凧花さんは」

「流石、岡崎大悟っていう人間を作り上げた人なだけはあるよな」

「……………技のかけ方も完璧」

「何て言うか……………岡崎以上に凄い人ね。子は親に似るっていうけど……………親も子に似るのね」

「予想以上でビックリしました……………でも、とっても楽しくて良い人そうですね」

皆が口々にそう言う。けど確かに大悟と凧花さんのやり取りを見てみると、本当に家族としての仲が良いんだなって思う。

『アキ君？ 歯を食い縛って下さい？』

……それに、凜花さんの行動が、何故か他人事のように思えないんだよなあ……。

――

凜花さんが帰って少しした後、僕と雄二は召喚大会の二回戦へと向かっていた。

ちなみに大悟は起こすのが面倒だったからそのままにしておいた。まあ、喫茶店の方は材料の仕込みが終わるまで営業出来ないらしいし、ほつといてもそのうちに復活するよぬ。

「で、二回戦の相手はどんな連中？」

特設ステージに向かいながら、隣を歩く雄二に聞く。

喫茶店の方が忙しかった為に、二回戦の相手を調べる暇さえなかった。弱そうな相手だといんだけど。

「対戦表を見た限りだと、勝ち上がってきそうなのは――お、予想通りだ」

雄二の目線を追う。すると、その先には僕らを待ち構えている対戦相手の姿があった。

「あれ？ 誰かと思えばBクラスとCクラスの代表カップルじゃないか」

「よ、吉井に坂本!? お前らが相手か！」

ステージの向こうから僕らを見て顔が引き攣っているのは、前回の試召競争で大変お世話になったBクラス代表の根本君と、先日女子更衣室の時間にお世話になったCクラス代表の小山さんだった。

「どうしたの根本君。Fクラスの変態バカトリオのうちの二人が相手なんだから、この勝負は貰ったようなものじゃない」

バカに加えて変態とは酷い言い様だ。でも、正面切つて悪口を言ってくるなんて、小山さんは相変わらず性格が悪いな。大悟が嫌うのも分かる気がする。

そしてその彼氏があの根本君だもんな……嫌なカップルだ。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」

立会人の遠藤先生が、そう宣言すると、僕らはそれぞれ召喚獣を喚び出した。

「『試召獣喚《サモン》！』」

Bクラス 根本恭二 199点

Cクラス & 小山友香 & 165点

英語W VS

Fクラス 坂本雄二 73点

&

Fクラス 吉井明久 59点

流石はBクラスとCクラスの代表コンビ。点数も立派なもんだ。それに対して僕と雄二の点数はかなり見劣りしてしまっている。

でも、特に問題はない。何故わざわざ雄二がこの試合にこんな科目を選んだのか。それはハナから、根本君達相手に正々堂々と戦う気が無いからだ。

「じゃあ雄二、例のモノを」

「おう。これのことだろう?」

そう言つて雄二が取り出したのは、ダイゴブックスとムツツリ商会によつて生み出された根本恭ニコスプレ個人写真集『ダイゴブックス&ムツツリ商会 Presents

く生まれ変わった私を見て! 男子高校生のヒ・ミ・ツ♪』だ。正直、見てと言わなくても見たくないけど……。

「そ、それは……！」

予想通り、根本君の表情が凍る。

これはこの間のBクラスとの試召戦争で負けた根本君を大悟が脅迫してコスプレをさせ、ムツツリーニが撮影した、彼の女装コスプレ写真集だ。どうやら雄二はそれを大悟から買い取っていたようだ。その時は何でそんなものを……、と思っただけ、この時の為だったと分かった。

できれば墓場まで持っていきたい汚点だろうけど、姫路さんの気持ちを弄んだ罰だ。手加減はしない！

「さて根本君。この写真集をバラ撒かれたくなかったらー」

「おいおい明久。交渉の相手が違うぞ？」

「え？ そうなの？」

でも、根本君以外に誰を交渉させるんだらう？

「おい、根本の彼女だかCクラス代表だかゲロ吐きまくったクラスのヒステリー女だから、その女」

「誰がヒステリー女よ！ 大体あれは全部あのキモオタが描いた汚物（船越女史のイラスト）のせいじゃない！」

どっちも流石に言い過ぎじゃないかな？

「まあまあ落ち着け。そんなことより、これを見てみる」

「……何よ」

睨む小山さんを前に、雄二は写真集の一ページ目を捲る。そこにはゴスロリ衣装を着て恥ずかしげにポーズを取っている根本君が、遠目のアングルで写っていた。

「さ、坂本！ わかった！ 降参する！ だからその写真だけは……！」

「明久、根本を押さえろ」

「ん、了解」

雄二の指示通り、写真集を奪おうとする根本君を羽交い締めにする。

「よしよし。さて、Ｃクラス代表。この写真集が見たかったら、俺達に負けるんだ」

「さ、坂本っ！ お前は鬼か!？」

根本君が泣きそうな声を出す。これには流石に僕も同情してしまいそうになる。あくまでも『しまいそう』なだけけど。

でも、この交渉だと、根本君は問答無用で負けてしまう上に大悟厳選の際どいコスプレ写真集を彼女(?)に見られてしまう。最悪に最悪の上塗りだ。

「……気に食わないけど、いいわ。私達の負けよ」

「交渉成立、だな」

悪役の笑みを浮かべる雄二。かくして、写真集は小山さんの手に渡ることになった。

「ゆ、友香?! 頼む! それだけは見ないでくれ!」

根本君の懇願も虚しく、小山さんは写真集を開いてマジマジと観ている。

「明久。勝負はついた。戻るぞ」

「そうだね。それじゃ遠藤先生。僕らの勝ちということだ」

脇から写真集を覗き込んでいる遠藤先生に声をかけておく。

「あ、はい! 坂本君と吉井君の勝利です!」

よし、これで三回戦進出決定だ。良かった良かった。

『……別れましょう』

『ちよ、ちよつと待ってくれ! これには事情が……!』

去り際に聞こえてきた会話は気にしないでおう。

——

——大悟視点——

「ああー……クソツタレ。頭痛え……」

俺は自分を襲う頭痛に耐えながら、校内を適当に散歩していた。どうやら母さんは俺をノックダウンさせた後、そのまま店があるから帰ったようだ。つたく、いくらこつちが悪いとはいえ、プリン一つで息子にバックドロップかけるか普通？ ホント、変な所でガキだよなあの人も……。

「さてと、追加の材料が届くまで暇だな……つつても他のクラスの出し物にや興味ねえし……」

「あつ、いたですつ！ オタクのお兄ちゃん！」

「あー、でも腹へったな。近くの屋台で何か買つてくか……?？」

「あれ？ 聞こえないのですか……? オタクのお兄ちゃん！」

「いや、Aクラスの視察に行くか？ 監督兼指導者としてちゃんと俺の教えに沿ったメモイドが出来ているのか心配だからな。霧島はともかく、優子がな……」

「オタクのお兄ちゃんってば！」

「よし！ そうと決まれば早速ー」

「オタクのお兄ちゃん!!」

「あ？」

なにやら声が聞こえる。下の方を向くと、そこにはちよこんと幼女がいた。

赤い髪に腰まで伸びたツインテールに、グリーンアイが特徴的な子だ。

「もう！ 葉月がずっとオタクのお兄ちゃんって呼んでるのに、オタクのお兄ちゃんは全然気づいてくれないなんて酷いですよっ！」

「はあ？ あー……ちよつと待て。いきなり過ぎて俺の思考が追い付いていない」

ブンブンと頬を膨らませる幼女。デユフフ、可愛いでござる。お持ち帰りしたーじゃなくて、誰だこの子は？ 実に悲しいことに俺には妹なんていないし、俺の事をオタクなんて堂々いう女の子なんざいるわけーあつ。

「……ああ！ よく見りゃあの時のぬいぐるみの子じゃねえか！ 確か名前は、葉月ちゃんだったな！」

「そうですっ！ オタクのお兄ちゃんっ！」

思い出した。確か俺が出所してすぐに葉月ちゃんと会って、お姉ちゃんにあげる為のぬいぐるみをチンプラカップルに取られた挙げ句殴られたって言ってたから俺がそのゴミをぶちのめしたんだった。

「そうだ！ しかもそんな時に俺にめるたんのストラップをくれたんだった！ そ、そんな大恩人を忘れるなんて俺のクズ野郎！」

「どうだった？ あの時のぬいぐるみは喜んで貰えたかい？」

「はいっ！ お姉ちゃんもとっても喜んでくれました！ オタクのお兄ちゃんのおかげですっ！」

「ははっ、そう言つて貰えるとは嬉しいねえ。しかし、葉月ちゃんも見ない間に成長したな。お兄ちゃんは感激だ」

「本当ですか!?! 葉月、とつても嬉しいですっ！」

そう言つて、眩しいくらい笑顔で俺の腰に突進、もとい頭突きをしてきた。うん、可愛い。でもこの威力……この子、世界を狙えるぞっ！

「そうですっ！ オタクのお兄ちゃん！ 葉月のこと、肩車してくださいっ！」

「肩車？ なんでだ？」

「葉月、今まで誰かに肩車をさせてもらつたことがなくて……オタクのお兄ちゃん。背もおつきいですし……駄目ですか？」

おっと、幼女の頼みとあらば、断るのは紳士として恥ずべき行為ですな。

「なんだ、そんな事か。別に構わねえぞ？ よっこらしょっと」

「うわーっ！ 高いですっ！ 葉月、感激ですっ！」

キヤツキヤと嬉しそうに俺の頭の上ではしゃぐ葉月ちゃん。うんうん、幼女が喜んでいる姿を見るのは二次元、三次元関係なく感無量なものですねえ。いやー乱世乱世！

あと出来ればあまりリーゼントを掴まないでほしい。これセットすんのだいぶ時間

かかるから。

「そういや、今日は葉月ちゃんは何をしに来たんだ？」

「あ、実は葉月。お姉ちゃんに会いに着たのと、もう一人お兄ちゃんを探しているんですっ」

「ほー、葉月ちゃんのお姉ちゃんはこの学校なのか？ それと、葉月ちゃんには兄貴もいたんだな？」

「そういや、葉月ちゃんの雰囲気……どつかで見たことあるんだよな……」。

「んで、どんなお兄ちゃんなんだ？」

「えつと……バカなお兄ちゃんですっ！」

「なんて不名誉な特徴だろうか。だが、バカなお兄ちゃんか……やべえ、Fクラスしか出てこねえ！」

「あぁ……他に何か特徴はあるか？」

「えーつと、その……すつごくバカなお兄ちゃんなんですっ！」

「明久か」

「よし確定キタコレ。俺の知ってるなかで群を抜く馬鹿といえは明久しかいないからな。」

「よし、じゃあお兄ちゃんがそのバカなお兄ちゃんの所まで案内してあげよう」

「本当ですかっ！　ありがとうございますっ！」

「……でも、お兄ちゃんからも一つ頼みがあるんだ」

「なんですか？」

「俺のことは『オタクのお兄ちゃん』じゃなく、『大悟お兄様』と呼んで欲しいんだ」

「分かりましたっ！　大悟お兄様っ！」

言ってやったぜ。

俺の長年の野望『妹属性を持つ幼女に、お兄様と呼ばれる事』が叶う日が遂に来たのだ！　し、しかしなんとというクリティカルヒットなんだ……!?　いや！　気をしっかり持つんだ岡崎大悟！　お前は折角のチャンスをついにするつもりか！

「よし、それじゃあ行くか、葉月ちゃん」

「はいっ、ですっ！　大悟お兄様っ！」

ああ、心がピヨンピヨンするんじやあ。この前防犯ブザーを鳴らした女子小学生は俺のことをゴミを見るような目で見てたからな。あれはあれで興奮したが、やつぱりこういった幼女は素晴らしい！

もういつそのことこのままお持ち帰りして俺が本当の葉月ちゃんのお兄様になつてやろうかな。

「あ、そういえば大悟お兄様」

「なんだい？ 葉月ちゃん。大悟お兄様だよ、あつはつは」

「さつきから葉月達の後ろでトゲトゲのバットを持って立ってるお姉ちゃんは誰ですか？」

「……………え？」

チラツ

「……………大悟、なあにその子？……………まさか、浮気カナア？ カナア？」

グシヤアツ！

——

「……………？（キヨロキヨロ）」

「どうしたのじゃ、ムツツリーニ？」

「……………今、悲鳴が聞こえたような気がした」

「悲鳴じゃと？ 儂には聞こえなかったが、にしても大悟のヤツ、どこへ行ってしまった」

のじやろうか？」

第二十三問 実妹が可愛いのは二次元だけだ!

——明久視点——

「あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん? 名前はなんて言うんだ?」

「あう……。わからないです……。それよりも大悟お兄様、頭から血が出てるですよ?」

「あつはつは、気にしないでいい。いつものことさ」

大悟がFクラスに戻ってくると、何故か小学生くらいの女の子を肩車して連れていた。それにぞろぞろと群がるクラスメート達。最初は『遂に犯罪に手を染めてしまったのか……』と思い警察に通報しようとしたけど、どうやら普通にFクラスまでその子を案内してあげていたようだった。

けど、どうして大悟は誰かに散々鈍器のようなもので殴られた挙げ句顔面を踏みつけられたボロ雑巾みたいな状態になっているんだろうか。

「よし、じゃあ葉月ちゃん。そのお兄ちゃんの特徴をもう一回言ってみようか? せー

のっ」

「はいっ、すつごくバカなお兄ちゃんなんですっ！」

「「「吉井しかいないな」」」

僕の方に一齐に集まる視線。やだな、泣いてないよ？

「全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんていないよ！ 絶対に人違いー」

「あつ！ バカなお兄ちゃんだっ！」

いきなり抱きつかれた。

「絶対に何だつて？ 明久」

「…………人違いだと、いいなあ…………」

最近、皆が僕のことをバカつていうから、本当に自分がバカだと思ふようになってきたじゃないか。

「つて、キミは誰？ 見たところ小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはいないよ？」

「え？ お兄ちゃん…………。知らないつて、ひどい…………」

女の子の表情が歪む。あ、マズい！ 泣かせちゃったかも!?

「明久。俺の前で幼女を泣かせるたあいい度胸だな。野郎共、構えろ」

『『了解しました。異端者を排除します。』』

手の甲をポキポキと鳴らす大悟。ヤバい！ このままだと僕は太悟率いるクラス

メートに八つ裂きにされて魚の餌にされてしまう! なんとかしないと!

「バカなお兄ちゃんのパカあつ! バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか』って聞きながら来たのに、あんまりですーっ!」

「明久、最期の情けだ。自分の罪をじっくりと悔い改めてから死ぬ」

『『異端者には死の鉄槌を。それが我等異端審問会の血の掟也』』

「明久ーじゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな?」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなのじゃ。許してやってくれんかのう?」

「…………お詫びとして明久の右手をプレゼントする」

なんだろう。この子と一緒に僕まで泣きたくなってきたよ。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのにー」

「瑞希!」

「美波ちゃん!」

「殺るわよ!」

「ぐあつ!」

突如首筋に激痛が! なんだ!? 何が起こったんだ!?

「瑞希。そのまま首を真後ろに捻って。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「(、)こうですか?」

いかん。殺されかねん。

「ちよつと待つて！ 結婚の約束なんて、僕は全然ー」

「ふえええんつ！ 酷いですつ！ ファーストキスもあげたのにーつ！」

「明久、幼女汚シタ。ブチ殺ス」

「待ちなさい岡崎。そのノコギリでアキの顔の皮膚を剥ぎ取るのは最後よ。坂本は包丁を持つてきて。五本あれば足りると思う」

「吉井君。そんな悪いことをするのはこの口ですか？」

「お願いひまふつ！ はなひを聞いてくらはいつ！」

「いつも優しい姫路さんまで！ しかも他の連中も鉈やらチェーンソーやらを持ち出してゐるし！ こんな扱いはあんまりだ！」

「仕方ないわね。二本刺したら聞いてあげるからちよつと待つてなさい」

「あのね、美波。包丁つて一本でも刺さったら致命傷なんだよ？」

美波に足りないのは日本語力だけじゃないと思う。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよつ！」

お姉ちゃん……葉月ちゃん……ファーストキス……

「ああつ！ あのときのぬいぐるみの子か！」

思い出した！ そういえば、前に小さな女の子がお姉ちゃんにプレゼントをしたいけ

どお金が足りない、なんて哀しそうにしてたから手伝ってあげたんだっけ。あげたのは確かノインちゃんぬいぐるみだっけかな。その後観察処分者になつたりして色々と忙しかったから、すっかり忘れていたよ。

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった?」

「はいですっ!」

「あれ? 葉月とアキって知り合いな?」

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ?」

マジマジと葉月ちゃんの顔を見る。言われてみると、確かに似ている……。元氣そうなの雰囲気とか、ちよつと勝気な目の当たりとか。

「そんな……ずるいです……。吉井君はどうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか? 私はまだ両親にも会ってもらって無いのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になつちやつてたり……」

姫路さんは何を言っているんだろう? 最近、彼女もたまに壊れているような気がする。

「……………」

「ん？ どうしたの、大悟？」

「……………クラスメートの女子の妹だと……………まるでエロゲーの隠しルートじゃないかっ！ 難易度が高すぎるだろっ！ いや、葉月ちゃんは三次元には希少価値ともいえる存在だ。ならコスプレくらいなら土下座で……………」

このキモオタは一体葉月ちゃんに何をさせるつもりなんだろうか。

「あれ？ でも、どうして葉月ちゃんと大悟が知り合いなの？」

「あ？ まあ、色々あったんだよ」

「オタクのお兄ちゃんじゃなくて、大悟お兄様が葉月のノインちゃんを取り返してくれたんですっ！ だから大悟お兄様は葉月のヒーローなんですっ！」

「取り返した？ どういうこと？」

僕がそう大悟に訊くと、その時の経緯を説明してくれた。

話によると、僕が葉月ちゃんにノインちゃんのぬいぐるみを取った後、チンピラカッブルど出くわしてしまい、ぬいぐるみを取られた挙げ句暴力を振るわれたらしい。

そこに偶然少年院からの帰りで通りかかった大悟が事情を聞いて激怒し、葉月ちゃんを殴ったチンピラカッブルの男の方をボコボコにしてぬいぐるみを取り返し、無事葉月ちゃんに返したと。

「そんな事があつたのね……あの時、なんで葉月が右頬を怪我してたんだろうって思つたけど、これではつきりしたわ」

「でも、そいつらも酷いことするよね。こんな幼い葉月ちゃんを殴り付けるなんて……許せない!」

「アキ……」

思わず言葉に熱が入る。多分僕が大悟の立場にいても同じことをしていたに違いないだろう。でも、見ず知らずの子供の為にそこまでやるなんて、見かけとは裏腹にやっぱり大悟は優しい性格の持ち主だ。だからやつぱり、僕はコイツが少年院に入るような存在じゃないとー

「アキがそう言ってくれて、私も嬉しいわ。それに岡崎、今更だけど葉月を助けてくれてありがとう。姉として礼を言わせて」

「僕からも、ありがとう。大悟」

「おいおい、別に礼を言われることはやってねえよ。それに、女子小学生という存在は二次元三次元関係なく世界の宝だからな。それを汚すやつなど俺が許さん!」

「大悟……」

「そしてその後はその女子小学生と人目につかない場所であんなことやそんなことをしメチャクチャにしたりされたりするのさ!」

「台無しだよっ！ 僕の感動を返せ！」

「葉月に変なことしたら許さないからね！」

訂正。やっぱりコイツは未来の子供達を守るためにも社会から抹消しておくべきだ。

「大体、大悟にだつてちゃんと妹の天ちゃんがいるじゃないか。それで満足したらいいんじゃないの？」

「明久、お前は馬鹿か？ 実の妹で興奮するなんざ二次元だけの話だ。三次元の妹なんざウザつただけなんだよ。葉月ちゃんみたいな素直な子ならともかく、アイツはただの——」

ガラガラガラ

『すいませーん！ Fクラスつてここですか？』

と、突然元気な声と共にFクラスの扉が開かれる。そしてそこから教室内へと入ってきたのはセーラー服姿をした中学生くらいの可愛らしい女の子だった。

「ん？ あ、あれは確か……」

「これまた、意外な子が来たのう」

「……………(ピクツ)」

真っ先にその子に気づく雄二と秀吉とムツツリーニ。僕もすぐにその子が誰なのかに気づいた。

『うん? これは可愛いお客さんだね』

『いらつしやいませ、お嬢さん』

『おや、あまり見ない女の子だね? お兄さんと付き合わないかい?』

すると、先程まで僕を撲殺しようとしたクラスメート達がキラリと歯を輝かせてその女の子を出迎えていた。あつという間にクラスの野郎共に囲まれたその子。

「あのつ、それで私のお兄ちゃんはどこにいますか?」

『お兄ちゃん? このクラスにお兄ちゃんがいるのかい? それは聞き捨てならないね』

『なんて羨ましいんだ…………』

『そいつを殺して化けの皮を被って俺が君のお兄ちゃんになりたい』

よく初対面の女子中学生の前でそんな事が言えるものだ。ある意味コイツらには恥じらいというものが欠落しているんだろうな。

と、傍らで思っていると、

「あ! いた、大悟兄! 遊びに来たよっ!」

「げっ!! 天!! なんで母さんに続いてお前までここにいるんだっ!!」

すると、その子……大悟の実の妹さんである、岡崎天（そら）ちゃんは、大悟の姿を見つけると一目散に駆け寄っていった。

「もうっ、大悟兄つてば、どうして学園祭があるつてあたしに教えてくれなかったの!? もしかして天のこと嫌いなもの!? そんな酷いことすると泣いちゃうよ!」

「いや、だつて別にお前に来て貰いたいワケでもねーし。」

「あー! そういうこと言うなんて大悟兄嫌いつ! もつと兄らしく妹に優しくしろー! 拗ねるぞー! ふてくされるぞー!」

「……チツ、面倒くせえヤツだな。はいはい、よく来たな。天」

「ふふん、最初から大悟兄はそう言えば良いのです。全くツンデレなんだからなあ♪」

「よし、天。今から拳骨するから頭出せ」

「やーだー! ごめんなさーいー!」

「おい、ジタバタすんじゃーはっ!」

『総員。構え』

『はっ!』

殺気再び。瞬く間に取り囲まれた大悟。そして鈍器を構える野郎共達。

「待て貴様ら! これは大きな誤解だ!」

『兄貴、残念だ。貴方は俺達の希望だと思っていたのに、失望したよ』

『こんなにも可愛らしい女子と交流を持つていたなんて、異端審問会の血の盟約に背きましたね、兄貴』

『どうやら兄貴には再教育の必要があるようだ』

「落ち着け! いいか、まず天は俺と血が繋がった実の妹だ! それに忘れたか!?! 俺は二次元を愛する男だぞ! お前らの思うような関係なんぞあるわけがなからうが!」

『『はっはっは、それがどうしたああつ!!』』

いや、そこって大事な部分だと思うけど。後大悟。君さつき葉月ちゃんに何かしようとしてたよね?

『いや、待つんだ諸君』

『会長! どうして止めるんですか!?!』

『よく考えてもみろ。わざわざ兄貴が妹さんを連れてきたんだぞ? つまりそれは、我々に妹さんを紹介するためじゃないだろうか?』

『『つ!?!』』

『というわけで、君の名前を聞かせて貰ってもいいかな?』

「えっと、岡崎天です。大悟兄とは二歳違いの中学三年生です」

『なるほど、じゃあ岡崎天さん。彼氏はいるかな?』

「彼氏ですか？ いたこと無いですね」

『初めまして、僕は兄貴の親友の須川亮と言います』

『天ちゃん。偶然だね、この僕、横溝浩二にも今恋人がいないんだ』

『携帯電話の番号を教えてくださいたら、僕がお小遣いをあげるよ？』

『義兄^{アキキ}！ 俺、天ちゃんのこと一生かけて幸せにしてみせる！』

「あ、あのー……急にそんなこと言われても困ると言いますか……」

あはは、と苦笑いをしてそう答える天ちゃん。

「それに、私には大悟兄がいますから♪」

『死刑』

『『『イエツサー！』』』

「サラダバー!!」

『しまった！ 兄貴が窓から飛び降りて校庭に逃げたぞ！』

『こうなったら兄貴は最早我々の味方では無い！ 反逆者だ！ 即刻見つけ出して異端

審問会にかける！ 主力部隊は俺に続け！ 残りは船越先生のところに向かえ！ 人

生の墓場と三次元の恐怖というものを教えてやるんだ！』

『『了解!!』』』

そして、窓から逃げた大悟を追って須川君達はそろそろと出ていった。

「あはは♪ Fクラスって面白い♪ 来て良かったなあ」

それを見てクスツと笑みを浮かべる天ちゃん。なんていうか、うちのクラスの悪評が広まっただけのような気がするけどね。

「よう、お前も来たのか、大悟妹」

「よく来てくれたね。天ちゃん」

「あ、雄二さん! それに明久さん! 秀吉姉! ムツツリーニさんも!」

「待つのじゃ! なぜ儂だけ姉呼びなのじゃ!」

雄二が天ちゃんに話しかけると、天ちゃんは僕らの所に近づいてきた。

「どうです? 中華喫茶の方は上手くいってますか?」

「うん。おかげさまで繁盛してるよ。凛花さんも手伝ってくれたしね」

「それなら良かったです。お母さんちよつとやり過ぎな時もあるから……迷惑とかか
けなかったですか?」

「いや、そんなことはない。むしろ俺達がいけない時に店の方を無償で手伝ってくれたんだ。感謝するのはこっちの方だ」

「うむ、雄二の言う通りじゃ」

「……………(コクコク)」

「そうですね。それを聞いて安心しました♪」

笑顔を見せる天ちゃん。なんていうか、小動物みたいで和むなあ。

「う、嘘でしょ!? この子があの岡崎の妹!? 全然違うじゃない! 凜花さんといい、どんなDNAをしていけばそうなるの……?」

「何て言うか……美人の凜花さんとはまた違って凄く可愛いです……」

「お姉ちゃん、とつても可愛いですっ!」

美波と姫路さんと葉月ちゃんが天ちゃんを見て口々に言う。確かに、天ちゃんは本当にあのブサイクでキモオタな大悟と血が繋がっているとは思えないほど可愛い。例えるなら秀吉と姫路さんを足して二で割ったようなあどけない顔立ちをしている。身長はムツツリー二よりも小さく、姫路さんに似たふわふわとした雰囲気がある。

それにしても、本当に岡崎家の女性って美人揃いだなあ……唯一の男がクズなのに。

「えっと、姫路さんに島田さんですよ? それに、葉月ちゃんだったかな? 大悟兄がお世話になってます。アタシは妹の天って言います。よろしくお願いします」

「あつ、こちらこそよろしくね。天ちゃん」

「分からない事があつたら何でもウチらに訊いてね」

「よろしくお願いしますっ!」

ペコリとお辞儀をする天ちゃんに対して同じ様に返す三人。

大悟と違って礼儀正しいなあ。まだ中学生なのに。

「じゃあ、突然なんですけど、お近づきのしるしに二人にプレゼントがあります」

「プレゼント?」

「はい。用意するのでちよつと待って下さいね」

そう言うのと突然天ちゃんやんは壇上に向かい、チョークを持って壁のクロスを捲り、黒板何かを描き始めた。しかもその手は止まることなく何かのイラストだろうか? を段々と描き進めていく。

あれ? この光景、前にも見たことあるような……?」

「……よし! 出来ましたつ! 岡崎天、渾身の一作ですつ!」

数分後、描き終えた天ちゃんが満足げに頷きながら描いた内容を皆に見せる。

描かれていたのは……僕らしき人物がスクール水着を着ているイラスト(R18)。

「いやあああああーっ!!」

見た瞬間、僕は膝から崩れ落ちた。

「おお……コイツは凄いな……描かれてるのは明久なのに全く気持ち悪さを感じねえ」

「ふむ、細部まで明久そつくり描かれておるのう。それも全く違和感を感じさせぬ画力……見事じゃ」

「……同志と同じ血が流れてるだけのことはある」

やめて三人とも！ そんな真面目な目で評価しながら僕の汚れた姿を見ないでえっ

!!

「どうですか？ 喜んで頂けました？」

「天ちゃんっ！ アウト！ これは完全にアウトだ！ 内容もそうだけどうして姫路さん達への贈り物が僕のスクール水着イラストなのっ!？」

「あれ？ 駄目でしたか？ はっ！ ……まさか、スクール水着よりもビキニの方がお好みでしたか？」

「違うんだ！ 水着の種類云々以前に性別と格好が伴っていないんだ！ 秀吉じゃあるまいし、せめてちゃんとした服装を着せてよ!？」

「待て！ 何故そこで儂の名前が出てくるのじゃ!？」

「何を言ってるんですか! 明久さんにまともな服なんて着せたら魅力が落ちちゃうじゃないですか! それに前に大悟兄も言っていました。『明久ほど露出高め女装イラストの二次元モデルに相応しい人間はいない』って。実際あたしもそう思いますし、姫路さんと島田さんにはこれが一番喜ばれると思っただんですよ! それに、二次元風の明久さんって可愛くないですか!? ああ! やっぱり二次元って最高ですよねっ! あたしも二次元に生まれたかったっ!」

笑顔でとんでもないことを暴露する天ちゃん。取り敢えず大悟は後でたつぷりシバいた後に校舎裏の庭にでも埋めておくとして、誤算だった。まさか、天ちゃんも大悟と同じ部類の思考を持つ人間だったとは。流石、あのキモオタの妹なだけはある。と、兎に角! あのイラストを急いで消さないと! 姫路さんと美波はまだしも、葉月ちゃんはまだこの世界に踏み込ませちゃいけない!

「ま、待つてください! 明久君!」

「アキ! まさかアンタあのイラスト消すつもりじゃないでしょうね?」

すると、突然姫路さんと美波に呼び止められる。

「何故止めるんだ二人とも! 僕にはあの見るに絶えない悪夢を視界から完全に消し去らなくちゃならないんだ!」

「そんな、悪夢なんかじゃないですよっ! とつても可愛いじゃないですか! 特にあ

の綺麗な体のラインとか鎖骨が凄く色っぽくて！」

「そ、そうよっ！ それに、せつかく天ちゃんか私達の為に描いてくれたんだから、消すなんて失礼よっ！」

「わあー、天お姉ちゃんとっても絵が上手ですっ」

何故だ!! 一体何が二人をそこまで突き動かすんだ!! まさか、僕に長く辱しめを受けさせようとしているのか!? そんなのあんまりだ! 僕が一体何をしたっていうんだ!?

「じゃあ、そろそろ消しますけどいいですかー?」

「待って（下さいっ）! 今すぐ写真に収める（ます）からっ!」

ガラッ!

「落ち着くのじゃ明久! 飛び降りなんて早まった真似をするでない!」
「放すんだ秀吉! もう僕はこれから生きていける気がしないんだっ!」

どうやら僕は姫路さんと美波に酷く嫌われているんだろうな。

「ところで、さつきから思ってたんだが、やけに閑散としていないか?」

「そういえばそうだね」

雄二の言葉に僕が同意するように頷く。

現在時刻はお昼前。今は食材の仕込み中だから一旦ストップしてるけど、さつきまでの繁盛ぶりなら、少しくらい客足が来てもいい筈なのに、外にお客さんの姿どころか気配すら無かった。

「そういえば、あたしここに来るまでに変な噂を聞きましたよ」

「噂だと? どんな内容なんだ、大悟妹?」

「なんか、Fクラスの中華喫茶は料理に虫を出すから行かない方がいいって」

「あつ、それ葉月も同じことを聞いたですっ」

「虫ってことは、先程凜花さんにやられた三年生の作業じやろうか?」

この教室は今が設備は豪華だし、掃除もしっかりしている。だから汚いとかって悪評が流れることは無いと思う。というところは、午前中に凜花さんにブチのめされた人達しかいないだろう。

「ふむ……。例の連中の妨害が続いてるんだらうな。探し出してブチのめすか」

「うーん……。でも、どうしてそこまで僕達を目の敵にするのかな?」

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで拡がっているのかを確認しないと」

「それで大悟妹にチビツ子、その噂はどこで聞いたんだ？」

「あー、それでしたら可愛い衣装を着た女の子達がたくさんいる店ー」

「なんだって!? 雄二、それはすぐに向かわないと!」

「そうだな明久! 我がクラスの成功のために、低いアングルから綿密に調査しないと
なー!」

聞いた瞬間全力ダツシユ。

喫茶店は姫路さんの転校に関わる大事なことだ! 後悔のないように全力を尽くし

ておきたい!

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃんのバカ!」

背後からの罵倒も気にならないほどに、僕の心は踊っていた。

「……でもあそこって、優子姉がいたクラスだったんだよなあ。でもあの紫の髪の女の人も可愛かったなあ」

第二十四問 いけいけ僕らの可愛いアキちゃん☆

——明久視点——

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何を言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

僕らはAクラスの前に来ていた。天ちゃんと葉月ちゃんの話によると、噂の出所はここらしい。けどその名前が「魔法メイド少女カフェ 『ご奉仕しちゃうぞっ☆』』という、いかにもFクラスのキモオタが考えそうなネーミングセンスだった。でも魔法少女なのかメイドなのかどっちなんだろう、と思っていると、

【協賛 貴方の欲望、お埋めします ダイゴブックス】

やっぱり大悟が絡んでいたか。まあ、こんなこと考えるのアイツくらいしかいないも
んね。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「あれ？ あと確かここには岡崎の恋人の木下さんもいるのよね？ 岡崎はどうしたの？」

「さあ？ まだFクラスの人達から逃げ回っているんじゃないですか？」

雄二が妙な抵抗をしているうちに女の子三人も追い付いてきたみたいだ。でも、珍しいことにこの場に大悟はいない。おそらく天ちゃんの言う通り百鬼夜行と化したクラスの中からは逃げ回っているのだろう。それに船越先生がどうか言ってたし、大悟にとっては死と絶望の鬼ごっこといっても過言じゃないだろうな。

「ま、大悟のことはともかく、雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだからー」

「……………!! (パシヤパシヤパシヤパシヤー!）」

「……………ムツツリーニ?」

見ると、そこには現在厨房の責任者をいなくなつた大悟の代理で任されているはずのムツツリーニが、指が擦り切れんばかりにカメラのシャッターを切っていた。

「……………人違い」

「どこからどうみても土屋でしょうが。アンタ何してるの?」

「……………敵情視察」

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことをしたら撮られている女の子が可哀想だとー」

「……………一枚百円」

「2ダース貰おうー可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

はっ!?! いつの間!?!

「……………そろそろ当番だから戻る」

そう言つて、ムツツリーニは僕に写真を残して、教室の方に去つていった。

「全く、ムツツリーニにも困つたもんだね」

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」

「やだなく姫路さん。もちろん処分するに決まつてるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろう? もう凄くお腹が減っちゃったよ」

「あ、そうですね。入りましょうか」

「うんうん。早く敵情視察も済ませないとー写つてるのは男の足ばかりじゃないか畜生!」

「やっぱり見てるじゃないですかっ!」

「ご、ごめんなひやい! くひをひっぱらないで!」

バレて頬をつねられた。それと、足元では何故か葉月ちゃんが僕の腿をつねっていた。

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

ガチャリ

「お帰りなさいっ、お姉様っ」

出迎えてくれたのはクールで知的な美人、霧島翔子さんと、キュートで可愛い女の子、木下優子さんだった。

「わあ……二人とも綺麗で可愛い……」

「あつー！ さつきのトゲトゲバットのお姉さんですっ！」

姫路さんが感嘆の声を漏らす。確かに霧島さんと木下さんは綺麗で可愛かった。でも木下さんは恥ずかしいのか、若干顔を赤らめながら俯いている。ていうか、やっぱりさつきの大悟の状態は木下さんによるものだったのか、ざまあみろ。

霧島さんは長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。反対に木下さんは流石秀吉と二卵性双生児というだけあって、その端麗かつ幼さの残る顔立ちに茶色の髪。そして霧島さんとは真逆でミニスカートの生足というどこか大胆さを兼ね備える衣装だった。

そして、店名にもあった魔法少女よろしくなのか、肩から二の腕くらいまでに黒いフードを身につけ、胸元には白いリボン。更に二人ともキラキラしたステッキを持っている。まさにメイドと魔法少女の良いところ取りって感じだ。

くそっ。やっぱり雄二と大悟のヤツが心から憎い！

「それじゃ、僕らも」

「はい。失礼します」

「魔法少女×メイド……Best Match!」

「お姉さん達、きれ〜!」

「……お帰りなさいっ、お兄ちゃんっ」

「……お、お帰りな……さいっ、お姉ちゃんっ」

霧島さんと木下さんは姫路さんと葉月ちゃん、天ちゃんにも同じように出迎える。照れながら言う木下さんはなんかいつもの優等生って感じとは違って新鮮だなあ。これが大悟が前に言ってた『ギャップ萌え』ってやつなのかな？

「……チツ」

最後に雄二が渋々入店してくる。

「……お帰りなさいっ。貴方に永遠の愛の魔法を、ダーリン」

ちよつとアレンジされていた。

「霧島さん、大胆です……!」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さん。魔法が使えるのかな?」

「へえ、あれが大悟兄の言ってた雄二さんのお嫁さんか」

それぞれのリアクション。美波は見習ってどうするのか気になるころだ。

「……………」

すると、木下さんは僕達の集団をキョロキョロ見回していた。おそらく僕達の中に本命の大悟がないのに気づいたんだろう。まあ、今は大悟はそんな場合じゃないしね。

それが分かる、途端にしゅんとした表情になってしまった。

「……………吉井、岡崎は？」

「うーん、それが僕達にも分からないんだよ。どこにいるのかもさっぱりで」

「……………優子、ずっと岡崎の事待ってる。なんとか岡崎をここに呼べたりしない？」

「そうだな……………じゃあちよつと連絡してみるよ」

「あ、ならあたしに任せて下さい」

ポケットから携帯電話を取り出そうとすると、突然天ちゃんに止められた。

「……………貴女は？」

「あ、初めまして、あたし大悟兄の妹の天つていいいます。大悟兄を呼び出したいなら一番効果的な方法がありますよ」

「え？ そんなのがあるの？ 天ちゃん」

「はい。えーつと……………あ、あった。これです」

すると、天ちゃんを取り出したのは小型の音楽プレイヤーだった。

「ん？ これでどうやって大悟を呼び出すの？」

「まあまあ、見ていてください。じゃあ、再生しますね」

天ちゃんは音楽プレイヤーからイヤホンを外し、音がそのまま出る状態にする。そして何やら曲を選んでいるようで、それを再生した。

『悪い人はお仕置きしちやいますっ！ エボリユーシヨン☆チェーンジ☆』

流れてきたのは何かのボイスのようだ。でもやけに子供みたいな声っぽいけど、何のボイスなんだろ？

『炎上爆発！ 殲滅破壊！ 魔法のステツキで大変身☆ 我こそはゴツドウィザードの正当なる後継者！ その名もー魔法少女の弟子っ☆』

「『めるたあああああああああーんっ!!!』
ガシヤアアアアアン!!!」

すると、突然外の窓から何者かが大声を上げて教室に突入してきた。

よく見ると、それは良く僕が見知った馬鹿だった。

「……………何してるの、大悟?」

「何をしてるだどっ!? そんなことよりも明久! 今ここからめるたんの声が聞こえただろう!? どこだ、めるたん! まさか敵が現れたのかっ!? もう安心してくれ! 君を守る騎士であるこの大悟お兄ちゃんが助けに」

「お帰り、大悟兄」

「ん? 天? 何故ここにーん?」

天ちゃんの一言で、少し我に帰った大悟。そして周囲の状況をキョロキョロと確認しだした。

『めるたんの変身ボイスが流れている音楽プレイヤー』

『それを持っている妹の天ちゃん』

『大悟の後ろで淀んだ目をして禍々しいオーラを発している木下さん』

「お帰りなさいっ。一生覚めない夢の魔法を貴方に、お兄ちゃん……………いえ、あ・な・た」
♪

やけにドスの効いた木下さんの出迎え。

大悟は一通り確認し終えたのか、ふう……………と深呼吸をした。

ダッ（出口に走り出す大悟）

ガツ（その手を掴む木下さん）

ドカツ（そのままエスカ○ボルグで大悟を殴る木下さん）

ズルズルズル（そのまま木下さんに無理矢理席まで引きずられていく大悟）

……なんだろう、Aクラス戦以来から、段々優子さんがFクラスに負けなくらい過激になっていってるような気がする。

「木下さん、とつても行動力がありますね……羨ましいです」

「憧れるよね……ウチも見習わないと」

「あのお姉さん、ちょっと目が怖かったです」

美波、それは多分見習わなくていいやつだと思うよ。

――

――大悟視点――

「……はっ!？」

「あ、起きた、大悟兄？」

「ん、天か。俺は一体何を……つてか頭痛え……」

「ここはAクラスだよ、大悟兄」

目を覚ますと、俺は椅子に座っていた。隣には天が座っていて、同じテーブルには明久、雄二、葉月ちゃん、姫路、島田もいる。そういや、俺は確かFクラス連中と何故だか船越先生から逃げ回ってたんだったな。

そしたらここからめるたんの声が聞こえたから、つい我を忘れて突入してしまったぜ。

「そうか……って、Aクラスだとっ!?! まさかっ!?!」

俺は慌てて周囲を見回す。ヤバイ。Aクラスということはあるのヤンデレモンスターがいるに違いない。どうりでさつきから頭が何か鈍器で殴られたような痛みがするワケだ。理由は知らんが多分また俺はアイツにやられたんだろうな。

「落ち着いて大悟兄。優子姉なら今はいないよ」

「いないだと? それは本当か?」

「うん。さつき出ていったから明久さん達も皆知ってるから」

そうか、なら良かったと俺は安堵する。けど珍しいな。自慢するワケじゃないが、俺が来たとなればアイツは真っ先に俺にベタベタしてくると思ってたからな。買い出しにでも行ったんだろうか?

「何処に行くとかは言ってなかったのか?」

「確か、大悟兄が追われてるって事を明久さんと雄二さんが話したら『ちよつとそのゴミ始末してくるわ』ってエスカ○ボルグ持つて出ていったよ?」

「さらばだ野郎共、船越先生。今までそれなりに楽しかったぜ」

残念だ。まさかこんなにも早く身近な人達がいなくなってしまうなんて。けど不思議だ。悲しいとはあんまり思わん。

「あ、そうだ、天」

唐突に俺はとある事を思い出し、天に言う。

「ん? なに、大悟兄?」

「お前、めるたんのボイス流して俺を騙したよな?」

「え? ……あつ」

「前にも言ったよな? 二次元関係で俺を騙したり嘘ついたりしたら怒るぞってさ?」

俺の言葉に冷や汗をかく天。この様子だとそれを知った上でやってたなコイツ。

「え、ええつと、それは……その……あれですよ?」

「言い訳したら拳骨な?」

「……………」

「……………」

「おにいたまだいちゆき☆ ゆるちて?」

満面の笑みでそう返した天。全く、天は仕方ねえなあ。

「よし、天。少し離れてくれ」

「嫌だ」

「離れろな？」

「嫌です」

「離れろ」

「やだ、叩くでしょ？」

「叩かねえよ」

「ほんと？」

「シメるから」

「やーだー！ ごめんなさーい！ 許してー！」

アイアンクローをやるうとする俺の手を必死に両手で押さえて許しを乞う天。だがごめんで済めば落とし前なんていらねえんだよ。よくもこの俺の純情なるめるたん愛を利用してくれたな愚妹よ。兄の怒りを知れ。

「……………では、メニユーをどうぞ」

すると、霧島が立派な装丁のメニユーを渡してきた。ふむ、改めて見るとやはり霧島もそうだが文月の女子は逸材ばかりだ。メイドと魔法少女というアンバランスな組み

合わせにも関わらず両方の良さを引き出し、尚且つ互いの邪魔をさせない着こなし……やはり俺の目は間違えていなかったようだ。

クラスの内装も完璧だし、あの時、二時間以上かけて講義『メイドは何か？』ご奉仕とは何か？』をした甲斐があつたぜ。ま、それに加えてつい魔法少女についても話しちまつたけどな。ま、是非もナイヨネ！

「ウチは『天にも昇る魔法のふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

「じゃあ、あたしもそれにします」

女子勢は仲良くシフォンケーキ。

「僕は『聖なるスカイブルーウォーター』で。付け合わせに『マジック☆ソルト』があると嬉しいな」

「おい、それ綺麗な名前してつけど、水と塩じゃね？」

コイツどこでも塩水飲んでんな。

「さて、どうすつかなあ……雄二は何にすんだ？」

「そうだな……んじゃ、俺は」

「……ご注文を繰り返します」

遮るような霧島の声。え？ まだ俺達注文してねえぞ？

「……『天にも昇る魔法のふわふわシフォンケーキ』が四つ、『聖なるスカイブルーウォーター』と『マジック☆ソルト』が一つ、『メイドとの婚姻届』と『魔法少女との夜の営み』がそれぞれ二つずつでよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

突然の悪魔の言葉に叫び声を上げた俺と雄二。待つてくれ、俺の今までの記憶を辿る限り、メイド喫茶にも魔法少女にもそんなイヤらしさ満載なメニューもやり取りも存在しない！ 勘弁してくれよ霧島さんホント！ 冗談でも言つて良いことと悪いことがあるんだぞ！

「……では食器を~~ご~~用意致します」

カチャツ（女子勢の所に置かれたフォーク）

スツ（明久の前に置かれた塩）

スツ（俺と雄二の前に置かれた実印&朱肉 ラブホテルの予約票）

おかしい。明久の塩がまともに見えるくらいおかしい物が置いてあるんだが？

「待つてくれ霧島！ どうしてお前が俺達の家の実印を持つているんだ!？」

「そうだ！ それにもう一つの方はどうやって未成年じゃ用意するのは無理だろ！ どうやって手に入れたんだ!？」

「……さつき、凛花さんっていう人が用意してくれた。雄二の実印はお義母さんが貸してくれた」

「何やってんだ俺達の母親よおおおっ?!」

そうだったのか。全く相変わらず読めない行動をしやがるな。

よし、帰ったらあの人の常備してる酒という酒全部を下水道に棄ててやろう。やられたらやりかえす、俺はやるからな？ 息子の底力と怒りを舐めるなよ母さん。

「……では、魔法メイド少女とのラブラブ生活を想像しながらお待ちください」

「恐ろしい事を言うな!」

優雅にお辞儀をしてキツチンらしき方向に歩いていく霧島。

「……雄二、お前、絶対に召喚大会優勝しろよ。俺も全力で応援する」

「……当たり前だ。俺達の自由と操の為にも！ そうだろ、明久!」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

雄二の目からは並々ならぬ決意が感じられる。ふっ、いい目だ。それでこそ俺のダチだぜ。

「んで、葉月ちゃん。天ちゃん。キミ達の言っていた場所ってここなの?」

「あー、そうですよ。ここで馬鹿みたいにデカイ声でずっと騒いでました」

「なんか、嫌な感じのお兄さん達でした!」

『お帰りなさい、お兄ちゃん達っ』

『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか?』

と、新規の客の音が聞こえてきた。聞いたことのある胸糞な声だ。

「あ、大悟兄。アイツらだよ。さつきからずっと『中華喫茶は危ない』って言ってるの」「やっぱりそうだったか。つたく、暇人かってんだよ」

声の主は、さつき俺らのクラスで営業妨害を企てて母さんにボコられた常夏コンビだった。天がさつきからって言ったから、多分通ってんだらう。

『それにしても、この喫茶店は平和でいいな!』

『そうだな。さつきいった二―Fの中華喫茶は酷かったからな!』

『料理の中に虫が入ってたし、物騒な客までいるしな!』

「っ!」

「待て、明久」

勢いよく立ち上がった明久を止める。恐らく殴り飛ばしにでも行くつもりだろう。単純なヤツだ。

「大悟、どうして止めるのさ! あの連中を早く止めないと! しかもアイツら、凜花さんの事まで悪く言ってるんだよ!」

「馬鹿野郎。こんなおおっぴらに喧嘩沙汰なんて起こすな。そしたらFクラスの悪評は

余計に広がることになるんだ」

「けど、このまま黙って指を加えて見てるワケには……………」

「まあ待て。大悟、何か考えがあるんだな?」

「おうよ。こちとら何百とメイド喫茶に通ってる身だ。だからああいった害悪野郎が来ることも予想済みよ。見てろよあのゴミ共め、俺のプロデュースする魔法メイド少女喫茶で好き勝手はさせねえからなーあ、丁度来たな。おい、優子!」

「…………あつ、ただいま、ダーリン♪ で、何?」

丁度Aクラスに戻ってきた優子を呼ぶ。てかまじでダーリンとか止めてくれ。俺はダーリンはダーリンでもダリ○ラの方が好きなんだ。

さて、優子の手の甲とエプロンに鉄の香り漂うトマトケチャップらしきものが付着していることはさておき、俺は本題に入る。

「なあ優子。アイツら、見たことあるか?」

「え? ……ああ、あの先輩達? あれならさつきもこの教室に来て、全く今と同じようなこと喋ってたわよ。何なのかしら? 正直五月蠅いし、雰囲気も悪くなるから目障りなのよね」

分かりやすく顔を歪める優子。その後ろで霧島もコクツと頷いた。やはり二人にとつても愉快な客では無いようだ。

「そうか……それなら丁度良い。優子、衣装を貸してくれ」

「……流石に大悟が着れるサイズは用意して無いわよ?」

「待て! 俺がいつ自分用の衣装が欲しいと言った!?!」

「あ、でもどうしても大悟が欲しいなら、恥ずかしいけど私のでー」

「よし、落ち着け。お前のは必要じゃないからメイド服を脱ごうとするんじゃない!

この変態野郎!」

あろうことか、その場でいきなり着ている衣装を脱ごうとした優子を、俺は必死に止める。クソ! コイツ、俺が言うことなら躊躇い無く実行しようとしやがる! 前までそんな様子全然見せなかった癖に! なんて危ない野郎だ!

あと後ろで明久と天が残念そうな顔をしていた。

「いいか優子? 俺は予備の衣装があれば貸してくれって言ったんだ。ちゃんと意味を理解しような?」

「ダーリンがそう言うなら分かった。けど誰に着せるつもり?」

「それは見てからのお楽しみというヤツでー待て優子。どうして俺にエスカ○ボルグを突き立てる?」

「まさかとは思うけど……私の知らない他の女に着て欲しいから、とかじゃ無いのよね?」

「はっはっは、何を言ってるんだ？ 全く優子は馬鹿だな「大悟？ 質問に答えなさい？」 決してその様な愚かな真似はしないと固く心に誓います」

うん、これ以上なんか言うとか命が危ないな。もう臨死体験はごめんだ。

「……仕方ないわね。けど、もし嘘をついたらー」

「ついたら？」

「前歯以外、全部へし折っちゃうからね♪」

そうどす黒い笑顔で言い残して去っていった。前歯以外か……痛そうだ。

『あの店、他の食い物もヤバいんじゃないか？』

『言ってるな。なんせ、虫が入ってるんだもんな！』

『流石、あの問題児共がいるクラスだよな！』

わざとらしく大声で喋りやがる常夏コンビ。しかも俺達のテーブルは他の客からの注目の的になっていて、下手に動けない状況だ。

「大悟！ なんでもいいから早く連中を！」

「まあ待ちたまえよ明久君。おい、天、着付けの準備だ。秀吉にも連絡しとけ」

「？ なんで？ まあ別にいいけど……」

天が携帯を取り出して秀吉に繋ぐ。うし、これでいい。

「お待たせ、はい」

「お、サンキュー、優子」

と、今度は優子が俺特性デザインの衣装を一式抱えて戻ってきた。

「これで貸し一つね、大悟？」

「うむ、分かった。だそうだ、明久」

「分かったよ。じゃあ御礼に後で大悟を滅茶苦茶にしていから」

What!?! 明久、今貴様なんつった!?!

「ほんと？　ありがとう、吉井君♪」

「ちよつとまでテメエ！　なんで俺なんだよ!?!」

「じゃ、私そろそろ仕事に戻るから。今夜が楽しみね、ダーリン♪」

「待つて！　優子も本気にするな！　頼むから待つてくれえー!!」

俺の抵抗も虚しく、優子は嬉しそうにその場を離れていつてしまった。

「終わった……俺のきらびやかな二次元生活が終わった……」

「まあまあ、そこまで落ち込むことないじゃないか。で、これをどうするの?」

明久がそう呑気に訊いてくる。このクソ野郎後で絶対シバいてやる。そう思い、俺は恨みの籠った視線を明久に向けて言った。

「……コイツを着ろ」

「ふーん、だつてさ、姫路さん」

「え？ わ、私が着るんですか？」

「バカいってんじゃねえ。姫路が着たところでどうやってあの常夏コンピを倒すんだよ？」

「じゃあ、天ちゃん？」

「あたしの戦闘力はゴミです」

「それじゃ、美波？ でも、胸が余っちゃうとぶべらあつ！」

「ツギハ、ホンキデ、ウツ」

すげえ殺気だな。

「島田でもねえ。そしたら面が割れちまうだろうが」

「？ でも、葉月ちゃんじゃ丈が余りすぎちゃうし、秀吉は今いないし、誰に——まさか」

どうやら明久は感づいたようだ。そう、そのまさかよ、

「着るのはただ一人……お前だよ明久ア！」

「いやあああああつ！」

勢いよくテーブルから立ち上がり、拒否反応を示す明久。ふん、残念だったな馬鹿め。今のこの状況でコスプレが出来尚且つあの三年共を倒せるのは『女装が一番似合う男NO.1』の称号を持つお前にしか出来ないのだよ！

「やっぱ僕か！ そりや女装したら確かに顔はバレないかも知れないけどー！」

「分かってるなら話は早い。なに、心配するな。お前はブサイクだが女装すればそれなりに可愛い。その証拠としてダイゴブックスの先月の売り上げトップ3には女装明久二次元エロ漫画がランクインしてたんだぞ？」

「待って！ どうして他の正統派を差し置いてそんなおぞましいジャンルが上位にランクインしているんだい!? そもそも僕の女装なんてどこに需要があるのさ！」

「ちよつとまで明久。いいか、人間つてのは多種多様な趣味を持つ生き物なんだ。そうやってお前の価値観でおぞましいとか判断するんじゃないやねえ」

「そうですねよ明久さん。少なからずここには女装明久さん、略してアキちゃんを求める人がいるんですから、失礼ですよ？」

「くっ！ 兄妹そろって地味に正論を述べるとは……あと天ちゃん、その呼び方はやめてほしい！」

「ま、そのトップ3に貢献してくれた奴らがすぐ近くにいるわけですがな。はっはっは。」

「つてなわけで、着ろ」

「くっ！ そうはいくものか！ こんなところにいられない！ 僕は先に帰らせてもら痛あああい！」

「まあそう言わずに着てみるよ、明久。案外似合うかもしれないねえぞ?」

「そうね。せっかく用意してもらったんだから、逃げるなんて失礼よ、アキ」

逃げようとした明久はすぐさま雄二と島田に捕らえられ、地面に組伏せられた。特に雄二は顔がにやけていることから俺の考えに気づいたんだろう。

馬鹿め、Fクラスの売りは団結力と行動力。島田はともかく、雄二がお前の行動を予測出来ないとも思ってたのか?

「あの、吉井君。大丈夫ですか?」

そう言って倒れてる明久に近づくと姫路。

「ありがとう。まったく、大悟の卑劣さには驚かされるよ」

「あ、あはは……でも、きつと大丈夫ですよ」

「そうだよね。あんな卑怯な真似は——」

「吉井君ならきつと可愛いと思いますっ」

「そういう問題じゃないよ姫路さん!」

——

——明久視点——

「こ、この上ない屈辱だ………!」

「明久、存外似合っておるぞ」

「やっぱりあたしと大悟兄の目に狂いは無かったですねっ!」

連絡を受けてわざわざやってきた秀吉と、連絡した天ちゃんによつて、僕は男子トイレで着付けとメイク作業をさせられた。

凄いい、たった数分でここまで出来るなんて、けど全然ありがたくない。

「では、僕は喫茶店に戻るぞい。存分に悪党をのしてくるが良い」

「いやー、にしても可愛いですねえアキちゃんさん。もういつそのこと性転換でもしたらどうです?」

それだけは絶対に嫌だ、と思い、秀吉と別れてAクラスに戻る僕と天ちゃん。なんだろう。周囲の視線が凄く気になる。特に雄二と大悟の明らかに面白い生き物を見るような視線が。

『ていうか、そもそもよくあんな場所で食品なんて出せるよな』

『ま、教室のある旧校舎自体も汚いし、当然だよな』

あの連中、まだそんな会話を続けているのか。あいつらにとつてはただの嫌がらせでも、僕にしてみれば大事なクラスメートの命運をかけた喫茶店なのに。許せない。

「お兄ちゃん達っ」

しずしずと歩き、このクラスのウエイトレスであるかのように声をかける。こんな奴らにお兄ちゃんなんて死んでも言いたくないけど、仕方ない。

「なんだ？　ーへえ。こんなコもいたんだな」

「結構可愛いな」

舐めるような視線が僕にまとわりつく。物凄く気持ち悪い！

「足元にゴミが落ちてるよ？　ちよつと拾うね？」

「そうか？　さっさと済ませてくれよ？」

「ありがとう、お兄ちゃん。それじゃ、よいしょつとー」

「ん？　なんで俺の腰に抱きつくんだ？　まさか俺に惚れて」

「恋の！　マジカル☆バスタアアアツ!!」

「ごぼああっ！」

大悟直伝のバックドロップ成功。これで坊主先輩は凜花さんに続いて本日二度目の脳天痛打だ。

「き、キサマは、Fクラスの吉井……！　まさか女装趣味がー」

チツ！　生きてやがった！　仕方ない。応援を呼ぶとしよう。

「う、うう！　このお兄ちゃん、あたしの事乱暴しようとした！」

「ちよつと待て！ 乱暴してきたのはそつちだし、だいたいお前は男だとーぐぶあつ
！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「俺の目の前で、可愛い可愛い魔法メイド少女に乱暴とは、良い度胸だなクスが」

痴漢退治と暴行阻止という大義名分を得て雄二と大悟が登場。

「お前らは何を見てたんだ!? 明らかに被害者はこつちだろ！」

「ふざけるな！ さつきこの子に『僕達は変態のお兄ちゃんだよ』『今からエロい魔法を
かけてあげようグへへ』と言いなながら嫌がるこの子に迫っていたよなあ!」

「それに、コイツはこのウエイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！ 俺達の目は
節穴ではないぞ！」

いや、正直節穴だと思う。

「さあ可愛いお嬢さん。コイツは大悟お兄ちゃんと雄二お兄ちゃんが懲らしめてあげる
からな」

「そつちで倒れてる男は任せたぞ」

「え？ あ、うん。ありがとう、お兄ちゃん達つ」

うん。この坊主、どうしよう？ 取り敢えず秀吉と天ちゃんに押し付けられたブラ
と猫耳でも頭につけておくか。瞬間接着剤で。

「さて。痴漢行為と性的暴行の取り調べの為、ちよつと来てもらおうか」
「くっ！ 行くぞ夏川！」

「お、おい！ これ外れねえじゃねえか！ 畜生！ 覚えてろ変態めっ！」
坊主先輩は頭にブラと猫耳をつけたまま走り去つて行つた。

「逃がすか！ 追うぞ大悟！ アキちゃん！」

「おうよ！ 雄二！ アキちゃん！」

「了解！ でもその呼び名は勘弁して！」

二人の後を追つて僕達も廊下に飛び出す。

「ところで、こここの会計は？」

「俺達三人は何も頼んでいないだろ！ 姫路達に任せておけ！」

「それに、実印は回収済みだからな！ 問題はねえ！」

『……お会計は、夏目漱石を一枚か、坂本雄二と岡崎大悟を一名ずつのどちらかとなります』

『坂本雄二と岡崎大悟を一名ずつでお願い』

『……ありがとうございます』

……いいのかな？ 君達千円で売り飛ばされてるけど。

第二十五問 幼女の笑顔こそ明日への活力

——大悟視点——

く前回のあらすじく

常夏コンビを追いかけてたらお化け屋敷で変態二人に遭遇しましたとき。

「へ、変態だ！」

「どっちもな」

「この野郎！ 必殺恋のアキちゃん☆回天魚雷アタックを食らいやがれ！ 雄二、いくぞ！」

「おう、任せろ、大悟！」

「二人とも、その必殺技はやめよう！ 名前を聞く限り一番の被害者は僕のような気がする！」

そしたら、明久を持ち上げている間に逃げられた。畜生め。

——

——明久視点——

「んで、三回戦は不戦勝だったと」

「うん。なんか対戦相手が食中毒で棄権したんだ」

Fクラスにて、大悟が奢ってくれた焼きそばとたこ焼きを食べながら、僕は言う。

先輩達を逃がしてしまったあの後、メイド服から着替えた僕は、急いで召喚大会へと向かった。しかし待っていたのは相手が棄権という拍子抜けの結果だった。

「なあ、食中毒って、まさかとは思いますが、姫路の……」

「……そうじゃないと僕は思いたいよ」

うちの店でハズレを引いた客ではないと信じたい。うん……そう信じよう。

「でもありがとう大悟、お昼奢ってくれて。こんなにカロリーを摂取したのは久しぶりだよ」

「あ？ ああ、気にすんなよ。流石にお前があのお喫茶店で塩水頼んだの見たらちよつとな……」

「しよ、しようがないんだよ。仕送りにも限りがあるし……趣味にはお金がかかるのは大悟が一番良く知ってるでしょ？」

「それはそうだが……せめて最低限の生活水準は残しておけよ。じゃねえとお前

……例の姉さんとやらが来ちまつたりするんじゃないのか？」

うぐつ！　そ、それは困る……。もしあのアブノーマルかつ厳しい姉さんが今の僕の生活状態を見たらとんでもないことになる。それに学校の成績も重なれば、間違いなく僕の一人暮らしは終わりを迎えてしまう。

やっぱり、大悟の言う通り少し食費にも当てた方がいいかも知れないな、と考えていると、店で接客をしていた雄二が声をかけてきた。

「休憩は済んだか、明久、大悟。ならそろそろ戻ってきてくれ。ここらで一発新しい事をやるぞ」

「新しいこと？　どういうこと雄二？」

「明久。教室をよく見てみる」

言われた通り教室を見回すと、あの先輩達の妨害の影響なのか午前中に比べて客は少なく、ちらほら空席も見られる。

でも設備は完璧だし、飲茶も烏龍茶も申し分ない。接客だつて特におかしなところは無いと思うけど、雄二はこれ以上何をやるうというのだろうか？

「雄二、何か良いアイデアでもあるの？」

「任せておけ。中華とコレでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう言つて雄二が取り出したのは、刺繍も見事なチャイナドレスが四着。一つは水色

と白のチャイナドレス、二つ目は赤いチャイナドレス。三つ目は純白のチャイナドレス。そして最後はやけに裾が短い露出高めのチャイナドレスだった。

「ほう。若干裾が短いような気もするが、見事な衣装じゃのう」

「ホントだね。でも雄二、そんなのどこで手に入れたの？」

「気になり、僕はぼろりと口にする。」

「ああ。これはさつき岡崎兄妹とムツツリー二に用意してもらったものだ」

「ちゃんと着る人用にサイズは合わせてありますよー」

「この程度、造作もないぜ」

「……………一般技能」

そう言つて三人が僕と秀吉にグーサインを示す。女性用のチャイナドレスを作ることが一般技能なんてことは初めて聞いたけど、彼らにとつてはそうなんだろうな。

「じゃ、じゃがこれならば確かにインパクトはあるじゃろうな。これを着て宣伝用にするのじゃな？」

確かに姫路さんや秀吉が着たらインパクトは絶大だろう。しかもあのダイゴブックスとムツツリ商会によつて作られたチャイナドレスだけあつてクオリティもかなり高い。王道だけど、悪くない作戦——

「ああ。コレを——明久が着る」

それはインパクトが絶大過ぎる。

「ちよっ………！ お願ひ、許して！ メイドと魔法少女のコスプレの次にチャイナドレスまで着たら、きつと僕はホンモノだつて皆に認識されちゃうよ！」

「大丈夫だろ。どうせお前の女装趣味なんざ学年中が認知済みだからよ」

「そうですよ！ 明久さーアキちゃんなら今更チャイナドレスを着たところで誰も不思議に思いませんっ！ ノーカウントつてやつです！」

「無理がありすぎるよっ！ それにしつかりカウントされちゃうよ！」

「……………(スツ)」

「ムツツリーニ！ 今すぐそのカメラをしまうんだ！ 後天ちゃんは即刻その呼び方をやめるんだ！」

全く油断も隙もあつたものじゃない。楽しい学園生活の為にも、これ以上の変な悪い噂は避けたい。ただでさえ無駄に有名人になりつつあるんだから。

「僕はもう絶対に女装なんてしないからね！」

「何言つてやがる！ お前から女装を取つたら一体何が残るつていうんだ！」

「そうですそうです！ アキちゃんさんは唯一といつていいほどの長所を消し去るつもりなんですか!?! そしたら貴方の価値は駄々下がりなんですよ!?! もっと自覚を持つてください！」

「……………」

「明久。そんな全てに絶望したような顔をして泣くな」

そんなことないよね？ 僕にはもっと人間として良いところがあるよね？

「まあ冗談はこのくらいにして、これは秀吉と姫路と島田と大悟妹に着てもらおう」
なんだ〜冗談だったのか。ビックリしたあ〜。

「よ、良かったあ〜」

「「チツ、冗談か」」

「儂が着るのは冗談ではないのかのう……………」

「あれ？ でも天ちゃんも着るの？」

「はい。どうせなら女子は多い方が良いでしょう？ それに大悟兄がお世話になつてる
クラスの為なら喜んで手伝わせて頂きますよ！」

そう言つてニコツと笑う天ちゃん。ちよつと癖はあるけど、こんな外道キモオタの妹
とは思えない優しさだ。

「たっだいま〜！ つて、なんだ。アキつてばメイド服脱いじやつたんだ」

「あ……………残念です。可愛かつたのに……………」

「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな〜」

と、三人娘が帰宅(?)した。

「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見られるほど世の中は甘くないよ?」

「そういうことだ。というわけで姫路に島田、クラスの売り上げの為に協力してもらおうぞ」

獲物を逃さないように、チャイナを片手に退路を断つ。

「やれ! 明久!」

「お前の力を見せてやれ!」

「オーケー! へっへっへ、今こそ大悟から習った格闘術を見せてやる! さあ二人とも! 僕のコスプレを見たんだからそっちも大人しくこのチャイナ服に着替え痛あつ! マジすんませんでした! 自分チョーシくれてましたっ!」

速攻で美波に倒された。

「弱いな、お前……」

「しかも一撃かよ」

雄二と大悟が呆れたように言う。それにしても、どうして美波は男の僕より攻撃力が高いいんだろう?

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ? 前に須川はチャイナドレスを着た

りすることはない、って言ってたと思うけど」

美波が渋い顔をする。

「まあまあ落ち着けよ島田。それに明久が言ってたぜ、姫路と島田ならチャイナドレスが似合わないワケが無いってな？ そうだろ？」

「え？ ああ、うん。似合うと思うよ」

「えっ!？」

「それに、お前この前俺と秋葉原に行ったときチャイナドレスを着たコスプレイヤーを見て『大悟……チャイナドレスってさ、最高だよ。今度チャイナドレスを着た女の子の同人誌を頼めるかい?』って言ってたじゃねえか」

「ちよっ! 大悟! どうして今そんなことをばらすのさ!」

「っ!？」

よりにもよって姫路さん達の前で僕の新しい性癖をバラされるとは。けど確かにこの前大悟と新しいゲームを買うために秋葉原に行ったときに見かけたチャイナドレスはとても魅力的で、エロかった。

けど、正直に言うのはなんか恥ずかしいし、ここは上手くお茶を濁す感じで誤魔化そう。

「大好——愛してる」

「……お前つてさ、良い意味でも悪い意味でも嘘がつけねえよな」

おかしいな？ 台詞の選択を間違えたかな？

「よし、なら取引をしようぜ姫路、島田。やってくれるのなら、その褒美としてチャイナ姿の二次元版明久のエロタペストリーを特別価格でくれてやろう！」

「やりますっ！」

大悟の取引という言葉に途端に目の色を変えた姫路さんと美波。そんなにタペストリーが好きなのかな？ でも途中で一ヶ所聞こえなかった部分があったけど、何て言っただらう？

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね！」

姫路さんと美波がそれぞれ服を手にとると、ここそこそと大悟に何か耳打ちをした。

（岡崎、そのタペストリーはどれくらいで出来そう？）

（ざっと見積もって二週間つてところか。カラーの有無や解像度、表情やポーズなんかはそつちの要望に任せる）

（に、二週間ですか……わかりました。それまでにお財布は暖めておきますね）

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

と、突然葉月ちゃんがキョロキョロしながら尋ねる。

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだい！」

なんて良い子なんだ。美波の妹とは思えない。

「けど、ごめんね。気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの方は数がー」

「うおおおおおおおーっ!! (チクチクチクチク)」

「……………!! (チクチクチクチク)」

「えっ!? ムツツリーニ！ 大悟！ どうしてそんな凄い勢いで裁縫を!? っていうか

ムツツリーニはさつきまでいなかったよね!？」

「か弱き幼女の笑顔こそ！」

「……………明日への活力！」

そう言いながら高速でチャイナ服を縫っていく二次と三次を統べる男二人。なんだろう、格好いい台詞に聞こえるけど、凄く格好悪い。

「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」

時計を見ると、もうすぐ姫路さん達の試合が始まる時間になる。そして、会場に向かうため二人が教室を出ようとすると、雄二がそれを止めた。

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

「宣伝の為だ。そのまま召喚大会に出てくれ」

そういえば、召喚大会の三回戦からは一般公開が始まるんだった。折角人が集まるのだから宣伝をしておいて損はない。

「こ、これを着て出場しろって言うの……?」

「流石に恥ずかしいです……」

二人ともチャイナドレスを手に困った顔をしている。メディアを含めた観衆の前で、その格好で動き回るのは流石に抵抗があるのだろう。

でもこれは姫路さんの転校を防ぐためにも含まれてる。是非ともやつてもらいたい。

「二人とも、お願いだ」

言つて頭を下げる。姫路さんの為に、というわけじゃない。僕自身が姫路さんの転校を認めたくない。つまりこれは僕の単純なるわがままだ。それなら僕が頭を下げるのは当然のこと。

「明久……。お前は本当にーチャイナが好きなんだな……」

敢えてそれは否定しないが。

「もしかして吉井君、私の事情を知つてー」

「仕方ないわね。クラス設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希?」

「あ。は、はいっ! これくらいならお安い御用です!」

「それならすぐに着替えて会場に向かってくれ。自分達がFクラスの生徒だつてことを強調するのを忘れずにな」

「オツケー。任せておいて。行くわよ瑞希」

「はいっ」

チャイナドレスを抱えて教室を出ていく二人。あつちは任せておいて大丈夫だろう。

「よし、これで何とかかなりそうだな」

「そうだね。姫路さんと美波なら喫茶店の宣伝とFクラスの美人レベルのPRも出来て

一石二鳥ー」

「お、お主らっ！ 何をしておるのじゃっ!？」

すると突然、隣で秀吉が慌てたような声を出した。

「どつたの、秀吉?」

「なんだ? まさかまた問題を起こすようなヤツでもー」

僕と雄二が声のした方を見るとー

「んしよ、んしよ……」

「……ぶはあつ、よいしよつと……」

「……………!! (ボタボタボタ)」

「我が魂はああ……………めるたんと共にありいいいい…………… (ガクツ)」

『『『うおおおおおおおおおつ!!!』』』

まさかの教室のど真ん中で着替え始めた葉月ちゃんを見て大悟が気を失い、天ちゃんを見たムツツリーニが大量の鼻血を垂らして、更に周りではクラスメート達が二人の生着替えに歓喜していた。

「ちよ、何やってんだお前ら！ 特に大悟妹!？」

「は、葉月ちゃん！ 天ちゃん！ キミ達もこんなところで着替えちゃ駄目だ！ ちゃんと女子更衣室で着替えないとー!」

「あつ、そうなんですわね。分かったですつ」

「別に前を見られてるワケじゃないですし、あたしは下着くらい構いませんけどね、ムツツリーニさん? (グイッ)」

「……………!?!? (ブシャアアアアアッ!)」

「そんなのダメだよつ！ ああつ！ ムツツリーニが出血多量で死んじゃう!」

「おい！ 大悟の心臓が止まってるぞ！ 誰かAEDを持ってこい!」

致死量レベルに出血しているムツツリーニと、死にかけている大悟二人は、心から幸

せそうな表情をしていた。

ちなみに、ムツツリー二と大悟がいなかったら僕も天ちゃんの生着替えを見てみたかったというのは内緒。

――

――大悟視点――

『この胡麻団子やっぱり美味しいねー』

『そうだねー。噂じゃ危ないって聞いたけど、全然そんなことないね』

『しかも見ろよあの赤いチャイナ服の子、この女子生徒レベルたけぞ……』

『小中学生のチャイナ姿 k t k r』

『あの子と結婚したい』

姫路達が試合から戻ってきてから少し経ち、中華喫茶は少しずつではあるものの盛況ぶりを取り戻していった。最初は明久と雄二がチャイナ服に着替えた葉月ちゃんと秀吉と愚妹を連れて校舎内を歩き回ってきたらしい。良い宣伝効果だ。俺も葉月ちゃんと手を繋いで歩きたかったよこん畜生め！

そして試合会場では姫路と島田がチャイナドレスで試合をすることで更にそれが呼び水となり、客がぞろぞろと舞い込んできたようだ。やっぱり皆チャイナドレスが好きなんだなあ。

「良かったのう大悟よ。これで店の方はなんとか解決じやの」

ホールからチャイナドレスを着た秀吉が話しかけてくる。やべえ、何この可愛い生き物。三次元に少しでも興味があつたらこのまま襲いかかつてる所たぜ。

「そうだな。この調子ならすぐに遅れを取り戻せるだろうな」

「それに先ほどと比べて女性客も増えておるようじゃ。おそらく味についての噂も流れ始めたのじやろうな」

「ふっふーん！ このあたしが手伝っているのですから当然ですよ！」

と、横からひよこつと天が俺と秀吉の間に割り込んできた。

「どう大悟兄？ あなたの可愛い可愛い妹がチャイナドレスを着ていますよ？」

と言つてそれっぽいポーズを取る天。

「ああ、うん。そだな」

「え？」

「は？」

「それだけ？」

「なにがだよ」

「妹がチャイナドレスを着てるんだよ？」

「見りや分かるわ」

「違うよっ！」

急に怒鳴る天。なんなんだよ一体。

「もつと褒めてよっ！ 兄らしくもつと妹を褒め称えろ！ もつとデレデレしなさいっ
！」

「馬鹿かテメエは」

「うーわ、なにこの馬糞頭の兄うーわ、もうあたしやる気なくしたわー、大悟兄の心ない言葉で傷ついたわー、これはもう立ち直れないわー」

誰が馬糞頭がこの野郎。でもせつかく着て貰ったワケだし、流石になにも言わないのは可哀想か。

「あー、お兄ちゃん天のチャイナドレスが見れて嬉しいな。可愛いし実に似合ってる。流石俺の自慢の妹だなー」

「ありがと〜♪ 大悟兄大好き〜♪」

急に笑顔になり、そのまま仕事に戻っていった天。なんなのアイツ、前々から思ってたけどブラコンなの？

「……………同志（クイツクイツ）」

すると、突然同志が俺を呼んだ。

「どうした？ 何か困りごとか？」

「……………鳥籠茶の茶葉か切れた。それに餡子も残り少ない」

「なに？ それなら教室の近くの空き教室に在庫が置いてある筈だが？」

「……………明久に取りに行ってもらってる。けど遅い」

同志に言われ、ホールを見ると確かに明久の姿が見えない。空き教室はここからそこまで距離があるわけじゃねえし、何かあったのだろうか？

「しゃあねえな。ちよつと行つてくら。少しの間任せるぞ」

「……………（コクリ）」

そして、俺はFクラスを出て廊下を早足で歩いて目的の場所まで向かう。しかし何故か明久はおらず、扉は閉められていた。

中にいるのか？ と思い俺は空き教室の扉を開ける。

「おい明久。なにやつてんだお前は、早くストックを持ってこいよ」

「あ、大悟。丁度よかった」

そこには明久と一緒に見たことないヤツラがいた。おそらく他校の生徒かなんかだろう。見た感じ俺らと同年代くらいのチャラそうな男三人だが、何をしていたんだろう

か？

「おい、なんだコイツら？」

眉をしかめ、俺は明久に訊く。

「よくわからないけど、大悟と殴り合いがしたいみたいなんだ。だから後は宜しくね」

「はあ？　なんだそりゃ？」

俺が戸惑っていると、明久は俺を無理矢理教室の中に引き入れ、そのまま廊下に出て扉を閉めてしまった。

「おい明久、説明しろ。なにがどうなってるんだ？」

「なあ、コイツどうする？」

「面倒だから一緒にやっちまおうぜ」

そんな会話が目の前で聞こえる。随分と物騒な話し合いをしているようだ。

すると、そのうちの一人がいきなり拳を固めて俺に殴りかかってきた。

「お前に恨みはねえけど、ちよつと大人しくしてくれや！」

ーああ、やつと分かった。そういう輩ね。全く、久しぶりだなあ。

「恋のプリティー☆三連コンボ」

バキッ！ ボコッ！ グシヤッ！

——十秒後——

「クソツタレ！ 覚えてやがれっ！」

「てめえの面、忘れねえからな！」

「夜道に気を付けろよ！」

そう言つて立ち去るチンピラ達。いや弱すぎるだろ。俺一発しか殴つてねえぞ？

「お疲れ、大悟」

「ああ。にしてもなんだったんだアイツら？」

「おいお前ら、ムツツリーニが早くしてくれと言つてたぞ。それにさつきやけにボコボコになつてた連中を見かけたんだが？」

と、俺達を探しに来たらしく雄二が登場した。

「なんか急に殴りかかつてきてな。意味が分からねえ」

「僕も襲われそうになつたし、一体何だつたんだらうね？」

「売れ行きがよくなつたFクラスの妨害でもしに来たんだろ」

「あはは。そんな理由で絡んでくるバカはいないよ」

「そうだけ。うちの学校の生徒でもねえのに、んなことしてヤツラになんの得もないだろ」

「どうだかな、と言ひ雄二は茶葉と餡子を抱えて来た道を引き返す。明久もそれに続いて喫茶店へと戻っていった。んじゃ、俺も——」

「おや、ここにいらっしゃいましたか。岡崎君」

「あ?」

突然聞こえた澄んだ丁寧な口調。誰だろうか、俺は声のした方を向く。
そこにいたのは——

「……………高城さん?」

第二十六問 必要な犠牲となったのだ

——大悟視点——

「高城さん……」

「奇遇ですね、岡崎君」

これはまた、意外な人物と遭遇したものだ。それもこんな辺境の場所には訪れる可能性が限りなく低いであろうヤツが。

「まさか、アンタともあろう人がこんな所に来るとは思わなかったぜ、三学年主席の高城さんよ」

「ははは、文月の二大経済巨頭の一つ『ダイゴブックス』を経営する貴方にそう言っ頂けるとは光栄ですね」

俺の言葉に爽やかな表情でそう応えるこの美形の先輩の名は高城雅春。

スラリとした長身に艶のある清潔感漂う髪。細面と切れ長の目という俗に言うイケ

メンと呼ばれる顔つきをしている。

しかもこの高城という先輩は三年の主席を務める程の秀才でもあり、この学力至上主義の文月学園に置いて、全生徒の頂点に君臨している男だ。

そして何気に、ダイゴブックスの初期の頃からの顧客でもある。しかも内容は自分と姫路の絡みが中心の二次元オールカラー同人誌の為、姫路が好きということも理解済みだ。ま、当の本人は明久のことが好きなんだがな。

「んで、今日は何の用で？ また姫路の同人誌でもご所望かい？」

「はい。次は姫路瑞希嬢の抱き枕を所望し——失礼、そんなことではありません。実は生徒や一般のお客様が二年Fクラスについて色々な耳にしましてね。『学園祭のレベルを遥かに越えた飲茶を提供する中華喫茶店がある』『あの中華喫茶店は客に出す食事の中に虫が入ってる』と」

しっかし、この男の慇懃な喋り方、どうにも馴染まねえな。

だが、まさかそこまで色んな評判が広まっていたとは知らなかった。姫路達がチャイナドレスを着たことはかなりの収益効果になったようだな。だが同時に、あの常夏コンビがやらかしやがってくれた根も葉もない噂まで出回っているとはな。

「ですから、その噂の真偽が如何程なのかを確かめに本日はお伺いしたのですよ。友人

と一緒だね」

「友人？ いや、見たところ一人じゃねえか。どっかに連れでもいるんすか？」

「あら、ここにいたんですのね、高城君」

すると、高城さんの向こうからやってくる一つの影が見えた。その声から女性だと判断出来る。

「もう、高城君。貴方は一人で行動しない方が良いつて、散々言っているではありませんか」

「申し訳ありません小暮嬢。如何せん旧校舎という所は初めて来る場所なので迷ってしまっています」

高城さんの言葉にその女性は呆れたような表情をする。見た感じ、この人が高城さんの連れの女性の様だな。

「高城さん。この人か？」

「ええ、紹介します。私と同じクラスの小暮葵さんです」

高城さんがそう言うと、その女性は俺の前に出てくる。

「貴方が噂の兄貴……岡崎大悟君ですね？ 初めまして、私、三年A組所属の小暮葵と

申します」

「あ、ども。岡崎大悟つす」

スカートの端を摘んでちよこんと礼をする小暮先輩。結び上げた髪に濡れた瞳。制服の上からでもハッキリとわかるほどの魅力的な身体のラインはどこか妖艶な雰囲気を感じ出している。単純に言うところのエロゲの人気種族である色欲魔、サキュバスみたいな感じの人だった。

おい、その仕草は普通はロングスカートでやるもんだろ。そんな短いスカートでやつたら女の花園をガードする唯一の生地が見えてしまおうとーあり？

「……俺の気のせいなら済まない。小暮さんとやら、アンタ何でその長さでスカート持ち上げたのに下着が見えないんだ？」

「下着を穿いていないからでしょうか」

俺のセクハラともとれる質問にも平然と答える小暮さん。同志が聞いたら真っ先に鼻血を噴射していただろうな。

「……………」

「あら、どうかしましたか岡崎君？　もしや……………スカートの中が気になっているのですか？」

「いや、別にーって、なんで近づいてくるんですか？」

「気になるのですしたら……………ご自分の目で確かめてみますか？　私は構いませんよ？

(ピラッ)

そう言つて身体をぐいつと近づけてくる小暮先輩。実際近くで見るとかなり妖艶で綺麗な女性だと思つた。そんな女性が自らのセーフティゾーンを晒そうとしてゐる。普通の男ならここで性欲がクライマックスを迎えそのまま彼女を押し倒して無理矢理制服を脱がしてレツツトブルダークネスしている事だろう。

だが、甘い小暮先輩よ。誘惑のやり方を誤つたな。

「いや、別に興味ねえな。それに、あんまり男の前でそんな誘惑じみた真似は控えた方がいいぜ」

「あら……そんな事を言うなんて、随分と紳士的なお方なのですな」

「いえ、小暮嬢。彼は本当に興味が無いのですよ。何故なら岡崎君は自他共に認める『二次元をこよなく愛する男』ですからね。ですから我々三次元では彼を誘惑することは不可能なのですよ」

高城さんがそう助け舟を出す。分かっているようで

「まあ、それは残念ですわ。でも、せっかく良い体つきをしていらつしやるのですから、少しは三次元の方にも興味を持たれては如何でしょうか？ 私でよければ、エスコートして差し上げますよ？（クイックイツ）」

「はは、なら俺のダイゴブックスの専属コスプレモデルになつてくれるのなら考えますかね」

小暮先輩の顔つき、凹凸のハッキリした身体、そして男を惑わす誘惑的な言動。柿崎みるくちやーいや、工藤とはまた違った魅力がある。

工藤が男を釘付けに『する』やり方なら、この小暮先輩は男を釘付けに『させてしま』うやり方。言葉は一緒でもその本質が大きく違う。

これをエロゲヒロインの特徴で例えますとねえ、工藤は『最初は友達だと思つてたけど徐々に女性として意識するようになったスポーツ系幼なじみ』で小暮先輩は『密かに年下の男主人公に好意を持つているけどそれが伝えられない学園マドンナのエロい先輩』なんだよな。まあどちらも素晴らしいってこと。

「ふふ。噂通りの面白い方ですね、岡崎君。少し興味が湧いてきてしまいましたわ」

「そうですか、それは光栄ですね。じゃあもし本当に専属コスプレモデルになっていただけののなら是非こちらまでお電話を」

「そうですね。機会があれば是非お電話させて頂きますわ」

俺は手作りの名刺を小暮先輩に渡す。うし、これでまた売り上げの増加が見込めるぞ。

「流石は岡崎君。小暮嬢をこうも容易く手込めてしまうとは、やはり兄貴と呼ばれる男は伊達ではないようですね」

「おいおい高城さんよ。勘違いはよくねえな。女性つてのは『作品』と一緒にだ。造り上げ

る人間がクズなら、女性だって華やかになるものもならねえぜ。そんなんだからアンタは二学年の間で『学園長とデキている』なんて噂が立つんだぞ？」

「おや、岡崎君が冗談を言うとは珍しいですね。私とあの学園長先生がそのような関係などと」

「姫路もそれ知って『気になっていたのにながかりです……』って言ってたしな」

「……な、何をおっしゃられているのかが些か理解に欠けますね。で、ですが所詮は根も葉もない噂、何も気にすることは」

「そういうや最近学園長がダイゴブックスのお得意様になってな。しかもその内容が高城さんとの年の差イチャラブ同人誌で」

「岡崎君、嘘だと言ってください」

「悪いな高城さん。俺は嘘つきが嫌いなんだ」

「……………」

「高城君。吐くのならもつとエレガントにお願いします。バカがバレてしまうでしょう？ それに今のは岡崎君の嘘ですよ」

「大丈夫つすよ小暮先輩、もうバレてますから」

流石明久の上位互換と呼ばれてる男だ。こんな簡単な嘘に騙されるとは。なんていうか、明久と同じ部類の臭いがプンプンしやがる。

高城さんを見てみると、『頭が良い』と『人間として出来ている』は別物なんだなとほとほと思わされるんだよな。

「つたく、高城さんといい午前中のアイツらといい、三年は変な面白い人ばかりですね」「アイツら？ それはどちら様ですか？」

げぼげぼと吐き終えた高城さんが俺に訊いてくる。くせえ。

「常夏コンビーリーいや、常村と夏川つつう先輩共なんすけどね」

「ああ、彼らなら私達と同じAクラスの生徒ですよ？」

マジかよ。あんなヤツらが勉強できんの？ 小物感漂うチンピラもどきのくせして。

「あの二人がどうかなさったのですか？」

「……まあ、なんつーか、午前中にそいつらが営業妨害をしてきてな」

「営業妨害……ですか？」

俺はあつたことを高城さんと小暮先輩に話した。

「なるほど……確かにあの二人は普段からあまり言動が良くは無いですからね。そんな行動に出ても何も不思議には思いませんが……」

「ですが、どうしてそんな後輩の出し物にちよつかいをかけるのでしょうか……皆目見当も着きませんわ」

「ですよ。俺もさっぱり分かりません」

「うーん……あ、そういえば、少し気になることがありました」
「なんすか？」

俺が訊くと、高城さんは間を置いて言った。

「最近、あの二人が教頭の竹原先生とよくいる姿を見かけます。しかもそれが廊下の隅や空き教室などの人目につかない所での密談をよくしているみたいなのです。ですから岡崎君、あの三人は何かよからぬ事を企んでいるかも知れないので、気を付けた方が宜しいかと」

――

――高城さん達と別れ、中華喫茶に戻り、しばらくした頃――

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです……」

「お前ら、一体何したんだよ……明久」

「あ、いや、あれも勝負だったからさ」

試合から戻ってきたかと思えば、いきなり妙な雰囲気舞い込んできた。島田のジト目と姫路の悲しそうな目に言い淀む明久。

話を訊くと、どうやら次の相手がまさかの姫路達だったらしく、流石に正攻法じゃ勝ち目が無いと判断した雄二によって卑怯な手を使ってどうにか勝ちを奪ったらしい。いくら勝負とはいえ友人にさえ容赦ない雄二のやり方には色んな意味で脱帽だ。

「二人ともそう言うな。お前らの代わりにしっかり俺達が優勝してやるから」

かたや雄二は全く悪びれる様子なし。流石人間の皮を被ったクソ野郎だ。

「それはそうと、アキ。本当に葉月に手を出そうとしてるわけじゃないわよね？」

「野郎共、殺せ」

『『了解』』

よし、始末する。

「言葉に気を付けてよ美波。クラスの皆が殺意の籠った視線を向けながら釘バットを構えているじゃないか」

「ばれたか。しかし葉月ちゃんに手を出そうとするなど万死に値するぞこのロリコン野郎が。そんな愚か者はここで始末してやろう。」

「岡崎、皆、釘バットはまだよ。さあアキ答えなさい」

「心配しなくていいよ。僕はそもそもAカップに興味はないんだ」

「そ、そうなの……あ、あはは。それは安心ね」

島田はそうやって軽く笑い、少し後に目を逸らした。そして散開する野郎共。まあ俺は幼女なら胸のデカさなど関係はないがな！ はっはっは。

(……女は胸じゃないのに。アキの、バカ……)

？ 何かボソボソ言っているようだがよく聞き取れないな。まあいいか。

「あ、皆さんお帰りなさい」

「あ！ バカなお兄ちゃん！ お客さんがいっぱい来てくれたんだよ！」

葉月ちゃんと天が明久達の姿を見るなり、トトトツと駆け寄ってくる。

「そうだね。葉月ちゃん、天ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んにゃく……」

明久に頭を撫でられ気持ち良さそうな葉月ちゃん。クソウ可愛い!! 俺もなでなでしたいっ!!

「大悟兄、あたしの頭なら撫でてても良いよ？」

「……………」

「……………笑ったよね？ 今鼻で笑ったなあ!? このおー!」

目の前で騒ぐ馬鹿はほつといて、厨房に戻る。あ、そうだ

「なあ雄二、ちよつといいか？」

「なんだ、忙しくなるんだから手短にな」

隣にいる雄二に声をかける。

「実はさつき、三年の先輩達と会ってな。妙なことを訊いたぜ」

「妙なこと？」

俺は明久や姫路達に聞こえないように雄二と一緒に厨房まで移動し、小声で話す。

「何でも例の常夏コンビだが、教頭と何か繋がりがあるらしい。それも学園祭が始まる

以前から頻繁に一緒にいるところを目撃してんだと。今回のヤツらの妨害と何か関係があるんじゃないか？」

「竹原と……だど？」

俺の言葉に、雄二は腕を組んで考え込む。

「竹原が常夏コンビと絡んでるか……大悟、お前はど思う？」

「そうだな、流石に教頭がFクラスの売り上げの邪魔をしてやろうなんて小せえこと考えてると思えねえし、別の目的があるんじゃないか？」

「……お前もそう思ってたのか」

「まあな」

どうやら雄二と考えていたことは一緒のようだ。

「それに、さつき明久を襲おうとしたチンピラも引つ掛かってる。明久が何かしたなら話は別だが、アイツらは何か目的があつて明久を狙ったんだ。ただの一般客がそこまでするんじゃない」

「つまり、竹原は常夏コンビだけじゃなく、他校の生徒とも繋がってるってことか」

雄二の言葉に俺は頷く。あのチンピラ達の喧嘩スタイルを見てわかった。あれは俺や雄二の様に『相手を倒す』という目的でやってたのではなく『喧嘩以外の目的を果たす』為だったのだ。

それにここは学校の敷地内、警備もしっかりしていて下手に喧嘩沙汰なんて起こせば一般客だろうがすぐにしよっぱかれる。喧嘩するのが目的ならどこか別の場所にでも連れていくはずだ。

けどそれをしなかったことは、『リスクを侵してまで明久を潰す』ための理由があつたということになる。

「ふむ、そうなつてくると目的はFクラスじゃなさそうだな」

「そうなのか？」

「考えてもみろ。単純にFクラスの妨害がしたいならわざわざチンピラなんて雇わないだろ。しかも今まで回りくどいやり方だったのがいきなり直接潰しにかかってきたんだ」

つまり、先ほどのチンピラ狙いはFクラスを運営を邪魔することではないことになる。

「だが、何故竹原は明久を潰そうとしたんだろうな」

「恐らく、例の試験召喚大会が絡んでいるだろう。偶然にも、常夏コンビも試合に参加しているみたいだからな」

雄二の持つていたトーナメント表を見ると、明久と雄二とは反対のブロックに常夏コンビの名前がある。高城さんはヤツらとクラスが同じって言ってたから実力は申し分

ない。間違ひなく決勝まであがるだろう。

「じゃあ、狙いは明久だけじゃなく雄二もか。でもわざわざここまでして明久達の優勝を阻む動機が分からん」

「まさか竹原がプレミアムチケットを狙うわけがないだろうしな」

まあ、俺としてはそうなつてくれれば優子と地獄のデートに行かなくてよくなるし、大歓迎なんだけどな。

「こうなると、あのババアは俺達をプレミアムオープンチケットを回収させる為に戦わせてるんじゃないか、別の目的を隠して参加させてる可能性が高いな。その目的は恐らくーもう一つの景品の『白金の腕輪』が関わっているんじゃないか？」

「白金の腕輪？　なんだそりゃ？」

「俺もよくは知らないが、なんでも試召戦争において特殊能力が使えるアイテムらしい。竹原が狙っているのは間違ひなくこの白金の腕輪だろう。だから確実に優勝を狙えるように常夏コンビを大会に仕向けたんだ。そして万が一のことを考え、チンピラ共を明久に差し向けた。こう考えれば今までの出来事に納得がいく」

「そうか……だがまだ疑問だ。竹原の動機が分からねえ。どうしてそこまで白金の腕輪に固執する？　それにあの婆さんだって、確実に腕輪を手に入れたいなら、霧島や優子みたいなAクラスに頼む筈だ。わざわざFクラスのお前らに頼む理由が無い。デメ

リットがでかすぎる」

それに竹原も竹原でどうして常夏コンビなんだ？ 普通に考えれば主席の高城さん辺りにでも頼みそうなものだが。何かあの二人に有益な取引材料でも持ってるのかな？

「……それなんだが、一つだけ推測がある」

「なんだ？」

「Aクラスじゃなくわざわざ何故俺達に回収を依頼したのか、それは俺達が特別だからでも、明久が観察処分者だからということじゃなく、俺達がFクラスだからなんじやないか？ 点数が低い俺達に白金の腕輪を回収させるということは、逆に高得点を持つ生徒に白金の腕輪を手に入れられたら困るということ。そもそもあのババアは生徒が誰と一緒にしろうがどうでもいいと思う人間だ。プレミアムオープンチケットつてのは俺達を動かすための建前なんだよ」

「マジかよ、じゃあ、白金の腕輪に何かあるつてのかわか？」

「考えられるのは……不具合、それも高得点者が使うと壊れちまうとかだな。それから竹原が白金の腕輪を常夏コンビに使わせたい理由にもなるし、召喚大会は文月のスポンサーが多く見に来るマンモスイベントだ。その前で白金の腕輪が欠陥品だということバラされれば、その開発責任者のババアはどうなると思う？」

雄二に問われ、俺は顎に手を当てて考える。

「……………責任が問われるな。最悪学園長っていう立場も危ぶまれる」

「そうだ。だからババアはプレミアムオーブンケットのジnkクスを利用して俺を焚き付けた。それに設備の改修という要望をのんだことで俺達がそう簡単に断れなくしたんだと推測出来る……………あのババアめ、とんだ策略家だな」

なるほど、まさか教頭がそこまで企んでいたとは知らなかった。たかが設備の改修と俺達の未来を守る為の戦いだと思ってたが、そこまで話が壮大だったとはな。

これが高城さんの言ってた『よからぬ事』なんだろう。

「……………にしても、相変わらずお前はすげえな雄二。まさかあの状況からそこまで予測して話が立てられるなんてのはそうそう出来るモンじゃねえ。流石神童と呼ばれた男だな」

「いや、大悟のあの話が無ければここまで推測は出来なかった。こっちこそ助かったぜ、大悟」

雄二はそう言っつて俺の肩を叩く。

「さて、そろそろ準決勝だ。今回は俺達だけじゃなく、秀吉とムツツリーニ、大悟にも協力してもらおうからな」

「分かった。こっかが俺達にとつての正念場だな……………」

見ると雄二の目が今までにないくらいガチだ。だがそれは俺とて同じ。何故なら次の相手は、

「霧島と優子か……やはりあがつてきやがったかコンチクショウ！」

「ああ。だがあんなバケモノどもとまともに勝負するほどバカじゃない。うまくやつてやるさ」

ちなみに準決勝の教科は保健体育。何故こんなところで保健体育を選んだのかと聞くと、雄二は作戦の内だと言った。霧島と優子が勝ち上がってくるのを予測し、敢えて保健体育にしたらしい。

「雄二、分かつてるとは思うがな、ここで負けること……それは同時に人生の敗北（結婚）を意味する。俺も全力で力になる……だから死ぬ気で勝て！」

「当然だ。絶対に負けるわけにはいかない……俺達の自由の為に……！」

「例え、明久の命をかけてでも!!」

俺と雄二は互いにハイタッチを交わす。やっぱり友情というものはかけがえのないものなんだなあ。

果たして、あの霧島と優子がどんな手を使ってくるかな。

(だが悪いな大悟、万が一の時になったら、お前には犠牲になってもらう)

――

――明久視点――

『お待ちせいたしました！ これより準決勝を開始したいと思えます！』

僕らが到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。どうやら時間ぎりぎりだったみたいだ。

『出場選手の入場です！』

お客さんの前に立つ。僕らの向かい側には対戦相手の霧島さんと木下さんがやってきた。

「……雄二。邪魔しないで」

「Fクラスの分際で、アタシとダーリンの未来を汚すつもりかしら？」

「そうはいかない。俺も大悟もまだやりたいことが沢山あるんだ！」

雄二がそう言うのとステージ脇で構えていた大悟がコクコクしているのが見えた。お誘いがそこまで嫌なら断ればいいのに、素直じゃないなあ。

「……雄二、そんなに私と行くのが嫌？」

うっ！　こ、これは必殺上目遣い！　霧島さんみたいにクールな女の子がやると、その威力はもはや無限大だ！　ここで酷いことを言える奴は人間じゃない！

「ああ。嫌だ」

コイツは人間じゃない。

「……やっぱり、一緒に暮らしてわかり合う必要がある」

「そうね。だから力づくで排除しなきゃいけないようね」

きっぱりと拒絶されたのに全く気にしていない霧島さんと、こっそりエ○カリボルグを忍ばせた目の濁った木下さん。なんていうか、相性だけ見れば雄二と大悟に似てると思う。あと木下さんが最近怖い。

「ハッ！　残念だったな！　そんな寝言は俺達に勝ってから言うことだ！」

「……分かった。そうする」

言い争いも終わり、いよいよ準決勝が始まる。

「雄二、作戦はどう？」

「任せておけ。抜かりはない。――もう演技はしなくていいぞ、秀吉っ！」

何故か雄二が目の前の木下さんに向かってそう呼ぶ。いやいや、確かに外見は秀吉そっくりだけど、中身は秀吉のお姉さんーって、そうか！

「二人がそっくりなのを利用した入れ替わり作戦か！」

「ご名答だ、明久。さあ秀吉。お前もこっちにー」

「……………ふふっ」

と、突然木下さんが口元に手を当てて笑う。

「秀吉。もう木下さんの演技はいいから、早く僕らとー」

「秀吉？ 秀吉って、あのゴミのこと？」

「く……………すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……………」

木下さんが大悟の方を指差す。するとそこにはボロボロにされた拳銃手足を縛られた秀吉の姿があった。

「バ、バカな！」

「ひ、秀吉?! どうしてそんな姿に！」

「雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

雄二を見て笑みを浮かべる霧島さん。戦争の時は幼なじみという立場が有利に働い

たけど、今回はそれが仇になった。

これで雄二の作戦は失敗だ。

「ま、匿名の情報提供もあつただけだね」

匿名の情報提供？ 誰がそんなことを。僕ですら知らなかったこの作戦をバラすなんて、常に僕らをマークしていきなさいとできないはずだ。

けれどもそんなことより、チャイナドレスで縛られている秀吉は物凄く目に悪い。いけない気分になってしまいそうだ。

「……………!! (パシヤパシヤパシヤパシヤ!)」

「……………!! (サラサラサラサラサラッ!!)」

「ムツツリーニ！ 大悟！ いつの間に!?!」

気がつけば、カメラを構えたムツツリーニとスケッチブックを持った大悟が一瞬で僕らのそばに出現していた。

「二人とも！ 撮影にスケッチなんかしてないで、早く秀吉の縄をほどいてあげてよ！ (その写真とイラスト、後で売って欲しい!)」

「明久。本音が混ざっているぞ」

しまった。つい僕の正直な部分が出ちゃったみたいだ。

「……………名残惜しいが、仕方ねえな」

「……………了解」

二人は素早く秀吉に駆け寄り縄を解いていた。

「二人とも、大人しくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

「くうっ……………!」

木下さんの降服勧告に雄二が顔を歪める。雄二が立てた作戦が見破られてしまった以上、正面から戦うしかなくなってしまった。でも学年主席の霧島さんとそれに準じた成績を持つ木下さんに僕らが敵うワケがない。

せめて、木下さんだけでもどうにか出来ないか……………!」

「仕方ねえ……………こうなったらあの手段を使うしかねえ!」

すると、雄二が高らかにそう言った。

「雄二!?! まだ何か策があるのかい!?!」

「ああ! 少し手荒だが、効果はある! ……………大悟、お前の出番だ!」

すると、後ろで待機していた大悟がこっちに来た。そういえば、秀吉やムツツリー二とは違って大悟の役割が分からない。一体何をさせるつもりなんだろうか？

「ほほう、雄二。ついに俺の出番というワケだな！ さあ命令をくれ！ どんな内容だろうと確実にこなしてや」

「唸れ俺の黄金の右手!!」

「ぐばあつ!」

すると、突然雄二が大悟の首元に向かって全力の手刀を放った。それにより大人しくなった大悟。

(秀吉、頼んだぞ)

(うむ、了解じゃ)

そして秀吉の登場、あつ……なるほど、そういうことか。

「優子！ 俺はお前にどうしても伝えたい事があるんだ！」

「えっ……な、なに？」

本人と全く区別がつかないほどの物真似で話す秀吉。流石に予想外のことだったのか、先ほどまで余裕っぷりがあった木下さんにも動揺が見られた。

「だから優子。少しの間目を瞑って欲しい」

「？ う、うん。分かったわ」

言われた通り目を瞑った木下さん。

(よし、明久。コイツを木下姉まで運ぶぞ)

(うん、了解)

「ぐうっ……ゆ、雄二、貴様アツ……!」

「寝てろキモオタ」

「へぶっ!」

おっと、危ない危ない。雄二の手刀で一度でおちないなんて相変わらず頑丈なヤツだなあ。

そのまま僕と雄二で周りに怪しまれないように肩を貸す振りをして木下さんのもつまで大悟を抱えて持つていく。

(よし、行くぞっ!)

(うん!)

そして、そのまま大悟を木下さんの目の前で手放してすぐに元の位置まで戻る。

「もういいぞ、目を開けてくれ」

「うん。けど一体何を……っ!」

大悟の体はそのまま木下さんに向かって倒れ込む。そしてバランスよく木下さんがそれを受け止めた為、端から見れば大悟が木下さんにいきなり抱きついたようになっ

た。

突然のことでアワアワする木下さんに、秀吉からのとどめの一撃。

「これが俺の本心だ。俺達はこの大会で優勝して、お前と一緒にデートがしたい!! 最後に……この俺、岡崎大悟は世界中の何よりもー木下優子を愛しているっ!!!」

力強い声での告白。流石演劇部に所属しかつ大悟と付き合いが長い秀吉だ。ちゃんと特徴を捉えた口調になっている。

でも、優子さんは大悟の事を知り尽くしていると思うし、いくらそっくりといつても声真似なんかで騙せるだろうかー

「……………アタシも世界一大悟が好き、もうどこにもニガサナイ。ずうつと永遠にね……………ダーリン♥」

今までに見たことないくらいどす黒い瞳をして気絶している大悟を激しく抱き締め

る木下さん。どうやらいけたみたいだ。

「……………優子?」

「悪いな大悟! これも俺達の勝利の為だ!」

「よし! これである意味最狂の敵は封じたぞ! 後は君だけだ! 霧島さん!」

「……………っ!」

よし、ここからは僕の出番だな。霧島さんなら、大悟と同じ方法が使える!

(雄二。僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言つて欲しい)

(考えだど? よく分からんが、了解だ)

僕の指示だとばれないように雄二の影に身を隠す。そして再び秀吉にこっちに来る

ように促した。よし、やるぞ!

〈翔子、俺の話を聞いてくれ〉

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

雄二は演技だと感づかれないように、真剣な表情をしている。

〈お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ〉

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

「……………雄二の考え?」

霧島さんが首を傾げる。よしよし

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ!」

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいーって、ちよつと待て!」

雄二が慌てて僕の方を向こうとする。けどそうはいくものか! 強引に雄二の頭を押さえつけてやる!

「……雄二」

霧島さんはうつとりとした表情で雄二を見ている。よし、あともう一息だ。

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう」

「だつ、誰がそんなことを言うかボケエツ!」

「うるさい! くだばれ!」

「くペっ!」

後ろから頸動脈を押さえる。これで聞き分けがよくなるはずだ。

「……雄二?」

霧島さんが続きの言葉を待ち構えている。お任せください。貴女の期待に応えましょう!

「俺は大会で優勝したら、お前にプロポーズするんだ！ 優勝したら結婚しよう！ 愛してる、翔子ー!!」

秀吉によって最後の台詞が紡がれる。

「……雄二、私も愛してる……♥」

霧島さん攻略成功。これでもう向こうに戦える人間はいなくなつた。

Aクラス 霧島翔子 UNKNOWN

&

木下優子 UNKNOWN

VS

Fクラス 吉井明久 52点

&

坂本雄二 UNKNOWN

「よしっ！ 僕と雄二の勝利だ！」

物言いがつく前に勝鬨を上げておく。

『ただいまの勝負ですがー』

「霧島さん、木下さん。僕らの勝ちで良いよね？」

「……それは」

「……でも」

「翔子、愛してる（秀吉）」

「可愛いよ、優子（秀吉）」

「……私達の負けで」

『分かりました。坂本、吉井ペアの勝利です！』

冷めた観客の視線の中、僕らは勝ち名乗りを受けた。

第二十七問 悪鬼羅刹と閻魔大王

——明久視点——

「それじゃ、僕らはこれで！」

試合も終わったので、罵声が飛んでくる前に教室に戻ることにする。

「明久。なかなかの機転であったな」

「……………作戦勝ち」

「ありがとう。皆の協力があつたおかげだよ」

これで残るは決勝戦のみ。あと一つ勝てば目的は達成される。姫路さんの転校を阻止することが出来るんだ。

「……………(チヨンチヨン)」

「ん？ どつたのムツツリーニ？」

「……………雄二と同志は、あのまままで？」

「え？ 別にいいんじゃない？ 良い機会だし、雄二も大悟も素直になるべきだと——」

「……………一服盛って持ち帰ろうとしてる」

ムツツリーニが指差した方を見ると、そこには虚ろな目をしてタキシードに着替えている雄二と大悟だった。

「き、霧島さん！ 雄二には決勝もあるから棄は許して！」

「あ、姉上も待つつのじゃ！ まだ大悟には中華喫茶の仕事が残っておる！」

その後、二人が取り乱してきたけど、僕が雄二の腹を殴り、ムツツリーニが大悟に改造スタンガンを押し当てて冷水に浸けたらなんとか正気を取り戻してくれた。

――

――大悟視点――

霧島達との試合から何故か記憶がすつとび、意識が戻った時には既に試合終了しており、俺達はFクラスへと戻り始めていた。明久曰く、どうやら試合は勝つたようであった。

ただ、どうして俺に詳しいことを教えてくれないんだろうか？ あと優子の俺を見る目がいつも以上に恍惚としていたんだが？

「ところで姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

この時間は姫路や島田や葉月ちゃんや天はウエイトレスバカをやっているはずだ。先に戻った秀吉と同志も仕事を再開しているだろう。

すると、突然俺達の前に同志が駆け寄ってきた。そして一言、

「……………ウエイトレスとメイドが連れていかれた」

——

——Fクラスにて——

「こりやあどういう事だあ!？」

目の前に広がる悲惨な光景を見て俺は叫んだ。

テーブルや椅子は倒され、インテリアや飲茶用のお椀や器は無惨にも破壊されて、床にその破片が散らばっていた。

当然客は一人もおらず、閑散としている。現場にリアルタイムでいた同志の話によると、突然教室にチンピラ達が押し入り、あれよあれよと姫路達と何故か一緒にいた霧島と優子を連れ去っていったらしい。

そしてこの荒らされ様はヤツらが暴力的方法を使つて争つたことに他ならない。

「須川あ！ 何があつたのか説明しろや！」

俺は目の前の須川達にそう思わず強く尋ねる。俺達がいけない間、中華喫茶の責任者は須川に任せていたので、確実に知ってるはずだ。

「違うんだ兄貴！ 話を聞いてくれ！ 俺はその時材料を取りに空き教室にいたんだ！ 責任ならこのチンピラにすぐ負けた横溝にある！」

「はあ!? お前クラスメートを売る気かクソ野郎！ 兄貴、それだつたら福村だつてチンピラを見た瞬間逃げ出したんだ！ 一番のクズはこいつなんだ！」

「な、横溝貴様！ ち、違うんだ兄貴！ 俺は急に腹が痛くなつてトイレに行ったんだ！ 決して逃げたワケじゃない！ それよりも、チンピラに見逃して貰うよう頭を下げた

近藤にこそー！」

「ゴチャゴチャうるせえんだよ馬鹿共が!! 言い訳してんじゃねえ!!」

俺はそう声を荒げながら須川のすぐ横の壁を蹴りつけ、大きなヒビを入れてしまった。

「たかがチンピラ風情に女奪われやがって、それで苦し紛れの戯れ言か？ お前らそれでも男かこの野郎！ 恥を知りやがれ！」

『『うぐっ?!』』

会話からも分かる通り、何の躊躇いもなくクラスメートを売るあたり、やっぱりコイツらは性根が腐ってるクズの集まりだな。

「罰として、ダイゴブックスはお前らの予約受注はしばらく受け付けない!!」

『『そんなっ?!』』 それだけはお許しを!!』』

「黙れカス共！ お前らの意見は聞かん!!」

『『嫌だああああああ!!』』

須川達の悲痛な声。だが俺は一度言ったことは撤回しない。チンピラに負けたことはまあ仕方ない。喧嘩には強さの良し悪しがあるからな。だが自分の不都合な事実をやも自分は悪くないと言い逃れをしようとしたその態度が頂けない。少し頭冷やして反省しろ。

「落ち着け大悟、これは予想の範疇だ」

俺の肩にポンと手を置いて雄二が言う。

「どういうこと、雄二？」

「多分もうそろそろ仕掛けてくるだろうとは思っていた。俺や明久と直接やりあつても勝ち目は無く、更にこつちには大悟という後ろ楯がある以上、当然と言えば当然の判断だな」

恐らく直接やりあうというのは喧嘩のことだろう。確かに雄二が言わずもがなであり、明久は一年の頃、とある理由で殴り合いの喧嘩をした時にコイツにセンスはあるなど思った為、あの程度のチンピラごときなら余裕だろう。

「そうなれば、向こうはまた午前中の時みたいに戻りくどい方法を使うことは簡単に予測が出来る。それが今回はウエイトレスを拐うってやり方なだけだ」

「随分と物騒な予想をしてたんだね」

確かに、この中華喫茶は味以外にもチャイナドレス見たさに足を運ぶ客も多い。姫路達がいるとこないとは売り上げに大きな違いが生じるのは確実。そこを狙ってきたというわけか。

これも竹原の指示によるものなら、流石に容認は出来ねえ。自分の学校の生徒、しかも女子を私利私欲の為に巻き込むなんてのは教師としても、人間としても逸脱した行動だからだ。

「ていうか、なんで優子達までここにいたんだ？」

「流石にそれは分からねえ……それよりもまずは姫路達がどこに連れていかれたかだ」

「……………行き先は分かる」

と、同志が取り出したのは何かの機械。

「何これ？ ラジオみたいに見えるけど」

「……………盗聴の受信機」

「オーケー。敢えて何で持っているのかは聞かないよ」

そんなものを持っていてはなんて、流石同志だ。盗撮カメラやマイクを学校の至る所に隠しているムツツリ商会ならば、そんなものは当たり前前の常備品なんだろうな。

「さて、場所がわかるなら簡単だ。かるくお姫様達を助け出すとしましょうか、王子様達？」

「そのニヤついた目付きは気に入らないけど、今回は雄二に感謝しておくよ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「そうだな。調子に乗ったヤツらに正義の鉄拳を——」

いや、待てよ？ チンピラ達はチャイナドレスを着たヤツらは全員拐ったんだよな？

ということとはそこには葉月ちゃんも当然含まれるよな？

となれば、今葉月ちゃんは無理矢理連れ拐われるという体験をして凄く怯えている筈

だ。誰かが助けに来てくれることを心から願っている。そんな中で俺がカツコよく登場すればどうなるかー

『俺達はロリコンです』

『これから君にエロいことをします』

「い、いやあ……誰かあ、助けてえ……」

「待てええいっ!!!」

『だ、誰だ貴様は!?!』

「葉月ちゃんは俺が守る!!!」

「だ、大悟お兄様……っ!」

そして俺がチンピラ共を軽く撃退してー

「うわああん! 大悟お兄様あー!! 葉月怖かったですー!!」

「もう大丈夫だよ。葉月ちゃんが無事で何よりさ」

「大悟お兄様……その、葉月。お礼がしたいですっ」

「なんだい?」

「葉月のことを……メチャクチャにして欲しいんですっ!」

「葉月ちゃん……」

「葉月、岡崎! アンタ達とつてもお似合いよ! 姉としてとつても嬉しいわ!」

「えへへ……愛してるですっ、大悟お兄様♥」

~~~~~ true end ~~~~~

「最高ですよんっ!!」

「うわっ! ビックリした!」

「なんだ大悟! 急に大声出すんじゃねえよ!」

これもう確定の流れ来ましたわ!! 最早俺の考えに一切の死角ナシ!! このまま行けば葉月ちゃんは俺にメロメロというワケだあっ!!

「任せとけ雄二、俺の名誉にかけて、確実に姫様達を救いだしてご覧に入れよう」

「お、おう……頼んだぞ」

「てか、どうして君はそんなにニヤニヤしているんだい?」

これが笑わずにいられるか。何せ女子小学生のイチャラブ展開が待っているという

のにつ!

「……と、とにかく、まずはあいつらを助け出そう。ムツツリーニはタイミングを見て裏から姫路達を助けてやってくれ」

「……分かった」

「大悟は先に潜入してチンピラどもを混乱させろ。そしたら明久を援護してやれ。最悪半殺しにしてもいい」

当然だ。葉月ちゃんを泣かせるようなゴミは全員ぶつ殺す。

「雄二、僕らはどうするの?」

「王子様の役目は昔から決まっているだろう?」

茶目っ気たっぶりの雄二の目が明久を見る。

「お姫様をさらった悪者を退治することさ」



| | |

| | | 明久視点 | | |

『さてどうする？ 坂本とー吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとまずい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』

『坂本つて、まさかあの坂本か？』

『ああ。しかも噂によると、あの岡崎までバックにいるらしい』

『マジかよ!? 岡崎つていやあここら一帯で最強って言われてた……アイツ、少年院から出てきたのか』

『できれば事を構えたくはないんだが……』

ムツツリーニから案内されたのは、文月学園から歩いて五分程度のカラオケボックス。そのパーティー用の部屋に姫路さんたちは連れていかれたらしい。そしてムツツリーニの持っていた受信機から音楽に混じってそんな会話が聞こえてきた。

依頼つて言つてたけど、他にも関係者がいるつてことなのかな？

(雄二、この連中つて)

(ああ。恐らくあいつらも黒幕から依頼された他校の生徒だろうな。これであの時の推測が事実に近い……)

(え？ 何か言つた？)

(なんでもねえ。それよりも、ヤツラから目を離すなよ)

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよ！』

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

『ギヤはははは！』

チンピラ達はウエイトレス達を簡単に拉致出来て安心したのか、下衆びた笑いが聞かえてくる。吐き気すら覚える外道の数は十人つてところか？ 上等だ。今すぐ黙らせやる。

(待て、明久。勝手に行動するな。気持ちは分かるが、まずは人質の救出が先だ。ムツツリーニと大悟が上手くやるまで待つていろ)

(……分かつたよ)

雄二の言う通り、ここはじつと我慢しよう。僕らの出番はそれからだ。

『……：灰皿をお取替え致します』

『お待たせしましたー。こちらご注文のラーメン二つになりまーす』

『あ、どもー』

そして新たに聞こえる二つの声。どうやら大悟とムツツリーニが潜入に成功したようだ。

『で、このオネーチャンたちどうする？ ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はコツチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！ ブリー！ それなら俺二番ね！』

『なら俺はコツチの双子ちゃんかなー！ たっぶり楽しめそうだしなー！』

パーティールームの中からは下品な声が響き渡る。

『あ、あのつ！ 葉月ちゃんを放して、私達を帰らせてください！』

『それはオネーチャン達の頑張り次第だよな？』

くつ！ 何をやってるんだ大悟！ 早くしないと姫路さんたちが！

『ちよ、ちよつと！ 気安く触らないでっ！』

『っ！ 痛つてーなこのアマ!!』

『きやつ!!?』

『……：優子!』

『姉上っ!』

パアン、という何かを強烈にはたいた音と木下さんの悲鳴。そして遅れて何かにゴんとぶつかる音。まさか……アイツらっ!

『やつ! さ、触らないでー』

『ちよつと、やめなさいよ!』

『あーもう。うっせえ女だな!』

『きやあっ!』

ドン! ガシヤアアン!!

「っ!!」

何かを突き飛ばした音と美波の悲鳴。何かがテーブルを巻き込んで倒れたような音。それを聞いた瞬間——僕の中で何かがトんだ。

(おい、明久!)

雄二の静止を振り切り、僕はドアを開け放つて目的の部屋に入る。そして中の様子を  
確 n

「くたばりやがれこのゴミクズ野郎がああああああああああああああ!!!」  
「ぐべらあっ!!?」

……しようとする、目の前では、カラオケ店の制服を着た大悟が、チンピラに強烈な右ストレートをかましていた。それにより壁に叩きつけられたそのチンピラは顔面が崩壊し一撃でノックアウトになっていた。

「ヤスオ!? テメエいきなりなにしがぶべえつ!」

「……………同志直伝、恋のミラクル☆毆殺アタック」

白目を剥いて倒れるチンピラ。その後ろにはクリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立っていたムツツリーニがいた。うわあ痛そう。

とりあえず僕は改めて部屋の様子を確認する。

「よ、吉井君?」

「アキ……………」

部屋には身を縮めている姫路さんと、尻餅を付いている美波。そして少し奥には木下さんをかばうように秀吉と霧島さんがいた。しかも木下さんは少し口から血が出ていて、おでこに傷を作っていた。

中では大体予想通りの光景が展開されていた。

「お邪魔しまーす!!」

「ああ!? 誰だテメ「死にくされやああつ!」 ほかああああつ!」

丁度目の前にいたチンピラの股間を思い切り蹴り上げる。相手はその一撃だけで白目を向いて失神した。

「てつ、てめえ！ 何しやがる！」

ゴキツという鈍い音と共に感じられる衝撃。口の中が切れたのか、血の味が広がる。——けど、それがどうした！

「イイツシャアア——！」

「ぶぶああつ！」

お返しのハイキックをお見舞いしてやる。

「つたく……少しは我慢しろってんだよ。明久、大悟」

そして僕に続いて部屋に入ってきた雄二。これでメンツは全員揃った。

「すまねえ雄二。ついカツとなっちまったぜ」

「僕もだよ。でもしようがないよね」

「コイツ、吉井って野郎だ！ それに坂本と岡崎までいんじやねえか！」

「なんでこの場所が分かったんだ!?!」

明らかに狼狽える様子を見せたチンピラご一行。僕はともかく雄二と大悟はその腕つぶしで広く名を知らしめた存在だ、無理もないだろう。

これで形勢は完全にこちらが有利になった。けど許すつもりも手を抜くつもりもな

い。

「さて、と……テメエら！ よくも美波に手をあげてくれたな！ 全員ぶち殺してやる！」

やったのはどいつだ？ 美波の近くににいるやつか？ それとも……まあいいか。わからないなら全員殴れば良いだけだ！

「でも来てるんなら丁度いい！ こうなったら全員ぶち殺せ！」

「たつた三人で調子くれやがって！」

「舐めてんのか！」

テーブルを蹴散らし、残りの男が群がってくる。数では向こうに軍配があるが、気力ならこつちの方が断然上だ。

「……調子くれるだと？ テメエら……ふざけんじゃねえぞ!! よくも優子の顔をぶん殴ってくれたな!! 全員この場で血反吐吐くまでぶちのめす!! 覚悟出来てんだろうなあ!! このゴミ共があ!!」

「「「っ!?!」」」

大悟のドスの効いた一喝はその場にいた全員をビビらせた。それもその筈、今の

が纏っている雰囲気はいつもの感じとは大きくかけ離れている。

鼻息は荒く、目つきは雄二なんか比喩物にならないくらい鋭い。それでいて表情は『憤怒』という感情で染まっている。いつものキモオタ感はどこにもない。僕と雄二はすぐに察した。

大悟は今一怒っている。それも今まで見たことないくらいに、木下さんに手をあげたという事実と、それをしたチンピラ達に対して、完全にキレていた。

「大悟………」

「大悟兄………」

「なんだそりゃあ!? カッコつけてんじやねえぞ岡崎!!」

「そういうや teme と坂本には中学時代散々やられたっけな! ここでその借りを返してやるよ!」

と、先程ハイキックを食らわせたチンピラの一人が立ち上がって大悟の顔を殴った。拳は完全に大悟の顔面にクリーンヒットし、それに続き他の連中も後ろや横から次々と攻撃を仕掛ける。

「大悟! お前らっ……!」

僕が大悟に複数で畳み掛けるチンピラに向かおうとすると、

「鬱陶しいんじゃない!!」



「げぶっ!」

最初に向かっていった相手は顔面に拳を叩き込まれていた。多分鼻の骨折れたな。

「この雑魚共があっ!!」

「ぶべらあっ!」

続いて他のヤツにローキックを見舞う。あ、今度は顔面に膝が入った。

「はっ、流石だな大悟! 全く衰えてねえじゃねえか! ーオラアッ!」

雄二が感心しながら別のヤツに拳を叩き込む。

「な、なんだよコイツら……」

「ば、化け物じゃねえか……」

二人を見て連中が浮き足立つ。これならいけるか……? ?

「ま、待て! 坂本、岡崎よお。このお嬢ちゃん達がどうなってもいいのかわか?」

向こうの一人が葉月ちゃんと天ちゃんを羽交い締めにしていた。女の子に、しかも小  
学生と中学生になってことをしやがるんだ!

「いいか? 大人しくしているよ? さもないと、ヒデエ傷を「テメエ何気安く俺の葉月  
ちゃんに触れてんじやゴルウウウアアアア!!」ほぶうっ!」

呆気なく大悟の高速パンチで崩れ落ちた外道。確かに宣言通り酷い傷を負ったよう  
に見える。有言実行とは見上げた根性だ。

「大悟お兄様！」

「大悟兄！」

解放された葉月ちゃんと天ちゃんは大悟に抱きつく。よつぽど怖かったのか、葉月ちゃんは少し涙ぐんでいた。でも大悟、葉月ちゃんは美波の妹だよ？

「もう心配ねえ、島田、天達を頼む！」

「うん、ありがとう、岡崎！ 葉月、天ちゃん！ 今のうちに——」

「逃がすかあ！」

チンピラが人質を逃がすまいと立ち塞がる。

「おいおい、お前らの相手はこっちの筈だろ——うがつ！」

「ふぐつ！」

けど、雄二がそれを無理矢理引き戻しそのまま鳩尾に拳を叩き込む。

「吉井君つ！」

すると、姫路さんが腕を広げて駆け寄ってくる。もしや——これはチャンスかつ!?

「姫路さ——ぐぶあつ！」

「オラアツ！」

腕を広げて姫路さんが来るのを構えていたら、ドンと来たのはチンピラのパンチだった。

よくもー！ 千載一遇のチャンスをおおっ!!

「……………!!」

「な、なんだコイツ？ 血の涙流してるぞ……………？」

「姫路さん、ちよつと待ってて！ コイツをシバき倒した後でもう一度ー」

「姫路に島田！ お前達もムツツリーニと一緒に学校に戻っている！」

「……………こつち（クイツクイツ）」

「雄二！ キサマまで僕の邪魔をするのか！」

けれどその判断は正しいから反対出来ない。

「霧島、秀吉。優子を頼む。ーてか、何で秀吉は縛られてんだ？」

「姉上に縛られた時の縄が残っておつての……………それに何故か儂だけ随分と尻を撫でられたのじゃが、済まぬが外してくれぬか？」

「へいよ……………面倒だからちぎっちゃまうか（ブチツ）。そんじゃ頼むわ」

「うん……………分かった」

「大悟、お主も気をつけるのじゃぞ……………といつても、お主なら余計な心配じやろうがな」

「分かつてるじゃねえか相棒。優子……………ちゃんと額の傷は手当てしとけよ」

「大悟……………うん」

そうして、誘拐された女性（秀吉）達は全員逃げ出すことに成功した。あとはこのチンピラ共を全員ぶっ飛ばすだけなのだが一。

「くははははは！ それにしても丁度いいストレス発散の相手ができたな！ 生まれてきたことをこれでもかかってぐらい後悔させてやるぜええつ!! そうだろ大悟!!」

「当然だ。コイツらは女に手えあげるクズだからな！ なら容赦なんざ要らねえ!! お前ら骨も残らねえと思いやがれええつ!!」

「こ、これが岡崎と坂本……!!」

「悪鬼羅刹と閻魔大王の噂は本当だったか……!!」

悪魔の様な表情を浮かべる雄二と大悟。今まさに『悪鬼羅刹』と『閻魔大王』が復活した瞬間だ。

霧島さん達にいろいろ追い詰められ、ストレスが溜まっている雄二と、女性に手をあげるという愚行を目撃して怒っている大悟と喧嘩するなんて、この連中は御愁傷様としか言い様がない。多分大悟の方は手加減しないと思うので病院送りは確実だろう。ま、自業自得だから僕は何も言わないけどね。

――

――優子視点――

あの時。

『くたばりやがれこのゴミックズ野郎がああああああああああああああ!!!』  
 聞き覚えのある声、本来ならこんな所にいる筈のない、アタシが好き男の声。  
 怖かった。アタシはただ、代表と一緒にアイツの所へ行こうとしただけに、アイ  
 ツに会いたかっただけに、ガラの悪い男達に捕まって、どこかへ連れてかれて――  
 そして殴られて、どうしようもなく怖かった。泣きはしなかったけど、無意識に震えて、  
 目を瞑って耐えるしかなかった。

まるで――一年半前の『あの時』の様だった。怖くて、何も出来なくて、ただただ目

の前に迫る恐怖に怯えるしかなかった。

けど、再び目を開けたら、そこにはアタシの大切な人がいた。何故かカラオケ店の店員の格好をしたそいつはアタシを殴った男を逆に殴り返していた。

まるで二次元小説の中に出てくる主人公がヒロインを助け出すように、そいつは颯爽と仲間を連れて現れた。怖くて震えてたアタシの前に立って、そいつは男達にこう言い放ったんだ。

『よくも優子の顔をぶん殴ってくれたな!! 全員この場で血反吐吐くまでぶちのめす!! 覚悟出来てんだろうなあ!? このゴミ共があ!!』

久しぶりに聞いた、アイツの怒りの叫び。それは自分のことでは無く、アタシを傷つけた連中に対する怒りだったんだと分かる。木下優子という人間を守る為に、アイツは怒ってたんだ。

ああ、そうだ。コイツは昔から何も変わってない。アタシや秀吉、それに他の人達のために平気で自分の身を張って、平気で泥を被る人間、どうしようもなく馬鹿で、滑稽で——カッコよくて、強くて、どうしようもなくなるほど、アタシの大切なヤツ。

あの時もそうだった。アイツはアタシの為に――自分を犠牲にした。

ああ。もうアタシはおかしくなっているんだ。こんな状況で改めて自覚させられるなんて、でも、代表が坂本君に対してそうであるように、アタシももう、押さえきれなくなってるんだ。あの時、大悟がアタシに言った台詞は、アタシ自身にも言える――

アタシは――この世の何よりも、岡崎大悟という男が、好きで好きでたまらないんだ。

――

――大悟視点――

誘拐騒ぎも無事終了し、俺と秀吉は散らかされた喫茶店の後片付けをしていた。明久

と雄二は『学園長に話がある』とのことで別の空き教室へと行くらしい。

ちなみに姫路達は先に帰った。

「つたく、あの連中。相当派手に荒らしやがって、これ結構値段すんだぞ?」

「そうじゃのう。せつかく凜花さんに用意して貰ったというのに、これでは会わせる顔がないわい」

そう愚痴を言いながら割られたお椀を見る。捨てるヤツだったから良かったが、もし店のモンをこうしちまったら、おそらくジャーマンスープレックスからの四の字固めをされるとこだっただろうな。

「はあー、にしても腹減ったなあ。秀吉、帰りになんか食ってこうぜ」

「そうじゃの。儂も今日は色々あつて空腹じゃわい。それでどこへ行くのじゃ?」

「それなんだけだよ、丁度近くに旨いお好み焼き屋を見つけたんだよ。値段もリーズナブルだし、量も結構ー」

ガラッ

「……岡崎、木下、ちよつと」

突然教室の扉が開き、澄んだ声で霧島が入ってきた。



「ん？ なんだ、霧島じゃねえか。雄二なら今いねえぞ？」

「何か儂らに用かの、霧島よ？」

俺らがそう聞くと、霧島は少し間を置いて、言った。

「違う。用事があるのは岡崎達……今日の優子のことで少し」

「っ!?」

声にもならない声で反応する俺と秀吉。

「……優子がどうしたんだ？」

「……連れてかれた時の優子、明らかにおかしかった。凄く怯えてたし、ずっと震えてた。いつもの優子ならそこまでにはならない」

「……何を言つとるのじや霧島よ？ 考えすぎでは」

「……なら、なんでそこまで狼狽えてるの？」

「っ! ……それは」

秀吉が言葉に詰まる。

「あの時、まるで……優子はあの怖さを前から知ってたような怖がり方をしていた」  
「っ!?!」

霧島の言葉に俺達は動揺した。あの秀吉でさえも表情がそのまま出ている。そんな俺達を見て、霧島は何かを感じ取ったのか、俺達の目をはつきり見て、こう言った。

「岡崎、木下……教えてほしい。過去に優子に……一体何があったの？」

## 第二十八問 馬鹿の底力を見せてやろう

——大悟視点——

「——つつうワケなんだ」

「……そんな……酷い事が……」

話終えると、霧島は明らかに驚愕と恐怖で動揺した素振りを見せた。

表情こそいつもと変わらず仏頂面気味だが、声は震え、目頭には若干の涙を溢し、こちらからでも分かるくらい皮膚に鳥肌を立たていた。俺の話がよつぽど衝撃で、……あまりにも残酷な内容に怯えてるんだらう。

「大丈夫か、霧島」

「……ううん。岡崎、木下……教えてくれてありがとう」

「ああ、だが霧島。一つだけ頼みがある。このことは決して他言無用で頼みたい」

「これは姉上の名誉の為でもあるのじゃ……！ だから、霧島よ——」

「分かってる……絶対誰にも言わない。優子は私の大切な親友だから。今まで通り、大

事な関係でいるつもり」

「そうか……それが聞けたならいい。すまねえな、霧島」

「岡崎が謝る必要はない……聞かせてほしいと言ったのは、私だから」

話を済ませ、彼女を帰らせる。多分あいつなら今日のことを永遠に胸中にとどめておいてくれるだろう。

すると、姫路や優子達を家まで送っていた明久達が戻ってきた。

「おう、帰ったか明久、雄二」

「ただいま大悟、秀吉。あれ？ ムツツリーニは？」

「ムツツリーニならゴミを捨てに行行って貰っておるぞ。もうすぐ戻ってくるのではないかの？」

「……………今戻った（ガラガラガラ）」

「よし、全員集まったか。ならちよつと俺たちに付き合ってもらおうか」

雄二がそう俺達に告げる。

「なんだ、まだなんかあるのかよ？ 早く帰っておジャ魔女ど〇みの再放送が見たいん

だが」

「どうせ録画してるんだからいいだろうが。それよりもこっちの方が重要だ」

ほほう？ 随分とデカク言ってくれるじゃねえかこの野郎。

「それで、一体何の用なのじゃ？」

「ああ、ちよつとある人物を呼び出していてな」

「？ ある人物って？」

「ババアだ」

ババアってことは、学園長か。雄二の表情を見る限り、何か理由があるのは明白だが。

「学園長がわざわざここに来るの？」

「俺が呼び出した。さつき廊下で会った時に『話を聞かせろ』ってな」

話か……という事はさつきの俺と雄二の会話が深く関係しているのだろう。いや、それを差し引いても、今回ばかりのことは見逃すわけにはいかない。営業妨害ならまだしも、下手すりゃあ警察沙汰の騒ぎまで起きてんだからな。こうなるのは至極当然といえよう。

「あのババアには事情を説明させないと気が済まん」

「そうか。ならああのババアには洗いざらい吐いてもらわねえとな」

「へえ、あのババアに原因がーええええつ!? あ、あのババア！ 僕らに何か隠してたの

か！」

明久がそういきり立っていると、

「……やれやれ。わざわざ来てやったのに、随分とご挨拶だねえ、ガキどもが」

「出たな諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？ それに大分人数が多い

ようだね？」

そう言つて俺や秀吉を睨む学園長。まあ、学園長からしたら俺達は全くの部外者だからな。

快く受け入れる訳はないわな。

「いいや、これは俺達だけで済む問題じゃ無くなつた。なら大悟たちにも聞く権利は十

分にある。それにアンタも、そろそろ本当のことを話す頃合いじゃないか？」

「悪いが、内容は全部雄二から聞かせて貰つたつす。だから下手な誤魔化しは通用し

ねえつすよ」

雄二と俺がそう問いかけると、ババアは少し感心したかのように頷いた。

「ふむ……。やれやれ。賢しい奴だとは思つていたけど、まさかそこまで探られてい

たとは思わなかつたよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思つていたんだ。あの話だったら、

何も俺達に頼む必要はない」

「それこそ、学年主席の霧島や高城さんあたりにも頼むのが最善の方法だからな」

「そういえばそうだよな。優勝者に後から事情を話して譲ってもらうとかの手段も取れたはずだし」

「そう考えると、雄二達を擁立するのは、明らかに不効率じゃな」

「……………（コクコク）」

そして話によると、俺達の当初の目的であった設備改修の件をババアは渋つたらしい。でもそれは敢えてそんな態度を取り、明久達に召喚大会への参加を促すための演技に過ぎなかつたと。まあ、いくら人の心を持たないクソババアでも肩書は学園長だからな。教育方針云々以前に生徒の健康状態を無下にするなど出来ないだろう。

また、雄二は大会での科目選択権を譲れという提案を出していたのだが、学園長はそれをすんなりと承諾した。つまりその条件を呑まなくてはならないほど、明久達に大会に出てもらい、優勝を勝ち取ってもらふ必要がババアにはあるということだ。

「他にも学園祭の喫茶店（こ）ときで営業妨害が出たり、対戦相手に情報を流す密告者がいたりと色々あったが、それよりも決定的だったのは、俺たちの邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れ出したのが決定的だった。ただの嫌がらせにしては質が悪すぎる」

確かに、あれはマジでやり過ぎていると思った。同志が盗聴器を仕掛けていたからよかつたものの、もしあのままだったら前にやったエロゲの胸糞集団強姦レ○プシーン並

の大惨事になっていたかも知れない。ちなみにそのエロゲはクリア後ぶっ壊して家の裏で燃やして捨てた。

しかもアイツら、優子や島田に暴力を振るったことも許せんが、愛しの葉月ちゃんを怖がらせやがった。だから取り敢えず雄二と二人で全員血反吐吐かせてから病院送りレベルに叩きのめしておいたぜ。幼女を泣かせる奴は誰だろうと死ね!

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったか……済まなかったね」

と、生徒である俺達に頭を下げるババア。まさかそんな事をするとは思わなかったが、意外と責任感が強いのか?

「さて、こちらのタネ明かしはこれで終わりだ。今度はそつちの番だ」

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できればふせておきたかったんだけどね……」

だから誰にも公言するな。という前置きをして、ババアは真相を明かし始めた。

「アタシの目的は如月ハイランドのペアチケットなんかじゃない。もう一つの賞品の方なのさ」

「……やっぱりか」

「ペアチケットじゃない!? どういうことですか!?!」

俺と雄二が予想していた通り、ババアが回収したがついていたのは『白金の腕輪』だっ



た。分かっていた事なので俺と雄二は特に驚きはしなかったが、明久達には相当のことだったのか、目を丸くしている。

そしてババア曰く、この白金の腕輪は二つあり、一つは点数を分配して召喚獣を二体召喚するものと、教師の代わりに立会人となって召喚用のフィールドを展開できるもの。こっちは使用者の点数に応じて召喚可能範囲が変わるらしい。そしてその科目はランダムで選択されるとか。

そしてババアはその腕輪を明久達に勝ち取ってもらいたかったらしい。

『回収』ではなく『勝ち取る』ということを選んだのは、理由もなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体を疑われる可能性がある。ましてやスポンサーが大勢いる前でそんな真似は出来ないのだろう。

「でも、なんでその『白金の腕輪』を手に入れるのが僕らじゃないとダメなんですか？」

「……欠陥があったからさ」

「やつぱりか」

苦々しく顔をしかめるババア。

ババアは霧島や高城さんなどの高得点者ではなく、底辺の明久達に依頼した。それは白金の腕輪は高得点者ではなく明久達レベルにしか使えない。それもただの馬鹿ではなく、優勝の可能性がある特別な馬鹿に限定されるということ。

「じゃあ、その腕輪の欠陥つつうのは明久と雄二なら大丈夫ってことですかい？」

「そうさ、その二人なら暴走が起こらずに済む。だから他の生徒には頼めなかったのさ」  
「なるほどな。だから得点の高い翔子や姫路を使えないわけだ」

「ああ……そういうことじゃったのか……」

「……………納得」

「え？ 皆分かったの？ まだ話が見えないんだけど……」

雄二が苦笑いをし、相棒と同志はそれを察したような表情になる。だが肝心の明久はよくわかっているようにうたがむ。

「アンタらみたいなの『優勝の可能性を持つ低得点者』ってのが一番都合が良かったってわけさ」

「うーん……。取り敢えず褒められているってことでいいのかな？」

「「いや、お前（お主）らはバカだと言われているんだ（おるのじゃ）」」

「なんだとババア！」

いや、説明がないとわからん時点でバカだろうが。

「片方の召喚フィールド作製用はある程度まで耐えられるんだけどねえ……。もう片方の同時召喚用は、現状のままだと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは吉井専用にと」

「ねえ皆、これは褒められていると取っていいんだよね？」

「いや、馬鹿にされてるぞ」

「それも凄い勢いでの」

「……………(コクツ)」

「なんだとババア！」

「いい加減自分で気づけ！」

つまり腕輪は、片方は高得点で暴走し、もう片方に至っては平均点程度でも暴走する為、それ以下の点数しか持っていない存在——バカにしか扱えないということになるのだ。

「じゃあやつぱり、一連の妨害の黒幕は内部の人間によるものか」

「そうなると、俺たちの邪魔をしてくるのは学園長の失脚を狙っている立場の人間——他校の経営者とその内通者といったところだな」

「雄二、大悟、そうやって僕を会話から置き去りにするのはやめてほしいな？」

また明久は話についてこれてないようだが、雄二が簡単に説明したことでもようやく理解を示した。

「じゃあ、やつぱり黒幕は……………竹原の野郎か？」

「おや、岡崎がそこまで辿り着くとは意外だね。ご名答。この一連の手引きは、恐らく教

頭の竹原によるものさね。しかしなんで岡崎がそこまで知っているんだい？」

「別に気づいてたわけじゃないです。偶然高城さんからそんな話を聞いただけですよ。最近の竹原の行動はどうにも怪しいってな。そこから雄二が考えたんですよ」

「？　大悟、高城って誰？」

「知り合いの一個上の先輩だ。ま、別に知らなくてもいい」

「明久と高城さんを合わせたら色々面倒くさい事になりそうだからな。なんせ同類だから。」

「竹原は近隣の私立高にも出入りしていたなんて話も聞くからね。まず間違いはないさね」

「それじゃ、僕らの邪魔をしてきた常夏コンビとか、例のチンピラとかは」

「教頭の差し金だろうな。協力している理由はわからんが」

「ふん、テメエの欲の為に自分の学校の生徒をダシに使おうとするたあ気に入らねえな。教師の風上にもおけねえ」

俺の言葉に周りがふむふむと頷く。すると明久が言った。

「コレってーかなりまずい話じゃない？」

「うむ、下手をすれば学園の存続に関わる事態じゃからの」

明久や秀吉の言う通り、最早姫路の軛校がどうたらとか言ってる余裕はない。それどころか、この文月の生徒全員が危機的状況にあるのだから。

「あ、なら優勝者に事情を話して渡してもらったらー」

「それは無理だ。決勝戦の相手を見てみる」

雄二がズボンのポケットから小さな冊子を取り出す。書き込まれているトーナメント表を見てみると、

「……常夏コンビか」

よりにもよってコイツらか。これじゃあ事情を話して回収するという方法は出来ないな。

「やつらは教頭側の人間だ。嬉々として観客の前で暴走を起こすだろう」

つまり、明久達に残された道はただ一つー自力での優勝だ。

「悪いが、アンタらにはなんと少しでも優勝してもらうしかないんだよ」

「……予想はしていたが、まさかこんなことになっているとはな」

だが、俺にとつては事情などどうでもいい。どっちみち俺達の目的は優勝だ。それに関しての逃げ道が塞がれただけの事に過ぎない。だから今更そこにどれだけの問題を抱えられていようがどうでもいい。

それよりもまず……無関係の奴まで自分の身勝手な理想の為に巻き込んで、女を傷つけても構わないとする竹原の畜生なやり方がいただけねえ。本来ならヤツを呼び出して一発くらわしてやりたいところだが、それは出来ない。

だから俺達は——与えられた土俵で勝負するだけだ。ま、俺は試合には出ねえけどな。

「……だが、俺達のやることは変わらねえ。どっちみち優勝出来なきやあ今までの行動も全部水の泡なんだ。それに、相手があの常夏コンビなら遠慮は不要だしな！　こうなりやとことんやってやらあ！　そうだろ、お前ら！」

「ああ、せっかくここまで来たんだ！　絶対に優勝してみせる！」

「おうよ！　調子に乗ってるあの三年共に、下剋上といこうじゃねえか！」

「うむ！　Fクラスここにありというのを、知らしめてやろうぞ！」

「……………俺達は最強（グツ）」

そして、俺達は全員で肩を組みあう。俺を含めた全員の目は……………本気だ。

「野郎共！　改めて言うぞ！　俺達の目標はただ一つ、大会での優勝だ！！　そしてそれ

はもう目の前まで迫ってる!! 馬鹿の底力つてやつを、見せてやろうじゃあねえか!!」  
「「「おおっ!!!」」」

雄二の力強い叫びにそれ以上の声量で返事をする俺達。はは、これが文化祭つてやつか! 最初はどうでもいいって思ってたが、中々に楽しませてくれるぜっ!!

「ははっ、随分と頼もしい奴らじゃないか。その調子で頑張っておくれよ」

俺達の様子を見て口角を歪ませて笑みを浮かべるババア。ふん、アンタに言われなくともそのつもりだつての。

ちなみに、腕輪の暴走に関してだが、明久専用のやつは総合科目で平均点にいかなければ起こらず、一つ二つの科目が高得点だとしても問題はないらしい。

「それじゃ、アタシは学園長室に戻るとするかね。アンタ達、明日は頼んだよ」

「「「はーい」」」」

そして、ババアは静かに空き教室を出ていった。

「んじゃ、俺達も帰るとするか。家でやることもあるしー明日も早いしな」

「……………(コクリ)」

「おうよ、そんじゃ秀吉。ゲン担ぎにラーメンでも食ってこうぜ? 今日には二郎系な?」

「またか。ホントにお主はラーメンが好きじゃのう。まあ、空腹じゃし、別に構わぬがの」

「あ、大悟。ちよつといい？」

「ん？　なんだ明久？」

「一つ……頼みがあるんだ」

こうして、波乱万丈の学園祭初日は幕を閉じた。



――

――明久視点――

「アキ、おはよう」

「おはようございます、吉井君」

「あ、二人とも。おはよう」

学園祭二日目の朝。姫路さんと美波が揃って登校してきた。そんな二人に対して、慎重に言葉を選んで話しかける。

「あく、その……昨夜はぐっすり眠れた？」

「え？ はい。ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ごはんはきちんと食べてきた？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えつと、それじゃ変な夢とかはー」

「ーふふつ。吉井君、気を遣い過ぎですよ?」

あう。バレた。けど、暴行未遂なんて怖い目に遭ったんだ。ショックを受けてないかを心配しない方がおかしいと思う。

現に昨日雄二と姫路さん達を送っていった時も、妙に木下さんの様子が変わったしね。

「大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いていますから」

「そうなの?」

「はい。それに……もしかたあいうことがあつたら、きつとまた吉井君が助けられますから」

そう言つて、無理のない自然な笑みを浮かべる姫路さん。

「アキというよりは坂本と岡崎と土屋かもしれないけどね」

美波も全然気にしている様子はない。どうやらこの二人、僕が思っているよりも芯が強いみたいだ。

すると、秀吉とムツツリー二が一緒に登校してきた。二人が言うには特に怪しい人物はいなかったらしい。念の為二人には姫路さん達を迎えに行つて貰つていたのだ。借

り物のスタンガンを持たせて。

「二人共、ありがとう」

「これくらいは当然じゃ。特にワシは昨日役に立てなかったし……」

「いや、それは縛られていたんだし、仕方ないんじゃないの？」

むしろ同情してしまうくらいだ。

「ふああ、お、お前ら早えな」

今度は大きな欠伸をしながら大悟が登校してきた。随分と眠そうな表情をしている。

「おはよ。随分と眠そうじゃない、岡崎？」

「ああ、昨日はちよつと野暮用があつてな、徹夜だったんだ」

「徹夜ですか……？ もしかして、またエツチなゲームでもやっていたんですか？」

姫路さんがまさかの質問を投げかける。もう大悟がそういうことをしてもあまり

驚かなくなっているんだろうか。

「ははは、生憎違う。実は明久と雄二に頼みごとをされてな」

「頼み事？」

「うん。実は、昨日雄二と一緒に大悟から勉強を教わっていたんだよ」

そう、僕と雄二は昨日学園長との話を終えた後、大悟に勉強を教えて欲しいと二人でお願いをしていたのだ。

理由は簡単。決勝戦の対戦科目が日本史であったからだ。悔しいことに僕は雄二に比べて点数は低い。更に相手は三年生だ。だからこのままじゃマズいと思い、学校一の実力を持つ大悟に協力を頼んだのだ。

「そっか、確か決勝戦の科目は日本史だったものね」

「それなら、岡崎君に教わるってことも納得できますね」

「ま、と言つても一晩しかなかったから、テストに出やすい場所をピックアップしてその知識を叩き込んだだけだな」

そう謙遜する大悟。けど意外にも大悟の教え方は分かりやすく、暗記教科というものもあるけど、内容がスラスラと頭に入っていく、さっきのテストもいつもより全然解くことが出来た。

雄二も同様だったみたいで、テスト中もいつもより表情に陰りが無いように見えたのだ。

「お、今日は無事だったか二人とも」

すると、奥から雄二が頭を掻きながら出てきた。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君も早いですね〜」

「朝一番でテストを受けていたからね。ふわあ……という事で、少し寝かせてもらえ  
るかな？ 昨夜は徹夜だったから眠くて」

眠気で欠伸が出る。全然寝てないから当然だけど。

「もう、そんなので決勝戦は大丈夫なの？」

「大丈夫だ。俺も明久も大悟の鞭撻のおかげで点数はかなり稼げたからな。それより  
この状態じゃ集中力が持たねえ。だから俺も少し休ませて貰う」

「そうだったんですか。それならゆつくり休んでください」

「そうじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「俺も休みたい……て言いたいところだが、お前らを休ませるのが先決だわな」

「……………（コクコク）」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃあ、一番喫茶店が混み合う十一時くらいに起こしてもらえる？」

流星にその時くらいは手伝わないとね。

「んじや、その時は俺も一緒に起こしてくれ。屋上で寝ているから。ほわあ……」

「それなら僕も屋上にいるからよろしくね」

屋上なら後夜祭用の放送機器が設置されてるだけだし、誰にも邪魔されずに眠れる

な。天気もいいし、絶好の昼寝場所だ。

そして少しふらつく頭を押さえながら立ち上がり、屋上へと向かっていった。

(なあ姫路、島田。あの二人が屋上に行つて、本当に寝るだけだと思ふか？ わざわざ屋

上を選んだ理由はなんだろうなあ?)

(ええっ!? それってじゃあ、寝るっていうのは? で、アキは人気のないところで坂本と  
……)

(……やっぱり、吉井君の方が受けなんでしょうか……?)

去り際に聞こえた会話は忘れることにしよう。そしてあの<sup>キモオタ</sup>大悟は後でシバイておこ  
う。

— —

「さてと、行こうか雄二」

「仮眠を終え、そこから少しの間喫茶店の方を手伝い、そしていよいよ試合の時間となった。

「そうだな。島田、俺たちは抜けるが大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても行かないと駄目でしょうが。決勝戦なんだからね？」

「後で私達も応援に行きますね」

「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」

「……………優勝」

「秀吉とムツツリーニがそう言つて僕と雄二に拳を突き出す。ちなみに大悟は先に試合場に行つていゝらしい。何でも自分の目で最初から最後まで僕らの戦いを見届けたいらしいのだ。全く、キモオタの癖にそういうところは情に厚い奴だ。」

「分かつてる。試召戦争の時みたいなへまはしないよ。それじゃ、行つてくる」  
「やれやれ。耳が痛いな」

「僕らはその突き出されたてに軽く拳を当てて、決戦の地に向かつて歩き出した。」

## 第二十九問 馬鹿と雑魚は違う

——大悟視点——

「ほー、中々に盛り上がってるじゃねえか」

大会会場に着いた俺はそのギャラリーの多さに思わず声を漏らす。準決勝の時もそれなりに観客はいたが、やはり決勝戦ともなるとその盛り上がりようは段違いだ。

しかも、観客席にちらほら品のよさそうな格好をした人が見受けられる。あれがババアの言っていた文月へのスポンサーなんだろうな。

(さて……：幼女はどこだ……：出来れば葉月ちゃんレベルの可愛い妹系キャラが……)

そう思い、観客席を見渡す。こんなに大勢いるんだ。その中に幼女の一人や二人いてもおかしくはない！

あわよくばその幼女の隣に座ってその香りを余すことなく堪能させてもらいたいですぞおグヘヘヘ……



「ねえママ。あのお兄ちゃんずうっと笑ってるよ?」

「しっ! 見ちゃいけません! 優奈はああいう怪しい変態に声をかけられてもついでいつちやダメよ?」

「へんたい? わかんないけどはーい!」

おっと! いかんいかん! 幼女とのイチャラブなんて事を考えている場合ではなかったな。それに俺は二次元を愛する男だ。それを忘れないようにしなければ。

そして、俺が一番明久達との距離が近いであろう一番前の席に座る。いい席が空いててよかつたぜ。

「さて、少し時間もあるみてえだし、途中だったオリジナルエロゲの脚本作りでもー」

「おや、偶然ですね。岡崎君」

「こんにちは、岡崎君」

「あ?」

急に隣からかけられた澄んだ声と妖艶な声。俺の知ってる中でこんな美声を持つヤツらは二人しかいない。

「なんだ、高城さんに、確か……小暮さんじゃねえか。どうしたんだこんな所で」

「いえ、私達もこの試験召喚大会の様子を見物させて頂くこうと思ってますね。隣、よろし

いでしようか？」

「ああ、構わねえよ」

「それでは、失礼しますね」

そして、高城さんが右側に、小暮さんが左側に座る。ふむ、こうして改めて見るとホントに整った顔立ちしてるよなあ。黙つてりやあカッコイイとはよく言うが、正にそれだよなあ。

そこで小暮さんは相変わらずエロイな。同志に紹介してやりてえぜ。

「だが、意外だな。高城さんはこういった催し物に興味がないと思つてたんだがな」

「ははは、それは少し心外ですね。私とてこういったエンターテイメントには多少なりとも関心はあるんですよ。それに、私にとつては今回の学園祭ですから、少しでも多く思い出作りというものをしようと思つているのですよ」

「思い出作り？　ならこんな所よりもババアのいる学園長室に行つて来たらどうだ？」

「おや、どうしてそこで学園長の名前が出てくるのです？」

「だつてアンタら、付き合つてんだろ？」

一瞬にして高城さんの表情が固まる。小暮さんは横でクスクスと笑みを浮かべていた。

「……お、岡崎君。もしや昨日のように私を騙そうとされていますね？　ですが流石に

もうそんな手には」

「そういえば小暮さんよお、今回の優勝賞品がなんだか知ってるか？」

「はい。確か如月ハイランドパークのプレミアムチケツトでしたわね。何でもそこに行つた男女は幸せになれるとか」

「そ、そうだったんですね。ですがそれと何の関係が」

「実はな、俺達Fクラスの設備の改修と引き換えにこのチケツトをババアに譲るという交渉をしててな。いやあ、あんなに嬉しそうなババアの顔は初めて見たぜ。良かったな高城さん」

「あら、そうだったんですの。なら友人として、私もお祝いしなければいけませんね」

「岡崎君、小暮譲、冗談はそのくらいに」

「ごめんなさい。私、？はあまり得意ではありませんの」

「人の幸せを冗談で使うワケねえだろうが。不謹慎だろ？」

「……………」

『さて皆様。長らくお待ち致しました！ これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

おっ、どうやら始まるようだ。

取り敢えず横で俺に論吉を差し出している高城さんは放つておいて、俺は会場に視線

を向ける。

『それでは、出場選手の入場です！』

アナウンスがそう告げると、会場に繋がる通路から明久と雄二が現れた。

『二年Fクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・吉井明久君です！ 皆様拍手でお迎えください！』

すると、盛大な拍手が観客席中から大きく響き渡る。おそらくここには例の姫路の父親もいるんだろう。

「あら……あれが例の『観察処分者』の吉井明久君ですか。思っていたよりも可愛らしいお顔をしているんですね」

「おっと、小暮さんお目が高い。何せヤツはダイゴブックスの中でも上位に食い込む売り上げを誇るんだ。主にそっち方面の方々や、一部の（腐）女子に大人気ですぜ？」

「おや、そうなんですかね。なら今度私も拝見させてもらってもよろしくて？」

「いいでしょう」

良かったな明久。お前（アキちゃん）のファンがまた増えそうだぜ。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！ これはFクラスが最下級という認識を改める必要があるかもしれません！』

「ほう、あの司会、中々粋な台詞を言うじゃねえか」

こんな言葉が聞かれれば、姫路の父親にも好印象だろう。オマケにここで明久達を持ち上げておけば『試験召喚システムのおかげで、最低学力の自分達でもやる気を出して学力が向上した』というPRにもなる。

『そして対する選手は、三年Aクラス所属・夏川俊平君と、同じくAクラス所属・常村勇作君です！ 皆様、こちらも拍手でお迎えください！』

コールを受けて拍手と共に姿を現したのは、散々邪魔をしてくれやがった例のクッソ野郎共常夏コンビだ。

『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるでしょうか！』

そして、明久達と常夏コンビが向き合った。さてさて、泣いても笑ってもこれがラストバトルだ。俺は野郎共の戦いを静かに見届けようじゃねえか。

「……いやはや、まさか高校最後の学園祭で、こんな異様な光景が見られるとは思いませんでしたよ」

「異様？ そりゃどういいう意味だ？」

「いえ、岡崎君にとつては気分を害してしまうような発言になつてしまうのですが、君達Fクラスは学園の中でも最底辺に位置するクラスです。そしてあの二人はその中でも特に問題児とされる生徒でしよう?」

「まあ、否定は出来ねえな。実質俺も似たようなもんだし」

「ですから、そんな彼らがどうやってこの決勝戦まで踏み切る事が出来たのか、私には皆目見当もつかないのです。特に片方の生徒……吉井明久君でしたかな? 彼は学園初の『観察処分者』です。悪いうわさも度々耳にしますからね。そんな名実ともに最悪とされる人物が何故この舞台に立てるのでしようか? いや……どうして立とうとすら思つたのでしょうか?」

「……………」

淡々と告げる高城に俺は何も言い返さない。高城さんは言葉を選んで話しているつもりだろうが、要約すると『何でお前等みたいな馬鹿が勝ち上がれるなんて有り得ない』と言っているのだ。でもこの考え方を俺は否定しない。

俺達は、勉強こそが学園で生きるための武器であり、戦争で最も必要とされる力になる文月学園において、それらを酷くおろそかにしたヤツラの集まりだ。そしてこれは召喚大会。普段の戦争とは違って普段の積み重ねだけが勝敗を決めるため、その『力』を持たない俺達がいること自体がおかしいことなんだろう。

それに高城さんはこんな残念ながらも三学年の首席だ。全生徒の頂点に立つ高城さんが、自分とは全く逆の立場にいる明久に対して良い印象は持てないのも無理はない。まあ、高城さんの場合は姫路のことも含めて思うところがあるのだろうが。

「待って下さい高城君。あまり岡崎君の前でそのような事を言うのはー」

「いや、別に構わねえぜ小暮さん。高城さんの言ってることは至極真つ当な考え方だ。だから俺はそれを責めるつもりはねえ」

「岡崎君……」

「だが、高城さんよ。アンタの言ってることには一っだけ間違いがあるな」

俺がそう言い放つと、高城さんは疑問符を浮かべたような表情を見せる。

「間違いですか？ 一体私が何を間違えているというのです？」

「ま、見ていれば分かるさ。アンタがそうであるように、明久達だってそういうことなんだ」

「？ どういうことですか？」

「『馬鹿』と『雑魚』は違うってことだよ」

――

――明久視点――

アナウンサーがルール説明をしているが無視し、僕らは先輩達と睨みあった。

「ようセンパイ方。もうセコい小細工はネタ切れか？」

「お前らが公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな。Fクラス程度のオツムじゃ理解できなかったか？」

「残念ながら、お前らの言葉なんてAクラス所属でも理解できないだろうよ。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将」

「て、テメエ、先輩に向かつて……！」

観客には聞こえない程度の小声で雄二と坊主先輩による挑発合戦が行われている。雄二も言つてやりたいことがたくさんあるのだろう。

そして、僕も確認したいことがある。

「先輩。一つ聞きたいことがあります」

「あんだ？」



「教頭先生に加担している理由は何ですか」

「っ!？」

そう聞くと、坊主先輩は一瞬驚いたような顔をした。

「……そうかい。事情は把握してることかい」

「大体は。それでどうなんですか？」

「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさげらばだ」

「そうですか。そつちの——常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあな」

「……そうですか」

小さく頷いて会話を打ち切る。僕が聞きたいのはこれだけだ。

「本当は小細工なんて要らなかつたんだよな。Aクラスの俺達とFクラスのお前らじゃ、そもそも実力差があり過ぎる」

「そうか。それなのにわざわざご苦労なことだな。そんなに俺と明久が怖かったのか？」

「ハッ！ 言つてろ！ お前らの勝ち方なんて、相手の性格や弱みにつけこんだ騙し討ちだろうが。俺たち相手じゃ何もできないだろ！」

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』  
説明も終わり、審判役の先生が僕らの前に立つ。

「「試獣召喚」」

掛け声をあげ、それぞれが分身を喚び出した。

Aクラス 常村優作 209点

&

夏川俊平 197点

確かにAクラスに所属しているだけのことはある。点数はかなりのものであり、召喚獣も質がかなりよさそうに見えた。

どうやらこの二人、本当に勉強ができるみたいだ。

「どうした？ 俺たちの点数見て腰が引けたか？」

「Fクラス程度じゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」

誇らしげにディスプレイを示す先輩。確かに誇ってもよいくらいの点数だ。

けれど、特に驚きはない。何故なら先輩達の点数が可愛く見えるくらいの化け物を、僕はよく知っているから。

そして彼らは、あれほどの点数を持ち合わせていながら、正々堂々ということ捨てて、僕たちの邪魔をした。

——大切な人たちに取り返しつかないような酷いことをしようとした。こんな連中の身勝手な動機のせいで、姫路さんを守れないなんて、馬鹿げている。

「ホラ、観客の皆様に見せてみるよ。お前らの貧相な点数をよ」  
「夏川。あまりいじめんなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ？」

この二人に対して、形容しがたい強い感情が湧いてくる。

「……前に」

「あん？」

「前に、僕の二人のクラスメートが言っていた」

「なんだ？ 晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」

ギャハハハ、と笑う坊主先輩。

「試召戦争の時、姫路さんと大悟が言ってくれた言葉が頭に浮かぶ。そう。あの時、二人はこう言っていた。」

「『好きな人の為なら頑張れる』って」

「ハア？ コイツ何言ってるんだか」

「そしてもう一つ。先程から先輩達が発しているそのセリフは——」

Fクラス 坂本雄二 215点

&

吉井明久 166点

「——負けフラグそのものだって」

「なっ!?!」

点数が表示されたディスプレイを見て、二人の顔色が変わった。

「アンタらは小細工なしの実力勝負でぶっ潰してやる！」

| | |

| | | 大悟視点 | | |

「なんと、あの点数は……」

「あんな点数が取れるとは……とてもFクラスの生徒とは思えませんわ……」

デイスプレイに表示された明久と雄二の点数を見て、若干ではあるが驚愕の姿勢を見せる高城さんと小暮さん。そりやあそうだ。最底辺に位置する問題児二人が、自分たちと同じAクラス相当の点数を引つ提げてきたのだから。

俺も初めてアイツらの点数を見るが、特に明久の野郎……いつもより全然高得点じゃねえか。ま、そうでなきや俺が付きつきりで教えた意味がねえ。

「二人共、驚くのはまだ早えぜ？ お楽しみはこれからなんだからよ」

「……成程、これは興味深い。どうやら思っていたよりも、中々に楽しめそうな試合になりそうですね」

「ええ、その通りですわね」

そうやって、二人は再び視線を会場に向けた。これで二人は明久達に一目置いただろうが、俺にとってはそんな事はどうでもいい。

さあ、俺はやるだけのことをした。後はテメエらがやるだけだ。だから俺は一切声は出さない。

アイツらの勝利を信じて、どっしりと構えておけばいい。

(明久、雄二。テメエらは俺にめるたんのリアルタイム視聴をやめさせてまで付き合わせたんだ。こんなところで負けやがったら許さねえからな！)

――

――明久視点――

「それじゃあー行くぞっ」

先に動いたのは雄二の召喚獣だった。装備が軽い分、動きが速い。

「夏川！ こっちは俺が引き受ける！」

モヒカン先輩が慌てて雄二の正面に立ち塞がる。雄二とモヒカン先輩の点数は拮抗関係にあるから、互いが目を離す事は出来ない。つまりタイマン勝負になる。

これなら僕は、もう一人からの不意討ちなどを心配せず存分に戦える。

「それじゃ、僕の相手は先輩ですね」

「上等じゃねえか！ 多少ヤマが当たったくらいでいい気になるなよ！」

正面から坊主先輩の召喚獣が剣を構えて突つ込んでくる。流石に動きは速い、けれどただの馬鹿正直な突撃なんて避けてくれと言っているようなもの。

半身を右にずらして、小さな動きで相手を避ける。

「つと、この……！」

そのまま背中を向けそうになった相手は、振り向きざまに横薙ぎの一撃を見舞おうとするが、その一撃を小さく屈むことでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るう。

「くうっ！」

なんとか剣で防御した先輩は、仕切り直すように大きく一歩下がった。

「テメエ、試召戦争じゃ60点程度だったくせに……！」

「今でもそんなもんですよ。この教科以外は、ね？」

「野郎……！ 最初からこの勝負だけに絞ってやがったな……！」

「ご名答。よくわかりましたね、先輩」

歯噛みする敵に対して木刀を四方から叩きつける。これだけの点数を取っていたら木刀だつて真剣に負けない強度になる。これならぶつかり合つても折れたりはしない。

「クソっ！ Fクラスのくせに……！」

「そんなFクラスでも、頑張ればここまでの実力をつけられるんですよ。甘く見られては困りますねっ！」

悔しそうに歯ぎしりをする坊主先輩。よし、中々にいい調子だ。このまま押し切れれば勝機はある！

「仕方ねえ。二年相手に大人げないが、経験の差つてやつを教えてやるよー」  
「？」

そう告げると、坊主先輩の召喚獣は大きく飛び退つて、僕だけじゃなく坊主先輩本人からも距離を取つた。一体何をしようというんだ？

「何をしようとしてるか分からねえだろ？ お前の知らない戦い方があるんだよ」

「なんだつて……？」

戸惑う僕に対して意味ありげな坊主先輩の台詞。そこまで言われれば、嫌でも向こうの召喚獣の動きが気になる。



用心深く見ていると、敵は剣を腰だめに構え、まるで力を溜めているように見えた。まさか、僕ら二年生が知らない特殊能力でも持っているのかな？

「おおおおっ！」

坊主先輩先輩が力を込める。何をしてくるのか分からないけど、とにかく相手を牽制しないと！

「いけっ！」

召喚獣を敵に向かって走らせる。このまま追撃を——

「そら、引っかかった」

「えっ……うぐっ!？」

と、坊主先輩のからかうような声が出たと同時に、両目に飛び込んできた異物。思わず目を閉じてしまった。

こ、これは……砂利!? 目潰しか!

「く——そおっ！」

「そうか、この為に坊主先輩は召喚獣にあんな大仰な仕草をさせたのか！　そうすれば立会人の教師も観客達も坊主先輩の召喚獣に視線が集中する。誰も坊主先輩本人の動きなんて見ていないだろう。やられた！」

「これが経験の差ってやつだ。さあ、反撃開始といこうじゃねえか！」

「マズい！　敵の攻撃が来る！　目は未だ見えないため、勘で召喚獣を横に跳ばせる。」

その瞬間、左脇に鋭い痛みが走った。

「ぐうううっ！」

痛む目を擦って無理矢理開く。そして一目散に僕の視界に映ったのは、剣にわき腹を切り裂かれた僕の召喚獣だった。

「そーいやお前、《観察処分者》なんだよな？　こいつはさぞかし痛えだろうなあ」

「……………っ！」

おまけと言わんばかりに顎に拳を叩き込まれる。脳が上下に揺さぶられ、意識がとぶような感覚に襲われた。

脇腹の焼けるような痛みと、頭の中が掻き回される不快感。そのせいでこみ上げてくる強烈な吐き気。これ、結構マズいかも……………。

「ま、これがお前ら二年と俺ら三年の実力差ってことだ。んじゃ、これで終わりにしてやるよお！」

坊主先輩の召喚獣が再び僕の召喚獣めがけて突進してきた。でも今の僕にはそれを回避するための余裕がない。

あまりの苦しさに視界もぼやけてきて、少し意識が遠ざかってきた。やっぱり、僕じゃあ勝てないのか——

「明久っ！ てめえ根性見せろやっ!!」

「——っ！」

突然鼓膜に響くほどの怒声が聞こえる。他でもない、雄二の声だった。それによって、僕は思い切り足を地面に叩きつけて意識を留まらせる。

そして、ふと観客席の方をみると、

「……………」

もう一人の戦友、大悟がこちらを見つめていた。

一切口元は動いておらず、ただ真つ直ぐにその射殺すような鋭い視線を僕に向けている。けれど僕は、不思議とヤツが僕に何を言いたいのかが分かる。言葉ではなく、その表情と気迫だけで、全てを察した。

——お前なら勝てる。だから思う存分やつちまいな、と。

「よし。いけるな、相棒明久？」

「……当然っ！」

そうだ。まだ戦闘不能じゃない。前に大悟が言っていた。戦いで負けるのは弱者でもバカでもない。ちよつとでも負けに臆したヤツだつて。つまりそれは、さっきの僕みたいに一瞬でも勝つという信念が揺らいだ時も同様だ。

なんて僕は情けないんだ！ たった少しだろうと、こんな連中に負けると思ってしまったうなんて！

「死んでも……負けるもんかあつ！」

「その意気だ、明久！」

「悪あがきを！ すぐにとどめをくれてやるぜ！」

僕の召喚獣は弱っている。ここでケリをつけないと勝ち目はない！

「……んのおおっ！」

痛みを堪え、召喚獣を動かして敵の脇をすり抜ける。そのがら空きの背中に大きく蹴りを放った。

傷の影響であまり威力は出ていないけど、相手の態勢を崩すことに成功した。

「雄二っ！」

「おうっ！」

雄二が僕の様子を確認して、一気に召喚獣をもう一方の敵であるモヒカン先輩の方に突っ込ませる。

「舐めんなっ！」

迎え撃つようにモヒカン先輩の召喚獣が剣を振り下ろす。対する雄二の召喚獣は防御や回避もせず、ただ一直線に敵に迫る。

「もらったあっ！」

その剣が雄二の召喚獣の首を両断しようとした。

「させるかあっ！」

ギインッ！

その寸前、僕の召喚獣が木刀をぶん投げて、その剣の軌道を変えた。

「ぐっ！ しまつー！」

「吹き飛ばやああつ！」

雄二の召喚獣の間合いにまで入られたモヒカン先輩の召喚獣は、大威力の拳によつて吹っ飛んでいった。

それにより会場中から歓声が起こる。

「野郎！ 得物を手放すなんて上等じゃねえか！」

そして、僕の方に坊主先輩の召喚獣が迫る。こつちは無手で、相手は三年生だ。召喚獣の扱いに慣れていない同学年相手とは違って、武器もなしにいなせるほど甘くはないだろう。

けれど、一瞬でも注意が逸れば初撃はかわせる！

「こんな戦い方もあるつてことですよ！ なんせ僕をここまでにしてくれた男は、そういうヤツなんでねっ！」

「っ!?! 邪魔ー！」

先程雄二の召喚獣によつて吹っ飛ばされたモヒカン先輩の召喚獣が、坊主先輩の視界を遮る。さっきの砂利のお返しだ。

その隙に召喚獣を前に出す。狂った間合いのおかげで坊主先輩の召喚獣は攻撃の夕

イミングがずれる。これならかわせる！

「くらえっ！」

相手の攻撃を避けて、そのまま頭突きをくらわせた。威力には期待できないけれど、動きを牽制するならこれで充分だ。

「明久！」

「待ってたよ雄二！」

雄二の召喚獣がさっきの木刀をこちらに向かって蹴り飛ばしてきた。扱いに慣れてないくせにいいパスじゃないか！

勢いよく地面を転がってくる木刀を拾い上げさせる。そして雄二の召喚獣とともに坊主先輩の召喚獣に迫った。

「くそおおっ！ お前らごときに三年の俺がー！」

「はっ！ 俺たちを相手にしたのが間違いだったな、ボス猿さんよお！ 行くぜ明久ア！ ぶちかますぞ！」

「おうっ！ これが僕たちFクラスの力だ!! くらえっ！ 大悟直伝ー！」

「恋の!! ダブル☆ストリアアアアアイク!!!」

ドオオオオオオオン  
!!!!

僕の召喚獣の木刀は相手の喉元に深く突き立たれ、雄二の召喚獣の拳は相手の顔面に捻じ込まれる。そして相手は、その衝撃によって大きく吹っ飛んでいった。

これでもう、相手に戦える戦力はない。つまり、

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしやあああー!!」

全身が激しく痛むし、吐き気だっておさまらない。それでも僕は今、最高の気分を味わっていた。



## 第三十問 終わり良ければ総て良し!

——大悟視点——

『坂本・吉井ペアの勝利です!』

「いいいよつしやああー!!」

アナウンサーが勝ち名乗りをあげると、明久の歓喜の叫びと観客の歓声が一気に会場中を包み込んだ。そりゃあそうだ。はたから見れば誰もが常夏コンビの勝利を考えていたのにも関わらず、後輩に、しかも学園最底辺の二人が正々堂々と戦い、見事観衆たちの予想を大きく覆したのだ。盛り上がらないワケがない。

当の俺も思わず声をあげてしまいそうになるくらい喜びに満ち溢れていた。

「まさか……本当に優勝してしまうとは……!」

「なんとという大番狂わせ……! 信じられませんか……!」

流石に高城さんも小暮さんも予想外だったのか、かなり驚いているようだ。

「ははは、どうですか二人共。確かに俺達はアンタら三年から見たら掃き溜めのような

存在かもしれねえ。けどな、その代わりに俺たちは掃き溜めであるが故の『勝ちへの執念』と『バカゆえの諦めの悪さ』に關しちやどこにも負けねえ。ああいうバカつてのはな、普通のヤツらと違って『あんなに実力差があつて勝てるわけがない』という概念は持ち合わせちやいない。ただただ学力という一つの道筋しか知らねえお利口さん共とは『氣概』が違うのさ」

俺は自信満々かつ淡々とそう二人に言い放つ。

「それにな、高城さん。アンタはさつき明久がなんでこんな大舞台に立とうと思つたのかと言つてたな？ そんな簡単な話だよー」

「ーアイツはな、テメエの守りたいモンの為に動いてるだけだ」

そう、何故明久が召喚大会への参加を決意したか。それは学校存続の危機だとか、設備の改修だとかも勿論だが、大元の理由は……：姫路なのだ。

召喚大会で優勝すれば、ババアの失態を隠す代わりに設備の改修を承諾してくれる。そうすれば姫路は今よりもっといい環境で過ごすことができる。そして転校の件も、自分たちが優勝して、Fクラスの存在意義を父親に見せつけければ、その考えを改めるかもしれない。

そう、明久の今回の行動は殆ど、姫路の事を一番に考えての行動なのだ。そうじゃなければあのバカがここまで躍起になることはない。だからこそ俺や雄二は学園祭に真面目に取り組む事を決めたのだ。まあ、俺や雄二は霧島ヤン&優子デレの共こともあるんだが。

「観察処分者? Fクラス? んなもんアイツには関係ねえ。誰になんと蔑まれようが悪く言われようが、明久は決して折れたりしねえ。例え絶望的な状況にしようが、少しでも可能性があるならそれに向かつてがむしやらに突き進む……それが『吉井明久』って男なんだよ」

正直、自分でも何言ってるんだかと思う。だが不思議ともうそれを受け入れている自分がいるのも確かだ。

俺も雄二も、秀吉も同志も……気づかぬうちにあのバカに洗脳されてんのかな。

「……成程、どうやら私は彼のことを過小評価し過ぎていたようですね」

「あ?」

「岡崎君。先程の私の発言ですが、訂正させて頂きたい。彼は私の思っていたよりも素晴らしい生徒のようだ。先程のアナウンサーの方同様、私もFクラスだからなどという考えは、改めなければならぬようですね」

「ほう、それはまた随分と持ち上げるんだな?」

「いえいえ、岡崎君も知っているでしょう? 私は騙されやすい人間ではありませんが」

まらない？がつける人間でもありません。ですからこれは紛れもない本心ですよ。吉井明久君……彼は優勝するに相応しい人間のようだ」

「……そうかい。ま、そう思ってくれたんなら俺からは特に何も言えねえわ。それにアンタらも、ちゃんと自分のクラスの手綱くらいしっかり引いとけな？」

そして、俺はゆつくりと立ち上がる。明久と雄二の優勝が決まった今、もうここに用はない。恐らくこれでFクラスのこととはかなり認知されたことだろう。中華喫茶の方も忙しくなるに違いない。

「んじゃ、俺は喫茶店の方があるんで戻りますわ。高城さん、小暮さん、もし暇があるならFクラスに足を運んでくれよ？ アンタの憧れの姫路もチャイナ服で働いてっから

よ」

「ええ、是非ともそうさせてもらいましょつか」

「学生最後の学園祭に素晴らしいものを見せていただきましたわ。感謝致します、岡崎君」

「それは俺じゃなく明久と雄二に言うこつたな。そんじゃ」

そして、二人に軽い挨拶をして俺は会場から出ていった。

そしてそのまま廊下を歩いていると、丁度試合を終えた明久と雄二と出くわした。

「「.....」」

何も言わない。いや、何かを言う必要などなかった。

色々言いたいことがあつたはずなのだが、こいつらの表情を見た瞬間、それは全て杞憂と化したのだ。

そして、俺はゆつくりと両手を上げる。それに応じるように明久と雄二もそれぞれ片腕をあげー

パアッ!!

俺たちは一斉に、ハイタッチを交わした。

この喧嘩、俺たちの完全勝利だ。

――

――明久視点――

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「まさかここまで客が増えたとはな……」

「……………（コクコク）」

放送を聞いた途端、足から力が抜けていく。

試合終了後、僕らの中華喫茶は優勝の影響もあり、お客さんが嵐のように舞い込んできた。怒涛の勢いでやってくるお客さんを案内してはさばいて、さばいては案内して。

ここまでウエイターが疲れる仕事だとは思わなかった。

「あそこまで忙しいなんて、ウチの店の? 忙期並じゃねえかクソツタレ……」

隣では大悟が深く椅子に腰かけている。僕も相当疲れたけど、コイツやムツツリーニは息つく暇もなくずっと押し寄せる注文に対応してたんだ。体力自慢の大悟でもかなりキツかっただろう。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだらう?」

「ん? なんだ、お義父さんが心配なのか?」

「なっ!? べ、別にそういうわけじゃなくて!」

「後夜祭の後で話をしに行くと言っておったのう。おそらく結論はその時じゃな」

秀吉が返事をしてくれる。そっか、まだわからないのか。大丈夫だとは思うけど、少し不安だな……。

それにしても、さっき姫路さんが言っていたお話って何なんだらう?

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ!? どうして!」

若干沈んでいるところに、更にご無体なお言葉。

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まっているでしょ?」

「すいません。すぐ戻りますので」

「待って！ 二人とも考え直すんだ！ カムバアーツク！」

僕の必死の説得も虚しく、姫路さんと美波は無情にも去って行ってしまった。非常に残念だ。

因みに葉月ちゃんはそのままの格好で帰っていった。それについていこうとした馬鹿もいた。隣にいるやつだけだ。

「……………明久、心配するな」

「え？ 大悟……………」

サツ（姫路さんと美波のチャイナ服イラスト『着崩し&上目遣いバージョン』）

「俺からの優勝祝いだ」

「大悟おおおおおーっ!!」

凄いい！ いつの間にこんなイラストを作っていたなんて！ しかもカラーバージョンじゃないか！

馬鹿にしてごめんよ大悟！ やっぱり君は最高の友達だ！

「ふむ、ならばワシもー」

「！！！！」

そう言っただち上がろうとした秀吉。そうはさせない！

「させるかあつ！ せめて秀吉だけは着替えさせない！」



「そうだつ! そんな無情な真似は相棒にはさせるわけにいかねえ!」

「……………(フルフル)」

「なっ!? 何をするのじやお主ら!」

疲れた身体に鞭打つて秀吉の足にタツクル。そしてもう片方の足にはムツツリー二が。後ろからは大悟が秀吉の両腕をがっちりとホールド。

「どうやら考えていることは同じなようだ。」

「おいお前ら。遊んでないで学園長室に行くぞ」

そんな僕らを呆れたような目で見ているのは疲れを感じさせないタフなクラス代表。

雄二の言う通り、腕輪は僕らなら問題なく作動するとはいえ、一応約束だ。最低限必要な報告くらいはしておかないといけないし。

「ならちよつと待つておれ、すぐに着替えを」

「NO着替え! お前はそのまま行くんだよ秀吉!」

「なっ! は、放すのじや大悟! 下ろすのじや!」

そう言つて大悟は秀吉の身体を右腕で抱きかかえる。うーむ、今だけあの大悟のパワーが羨ましい。

けど流石大悟だ。僕ら愛好家の在り方をきちんと心得ている。

「もういい秀吉。お前はそのままの格好で来い。コイツらを説得するのも面倒だ」

「やれやれ……。仕方ないのう。着替えは後回しじゃ」

「よし。ほら大悟。放してやれ」

「分かった」

「全く。ワシのこんな姿を見てもなんの足しにもならんじやろうに……。」「決してそんな事はないと思う。」

——

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

「どもー」

ノックと挨拶をして学園長室の扉を開ける。

「お主ら、全く敬意を払っておらん気がするのじゃが……。」「

「そう？ きちんとノックをして挨拶したけど？」

それにコイツらよりはマシなはずだ。

「アタシは前に返事を待つようにいったはずだがねえ」

「あ、学園長。優勝の報告に来ました」

「言われなくてもわかっているよ。アンタたちに賞状を渡したのは誰だと思ってるんだら？」

相変わらず遠慮のないババアだ。少しは相手に気を遣うことを覚えた方がいいと思う。

「それで、白金の腕輪は返却した方がいいですか？」

実は白金の腕輪は、高得点を叩き出した時に出てくる金の指輪とは違って、召喚者自身に装備するものなのだ。

「いや、それは後でいいさね。どうせすぐに不具合は直せないんだ」

「あ、そうだったんですか。じゃあしばらくは僕らが持つていていいって事ですか？」

「ああ、それで構わないよ」

そうか、それならありがたく使わせてもらうことにしよう。確か僕の腕輪は、召喚獣を同時召喚出来るタイプのやつだからかなり使い勝手が良いに違いないだろうな。

「……ん？ おい雄二、さっきからどうしたんだ？」

見ると、雄二がまた何かを考えるような仕草を見せている。この部屋で考え事をするのが好きなんだろうか？

なにかブツブツ独り言を言ってるようだけど放っておこう。どうせ説明してもらわないとわからないし。

「そういえば、なんであいつらは俺たちがババアとつながっていると知っていたんだ  
……………」

「なあ明久。とつとと用件済ましちまえよ。この後後夜祭もあるんだろうが」

「そうだね。じゃあ、これと交換条件で設備の改修を承諾してくれる取引を——」  
「待て明久！ その話はマズい！」

「「え？」」

雄二が急に真剣な表情で怒鳴りだしたため、思わず大悟と間拔けた声を出す。

「おい雄二、いきなり何だってんだ？」

「……………盗聴の気配」

「クソっ！ やっぱりか！」

ムツツリー二の言葉を受け、雄二が駆け出して扉を開け放つ。すると、複数の足音が遠ざかっていくのが伝わってきた。

「あいつら……………！ 追うぞ明久！ 大悟！」

「ちよっ……………雄二、どういうこと!?!」

「盗聴だ！ あの連中、この部屋に盗聴器を仕掛けてやがったんだ！」

「何だつて!？」

「てことは、今までの会話も全部筒抜けだったのか!？」

「ああ、間違いない! もしも録音なんてされていたら、相当マズいことになる!」

そんなの冗談じゃない! もしこれまでのことが公になったら今までの苦労が水の泡だ! 学園の信用は地に落ち、存続自体が危険に晒される! そうなったら姫路さんどころか全員が転校だ! なんと少しでも証拠を隠滅しないと!

「とにかく急ぐぞ! 秀吉とムッツリーニも協力してくれ!」

「うむ!」

「……………(コクリ)」

五人揃って学園長室を飛び出す。おそらく盗聴をしていたのはあの常夏コンビだろう。あれだけやられたのにまだ懲りないのだろうか。

一人ずつで方が一返り討ちに遭うとまずいという事で、ここからは二手に分かれて行動することにした。

「秀吉、同志! 連中は昨日母さんにボコボコにされた二人組だ! 分かるか!？」

「なるほど、あやつらじゃな! 了解じゃ! ワシとムッツリーニは外を探す!」

そうか。家に帰ってコピーでもされたら厄介だから、まずは学校の出口から潰していくのか。

「……………明久」

「ん？」

「……………これを」

そう言つてムッツリーニが手渡してきたのは、彼の愛用の双眼鏡だった。

「……………予備」

「サンキュー、ムッツリーニ！」

「……………この学校は気に入っている」

それは僕も同意見だ。だからこそ僕らはこうして奔走している。学園を潰させない為にも。

「相棒！ 見つけたら俺の携帯に連絡を入れろ！」

「了解じゃ、相棒！」

そして、屋外組と屋内組に分かれて、校内を走り回る。本当にここ二日間は学校内を走ってばかりだ。

——大悟視点——

「明久! 大悟! まずは放送室を押しさえるぞ!」

「オーケー!」

「了解だ!」

まずは最も危険な放送室を選んだ雄二。確かにあそこは仕入れた情報を暴露するの  
にうってつけだ。そうなりやあ録音された本体機器を回収しても無意味だ。確実に押  
さえるべきか。

く 放送室 く

「ガサ入れチェックの時間だオラア!」

「邪魔するぞ!」

「な、なんだお前ら!」

「雄二、大悟! ここにいるのは煙草吸ってるバカだけだし、置いてあるのは学園祭で密  
かに取引されていたアダルトDVDくらいだ!」

「何だこりやあ!?! 亀甲縛りの結び方がちげえじゃねえか! 監督は素人かコンチク  
シヨウ!」

「とりあえず煙草とDVDを押収して先を急ぐぞ！」

「そうだね！ 校則違反だもんね！」

「おいお前ら！ こんなもん見るくらいなら俺がもつと良作を用意してやる！ もし所望するなら後日改めて俺の所まで来い！」

「ど、どろぼう！ 泥棒！」

く 廊下 く

「あれ？ アキに坂本に岡崎。そんなに急いでどうしたの？」

「ごめん美波！ ちょっと先を急ぐんでまた後で！」

「あ、おいバカ！ お前DVD落としたぞ！」

「なっ!? しまった！」

「アキ、何か落としたわよ？ えーっと、『女子高生緊縛物語』……何コレ？」

「逃げよう二人とも！ なんだか美波を中心に闘気の渦が見えるんだ！」

「待ちなさい！ アンタなんでこんなものを持つてるのよ！」

「明久が欲しそうにしてたから譲った！」

「余計な事を言うな貴様ら……ってひいいっ!? 追ってきたあ！」



く 二—A教室前 く

「……雄二」

「翔子! 悪いが今はお前に構ってられない!」

「……大丈夫。市役所くらい一人で行ける。婚姻届を出すだけだから」

「そうか! なら何も問題は無いな!」

「ちよつと待て! 問題大ありだ! 大体俺はそんなものに判を押した覚えはないぞ!」

「雄二! 大悟! ここにはいないから先を急ごう!」

「待て二人とも! こつちはこつちで大変なことになっているんだ!」

「それじゃあまたね、霧島さん!」

「邪魔して悪かったな!」

「待て! 頼むから待ってくれ!」

く 再び廊下 く

「ダイゴ? ドウシテニゲルノカナ? ナニヲカクシテルノカナアアア? ウワキ

カナア?」

「走れお前ら! 捕まったら挽き肉にされるぞお!」

「うわあっ!? 大悟! 木下さんがナイフを十本くらい持ち出してるんだけど!」  
 「まさかあれを投げる気なのか!? そんな芸当がー!」

ヒュウン!! ザクッ

「!.....逃げろおおおおお!!!」

「ソツカア、アタシトオニゴツコガシタイノネ? ジャアサンニンマトメテツカマエテ  
 アゲルワネエ? トクにダイゴニハタツプリオシオキシナイトネ♪」

「!うわあああああああ!!!」

――

結局、校舎を一階から四階まで探したが、肝心の常夏コンビは見つからなかった。それどころか、何故か俺が明久と雄二の三人で逃避行を図ろうとしているというふざけた誤解が生じ、霧島と島田にまで俺たちは追いかける羽目になった。

「畜生! 全然見つからねえな.....」

「マズいな.....。随分時間をロスした」

「そうだね。あいつら一体どこにーん?」

「どうした明久ーなんだありや?」

明久の視線を追ってみると、そこには見慣れないものが置いてあった。

「ああ、ただの打ち上げ花火じゃねえか」

「あ、恒例の締めを使うヤツ? へえ。こんなところに保管していたんだ」

「花火は一応火薬の塊だからな。寸前まで火の気のないところに保管しておくのが鉄則だ」

「ほー、そうなのか。しっかし花火まで用意してやがるとは、ホントに金はあるんだな」

「感心している場合か? それよりも早く常夏コンビをー」

すると、俺のポケットから無機質な着信音が響いた。携帯電話だ。

「俺だ、秀吉か?」

『うむ。見つけたぞい、さすがはムツツリー二じゃ。遠くまで見ておる』

「ナイスだぜ! そんなで、連中はどこにいやがる!?!」

『新校舎の屋上じゃ』

「お前ら! ヤツらは新校舎の屋上だ!」

俺がそう叫ぶと、明久は同志から借りた双眼鏡で屋上を覗く。

「あ、本当だ! 確かにいる!」

「明久! 俺にも見せろ!」

明久は双眼鏡を雄二に渡す。しかし、屋上か……そこまでは探していなかった。

「やべえ！ あいつら、屋上の放送機器を準備していやがる！」

「なんだって!?!」

つまり、後夜祭用の放送機器を使って流すつもりか！

「秀吉！ お前たちは今どこだ！」

『部室棟じゃ』

部室棟だと、それじゃあダメだ。そこから屋上までは走っても五分はかかっちゃう！  
けれど今俺達がいるこの場所からでも同じくらいはかかる。だが向こうは今すぐにも放送を始めようとしているし、このままじゃ間に合わねえ！ 着いた頃には全てが  
終わりだ！

どうすればいい、最悪アイツらごと倒すやり方でも構わない。ここからでもあの放送  
を止めるためにはどうすれば

——ふと、先程の打ち上げ花火が目に入った。

「……おい。明久、雄二」

「……やっぱり大悟もそう考えるか」

「……それしか方法はないもんね」

「ああ、どうせこのままじゃ俺たちは終わりだ。ならいつちよド派手にかましてやるのも悪かねえ」

「それじゃあ雄二、よろしく」

「了解だ。――起動<sup>アウエイクン</sup>」

そして悪戯な笑みを浮かべる俺たち。さあ、パーティーの始まりだ。  
アイツらにはいつちよ、地獄を見てもらうとしよう。

――

「夏川、そっちの準備は大丈夫か?」

「大丈夫だ。へへっ。これが流れりや俺たちの逆転勝利だな」

「そうだな。これで受験勉強なんかしなくても――おおおっ!」

「なんだよ常村。何をそんなに驚いて――ゲエツ!? マジかよおっ!」

「とにかく伏せろおおっ!!」

ドオン！パラパラパラ

「どうだ大悟！ 当たったか!？」

「いや、外したぞ明久！ もうちよい下を狙え！」

双眼鏡を覗き込みながら、そう明久に指示する。チツ！ 避けやがったか！ 無駄な足掻きを！

現在、俺たち三人を中心に試験召喚フィールドが展開されており、物理干渉が可能な明久の召喚獣が、打ち上げ花火を屋上めがけて投げつけている。

無論、こんなことを教師が承認するワケはない。じゃあなぜフィールドが出ているのかというと、雄二が身につけているもう一つの腕輪によるものだ。

「オツケー、もうちよい下だね！」

「いけ明久！ 点火だっ！」

「了解！」

「「「フオイヤー!!」」」

ヒュ〜………

ドオン！

「よっしや! スピーカーが粉々に破壊されたぜ!」

これが俺たち三人の最終手段。名付けて恋のバーニングフラワー☆アタックだ!

「よし! 後は放送機材だけだ! さつきよりも右に一撃くれてやれ! ビスマルクちゃんのようにな!」

「おうっ!」

俺の指示通り、明久は召喚獣の方向を右に修正する。物に触れられる明久の召喚獣は、こういう時は本当に役立つ。

そしてもう一発、召喚獣は花火をしっかりと構えた。

「いく大悟! 雄二!」

「おうっ!」

「「フオイヤー!!」」

三人の声と共に、花火を思い切り投げつける明久の召喚獣。そのまま花火は綺麗な放射線を描きながら屋上へと向かっていき、見事放送機材に命中した。これでもうヤツらはなにもできまい!

「雄二、一応目的は果たしたがどうする? まだやるか?」

「そうか、それじゃあ最後に常夏コンビに一発ブチ込んでトンスラするか」

「そうだね。やっぱり悪は徹底的に殲滅しないとね」

その通り、悪は可能性から根絶やしにせにやあならん！ ようみちよれ……！！  
そして再び双眼鏡で確認する。おっと、大分慌てていやがるな。だが時すでに遅しと  
いうものよ！

「今度はさつきより左……いや、右に照準を合わせろ」

「りよーかい！ それじゃあ、とどめの一撃いきまーす！ せーのー！」

「貴様らあつ！ 何をやっているかあつ！」

「うわあつ！」

「おいバカ！ どこに投げてやがー！」

ヒュ………

ドオン！

「あ、明久！ 学校にブチ当たったぞ!？」

「ああつ！ 校舎がゴミのようだつ!？」

「まるで海外ドラマの建物が爆破するシーンみてえだな！」

突如後ろから聞こえたドスの利いた怒鳴り声によって、召喚獣は狙いを外し、火花は見事校舎の一角に激突、爆破した。壁や扉が瓦礫の山と化していく。わースゲー。



「き、君達! よりによって教頭室になんてことをしてくれただ!」

え? あそこ教頭室だったのか。なら逆にラッキーだ。今回の黒幕は教頭だからな。それにアイツには優子の件でケリをつけなきゃと思っていたところだった。こいつはいい! 今までふんぞり返ってたテメエに俺たちからの正義の鉄槌をくらいやがれ竹原さんよお!

「よし、これで任務完了だな! アツハツハ!」

「全くその通りだな! アツハツハ!」

「これでもう心配はないよね、アツハツハ!」

「何がアツハツハだこの馬鹿共があつ!!」

お馴染みの低い声。我らが鉄人の登場だ。

「逃げるぞ明久! 大悟!」

「おうともさつ!」

「分かつてらあ!」

「吉井いつ! 坂本おつ! 岡崎いつ! 貴様ら無事に帰ることができると思うなよ!」

さて、悪は滅んだ。後は裏ボスから逃げることだけだ！

「違うんですよ先生！ 僕らは学校の存続の為に」

「存続だど!? 馬鹿を言え！ たった今お前らが破壊したばかりだろうが！」

「そ、それには深いワケが！」

「恩に着るぞ明久！ 鉄人を引き付けてくれるとは！」

「おまえのその勇氣には俺たちも脱帽せざるを得ないぜっ！」

俺と雄二は一目散に明久から距離を取る。これで少しは逃げやすくなるはずだ。

「しまった！ ズルいぞ雄二！ 大悟！ 先生、向こうに坂本と岡崎が逃げました！」

「まずは貴様だ吉井いっ！」

「何でええええええ！」

鉄人はそのまま明久を追いかけ始めた。よし、今のうちにとつととー

「みいつけた、ダーリン♪」

「……雄二、そこまで」

と、俺と雄二の前に突如として立ち塞がった二つの影。

見るとそれは、禍々しいオーラを纏い、眩しいくらいに笑顔でエスカリボルグを構えた優子と、同じく釘バットを持って静かに佇む霧島だった。

「さあて、どうしてアタシから逃げたのか、たっぷり聞かせて貰おうかな? カナア?」

「雄二……岡崎と逃避行なんて……絶対に許さない」

「ま、待て翔子! 誤解なんだ! 落ち着ぎやあああああつ!」

「優子! これにはちゃんと理由があるんだ! だから話をあぎやあああああつ!」

『坂本おつ! 岡崎いつ! 貴様らも逃がさんぞおおおつ!!!』

「「なんでさああああああああ!!?」」

こうして、俺たちの命を懸けたリアル鬼ごっこが幕を開けた。

## 第三十一問 清涼祭編 エピローグ

——明久視点——

「痛てて……。随分と殴られたよ……。」

「くそつ、アイツらめ。少しは手加減を知らないのか」

「これだから三次元はやなんだよ……。」

結局、僕たち三人は努力の甲斐も虚しく捕まった。あれだけの騒ぎを起こしたのだから、良くて停学悪くて退学——と思ってたんだけど、学園長が手を回してくれていたのだろうか嚴重注意で済んだ。

ただし僕たちは顔の面積が倍になるまで鉄人に殴られ、それに加えて雄二は霧島さんにシメあげられ、大悟は木下さんにエスカ○ボルグで蹴られまくっていたけど。

「ま、これであのババアも助かったんだ。感謝する気なんてさらさらないがな」

「学園長が僕らを助けてくれるのはギブアンドテイクってやつだね」

「これで退学とかにでもなったら不公平だもんなあ」

それに加え、僕たちは早めに解放されている。というのもも教頭室に偶然にも花火が飛び込んだおかげで、その修繕という名目でガサ入れが始まったからだ。こうなると学園

長は徹底的に教頭を調べ上げて、その尻尾を掴むだろう。

「ま、これでババアには俺たちには借りが出来たつてワケだな」

「そうだね、でも一応感謝だけはしておくよ。取引つて言つてもその気持ちは忘れちゃいけないしね」

「む。やつと来たようじゃな。遅かったのう」

「……………先に始めておいた」

集合場所である近所の公園に着くと、既にFクラスのメンバーで一杯になっていた。特に店も取らずに簡単なお菓子とジュースだけという質素なものだが、これはこれで楽しそうだ。

ちなみにそのお菓子とジュースは全部凜花さんからの差し入れらしい。本当にあの人には頭が上がらないなあ。

「お主ら、もはや学年中で知らぬ者はおらん程の有名人になってしまったのう」

「……………（コクコク）」

「……………おいおい秀吉。冗談はよせよ。俺とこのバカ二人が同列だと?」

「……………こつちだつてお前らと同じ扱いだとは不本意だ」

「それは僕の台詞だよ……………」

僕の悪い噂がますます学園中に広まってしまった。もう在学中に彼女を作るのは無理かもしれない。

「あれだけのことをやっておいて、退学どころか停学にすらならないんだもの。妙な噂が流れて当然でしょ？ ウチだって気になるし」

美波が僕と雄二と大悟にジュースの入った紙コップを手渡してくる。お礼を言つてそれを飲むとうすると、

「ういーつす！ やつてるかガキどもお!?」

と、突然聞こえた聞き覚えのあるはきはきした女性の声。振り向くと、そこには鋭い目つきをした赤髪の女性——凛花さんともう一人、天ちゃんが立っていた。

『『あ、姐さん!! 天お嬢様!! お疲れ様です!!』』

「おう！ つてか天。お前いつからお嬢様なんて呼ばれるようになってんだ？」  
「分かんない。けどなんかオタサーの姫つてこんな感じなのかなあ？」

『さあお二方、こちらのお席へどうぞ』

『いえいえ、姐さん。お嬢様。ここはこの私、横溝浩二が丁重におもてなし致します』

『いやいや、ここは『生けるおもてなし伝説』の異名を持つ、この福村耕平の所へ』

まさかの大悟ファミリー全員集合。大悟も思わず目を丸くしていた。ていうかクラスメート諸君。今の君たちはまるで極道の下っ端みたいに見えるよ？

「げっ!!」　なんで二人共ここにいんだよ!?　店はどうした店は!?

「ああ?　んなもん臨時休業に決まってるだろうが!　こんな面白れえ宴会がある時に店なんかやつてられっか!」

「アンタそれでも経営者か!　もうちよつと自覚持て!」

「ああ!?　大悟テメエ!　親に向かつてなんだその口の利き方はあつ!」

「いだだだだ!!　待ってくれ母さん!　散々殴られた後なのに更に絞め技は勘弁してくれえつ!!」

「あははっ!　いい気味だね大悟兄!」

「ほれ大悟、早く脱出してみろよ?」

「天も雄二も笑ってんじやねええええ!」

と、隣で凜花さんに腕ひしぎをかけられている大悟は放っておき、僕は改めてジュースに口をつける。

中身はオレンジジュースっぽいけど、ちよつと苦みがある。本格的なやつなのかな?　「そういえば、お店の売り上げってどうだったの?」

飲み物を持って来てくれた美波に声をかける。一応実行委員だし、一番わかっている

はずだ。

すると、美波は収支の書かれたノートを見せてくれた。確かに多くはないけど、二日間で得られた額としては少なくともはない。でもこの額じゃ、せいぜい畳と卓袱台が関の山だろう。やっぱり出だしの妨害が痛かったか。

「すいません。遅くなりました〜」

と、可愛らしい声が僕らの後ろから聞こえてくる。姫路さんも遅れてきたみたいだ。

「あ、瑞希。どうだった？」

「はいっ！ お父さんもわかってくれました！ 美波ちゃんの協力のおかげです！」

そっか。転校は阻止できたんだ。良かった…………。

「姫路さん、お疲れ様」

「あ、吉井君…………」

僕の顔を見て一瞬姫路さんが微妙な表情になった気がしたけど、すぐに戻った。気のせいかな？

「すいません。私も飲み物を貰っていいですか？ 沢山お話ししたので喉が渇いちゃったので」



「あ、うん。どうぞ」

「ありがとうございます」

渡した紙コップを受け取って、一気に飲み干す姫路さん。

「あつ……!」

「ん? 美波、どうかした?」

「あれ? もしかして、美波ちゃんのだったんですか?」

「そ、そういうわけじゃないけど、その……」

「美波も飲みたかったとか?」

「飲みたかった……? そ、そうね! 瑞希、悪いけどウチも一口貰っていい?」

「あ、ごめんなさい。全部飲んでしまったので新しいものを貰ってきますね」

「新しいのじゃ意味がないじゃない……」

はて、姫路さんが新しいジュースを取ってきてくれるというのに、随分と不満そうだ。一体何が気に入らないのやら。

「そういうえばアキ。一つ言っておきたいことがあるんだけど……」

「ん? 何?」

「昨日、変な連中から助けてくれた時、その……」

恥ずかしそうに美波が俯いている。顔も真っ赤だし、何を言おうとしているんだろう

?

「その……、『よくも美波に手をあげてくれたな!』って怒ってくれたの、凄く嬉しかった……」

「えっ!? あ、いや、あれは、その……!」

「言いたかったのはそれだけっ! じゃあね!」

そう言つて美波は走つて遠くに行つてしまった。なんだろう。この妙な気分は。

「明久君」

うん? この声は姫路さんだ。戻つてきたのかな?

「うん? どうしたのー」つてひひひ、姫路さんっ!」

「えへへ、明久君」

突然姫路さんが僕の腰に抱きついてきた。な、なんだ!? 一体どうしたつていうんだ!?

しかも何か柔らかいものか思いつきり僕の腰に当たっているような気がする!

「明久君は、いい匂いです、うへへへ」

僕の胸に顔を埋めてゴロゴロしている姫路さん。このままじゃマズい。何がマズいつて、僕の心拍数とか理性とかが。

明らかに今の姫路さんは正気じゃない。まるで酔っぱらっているようない

「ん？ 酔っ払い？」

チラツ

「おい母さん！ これよく見たら全部酒じゃねえか！」

「あ？ なんだ大悟、今更気づいたのかよ？ アタシといえば酒、酒といったらアタシだろうが！ アハハハハハハ！！」

「アンタ頭おかしいのか!? 息子のクラスの差し入れに酒持ってくるとか何考えてやがる!？」

「別にいいだろうが、度数9%なんざ水みてえなもんだろ？ 問題ナツシ〜ング♪」

「それは母さんだけの話だろうが！ てかアンタここ来る前にも呑んでただごぼおつ!？」

「ごちやごちや言つてねえで飲め！ どうせお前も酔わねえだろうが！ ……おい秀吉い！ 雄二い！ ムツツリーニイ！ テメエらも付き合えや！ 天！ 三人を逃がすな！」

「はーい♪ というわけで観念してくださいね♪」

「ま、待つてくれ凜花さん！ 俺たちはまだ未成ねごぼおつ！」

「り、凜花さん！ 頼むからやめるのじゃぼおつ!？」

「……………っつ?! (ゴクゴク)」

「あれ? お母さん。それスピリタスじゃない?」

「へ? あ、ホントだな。まいつか!」

さっぱり酒だったのかあーっ?! 何をしてきているんですか凜花さん!?

「明久君、私は怒っているんですよ?」

と、頬を膨らませる彼女。怒っているって言われても、僕が何かしたっけ?

「むうっ! 私が怒っている理由すらわからないんですねっ! そんな明久君にはこうですっ!」

「いひやいれふ! くひがのびそうれふ!」

頬を思いきり左右に引っ張られた。

「……………約束」

「約束?」

「召喚大会から戻ってきたときにした約束ですっ!」

「ああつ! 校舎裏!」

「私ずっと待っていたのに、忘れるなんてひどいですっ!」

常夏コンピを追いかけるのに必死ですっ! しっかりそのことを忘れていた! そりや怒る

よね。

「むく……つ！ 絶対許しませんっ！」

「そこをなんとか！」

「絶対だめですっ！」

「そ、そんなあ……」

「ーなんて、冗談です」

「はえ？」

思わぬ台詞に思わず間抜けな声をあげてしまう。

「実は、明久君がどうして約束を守れなかったのか、教えてもらっちゃいましたから」

「へ？ 誰に？」

これは衝撃の事実だ、一体どこのどいつが姫路さんに事情を話したんだ？

「だから、私が怒っているのはー私自身です」

彼女が視線を地面に送る。

「私、明久君が私のために頑張ってくれているのに、約束の場所に来てくれなかったことに怒っていました」

「あ、いや、それはその、姫路さんにも事情が……」

「そんなの関係ないんですっ！ 私は私のために頑張ってくれている人に対して怒って

いた自分が許せないんです。だってー」

一息入れて、姫路さんは顔を上げて僕に視線を合わせてくる。

「だって、明久君は優しい人だって、前から知っていたことですから」

そんな真つ直ぐに見られても、逆に僕が目を逸らしてしまう。

「前の試召戦争の時も、今回も、私は助けられてばかりで、それなのに私は自分の想いを伝える事ばかり考えていて……」

「ひ、姫路さん……」

「だから、明久君に何かお礼をしたいんですっ」

そう言つて、彼女は持っていた缶を開けて一気に飲み干す。そのラベルには『大人のオレンジジュース』と書いてありーっとうおおい!? またお酒じゃないか! 凜花さんお酒しか持つてきてないのか!?

「……そういうわけですから、明久君」

「は、はい」

「服を脱いで下さい」

「なにゆえっ!?!」

言動が支離滅裂だ。凄い勢いで酔っているみたいだ。

「今からお礼をするためですっ! 抵抗しないでください!」

「ちよ、ちよつと待つてよ！ それ明らかにおかしいから！」

「おかしくありません！ 皆していることですし、この方法が一番相手は喜ぶって岡崎君が言っていましたもんっ！」

あのキモオタ野郎！ 姫路さんになんて事を教えるんだ！

そんな事を思っていると、姫路さんが次々と制服のボタンを外していく。この距離じゃうまく引き？がせないし、色々とマズい！

そうだ！ ここはヤツらの力を借りてー

「だらつしやああああ!! なんぼのもんじゃああああい!!! めるたんパワーアアアア

!!」

『うおおおおおっ!! さすが我らが兄貴だああああ!!』

『これでスピリタス七杯目突入だああああ!!』

「やるのう大悟！ それでこそワシの相棒じゃ！」

「オラアツ！ 次の相手は誰だあっ!？」

「次は俺が相手をしてやるぜ大悟おっ！」

「ほう、雄二か！ 俺に酒の勝負で勝てると思うなよ！」

「はっ！ その言葉そっくりそのまま返してやるぜえ！」

「……………はじめっ！」

「うおおおおおおお!!!!」

「はっははー!! 二人ともいい呑みっぷりだなあ! こりやあ面白くなつてきやがったぜ! せいぜい頑張れよガキども! アーッハッハッハッハッ!!」

「アッハハー! やっぱりFクラスって面白ーい!!」

「ーダメだ! 誰一人として頼れる奴がいないっ! ていうかあれは何!? 明らかに高校生がやることじゃないことやつてるように見えるんだけど!? 秀吉とムツリーニまでキャラ変わってるし!」

「とにかく、私は美波ちゃんには負けられないんですっ! だから名前だつて『明久君』って呼んじやいます!」

「こつちはこつちで会話が成り立っていない。姫路さんつてお酒弱いんだなあ。」

「そしてーいつかきつとー明久君と付き合つー」

「もしもし、姫路さん?」

「……………ずつと……………一緒に……………」

急に姫路さんが尻すぼみの声になったかと思うと、そのまますうすうと寝息を立てて眠りについてしまった。ここまでお酒に弱いとなると、今後は飲ませないように気をつ



けておかないといけないな。男の前で眠っちゃうなんて危ないし。

取り敢えず、姫路さんはどこか静かな場所に移動させー

「……ウチが少し目を離れた隙に、アンタは一体何をしてるの……！」

「えっ!? み、美波! 違うんだ! これは別に何も……！」

「問答無用よおおっ!!」

「いやああああああっ!!」

美波も酔っぱらっていたみたいで、攻撃に手加減がなかった。

――

「おはようございます」

「あ、姫路さん。おはよう」

翌朝、登校途中の坂で姫路さんに会った。朝からラッキーだ。

「そうだ姫路さん。ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「はい。なんですか?」

「昨夜言っていた、『いつかきつとー明久君とー』ってなんのこと?」

まさか……あの言葉の真意は、と思ひ僕の鼓動が早くなる。一体どんな……!」

「すいません。私、昨夜のことーほとんど覚えていません」

「へ?」

緊張しながら聞いた質問に対するまさかの答えに、思わず拍子抜けした。そういえば

随分と酔っていたんだし、記憶がないのも当然だよな。

「あ、そ、そうだよな。ごめんね姫路さん」

「いえ、こちらこそ覚えてなくてごめんなさい、明久君」

「いやいや、別にーって、あれ?」

どうして僕のことを同じく『明久君』って呼んでいるんだろう?

「……雄二。婚姻届が受理されなかった。残念……」

「そりゃそうだろう。俺は十七になったばかりだしな」

「…………だから、来年までに大切に保管することにした。今はまだ、ただの許嫁」

「翔子。今度お前の家に遊びに行っても良いか？」

「…………いいけど、婚姻届は弁護士に預けてあつて家にはない」

「随分嚴重な保管だなオイ！」

「ねえ大悟？　なんで昨日アタシが何回も電話したのに出てくれなかったの？　まさか

……………ね？」

「誤解だ。昨日は打ち上げで飲み過ぎてそんな気がなかったんだ。流石にスピリタスをジョッキで十杯はキツかったからな」

「……………本当？　やましいこととか何もないのね？」

「ねえよ。けどまさか意外にも秀吉がそこまで酒に強いとは思わなかった。しかもあの野郎酔い潰れるまでずっと俺にベタベタ寄りかかって痛ああああ!!!」

「ほら……………やつぱり他の子見てるじゃない。アタシに？　ついたわね……………？」

「待て優子！　他の子つてお前の実弟だろうが！　なんでそこまで怒るんだああああ!!!」

「大悟はアタシだけを見ていればいいの……………そんな悪いことをするこんな手なんて要らないわね？」

「ふざけんなこの野郎ぎゃああああああああつ?!?!」

どこからか聞き覚えのある声が聞こえてくる。片方は霧島さんと雄二、もう片方は木下さんと大悟だろう。雄二も大悟もいい加減二人の好意を素直に受け止めればいいのに。チケットの件でも随分足掻いていたみたいだったけど。

「つと、そういえば、このプレミアムチケットをどうしよう?」

雄二はそんな恐ろしいものは持っていられないと言つて僕にくれたし、大悟も気持ちだけでも不愉快だといつて受け取らなかつたし。

でも、僕が持つていても行く相手が……

「?」 どうかしましたか、明久君?」

「あ、いや。なんでもないよ」

無意識に姫路さんの顔を見てしまう。

うーむ、姫路さんと行きたいけど、このチケットを使つたら色々フォローが入つて、逆に気まずくなるかもしれないな。

「よし。これはやつぱり、必要としてる人にあげるべきだよね」

「?」 なんのことですか?」

「素直になれない男共と、一途な二人の女の子への贈り物つてところかな」

「??」

姫路さんがなんのことだかわからない、といった顔をしている。ちよつと惜しい気もするけど、これは霧島さんと木下さんにプレゼントしよう。とても喜んでくれるに違いない。

僕の方は……とりあえず今はこの距離にいられるだけで満足だから。

「あつ、そう言えば、今朝は職員室に呼ばれているんです。すみませんが、先に行きますね?」

「あ、うん。いってらっしゃい」

姫路さんが小走りに遠ざかっていく。その時、

「ーきです。明久君」

彼女が何か呟いたけれど、それは朝の喧騒と、大悟の断末魔で聞こえなかった。

## 番外編その1 如月ハイランドパーク編

## 第三十二問 現実のヤンデレはおつかない

「明久」

「ちよつといいか？」

「ん？ なに、雄二、大悟」

「そういえば、例のチケットはどうした？」

「例のチケットって、如月ハイランドのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確か今週末がプレオーブンの予定日だっただろ？ 姫路を誘って行ってみたりはしないのか？」

「それか島田あたりにでも声をかけてみるのはどうよ？」

「な、何を言っているのさ二人とも！ 美波が僕なんかと一緒になんて思っているわけがないし、あのチケットを使って入場したら、如月グループの力で一緒に行ったりとの結婚を強要されちゃうんでしょ？ そんなことになったら姫路さんと美波が可

哀想じゃないか」

「そりゃあ、向こうもそんなジंकクスが出来りやあ儲けもんだからな。色んな策を講じてやって来たカップルを結ばせるだろうな」

「うんうん。そうだよね」

「だが、案外姫路も島田も満更じゃないと思うぞ」

「……ほえ？ どういうことさ、雄二」

「いいじゃないか。勇気を出して誘って見たら。意外とすんなりOKをもらえるかもしれないぞ」

「男は度胸、何でも試してみることが大事だぜ？」

「あ、あはは。またまた二人つてば、冗談ばかり。僕なんか姫路さんや美波と結婚なんてあるわけないじゃないか」

「おいおい、やる前から諦めてどうすー」

「それにもし僕が仮に美波と結婚したら、葉月ちゃんは僕の義理妹になるよ？」

「明久。時には諦めも肝心だ」

「ふむ。まあ、お前がそういうならそれはそれで構わないが。けどそれなら、チケットはどうしたんだ？」

「丁度身近に結婚を考えている人たちがいたからね。その人にあげたよ」

「ん？ そんなやつが知り合いにいたのか？」

「そんな奴がいるなら都合がいいな。そのままうまく結婚になれば、如月グループも喜ぶだろうしな」

「これで俺たちの安全も保証されたし、一石二鳥だな」

「そうだね。うまくいけば全員が幸せだもんね」

「その連中、うまくいきそうなのか？」

「うん。あとは時間ときつかけの問題だと思うんだ」

「そうか。うまくいいいな」

「全くだぜ、アツハツハ」

「大丈夫。きつとうまくいくよ」



——大悟視点——

『朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！ 朝だよお兄ちゃん！』

「……………ん、ふあゝあ」

部屋のカーテンの隙間から差し込む陽の光と、一日の始まりを告げるめるたん目覚まし時計の声で俺は目を覚ます。うむ、やはり朝一番で彼女のボイスを聞くのは実に気持ちがいい。

「確か今日は休みだよな……………けど起きるか」

と言い、俺は目覚まし時計を止めてベッドから起き上がる。俺の視界に映るのは部屋中にびっしりと貼つてある二次元美少女達<sup>俺</sup>、ゲームや仕事用のパソコン、本棚にこれでもかと丁寧<sup>線</sup>に並べられている漫画、フィギュア、DVD、同人誌、隣にあるめるたんの抱き枕……………

「おはよう、<sup>ダーリン</sup>大悟♪」

……そして、笑顔で俺の布団に潜り込んでいる優子。

「ん？ あ、ああ。おはよう」

すると、優子はすくつと立ち上がって部屋のカーテンを開く。陽光がさらに強く部屋の中に差し込んできた。

「今日は良い天気みたいね？」

「そうみてえだな」

目をこすり、大きな欠伸をしながら、俺はまじまじと彼女の姿を見る。

今日は学校が休みというのもあってか、いつもの制服姿じゃない。上は白のインナーにグレーのシャツワンピースで、下は紺色のショートデニムを履いている。そして両耳にはエメラルドの宝石を横ったようなイヤリングをしていて、いつものずぼらさからは想像もつかないほどお洒落な格好だ。

俺は三次元のファツションなんかには全く興味はないが、そんな俺でも思わず今の優子は魅力的に見えてしまう。

「大悟……、その、どうかな？」

「あ？ まあ、似合ってるじゃねえか？」

「ホント？ 嬉しいな♪」

嬉しそうに微笑む優子。多分秀吉にでもコーディネートしてもらったのだろうか。流石演技派な相棒だ。素材の活かし方を分かっている。

「改めて、おはよう。優子」

「うん、おはよう大悟」

布団を押しつけて、俺はゆっくりと上体を起こす。そういや、なんでコイツが俺の部屋にいるんだ？ 部屋には頑丈な鍵をかけておいたはずだし、優子と会うなんて予定もない。

つまり、特にこれといって優子とは約束はしていないという事になるな。てことは……

「優子。そこにある俺の携帯電話を取ってくれないか？」

「はい。でも何に使うの？」

「ちよつとな」

優子から携帯電話を受け取り、あるところに電話をかける。

そう、今の優子がここにいるのは――

「もしもし、ポリスマン？」

住居侵入だ。

――

ダダダダダダダダダダ！ ガチャツ！

「天あああああああ!!!!」

「わっ！ ビックリした！ 朝からどうしたの、大悟兄」

一階のリビングへ駆け込むと、妹である天が驚いた顔でこつちを見ている。ちなみに俺の家は中華料理屋を営んでおり、店と住むところが同じ建物だったりする。その為リビングの向こうはそのまま店の厨房に繋がっているのだ。

「あ、朝ごはんならもう出来てるからお腹すいたら食べてね？」

「お？ そつか、済まないなーってんなこたあどうでもいい!! どうして優子が俺の部屋にいやがるんだ！ おかげで俺は警察のオツサンにいたずら電話だと勘違いされて長々と説教されたじゃねえか！」

「……………え？ 優子姉が……………」

天が首を傾げて困ったような顔をする。

まるで何のことだか分からないといった態度だ。何だ、まさかこれは優子の単独犯なのか？ 母さんは昨日から地元の友達と飲みに行くって言ってたからまだ帰っちゃこねえし、てつきりこのバカが優子に言われて協力してやがるのかと思つたが、俺の早とちりだったのか？ もしそうだとしたら少し申し訳なかつたな。いくらコイツがウザくて迷惑しかかけないクソ野郎でも、何の根拠もなしに疑うのは流石に悪くー

「ああ、知らねえならいいんだ。急に怒鳴って悪い。てことはあの野郎が勝手に入つてー」

「なーんだ。優子姉もピユアだなあ。せつかくアタシが色々手を回して、大悟兄の部屋の鍵のスペアまであげたのになー。どうせならそこで一発ヤツちやえばいいのーにやあああああ!!？」 大悟兄!! らめえええええ!! 頭蓋骨が割れるううううう!!」

「やっぱりテメエが絡んでんじやねえか!」

前言撤回。やっぱりコイツはクソ野郎だ。少しでも悪いと思つた俺の気持ちを変せ。

「大悟! あんまりアタシの義妹をイジメちゃダメよ!」

「優子、止めるんじやねえ。俺はこのバカをたつた一人の兄として躰け直さなきゃいけねえんだ」

後ろから現れた優子が、天にアイアンクローをかます俺の右腕を掴んで止めようとす

る。てか勝手に義妹とか呼ぶな。

「……アタシの言うことが聞けないなら、これを今すぐ叩き割るわよ?」

そう言つて優子を取り出したのは可愛い中学生くらいの二次元の女の子がエロい表情で下着姿のままリコーダーを吹いているパッケージが……つて! あれはまさか!?

「待つんだ優子!! それだけは勘弁してくれ!! そんなことをされたら俺の命に関わる!!」

どうしてよりもよつてあれが優子の手に渡つたんだ!? あれはエロゲ界限でもそのクオリティーの高さと豪華声優陣による完璧な妹ボイス、そして細部にまで作り込まれたストーリー性からロリコン製造機として名を馳せ、俺だけではなく同志や明久、雄二さえも唸らせた神作『く』俺の妹が死んで変態中学生に生まれ変わった件について『く』じゃないかあつ!!

「大体、それは俺が鍵をかけて嚴重に金庫にしまつておいたはずだぞ!! どうやって開けやがった!?!」

「あ、優子姉。それって確か金庫の暗証番号、めるたんの誕生日でしょ? よくわかつたね?」

「当然よ。ダーリンの事なら何でも知ってるもの♪」

なんだろう、今非常に涙が止まらない。俺には安息の地というものはないのだろう

か。

「わ、わかった。天は解放しようじゃねえか」

優子の言葉に従い、手を放す。だが彼女たちを守る為だ、仕方ない。

「いい子ね大悟。それじゃあー」

取り返した暁には今度は電子ロックつきの金庫にでも閉まってー

「これはアタシがへし折るだけで許してあげるね♪」

「よし優子。落ち着くん、それは許された時の対応じゃあない気がする」

「じゃあ、大悟にお仕置きしてからへし折る」

「更に悪化してるんだなあ」

「じゃあ、やっぱりへし折っても許さない♪」

「返すっていう選択肢は!？」

コイツとは中学からの付き合いだ、どうしてこうなっちゃったんだとたまに思う。

「やっぱり、大悟兄と優子姉はベストカップルだね」

「お前はこれをどう見たらそういう風に見えるんだ?」

「そうよね、もう夫婦だものね」

「そんなワケねえだろうがー待て、エスカ○ボルグはやめてくれ」

どうしてコイツは何かあるたびに俺を撲殺しようとするんだろうか。ホント、ヤンデ

レは二次元限定でいいや。二次元だとおつかないだけだ。

「……………そういや、なんで優子は俺の家に来たんだ？」

「え？　だって約束したじゃない。忘れたなんて言わせないわよ？」

「はい？」

すると、優子は懐から小さな紙きれを取り出す。見るとそれは何かのチケットのようだが……………？

「あ、それって確か如月ハイランドのプレミアムチケットだ！　でもこれって倍率が高くて中々手に入れないやつだよね？」

「……………なあ優子。一応聞くが、これどうやって手に入れたんだ？」

「それがね、優しい人がどうぞってくれたの」

「へー、ラッキーだね優子姉！　……………って大悟兄？　どこに電話してるの？」

「いや、ちよつとゴミ野郎に用事がな」

人間の屑があ野郎。

恐らくアイツは俺の携帯電話番号を着信拒否にしているだろうから、敢えて家電からかける。

数秒の呼び出しの後、？　気な声が電話口から聞こえた。



『はいもしもし? どちら様でしょう』

「アタシメリー、今アナタの家に向かっているの………:………:………:………:シネ」  
『え!? 今度は何!? 僕がなにかした!? 頼むからやめー(ブツツ)』

少しだけ気分が晴れた。

「大悟、行こう?」

俺の手をスツと優子が握る。よっほど行きたいんだろう。

「だが断る」

「えー、せっかく優子姉が用意してくれたんだから行つてきなよー」

「嫌だね」

「むー、どうしてそんなに嫌がるのさー?」

何も知らないくせにお気楽なことをいう天。

これが普通の遊園地ならここまで拒否はしない。だがこれは背後に如月グループが関わっている危険なものだ。そんなものに優子と参加したら、有無を言わさず結婚の段階まで持ち込まれるのは確実だし、もし如月グループのジnkクスである『どんな手段を使つても結婚させる』という事実を優子が知れば、俺に逃げ場はなくなってしまう。

「……アタシは大悟と一緒にじゃなきゃ、イヤだから」

優子がジイツと俺の目を見ながらそう言う。俺はこの優子の全てを見え透いているかのような視線が苦手だ。

コイツがこうやって俺に直接的に好意を示してくるようになってからやや時は過ぎたが、後から秀吉に聞いたら、どうやら俺が少年院にぶち込まれる前から好意は持っていたらしい。さすがヤンデレ、恐ろしいくらいの思い込みの強さだ。

けれど、俺は二次元を愛する男であり、三次元の女なんかと一緒にいる気など無い。それにコイツだって俺なんかよりもっと良い男と付き合えるはずだ。だからここはビシツと言つてやろう。

「優子」

「右腕要らない？」

「ごめんなさい」

瞳の色が淀み、エスカリボル〇を突き付けられたので反射的に土下座した。どうしてだ、まだ名前しか言つてないし、そんなんじやねえのに。

「だ、だが優子、まずは俺の話を」

「……そう、ならしやうがないわねー」

俺の言葉を遮り、優子はトートバッグから何かの本を取り出し、テーブルに置いた。

『世界の拷問・処刑 100連発』

『子供でも分かる監禁方法 完全版』

『初心者でも簡単♪ マインドコントロール』

『女性向け催眠術』 彼を一生アナタのものに 』

「選んで♪」

「すまん。話の流れが全く分からん」

「だって、あの時言ったじゃない。大悟はもうアタシのものだって。だから言うことを聞かない悪い子にはお仕置が必要だもん♪」

いや、これ全部お仕置きつてレベルには見えないんだが？

「アタシはこの『リアルイモムシ潰し』とか面白そうだなあ〜」

「天、お兄ちゃんが今命の危機に瀕しているのにそんな？ 気に構えないでくれ」

あとなにその妙に股間に寒気が走る名前。

「大悟。早く選んでくれるかな？ 内容によつては結構な道具とか用意しなくちゃいけないから」

「あつ、でもこつちの『イリエワニのペンチ』とか『簡易版アラリスの雄牛』も興味ある！ 大悟兄はどれがいい？」

「うぐう……っ！」

クソツタレ！ どっちを選んでも俺の人生がバッドエンドまっしぐらじゃねえか！  
あとさつきから拷問のタイトルが恐ろしすぎる！ あとファリスの雄牛は拷問  
じゃなくて処刑道具だからな！

だが、この程度のことですべて屈するほど、俺は弱い奴ではない！ なんとかしてこの状況  
から脱出してー

ドスッ！

「逃げたら殺すから」

「よし、遊園地に行こう。準備するから待っていてくれ」

うん、意地張るの辞めよう。だって命は一つしかないんだから。

## 第三十三問 俺達は逃げられない？

——大悟視点——

「……俺達は……無力だ……」

入場ゲートの前で、俺と雄二はそう弱々しく呟き、互いに肩を抱き寄せていた。

結局、俺は優子と一緒に如月ハイランドに行くことで話が決まってしまった。これは仕方なかったんだ！ 勿論行きたいワケでは無かったのだが、もし頑なに拒否しようものなら、今頃俺は亀甲縛りからの股間潰しが待ってたかも知れない！ あの殺伐とした場所から逃れる為の苦肉の策だったんだよお！ 決して怖くてビビったワケじゃねえんだからなっ！

そしてさあ行こうかという所で、やけに嬉しそうな霧島と、俺と同じく死んだ魚の目をした雄二と出会った。どうやら霧島と優子と一緒に行く約束をしていたらしく、どうやら雄二も俺と似たような境遇らしかったのだ。ああ神よ。あなた様は俺達の事が随分とお嫌いなようだ。なんて俺達は不幸なんだろうか、そして——

(あの明久<sup>クッ野郎</sup>……次会ったら確実に息の根を止めてやる……!)

そう俺達は固く誓ったのだった。

「……………やっとなつた」

「へえ、思ったよりも楽しそうな所じゃない」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている優子と霧島。

……………うむ。そんな姿を見ると、少しは付き合った甲斐があるのかも知れないな。全く、強がってはいるが所詮はまだ子供だなあ。

「よし、じゃあ優子」

「それじゃ、翔子」

「……………うん」

「そうね、早速ー」

「帰ろう」

スタスタスタ……………ミシッ

「どこに行くのかしら? 大悟」

優子に手首を掴まれた。それも握り潰さんとする位のパワーで。

「はっはっは、優子。俺の手首関節はそっちの方には曲がらないからな？」

「大丈夫♪ バラバラになった骨はアタシが一つ残らず拾ってあげるから♪ だって大悟の髪の毛から指先の爪まで全部アタシのものだもん♪」

ヤバイ。笑顔でなんて恐ろしい発言をしゃがるんだこの女は。このままでは俺は今後の人生を隻手で過ごすことになってしまふ。あと俺の関節をへし折ることは確定なんです。ねド畜生め。あれ？ 指先が冷たくなってきたぞ？

一方で雄二は霧島に同じように肘を極められていた。

「……雄二。往生際が悪い」

「次逃げようとしたら顎骨だからね、大悟？」

「わ、分かった！ だから手を離してくれ優子！ ああつ！ 段々と手首の間隔があつ  
!？」

「ぐあつ！ せめて関節技を解いてから歩いてくれ！ 本当に肘が逆方向を向いてしま  
う！」

そして二人の可哀想な男達は、それぞれの片腕を人質に取られながら入場ゲートへと  
連行されていった。

すると、引きずられている俺に雄二がこっそりと耳打ちしてきた。

(……おい、大悟。話がある)

(ん？ なんだ雄二。俺は今手首から下がもぎ取られるかどうかの瀬戸際なんだが)

(まあ聞け。ここは俺と協力しようじゃねえか。このままだと俺達は二人仲良く人生の墓場へとまつしぐらだ。お前もそれは何とか阻止したいだろう?)

(当たり前だ！ 俺は二次元を愛する男！ 三次元なんぞに人生を狂わされてたまるか！)

(ああ、理由はさておき、俺も同意件だ。だから俺達二人が手を組んで、このウエディング企画なんてモンをどうにか乗り切るんだ。それ以外に助かる道はない)

(……そうだな。これも俺達の自由と操を守る為だ、その提案乗ったぜ)

(よし、協定成立だな。俺達は必ず生き残って帰るぞ！)

(<sup>アツ</sup><sub>シエン</sub><sup>テ</sup>盟約に誓って！)

そして、俺と雄二は静かに頷く。

今ここに、男達の命運を分けた死のデートが始まるのだった。

――



「いらつしやいませ！ 如月ハイランドにようこそ！」

入場ゲートでそう告げるスタッフらしき男。その少し訛りの混じった口調と顔つきから、日本人では無いことが伺える。中国系の人だろうか？

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「……はい」

「これでいいですか？」

「はい、拝見しマー……」

すると、霧島と優子が差し出したチケットを見たそいつの表情が固まった。

「あの、どうかしました？」

「……そのチケット、使えないの……？」

「あ、イエイエ、そんなコトはないデスよ？ デスが、ちよつとお待ちくだサーイ」

係員はそう言つて後ろを向き、携帯電話で電話を始めた。

「ー私だ。例の二人組を発見した。すぐにウエディングシフトの準備を始めろ。確実に仕留める」

『了解』

「待てやコラ、なんだ今の不穏な話は」

コイツまさか、例の如月グループの息がかかった人間か？

「……ウエディングシフト？」

「うん？ 何ですかそれ？」

「気にしないでください。コッチの話です」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。気づかれないでも思っただのだろうが残念だったな。もう俺達にはバレバレだ。

「おい、アンタさつき流暢な日本語で喋っていないかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーん」

殴りたいなあこの顔。

「ちなみに、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場さえさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

「こつちもだ。俺達は純粹に遊園地を楽しませて貰うとしよう」

その隠すという気持ちは一切見られない清々しいネーミングから何をしようとするのがすぐに分かったからな、ならんなモンに参加する必要は全く無い！

「そんなコト言わず二、お世話させてくださいサイイ。トツテモ豪華なおもてなしさせていただけきマース」

「要らん」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「断る」

「ダメだ」

「この通りデース」

「しつけえ」

「却下だ」

「断ればアナタ方のお母様に当パークのイメージキャラクターとして可愛いコスプレをして貰いマース」

「やめろおおおっ!!!?」

なんて身の毛もよだつような狂言を発しやがるんだこの似非外国人は！ 雄二の母親は分からんが、うちの母親は何でも面白そうだと思ったら簡単に首を縦に振っちゃまうような人なんだぞ?! 間違いなく引き受けちゃうに決まってるじゃねえか！ てかされ以前に実の母親が『みーんなー！ 如月グランドパークによるこそー！』ってキャピキャピしてる姿とか見たくねえ!!

「なんて恐ろしい脅迫をしやがるんだ、この似非外国人め……!」

「俺達が一体何したって言うんだよ……!」



深く被っているな。……というかさっきの声、やけに聞き覚えがあるんだが。俺の悪友の全米ナンバーワンレベルのバカとの呼び声もある吉井明久の声にそっくりだ。

隣を見ると、雄二も怪しむような目でそいつを見ている。よし、まさかとは思うが、確かめてみよう。

「そーいや雄二。俺さ、昨日仕事用のパソコンが壊れちまつてさー。だからしばらくは同人活動は休業になっちまうんだよ」

「そーなのか？ でもお前、明久と取引してたんじゃないか？」

「ああ。だがこんな状況じゃあー取引は中止だな」

「ええっ!? 大悟！ それはあんまりだーあつ」

あつさり正体看破。さあ、狩りを始めようか。

「……いよう明久。テメエ、面白いことしてるじゃねえか……」

「アタシ、メリー。今、アナタの目の前にイルノオ……」

「人違いですつ！」

ダツ！

「逃がすかコラ！ 待ちやがれ明久ア!!」

俺と雄二は逃げた馬鹿を追いかけてしようとす。すると俺達の目の前を似非外国人が

遮った。

「邪魔をするな！ 俺達はあのバカを捕まえてボコって海に沈めるといふ役目があるんだ！」

「大悟の言う通りだ！ だからそこを退けこの似非外国人！」

「違いマース。彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ・ロドリゲス・武司（三十五歳）、通称ステイヴでース。吉井ナントカさんではゴザイマセーン」

「黙れ！ 人種性別年齢氏名全てに堂々と嘘をつくな！ しかもどう考えてもその名前前でステイヴはないだろう！ あと名前もハナコなのか武司なのかどっちだよ！」

「それに俺達は一度も吉井なんて苗字は口にしていないぞ！ やっぱりテメエ如月グループの差し金だろう！」

コイツに絡まれてしまい、結局明久を見失ってしまった。あんのクソ野郎、やっぱり俺達をハメるつもりでこんな真似しやがるんだな……！！ 人の人生をなんだと思っ  
ていやがる！ 日頃の仕返しにしても限度つてもものがあるだろうが！

「待てよ……：……：……：……：……：……：……：……：……：……：……！！」

「ああ、それも遊園地のスタッフとなれば、明久達だけで計画したとは思えない。恐らくあのババアも関わってるだろうよ。明久には借りがあるから断れなかつたんだろうな。クソツ、どいつもこいつも人の不幸を何だと思つてやがる……：……：……」

さて、こうなってくると俺達が助かる難易度は大幅に跳ね上がってくる。明久一人ならまだしも、秀吉や同志、姫路や島田といった奴らが協力しているとみると、俺たちの素性や性格を分かっている分、簡単には突破できないような多くの罠が施されていることは明白だ。某弾幕シューティングゲームもビックリの無理ゲーだよコンチクショウ。

(……大悟、やるぞ)

(やっぱり雄二もそう思うか)

(ああ、こうなってくると俺たちの力じゃ実力不足だ。ならこうすることが最善の近道だろ？ それに幸運にもここは人の密集場所だ。どうにでもなる)

(そうだな。RPGでも敵わないと分かったら即座にこうするもんな。よし、乗った)

雄二が隣で周りには殆ど分からない程度に小さく頷く。

霧島と優子は二人で仲良く会話していて、俺たちの方を見ていない。よしよし、いいぞ……。俺と雄二は静かにその瞬間を待つ。

「それデハ、写真の準備をしますノデ、少しお待ちくだサーイ」

そして、似非外国人の意識が手元のカメラにいったーここだあつ!!

「散開っ!!」

その瞬間、俺と雄二は一斉に出口に向かって走り出そうと足を踏み込み――

ダツ（俺と雄二が走り出す音）

スツ（高速で優子と霧島が前に立ち塞がる音）

ガシツ（俺は顎を、雄二は顔をわしづかみにされる音）

ミシミシミシ（骨が軋む音）

「ぎゃあああああああつ!!?」

――あっさりとは阻止されてしまった。勝てないので敵前逃亡しちやえ作戦、失敗だ。

「大悟? どこに行こうとしたのカナ? 次逃げたら顎骨って言ったわよね?」

「……悪いことをした雄二には、お仕置き」

「あががががつ!! ごげんなざいごげんなざああい!!」

「ぐあああああつ! 俺の頭蓋骨があああつ!」

優子の人間離れた握力によって顎骨が軋む音が聞こえてくる。

「では、写真を撮りマース。はい。チーズ」



近くでフラッシュが焚かれ、カシヤツつというシャッター音が二回聞こえた。

その間にも俺は優子にそのまま顎を砕かれようとしている。ああ、治療代つてどんぐらいかかるんだろうか？

そのま少しの間を置いて、似非男が写真を持ってきた。

「ーはい、出来マシタよ」

「……ありがとう」

「どんな感じかしら？」

二人は嬉しそうに写真を受け取り、同時に俺たちを解放した。あ、顎が痛い……。

「大悟、見て。アタシたちの思い出よ♪」

「……おい、なんだこれ」

顎をさする俺に、優子が見せてきた。写っているのは瞳から光が消えた優子と苦痛に悶える俺の後頭部。そしてその二人を囲うようなハートマークに可愛らしい書体で『私達、幸せになります』と書かれていた。

隣を見ると、雄二も苦い顔をしている。そっちの写真も覗いてみたら、似たような感じだった。

「サービスで加工も入れておきまシタ」

「そうか。俺から言えることは明らかに写真の内容と周りのデザインが噛み合っていない

いんだが」

「どう見てもこの二人に幸せは訪れそうにないしな」

「ちなみに、コレをパークの写真館に飾っても良いデスカ？」

「お前は馬鹿か!? こんなもん飾ったらここのテーマパークのイメージダウン確定だぞ  
!?!」

見に来る客は間違いなくドン引きだろう。

「大悟、ひよつとして恥ずかしいの？ 可愛い♪」

「お前はこの写真のどこに恥ずかしがる要素があると思ったんだ？」

はあ、来たばかりだったのにもう気疲れがどつと出たわ。と思つていると、

『ああつ！ 写真撮影してる！ ねえねえ、アタシら皆も撮ってもらおうよ！』

『おお、それは名案だな！ てことでおい、その係員。俺達も写つてやんよ』

さつきの似非野郎のもとに、やけにチャライ感じの二人組カップルがやって来た。

「すいません。こちらは特別企画でスので、一般のお客様は……」

『ああつ!? いいじゃねーか！ オレたちやオキヤクサマだぞコルア!』

『キヤー、リユータ、かつこいーつ!』

『そーだよ！ そりゃあ差別じゃねーのか、ああ!?!』

『ほら、拓郎の言う通り、早く写真撮んなさいよ！ オキヤクサマは神様なんでしょ!?!』  
次々に似非野郎を威嚇するチンピラカップル共。 ったく、随分と自分勝手な奴らだな。 まるでクレーマーみてえだぜ。

ま、あの似非野郎も運がなかったとしか言いようがないな。 そんじや、あのチンピラ共が係員の注意を引いているうちに離れるとするか。

『ああ！ グダグダ抜かしてねえでさっさと撮れつつつてんだよ！ 痛い目にあいてえのか!?!』

「ひいっ!?!」

すると、そのうちの一人が痺れを切らしたのか、似非野郎の胸倉を勢い良くつかみ上げてそう脅した。 それによって他の一般客たちがビビったような態度を見せる。 中には怯えている子供までいた。

全く、ああいう奴らは下手に相手をするとう執拗に絡んでくるから面倒なんだよな。 だが流石にこんな所で暴力沙汰はマズいよな、いくらム力つく奴とはいえどもこんな理不尽な理由で殴られるのは流石に可哀想だ。

「優子、雄二、霧島。ちよつと待つてろ」

「大悟？」

俺は三人にそう言つて、そのチンピラのもとにゆつくりと歩み寄る。やれやれ、穩便に終わるといいんだがな……

『ムカつく野郎だなあ！ テメエホントに』

「まあまあ、その辺にしときましようよ」

俺はそう告げ、二人の間に割つて入つた。

『あ？ なにお前？ お前には関係ねえだろ？ 退けよ』

当然そのチンピラは俺に視線を向ける。金髪で耳にピアスをつけた典型的なヤンキー崩れみたいな野郎だった。急に邪魔されたのが気に入らないのか、似非野郎から手を放して、下から俺を睨みつける。

「そう怒らないで。憤慨する理由も分かりますけど、ここは穩やかにいきましようよ？」

せつかくの遊園地ですし、何より暴力はいけませんよ」

そうやんわりとそいつに注意する。つてコイツ煙草くせえな。

『ああ!? なんだそりゃあ!? 偉そうにしゃがつて！ 俺を舐めてんのか!』

『なにコイツ、マジキモイんですけどー』

「別に舐めてはいませんよ。ただそんな荒っぽい真似をされると遊園地側に迷惑がかかりますし、何より楽しみで来ている他の客の雰囲気が悪くなるんです。その程度、考えなくても分かるでしょう？」

『んだとテメエ！ 俺が馬鹿だって言いてえのかよ！ いい加減にしねえとテメエもぶつとばすぞー！』

するととうとうそいつは俺の胸倉を掴んで自分に引き寄せてきた。俺の方は身長は高いので前屈みになる感じだ。

やっぱりこうなったか。だがこういう時こそ感情的になるのはダメだ。こちらあくまでも下手な態度を保ち続けるのが基本だからな。

「だから落ち着いてください。子供も見ています。そんな感情的にならないでー」  
『うるせえ！』

ドゴツ！

そんな罵声と共に、左頬に鈍い衝撃が走る。そのチンピラに殴られたせいだ。

そしていきなりの攻撃だった為、俺は態勢を崩してしまい大きく尻餅をついてしまった。

「っ!」

『おいテメエ……あんま調子に乗ってんじやねえぞ。関係ねえ癖にしゃしゃり出やがって、何様なんだよオラア!』

「……………」

『ほら、やり返してみろよ。そんな偉そうな態度とんならよお、喧嘩の腕にも自信があるんだよなあ?』

『ほらほら、あんまり怖がらせちゃ可哀想だよ、拓郎?』

俺の態度から自分たちの方が立場が上だと判断したのか、明らかな挑発態度をとるカップル。だがここで冷静さを欠くわけにはいかない。てか実際そんなに痛くねえしな。

『なんだ、やり返せねえのか? あんだけ言つといて何も出来ねえのかよ腰抜け!』

「……………」

『チツ。なんだよ、つまんねーやつだな。カスはカスらしく大人しくしとけつてんだよ、ペッ!』

『拓郎〜こんなキモい男ほつといて早くいこ〜』

最後にそのチンピラは唾を吐いて、俺の前から消えていった。

ふう、ようやく終わったか。全く大人しくしているというのも案外疲れるもんなんだ

な。少年院でそういう我慢強さも鍛えられたが、ここで役立つたというべきだな。

「はは、大悟。酷くやられたな」

「……岡崎、大丈夫？」

二人がそう言つて俺の元まで近づいてくる。霧島と違い、雄二は特に俺の心配はしてないようだ。

俺はゆつくりと立ち上がり、持ってきたちり紙で唾を拭き取る。

「ああ、問題はねえ。だが如月ハイランドも運が悪いな。せつかくの宣伝のイベントなのにあんな馬鹿共に見舞われちまうとはな………つておい、優子。どこ行くんだよ？」

突然優子が血相を変えて歩き出したので、その肩を掴んで引き止める。

「………だつてアイツら！ 大悟の事を悪く言つたし、殴つたりもしたから許せない………！」

「落ち着け。いいか優子？ ああいう連中に馬鹿正直に相手する必要なんかねえんだよ。適当にこつちが下手な対応してりゃあ勝手に消えるんだからな。面倒事はそうするに限る」

「でも………！」

「お前もそんな程度でいちいち怒ってたらキリがねえぞ？ 俺にとつちやたかが暴言吐かれてへなちよこパンチ食らって唾を吐きかけられただけだ。そこまで怒るほどの事じゃない。俺たちがやることはあんなチンピラの事なんざ忘れて遊園地を楽しむんだよ。わかったか？」

「……大悟がそこまで言うんなら」

それにコイツだと、勢い余ってあのチンピラ共を撲殺しかねないし。流石に友人を猟奇殺人犯にするわけにはいかないからな。

そして気持ちを切り替えて、俺たちは園内を探索することにした。



## 第三十四問 本当に怖いのはお化けではなく人間

少し回つてみたが、この如月ハイランドは思っていたよりも多くの最新アトラクションがあった。コーヒーカップやメリーゴーランド、ジェットコースターといったスタンダードなものは勿論、3Dの体感アトラクションや絶叫マシンもあり、来る人を飽きさせないような設備の揃いようだ。遊園地なんざもつと子供っぽい場所だと思っていたが、これは老若男女問わず楽しめるだろう。

「んで、どこに乗るんだ？」

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「確かに、んじゃそこにー」

「ダメ」

「デスヨネー」

二人に即刻却下されてしまったので、仕方なく別のアトラクションを探す。逃げちまおうとも思ったが捕まったら今度こそ顎骨粉碎フルコースなのでやめておく。

出来ればそんなに問題が起こらないかつ手早く乗れるモンがいいな……

『ねえねえ、そのラブラブなカップルのお二組〜?』

『私たち、アインとフィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?』

すると、突然俺たちの前にトコトコと着ぐるみが現れた。片方は黄色の体で頭に大きなりボンをした、もう一方はオレンジ色の体で頭にはリボンではなく、花のアクセサリーをつけていて、どちらもキツネをモチーフにしたようなキャラクターだ。

てかさっきの声、また聞き覚えがあるな。気のせいかもしれないが、同クラスの帰国子女と優等生に思えるんだが? そんなじゃ、また試してみるか。

「そーいや、実は俺のパソコンが故障して依頼品のデータが全部ダメになっちゃったんだ」

『ええっ!? そんな! じゃあ明久君の等身大パネルはどうなるんですか!?!』

『嘘よね!? ちゃんと別でバックアップをとってるのよね!?!』

「……………姫路、島田。アルバイトか?」

『『え? ……あっ!』』

本当にどいつもこいつも……………!

『ち、違うわよっ! ウチーじゃなくてアインは島田なんて人じゃないのよ?』

『私ーじゃなくてフィーも姫路なんて人じゃないよ? 見ての通り私たちはキツネの

女の子だよっ♪」

取り繕うような態度を見せる二人。まだ騙し通せると思つてんだらうか。

すると、雄二が腕を組んで言う。

「シラを切るといふのなら良いだらう！ ならお前たちのオススメを教えてもらおうか？」

『あ。う、うんつ。私たちのオススメはねつ、向こうに見えるお化け屋敷だよっ』

姫路ーもとい、フィーが向こう側の建物を示す。そこには病院らしき建物をそれほど改造したような施設が見える。

そうかそうか、あれがオススメなのか。

「そうか。ありがとう」

「そんじゃ、お言葉通り……」

『いえいえつ。礼には及ばないわっ』

『楽しんできてねっ』

「そんじゃお前ら。お化け屋敷『以外』のアトラクションに行くぞ」

「おう」

そのままお化け屋敷とは逆方向に歩き出す。すると、慌てたように姫路が雄二の腕を、島田が俺の腕を掴んできた。

『ままた待つてくださいいっ！ どうしてオススメ以外のところに行くんですか!?』  
『そうよっ！ せっかくアインたちが教えたのにつ!』

「どうしてもクソもあるか。お前らの口ぶりから察するに、そのお化け屋敷には俺たちを陥れる為の仕掛けがされてるのは明白だろう。ならわざわざそんな場所に足を踏み入れる必要はない」

「雄二の言う通りだ。それに俺たちを騙すんなら、もうちつと考えて出てくるこったな」  
『そ、そんなの困るわよっ！ お願いだからお化け屋敷に行きなさいっ!』

『美波ちゃーアインちゃんの言う通りですっ！ だから行かないでください!』  
「断る」

「離せ」

『お願いですっ！ お化け屋敷に行つて下さーいっ!』  
『絶対お化け屋敷は楽しいからっ!』

俺は嫌だ! 雄二の考えも勿論そうだが、俺には別の理由もあるからな……。

『そこまでだ! 雄二、大悟ーじゃなくて、そのブサイクな男共っ!』

「それ以上ファイーちゃんとアインちゃんをイジメると、アタシたちが許さないよっ!」

そう言つて颯爽と登場したのは、青いキツネの着ぐるみと、魔法使いみたいな格好をしたスタッツらしい女だった。

「その頭の悪そうな格好は……明久だなっ！」

「そしてとなりの場違い感満載のバカなヤツは……天だなこの野郎!!」

「ち、違うよっ! 私は如月ハイランドのイメージキャラクター、如月マインちゃんだよ! 決してアナタの可愛い可愛い妹なんかじゃないよっ!」

『そうだ! それに失礼な! 僕……じゃなくてノインのどこが頭が悪いって言うんだよ!』

「黙れ! 頭部を前後逆につけているやつをバカと言つて何が悪い!」

「天、ちなみに冷蔵庫のプリンだが、俺が食べたからな」

「ちよっ!? 大悟兄! あれは大事に取つてあるものだから食べないでつて言つたじゃーあつ」

コイツ等が馬鹿で良かった。ていうか明久に関してはどうやったら着ぐるみの頭部が逆だつてことにずつと気づかないでいられるんだらうか。

あと天に関してはムカついたからプリンは本当に食べてやろう。

「大悟、マインちゃんは騙されやすいのよ」

「俺は何も？はついていないし騙したつもりもない。あのバカが勝手に自滅したただけだ」

「むっ！ さつきから聞いていれば人のことをバカバカと！ それ以上言うんならアタシの魔法でお仕置」

「そうか。ならお前今日の晩飯トマトオンリーな」

「すみませんでした自分マジチョーシ乗ってました」

トマトという単語が出た瞬間、目の前で綺麗な土下座を見せる魔法少女。何という切り替えの早さだろうか。

さて、あとは明久を片付けておくか。

「おいフィーとアインとやら、これを見てみる」

『？ 何ですか？』

俺は目の前の着ぐるみ二体にとある写真を手渡す。それを受け取ると、二人は視線をその写真に移した。

そこにはー前にアキバに行った時に撮影した、メイド喫茶の店員と明久が笑顔でツーショットで写っているというものだった。

『明久君……これ、どういうことですかあ？』

『へえ、随分と良い笑顔で写ってるじゃない、アキ？』

『え？ な、なんのこと？ 僕は何にもーって！ どうして二人がこれを!』

『へえ、アキ。ウチらの知らない所でこんなことしてたのね。これはたつぷりと説明してもらおう必要があるみたいねえ?』

『明久君。お話、ゆつくり聞かせて下さいね?』

『だ、ダメだよつ！ 楽しい遊園地で刃傷沙汰なんてここの評判に影響するから！ これは誤解なんだ！ 大悟に言われて仕方なく行って行っただけで、なにも卑しい気持ちはなかつたんだーひいっ！ どうして二人はファイティングポーズを取るの!』

『ごめんなさい土下座でも何でもするから殺さないでえつ!』

『ああつ！ 待ちなさいアキ！ 今なら両腕の小指で許してあげるからつ!』

『明久君？ 逃げると罪が更に重くなっちゃいますよお?』

ドドドドドドドドド!

そして三匹のキツネはどっかに消えていった。いつの間にか天も撤退したようだ。うし、これで問題の解決とクソ野郎に対する復讐が同時にできたことになるな。あー スツキリした。

「ハイ、すいませーン。お待たせしまシタ」

と思つたら、またさつきの似非野郎登場だ。

「岡崎サン、先ほどは助けてくれてありがとうございまシタ」

「いいや、気にすんな。もう過ぎたことだ。それより何の用だ？」

「ハイ。坂本雄二サン、岡崎大悟サン。貴方方にはお化け屋敷に行つてもらいたいのです」

「絶対に嫌だ」

助けてやったのにまだ俺たちを貶めようとするつもりなのかこの恩知らず！ だが俺たちは断固としてそんな危険地帯に行くつもりはないからな！ 諦めてとつとと、

「坂本翔子サン。岡崎優子サン。お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「……雄二。お化け屋敷に行く」

「抱きつき放題……大悟、決まりね♪」

「痛だだだだっ！ 腕がねじ切れるっ!？」

抵抗も虚しく、俺たちはお化け屋敷へと連行されてしまった。あと勝手に優子を人の家系に入れるんじゃない！ そいつの苗字は岡崎じゃなく木下だ！

すると、後ろで何か断末魔のような声が聞こえたが、聞かなかつたことにしよう。ざまーみろ馬鹿め。



— —

そして俺たちはお化け屋敷の入口へと立たされる。雄二の話によると、ここは実際に存在した廃病院を如月グループが買い取ってお化け屋敷に改造したらしいが、確かに遊園地のアトラクションにしてはクオリティーが高い様に感じる。まるで某テーマパークの戦○迷宮みたいだ……や、やべえ。

「な、なあ優子。マジで入らなきゃダメか？」

「勿論♪ ……あつ、そっか。大悟はお化け屋敷みたいな施設はにが」

「バツ、馬鹿を言うな！ そんなワケがないだろう!! 俺はただ貴重な時間をこんなモンに使っていいのかと」

「別に誤魔化さなくても良いわよ？ もう、そういう所が可愛いんだから♪」

そう。優子の言葉通り、俺にはこの世で一番と言っていいぐらいに苦手なことがある。それはお化けが怖いのではなく、お化け屋敷やドッキリ企画といった急に驚かされるものに非常に対して耐性が低いというもの、いわゆるビビりなのだ。

だから俺はあの似非野郎の邪魔が入らなかつたとしても、お化け屋敷みたいなアトラクションは避けるつもりだったのだ。だって暗い中で予想だにもしない所から驚かせ

てくるとかマジ無理、三次元並に無理。

「そうだぞ？ それに大悟がドの付く程ビビりなのはこの場にいる全員が知ってることだからな」

「……見た目とのギャップがある……可愛い」

「ほつとけ！ それとお前ら二人そのにこやかな視線を向けるなあ！ 惨めな気分になるだろうがあ！」

人間にだって欠点の一つや二つ、あつて当たり前だというのに。

「……………では、入場前にサインを」

すると、似非野郎とは別のスタッフが二人現れて、俺と雄二に紙と板を差し出した。片方は顔は帽子を深くかぶって隠しているが、その声と小柄な体型で正体はバレバレだが、ツツコむのも面倒なのでスルーだ。

もう片方に関しては、もう隠してすらいなかった。なんか優子の弟かつ俺の相棒そつくりだが、こつちも無視でいいか。

「サイン？ なんだこれ？」

「当アトラクションでは、万が一のことを考慮して、お客様には入場前に誓約書を書いて

頂きます」

淡々と秀吉がそう説明する。え、なにそれめっちゃ怖いんですけど。てことは言い換えればここはマジで何か起きる可能性があるってことやん。

「ほう、このお化け屋敷はそんなに危険なのか。だが、それはそれでスリルがあつて面白そうだな」

「ちつとも面白くねえよ！ 入る前からそんなビビらせるような真似するな！ 心臓に悪い！」

雄二に文句を言いながら、俺は差し出された板を受け取る。んで、誓約書やらにはなべて書いてあるんだ？

### 【誓約書】

- 1, 私、岡崎大悟は木下優子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
- 2, 婚礼の式場には如月ハイランドを利用することを誓います。
- 3, どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。
- 4, 万が一誓いを破った場合は、その罰を抵抗なく受けることを誓います。

「はい、大悟の実印」

「朱肉はこちらです」

「お前ら人間じゃねえ!!」

もうやだコイツら。今すぐ全力で家に帰って部屋にこもってエロゲしてたい。

隣の雄二も俺と同じような反応をしているから、内容は同じなんだろう。

「冗談でございます、誓約書は構わず中にどうぞ」

「冗談にしては質が悪すぎる……」

「カーボン紙を入れて写しを用意しているくせにこれを冗談と言えるのか」

え？ マジで？ うわホントだ。用意周到過ぎる。

「それでは、こちらでお荷物の方をお預かりします」

「分かったわ、はい」

優子が秀吉に持っていたバッグを渡す。そして霧島も同じように似非野郎にバッグ

を渡していた。

「秀吉。少しでも中身を零したら両手両足へし折るからね？」

「りよ、了解しました……」

なんかボソツと聞こえたが、何を言ってるのか分からん。そう言えば、優子も霧島も

やけに鞆がデカいな。何を持ってきてるんだらうか。

「では、スリル満点の恐怖体験をお楽しみ下さい」

「大悟、行こっ」

「お、おとおおう。そそそそそうだな」

ビビりながらも、俺は何とか自分を心の中で奮い立たせて扉の前に立つ。そして優子に手を引かれてお化け屋敷の中へと入っていった。

畜生！ こうなったら仕方ねえ。スリル満点だかなんだか知らないが、全部耐えきつてやらあ！

『私だ。お化け屋敷にターゲット達が入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ』

——

——雄二視点——

薄暗い廊下を俺を含めた四人で歩く。カッン、カッンという音が響き、どうやらこの廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした。

「流石廃病院を改造しているだけのことはあるな。雰囲気満点だ」

「……ちよつと怖い」

「こういうものにお前がビビるなんて、珍しいな」

「……そうかも。でも、隣はもつと怖がつてる」

「やべえよやべえよ……おおい、出るんなら早く出て来いよお？ 焦らすのやめてくれよお……！」

「怖がらないで大悟。いざとなったらアタシの胸に飛び込んできて構わないからね」  
♪

その凶体のデカい体をガクガク震わせながら歩く大悟と、それを宥める木下姉。いつもの迫力ある雰囲気はどこへやら、まるで小動物のように弱弱しい態度だ。と思つていと、

ガタン！

「アアオ!!？」

何かが崩れ落ちるような音がした。恐らく向こうの仕掛けだろうが、随分と古典的な怖がらせ方だな。そして隣では、奇妙な叫び声を上げて大悟が膝をついていた。

「テ、テメエ！ だからつていきなり出てくんなよ！ ビックリするでしょうが！」

「いや、それがお化け屋敷つてもんだろ。一タリアクションがオーバーなんだよ」

「しよ、しよがねえだろ！ 大体、何でお前らはそんな冷静でいられんだ!？」

冷静さを欠きまくった大悟が叫ぶ。なんでもと言われても、別に物音程度で驚くような性格じゃないとしか言いようがないんだが。

「とにかく先へ進むぞ。こんなところさつきと終わらせて外に出たいからな」

「ち、チクシヨウ……あの似非野郎と秀吉めえ、出たら覚えとけよ……」

そして俺たちは、時折壁に貼られている《順序》というポスターに従って先へ進んで行く。だがその道中で何も無いわけがなく――

ーバンツ（音と共に目の前に血塗れの女が登場）

「アギヤアツ!？」

ーキヤアアアア（甲高い女性の悲鳴）

「イヤアアアアツ!!？」

ーパリイン！（ガラスが割れるような音）

「ヒイイイイツ!？」

ープーツ！ プーツ！（サイレン音）

「フオオオオツ!？」

様々な仕掛けが襲ってきて、大悟だけがそれにやかましいぐらいビビりまくっていた。

そんなことがありながらも無事一階は回り終え、二階へと続く階段を登り始めた。

「もう無理だあ、降参するからリタイヤさせてくれえ……」

「はああ。怖がる大悟、超可愛いつ♪」

「なんでそんなに楽しくしてられんだよお……助けてめるたあん……」

「我慢しろ。それにこの階を回れば終わりっほいからな」

そう大悟に言って、先を進む。

そして二階に上がり、少し進んだ廊下で、また新たな演出が顔を出した。

【「ーじの方がーよりもー」】

【きぐーれも同感ーぞくせー】

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。ふむ。怨嗟の声の演出か？

【……この声、雄二……？】

【大悟の声も聞こえるわね……？】

【ん？ そうなのか？】



「そ、そうか。それなら良かったぜ……」

どうやらこれは俺と大悟の声らしい。秀吉に声真似でもさせているのだろうか。確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いと言えば怖い、明久達にしては普通の演出だ  
とー

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし】

【奇遇だな、俺も同意見だ。優子に比べて必要なヒロイン属性を全て兼ね備えているからな、はっはっは！】

………ええ？

「………雄二。覚悟、できてる……？」

「大悟………どういうことかなあ？　なんでアタシ以外の女の名前が出るのかなあ？」

「うおおっ!?　優子の目のハイライトが一気に消えたあっ!?!」

「こっちは翔子が般若のような形相に！　確かにこれはスリル満点の演出だ!」

油断していたところにまさかの一撃。なんて恐ろしいことを考えるんだアイツら!

まさか日頃の恨みで俺と大悟を生かしてここから出さないつもりか!?!

「ま、待て優子!　これは俺たちの声じゃない!　これは秀吉が真似をしてんだ!」

「そ、そうだ！ これはアイツらが仕掛けた罠なんだ！ だから落ち着け！」

なんてビビっている、突然バンツと背中では何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。

よっしゃ！ ナイス演出！ 助かったぜ！

「二人とも！ 何か出てきたぞ！」

音のした方に首を向けると、そこにはさつきまで何もなかったはずなのに、突如あるものが現れていた。それは――

……釘バットと、エスカリ〇ルグ？

「……………気が利いてる」

「あ、丁度良かったわ」

あ、これはもう話し合いは無理だな。逃げた方が良さそうだ。

「畜生っ！ よりによつて処刑道具まで用意してくるとは！ 全く趣旨は違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だあっ！」

「これがホントの体感型アトラクションってやつなのかあ！ サービス精神が旺盛過ぎるぜえっ！」

俺たちは再びその場から翔子達に背を向けて全速力で走り出した。

「……………雄二。逃がさない」

「大悟ったら、お仕置きしなくちゃいけないかしらあ……………」

そんな呪詛の眩きを発しながら、俺たちを殺さんとする勢いで追いかけてくる二人。結局、俺と大悟は凶器を持った幼馴染みに追いかけられるというリアル鬼ごっこもビックリの斬新なアトラクションを一時間近く楽しむ羽目になった。

しかし、明久たちはこんなんで成功すると思っっているのか……？

## 第三十五問 三次元に見惚れるなんて……

——大悟視点——

「ぜえ、ぜえ……な、何とか生き残ったな、雄二」

「ああ、マジで寿命が縮むと思ったぜ……」

俺たちは、アレは秀吉の声真似だと逃げながら命がけの説得を行い、何とか二人の怒りを鎮めることが出来た。

危なかった。もし少しでも言葉選びに失敗していたら、俺と雄二は仲良くお化け屋敷の新メンバーとなっていた事だろう。

「坂本雄二サン、岡崎大悟サン。お疲れサマでシタ。どうでしたか？ 結婚したくなりまシタか？」

「お前にはそう見えるのか？ もしそうなら俺が良い眼科医を紹介してやろう」

「アレを結婚と結び付けて考えることができるのはお前と明久ぐらいだろうな……」  
絆どころか更に溝が深まったな。

「オカしいデスね？ 危機的状况に陥った二人の男女ハ、強い絆で結ばれルという話な

のデスが……」

「その危機的状況の原因が、結ばれるべき相手じゃなければな……」

「吊り橋効果どころか将来的に奈落の底に真つ逆さまだな」

コイツ、もしかして明久並のバカなんじゃないのか？

「……そろそろ、お昼」

すると、霧島が噴水の上の方を見ながら呟いた。そこにある時計は午後の一時を差している。おっと、もう昼過ぎなのか。色んなことがありすぎて全く気付かなかったぜ。

「デハ、豪華なランチを用意してありマスので、こちらへいらして下サイ」

「ほう、昼飯まで用意してくれるのか。中々の待遇っぷりじゃねえか」

「さすがはプレミアムチケツトだな。そこらへんの準備はしっかりしてるんだな」

豪華なランチと聞いては黙っておれぬ。腹いせというワケじゃないが、こうなりや腹いっぱいになるまでたつぷりと馳走になるうじやねえか。育ち盛りの男子高校生二人分の胃袋のデカさを見せてやるぜ！

「……あの、私のバッグ……」

「……あつ、大悟……アタシのー」

「ん？ どうした二人共？」

「何か気になることでもあんのか？」

「……………う、ううん。何でもないの」

「……………私も」

「??？」

何だ？ 一瞬だったが寂しそうな表情に見えたんだが……………？

「……………雄二。急がないとはぐれる」

「大悟もつ。ほら、行きましょ」

「お、おう」

「わ、分かった」

気づいたら、似非野郎の姿がずいぶん遠くに見える。俺たちは早歩きでヤツの元へと向かった。そういえば、まだ霧島と優子は鞆を返してもらっていないのか？ 見たところ、あの似非野郎が両方のバッグを持つてる様だが。まあ、いずれはちゃんと返してくれるだろ。

そしてしばらく歩いてみると、目の前に小洒落たレストラン風の建物が見えてきた。

「おお、あれがレストランか？」

「ハイ。お二組はコチラでランチをお楽しみ下さい」

似非野郎に連れられるまま、中へと通される。

レストラン内の空間は、まるでパーティー会場のような内装で、そこら中にはお高そうな丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルがあった。

「これはあれか？ 飯を食いながら目の前でイベントをやってくれるってやつか？」

「いや、こりやあレストランってよりも……」

「……クイズ会場みたい」

「確かに……テレビでよく見るような雰囲気ね」

そうか？ 言われてみればそう見えなくてもないが、こういうレストランは別に珍しくはねえし、子供の頃から天とよく母さんに色んな国のレストランに連れてってもらったから、別段違和感なんてのは感じねえな。

「いらつしやいませ。坂本雄二様、翔子様、岡崎大悟様、優子様」

すると、俺たちの前にボーイに扮した秀吉が現れた。

「秀吉。まだ演技を続けるつもりか？」

「秀吉？ どなたかと間違われておいででしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくる相棒。さすがは演技派人間。こうなると余程のこ

とがない限りはボロをださねえか……。

よし、さっきのお化け屋敷の件も兼ねて、仕返ししちやるか。

「ようしボーイさんよ、違うって言い張るんなら、ちよつと待つてな」

そう言つて、俺は携帯電話を取り出し、中の写真や簡単な動画が保存されているファイルを開く。

「優子。この写真懐かしくないか？」

「えっ？ なにがーちよっ!? こ、これ、なんでこんなもの保存してーあははははっ  
！」

「だろ？ いやあ、あまりの傑作ぶりについて写真に残しちまったぜ」

優子が写真を見て腹を抑えながら思い出し笑いをする。それを不思議そうに見ていた雄二と霧島が俺に聞いてきた。

「……優子がこんなに笑うなんて、初めて見た」

「大悟、なにがそんなに面白いんだ？」

「お？ 気になるか？ これはな、俺らが中二の時に秀吉が俺ん家でー」  
そう言いかけたとき、

ヒュンツ！



突然、高速で秀吉が俺の手から携帯電話を奪い取った。馬鹿な!? 見えなかっただ  
とお!?

「申し訳ございません。手が滑ってしまいました」

「いや、明らかに狙ってただろ!？」

「いいえ。手が滑ったのでございます。すぐにお返ししますね」

そう言つて俺に携帯電話を返す秀吉。すると、さっきの写真は跡形もなく削除されて  
いた。どうやらあの一瞬のうちに画像を消していたようだ。

普段からの秀吉では想像もつかないほど俊敏な行動だ。そんなにあの写真が見られ  
たくなかつたのだろうか？ 俺はアリだと思うけどな。まあ、コイツの性格を知つて  
尚且つあの写真を見れば大爆笑不可避だが。

「なあ大悟。さっきのは何だったんだ？」

「んあ？ ああ、やっぱ気が向いたら教えるわ」

「？」

「……優子、何を見たの」

「ご、ごめん代表、また後で教えるね……プフツ」

「？」

「……そ、それでは皆様、こちらへどうぞ」

秀吉に連れられて、会場の中を移動する。すると会場の丁度真ん中くらいのテーブルに案内された。

そして席に着くと、早速秀吉がグラスに飲み物を注いでくれる。ラベルを見せるように注ぐあたり、徹底しているな。

雄二と霧島と優子にはノンアルコールのシャンパンを。俺には純度100%のスピリタスを注ぎ——

「待て。明らかに俺の飲み物だけ常軌を逸脱しているんだが？」

「いいえ、しっかりと岡崎様のご家族の方に確認を取っておりますので、間違いはございません」

「そうか。ちなみに誰に聞いたんだ？」

「妹様です」

よし、あのバカは明日からの晩飯はしばらくトマトだけで決定だな。

その後はちゃんとした飲み物とオードブルが運ばれてきたのでまあ良かったが。あと一つ心配なのは………

「(……これ、姫路が作ってないよな?)」

—

食事タイムは無事進行し、最後のデザートまで食べ終えた。よ、良かった。ちゃんとした味で安心したぜ……。

「ふむ、ここには特に何の仕掛けもなさそうだな」

「そうだな。ま、食事くらいは気兼ねなくゆっくりしてえからな。それでいい」  
と、雄二と安堵しかけた時だった。

《皆様、本日は如月ハイランドのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます》  
《ございます！》

突如、レストラン会場に大きくアナウンスの音が響き渡った。なんだ？ これからシヨールでも始まるのか？ と思いい、紅茶を口に入れる。ふむ、ダーズリンティーか。しかもこの茶葉はいいものを使っているな。食後のティータイムにはピッタリのー  
《なんと、本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高  
校生のカップルが二組、いらっしやっています！》

「ブフオツ！」

勢い良く紅茶が口から出た。台無しだ。

《そこで、当如月グループとしましては、そんな方々を応援するための催しを企画させて頂きました！ 題して、『如月ハイランドウエディング体験』プレゼントクイズ〜！》

そんなアナウンスと共に、出入り口を閉鎖する重々しい音が聞こえてくる。クソツ！  
俺と雄二の行動パターンは先読みされていたか……おのれ明久ア！

《本企画の内容は至ってシンプル！ こちらの出题するクイズに答えて頂き、見事指定数を正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験していただけるというものです！》

「いらねえよ!？」

《もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありません》  
「大問題だ馬鹿野郎！」

おのれ……安心したところに攻めてくるなんて、なんて卑怯なヤツらなんだ！ 同じ人間として恥ずかしいぞ！

《それでは、坂本雄二さん&翔子さんペアと、岡崎大悟さん&優子さんペア！ 前方のス

テージへとお進みください!」

「ご丁寧に司会が俺たちの席を示したため、レストランにいる観客が一気にこちらへと視線を向ける。だが俺も雄二もそんなモンに出るつもりなど毛頭ないわ!

「ふざけるな! こんな茶番に付き合つてられるか! 俺は家に帰らせてもらあだだだだだだだだつ! 鼻が! 鼻がもげるうつ! 分かったから引つ張んなあつ!」

「行きましよ大悟。絶対にウエディング体験を勝ち取つてみせるわつ!」

「落ち着け翔子。そういつたものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだつ! 耳が千切れるつ! 行く! 行くから放してくれつ!」

「……ウエディング体験……頑張る……!」

俺と雄二は、逃げることもかなわずそのままステージへと強制連行されていく。嫌だあ! 行きたくねえよ!

そしてスタッフ誘導のもと、俺たちはそれぞれの解答席へと案内された。目の前には大きなボタンが一つ設置されている。どうやらコレを押してから解答するみたいだ。

《それでは「如月ハイランドウエディング体験」プレゼントクイズを始めます!》

司会が催しの開始を宣言する。そんな中、俺と雄二はこっそりと目と口パクで合図を交わした。

(雄二、どうする?)

(こうなったらやることは一つだ。正解したらプレゼントってことは、間違え続ければ無効だ。だから女どもに解答権を与えず、俺たちが全部間違った解答を出せばいい)(分かった。その方法でいこう。健闘を祈るぜ)  
(お前もな)

俺たちは互いに頷き、正面に向き直る。そしてボタンに手を伸ばす準備を整えた。

さあどこからでもかかってこい！ 俺は負けねえぞ！

《では、坂本さん&翔子さんペアに、第一問！》

最初は雄二か。一体どんな問題が……？

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうかっ？》

……は？ どゆこと？ 意味が分からんのだが。

ーピンポーン！

《はいっ！ 翔子さん、答えをどうぞっ！》

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり死んでしまえそうだ！」

なっ！ いつのまに霧島がボタンをつっ!? だがいくらアイツとて、答えの存在しない

問題には……

《お見事！ 正解です！》

「何いいっ!？」

なんで正解なんだよ!? いや、霧島の答えもあれだが、結婚記念日つてまず結婚してないと記念日として成り立たんだろう! だからこの結果は明らかにおかしいぞ!?

(おい雄二! これはさすがにおかしい! どうなつてやがる!?)

(クツ! まさかこのクイズ……出来レースか! まさかとは思っていたが、どれだけ俺たちにウエディング体験をさせたんだ!?)

(マジかよ!? じゃあもうなすすべがねえじゃねえか! どうする!?)

(落ち着け大悟! それなら、問題と明らかに関係ない答えを出すんだ。それなら向こうも対応は出来ない!)

(そうか! 分かったぜ!)

《それでは、岡崎さん&優子さんペアに第二問! 大悟さんが優子さんと初めて出会ったのはどこでしょうか?》

ーピンポーン!

《はいっ! 答えをどうぞ!》

「カレーうどん!」

《正解です!》

「なんでだああっ!?!」

馬鹿な!?! 場所を聞かれたのにカレーうどんが正解って!?!

《お二人の出会いには母校である望月中学校の屋上、別名「カレーうどん」です! その時に先輩に絡まれていた優子さんを助けたことが始まりですね!》

「待たんかあいつ! 学校の屋上がカレーうどんなワケないだろうが! 強引にも程があるだろ!」

「絶対その別名はこの場で命名しただろう!」

《坂本&翔子ペアに第三問!》

「話を聞けええええ!!」

あの司会マジぶん殴ってやりてえ。

《お二人の出会いはどこでしようかつ?》

「クソツ! 今度こそ確実に間違えー!」

「……させない」

ブスツ

「ふおおおおつ!?! 目が、目があつ!?!」

流れるような仕草で雄二の目が突かれる。悶絶する雄二の隙をつき、霧島がボタンを



押す。

《はい、答えをどうぞ!》

「……小学校」

《正解です! お二人は小学校の頃からの長い付き合いで今日の結婚にまで至るとい  
う、なんとも仲睦まじい幼馴染みなのです!》

アイツはバカなのか? これをどう見たら仲睦まじいカップルに見えるんだろうか  
?

うむ、どうやら問題を聞いてから動き出すようでは遅いようだ。なら多少強引だが、  
問題文が読み上げられる前にボタンを押し、「分からぬ」と解答する! それなら絶対  
に間違いになるはずだ!

《第四問参ります!》

ーピンポーン!

「分かりまー」

《正解です! それでは最終問題です!》

おおい!? 最早解答権すら無くなつたぞ!? もう強行突破つてわけかよコンチク

ショウ!

クツ……もう打つ手なしか、と思つた時、

『ちよつとおかしくなくい？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなこーこーせーこーこーせーだけが特別扱いなワケ〜？』

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうかご静粛にー』

『ああつ!? こつちは客だろーが！ ガタガタ抜かしてんじやねえよ！』

『そーだよ！ 引つ込んでろよ！』

不愉快な騒ぎ立てとともに、ステージの近くへと歩み寄ってくる四人組。どっかで会ったような連中だと思つてよく見てみると、入場口で難癖をつけて俺を殴ったチンピラ集団だった。

『アタシらもウエディング体験つてヤツ、やってみたいんだけど〜？』

『アタシもアタシも〜！』

『で、ですがー』

『だからゴチャゴチャうるせえつてんだよ！ 俺達もクイズ大会に参加してやるつてんだよバーカ！』

『うんうんつ！ じゃあ、こうしよーよ！ アタシらがあの四人に問題出すから、答えられたらアイツらの勝ち、間違えたらアタシらの勝ちつてことぞ！』

『そ、そんなー』

慌てるスタッフのマイクを奪い取り、その集団はズカズカと壇上が上がってきた。

チツ、また面倒事が増えやがったな。だがこれはある意味チャンスだ。ヤツらが出す問題なら堂々と間違えることができる。そうすりゃあウエディング体験なんてもんはしなくて済むからな！

(雄二、いけるか?)

(ああ、任せておけ。アイツらがどんな問題を出してきたとしても、確実に答えて見せる)

「だ、大悟……?」

一応優子の手を握って妨害をさせないようにする。

『んじゃ、問題だ』

「……………」

『アジアの首都はどこだか答えろっ!』

「……………」

『オラ、さっさと答えろよ。分かんねえのか、あ?』

言葉が出ない。え、えつと……確かにこれはこの場にいる全員が解答不可能な問題だ。何故ならアジアは大陸を指す名称であつて国の名前ではないからだ。だからその首都と言われても答えようがない。

『んだよ? ……ここにいるやつ全員バカなのかあ? 小学校からやり直したらどうだよ、ぎやはははは!』

今の小学生はそう教えられているのだろうか。日本の教育レベルも落ちたものだな。

《……坂本雄二さん、翔子さん。並びに岡崎大悟さん、優子さん。おめでとうございませう。〔如月ハイランドウエディング体験〕をプレゼントいたします》

『おい待てよ! コイツら答えられなかつただろ!? オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

『マジ有り得ない! この司会バカなんじゃないの!』

『話とちげえじゃねえかゴラア!』

『約束破つてんじやねーよ!』

馬鹿共がギヤアギヤアと騒ぐ中、ステージに幕が下りる。

なんていうか……上には上がいるんだな。

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」  
 「……凄く嬉しい」

「やった♪」

レストランを出ると、未だに二人の鞆を持っている似非野郎が近づいてきた。

「何がラッキーだよ。こつちは今までアンラッキー続きだったの」  
 「全くだ。すべて計画の内だろうに」

正直限界だ。これ以上変な仕掛けに来られたら気力が持たない。でもまだ一番のビッグイベントであろうものが残ってるしな……もう勘弁してくれよ。

「そういえば翔子。お前の持つてきた鞆は何が入ってるんだ？」

「優子もやけに荷物がデカいが、そんなに必要なモンがあるのか？」

「あ……それは……」

「……別に、何も……」

「?!」

困惑したように答える二人。何かあんのか？ ま、実印やらエスカリボル○やらを常に持ち歩いてるヤツだし、とくにおかしくないか。

「それデハ翔子サン、優子サン。ウエディング体験の準備があるノデ、このスタッフにつ

いていつてもらえマスか?」

すると、似非野郎の後ろから女性スタッフが歩み出てきた。ウエディングドレスのコーディネートを担当するスタイリストの人らしい。まさか本職の人まで呼ぶとは……奴さんは相当このウエディング体験に力を入れているようだ。

「てことは、今までののは前座で、本命はこのウエディング体験だったか」

「みたいだな。んじゃ、俺たちは長い時間待たされるのか?」

「そりやそうだろ。ウエディングドレスってのはそう簡単に着れるようなモンじゃあねえ。何せ女性が最も美しくなるとされる衣装だからな、化粧なんかを含めたら少なくとも数時間はかかるぜ」

「ならその間俺たちは何をしなければいいんだ?」

「ご安心下さい。お二人についての対応は吉井サンと木下サンから聞いてーではナク、ワタシが考えてありマース」

もうそこまで言っただんなら隠さなくていいだろうが。

「明久と秀吉から指示が出ているのか?」

「嫌な予感がするんだが」

「ハイ。マズは岡崎大悟さんにはコチラを渡すように、ト」

そう言っつて似非野郎が取り出したのは、一枚の紙だった。

「どうぞ、岡崎サン」

「ふん、何のつもりかは知らないが、そんなもんでこの俺が止められるとー」

ピラッ

(アニメ版めるたんの精神崩壊トラウマシーンのコピー)

「あああああああああああああああああああああああああああああああ  
!!!!」

バタツ……

「お、おい! 大悟!! どうしーって、なんだお前! なんてそんなモンもってあぎや

あああああああつ!!」

「少しガマンして下サーイ」

俺はあまりのショックによつて気を失つた。めるたんがあ……めるたんがああ  
あああつ!

ー  
ー  
ー

《それではいよいよ本日メインイベント、ウェディング体験です！ 皆様、まずは新郎のお二人を拍手でお迎え下さい！》

アナウンスの宣言により、園内全てに響き渡らんくらいの拍手が聞こえてきた。そして気がついたら、俺と雄二はタキシード姿に着替えられ、ご丁寧に指輪まで持たされていた。どうやら気絶している間にやられたみたいだな。

「坂本雄二さん、岡崎大悟さん、お願いします」

舞台袖で似非野郎が耳打ちしてくる。この野郎、よくもあんな残酷なものを俺に見せてくれたな。許さねえぞ覚悟しろ、今すぐテメエには俺の必殺恋のパワフル☆半殺しをお見舞いしてー

「抵抗すれば、アナタの実家に泡盛の詰め合わせを送りマース」

「やめてくれ。そんな真似をされたらあの人は散々呑んだくれた挙句暴れて手に負えなくなる」

「やれやれ……。まあ、あくまでもただの体験だしな。適当に付き合つてさっさと終わらせようぜ……」

そう俺に呟く雄二。まあ、確かにここまで来ちまったもんは仕方がねえ。それにどっちみち逃げることは出来ないんだ。大人しくコレが終わるのを待つのが最善の方法だろうな。



「さア。どうぞ」

「あいよ」

「おう」

俺は大人しく従うことに決め、目の前の小さな階段を昇る。そのまま二人でステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

「マジかよ……ここまでするか」

「おいおい……。なんだよこのセット……」

目の前の光景に思わず驚愕の声を漏らす。

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。天井には風船や色とりどりの電飾が設置されていて、派手さというものを超えて壮大ささえ感じさせられた。

そして、俺と雄二はステージの指定された場所まで歩く。

《それでは新郎方のプロフィールの紹介をー》

お、俺たちの紹介もすんのか。まるで本物の結婚式さながらだな。多分明久と秀吉にでも聞いてー

《ー省略します》

「手え抜きすぎだろ」

そこはせめて紹介しろよ。もう新婦側に興味はありませんってか？ 悲しいなあ。

《ーそれでは、お待たせいたしました。いよいよ新婦のお二人のご登場です》

心なしか音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気がパッと一斉に消えた。足元にはスモークが立ち込め、一気に雰囲気が変わったのが分かる。ほう、こりやあいい演出だな。

この隙に脱出してしまおうとも思ったが、折角だ。優子のウエディング姿を見ておいても良いだろう。あれでも一応秀吉と瓜二つの美貌の持ち主だ。そこそこ似合っているもなんも問題はないだろうー

《本イベントの主役である、霧島翔子さんと木下優子さんです！》

すると、壇上のとある一点に向かってスポットライトが照らされた。暗闇からいきなり輝きが舞い込んできたため、思わず目を瞑ってしまう。

そして、再び目を開けたときに視界に映る姿にー俺は言葉を失った。

『……………綺麗』

会場のどこからか聞こえてきた台詞。だが、俺はその言葉に対してなにも違和感はない。それほどまでに目の前の存在は、その言葉に相応しいものであるからだ。

見慣れた腐れ縁でありながら今日が初めて出合いを果たしたかのような、そんな感情になるほど、アイツは大変身を遂げていた。

「……………」

俺も雄二も言葉が出ない。いや、言葉など不要だった。

彼女らが身に纏う汚れなき純白のドレスは、俺が今まで見てきたどんなコスプレ衣装よりも気高く、淑やかに、そして美しく輝いている。思わずその姿から無意識に視線が離れなくなっていた。

馬鹿な……………この俺が、二次元を愛する男であるこの俺が！ 三次元に見惚れているだとおっ!?

「……………大悟?」

「つ……………」

気がつくくと、二人はステージの中央、俺と雄二の目の前まで歩いてきた。ヴェールの下に素顔を隠して、シルクの衣装に身を包む腐れ縁が、俺を見上げていた。

そんな……俺は今、コイツを美しいと思っているのか……!?

「ゆ、優子なのか……?」

「そうよ……大悟」

何も考えられなくなる。どうしちまつたんだ俺は！ 相手はあの優子だぞ！ なんとこんなにも動揺する必要があるんだ！ 冷静になれ！ お前は二次元に生き、二次元に死ぬ男だろう！

「……大悟、どう？ アタシ……綺麗になつたかな……?」

恥ずかしげにそう優子が俺に訊く。それを見た時、俺は今まで考えてたものが全部頭の中から吹っ飛んでいくのを感じた。どうやって逃げようとか、ウエディング姿が似合うのかなんてもうどうでもいい。

そして無意識のうちに浮かんだ言葉を、そのまま発した。

「……ああ、間違えるようだ」

どうやら俺は思っていたほど土壇場じゃあ？ がつけない人間のようだ。まさか俺ともあろうものが三次元、しかも優子に対して『魅力的』なんて感情を持つとはな。だが、それは間違いでも何でもない。

今の優子はそれほどまでに……綺麗で、可憐で、美しく輝いていた。見えないけど、隣にいる霧島もそうなんだろうな。

「……………大悟……………」

優子は小さな声で俺の名を呼び、胸のブーケを抱え直す。

「……………待つてた……………」

すると、ブーケに顔を伏せて静かに震えだす。な、なんだ？ 様子が変だぞ？

《ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁のお二人が泣いているように見えますが……………？》

……………泣いてる？

アナウンスが入ったことで、俺は気がついた。優子は肩を震わせながら俯きー涙を流してきた。よく見ると、隣の霧島も泣いていて、雄二が困った顔をしている。そんな姿に観客もざわめいていた。なぜいきなり泣き始めたんだ？

「お、おい優子。どうしたんだ……………？」

俺がそう恐る恐る問いかけると、優子はいつもの強気な態度からは考えられないような、涙混じりの小さな声で呟いた。

「……………アタシの願いが……………叶ったの……………」

《お願い、ですか?》

「……………ずつと……………アタシの願いだつた……………嘘でも演技でもいい。大悟とこうすることが……………。大悟にとつてのたつた一人の特別な存在になりたかつた……………。大悟がアタシを守るために、目の前からいなくなつたあの日から……………」

優子が嗚咽を混じらせながら懸命に紡ぐ言葉に、俺はとてつもない罪悪感に襲われた。

秀吉から聞いた、コイツの俺への想い。それがあの時のことから来ているんだとするなら、それは大きな間違いなんだ。俺はそんなことのためにやつたんじゃない。好意なんて要らない、俺はただアイツらから優子を守りたかつただけなんだ。そのせいで俺は感情に負けて取り返しをつかない事をして……………そして『自分たちのせいで』なんて勘違いをさせて優子を余計に苦しめてしまった。

それなのに、コイツは嫌がるどころか、世間から見たらクス野郎の俺を懸命に愛している。こんなの笑い話にもならねえ。コイツは、俺みてえなゴミクスなんかと一緒にいるべきじゃないんだ。それなのに、どうしてそこまで俺を好きでいられるんだ。辛いだけだつていうのに。

「……………だから、アタシは大悟に自分をちゃんと見てくれるこの時間が……………本当に嬉

しいの……。だから……。ありがとう……。大悟」

「……………」

そこまで言ったところで、優子はまた泣いてしまった。

すると、会場のどこからか聞き覚えのある声が微かにする。恐らく秀吉だろう。つた、役者人間のくせに涙もろいヤツだ。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁さん達は相当に一途な方々のようです。さて、花婿の二人はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

フン、そんなもん聞かれるまでもない。俺が優子にしてやれることなんて一つだけだ。コイツの間違った好意をちやんと修正して、これ以上無駄な時間を過ごさせないことだ。それが優子にとって一番良いことなんだからな。

「優子。なら俺はー」

『あーあ、マジつまんねー！』

俺が言いかけたところで、観客席から声が上がった。



## 第三十六問 乙女よ、大志を抱け

『あーあ、マジつまんねー!』

観客席の最前列からの声に、俺は思わず口が閉じた。声の主は……さつき会場でバカみたいに騒ぎまくってたチンピラ共じゃねえか。よく会うなあ。

『つまんねーんだけどこのイベントおく。他人の思い出話とかマジ興味ねーからあ、早く演出とか見せてくれてくれってカンジイ〜』

『全くだなく。ガキどものノロケとか聞いててなんも面白くねえよ』

『ホントだよねー、だからアタシらが出た方が全然盛り上がったしね〜』

『だよなく。時間の無駄だつてんだよなく』

啖呵を切つたように口々と不満を大声でぶちまける。会場が静まり返っているおかげか、やけに良く聞こえやがるぜ。

『つてか、さつきから聞いてればなにい？ お嫁さんが夢とか、ずっと待つてたとか、つて。お前らいくつだよ？ なに？ キャラ作り？ ここのスタッフの脚本？ 馬鹿じゃねえの？ 正直うぜえしキモいんだよ!』

『てかそれもウソ泣きでしょ？ うわー引くわあ。アンタらの泣き顔とか別に価値もねえから！』

『しかも何あれ？ オトコドモもマジな顔してるしい。ウケるんだけどお？ ガキのくせにいつちよ前に大人のマネゴトとか見てて不愉快だし』

『てかアイツ、朝えらそーな態度こいてた雑魚じゃん。うーわマジ最悪だわ。あんなクソ野郎の結婚式とか存在価値もねーから！ とつとと失せろし！』

そして俺たちを指差し、下衆びた声で大笑いする四人組。

すっかりクソ野郎とききましたか。我ながら酷い言われようだなあ。こっちは迷惑になりそうだったから注意しただけだってのになあ。

「大悟、お前酷い言われようだな」

「全くだ。俺別に悪いことしてねえのに。世知辛い世の中だぜ」

「ま、お前がクソ野郎なのは間違いないがな」

「おいおい、何言ってるんだ。クソ野郎はお前だろう？」

「いやいや、お前ほどのクソ野郎と張り合えるやつなんてそうそういないだろ」

「そんな事はない。この地球上でナンバーワンと言っているくらいにクソ野郎の雄二にはかなわんぞ」

「……………（メンチの切り合い）!!」

あのチンピラ共の様子を窺いつつ雄二と睨みあう。すると、

《んだとテメエらっ！ もういつペン言つてみやがれ！》

《あ、明久君！ 落ち着いてっ！ ステージが台無しになっちゃいます！》

《今ここで出て行つたら、全部水の泡になっちゃうわよ！》

そんな放送が入り、舞台裏の方から誰かが暴れるような音が聞こえてきた。多分どこかで今のチンピラ共の発言に腹を立てたバカが暴走してんだらうな。

それはそうと、運営側もいい加減あいつた奴らはさっさと追い出しちまえばいいのに。それをしないってことは、相当世間体を気にしているんだらうか。

『オラア！ とつとと消えろよカスども！ 目障りなんだよ！』

『『消—え—ろ—！ 消—え—ろ—！』』

余程俺たちを根に持っているのか、遂に中指を立てて煽りまくられる。

おーおー、汚ねえ合唱だな、と思ひ奴らを見下ろしていると、

「……………じゃない」

「あ？」

「……………カスなんかじゃない」

「ああ？ 聞こえねー」

「大悟はカスなんかじゃない!!」

ハッキリと鼓膜の奥底まで響くほどのデカイ声量で、叫び声が隣から聞こえてきた。すると、優子が泣きながらステージを降り、そのチンピラの下へ歩み寄っていった。な、なんだ？

『んだテメエ！　なんか文句でもあんのかよ！』

「うるさい！　黙れ！　他人に迷惑しかかけられない最低なチンピラのくせに、アタシの大事な人をバカにして、何様のつもりよ!!」

『ああ!?　誰がチンピラだとこのガキ！　カスにカスって言って何が悪いんだよ!?』

「カスはアンタらよ!!　確かに大悟は、中学の頃からバカで、オタクで、喧嘩ばかりしてたでしょうもないヤツよ……!!　でも、アイツは決して弱い者イジメもしないし、堅気に出すこともなかったし、他人を不快にさせるようなことだつてしない！　何より……大悟は友達の為に体を張れる仁義の男よ！　何も知らないくせに……!!　アンタらみたいな自分の事しか考えてないクズに！　アタシが好きになった男をバカにされたくない!!」

『っせえな！　下らねえゴミみたいな夢なんざ語りやがるクソガキが！　調子に乗ん

じゃねえよ!』

「ゴミなんかじゃない! ゴミなのはそうやって傍若無人に振舞ってるアンタらのことよ!!」

チンピラ共の威圧するような態度と言葉責めにも怖気ず、涙ながらに対抗する優子。その声には、何かの強い感情が込められているように聞こえた。

「アンタらなんか……! アンタらみたいなヤツらなんて、全員大悟にぶつ飛ばされちゃえばいいのよ!!」

『さつきから聞いてりや舐めやがって! ガキの癖に生意気なんだよ!!』  
「きやあつ!」

すると、その金髪は無理やり優子を突き飛ばした。近くにテーブルが無かったので大事には至らなかったが、優子はそのまま強く転んでしまった。

それを見た霧島が、急いで優子の下へと駆け寄る。

『さつきと失せろ! テメエらを見てると腹が立つんだよ! クソガキ風情が!』

『うわーマジダツセエンだけど! ウケるわー!』

「……それはこっちの台詞。女に手を挙げるなんて、最低……! 優子、行こう」

「……代表……っ! うぐっ! えぐっ!」

すると、そのまま優子と霧島は会場からフェードアウトしてしまった。

さつきまで彼女が立っていた場所には、落としたのであろうか、指輪交換用の指輪入  
れが落ちてゐる。

「……チツ」

俺は指輪入れを拾う。それは凄い力で握っていたのか、少し潰れたような形になつて  
いた。

《は、花嫁さん!? ど、どちらに行かれるのですか!? 花嫁さん!?》

スタッフ達がバタバタと駆け出す。どうやらこのウェディング体験は失敗に終わり  
そうだな。ここままでやってこんな結果に終わったんだ。恐らく如月グループの幹部連  
中やスポンサーはとんでもないことになつてゐるだろうよ。

「まったく、こんなことになるんなら最初からあのチンピラ共を入場禁止にでもすりやあ  
よかつたのにな。」

「さ、坂本さん! 岡崎さん! 霧島さんと木下さんを一緒に探して下さい!」  
血相を変えたスタッフが慌ててこっちにやって来る。

「断る。ここままでする義理はねえ。ほとぼりが冷めりやあ戻つてくるよ」

「同感だ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え? ちよ、ちよつと、お二人とも……!」

何か言いたそうなスタッフを無視して、俺たちは会場を出ていく。全く、最初から最

後まで面倒事に巻き込みやがって、ホントいい迷惑だぜ。

そのまま退場していく客に混ざって外に出て、少し離れた所のベンチに二人で座った。もう日も沈んでいるというのもあつてか、もうアトラクションも終了していて、客ももう殆どいないようだ。ま、そっちの方が都合が良くて助かるけどな。

「なあ雄二。これからどうするよ?」

「なについて、やることなんざ一つしかねえだろ。お前もそのつもりで出てきたんだろうが」

「確かにな」

そんな話をしていると、向こうの方から声が聞こえた。どうやら目的の奴らが来てくれたようだ。

『いや、マジでさっきのウケたな!』

『うんうん! 私……結婚が夢なんです……。アタシを見てほしかったんですう……。どう? 似てる? 可愛い?』

『ああ、似てる! けどーキモいに決まってるだろ!』

『つたく、ガキのくせにいつちよまえに大人のマネゴトなんかしてっからだよな!』

『それなく、あはははは!』

さてさて、そんじやとつと用件済ませつか。

俺と雄二は立ち上がり、そいつらの前に立ち塞がる。

「よお、楽しそうだな」

「さつきは世話になつたな」

『ああ？ んだよ？』

四人組が俺たちの方に顔を向ける。

コイツ等には散々借りを作っちまったからな。返すもんはきちんと返しとかねえと。

『ああ、拓郎。コイツさっきの腰抜けドモじやない？』

『みてえだな。んで、臆病者が俺になんの用だ、ああ!?!』

金髪の方が一步前に出て、俺を威嚇するような仕草を見せる。昼間の出来事から、俺よりも自分の方が実力が上だと思ひ込んでいるのだろう。

まあいい。そんな事は今の俺にとつちや関係ないからな。

『なんだ？ まさか文句でもあんのかよ？ なら言ってみろよ！ 喧嘩の仕方わから

ねえカス野郎がよお！ それとももう一度俺にぶつ飛ばされつかあ!?!』

「いや。別に文句なんてねえよ。ただー」

金髪が再び俺の胸倉を掴む。だが前回とは違って、俺はそれを止めるつもりはない。



そして不思議なことに、俺の身体は最高潮に調子が良かった。

隣を見ると、もう一人の男の方が雄二に迫っているのが見えた。ま、こうなつちまつたらしようがねえよな。喧嘩の仕方もわからねえ……か。

『ほら！ 言ってみろよ！ 俺の気が変わらねえウチにー』  
ガシッ！

「お前……いつペン死んどけや」



――

「おう。二人共遅かったじゃねえか」

「随分と待たせてくれたな」

私服に着替え、如月ハイランドの中にあるグランドホテルの前で待っていると、玄関から二つの人影が見えた。霧島と優子だ。

二人共俯きがちで、特に優子は散々泣きはらしたのか、目の周りが赤くなっている。

「……………大悟……………」

「んじゃ、帰ろうぜ。霧島、ありがとな」

「……………うん。ほら、優子……………」

「……………」

霧島に促されて、優子が俺の元まで来る。

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

「おうよ」

似非野郎から返してもらっておいいた優子の鞆を担ぎ直し、全員で帰途につき始める。

「……………」

優子は何も言わずに、静かに霧島と並んで俺と雄二の後をついてきた。ただ何も喋らず、黙々と駅に続く道を歩く。

そのまま駅について電車に乗り、数時間後には最寄り駅に到着した。電車を降りて改札をくぐり、駅を出た。

「じゃあな、雄二、霧島」

「おう。また学校だな」

そして雄二たちと別れ、俺は優子を送り届けるためにコイツの家に向かっていた。

どれくらい無言のまま時間が経っただろうか。人気のない道を二人で歩いていると、優子が聞こえるかどうかくらいの小さな声で呟いた。

「……………大悟……………」

「……………どうした？」

「……………悔しい……………」

「なんだって？」

「……………アタシ、悔しいよ……………！ あんなヤツらに馬鹿にされて……………何も知らないヤツに夢を笑われて、それどころか、大切な人をけなされて……………なのにアタシは、ただ感情的になることしか出来なくて、結果的に大悟に迷惑をかけて……………！」

「……………優子……………」

「……………ねえ大悟。アタシが今まで思ってきたことって、おかしいの？ そんなに、アタシの夢って、笑い話なの……………っ!？」

ボロボロと優子の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。

どうしてそこまで自分を思い詰めてしまうんだろうか。大方あのチンピラ共にけなされたことが余程ショックだったんだろうな。顔はよく見えないが、伊達に中学からの付き合いじゃない。どんな表情で泣いてるのかなんぞ、見なくたって分かる。

だが、だからといって俺はコイツを励ましたり、慰めるようなことはしない。

「仕方ねえよ。夢なんて他人から見れば所詮絵空事なんだ。笑われて当然だろうが」

「……………っ!？」

真つ先にそんな言葉が俺の口から出た。

「……………そんな……………」

再び俯く優子。どうやら心のどこかで、俺に慰めの台詞を発してもらえるのだと思つてたんだろうな。だが俺は嘘の言葉なんかでコイツには立ち直つて欲しくないし、されたくもなかった。

さっきの言葉を鵜?みにしているつつうことは、コイツは一年半という決して短くな

い時間を、色褪せることのない想いと夢を胸の内に秘め続け、生きてきたんだ。

だがそれを、何も知らない連中に否定され、馬鹿にされ、ゴミ呼ばわりされた。それが今のコイツにとってどれ程残酷だったか、俺には分かるべくもない。

「人の夢を笑うな？ 馬鹿にするヤツは最低だ？ 下らねえ。手前の身の丈に合わねえような御託垂れてたら馬鹿にされるに決まってるだろ。んなもん考えなくても分かる。

……違うか？ 優子」

「……………」

「それにこの際だから言っておいてやる。お前のその気持ちは、純粋な愛なんかじゃない。あの時の俺に対する罪悪感が形を変えただけのモンに過ぎない」

一年半前のあの日、俺と優子にとって忘れたくても忘れられない、あの出来事。そして優子が、俺に好意と勘違いした感情を持つようになってしまったであろうきっかけ。俺はあの時の事を今でも悔やんでいる。

あんなことがなければ、コイツはもつとちゃんとした人生を送れた筈なんだ。まともな男に出会って、いい恋愛をして、明るい未来を生きていける……だがその運命を、俺が奪い去ってしまった。俺という存在が、アイツの本当に進むべきはずだった道を破壊し、アイツを縛り付ける枷になった。だから、あの時俺が少年院行きが決まった時も『本当の罪』を犯してしまった自分への罰であり、自業自得だと思っている。

だから、俺は彼女に教えてやらなければならない。これ以上、俺みたいなクズが、女の人生においての障害になってはいけないのだから。

「……………だい、ご……………」

優子が悲しみに満ちた表情でこっちを見る。信じていたはずの俺にこんな事を言われて、傷つけてしまったかもしれない。

「……だがな、お前が苦しむ必要なんざねえ」

「……………え……………っ?」

でも、だからといってコイツが傷つき、今までの自分を否定する必要なんてどこにもない。確かにコイツの抱いていた夢も願ひも、俺にとつちゃあ勘違いもいいところだ。罪悪感からくる好意なんて、それ以外の何物でもない。

けれど、その行為自体は間違つてなんかかない。誰か一人の男を、ずっと一途に愛し続けられるなんてことはそう簡単に出来ることじゃない、それは強い信念と覚悟がなきや絶対に叶わない、かけがえのない素晴らしいことなんだから。

「いいじゃねえか、笑われて。笑われて馬鹿にされるってことは、自分達じゃ決して叶えられないモンをお前は抱いてるってことなんだぜ? だったら、それを自分が叶えれば

いいだけの話なんだ。それとも、お前のその夢ってのはあんなヤツらにけなされた程度で折れちまうほど弱いのか？」

「……………」

「違うだろ？ あいつらはお前のその『信念』にまともに喧嘩を売る度胸すらないクソ雑魚だ。そんなもんの戯言に耳を傾けるな。気にするな。言わせておけ。お前はお前の信じた道を進めばいい。ワンピースの黒ひげも言ってただろう、高みを目指せば出す拳の見つからねえ喧嘩もあるつてよ。夢を追い続けてりゃあ、そういうことだつてあるさ。ま、何が言いたいかつていうとだなー」

「ー乙女よ、大志を抱け!! つてことだ!」

俺はそう言つて、会場で拾つておいたものを開けて、中身を取り出した。

「ま、それがちゃんとした相手ならつて話だがな」

そしてそれを、優子の左手の薬指に嵌めてやった。

「これ……………さつききの、指輪……………」

「ま、折角の体験なんだ。これくらい思い出は必要だろ?」

花嫁の象徴ともいえる白銀に光る指輪を指に、優子は驚いたように顔を上げた。俺は



それに対して軽い笑みで返す。

つと、思い出した。もう一つ言っておかなきゃならない事があつたな。

「それからな、優子ーありがとな」

俺は既に中身がなくなつて軽くなつた鞆を優子に返した。

「あ……大悟、食べてくれたの……？ アタシが作つた……お弁当……」

「ああ。ま、旨すぎてお前の分まで食つちまつたけどな。そこは済まん」

「……………」

「うし。そんじや帰ろうぜ。あんまり遅いと面倒だからな」

「……………大悟」

「特に母さんと天は、色々とダルいからな。だからー」

「大悟っ！」

ぎゅっ……

突然の優子の大きな声と共に、背中と腰の辺りに感じる暖かさと柔らかさ。俺は思わ

ず立ち止まってしまおう。

「……優子？」

普段通りの感じで振り向くと、そこには、

「アタシ、もう迷わない。今までも、これからもずっと——大悟のことが好き！」

満面の笑みで俺を見詰める腐れ縁が、そこにはいた。

――

週明けの学校にて。

「よお、明久」

「ん？ おはよう、雄二、大悟。どうしたの？」

「如月ハイランドじゃ随分と好き放題やってくれたな」

「おかげで散々な一日だったぜ」

「あははっ。二人共何を言ってるのさ。僕は一日中家でゲームをやっていたんだよ？

如月ハイランドになんて行けるわけがないじゃないか」

「……そうか。お前がシラを切るならそれでもいいだろう。ところでー」

と、雄二が明久に例の物を渡そうとすると

トントン

不意に誰かから優しく叩かれた。誰だ、と思い後ろを振り向くと、

「………同志、これはどういふことだ」

暗殺者のごとき殺気を放っている同志ムツツリーニの姿があった。そしてヤツが手にする写真には、あの時の優子と俺が綺麗に映っていた。

「なっ!?! なんでお前がそれを持っている!?!」

「……………匿名からの情報提供」

「なにい!?! そんなの一体誰が……………はっ!?!」

気が付くと、俺の周りを邪教集団、他人の幸せ破壊しますでおなじみ『FFF団』が取り囲んでいた。

こうなってしまうたらもうしようがない。真実を話すことにしよう。

「同志、これはなー」

「……………(コクツ)」

「優子に抱きつかれたんだ」

「……………なるほど、会長。この邪教徒をいかように?」

『死刑に決まっているだろう常識的に考えて』

『『悪! 速! 斬! 悪には正義の鉄槌を!!』』

よし、ここうなったらやることは一つだ。

「アデュー！」

「逃がすなあ!! 異端者を即刻捕らえて血祭りにあげろ！」

「「うおおおおお!!」」

「……同志、せめて俺の手で葬ってやる」

そして、俺と嫉妬に狂った馬鹿野郎たちとのリアル鬼ごっこが始まった。

「ふん、大悟め。あんな恥ずかしいものを晒そうとしたお仕置きじゃ」

——

——Aクラス——

「あれ、優子? その左手のそれって……」

「うん。これは——」

「——アタシの大切な人がくれた、宝物なの」

## 強化合宿編

## 第三十七問 盗聴なんて頭にきますよ！

——大悟視点——

「優子」

「えっ？ な、なに、大悟？」

「お前、何か隠してるだろ」

「えっ!? か、隠し事？ そんなのしてるワケないじゃない、何言ってるのよ」

「ならなんでそんなに落ち着きがねえんだ？」

「べつ、別にいつも通りだけど？ 何もおかしくなんてないわ」

「優子。お前にプレゼントがあるんだ。受けとってくれるか？」

「うん♪」

サッ

「バカが——って、ウオークマンじゃねえか」

「あつ！ ちょっと待って、それは——」

「なんだ。なら別に隠す必要ねえじゃねえか。どうせお前のことだからBL系のドラマ

CDでも入ってー」

ーポチツ 《この俺、岡崎大悟は世界中の何よりもー木下優子を愛しているっ!!!》

「……………」

「…………別におかしくないでしょ?」

「今日これは預かっておいて放課後に返してやる」

「そんな! まだ凜花さんに聞かせてないんだから待つてよ!」

「余計に待てるか! こんなモン母さんに聞かせてどうしようってんだ!」

「凜花さんに聞かせれば実質的に合意の上になるでしょ? そしたら大悟は永遠にアタシのものになるじゃない!」

「俺自身に決定権がないんだがーん? ポケットにあるそれはなんだ?」

「あ、これは別に普通だよ」

「どれどれ…………『愛しの大悟監禁観察日記』…………何コレ」

「アタシと大悟の新婚生活を想像して書いたの♪ ちなみに今は1642日分まで出来上がってるわよ」

「そうか、じゃあこの内容が現実にならんようにしなくちゃあな」

「大丈夫♪ こんなことしなくても、アタシは大悟と幸せな未来を築けると思うから」  
「目をどす黒くして言われても説得力ないぞ」

「ちなみに、子供は二人で男兄弟がいいわ」

「なんでだよ？」

「兄弟同士での禁断の淫靡関係って……最高じゃないかしら？」

「お前は実の息子たちに何させようとしてんだ……」

「あ、女の子が生まれたらその時に考えるわ」

「どっちも普通に育てろ！ ったく……一回ちゃんど病院で診てもらった方がいいのかもな」

「え……でもまだつわりは来てないし……そもそもまだアタシは処女でー」  
「産婦人科じゃねえよ馬鹿野郎」

――

「同志ー!! 同志同志同志イイイイイイ!!」



俺はFクラスの教室に勢い良く入室し、真つ先に目的の人物がいるであろう席に駆けていった。

「……いきなりどうした? 同志大悟」

目の前で一眼レフカメラを弄りながら俺にそう尋ねた小柄な体格の男、土屋康太。その俺にも匹敵するほどの妄想力の高さと性に対する知識と執念。俺とは嗜好が正反対ながらも、その性欲に対する揺るぎない探求心。そして何よりも、二次元の良さを理解している素晴らしさに敬意と友情を表し、同志ムツツリーニと呼んでいる。

「実は、同志に今すぐに頼みたいことがあるんだ。大急ぎで」

「………報酬は?」

「うむ。ダイゴブックス監修夏コミコスプレ美女名鑑集はどうだろうか?」

「………話を聞かせろ」

あつさり取引成立。ふっ………なんていい目をしてやがる。俺はそんなお前が大好きだ。さて、そろそろ本題に入るとしよう。

「実はな、今朝優子からこんなものを回収した」

「………音楽プレイヤー」

「ああ。そしてこの中には、何故だか全く記憶にない俺の優子に対するプロポーズが録音されていてやがったのさ」

そして、俺は同志に聞こえるくらいの音量でそれを再生する。

もしこんなものが俺の母さんに聞かれたりでもしたら大変な事になる。あの人酔っててもシラフでも毎日のように俺に『あんない奴がバカでロクデナシでキモオタのアンタに好意を持つてんだからさっさとくっつけ！　そしてアタシに孫を見せろ！』って言うてくるような人でなしだからな。おそらく俺は有無を言わさず人生の墓場に突き落とされ……その先は地獄だ。考えたくもない。

「……………何か心当たりは？」

「ねえな。そもそもこれがいつ録音されたのかも分からねえのにーって同志、どうし気まずそうに目を逸らすんだ？」

「……………日光が眩しいだけ」

「ここどつちかというと廊下側の席なんだが……………まあいいか。

「二応コレは取り上げておいたが、この音声はおそらく複製したもので、必ずどこかに音源があるに違いない」

「……………何故そう言い切れる」

「もしコレを優子本人がやったのだとしたら、わざわざ音楽プレイヤーなんて分かりやすい所に残すわけがない。アイツはかなり用意周到な性格だからな。常に万が一を考えてる。それこそもし紛失や故障なんかがあったら全部ペアになる可能性だってある

からな。わざわざ自分で入れたもんも不用心に持ち歩くとは考えにくい」

「……………なるほど（コクツ）」

つまりこの音声を録音したのは他の誰かで、俺の告白をコピーして優子に渡したのだ。だが優子の周りの友人関係を思い出してもそんなことが出来そうなヤツは一人もない。霧島は機械音痴だって雄二が言ってたし、工藤や久保にはそもそもそんなことをする動機がない。なら外部の人間の犯行じゃないか？　とも思ったが、アイツにそこまでの人脈はないだろう。

てことは、盗聴犯は文月の人間かつ、俺と優子の関係性を知ってるヤツということなんだ。

「だから、同志にはその台詞を録音した実行犯を探してもらいたい。出来そうか？

「……………愚問だな同志。俺を誰だと思ってる（フツ）」

自信ありげにそう言う同志。さすがは情報収集や盗撮、盗聴のエキスパートだ。言葉の重みが違う。そう思っていると、

「ムツツリーニ、ちよつといいか？」

後方から聞こえる聞きなれた声。振り向くと、そこには俺のダチである坂本雄二がいた。

「雄二か。悪いが後にしてくれ。俺には時間がねえんだ」

「何だと？ なにかあったのか」

「……………同志大悟が人生の墓場に送られようとしている」

ムツツリー二の言葉を聞いた雄二は、何故か俺に同情するような視線を向けた。

「なんだ。大悟も俺と全く同じ状況か」

「何だと？ まさかお前も……………」

「ああ……………このままじゃ俺は、翔子に一生囚われる人生になっちまう……………」

話を聞くと、どうやら俺と同じく、雄二も身に覚えのない告白を何者かに盗聴され、霧島がそれを自分の父親に聞かせて婚約の証拠にしようとしているらしい。優子もそうだが、霧島のヤンデレっぷりも筋金入りだな。

てことは、俺の雄二の件は同一犯の可能性が高いということか。

「そんなワケで、ムツツリー二にはこの台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。アイツは機械音痴だからな。密かに集音機を仕掛けるなんてことはできるわけがないから、木下姉と同じく、盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

「しっかし、犯人は何を考えてやがるんだ。俺や雄二の結婚を助長するような真似しやがって。なんの目的があるんだ？」

「さあな。だが少なくとも、犯人は俺たちを——」

「助けてムツツリーニ！ 僕の名誉の危機なんだ！」

すると、いきなり誰かが俺たちのところに倒れ込むように駆け寄ってきた。見ると、それは俺のダチでありFクラスを代表するキングオブバカでお馴染みの吉井明久だった。

「後にしろ。今は俺たちが先約だ」

雄二が明久の行く手を遮るように身体で邪魔をする。

「あれ？ 雄二、大悟？」

「悪いな明久、こっちは急ぎなんぞでな」

「そうなの？ ムツツリーニ、何の話をしていたの？」

「……………雄二と大悟の結婚が近いらしい」

「雄二と大悟の結婚？ そんな既に決まっていることより、僕の方が重要だよ！ このままだと僕が学校中に女装趣味の変態として認識されそうなんだ！」

「なんだと明久テメエ！ お前が女装趣味の変態なんぞ、それこそ今更だろうが！」

「そうだ！ どこにも間違いないなんてねえだろ！ 事実なんだからよ！」

「黙れこの妻帯者共！ 人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこのド変態！ とつとつとメイド喫茶へ出勤しろ！」

「そんでそのままアキちゃんとしてデビューしちまえ！」

「……………」

「……………傷つくなら三人とも黙ってればいいのに」

「な、泣いてねえよ！ これは昨日の泣きゲーのエンディングを思い出してしまったが故だ！」

「で、でも、まだ結婚の話程度で済んでよかったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子供が出来てることにされてるのかとー」

「……………明久。笑えない冗談はよせ」

「え？ なに？ 笑えないの？」

「ああ、とつても笑えない。あれ？ おかしいな？ もう泣きゲーのことは考えていはいはずなのにまた自然と涙が出てきたぞ？」

「……………それで、明久は？」

「と、ムツツリーニが明久の方を向いた。どうやら事情を聞くようだ。」

「うん。実は、僕のメイド服パンチラが全世界にWEB配信されそうなんだ」

「……………何があつた？」

「明久の内容が理解できず、思わず聞き返してしまう。」

「ごめん。端折り過ぎた。要するにねー」

— —

明久の話を簡潔にまとめると、朝学校に来たらロッカーに手紙が入っていてその内容は、これ以上傍にいる異性に近づくなという脅迫文と共に、学園祭の時の明久のメイド写真が入っていたらしい。おそらく言う通りにしなければその写真を公表するということなんだろう。

「——そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんてないから、きつと盗撮の得意なやつがこつそり撮影したんだと思う」

「なんだ。明久も俺たちと同じような境遇か」

「一体どうなってやがるんだ？」

「……………脅迫の被害者同士」

「こんなことで仲間ができて嬉しくないよ……………」

それに関しては激しく同意だ。こんな不慣れた理由で紡がれる関係性とか嫌すぎるからな。

「そういや、その明久の写真ってどんなのだ？」

「ああ、うん。これなんだけど……………」

そう言つて、俺たちは一枚ずつ明久から写真を見せてもらう。その内容は明久が着替えながらブラジャーを持って立ち尽くすものだったりトランクスのパンチラだったりする。

「……………これは酷いな。男の威厳もクソもねえし、コスプレすんならちゃんと下着も女物を履けよ。中途半端な仕事しやがって」

「俺だつたら恥ずかしすぎて表を歩けないほどだ」

「やめて！ そんな哀れむような表情で僕の汚れた姿を見ないでえ！」

「……………しかもコレは……………俺のよりベストアングル！」

「ああつ！ ここにも伏兵が！」

「……………安心しろ、俺は無料で撒いたりはしない」

「撒くんだけ！ 有料なら撒くんだけ！」

そんなやりとりをしていると、ガラガラと教室の扉が開く音が響いた。

「遅くなつてすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。HRを始めるから席についてくれ」

そう告げたのは担任の鉄人こと西村先生だ。手には大きな箱を抱えている。

「……………とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持つてくる」



「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその二を持つてくるよ」

「さっきのブツに俺厳選の二次元イラスト（R18）もつけておこう」

「……………必ず調べ上げておく」

よし、交渉も無事終了したことだし、鉄人に目を付けられないうちにさつさと席に戻るか。

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、大体のことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題ないはずだが、くれぐれも時間と場所だけは間違えないように」

前の席から冊子が配られてきたので、それを受け取る。はあ……………合宿ねえ。あんまり気分が上がりかねえなあ。だってよお！合宿の間は家に帰れないからアニメもゲームもお預けつてことだろう!? ふざけんな！毎日俺の帰りを待つてくれている女の子（画面の向こう）たちを寂しがらせてしまうじゃあないか! どうしてそんな非情な仕打ちを俺に課しやがるんだ……………っ!?

「楽しみじゃのう、大悟」

「ん?」

すると、横から俺に話しかけてきたやつがいる。俺の相棒でありダイゴブックス公認の絶世美人の男の娘。木下秀吉だ。

「なんだ秀吉か。やけに生き生きしてんな」

「当然じゃ。学力強化が目的とは言え、皆で泊りがけなのじゃ。楽しみになるのは仕方がないじゃろう？ 無論ワシとて胸が躍っておるしの」

「何言つてやがる。胸が躍るっていうほどデカくないだろ」

「いや、ワシの胸が大きくなつては困るのじゃが……」

まあ、コイツはこういった行事が好きなのは知っているが。反対に俺の心は現在停滞中だが。

「それに、学校行事とは言え、大悟とどこかに泊りがけということも初めてじゃろう？ いい思い出が出来るワシは思うぞい」

「そうかねえ……だがやつぱリアルタイム視聴を逃すのは悲しいぜ」

ぼやきながらパラパラと冊子をめくる。

今回俺たちが向かうのは卯月高原という場所らしい。洒落た避暑地として有名であり、ここからだじめちやくちや遠く、電車やバスを使つても五時間程度かかるとか。うげえ……マジかよ。

「気をつけろよ、集合場所はクラスごとでそれぞれ違うからな」

鉄人のドスの利いた声が響き渡る。

「どうせ優子達は快適なリムジンバスとかで行くんだろうな」

「うむ……となるとワシらは、狭いマイクロバスとかかのう……?」

いや、ひよつとしたらもつと設備の悪いモンかもしれないな——

「いいか、我々Fクラスは——現地集合だからな」

『『『案内すらないのかよっ!?!』』』

あまりの扱いに全級友が涙した。

――

――強化合宿、初日目の朝――

車窓を流れる緑の多い風景に、都会では味わえることのないであろう新鮮な空気。それらを目で、鼻で、耳で、そして体で感じていると、いつもの街から遠く離れた土地に來ていることが強く実感出来る。なんて素晴らしいんだろうか。思わず体の奥から何かがこみ上げてくるようだ。

雲一つない青い空に、眩しく照りつける太陽。悠々と生い茂る木々。まるで母親の田舎の実家に行った時のような懐かしさを感じさせられるような一面の田畑に、せつせと農作業をしている人の姿――

「おええええええええ……」

「全く……しつかりするのじゃ、大悟」

――そして、そんな綺麗な景色の下で盛大に吐く俺。

「秀吉い……あとどんくらいで目的地に着くんだけ？」

「おそらくは、あと二時間くらいじゃろう。じゃが大悟よ。ワシがあれば念を押しておったのに、どうして酔い止めを持ってこなかったのじゃ……」

秀吉が俺の背中をさすりながらため息をつく。そう、何を隠そうこの俺は非常に乗り物酔いしやすい体質で、自分で運転するバイクや自転車なんかは平気だが、それ以外は全部無理なんだ。自動車や電車はもちろん、飛行機や船なんかもアウト。今もそうだが、どうにもガタンゴトン揺れるものは体に合わず、こうして気分を悪くしちまうんだ。本来ならそういったモンに乗る前にはいつも酔い止めを飲むのが当たり前のことなんだが――

「まさか、酔い止めとヨーグ○ツトを間違えちまうとはな……おえええええええ」

「どうやったたら市販薬と菓子の間違えられるのじゃお主は……」

そうか？ 結構似てるから間違えそうなモンだと思つてたぜ。

畜生……やっぱり昨日の夜に四日分の二次元成分をため込もうとしてオールで溜め撮りアニメ消化とエロゲー攻略と執筆をしたのは間違いだつたか……ちゃんと寝とけば少しはマシだつたのだろうな。

「チクシヨウ……もう吐きつくして胃液しか出てこねえ……ていうか、よく同志はこんな状況で寝てられるなあ……」

「どうやら疲れ取るようじゃのう。色々調べ物しておったとか」

目の前では同志がコクコクと眠っている。おそらく俺たちの依頼を一晩かけて調査しておいてくれたのだろう。なら仕方がないな。

「無理に起こす必要はねえな」

「うむ」

さて、んじや俺は少しでも気を紛らわす為にこつそり持つてきたウォークマンで俺様厳選エロゲー主題歌メドレーでも聴きますかな、と思つてしていると、

「ねえ秀吉、大悟」

と、突然後ろの席に座つていた明久が声をかけてきた。

「なんだ、明久」

「今、こつちで心理テストを皆でやつてるんだけど、二人も混ざらない？」

「ほう、面白そうじゃのう。ならワシも混ぜてもらおうぞい」

「心理テストねえ……ま、暇つぶしくらいにはなんだろう」

俺たちは明久の誘いに乗り、そつちの席に秀吉と集まる。そこには明久、隣に雄二。その向かい側に島田と姫路が座つていた。

ただ、なんで島田は不機嫌そうな顔をしてんだ？ それに本が真ん中から引き裂かれてるんだが。

「それじゃ、第二問いくわよ」

島田が本を開く。

『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つあげて下さい』だつて。そう?」

「俺は5、6だな」↑雄二

「ワシは2、7じゃな」↑秀吉

「僕は1、4かな」↑明久

「私は3、9です」↑姫路

「俺ア8、10だぜ」↑俺

ちなみに理由はめるたんと妹のまめつこちゃんの年齢が10歳と8歳だから。

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもあなたがまわりに見せている顔を表します』だって。それぞれー」

「クールでシニカル」↓雄二

「落ち着いた常識人」↓秀吉

「死になさい」↓明久

「温厚で慎重」↓姫路

「豪胆で無鉄砲」↓俺

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「ねえ、僕だけ罵倒されてなかった？」

「温厚で慎重ですか」

「悪くねえ結果だな」

「それで、『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔を表します』だつて。それぞれー」

「公平で優しい人」↓雄二

「色香の強い人」↓秀吉

「惨たらしく死になさい」↓明久

「意志の強い人」↓姫路

「紳士的で友達思いな人」↓俺

「ほう。秀吉は色っぽいのか」

「姫路は意志が強いようじゃな」

「ねえ、僕の罵倒エスカレートしてなかった？」

「岡崎君は紳士的だそうですね」



「雄二が優しいってよ」

心理テストをネタにわいわいと盛り上がる会話。ふむ、こうやって皆で他愛のないことで盛り上がれるのも旅の楽しみの一つなのかもしれないな。

酔いも収まってきたし、何とか現地到着までは耐えられそうだなー

――

――五分後――

ポオン！ バタツ……

「……………（ピクピク）」

「「「明久アアアアア!!」」」

「あ、あれ？ 急にどうしたんですか、明久君？」

「俺たちは、再び目の前で儚い命が散っていく姿を目の当たりにした。

## 第三十八問 女子の裸になんぞ興味はない!

——明久視点——

桜の花もすつきり身を潜め、少し暑さを感じながらも夏と呼ぶにはまだ早いこの季節。僕らはこの卯月高原に学力強化合宿にやって来た。

数え切れない星と儂げな三日月が夜を彩るこの日に——

「アキ……抱いて……くれる……?」

「明久君、お願いです。抱いてください……」

僕は、少し大胆になったクラスメイトの少女たちから、言い迫られ——

「そんなの、僕には無理だよ……」

「やっぱり、どうしてもダメなの……?」

「……」

「明久君がダメなら、土屋君に抱いてもらおうしか……」

「それでもいいの……?」

「……ああ、僕はそれでも構わない……」

「だってー♪ 抱いてくれる、土屋? もう一枚!」

「………つ!? ………ーッ!! (ドンツ)」

大昔の拷問である、石抱き刑を受けていた。

「………浮気は許さない」

「俺たちは覗きなんかしてねえ………! (ミシミシ)」

「そんなことを考えるいけない脳みそはこれかしら?」

「だから誤解だつってんだらうがあ………! (ギチギチ)」

一体、どうしてこんなことになってしまったのだろうか。

事の発端は、今から少し前に遡るー

|  
|  
|

「……あ、あれ? ここは……」

気が付くと、僕は知らない部屋で寝かされていた。確か僕はあの時、姫路さんが作ってくれたお弁当を食べて……そこからの記憶が……

「明久、起きたか! 良かった……。電気ショックが効いたようだな……」  
「この旅館にAEDがあつて助かつたぜ……」

心底安心した表情でアイロンみたいな道具をしまう雄二と大悟。AEDつて……冗談だよな? 僕の命がそんな一か八かの状態になつていたなんて。

「ところで、ここは合宿所?」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取つて合宿所に作り変えたらしいぞ」

「つたくよお。そんな金があるならもうちつと別なところで使つてほしいぞ。無料の学食とか校内にアニメショップを作るとかよお」

作り変えたつてことは、召喚獣を喚び出せるようにしているとみて間違いないだろ

う。その為の文月学園だし。

「む。明久、無事じゃったか！ 良かったのう……。 お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めた時には、正直もうダメじゃと……」

部屋に入ってきた秀吉が胸を撫で下ろしていた。よく生きてるな僕。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ムツツリーニも含めた五人でこの部屋を使うのじゃ」

「そうなんだ。あれ？ ムツツリーニはどこに行ったの？ 覗き？ 盗撮？」

「友人に対してそんな台詞がサラツと出てくるのはどうかと思うのじゃが……」

ガチャツ

「……………ただいま」

噂をすればなんとやら。丁度いいタイミングでムツツリーニが部屋に帰ってきた。

「おかえりムツツリーニ」

「……………明久。無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

「……………情報も無駄にならずに済んだ」

「情報？ 昨日俺たちが頼んだ例のヤツか。随分早いな」

情報と聞いて雄二が反応した。ああ、僕の盗撮（メイド服激写）と雄二と大悟の盗聴

(プロポーズ録音)の犯人を捜してほしいっていうやつか。

「流石同志。仕事が速いぜ」

「……………手口や使用機器から、明久と雄二、同志の件は同一人物の犯行と断言できる」

「それで、その犯人は誰だったの?」

「……………(プルプル)」

尋ねると、ムツツリーニは申し訳なきように首を振った。そりやそうだよ。昨日の今日でそう簡単に犯人なんて見つかるわけがないよね。

「……………すまない」

「いや、そんな。協力してくれるだけでもー」

「……………『犯人は女生徒でお尻に火傷の痕がある』ということしかわからなかった」  
「君は一体何を調べたんだ」

普通の人は名前や顔を知っている相手でもお尻の火傷の有無なんて知らない。この男の調査方法が気になるところだ。

「……………昨日の内に校内に盗聴器を仕掛けておいた」

そう言つてムツツリーニが取り出したのは小型録音機だ。なるほど、これで学校内での怪しい生徒の行動が分かるというわけだな。

ーピーツ

《ど、どうですか岡崎君、土屋君。似合っていますか？ 少し肌の露出が多くて恥ずかしいですけど……》

《ビューティフォー!! さすがは姫路だ! やはり俺の目に狂いはなかったようだな!

これで夏の同人誌即売会の売り上げトップは俺たちが頂いたも同然よお!》

《………我が人生に、一片の悔いはなし………っ! (ブシヤアアアアツ)》

《じゃ、じゃあ、お約束通り……》

《任せとけ! 高解像度データで仕上げたナース服バージョンの明久イラストをー》

ーピーツ

「………間違えた」

「おいおい同志よ。顧客との守秘義務があるんだから気を付けてくれよな」

「………すまない、同志」

「待つて! 僕としてはそっちのほうが凄く気になるんだけど!」

一体この二人と姫路さんは何の会話をしていたんだろうか。僕の名前が出てきたよ



うな気もするし。そもそもなんで関係ないのに録音の必要があるんだろう。  
「……………こつちだ」

ーピーツ《ーーらっしやい》

改めてスイッチを押すと、内蔵されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響いた。

「あれ? 随分と音が悪いね」

「校内全てを網羅したというのなら仕方ないだろう。音質や精度にこだわる余裕がなかったんだろう」

「じゃあさっきの会話は?」

「……………プライベートに踏み込むのはよくない」

「あ、うん。ごめん」

答えになつてないような気がする。

《……………雄二のプロポーズを、もう一つお願い》

《アタシも、大悟のプロポーズを一つ》

対する二つの女子の声。こつちも声で人物は特定できないけど、この台詞から簡単に

割り出せる。

「しよ、翔子……………！ アイツ、もう動いていたのか……………！」

「優子の野郎……………！ 相変わらずこういうときだけ行動的になりやがって……………！」

霧島さんも木下さんもこんなやつらのどこがいいんだろう？

《毎度。二人共二度目だから安くするよ》

《……………値段はどうでもいいから、早く》

《あら、気が利いてるのね。じゃあお言葉に甘えようかしら》

《それじゃあ明日ーーと言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから引渡しは来週の日曜で》

《あら、残念ね》

《……………分かった。我慢する》

「あ、危ねえ……………。強化合宿があつて助かった……………！」

「なんとか首の皮が繋がったつてところか……………」

「タイムリミットが来週の日曜まで延びたね」

と言つても土日は殆ど行動できないだろうから、実質はあと四日だ。

「……………それで、こつちが犯人を特定するヒント」

《ーーでも、相変わらず凄い写真ですね。こんな写真を撮っているのがバレたら酷い目

にあうんじゃないですか?》

《ここだけの話、前に一度母親バレてね》

《大丈夫だったんですか?》

《文字通り知りにお灸を据えられたよ。全く、いつの時代の罰なんだか》

《それはまた……》

《おかげで未だに火傷の跡が残ってるよ。乙女に対して酷いと思わないかい?》

「……分かったのはこれだけ」

「なるほど。それでお尻に火傷の痕ってことか」

「今の会話を聞いても女子というのは間違いなさそうだな」

「口調は芝居がかかっていただけ女子というのは間違いなさそうだね」

音が悪いから心配だったけど、自分で乙女と言っているからには女子か秀吉のどちらかなのは間違いない。

「だがどうする? 尻に火傷の痕があるつつつてもどうやって調べんだ? 流石に女子

全員のスカートを捲って回ったとしても見つけられる保証はねえぞ」

「赤外線カメラでも火傷の痕なんざ映らねえだろうからなあ……」

隣では雄二も大悟も女子のお尻を見る方法を探していた。

「お主ら、さつきから何の話をしているのじゃ？」

そんな僕らを見て秀吉が首を傾げている。そっか。秀吉は事情を知らないんだっけ。

「秀吉、実はねー（以下略）」

簡単に僕らの事情を説明する。

「そうじゃったのか。それにしても、尻に火傷とは……」

秀吉も一緒に考え始める。すると、突然大悟がああ！と声を上げた。

「いい案が思いついたぜ！　女子が風呂に入ってる時に相棒に見てきてもらうってのはどうよ!？」

「そうか！　確かにそれなら安全で確実に調べることが出来るね!」

「お主ら。なぜにワシが女子風呂に入ることが前提になっておるのじゃ？」

大悟の割には中々にいい考えだ。これなら大丈夫だろう。

「大悟、明久。それは無理だ」

「雄二？　どうして無理なのさ」

「そうだ。何も問題はなからう？」

「いや、じゃからワシは男じゃと」

「しおりの3ページ目を見てみる」

雄二に言われた通りに大悟と強化合宿のしおりの3ページ目を見てみる。えっと、

く合宿所での入浴についてく

|           |      |     |     |     |        |
|-----------|------|-----|-----|-----|--------|
| ・男子ABCクラス | ：：20 | く00 | く21 | ：00 | 大浴場（男） |
| ・男子DEFクラス | ：：21 | く00 | く22 | ：00 | 大浴場（男） |
| ・女子ABCクラス | ：：20 | く00 | く21 | ：00 | 大浴場（女） |
| ・女子DEFクラス | ：：21 | く00 | く22 | ：00 | 大浴場（女） |
| ・Fクラス木下秀吉 | ：：20 | く00 | く21 | ：00 | 個室風呂？  |

「ちくしよおおおおー!!」

くそっ！ これじゃあ秀吉に見てきてもらおうことが出来ないじゃないか!

「そういうことだ」

「どうしてワシだけが個室風呂なのじゃ!？」

良い考えだと思つたのに、残念……。

「ま、普通に考えりゃあそうだよな……」

大悟の言葉に僕、雄二、ムツツリーニの三人がうんうんと唸る。仕方ない、別の方法をー

ードバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい!!」

突然、凄いい勢いで部屋の扉が開け放たれ、沢山の女子がぞろぞろと入ってきた。

「な、なにごとじや!?!」

「木下はこつちへ！ そつちのバカ四人は抵抗をやめなさい!」

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじや………?」

咄嗟に窓から脱出しようとしたら、先頭に立っていた美波に制された。流石美波、で  
きる………!

「全く、仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ?」

「こんな夜に奇襲かけてくるたあ、どういう見だこの野郎」

窓を閉めながら女子勢に向き合う雄二と大悟。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。あなたたちが犯人だつてことくらいすぐに分かるというのに」

そう高圧的な口調で言い放ったのはCクラスの小山さんだ。結構感情の起伏が激し

く、大悟からはヒステリー女って言われてる。

「犯人? 犯人ってなんのことさ?」

「コレのことよ」

小山さんが僕らの前に何かを突き付けてきた。

「……………CCDカメラと小型集音マイク」

「コレが女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

「え!? それって盗撮じゃないか! いったい誰がそんなことを」

「とぼけないで。あなたたち以外に誰がこんなことするっていうの?」

完全に僕らを犯人だというような態度で迫る小山さん。すると、秀吉が小山さんの前に出た。

「違う! ワシらはそんなことしておらん! 覗きや盗撮なんて真似はー」

「そうだよ! 僕らはそんな真似しない!」

「……………! (コクコク)」

秀吉の反論に合わせて僕とムツツリニが前に出る。

「そんな真似は?」

「そんな真似は……………真似は……………否定できん……………つ!」

「ええっ!? 信頼足りなくない!」

僕とムツツリーニが同じ扱いだという事実には少しだけ涙が出た。

「……おいおい、随分と好き勝手に言ってくれるじゃあねえか」

すると、今までずっと黙っていた大悟が口を開き、僕たちの前に歩み出た。

「つ……なによ岡崎。文句でもあるの？」

「そりゃああるに決まってるだろうが。さつきから聞いてりやあなんだ？　大した証拠もねえ癖に犯人だとか決めつけやがって、いい迷惑だってるんだよこのヒステリー女。あんま俺たちを舐めてんじやねえぞ」

「な、なんですつて……！」

大悟と小山さんが互いを睨みそう言い合う。だが大悟の言い分は最もだ。

確かに彼女たちは証拠物品であるカメラと小型マイクを持っていた。でもそれはあくまで『覗かれたという事実の証拠』を示しているだけで、それが僕らが女子風呂を覗こうとしたということには結びつかない。だからおそらく小山さんたちは、普段の僕らの行いや態度から、犯人はコイツ等だという風に決めつけているんだろう。

流石大悟だ。そこをちゃんと指摘できるなんて、いつもは気持ち悪いオタク野郎だけど、やっぱり兄貴と呼ばれるだけのことはあ——



「そもそも！ 俺は三次元の女の裸になんぞ興味がない！ ましてや貴様らのような中途半端に発達した体など、覗いたところで俺にとつては何の意味も価値もない！ そんなお前たちに教えてやろう！ この世で最もその姿を拝む価値があるもの……それは二次元の女の子の生着替えシーンなんだ！ そこには三次元ごときでは決して味わうことの出来ない背徳感と幸福感、そして現実では決して実現が不可能な妖艶なボディから醸し出されるとめどなき溢れるエロスがある！ 画面の向こうに広がる光景は、まさに現代の科学や技術を以てしても踏み込むことの出来ない理想郷アヴァロンよお！ 例えるなら！ 血のつながっていないロリ巨乳な義理の妹の脱衣シーンをうっかり目撃してしまい『は、はあ!? なに勝手に入ってきてんのよこのスケベ!』と口では言いながらも心のどこかではお兄ちゃんとなんな展開を待ち望んでいたかのような誘っている仕草を見せられたらもう辛抱たま」

「大悟、分かったからそれ以上はやめとけ。女どもが冷え切った目をしている」

ヤバいと思ったのか、雄二が止めに入った。ーうん。やっぱりコイツは頭がおかしい。いくら冤罪を晴らすためとはいえ、女性に対してここまで自分の性癖を自慢げに語れるなんて並大抵のイカれ具合じゃない。しかもに隣ではムツツリー二が鼻血を噴射

して倒れているし。

「……もうコイツは覗き云々以前に社会から抹消した方がいいんじゃないかしら」

小山さんの言葉に後ろの女子たちも頷く。……どうしよう、否定ができない。現に女子小学生が良いって公言するようなヤツだし。

「まさか、本当に明久君たちがこんな事をしていたなんて……」

殺気立つ女子と大悟を生ゴミのような目で見る女子の中から一人悲しそうな声をあげたのは姫路さんだった。そうやって言われると信頼を裏切ったみたいで辛い。でも、本当に身に覚えがないんだ！

「嘘なら？と言ってください。明久君……」

「アキ……。信じていたのに、どうしてこんなことを……」

「姫路さん……美波……、じゃあ、どうして……」

——二人は拷問道具を持ってきているんだろうか。信頼のかけらも感じられないだけだ。

「姫路さん、違うんだ！ 本当に僕は——」

「もう怒りました！ よりによってお夕飯を欲張って食べちゃった時に覗きをしようだ

なんて……い、いつもはもう少しその、スリムなんですからねっ!!」

「ええっ!? 怒るところはそこなの!」

「う、ウチだつていつもはもう少し胸が大きいんだからね!」

「いや! それはウソ」

「皆、やつておしまい」

素早い動きで女子たちに周りを取り囲まれた。し、しまった! つい咄嗟に本音が! そのまま抵抗出来ずに石畳の上に座らされる僕とムツツリーニ。これは大ピンチだ。こんな時に頼りになるのは――

『はっ! 馬鹿め! たかが女子が大勢いたところで烏合の衆よ! この俺を止められると思つたら大間違ふべらあつ!』

『大悟おく? 覗きつてどういふことかしら? どうしてアタシ以外の女を見るのかしら?』

『ゆ、優子! 違う! これは罠だ! 誰かが俺を陥れるために仕組んだ罠であがああああああああつ!!』

『……浮気は許さない』

『翔子待て! 誤解だ! 落ち着ぎやあああああつ!』

ダメだ！ 向こうでは既に刑が執行されている！

「さて。真実を認めるまでたつぷりと可愛がってあげるからね？」

美波のS氣質が全開だ。これはご機嫌をとっておかないと命に関わる！ ウソは嫌だけど、ここはお世辞でも言つてごまかさないと！

「あのね。僕、今まで美波ほどの巨乳を見たことがぎやあああああつ！」

「まずは一枚目ね」

「明久君。まさか、美波ちゃんの胸、見たんですか………？」

「あははっ。やだなあ。優しい姫路さんはそんな重そうな物を僕の上に載せたりなんてふぬおおおっ!？」

「質問にはきちんと答えてくださいいね？」

最近、彼女の笑顔は綺麗なだけじゃなくなってきた気がする。

――

拷問に遭う（雄二と大悟は処刑レベル）こと三十分。僕らは証拠不十分という形で解

放された。

「なんか、今日はいつもより更に生命の危機が多いよ……」

「なあ秀吉。俺の顔ダイジヨブか？ 耳とか鼻とか取れてねえよな？」

「安心せい、辛うじて無事じゃ。しかし酷い濡れ衣じゃったのう……。何故だかワシは被害者扱いじゃったのも解せぬが」

「……見つかるとなへマはしないのに」

ムツツリーニ。その返事はギリギリだと思ふ。あと大悟は木下さんに顔面が見えなくなるくらいまでポコポコに殴られていたようだ。

「……上等じゃねえか」

「え？ 雄二。どうしたの？」

ずっと黙っていた雄二が、何かを決意したかのようにその場に立ち上がった。

「どうせここまでされたんだ。本当にやってやろうじゃねえか」

「本当って……まさか雄二」

「ああ。そのまさかだ。あつちがそう来るのなら、本当に覗いてやろうじゃねえか！」

いきなりとんでもないことを言い出す雄二。すると、隣にいた大悟も同じように立ち上がった。

「雄二も同じことを考えていやがったか！ あそこまでポコポコにされたんだ！ この

まま泣き寝入りなんざ俺あしたくねえ！ だったらお望み通りにしてやらあ！」  
「いいぞ大悟！ それでこそ兄貴だ！」

雄二と大悟（顔面痣まみれ）が互いに頷く。コイツらは何を言ってるんだらう。こんな警戒されているタイミングで覗きに行くなんて、頭が悪いにも程がある。

「二人共。そんなに霧島さんと木下さんの裸が見たいなら、個人的にお願いすれば——」  
「バ、バカを言うな！ 翔子の裸になんか興味があるか！」

「俺は二次元の女の子の裸が良いって言ってるだろうが！」

胸を張って言おう。僕は両方とも見たい。

「ふむ。もしや、例の尻に火傷のある犯人探しかの？」

「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思ってる遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は不要だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」

「……………さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「なんじゃと？ それは本当かの、ムツツリーニ」

「……………間違いない」

「流石同志だ。あの短期間でそこまで見抜いたあよ」

四人が腕を組んで頷き合っている。えつと——

「つまり、どういふこと?」

「いいか? 俺と大悟。そしてお前を脅している犯人は同じで、さっきの覗き犯のカメラとマイクがその犯人と同じ物だった。そして、覗き犯は火傷の痕があるということだから——」

「ああ、なるほど! その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ!」

「これでもう迷う余地はない。覗きなんて褒められたことじゃないけど、これも僕と雄二、そして大悟の幸せな未来の為!」

「そうとなれば、すぐにでも向かわねば風呂の時間が終わってしまうぞい」

「……………(コクコク)」

「え? 秀吉とムツツリーニも協力してくれるの?」

「うむ。友人と相棒の危機なのじゃ。当然じゃろう」

「……………(コクコク)」

なんて良い友達だろう。苦勞も汚名も顧みずに動いてくれるなんて。

「それに……………雄二と大悟の台詞には責任があるのう……………」

ああ、あの時の召喚大会のことか。あれは僕と雄二が仕組んだことだから別に気に病む必要はないのに。

「……………女子風呂の場所なら確認済み」

「同志、それで現在の状況は？」

「……………後半組の入浴時間、残り四十分」

「時間がないな、行くぞお前ら！」

「オツケー！」

「おうよ！」

「了解じゃ！」

「……………（コクツ）」

そして、僕たちは部屋を出て、目的地である女子風呂へと向かい始めた。

こうして、僕たちの四日間に渡る戦いの火蓋が切って落とされたのであった。



「………フン、いい気味ね。ま、アイツらがただで終わるとは思えないけど、私としては、アイツに仕返しが出来ればそれでいいわ………」

## 第三十九問 女子風呂へ突撃せよ！ 第一夜目

——大悟視点——

「いいかお前ら、タイミングは女子共が脱衣所に集まっている時だ！ そこに突入次第、火傷の痕がある尻を見つけ出せ！」

「「了解！」」

改めて目的を確認し、廊下を走る俺、雄二、明久、秀吉、同志の五人。幸いにも男女ともに入浴時間であった為、人通りは皆無だ。

「そんで、女子風呂っていうのはどこにあるんだ？」

「……………この階段を降りてすぐに宴会用の客間がある。そこを抜けてしばらく廊下を進めば突き当りに女子風呂」

「なるほど。それじゃあ外からの覗きは無理なことだね」

「そういうことだ。時間が無い。一気に突っ込むぞ」

雄二の宣言に俺たちは五人で頷き、丁度目の前に見えた下へと続く階段を降り始め

る。

そしてあつという間に階段を下り切り、女子風呂へと続く道がある客間へ一気に駆け  
る。

「君たち、止まりなさい!」

すると、前方から何者かの制する声が聞こえてきた。その声の主を見ると、そこ  
には見慣れた男性教師が一人立っていた。

「チツ……教師か。てことはもう俺たちの件が向こうに広まつてるってことかよ」

「あれは……化学の布施先生!」

「やれやれ……更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒してみたら、まさか本  
当に覗き犯がやってくるとは思いませんでした」

明久の言う通り、アレは俺たちFクラスの化学担当教師の布施だ。チツ……厄介だ  
な。女子だけならまだしも、教師陣まで敵に回っているということは、俺たちにとつて  
不利以外の何者でもないからだ。おそらくこのまま捕まったら鉄人に引き渡されて教  
育的指導という名の鉄拳制裁を受けることになるだろう。だったらー

「雄二! ……こうなりやあ!」

「ああ！ 全員でアイツをぶちのめして進むぞ！」

「待ちなさい坂本君！ 私は一応教師ですよ！」

「んなもん関係ねえ！ 心配すんな！ 痛くねえようにすぐ済ますからよ！」

「岡崎君!? 全然安心ができませんのですが!?!」

「というワケで明久！ 先陣をきれ！」

「了解！ 一撃でケリをつける！」

「吉井君も了解じゃないでしょう!?!」

狼狽える布施先生。だが悪いな。これは俺たちの濡れ衣の返上と自由を勝ち取る為の戦いだ！ そのためなら例え相手が教師だろうと力づくで突破するのみ！

あといつつもよくわからん記号やら計算式ばっかテストに出しやがって！ 全然解けねえんだよ！ だからついでにその溜まりに溜まった鬱憤と怒りをここでぶつけてやるぜ!!

「というワケで布施！ くだばれえええつ!!」

「この前の補修の恨みをくらええつ！」

「お主ら、思いつきり私心で行動しておらんか!?!」

秀吉が何か言っているが気にしない。くらえ！ かつて雄二をはじめ何人もの不良達を再起不能にしてきた必殺の一撃、『恋のラブリー☆顔面砕き』をおおおおつ!!

「死ねええええ!!」

「ひいひいひいっ! さ、試獣<sup>サモモン</sup>召喚っ!」

すると、布施の喚び声と共に、突如現れた存在に攻撃を阻まれた。

「あれは……試験召喚獣!」

「マジかよ……教師も持ってたのか……」

布施の前にいたのは、普段俺たちが戦争で使役しているのと同じ試験召喚獣だった。布施が化学を担当科目にしているのが反映されているのか、白い白衣にフラスコのような武器を持っている。

だが、注目すべき点はそこではない。先ほど俺と明久の攻撃を防いだのがあの召喚獣に間違いない。ということは、俺たち生徒の召喚獣とは違い、物体に触れる事が出来る。つまり布施……いや、教師陣の召喚獣は《観察処分者》である明久と同じく物理干渉能力が備わっているということなのだ。

「くっ……明久と同じ能力持ちか……面倒だな」

「ふう、間に合いましたか……。まあ、吉井君が観察処分者に認定されるまでは雑用を自分たちでやっていましたからね。物に触れる方が都合が良いのですよ。こういった若者の暴走を止めなければいけない場合もありますし」

確かに、召喚獣は例え明久レベルのバカが喚び出してもその力は生身の人間の何倍も

の力がある。そりゃあ教師からしたら雑用を手伝わせるにはもってこいな存在だよな。「けど、卑怯じゃないですか！ 自分たちが作ったテストで召喚獣を喚び出したら強いに決まってますよね!？」

「そうだ！ そんなのチーターだ！ ティーチャーのチーターでチーチャーだ！」  
何言ってるんだ俺。

「いや、正式な勝負という訳ではないので卑怯も何もないですし、それ以前に自分たちが一方的に暴力を振るおうとしたことを棚に上げていませんか……?？」

「そうやっていつも詭弁で僕らを騙そうとするなんて、大人はなんて卑怯なんだ！」

「それに、教師も他の学年の先生が作ったテストを受けているのですよ?？」

「え？ そうなの?？」

話によると、学園長の方針曰く『教える側にもそれに相応しい学力が必要だ』ということ。生徒と同じように教師にもテストを受ける義務があるらしい。あのババア、傲慢で無礼な癖にそういうところははっきりしてんだな。

「さて、それでは大人しくしてもらえますか?？」

「チツ……どうする雄二?？」

「……………女子の入浴時間終了まで、もうすぐ」

「こうなりゃあ徹底抗戦だ！ 布施を召喚獣ごと叩き潰すぞ！」

そうか。確かに布施の召喚獣は脅威だが、当の本人を潰しちまえば問題は無いし、ルールにも『召喚者に危害を加えてはいけない』なんてもんはないからな。

まあ多分後で死ぬほど制裁をくらうだろうが、そんなことを考えている暇はない!

「分かったぜ雄二! ここは任せたぞ!」

「うん! 行こう大悟!」

「待てやコラ。一応聞いておくが、お前たちの化学の点数はなんだ?」

先を急ごうとする俺たちを止める雄二。ふつ……さては俺たちが酷い点数を取ったんじゃないかと危惧しているな? 全く、舐められたもんだぜ。

ええつと、最後に受けた化学のテストは……

「あと一点で二桁だったと思う」

「もうちよつとで片手分の点数が取れたぜ」

「先に行つてろ生ゴミと粗大ゴミ」

何故だつ!? 今までの俺の自己最高点数だというのに! リトマス紙が青くなるってことは分かったんだぞ!

「雄二、教師相手に一人では辛かろう。ワシも手伝おう」

「いや、ここは俺一人で何とかする。目的は一人でも多く女子風呂に辿り着くことだか

らな。お前も先に行け」

「じゃが、雄二ー」

「心配すんな。すぐに追いついてみせるさ。試獣召喚っ！」

そう言つて、雄二が召喚を開始する。すると床に紋様が浮かび上がり、召喚者の姿をデフォルメした召喚獣が現れた。

「むう……雄二がそういうのであれば従おう。大悟、明久、ムツツリーニ。先を急ごうぞー」

「うん。ここは雄二に任せて先にーって、ムツツリーニがもういない!？」

見ると、既に同志は先に走り出していた。流石の行動力だ。

「俺たちも後に続くぞー！」

「うん！」

「了解じゃー！」

同志を追いかけて俺たちも走り始める。

「こ、こらー！ 三人とも待ちなさい！」

「布施セン。悪いがそいつらは追わせねえ。しばらく俺と遊んでもらうぞー」

そんな雄二のやりとりを背中で聞きながら、俺たちは更に先に進む。よし、もうすぐ



行けば大広間だ。

と、思っていると、

「そこで止まれ」

その行く手には更に別の刺客が立ち塞がっていた。あれは確か……保健体育の大島!

「……………大島先生」

同志が苦々しく呻く。それもそのはず、大島は保健体育担当ということで、同志にとっては師匠的存在だからだ。

だが、こっちの同志は全点数のステータスを保健体育に全振りしている男だ。その実力は向こうも分かっているだろう。そう簡単にやられはしない筈だ。

「ムツツリーニ」

「……………(コクリ)」

明久に真剣な表情で返し、大島の前に歩み出た同志。

「……………大島先生」

「なんだ」

「……………これは覗きじゃない」

「それなら何だと言うんだ？」

同志の言葉に話を聞く態度を見せる大島。ほう、話し合いに持ち込むつもりか。さて、同志の説得力がどこまで通用するか……………

「……………これはー」

「……………」

「ー保健体育の実習」

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>だ」

話し合い決裂。実に口惜しく残念だ。

「……………試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>」

同志が不満そうに召喚獣を喚び出す。多分あれで説得できると思ってたんだろな。

「仕方がない。大悟、明久。ここはムツツリー二に任せて先を急ぐのじゃー」

「そうだね！ それじゃあむムツツリー二！ 先生を片づけたらまた会おう！」

「お前の力を信じて背中を預けるぜ！ 同志！」

同志にそう言い残し、俺たちは先を急ぐ。

「片付ける、か……………いいかお前たち。教師をー舐めるなよ」

体育教師 大島武 663点

保健体育 VS

Fクラス 土屋康太 424点

「……マジかよ」

走りながら、後ろで表示された大島の点数を見て言葉を漏らす。

まさか、あの保健体育の貴公子こと同志を大きく上回る点数を持っているとは……  
伊達に教師はやってないってことか。

「あんな点数が取れるなんて……」

「さすがは人にものを教える立場の人間じゃ。一筋縄ではいかぬのう」

隣の二人も大島の点数を見て思わずそう呟く。こうなつてくると、おそらくこの先にも何人かの教師が待ち構えていることだろう。だが、だからといってこのまま引き下がるわけにはいかない。

すると、目の前に通過地点である大広間の扉が見えた。

「ついた! あそこを突破すれば女子風呂にたどり着くよ!」

「よっしゃあ! もうすぐで目的達成だ! 野郎ども、ふんどし締め直せよ!」

「おうっ!!」

力強く頷き、目の前の扉をぶち破らんぐらいの勢いで強引に開き、中へと突入する。そこは床が高級そうな絨毯で敷き詰められ、上には小洒落たシャンデリアがあり、奥には小さなステージが見える。そして大人数で使う用の部屋と言うだけあり、天井高や奥行きが上の階で一番広い食堂の倍はありそうな感じだ。

本来なら宴会用にテーブルや椅子が沢山置いてあるんだろうが、この部屋は今回は使わないのか、今はもぬけの殻状態になつてようだ。

まあいい。俺たちの目的はこの先だ。こんなとことつととー

「待って! その三人っ!」

すると、三度俺たちの道……女子風呂へと繋がる廊下の扉の前に立ち塞がる存在を視認した。先ほどの布施や大島に比べると声質が全然高く、トーンも高い。まさか……この声は!

「岡崎君、吉井君、木下君! 勝手な真似はそこまでだよっ!」

「くっ、やはりまだ刺客がおったか……!」

「大悟、あれは……!」

「クツ………! 落合の姐御………!」

俺たちの前で立ち塞がるのは、二学年の社会科目担当の女教師、落合夏音先生だった。そして何気に、俺と姫路の一年時の担任の先生であつたりもする。

「落合の姐御! そこを退いてくれ! 俺たちには時間がねえんだ!」

「岡崎君、いい加減にその姐御つて呼び方はやめて先生つて言いなさい! それから君たちが何をしていたかも知つてるからね! ここを通すわけにはいかないよ!」

そう言つてその小柄な体で扉に陣取る姐御。

彼女は文月学園の教師陣の中で最も最年少であり、まだ教師という経験が浅いにも関わらず、その分かりやすい授業内容と本人の朗らかで優しい性格は学年問わず定評があり、それに加えて姫路や優子、秀吉に匹敵するくらいの愛くるしい童顔とスタイルを持つているため、男子からは絶大な人気を誇るとともに、ダイゴブックスが行つた『第一回コスプレイヤー王決定戦』では審査員(俺、明久、同志)特別賞を受賞。『彼女にしたいランキング』では何故か教師なのにランクインを果たした猛者だ。

ちなみに何度か俺と同志で『靴を舐めるのもう一回コスプレしてください』つて土下座したけど未だに断られ続けている。

「それに……女の子の裸を覗こうだなんて……、岡崎君たちも年頃の男の子だからわからなくはないけど、それは犯罪なんだからねっ! 見られた女の子たちの気持ちも

考えないと駄目だよっ！」

「そんなのは分かってる！　だが姐御！　俺たちは別に女子の裸が見たくてこんなことしてるワケじゃねえんだ！」

「えっ？　じゃあ、何のためにやってるの？」

キョトンとした表情で姐御が動きを止めた。

そうだ、俺たちの目的はあくまでも真犯人探し。そしてその犯人がたまたま女子で尻に火傷の痕がある人だったというだけなのだ。それに俺はさつきも言ったが三次元の女の裸なんぞ眼中にない（但し葉月ちゃんをはじめとした女子小学生から中学生上がりたては例外）。だからここは真実を隠しつつ、姐御に納得してもらえるように言葉を選ぼう。

「いいか姐御。俺たちはー」

「うん」

一呼吸置き、告げた。

「ただ……女子生徒のケツを確認しに行くだけなんだ!!」

「駄目に決まってるでしょ!？」

僅か一秒足らずで説得終了。馬鹿な、完璧な発言だったはずなのに。

「大悟よ……それでは更に誤解を招いてしまうぞい……」

「え? 俺なんか変なこと言ったか?」

「むしろあれがまともな返しだと思つてたのかい、大悟?」

そう言つて二人に揃つてため息をつかれる。おい、なんだそのバカを見るような目は、実に解せない。

「そ……そんなの、不埒だよつ! 破廉恥だよつ!! よりにもよつて年頃の女の子たちの……その……お尻を見ようだなんて、絶対許さないからね!」

顔を紅潮させ、アワアワしながら姐御が叫ぶ。あの程度で破廉恥とかつて取り乱すとか、どれだけウブなんだあの人は。

だが、これで話し合いの余地は無くなった。ならば残された手段は一つだ。

「……姐御、本当に退かないんだな?」

「当然だよ! 生徒を守るのが教師の役目だからね、何があつても退くつもりはないよ」

「そうか……ならー」

「アンタを倒して、力づくでも通らせて貰うぞ! 試獣召喚!」

力強く言い放ち、俺は召喚獣を喚び出す。すると俺の足元に魔法陣が浮かび上がり、俺そっくりの召喚獣が現れた。Aクラス戦の時と同じく、和装束に巨大な金棒、右腕には金の腕輪装備状態だ。

「大悟よ、流石に相手はあの落合教諭じゃ。雄二と同じようにはいかぬ。じゃからワシも助太刀させて貰うぞ」

「いや、ここは俺一人で何とかするぜ。だからお前は明久とー」

「試獣召喚じゃー！」

俺が言い終わる前に、秀吉は自らの召喚獣を喚び出してしまった。これでもう逃げ出すことは不可能になった。

「なっ！ 秀吉、お前……」

「大悟よ、雄二が言っていたじゃろう？ 目的は一人でも多く女子風呂へとたどり着くことじゃと。ならばこうすることが一番の最善の策じゃ。それにお主とワシが組めば、どんな敵にも負けはせん！」

「秀吉………はっ！ 随分と言うようになったじゃねえかよ！ ならせいぜい足引つ張んねえよう気をつけろよな、相棒！」

「勿論じゃ、相棒！ 明久、ここはワシらに任せて先を急ぐのじゃー！」



そして、俺と明久は改めて姐御に向き直る。秀吉の発言は多少フラグっぽいけど、流石に雄二みたいなことはないよな。

「分かった。じゃあね二人共! 先にゴール地点で待っているから!」

「そう言い残して、明久は先に扉へと再び走り始める

「あつ! 待ちなさい吉井くーきやつ!」

「悪いな姐御。そいつは追わせねえぞ!」

止めようとした姐御を、召喚獣に金棒をぶん投げさせることで動きを防ぐ。その隙に明久は扉を開け、先へと急いでいった。

「さ、諦めて俺たちの相手をしてもらおうか、姐御!」

「済まぬがこれも友の汚名を晴らすためじゃ。覚悟してもらおうぞい!」

召喚獣に戦闘の構えを取らせる。姉御は社会科目全般の担当だから勝負科目は日本史、世界史、地理、現代社会のいずれかだ。召喚獣を用いるのはAクラス戦以来で少しブランクがあるが、そんなのは戦っていれば自然と思いつける。

それに前回のテストはそこそこ自信があるし、そう簡単には負けないはずだ!

「むう………あんまり暴力的な解決は嫌だけど、これも教師の役目! こつちだつて負けないよ! 試獣召喚っ!」

戦う覚悟を決めたらしく、姐御も同じように召喚獣を展開する。

「あれが、姐御の召喚獣か……」

その姿は、紅と白で彩られた着物に同色の羽織を身に纏い、髪は簪のようなもので綺麗に整えられていて、腰には武器であろう日本刀が提げられている。

俺や秀吉の召喚獣同様『和』がモチーフのようだ。

「まるで花魁のようじゃのう……随分と華やかな出で立ちじゃ」

「そうだな。だがんなこたあ関係ねえ。相手がどんな奴だろうと、真正面からぶちのめすだけだ！ 行くぞっ！」

俺の召喚獣が金棒を振り上げ、敵に目掛けて走り出す。それに続く秀吉の召喚獣。

流石に明久や同志ほどのスピードは出せないが、こっちにはその欠点を補えるだけのパワーと奥の手である『龍化』がある。見たところ姐御の召喚獣はそれほど攻撃力にステータスを振っているわけではなさそうなので、上手くいけばごり押しでどうにかなる可能性がある！ そこに加えての俺の得意科目であり、秀吉がサポートについてくれる。いくら担当教師の姐御でも、こっちの勝算は十分にあるぞ……！！

「……岡崎君、木下君。一つだけ教えてあげるねー」

姐御はゆつくりと俺たちの召喚獣を見下ろして、自分の召喚獣に命令した。すると、

スツと敵が腰の刀の鞘に手をかけ、抜刀の構えを見せる。相手の間合いや力量が不明な以上、まずは一発目を防ぎつつ敵の攻撃の威力と速度、射程距離を見極めてからその隙にカウンターを叩き込んでやる!

その為、俺は振り上げた金棒を戻し、目の前で構え直して防御態勢を取る。さあ来やがれ、どんな攻撃だろうと受け止めてー

「ー教師っていうのは、君たちが思っているほど甘い存在じゃないんだよ?」

ー刹那、姐御の召喚獣が姿を消した。

「……………あ?」

呆気にと取られていると、再び敵の姿が見えた。だが相手は元の場所ではなく、何故か俺の召喚獣の射程距離外にいた。

「なんだ……………何が起きー」

ズバズバズバアアアーン!

その瞬間――俺の召喚獣は全身を派手に切り刻まれ、血飛沫をまき散らしながらその場に倒れた。

「なにいいいいっ!?!」

あまりの出来事に、俺は思わず声を上げて驚愕する。馬鹿な……いつの間にか攻撃を食らっていただとお!?

「そんな……あの大王がこんな一瞬の内に……!?!」

社会教師 落合夏音 885点

世界史 VS

Fクラス 岡崎大悟 672点 ↓ 461点

&

木下秀吉 95点

遅れて召喚獣の強さを示す点数が表示される。向こうの点数は明らかに俺たちを大

幅に上回っていた。

「オイオイ……そんなのアリかよ……」

「あんな点数……見たことがないぞい……」

マズイ。これは完全に想定外だ。いくら担当科目とは言え、まさか姐御がこれほどまでに社会科学目が得意だったとは思ってもいなかった。というか800点越えて……もうさっきの大島の点数が可愛く見えてしまう。考えるのも馬鹿らしい。

「教師だもの。これぐらい出来ないと、生徒の子たちに示しがつかないでしょっ!」

そして、再び刀を構えて向かってくる姐御の召喚獣。その速さは驚くべきことに同志に匹敵するほどだ。パワー重視の俺の召喚獣じゃああの斬撃は防ぎきれないだろう。

「チツ……そういうことならこっちも出し惜しみはしねえ!」

なので、俺は奥の手を使うことを決意した。本来なら使う予定は無かったが、このまま何もせずに負けるぐらいなら、多少の反動くらいなんてことはない!

「いくぞ! 変しー!」

「させないよっ!!」

すると、姐御の召喚獣が物凄い速さで俺の召喚獣の懐に入り込む。

そのまま刀を振り上げて、召喚獣の腕輪が装着されている方の腕を肩から一刀両断してしまおう。

「っ!?! しまった!」

「君の能力は知ってるよ! だからそう簡単には使わせないっ!」

腕を切り落とされたことで、腕輪の能力は封じられてしまう。しかもその影響で金棒を支えきれなくなり、右腕と共に吹っ飛ばされてしまうというアクシデントまで発生した。

こうなってしまったら、最早こっちに攻撃手段は残されていない。つまりー詰みである。

「……………相棒、すまねえ」

「大悟!」

「ごめんね岡崎君! けどこれで…………とどめっ!!」

そして、がら空きになった俺の召喚獣の胸元に、

グサツ………！

銀色の刃が、深く突き刺さった。

Fクラス            岡崎大悟            D E A D

——

——明久視点——

大悟と秀吉に背中を預け、僕はようやくやく女子風呂の前まで辿り着いた。だがそこには

………

「吉井、どうして俺がお前の召喚許可を取り消さないかわかるか？」

最後の関門であろう存在——鉄人こと西村先生が待ち構えていたのだった。

「そ、そんな……！　生身で召喚獣と張り合うなんて……！」

「いやはや。お前が観察処分者で良かった。召喚獣を殴るだけならば——体罰にはならんからなあっ！」

「ええっ!?　今まで一度も体罰なんか気にしたことなんて——」

「歯あ食い縛れえっ！」

「ぐっぶあっ!？」

瞬間、一息で拳が五度叩き込まれる。な、なんてデタラメな攻撃だろう……。生身で召喚獣をボコボコにするだけでもおかしいのに、痛みのフィードバックだけで胃液が込み上げてきた……。

「まあ、男らしく正面から堂々と現れた気概に免じて、停学は勘弁してやろう。心優しい西村先生が相手で良かったな」

バキバキと関節を鳴らしながら召喚獣に迫る鉄人。

良くない。全然良くない。心優しい先生ならこの時点で許してくれるはずだ。

「なに。俺も鬼ではない。きつちり指導を終えたら解放してやる。——そっちの四人も



な」

「へ?」

鉄人の視線を追うと、その先には捕縛された雄二・秀吉・大悟・ムツツリーニの四人がいた。嘘だろ……あの大悟が負けたっていいのか!?

「さて、まずは英語で反省文でも書いてもらおうか。文法や単語を間違えていたら何度でもやり直しだ! 終わった者から部屋のシャワーを浴びて寝ても良し!」

こうして、強化合宿の一日目は廊下で正座しながら英語の反省文を書かされるという醜態を晒して終わった。

## 第四十問 推しの為なら死ねる!!

——side 明久

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

「あの、優子さん？ 腕の関節が外れそうなのでその手を放してくれませんか？」

「何言ってるの、ダメよ？ 暫くはずつとアタシと一緒にだからね♪」

強化合宿二日目。今日の予定はFクラスとの合同合宿となっていた。

学習内容は基本的に自由であり、殆ど自習のようなものだ。その為机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？ 授業はやらないのかな？」

「授業？ そんなもんやるわけないだろ」

そんな僕の一言を聞き付けて、雄二が霧島さんを置いて隣にやって来た。

「やらない? どうしてさ?」

「明久。てめエはAクラスと同じ授業受けて中身が理解出来んのか?」

斜め前の席で大悟がそう僕に告げる。

「むっ。失礼な。大悟にはそうかもしれないけど、僕にとってはAクラスもFクラスも大差はないよ」

「ほう。それは凄いのう」

「——どっちも理解出来ないからね」

「……色んな意味で凄いのう」

隣にいた秀吉が微妙な表情を見せる。あれ? 僕変なこと言ったかな?

「……この合宿の趣旨は、モチベーションの向上だから」

「じゃなきや、Fクラスの人たちと同じ場所になんかないものね」

「え? どういうこと?」

「翔子、木下姉、それだけじゃ明久にはわからんだろ。つまり、AクラスはFクラスを見て『ああはなるまい』と、FクラスはAクラスを見て『ああなりたい』と考える。そう言ったメンタル面の強化が目的だから、授業はさして問題ではないということだ」

「ほー、そういうことだったんか。だがそれ、Aクラスはともかく、Fクラスには効果があ  
あるのか?」

「……見た感じ、その可能性は薄いわね」

霧島さんの言葉の続きを雄二が説明してくれる。やっぱり息もあつてるし、この二人は（外見を除けば）お似合いだなと思う。ちなみにその隣のカップルは色んな意味でバイオレンス（主に大悟の身が）だ。

僕は席を外した方がいいかな、などと考えていると、

「あ、代表と優子ここにいたんだ。それならボクもここにしようかな？」

そこに聞き慣れない声が聞こえてきた。いそいそと僕の正面の席に勉強道具を広げている彼女は、確か――

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり」

「あ、貴女様は我が愛しの嫁の柿崎みるくたそ!!? なぜ青色スプラッシュサマーの世界からここに……ハッ！ まさか画面の向こうからわざわざ僕に会いに来てくれたのかッ!!? つまり相思相愛!!? ということなら話は早い!! 僕も会いたかったよマイニード嫁ええええげぼるおっ!!」

「だ〜い〜ご〜? またそうやって他の女に色目を……オシオキが必要かしら？」

「推しのためなら死ぬる!! どんと来ぎやあああああつ!!?」

「あははっ、岡崎君は相変わらずだね。でもボクはそのみるくたそとかいう人じゃない

かな」

木下さんによる虐殺行為を目前にしてもなお、ニツと歯を見せて笑う工藤さん。ボーイッシュな雰囲気と相まって、その仕草はとても爽やかに見えた。

反対にその隣の木下さんは、そのどす黒いオーラと制服に付いた返り血も相まって、その仕草はとても狂人的に見えた。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。趣味は水泳と音楽鑑賞で「みるくたそと同じだど?!」 やっぱり貴女はみるくぎやあああああつ!」

「……大悟のバカ。顎骨へし折ってやるんだからつ」、スリーサイズは上から78・56・79、特技はパンチラで好きな食べ物シユークリームだよ」

なんだ!? 大悟の戯言と何かの骨が砕けるような音はどうでもいいけど、最後の方に魅惑的な台詞が混ざったぞ!?

「ん? どうしたの吉井君?」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その……」

「あ、さては疑ってるね? なんなら、ここで披露してみせよつか?」

工藤さんがスカートの裾を摘まんでそう言う。クツ、女の子からこんな誘惑的な台詞を受けたら、男として聞き逃すわけには……、

「……待つんだ。そんなことをする必要はないぜ」

「え？」

突然大悟が立ち上がり、そうはつきりと工藤さんに言った。顔面アンパ○マンみたいに腫れあがってるけど。

「みるくた——いや、工藤。いくらお遊びとはいえ、そのような不埒な行為を人前で晒すのは些か倫理観に欠けるな。そういつた真似は冗談でも控えた方がいい。俺の考えを押し付けるようで済まないが、女性つてのは”品格”が大事だからな。それを忘れちゃあならねえぜ？」

「おお……大悟が珍しくまともなことを」

「……だが！ 目の前で三次元版みるくたそのパンチラはどうしても見たい!! つまりどうするか!! それを人前でそれをさせなければ合法なのさ!! てことで工藤、夜になつたら体操着姿でちよつと俺のところに来てごばあっ!!」

「はーい♪ 次は前歯と奥歯を一本ずつね♪」

……うん。大悟はやっぱり狂ってる。木下さん。もういつそのことその社会不適合者予備軍を社会から完全に隔離してくれて全然構わないよ。

そして、隣ではなぜか雄二が目を押さえてのたうち回っていた。霧島さんが指をチョキにして「……浮気は駄目」と呟いているのは関係ないと思いたい。

「……………明久、同志。工藤愛子に騙されないように」

いつの間にか隣にやってきたムツツリーニが不可解なことを言い出した。

「騙す、だと? どういうことだ同志? みるくたその生まれ変わりである彼女に限って——」

「あれ、ムツツリーニ、随分と冷静だね。僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てつきり鼻血の海に沈んでいると思つたのに」

「……………ヤツは、スパッツを穿いている……………」

「「そ、そんな!! 僕(俺)達の純情を騙したね(のか)!!」

畜生がつかりだ! 僕のドキドキを返してほしい! それと隣で「俺は目を突かれ損じゃないか……………」と落胆している雄二と「スパッツだと……………、ふぎけるなツツ!!

そんなの俺が断じてゆる”き”ん”っ!!」と血の涙を流して歯ぎしりしている大悟に謝ってほしい!

「大悟。アタシはスパッツ穿いてないわよ?」

「あつそ。だからなんだだだだだだ!! なんてえええええ!!」

「……………バカ」

「あはは、バレちゃった。さすがはムツツリーニ君だね。まあ、特技つてわけじゃないけど、最近凝っているのはコレかな?」

笑いながら彼女が取り出したのは小さな機械だった。なんだろコレ?

「……………小型録音機」

「うん。コレ、凄く面白いんだ。例えば——」

——ピツ 《工藤さん》《僕》《こんなにドキドキしているんだ》《やらない?》

「ほう……コイツはすごいな」

「実に率直かつ大胆な台詞じやのう」

「わああああつ！ 僕はこんなこと言っていないよ!? 変なものを再生しないでよ！」

「ね? 面白いでしょ?」

いきなりその小型録音機から流れてきたのは、先ほどまでの僕の複数の言葉を繋げて変な風に改ざんされた声だった。それを聞いてニヤつく雄二と感想を述べる秀吉。面白くない！ 僕は全く面白くないよ工藤さん!?

「待ってくれ工藤!! それ俺にも貸してくれ！」

「ん? いいよー」

——ピツ、ピツ、ピツ、ピツ、ピツ 《工藤さん》《やらない?》《やらない?》《やらない?》《やらない?》《やらない?》《やらない?》



「大悟貴様アアアアアアア!!」

「あははつ、やるねえ岡崎君」

「わははははは! 合成会話か! コイツは確かに面白れえ!」

悪戯っぽい笑みを浮かべる工藤さんと、大口を開けて笑う大悟。クツ、このキモオタ野郎! 中学生みたいな低レベルな真似をしゃがって……!

と、思っていると突然背後から急激な寒気を感じた。僕の中の危険感知センサーがガングアンなっている気がする。

「……………ええ。最つつ高に面白いわ」

「……………本当に、面白い台詞ですね」

振り向くと、そこには水の微笑をたたえた美波と姫路さんがいた。

「え、えつとね、姫路さん? 美波? これは大きな誤解で——」

「瑞希。ちよつとアレを取りに行くのを手伝ってもらえる?」

「わかりました。アレですね? 喜んでお手伝いします」

机に勉強道具を置いて、学習室を出ていく二人。何故だろうか、全身から冷や汗が噴

き出して止まらない。

「……明久、大悟、ちよつといいか」

すると、隣で真剣な表情をしていた雄二が僕と大悟に手招きをしていた。

アイツが真剣な顔をするときは必ず何かがある。僕たちは周りに聞こえないように、雄二に小声で話しかける。

(雄二、どうしたの?)

(まさか、お前もみるくたその魅力に気付いたのか?)

(違うわバカ。今の手際を見ただろう。もしかすると、工藤が例の犯人かもしれないと思っただけ)

(なん……だと? バカな! あの子はみるくたその生まれ変わりなんだぞ! そんなことが信じられるか!)

(いい加減二次元と三次元の区別をつけろこのキモオタ。まあ大悟は放っておくとして、さっきの行動から、ヤツはこういった行為に慣れているとみた。確定まではいかないが、有力な犯人候補といえる)

(そっか。雄二と大悟はプロポーズを録音されてたんだもんね)

(クツ……信じたくはないが、その線が一番あるか)

大悟も苦虫を噛み潰したような表情をするも、雄二の仮説を肯定する。

確かに彼女のあの技術はムツツリー二にも引けを取らなかった。それに加えて、彼女はAクラスの人間だ。霧島さんや木下さんのこともよく知っているに違いない。だから彼女が二人とそういつた取引を行っていたとしても何の不思議もないという訳か。

(さて、こうなつたら後は工藤が犯人だという決定的な証拠が欲しいところだ)

(なるほどな……よし!　ここは俺に任せておけ!)

(え、大丈夫かい大悟?　また変なこと言つて木下さんにボコられるんじゃないの?)

(おいおい、二度も同じ轍を踏むわけがないだろう?　ちゃんと考えがあるんだよ。ま、見てな)

そう言つて大悟は、自信満々に向かつていく——何故か工藤さんではなく、木下さんの方へ。

ああなるほど、木下さんに協力を仰ごうというのか。確かにそつちの方が成功率は高「優子。濟まないがちよつと頼みがある。聞いてくれるか?」

「ん?　何かしら大悟。ダーリンの頼みならなんでも——」

「工藤のケツが見たい。だから協力してくれ」

「——あ?」

ボゴオ……ッ!!

あ、大悟の顔面に木下さんの鋭い回し蹴りがクリーンヒットした。

そしてそのまま笑顔でエスカリ〇ルグで大悟を蹴り始める木下さん。最早見慣れた光景だ。

(……アイツはダメだ。明久、頼む)

(うん。了解)

全く役に立たなかった大悟の代わりに僕は、工藤さんを真っ直ぐ見据える。

……いや、待てよ? もし工藤さんが犯人だとするなら『君が僕に脅迫状を書いたの?』と聞いてバカ正直に答えるわけがない。むしろこつちを強く警戒してしまうだろう。それでは意味がない。

危ない危ない。これは質問の仕方を変えないと。

「工藤さん。君が——」

「ん、なに、吉井君?」

頭を使え吉井明久! 相手に気取られないかつ犯人だと特定できるような質問を考えるんだ!

そういえば、大悟がさつきお尻って言ってたよな。……そうか! 犯人の特徴はお尻に火傷の痕があるんだ——よしっ!

「キミが!」

「ボクが?」

「キミが——僕に、お尻を見せてくれると嬉しいっ!」

「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」

やっつてもうた。

「…………ぷつ。あははっ。吉井君はお尻が好きなの? それともボクの胸が小さいから気を使っってお尻にしてくれたのかな?」

「ご、誤解だよ! 別に僕はお尻が好きってわけじゃなくて!」

「ごごっ……………! あ、明久。残念ながら手遅れみたいだぞ」

「流石だな明久。まさか録音機を目の前にそこまで言うとは」

「へ?」

雄二も大悟も何を言っているんだろう。

「ごめんね。折角だから録音させてもらったよ」

《僕に、お尻を見せてくれると嬉しいっ!》

「ひあああっ!?! これは合成すらしていない分ダメージが大きいよ!?! お願い工藤さん

！ 今のは消してえええつ！

「吉井君って、からかい甲斐があつて面白いなあ。ついついイジメたくなつちやうよ」

「……見た目のボーイッシュな感じとは裏腹に小悪魔的な面も併せ持つ……やつぱり工藤は本物のみるくたそ「他の雌を見るような目はイラナイワヨネ」あがああああつ！！

目が！ 目がああああ！！

——ピツ 《お願い工藤さん！》《僕に、お尻を見せて》

「やめてええええ！ 僕が段々変態になつてゐる気がするよ！」

「今更だろ」

「黙れクズ共！！ と、とにかく工藤さんを止めないとー」

その直後、背後に物凄い殺気を感じた。

恐る恐る振り返ると、そこには予想通り、拷問器具を持つて黒く淀んだ瞳をした姫路さんと美波が戻つていた。

「……今の、何かしらね？ 瑞希」

「……なんでしようね？ 美波ちゃん」

表情を変えず、二人は僕の後ろに石畳を設置し始める。

「まさか、ただでさえ問題のクラスとして注意されてるのに、これ以上問題を起こすような発言をしたバカがいるのかしら?」

「困りましたね。そんな人がいるのなら、厳しいオシオキが必要ですよね?」

ヤバイ。最近姫路さんが木下さんに負けないくらいどんだん良くない色に染まってきた。つて、そんな余計なことを考えている場合じゃない! とにかく誤解を解かないと!

「二人ともこれは誤解なんだ! 僕は問題を起こす気はなくて、ただ純粹に《お尻が好き》《好き》だけなんだ——待つて! 今のは途中に音を重ねられ《工藤さん》《の》《お尻が》《好き》つてやめてよ工藤さああん!? ああ二人とも、お願いだから僕を後ろ手で縛らないで! あとそつちの皆も笑つてないで助けてよ! 特に雄二と大悟!」

既に僕の腕は関節を極められつつ背中に回されている。

「……………工藤愛子。おふざけが過ぎる」

「ムツツリーニ! 助けてくれるの!?!」

「……………うまくやつてみせる。任せておけ」

そう告げてムツツリーニは工藤さんと同じように小型録音機を構えた。さてはムツツリーニも音を重ねて工藤さんの音を打ち消すつもりか! よし。ここはムツツリーニを信じて、僕は僕のやるべきことをやろう!

「姫路さん。美波。よく聞いて。さっきのは誤解で、僕は《お尻が好き》って言いたかったんだ。《特に雄二と大悟》《の》《が好き》ってムツツリーニイーツ！ 後半はキサマの仕業だな!?! うまくやるって、工藤さんよりも上手に僕を追い込むってことなの!?!」

「……………工藤愛子。お前はまだ甘い」

「くっ！ さすがはムツツリーニ君……………」

二人はライバルのように睨みあっている。そうやって火花を散らすなら二人で直接やり合ってほしい。

「吉井君。ちよつといいかしら?」

「……………吉井」

「?」

突如、木下さんと霧島さんに手招きされた。なんだろうと思い、近づいてみる。

「どうしたの? 二人と——」

「……………吉井。雄二は渡さない」

「吉井君。大悟をたぶらかすような真似したら……………殺すから」

肩を砕かんとする勢いで強く掴む木下さんと、キリツと僕を見据える霧島さん。

おそらく雄二と大悟のと聞いて反応したんだろう。でも安心してください。僕はどちらでもいいません。



「アキ……。そんなに坂本と岡崎のお尻がいいの……。？ ウチのじゃダメなの……。？」

「前からわかっていたことですけど、そうはつきり言われるとショックです……。？」

「二人ともどうしてすぐに僕を同性愛者扱いするの!? 僕にそんな趣味は——」

「同性愛を馬鹿にししないで下さいっ!」

いきなり学習室のドアが開き、見覚えのある女子がつかつかと教室の中に入ってきた。ああ……。また変な人が増えたよ……。

「み、美春? なんでここに?」

「お姉さまっ! 美春はお姉さまに会いたくて、Dクラスをこっそり抜け出してきちゃいましたっ!」

「須川バリアー」

「なっ! け、汚らわしいです! 腐った豚にも劣る抱き心地ですっ!」

美波に盾にされた挙句口汚く罵倒された須川君は涙をこらえて上を向いていた。

そういえば、あの子どもで会ったことがあるような——って思い出した! この子、Dクラスの清水美春さんだ!

「お姉さまは酷いです……。美春はこんなにもお姉さまを愛しているというのに、こん

な豚野郎を掴ませるなんてあんまりです……」

「ちよつと美春！　こんなところで愛しているとかわないですよ！　アキに勘違いされちゃうでしょ!?!」

「おい島田！　同性愛は二、三次元関係なくれつきとした人間のアイデンティティーの一つだ！　馬鹿にするのは許さんぞ！」

「岡崎は黙ってなさい！」

「あ、岡崎先生！　お疲れ様ですっ！　依頼していたお姉さまの同人誌は出来ましたか!?!」

「おう。要望通り全ページカラーの高解像度データで出来ている。受け渡しは来週の月曜日だな」

「分かりました！　必ず行きますね！」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ美春！　アンタ岡崎に何を依頼してんのよ！」

ああ……、清水さんも大悟の神の右手に魅了されたのか。

でも否定はしない。だって僕を含めてここにいるほとんどがそうだからね。

「君たち、少し静かにしてくれないか？」

そんな中。凜とした声が響き渡った。知的に眼鏡を押し上げるクールな声の主は学年次席である久保利光君だった。

「あ、ごめん久保君」

「吉井君か。とにかく気を付けてくれ。全く、姫路さんといい島田さんといい、Fクラスには危険人物が多くて困る」

危険人物が多いのは否めない。けど、雄二やムツツリー二より先に姫路さんと美波の名前が挙がったのは意外だった。

「それと、岡崎君の言う通り、同性愛者を馬鹿にする発言はどうかと思う。彼らは別に異常者ではなく、個人的思考が世間一般と少し食い違っているだけの普通の人達なのだから」

「え？ あ、うん。そうだね」

なんだろう。久保君の台詞にはまるで実体験のような重みが感じられる。

それと、どうして木下さんは複雑な表情をしているんだろうか。

「そうです！ あのお二方の通り、性別なんて関係ないんですよお姉さま！」  
「ウチにその趣味はないから！」

依然収まりそうにない清水さんを美波が学習室の外に追いやる。やれやれ、やっと静かになった。

「……性別なんか関係ない、か……」

久保君が妙に思い詰めた表情をして清水さんの捨て台詞を反芻していた。なぜだか鳥肌が立った。

「性別なんか関係ない、ですか……」

「あのね姫路さん。その台詞を呟きながら雄二と大悟と僕を順番に見るのはやめてもらえるかな？ きつとキミは誤解をしているよ。知つての通り、僕は《秀吉》《が好き》なんだってちよつと!」

また余計な音声を重ねられたけど、今回は否定できなかった。

「け、けど、誤解しないでね？ 僕は秀吉の《特に》《お尻が好き》なんだ——つてこれだと余計に誤解を招くよね!! ムツツリーニと工藤さん、とにかくその機械をこつちに渡しなさい! 僕を取り巻く環境が変わらないうちに!」

「おい明久てめエ!! 秀吉は俺のモンだ!! 渡さねえかな!!」

「あ、明久……。ワシはどんな返事したら良いのじゃ……?」

「しまった! もう手遅れ!? こうなつたら、《久保君》《雄二と大悟》《順番に》《お尻を見せて》違う! どうしてこんな場面で久保君のお尻を見る必要があるのさ!」

「吉井君。そういうのは少々困る。物事には準備がある」

「わかつてる! 順序云々の前に人として間違っていることも!」

「アキ、アンタやつぱり女より男の方が……」

「だからどうしてみんな僕をソツチの人にしようとするの!? 落ち着いて僕の話聞いてよ!」

「大悟? 秀吉? 歯を食い縛りなさい♪」

「ま、待て優子! 今のは大事な相棒という意味であぎやあああああつ!」

「な、なにゆえワシまでぎやあああああつ!」

「……雄二。吉井より私にお尻を見せて」

「な、何馬鹿な事言つてやが——つて無理矢理ズボンを脱がそうとするんじゃねええええ!!」

騒がしい教室内のざわめきに僕の声が打ち消される。

結局、この騒ぎは鉄人が怒鳴り込んでくるまで続いた。



そして、俺たち五人で今後のことについて話し合った。

「僕は工藤さんが犯人だと思うな」

「その可能性は高いだろうな」

雄二が明久の意見に頷く。確かにあの録音機の使い方はかなりのものだ。怪しむのも無理はない。

俺としては、みるくたその具現化である彼女がそんな真似はしてないでほしいと思いたい。

「それじゃ、工藤さんを一気に取り押さえる?」

「……………それはやめた方がいい」

「なにか問題があるのか?」

「……………チャンスは一度きり。もし失敗したら犯人は見つからない」

「もし取り押さえて間違いだった場合、それを見ていた真犯人がどうするかをよく考えてみる、つてことだろ?」

「ああ、そっか。証拠を隠滅するとか、自分を探させないようにする為に更に脅迫をするかとかだね」

「無計画な行為は返ってこっちの首を絞めるつてことか」

確かにそう考えるとチャンスは一度きりだ。無暗に手は出せない。なら益々綿密な

計画を立てないとな。

「例の火傷の痕を確認できたら良いのじゃが……」

「いつそ、怒られるのを覚悟でスカート捲りでもしてみる？」

「……………彼女（ヤツ）は、スパッツを穿いている……………!!」

俺と同志が憎々しく呟く。クソツタレ！ パンチラつてのはスカートの下から覗かせるその花園を唯一お目にかかれる最高のシチュエーションなんだぞ！ 工藤はそれが分かってているのかッ!!

「……………確認するには女子風呂を除くしかない」

「やっぱりそうなるんだね……………」

「けどどうすんだ？ 昨日と同じやり方じゃあの教師共の陣営を突破するのは困難だぜ」

「作戦を練るにしても、あの場所はただの広い一本道に大きな大食堂があるだけじゃ。正面突破しかないと思うぞい」

確かに、あそこは何の隠し通路らしきものもない。だから裏から侵入という方法も無理だ。

「そうだな。午後は昨日失った点数の回復試験があったからな。時間もないし、基本は正面突破しかない」



「ま、そりや仕方がないわな」

「だが、方法がないわけでもない」

「え？ 作戦があるの？」

「作戦なんて立派なもんじゃないがな。要するに、正面突破を成功させたらいいだけだろ」

「いや、それが難しいから困ってるんだけど……」

向こうの戦力は今のところ教師の召喚獣が三体に鉄人。それに引きかえこっちはたったの五人だ。人数では上回っていても、質が大きく違う。特に鉄人と姐御はヤバい。

唯一の利は、向こうは点数の補充がままならないということだけだ。

「正面突破しか出来ないのなら、それを成功させるだけの戦力を揃えたらいい。実力は負けてても、人数で上回れば勝機はある」

「共に戦地に赴く同志を増やす……か？」

「そうだ」

なるほど。確かに、雄二らしくない方法だ。

「そういうことなら任せろ。すぐにヤツらと呼んでこよう」

「安心しろ。既に声はかけてある。そろそろ来るはずだ」

ガチャ

「坂本、俺たちに話ってなんだ？」

すると、扉が開き須川をはじめとするFクラスの面々がぞろぞろと部屋に入ってきた。

「よく来てくれた。実は皆に提案がある」

部屋に入りきらないメンバーにもよく聞こえるように、雄二はハッキリとデカイ声で告げる。

『提案？』

『今度はなんだよ。正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえなく』

「——皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『詳しく聞かせろ』』

フツ……馬鹿共め。俺はそう答えるって信じてたぜ。

「昨夜、俺たちは女子風呂の覗きに向かったんだが、そこで卑劣にも待ち伏せをしていた教師陣の妨害を受けたんだ」

『『『ふむ、それで?』』』

「そこで、風呂の時間になったら女子風呂警備部隊の排除に協力してもらいたい。報酬は二つ。ダイゴブックスによる全ページフルカラーエロ同人誌! そしてもう一つは、その後に得られる——理想郷アガルタの光景だ!」

『『乗ったあああ!』』』

流石雄二だ。見事にこっちの『脅迫犯を探し出す』という目的を隠しつつ、野郎共を一気にまとめあげてやがる。単純に覗くのが目的と言った方が説明が楽なのだろう。

「ムツツリーニ、今の時間は?」

「……………二〇一〇時」

確か入浴時間は午後八時。今から向かえばナイスタイムングだ。

しかも昨日より大分戦力の増強が出来た。警備を突破できる可能性が高まったぜ!

「よし、今から隊を五つに分ける。A班は俺に、B班は明久、C班は秀吉、D班はムツツリーニ、E班は大悟にそれぞれ従ってくれ」

『『了解っ!』』』

「いいか、俺たちの目的は一つ! 理想郷アガルタへの到達だ! 途中で何があろうとも、己が神

気を四肢に込め、目的地まで突き進め! 神魔必滅・見敵必殺! ここが我らが行く未

の分水嶺と思え!!」

『『『おおおっつ!!』』』

「全員気合いを入れろ!! 我らFクラス計四十八名!! 出陣<sup>で</sup>ぞ!!」

『『『おっしやあぁーっ』』』

そして俺たちは、一つの崇高な目的のため、走り出したのだった。

## 第四十一問 女子風呂へ突撃せよ! 第二夜目

——side 大悟

作戦開始直前。俺は相棒である秀吉と顔を見合わせ話し合っていた。

「……なあ大悟よ。本当にこれを着なくてはダメなのか?」

「当たり前だろ相棒! お前がこれを着るのと着ないのでは俺達のモチベーションに大きな差が生じるんだぜ? それにサイズはお前にバッチシ合わせてあるから問題ねエヤ—!」

「……………同志を信じろ(コクコク)」

「いや、性別という大きな違いがあるが……ご丁寧にカツラと模擬刀まで用意しておつて、これじゃ走りづらいじゃろう」

「大丈夫だつて安心しろよ。あ、あとこれパッドな」

「むう、仕方ないの——つてちよつと待てい!! パッドじゃと!? それだけは嫌じゃ!!」

「そこをなんとか! 頼むよ相棒!!」

「ええい！ ワシは男じゃ！ こんなの恥ずかし——つて、ムツツリーニも揃つて頭を下げるでない!! とにかく嫌じゃーっ!!」

その後数分にも渡る説得（土下座）の結果、渋々承諾してくれた。流石は俺の相棒。なんだかんと言つてやつてくれるのがコイツの良いところだ。後でまた飯でも奢つてやろう。

よし、これで準備は整つた。さあ、出撃だ。

「西村先生。流石に今日は彼らも現れないのでは？ 昨日あれほど指導をしたことですよ」

「布施先生。彼らを侮つてはいけません。彼らは生粋のバカです。あの程度で懲りるようであれば今頃は模範的な生徒になっているはずですから」

「そうでしょうか？ いくらなんでも、そこまでバカでは——ん？ あ、アレは!!」

「むっ、やはり現れたかあのバカ共は——ぬう？」

——ドドドドドドド!!

『走れ〜! 高速の〜! 帝○華撃団〜!! 唸れ〜! 情熱の〜! 帝国華○団〜!!』

「行くぞオ! 我等帝国歌劇団・F組の力を見せてやれえええ!!」

「な、何故にこうなったのじや……ええい! もうヤケクソじや! 真宮寺さ○ら、参ります!!」

『私達、正義のために戦います!』

『例えそれが、命を懸ける戦いであつても!』

『私達は、一步も引きません!』

『『『それが、帝○華撃団なのです!!!』』』

「に、西村先生! 大変です! 変態……というかそれ以上の珍妙な格好をした者達が編隊を組んでやつて来ました!」

「まさか、懲りるところか数を増やしてくるとは。それにあのおかしな格好は岡崎の入れ知恵か。これだからあの連中は……!」

「な、なんていうか、色んな意味で吹っ切れたように見えますね! 正直関わりたくありませんが……」

「布施先生、警備部隊全員に連絡を！ 一人とて通してはいけません！ 私は定位置につきます！」

「は、はいっ！」

—— side 明久

「吉井！ 帝○華劇団が布施と接触したぞ！」

「オーケー須川君。皆、帝国○撃団が先生を足止めしている間に一気に駆け抜けるよ！ 全員遅れないようにね！」

告げて、僕は一気に階段を駆け下りた。そのまま勢いを殺さずに廊下を走る。背中からは皆がついてくる気配を感じ取れた。

ていうか、大悟の用意したアレってホントに要るのかな？ しかもサク○大戦って今の若い人はあんまり知らないと思うけど。でも秀吉の巫女服姿が見れたのは良い活力源になったよ！

「よ、吉井君、待ちなさい！」

脇を抜ける時、布施先生の慌てた声が聞こえてきた。だけど待てと言われて待つばかりはない。当然のように走り去る。向こうも慌てて追いかけてきたけど、ある程度走る



と、悔しそうに足を止めた。

「あれ? 諦めたのかな? まだ追ってくると思っただけだ」

「諦めたってよりは《干涉》を嫌ったんじゃないか?」

隣を走る須川君がよく分からないことを言っている。《干涉》ってなんのことだろう?  
?

「よし。○国華撃団が布施を取り囲んだ。俺達はこのまま進もう」

「あ、うん。そうだね」

振り向くと、布施先生を囲む真宮寺さ○ら（の格好をした秀吉）と大○一郎（の格好をした大悟）率いる部隊が戦いを有利に進めている様子が見えた。もはや首級をあげるのも時間の問題だろう。

ていうか、よく大悟あんな衣装をバレずに持ってきたものだ。覗き騒動が無かったら何に使うつもりだったんだろうか?

「吉井、いけそうだな」

「そうだね。このままなら無事に辿り着けそうだ——」

「そこまです、薄汚い豚ども!」

「!?!」

突然の甲高い罵倒。何事かと思ひ見てみると、その先にはあり得ない光景が広がっていた。

「この先は男子禁制の場所！ 大人しく豚小屋に引き返しなさい！」

「し、清水さん！ あと、その他女子多数!?!」

広い廊下に展開していたのは、清水さん率いる女子多数による召喚獣部隊だった。

「吉井。数も質も、圧倒的にこちらが不利だ……!」

「クツ！ 清水さんお願いだ！ そこをどいて！」

「ダメです！ そうやってお姉さまのペツタンコを堪能しようだなんて、汚らわしい。

神が許しても私が許しません！」

「違う！ 僕の目的は美波のペツタンコじゃない！」

「嘘です！ お姉さまのペツタンコに目が眩んだ豚野郎は、私が成敗します！」

「信じてくれ！ ペツタンコは所詮ペツタンコなんだ！ 今の僕には美波の地平線のよ

うなペツタンコなんかよりも大事なのが右肘がねじ切れるように痛いっ！」

「黙って聞いてれば、人のことペツタンコって何度も何度も……!」

「またオシオキが必要みたいですね……?」

そこには僕の右腕を極めようとする美波と、恐ろしささえ感じる程の笑顔をした姫路

さんだった。

「み、美波、姫路さん。今は入浴時間じゃ……?」

「忘れたの? ウチと瑞希はFクラスだから後半組なのよ。——もつとも、前半組のAクラスからも参加している人がいるみたいだけどね」

美波が廊下の奥を指し示す。目をやると、そこにはこつちに手を振っている女子の姿があった。

「やつほー、吉井君。何を見に来たのかな? ボクを覗きに来てくれたのなら嬉しいんだけど♪」

「工藤さん!? そんな! どうしてここにいるの!」

脅迫犯であるはずの工藤さんが「……浮気は許さない」こんなところにいるなんて「翔子待て! 落ち着ぎやあああああつ!」計算外だ。これだと彼女が「ダーリン? 秀吉? 次は無いつて言ったわよね?」犯人かどうかを「は、優子!? なんでここにおごおおおおつ!」確認することが「待つのが姉上! ワシの足首はそつちの方向には曲がらあぎやあああああつ!」できない!

「あ。さてはボクからこれを取り戻そうとしてるのかな?」

例の録音機を取り出してニコニコと笑う工藤さん。やつぱり彼女が犯人か……?

「……………チャンスは一度きり」

踏み切ろうとする僕をいつの間にかやって来たムツツリーニが諫める。確かに、先ずは話を聞いて確信を得ることにしよう。

「工藤さん。質問なんだけど、どうしてキミは録音機なんて物を持っているの？」  
「勿論、先生の授業を聞いて後から復習するためだよ」

「何い!?! 嘘だ! みるくたそは勉強が苦手っていう設定がありぎやあああああつ! 目がア! 眼球が焼けるように痛ええええ!!」

大悟のバカはほつといて、これはウソだろう。そもそも録音機なんて代物。普通の人なら売ってる場所すら知らないはず。それにこれは偏見かもしれないけど、彼女はそんなに真面目に勉強をしているようには見えない。

これはもう、彼女を犯人と確定してもいいんじゃないだろうか……?」

「それより、吉井君達の目的は? もしかして、脱衣所の盗み撮りとか?」

「くっ……!」

「じゃ、一つイイコトを教えてあげるよ」

彼女を捕らえるかどうかの決断に迷っていると、工藤さんが僕に近付いて一言。

「まだ脱衣所には見つかっていないカメラが一台残っているよ?」

衝撃のカミングアウトに、僕は息を呑んだ。後ろでは雄二と大悟と秀吉の悲鳴が聞こえたが今はスルーした。

「……………っ! 工藤さん、キミは!」

「ボクが仕掛けたわけじゃないけど、偶然見つけちゃってね」

偶然見つけた? そんなの嘘に決まっている! くそっ! 僕らの状況を知りながらからかかって遊ぶなんて、どこまで悪趣味なんだ!

「さて、おしゃべりはここまで。そろそろ始めようか、ムツツリー二君?」

言うだけ言うと、工藤さんは僕から離れてムツツリー二の正面に立った。

「……………分かってる」

ムツツリー二の声は苦々しい。工藤さんは強敵だし、勝ったとしてもその後には保健体育の大島先生がいるのだから無理もない。

「気にするな吉井! 女子の召喚獣なんかじゃ俺たちは止められない!」

「あつ! 待つんだ須川君! その先には——」

「教育的指導っ!」

「ふぐうっ!」

目的地へ向かおうとした須川君に、突如として放たれた拳。

そう。その主こそ僕らにとつての最大の難関である、担任の鉄人だった。

「やはり来たな。生粋の馬鹿共め」

『て、鉄人だ?!?』

『ヤツを生身で突破しないといけないのか?!?』

『バカを言うな! アイツは兄貴以上の強さなんだぞ! そんなの無理に決まっているだろ!?!』

僕らFクラス男子にはヤツの鬼のような強さが見に染みる程理解できる。だからこそ、皆はその姿に動揺していた。

「吉井。やはりキサマは危険人物だったな。今日は特に念入りに指導してやろう」

ゆらり、と鉄人が歩を進めてくる。周囲は大勢の女子生徒。これはもう万休すというヤツだろう……。

僕はこの場で部隊の全滅を覚悟していた。

ところが、

「いいや、まだ終わっちゃいねえ!」

「っ!?!」

廊下中に響き渡るドスの効いた声。

見ると、先程まで木下さんと霧島さんにボコられていたはずの大悟と雄二が颯爽と僕らの前に出たのだった。

「雄二! 大悟!」

「おいおいでめエら、諦めるのが早すぎだろ。根性を見せろよ根性を」

「悪いが鉄人。今ここで明久を失うワケにはいかない。ここからは俺達が相手だ」

言いながら、コスプレ衣装を脱ぎ捨てポキポキと首と拳を鳴らす大悟と、その場で軽くシャドーボクシングをしてみせる雄二。

そう、アイツらは——召喚獣を用いるのではなく、本当の”実力”、すなわち喧嘩で鉄人を倒そうとしているのだ。

「ほう……坂本に岡崎か。お前らの腕はよく知っている。良いだろう……ならば吉井の前にお前ら二人まとめて徹底的に指導してやろう」

そしてそれを見てもなお全く動揺することなく、鉄人は自分の拳を握って構えを取った。

ダメだ、無謀すぎる。そう思った僕は必死に訴えた。

「無理だよ二人ともっ! 相手はあの鉄人なんだよ! いくら雄二も大悟も喧嘩慣れし

てるって言っても——」

「んなこと言われなくても分かってる。それよりも明久。てめエは人の心配してる余裕があんのか？」

「えっ？」

「大悟の言う通りだ。明久、さつきも言ったが、お前をそう易々と失うワケにはいかない。なら俺達がやるべきことなんざ一つしかねえ。それは……この場から無傷でお前を逃がし、安全にお前が辿り着ける道を作ることだ!!」

そう僕を激励し、再び鉄人と向かい合う二人。

その背中からは、いつもの悪友とキモオタの面影はなく、僕を命がけで逃がすという”男”の覚悟と、かつての”悪鬼羅刹”閻魔大王が大きく現れていたのだった。

「さあ、行くぞ鉄人!! 武器の貯蔵は十分か! 帝国華○団・F組隊長、岡崎大悟が相手だ!!」

「喧嘩は単純な腕力だけじゃ勝てないってことを教えてやる! 野郎共、ここは俺と大悟に任せて、明久の撤退を援護しろ!」

『『『おうっ!!』』』

「雄二、大悟……。それに、皆も……」

二人の男気に押されたのか、全員が奮い立ち、僕に笑顔を向けてくれていた。僕は、僕



は……………」

『吉井! お前は召喚獣で女子を押しつけて走れ! 向こうの召喚獣は俺たちが意地でも抑える!』

『坂本と兄貴の覚悟を、フイには決してするんじゃねえぞ!』

『この場の全員で血路を開く! お前は振り向かず、駆け抜ける!』

『ここが男の見せ所、つてやつだな!』

『我等、帝国○撃団は不滅だ!!!』

そして、遂に大悟&雄二と鉄人による最強の闘いが始まり、他の仲間たちも次々と死地へと赴いていく。

そんな姿を見せられて、いつまでもウジウジ迷っているわけにはいかない!

「……………わかったよ。ここは皆に任せる! そして僕は必ず生き延びて……………目的を果たす! 行くぞ、試獣召喚っ!」

お馴染みの召喚獣が現れたのを確認して、僕は退路を塞ぐ女子の人垣に突っ込んだ。

「アキッ! 逃がすもんですか! 試獣召喚!」

「明久君! オシオキはまだ終わっていませんよ! 試獣召喚!」

目の前に姫路さんと美波の召喚獣が現れる。くっ! こんなときに!

『そうはいくか! 試獣召喚!』

『吉井の邪魔はさせねえ！ 試獸召喚！』

「邪魔よアンタ達！」

「どいてくださいっ！」

二人の仲間が命がけで姫路さん達を足止めしてくれた。

「悪いが霧島！ 木下姉！ 兄貴達の喧嘩につまらない横槍は入れさせねえぞ！」

試獸召喚！」

「あ、姉上よ……ワシとてこのままでは終わらぬのじゃ！ 試獸召喚！」

「……なら、力づくで通してもらおう。……試獸召喚！」

「秀吉。そんなふざけた格好といい、そこまでお姉ちゃんの言うことが聞けないんなら

……徹底的に叩き潰してあげるわ！ 試獸召喚！」

後ろでは秀吉達率いる帝○華撃団が霧島さんと木下さんを止めているのが分かった。

「皆……ごめん。必ず僕は生き延びて、いつか理想郷に辿り着くことを誓うから……」

あまりに無力な自分に腹が立った。悔しくて噛み締めた唇が痛かった。涙を堪えて走る自分が惨めだった。

だから、強くなりたいと思った。

「……………くそっ!!」

誰もいなくなつた部屋に戻つて、膝を抱いて座る。もしかすると誰かが生き延びて戻つてくるかもしれない。そんな淡い希望を抱きながら、僕は――

ピンポン パーン ポーン……。

《――放送連絡です。えー、Fクラス吉井明久君。至急臨時指導室に來なさい》

ま、普通そうなるよね。面割れてんだし。

「はあ……はあ……、全くこの馬鹿共が。随分と手を焼かせおつて……」

「……………(チーン)」↑気絶してゐる大悟

「……………(チーン)」↑気を失つた雄二

「……………(ピクピクピク)」↑優子の折檻を受けまくつたことにより再起不能になりかけてゐる秀吉

「……………(ポタポタポタ)」↑戦いの最中に工藤の誘惑行動により出血多量のムツツリーニ

こうして、強化合宿二日目の夜。

僕らの作戦はこちら側の満身創痍により、惨敗となつた。

第四十二問 めるたんに嫌われるとか自殺モンに決まってるダルオ!?

——side 大悟

「あれ……ここはどこだ？」

気が付くと、俺は真つ暗闇な場所に一人で立っていた。

「なんだここは？ 俺は確か鉄人と優子にボコボコにされてそのまま部屋に戻って寝ていた筈だが……？」

「まさか、これは夢か？ にしては随分と不気味じゃねえの」

思わず一人で喋ってしまう。

「取り敢えず今俺は夢を見ているんだろうなということはわかった。所謂明晰夢ってヤツだろう。」

「あーあ、早く目が覚めねえかな……」

『大悟お兄ちゃん』

「!？」

突然、暗闇の中から俺をお兄ちゃんと呼ぶ声が聞こえた。

俺は思わず目を見開き、その方向に視線を向ける。すると、

『会いたかったよ、大悟お兄ちゃん……♪』

「う、嘘だろ……キミは、め、めるたん!？」

そこには、俺の最推しキャラクターである『魔法少女の弟子☆めるたん』の主人公、めるたんが立っていたのだ。

「おお、本物……、本物のめるたんなんだね!! 僕こそ会えて嬉しいよ!!」

俺の心は一瞬にして晴れやかなものになった。

夢とはいえ、手の届かぬ憧れの存在であるめるたんが俺の目の前にいて、なおかつお兄ちゃんと呼んでくれてる!! これ以上の幸福などあろうか!! 俺は今! 最高にハイってヤツだぜ!!

いや、これは心が躍りますぞ。さあて、これからは俺とめるたんによるイチヤラブタイムの始ま

『……ねえ大悟お兄ちゃん。一つ聞きたいことがあるんだけど』

「ん? なんだいめるたん? キミの大悟お兄ちゃんがなんでも答えてあげ——」

『どうして、女子風呂なんて覗こうとしてるの?』

「……………え?」

一瞬、思考が停止した。

『お兄ちゃん。どうしてそういういけないことするの? 私画面の向こうからずうっと言ってるよね? エッチなことはしちゃいけないだよって』

「い、いや待ってくれめるたん! これには海よりも深い事情があるんだ! それに俺は三次元の裸なんぞに興味は——」

『やめて! 言い訳なんて聞きたくないっ!』

「め、めるたん…………」

『…………もういい。私は大悟お兄ちゃんの事信じてたのに、お兄ちゃんは私を裏切ったんだね。それどころか謝りもしないなんて…………』

「ち、違うんだめるたん!! 俺は…………」

『……………もう、大悟お兄ちゃんなんて——大っ嫌い!!』



その言葉は、俺の心臓に深く突き刺さった。

そしてめるたんは、そんな俺を一瞥したかと思うと、再び暗闇の中に消えてしまった。

「そんな……う、？だ……、め……めるたあああああああああああ  
ん!!!」

「ああ、待ってくれ……めるたああああああん……!」

「大悟、大悟。起きるのじゃ。もう起床時間じゃぞ!」

「めるた……んあ?」

声が聞こえたので、俺は目が覚める。

すると目の前には、俺の大親友であり可愛らしさ満開の男の娘の顔があった。

「……秀吉? 何故お前がここにいます? ていうか俺の嫁は?」

「何をおかしなことを言っておるのじゃ。変な夢でも見ておったのか?」

「何………てことは夢から醒めたのか。チクシヨウ……最悪の悪夢だったぜ」

ホント、めるたんに嫌われるとか自殺問題だかな。夢で良かった。

すると、隣で寝ていた同志も起きてきたようだった。そんなじゃ、俺も起きるかと思ひ上体を起こす。

「とにかく雄二！ 起きろコラアッ！」

「ぐふあッ！」

いきなり怒声と共に、明久が雄二を布団から蹴り飛ばすのが見えた。おお、いいキツクだ。

てか、なんで雄二が明久の布団と一緒に寝てたんだ？ ホモか？

「んむ？ なんじゃ？ 雄二はまた自分の布団から離れた場所で寝ておったのか」

「あ、おはよう三人とも。って秀吉。またってどういうこと？」

「俺も気になるな」

「いや、別に大したことではないのじゃが……雄二は大層寝相が悪くてのう。明け方はワシの布団の中に入ってきておって——ってお主ら何をしておるのじゃ!!」

秀吉が言い終わる前に、俺達三人は雄二につかみかかっていた。

「殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

「雄二この野郎！ 明久だけじゃ飽き足らず俺の相棒にまで手出そうとはな！ くだばれカス野郎!!」

「……………その罪、死をもって贖うべし……………」

ガチャ

「おいお前ら！ 起床時間だ——ぞ？」

「死ね雄二！ 死んで詫びるんだ！ もしくは法廷に出頭するんだ！」

「お、ちようどこここにいい感じの花瓶があるな！ これで頭をカチ割ってやるよ！」

「……………楽には殺さない（ギリツ）」

「なんだ!? 朝からいきなり三人がキまつているぞ!? 持病か!？」

「ええい落ち着くのじゃお主ら！ 西村先生、済まぬがこやつらを抑えるのを手伝って

いただきたい！」

「…………お前らは朝から何をやっているんだ」

鉄人に邪魔をされてしまい、残念ながらこのクソツタレの息の根を止めることはできなかつた。

「雄二。そう言えば昨夜妙なことを言われたよ」

「ん？ なんだ？」

寝起きのひと悶着も終わり朝食中。突然明久が雄二に話しかけた。

「工藤さんに『脱衣所にまだ見つかったないカメラが一台残ってる』って」

「なんだと？」

忙しく動いていた雄二の橋が止まる。俺も思わず食事を一旦止めてしまった。

「怪しいよね。そんなことを知っているなんて、やつぱり彼女が犯人じゃないかな？」

「いや、そうとは限らんじやろ。それならわざわざ怪しまれるようなことを言うとは思えん」

「だが、それは逆にそう思わせることでこっちの動向を錯乱させる作戦の可能性もある

ぜっ」

「うくん。どつちなのかな……」

「……………確認するしかない」

「やつぱりそれしかないか……」

どうあつても方法は覗く以外に残されて無いようだ。

「だが、工藤の情報がありがたいぞ。それを工藤しか知らないってことは、そのカメラに女子の着替えが撮影されている可能性が高い。それを手に入れたら入浴していない女

子の確認もできるからな」

「そこに工藤が映っていないけりや、犯人の線は強くなるな」

「……………隠し場所なら五秒で見つける自信がある」

流石同志だ。俺もしつかり見習わねえと。

「だが雄二。そうなると少しおかしくねえか？ 確か最初にカメラを見つけたのは小山

だ。同志なら分かると思うんだが、盗聴や盗撮に長けた人間が素人に簡単に見つかるよ  
うな場所に仕掛けるワケがない」

「お、いいところに気づいたな。確かに大悟の言う通りだ。そうなると考えられるのは

——」

「……………二段構え」

「そうだ。最初に見つかったカメラはカモフラージュだった可能性が高い」

「用意周到じゃな」

「けど、それならお風呂の時間を避けて本命のカメラを取りに行けばいいんだね」

「……………それは無理。時間外だと脱衣所は鍵がかかっている」

「つまり、今まで通りガンガン行こうぜ作戦しか無理なワケだ」

やれやれ、これからも骨が折れる（主に優子の手により）戦いになりそうだ。

「そこで昨日の反省だ。明久、昨日の敗因はなんだと思う？」

「敗因？ うーん、帝国華撃○じゃない？」

「なんでだ!! あれは完璧だっただろう！」

「アレは敗因じゃなくただのこのキモオタがやらかしたバカ騒ぎだ。残念ながら違う」

よし、後で雄二には俺の新技、恋のギャラクシー☆ラツシュを食らわせてやることにしよう。

「それじゃあ……、向こうが女子の半分を防衛に回してきたことじゃないかな？」

「……………敵側には工藤愛子もいた」

「そうだ。昨日の敗因はAクラスを含め、敵の戦力が大幅に増強されていたことだ」

記憶に残ってる限りでも、昨日までの向こうの戦力はこちらの人数の数倍の人数。更には教師陣が四人もいる。まさに火中の栗を拾うなんてよりも以上の戦力差だったな。

それに、日を追うごとに優子の折檻もハードになってきている。明日あたり殺されるんじゃないか？

「そこで、こちらにも更に戦力を増強しようと思う。Fクラスだけでなく他のクラスも味方につけて対抗するんだ。幸いここには、学年の全男子を動かすことのできる力を持つ男が二人もいるからな」

「それは……もしかや大悟とムツツリー二のことかのか？」

秀吉の問いに雄二がああ、と頷く。

確かに、俺の“ダイゴブックス”と同志の“ムツツリ商会”は文月の裏経済を牛耳っている二大産業だ。当然二学年の男子にもかなりのファンがついてくれている。その立場を上手く利用すれば、かなりの戦力増加が見込めるだろう。

「ぬう……正直なところ、立場に物を言わせるやり方は俺の経営理念に反するが……この際そうもいつてらんねえか」

「……………これも汚名返上のため」

仕方ない。次の休み時間にも話をつけに行ってみるか。

と思っていると、明久が何やら腑に落ちないような面をしていた。

「む？ 明久、どうしたのじゃ？」

「うくん。なんか、この作戦がいつものやり方と違うやり方な気がしてさ……。ほら、いつもなら戦力で不利だったとしても上手く立ち回ったりして目的を達成するのが僕らってところあるじゃん？」

「ほう……。明久も頭が少しは回るようになってきたな。その通り。このやり方の目的はもう一つある」

「目的？ んだそりゃ？」

「それは俺たちの“保身”だ」

保身？ どういうことだ？ どうして戦力増強が俺たちの身を守ることに繋がる？

頭にはてなマークを浮かべていると、雄二は続けた。

「いいか？ 今のところは未遂で終わっているから大した問題になっていないが、覗き  
は立派な犯罪だ。作戦が成功して女子風呂に至ったとしても、例の真犯人が見つからな  
い限り俺たちは処分を受けることになる」

そりゃあそうだ。今のところ俺たちのやつてることは向こうからしたらただの覗き  
のための暴動だ。仮に突破が成功しても盗聴・盗撮の真犯人をとつかまえて事情を説  
明しない限り、少年法で守られているにしても俺達はそれ相応の処分を受ける。最悪退  
学だ。

「そこで、覗きの人数を増やせば相手の特定は難しくなる。向こうだって戦いながらそ  
の場にいる全員の顔を覚えるのは難しいだろうからな」

「じゃが、ワシらは既に面が割れておるぞ？」

「ああ。だから昨日明久が呼ばれたんだろうな」

「文月学園は世界中から注目を浴びている試験校だからな。そんな不祥事があつた場合  
はひた隠しにするかキツチリと一人残らず処分するかのどちらかしか選べない。そし  
てもう一つは……お前だ、大悟」

「俺？」

いきなり雄二が俺を話題に上げた。



「大悟は元々、青少年更正プロジェクトの第一号である”特別監視対象生徒”だ。当然あのババアや文月の経営に携わるスポンサー、お偉いさんもそれは既知のこと。てことは裏を返せば、何が何でもこの文月学園の教育を用いて大悟を完全に更生させなきゃならない。そんな期待を寄せられている中で、覗きなんていう理由で大悟を退学処分にしたらそのあとどうなると思う?」

「少なくとも、文月学園の信頼はガタ落ちだね」

「……………(コクリ)」

「ああ。わざわざあのババアが自らこのプロジェクトに名乗りを上げたと聞いているからな。そう簡単に大悟を手放すような真似は出来ねえだろうよ」

成程、つまり俺のこの”特別監視対象生徒”という不名誉な肩書は、この状況なら逆に大きな後ろ盾になるといいたいんだな。

確かにあのババアはわざわざ少年院の院長に頭を下げてまで俺を引き抜いた。そしてこの青少年更正プロジェクトを開始した。もしそれが失敗に終われば文月というブランドに大きな傷がつくだけでなく、学園に投資してくれているヤツらからもよく見られなくなり、その後の運営にまで支障が出てくるだろう。そんなあのババアは絶対に回避しようとするに決まってる。

「ま、大悟という条件がなくても、中途半端に一部の生徒だけを罰するようなことをすれ

ば、ただでさえ叩かれている『クラス間の扱いの差』に更にマイナス要因を増やすことになるけどな」

「えーと……、つまり僕たちみたいに顔の割れているのがFクラスつてのを利用するのはかい？」

「確かに、ワシらだけが罰を受けようものなら『出来の悪いFクラスだけが処分を受けて他の優秀なクラスが忖度を加えられた』なんて風にみられるじやろうな。更に言えば大悟もFクラスゆえ、かなりの相乗効果じゃな」

世間の注目度を鑑みるに、そんなことは絶対にしたくないよな。

「なるほど。流石は雄二。汚いことを考えさせたら右に出る人はいないね」

「知略に富んでいると言え」

ま、これでもかつて『神童』なんて呼ばれていたヤツだからな。否定は出来ねえ。

「なら、まずは協力者の確保をしなきゃいけないな」

「そうだね。じゃ、まずはどこから行く？」

「当然戦力が一番揃っているAクラスだ。同じ手間ならそっちの方がいい」

「Aクラスならば昨日の合同授業で交流もあるしう。話もしやすいじやろうて」

「……………適切な判断」

今後の方針も決定したので、俺達は再び食事を始めた。ううん……、ちよつと味付け

が濃すぎないか？ この鮭の塩焼き。

「さて、Aクラスに説得に行くわけだが、一番は久保を説得するのが妥当だな」  
「賢明な判断だな」

久保は霧島、姫路に続く実力を持つ学年次席。おそらくクラスの男子をまとめているのもアイツだろう。

「よし、明久。行って来い」

「え？ 僕？」

当然雄二が指名したのは、我らがアキちゃんこと吉井明久だ。

「うむ。明久ならば適任じゃの」

「……………頼んだ」

「お前が一番成功確率が高いからな」

「あ、うん。別にいいけど。でも、どうして僕なの？」

「[[[.....]]」

全員が目を逸らした。真実は時として人を悲しませる。

「あ、あのさ。なんだかすごく嫌な感じがするんだけど、本当に大丈夫だよな？」

「……明久。この世から性に対する差別なんてモンがなくなればいいよな」

「い、一応久保はお主に悪意は抱いておらんと断言できる」

「.....彼に悪気はない」

「なんで三人ともそんな奥歯にものが挟まったような言い方をするの？」

ホントのことなんて言えるわけがなからう。

「明久、大丈夫だ。この中ではお前が一番久保に好かれている。自信を持って」

「あ、うん」

「.....ただし、いざというときはこれを使え」

「俺からも渡しておく」

俺はポケットからそれを取り出して明久に渡した。同志も何かを明久に渡す。

スタンガン（二十万ボルト）

スタングレネード（本場もの）

「ねえ、どうしてお願い事をして行くだけなのにこんな物騒なものを持たされるの？」

「一万が一だ」

「そ、そう……それじゃあ行ってくるね」

そして、明久は久保のいるテーブルへと向かっていった。

明久……最悪貞操だけは守り切るんだぞ。

—— s i d e 明久

「ごめん皆、失敗だったよ」

肩を落として、僕は皆のいるテーブルへと戻ってきた。

結局、久保君は僕をお願いを聞いてはくれなかった。それどころか『女生徒の身体を

見ようとする考えそのものが不潔』なんていう軽いお説教まで受けるという始末に終わってしまつたのだ。

でも、去り際に『……人として間違つたこと、か……』つていう呟きが聞こえたけど、なんだつたんだらう？

「そうか。まあ、無事で何よりだ」

「いや、そんな危ないことはしてないんだけど」

そうやって心配するんならもつと別の時にしてほしいもんだ。

「しかし、こうなると他のクラスとの交渉を迅速に進める必要があるな」

「それはそうだけど、今は一応授業中だよ？ 先生の見回りだつてあるし」

「それはわかっている。だが、全クラスに声をかけるとなるといくら大悟やムツツリーニを以てしても、休み時間程度じゃ全然足りないからな。何としても抜け出すしかない」

「しかも俺達の担当は鉄人だからな。そう簡単にはいかねえだらう」  
「ああ、だがそれでもどうにかする」

雄二が鋭い目つきで鉄人の隙を狙っている。すると、

「こらつ。アンタたち、また何か悪巧みしてるでしょ」

僕らに近づいてきた人影がいた。少し離れた席で自習をしていた美波だった。

「美波、別に僕たちは悪いことなんて考えていないよ?」

「そうだけ。もう散々痛めつけられたからな。流石に懲りてる」

「はあ……。今更アンタたちに問題を起こすな、なんて無理を言う気はないけど、よりによって覗きなんて……。少しは覗かれる方の気持ちを考えてみたら?」

美波の言っていることは正しい。僕も脅迫を受けていなくて無実なのに拷問を受けていなくて姫路さんの胸がもう少し小さかったら考えを改めていただろう。

「よりによってお風呂の覗きなんて……。周りと比較されるし、隠すものはないし、パッドを入れることもできないし、寄せてあげること……」

「それって特定の個所を見られるのが嫌なだけだね?」

「島田。二次元じゃお前のその身体つきはかなり喜ばれるんだぞ? だからそう卑屈になるな」

「そんな台詞で励まされても嬉しくないわよ」

僕も今更取り繕う必要もないよ、と言おうとしたところ、雄二が目線を送ってきた。

『鉄人にマークされている。島田を遠ざけろ』

確かに、鉄人がずっとこちらを見ている。美波との会話で鉄人の警戒心を煽ってし

まったみたいだ。ここで目立ってしまうのは非常にマズい。ここは雄二の言う通り美波を遠ざけることにしよう。

さてさて……お、ちようどいいところに木下さんがいた。申し訳ないけど彼女を利用してもらうことにしよう。幸い大悟は秀吉と喋ってる。今の内だ。

「ねえ美波、ちよつと頼みがあるんだけど」

「ん？ なによ」

「コレをあそこにいる木下さんに渡して欲しいんだ」

と言って、僕は前にムツツリーニから貰っていた一枚の写真を取り出して美波に渡す。

「ふうん……。でもなんでウチなの？ アキか岡崎本人が行けばいいじゃない」

「いやあ、そうしたいのはやまやまんだけど、生憎僕らは覗きをしようとしたでしょ？

木下さんも警戒してるだろうし、同じ女子の美波が行った方がいいと思うんだ」

「あ、そういうことなの。ならしようがないわね。行ってくるわ」

そう言い残して、美波は木下さんのところに向かつていった。

『島田。どこに行くつもりだ？』

『いや、なんでもこの写真を木下さんに渡してほしいって言われて』

『そうか。ならこれは俺が渡しておこう。島田は自習に戻れ』



お、運よく鉄人が向かってくれている。またとないチャンスだ！

「明久、秀吉、大悟、ムッツリーニ。今だ。見つからないように脱出するぞ」

雄二が何かを話し合っている大悟&秀吉と自習のフリをしているムッツリーニに声を掛けた。互いの目を見て小さく頷く僕ら。

そのまま音もなく出入り口に向かい、廊下に出ていった。

『西村先生。ちよつと大悟のところに行つてきてもいいでしょうか』

『別に構わないが、俺はお前が岡崎を完膚なきまでに廻り殺さないか心配なんだが』

扉を閉める寸前、とてつもない寒気とそんな会話が聞こえてきた。どうやら例の写真——大悟がコスプレイヤーの女性とツーショットで写っているのが効いたようだ。

大悟ごめんよ。君の犠牲は無駄にはしないから。

## 第四十三問 女子風呂に突撃せよ！ 第三夜目

—— side 大悟

なんやかんやあつて強化合宿三日目の夜。

俺達五人は他クラスの協力を得るため、古今東西ゲームで明久を囮にしたり明久を嵌めたり明久を見棄てたり何故か優子に手首をねじ切られそうになったりしたがどうかやり過ぎし、その後は昨日と同じく午後の回復試験を終えて部屋に戻り、恒例の出撃ブリーフィングをしていた。

「結局、手を貸してくれたのはD・Eクラスだけじゃつたな」

「仕方ないだろう。Bクラスは代表が代表だけにまとまりがないし、Cクラスは代表が小山だからな。男子連中が尻込みするのも無理はない」

「特に小山さんは、大悟と折り合いが悪いもんね。Cクラスの皆もそれは知ってるだろうし」

雄二と明久の言う通りだ。

Bクラスの代表は、卑怯・卑劣でお馴染みのウンコ野郎、根本恭二。元々人望が無い

ようなヤツだったことに加え、前回のFクラスの試召戦争ではあれだけ根回しをしてい  
たにも関わらず負けた。恐らく今のアイツに発言力はなく、まともに従うような生徒は  
いないだろう。てことで不参加。あとアイツはあつさり敵に寝返りそう。

そしてCクラス。こっちは代表があの子のヒステリック女だ。ちよつとでも自分の意に  
そぐわないような行動を起こそうもんならすぐに怒鳴つて喚き散らかすヤツだからな、  
そりゃあ萎縮もする。下手に妙な真似は出来んか。

「けど、D・Eクラスが協力してくれるだけでもずつと状況が良くなったよ」

これでこっちの戦力はかなり増加した。更に女子側は時間とスケジュールの都合上、  
半分は入浴していなければならず、多くとも半分しかこっちの相手はしてられない。

勿論、今日も俺達男子が向かってくるだろうとは予測しているだろうから、向こうも  
それなりの戦力で迎えてくると思うがな。でも戦いにおいて、数の暴力というのは立派  
な戦術の一つ。今までの倍以上の人数で兵達を押しさえつけ、後は教師をなんとかすれば  
……勝機は十二分だ。

「……………」

「? どうしたの大悟、難しい顔をしているけど」

「……………なあ明久。お前の召喚獣の仕様は教師と同じなんだよな?」

「え? 僕の召喚獣? まあ一応《観察処分者》だからその通りだけど……………それがどうか

した？」

「そうか……いや、それが聞ければいいさ。特に深い意味はねえ」

「そうなの？　ならいいけど……あ、それよりも雄二、ここまで大きな騒ぎにすると女子の入浴自体が中止になったりしないかな？」

「それはないだろ。教師側にもプライドがあるからな。『覗きを阻止できないかもしれないので入浴は控えてください』なんて言うと思うか？」

「ああ、そっか」

「それに女子側もそんな理由で風呂に入れないなんてことは嫌だろうからな」

教師達としても生徒、しかも下心で動くようなヤツらに召喚獣を使った勝負で負けるわけにはいかないのだろう。

全く、いい迷惑だ。俺は三次元の裸など興味がないと言っているのに。

「それとこれは憶測だが……教師側はこの事態を好ましく思っている可能性があるな」  
「あ？　どういうことだそりゃ？」

雄二の説明曰く、この合宿の目的はあくまで『生徒の学習意欲の向上』である。召喚獣を使って戦うというこの学校のシステムであることを教師陣は逆手に取り、どちらとも勉強せざるを得ない環境に仕立てあげているのだ。

確かにそれなら理解は出来る。もし本当に覗きを止めさせたいなら今から俺達を見

張るなり拘束して変な真似を起こさないように立ち回る筈だからな。それをしないと  
いうことは、さっきの説明に加え『自分達の防衛線は絶対に破られない』という大層な  
自信の表れであることに他ならない。

「先生達も絶対抜かせない自信があるからって大胆な行動に出てるなあ」

「自信過剰なんだかそうでないんだか、これもうわかんねエな」

「ま、今はその考えが逆にありがたいがな。さて、そろそろ時間だ。ムツツリーニ。作戦  
開始時刻と集合場所は両クラスに通達してきたか？」

「……………問題ない」

作戦開始予定時刻は間もなくの午後八時、集合場所は一階にある大食堂。女子の前半  
組が丁度服を脱いで入浴を始める所を一斉突撃を仕掛ける手筈だ。

そこまですれば俺たちのやることは一つ。尻に火傷の痕がある女子を探し出して事  
の顛末を問い詰めてやるのだ。

「よし、それじゃ、そろそろ出るか」

「そうだね。他のみんなが待っているかもしれないし」

「既に身体は準備万端だ。いつでも行けるぜ」

伊達にここ数日間は優子にボコられてはいない。多少なりとも身体が強くなったの  
だろうか。

さて、そんじや戦場に向かいましたよか、と腰を上げた時、

「吉井つ、坂本！ 大変だ!!」

突然部屋の扉が乱暴に開かれ、須川が慌てた様子で飛び込んできた。

「おう、どうした須川。お前も早く定位置に——」

「違うんだ兄貴!! やられた！ 大食堂で敵が待ち伏せをしていたんだ!」

「何いいっ!?!」

「今は戦力が分断されて各階に散り散りになっている！ だがそれも長くはもたないぞ  
!」

「馬鹿な……!」

俺達は驚く。まさかこちらから仕掛けるつもりが逆に先手を打たれていたなんて思  
いもしなかったからだ。となると、事前に向こうは俺達の行動パターンを把握してい  
たことになる。

「……………情報が洩れるようなことはない」

「まさか、男子側に密告者でもいたつてののか!? だとしたら許さねえ!!」

「いや、その線は薄い。男子側にそんなことをしてメリットがある奴なんていないだろうし、仮にあつたとしても、向こう側には今日の俺達の行動に対処するためにそれ相應の準備時間がかかる筈だ。てことは……」

「予めこつちの考えが読まれていた……!?!」

明久が悔しげに呟く。

つまり、今日は俺達が戦力を増やして正面突破を図るという考えを見破られていたということになる。普通の人間なら昨日が正面突破で失敗していたから、今日は隠密作戦で来るだろうと考えて計画を立てるはずだ。それなのにこの作戦を読まれたということとは、相手は他以上に頭が切れ、司令塔である雄二の思考回路や俺や明久をはじめとしたヤツらの予測不能な行動をかなり熟知している人間にしかできない。

「この時点でそんなことが考えうる奴と言えば……」

「うむ。恐らく……いや、間違いなく霧島翔子と姉上じやろうな。流石は学年トップクラスと云つたところか」

「よつぽど雄二と大悟の覗きが許せないんだね」

「そんなア! だから俺は二次元の裸にしか興味はないとあれほど言つてるのに! これじゃまた俺も秀吉もボコられるの確定じゃないか!」

「な、何故ワシまで!? ……いや、否定が出来ぬ……」

「雄二、どうする!?! こうなると状況はかなり厳しいよ!?!」

「……………迷つてる時間はない」

「どうするもこうするも、こうなつては作戦なんて殆どないようなものだ。分断された戦力を一旦編成し直すしかない! とにかく出るぞ!」

「了解!」

そして、俺達は須川と共に戦場へと急いで向かつていった。

シーン……、

「……………」

ガチャ、テクテクテク……、スツ。

「まさかずつと気づかないなんて、ホントアイツらつて馬鹿。灯台下暗しつて言うけど、まさにこのことね……」



——side 明久

廊下に出ると、そこは既に戦場となっていた。

『このスケベども! 大人しくお縄につきなさい!』

『覗きなんてさせないからね!』

『くそおつ! どうしてこんなところに女子が?!』

『知るか! とにかく応戦しろ!』

徒党を組んで攻め込んでくる女子生徒を相手に召喚獣を喚んで応戦する仲間達。でも、その差は圧倒的だ。

Dクラス 小野寺優子 116点

化学 VS

Fクラス 朝倉正弘 44点

朝倉君の召喚獣が簡単に打ち倒される様子を見て、須川君が声を上げた。

「皆落ち着け! 召喚獣は俺たちに触ることが出来ない! 向こうが召喚をしても相手

をせずに突つ切ればいいんだ！」

言うな否や、女子の隣を駆け抜ける須川君。

「須川君、その判断はダメだ！ 気をつけなきゃいけないのは鉄人だけじゃないんだよ  
！」

「安易な野郎め！ それを敵側が考えてねエワケがあるかよ！」

慌てて大悟と一緒に声をかけるものの、須川君はすでに動き出している。もう間に合  
わない！

「Fクラス須川亮君ですね？ 特別指導室に連行させてもらいます。試獣サモ召喚モン」

女子の影から出てきたのは布施先生だった。召喚が行われているから向こうには教師が  
いる。その召喚獣を倒さない限りここを突破することができない。だからこそ僕らの作戦は戦力一  
転集中なんだ。いくら強い召喚獣でも、一度に相手にできる敵の数には限界がある。教師の  
数は生徒の数ほど多くないのだから、こちらの頭数さえ揃えばなんとかなるとい  
うのに……！

「マズいぜこりゃあ……ただでさえ総合的な実力は向こうの方が上だつつうのによ」

「……………全滅は免れない」

「分かってる! 全員聞け! とにかく一点集中でこの場を踏み切る! 俺達の後に続くんだ!」

「雄二! そつちは一番敵の層が多いよ!? 階段を降りた方が突破しやすいと思う!」  
「だからこそだ! 層の薄い方を突破しようとするのと逆に罠に嵌められる危険性が高い! ここは苦しくても一番危険な方向に進むんだ!」

そう言われてみると、向こうの戦力の分布は不自然に見えた。まるで階段の下に来てくださいといわんばかりに。雄二の言う通りこれは確かに罠が仕掛けられているかもしれない。流石だ。こんな状態でもきちんと考えを巡らせている。

「なるほど! よくあるRPGのダンジョンみたいなものか! 下手な隠し通路よりも王道通路の方がゴールに近かったりするもんな!」  
「ちよつと違うが、まあそんなところだ」

『よし皆! 坂本達に続け! 先生を迂回してこの場を逃れるんだ!』  
『一気に行くぞおーっ!!』

方法を向いていた全員の視点が一か所に集まる。そして、皆が同じ方向へ駆け出した。

すると、先程まで通路を阻むように立ちはだかっていた女子の軍勢は何故か左右に割れた。僕らの勢いに圧されたのか? いや、それにしてもあまりに諦めが悪すぎるよう

な……。

でも、今は余計なことを考えている場合ではない。僕らはその行為に甘えてその場を突っ切り、階段前の廊下を駆け抜けて、学習室へと続く廊下を曲がった。

「……雄二。待ってた」

「待ってたわよ、大悟……！」

しかし、現実はその易々と甘くはなく、待ち構えていた霧島さんと木下さんに出くわしてしまった。

しかも木下さんに至っては例のごとく瞳がどす黒く濁っており、手には例のエスカリボル○をもっている。驚きはしないけど凄く怖い。

「翔子。やってくれたな……！」

「優子、テメエ……！」

雄二と大悟の歯軋りが聞こえてくる。

これは特に雄二は悔しいだろう。咄嗟の判断でとった行動が相手の思惑通りだったなんて。

更に相手の読みがこちらを上回っていたなんて、この上ない屈辱のはずだ。

「……浮気は許さないと言った。それを身体に教えてあげる」

「……まさか大悟がここまでバカだったなんて思わなかったわ」

そう告げて、霧島さん達は互いに一步横にずれた。

そして、奥から現れた人物が一人。

「貴女達には社会のルールについてたつぷりと指導する必要がありますね」

「なっ……アンタまで参戦してくるとは……!」

「よりによつて、引率は学年主任の高橋女史か……!」

クールで知的な印象を持つその女性は、メガネのレンズ越しに僕らに厳しい視線を送っていた。高橋先生は基本的には鉄人と同じくどの科目も出来る人だから、恐らく総合科目で勝負してくる。そんな人が相手では、一科目なら教師以上の点数を稼げるムツツリーニや大悟でも勝ち目はない。

「雄二、ここは撤退を」

「ごめんね。そうはいかないんだよね」

「っ、工藤さん……!」

「やつ、頑張ってるね吉井君」

来た道を振り返ると、白々しく工藤さんが手を挙げている。そして当然のようにその後ろには保健体育の大島先生。更には社会科目の落合先生もいた。これではもうムツツリーニと大悟は封じられてしまったも当然だ。

「アキ。アンタあれだけやってもまだ懲りてないようね……!」

「明久君。そこまで見たいのなら、どうして相談してくれなかつたんですか?」

僕の前にはお馴染み美波と姫路さんのコンビ。高橋先生が控えている以上は勝負は総合科目。美波の弱点を突くこともままならない。この戦いは完全に僕らの負けだろう。

でも、だからと言って諦めることはできない! あんな写真が出回ったら僕の学園生活は灰色確定なのだから!

「皆! 最後まで諦めずに戦うんだ! 試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚!

召喚獣を喚び、戦闘の構えを取らせる。狙うは勿論高橋先生だ。あそこを突破さえできればまだ先はある!

「……………成程。あれが高橋女史の召喚獣か……」

「先生! アキの召喚獣は見かけよりずっと強いですから——」

「大丈夫です島田さん。心配には及びません」

余裕のつもりか、援護しようとする美波を片手で制する高橋先生。

でも、僕だつて召喚獣の扱いには他の皆より慣れてる! いくら学年主任とは言つても、上手くやれば……!

「よし、行けっ!」

僕の召喚獣が敵目掛けて弾丸のように駆け出す。向こうの召喚獣の武器は鞭。間合いがわからない以上、まずは相手にわざと攻撃させて、その射程距離を見定める!

そして、木刀を正眼に構えて攻撃に備えていると、

「……吉井君。あなたには失望しました。少しは見所がある子だと思つていたのですが」

すると、高橋先生の召喚獣が動いた。

スツと得物である鞭を構えたかと思えば、目にもとまらぬ速さでそれを振るう。その瞬間、突然僕の召喚獣の動きがピタツと止まり——その場に倒れた。

「「……はっ。」」

僕だけでなく、雄二や秀吉も呆気に取られる。一体何が——

ビシビシビシイイイツツツ！

「いったあああああつ!!」

その瞬間、僕の全身に鋭い痛みが走った。

「コレはすごい痛いっ！ さすがは拷問用の道具だよ!!」

鉄人の鉄拳や美波の拳骨とは違い、皮膚を切り裂くような痛みが全身にくまなく広がっていく。

学年主任      高橋洋子      7791点

総合科目      VS

Fクラス      吉井明久      902点

「な、七千点台だど!?!」

「圧倒的過ぎる!」

高橋先生の点数が明かされ、驚愕する雄二達。無理もない。戦っている僕でさえ比較



するのも馬鹿らしくなるほどに圧倒的な点差だったのだから。

「さて、それでは全員特別指導室に移動してもらいましょうか」

『ど、どうする坂本!』

『アレは強すぎる! 俺達の戦力じゃ勝ち目はない!!』

男子達が一斉にどよめく。

そりやそうだ。相手はこちらの予想を遥かに凌駕した化け物じみた力を持っている。それにあの召喚獣を完璧に操作する技術力、伊達に学年主任を務めてはいないというところか。流石の雄二も額に汗を伝わせている。

「雄二、このままじゃ……」

「……決まってるんだろ。こうなったら俺達に出来ることを全力でやるだけだ!」

すると、雄二は何かを決意したような顔になり、その場にいる全員に告げた。

「全員聞け! ここからはもう作戦もなんもねえ! 各自の意志で行動しろ!」

『っ!?!』

「自分を信じるんだ! お前らなら出来る。心で考え、頭で判断し、最も正しいと思う行動を取るんだ!」

『『……!』』

「以後、各自の判断に任せる!!」

事実上の撤退宣言が総司令から発せられた。

作戦の指示がなくなり、全員がそれぞれの判断で行動を決める。こうなると個人の力量が試される。どうやってこの場を逃れようとするのか、じっくりと見せてもらおう!

「そうか……なら、俺も好きにやらせてもらうぜ、雄二」

「!？」

すると、僕らの背後から聞き慣れた悪友の低い声が聞こえてきた。

振り返ると、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた大悟が僕らを両手で押しつけて堂々と高橋先生の前に歩み寄っていったのだ。一体何をするつもりだろうか？

「大悟、まさかとは思ってたが……本当にやるんだな？」

「おう、じゃなきやガラにもなくお前にあんな真面目な話はしねえだろうが。それに……俺もコレが一番やりやすい」

「そうか。ま、それがお前だもんな。だが無茶はするなよ。お前はこの作戦において大事な戦力の一つなんだからな」

「分かってるよ。だから後ろで黙って見てな」

そのままの姿勢で後ろにいる雄二にそう言う大悟と、やれやれと腕を組み肩をすくめる雄二。僕は二人が何の会話をしているのかがさっぱり分からない。

でも、ただ一つだけ確信が持てる考えがある。恐らくあのキモオタは——  
また無茶をやらかすに違いない。

その為、頭にはてなマークを浮かべながらも、ただ無言で大悟の背中を見つめていた。

「……何の真似ですか、岡崎君」

高橋先生がそう大悟に尋ねる。それに大悟は間を置かずに言葉を返した。

「いやあ、後ろで見てたがやつば強えな。あの召喚獣を一番使いこなしてる筈の明久が手も足も出ないなんて、流石は学年主任。あんなの見せられたら姫路や霧島の点数なんざ可愛く見えてくるぜ」

「見え透いたお世辞は受け取っておきます。ですがこちらの質問の答えにはなっていないね」

「そうか? いや、アンタならこの時点で察してくれると思ってたんですけどね。俺が何をしようとするのかをよ」

「まさか、次は貴方が私の相手をするつもりなのですか？」

「あー、まあ、そんなところだ。それに、色々試したいこともあるしな」

「何ですって……?」

あれだけの実力差を見せつけられているにも関わらず、普段と変わらない余裕の姿勢を見せる大悟を見て、高橋先生も眉をひそめた。

「……そこまで言うのであれば、勝負を受けましょう。ですが岡崎君。貴方の点数は大方把握しています。失礼ですが、吉井君ほどではないにしろ、実力が——」

バツ!

「——えっ?」

すると、高橋先生の表情が一変した。

「おいおい、アンタさっきの俺の発言を聞いてなかったのか? なら改めてちゃんと  
言ってやるよ——」

ドゴオツ!!

「俺は俺のやり方でやらせてもらうってんだよお!!」

その瞬間、高橋先生の召喚獣に、大悟の右拳が深く捻じ込まれた。

## 第四十四問 試してみな

——side 大悟

『『……………!?!』』

俺の突然の行動に、高橋女史だけでなく、霧島や優子など他の女子達や味方側の男子までもが唾然としている。

当然だろう。普通に考えて召喚獣に対し生身で攻撃を仕掛けられるとは到底考えないのだから。

「……………！ お、岡崎君?! 一体何を……………！」

流星は高橋女史。他の奴らよりもいち早く意識が戻ったようで、目を見開きながら驚愕の言葉を放つ。彼女の召喚獣も吹っ飛ばされたものの、すぐに体勢をやはり生身の拳じゃ大したダメージは

それに対して俺は、ニヤリと小さく笑みを浮かべて返した。

「おいおい高橋女史、ぼさっとしちやアカンですよ。もう闘いは始まってらんすから」  
「た、闘いって、どういいう——」

「どういう？ そんなの——こういうことだっただってんだよ!!」

俺は再び強く脚を踏み込み、素早く高橋女史の召喚獣に肉薄する。

そのままの勢いを利用しての下段回し蹴り。相手の召喚獣に回避する隙を与えず、そのまま廊下の壁に向かって吹っ飛ばした。

「っー、この……!」

「甘いッ!!」

召喚獣は反撃とばりに、自らの得物である鞭を繰り出してくる。が、すかさず俺は膝を曲げ、下半身に力を込めて上体を重くしつつ右肘でそれを受けた。

が、人間の遥か何倍もの力を持つ召喚獣の攻撃だ。鍛えてるとはいえまるで鋭い刃物で斬りつけられたような痛みが腕から全身に伝わってくる。

「ぐっ! 痛え!! ……はは、流石は教師の召喚獣。伊達じゃねえな……!」

「だ、大悟!! 一体何してるんだよ!! 生身で召喚獣を殴るなんて!」

「ち、血迷ったのかお主!!」

「……………自殺行為! (コクコク)」

「まてお前ら。これはバカのアイツなりに考えた策なんだ」

「なんじゃと!!」

「え? ちよ、ちよつと、どういうこと雄二?」

後ろの雄二のあまりにも落ち着いた姿勢に、明久達が見なくとも分かるくらいに動揺している。そう、雄二の言う通り、俺の今のこの行動は突発的なものではなく、ちゃんとした“策”に基づいているのだ。

と言つても、頭の無い俺が考えたものだから作戦とも呼べない代物だな。

「なあ明久。俺は昨日お前に召喚獣のことについて訊いただろう？」

「あ、うん。確か僕の召喚獣と教師の召喚獣は仕様が同じなのかつて言つてたね」

明久の言葉にそうだろう、と返す。

コイツは他のヤツらとは違い“観察処分者”という肩書きを持つ生徒だ。それは自身だけではなく召喚獣にも影響を及ぼし、特に一番の特徴は教師の雑用をやらされるという名目のもと物理的干渉が可能になり、物体に触れることが出来るのだ。現にこれまでこの能力によつて窮地を脱した経験が何度もある。

だが、俺は見ていくうちに気づいた。物体に触れるというなら——明久の召喚獣は人間にも触れられるということに。

でもこの試召戦争では基本的に召喚獣同士で行うものであり、そもそも人間と召喚獣じゃ力の差がありすぎて勝負にもならないから、さして重要なことではないだろうと思つていた。

「でも、僕と先生達の召喚獣の仕様が同じなのと今の状況がどう関係あるのさ？」



「何言つてやがる明久。むしろ関係大有りだ」

「へ？」

「よく思い出せ。お前はそれが原因で一度痛い目を見ている筈だろう？」

「痛い目つて……うーん、特に何も無かったと思——あつ!!」  
でも違った。

確かに召喚獣は普通の人間じゃとても勝てるような代物じゃないことには変わらな  
い。しかし、物事にはイレギュラーというものが付き物であるように、この絶対的概念  
を覆す存在がいたことをこの強化合宿の中で思い知らされた。

「——鉄人!!」

「その通りだぜ、明久」

そう、それは何をかくそう鉄人こと西村教諭だ。

ヤツは一日目の女子風呂突撃作戦において、最終防衛ラインとして立ち塞がり、明久  
と対決したのだが、なんとヤツは生身で対峙したばかりか、意図も容易く明久の召喚獣  
を打ち倒してしまったという。信じられない話だ。

いくら鉄人がバケモノじみた戦闘力を持っていて、明久の点数が低かったとしても戦

闘力の差は召喚獣にある。更に明久は「観察処分者」であるために、他よりも召喚獣の扱いに慣れているハズなのだ。それでも鉄人はそれを叩き潰し勝利した。決して有利な戦況では無いにも関わらずだ。

これは単にヤツが強すぎるからという単純な理由だけで済むものなのだろうか？

俺は事の顛末を明久からそのことを聞いた時からずつと疑問に思っていた。

「確かにあの時、僕は完膚なきまでに叩きのめされたよ。痛かったなあ……」

「そうだ。いくらお前がどうしようもないくらいに馬鹿とはいえ、この学年で一番召喚獣の扱いを心得ている。それでもなお鉄人には敵わなかった。だがそれは単に鉄人が怪物並の戦闘力を持っているだけだからじゃないと俺は思ってたんだ」

「馬鹿は余計だよっ！ でもそれだけじゃないって……じゃあ、他に一体何があるっっていうんだよ、大悟？」

「同感じゃ。ワシらではそれ以外に考えがつかぬぞ」

「……………（コクコク）」

三人が後ろから尋ねてくる。仕方ない、教えてやるとするか。

俺は小さく笑みを浮かべてみせる。そう、鉄人が召喚獣に黒星を挙げさせた最大の理由は明久が弱いからでも怪物じみた強さからでもない。俺が導きだした答えは——

「戦い」という「場数」の違いだよ」

学年主任 高橋洋子 7760点

総合科目 VS

Fクラス 岡崎大悟 NONE

「さ、てことで早速始めましょうや。高橋先生」

召喚獣の前に、俺は足を肩幅くらいまで開き両拳を頭上で強く握り締め、  
久しぶりに構えた。

『な、なんだあの兄貴の姿勢は!?!』

『見たことないぞ?!』

「あの構え……あれは大悟が喧嘩をする時に必ず用いておったものじゃ」

「……………気迫と威圧感が凄い……!」

後ろが騒がしいが特に気にもとめず、俺は視線を高橋女史とその召喚獣のみに集中する。

無論こちらの勝ち目は未だに少ない。だが俺はこのまま大人しく敗北を受け入れるつもりは毛頭ない。負け戦なら負け戦なりの足掻きつてのを見せてやるぜ!

「……仕方ありませんね。本来なら教師が生徒に危害を加えることなど絶対にあつてはなりません。が……今回ばかりは例外としましょう。それに、西村先生からも『多少の教育的指導』をしてもよいと言われていますから」

「つ！ 先生、でも大悟のアレは——」

「心配には及びませんよ。木下さん」

優子を手で制し、高橋女史は再び冷たい視線を俺に向ける。

それに呼応するように彼女の召喚獣も得物を構えた。

「フン、その上からの態度……アンタ、自分が敗けるかもなんて想像すら一片もしてねえだろ？」

「当然です。自慢するわけではありませんが、今のこの状況……私と岡崎君の間には絶対的な差があります。むしろ負けることの方が遥かに難関だと思いますが？」

「いいねえ……そういう自信に満ち溢れたヤツは嫌いじゃない」

驚いた。大抵の人間は俺を知らなくとも構えただけでビビったり竦み上がったりするのが殆どだったが、彼女は全くと言っていいほど動じてない。

ていうかそもそも勝負にすらならないだろうなど、高橋女史は考えているかも知れねえな。まあ無理もないが。

「来なよ。アンタのその召喚獣の腕前で……どこまで俺を追い詰められるのか……試してみなあ!!!」

「!! 虚仮威しを!」

俺の挑発とも取れる発言に、高橋先生の目元が鋭くなった。それと同時に召喚獣も動く。

そしてそのまま突撃してくるのかと思いい警戒していると、予想通り直線上から鞭をしなければ勢いをつけたかと思いきや、その鞭が視界から消えた。先程の明久戦同様、あまりの速さ故に視認すら出来ないのだろう。

そして鞭は、空を切る音と共に、俺の頭部めがけて叩きつけられ——

「大悟! 危ない!」

「遅いです! いきなさい!」

「恋のラブリー☆顔面砕き!!」

——る直前に、俺の拳が先に召喚獣を捉えた。

「何!?!」

軌道がずれたのか鞭はあらぬ方向に行き、召喚獣も無防備に空を舞った。

「もういつちよ!! 恋のラブリー☆肋骨粉碎パンチ!!」

瞬間、俺は素早く五段突きを叩き込む。

まともに食らった相手の召喚獣は、体をくねらせそのまま大きく壁に激突した。

『嘘でしょ?! 高橋先生の召喚獣が吹っ飛ばされてる?!』

『そんな、あり得ない……!』

「どうした高橋先生? 明久の時より随分手こずってるようだぜ?」

「くっ! この……まだです!」

しかしダメージなど無いようなもの。すぐに召喚獣は立ち上がり、再び俺に攻撃を仕掛けてきた。

今度も鞭は視認できないほど速い——が、速いだけだ。それが対応出来ないワケじゃない。俺は重心を下げて姿勢を保ち、両腕をクロスさせて防御の構えを取った。

バシン! ビシン!

「うぐっ?! く、くうううっ……!!」

全身に降りかかる想像を絶する程の痛みに、歯を食い縛って耐える。明久と違ってフィードバック機能によるある程度のダメージ軽減が無く、受けた攻撃がそっくりそのまま俺に来るため、衝撃も負担もヤバイ。

そもそも鞭というのは、本来殺傷を目的として作られてはおらず、主に拷問などの身体的苦痛を与える為のアイテムとして開発された代物。それ故に武器としてはあまり効率がよいとはいえない筈だ。

だがそれを人間の何倍もの召喚獣が使えば話は別。威力も苦痛レベルも段違いだ。気を抜いたら倒れちまいそうだ。

「……流石に体鍛えてても、召喚獣の攻撃はかなり効くなあ……！」

「僕の召喚獣のフィードバック作用のダメージ軽減があつても悶える程だったあの攻撃を、腕だけで受けてるなんて……!?!」

「……………凄まじい防御力」

「見ているこつちまで腕が痛くなってくるの……じやが」

「ああ……大悟の野郎——全然余裕な顔してやがる」

鞭打部位の皮膚は剥がれ、肉が裂け、血が滲む。だが、まだそれだけだ。折れたりしていなけりや充分。逃げるつもりなど毛頭ない。何故なら既に「俺の喧嘩は」後退」というネジをとつくの昔に外してあんのさ！

それに、この程度の鞭打なんかより——いつもくらつてる優子の折檻の方が全然痛え！

「効くなあ……流石は学年主任!! 骨があるじゃねえか……！」

「流石の岡崎君でもここまで太刀打ちは出来ない筈……そろそろ降参した方が身の為ですよ？ 生徒を傷つけるような行為は私として、出来ればたくはありませんからね」

「……その言葉、そっくりそのまま鉄人に訊かしてやりてえな……そうだよな。高橋先生の言う通り——」

「なら、このまま大人しく——」

ガシツ！

「傷つけられる前に——勝負<sup>ケッ</sup>をつけなくっちゃあな……！」

「!?」

「油断したな先生……！」

俺は高橋先生が見せた一瞬の隙について、鞭を両手で掴んだ。

そのまま力を込めて勢いよく自分の方へと鞭を引っぱる。それに伴って高橋先生の召喚獣も鞭の柄を掴んだ状態で引き寄せることに成功した。

「くつ、小癩な真似をしますか……！」

「戦いに小癩もクソも無いんですよ——オラア!!」

そのままカウンターとばかりの強烈な右ストレートを顔面に叩き込む。



召喚獣はその衝撃で再び敵陣へとブツ飛び、得物である鞭を放り投げた。

学年主任 高橋洋子 7660点

総合科目 VS

Fクラス 岡崎大悟 NONE

やっぱり、ここまでやっても蚊ほどのダメージしかないか……。

『ウオオオ！ すげえ！ 兄貴が学年主任の召喚獣相手に押ししてるぞ！』

『流石は俺達の希望の星だ！』

『いいぞー！ 兄貴イイイイ！！』

「す、凄いよ雄二!! 大悟の動きが高橋先生の召喚獣を上回ってるー！」

「ああ、しかもあのストリート……攻撃が小さい的の召喚獣に確実にクリーンヒットさせてやがる！ コントロールも流石だな大悟！」

「こんな馬鹿なことが……」

何かの間違いだ、と言わんばかりの表情をする。そりやそうだ。普通の人間の動体視力じゃ召喚獣のスピードもパワーも越えられるワケがないのだから。

…が、それはあくまで性能故の憶測に過ぎない。それは何故か？ 本来召喚獣という

システムは対人時のことなど全く考えておらず、あくまでも召喚獣同士を戦わせるという前提条件で立てられているからだ。

「高橋先生。確かに人間と召喚獣じゃその力は雲泥の差だ。それは認めざるを得ない」  
「！」

「だが戦いつてのは、”力”と”性能”だけで押しきれれるほど甘つちよろいモンじゃない。さっきの召喚獣の操作とアンタの様子を見て気づいたが——高橋先生。アンタ……喧嘩”も一つすらししたことないだろ？」

「！ それは……」

高橋女史の表情が揺らぐ。どうやら凶星の様だ。

先程から高橋先生の召喚獣は、ただひたすら俺に向かって攻撃してくるように動いていた。一度俺からの攻撃を受け、その行為は既に見透かされているにも関わらず真つ正面から突っ込み、得物を振るうだけ。これがもし不良やチンピラとの喧嘩であつて、相手が高橋先生の召喚獣のような動きをしたなら、意図も容易く振じ伏せれる。何故なら喧嘩を含む全ての”戦い”において、敵の初見の動きやスタイルは二度とは通用しないのがセオリー。

一度やったゲームは二週目以降になると簡単にクリア出来るよう（例外もある）なものだ。そしてそれをする人間というのは、その概念が分かかっていない者、もしくは知ら

ずにいる者——つまり、戦いという行為自体に慣れていないことに他ならない。

更に付け加えるなら、そもそも召喚獣というシステムに頼っている事が大きい。

あれはあくまでも自分の知力を召喚獣というものに置き換えて使用するモジュール化したもの。つまり召喚獣を用いるということは、戦っているのは自分であって自分では無いという矛盾じみた事実になる。例えるなら、ゲームで自分そっくりのアバターを作ってバトルするようなものだ。あれだって”本人”ではなく、”本人自らの手で造り上げた本人像”に過ぎない。自分はただそれに命令して思うがままに動かしているだけ。召喚獣も同じだ。

いくら殴られ、蹴られ、傷つけられようと決して自分にはダメージがない。しかもそれを操作するのは戦争どころか”殴り合い”すらも大して経験したことのないド素人共だ。何が”戦争”？俺から言わせればこんなのは”戦争ごっこ”だ。

つまり召喚獣を操れば、自分の技量は関係が無い。つまり——喧嘩の素人でも同じように戦えてしまうことになる。

しかし、ただの一般人が鋭利で扱いやすいナイフを携えたところで、ジャックザリッパを殺せるのか？ 答えはノーだ。

だから鉄人は明久に勝てたのだ。ヤツは確か学生時代レスリングだかなんだかをやっており、かなりの成績を挙げたと聞く。そして今も現役でトライアスロンをやっ

る。

いや、たかがレスリングだろ？　と思われるかも知れないが、俺はあれほど実戦に基づかれた格闘競技はないと思ってる。押し技、投げ技、掴み技、絞め技などあらゆる総合的格闘技術を用いて戦うのだ。実際、他の格闘技経験者がレスリングをやっていることも珍しくないからな。

さっきの例えを借りるなら、鉄人はジャックザリッパー。明久は高性能なナイフを持った一般人となる。

つまりヤツは、戦いというものが何なのかを知っていて、反対に明久はそれを知らなかった。これが先程言った“場数の違い”であり、二人の勝敗を分けた大きな原因だと考えている。

「今のアンタは俺を優に超える力はあるけども、それを最大限に活かせるだけの知識と技量——所謂“経験値”が足りなさすぎるんだよ。例えるなら、格ゲー初心者がいきなり高難易度キャラを使うようなもんだ。」

「なんですって……？」

「性能は凄まじく、さほど知識が無くてもそこそこ戦える。だが———決してプロゲーマーには勝てない」

そして俺は再び先程と同じ構えを取り、臨戦態勢に入った。

「覚悟しな…俺が二次元と同様真剣に打ち込み、毎日欠かさず練り上げ、多くの腕自慢バカ共を叩き潰してきた格闘技術の粹!! たっぷりと味わってみるがいい!! 高橋女史!!」

もうここまで来たのなら引き返すという選択肢はない。

それに…:…あそこまで明久達に啖呵を切ったんだ。こんなところで性根を上げてたら、めるたんをはじめとする全ての嫁達に愛想を尽かされてしまうではないか! そんなのは男として断じて許されない!!

見ていてくれ皆! この戦いを、俺の勇姿を、そして完全なる勝利を——画面の向こう側で応援してくれている君達に捧げようっ!!

——計算もクソもないっ! 全てをこの肉体に委ねるっ!!

「いくぞ——歯あ食い縛れえええ!!」

信じられない。

今の状況を言葉にするのなら、僕の語彙力ではこれが限界だ。

「うおおおおおおお——っ!!!」

野性味溢れる猛獣の様な叫び。鬼のような眼光。

鉄人に劣らないその限界まで鍛え込まれたであろう鋼の肉体から繰り出される殴打の雨。反撃のタイミングも何も無い。その先には——この場で最も強い筈の高橋先生の召喚獣が防戦一方になっている二度と見れないであろう光景があった。

「驚いたかの、明久？」

「秀吉……」

茫然自失としているところに、秀吉が僕の肩に手を置いて言った。

「ワシも、大悟のあんな姿を見るのは久しぶりじゃ」

「同じくだ。あの野郎、全く衰えちやいねえな……」

慈しむような視線を向ける雄二と秀吉。けど心なしか表情は嬉しそうだ。

その横には僕同様言葉が出なくなっているムツツリーニがいる。

「凄いね……いや、もう凄いとかっていうレベルを超越しているよ」

「……………普通じゃない」

「その初々しい反応、懐かしいのう。ワシも初めて大悟の喧嘩を見たときはそんな反応をしたものじゃ」

「まさしく、閻魔大王」の本領發揮つてところだな。もう昔のことなのに身体が震えやがる……」

雄二の口から告げられた閻魔大王というワード。これは確か同じ地区の不良達によつて大悟に付けられた異名だった筈だ。

「あやつは喧嘩だけじゃなく、昔から空手。ボクシング。柔道。合気道。中国拳法などといった格闘技や武術にもかなり精通しているからの。実力は折り紙つきじゃ」

「ああ。ここら一带の不良や喧嘩自慢共は一人残らず大悟にブツ潰された。未だに病院から出てこれねえヤツもいるらしい。射殺するような眼力と無類の喧嘩の強さ。そして一度自分に向かつてきた野郎は、例え許しを乞おうが泣きわめこうが倒れ骸と化すまで一切情け容赦のないやり方から」閻魔大王」と呼ばれるようになったんだよな」  
とても女子小学生に平気で土下座するような二次元オタクとは思えない話だ。

「やけに詳しいね、雄二」

「俺も一度大悟に完膚なきまでやられてるからな。嫌でも知っちゃうんだよ」

「うむ、あの時か……その時は姉上と共に現場にいたからよく知っておるわ」

「……………最早伝説（コクコク）」

そういえば、雄二も大悟ほどではないが、昔は喧嘩の腕で広く名を馳せてたんだっけか。

あまりそういったことに疎い僕でも、雄二と大悟の喧嘩は当時耳にしていた。それどころかここら一带の中学に通う人で知らない者はいないくらい有名な出来事として残っている。

「それに、お前もアイツの強さを身をもって知つただらう？」

「あはは。そんな事もあつたね。懐かしいなあ」

雄二の言う通り僕は一年生の頃、とある事が原因で大悟と本気の殴り合いに発展するまでの大喧嘩をしたことがある。勿論僕程度が敵うわけもなく、気を失う直前までボコボコにされた。

最終的にはその原因は大悟を恨む当時の三年生の仕業であつたことが判明し、僕らは和解という結果に終わった。けどもしあのまま続いていれば僕は間違いなく自然治療不可能なほどの大怪我を負い、病院送りにされていただろう。

「つー！ どうしてこれほどの強さを……!？」

高橋先生が苦虫を噛み潰したようにそう呟くのが聞こえる。

その言葉通り、召喚獣はどうにかして逃げようとするもののそれより速く大悟の攻撃が放たれている為、回避が不可能になっていたのだ。



「簡単なことです……何かを決意した人間つてのは特別な力を發揮する。俺はあの日の決意から今日までの15年間、度重なる努力や苦勞を重ねて己を磨き続けてきたんですよ！ それこそ血の滲むようなね……!!」

「あの日の決意……!?!」

「そうです。俺はあの時……彼女等」と出会ったことで、自分の中の世界が変わったんです。そして心に誓ったんだ——」

「——二次元の女の子達は俺が守るんだってなあああ!!!」

「……………は?」

一瞬ポカンとなる高橋先生。

だが大悟は構わず続ける。

「めるたんをはじめとする全ての二次元の可愛い女の子達を守れる存在……つまり！ 美少女&ロリツ娘達とあんなことやこんなことやキャツキャウフな展開が繰り広げられるハーレム系主人公として相応しい男になる為だ!!! そして俺はこの強靱な身体と卓越した技術を手にいれたのさ!! そう、今の俺を突き動かしているのは覗きを達成するという目的だけじゃねえ——俺を変えてくれた二次元に対する絶対的な“愛”な

のさ!!!  
!!!

なんだろう、力をつけた理由が予想以上にしようもなさすぎて逆に凄いと思う。そもそも二次元の女の子にはどう頑張っても会えないからね？

「長年の鍛練によつて培われた打撃の境地!! 決して揺らぐことのない信念!! 彼女達への真なるラブ!!! たかが召喚獣の性能と素人の反射神経で追いつけると思うなあつ!!」

「な、なんてふざけた考えなの……!?!」

「ごもつとも、とは敢えて言うまい。」

だが大悟にとつてはそれが原動力だから仕方ないかな。

「愛は男を強くする!! これが岡崎大悟の力だああああ!!!」

大悟のラッシュが更に加速する。

「くつ……これでは埒があきませぬ。誰か西村先生を呼んできてください!!」

「わ、分かりました!!」

高橋先生が後ろで見ていた女子生徒にそう指示を出す。

ま、まずい! 鉄人はおそろくまた女子風呂の前で防衛を張っている。もしここにヤツが合流してしまえばいくら大悟とはいえ勝ち目は一気に無くなってしまふ!

「そうはさせるか! 野郎共、大人数で女子の行く道を阻め! 何があつても鉄人の下

まで行かせるな!!」

『『おうつ!!』』

すぐさま雄二が全員にそう通達し、仲間達が一斉に走りだし次々と女子生徒に勝負を挑んでいった。

科目は勿論高橋先生の召喚フィールドにより強制的に総合科目となっている。

「くつ! 工藤、高橋先生に加勢するぞ!」

「分かりました! つて、そこをどいて、ムツツリーニ君!」

「……………悪いが断る。同志の邪魔はさせない:試獣召喚!」

『俺も手伝うぞ! ムツツリーニ! 試獣召喚!』

『兄貴は俺達の最後の希望なんだ! 何があつても守り抜く! 試獣召喚!』

近くでは既にムツツリーニ達が工藤さん達を足止めしていた。

こうなつたら、僕もやれるだけのことをやらなくちゃね!

「俺たちも行くぞ、明久! 秀吉!」

「うん!」

「了解じゃ!」

雄二の号令に従い、僕達も戦地へと赴く。

目的は皆と同じ、鉄人の下へ向かおうとする女子の足止めだ。そして僕らが相手をす

ることになったのは、

「……雄二、そこをどいて」

「私達の邪魔をしないでください、明久君！」

「大人しく道を空けなさい、アキ！」

「秀吉…なんのつもりかしら？」

最早見慣れた顔ぶれの四人だ。

「そうはいかねえ。大悟があそこまで身体張ってんだからな！　なら俺達もそれに全力で応えるのが筋ってんだ！」

「雄二の言う通りだよ。だから姫路さん、美波、霧島さん、木下さん。ここからは何があろうと通さない!!」

「どうしても通りたくば、ワシらを倒していくのじゃ!!　馬鹿の意地というものを見せてやるぞい！」

「「全ては女子風呂の覗きの為に!!　試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>!!」」

僕らは召喚獣を喚び出す。

それを見て完全に僕らが退くつもりがないと理解したのか、霧島さん達も観念して召喚獣を出現させた。

|      |      |       |
|------|------|-------|
| Fクラス | 坂本雄二 | 1720点 |
| &    |      |       |
|      | 吉井明久 | 902点  |
| &    |      |       |
|      | 木下秀吉 | 961点  |
| 総合科目 | V S  |       |
| Aクラス | 霧島翔子 | 4741点 |
| &    |      |       |
|      | 木下優子 | 4279点 |
| &    |      |       |
|      | 姫路瑞希 | 4418点 |
| Fクラス |      |       |
| &    |      |       |
|      | 島田美波 | 989点  |

桁違いの戦力差。まさに月とスッポンと言ったところか。

「……雄二。浮気は許さないと言った」

「へえ……お姉ちゃんに逆らうの。なら大悟の前にたっぷりお仕置きしてあげるわね、秀

「吉」

「坂本君、明久君、木下君。覗きは立派な犯罪なんですよ？」

「そういえばアキには昼間のお礼もしないとね？」

戦闘態勢に入った四人。

正直凄く怖いけど、何とかその気持ちをグツと堪え彼女達に対峙する。

「「かかってこいやあああああっ!!!」」

そして、僕らの召喚獣と彼女達の召喚獣が肉薄した。

## 第四十五問 送り間違いはらめええええええ!

——side 明久

「ああクソツタレ……全身が焼けるように痛え」

「まさか教師が全員集合してくるとはな……」

「もう戦力がオーバーキルしてたよね……」

僕達は女子生徒&教師連合軍に三回目の敗北を喫した。

やはり元々の戦力に大きな差があつたというのが大きく、時間経過と共に次々とこちらの人数が減っていきやがて全滅。もちろん僕らも完膚なきまでに姫路さん達に叩きのめされた。

今夜一番健闘した大悟に至っては、鉄人を含む引率の教師が総動員し最後には召喚獣達に取り押さえられ教育的指導のもとボコられるという結果に終わった。

その後雄二は霧島さん、僕は姫路さんと美波、大悟は木下さんにそれぞれ口に出すのも憚るほど凄惨なオシオキ……もとい拷問を受けた。今後は当分姫路さんと美波の笑顔が夢に出てきそうだ。勿論悪夢で。

「教師なんかには負けるなんて、俺の二次元に対する愛が……まだ未熟だともいうのかあっ!!」

「大悟よ。その気持ちは分かるがテーブルを破壊するでない」

悔しそうにギリギリと歯を擦り鳴らす大悟。

いや、召喚獣に殴り勝ちする時点で十分凄いことだと思うけど。

「……………惜しかった(コクリ)」

「トランス状態の大悟と互角以上に張り合うなんて、もうあれは人間の域を超えてるよね……」

「ああ、全くだ」

最早あの化け物相手にタイマンで勝てるヤツなんてこの世にいないだろう。

ちなみに秀吉は姉の木下さんから拷問は受けていたけど覗きに関しては無罪放免だった。ま、女の子が女の子のお風呂を見たからといって犯罪になるわけじゃないから当たり前前だけど。

「じゃがどうする? このままではお主らは脅迫犯の影に怯え、且つ覗き犯という不名誉な称号を掲げられてしまうぞい」

「勿論諦める気は毛頭ない。残るチャンスは明日だけだが、逆に言えばまだ明日が残っ



ているんだからな」

「そうだね。圧倒的な戦力差だったけど、そんなのは僕らにとってはいつものことだし。こういう逆境を覆す力こそが僕らの真骨頂だよね!」

「よし、なら例のあれやつとくか。同志」

「……………オーケー(コクツ)」

「例のあれ?」

大悟の発言に僕が首を傾げていると、突然鞆からバスケットボール、丸眼鏡、付け髭を取り出した。いや、なんでそんなもの持ってきてるの?

するとムツツリーニが膝をついて項垂れるようなポーズを取り、大悟はバスケットボールを持って立ち上がった。

「最後まで…希望を捨てちゃいかん。諦めたらそこで試合終了だよ」

「……………先生。覗きが…したいです……………! (ガクツ)」

すると、今度は唐突に秀吉が歌い出した。

「世界が終わるまではく♪」

「おい馬鹿やめろ!」

「安○ネタは色々アウトだ!」

慌てて僕と雄二は二人を止める。危なかった…もうちよつとで様々な方面の人達が

ら怒られるところだった。

大悟とムツツリーニは「折角名シーンを再現してたのに……」と不満そうな表情を見せながらしぶしぶそれらを片付けていた。いや再現するにしても相手を選ぼうよ。危うくこの小説ピンチだったんだからね？

「あと秀吉も乗らなくていいからね？」

「す、済まぬ……あのシーンを思い出したら無意識に……」

申し訳無さそうに言う秀吉。ていうかスラム○ンク読んでたんだ。

それにしても、相変わらず声真似が上手いなあ……後でこの五人でカラオケに行こう。絶対に楽しくなる。

「つたく、昨日のサクラ○戦といい、お前らはもうちょっと自重しろ」

「だが断る（キリッ）」

「断るな！」

某スタンド使いの漫画家の有名台詞を吐く二人。

ちなみに僕もジョ○ヨは大好きだ。

「ワシは五部が一番好きじゃの」

「僕は三部かなー。やっぱり一番人気つてのもあるし、D○○もカッコいいしね」

「……………一部こそ至高。人間賛歌は……勇気の賛歌……………！」

「何を言う、やはり四部だろう。グレートですよ、コイツはあ! 雄二は?」

「俺か? 俺は二部が面白——ってそんなことはどうでもいい! それよりも明日の作戦内容について話すぞ!」

「二」「へーい」

### 閑話休題

「それで、今度はどんな作戦を考えているの?」

「正面突破だ」

「は? (威圧)」 ↑ 僕

「うっそだろお前 (呆れ)」 ↑ ムツツリーニ

「人間の屑がこの野郎… (憤怒)」 ↑ 大悟

雄二が自信満々にそう告げたのを訊き、僕らはもうダメかも知れないと思った。

「三人とも俺を罵倒する前に最後まで聞け。正面突破の基本スタンスは変えないが、その分事前の準備で考えがある」

「正面突破を続行するってことは、こっちの戦力を更に増やすってこと?」

「そうだ。向こうの戦力はもう頭打ちだ。あれ以上は戦力を増やせない。今日は負けた

が、おかげで相手の戦力を知ることが出来た。これは大きいぞ」

「……………他のクラスでの目撃情報も集めた」

「ていうかむしろあれで全力じゃないならキツすぎるがな」

大悟の言う通りだ。

ただでさえ今の戦況でもジリ貧なのにまだ全力じゃありませんでしたなんて無理ゲーもいいところだ。

「まずは向こうの布陣だが、教師を中心とした防御主体の形になっている」

「ああ、まさに鉄壁の守りだったよな」

「だがあれは強固ではあるものの無敵という訳ではない。色々と弱点もあるんだが、それがなんだかわかるか？」

「微塵も分からないね」

「大悟。チョコキの正しい使い方を教えてやれ」

「ほいよ（ブスリ）」

「ふぎやあああつ！ 目が、目があつ！」

大悟のチョコキが僕の眼球にデーパーキスをプレゼントしていった（詩的表現）。この野郎、全く躊躇いもなくクラスメイトの眼球を潰そうとするなんて血も涙もないのか。

「まったく、少しは考えろってんだ。よし、ムツツリーニ。あれを見せてやってくれ」

「……………了解」

雄二の言葉に従い、ムッツリーニがノートパソコンを準備し始める。

そこには昨日か今夜かの僕らの突撃作戦の様子らしき映像が映し出されていた。

「さて、これを見て何か気になる点はないか?」

「おかしいところ? うーん…見たところ特には…」

なにか不自然な箇所や違和感を探せと言われても全然分からない。

すると、秀吉が画面を凝視しながら言った。

「む、そういえば、やけに教師達は互いに間隔を開けてフィールドを展開しておるのじやな」

「んあ? あ、確かにそうだな…」

「ビングだ。秀吉」

「え、そうなの?」

「ああ、これこそが向こうの弱点なんだ。お前ら——《干涉》というものは聞いたことがあるか?」

雄二から出てきた《干涉》という単語。そう言えば、二日目あたりに須川君がそんなことを言っていた気がする。でもその時はそれがどういう意味なのか分からなかったから、すぐに忘れてしまったんだけど。

「なんだそりや、子供がよくイタズラでやるあの痛いヤツか？」

「それは浣腸だ」

「耳が遠くなること」

「それは難聴」

「地下チンチロ」

「それは班長！」

「……………下手だなあ、雄二君。ツツコミのやり方が下手つぴさあ……………（ニヤリ）」

「うるせえ！ あと似てねえ物真似はやめろ！」

「ならシルヴェスター・○タローンか？」

「……………新作は面白かった」

「それは恐らくラン○ーって言いたいんだな!? だからお前らは話を脱線させるな！」

「かしいかわいい?」

「もういいわ!!」

ツツコミきれなくなつたのか、そう二人に怒鳴る雄二。最後の答えはは多分南○だね。

このところ大悟とムツツリーニが揃つてポケるようになる光景が多くなつたなあ。

「つたく、話を戻すぞ。召喚獣を呼び出すフィールドにはさつき言った《干渉》というも

のがある。これは一定範囲内でそれぞれ別の教師がフィールドを展開すると、科目同士が打ち消しあつて召喚獣が消えてしまうというものだ」

「つまり、教師はある程度の距離を取らないと複数の人数を配置出来ないんだね」

「そういうことだ」

なるほど。だからあの時高橋先生以外の教師達も総合科目で勝負していたのか。もし召喚獣がいなければ大悟は勿論のこと、他の男子高校生の体力にも対抗する力は無くなるわけだし、干渉は最も避けたい事実なのだろう。

まあ、鉄人というイレギュラーな存在もいるけど。

「その現象と今回の大悟が引き起こした行為、を総合して判断すると、明日の向こうの戦力はこんな感じだ（カキカキ）」

雄二がテーブルに紙を広げて書いていく。

「あれ？ 高橋先生は今日と違う場所になるの？」

「確実に、というワケではないが、俺が向こうの立場ならそうする。絶対に通過する道に主力を置くのは定石だ」

「地下に続く階段の前か……ま、女子風呂に繋がる道はここだけだからな。ならそこに戦力を配置するのは当然だつてはつきりわかんかね」

「それなら、なんで今日もそうしてこなかったのかな？」

「あんた馬鹿ア!!」

「なんで!？」

いきなり大悟に罵倒された。ていうか君がそれやってもブサイクなだけだよ!

「恐らく圧倒的な力を見せてこちらの出鼻を挫きたかつたんじゃないか? ま、今回はその目論見は叶わなかったみたいだが」

「そうじゃのう。確かにあの点数は圧巻じゃったが、こつちにはそんなもの関係無く縦横無尽に暴れまくったヤツがおるのじゃからな」

確かに。向こうからしたら今回の大悟の行動はかなり予想外だっただろう。なにせコイツは今日、試召戦争の根幹を大きく覆してしまったのだから。

「でも、それでもまだ苦しい勝負だよ。鉄人と大島先生(保健体育教師)と落合先生(社会科教師)と高橋先生(学年主任)のいる場所は絶対に通らないといけないし」

「その中でも特に鉄人だ。ヤツは最後の砦として女子風呂の前に陣を敷いてるだろう。だが今日見て分かった通り、生身の人間じゃ打倒は不可能だ」

「ありや無理だ。人間とやつてる気がしない」

喧嘩で名を馳せた大悟でさえこの台詞だ。

もう一体どんな手を使えばいいのだろうか。

「そこで、だ。鉄人の相手はあるヤツに任せようと思う」



「あるヤツ?」

「お前だよ明久。お前が鉄人と戦って勝利する。これはどうあつても外せない条件だ」  
「それって僕が” 観察処分者 ” だから?」

「そうだ。人間は武器を持って初めて猛獣と対等になる。その武器を持っているのは明久、お前しかいない」

確かに僕の召喚獣は他とは違い物や人に触れる。そうなると必然的に鉄人の相手をするのは僕であるのは必然だ。

「でも、それなら大悟の方が可能性はあるんじゃない?」

「本来ならそれが理想なんだが…向こう側もそれを一番警戒してるだろうからな。必ず対策をしてくる筈だ」

「てことで明久。ラスボスの相手は頼むぞ」

うーん…:大悟でも歯が立たない化け物を僕が相手するのか。イマイチ自信が持てないな。現に一度負けてるし。

「じゃが、そうなると高橋女史の場所を無傷で通過する必要があるじゃろう?」

「ああ。大島はムツツリーニ。落合は大悟にやってもらおうとしても、高橋女史と戦うための戦力が圧倒的に足りない」

「俺が両方とも相手できればいいんだが…現実的に無理だ」

「つまり作戦を成功させるにはどうしてもA・B・Cクラスの協力が必要になる」

B・Cクラスは高橋先生まで辿り着くまでの陽動。Aクラスは高橋先生の討伐に必要だと雄二は言う。

「だから明日の作戦時刻まではその根回しに全力を注ぐことにする」

「でも、一度断られたわけだし、そう簡単にいくかな？」

「明久。よく見てみる。ここには文月の男共を動かせるだけの力を持つ存在がいるだろう？」

雄二はムツツリーニと大悟に視線を向ける。

確かに、この二人ならそれが可能だ。なにせこの二人は文月の裏経済を牛耳る二大巨頭『ムツツリ商会』『ダイゴブックス』の経営者だ。

特に大悟はその良質かつ色々な性癖に応じた商品と学生に優しいお手頃価格。どんな人だろうと客であるなら決して差別しないという徹底した運営方針の為、殆どの男子生徒（一部女子生徒も含むらしい）から信頼と人望を得ている。彼が本気を出せば全ての男子生徒を動かすことも夢じゃないだろう。

「てことで大悟、ムツツリーニ。頼むぞ」

「おうよ。俺達の腕の見せ所だけ、同志よ」

「……………任せろ、同志（グッ）」

そう言うと、ムツツリーニは何故か撮影機材の準備に取りかかり、大悟は自分の鞆をガサゴソと漁り始めた。

あれ、このくんだり前にもあつたような………？

「……今回はそんなにねえか……？」

そして大悟は鞆から何かを取り出し、床に広げた。

バサツ（レオタード）

バサツ（ビキニ（セパレートタイプ））

バサツ（ワン〇ース、ナ〇のコスチューム）

バサツ（スクール水着）

バサツ（間〇桜（黒化）のコスチュームセット）

バサツ（レースクイーン）

バサツ（セーラー服（スカート丈が凄く短い））

「これくらいしか用意がないな」

「お前にとつてはこれでも足りない方なのか!？」

いつからだろうか？ 大悟がコスプレ衣装を持ち歩いていることに違和感を覚えな

くなつたのは。

「…まあいい。これらを使って写真を撮り、なおかつそれを大悟にイラストにしてもいい、AとCクラスの野郎どもの劣情を煽る。間違いなく覗きへの興味を引き出せる筈だ」

やっぱりそういう作戦か。

「でも確かに大悟特製のイラストやコスチュームとムツツリー二の撮影技術なら効果は絶大だね。てことではいい、まずは浴衣から」

「あ、その次はレオタードかレースクイーンがおすすめだぞ」

「……………予想はしとつたが、やっぱりワシも着るのかのう……………」

コスプレ衣装を渡された秀吉はなんだか不満そうな顔をしていた。

「安心しろ。秀吉だけじゃない。姫路と島田にも着て貰う」

「え？ 雄二、工藤は呼ばないのか？」

「アホか。犯人の疑いがあるヤツを呼ぶわけ無いだろう」

「……………Ready?」

「Ready」

その後、大悟はいきなり地面に伏せて号泣し始めた。

どうやら工藤さんに例のエロゲキャラのコスプレをさせたかつたらしい。理由が理

由だから可哀想という感情がまるでおきない。

「雄二貴様ア……………俺の期待と夢を容赦なく踏みにしりやがって…末代まで呪ってやる……………」

「そんな下らん理由で俺の子孫を不幸にするな」

「下らん理由だど!? 貴様! 俺の愛するみるくたんを侮辱するのは許さ——」

「なら木下姉に今の発言をバラすか?」

「誠に申し訳ございませんでした」

相変わらず木下さんのことになると弱気だなあ。

「いや、ワシ一人で着るのが不満だとかそういうワケではないのじやが」

「ならいいじやねえか。別にコスプレぐらいもう慣れっこだろ?」

「むう…確かにそうじやが……………」

つまり不満はないワケだ。よかったよかった。

「それじゃ、ムツツリーニと大悟は引き続き準備をしてくれ。明久は姫路と島田に連絡を」

「オツケー」

雄二の指示に従って僕は携帯電話を取り出す。え〜つと、二人のメアドは……………つと。

カチカチとメールの文章を作成し、送信する。

【ちよつと話があるんだけど、僕らの部屋に来てもらってもいいかな？】

【分かりました。お菓子とか持って遊びに行きますね】

【別にいいけど、こんな時間にどうして？】

すぐに返信が来た。ふむ、姫路さんは大丈夫そうだけど、美波が少し警戒してるみたいだ。はてさて。なんて返事したらいいものか。

考えていると、三度僕の携帯電話がメールの着信を通知してきた。送信者は——須川君か。なんだろう？

【吉井。気になったんだけど、お前はなんで覗きにそこまで必死なんだ？ そもそも本当に女が好きなのか？ 坂本や木下や兄貴の尻が好きだって言ってた気がするんだけど】

こ、これはとんでもない誤解だ！ この文面を見ると僕は女の子よりも雄二と大悟に興味があるみたいじゃないか！ 特に大悟はガチムチの筋肉野郎だから誤解云々の前

に絵面が最悪だよ!　すぐにも認識を改めさせないと!  
なんで女子風呂を覗くのかって?　そんなの、決まっている!

【勿論好きだからに決まっているじゃないか!　雄二や大悟なんかよりもずっと!】  
少し熱くなりながらも送信ボタンを押す。やれやれ。どうしてそんなことに疑問を抱くんだろうか?　本当に僕の周りにはバカが多くて困——

【メール送信中…………… ↓ 島田美波】

——あれ?　おかしいな、メールの宛先の標示が間違っているぞ?　ちゃんと目を凝らして、

【メール送信完了…………… ↓ 島田美波】

「ゴ、ふっ」

送信先を見た瞬間、口からあり得ない音が出た。

いやまで、落ち着くんだ吉井明久。これは何かの間違いだ。そうだ、まずは冷静に

なつて送つた文章をもう一度ちゃんと見直してみてごらん？

【勿論好きだからに決まっているじゃないか！ 雄二や大悟なんかよりもずっと！】

なんて男らしくて力強い告白文だろうか。

「バカあつ！ 僕のバカあつ！ ある意味自分の才能にビックリだよ畜生！」

ここここイツは人生最大のピンチだ！ よりによって僕のことをウジ虫かサンドバッグとしか考えていない美波にこんなメールを送つてしまうなんて！

とにかく訂正のメールだ！ さっきのメールは事故だつてきちんと弁解しないと！  
「どうした明久？ さっきなにか悲鳴が聞こえたんだが——つとと！」

ツルン（雄二がバナナの皮で滑る音）

ドタツ（雄二が僕を巻き込んで倒れる音）

バキツ（雄二が僕の携帯電話を踏み潰す音）

「なにか大変なのか？」



「たった今貴様が作った状況がな」

僕の携帯電話は、雄二の足によって物言わぬスクラップと化した。メールや電話での弁明なんて明らかに不可能だ。

「ん? これはお前の携帯電話か。すまん。今度修理して返す」

「いや、今はそんなことどうでもいいから、とりあえず雄二の携帯電話を貸して!」

「ほらよ」

いかにも雄二が好みそうなシンプル形状の携帯電話を受け取り、すぐに美波の電話番号を探し始める。

坂本雄二のアドレス帳登録……………一件 ↓ 『霧島翔子』

「む。翔子のヤツ、また勝手に俺の携帯電話を弄りやがったか。機会音痴のクセに……………これでまた家でアドレス帳を入力しないといけないじゃないか」

「……………」

僕の中で何かが色々と終わってしまった。

「……………ねえ雄二。美波の番号って覚えてる?」

「逆に訊くが、お前は友人の電話番号なんていちいち覚えてられるのか?」

「そつか……、そりやそうだよね」  
カチカチカチ。送信……………つと。

【To:霧島翔子 From:坂本雄二】

もう一度きちんとプロポーズをしたい。今夜浴衣を着て俺の部屋まで来てくれ！

「うん？ 明久、俺の携帯で誰に何を送信し——ゴふつ。ななななんてことをしてくれるんだキサマ！」

「黙れ！ キサマも僕と同じように色々なものを失え！ どりやああ——っ！」

「おわあっ！ 俺の携帯をお茶の中に突っ込みやがったな!? これじゃ壊れて弁明もできないじゃねえかこのクズ野郎！」

「そう！ その気持ち！ それが今僕が雄二に抱いている気持ちだよ！」  
「何をわけのわからんことを！」

そのままお互いに胸ぐらを掴んで睨み合う。

くそっ！ 肝心なところでこの馬鹿はいつつも僕の邪魔ばかりしやがって！ この件が終わったら全身全霊を持ってシバキ倒してやる！

ここうなったら……………アイツにお願いするしかない！

「大悟! ちよつといいかい!」

「んあ? なんだ明久」

横でムツツリー二と一緒に撮影の準備をしている大悟に呼び掛ける。

「ちよつと携帯電話を貸してほしいんだけどいいかな?」

「俺もだ! 頼む大悟!」

「あ? 携帯電話? テープルの上にあるから勝手に使えよ」

「ありがとう! つて雄二! なに勝手に使おうとしてるんだ!」

見ると、いつの間にか雄二が大悟の携帯電話を弄っていた。いかにも大悟が好きそうな二次元の女の子がデザインされとつても痛々しい。

「超越せ雄二! その携帯は僕が使うんだ!」

「なに言つてやがる! お前に何があつたかは知らないがこんなのは早い者勝ちだ!」

「そんなの関係ない! 僕は一刻も早くこの状況をどうにかしないとイケないんだ! だから大人しくその携帯を渡せこの妻帯者あつ!」

「なんだとこの女装趣味の変態野郎が! つて制服を引つ張るんじゃねえ!」

「うるさい! よこせつ! 携帯をよこせえーつ!」

「決して渡すものかあーつ! 早速翔子のメアドを——」

岡崎大悟のアドレス帳登録……………一件 ↓ 『木下優子』

「……………」

お互いに顔を見合わせる。

そして雄二が静かにカチカチと文字を打ち込み、躊躇いなく送信ボタンを押した。

【To: 木下優子 From: 岡崎大悟

お前を抱きたい。だから夜中になつたら俺の部屋まで来てくれないか? 一緒に

……………限界までイツちやおうぜ?】

「はい、ありがとう大悟」

「おう。けどさつき俺の携帯のメールの送信音が聞こえたんだがなにをしてたん——

ゴふっ!!?」

送信されたメールを見た瞬間、大悟の口からあり得ない音が出た。

そしてすぐに僕たちに掴み掛かってくる。

「明久あつ! 雄二いいつ!! テメエらなんだこの身の毛もよだつような恐ろしいメールはああつ!!」

「いやあ、ごめんよ大悟。他人の携帯だから打ち間違えちゃったよ」

「おいおい、気をつけろよ明久。ま、間違いならしようがないよな」

「どこをどうすりゃこんなピンポイントな間違いが出来るってんだよこの馬鹿野郎! と、とにかく妙な真似をされる前に訂正を——」

「おつと、手が滑ったあ! (バシッ!)」

「俺も足が滑ったあ! (ベキッ!)」

「更に僕も足が滑ったあ! (ゲシゲシゲシ!)」

「あああああああああ!!!?」

大悟の携帯電話は僕らによって鉄クズと化した。

デザインされている女の子のイラストが見るも無惨な姿になっている。

「貴様らあああつ!! なんてことをしてくれやがんだ!?! これじゃ誤解を解くことが出来ねえじゃねえかこのゴミ野郎!」

「黙れこの役立たず!」

「お前も俺達と同じ気持ちを味わいやがれ!」

「アアん!? 二人揃って意味不明なことを抜かしやがって……! くそっ! だがお前らをブチのめすのは後だ! 携帯がダメなら直接アイツに——」

「そうか! なら俺も翔子のもとに——」

ガラツ（雄二と大悟が廊下へと続くドアを開ける音）

ドゴツ（廊下にいた鉄人が二人に拳と蹴りを叩き込む音）

グシャベキグチャツ（雄二と大悟がテーブルを巻き込んで壁に激突する音）

「部屋を出るな」

「了解です」

屍となった二人の代わりに僕が返事をする。

「ちなみに秀吉とムツツリーニはまだ携帯電話買ってないの?」

「うむ。前に捨てて以来買ってないのじゃ」

「……………いざというとき鳴り出すと困る」

最近の高校生としては珍しいな。片方の理由は特に。

仕方ない。美波には明日会った時にでも事情を説明しておくでしょう。

「ところで、この部屋は片付けないとまずいのではないかの? これでは布団も敷けぬ

ぞ」

「そうだね。とりあえず片付けて秀吉の撮影を始めようか」

テーブルを戻して、床に散らばったものを一ヶ所に纏めておく。

秀吉の荷物はこつち（ドサツ）。

割れたグラスや花瓶の破片は危ないからあつち（ポイツ）。

僕の荷物はこつち（ドサツ）。

雄二はゴミだからあつち（ポイツ——ザク）

ムツツリーニの荷物はこつち（ドサツ）。

大悟もゴミだからあつち（ポイツ——グサツ）

「ぐあああつ！　せ、背中にガラスの破片がつ!!」

「あ、雄二に大悟。起きたなら手伝ってよ」

「待て！　お前には俺達の背中の傷が見えないのか!？」

「いい感じに手が届かない所に刺さってやがるぞコンチクショウ!」

「大丈夫。致命傷ではなさそうだから」

「そう思うならお前にもこうしてやらあ!」

「あああつ！　僕の着替えがガラスの破片まみれに!？」

「お前も俺達と同じ痛みを味わえ！」

「それなら浴衣を着るからいいさ！ 秀吉とペアルックだしね！」

「そうはさせるか！ 大悟！ 秀吉と姫路達以外の分の浴衣を全部改造しちまえ！」

「任せろ！ 露出度高めのエロ浴衣に大変身させてやらあ！」

「そんなことはさせないぞこのキモオタ！」

なんてことをやってるうちに時間が過ぎて

——コンコン

「こんばんわ、皆さん」

扉が開かれ、僕らの部屋に姫路さんが入ってきた。

「あ、いらつしやい、姫路さん。あれ？ 廊下で鉄人に絡まねかった？」

「西村先生ですか？ いましたけど、お菓子をあげたら通してくれました」

「「「さらば鉄人。安らかに眠れ……………」」」

——消える飛行機雲♪ 僕たちは見送った♪

彼の冥福を心から祈ろう。



「ところで明久君。お話ってなんですか?」

「ああ、うん。それなんだけどね」

「よく来たな姫路。早速だがプレゼントだ」

雄二が大悟特性のコスチューム（黒桜なりきりセット）を姫路さんに手渡す。

「これって、岡崎君のコスプレ衣装ですよ? どうして私に……………」

「うん。実はね、そのコスチュームを着た姫路さんの写真を撮らせて欲しいんだ」

「仕事は俺達に任せろ（キラーン☆）」

「え……………」

突然の話で目をパチパチと瞬かせている姫路さん。そりや、いきなりこんなことを言われたら驚くよね。

「あく、その、なんて言うか……………」

「安心しろ姫路。これはコイツにも着させるから」

「えっ!?!」

突然大悟が僕の肩を叩いてそう言った。

「ちよつと大悟! なにを勝手に」

「本当ですか!?! それなら喜んでやりますっ!」

すると、姫路さんが急に態度を変えて承諾してくれた。さつきまで微妙そうな顔を

てたのに今は目がキラキラと輝いている。一体彼女の中でなにがあったんだろうか？

「アキちゃ——明久。ここは大人しく従え。お前が我慢さえすれば姫路は協力してくれんだからな」

「ぐっ……………、なんて屈辱的な……………！」

それに最初に貴様が言おうとしたことは聞き逃さなかつたからな？

「……………明久君の可愛いコスプレ姿。これでまたコレクションが増えちゃいますね……………♡

♡♡」

「ん？ なにか言った、姫路さん」

「ふええ!? い、いえっ！ なんでもないですよ！ それじゃ、ちよつと着替えて着ますね」

コスチュームを持って着替えに行こうとする姫路さん。

ここでふと思った。撮影する写真を人に見せてもいいか聞いておくべきじゃないだろうか？ 変な写真を撮るつもりはないけど、友達としてそれくらいはしておくべきだ。

「姫路さん、ちよつと待って」

「はい?」

「実は撮る写真なんだけどさ、友達とかに見せてもいいかな?」

「え？ このコスプレ姿をですか？ そ、それは少し恥ずかしいです……」

「何を言ってるんだ姫路。コスプレ程度で恥ずかしいと思っていたら明久の存在はどうなる？ バカの上に変態なんて、生きていけないほど恥ずかしいじゃないか」

「その通り。だから姫路は全然気にしなくて大丈夫だ。明久はもう現代医学じゃ手遅れなぐらいの変態クソ野郎だが、お前は二・三次元共において魅力溢れる稀少な女性だからな。自信を持っていい」

「そ、そんな………魅力溢れるだなんて、照れちやいます」

「落ち着くのじゃ明久！ 割れた花瓶の破片を振りかざすでない！」

「放して秀吉っ！ これでコイツらの脳ミソをグチャグチャにかき回してやるんだ！」

なんだろう。雄二と大悟のフォローはいつも僕を不幸にする。

「まあ、こつちも無償でやらせるなんて野暮な真似はしない。報酬は弾ませて貰おう。大悟」

「分かってるよ。姫路、ちよつとこつちに来てくれ」

「なんででしょうか？」

特に警戒した様子もなく姫路さんと大悟が部屋の隅に寄っていく。そして僕らに背を向けて小声で会話を始めた。

「……………久の無修正イラ……………抱き枕カバーとストラップもセット……………」  
「……………当ですか!? ………………少のエッチな格……………やります……………!」

一体何を話しているんだろう? と思っていると姫路さんと大悟がいい笑顔で固い握手を交わした。

「交渉成立だ。特に問題はないってよ。な、姫路」

「はいっ! 多少のサービスシーンくらいなら全然大丈夫ですっ!」

なんだ? 何が彼女をそこまで奮い立たせたんだ?

ちなみに隣では人知れずムツツリーニが「……………サービス、シーン……………!」と眩きながら出血多量で倒れている。

「とにかく協力してくれてありがとう。それなら早速準備をお願いできる?」

「はいっ! あ、でもその前に一つやる必要があるんです」

「ん? やることって?」

「おいおい明久。さつき俺が言っただろう——」

「お前にも着てもらう……………」

その場にいた全員が僕に屈託のない笑顔を振り撒いた。

「……………ごめんっ!! 僕ちよつとトイレに行つて「野郎共!・そいつを逃がすなあ!!」  
「了解!!」ぐはあっ!」

咄嗟に逃げようとした僕は一瞬で雄二とムツツリー二と姫路さんに取り押さえられた。

「どこへ行くんですか? 明久君?」

「……………無駄なあがきはやめるべき」

「いやだ! 僕はもうあんな恥ずかしい格好は二度としないと決めたんだ!」

「そう恥ずかしがるなよ明久。案外似合うかも知れないし、そうじゃなくてももうこれは決定事項だからな」

「そうじゃの。明久もワシと同じ気持ちを味わうべきじゃな」

「僕は一度でも女装するなんて言った覚えはないんだけど!」

「わめくな。元より貴様の意見など関係ない。俺がルールだ」

「大悟貴様っ! この人間の形をしたクズめ!!」

「はっはっは、なんとでも言うがいい。では諸君、始めようか」

「はいっ。じゃあ明久君。着せてあげますから制服を脱いでくださいね?」

「ひ、姫路さん? 落ちて着こう? だからよだれを垂らしながらスクール水着を持って

ジリジリ迫り来るのは止めてくださいホントお願いします勘弁してください神様仏様  
姫路様!!」

「むう、往生際が悪いですよ明久君！ ならちよつと乱暴にしてもやっちゃいますか  
らね！」

「やめて！ こないで！ いやあああああつ!!!」

僕の憧れた姫路さんはどこへ行ってしまったのだろうか。

## 第四十六問 ヤンデレな幼馴染みに死ぬほど（ガチ）愛されて眠れない

——大悟視点——

『ギャハハハ!! 大悟! お前合宿で男総出で覗きするなんてまた面白えことすんじゃねえか! 傑作だな!』

『あつははは! さすが大悟兄! やることが本当斜め上だよねー!』  
「二人揃ってゲラゲラ笑ってんじゃねえよ! こつちにとつちや真剣かつ命懸けなんだからよ!」

ダイゴブックスとムツツリ商会による協同撮影会を終え、俺は今旅館の公衆電話から母さんと天に電話している。何故なら「どつか一日くらいはこつちに電話跨越せ」としつつこく言われていたからだ。

本当なら携帯から連絡しようとしてたんだが、生憎あの馬鹿共によつて俺の携帯電話はスクラップになつている。だからこうしてわざわざ小銭を払わなくちゃいけないとか頭にきますよ!

でも、撮影会ではかなり良質な写真を手に入れられたから良しとしよう。俺のインスピレーションや創作意欲もかなり急上昇して最高のイラストも描けたからな。ホント姫路と相棒には頭があらんよ。え、明久？ 知らん。

『んで、どうだったんだ？』

『は？ どうだったってなにが？』

『なにがってそんなの決まってるだろ！ 目的の女子共の発展途上の裸体は覗けたのか？ どうだった、どうだった!? 興奮した!? ムラムラしたか!? 欲情したか!? 大人の階段登ったか!?』

「アンタ息子に対してよく恥ずかしげもなくそんなこと平気で言えるな！」

『なにいい!? はっ！ もしや大悟お前……遂に優子と一線をこえたか!?』

「ちよつと待て！ 今の流れをどう解釈したらそうなるんだ!?」

『嘘!? まさか大悟兄、優子姉のāvアロン（意味深）にエクスカリバー（意味深）しちゃったの!? そのそそりたった乖離劍（♂）で優子姉の固有結界（♀）にゲートオブバビロン（意味深）からのエヌマ・エリシユ（意味深）しちゃったかなあ!? この絶倫王ギルハメツシュめ!』

『慢心ならぬ慢チンってか!? ギヤハハハ!』

「なあアンタら素面だよな!? 酒入ってねえよな!?」



『はい！ てことでそんな童貞卒業間近の愛息子、大悟にこの歌を送りま〜す！』

『イエーイ！』

「人の話を聞けよ！」

『あ、それチ○コ出してマ○コはめてよよいのよい♪ あズッコバツコズッコバツコズッコバツ♪』

「よし！ もういいから黙っとけアホ共！」

『オ○リイクならパコらにやあんっ♪ あんっ♪』

「ドスケベ音頭はやめろ!!!」

電話越しからでも分かるくらい興奮して母さんと天。

どうしよう、俺の家族が低レベルかつ高難易度の下ネタを叫ぶ変態しかいない件について。ぬきたしとか知ってる人あんまりいねえよ！ コイツら息子や兄の学校行事をなんだと思つてやがる！

あとなんでこの流れで優子が出てくるんだよ！ やめてくれよ！ さつきあんなメールを送つちまったからマジでそうなるんじゃないかって怖いんだよ！

「……………まあ、覗きに関してはこの三日間全部阻止されてるな。さすがに向こうには教師陣もいるからな。最早無理ゲーに近い」

『なんだ、つまんねーな』

『私は大悟兄が優子姉に『孕めオラア!!』って叫びながら処女を美味しく頂いたと思って赤飯炊こうと思ってたのに……はーつつかえ』

「天。お前帰ったら覚えとけよ」

『ごめんなちゃい』

「つたく、どうしてうちの家族にはまともなヤツがないんだ。俺はこんなにも常識に溢れた性格をしてるといふのに↑は？」

ため息を一つつき、俺は再び受話器を耳に当てる。

『でもよ大悟。やり過ぎはやめとけな。昔と違って今はそういった行為は厳しく罰せられるみたいだからよ』

『まだ未遂で終わってるけど、普通は覗きなんてしたら一発停学間違いなしだもんね』  
「そんなことはとうに俺も皆も分かっている。だがそれでも俺達はこのまま引き下がるワケにはいかないんだよ。なにがなんでも女子風呂を覗いて、俺や雄二、明久を嵌めよう」として真犯人を見つけだしてやる」

『そうかい。ま、お前ならそう考えてるだろうとは思ってたがな』

「何言ってやがる。『一度決めたことは最後まで貫き通せ』。それが母さんが俺に教訓としてきたことだろうが。俺はそれに従ってるだけだよ」

『ほー、いいねえ！ さすがアタシの息子だな！』

『ホント、大悟兄も明久さん達も良い意味で諦めが悪いよねー』

『それがFクラスの強みだからな』

『あははっ、だよね！ じゃなきや三日間続けて覗きになんて行けないよ！』

『馬鹿と変態は負けず嫌いが多いからな！ な、大悟！』

『なにせFクラスはそんな人達の巣窟だもんね！』

『なんだか遠回しに罵倒されている気がするんだが』

『失礼しちゃうな。折角可愛い可愛い妹が誉めてあげてるんだから素直に喜びなよ』

♪

『それで母さん。頼んでおいたアニメの録画はやつてくれたか？』

『ああ、やつといたよ。アタシに感謝しろよな』

『サンキュー』

『コルア！ 露骨なシカトはやめろお！ 天ちゃん傷つくぞー！』

『うるせえよアホ』

『うわーん！ お母さんと大悟兄が辛辣う!!』

電話越しにギヤアギヤア騒ぐ天。つたく、毎度毎度コイツは面倒臭いな。

でも声を聞く感じ二人とも特に変わりはないようだ。まあだからといってなんだっ

て話だが。

『……………ま、でもアタシは安心したよ』

「あ？　いきなりなんだよ？」

『なんだかんだ言っても、お前も随分と明久達と楽しんでるなって思ってたな。そこだけが心配だったんだが……………声がいともより弾んで聞こえるぞ？』

「……………妙なところに気づくな、母さんは」

『馬鹿野郎、何年お前の母親やってると思ってたんだ？　息子の変化ぐらいすぐに分かるってんだよ』

「まあ、楽しくないと言えば嘘になるな」

『へっ、素直に喜べよ。友達と一つ屋根の下でバカ騒ぎなんて誰だって楽しいもんさ。それによ……………そんな思い出を作ることって、今のお前が強く望んでることだろう？』

「……………あんまり息子のプライバシーを詮索するのはよせよ、母さん」

『おっと、そいつは済まねえな。ま、母親からの必要なおせっかいとして受け取っておきな』

「分かったよ。んじゃ、もうすぐ就寝時間だから切るな。じゃないと鉄人がうるせえから」

『そうか、分かった。あ、じゃあ最後に一つだけ聞かせてくれ』

「なんだ？」

『優子とパコるならちゃんど避妊はしと「おおーつと小銭が切れたああつ!!」』

ガチヤツ、ツー…ツー…

「はあ…はあ。台無しだよクソが!! さっきまでのいい雰囲気返しやがれ!!」

乱暴に受話器を戻し、踵を返して部屋までの廊下を歩く。

ちよつとでも母さんに対して感動してしまった俺が馬鹿だった! どんだけ息子の貞操観念を弄り倒せば気が済むんだよコンチクショウ!

帰ったら報復として押し入れにある酒の中身を全部砂糖水に変えてやる! 息子の怒りをとことん思い知るがいいわ!

——しかし、この時は気づく由も無かった。

俺は知らぬ間に…とんでもない危険と恐怖に晒されてしまっているということを。

『はあつ…はあつ…大悟、待ってて。必ず…行くから…♡♡♡』

その後俺は部屋に戻り、野郎共と修学旅行らしく就寝までの自由時間を使い一時の享楽に勤しんでいた。

「くらえ、ウノだ！ よし、もう少しで僕が一番最初にあが」

「ドロ2だ」

「ワシもドロ2じゃ」

「……………同じく」

「ドロ4、色は青な」

「くそおおおっ!!!」

UNOをやったり、

「ほれ、6じゃ」

（くっ……俺の手札には6が三枚。場の流れとアイツの今までの動きから察するに、秀吉が嘘をついている可能性はイーブン……ここは賭けで宣言するか……）

「大悟。次はお前だぞ」

「え？ あ、ああそうだったな。じゃあ俺は7だ」

（ああしまったああ！ 雄二に急かされて思わず出しちまってダウトって言いそびれてしまったあ！ 仕方ない、ここはスルーするか）

「……………8（スツ）」

「9だ」

（次は明久か。場にはかなりのカードが溜まつてる。さてどうで——）

「じゅ、10だよっ！（ソワソワ）」

「「「ダウト」」」

（——考えるまでもなかったな）

「そんな!? なんでバレたんだ!? 僕のポーカーフェイスは完璧だったのに!

?」

「いや、めちゃくちゃ目泳ぎまくってたじゃねえかお前」

「まったくじゃ。『僕は嘘をついてます』という態度がありありと見てとれたぞい」

「それに10は4枚とも俺が持つてるからな。お前が嘘をつくのは確定事項だ」

「……………そもそも明久は賭け事に向いていない」

「ふ、ふんっ！ いいさ！ まだ勝負は始まったばかり——って誰も正しい数字を出してないじゃないかあーっ!!」

(((計画通り……………)))

ダウトをやったり、

「あつ、雄二貴様！ それは僕が狙っていたアイテムボックスだぞー！」

「はっ！ なに言ってるやがる！ こんな早い者勝ちで——ってうおおっ!? 後ろから赤甲羅がっ！」

「残念だったなバーカ！ これで俺が一位だ！」

「む、トゲ甲羅を引いたのじゃ」

「あつ、秀吉！ ちょっと待ってくれ！ 今撃つのは早い！ なんとか明久を一位にさせるか——ああなんで撃つんだよチクシヨウ！ 駄目だ間に合わねええええっ!!」

「よっしやああああ！ ざまあ見やがれええええっ!!」



「……………後ろからキラーが来てるが」

「えっ、ちよ、ま——ぎやあああああつ!!!」

「二人が死んだ!？」

「この人でなし!」

皆で口裏を合わせ内緒で持ってきたゲーム機を使いマリ○カートをしたりしていた。ちなみに後で鉄人にバレて全員没収された。買ったばかりなのに。

その後も他愛もない雑談なんかをしたりして残りの時間を過ごした。そしたら時の経つのは早いもので、あつという間に就寝時間となった。

「ふああ……………そんじや寝るか」

「そうだな。明日の決戦に備えて体力を回復しねえとな」

「流石に今日くらいはぐっすり眠りたいよね」

「そうじやの、一昨年昨日とまともに睡眠時間を取れなかったかなの、今宵は何もおこらぬことを祈るばかりじや」

「おいおい秀吉、そんなフラグ感満載な台詞はやめてくれよなく頼むよ」

「……………（コクコク）」

「よし、それじやあ電気消すぞ」

「うん、じゃあ皆おやすみ」

「おう」

「おやすみじゃ」

「……………おやすみ」

「Good night」

カチツ

雄二が部屋の電気を消すと共に猛烈な睡魔に襲われる。

俺はその本能のままに従い、自分の布団に潜り臉を下ろす。合宿三日目にしてようやくまともな睡眠にありつけられると思うと、いつもよりすぐに意識が朦朧とする。

(今日くらいは……ホントにいい夢見てえなあ)

昨日はめるたんから面と向かって『大嫌い』と言われるという最高の悪夢だったからな。そんなのはもう御免被りたい。今度こそはめるたんのいちやらぶドリーム、頼みますっ！

そして直ぐに、俺の意識は暗闇へと誘われていった。

——数時間後。

ガチャリ

部屋の扉が開かれる。

それにより、廊下に灯る明光が、扉から近い部屋の前面を微かに照らした。

「……………う、ううん……」

丁度その場所に寝ていた俺は少しだけ意識が覚醒する。

なんだ…誰か来たのか、とは思いつつも特に気に止めず寝返りを打つ。

スタ……………スタ……………

何者かの足音が聞こえる。

多分鉄人あたりがちゃんと寝てるかどうか見回りにでも来たんだろう。全くご苦労なこつたな。

すると、その足音がピタリと止む。あーはいはい寝てますので大丈夫ですよー。だからそんなに視ないでくれます？

「はあっ……………はあっ……………♡♡♡」

はいはい。そうやって発情した犬みたいに荒々しい吐息をしなくても——ん？  
これ——鉄人じゃ、ない？ そう思っていると、

「大悟……ホント可愛いっ……ふふふふ……♡♡♡」

欲望が滲み出るその声音に、思わず意識が鋭敏化し、ぞくりと鳥肌が立つ。え、ちよつと待って、なにこれ、メチャクチャ怖いんですけど。

しかし、それは俺の抱いている感情とは裏腹にゆっくりと背後に忍び寄ってくる。

「もう……そつちから呼んでおいて寝てるなんていけないわね……なら、勝手にしちゃうから……っ♡♡♡」

「っ……!!?」

侵入者は恐怖で固まる俺の布団に潜り込み、その身体を密着させてきた。むにゅつと柔らかい感触が俺の筋肉で固められた背中にじんわりと張り付き、首元には生暖かい吐息がかかる。

ヤバイ、このままではマジでなにかがヤバイ（小並感）と直感した俺はどうか勇氣を振り絞り、ガバツと後方を向いた。

「誰だ！ 夜這いイベントなら生憎間に合って——っ!？」

「あははっ……起きちゃった？ アタシよ、大悟……いえ、ダーリン♡♡♡♡」

「ゆ、優子……!？」

ようやく慣れてきた俺の瞳にその正体が浮かび上がる。

艶のある綺麗な茶髪に小動物のような可愛らしい顔立ち。俺よりも一回り小柄な体軀。そう、俺の相棒の双子の姉にして最狂のヤンデレ——木下優子だった。

その瞳はまるで全ての光という光を飲み込んでしまうブラックホールを連想とさせるほどドス黒い。直視してたらこっちまで気が狂いそうになる。

「なんで!? お前がここにむぐうっ!？」

「あんまり大きな声出しちゃ駄目よ？ 他の人が起きちゃうからね……♡♡♡♡」

「む……むぐぐ……?」

「それにあんまり騒ぐと……力づくでその口塞がなきゃいけないかしら……(スッ)♡♡♡」

そう言って優子はどこからか鉈を取り出す。あ、これ大声とか出して逆らったら真っ先にズタズタに全身を斬り刻まれるやつっぽいわ。

落ち着け、落ち着くんだけ俺。取り敢えずまずは状況を冷静に分析しようじゃないか。そう思い、優子の様子を伺う。

「え、えつと……優子さん？ 一旦離れ——うおっ！」

「すう……すう……はあん♡♡♡ ……はあ……大悟の匂い……しゅきい……♡♡♡」

その瞬間、布団は剥ぎ取られ、気づけば痛みもなく仰向けにされる。あまりにも鮮やかな手際によって。ていうかコイツ…なんで浴衣姿なん？

優子はそんな俺の腹にうつ伏せに乗っかり、心底嬉しそうな笑い声と熱い息を漏らし顔を胸に埋めてきた。人肌特有の熱さと柔らかさに加え、女性ならではの甘い香りが俺の肢体を包む。

「ふふふふ……ようやく……ようやくアタシの気持ちに伝えてくれるのね。でも、わざわざあんなメールじゃなくて直接言ってくれてもよかったのよ……？ それとも、今までの態度の手前恥ずかしくて面と向かってじゃ無理だったのかしら？ もうっ、そう言うところも可愛いんだから……♡♡♡」

「な、何を言ってる……」

「でも安心して……別に怒ってるとかは全く無いから。むしろ大悟がやつとアタシを見てくれる……愛してくれるって分かったんだもの。今までに無いくらい最高の気分よ……♡♡♡」

頬をいつも以上に赤らめ、そう告げる優子。

コイツは一体何を言っている？ 俺が優子を愛するだど？ そんな台詞を吐いた覚

えなど一度も無いし、携帯だつて明久と雄二に壊され——

「あつ」

俺は今になってようやく思い出した。

恐らくこの現状を作ってしまったであろう原因を。

（あのメールの誤解解くのすっかり忘れてたあああああ!!!）

俺は激しく後悔する。だが時既に遅し。

「ハアハア……♡ 熱い……、身体の底からも、大悟からも熱を感じる……♡♡ これ  
”愛” っていうもののなのね……♡♡♡ 凄いわ……気持ちよくて、ふわふわして、何か  
がこみ上げて溢れそうになるっ♡♡♡ 駄目……もう、理性が持たないかも……♡♡」

すると優子は俺の首に両腕を回し、腰辺りに足をエロい感じに絡ませてきた。浴衣は  
完全にはだけ、下着のみを着けた上半身が露になる。

さて諸君。突然だがここで俺と一つクイズをしよう。

これから俺が提示する計算式に対して妥当な答えを出してくれ。それでは早速どうぞ！

Q. 理性が限界値なヤンデレ＋誤解を招くメール＋夜這い∥???

A. 大抵バッドエンド

うん、普通だな（泣）。不正解だったヤツは帰って、どうぞ。



ああ神様。俺は一体どこで選択肢をミスってしまったのでしょうか。

ってそんな事言ってる場合じゃねえ！ とにかくコイツを止めないと！ このままじゃ優子によって俺のバラ色二次元生活が粉々に碎けるだけじゃなく、人生そのものがコンティニュー不可のゲームオーバーになること確定だ！

「や、やめてくれ優子！ それ以上はホントに取り返しのつかないことになる！」

「ふふふふ♡♡♡ 大悟、そんな事言つて無理に我慢しないでいいのよ♡♡♡ アタシのことを満足するまで好きにして構わないから……全てをさらけ出して、一緒にびしょびしょになって月の向こうまでイッちゃいましょう♡♡♡」

「いや我慢するのはお前のその暴走してる性欲だからな!? ていうかホント勘弁してくれマジで！ そもそも俺が愛するのは二次げ」

ザクッ！

「愛するのは……なにかしら？（ゴゴゴゴゴゴ）」

「軽率な発言をしたことを謝罪します」

あと数ミリずれていたら俺は右手と永遠にお別れしていただろう。

すると優子は、俺の顔にグイッと自分の顔を近づけてきた。互いの鼻先が触れ、獣の

ごとき吐息が鼻孔を擽る。

「前にも言ったでしょう……？　大悟はアタシのものなの。例え二次元だろうと他の雌なんて視界に入れる必要もないし許さない……そんなことしたら、大悟が腐っちゃうじゃない。だからアタシだけを見てればいいの……それが二人にとって幸せなことなの……そうでしょう？　ア・ナ・タ♡♡♡」

「ゆ、優子……お前……」

「はあ……はあ……♡♡♡　だから……アタシももう我慢しないわ。もう他の事なんて知らない。いえ、最早学力強化合宿も覗きの件ももうどうでもいい……この瞬間を迎えられるならアタシは今回のことも水に流すし、どうなつたつて構わないの……♡♡♡　幸いたっぷり時間はあるから……ふふふつ、朝までアタシと一緒に、じっくりと愛を確かめ合いましょう……大悟……愛してる♡♡♡」

優子の甘美で誘惑的な言葉とは裏腹に、俺は全身が凍りつくような感覚になった。

普段の明るく社交的で、誰に対してもそつがなく接する八方美人な彼女は消え失せ、代わりに眼前に映るのは同じ姿をしながらもその性質は真逆——対象者に近づくありとあらゆるものを「害」とみなし、己の欲望と本能のみに従い、理性という抑制装置がぶつ壊れた姪獣だ。やっぱり間〇桜じゃないか！　いい加減にしろ！　あのルート

クリアするのに何日かかったと思ってるんだ！

そして、今の状態の優子はヤンデレ界限でいうところの『末期』。つまり、もう何しても無駄だから諦めとけなのである。そんなの死ぬしかないじゃない！

「ややややめろ優子！ それ以上気を高めるなあっ！ 俺はまだ純粋な童貞でいたいのでひいっ!!?」

優子の燃えるような舌が、まるで獲物を食うような勢いで俺の首筋や顔面を這い回る。それと同時にその小柄な体を蠕動運動のように擦り付けてきた。

「んれろ……♡♡ あえ……じゅるっ……♡♡ ぶはあっ、くちゅっ、あえ……♡♡ んはあっ……♡♡」

ぎやあああ何この子俺の体舐め回してやがるんだけどおおおっ!!?

いや、確かに成人向けアニメや漫画、エロゲーなんかじゃ前戯として全身舐め回しプレイはセオリー中のセオリーだよ!? そこでお互いに興奮を高め合わせてからフェ〇チオやく〇二に移行するんだけども！ ちなみにこの前やったエロゲーも幼馴染みが主人公を体育館倉庫に閉じ込めるといふ展開と汗だくの体操着姿といやらしいボイスが最高で……ってそんなことは今はどうでもいい！

ていうか実際に自分がやられると寒気と不快感と恐怖しかねえ！

「はあ、ああ、ふうっ、ふうっ、ああああ……♡♡♡ 足りない……これじゃ満足出来ない♡♡♡ もっと大悟との愛を感じたいの……お願い……アタシを壊すくらいにメチャクチャにしてえ……はむっ♡♡♡ じゆる……ちゅぱっ……♡♡♡」

「あばばばば……!?!」

すると今度は俺の指を赤ん坊のようにしゃぶり始めた。舌が絡み付いてくる感触と唾液の温度が直に伝わってくる。

コイツヤンデレだけじゃねえ!! スイッチが入ってとんでもない痴女と化してやがるうううっ!! 霧島よりやべええええっ!!

「わ、分かった。分かったからひとまず——」

ガバツ!

「え?」

「ぶはあっ♡♡ 見、い、っ、け、た♡♡♡」

「▲?・?・?・b◇☆??」?・?・?」  
!!!」

俺のズボンが一気に引き下ろされた。次いでパンツに手がかけられる。アカンこのままじゃ俺のご立派様の封印が解かれてしまわれるう!

ちよつと待って、ねえこれ冗談抜きでマズいつて!! やめるんだ! その先をやつたら間違いなくこの小説死ぬから! 消されるからあ!

そう思った俺は咄嗟に視線を他に向ける。こうなつたら誰かに助けを――

『……………(ギンギン)!!!!』

こちらに一眼レフを向けてこちらを窺う同志と目が合った。

これでもかかというくらい血走った眼を見開き、鼻血を出しながらビクビクと痙攣している。恐らく興奮でぶっ倒れそうになるのを全力で堪えているのだろう。流石はエロに対する執念が違うな。

(た、頼む同志!! 一世一代のピンチだ! 俺を助けてくれ!! 報酬ならいくらでも出す!)

俺はそうアイコンタクトを送る。と、同志の口が微かに動き、その形で言葉を返してきた。

——その、ま、ま、つ、づ、け、ろ

我欲〈友人の人生

どうやら俺は同志に見捨てられてしまうようだ。誠に遺憾である。

「あは……んんっ♡♡♡ 下着の上からでもこんなに……固くて……太くて……大き  
 いっ♡♡♡ これが大悟の……じゅるり♡♡♡ くうっ、はあっ、はあっ、もう、我慢  
 の限界……♡♡♡」

ズルリと、俺の下半身の最終防衛ラインが崩される——あ、終わった。  
 俺は静かに人生の終了を悟る——その時、

バチイツ!!

「あ……がつ?!

!?!」

微かな電撃音が聞こえると共に、突然優子が目を見開き嗚咽を漏らした。

そのままバタリと力無く俺の胸に倒れ込んでくる。

「無事か、大悟よ!」

上から俺の名前を呼ぶ声が聞こえる。この声は、

「ひ、秀吉! 起きてたのか!」

「うむ、近くから姉上の喘ぎ声が聞こえたから何事かと思つての。間一髪間に合つたわい……」

秀吉の手にはスタンガンが握られている。どうやらあれで優子を気絶させたようだ。その顔は焦燥に染まっていることから、コイツも俺と同じく状況がヤバいと思つていたのだろう。

「た、助かったぜ相棒。危うく社会的に死ぬところだった……」

「礼など要らぬ。親友を助けるのは当然のことじゃ。それよりも……いつまで下半身を露出しておるつもりじゃ？」

「え——うおおっ!?! 忘れてた!」

急いでパンツとズボンを履き直し、俺のリトル大悟（♂）を封印する。少しズボンに湿った跡があるのは気のせいだと心に言い聞かせよう。

あと隣で布団を血に染めて倒れている同志は放っておいていいだろう。

「しかし、姉上もとんでもない行動に出たものじゃ……まさか夜這いとはもう」

「ああ、しかもコイツ完全に目がイってやがった。間違いなく本気だったろうよ……おお怖い」

「姉上の狂信っぷりもここまでくると戦慄が走るわい……」

二人揃って「ああ、と気苦労の込められたため息を吐く。

「とりあえず、優子はこのまま部屋まで連れていこう。ここにいると色々と厄介だ」

「うむ、恐らく霧島や工藤と同じ部屋じゃろうから、理由を話せば分かってくれると思うぞい」

ううむ……正直コイツに夜這いをかけられてましたなんて話したくは無いが、この際仕方あるまい。霧島や工藤なら心当たりもあるだろうし、秀吉の言葉通り信じてはくれるだろう。



「それじゃ、行くとするか」

「そうじゃの。じゃがまずは姉上の浴衣を整えねばな」

「そうだな」

そして俺はうつ伏せに倒れる優子の方に視線を向けようとする。つたく、コイツは本当に昔から世話の焼けるヤツ

ヒュンツ……ザクツ！

「あ?」

「む?」

突如俺と秀吉の間に走る衝撃。その後すぐに後ろの壁に何か刺さる音が響いた。おそるおそる見ると、それは刃の部分が完全に壁に突き刺さった鉋だった。

「……………」

「!!?」

ゾクリ……と今までに無いくらいの悪寒が俺と秀吉を襲う。震えが止まらない。

怨霊のような禍々しいオーラを纏ったその主は、ゆらりと布団から起き上がり——  
もう一つの「殺殺武器 エスカリボルグ」を取り出した。

「……………」

「あ、あの優子さん。これはですね、あのそのえつと」

「あ、姉上？ 違うのじゃ。ワシは相棒の危機に駆けつけただけなのであつて決して姉上を痛め付けてやろうとかそういうのは全くないのであつて」

ドンッ！

「……………」（ニッコリ）「

「……………はい」（ニッコリ）「

「……………うむ」（ニッコリ）「

—  
F  
I  
N  
I  
S  
H  
  
H  
I  
M  
,  
s  
  
F  
A  
T  
A  
L  
I  
T  
Y

「ぎやああああああああああああああああああああ……  
!!!!!!」  
「」

## 第四十七問 学力強化合宿最終戦 〔前哨〕

——明久視点——

「ふあ……あふ……」

自分でもだらしがないと思うほど大きな欠伸が出る。

眠い。とにかく眠い。死ぬほど眠い。今が貴重な朝食の時間でなければブツチぎつて寝ているところだ。

「流石に眠いぞ……」

隣では雄二も同じように目を擦っていた。

眠いのも当然。昨晩は美波にメールの件で暗殺されかけたり鉄人に朝まで教育について（拳で）語られたのだから。これで三日連続だし、眠くないわけがない。

だが、それよりも僕は気になる事が一つある。

「ふあ……それにしても、二人はどこに行っちゃったんだろうね？」

そう、僕達の主力メンバーである大悟と秀吉が行方不明なのだ。そのため現在僕らは残りの三人で朝食を摂っている。

「さあな……少なくともあの時、俺が翔子に襲われてた時には影も形も無かったからな

……」

「大悟はともかく、秀吉までいなくなるなんて珍しいね。ムッツリーニは何か知ってる？」

「……………さ、さあ？（フルフル）」

僕の質問に対し首を横に振って答えるムッツリーニ。ん？　なんか今気まずそうに視線を逸らされた気がするんだけど、気のせいかな？

でも、昨晚コイツは僕らにおきた出来事をこっそりカメラに収めようとしていたから、その前の二人の行動や行方も知っていると思ってたんだけどどうやらわからないようだ。とにかく無事だといいたくだけど。

「俺たちと同じように木下姉に二人揃って拷問を受けてたりしてな」

冗談混じりに雄二が言う。

「あはは、流石の木下さんでもそこまではしないですよ。それに大悟はともかく、秀吉はその理由がないじゃないか」

「いや、木下姉は周りが見えなくなるぐらい大悟に陶醉してるからな。『秀吉の癖にアタシの大悟に馴れ馴れしく……』とか平気で言いそうじゃないか？」

「あ、確かにその可能性はあるね！」

工藤さんの小型録音機の件でも、僕に対して殺意を剥き出しにしてたからね。大いに

あり得る。

「原因は間違ひなくあのメールだろうがな。ま、御愁傷様だな」

「何他人事みたいに言ってるのさ。そもそもメールを打ったのは雄二じゃないか」

「ん？ そうだったか？ けど明久もノリノリだったじゃねえか」

「いや、正直大悟が木下さんにポコられてるのを見てると面白んだよね」

「分かるぞ明久。アイツの苦痛に悶える顔は実に愉快だからな」

「あはははははは！」

僕と雄二が二人揃って笑う。

ま、あのキモオタは生命力がゴキブリ並だから多分大丈夫だよな！ でも後で秀吉には謝っておかないといけな

ポンッ

ん？ なんだ。僕と雄二の肩に手が置かれたぞ。

なんだかとてもデカイ手で随分掴む力が強いな。誰だろう？ そう思つて僕達は後ろを振り返ると――

「I, l l b e b a c k」

全身ボロボロで満面の笑みを浮かべた大悟が立っていた。

——秀吉視点——

姉上に極められた関節の痛みが少しずつ引いてきた頃。

「さて、早速今夜の決戦に向けての準備を始めるぞ（ヒリヒリ）」

「うん、そうだね（ヒリヒリ）」

大悟にブン殴られ、頬を赤く腫らした雄二と明久がそう言う。

事情が事情とはいえ流石にやり過ぎではないかの？ 手加減はしたみたいじゃが、二

人とも顔がアンパ○マンみたいになっておるではないか。

「ムツツリーニ、大悟。例のブツはどうだ」

「……………準備万端」

「俺の方も完璧だ」

そう言い、ムツツリーニと大悟が制服の懐から何かを取り出した。おそらく昨日のワシや姫路の写真が現像し終わったのじゃな。

大悟の方は……………それを元にしたイラストじゃろうか？ 相変わらず仕事が早いのが。

「どれ、ワシらにもその写真を見せてくれんかの？」

「……………(スツ)」

「ほらよ」

手にしておる写真とイラストをワシらに手渡してくる。ワシと明久はお互いの間にその二つを置いた。

「うーん、でもいくら大悟とムツツリーニの協同作品だとしても、たかが写真とイラストで皆をやる気にさせられるかふおおおつ！」

「ほう。これはまた…………」

ムツツリーニが見せた写真は、予想の通り昨夜撮影した姫路とワシの浴衣姿じゃった。そして大悟の方はそれを二次元の女の子風に雰囲気やポーズをアレンジしたもの。



う、ううむ、こうして改めて見ておると本当にムッツリーニの撮影技術は凄いのう……。大悟も大悟で相変わらず細部までよく描き込まれておるし、流石としか言いようがないわい。

しかし、作戦とはいえこれでまた学年中の男子から益々ワシが女として見られると思うと、なんだか複雑な気分じゃ……。

「僕、生きていて良かった……」

「今すぐのご契約で特別に台詞付きカラーイラストになるぞ？」

「ニダース買った。あと出来れば秀吉の方の表情と台詞を更に色っぽく出来ないかい？」

「追加料金を払うのなら良いだろう」

いや、ワシは全く良くないのじゃが……。

「……………そしてこれが二枚目（スツ）」

ムッツリーニが写真を捲る。

すると今度は浴衣姿の霧島とハーフパンツ姿の島田のツーショットが出てきた。

「す、凄いつ！ これも凄いやムッツリーニ！ 今僕は君を心から尊敬している！」

「確かに凄いのう……。しかしなぜ霧島と島田が共に写っておるのじゃ？」

「ああそつか。秀吉はいなかったから知らないんだったね。実はその間に美波と霧島さ

んが部屋に来たんだよ」

「なるほど、そうじゃったのか」

島田は分からぬが、おそらく霧島は姉上と似たような動機じやろうな。

「して、三枚目は？」

「あ、うん。三枚目は——」

更に写真を捲る。すると、そこに写っておったのは——セーラー服姿の明久。

「……………綺麗に撮れたので印刷してみた」

「放して秀吉！ このバカの頭をカチ割ってやるんだ！」

「落ち着くのじゃ明久！ よく撮れておるではないか！」

暴れだす明久を羽交い締めにして止める。しかし、何故明久はセーラー服なんぞ着て

おったのじやろうか。

「同志、後でそれを参考資料として一部貰おう。報酬は女体化アキちゃんのイラストで」

「……………契約成立（ガシツ）」

「待って!! イラストとはいえ勝手に僕を性転換させないでよ！ 仮にどうしてもやる

んだつたら僕よりも秀吉の方が断然可愛いじゃないか！」

「明久!? なぜそこでワシを引き合いに出すのじゃ！ そしてお主らも『確かに……』と

いった表情をしてワシを見るでない！」

全くこやつらは……ワシはずっと男じやと言うておるのに……!

「よくやったぞムツツリーニ、大悟。まさかここまで上等な品々に仕上げてくるとはな」  
「これで増援も期待できるといっわけじやな」

あまり女子に興味を示さぬ雄二でさても目が輝いておるのじや。普通の男子なら興奮は間違いのないじやろう。

すると、明久がなにやら微妙な面持ちになった。

「……これ、他の皆にも見せないでダメかな?」

こやつ、まさか内緒で写真とイラストをくすねようとしておらんか?

「明久。俺達の目的を忘れるな。大局を見誤る人間に成功はないぞ」

雄二が妙に厳しい目をして明久に告げた。

「う……ごめん。確かに間違えていた。この二つは目的の為の手段だし、そんな未練は断ち切る。後でイラストは同人誌にでもらって写真はムツツリーニ一グロスほど焼き増ししてもらっただけで我慢するよ」

「同人誌はともかく一グロスは多すぎだろ」

「未練タラタラじやな」

「ほつといて欲しいな?」

「同人誌にするなら印刷代も上乘せだな」

やはり下心があつたようじゃのう。

「よし、それじゃ早速——」

雄二がどこからかペンを取り出し、写真とイラストの後ろに荒々しく何かを書き殴る。

『これを全男子に回すこと。女子及び教師に見つからないよう注意！ 尚、パクったヤツは今後ダイゴブツクスの使用を禁止し、かつ坂本雄二の名の下に私刑を執行する』

なるほど、これなら窃盗される心配もないのじゃな。

「おい須川。この二つを男子に順番に回してくれ」

近くで食事をしておつた須川に写真とイラストを渡す。須川は疑問符を浮かべながらも受け取つて、

「ふおおおおおおお——っ!!」

覚醒していた。

「あ、わり。俺ちよつとトイレに行つてくるわ」

大悟はそう言うのと席を立て部屋を出て行つた。

「ところで雄二。僕の写真はきちんと抜いておいた？」

「安心しろ。あんなものを流したら士気がガタ落ちだからな。キツチリ抜いておいた」  
「そっか。それは良かったよ」

明久が安心したような顔を浮かべる。

するとふと、ワシはムッツリーニの手にあるもう一枚の写真に目がいった。

「うん？ ムッツリーニ。お主、他にも写真を持っておったのか？」

「……………（コクリ）」

「どれどれ、何が写っておるのじゃ？」

「あ、僕にも見せてよ」

ムッツリーニから写真を拝借しそれを見る。明久も横から覗き込んできた。

そこに写っておったのは——セーラー服姿の明久（WITHパンチラ）。

「……………思わず撮ってしまった」

「放して秀吉！ コイツの脳髓を引きずり出してやるんだ！」

「見ておらん！ ワシは何も見っておらんから落ち着くのじゃ！」

ワシらが姉上に拷問と折檻を受けておる間に、明久も明久で大変だったようじゃの

……………。

## ——大悟視点——

「ふいふ。すつきりするぜ」

放尿による爽快感が全身に伝わる。

俺は今合宿所のトイレで用を足している真つ最中だった。

「昨日は優子から逃げるのに夢中だったからな。かなり溜まつてるようだな。ああしたまらねえぜ」

人間の一番の身体的快楽はもしかや放尿なんじゃないだろうか？　と思っていると、

「おや、ここで会うなんて奇遇だね。岡崎君」

後ろから俺に向かつての声が聞こえる。誰だ？

振り返ると、そこにはAクラスの学年次席。明久大好き真面目系クール眼鏡こと久保利光がいた。

「よう久保。お前も小便か？」

「少し催してしまったのでね。済まないが隣失礼するよ」

「おう」

そう言つて久保は俺の左の小便器の前に立ち、用を足し始めた。

「……………」

無言の時間が続く。うーむ、気まずい。久保はお得意様ではあるが別段仲がいいというわけでもないからな、今みたいな二人だけの空間はなんともいえない気まずさがある。

「……岡崎君。一つ質問をしてもいいかい？」

やべー、早く終わらないかと思っていると、向こうから声をかけてきた。

「なんだ？ また明久との絡み本が欲しいとかか？」

「残念だが違う。いや勿論それは後々お願いしようとは思っているんだが」

そうか。それはいつも「鼻屑」どうも。

「ならなんだ？ やけに真剣な顔をしているが……」

「……今日も君達は、覗きをしに行くのかい？」

久保から放たれた言葉に、俺は一瞬驚く。まさかコイツ、教師に言われて俺達の動向を探ろうとしているのか？

「安心してくれ。別に僕は先生方に告げ口をしようとは思っていない。これは個人的に気になることさ」

「なんだそうか。なら良かった。答えは勿論イエス、今日も行くつもりだ。まだ俺達の目的は果たされていないからな」

「そうなのか……」

静かな声でポソリと、久保は俺の言葉に返事をした。うーむ、コイツをどうにか出来れば俺達の戦力はかなり増大する。

明久でも説得は不可能だったが……やるだけやってみるか。

「なあ久保よ。俺達に協力してくれないか？ この戦いにはお前やAクラスの男子の力が必要なんだ」

「……濟まないが断る。僕は今回の君達に手を貸すつもりは一切ない」

「どうしてもか？」

「ああ」

久保が静かに頷く。

話を聞くと、俺達がやっていることはれっきとした犯罪行為であり、入浴中の女子の身体を見ようとするとする真似自体が不潔。その為、自分はそんな社会に不適合ともいえる真似は人として決してするわけにはいかないとのこと。

これと全く同じことを明久にも言ったらしい。なるほど、だから明久は説得に失敗したと言ってたのか。これは思った以上に真面目なヤツのようだ。

俺はしばらくの沈黙の後、言った。

「……確かに、世間一般的に見れば俺達のやってることは常識として逸脱してるかもな」



「そうだろう。だから——」

「でもな久保。一つだけお前の言葉に異を唱えさせて貰う。俺、いや俺達は——」

「——ただの一つも、間違えてなどいない」

——

——明久視点——

カチツ　カチツ

時計の針の音が妙に大きく聞こえる。昨日まではそんなこと気がつきもしなかったのに、今になってその音が気になり始めた。

「明久。今更ジタバタするな。補充のテストも全て受けたし、写真も回した。やるべき

ことは全てやったのだから、あとは何も考えずに戦うだけだ」

「だが明久の気持ちも分かるぜ。なんせあと数時間後には全てが終わってるんだからな。泣いても笑ってもよ……」

部屋の隅で目を瞑っていた雄二と虚空に向かつてシャドーボクシングをしていた大悟が僕の様子に気がついて声をかけてくれた。こういう時はコイツらの神経の太さが頼もしい。

「D・E・Fクラスは昨日に続いて全員参加のようじゃ。あとはA・B・Cクラスが協力してくれるかどうか、じゃな」

今日は点数補充の為にテストで殆ど根回しに行けなかったから、写真とイラストを回した結果がどうなっているのかわからない。結果は作戦開始後に始めてわかることになる。

「……………今日こそ借りを返す」

「俺もだ。二次元嫁達を守る者として、三次元なんぞにやられっぱなしじゃ終われねえ」  
闘志を燃やすムツツリー二と大悟。今夜の二人は一味違う。

「作戦開始も近い。最後の打ち合わせを始めるぞ」

「二二「わかった（のじゃ）」二二」

瞑っていた目を開け、雄二が僕の前にやってきた。それに続いて残りの三人も集まっ

てくる。

「俺達がいるのは三階だから、三階、二階、一階、女子風呂前の四ヶ所を突破しないと目的地には辿り着けない」

しかも僕達の部屋は女子風呂から一番離れた場所にある。従ってルートとしては一番長く、かつショートカットも不可能だ。

「三階の敵はE・Fクラスの仲間が抑えてくれる。二階の敵はDクラスが抑えてくれる手筈になっているが……」

「戦力的に、Dクラスだけでは少々厳しいじやろうな」

教師側も各クラスの生徒の強さに応じて戦力を配置している。Cクラス抜きでの二階突破は厳しいだろう。

「でも、ここまで来たらやるしかないよ」

「勿論そのつもりだ。それで、二階を突破すると——」

「……………高橋先生」

「アイツか……………」

「そうだ。学年主任の高橋女史が率いる一階教師陣だ。恐らくここには翔子や姫路、工藤愛子。そしてもし大悟が暴れた時のことを想定して木下姉もいるだろう」

「っ……………!!」

木下さんの名前が出た瞬間、大悟と秀吉がビクツとはねあがる。どうやら相当過敏になっっているようだ。

今朝も二人はまるで全ての間接を極められ完膚無きまで殴られた挙げ句壁に顔面から叩きつけられたような姿をしていたし、一体木下さんに何をされたんだらうか。

「とすると、これじゃ鉄人の下まで行くのはかなり難関になるね」

「いや、お前ら四人を通す一瞬の隙は俺が作る。だが、高橋女史や翔子達をそのまま足止めするのは不可能だと思ってくれ」

「じゃが、足止めできねば……」

「ああ。お前らは前後を挟まれて終わりだ。作戦は失敗。俺は翔子に残りの人生を奪われ、明久は変態として生きていくことになり、大悟は木下姉に Nice boat される未来になる」

「作戦が失敗しても現状と対して変わらん気がするのじゃが……?」

なんてことを言うんだ。しかも大悟に至っては殺されてるし。

「とにかく、高橋女史は根性でなんとかするしかない。A・Bクラスが協力してくれたら勝機は充分にあるんだが」

「えー、そうか? 根本あたりとか状況次第で女子側に寝返りそんな気がすんだけど」

どうしよう。否定が出来ない。

「いや、Aクラスはともかく、Bクラスは大丈夫じゃろ。いくら根本といえどもそこは思春期の男子。きちんとヤツを含めた全員にあの写真が効くはずじゃ」

「あははつ。でも秀吉の言い方だとAクラスの男子代表格は女の子に興味がないみたいだよ？」

「「「「……………」」」」

え？ 何で皆気まずそうに目を逸らすの？

「そこまで行ったらあとはお前たちの仕事だ。わかっているな？」

「……………大島先生を倒す」

「俺と秀吉は姉御だ」

「そして僕は鉄人、だね？」

正直、今までの戦いでもこれほど厳しいものはなかった。今回はあまりにも不確定要素が多すぎる。でも、

「……………大丈夫。きつとうまくいく」

「うん」

「当然だな」

「じゃな」

「今更何をいうか」

僕らはクスリと笑みを浮かべる。

僕は思う。このメンバーなら何でも出来る気がする。不可能を可能にすることが出来る。それは他の誰でもない、僕ら五人でないと絶対に成立しない。

坂本雄二という悪友バカがいて、

木下秀吉という美少女バカがいて、

土屋康太というムツツリスケベバカがいて、

岡崎大悟というキモオタバカがいて、

最後に、僕……吉井明久という大バカがいる。

こんなどうしようもない五人だからこそなんだ。だからこそ、今なら胸を張って言えることがある。

僕ら五人は——絶対に負けない。

——ピピッ

どこかで電子音が聞こえた。八時を告げる時報。戦闘開始の法螺貝だ。

僕らは円陣を組み、雄二が最後の激励を飛ばす。

「……よし、てめえら、気合いは入っているか！」

「……おうっ！」「……」

「女子も教師も、AクラスもFクラスも関係ねえ！ 男の底力、とくと見せてやろうじゃねえか！」

「……おうっ！」「……」

「これがラストチャンスだ！ 俺達五人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はあり得ねえ！ そして俺達ならそれが出来る！ いいか！ 俺達は——最強だっ！！」

「……当然だっ！！」「……」

「強化合宿第四夜・最終決戦、出陣でるぞっ！！」

「「「よっしやあ——っ!!」」」

強化合宿四日目二〇〇〇時。

今、覗きを巡る最後の勝負が始まろうとしていた。



## 第四十八問 学力強化合宿最終戦 〔開戦〕

——大悟視点

『いたわっ！ 主犯格五人組よ』

『長谷川先生！ 向こうの五人をやります！』

部屋を出ると、真っ先に待ち構えていたであろう女子部隊に道を阻まれる。長谷川を連れていることから対戦科目は数学か。

俺では無理だなど思っていると、横にいる雄二が野性味溢れる顔と口調で言葉を返した。

「俺に任せろ！ あんな雑魚共一瞬で叩きのめしてやる！ 試獣<sup>サモモン</sup>召喚！」

「……任せた！……」

先行してきた女子二人に対し雄二が召喚獣を展開して迎え撃つ。

が、所詮はただの雑兵。真面目に勉強し、補充試験で点数を上げた雄二には相手にすらならない。

『Fクラスの分際で!』

「ほぎげ! 勉強してから出直しやがれっ!」

『きゃあああ——っ!』

あえなく拳一発でダブル撃沈。

見たところ、相手はEクラスの生徒だな。一学期最初の方ならまだしも、これまで試召戦争の経験も録にないヤツらが勝てるほど、今の俺達は甘くない! 悔るんじゃねえよ!

「雑魚に構ってる暇はねえ! 先を急ぐぞ!」

「[[「おうっ!」]]」

「待ちなさい! 坂本君!」

女子グループを率いる長谷川が迫ろうとする。が、召喚獣の動きが厳かだ!

「大悟! 頼む!」

「おうっ! 唸れ俺の黄金の右いいいいっ!」

俺はその一瞬の隙をついて肉薄。素早く召喚獣に拳を叩き込む。

驚く長谷川をよそに、不意をつかれた召喚獣は抵抗も出来ずフツ飛んでいった。

「それじゃあな長谷川さんよ!」

「くっ、岡崎君! 行かせません!」

「長谷川先生。残念ながらあなたの相手は兄貴達じゃなく、僕らです」

そのまま俺達と長谷川の間には、須川率いるクラスメイト達が割って入った。

「吉井、坂本、兄貴！ ここは任せて先に行け！ 試獣召喚！」

『『試獣召喚っ！』』

「頼むよ須川君！ ヴァルハラで会おう！」

「任せろ！ それより、きちんと鉄人を倒しておけよ！ そうじゃないとここを片付けた後で覗きに行けないからな！」

「わかってるよ！」

須川の言葉に明久が力強く頷く。普段のコイツらからは考えられないほど真剣かつ凄まじい闘志を感じる。実際、まだこちらは一人も戦死者を出していない。

俺はそんなヤツらを鼓舞するように叫んだ。

「いいか野郎共！ 何があろうと死ぬんじゃねえぞ！ 生き残った暁には、ダイゴブツクス特製のエロ同人誌をフルカラーバージョンかつ無料でくれてやるぞっ！！ 勿論、希望があれば受け付ける！！」

『『うおっしやあああぁー！！』』

「更に！！ 今回功績を上げたヤツには特賞として、うちの妹の連絡先を教えてやろうじゃねえかあああぁ！！」

『『兄貴は最高だあああああー！！！！』』

「……………?」

「どうしたんだ? 天」

「いや、なんかどこからか邪な気配を感じたような……………」

長谷川の対応を須川達に任せ、俺達は目的地に向かって進軍する。

『翔子たん! 翔子たん! はあはあはああつ!』

『島田のぺったんこおおーっ!』

『姫路さん結婚しましよおーっ!』

『優子さん! 僕を踏んでくださあああいつ!』

ふっ……………欲望に忠実なヤツらめ。その意気で頑張ってくれよ。

「凄い士気じゃな。これならば三階の制圧は問題無さそうじゃ」

「皆の気持ちが一つになってるからね」

三階に配置されている教師を含む相手側の戦力は、こっちの戦力であるE・Fクラスの男子によって苦戦している。だが当然だ。なにせこの時点で二クラス分の人数を投入しているんだからな。

秀吉の言う通り、後は時間の問題だろう。

「だが、問題はここからだぜ」

「……………援軍が来なければ、ここまで」

「そうだな。Dクラスだけで戦っているのか、Cクラスが参戦しているのか」

「……………躊躇っている時間はない」

「うん。行こう皆！」

正直なところ、Cクラスが来ていなければ俺達は詰みだ。だが、俺は信じるぞ！  
ダ  
イゴブックスとムツツリ商会は、全ての男共の性欲を刺激し、そこに秘められた本能を  
突き動かせる力があるってことをな！

二階へ続く階段を勢いよく駆け降りる。そして踊り場を曲がって見えた先には、

『俺達の覗きの邪魔はさせない！』

試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>！』

『先生、覚悟してもらいます！』

『き、君達まで参加していいようとは……!』

化学教師 布施文博 663点

化学 VS

Cクラス 黒崎トオル 144点

&

野口一心 132点

「Cクラス！ 来てくれたんだね！」

望んでいた援軍の姿を見て、明久が歓喜の声を上げる。

「ムッツリーニと兄貴が見せてくれた浴衣の写真とイラスト……あれほど胸を熱くするものがあつただろうか……、俺は心底！ あの浴衣の中を見たいと思った！」

なんて嬉しいことを言ってくれるのだろうか。読者が喜んでくれたのなら製作者として冥利に尽きるってもんだぜ。

「黒崎……俺はお前の姿が輝いて見えるぞ！」

「兄貴。俺……いや俺達は！ 兄貴とムッツリーニを心から尊敬している!! だからこ

そ……こんなところでそう簡単に死なせはしない！」

黒崎の魂のこもった叫びに、俺と同志は真剣に頷く。

コイツらは自分の身を呈してまで戦ってくれているんだ。なら俺達に出来るのは、コイツらの覚悟と託された期待に全身全霊を持って応えることだ。人間として……同じ男としてな！

ありがとう！ 礼としてお前らにはダイゴブックス特製ドスケベイラストの枕カバーをプレゼントするからな！

「Cクラス、Dクラスの野郎共、協力に感謝するっ！ 二回は——俺達の背中はお前らに任せるぞ！」

「俺達も、お前らに夢を預ける！ Cクラス、Dクラス男子。アイツらに道を作るんだ！

栄光の、ウイニングロードを!!」

『『『おおーっ！』』』

地鳴りするような怒号と共に彼らは再び敵である布施へと向き直った。

そんな勇敢な戦友達を背にし、俺達は更に前へと進む。

「あのさ、こういうのって凄く嬉しいよね」

途中、明久がそんなことを口に漏らす。

「そうじゃの。仲間が増えていく喜びとでも言うべきじゃろうか」

「昨日の敵は今日の友ってか。まさしく少年向け漫画の主人公気分だな。こりゃ」

「その分仲間だった女子が敵だな」

「そこは気にしない方向で」

「心配するな。仲間だったヤツが闇堕ちして敵になるなんて事態はそうそう珍しくない。そしてそういう時こそ、主人公は真の力を発揮するー」

「挙げるなら桜ルートの衛宮士郎とかが良い例だな。セイバーオルタとイリヤたんまじすい。」

「だが、それもこの先の状況次第だ」

「後はA、Bクラスが協力してくれているかどうかじゃが……」

「……………久保に、あの写真は効かない」

「そんな!? まさか久保君は、あの写真やイラストよりもっと凄いものを!」

「「……………」」

「え? なんで急に皆押し黙っちゃったの? 僕何かおかしなこと言った?」

それは知らぬが仏ってヤツだ。

そうこうしているうちに、一階に続く階段に辿り着き、そのまま一階へと近づくと、



すると、微かに下から声が聞こえてきた。

『……………護してくれっ……………』

『……………メだ！……………倒的過ぎる……………！』

なんだ……………？ さつきとはまるで声色が違うぞ。まさか……………!?

「やった！ 男子の声が聞こえるよ！ これで一階の制圧もうまく——」

「いや、違う！ 様子がおかしいぞ……………！」

「やっぱり、予想していたことがおきているか！」

急いで一階に向かい、階下の様子を見渡す。

するとそこにいたのは、俺達にとってルナティック。すなわち高難易度な存在である

二人の女子の姿だった。

「……………雄二。悪戯はそこまで」

「明久君。ここは通しませんよ」

「翔子かつ！」

「姫路さん……………っ！」

その二人、霧島と姫路によって仲間達が次々と蹂躪されていく。

Aクラス 霧島翔子 4762点

&

Fクラス 姫路瑞希 4422点

VS

Bクラス 加西真一 1692点

くっ……、分かつてはいたがなんつう強さだ！ 流石は学年最強コンビ。ハンパじゃねえな……！

「Aクラスがおらんようじゃな……」

秀吉の言う通り、現在ここにいるのは根元率いるBクラスのみ。俺達が一番加勢を期待していたAクラスの男子はどこにも見当たらない。それに気づいたのか、雄二も悔しげな顔をする。やっぱり、久保を動かすのは無理だったというのか……。

「……雄二。お仕置き」

「くっ！ 根元バリアーっ！」

「さ、坂本っ！ 折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか!？」

Aクラス 霧島翔子 4762点

総合科目 VS

Bクラス 根元恭二 1931点

Bクラス代表の根元でさえ一撃で葬るとは……。恐ろしく速い攻撃。俺でなきや見逃しちゃうね。

と、そんな事を思っていると、姫路が召喚獣を従えて明久に、霧島が雄二に歩み寄っていった。すると、その様子を見ていたBクラスの連中が怖じ気づいたのか、ちらほら弱音を吐き出し始める。

「明久君。大人しく降参してください」

『もうこれ以上は無理だ……。姫路に霧島に高橋先生なんて、勝てるわけがない』

『だいたい、姫路と霧島が入っていないのなら覗く価値がないじゃないか』

ちやつかりハブられた優子さん。まあアイツ姫路や霧島みたいにナイスボディなワケじゃないからね、しょうがないね。

おっと、今寒気感じた。やっべ殺されるわー。

「諦めちゃダメだつ！ 例え二人が入っていないくとも……、女子が入っているんだよ！ それだけでも覗く価値は充分にあるっ！」

明久がそう皆を鼓舞する。

すると、その様子を見た秀吉が少し驚いたような表情で明久に訊いた。

「明久。なぜここまで圧倒的に不利な状況でありながら諦めようとしなのじゃ？ そ

こまでして写真を取り戻しても、お主の評判は変わらんじやろう？」

更に言えば明久は《観察処分者》だ。痛みのフィードバックがある。このまま続ければヤツが受ける苦痛は想像を絶するレベルになるだろう。

だがそれでもなお明久は諦めようとはしていない。その証拠に、明久の目はまだ死んでいなかった。

「——違うんだ秀吉。そうじゃないんだよ」

「そうじゃ、ない？」

どうやら明久には、本来とは別の目的が出来たようだ。

「確かに最初は写真を取り戻して、真犯人を捕まえて、覗きの疑いを晴らすつもりだった。……でも、こうして仲間が増えて、その仲間達を失いながらも前に進んで、初めて僕は気がついたんだ」

「明久。お主、何を言ってる——」

すると、明久はいつにもなく真剣な表情で叫んだ。

「——正直に言おう。たとえ許されない行為であろうとも、自分の気持ちは偽れない。僕は今——純粋に欲望の為に女子風呂を覗きたいっ！」

「お主はどこまでバカなのじゃ!？」

「……く、くくつ。がはははは!! なるほど、それがお前の本心か!」

秀吉が明久に叫ぶ。ヤツのあまりのバカさ加減に突っ込まずにいられなかったのだろう。

ああそうだ。確かにアイツはバカだ。まさか目的を達成するための過程がそのまま目的そのものになっちまうとはな! しかもそれが冗談や洒落の類いじゃなく純粋に心の底からそう思つてるときたもんだ! なんて欲望に忠実な野郎だ! これが笑わずにいられるか!

しかし、そんな明久の信念を良しとしない者がいた。

「そ、そこまでして私よりも、美波ちゃんのお風呂を覗きたいんですね……! もう許しません!」

怒りに身を任せ、姫路が召喚獣に突撃指示を出す。

対する明久も、それに負けないほどの闘志を湧かせながら召喚獣を喚び出し、応戦の態勢に入らせた。

「覗きは、いけないことなんですからねーっ!!」

「世間のルールなんて関係ない！ 僕は、僕の気持ちに正直に生きるんだあああーっ  
!!」

『よく言った、吉井明久君っ！』

どこかで聞いたことのある声が、廊下に響き渡る。

それにより氣勢を削がれたのか、姫路は召喚獣の動きを止めた。

「だ、誰ですかっ！」

「待たせたね、吉井君。君の正直な気持ちは確かにこの僕が聞き届けた」

「久保君っ！ 来てくれたんだねっ！」

「到着が遅れてしまつてすまない。踏ん切りがつかず、準備をしながらもずっと迷つていたんだが……さっきの君の言葉を聞いて決心がついたよ」

姫路よりも先にその声の主、久保利光を見つけ歓喜する明久。ヤツがここに現れたということは、それによつて巻き起こるイベントは一つしかない。

そしてどこからともなく現れるAクラスの男達。

「Aクラス男子総勢二十四名。今より、吉井明久に力を貸そう！ 全員、彼を援護するんだっ！」

『『『おおおおーっ！！』』』

久保の号令により、一斉に沸き立つAクラスの野郎共。

そしてこの瞬間をもつて、文月学園二学年の全男子が参戦したことになる。

「久保。随分とカッコいい登場の仕方すんじゃねえか。ええ？」

「ああ。そして岡崎君。僕は君に礼を言わなくてはならない。君があの時僕に言ってくれた言葉……胸に深く刺さったよ」

## ——回想始まり

「間違いいじゃ……ないだつて……？」

「ああ。何も間違つてなどいない。俺達はな久保。他の連中からはおかしなやつらだとか頭のおかしい馬鹿の集まりとかつて散々言われ続けてきた。そりゃあそうだろうよ。今までの行いを鑑みてもおおよそ他人から評価され、褒め称えられるようなことなんてしてない。むしろああすれば良かったとか、もつとこうすれば失敗しなかつたとかつて後悔ばかりな日々だったよ。今回のこの覗きも、多くのヤツらからバツシングをくらうだろうな」

「……それなら、どうして」

「だがな。俺達からしてみればそんなもん大した問題じゃねえ。周りが言いたいなら勝手に言わせておけばいい。そんなもんに耳を貸してやる必要も意味もない。俺はな久保……人間にとつて一番大事なのは、決して播るぐことのない”信念”を持つことだと思つてる」

「信……念……？」

「ああ。確かに覗きは犯罪だ。だがそんなもんは百も承知。むしろんなもんだつていい。俺達はなにがあらうと覗きを成功させる……例えどんな壁が立ちほだかろうと、



気持ちの悪い変態と見下されようと構わない！ 自分に嘘をついて本当に大事なもんを失うくらいなら、喜んで俺達はそのレッテルを受け止めてやるよ。それこそが俺達五人……俺。雄二。相棒。同志。そして明久が誓いあつた汚れなき信念だ！ そしてそれは決して、間違いなんかじゃねえんだよ！」

「……………」

「久保。お前にだつてある筈だ。そんな誰に何を言われても決して折れない、そんな強く固い信念がよ。ならその気持ちに……嘘なんてつくんじゃねえ。素直に従えばいいんだ。それは不潔でも間違いでもなんでもない。自信を持つこと、それが自分にとつても……そして明久にとつても大切なことなんだからな」

「……………」

「それを踏まえてもう一度聞くぞ。俺達に協力してくれないか？ 明久だつて、それを強く望んでいる。お前の事を……ずっと待つてるんだよ」

「……………しかし」

「……テメエ！ 何を躊躇つてやがる!! お前は吉井明久という人間を守ると誓つたんじゃないのか!? アイツが苦しみ、困っているのなら迷わず手を差し伸べるんじゃないのか!? お前はかつてそう俺に教えてくれたんじゃないのか!? それとも全部……虚言だつたのかよ!? お前の明久に対する想いはその程度しかない上つ面なモンか！」

「ああ!」

「…っ!? 違う!! 僕は本当に吉井君の力になりたいと思ってる!! その気持ちは決して…:…軽薄でも嘘偽りでもない!!」

「そうか! なら——」

「——その気持ち…:…口じゃなく行動で示してみろ! お前ならそれが出来る筈だ! そうだろう!! 久保利光!!」

——回想終了

「君は僕に教えてくれた。自分の信念に従うことは決して間違いなんかじゃないと。それが分かった今はとても晴れ晴れとした気分だ。本当にありがとう。岡崎君」

「いっていいよ」

そうやって、お互いに握手を交わす。

その時の久保は、まるで心につつかえていたものが取り払われたかのような清々しい表情をしていた。それを見て、今のコイツにもうあの時の迷いはないと断言出来る。

すると、明久が再び久保に言った。

「ありがとう久保君！ 君たちの勇氣に心から感謝するよ！」

「いや、感謝するのは僕の方さ。君の言った通り、自分の気持ちに嘘はつけない。世間に許されなくても、好きなのは好きなんだ……！」

明久が一瞬震えたのは気のせいだろう。

「久保君。お仕置きの邪魔をしないで下さい！」

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>……っ!!」

すかさず久保は自分の召喚獣を喚び出し、突撃してくる姫路の召喚獣を止める。

「僕は吉井君を守ると誓ったんだ。君の思い通りにはさせない！」

久保の宣言と同時にAクラスの男達が一斉に召喚。姫路と霧島の召喚獣を取り囲んだ。さすがにあの二人でも苦戦は免れないだろう。

「今だっ！ 明久、秀吉、ムツツリーニ、大悟！ 階段へ向かって走れっ！」

「「「わかった！」」」

援軍に驚く霧島を突破し、雄二が高橋女史の前に躍り出る。

しかし、そんな光景を目の当たりにしてもなお、彼女は一切の動揺を見せなかった。「まさかAクラスまで協力するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから——試験召喚」

冷静に高橋女史は自分の召喚獣を喚び出す。それにより先日の出来事が俺の脳裏をよぎった。

恐らく向こうも俺が再び生身で向かってくることを想定に入れているだろう。だが、今日は違う！

「いいや、悪いがここは通らせてもらおうぜ！ 行くぞ——起動っ！」

アウェイクン

雄二の掛け声と共に、ヤツが召喚大会で手に入れた白金の腕輪が起動し新たな試験召喚フィールドが展開される。

そして今現在は、既に高橋女史が総合科目フィールドを展開中だ。つまり——

「干渉ですか……！ やつてくれましたね坂本君……！」

——科目の異なるフィールドが重ねられた為、双方の効果が打ち消される。これにより全ての召喚獣は科目に関係なく消え去った。これが昨日雄二が説明した《干渉》という現象だ。

「行けーっ！！ 明久あーっ！！」

「任せとけっ！」

「よし、行くぞ野郎共!! 最終決戦の地まで全速☆前進☆D A!!」

『『『おおおーっ!!』』』

俺。明久。秀吉。ムッツリーニの四人が先行し、一気に高橋女史の脇を駆け抜ける。

それに続いて他の男子達も走り出すが、そう簡単には問屋が卸さないようだ。

「く……………! 吉井君達四人は逃がしましたが、貴方達まで通しはしません!」

既に高橋女史は召喚獣を喚び直していた。

後ろから雄二のうめき声が聞こえる。どうやら抜けられたのは俺達のみで、援軍達は

足止めされてしまったようだ。ならしうがねえ、ここから先は俺達だけで切り抜ける

!

「ムッツリーニ。ここは打ち合わせ通り大島先生を宜しく」

「……………了解」

地下に繋がる階段を駆け降り、女史風呂へと繋がる最後のルートへとたどり着いた。

あとはこの先にある大宴会場を抜けるだけだ。

しかし、階段を振り切ったその先では、二つの影が俺達の道を阻むように立っていた。

「もしかしたら来ないんじゃないかと思ったよ。ムッツリーニ君」

「く、工藤さんまで…………」

保健体育の大島。そして俺の嫁の一人、柿崎みる——ではなく、ムツツリーニの自称ライバルこと工藤愛子だ。

この廊下はあまり敷居がないから教師だけだと思っていたが、まさか工藤までいるとは思わなかった。間違いなく同志を警戒してのことだろう。

「仕方ない。ムツツリーニ、援護するよ」

流石の同志でも工藤と大島を二人で相手するには荷が重いと判断したのか、明久が前に出る。

「……………いや、計画に変更はない。ここは引き受ける」

「でもー」

「いいよ。ムツツリーニ君に免じて、残りの三人は通してあげる」

「え？」

工藤の思いがけない台詞に、明久が間の抜けた声を漏らす。

一体何故だ？ 保健体育の点数なら同志はともかく、俺ら三人なんぞ簡単に倒すことが出来る筈だ。そうすれば後方で控えているであろう戦力を無理して使うこともない

だろうに。

……だが、相手からわざわざ道を作ってくれるのならありがたい限りだ。何を企んでいるのかは知らないが、ここは工藤の言葉に甘えさせてもらおうとしよう。

「行け。三人とも」

「……………信じていいんだな。同志」

「……………当然だ」

尋ねる俺に小粋な笑みを返す同志。フツ……いい目をしやがって。

「……………死ぬなよ、ムツツリーニ！」

「お前の覚悟は、決して無駄にはしねえからな！」

「ワシらの背中は、お主に預けるぞい！」

「……………！！（コクリ）」

力強く頷く同志。ヤツは本気だ。自分の力を信じている。自分の力が目の前の二人に負けることは絶対しないと確信している。アイツはやるときはやるヤツだからな。なら何も心配はいらねえだろうよ！

そう自分に言い聞かせ、俺達は更に先を目指し走り出した。

## ——明久視点。

後ろで召喚獣が展開された気配がする。ムッツリーニが戦闘を始めたみたいだ。

「あともう少しでゴールだ！ 気張っていけよてめえら！」

「うんっ！」

「承知じゃー！」

大悟の激励の鼓舞に、僕と秀吉が元気よく返す。

コイツの言う通り、ここまで来たからには負けるわけにはいかない。今も僕らの後ろでは雄二やムッツリーニを始め多くの仲間達が戦っている。人のことを気にするより、僕らは僕らに化せられた使命を果たすべきだ。

「着いたぞい！ 大宴会場じゃ！」

秀吉が先を指差す。

そこには一日目の時に見た、高級そうな観音式の扉がある。よし、あそこを越えたら  
いよいよ女子風呂だ！

「ふん！ しゃらくせえ!!」



Bannon!

大悟がその扉を思い切り蹴破ると同時に、室内へと飛び込む。

そこには先日同様、テーブルや椅子などが撤去されたただっ広い空間が広がっている。

そして視線の先には、さっきの工藤さんと大島先生同様、先の扉を守る様に仁王立ちする人影がいた。

「待ってたわよ、大悟」

「やっぱり来たんだね。岡崎君。吉井君。木下君」

「落合先生……………」

「優子……………」

雄二の予想通り、そこには社会科担当の落合先生と秀吉のお姉さん兼大悟の彼女(仮)こと木下さんがいた。

しかも二人だけではなく、その後ろには数多くの女子が並んでいた。おそらく伏兵として落合先生が連れてきているのだろう。

「二日目と違って、かなり人数が多いようじゃのう」

「ああ。こりや骨が折れそうだな」

「まさかあの高橋先生を突破してくるなんて思わなかったけど……その猛進もこれまでだよ。ここから先は誰も行かせないからっ！」

「大悟……。そこまでして他の雌の裸を見ようなんて……かなりキツめのオシオキがご所望かしら？」

年上とは思えないほど可愛い表情でキリツと睨み付けてくる落合先生と、逆にニコニコと黒く淀んだ瞳で笑みを浮かべる木下さん。

特に木下さんは、大悟が自分以外の女子の裸を見ることが相当許せないようで、その証拠に目が全く笑っていない。霧島さんとは違う種類での恐怖を感じる。

「大悟、秀吉。今回ばかりは僕も残るよ。さすがに状況が厳しすぎる」

おそらく勝負科目は歴史。となるとこのメンバーに対して僕はかなり劣る。でも、だからといって大悟と秀吉の二人で勝てる相手じゃ——

「必要ねえよ」

「うむ。右に同じじゃ」

「え？」

さつきのムツツリー二の時と同じく、間拔けな声が出た。

思わず耳を疑う。そんな馬鹿な！ いくら大悟の社会科目が先生並とはいえ、一度完全にはやられているじゃないか！ しかも今夜は戦力だつて大幅に違うのに二人で戦うなんて！

「言つただらう明久。お前はこつち側の陣営の最終兵器。リーサルウェポン。鉄人と互角にやり合える唯一の存在なんだ。こんなところで危険に晒せるもんか」

「それにワシらは、あの人に借りがあるのでな。それを今ここで返したいのじゃ」

でも、二人の表情は真剣だつた。ムツツリー二同様、負けることなど全く考えていない。本気で落合先生達を倒そうとしている。

「いけるんだね、大悟。秀吉？」

「愚問だな明久……俺達を誰だと思つてやがる？」

「大悟の言う通りじゃ。じゃから明久は先へ進め。お主の背中は、何があろうと守り抜いてみせよう」

そう言つて二人は口角を上歪めた。

普段はどうしようもないキモオタと、逆に僕が守つてあげたくなくなるくらい的美少女なのに、今はまるで別人のように凛々しく、そして大きく見える。

そうか、なら僕も覚悟を決めなきゃ！

「分かったよ！　ここは任せた！　代わりに僕は鉄人を倒す！」

「ちよつと待つて！　さつきもいつたけど、ここから先は——」

「別にいいですよ落合先生。吉井君。特別に貴方だけは通してあげるわ」

木下さんがそう言つて落合先生を制する。

彼女は多分、僕に突破されたとしても、女子風呂の前には最大の壁である鉄人が控えている。彼の力なら僕程度、簡単に沈めることが出来るだろうから特に問題ないと思つているんだろう。

ちよつと悔しいけど、今はそんなことどうでもいい！

「大悟！　秀吉！　絶対に負けるなよ！」

「お前に言われるまでもねえ！」

「おまこそ、しくじるでないぞ！」

二人を残し、僕は女子達が開けてくれた道突つ走る。そしてそのまま向かい側の扉を開け、理想郷への道をひたすらに駆けていった。

## ——大悟視点。

「いやー、聞いたかよ秀吉。あの野郎、負けるなだつてさ」

「うむ。エールのつもりで明久は言ったのじゃろう。じゃが、ワシらにとつては笑い話じゃな」

俺と秀吉はそう言つて笑い合う。

全く、毎度毎度そうだが、アイツは俺達よりも自分の心配をしとけつてんだよ。

「へえ……随分と余裕綽々じゃない。アンタ達……!」

「岡崎君。木下君。私と二人の実力の差は一目目で分かつてる筈だよ? なのにまだやるつもりでいるの?」

「落合先生。ここはアタシ達生徒に任せてくれませんか? あのバカ二人は一度完膚なきまでに倒して痛い目を見させないと分からないようなので」

「そうなの? わかった。なら私も召喚はするけど援護に回るね。その代わり暴力は駄目だよ?」

「大丈夫ですよ。今はそんなつもりありませんから」

「そ、そう? ならいいんだけど……(今は?)」

すると、優子を筆頭に女子達がそろそろと一斉に並びやがった。

「……………さて、そんじや俺達も始めるとするか。力貸せよ、相棒？」

「勿論じや。相棒」

「っ！ そうやってアタシ以外の女と仲良くするなんて……………！ 許さない……………！ 二人

まとめて本気で叩きのめしてやるわ！ 試獣召喚！」

『『試獣召喚!!』』』

「姉上!? ワシは男なのじゃが!!?」

Aクラス 木下優子 399点

日本史 &

森兵恵 290点

&

横田奈々 310点

&

花岡麗 286点

&

奥井美咲 300点

社会科教師 落合夏音 & 689点

召喚フィールドが展開され、一斉に向こうの召喚獣が現れた。

それに対し、俺と秀吉も同じく召喚獣を喚び出す為の呪文を唱える。

「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚！」

そして現れた俺と秀吉の分身。

「皆！一斉にかかるわよ！」

「了解！」

優子の号令により、一気にそれぞれを武器を構えて相手が突貫してくる。狙いは当然俺の召喚獣だ。

前にも話したが、召喚獣の根底は人間と同じなため、急所を狙われればダメージもそれに比例する。頭が吹き飛ばされたり、心臓を貫かれたりなんかしたら即死だ。

「……………本気、か。なら——」

そして、敵の召喚獣達が、俺の召喚獣を串刺しにする——

「っ！ 待って木下さん！ 今岡崎君の召喚獣に近づいちゃ——」

「——こつちも遠慮なくそうさせて貰うぞ!! ”変身!!”」

——その刹那。俺の召喚獣が獣のごとく吠えた。

『ヴウウウウウロロロロオオオオオ!!!』

「っ!!? しまっ——」

姉御の言葉により、優子はすぐさま自分がしてしまった過ちに気づいたようだが、時すでに遅し。

発した咆哮は巨大な衝撃波となり、向かってきた全ての召喚獣を吹き飛ばす。

そして、俺の召喚獣はその姿を再び変貌させた。

「叩きのめすだど? はっ! おもしれエ……!!」

碧色に輝く鱗。

天井を覆い尽くす程の長身な体躯。

総てを喰らい、破壊し尽くさんとするほどの凶暴さと、総てを平伏せさせてしまう程



の神々しさを兼ね備えた牙、爪、角、眼、髭。

「さあ、本番はこれからだ……お前ら全員、俺達<sup>俺達</sup>が叩き潰してやるよ!!!」

Fクラス 岡崎大悟 884点

日本史 &

木下秀吉 170点

『ヴオロロロロオオオオオオオオ!!!』

そんな俺の声に同調するかのように、龍と化した俺の召喚獣が吠えた。  
さあ、長かった戦いもこれが最後だ！ 今度こそ——勝つ!!!

## 第四十九問 学力強化合宿最終戦 ～リベンジ戦～

「大悟！ 今じゃ！ 敵が同一箇所に集まったぞい！」

「おうよっ！ くらいやがれ——」恋のバーニング☆プレス!!!」

「っ!? 皆、避けて!!」

空に浮かぶ巨大な龍と化した俺の召喚獣の口から放たれた巨大な熱線が、地上ごと敵を焼き尽くさんと襲いかかる。

それに対し優子は、いち早く指示を出し味方に攻撃を回避させようとするが、  
ポオオオオンツ!!

『っ!? きゃああああつ?!』

『森さん?!』

一瞬の判断が遅れたのか、逃げ遅れた一体の召喚獣が熱線に包まれる。勿論戦死だ。

ちなみに秀吉の召喚獣は俺の召喚獣の頭部に搭乗させることで、簡単には敵に攻撃をさせないようにしている。

「ははは！ 実に痛快だな！」

『な、なんてデタラメな攻撃なの……!』

『しかも何よ。あのバカげた点数は……!?』

龍を見上げながら、女子達が口々に呟く。

当然だ。ただでさえ相手がこんなバカデカイ怪物なのに、更にその強さが担当教師を大きく上回っているのだから。

「当たり前だ！ このリベンジ戦の為に備えて、俺と秀吉はこの三日間を費やしたんだからな！」

「うむ。正直かなり体力的にも精神的にもキツかったが……これも雪辱を晴らすためじゃからな！」

俺の得意科目は社会科目。特に日本史と世界史だ。

だから俺達最初の敗北から、この三日間の内に与えられた学習時間は全てその科目のみを勉強した。どうせ他の科目じゃ俺は使い物にならないし、なら自分の持つ最強の武器を徹底的にレベル上げする方が効率的だからな。雄二もお前はそうしてくれと言っていたしな。

秀吉も同様で、今までに見たことがないくらい必死に勉強していた。コイツは演劇や歌唱など“エンターテイナー”としての才能には長けているが、勉強に関しては社会科目以外の俺や明久、同志とあまり大差がない。だから中々に苦労はしたがその結果、凄く良いとまではいかなかったものの、今までの成績を凌駕する程の点数を取ることが出

来たのだ。

「もう油断も加減もしねエ。覚悟しろよ女子共。今日の俺達は——強エぞ!!!」

『……………！こ、こんなの私達でどうにかなるの……………？』

『落合先生を点数で超えてるのに、無茶だよ……………！』

戦況はまさしくこっちの圧倒的有利。一日目の無様な結果とは大違いだ。

……………が、だからといって諦めるようなタマじやないことは知っている。そう——特にアイツは。

「怖じ気づかないで！確かに今は完全にこっちが不利だけど、大悟の腕輪の能力には時間制限があるの！だからそこまで生き残ることが出来れば、アタシ達の勝ちよ！」

「木下さんの言う通りだよ！だから皆。まずは防御と回避に撤して！そして隙が空いた瞬間に攻撃を仕掛けていくよ!!」

『『はー!!』』』

なるほど、どうやらこっちの情報筒抜けのようだ。

二人の言葉通り、俺のこの召喚獣を龍に変身させる能力には、点数分の秒数かんのみという時間制限が存在する。それが過ぎてしまうと元の姿に戻るだけでなく、一気にその点数がごっそりと減ってしまい、かつ疲労感のフィードバックがあるというおまけつきだ。当然そうなれば勝ち目は皆無になる。

だからさっきの姉御の発言は妥当な判断だと言えるだろう。無理をして攻め込み返り討ちになるよりも、そうした方が断然イージーなのだから。

「はっ。確かにそうだな。だがそんな甘っちょろい考えで……俺達を——」

俺は龍を上空でとぐるを巻くように大きく旋回させる。そして凄まじい勢いを利用し、

「っ！ 来るわ!! 回避!!」

『はい!!』』

「——倒せると思うなあ!!」

鞭の様にしならせた尻尾を思い切り叩きつけた。

地面を砕かんとするほどの轟音と衝撃を引き起こすが、残念ながらその攻撃は今度は空振りに終わってしまった。

「チツ、はずしたか」

「とんでもない威力じゃの……召喚獣でなければ床は確実に木っ端微塵じゃな」

「おう。そのつもりでブツ叩いたからな」

手加減など必要ない。

これは喧嘩じゃなく戦争だ。例え相手が女子だろうが、敵に少しでも情けや容赦をかければそれが命取りとなる。

だから俺は今日——相手をブツ殺すつもりで戦う!

「姉御! 優子! 悪いが今日は教師とか、腐れ縁だとかつつうモンは全部抜きにさせてもらう! 大義の為、友の冤罪を晴らす為……そして、男の尊厳を守る為に遠慮なくお前らを倒す!! 行くぞ秀吉!!」

「合点!!」

龍が咆哮をあげながら敵に迫る。狙いは一番厄介になるであろう姉御の召喚獣だ。まずは先に潰す!!

「前回の時のようにはいかねえぞ!! 姉御!!」

「くっ! 岡崎君、木下君……どうしてそこまでして覗きなんてする必要があるの!?

言っておくけど、君達がやってることは犯罪なんだよ!? 停学が怖くないの!?

「停学……? それがどうしたってんだよオ!? んなもん俺達が背負ってるモンに比べりや大したことじゃねえ!!」

「いや、停学はかなりの事態だと思ふのじゃが……」

そして龍が相手を噛み砕こうと大きく口を開けて襲いかかる。

「もうっ! どうしてその行動力を他の事に活かせないのかなっ!」

が、間一髪のところまで避けられる。すると反撃とばかりに姉御の召喚獣が武器を抜刀し首目掛けて刃を振り上げてきた。しかし、その攻撃は強固な鱗のお陰でダメージは殆

ど通らない。

「そんな攻撃じゃあ、俺達は倒せねえぞ!!」

「むう。一年生の頃といい、本当に貴方や吉井君達は破天荒なんだからっ!!」

「あははは! そいつはどうも! 誉め言葉と受け取っておくぜ!」

龍は再び上空へと高く舞い上がり、地面から敵を見下ろす。

さて、次はどうやって攻撃を仕掛けようかと考えていると、

「大悟……そこまでして他の女の裸が見たいっていうの……? アタシのじゃ、満足出

来ないの……?」

「なんだと?」

「だって、ここまで危険を犯してまで女子風呂を覗こうとするってことは、大悟にとってそこまでするほどの魅力的な子が他にいるって事なんでしょう……?」

優子が俺に向かってそんな事を訊いてきた。

俺はふう、と溜め息をつく。全く、アイツは何をバカなことを言っているのだろう。

全く仕方ないな……もう一度教えてやるとするか。

「勘違いするな優子。別に俺にはそんなヤツはいねえし、お前の身体が魅力的じゃないとも思っていない。何故なら俺は——」

「えっ……? それってつまり、アタシのことが……」

「——二次元かロリじゃないと興奮出来ねえんだ」

「うん、殺すわね♪」

瞬く間の殺害宣告。そんな！俺は何も嘘はついていないというのに!?

しかもなんか背中から禍々しいオーラみたいなの出てるんだが!?! はっ！まさか優子は病ミ病ミの実を食べたヤンデレ人間!?!

「大悟。秀吉。この勝負が終わったら三人でサッカーをしましょう。アタシがキッカーで二人はボールとサンドバッグね」

「待て優子！俺の知識が間違っていないのならそれはサッカーでなくただの虐殺だ！」

「しかも何故ワシまで巻き込まれるのじゃ!?!」

すると、優子の召喚獣が物凄い速度で壁を蹴ってジャンプ。驚くことにその跳躍力は凄まじく、空中に浮かぶ俺の召喚獣と同じ高さまできやがった。

「あつ！木下さん！待って!」

「ふん！バカ正直に正面から来やがったな！ならくええ！」恋のバーニ——」

「違うわ！まずはアンタからよ!! 秀吉!!」

「なんじゃと!?!」

そのままランスを突き出して俺——ではなく、頭部に乗っている秀吉の召喚獣に向



かっってくる！

ま、まずい！ 回避をつ！

「クソツ!!」

「あ、危なかったのじゃ……!!」

「まだよ!!」

間一髪のところでもなんとか避ける。が優子は地面ではなく、なんと龍と化した俺の召喚獣に着地したのだ。

そのままダッシュで身体を駆け、頭部へと向かっていく。

「召喚獣といえど、アタシの大悟に気安く触れるなんて許さないわよ……秀吉イ!!」

「姉上。ワシが言うのもなんじやが目的が変わっておらぬか!？」

「!! しっかり掴まってるよ秀吉!!」

『ヴォロロロロロロ!!!!』

召喚獣に全身を大きくうねらせ、召喚獣を振り落とそうとする。しかし、

「この程度で、落とされるもんですか……!!」

「なっ!？」

俺も秀吉も驚きの声が漏れる。

優子の召喚獣は全身を使って龍の身体にしがみつき、そのまま昇ってきているのだ。

な、なんつう意地だ……まるで優子の意志がそっくりそのまま召喚獣に移ってるようじゃねえか！

「こんな小細工、無駄なのよ……Ａクラスを、舐めないで！」

「ふん。やるじゃねエか……！」

やがて優子の召喚獣は頭部へと到達してしまった。

「どうどう辿り着いたわよ。覚悟しなさい……秀吉!!!」

「っ！ 姉上……！」

隣で苦虫を噛み潰したような表情になる秀吉。

まずい！ いくら秀吉の点数がいつもより高いとはいえ、それでも優子の点数には圧倒的に及ばない。このままじゃ戦死確定だ！

だが……そう易々と相棒をこのまま見殺しにしてたまるか！

「くらいなさい!!」

「負けぬぞっ!!」

優子の槍と秀吉の薙刀が交わろうとするその瞬間、

『ヴオオオオオロロロロロロオオオオッ!!!』

「!?!」

空間を揺らすほどに龍が咆哮をあげた。

『な、なにあれっ!?!』

女子の一人が天井を指差して叫ぶ。

彼女が示す視線の先にあつたのは、俺達の召喚獣——の更に上空に突然として現れた黒雲だった。

それにより、優子と秀吉も攻撃を止める。

「な、なんじゃ!?!」

「なによあれ……!?!」

驚愕する二人をよそに、その黒雲はどんどんと大きくなり、やがて天井いっぱいになるほどの大きさまで巨大化する。よし、これで準備は万端だ!

「秀吉!! すぐに俺の召喚獣から離れろ!!」

「っ!?! 承知じゃ!!」

俺はそう秀吉に強めに言う。

本人も俺の意図を察したようで、すぐさま頭部から飛び降り、急いで自分の召喚獣に距離を取らせた。

その反面、優子は雲に気を取られ動けないでいる。今だ!

「くらえよ……」恋の——」

俺は龍に思い切り頭部を振り上げさせ、優子の召喚獣を吹き飛ばす。そして——

「——シャイニー☆ボルテエエエツク!!」

——刹那、誰もが予測しえない事が起こる。

黒雲から巨大な雷が発生し——優子の召喚獣目掛けて落とされたのだ。

バリバリバリバリイッ!!

耳をつんざくような雷鳴が響き渡る。

やがてそこには、バタリとうつつ伏せて倒れている優子の召喚獣があった。

「まともにくらったな……まだ戦死にやなつてねえだろうが、相当点数は削った筈だ」

「なんと……まさか雷まで使用するとは……恐るべき能力じゃのう。お主の召喚獣は」

「まあな。けどその分リスクもデカいけどな」

「くっ……! 油断したわ……。まさかこんな技を隠し持ってたなんて……!」

世界史

Aクラス 木下優子 198点

予想通り、優子の点数を最初の半分くらいまで減らすことが出来ていた。

しかしさすがはAクラスのトップレベル。それでもまだ余裕で戦えるだけの点数が残っている。

「木下さん、大丈夫？」

「は、はい……。すみません。勝手な真似をして」

「ううん。気にしないで。でもどうやら聞いていた以上の能力みたいだね。本当、学園長のこだわりにも困っちゃうな……」

姉御の表情が更に強張る。

召喚獣の腕輪の性能は全て開発者であるあのババアが決めている。だからババアの器量次第で同じ腕輪でもその固有の能力に大きな違いが出ることもあるだろう。それは仕方の無いことだ。まあ、だとしても腕輪は全部強スキル持ちであることに変わりはないが。

今思うと、正直よくこんなチートに近い能力をあの堅物ババアが俺なんかに渡してくれたものだ。だが今はその心意気に感謝しておこう。

「さて、仕切り直しといくか。秀吉、乗れ」

「うむ。了解じゃ」

秀吉の召喚獣を再び頭部に乗せて浮遊する。

俺の体感時間では変身してからおそらく五分は経っている筈。龍に姿を変えていられるのは変身時での点数の秒数であるため、残り時間はもう10分もない。

「さあ、今度はこっちの番だ!! 一気に攻めるぞ!」

「分かったのじゃ!」

俺は召喚獣に攻撃の指示を出す。

すると天井に広がる黒雲が渦を巻き、ゴロゴロと不穏な音を立て始めた。

「避けれるもんなら避けてみやがれ!!」

俺がそう叫ぶと、再び雷が大きな音をあげて発生。しかも今度は一ヶ所ではなくフィールド全体に向かって落とさせた。

ドオン! ドオン! バリバリバリイツ!

「くっ、皆避けて!」

「当たったらタダじゃ済まないわよ!」

姉御が優子達にそう指示を出すと、自分も自身の召喚獣を上手く操作し、襲いかかってくる雷を颯爽と避け始める。優子も同様だ。

が、そんな高度な操作技術を全員が持つてる訳もなく、

『きゃあつ！ ちよつと危ないじゃない！ 邪魔しないでよ！』

『あつ、ごめん！ わざとじゃないの！ 慌てたらつい……………』

『気を付けてよね！ 全く！』

『そ、そこまでキツク言わなくても……………！』

『ちよつ、二人共!! 上、うえ！』

『え？ なに——きゃあああああつ!!!?』

互いにつつかり合いバランスを崩した敵の召喚獣目掛け、俺の召喚獣の無慈悲なる鉄槌が下された。

世界史

Aクラス 横田奈々 76点

&

花岡麗 54点

一瞬で相手を満身創痍直前にまで追い込む。しかしこれでは終わらない。続けて俺の召喚獣は、その大木のように巨大な尻尾を思い切り斜めに振り下ろした。

「ふん……………つまらねえな。もういい、ここでくたばれ!!」

『きゃあつ?!』

相手が女子だろうが手加減はしない。何度も言うがこれは遊びじゃない。模擬とはいえそれぞれの命を懸けた『殺し合い』だ。そこで負けたのならそれは弱エヤツや油断したヤツ自身が悪いのだ。

それを体現するかのようには、龍の尻尾による強烈な攻撃は向こうの反撃すら許さずに召喚獣を葬り去った。

『ひ、ひいつ?!』

かろうじて逃れた残りの女子生徒が小さな悲鳴をあげる。さっきの光景を見て怖じ気づいてしまったようだ。

「……………おい。この程度で俺達を倒すだとオ……………? 夢見てんじやねエよ!!」

すかさずその敵の上空に移動し、口から再び熱線を吐く俺の召喚獣。抵抗する間も与えず相手を文字通り灰塵にした。

『Aクラスの私達がこんなあつさり……………』

『点数が違い過ぎる……………!』

『前の試召戦争から思っていたけど、どうしてあんなヤツがFクラスにいるのよ……………!』  
「凄……………一日目の散々たる結果が嘘のようじゃ」

横でそう感嘆の声をあげる秀吉。だが俺の心情は穏やかではなかった。自分が思っ



ていたのと違う。

「おうよ。しかし……姉御や優子にも焼きが回ったもんだぜ。こんなヤツらと徒党を組んだくらいで俺と相棒の首を獲れると思つてたとはな……図に乗るなア!!」

「っ!?」

「二度勝つたぐれエで、調子に乗りすぎじゃあねエか姉御? 優子、おめエもだ。俺の性格を熟知してるつてんならよオ……俺があのままやられつぱなしじゃ収まらねエヤツだつてことをわかつてるんだよな? それがなんだこのザマは!! 『男子、三日会わざれば刮目して見よ』つて諺を知らねエのか!!」

舐めやがつて、といったニユアンスを込めて俺は二人に告げた。

そう、俺も秀吉も今日まで身を粉にする思いで力をつけた。それは覗きや盗聴の真犯人を突き止めるのもそうだが、一度敗北を喫した姉御への雪辱を果たすためでもある。当然向こうも俺達がこうして力をつけることを想定し、こちらに負けないくらいの戦力を蓄え、作戦を練り、完璧な状態に仕上げた敵である俺達を迎え撃つものだと思つていた。それに優子は勉強だけに留まらず、あらゆる事に置いて手を抜くという行為をしないヤツだ。それは俺と秀吉が一番よく分かっている。姉御も姉御で優子と同じくそういう人種であることも承知済みだ。

実際俺も姉御や優子のそんな強さには一目置いてるし、隣にいる秀吉だつてそうだ

ろう。だからこそ俺は一日目に姉御と戦うことに對して戸惑つたし、Aクラスとの代表戦の時も優子と本気でぶつかり合い、腕輪の能力まで使つたのだ。それも結局、二人を敵としては見ていても、その強さを認めているからだ。この辺りの思いは好きとか嫌いとかそういう単純なものじゃない。最早勉学の出来というよりも、本来持ち合わせているであろう人としての強さが大いにあるんじゃないかと思う。これはあまりこの二人と関わりの無い者や外面しか見ていない者には決して分からないだろう。同じ教職者である鉄人や高橋女史。敵の立場にある雄二や明久。そして同じクラスであり仲の良い霧島や工藤、久保だつて同じだ。誰もこの二人を侮る者などいないだろう。むしろ姉御や優子を大して知らないヤツがデかい口を叩こうものならそいつのことを俺は嫌になる。昔だつたらムカついて殴つてしまうかも知れない。實際中学の頃はそんな性格の優子をかからかつた同級生を泣かせるまでボコボコにしたし、Aクラスとの試召戦争の時も『兄貴なら余裕で勝てる』と抜かしたヤツを強めに叱りつけたこともある。冗談でも許せないのだ。

だからこそ俺は——こんな体たらくをしやがった二人に怒りを覚えているのだ。

そして何より……俺は他人に勝負事で手を抜かれるつてのが大っ嫌いなんだよ！

「お、おい大悟よ。少し落ち着……」

「クソツタレが……!! ムカついてきたぜ……俺も秀吉も大したことねエと思われただ

けじゃなく、その相手があの二人だっただけだからな……フザけやがって——」  
横で秀吉が何か言ってるが気にしない。

気合いを込め、俺は部屋いっぱい響き渡る音量で叫んだ。

「——俺達を舐め腐りやがったこと……補習室じゅくしむで後悔しやがれエ!!」

俺の気合いに呼応するかのように、続いて俺の召喚獣が大きな咆哮をあげる。

「むう、大悟め。スイッチが入ってしもうたか。こうなってはワシでは止められんな……」

「っ! 流石は大悟。ものすごい気迫ね……!」

「うん……でもここで怯んじやダメだよ! さっきも言った通りここは逃げることに集中して! このまま制限時間まで耐えきれば私達の勝ちなんだから!」

「まだそんな戯れ言を……ブツ潰してやる……!!」恋の——」

「っ!? また何か来る!」

「また雷が——いや、違う!」

「——アイシクル☆ブリザード!!」

技名を宣言し、龍は再び雷——ではなく、新たな能力のお披露目とばかりに、上空のあちこちに巨大な氷塊を出現させた。氷塊はそのまま物理の法則に従い地面へと次々に落下する。

「なにあれ、氷——きやあつ！」

「危ない！ このっ……!!」

姉御の召喚獣が得物の刀を抜く。そして優子に向かって落ちてきた氷塊を当たる危機一髪で粉碎した。が、雷と違って氷塊は落下してからもその場に留まり続けるので、向こうからすればかなり厄介な障害物と化す。

そして俺の予想通り、同じ場所にいれば避けにくくなると思ったのか、姉御と優子の召喚獣はそれぞれ立ち位置を分散させた。俺はそのまま続けて、

「これで終わりだと思ったか!!」恋の——スピニング☆ハリケーン!!」

『ヴオオオオオオロロロロ!!』

ブオオオオオオツ!!

「こ、今度は竜巻——!!」

「こんなのアリ!? さすがに避けられる訳ないよ——!!」

今度は龍に身体をうねらせるように高速で回転させることで巨大な竜巻を発生させ、容赦なく二人の召喚獣を飲み込んだ。無様に逃げ出そうと竜巻の中でもがいているのが見える。更には地面に落ちていた氷塊をも巻き込み、まるで本物の嵐が来たような凄惨な光景が広がっていた。

その後は簡単なもので、特に苦労もなく二人の召喚獣を満身創痍にまで追い詰めるこ

とが出来てしまった。

「まさか、ここまでだなんて……」

「っ！ 大悟……」

「……ここまで圧倒的じゃと、逆に向こうが可哀想に思えてくるのう」

「ふん！ 俺はもつと一進一退の展開になると思ってたのに期待外れだよ……さて、そろそろ明久達もケリをつけてる頃合いだからな……悪いがここで終わりにしてやる!!」

「!!?」

不完全燃焼なのが癪だが時間も迫っているし、本来の目的を忘れてはならないと自分に言い聞かせ、俺は召喚獣に最後の命令を下す。

その瞬間竜巻がパツと晴れ、二人の召喚獣が露になる。

「大悟、今じゃ!」

「おう。トドメだ……自らの無力さと、俺達を侮つたその愚かさを思い知りやがれエ!!!」

「これも勝負の内じゃ。姉上、落合教諭。済まぬ!」

「マズいっ！ 先生！ 逃げ……」

「ダメ！ 間に合わな」

「消し炭にしてやる——」 恋の!! バーニング☆ブレエエエエエエス!!!!!!

——室内を埋め尽くす程の閃光と爆発音。

俺の召喚獣から放たれた最後の一撃は、姉御と優子の分身を塵一つ残らず消し去ったのだった。

世界史

社会科教師

落合夏音

DEAD

&

Aクラス

木下優子

DEAD

## 第五十問 学力強化合宿最終戦 〈結末〉

——明久視点

「ぐう……っ！ よ、吉井、貴様……」

ドサリ、と重い音を立てて、鉄人はゆっくりと床に倒れ伏した。長い戦いにようやく  
終止符を打ったのだ。

「やつと、やつと終わった……！」

本当に長かった。何度諦めかけたことか。絶望したのは一度や二度じゃない。でも  
今僕はこうして理想郷を前にしている。

あの写真に秘められた桃色世界が目の前に！ 楽しみで仕方がない！

「待ってるよ、美波のペッタンコ——はっ！ 殺気!?!」

くらうかつ！

殆ど本能のような感覚でしゃがみこむ。

すると、さつきまで僕の頭があつた位置を何かバチバチと音を立てながら通過して  
いくのが見えた。

「お姉さまの操は渡しません……!」

「清水さん!」

スタンガンを構えた清水さんが僕に向き直る。

「昨夜からお姉さまの元気がないのも、美春に振り向いてくれないのも全て貴方のせいです! 死んで美春に詫びて下さい!」

清水さんが凶器を振り回してくる。けれども鉄人の動きに比べると清水さんのそれはあまりにも温い。避けてくれと言わんばかりだ。

「このっ、このっ!」

「ほいほいっ」と

余裕で避け続ける。このままバッテリー切れを待てばいいだろう。

そんな作戦を考えていると、向こうもこちらの意図に気がついたのかポケットから何かを取り出して僕に突きつけてきた。

「手を引きなさい! さもなくばこの写真を公表して社会的に抹殺してやります!」

「え? 写真って——うわっ! 僕の恥ずかしい写真!」

なんで彼女が僕の写真を持っているんだ!? まさか——

「——清水さんは僕のことを好き、だとか?」



「考えるだけで吐き気がします!!」

やだな、泣いてないよ？

「でも、それならどうしてそんな写真を？」

「お姉さまのチャイナ姿を撮ろうと思ったら丁度いい脅迫ネタが通りかかったので撮影したまでです！ 男なんかに興味はありません！」

男なんかつて。まあ好みは人それぞれだけど……。

「あれ？ ということは清水さん、お尻に火傷の痕があつたりする？」

「な、なんでそれを知っているんですか!?! さては盗撮や覗きをやってますね!?!」

間違いない。清水さんが例の脅迫犯だ。つてことは、工藤さんは犯人じゃなかったのか……。彼女が言っていたことつて本当に間違いじゃなかったんだな……。

「……あれ？ でも清水さん。僕はともかくどうして雄二と大悟の盗聴までしたの？」  
「つ!?! それは……貴方には関係ありません！」

一瞬バツが悪そうな顔をしたが、すぐにいつもの調子で答える清水さん。

「とにかく大人しくして下さい。写真をバラ撒きますよ？」

堂々と僕を脅迫してくる。仕方ない。女の子に乱暴な真似はしたくないけど、これは少しオシオキが、

「……………あ」

「うん？　なんですかその間抜けた面は。まさか許しを請おうとでも？」

「いや、清水さん……………後ろ」

僕はおそろおそろゆつくりと清水さんの背後を指差す。

「後ろ？　それがどうしたというのですか？　全く、ブタ野郎の分際で美春を誤魔化そ  
うなど……………」

清水さんは僕の言葉に悪態をつきながらも、渋々と後ろを振り返る――

「……………よう」

——そこには、恐ろしい程に不敵な笑みを浮かべたFクラスの怪物の姿があった。

「明久よ！ 無事じゃったか！」

「秀吉！ そつちこそ大丈夫だったんだね！」

「うむ。まあ殆どワシは何もしておらぬかったがの」

その後ろから少し遅れて秀吉もやって来た。無事に来れたということは落合先生達に勝つことが出来たのだろう。

「ハア……ハア……。随分と面白エ話をしてるみたいだなア。是非俺にも訊かせてくれよ。なあ？ 清水う……」

そう言つてポン、と優しく清水さんの肩に怪物……もとい大悟の大きな手が置かれる。息を切らし、明らかに疲れた様な表情をしているのは、腕輪の後遺症による疲労感のフィードバックによるものだろう。

そんなヤツの口調は穏やかだが明らかに目は笑っていないし、心なしか額に青筋がピクピクと浮かんでいるのが見える。

それを見て一気に青ざめる清水さん。

「だ、だ……大悟先生。こ、これは……」

「これは……なんだって？」

大悟のそのゴゴゴゴゴ、という擬音が似合うであろう威圧感に気圧されたのか、清水さんはガクガクと生まれたての小鹿のように足を震わせながら後退りする。冷や汗がびっしりで、さつきまでの強気な態度が嘘のようである。

「いやあ、驚いたぜ……まさか俺を嵌めようとしやがったヤツの正体が、皮肉にもダイゴブックスの超常連様だったんだからよ。飼犬に手を噛まれるとはまさにこのことだよなあ……！」

「あ、ああああああ……」

「顧客は事業主に対し、如何なる理由があろうとも決してその私生活及び商売活動を侵害、及びそれに準ずる行為をしてはならない……それがダイゴブックスとの契約をするにあたっての原則だった筈だろう？ 忘れたとは言わせねエぞ？」

あ、彼女もそうだったんだ。まあ、思い当たる節はあるから意外ではないけど。

「ち、違うんです。美春は先生を貶めるなんてするつもりは……」

「黙れ!! だから理由なんかどうでもいい!! それに言い訳で済めば原則なんざ要らねエんだよ!!!」

「ひいつ?」

いきなり大悟がドスの効いた声で言い放った。思わず僕と秀吉も背筋が伸びる。少しだけ清水さんを可哀想と思ってしまった。正直そこら辺のチンピラや暴走族なんか

に脅されるよりも断然怖いからね。

「俺は約束を守らねエヤツが死ぬほど嫌いなんだよ！ フザけやがって……!! だからよ……コイツはきつちりと落とし前をつけてもらわなくちゃあならねエなあ……!!」

「お、落とし前……」

清水さんの体の震えが更に大きくなる。

「最初に教えてあるよな……もしこの絶対原則を破るような真似をしたら、それ相應の罰を与えるから気を付けろってよオ……」

「お、おお、おおおおお……」

「それを清水。お前はやらかした……どうなるか分かってんだろうなア!!」

完全に清水さんを許す気は無いらしい大悟の態度。こうなってはもう彼女の運命は一つしかない。

「だ、大悟先生。今回だけはどうか美春にお慈悲を……」

「クドい!!」

キツパリとそう告げると、大悟は僕と秀吉のほうに顔を向けた。

「明久、秀吉。多分コイツから訊きたいことは山ほどあるだろうが先にこっちの用件を済ませたい。いいか？」

「あ、うん。でも一応聞くけど暴力とかじゃないよね？」

「当たり前だ。物騒な真似はしねえよ」

「なら良いのじゃが……あまり時間をかけるでないぞ？」

「おう」

そう言つて、大悟はガタガタ怯える清水さんを連れて先に脱衣場へと向かつていった。

去り際に清水さんが悲壮感漂う視線を向けてきたけど、残念ながら僕らにはあの二次元狂戦士バーサーカーを止める手立てはない。ただそれを呆然と見つめることしか出来なかった。

「待たせたな、明久！ 秀吉！」

「……………間に合つた」

すると、背中から僕らを呼ぶ声が聞こえた。この声は、

「雄二！ ムツツリー二！ それに皆も！」

雄二とムツツリー二。更には各クラスの男子の面々がやってきた。全員が一つの目的を達成した喜びに満面の笑みを浮かべている。

「明久、よくやったな」

『吉井。よく鉄人を倒してくれた』

『お前が今回のMVPだな』

「皆の協力があってこそだよ！ 本当にありがとう！」

大きな声で皆に呼び掛ける。この場にいる全員に心から感謝している！

「……？ おい明久。そういえば大悟はどうしたんだ？」

雄二が周りを見渡しながらそう僕に尋ねる。

その為僕はさつきまでここであったことを話す事にした。

「ああ、大悟なら今——」

そう口始めた時、

『ひよぎやあああああああ  
!!!!?』

『!!!』

突然女子風呂の暖簾の先から絶叫が響いた。

『ご、ごべんなぎい!! だからそんなものの……あびやあああつ!!! ちよ、ちよつと待——おぼおつ!!! おろろろろろろろろろろろ!!! ごぼっ!! げぼぼろ





「何って、俺達を嵌めた犯人への制裁に決まってるだろ。ほれ」

そう言つて大悟は片腕に抱えていた清水さんを床に置く。

「……………（チーン）」

彼女はまるで生気の抜けた脱け殻のように真っ白になっていた。目は虚ろになりどこか虚空を見つめている。

それを尻目に、大悟はどこかスッキリしたような表情になっていた。

「これでもう清水も存分に懲りただろうよ。ちなみに何したか訊きたいか？」

「いや、俺はいい……………」

「僕も結構だよ……………」

「右に同じじゃ……………」

「……………知らぬが仏（コクコク）」

この時、ここにいる僕を含めた全員が改めて思ったことだろう。

——コイツだけは、なにがあらうと決して敵に回してはいけないと。

## ——大悟視点。

〃〃〃

『……本当なのか？ それは』

『そ、そうです！ その人から美春は頼まれただけなんです！ この録音した音声をそれぞれ霧島さんと木下さんに売って欲しいって！ だから美春自身が計画した訳じゃないんです！』

『アイツがか。なるほどな……それなら同志が同一犯の犯行だと勘違いしてもおかしくねエ……動機も十分に考えられるな。分かった』

『じゃあ美春は——』

『いや、片棒担いだ時点で同罪だから』

〃〃〃

俺は清水を廊下の隅に寄せ、その場に放置しておくことに決めた。

しばらくすれば誰かが回収してくれるだろ。そして、

「秀吉。本当にいいのか？」

「うむ。どうせワシは最初からお主らの冤罪を晴らす為に行動しておったゆえ、特に覗きに興味はないからの。これくらいお安い御用じゃ」

「済まねえな。後でまた飯を奢るからな。それじゃ頼んだ」

「了解じゃ。行ってくる」

そう言い、秀吉が来た道を引き返して行った。

あとはアイツに渡したブツが無事届けば全てが解決する。真犯人め……俺から逃げられると思うなよ。

「よし。それじゃ、そろそろ行くか」

雄二が顔を綻ばせながらそう言う。コイツもなんだかんだいって女子の裸に興味アリなんだろう。

俺は正直三次元の裸体などに興味はないが、折角なので今後女子高生イラストを描くための参考資料として閲覧おくことにしよう。欲を言えばみるくたそ似の工藤が若干見たかったが。

「皆！ これだけの人数がいれば人物の特定も出来ないし邪魔も排除できる！ 停学や退学の処分もないから思う存分楽しんでくれ！」

『『おーっ!!』』

廊下を揺るがすほどの野郎共の歓声。

確かにこれだけの人数ならわざわざ誰が参加していたかなんて把握するのは難しい。つまりここからは俺達の自由時間。ワンダフルタイム 精一杯欲望を発散出来る最高の時間ということだ。

そして俺達はザツ、ザツと暖簾をくぐり、まっすぐ脱衣所を越え、浴場の扉の前に立った。

最後に雄二が皆に言い放つ。

「全員、心して見ろ！ これが俺達の勝ち取った栄光だ！」

ガラガラツ!!

雄二によって扉が開かれ、中の様子が露になる。そこには風呂の湯気に隠れるようにして椅子に鎮座する一人の後ろ姿だった。

しなやかに伸びる手足。

腰まで伸びる艶やかな銀髪。

駄肉の無い身体。

「恐らくこの機会を逃せば一生拝むことは出来ないだろうその姿。期待と性欲を一気に膨らませ、皆がその女性に釘付けになる。

そしてその女性もこちらの存在に気づき、ゆっくりと振り返る。その瞬間俺は――

「な、なんだいアンタ達は!? 雁首揃えて老人の裸見に来たのかい!？」

——  
学園長ババアの一糸纏ババアわぬ裸体を見てしまい

『割にあわねえーつつつ!!』

——  
あまりのグロテスクさに気を失った。

——







「なあ天。大悟のヤツ、一体どうしちまったんだ？」

「どうしたって、何が？」

「合宿から帰ってきて以来ずっと部屋に閉じ籠っちまってるじゃねえかよ。しかも部屋の中でずっとブツブツ独り言言ってやがるしよ」

「確かに、あんな大悟兄今まで見たことないなあ。合宿でなにかあったのかな？」

「さあな。あ、そういや男子全員で覗き騒動起こしたって言ってたな。もしかしてそれと関係してんじゃねえか？」

「そうかもね。うゝん、見てはいけないものでも見ちゃったとか？」

「なんだそりゃ？」

「例えば、見たのが女子じゃなくてお婆さんの裸だったとか」

「あつははは！ そりゃあの二次元&ロリコンバカには精神的汚染がデかいわな！ てことは教師あたりの入浴時間にも立ち会っちまったってことかもな！ 御愁傷様だな！」

「でしょ？ それにあの後優子姉とも進展が無かったみたいだし……ちよつと残念だな」

「んだよ。折角愛する息子が童貞を卒業すると思つて楽しみにしてたんだがなあ……ま、しばらくすれば元通りになんだろ」

「だといんだけどね。でも、男子全員で覗きを計画するなんてブツ飛んだ発想だよな。さすがバカのFクラスなだけあるよ！」

「ま、その代償がコレだけだな」

### 処分通知

文月学園第二学年

全男子生徒

総勢150名

上記の者たち全員を

一週間の停学処分とする

文月学園学園長 藤堂カヲル

—— ついムラツときてやった。  
今は心の底から後悔している。

—— 三次元なんて嫌い。

くとある二人の生徒の反省文より抜粋く

## 番外編その2 プール編

## 第五十一問 俺とプールと水着回ツツ！ 前編

——明久視点。

いつもどおりの平穏な週末の夜。

僕の家には悪友である坂本雄二と岡崎大悟が泊まりがけで遊びに来ていた。

「あれ？ 雄二と大悟、何か買ってきたの？」

「食い物だ。お前の家にはろくな物が無いからな」

「普段のお前みたいに晩飯が塩水なのはごめんだ」

「失礼な。ちゃんと砂糖と油だつてあるさ」

全く、僕をバカにするのも大概にしてほしいものだ。

そう思っていると、雄二と大悟はテーブルに買ってきたものを並べた。

「へえ。差し入れなんて気が利くね」

ガサゴソ僕はビニール袋を開け、中に入っている物を取り出す。

雄二の前身

・ コーラ

・ アイスコーヒー

・ カップラーメン

・ カップ焼きそば

大悟の前身

・ 冷やし中華

・ きつねうどん

・ カツ丼

・ ドクターペッパー

・ フルーツゼリー

食べ物と飲み物がたくさん入っている。これはありがたい。

それにしても、大悟の方はやけに食べ物が多いな。知ってはいるけど、本当によく食べるヤツだなあ。

「それで、二人はどれを食べるの?」

「俺か? 俺はコーラとコーヒーとラーメンと焼きそばだ」

「冷やし中華と弁当とドクターペッパーときつねうどんとフルーツゼリーだ」

残り↓割り箸

「キサマら！ 僕には割り箸しか食べさせない気だな!」

「待て！ 割り箸だけでも食おうとするお前の思考に一瞬引いたぞ!」

「そもそも割り箸って人間は食べるのか?」

無機物のビニール袋よりは食べ物に近いから多分いけると思う。お腹は壊すかも知れないけど。

「割り箸はやらん。俺が素手でラーメンを食う羽目になるだろうが」

「それはそれで面白い光景だな。雄二、試しにやってみろよ?」

「しばくぞキモオタ」

確かに、親指と人差し指で麺を挟んで『熱い、熱い』と言いながらラーメンを食べる雄二の姿は実にシユールだ。

「まあ冗談はさておき、安心しろ。明久の分も買つてある」

「え? そうなの?」

そう言うと、大悟がもう片方の手に持っていたビニール袋をテーブルに置いた。確かに中身からチラッとペットボトルと弁当箱のような平べったい物体が見える。

「なんだ。やっぱり僕の分も買ってきてくれていたんじゃないか」

「まあな。如月ハイランドパークでは世話になったからな。俺と大悟からの感謝の気持ちだ」

「久しぶりのまともな食事だろうから、ありがたく食べるよ?」

二人が僕に感謝の言葉を次々と告げる。うんうん、そう言つて貰えると僕も苦勞して根回しをした甲斐があつたというものだ。

そして僕はそのビニール袋から中身を取り出して並べた。

・こんにやくゼリー

・ダイエットコーラ

・ところてん

「プレゼントフォーユー（ニヤニヤ）」

「僕の貴重な栄養源がああーっ!!」

全てカロリーオフ。その事実には僕は思わず泣いた。

「メタボにならないよう俺と大悟からの氣遣いだ。喜べ」

「絶対に嘘だ! だいたい僕の食生活のどこにそんな心配があるつていうんだよ!」

「だつてお前、糖分と脂肪ばかり摂ってるんだろ?」

「それしか摂ってないんだよ!!」

当然のごとく文句を放つ僕に対して、大悟がやれやれと肩を竦めた。

「しょうがねえな。なら俺のを分けてやるよ」

「え、本当？」

「ああ。さすがにおふぎけが過ぎたからな。ほれ」

そう言つて大悟はカツ丼にスツと手を伸ばした。なんだ、それなら良かった。やつぱりなんだかんだ言つて大悟はそんな酷い真似を本気でするヤツじゃなかつたん——

スツ↑カツ丼についていた七味

「美味しく食べるよ（ニッコリ）」

「表出ろやコラー！」

——前言撤回。コイツはやつぱりただのクズ野郎だ。

「くそつ！ やつぱり全然感謝なんてしてないじゃないか！ もう怒つたぞこの妻帯者共!!」

僕は袋からダイエットコーラを取り出して構える。

そんな僕の様子を見た二人は怪訝そうに眉をしかめた。

「なんだ、やる気か？」

「ああ。いずれは二人と決着をつけなきゃと思つていたところだよ」



「ほう……? いい度胸じゃねえか」

「いいだろう。のぞむところだ。返り討ちにしてやるよ」

「上等! 早撃ちで僕に挑んだことを後悔するがいいさ!」

「ハツ! 口だけは達者だな!」

「いいねえ! ならここは三つ巴の戦いといこうじゃねえか! まとめて吠え面かせてやるから覚悟しろ!」

雄二と大悟もそれぞれ袋からコーラとドクターペッパーを取り出して構えた。

三人の間に剣呑な空気が流れる。

「……………」

三人がそれぞれ敵を睨み付け、牽制しあう。相手は雄二と大悟だ。下手な手は通用しない。

一触即発の状況の中、キッチンから水が一滴落ちる。

——ピチヨン

戦いのゴングが鳴った。

「「——っ!!」」

シヤカシヤカシヤカ（僕と雄二と大悟がペットボトルを振る音）

ブシヤアアアアア（敵に向けてコーラとドクターペツパーを射出する音）

バタバタバタバタ（僕と雄二と大悟が目を押さえてのたうち回る音）

「「目が、目があああああっ!!」」

染みる！ コーラが目に染みてシユワシユワとした炭酸が弾けたあああああっ!!

「やってくるじゃねえか、テメエら！」

「ああクソツタレ……効いたぜチクシヨウ！」

「そっちこそ。さすが僕がライバルと認めた男達……！」

「だが、ここからは本気だ！」

「手加減はしないぞ……！」

「面白エ！ ならとつとと戦いを再開しようぜ!!」

そして、雄二はコーヒー、僕はところてん、大悟はフルーツゼリーを武器に、それぞれ  
の尊厳を賭けて戦いに身をゆだねた。

「……………ねえ二人共。一時休戦にしない?」

「……………そうだな。この戦いはあまりにも不毛だ」

「……………異議なし」

気がつけば全身がゼリーやとろてんやコーラでベトベトになっていた。物凄く気持ちが悪。 (※使った食材は勿論残さず食べました)

「ああ、食材粗末にしちまったか。こりや母さんにバレたらバックブリーカーからの腕ひしぎじや済まねえかもなあ……………」

大悟が頭のリーゼントについたゼリーを取りながらそう呟く。確かに凜花さんならそこから僕らを二回の窓から地面に向かって突き落とすところまでやりかねない。

「明久。悪いがシャワーを借りるぞ」

「うん。タオルは適当なのを使っていいよ」

「言われなくてもそうする」

「俺も後で借りるぞ」

そう僕に告げた雄二はそのまま脱衣所へと向かっていった。

「……あ。そういや明久よ」

それを後ろから見ていた大悟が、突然何かを思い出したかのように手をポン、と叩く。

「ん？ なに？」

「お前、今普通に雄二に風呂貸したけどよ。今月ガス代払ったのか？」

「いや、それがまた払えてないんだよ。今月はめぼしいゲームがいっぱい出ちゃって

さ。だから今ガスは止められて——あ」

僕が気づくとほぼ同時に、風呂場で蛇口を捻る音が鳴る。

『ほわあぁっ——っ!?!』

そして雄二の悲鳴。

ガチャツ　ズカズカズカ

「……もつと早く気づけコラ」

腰にタオルを巻いて出てきた雄二は寒さで全身に鳥肌を立てていた。

「ごめんごめん。今思い出したよ。えつとね、心臓に近い位置にいきなり冷水を当てると身体に悪いから、まずは手や足の先にかけてから徐々に——」

「誰が冷水シャワーの説明をしろと言った!?!」

「おい雄二。まずそのタオルの下からそそりたつネオアームストロングサイクロンジェットアームストロング砲なんかしろよ。見るに絶えねえ」

「うっせえ!! 寒いんだから仕方ねえだろ! つうかお前はどこ見てんだこの変態野郎!」

「なに熱くなってるのさ雄二。そうだ。冷たいシャワーでも浴びて冷静に」

「たった今浴びたから熱くなってるんだボケ!!」

ライオンの鬣のようなツンとした髪を逆立て、僕らに怒鳴る雄二。どうやら冷水シャワーはお気に召さない様だ。

そして確かに大悟の言う通り雄二のソレは結構デカかった。

「くそつ。このままじゃ風邪引いちまう」

「大丈夫だろ。だってバカは風邪を引かないって昔から言うし」

「おい大悟! 俺を明久と一緒にするんじゃないやねえよ! それが通用するのは極上のバカであるコイツだけだ!」

「おつと! それもそうか。明久は至高のバカだもんな。済まんば——明久」

「あつはつはつは！」

うん。このクソヤロウ共は後で絶対しばいてやる。

「まあそれはさておき……。仕方ない。明久、大悟、外に出るぞ」

服を着ながら雄二がそう言った。

「外？ 雄二が大悟の家でも行くの？」

「ウチは無理だ。生憎天も母さんも遊びやら飲み歩きで出掛けてて鍵が閉まつてるからな」

「いや、そうじゃない。どうせなら温水シャワーだけじゃなくプールもあるところに行こうぜ」

「プールも？ そんなとここの近くにあるか？」

雄二の言葉に大悟と僕が首をかしげる。

「ああ。そして尚且つ金もかからないところがある」

シャワーもプールもあつて、近場にあつて尚且つ無料で使えらるとなると――

「――ああ。あそこか、オツケー。すぐに準備するよ」

「え？ 明久分かったのか。俺は全然思い付かないんだが」

「大悟もついてくればすぐに分かるよ」

『は？』と頭に疑問符を浮かべている大悟を他所に僕は雄二に訊いた。

「雄二は水着は持つてくるの?」

「いや、俺はボクサーパンツで泳ぐさ。大して変わらんだろ」

「りよーかい」

「あ、おい。ちよつと待てよ。俺もすぐに用意する」

そして準備を終え、僕ら三人は目的地へと向かった。

——大悟視点。

「……なるほど。それで勝手に忍び込んでシャワー浴びてついでにパンツ一丁で泳いで

いたというワケだな？」

「「……………はい」」

どうしてこうなった。

現在俺達三人はパンツ一丁でプールサイドに正座させられていた。そして俺達の前には鉄人こと西村教諭が筋骨隆々の腕を組んで仁王立ちしている。

そう、つまり雄二の言っていた場所はここ。文月学園のプールだったのだ。

「何か言い訳はあるか？」

鉄人がドスの訊いた声でそう訊く。

「「コイツらが悪いんです！」」

三人は声をハモらせ、自分以外の二人を主犯として売り飛ばした。

「雄二と大悟がマトモな食材を買ってこないからだろ！」

「それは違うぞ！俺はただ会計に通しただけだ！計画したのは雄二の方なんだよ！」

「なっ！汚えぞ！テメエだつて意気揚々と『面白いからやるか！』つて言つてたじゃ

ねえか！」

「ええいうるさい！僕からしたら二人共同罪なんだよバカ野郎！」

「なんだと明久！というかそもそもお前がガス代払ってないのが悪いんだろが！」



「そうだ! 光熱費を滞納した明久こそ全ての元凶だ!」

「何をいうのさ! 水が出るだけマシじゃないか!」

「水すら出ないことがあるのか!」

「やっぱりお前は究極のバカだ! 趣味に金使いすぎなんだよ!!」

「「お前が言うなキモオタ!!」」

自らの弁明と相手への罵り合いを繰り広げる俺達。おのれ……なんて往生際が悪いんだ。さっさと自分の罪を認めやがれこのバカ共が! (※人のこと言えない)。

「……………もういい。わかった」

鉄人がそう言つて溜め息をつく。

「でしょう? 悪いのは雄二と大悟ですよね?」

「いやいや、俺の清廉潔白さは証明されたんだ。つまり悪いのは明久と大悟だ」

「おいおい、寝言は寝て言えよ。どう考えたって今の流れなら明久と雄二に決まってる

よなあ?」

「「アアん!? いい加減にしふぐおおっ!」」

いきなり鉄人のデカイ掌が俺の顔面を鷲掴みにした。そしてもう片方の腕で明久と雄二の首を抱え込む。

ぎやああ痛ええええーっ!! ミシミシと俺の頭蓋骨が軋む音が鮮明にいいいい

いーっ!!?

「お前らが底抜けの馬鹿だという事が分かった!! 罰として来週末は、三人でプール掃除をするように!! 分かったか!!」

「ふあ、ふあい……わがりました……っ!」

微かな声で返事をする俺達。

人間は本気を出せば頭蓋骨を破壊できることを知りました、まる。

---

「ということがあって、散々な週末だったよ」

時は過ぎ、週明けの教室にて。

いつものメンツで卓袱台を囲み駄弁っていた。

「それは災難じゃったのう……」

氣遣いの言葉をかけるのはFクラスの美少女(♂)にして俺の相棒、木下秀吉だ。

「あんなに広いところを掃除するなんて気が滅入るよ。はあ……」

「全くだ。明久がガス代をちゃんと払ってりや、こんなことにはならなかったんだがな」

「いや、僕にマトモな食べ物を持ってきてくれなかった大悟と雄二のせいだね」

「ははは、まだ言うか明久このクソヤロウ」

「いやいやいや、大悟こそいい加減素直になりなよバカヤロウ」

「……………!! (俺と明久によるガンの飛ばし合い)」

コイツ……まだ自分の犯した罪を認めない気だな! ならその身を以て分からせてやろうか!

「喧嘩はやめい。そして手に持っているカッターとハンマーを置くのじゃ」

秀吉が俺と明久をそう優しく諫めた。チツ、相棒に免じてここは従っておくか。

「……………それにしても、重労働」

俺の隣で同志が愛用の一眼レフカメラを手入れしながらそう呟いた。

そして手元には女子生徒を盗み撮りしたであろう写真が数枚ある。どれもいいアングルだ。さすが同志。

すると俺の丁度前に座っていた雄二がこんなことを言い出した。

「でもその代わり、『掃除をするのならプールを自由に使ってもいい』と鉄人に言われたぞ?」

「え? そうなの?」

つまり見返りとしてプールが貸し切りになるってことか。確かにそれはメリツトの方がデカイな。

「ああ。だから秀吉とムツツリーニもどうだ?」

「……………パス」

キツパリと断る同志。

そりゃあな。いくらプールが使えるといってもその対価が重労働。しかも周りは男まみれ。乗り気は起きないだろう。その気持ちはすんごい分かるぜ。

「ちなみに、姫路と島田にも声をかけるつもりだ」

「……………ブラシと洗剤を用意しておけ(キラツ)」

目の色が一気に変わりサムズアップ。ふつ……欲望に忠実な男よ。いい表情をしやがって。さすが同志。

「面白そうじゃのう。ワシも掃除を手伝うから相伴させてもらえぬかの?」

「勿論!」

秀吉も参加を表明した。ふむ、秀吉の水着か……………そういえば今まで俺も見たことな

かったな。これは楽しみだ。

「ねえ、何の話?」

「面白そうですね?」

すると、タイミングのいいところにやって来た二人の女子。

暴力系ツンデレヒロインの島田美波と、おっとり系隠れヤンデレヒロインの姫路瑞希だ。二人とも三次元の割にはハイスペックかつキャラクターの立った性格をしている。その為ダイゴブックスのイラスト公認モデルをやってもらっている。勿論報酬は明久のイラスト（一般&成人向け）だ。

「週末。俺達だけでプールを借りられるんだ。良かったら二人もどうだ?」

「え……………?」

プールと聞いた二人が微妙な反応をする。

「あ、まさか二人とももう別の予定があったりする?」

「い、いえ。でも……………プールって、水着ですよね……………?」（腹に目をやる姫路）

「プールって、水着だし……………」（胸に目をやる島田）

ああ。それぞれコンプレックスがあるのか。別にそこまで気にするほどでもないと思うがな。

「ちなみに、秀吉は明久に水着姿を見せに来るぞ」

「なっ！ 卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

「そうですねっ！ 木下君はズルいです！」

「??? お主らは何を言っておるのじゃ？」

一気に姫路と島田から責め立てられる秀吉。

まあ当然といっちゃ当然の反応だろうな。男の娘というのは常に女子からはライブ視されてしまう存在なのだから。悲しきかな悲しきかな。

ただ明久に見せるところは俺も気に入らない。豚に真珠もいとこだ。

「で、どうするんだ二人とも」

「行くわ！（行きます！）」

姫路と島田、参戦決定！ かなり増えたな。

「そうと決まればイロイロと準備して……」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね！ ご飯減らしてダイエットしなきゃ……」

ふむ。恐らく二人は明久に見せる——いや、魅せる為の準備をするのだろうな。ヒロイン達が主人公の為に頑張るといっているのはなんとも捻りのない王道パターンな展開だ。だが嫌いじゃない。

なんて思っていると、突然姫路が俺に耳打ちで話しかけてきた。

「あ、あのっ。岡崎君」

「あん? なんだ姫路」

「その……お願いがあるんですけど、確か岡崎君って、ジムに通っているんですよね?」  
「おう。ジムといっても普通のと格闘技の両方だな。それがどうした?」

「それなんですけど……私も行って良いですか? その……えつと……」  
「贅肉を落としたいと?」

俺の言葉に核心をつかれたのか、姫路は『はうっ!?』と可愛らしい声をあげた。

「あ、明久君の前でそんなこと言わないで下さいっ!」

「すまんすまん。んで、ジムの件についてだが……いいだろう。俺の紹介という形で参加させられるからな」

「ほ、本当ですか? ありがとうございます」

全く明久も罪な男だな。こんな可愛い子にここまでさせるなんて。うん、血を吐いて死ねば良いと思う。

だが、そう簡単に甘い蜜を吸わせてやるほど俺は安い男ではない。

「ただし、条件がある。姫路ならなんとなくわかってはいると思うが——」

「はいっ。またコスプレのモデルをすればいいんですよね? お安いご用です!」

「話が早くて助かるぜ」

契約完了。俺と姫路はその証として固い握手を交わした。

やはり持つべきものは友。はつきりわかんだね。

「うし。後は翔子に声をかけて終わりだな」

「霧島さんに？　へー、雄二も大人になったね」

「そうだな。てつきり俺は面倒事にならないよう黙つとくのかと——」

ポンツ

「明久、大悟。もし後になって翔子にバレたら、俺の命はどうなると思う？」

俺と明久の肩に手を置き、諭すように言う雄二。

その時俺の脳裏に浮かんだのは霧島翔子ヤンデレ3号。雄二への思いがオーバーフローしており、

目的の為なら手段を選ばない子。

その手には釘バットと包丁がよく似合う。そしてその先には——『自主規制』された雄二。

「……………ごめん」

「……………すまん」

「……………いいんだ」

俺達が謝り、それを許した雄二。

少しだけ、雄二への態度を優しくしてやろうと思った。



— 放課後。

『ん？ なあ、あの岡崎さんのせがれが連れてる可愛い子、誰だ？』

『ああ、なんでも彼の紹介で体験入会してるんだってさ』

『へー、にしても凄い鬼気迫った顔をしてるな』

『まあ、もう夏だし、引き締まった身体を作りたいんだろうな』

ドンッ！ ドンッ！

「どうした姫路!? 腰が入ってないぞ！ もっと姿勢をただせ！」

「はいっ！」

「なんだそのへなちよこパンチは!? そんなんで明久に振り向いて貰えると思うなよ

！」

「はっ！！」

その後、姫路はなんとかベストの体重になった。

そしたら前までの姫路よりコスプレ姿が魅力的に見えたので大変良かった。

## 第五十二問 俺とプールと水着回ッッ！ ～中編～

——明久視点。

時は過ぎて週末。

雲一つない抜けるような青空。夏特有の気候の暑さ。うん、今日は絶好のプール日だ。

「おはよー。皆」

「おはようございませす明久君。良い天気で良かったですね」

校門前には既に姫路さんと秀吉が立って待っていた。

この二人の水着姿が休みの日に見られるというだけで今日は最高の気分でいられそうだ。

「……………!! (カチャカチャ)」

「…………… (カチツカチツ)」

すると、その脇に二つの人影があることに気がついた。あれはムッツリーニと大悟の二、三次元コンビ？

「ムッツリーニ、大悟。おは——」

「話しかけるな、気が散る」

「……………今、忙しい」

ムッツリーニと大悟は鬼気迫る表情でカメラや撮影機器の手入れをしたり、スケッチ用の道具を準備したりしていた。

多分女子達の水着姿を写真に収めたり二次元風のイラストにしたりするんだろう。相変わらず我欲を満たす為の行動が速い男達だ。

「でもさ、大悟はともかくムッツリーニは無駄になっちゃうんじゃない？」

「……………なぜだ？」

「いや。だってムッツリーニは鼻血で倒れちゃうじゃないか」

清涼祭の時もチャイナドレスで鼻血の海に沈んだんだ。露出の多い水着姿でムッツリーニが意識を保てるはずがない。

「ふっ……………明久。お前は相変わらず浅はかだな」

「……………全くだ。甘く見てもらっては困る」

そう肩を竦めるムッツリーニと大悟。

「俺達が二度も同じ過ちを繰り返すと思ったら大間違いだぜ？ 見せてやれよ同志」

「……………ああ（コクリ）」

ガサッ

「輸血の準備は万全(だ)」

「うん。最初から予防を諦めてるあたりが潔いよね」

どや顔で血液パックを取り出した二人に、僕はただそう言葉をかけることしか出来なかった。

「でもさ、こんな輸血パックなんてどこで手に入れたの？」

「……………(サツ)」

質問に対し、二人は顔を背けた。

こういうのって医療関係者しか扱えない物だったと思うんだけど、一体どんなルートで入手したのだろうか。

でもこれで救急車を呼ぶような事態は避けられるだろう。

「準備と言えば、ワシは今日の為に水着を新調してきたぞい」

不意に秀吉がそんな事を口にした。

その心ときめく発言に僕ら三人が目を見開き、期待の眼差しを向ける。

「ええっ!? どんな水着!？」

「……………!! (ワクワク)」

「さすが相棒だ! 俺達の期待に応えられ——」

「トランクスタイプじゃ」

「男物じゃないかああああっ!!」

僕は悲しみのあまり、同時に地面に突っ伏した。

男物!? トランクスタイプ!? どうして秀吉はそんな愚行を犯してしまったんだ!? それじゃあ僕の秀吉の可愛らしい水着姿が拝めるって言う切なる願いも全て水の泡じゃないか!!

「……………見損なつた……………!!」

「相棒!! お前ともあろう者が……………血迷つたのか……………!!」

「酷いよ秀吉! 僕らが嫌いになつたの!」

「なぜワシは責められておるのじゃ……………?」

畜生! 秀吉だけは僕を裏切らないと信じていたのに!

いや、まだだ! こっちには秀吉の性格を知り尽くした百戦錬磨のオタクこと大悟がいる! なにか策を打つてあるに違いない!

そう思い大悟の方を見てみると、

「同志よ……………この世には神様なんていないんだな……………」

「……………所詮、神は人間の妄想が造り出した偶像の産物」

血の涙を流してムツツリーニと体育座りで落ち込んでいた。あの状態になつてゐるってことは代えの水着なんかは持つてきていないのだろう。クソオツ! 打つ手な

しか!!

こうなったら、僕がなんとか他の水着を調達して――

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ!」

「わわっ!?!」

後ろの方から声が聞こえて、急に背中に何かが飛びついてきた。

「あ、あれっ? 葉月ちゃん?」

「えへへー、二週間ぶりですっ」

この天真爛漫な声は、美波の妹の島田葉月ちゃんだ。清涼祭以来だから、確かに二週間ぶりの対面になる。

「この子だったら、着いてくるってきかなくて……………」

「あ、美波。おはよう」

少し遅れて美波がやって来た。

なるほど、だから来るのが少し遅かったのか。

「……………ねえ、土屋と岡崎はなにがあつたの?」

美波が横で負のオーラを漂わせながら落ち込む二人を見てそう僕に訊いてきた。

ワケを話すと、美波は『相変わらずね、あの二人も』と呆れるような視線を二人に対して向ける。

「あれ？ お兄ちゃん達、どうしちゃったのですか？」

「うーん、ちよつと今さつき悲しい事があつて落ち込んでるんだよね」

そりやあもう悲しくて仕方がないことが。

「そうなのですか……あつ、じゃあ葉月がお兄ちゃん達を慰めてくるですつ！」

「え？ 葉月ちゃんが？」

「はいっ。任せてくださいですつ！」

葉月ちゃんがそう言つて二人に駆け寄る。

いやいや、いくら天使の様な葉月ちゃんでもあそこまで落ち込むムツツリーニと生粋の二次元オタクの大病を励ますのは少し無理じゃないかな。

「エツチなお兄ちゃん！ 大悟お兄様！ 泣いちやダメですよ？ 笑顔ですつ」

「ああ？ なんだよ。俺を気安くお兄様などと呼ぶ不敬も——ふおおおおおおお

おつ!!! マイエンジェル葉月ちゅわあああああんつ!!!」

「……………?!? ……………!?! (ブツシヤアアアアアツ)」



葉月ちゃんが二人に抱きついた瞬間、大悟は歓喜の叫びを狂ったようにあげ、ムッツリーニは鼻血を噴水の様に噴き出した。うん、二人ともどうやら元に戻ってくれたようで良かった。

「あれ? 坂本はまだ来てないの? ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来ていますよ。今職員室に鍵を借りに行つて——あ、丁度戻ってきたみたいです」

「おう、これで全員揃つたようだな」

「……おはよう」

校舎の方から雄二と霧島さんが歩いてきた。前の宣言通り、本当にちゃんと声をかけていたようだ。

「んじゃ、早速着替えるとするか。そしたらプールサイドに集合だ」

「はーい!」

雄二の言う通り、一旦男女に分かれる。姫路さんと美波と霧島さんが女子更衣室に、僕と雄二とムッツリーニと葉月ちゃんを肩車した大悟が男子更衣室に——

「——つておい待てやキモオタ」

「なんだ?」

「君はなにをナチュラルに葉月ちゃんを連れていこうとしてるんだ。それに秀吉もこつ

「ちは男子更衣室だよ?」

「え? ダメなのか? 合意の上なんだが」

「雄二。警察呼んで」

「おう、ちよつと待つてろ」

「待て!! 通報はやめるんだ二人とも!」

慌てて僕らをとめにかかる大悟。最近コイツのロリコンぶりにもかなり拍車がかかっている。だから手遅れになる前に僕らの手で社会から根絶するべきだ。葉月ちゃんの為にも。

「えへへ。冗談ですつ」

「ワシは冗談ではないのじゃが……………?」

「ほら、遊んでないで行くわよ。葉月、木下」

「お主まで!?! 嫌じゃ! ワシ一人女子更衣室に混ざるのは嫌じゃ!」

「……………木下。もし雄二の前で脱いだら……………」

「どうしてそうなるのじゃ!?!」

でも一緒に着替えたりしたら、ムツツリーニが皆の水着姿を見ることなく天に召されちゃうしなあ……………。本人はそれで満足かもしれないけど。

「大丈夫だ秀吉。ほれ」

雄二が向こうを指差してそう言う。

その先には男子更衣室、女子更衣室とあるのだが、更にその先にもう一つの部屋を示す看板があり、そこには――

『秀吉更衣室』

――秀吉っていう、性別なんだ……………。

――大悟視点。

「やっぱり女子はまだ着替え終わってないか」

「そうみたいだね」

「……………（コクリ）」

「当然だろう。男と女では水着の難易度に大きな違いがあるからな」

トランクスタイルの水着に着替えた俺達四人はプールサイドで女子を待っていた。特に明久とムツツリーニはその瞬間を今か今かと待ち望んでいるようだ。

暇だ。片手腕立て伏せでもして時間を潰そう。

「ムツツリーニ。心の準備は出来てる？ 命に関わるからね？」

「……………問題ない。同志のアドバイスを元に、イメージトレーニングを256パターン済ませてある」

「その結果は？」

「……………そして256パターンの出血を確認した」

「致死率100%じゃないか」

あれは大変だった。俺は同志に頼まれ、様々なジャンル（王道、グロ、アブノーマル問わず全て）のエロゲーをやらせることでありとあらゆる場面に柔軟に対応させるという作戦を計画、実行したのだ。まあ途中大量出血で死にかけたことが何回あったがな。はっはっは。

「……………それにしてもよ。やっぱり凄い体してるよな、お前」

「あん？」

突然雄二が俺のバルクアップした大胸筋をペタペタと触りながらそう呟く。

「確かに、一体どんなトレーニングをしたらそんな漫画みたいなマッチョ体型になるんだろうね? 血管が浮き出てるじゃないか」

「……………鉄人以上」

続けて明久と同志も言葉をかける。確かに今日の為にいつもより徹底的に絞り込んできたが、別にそこまでこの身体を不思議がる必要はないと思う。全く何を言っているのやら。

「当たり前だ。三次元とはいえ年頃の女子に身を晒すんだぞ? だらしない体つきなんぞしてたら男としての恥だろうが」

「おお。大悟が久しぶりにマトモな正論を……………」

「久しぶりは余計だコラ」

最後の明久の言葉にツツコミを入れる。

ちなみに俺が身体をこうして鍛える理由は至極真つ当なもので、この世界に存在する全てのロリ少女達と二次元の女の子をこの鍛え抜かれた肉体を用いて守る為だ。過酷な格闘技の稽古だろうと、文字通り血の滲むような筋力トレーニングだろうと全てこなしてきた。この鍛え抜かれた鉄板の肉体はその勲章という訳だ。

「二次元とロリはこの世界の宝だからな。それを守るのは俺の使命のようなものよ。分

かるだろ?」

「うん。多分世界中探しても、そんな理由で体鍛えてるの大悟だけだと思うよ」

「人間の思い込みもここまで来ると尊敬に値するな」

「おいおい止せよ。照れるじゃないか」

少し言い方に違和感を感じるが、褒められているという解釈でいいだろう。良かったな俺の筋肉達よ。

と思っていると、更衣室の方から人影が駆け寄ってくるのが見えた。

「お兄ちゃんたちー、お待たせですーっ!」

ハッ!? この麗しき美声は我が愛しきマイエンジェルの葉月ちゃんではないか!!

さてさて、彼女は一体どんな水着を身に纏っているのかお兄様が直々に確かめてあげー

——んんっっ!?

「あ、葉月ちゃ——んんっ!?!」

ブルンツ↑(葉月ちゃんの大きく揺れる胸)

「「ブゲボフアツ!? (ブシヤアアアツ)」」

俺達三人は一斉に鼻血を出して倒れる。

「あ、あれって犯罪じゃね……………?」

「……………弁護士を呼んで欲しい」

「そんな馬鹿な……………ロリ巨乳が三次元に存在していたなんて……………!」

「お前ら……………。小学生の水着でそこまで取り乱すな」

雄二のツツコミが入る。

そ、そうだよな。別にロリ巨乳がいたからなんだというのだ。俺にとつては家族よりも見慣れているほど日常茶飯事なものではないか。危ない危ない……………どうやら突然の事で冷静さを欠いていたようだ。

さて、改めてマイエンジェルの姿を確認するとするか。どれどれ?

ふむふむ、昔ながらのスクール水着にその小柄な身体には不釣り合いな程の大きなボイン。そして弾けるような葉月ちゃん的笑顔。なるほど——あつという間に結論が出た。

「マーベラス (ブシヤアアアツ)」

「うん。懲役は二年程度で済みそうだね」

「……………実刑はやむを得ない (ボタボタボタ)」

「お前ら冷静なフリしてるだけだろ」

これが冷静でいられる訳がないだろう。ロリ巨乳の魅力を知らないから雄二はそんなことが言えるのだ。

見たまえ。この葉月ちゃんのふくよかかつ美味しそうなおっ——ん？

「は、葉月ちゃん。そ……………」

「こ、こら葉月っ！ お姉ちゃんのソレ、勝手に持つて行ったらダメでしょ!? 返しなさいっ！」

俺の言葉を遮って更衣室から出てきたのは、胸元を手で隠した島田だった。

そしてその視線の先には——不自然に膨らんだ葉月ちゃんの腹部がある。ま、まさか……………!?

「あう。ずれちゃいました」

ゴソゴソと何かをまさぐる。すると中から出てきたのは胸の詰め物……………いわゆるパッドだった。

その事実には俺は落胆する。ああ……………そりやそうだよな。よくよく考えれば島田の妹なんだし、そっちの方が不自然だよな。さらば俺の儂い夢。

すると、そのパッドを島田が勢いよく奪い取った。

「イタズラしちゃダメ！ これ高かったんだからね！」



「……………美波。それっていわゆるヌーブラアアアアアア!!」

「忘れなさい!! 今見たもの全部記憶から抹消しなさい!!」

「記憶以前に僕のありとあらゆる関節が粉々に抹消されるううううっ!!」

明久に見られ、恥ずかしさからか関節技をかける島田。

その後は颯爽と霧島が雄二の目を突いたり俺が美ボディに鍛え上げた姫路ややつぱり可愛い俺の相棒（女物水着バージョン）が現れたことで場が混沌と化したりしていたが、正直俺にはそんなものでもよかった。それよりも——

「ふええ……………大悟お兄様の筋肉、とつても大きいですっ!! 葉月、触ってもいいですか?」

「勿論構わないよ。思う存分触ってくれたまえ。見よ! この美しい逆三角形をつ!」

「ふわあ……………とつても硬いですっ! さすが大悟お兄様! カッコいいですっ!」

「ああ葉月ちゃんマジ天使なんじゃああくくもつと褒めちくりくく」

「褒めるですか? 分かったですっ。大悟お兄様は偉いですっ! よしよしくく♪」

「感無量ツツ!! (ブシャアアアツ)」

——マイエンジェルとの至福の一時を過ごすことの方が先決なのだから。全く、小

学生は最高だぜ!!

——  
明久視点。

「あの、明久君」

軽く準備運動をしてプールに入ろうとすると、姫路さんに声をかけられた。

「ん？　なに、姫路さん？」

「明久君は水泳は得意ですか？」

「うん。まあ人並みには泳げると思うよ。姫路さんは？」

「それが、実は全然泳げないんです」

「あ、そうなの？」

ある意味予想通りだ。姫路さんには悪いけど、上手く泳げる姿があまり想像出来ない。  
い。

「ん? 瑞希って水泳苦手なの?」

すると、隣で座っていた美波が僕らの会話に入ってきた。

「はい。水に浮くくらいしか出来なくて……………」

「それならウチが教えてあげよつか? 水泳得意だから」

「本当ですか? よろしくお願いします」

得意気に胸を張る美波に対して低姿勢で接する姫路さん。

このやり取りがいつもと逆の立場を見ているようで面白い。いつもはAクラスの姫路さんがFクラスレベルの美波に勉強を教えてあげているのに、今の状況はまるで――

「――美波がAで、姫路さんがFみたいだよね」

「寄せて上げればBくらいあるわよきつと!!」

「ぐべあつ!」

何?! なんでいきなり殴られたの!?

そう思ってるうちに、僕はそのままプールへと落下し、水中へと沈んだ。

『……………雄二。ちなみに私はCクラス』

『何を言ってるんだお前は?』

急いで水面に上がると、離れた場所で雄二と霧島さんが不思議な会話をしていた。ムツツリー二が妙に目を輝かせているのが謎だが。

「バカなお兄ちゃんっ」

「ん? 葉月ちゃん?」

見ると、浮き輪に掴まった葉月ちゃんが僕の所まで泳いで来ていた。

「えへへー。お兄ちゃん、葉月と遊ぶですっ」

「うん。でも葉月ちゃん、大悟と遊んでなかった?」

「それが……一緒に遊んでいたら突然鼻血を出して気を失っちゃったんです……」

そう言う葉月ちゃんの視線の先には、やけに恍惚な表情をして仰向けになって倒れるキモオタの姿があった。

おそらく葉月ちゃんへの興奮度が限界値を超えて理性がショートしてしまったのだろう。まさにロリコンここに極まれりといったところだ。

「葉月。何か悪いことをしちゃったのですか?」

「ううん。葉月のせいじゃないし、全然心配しないでいいよ。どうせすぐに復活するさ」

僕としてはあのまま一生眠っててくれてもいいんだけど。

「それよりも、葉月ちゃんはなにしてお遊びたい?」

「はいっ。葉月は『水中鬼』がしたいですっ」

水中鬼? 普通の鬼ごっことは違うみたいだけど、水中でやる遊びなのかな?

「どういうルールなの?」

「水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追いかけるです。それで、鬼が他の人を水中に引きずり込んで溺れさせたら勝ちですっ!」

「鬼だ! それは確かに鬼だ!」

最近の小学生は恐ろしい遊びを考えつくものだ。

「でも葉月ちゃん。その遊びは危ないなら、やっちゃダメだよ」

「あう……………。ダメですか?」

「ちよつと見ててごらん。霧島さん!」

水中鬼がどれほど危険かを教えてあげる為、霧島さんと呼ぶ。

「……………なに?」

すると、霧島さんはすぐにやって来てくれた。

「雄二と水中鬼っていう遊びをやって欲しいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせたあとで人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「……………行ってくる」

小さく頷くと、霧島さんは静かにプールサイドへと上がり、素早い動きで雄二をプールの中に投げ飛ばした。

『な、なんだ!?! 一体何がおこ(ガボガボガボ)』

そのまま霧島さんの手で深く沈められていく雄二。

「ね? 危ないでしょ?」

「うう……………、はいです」

わかってくれて良かった。こうして命の尊さを学んで貰えるのなら、雄二の一人や二人くらい安いもんだ。

「がはっ! てめえか明久がぼおっ!?!」

「……………雄二。しぶとい」

「しよ、翔子! 俺になんの恨みがあつて(ガボガボガボ)」

意地でも雄二を溺れさせて人工呼吸がしたいのか、霧島さんは雄二の頭を無理やり水中へと押さえつける。

やれやれ、雄二も往生際が悪いなあと思っていると、

「あれ? 代表?」

聞いたことのある声がプールに響いた。確かあの子は……………、

「……………愛子」

「Aクラスの工藤さん? どうしてここに?」

「ボク? ボクは水泳部だから」

そう言う彼女の名は工藤愛子さん。そのボーイッシュユで爽やかな雰囲気とは裏腹に自称保健体育の実技が得意という、ムツツリーニとは対照的な性格の女の子だ。

僕らとは先日の強化合宿の日以来の対面となる。へえ、水泳部だったのか。

「それに、他にも何人が来てるよ。ほら」

「え?」

見てみると、そこには新たに二人の女子の姿があつた。

『お姉さまっ! どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか!?

美春はこんなにもお姉さまのことを愛していますのに!』

『美春!?! どうしてアンタがここにいるのよ?!』

『美春にはお姉さまを害虫から護る為の特別な情報網がありますから!』

一人は美波を追いかけているDクラスの清水美春さん。そしてもう一人は――

『……………さて、言い訳をたっぷりと聞いてあげようかしら？ 二人とも』

『……………（ガクガクガク）』

――大悟と秀吉を正座させ、禍々しいオーラを放つ木下優子さんだった。



## 第五十三問 俺とプールと水着回ツツ! ～後編～

——大悟視点。

“われわれが怖れなければならぬただひとつのことは、恐怖そのものである。”

——byフランクリン・ルーズヴェルト

「大悟、秀吉。これはどういうことかしら？」

優子が腕を組み、ニコニコと笑顔を浮かべて正座する俺と秀吉に尋ねる。

俺達は今すぐここから全速力で逃げ出したい気持ちをグツと堪え、極力相手の目を見ないようにながら小声で答える。

「……………皆でプールで遊んでいます」

「……………右に同じじや」

神様——どうか俺達の平穩を返してください。

「そう。なら三つほど質問をしましょう」

「……………は？」

「まず秀吉。そのフザけた格好は何かしら？」

「……………店員に勧められたのが女物だと知らず、仕方なく着ておるだけなのじゃ」

「そう。それじゃあ二つ目。アンタ、今日は演劇部の練習だつて言つて出掛けたわよね？」

「……………姉上に嘘をついていたのじゃ」

問答を繰り返していると、徐々に優子の表情が綻び始める。

傍から見れば怒っているようには見えないだろう。でも俺と相棒には分かる。あれは全くの真逆。嵐の前の静けさだ。もしどちらかが少しでも地雷源に触れようものなら、一気に俺達の命を奪いにかかるだろう。そうなつてしまえば俺達に残される道は Dead or Die だ。

「……………それじゃあ最後に大悟」

「は？」

「……………どうして他のオンナがこんなにして、なおかつアタシに声をかけなかったのかしら？ それなりの理由があるのでしょうか？」

「……………」

脳ミソををフル回転させる。

相手は暴走一步手前のヤンデレ。間違った答えを言つて下手に刺激してしまえば間違ひなく二人とも死ぬ。それじゃあ一体どんな返答をすれば生き残れるのか、考えてみることにしよう。

〳〳岡崎大悟の妄想タイム〳〳

・考えその1『大人しく非を認める』

「ごめんなさい。俺達が悪かったです」

「心の底から反省しておるのじゃ」

「本当に?」

「はい」

「じゃあ二人とも。辞世の句を詠みなさい」

駄目だ。謝つたぐらいで許してくれるような甘いヤツじゃない。却下。

・考えその2『なんとかがごまかす』

「いやー、実は携帯が調子悪くて繋がらなかったんだよ。なあ秀吉？」

「そ、そうじゃ。じゃから姉上に連絡が出来ずにいたのじゃ」

「秀吉。アンタ携帯持ってないハズよね？」

「……………」

「いや、だからそれは俺の携帯が」

「なら今から電話をかけてみましようか？」

「これも駄目。バレたら更に状況が悪化する。」

・考えその3 『他のヤツらになすりつける』

「実は、明久と雄二が悪いんだ」

「そうなの」

「だから俺と秀吉は無実で」

「責任転嫁なんて最低ね。ならその腐った性根を叩き直してあげるわ」  
物理的に叩き直されること確実だろう。

くく妄想タイム、終了くく

チクショウ! どれを選んで俺と秀吉がバッドエンドになってしまおうじゃないか

でも正直に『優子を呼んだら面倒臭くなりそうだった』とも言えないし……俺は一体どうすればいいんだろうか。

隣では秀吉が『無理じゃ……もうおしまいじゃ……』とボソボソ呟いてやがるし。諦めんよお前。

「ダーリン? 怒らないから正直に言いなさい?」

「……………お慈悲はありますでしょうか?」

「あのね、アタシもそこまで鬼じゃないから。本当の事を言ってくればそれでいいのよ」

優子が諭すように俺にそう言う。

仕方ない。どうせこのまま沈黙を続けていても話は一向に進まないのだ。それに万が一ではあるが、正直な気持ちを話せれば優子も温情で許してくれるかも知れない。横を見ると秀吉も同じことを考えているのか、コクリと頷く。

よし、なら腹を括って男を見せるとしよう。

顔をあげて優子の目を見て、大きく息を吸って告げた。

「お前（姉上）を呼んだら厄介だと思った（のじや）」  
「秀吉？　ダーリン？　齒を食い縛りなさい」

“ 恐怖と勇気がどんなに近くに共存しているかは、敵に向つて突進する者がいちばんよく知っているであらう。 ”

—— b y モルゲンシユテルン

—— 明久視点。

「あはは、優子は相変わらずだね〜」

木下さんの手によつて大悟と秀吉がプールサイドに頭から叩きつけられているのを見て工藤さんがそう言う。

大丈夫かな？　二人とも血だらけになつて動かなくなつちやつてるけど。

「それじゃ、僕も着替えてくるね。優子、行こー！」

「あ、愛子。ちよつと待つてて。今行くわ」

両手の二人をポイツと放り投げた木下さんを連れて、工藤さんは更衣室へと向かつていく。

すると、その途中で振り向いて、

「おつと、覗くならバレないようにね♪」

「!？」

「ちよ、ちよつと愛子! アンタなに言つて——」

「いいからいいから♪ それじゃあね、吉井君♪」

と魅力的な台詞を残していった。

こ、これはつまり本人公認の覗き! 女の子にあんなことを言われたら、男として、行かないわけには——

「明久君? 余計な動きを見せたら大変なことになりますよ?」

「生きて家に帰りたくないの? アキ」

「……………雄二。今動いたら捻り潰すから」

なんだ? この強烈な殺気は。これじゃあ迂闊に身動きが取れない……………! こう

なったら、ムツツリーニのカメラに期待を――

「……………（チーン）」

視線の先では、僕らの最後の希望であつたムツツリーニが、輸血チューブに繋がれて白くなっていたのだった。クソオツ!!

「ところで、どうしてプールを借りることが出来たんですか？」

工藤さんと木下さんも加わり、皆で楽しく遊んでいる（大悟と秀吉もかろうじて甦つた）と、突然姫路さんがそう僕に尋ねてきた。

そっか、まだ事情を話していなかったっけ。

「まあ、ちよつとイロイロあってね。プールの掃除を引き受ける代わりに一日貸切にして貰ったんだよ」



「いい感じにはしよったなお前」

黙れ大悟。

「え? お掃除ですか? このプール全部を?」

「うん。でも、一人でやるわけじゃないよ。僕と雄二と大悟とムツツリー二と秀吉の五人でやるんだ」

もつとも、この楽しい時間の代償なら、その程度はなんの苦にもならない。

「プール掃除? それならウチも手伝おつか?」

「私もお手伝いします。遊ぶだけじゃ悪いですし」

「ありがとう。でも、掃除は僕らだけで充分だよ。道具も五人分しか借りていないし」

その気持ちだけ受け取って、丁寧にお断りさせてもらう。

「そうですか……………」

「うくん。道具がないなら仕方ないわね」

「あ、そうでしたっ。それならいいものがあります」

「いいもの? 一体なんだろうか。そして姫路さんが更衣室へとタタタと走り出していく。」

しばらく待っていると、両手で大きなバスケットを抱えて戻ってきた。何を持ってき

「ちよつと失敗しちゃって、人数分用意できなかったんですけど——」  
「「「!!?」」」

その瞬間、僕ら五人は本能的に何かを感じ取った。これは、もしや……………?

「——実は、今朝作ったワッフルが四つ」

「第一回！」（雄二の声）

「最速王者決定戦！」（僕の声）

「チキチキ！ 男だらけのっ！」（大悟の声）

「「ガチンコ水泳対決——!!!」」（僕と雄二と大悟の声）

「「イエーーツ!!」」（秀吉とムッツリーニの合いの手）

姫路さんの台詞を聞き終える前にタイトルコールが入る。

突然の事態についていけず、女子は全員目を丸くしていた。

「明久、ルールの説明を頼む！」

「オツケー！ ルールはとっても簡単で、ここのプールを降伏して、最初にゴールした人

の勝ちという、誰にでも分かる普通の水泳勝負です!」

ただし姫路さんの特製殺人ワツフルは四つで、僕らは五人。つまり生き残ることができるのはたった一人。つまり、二位以下は全員待ち受ける困難は同じということになる。

「バカなお兄ちゃんたち、突然どうしたんですか? 急に水泳勝負だなんて、葉月ビツクリですっ!」

「いいかい葉月ちゃん? 男にはね、大切なものを賭けて戦わなきゃいけない時っていうものがあるんだ」

「ふえ〜。つまり、プライドを賭けた勝負ってやつですねっ!」

いいえ。命を賭けた勝負です。

「葉月ちゃん……………いいや、マイエンジェル。俺の活躍、是非応援してくれないかい?」

「はいっ。葉月、一生懸命応援しますねっ! 大悟お兄様っ!」

そう言つて大悟の手を握る葉月ちゃん。そして再び興奮で発狂する大悟。

なんて健気でピユアな子なんだろうか。あんな欲にまみれたキモオタに対しても屈託のない笑顔と態度で接せるなんてよっほどのことじゃない限り不可能だというのに。

「……………」

「……………優子。さすがに小学生相手にそれはダメ」

「はっ!? ご、ごめんね代表。つい体が勝手に動いちゃって……………」

向こうから霧島さんと木下さんのそんな会話が聞こえる。あの手に持つてるエスカリボルグで一体何をするつもりだったのだろうか。

「へえ、面白そうだね。それじゃ、ボクが判定をしてあげるよ」

「頼んだよ〜——みるくたそ」

「その呼び方まだ続いてたんだね」

そう言つて工藤さんがスタート兼ゴール地点に立つ。

僕らは闘志を燃やしながらスタート地点に向かった。右隣には雄二、左隣には大悟がつく。

「そういえば、あの五人の中で誰が一番速いのかしらね」

「勿論大悟に決まつてるわ。なにせ筋肉と鍛え方が違うもの」

「確かに、運動神経と体力なら岡崎君が一番に見えますもんね」

「……………雄二も運動能力なら負けてない」

「そうね。それに動きの速さならアキや土屋も引けを取らないし」

そんな暢気な言葉が女子達の間で繰り広げられる。でも僕らにとってはそんなこと

よりも、無事に明日を迎えられるかどうかの方が重要なのだ。

「大悟お兄様ー! ファイトですーっ!!」

「うおおおおおおおおっ!!! 女子小学生の声援こそ我が力の源なりいいいいっ!!!」

横で訳のわからないことを叫んでるロリコンは放っておこう。

「はーい! 行くよー! 位置について——」

工藤さんのコールが響く。

ムツツリーニは出血で弱っているから大丈夫。秀吉にも、体力で負けることはないだろう。

「よーい——」

ということは、僕の敵となるのは——

「——スタートっ!」

「くたばれええっ!!」

合図と共に、僕ら三人は一齐に攻撃を仕掛けていた。

「おのれ雄二! 大悟! 卑怯な真似を!」

「てめえらも同じこと考えていやがったか! この腐れ外道共が!」

「その言葉、そのまま返してやる！」

体勢を立て直し、間髪いれずに雄二と大悟に掴みかかる。が、

「馬鹿が！俺に腕力で……………勝てると思うなア!!」

「うぐつ……………」

「なんだとお……………っ！」

大悟によつて二人同時に押さえつけられようとしていた。女の人のウエストなんて比じゃないくらい太い豪腕が僕を襲う。

な、なんて馬鹿力だ……………！全然動く気配がない！

「葉月ちゃんの前で不様な姿を晒せるものかあ……………！せめてもの情けだ。二人纏め

て葬つてやろう！」

「はっ、やるじゃねえか大悟……………！」

「僕だつてこんなところで負けるものかあ……………っ！」

この一戦に僕の生死が懸かっているんだ！例え相手が百戦錬磨の元喧嘩師だとしても、おめおめと諦める訳にはいかないっ！

『ねえお姉ちゃん。水泳なのに、どうしてお兄ちゃんたちはプールの中に入らないですか?』

『見ちゃダメよ葉月。バカがうつつちやうからね?』

遠くから何か失礼なやり取りが聞こえた気がする。

「三人とも。取っ組み合いもいいけど、向こうはもう折り返しだよ?」

「「え?」」

審判の工藤さんからそんな情報を聞かされ、思わず手を止めて先を見る。

するとまさにその通りで、秀吉とムツツリーニは折り返し地点を越えてこちらに戻ってきていたのだ。

「マズい! このままじゃ負けちゃう!」

「嘘だろオイ! いつの間にアイツらあんなに泳いでやがったんだ!」

「そうはいくかつ! 俺はムツツリーニを止める! 明久と大悟は秀吉をやれ!」

「了解!」

「任せろ!」

雄二はムツツリーニのレーンに、僕と大悟は秀吉のレーンに飛び込む。

そして急いで秀吉のいる半ばまで泳いだ。

「相棒! すまんがちよつと大人しくしてくれ!」

「秀吉! こころは通さない!」

「な、なんじゃ大悟に明久!? お主らは隣じやろう!」

脇を抜けようとする秀吉だったが、あっさり和大悟に片腕で止められてそのまま抱えられていた。

「大悟、放すのじゃ!」

「おい秀吉! 頼むから暴れんじゃねえよ! 明久! 手伝え!」

「オツケー!」

秀吉が大悟の腕の中から逃げ出そうと必死にもがく。くうっ! 水の中だからうまく捕らえられない……………

! とにかくどこでもいいから掴まなきや——

ズルツ

「へ?」

——と、突然掴んでいたものから抵抗がなくなった。

「……………? なんだこれ?」

落ちて着いて手に持っているものを見る。それはライトグリーン色のなにかで……………

「ア、アキッ!」



「明久君っ! なにをしているんですかっ!」

美波と姫路さんが僕の手元を見て血相を変えている。大悟も何事かと思っただのか秀吉を解放した。

その時、僕はようやくそれが何なのか分かった。

「え!?! ひよっとしてコレって、秀吉の……!?!」

「おい、まさかとは思うが、てことは……!?!」

二人揃って秀吉の方を見る。すると――

「な、なんじゃ……?」

秀吉は、上半身の水着がはだけて胸が露出していたのだった。

「「ホゴブファッ!?!」」

それを理解した瞬間、僕、大悟、ムツツリーニの三人の鼻から赤い噴水が舞った。

そしてどんだん朱に染まる水面。

「明久君!?! 土屋君!?! 岡崎君!?!」

「き、木下っ！ 早く胸を隠してっ！」

「な、なぜじゃ!? ワシは男なのに……………」

「うおっ！ 大丈夫かお前ら！ この出血量はマジでヤバくないか!」

「……………か、感無量……………っ！（ブクブクブク）」

「ああっ！ 三人がゆっくりと沈んでいっちゃってますっ！」

「ひくでくよくしゅ？ アンタはまたそうやって大悟を誑かしてーっ!!!」

「ま、待つのじゃ姉上!? これは完全に不可抗力……………!!（ガボゴボゴボ）」

「……………愛子。救急車の手配、頼める？」

「はーい。やっぱりFクラスの皆は面白いねえ」

「バカなお兄ちゃんたち、いつも楽しそうで羨ましいですっ」

「お姉さま、愛しています……………」

その後、次に僕らが目覚めたのは病院のベッドの上だった。

——週明け。

「……………吉井、坂本、岡崎。ちよつと聞きたいことがある」

「断る」

「黙秘します」

「同じく」

朝、僕ら三人は鉄人に呼び出され、事情聴取を受けていた。

しかし僕らは拒否の構えを取り、質問に答える態度を見せていない。

「……………どうして——」

一度言葉を区切り、大きく息を吸う鉄人。

「——どうして掃除を命じたはずなのにプールが血で汚れてるんだ!? 鉄拳をくれて

やるから詳しい話を聞かせろ!」

「説教なんて冗談じゃねえ! むしろ死人を出さなかったことを褒めてもらいたいくら

いだ!」

「そうですよ! 本当に危ないところだったんですからね!」

「アンタは大切な生徒があのまま失われてもいいっていうのか!? そんな薄情ものだとは思わなかったぜ!!」

「黙れ! お前らの日本語はさっぱりわからん! 拳で語り合った方が早い!」

「ええい、この暴力教師め! 逃げるぞ明久! 大悟!」

「了解っ!」

「おうっ!」

「待て貴様ら! 今度は反省文とプールの掃除では済まさんぞっ!!」

そのまま僕は、朝から鉄人に追いかけて回される羽目になった。

## 修羅場と第二次Dクラス戦編

### 第五十四問 正義、執行

——大悟視点。

二週間の停学期間が明け、俺は久しぶりに制服姿で外に出た。

「ねみい……………」

大きな欠伸をしながら、俺は二週間ぶりの通学路を歩く。

強化合宿から帰って以降ずっと引きこもりよろしく部屋から出ないかつ昼夜逆転の生活を送っていたためか、朝だというのに眠気がヤヴァイ。どれくらいかかっていうともう今からでもこの場で寝そべったらすぐに眠れるレベル。

「よし。今日は授業をサボって寝よう。どのみちこんな状態じゃ頭に入らん」

ま、じゃなくても理数系はちんぷんかんぷんなんだがな。はっはっは。

「おっ。大悟ではないか」

「む?」

不意に後ろから小走りで来る足音が聞こえる。

「久しぶりじゃのう。大悟よ」

「秀吉か。二週間ぶりだな。ふわあ〜……………」

その正体はFクラスの美少女アイドルにして唯一無二の俺の相棒。木下秀吉だった。

「どうしたのじゃ？ やけに眠そうじゃの？」

「まあな。謹慎期間はずっと徹夜だったからな。体内時計が狂ってやがるのさ」

「徹夜？ 一体何をしておったのじゃ？」

「エロゲとかギャルゲとか同人ゲーとか」

「要は全部ゲームではないか……………相変わらずじゃのう」

秀吉が呆れたようにそう俺に言った。

けど仕方がない。学校からは罰として二週間はどこにも行かず家にいろという謹慎命令を受けていたのだ。しかも山ほどの課題を出されると言う二重苦。こんなノストレスが溜まらない訳がなからう。

だから俺は最初の三日間くらいで死ぬ思いで課題を全て終わらせ（内容は別）、後はひたすらテレビか にかじりついてた。精神的に消耗していた俺にとって、二次元の女の子がキャツキャウフフしてたりあんなことやこんなことをしている姿は癒しであり、明日を生き抜く為の動力源なのだから。

「はあ……………今すぐ家に戻ってまた二次元の世界に浸りたい気分だぜ」

「そんなことをいうでない。ワシは久しぶりにお主に会えて嬉しく思っておるのじゃぞ

「？」

「え？ そうなん？」

「そういえば、今日の秀吉はいつもより笑顔を浮かべているような気がする。」

「うむ。いくら謹慎とはいえ、親友に会えない期間が長続きするのは不満じゃったからの。こうしてまたお主との日常が戻ってきたのは喜ばしいことじゃ」

「えっ……なにこの子めつちやいい子やん。惚れそう。」

「俺に会えて嬉しいだど？ 随分と物好きだなお前は。そんな節穴な目をしてると将来婿探しで苦労するぞ？」

「いや、そう意味で言ったのではないのじゃが……。それに男のワシに婿探しという言葉はおかしいじゃろう」

「俺が笑い飛ばすと、秀吉はどこか納得がいかないとでも言うように口をとがらせた。『……………そうか。ま、そう考えるのもありか』」

「家でのんびりと趣味に過ごすのもいいが、秀吉の言う通り友達とバカ騒ぎするついでうのも大切なことだよな。それに気づかせてくれるとは……………さすがは俺の相棒だ。」

「ま、またよろしくな。相棒」

「勿論じゃ。相棒」

「二人で拳を突き合わせる。最早俺達にとって恒例の行為だ。」

そしてそのまま二人で他愛のない雑談をしながら歩いていくと、

『ほら、とつとと金出せよ!! お小遣いあんだろ!!』

『詫び賃だよ、詫び賃!!』

どこからかそんな怒声が耳に響いてきた。

「なんだあ? うるせえなあ」

「だ、大悟。アレ……………」

秀吉が指差した方向に視線を向ける。

その先には、俺達と同じ高校生らしき二人組の後ろ姿が見えた。どうやらさっきの声の発生源のようだ。

『ぶつかってきたのはそつちだろーが! アアン!』

『はやくしねーと、本気で殴んぞオイ!!』

そう声を荒げ、物騒な言葉を惜しげもなく発する。道行く通行人達もその光景をチラ見たり巻き込まれないよう早足になったりしている。

なんだ、誰かと揉めてんのか? それとも喧嘩かなんかで打ち負かした相手への追い討ちか? まあどつちにしろ俺には関係ないが。



「ほれ、行くぞ秀吉」

「え？　しかし大悟よ……………」

「なんだ、止めなくてもいいのだったか？　いいんだよ。わざわざ人様の喧嘩におせっかいで首突つ込む必要なんてねえからな。やりたきや勝手にやらしとけって話だ」

「いや、そうではなくてじゃな。相手が……………」

「大体な、ありや見た感じ高校生同士の喧嘩だ。なら尚更止めるまでもねえのよ。ほとぼりが冷めりやあ勝手に終わってるもんなんだ。そんなもんに一々付き合ってたらキリがない。それも……………」

「じゃから、相手をよく見てみよ！」

秀吉があまりにも強く言うため、仕方なくそつちの方をよく見てみる。　　たたく、何をそんなに慌ててやがるんだ。別に喧嘩なんて俺と一緒にいるんでたんだから見慣れるだろうに——

『ひ、ひい……………つ！　こ、怖いよお……………』（女子小学生）

『お、お母さあん……………ふええ』（女子幼稚園児）

——一瞬で頭に血が昇った。

「秀吉。ちよつとコレ持つてろ」

「む?」

秀吉に鞆を預け、俺はそいつらの下へと向かう。全く、俺の前であんな可愛い可愛いロリ達にあんな態度を取るなんてなあ。これは俺が正しい方向へと二人を導いてやらなくてはいけないな。

そして、俺は背後からそいつらの肩を優しく叩く。

P O N

『あ、誰だ——ぶげぼおおっ?!!?』

『ん? なん——げぶううっ?!!?』

『幼ジヨ、泣カセるヤツ、死ネ』

さあ、正義を執行しよう。

「ふう、すつきりした」

無事にロリ達に群がるゴミを片付け、一息つくくと、秀吉がやれやれと肩を竦めながら来た。

「相変わらず容赦がないのう。お主は」

「当たり前だ。世界の宝であるロリを怖がらせるようなクソ野郎共には情けなど要らんからな」

後は適当にそこら辺に捨てておけばいいだろう。きっと誰かが拾ってくれるさ。鼻とか折れてるけど多分大丈夫でしょ。

「……………さて、麗しきお嬢さん方。お怪我はありませんか？」

「……………」

ロリ達の方を見つみると、口をポカンと開けて固まっている表情のロリ達がいた。

うんうん。そんな顔も実に可愛らしくて素晴らしい。思わずお兄さん興奮してきちゃったよ。

「やけに静かじやの？」

「どうしたんだい？ もう怖いヤツらはいないんだよ？ さあ、俺の胸に飛び込んでおい——」

二人でロリ達の顔を覗き込む。すると、

「……………ふえ」

「?」

「うえええええええん!!!」

「えええええつ!!」

ちっちゃい方のロリが突然大声で泣き始めてしまった。え、なにになにに!?

「どっ、どっどっどっどしたのじゃ!?! なぜ泣くのじゃ!?!」

「お、おとおお落ち着くんだお嬢さん！ 俺達は別に怪しいヤツらじゃなくて」

「うえええええええん!! うえええええええん!!」

「……………」

弁明を遮って泣き続けるちつちやい方のロリ。俺…………嫌われてんのかな？

「ごっ、ごめんなさい!! 妹は多分、さっきのが怖くて泣いてるんだと思うんですっ!

その…………さっきのびどだ…………ちが…………ううっ、うわあああああん!! ごわがっだ

よおおおおお!!」

そしたら恐怖を思い出したのか、姉のロリまで泣き出してしまった。

なんだろう。俺達が泣かせた訳じゃないのにも関わらず罪悪感が出てきた。ここま  
でやられるとさすがの俺も傷つく。けどこの子達は被害者だ。何も悪くない。

「ああっ！ 落ち着くのじゃ二人とも！ 大悟！ こういう場合はどうすれば良いの  
じゃ!？」

「任せろ!! こういう時はまず優しく抱き締めてあげるんだ!! そしたら次に愛の言葉  
を囁いてからその勢いでベッドへ行き一緒に大人の保健体育を……………」

「この状況でお主は何を言っておるのじゃ!? しつかりせい!」

「うええええええん!! うわあああああん!!」

はっ?! ついロリ達とのいちやラブ妄想へと浸ってしまっそうになっていた! 反

省反省！

取り敢えず、まずはこのロリ達を宥めて安心させないと――

P O N

「ん？」

誰だ？ 俺の肩を掴むのは。

「キミ。何をしてるのかな？」

声がしたので後ろを振り向くと、そこには青い制服を着たお巡りさんが、笑顔で俺の肩に手を置いていたのだった。

「……………」

「……………」

「……………」（ニコッ）」

「……………」（コクリ）」

カチャリ

「オラ!! キリキリ歩け!!」

「誤解です! 俺は何もやっていません!」

「嘘をつくな! 近隣住民から『高校生らしき男が女の子に暴力をふるおうとしてる』と

いう通報があつたんだ! さっきの状況的にもその見た目的にもお前だろう!」

「違います! 俺はただあの愛しき幼女達をあゝの悪党から守ろうとしただけなんです!

ていうか見た目は関係ないでしょう!」

「うるさい! 言い訳なら後で聞いてやる! だから無駄な抵抗はするなこのロリコン

野郎め!!」

「やめろおおおおーっ!! もう捕まりたくないあああーい!!」

「ああーっ! おつきなお兄ちゃんがお巡りさんに連れていかれちゃうよー!」

「待ってー! リーゼントのお兄ちゃん!!」

「どうしてこうなるのじゃ……?」

「ああクソ……ひでえ目にあつたぜ」

俺はあの後、騒ぎに駆けつけた警察官に近くの交番まで連行された。

誤解を解くために秀吉と先ほどのロリ達、そして連絡を受けて来たロリ達の母親とおぼしき女性が必死に説得してくれたおかげで、多少時間はかかったもののなんとか解放された。その際に何故か持ち物検査をされてしまい、顧客に渡す予定の同人誌（幼女×



オツサン×触手）が出てきて更に怪しまれたが、それもなんとか弁明して終わった。

『次からはあまり誤解を招くようなことをしないようにな』

そう去り際に警察官のオツサンに言われた。いや、アンタの早とちりじゃないのか………？　と思つたがとつとこの状況を切り上げたかつたから敢えて何も言わなかつた。

「お主も停学明け早々災難じゃつたのう………」

「ああ。でも一番はあの同人誌が見つかつたときの母親の『うちの娘達に近づくなこの鬼畜趣味の変態』つていわんばかりの視線を向けられたのがキツかつたな………」

「いや、そもそも何故あんな物を持つてきておるのじゃお主は………」

「仕方ないだろう。今日が客との受け渡しの日なんだから。没収されんじやないかとヒヤヒヤしたぜ」

唯一の救いは、このことがあの場で丸く終わつてくれたことだろう。もし学校に報告なんてされたら、また鉄人かババアから説教やら反省文やらを食らうことになつていたからな。

「でもまあ、ロリ達を助けられたからよしとしよう！　可愛かつたなあ〜」

「全くお主は………」

そんなこんなあり、ようやく目的地である文月学園へと到着する。

時間は食ってしまったが、元々早めに家を出ていた為か、遅刻にはなっていないようだ。

「そういや、明久達はもう来てるんか？」

「あの時間で見かけなかったということは、そうじゃろうな」

そうか。それなら久しぶりにあのバカの顔でも拝んでやるとするか。

そう思いながら、俺達は自分のクラスへと向かっていった。

—— Fクラス

「ういーす」

「おはようなのじゃ」

相変わらずのボロい扉を開けると、

『吉井！ 抵抗するな！ 往生際が悪いぞ！』

「くそっ！ 誰か、助け——そうだっ！ 優しい姫路さんなら僕を助けてくれるはず！ お願い姫路さん！ 僕を助けて！」

「美波ちゃん………やつぱり、明久君のことが………」

「ええっ!? まだそれやつてるの!？」

暗幕で光を遮る室内。ロープでグルグル巻きにされている明久バカコンビ&雄二。覆面姿のクラスメイト達。そこらかしこに置かれる鞭や蠟燭などの拷問アイテム。

やれやれ、朝っぱらから元氣だな。

「こ、これは一体何事じゃ!？」

が、相棒は冷静な俺とは真逆に驚愕の表情を浮かべてそう言った。

「秀吉！ 大悟！ 良かった………！ ずっと来ないからてつきり今日は休みなのかと」

明久が希望を見出したかのごとき視線を俺達に向ける。

「今朝は色々な諸事情があつて遅くなつてしまったのじゃが………。明久、お主は何をしておるのじゃ？」

「助けて秀吉！ このままじゃ僕はクラスメイトの手でこんがり焼かれた挙げ句紐無しバンジーをさせられてしまいそうなんだ！」

「? どういう事じゃ?」

「雄二。おめえ緊縛プレイをするにしても全身をくまなく縛つちや意味ねえだろう。俺が亀甲縛りに直してやろうか?」

「好きでこんなことしてる訳ねえだろ!? 俺はコイツの巻き添えだ!」

「ふーん」

「なんだ? また何かやらかしたか? と思いながら自分の席につこうとすると、

「お待ちしておりました。二次元の貴公子こと我らが大きいなる兄貴よ」

「あん?」

俺の前に一人の覆面が立ち塞がる。声から多分須川だろう。

「おい須川。この状況はなんだ?」

「はい。我ら異端審問会は、あそこにいる吉井明久と坂本雄二の二名を異端者として裁判にかけている最中でございます。そして今しがた、然るべき判決を下しました」

「やっぱりか。それで結果は?」

「満場一致で極刑です」

「なるほど。内容は?」

「人間丸焼きバーベキューか丸腰スカイダイビングを考慮しております」

「うむ。悪くないだろう」

納得する俺。後ろで『違う！ 誤解なんだ！』とギャーギャー騒ぐ声は無視していいだろう。

「んで、ヤツらの罪状は？」

「よく聞いてくださいました兄貴。異端者・吉井明久は我ら異端審問会の血の盟約に背き、よりによって我らが聖域である文月学園敷地内において、群衆の面前にも関わらず島田美波と接吻などという不埒な——」

ガラッ

突然扉が開いた。

「……………」

それは、何故か顔を耳まで赤くしながら俯く島田だった。  
なにも言わずに、俺達のこの状況そっちのけで足早に自分の席につく。

「……………」

静まり返る教室。

それは一時限目の担当である布施が来るまで続いた。

「美波ちゃん……やっぱり、明久君のことが……」

あと姫路はまだそんなことを呟き続けていた。

## 第五十五問 リア充は死ぬ!!!

—— 一時限目、化学。

半分眠気で意識を失いながら授業を受ける。

だが、そんな状態でも俺は、現在教室内に広がる違和感を感じていた。

—— 静かだな。そして殺気がすげえ。

普段なら勉強どころか静かに授業すら受けられないチンパンジー共が、今日は珍しく一言も声を発さない。しかしコイツらは決して真面目に勉強に取り組むようになったとかではないようで、ある一点の方向を見ながら邪気と怨念にまみれたオーラをこれでもかと放っていた。

その視線の先には、やけに頬を赤らめている明久の姿がある。そしてその明久が更に視線を向けているのは、朝と変わらず赤面で顔を伏せる島田だ。

「……………おい雄二」

「なんだ。ロリコン」

「ブチ殺されてえかコラ」

俺はロリコンじゃない。ただロリが他の人種よりも愛すべき存在なだけだ。

「なんだこの異様な雰囲気は。いつもと全然ちげえぞ?」

「ああそれか。別に大したことじゃないなら放っておけ。それに俺やお前にはあまり関係がないからな」

「そうなのか?」

興味がないのか、あるいは今朝の一件からまた巻き込まれたくないのかぶつきらぼうに俺にそう言った雄二。

そういえば朝、須川が島田と明久がキスをしていたと言っていたな。ならこのギスギスした嫌な雰囲気はそれのせいかな?

『では須川君。この場合3molのアンモニアを得るために必要な薬品はなんですか?』

『塩酸を吉井の目に流し込みます』

『違います。それでは、朝倉君』

『塩酸を吉井の鼻に流し込みます』

『流し込む場所が違うという意味ではありません。それでは、有働君』

『濃硫酸を吉井の目と鼻に流し込みます』



『『『それだつ!!』』』

『それだ、ではありません。それと答えるときは吉井君の方ではなく先生の方を見るように』

うん、どうやら俺の予想は間違いないようだ。

しかし明久も馬鹿だな。校舎裏とかならまだしも、わざわざ生徒達がたくさんいるような場所で堂々とキスをするなんてよ。それが後々こうなるつてことは簡単に予測が出来るだろうに。

とまあ、こんな感じでいつもと違う空気の中、一時間目の終了を告げるチャイムが鳴り響き、布施は大きな溜め息をついて教室から出ていった。

『吉井のヤツ、島田と目と目で通じ合っつていやがったぞ……………!』

『島田は狙い目だと思っつていたのに、あのクソ野郎……………!』

お前らみたいな名も無きモブ共じゃ無理だ。諦めとけ。

『畜生……………! 姫路、木下に続いて島田までヤツに持つていかれたら、このクラスの希望はアキちゃんしかいねえじゃねえか……………!』

『いや、兄貴と繋がりがあるといっ点で天ちゃんも可能性があるぞ……………!』

やめとけ、どっちもろくな人間じゃねえから。しかも片方男だし。

そんな殺意の籠められた野郎共の視線が飛び交う中、島田がピコピコとポニーテール

を揺らしながら恥ずかしそうに明久の席と一緒に座ったのが見えた。

「……………雄二。アイツらはこの剣呑な雰囲気気がついてないのか？」

「島田はともかく、明久は多分気がついてないだろうな」

そう俺と雄二が話しているうちにも、どんどんと距離を縮めていく二人。そしてそれと比例して膨れ上がる殺気。

フツ……………愚かしい。確かにあれは他の連中から見れば羨ましい光景だろうが所詮は三次元。わざわざそこまで気にする程でもあるまいて。

さて、俺は同志と約束していた写真&イラストの交換購入会でもやるとするか。そう思い立ち上がって同志の席へと移動する。

「……………来たか、同志大悟」

「おう。待たせたな同志ムツツリーニよ。今回も秋葉原で特殊なルートを使つて仕入れた良質物を持つてきたぜ」

「……………こつちもかなりの厳選を重ねた。抜かりはない」

「それは期待ができそうだ。んじゃ、早速始めようか」

「……………(コクリ)」

そんな感じで俺と同志は我関せずのスタンスを取り、他の連中が明久達を見て嫉妬の炎を燃やす中、

「お姉さまっ！ 何をしているんですか!? そんなに豚野郎に密着して！」

「デカイ声が響き渡ったかと思っただらなか来た。」

「み、美春!!? ウチの邪魔をしに来たの!?!」

「当然ですっ！ その豚野郎がお姉さまに密着している姿を見て黙っていられるはずがありませんっ！」

そう言っつて、明久を親の仇のような鋭い視線で睨み付けるのはDクラスの清水だった。なぜ怒っているのかは、おそらく島田を女性として愛しているがゆえに他の男……しかもよりによって恋敵の明久とイチャついているのが許せないんだろう。ま、俺にとつちやどうでもいいがな。

「み、密着っつて、仕方ないでしょ!? 代わりの卓袱台はないし、狭いんだからくつつかないとダメだし……」

「お姉さま。それなら姫路さんのところでいいじゃないですか!」

「そ、それは……。ほら、瑞希はきちんと勉強するから邪魔したら悪いでしょ? その点、アキなら邪魔になってもならなくてもどうせ成績は悪いんだし……」

「美波。僕、微妙に悪口を言われてる気がするんだけど」

安心しろ。お前はちゃんと馬鹿にされてんだよ。

その後はなんか島田が明久の為に作ってきたとか言う弁当の内容を清水が暴露したりして、島田が恥ずかしさのあまり清水を黙らせようと叫んでいた。その中でもさすがにご飯にハートマークは直接的過ぎないか？ と俺は思ったりもしたが。

おっと、そんな話はどうでもよかつたな。それよりもこつちの方が大事だ。

「さて、本日一枚目のイラストはこれだ！ 『妹属性を持つ貧乳女子高生のスクール水着イラスト』！ しかも高解像かつカラーに仕上げてある！」

「……………す、素晴らしい……………!! (ポタポタポタ)」

「そして更に、サービスカットとして今回は制服半脱ぎバージョンもセットでつける！」

しかも値段は通常価格の二割引だぜ！」

「……………迷うまでもない。即購入だ……………っ！（ドバドバドバ）」

「ありがとうナス！」

そしてイラストを渡し、俺は代金を受け取り財布にしまう。ふふ、同志のやつ、鼻血を出しながら嬉しそうにしゃがって……………これだからこの事業はやめられねえなあ！

俺の作品が他の誰かを笑顔にして、尚且つ二次元の良さを分かってもらうことこそがダイゴブックスの経営理念だからな！

とまあ、こんな感じで俺達盛り上がっていると、突然後ろからこんな声が聞こえた。

「——だって、ウチとアキは付き合ってるんだもの」

「畳返しっ!!」

シユカカカカツ

『『——チツ』』

「ん? なんだ?」

「……………?」

島田がそう告げた瞬間、明久が畳を返し、そこに無数のカッターが突き刺さるのが分かった。

おお、あの数と威力はマジで殺す気で投げたようだな。

「お、お姉さま……………? 付き合ってるなんて、冗談、ですよね……………?」  
うちひしがれたように狼狽える清水。そんな彼女に対し、島田は間を置かずに返した。

「冗談なんかじゃないわ。ホントの話」

「そ、それじゃ、美春の幻覚だと思っていた今朝のキスも、本当に……………?」

「……………うん」

ああ、やっぱりキスしてたのか。

「だからね、美春。これからもウチの」

「……男なんか」

「あくまでもお友達として」

「……男なんかが存在するから、お姉さまが……」

「美春、聞いている？」

「男なんかが存在するからお姉さまが惑わされるんですーっ！」

すると、清水が突如弾かれたように動き出した。その矛先は勿論——明久だ。

まあ、別にここで明久が処刑されようと思ったことではないな。それよりもこっちの方が俺にとっては重要だ。

「さて、あれはほっというて続きを再開しようか」

「……………（コクリ）」

「この豚野郎を始末します！　そして美春が第二の吉井明久としてお姉さまと結ばれるのですー！」

「ちよ、ちよつと清水さん!?　かなり錯乱してない!?　僕を始末したところで入れ替わることは難しいと思うけど!?!」

「極力身体に傷をつけないように始末した後、剥いだ皮を被って吉井明久になりすましますー！」

「それ凄くグロいよ！　ちよつと本気で考えていそうだしー！」

「大丈夫です！ 日本昔話で狸さんもそうしていました！」

「しかも原点は意外と可愛い！」

そんな会話と共に、清水と明久による攻めと逃げの攻防が背後で一進一退に繰り広げられている。だがおそらく軍配は清水に上がるだろう。嫉妬に狂った女子つてのは時に思わぬ力を発揮するものだからな。

するとそれを察したのか、明久は教室の隅にいる俺達の所に来た。

「助けてムツツリーニ！ 大悟！ 清水さんを止めて！」

そう囁にもすがる思いで助けを乞う明久。おそらくムツツリーニの素早い動きと俺の高校生離れた腕力なら清水をどうにか出来ると思っているのだろう。まあ、実際出来ると思うが。

そんな明久に対し、俺達は静かにこう言ってやった。

「……………邪魔をするな。裏切り者」

「死ぬなら一人で死んでろこのリア充が」

明久は泣いた。

「くそっ！ イラストを見てるフリをして飛び回る清水さんのスカートを目で追っ

るムツツリーにも薄情な大悟も大っ嫌いだ！」

「……………!! (ブンブン)」

否定しながらも同志の視線はしつかりと清水の下半身を捉えている。異名は伊達じゃないな。

「男なんてこの世からいなくなつてしまえばいいんですつ！ お姉さまに必要なのは美春なんです！」

「待つて清水さん！ キミにだつてお父さんはいるでしょう？ そんな哀しいことを言つちやダメだよ！」

「アレは誰よりも最初に消えるべき男ですつ！」

家族間で何があつたんだろうか。

「えつと……………何かあつたの？」

「……………思い出したくもないです」

声のトーンが一回り低くなる清水。よつぽど嫌な事があつたらしいな。

父親と娘というカップリングは同人界限じゃあまり珍しい組み合わせではないのだから。三次元つて難しいな。

「とにかく豚野郎は消えるべきです！ そして美春はお姉さまと結婚して、生まれてくる娘にお姉さまの『美波』から字を取つて『美来』と名付けるのです！」



「待つんだ清水さん！ 息子が生まれたらどうするんだ！」

「男なんか『波平』で充分です！」

国民的アニメキャラになんて侮蔑的発言を。

「その前にウチと美春じゃ子供は出来ないから！」

そんなことはない。今は人工受精や性転換手術といった方法があるため、女同士でもそれらを用いれば子供は作れるんだぞ？ 全く近頃の医療技術の発達は凄いやな。

だから俺はいつか、女性の見た目が小学生くらいから一切成長しなくなるような素晴らしい技術や薬が開発されることを心より願っています。

「さあ、無駄話は終わりです。五秒差し上げますので神への祈りを済ませてください」  
ゆつくりと清水が明久に迫っていく。これはもう明久も万事休すか？

ガラッ

「さあ、授業を始めるぞ。今日は遠藤先生は別件で外しているので俺がビシビシ——  
ん？ やれやれ……………また清水か……………」

タイミングよく扉が開き、姿を表したのは我らが宿敵、鉄人だ。そして清水を見て溜

め息をつく。

「清水。授業が始まるから自分の教室に戻るように」

「西村先生！ 今日だけは美春を見逃してください！ 特に大事な用があるんです！」

「それはどんな用だ？」

「はいっ！ 今日は『この教室の男子を全て殲滅する』という特に大事な——」

ピシヤン

「今後この教室への立ち入りを禁じる」

出禁宣言と共に、清水は鉄人によって教室の外へ放り出された。

それでもなお抵抗を続ける清水だったが、鉄人の迫力ある注意喚起を受けたことでようやく引き下がった。

『お姉さま……………！ 卓袱台だから豚野郎の近くにいらつというのなら、美春にも考えがありますからね……………！』

そう不穏な言葉を残して、清水は消えた。ふう、これで静かになつたな……………。うん

うん、よかったよかった。さて、俺も授業の用意をしなくちや——

サッ

ガシッ

ん？ なんだ、俺の手首が掴まれたぞ？

「土屋、岡崎。今更隠そうとしてももう遅い。それらは全て没取だ」

「ちくしよおおおーっ!!!」

俺と同志は泣いた。

「……………くそつたれ」

鉄人が淡々と授業を進める中、俺は無性にイラついていた。

それは勿論、あのチンパンジー野郎に俺と同志が苦勞して集めたお宝達を全て没収されたからなんだが、そんな状態の俺の神経を逆撫するかのように、俺の席の近くでは明久と島田がお互いの髪を触り合い楽しそうにしていやがる。

『『……………』』

なんだろう。俺はロリ以外の三次元になど一切興味がないはずなのに、今の明久を見てるとメツチャ腹が立つ。俺がこんなにも不幸な目に遭っているというのに……………そうか。これが俗に言う『リア充爆発しろ』っていう感情なのか。よし、覚えた。

だが、ここで明久や島田に八つ当たりをするのは筋違いというもの。仕方ない、ここは大人しく心の中で中指を立てるだけに留めておこう。

『『『もう我慢ならねえーっ!!』』』

が、他のヤツらは明久達の桃色空間に耐えきれなかったようで、遂に感情を爆発させたかのような怒号をあげた。うるせエ。

『さつきから見たりやあ、これ見よがしにイチャイチャしやがって!』

『殺す。マジ殺す。絶対的に殺す。魂まで殺す』

『……お姉さまの髪に触るなど、八つ裂きにしても尚、許されません……!』

『出入り口を固めろ! ここで確実に殺るぞ!』

そして全員が一気にカッターを構え、投擲の姿勢に入る。だからうるせエって……。

「そうはいくかつ! 僕の畳返しを破れると——」

『全員カッターの投擲終了後、間髪容れずに卓袱台を叩きつけるのですっ! 決してお姉さまに当たらないよう注意するのですよっ!』

『『了解っ!』』

「お姉さま! 早くこちらに——」

「うるせエ!! 静まりやがれてめエらア!!」

『『!?!』』

さすがに色々あってイラついてる中、周りが騒がしくなったことに耐えきれなくなり、俺は大声を出して野郎共を鎮圧する。

「たかが三次元のイチヤイチャごときで一々騒いでんじゃねエよゴミ共!! こっちはムカつくことが重なったおかげでイライラが溜まってんだよこのクソツタレが……!!  
そういうことは今じゃねエ、後でやるんだよオ！」

そう言うと、さつきまでの殺気が嘘のように消え失せ、武器を構えたままではあるものの、皆は大人しくそれぞれの席に戻っていった。

「清水………てめエも俺の苛立ちが噴火しないうちに教室に帰りな」

「岡崎先生！ ですが、美春はお姉さまの為を思つて——」

懲りない清水が俺に反発しようとした時、

「お前ら！ 今は授業中だぞ!!」

とうとう鉄人の一喝が入り、教室内に真の静寂が訪れる。

「清水。二度目の警告だ。おとなしく自分の教室に戻れ。それと、もう一度言うがこの教室への出入りを禁止する。わかつたな？」

「……分かりました」

「お前らも授業中に遊ぶんじゃない。そういうことは休み時間にやれ」

流石に鉄人に二度も念を押されて頭が冷えたのか、そのまま明久を睨み付けながら教室を出ていこうとする清水。

すると、その間にこっそりと俺に耳打ちしてきた。

（岡崎先生。お願いです。美春と協力してあの豚野郎の始末を！）

（あ？ 断る。なんで俺がそんなめんどくさいことをしなきゃなんのだ。第一俺は三次元の色恋沙汰なんぞには興味がない）

（ですが、もしお姉さまと豚野郎がくつつくような事態になってしまえば、とんでもない事態が待ち受けているんです！）

（とんでもない事態だと？ 一体それはなん——）

（………妹の葉月ちゃんにも、豚野郎の魔の手が伸びてしまうかも知れないですよ？）  
!!!?)

俺にそう言い残して、清水は俺の前から立ち去った。

それからは特に何事もなく、鉄人の英語の授業はチャイムと共に終わりを告げた。その後教室から出ていくのを見計らい逃げようとする明久と、それをさせまいと武器を構えるクラスメイト達。そして俺は――

「Go for It!!」

『『OK!! Let's Party!!!』』

――いち早く号令をあげて、明久の逃げ道を塞がせた。勿論そこには清水もいる。

「なっ!! 大悟貴様! 僕を守ってくれたんじゃないのか!?!」

「黙れ。この世全ての富を独占しようとする邪悪め。貴様ごときに愛しの葉月ちゃんは渡さん!!」

「なんでそこで葉月ちゃんが出てくるのさ!?! あの子は関係ないじゃないか!」

「ほざくな虫ケラ! そうやってハーレム系主人公よろしく姫路やら島田やら挙げ句の



果てには葉月ちゃんに至るまで周りの女の子かつさらっていきやがって！ 第一俺はな、二次元三次元どうこうよりもお前が幸せになることだけはハナから気に入らないんだよバーカ！ てことで者共！ ヤツを殺せええええつ！！ ヤツの首を獲った者には後で褒美（エロイラスト）を授けるぞおおおッ！」

『『了解!! くたばりやがれ吉井いーっ!!』』

『死になさいこの豚野郎おーっ!!』

「大悟おおーっ!! この腐れ外道がああーっ!!」

武器を構えた野郎共と清水が敵に向かって突貫。対する明久は勝ち目がないと分かったのか、俺に捨て台詞を吐くと尻尾を巻いて逃げ出した。あーすつきりした。やっぱりリア充が酷い目に遭っているのを見るのはなんとも気分がいいな。これが三次元の感情の一つか。悪くないだろう。

「おい、大悟」

「あん?」

飛び交うカッターや卓袱台を避けつつも清水の怒りのパンチをくらっている明久の無様な姿を見ていると、突然雄二から声をかけられた。

「なんだ雄二？ 今丁度リア充が撲滅される風景を見て楽しんでる最中なんだが」

「それどころじゃねえ。ちよつとこつちへ来い。話がある」

「話だと？」

そう告げる雄二は珍しく神妙な面持ちをしていた。そのままヤツの卓袱台に移動すると、同じく深刻そうな顔をする秀吉とムツツリーニが座っている。

「んで、何のようだ？ やけに真面目な顔してよ」

「ああ。明久のせいで面倒なことになりそうなんだ」

溜め息混じりの雄二の台詞。なんだ、また明久絡みか。強化合宿の時といい、必ずアイツは何かしら関わっていやがるよな。

何事かと俺が問うと、同志が静かに答えた。

「……………Dクラスで試召戦争を始めようとする動きがある」

「なあにそれえ」

うわあ、聞くだけでめんどくさそうなんだが。

「あれか？ その標的が俺達Fクラスとかそんな感じか？」

「その通りだ。そしてその理由だが——」

「あーはいはい。何となく分かるよ。清水だろ?」

「そこまで分かっているなら、説明の必要は無さそうだな」

そりゃあ、わざわざ上位クラスのDクラスが下位クラスである俺達Fクラスを攻めるなんて、今の状況的にそれくらいしか考えられないからな。多分設備のランクを落としたり卓袱台をミカン箱にし、島田と明久を遠ざけるのが目的だろう。

しかも俺達は先日の強化合宿で覗き犯のレットルを張られている。その為クラスを纏める立場である代表の平賀も発言力を無くしている今、清水達Dクラス女子勢を止められるものがないのも厄介になる。

「つたく、ほとほと貧乏くじを引かされるよ俺は。強化合宿じゃババアの汚工裸を見せられてかつ停学。そして今朝は警察に捕まりそうになって、鉄人にはお宝を奪われ、そんで今はDクラスに目の敵にされるんだからな」

「……………苦労が絶えない」

「途中の鉄人の件はお主らの自業自得ではないのかの……………?」

「???」

「いや、なぜそこで『え?俺達なにか悪いことした?』みたいな顔ができるのじゃ

……………」

秀吉もおかしなことをいうな。俺達になにか悪いことをしたのか?

「おいお前ら、話を脱線させるな」

「おっと、すまねえな。Dクラスのことだったか。仮に戦争になったらこつちに勝機はあるのか？」

「厳しいな。うちのクラスの連中は朝からの騒ぎのせいで点数を補充出来ていないし、唯一戦力が残ってる女子生徒はたったの二人。万全の態勢であつても作戦が無ければ太刀打ちできないというのに、点数が残ってるのが姫路と島田だけとなると、よほどのことが無い限り勝ち目はない」

成る程、それはヤバイな。確かDクラスの女子は二十人くらいいたはず。いくらこつちに強靱☆無敵☆最強の姫路がいたとしても多勢に無勢だな。

「ちなみに今のところその対策は？」

「まだない。何せついさつきムツツリーニから入ってきた情報だからな。策を考えるにしても時間がかかる」

「向こうもそれなりに準備の期間を要してくると思うが、それでも厳しいのう」  
「……………時間との勝負」

「オーマイガー」

そのままいつも通り作戦会議に入る俺達。

しばらくすると、クラスメイトと清水によってボコボコにされた明久がこっちに  
加わってきた。その有様を見て俺は心の中でこう思った。

——メシウマ。

第五十六問 エロが好きです。でもエロい年上の先輩はもつと好きです。

——大悟視点

「このクソ野郎!! 君のせいで酷い目にあつたじゃないか!」

「うっせえこのリア充が!! もとはと言えばてめエが公衆の面前でキスなんてしたからだろうがこのカスウ!!」

「なんだとこの性犯罪者予備軍め!! もう今度という今度は許さない!! 今から屋上で決着つけんぞコラア!!」

「上等だ!! もう一度実力の差を思い知らせてやるよクソ雑魚ナメクジが!!」  
「やめんかお主ら! 喧嘩しとる場合ではなからう!」

明久と胸ぐらを掴み合いながら口喧嘩をしているところを相棒に止められた。それにより俺ら二人は渋々と引き下がる。

クソウ。今は相棒に免じて大人しくしておいてやるが……後で覚えておけよ。お前のせいで俺と同志はかけがえの無いお宝達を失う羽目になったんだ。この怨み晴らさ

「ずおくべきか。この問題が解決したらあの殺人兵器をたつぷりと味あわせてやるぜ！  
そう思い、俺は再び話し合いに参加した。」

—— 明久視点。

「ああ、うん。ごめん秀吉。それでどこまで話したっけ？」

「お前らのせいで清水が俺達Fクラスに戦争を仕掛けてくるってところまでだ」

「そうだった！ でも、僕は別にそんなつもりじゃ……」

「じゃが、清水はそうは思っておらん」

「それに言っていたら？ 卓袱台だからなんとかって。おそらく清水はお前と島田の席を離す為にまた設備をミカン箱にするつもりのような」

しかも僕達男子は覗き騒動で停学をくらっていた為に点数が補充できていない。このクラスの大半は男子によって占められているため、今攻め込まれば確実な敗北は免れないのだ。

「さすがに姫路だけじゃあ、この状況を好転はさせられねえよな。言い方は悪いが、島田も数学以外じゃあまり戦力にならんし」

「そうだ。つてなワケで、今回の試召戦争は回避することにする。こつちが勝ったとしてもDクラス程度じゃあまりメリットがないし、折角貸しがあるクラスをわざわざ敵に回すこともないだろう」

「ま、それが妥当だよな」

「え？　回避できるの？」

「ああ。方法は二つある」

すると、雄二はポケットから一枚の紙切れを取り出し僕に手渡してきた。

「見てみる。これは凄いぞ」

「凄い？　一体何を――」

ペラッ（ダイゴブックス限定：船越先生の《自主規制》カラーイラスト）

サツ（一斉に視線を逸らす四人）

ゲボゲボゲボ（口から吐瀉物を出す僕）

地獄を見た。

「おええええええええつ!!!　な、なんて汚ならしいものを見せやがるんだこの野郎つ!!!」

「とまあ、これが一つ目の方法だ。この通り人間に対しての破壊力は絶大。必ず結果が



出ること間違いなしだ」

「なるほど。これを清水に見せつけて戦意を削ぐということじゃな」

「……………一撃必殺」

「そうだろう？ 今までで一番の出来だからな」

「だからって僕を実験台にしないでよ！ しばらく夢に出てきそうじゃないか！ 勿論

悪夢で！」

そう四人……特に実行犯の雄二と作成者の大悟に文句を言う。おのれ、あんな核兵器にも匹敵する代物を容赦なく友達に使うなんて、コイツらには人としての倫理観が存在しないのか。

「だが、これはあくまでも最終手段だ。まだ使わない」

「？ どうしてさ？」

「分からないのか？ これはむやみやたらに乱用するとんでもないことになる。下手したら一生ものの精神的負担を与え、最悪命まで奪いかねない」

「ある意味姫路の手料理よりも殺傷能力が高いと言えるだろう」

遠回しに姫路さんの料理の腕を貶す二人。ここで『それは失礼だよ！』と言い切れな  
いとところがなんとも歯痒いところだ。

「ちなみに、合宿の時に俺が清水を連れていなくなったのを覚えているか？」

「ああ、確か最終日のことだったよね。何をしたの?」

「仕置きとして、清水を拘束した上でこのイラストの拡大版を眼前で見せつけた。勿論気を失わせないように色々配慮もしてな」

「悪魔だ! こゝこゝに悪魔がいるぞ!!」

なんて身の毛もよだつ恐ろしい所業をするのだろうか。一瞬だけしか見てない僕でさえ思わず吐いたのに、あれを長時間視界に入れさせるなんて仕置きを超えて最早処刑に等しい。精神的に死んでもおかしくはないだろう。

なるほど、だからあの時清水さんは泣き叫んでいたのか。そう僕は納得した。

「そういった理由から、こつちではなくもう一つの案を実行しようと思うんだが……それに当たって明久に聞いておきたいことがある」

「ん? なに?」

「島田とお前は付き合っているのか?」

雄二の一言が僕に突き刺さった。

そんな質問をするってことは、もう一つの案には美波が関わっているってことなのかな?」

ちなみに美波は今この場にはいない。姫路さんを連れてどこかへ行ったようだ。

「僕の記憶だと、付き合っていない、と思う……」

「じゃが、島田の態度は明らかに付き合っている者のそれじゃったぞ？」

「うん。それは多分、僕の送った間違いメールが原因で——」

四人に強化合宿で起こった出来事を説明する。

「なるほど。つまり明久の間違いメールから全ては始まったんだな。理解したよ」

「うん。そういうことになっちゃうね……」

うんうんと頷く大悟。

「はっはっは。全く明久はドジだなあ——よし死ぬゴミクス」

グシヤア……………

ヤツの鉄拳が僕の顔面にめり込んだ。

「……………うぶおおおっ!? 僕の顔の骨が砕かれたような音と鈍い痛みがあつ……………」

「てめえふざげんな! つまりお前がそんな馬鹿な間違いしなきゃ、俺と秀吉はあの夜

優子にボコられずに済んだってことじゃねえか!」

のたうち回る僕を大悟がゴミを見るような目で見ている。くそおっ! これ以上ブ

サイクになったらどうしてくれるんだ!

「落ち着け大悟。明久を始末するなら全てが終わってからにしろ」

「おいコラ雄二! なにしれつと罪から逃げようとしてるんだ! そもそもあのメール

を木下さんに送ったのは僕じゃなくて雄二じゃないか!」

「よし、どうやら誤解つてことで良さそうだな」

「無視するなコラ！」

僕には目もくれず話を進める雄二。あの腐れ外道め。いつか必ず痛い目に遭わせてやるからな！

「そしたら後は簡単だ。島田の誤解を解いてお前らをいつもの調子に戻す。そうならば清水も無理に戦争を起こすなんて気はしなくなるだろ」

「ま、もしそれでも懲りずに因縁をつけてこようもんなら……コイツを使わざるを得ないがな（ピラツ）」

流石にそれはやめてあげて欲しい。そう思っていると、突然前の扉がガラガラと開かれた。

「失礼致します」

そんな丁寧な言葉と共に、見慣れない人が教室に入ってきた。どうやら女子生徒のようだ。

「休み時間中に申し訳ありません。二ーFクラスはこちらで合ってますでしょうか？」

その人は制服の上からでも凹凸がハッキリと分かるほど艶っぽい身体のラインに、扇

情的な仕種。美人ではあるもののどこか艶かしい雰囲気醸し出しており、今までに出会ったことのないジャンルの人だ。

「ああそうだ。だがアンタは？」

雄二がそう尋ねる。

「初めまして、二ーFクラスの皆さん。私、三年A組の小暮葵と申します」

そう言って、小暮先輩はスカートの端を摘んでちよこんと礼をした。

いやいや、そういうのって普通は長いスカートでやるもので、そんなに短いスカートでやったら……

『ようこそ小暮様。私Fクラスのナイスガイこと須川亮と申します』

『どうぞこの私、福村幸平を貴女様の犬としてお使い下さい。小暮様』

『いやいや、貴女様のようなお美しいお方にはあんな汚ならしいクズ共より、この私横溝浩二が相応しいかと思えます』

ほら、皆が錯乱しちゃったじゃないか。

「おいお前ら、とりあえず一旦下がれ。センパイが困惑してるだろうが」

『『『黙れ坂本!! 俺達や小暮先輩と話をしてんじやボケエ!!』』』

ホント、ここまでくると清々しい程のクスっぶりだ。

「ごめんなさい皆さん。私はとある方に用事があつてここに来ましたので」

そんなクラスの皆の様子など意にも介せず、小暮先輩は僕たちのいるところまでやつてくると、

「ご無沙汰ですな、岡崎君。こうして対面するのは清涼祭以来でしょうか」

そう大悟に話しかけた。え? この人大悟の知り合いなの?

「小暮先輩か。わざわざこんな辺境の地まで来るとは、どういった風の吹き回しっすか?」

「はい。少し岡崎君にお話がありました……お時間は宜しいですか?」

「話? 別に構いませんが……ここじゃダメなんすか?」

「そうですわね。出来ることなら——二人きりで♪」

「卓袱台返しっ!」

シユタタタタンツ!!

『『『チツ………!!』』』

四方八方から飛んできたカッターやハサミを、大悟はあっさりと卓袱台でガードし

た。そして聞こえる憎悪の込められた舌打ちの数々。

「分かった。だが今は見ての通り立て込んでいますね。あんまり長話は勘弁して貰いてえんですが」

「それは心配要りませんわ。それにこの後は私も授業がありますので」

「ならいいんですけど……ていうか——」

大悟が小暮先輩の下半身に目を向ける。そこには当然小暮先輩のスラリとした美脚があるだけなのだが……？

「——アンタ、前みたいの下着が見えないんだが、ちゃんと穿いてるよな？」

「ブふっ！」

思わず口から何かが出てしまった。

「だ、大悟！ 君は一体何とんでもないことを訊いているんだ!? 女性に対して失礼じゃないか!」

「それが、今日は朝が忙しくてうっかり下着を穿くの忘れてしまいましたの」

「いやそつちもなんで普通に答えているんですか!? しかもホントに穿いてないの!」

「大変じゃ!! ムツツリーニが出血多量でショック状態に陥っておる!」

ば、バカな!? 下着を穿いてないなんていくら女性でも法律的にアウトだ! いや、まさか三年生ともなればそれくらいは普通のことなのか!? もしそうだとしたらなんてけしから——羨ましいんだ!!

「……あら、貴女は確か観察処分者の」

「あ、どうも。吉井明久です」

突然小暮先輩が僕の方に視線を向けた。そしてニコツと微笑む。

「ふふつ。やはりそうでしたか。岡崎君から貴方のことはかねがね訊いておりましたの」

「え? そうなんですか?」

「はい。彼曰く『猿と互角に渡り合える程のバカ』だと」

あのロリコン後で絶対シバいてやる。それはさておき、

「小暮先輩。まさか本当に下着を穿いていないんですか?」

「あら。お疑いになられるのですね。でしたら自分で見て確かめて見ますか? (ピラッ)」

「まずいのじゃ! 血圧と脈拍数がどんどん低下してきておる!」

そんな魅惑的な台詞を発してスカートを少し捲り上げる小暮先輩。



やれやれ、こんな美人な女性にそんなことを言われたら、男としてすごすご引き下がる訳にはいかないじゃないか。

「ふっ。でしたら小暮先輩。喜んでその内側を拝借させてもらいたいあれ？　なんだか両手の手首が物凄い力でねじ切られるような鋭い痛みがあああああっ!!」

「クラスが騒がしいのが見えて何事かと思えば……覚悟は出来てるわね？　アキ」

「明久君？　もう一度オシオキが必要なようですね？」

寒気がするほど低い二つの声。

振り向くと、般若のような形相をした美波と恐ろしい笑みを浮かべた姫路さんがいた。どうやら帰ってきていたようだ。

僕の両手首が酷いことになっているのは見なかったことにしよう。

「ふっ。冗談ですわ。少しからかってしまっただけですの」

「な、なんだ冗談ですか。危うく本気にするところで」

「多分。紐みたいな下着だから見えなかったんだと思いますの」

「誰か！　一刻も早く救急車を呼ぶのじゃ!!　このままではムツツリーニが死んでしまおう！」

「………なあ小暮先輩。俺から振つといてなんだがそろそろいいか？」

これ以上は收拾がつかなくなると判断したのか、大悟が小暮先輩を止める。

「あら。ごめんなさい岡崎君。少しお遊びがすぎてしまったようですわね」

「話があるんだろ？ さっさとしてくれると助かるんだが」

「わかりました。それでは行きましようか」

今度は軽いお辞儀だけで済ませる先輩。

「それでは二年生の皆様。ごきげんよう」

そのまま大悟を連れて教室から去っていった。

ううむ、なんとも妖艶的な人だった。もしかすると、三年生にはあんな先輩がいつば  
いいるのだろうか？ だとしたら男としてはなんとも喜ばしい限りだ。

——でも、なんであの先輩と大悟が知り合いなんだろうか？

「んで先輩。俺に話ってなんすか？」

「はい。内容としては二つほど、岡崎君に伝えたいことがありますの」

小暮先輩は俺を空き教室へと連れて行き、誰もいないのを確認してからそう話を始める。

ううむ。誰もいない空き教室にてエロい先輩と二人きりか……中々男心をそそるシチュエーションじゃないか。けど俺としては、相手が更に二次元の女の子であったのなら完璧だったんだがなあ。

「なんすか？」

「はい。まずは強化合宿の件でお話を」

「強化合宿ですか？ てことはもしか——」

「もちろん、覗き騒動のことですわ」

俺にそうピシヤリと言いつける小暮先輩。ああ、やっぱり知ってたんすねえ……。

ま、一学年の全男子が停学をくらう事態にまで及んだんだ。そんな衝撃的なニュースなら他学年の人に知られていてもなんらおかしくはないか。

「最初この情報を聞いた時は思わず耳を疑ってしまいました……なんでもこれを先導したのは岡崎君達Fクラスの生徒なのでしょう？」

「いやあ、自分でもバカなことしたなあって思いますよ。けど、これもダチの名誉と俺の未来を守るためつすからねー。後悔はしても間違ったことをしたつもりはないっすよ」  
「ふふっ。さすがは奇想天外クラスといわれるだけありますわね。ちなみに結果はどうでしたの?」

「聞かないでください」

苦勞して勝ち取った栄光が、クソババアの汚ねえ全裸姿なんて言える訳がないだろう。

おえ……思い出したらまた吐きそうだ。

「……んで、それがどうしたんですか」

「はい。そのことなんです……小山優香さんという生徒をご存知ですよね?」

「小山? ああ……あのヒスメリック女ですか。でもなんで先輩がアイツのことを?」

「あら、ご存知なかったのですか? あの子は私の部活の後輩……つまり茶道部に所属しておりますのよ?」

「え!? マジですか!」

嘘だろ! あの人を見下すしか脳のないプライドの塊みたいな短気女が、その真逆ともいえる紳士淑女が集まることで有名なあの茶道部だとお!?

なにかの間違いだろう!? イメージが全く湧かんぞ!

「ふふふ。信じられないといったお顔をしていますね。ですが彼女はかなりデキル子ですよ? 作法や礼儀もしっかりとしておりますし」

「小暮先輩。すぐ精神病院か脳外科へ行きましょう。今ならまだ間に合います」  
「別に気がおかしくなつてはいませんわよ?」

ヤツを褒めるなんておかしい!

きつと彼女はあのヒステリー女によつて洗脳されてしまったに違いない。おのれ小山め! そうやつて無実の人間を巻き込むなんて、お前は本物の外道だ!

「まあそれはさておき、小山がなにを?」

「実は、彼女から今回の騒動のことを聞かせて頂きました。そしたら——岡崎君と……坂本君でしたか。その二人を嵌めようとしていたと」

「!」

小暮先輩からの衝撃的のカミングアウトに俺はピクリと眉を吊り上げる。

……が、俺は驚く態度は見せずに平静を保ち、言葉を返した。

「ふむ。やつぱりそうでしたか」

「おや、ご存知だったのですか?」

「ええ。つつても俺が気づいたわけじゃなく、他人からの証言ですがね」

勿論その他人というのは覗き騒動の真犯人である清水だ。俺は最終日にヤツをお仕置きを兼ねて尋問し、事の顛末を全て吐かせたからな。そしてたら明久の盗撮は時分がやったことだが俺と雄二の台詞を録音したのは違う。そしてその音源は小山から渡されたものであり、それを最も欲しがるであろう霧島と優子に売り付けて欲しいと頼まれたと白状した。清水は俺と雄二の件にはただブローカーとして動いていただけ、そして計画犯の小山は殆ど見ているのみで、霧島と優子には接触しない。そうすれば仮に自分達の動向を調べられたとしてもなんら問題はない。つまり同志が『明久と俺達の件は同一人物の犯行』ということ勘違いしてたことになる。なんとも用意周到なヤツだ。

「ま、なんで小山がわざわざそんな真似をしたのかは知らねえが……あの執念深い野郎のことだ。大方俺に対する個人的な仕返しのためりだったんだろうな。雄二のヤツは……そのついでかFクラス全体への同じく仕返しかな」

「確かにそんなことを言っていました。ですがなぜ小山さんは岡崎君にそこまで……」  
「まあ、一年の頃にちよつとした揉め事があります……それ以来敵視されています」

「そうでしたか……」

そう呟き、少し顔を俯かせる小暮先輩。

俺もその後は特に何も言わず、互いに沈黙する時間が出来た。

「……………申し訳ございませんでした！」

「は？」

すると、突然小暮先輩が深々と俺に頭を下げた。

「ちよ、いきなりなにしてんすか、小暮先輩」

「今回の覗き騒動の件。小山さんが全ての引き金を引いたことは理解しました。そしてそれによって岡崎君を初めとする二学年男子全員に迷惑をかけてしまいました。後輩の不祥事は先輩である私にも責任があるのです」

「……………」

そう申し訳なきように謝罪する小暮先輩。おそらく自分が面倒を見ている後輩がそのような真似をしたことに対して、強い罪悪感を感じているのだろうか。なにせ年下の俺に対してここまですているのだ。いくら自分達側に非があるのを理解してるにしても、こんな年下の後輩にわざわざ頭を下げるなどという威厳もクソもかなぐり捨てた行為が出来るだろうか。

全く……………そんなもんを見せられちまったら、俺が取るべき対応なんて一つしかないだろう。

「……………頭あげましょうや。小暮先輩」

「ですが……………」

「アンタがちゃんと筋を通す人間だつてのは分かった。だからいつまでもそうしてなくていいつすから」

そう言うのと、渋々と小暮先輩は頭を上げた。

「怒つてはいないのですか？」

「怒る？　小暮先輩に？　バカなこと言わねえでくださいよ。どうして俺が小暮先輩に怒らにやならんのですか。そんな理由がねえでしょうに」

「え？　しかし私は——」

「小暮先輩」

俺は小暮先輩の言葉をこっちの言葉で遮った。そしてそのまま俺は続ける。

「確かに俺達は散々な目にあつたが、今更それを騒ぎ立てても仕方がねえでしょう。んなのは往生際が悪すぎるからな。それにいくら小山の直接の先輩だからって、無関係のアンタを攻めるのはお門違いだ。それにもうこっちは小山本人に罰を与えてあるから謝罪は必要ない」

「岡崎君……………」

「ま、つまりもう全部丸く収まつたつてことですよ。それをまたわざわざ掘り返すことは止めて欲しいんですがね……………Aクラスのアンタなら分かるだろう」



「……………」

俺がそう諭すように告げる。

ま、これで小暮先輩が納得してくれるかは分からんが、少なくともこつちにはもう怒りの感情も復讐心もない。だからこれ以上謝られても逆に困るだけなんだよな……。すると、小暮先輩は唇に手を当てクスクスと笑い始めた。

「? なぜ笑う?」

「……ふふつ。なんと器の大きなお方でしょうか。停学沙汰にまでなった程の大事なのに、それを終わったことと割りきれるなんて……流石は文月学園の『兄貴』と呼ばれているだけありますね」

「え? その異名って全学年共通なんすか」

「ええ。特に半年前の男女コスプレコンテストの開催者としてかなり有名ですわ」

「ああ、あの時の」

そういやそんなことあったなあ。確か優勝は男女秀吉部門共に秀吉が優勝だったか。その後は鉄人に完膚なきまで指導を受けたっけ。懐かしい思い出だ。

「ま、そんな訳で小暮先輩が気にする必要はねえってことで」

「分かりました。それならそのお言葉に甘えさせて頂きましょうか」  
話が纏まったようで何よりだ。

さて、それじゃ次にいこう次。

「はい。そんじゃ一つめの話は終わりつてことで。んで二つ目はなんですか?」

「そうですね。もう時間も少なくなつてきてしまったことですし、簡潔に言いますわ――

――  
「???

すると、小暮先輩は俺にグイッと身体を密着させ、言った。

「岡崎君……私は、貴方に興味がありますの」

—— 閑話休題

「たでーまー」

『『来たな異端者め。今度こそ貴様の命を——』』』』

「そんなお前らに報告だ。ダイゴブックスの三次元ラインナップに新しく小暮先輩を追加することにした」

『『一生ついていきます兄貴!!』』』

教室に戻ってくるなりクラスの中に囲まれたため、俺はさつき彼女と交わした契約内容を告げて大人しくさせた。

「ん？ 明久達はどこへ行ったんだ？」

「ああ、あいつらなら屋上に行ったぞ。確か姫路さんと島田も一緒だったはずだ」

屋上か。それなら多分島田の誤解を解くために場所を変えたんだろうな。ここじゃうるさい連中がいるから。

うーむ。今行ってもしょうがないし、俺はここで待つてるか。そう決めて自分の席に

戻ろうとすると、

『どうしてくれるのよー?!? ウチのファーストキスーっ?!?』  
『ごごごごめんなさいっ! 僕も悪気はなかったんですーっ!』

上からそんなやり取りが聞こえた。明久、ガンバ（笑）。

## 第五十七問 今日も今日とて作戦会議

——大悟視点。

小暮先輩との話を終えてFクラスに戻り、その後明久達とも合流してしばらくたった昼休み。

「瑞希。お昼にしない？」

「あ、はい。美波ちゃん」

そう言つて立ち上がる美波と姫路に、スツと明久が近づいて声をかけた。

「あ、美波」

「何よアキ。ウチになんか用？」

「えつとさ、今朝言つてたお弁当なんだけど……」

「なあに、アキ？ ウチにあそこまで恥をかかせておいて、まさかお弁当をたかろうつて

言うのカシラ？」

「ごめんなさい。心の底からごめんなさい」

そう言って土下座する明久をよそに、島田は大変ご立腹な様子そのまま姫路を連れて去っていった。

その背中を見て沈んだ表情になる明久。それを見た俺はやれやれと立ち上がり、ヤツの肩にPONと手を置いて言った。

「怒られてやんの（笑）」

「喧嘩なら買うぞコラ!!」

怒って俺に飛び掛からんとする勢いでくらいついてきた。お前みたいなりア充してたヤツを俺が優しく慰めると思ったら大間違いだ馬鹿め。

「なんだ明久。島田が作った弁当は貰えなかったのか」

そんな声と共に、自分の弁当を持った雄二と秀吉が俺達のところへやって来た。

ん？ 同志の姿が見えないな。

「うん。美波のご機嫌が斜めで貰えなかった。凄く期待してたのに……」

「残念だな明久。だが、まさか島田があそこまで怒るとは思わなかったぜ。よつぽど明久の勘違いメールが気に入くないみたいだな」

秀吉から話を聞いたところ、明久が正直に島田に真実を打ち明けたところ、予想通り

メチャクチャ怒ってたらしい。まあ勘違いとはいえ接吻までしちゃった後でのカミン  
グアウトだからな。ああなるのも無理はない。

「まあ、この状況で手作り弁当など渡したら、また清水が乗り込んでくるかもしれないから  
な。諦めることじゃ」

「それはそうなんだけどね……」

「ざまーみるバーカ（笑）」

「殺し合いをご所望なら上等だ!! そこに直れカス野郎!」

「やめるのじゃ明久! トンカチで大悟の頭をカチ割ろうとするでない!」

明久を秀吉が慌てて羽交い締めにして止める。いやあ愉快愉快。やはり傷心中の元  
リア充を弄るのはとても楽しいな。

ガラッ

「……………ただいま」

そんな中、扉を開けて同志が教室に帰ってきた。どこかへ行っていたのだろうか。

「どうしたのムツツリーニ? また何かあったの?」

「……………（コクリ）」

「さっき言っていた情報とやらかの?」

「……………今朝よりも更によくない状況になってきている」

そう告げて、同志は卓袱台の上にお得意の小型録音機を置き、再生ボタンを押した。

P i

『あ、あのつ、土屋君つ。岡崎君つ。明久君のセーラー服の写真とイラストを持っていてるって噂は本当ですか?』

『情報が早いな。さすがだ。だが——（パチン）』

『……………一枚100円。二次配布は禁止』

『こっちはモノクロで200円。カラーと台詞付きなら300円だ。こっちも二次配布や無断転載は禁ずる』

『二次配布は禁止ですか……。残念です……。でも、私個人で楽しむだけでも十分に』

P i

「……………ファイルを間違えた」

「ねえ何!? 今の会話は何!? 僕にとっては今の会話こそが十二分に良くない情報なん



「だけどー！」

「安心しろ。これはひ——お得意様とのやり取りだ。特に珍しくもない」

「そうだぞ明久。こんなつまらんことでガタガタ喚くな」

「認めない！ 僕は自らの女装写真が売買されることが日常の一コマだなんて絶対に認めないっ！！」

そう喚く明久。

だが残念だったな。お前の女装写真は多くの顧客にかなり需要があるんだ。そう簡単に稼ぎ所を手放してたまるかってんだ。H A H A H A。

「……………こつちが本物」

P i

『うーし、そんじゃあ『雄二×翔子 く獣と化した幼馴染みく オリジナルドラマCD』の収録はじめっぞ！ 次の場面は雄二と霧島がベッドの上でお互いに絶頂を迎える寸前のシーンだ。二人とも準備はいいか？』

『……………うん。頑張る』

『やれやれ、気は乗らぬが演技となれば手は抜けんもう……仕方ない』

『同志。マイクや音声機材の調子はどうだ？』

『……問題なし。いつでもいける』

『よし、じゃあ本番5秒前！ 4！ 3！ 2！ 1……っ！』

カチツ

『……ああっ♡ あっ、はっ♡ ゆ、雄二つ……そんなに激しくされたら……私……

ひゃああんっ♡♡』

『くっ……！！ 凄いぞ翔子……！！ お前の中、すげえヌルヌルで締まりやがる。気持

ちいいぞ……！』

『わ、私も……とても気持ちいい……っ♡♡♡』

『くっ、はあっ、だ、駄目だ……！！ もう我慢が出来ねえ……出すぞ翔子！』

『うん……来て♡ 私のナカに……雄二の熱くて濃厚なせ』

P i

「……………おかしい。また間違えた」

「おいおい同志。まだこれ完成前なんだからあまりむやみやたらに流しちゃあかんぜ」  
「……………すまない」

「ちよつと待て!!! なんだ今の身の毛もよだつような会話の内容は!? 俺の知らないところだなやってやがんだテメエら!!」

「あん? 別にただの収録だが?」

「……………どこにも変なところなんてない」

「むしろ変なところしかねえんだよバカ野郎共!!! しかも秀吉! なんでよりもよつてお前まで参加してるんだ!」

「いやあ……………大悟に『お前のその演技力が必要なんだ!』と迫られての……………断るわけにもいかずつい」

「うるさいな雄二。つまらないことで一々騒がないでよ」

「そうだ。それに霧島にもちゃんと許可は取つてある。なら文句はないだろう」  
「……………契約の下に行っているから合法」

「一番大事な俺の意見が入ってねえだろうが!! くそっ! 最近翔子が珍しく帰り道についてこないと思つたらこんなことしてやがったのか……………! ならその音声ファイルをよこしやがれ!」

「ええい黙れ雄二! これを見て大人しくしてろ!!」

そう言うのと、明久は先程使った例の船越女史のイラストを雄二にバツと広げて見せた。

「おええええええええつ!!!」

雄二は白目を向いて吐いた。そして気絶した。

—— 閑話休題

「ああクソ、吐き気と頭痛が止まらねえ……………」

「しつかりしろ雄二。お前がそんなんじや話が進まねえぞ」

「誰のせいだこの野郎！」

気絶した雄二を蹴り飛ばして無理矢理起こし、俺達は再び話し合いに戻る。

「……………今度こそ本物」

ポケットからまた別の盗聴機を取り出した同志。そして再生ボタンを押す。

P i

『Fクラスの様子はどうか？』

『何かまたバカなことをやっていたようで午前中は点数補充もやっていないみたいだ。あの様子だと、こっちの意図に気付くこともないだろうな』

『そうか。それならいい。当面は俺達も点数補充をして、向こうにこちらの動きが気取られたら即座に宣戦布告を行おう』

『了解』

P i

い。ここで音声は終了。しかし音質が悪くノイズがかかっており、誰の声かが分からない。

「おい同志。これはなんだ？ Dクラスのヤツらか？」

「……………（フルフル）」

首を横に振って否定の返事をする同志。じゃあ一体誰の会話だろうか。

「……………これはBクラスの会話」

「Bクラス!? どうして!？」

「今の会話じゃと、BクラスはワシらFクラスに試召戦争を仕掛けようとしておるようじゃな」

「てことは根本の野郎か。あのゲス野郎め、随分と姑息な手を考えてくれたもんだ」  
雄二が苛立たしげに舌打ちをした。

根本か……………アイツが絡んでいるということはおそらく俺達への仕返しが目적だろうな。全く、あそこまで辱しめを与えたのにまだ懲りないとは。ひよつとしてDMなのかアイツ？

「だが、根本の目的は多分仕返しだけじゃない」

「え？ 違うの？」

「それなら他の目的は一体なんなのじゃ？」

「恐らくだが……………自分への非難を抑えることだな」

非難？ それが俺達に戦争を仕掛けることとどう繋がるんだろうか。

「根本は元々人望が皆無だったが、四月の戦争で卑怯な手を使ったのにも関わらず俺達に勝てなかったことで更にクラスの途中での地位は厳しいものになった。更に先週の覗き騒ぎの件もある。今や根本はBクラス内で居場所なんかないだろう」

「そりやそうだ。だがそれがなんだというんだ？」

「そこで質問だ。国情の不安が顕著になった場合、為政者はどういった対応をすると、手っ取り早く大衆の不满を抑えられると思う？」

「??？」

急に雄二が変な事を言い出した。

何を言っているのか分からず、明久と一緒に首をかしげる。

「二人とも理解出来ておらぬようじゃぞ、雄二よ」

「やれやれ……、つまり簡単に言うのだな『大衆の不满を抑えるにはどういった行動が適切か』ということだ」

ふむふむ。なるほど、そういうことだったのか。

つまりどうやって国民を黙らせればいいのかってことだろ？ それなら答えは簡単じゃないか。

「香水をつける」

「全員始末する」

「このバカどもが」

「恐ろしいほど奇抜と猟奇的な発想じやの」

「……………度肝を抜かれた」

「え？ 何かおかしかつた（か）？」

明久のよくわからん珍回答はともかく、俺のは別に変じやないと思うんだが。 雷帝  
“と呼ばれたロシア帝国の皇帝イヴァン4世やローマ帝国の暴君ネロ・クラウディウス  
だつてそうやって国を動かしていたんだぞ？

と心の中で呟いていると、雄二がハアと溜息を一つつき、口を開いた。

「全く……………いいか？ その答えは『外部に共通の敵を作ること』だ。同じ敵を持つ人間と  
いうものは若干の不和があつたところで結束し易いからな」

「そんじや、根本の狙いつてのは…………」

「自分へ向けられた怒りや不満を俺達に肩代わりさせて、自らの恨みも晴らす。あわよ  
くばFクラスを完全に打倒することで発言力も取り戻したい。そんなところだろうな」

雄二が分かりやすく説明してくれたおかげで、ようやく根本が戦争を仕掛けようとし



てくる動機が理解できた。要は『覗き騒ぎの主犯を肅清した』という大義名分があれば発言力のない自分でもクラスを動かすのは可能になるってことか。

なんつーか、マジでねちっこいやり方しかしてこないな。根本は。

「しかし、そうなるうちよつとやそつとの理由では戦争は回避できんじやろうな。いつもならまだしも、今のワシらは点数補充ができておらん」

「その通りだ。この状況じゃDクラスならともかく、Bクラスから勝ちをもぎ取るなんて不可能だ」

「んじやどうするってんだよ?」

さつき同志が言っていたように、状況は今朝よりも酷くなっていやがる。オマケにBクラスはおよそ半数が女子であり、残った半数の男子も朝から点数補充を行っている。

殆どが男のクラスである俺らが今更点数補充をしたところで間に合わんだらう。

「ならどうすんだ? なんの策もなしに勝てるほどBクラスは弱くねえぞ?」

「大悟の言う通りだよ。一体どうするつもりなのさ?」

俺と明久が問い詰めると、雄二は腕を組みながら言った。

「まずは時間を稼ぐんだ。Bクラスに宣戦布告されるまでの時間をな」

「時間稼ぎだと?」

一体それになんの意味があるんだ、と雄二に連続で問う。

「いいか？ Bクラスに宣戦布告されたら、俺達は戦うしかなくなる。だが、今はまだ宣戦布告を受けていない。つまり、まだ戦争を回避できる可能性があるってことだ」

「でも、根本君には戦争をする理由がたくさんあるんだよ？ とてもやめてくれそうにないよ」

「ああ。だから発想を変えて、逆にBクラスが戦争を出来ない状況を作るんだ。大悟、試召戦争の大原則は分かるか？」

大原則？ そうだな……。

「一クラス同士のタイマン勝負ってところか？」

「大正解だ。つまりそれにのっとって俺達が他のクラスと戦っていれば、Bクラスはルール上、その間は手が出せなくなるってことだ」

「なるほど。その間はBクラスから宣戦布告をされずに済むし、戦争後は点数補充をすることができるといふことじゃな」

「その通りだ」

確か試召戦争のルールとして、一つの戦争が終わった後には点数補充をするというものがあつた。これは連戦になつた際の公平を保つ為であり、また下剋上の泥沼化を防ぐ

役割がある。なので勝利したクラスは消耗した点数を回復する期間が与えられるのだ。

もしこれが無かつたらどんなに強いクラスでも容易くやられてしまうからな。

「そうすれば、Bクラスも簡単には攻めてこないってことか」

「ああ。現に向こうは一度痛い目を見てるからな。姫路、大悟、ムッツリーニ。そして前回壁を破壊するという想定外の行動に出た明久……そんなヤツらが万全の状態になつたと知れば、よほどのことがない限りはおとなしくするはずだ」

「じゃが、その肝心な相手はどうするのじゃ？」

それが一番の問題だ。

俺達は四月にAクラスに戦争を仕掛け、結果負けている。試召戦争のルールでは負けたクラスは三ヶ月間宣戦布告が出来ないことになっている。

そのためBクラスとの戦争を避けるためには他のクラスに攻め込んでもらうしか方法はないのだ。

「勿論相手はDクラスだ。ヤツらに宣戦布告をさせて、その戦争をやり過ぎして点数補充を済ませる。Dクラス程度なら勝つとまではいかなくても負けない程度の戦いが出る。幸いにもアイツらは開戦派と非開戦派の論争で点数補充を終えていないからな」

「ふむ。それなら敵はDクラスの半数の女子か。Bクラスと戦うよりはマシだな」

本当ならどつちとも戦いたくねえが。背に腹は変えられない。

「あれ？ でもさっきの話だと、やっぱり戦争はするんだよね？ だったらなんで午後も点数補充に使わないの？」

「お前の耳は飾り物か？ さっきのムツツリーニの情報を思い出せ」

「情報？ うーんとね——」

さっきの情報というと、根本達が話していた会話だろうか。確か動きを気取られたらどうか——

「ムツツリーニ！ 大悟！ 僕の写真とイラストが安すぎるよ！ 秀吉はそれぞれ500円なのに！」

——いやそつちかよ。

「ほほう。500円か……。三人とも、それらについて少々話を聞かせてはもらえんかの？」

「……………((サツ))」

「ええい！ そうやって顔を背けるでないわー!! 大悟このおおーつ！」

「いででで！ わがっだ！ わがっだがら頬をづねるなあ!!」

「お前ら全然危機感抱いてないだろ？」

膨れっ面になつた秀吉が俺の頬を摘んで引つ張る。やめろ、お前がそれをやっても可愛いだだけだ。

「さっきの情報で根本は『こちらの動きを気取られたら即座に宣戦布告を行う』つて行つてただろう?」

「ああ、そつちね。うん。確かに言つていた」

「つまり向こうは俺たちに気づかれるまで点数補充を続けるつもりだ。これは逆に言えば、俺達の動きが勘づかれなければ何もしてこないことになる」

「ふむ。なら明日までは猶予がありそうじゃな」

あれ? なんで明日なんだ? と思つたが、確か今朝鉄人が『試験召喚システムのメンテナンスが遅れている』と言つていたのを思い出した。

それならBクラスが今日中にいきなり仕掛けてくるようなことはないか。

「それじゃ、僕らはこれからどうするんだい?」

明久がそう問いかけると、雄二は任せろ、といった余裕綽々の表情で言つた。

「Dクラスからの宣戦布告を受ける為に工作をする。期限は今日中までだが、なんとか上手くやってみせるさ」

「具体的な案はあるのか?」

「簡単だ。今朝の一件を利用する」

今朝の一件というところ……島田が明久がイチャイチャして清水がぶちギレたやつか。

なるほど、また明久と島田を恋人同士に見せつけ、清水の嫉妬心を増幅させて宣戦布告に持ち込むつもりだな。相変わらず悪いヤツよのお……。

「でことで明久。お前には島田との恋人役を演じてもらう」

「えええっ!? そんなの無理だよ! 美波はあの話で思いつきりへソ曲げちゃってるんだよ!」

「それでもなんとかするんだ。演技に関しては秀吉。台本に関しては大悟に任せる」

え? 俺が書くのか? 明久と島田のイチャイチャ展開シナリオを? めんどくせえ。

「了解じゃ。大悟もオツケーじゃろ?」

「ええ………しやあねえな」

秀吉に念を押され、俺はしぶしぶとそれを引き受けた。

「ムツツリーニは情報収集及び操作。俺は作戦が成功した時の為に対Dクラス戦の用意を始める」

「……………わかった」

「よし、そうと決まれば早速行動開始だ。頼んだぞお前ら」

「おうし」

そして俺達はとつと飯を食い終え、それぞれの任務に移った。

やれやれ、正直気は進まないがやるとしますかね。えーと、まずどんなシチュエーションにするかを決めるか。そして次はそれっぽい台詞を考えて――

――しばらくして。

「――うし。こんなもんだろ」

なんとか短時間で詰め込めるくらいの内容が出来上がる。所要時間はおおよそ五分。内容的にはまだまだ手を加えたいところがあるが、時間もないからな。

「おい明久。出来たぞー」

そう言つて明久に原稿を見せに行こうとすると、

「絶対にイヤ」

歸つてきていた島田が腕を組みフンツと顔を背けていた。予想通りご機嫌斜めのようだ。

その前には困り気味の表情をした明久と秀吉、そして雄二がいる。

「ウチはなんと言われようとイヤ。こんなバカと恋人同士だなんて、冗談じゃないわ」

「そこをなんとか協力して欲しいのじゃ」

「み、美波ちゃん……」

どうやら交渉は上手くいっていないようだ。

やれやれ仕方ない。ここは俺が一発ガツンと言つてやりますか。

「島田。おめえまだ今朝のこと気にしてんのか？」

「！ 岡崎……当たり前じゃない。なに？ まさか器の小さい野郎だなどでも言いたいのかしらっ？」



そう半眼で俺を睨み付ける島田。

「そうじゃない。確かに明久はお前に大きな勘違いをさせた。その気持ちは察する。だが、それは今のこれとは別の話だ。それにムカつくんなら全てが終わってからいくらでも明久をボコるなり処刑するなりすればいいだけだろう?」

「まあ、確かに後でアキを拷も——折檻することは決定済みなんだけど」  
すると後ろでバカが騒ぎ始めた。だが無視だ。

「これはお前にしか出来ない役目だからこうして相棒達が頼んでいるんだぞ? それなのにお前はムカつくからやだなんていう一時の感情で無下にするつもりか?」

「それは……」

「相棒の言う通りじゃ。静観を決め込むなぞすれば必ず悔やむ時がくる。例えば——  
姫路が転校してしまう、なんてことになった時、お主は自分を責めずにいられるかの?」  
「うっ……」

もしこの話し合いに島田が応じなければ清水を焚き付けてDクラスに宣戦布告をさせることが出来ない。そうなればやがて補充試験を終えたBクラスに攻め込まれ、確実に負ける。

そしたら俺達の設備はまたミカン箱に逆戻りだ。そしたら再び姫路の転校話がぶり返される可能性がある。それは俺達だけでなく、姫路や島田もわかっている筈だ。

「あ、なら美波がイヤなら僕以外の誰かがやればいいんじゃないかな？」

島田が悩んでいると、唐突に明久がそんなことを言い出した。

「え？ それって他の誰かが美波ちゃんの恋人役になるってことですよ？ でも誰がやるんですか？」

「誰って、そうだな……じゃあ雄二とか」

「ほほう。お前は俺に死ねと言うのか」

「なら大悟とか」

PON

「明久……お前は忘れたのか？ そんなバカな真似をしたら最後、俺の身に一体何が起るのか……」

「……………ごめん」

「……………分かってくれたか」

論すように明久に告げる。

不意にどこからか殺気のようなものを感じたが気のせいだ。うん、気のせい。

「それじゃ、ムッツリーニは？」

「……………盗聴器の操作がある」

「この三人がダメとなると……………他は須川君とかかなあ?」

「明久よ。ワシの名前が出てこなかったのじゃが、他意はないのじやろう?」

秀吉じゃ無理だ。したらただのガールズラブもしくは男の娘×女の子という新たな花園が拓かれることになっちまうだろうからな。

「というか無理だろ。いつも通りならまだしも、お前と島田がキスしてるところを見られてる以上、今更他のヤツらと付き合ってるなんて嘘に引つ掛かるワケがない」

「それか島田は誰にでも腰を振るヤリマンビ〇チと思われるかもな」

「それだけは嫌!!」

「だろう? ならお前に残された道は一つだ」

そう俺が言うのと、急に姫路が明久と島田に頭を下げた。

「あの、美波ちゃん。気が乗らないかもしれませんが、お願いしますつ。凄く個人的な理由で申し訳ないんですけど、私やっぱり転校なんてしたくないです」

おおつと、ここでトドメの一発が入った。

もしこれで断るようなら島田。お前は最早人としての良心の欠落を疑がわざるを得

ないぞ？

「う……。わ、わかつたわよ！ とりあえず形だけでもやればいいんでしょ！ けど演技の内容次第じゃ、どうするかは知らないからね！」

「美波ちゃん……。ありがとうございますっ」

島田の返事を聞いて、姫路がもう一度頭を深く下げた。

これで第一段階はクリア。あとはコイツらの技量次第だな。

——明久視点。

「よし、そうと決まれば早速演技開始じゃな。大悟よ。台本は出来ておるかの？」  
「お、ようやくだな。この通りバッチリだ」

大悟がそれぞれ一部ずつホチキスで止められた冊子のようなものを渡してきた。

「台本？ もう書き終えたの？ いつの間に？」

「俺を誰だとおもってる？ こんな簡単なもんすぐ出来る」

それにしたって早すぎる。作戦会議を終えてから姫路さん達が戻ってくるまで五分程度しかなかったのに、やっぱりコイツは創作系の技能に関しては天才と言わざるを得ないだろう。

「おまえらはそいつを持って屋上で演技開始だ。だが下手な会話はするなよ。清水によつて盗聴されている以上、バレたら元も子もないからな」

「え？ もう行くの？ まだ台本に目すら通してないのに」

「……………大丈夫。屋上にはカメラに映らない死角がある。そこなら読みながら演技が可能」

ムツツリーニは紙を取り出すと、簡単な屋上の見取り図と死角になるポイントを描いた。

「読みながらでいいのならなんとかかなりそうですね、美波ちゃん」

「そうね。それは助かるんだけど……せめて内容を確認させてくれない？ 岡崎を疑う

わけじゃないけど、変なシーンがあるかどうか気になるもの。その……キスシーンとか

……」

あ、それは僕も困る。そんなシーン、素人の僕らには荷が重いからね。

「心配するな。そんなベタ中のベタなシーンをわざわざこの俺が入れるワケがないだろう。ちゃんとお前らにピッタリなシチュエーションや台詞にしてある。俺を信じろ。だからさっさと行ってこい」

そのまま取り付く島もなく、僕らは三人は教室から追い出された。

仕方なく無言で屋上へと続く廊下を歩く。カメラがあるかも知れないので、念の為台本も見えないようにしておいた。

ギィ

たてつけの悪いドアを開けて屋上に出た。幸いなことに他の人は誰もいない。

そのままムツツリーニが教えてくれた死角を伝い屋上の隅へと移動し、台本を取り出す。

(よし、後はここに書いてある台詞を読むだけだ)

美波と姫路さんも準備が整ったようだ。いよいよ演技開始。

台本の一ページ目を開き、中の台詞に目を通す。

くく明久×島田 ウチとバカなアイツのちよつぱりオトナな仲直りっ♡ くく

島田『うふふ……ようやくこの時が来たわね、アキ……えいつ♡』

明久『な、なにするんだ美波!?! ここ屋上だよ!?! もし誰かに見られたら……ああつ!』

島田『見られたら……? そうね、ウチら、学校の屋上でセツ〇スする変態カップルとして思われちゃうかもね……でも、そんなの関係ないわよ。それにアキのコレだつて、もうこんなに準備万端じゃないの。いいアキ? ウチはね……ずっとこうしたかつたんだからつ!』

ハムツ↑(島田が明久のペ〇スを啜える音)

明久『み、美波!?! 待って——んくうつ!?!』

島田『んっ、いつ♡ んむう……♡ じゆる……ちゅぷつ、ちゅぱつ……んふふ、あひの童貞オ〇ンポ、とつても大きいわ。口に入りきらないじゃない♡ アキのクセに生意気なんだから……んれろ……ずるるっ、ちゅぱつ♡』

明久『くっ! はっ、かっ、み、美波……そ、そんなつ、強くされたら僕——ま、まつて!』

島田『……ぷはあつ。なあにアキ？ ひよつとしてもういきそうなの？ 早くないかしら？』

明久『ご、ごめん……。だって、美波のテクニクが凄くて……』

島田『あら、アキのクセに嬉しいこと言うのね。それなら……。今までにないくらい気持ちよくしてイカせてあげるわよっ！ はむっ、じゆるっ、じゆるるるっ、ぬちゅ、ねちよっ』

明久『ひああああつ!? 更に激しくっ……。も、もうだめだ！ 出るっ！ 美波の口の中に僕のせ』

パタン

「……………」

僕は静かに台本を閉じ、元の道を引き返す。

そのまま再びFクラスの教室の扉を開けて、これを作った男の下へとゆっくりと向かった。



「ん？ 明久？ 随分お早いお帰りじゃねえか」

「……大悟」

「どうだった？ 俺の渾身の一作は。時間が足りなかった割にはなかなかいいシチュ

エーションを——」

バツ！

—— お前は一体何を書いとんじゃコラア！！！！

—— げぶるおおああっ！！？

大悟の顔面に僕のドロップキックがクリーンヒットした。

## 第五十八問 演技つて難しいんだな……

— side 大悟

「ああクソ……痛え。あの野郎……本気で蹴つてきやがって」

「自業自得じやろう。そもそも告白文を書けと言われたのにどこをどう解釈したらあのような文章になるのじや？」

先ほど明久から全力ドロップキックを食らった頬を擦る俺に、呆れ顔を浮かべた秀吉がそう尋ねてくる。あのような文章とは先程俺が書いた台本の事だろう。

明久の野郎。散々俺を罵倒した挙げ句、人が端正込めて作り上げたモンを目の前で堂々と破り捨てやがって。一体どこがどう気に入らなかつたというんだ!?

「それはだな秀吉。中途半端な内容や台詞じゃ返つて清水に演技臭いと思われちゃう可能性があるだろ？ ならこれくらいドストレートな表現の方がより信憑性があがると思つてな。それに学園モノのエロゲじゃ告白からの慰めセッ○スは基本的なセオリ―展開だからな」

「発想が極端過ぎるじやろうが。全く……せめてもう少し表現をオブラートに包めん

かったのか？」

そう溜息をつく秀吉。

どうしてそんな反応をするのだろうか。俺は何もおかしなことは言っていないというのに。まさかツンデレな女の子がちよつと弱気な主人公に精一杯ご奉仕するという素晴らしさを分かっていないのか？ それはいかん。ならば後で秀吉にはみつちりレクチャーをする必要があるかも知れないな。

余談だが、さつき明久と一緒に一旦帰ってきた姫路が顔を赤くしながら俺に『あのシナリオの美波ちゃんのところを私に変えて同人小説を書くことは出来ますか？』とこつそり耳打ちしてきた。彼女だけはお気に召してくれたようで何よりだ。

「おいお前ら。そろそろ明久達の演技が始まるぞ」

「む？ わかったのじゃ」

「おう」

雄二に呼ばれ、俺と秀吉はヤツの机に集まった。そこでは既に同志が盗聴器の準備をしている。

ちなみに最初の台本はボツになり、もう一度書き直しさせられた。

「大悟。今度はちゃんとまともな文章を書いたんだろうな？」

「おいコラ雄二。その言い方はさっきの内容がおふざけだと言ってるように聞こえるんだが？」

「そうだから言ってるんだよバカ」

何気ない雄二の一言が、俺の心を深く傷つけた。

「……………始まった」

「……」

同志の言葉に反応し、俺達は盗聴器のスピーカーに耳を澄ませた。さてさて、明久達はどうだろうか……………。

『……………ねえ、アキ』

『ん？ なに、美波？』

この声は島田と明久か。どうやらちゃんと始めているようだ。

少し棒読みな所が気になるが……………そこは仕方がないだろう。

『今更なだけど……………アキにきちんとウチの気持ち伝えておこうと思うの』

『え？ そんなの、今更言われなくても……………』

台本通りに会話が進んでいく。

「よし、今のところ順調だな」

「うむ。それに内容もさっきのと違っておかしな所は無さそうじゃ」

「はっはっは。秀吉、俺がいつおかしな文章を書いたっていうんだ？」

「黙ってろキモオタ」

「自覚が無いのかお主は……それはさすがにバカと言わざるを得ないぞい？」

二人から更に辛辣なお言葉。俺、そろそろ泣いてもいいよね？

なんて思っていると、

『わ、わざわざこんなところに呼び出してごめんね、アキ……』

更に島田の声が聞こえる。

よし、この台詞まで来たら後は簡単だ。島田が明久に告白して明久がそれを受け入れる。そしたらそこに姫路が割り込んできて島田とちよつとした言い合いをして……といった感じで完了だ。

おそらく島田は恥ずかしさでかなり赤くなつてるとは思うが……そこをグツと堪えるんだ！ ここを乗り越えた先にこそ、ツンデレ系ヒロインは一皮剥けるといふものなんだからな！

『あのね、ウチは、アキのことが——』

さあ、見せてやるんだ島田美波！ 瑞希じゃなくウチこそがこの物語の真のヒロインなんだと、明久に思い知らせてやるん——

『アキのことが——嫌いなやつ！』

——あり？

『み、美波……？』

『初めて会った時からずっとアキのことが嫌い！ あれから友達として傍にいたのがずっと辛かった！ 本当は友達でいるなんて、我慢できなかつたのに！』

おいしいおいしい？ 島田のヤロウなにやっつてやがる!? そこは好きって言う場面だろうが！ それなのに初めて会った時から嫌いってもうただの罵倒になつてるじゃねえか！

まさかこんな三次元どころか二次元ですら見たことない告白を聞かされ、心の中で突っ込みまくっていると、明久が台本通り彼女の言葉にこう返事をした。

『僕もずっと、同じ気持ちだった』

その後、間髪入れずに鈍い打撃音と悲鳴が聞こえてきた。おそらく明久が島田に顔面か何かを殴られたのだろう。だが今回限りは明久はドンマイとしか言いようがない。間違えてもないのに顔面パンチを見舞われるとか理不尽の極みだろ。

「……おい、どうすんだコレ」

「……どうするも何も、失敗に決まってるだろ」

「……………（コクリ）」

「これは……さすがにフオロー出来んのう……」

はあ、と溜息をつく俺達四人。

なんか今となって思うと、最初の文章でも結果はさほど変わらなかったんじゃないかと思ってきた。

「……………んで、何か言い訳はあるか？」

「……………返す言葉もございません」

「まったくお主らは、なんとという失態を……」

その後、演技に失敗した島田と明久がとぼとぼと教室に戻ってきやがった。

俺はそんな二人をまず眼前で正座させ、自分は仁王立ちをして見下ろしつつそう問いかけた。

「最初のヤツは嫌だつつかうから折角別なのに書き直してやったのに……あれじゃ殆どその意味ねえじゃねえか。あと最後明久を無駄に殴る必要はねえだろ。なあ島田？」

「うっ……………」

俺の言葉に島田が息を詰まらせる。どうやら自分がやらかしてしまったという自覚はあるようだ。

「だ、だつて仕方ないじゃない！ あんな台詞言えるわけないもの！ しかも録音されているかもしれないのよ!？」

「そ、そうだよっ！ 確かに一番初めのよりは全然マシだけど、そもそも美波にあんな可愛い台詞が言えるわけあれ？ 右手の感覚がなくなってきたような？」

明久の右肘がどえらいことになっているのはさておき、もうこの二人に恋人の演技は無理なんじゃないかと思ひ始めてきた。

だつてあんな簡単な文章すら録に言えないのだから。



「あのな島田。お前はこの三次元において数少ないツンデレ系ヒロインなんだからそこをもっと自覚して貰わないと困る。あれじゃヒロインどころかただのアンチ製造器だぞ？ それともお前はそのままメインヒロインの座を姫路に奪われちまっても構わないういのか？」

「そ、それは……確かに嫌だけど……」

「そうだろう？ なら次からは気を付けてくれよ。あといい加減明久の右腕を放してやれ」

「あつ、づ、ごめん……」

慌てて明久の右手から手を放す島田。うむ、赤く腫れ上がってはいるが腕の機能はまだ失われてはいないようだ。

「やれやれ仕方ない……相棒。コイツらに演技とはなんたるかを見せてやれ」

「んむ、ワシかの？ まあ別に構わぬが」

そう言つて秀吉に台本を渡すと、秀吉はしばらくじつと中身を見つめていた。

そして内容を全て暗記したのかよし、と本を閉じて明久の手を優しく握り締めた。そんな秀吉の突然の行動に明久が戸惑っていると、

「わざわざこんな所に呼び出してごめんね、アキ……。あのね、ウチは……アキのことが

好きなのっ！」

「!？」

秀吉が島田ボイスと口調で明久に告白（演技）した。そのまま俺が書いた台本通りの台詞を続ける。

「初めて会った時からアキのことが好き！ あれからただの友達として傍にいただけなのがずっと辛かった！ 本当はただの友達でいるなんて、我慢できなかったのに！」

矢継ぎ早に繰り出される秀吉の名演技ぶりは明久だけでなく、島田達をも黙らせかつ一瞬で魅了してしまっている。これには最早言葉など要らぬだろう。黙って脱帽だ。

だがなんだろうか……演技だと分かっている筈なのに、めちやくちや明久が羨ましく思える。いいなあ……

「アキ……。あんなことしちやった後で今更だけど、改めて……貴方のことが好きです。ウチと、付き合ってください」

きゆうしよに当たった！ 明久へのこうかはばつぐんだ！

「母さん……。今僕は、初めて貴女に心から感謝します……。僕を産んでくれて、本当に

——

「——とまあ、こんな具合じゃ」

スツと明久から手を離し、いつもの秀吉に戻る。

こういうオンオフの切り替えが容易に出来てしまうのも本当に凄いと思う。さすがとしか言いようがない。

姫路と島田が秀吉の演技に感激してベタ褒めしている中、相手役だった明久は天を仰ぎ、声を殺して泣いていた。俺はそんな明久に近づき、優しく肩に手を置いた。

「……………明久。今は思う存分泣け。泣いていいんだ……………っ！」

「うん。ありがとう……………大悟……………っ！」

「? 明久君。それに岡崎君まで、どうして泣いているんですか?」

「なんでもないよ姫路さん……………。ただ、少しの間だけ僕らをそっとしておいてくれないかな……………?」

「??」

言っている意味が分からないのか、首を傾げる姫路。けどその気持ち俺には痛いほど分かるぜ明久。幸せの絶頂から一気に現実を突きつけられる……………それはとても悲しくて苦しくて残酷なんだよな。おっと……………思わず貰い泣きしてしまったぜ。

そう俺達がお互いに肩を抱き合って泣いていると、秀吉が話を戻した。

「ムツツリーニ、先ほどの屋上での会話は清水に聞かれておったのか?」

「……………微妙。一応、途中でまた接触不良を装っておいた」

「それならまだセーフじゃな。序盤は台本通りに進んでおつたから向こうも真偽を訝んでおるところじゃろう。今度こそお主らには恋人同士を演じてもらうぞい」

「う……」

釘をさされ、言葉を詰まらせる明久と島田。秀吉があんな迫真の演技まで見せたのだ。二人はここで断るなんて出来ないだろう。ま、仮にそんな真似をしやがったのならこっちは例の殺人兵器を使うだけなのだが。

「ここから先は姫路にもしっかり参加してもらおうからの」

「は、はいっ。頑張りますっ」

「いい返事だぜ姫路。その意気だ」

姫路のやる気に満ちた返事に俺と秀吉は頷いて返した。

そして午後からの授業は自習であり、更に他のクラスでは皆テストを受けているらしい。その採点やら監督やらで教師勢は手一杯なため、こっちに來ることは殆ど無いだろう。つまり実行するのは今が絶好の機会という訳だ。

ま、その原因の大半が俺達の覗き騒動のせいなんけどな！ あっはっは。

「それじゃあ大悟。次はどんな設定にしようかの？」

「そうだな……うし、なら次は島田と明久が教室を抜け出して外で逢引をしてるつつう設定でいこう！ やはり皆に内緒でイチャラブ&ランデブーするのは学園ラブコメの

代表的シチュエーションだからな。てことでお前ら、腕組め」

「えっ………」

二人がマジで？ といった感じで顔を見合わせる。おいおい、まさかこんな初歩的なものに戸惑ってんのか？

「あ、あの……岡崎君。べ、別に腕を組む必要はないんじゃないや……？」

明久と島田が腕を組むことに思うところがあるのか、姫路がそう俺に異議を申し立ててきた。

だが、俺はその意見を容赦なくバツサリと切り捨てた。

「姫路、お前の考えは分からんでもない。だがこれは清水を騙してDクラスを焚き付けるための『演技』に過ぎない。ならそこまで気にすることでもないだろう？」

「で、でも………」

「ほー、ここまで言ってもまだ文句があるか。ならさっきの話は無かったことに——」

「ま、待つてくださいい！ ありません！ ありませんからそれだけはあつ！」

「なら大人しく従え。いいな？」

「分かりました………」

姫路が折れた。うんうん、それでいいんだ。

そして明久と島田は秀吉が説得しており、それが通じたのか島田が明久の腕を取っ

た。これで準備は万端だ。

「ごめんなさい。失礼するわね（ガラガラ）」

「「？」」

突如教室の前の扉が開かれた。今度は誰だ？

「む？ 姉上ではないか」

「ええ。お邪魔するわね秀吉。大悟はいるかしら？」

そう言うって俺達の所にやって来たのは、Aクラスの秀才にして秀吉の双子の姉、木下優子だ。二卵性双生児であるため秀吉に瓜二つな見た目をしており、学力や運動神経も優れているまさにエリート女子なのだが、その本性はドがつくほどのヤンデレ、そして腐女子という残念系美人なのだ。

「どうしたの木下さん？ Aクラスはテストを受けてる筈じゃ……」

明久が優子に尋ねる。確かにその通りだ。

「それは男子だけよ吉井君。アタシ達女子はその間はずっと自習になっているから時間があるの。だからこうして来れたってこと」

「へえ、そうだったんだ。それで大悟になにか用事？」

「うん。ちよつとね」

と言って、俺の前にトコトコと歩いてくる優子。

だがおかしい。どうして俺の背筋は氷の様にカチカチに凍りついている？ どうして手がブルブル震えている？ そしてどうしてアイツから異常な程の殺気を感じているんだ俺は!!

「大悟」

「な、なんだ優子？」

「アタシね。さつきDクラスにいる友達に用があつてここの廊下を通つてたの」

「うん」

「そしたらね、その途中である光景を見かけちゃつたの。もうビックリして声も出なかつたわ」

「ほうほう、それで？」

「……………大悟、聞かせて。——さつき親しげに喋つてた女は誰なの？」

ダツ（身を翻し走り出す俺）

ガツ（その手を掴む優子）

「大悟。どこに行こうとしてるのかシラ？」

「まあ待つんだ優子。話せば分かる。だからそんな喧嘩腰になるのは勘弁してくれ。それにあの人はただの知り合いでお前の考えているような関係などでは一切なく」

「大丈夫ヨ？　言い訳ならキッチンと聞いてあげるし、お仕置きもたっぷりシテアゲルカ  
ラネ？」

「……た、助けてくれ明久っ！　相棒っ！　このままじゃ俺は優子によつて挽き肉にされちまうんだ！」

「……すまぬ相棒。ワシらにはどうすることも出来ん……！」

「……せめて、残った骨は拾いにいくよ。大悟……」

「そ、そんなんっ!!?　嫌だ！　俺はまだ死にたくねえ！　誰かつ！　弁護士をつ！　弁護士を呼んで俺の無実を証明し——」

ピシヤッ



——side 明久

木下さんが大悟をズルズルと引きずって教室を出ていった。

最後まで助けを求められたけど、僕らではどうすることも出来ないの、そのまま無言で二人のことを見送った。

大悟。君のことは永遠に忘れない。せめて安らかにあの世に逝ってくれ……。

「それじゃあ、行こうか美波」

「……一応腕は組むけど、他のところに触ったりしたら殺すからね」

「りよ、了解。気を付けるよ」

気を取り直し、大悟の案に従って美波と腕を組み廊下に出る。とてもギスギスした雰囲気になってしまっているが、これはもう仕方がないだろう。

そのまま屋上へと続く廊下を歩きながら、美波とにこやかに会話をする。

「あはは。美波つてば、そんなに腕をギュってされたら歩きにくいよ」

「ふふつ。別にいいでしょ？ ウチらは付き合っているんだから、これくらい」

「でも美波、そのせいでさつきから肘に当たってるんだけど」

「え!? こ、この、スケベっ!」

「——アバラ骨が」



— s i d e 大悟

「……あ、あり。ここは……?」

目が覚めると、さつきまで優子に連れてかれた空き教室の天井が視界に入った。

何故だかは知らないがとてつもない恐怖体験をした気がする。そして死んだじゃないかとばあちゃんに出会ったような気がする。まさかまた臨死体験でもしたか俺?

「あら、ようやくお目覚めになりましたか？ 岡崎君」

「んあ？ つて、小暮先輩……？」

近くから聞いたことのある声が聞こえてくる。見るとさつきまで俺と話していた三年の小暮先輩が、心配そうな顔で俺をしゃがんで見つめていた。

そして俺の身体には包帯やガーゼ、絆創膏などで綺麗に応急処置がなされている。

「どうされたのですか？ 偶然先ほど通りかかってみれば、岡崎君がまるで誰かに散々毟られた後に全身の関節という関節を折られたような大怪我をして倒れていたのですから」

「ああ……それ多分正解っすね」

というより、大怪我で済んだのならむしろありがたい。殺されないだけマシだっただろう。

床に横たわっていた身体を起こす。全身の骨がバキバキと変な音を鳴らしているが、辛うじて人体機能は失われていないようだ。

「大丈夫ですか？ そんなに痛々しい身体で起きあがって……」

「問題ないっすよ。ちよつと臨死体験しただけです」

「世間一般では、臨死体験を『問題ない』とは思われないと思いますわよ？」

確かにな。

「そういや、なんで小暮先輩がここに？ さつき授業だつて言つてたじゃないすか」

「それが、担当の先生が急に来られなくなつてしまつたようで、午後の授業は全て自習になりましたの。ですから先ほどまで教室で勉強をしていたのですが、少し休憩がてらここまで……ということですよ」

「あー、そういうことね。完全に理解した」

自習になつてまで勉強をするとはさすがはAクラスの先輩だ。俺達じゃ絶対そんなことはしない。え？ だつて自習Ⅱお遊びタイムでしょ？

「そういや、この応急処置は先輩がやつてくれたんすよね？ それなら本当にありがとうございます」

「お氣になさらず。岡崎君が無事でなによりですわ」

軽く頭を下げて礼を言う。それに対して小暮先輩はクスリとわずかに笑みを浮かべて返してくれた。勿論相変わらず妖艶な雰囲気は出ている。

しかし、出会つてまだあまり時間も経つていないのにここまでしてくるなんて、この先輩はなんて後輩思いな人なんだろうか。あの常夏コンビや高城（姫路信者）さんとは大違いだ。

「なら小暮先輩。後で何かお礼をしたいんだが、なにか要望はあるか？」

「ふふつ、お礼など必要ありませんわ。私は岡崎君から見返りを得る為に手当てをしたわけではありませんの。ただ単純に——貴方が心配になつたからやつたのです。そ

れに私はこれでも貴方の先輩ですわ。なら困っている後輩を助けるのは先輩として当然のことでしょう?」

「……もしアンタが二次元の女性だったら一発で惚れてましたよ先輩」

「あら? それは残念ですわ。私は岡崎君にプロポーズされたら受け入れてもいいと思っと思っていますのに」

「あつはつは。またまたご冗談を。それに俺は二次元を愛する男だって言ったじゃないすかもお〜」

「……うふふつ……、そんな事を言うなんて、罪なお人ですこと」

「ん? なんすか?」

「あつ、いいえ。なんでもありませんわ」

「そうすか。んじや、俺はもう行きますね。こっちで野暮用があるんで。また何かあつたらいつでもお声がけ下さい。ダイゴブックスはいつでもお客様からの依頼をお待ちしていますよ」

「ええ。それではまた。岡崎君」

俺はそのまま空き教室を出ていく。

ふふ、小暮先輩はなんて素晴らしいお方だ。やはり俺の目に狂いはなかった。姫路、島田、霧島、工藤に続く新たなジャンル——ちよつとエツチな小悪魔お姉さん系先輩キヤラ！ まさかこんな所であの伝説の存在に会えるなんて思ってもみなかったが……なんて俺はラッキーなんだ！ これはまた執筆活動が捗るぞーひやつほう!!

「……行きましたか。さて、もうそろそろ姿をお見せになってもよろしいのではなくて？」

「……いつから気づいていたんですか。先輩」

「私、人の気配には人一倍敏感なものでして。それで、そうして潜んでいたということ  
は、私だけに何かご用があるのでしょうか？ 可愛らしい後輩さん？」

「……………!!」

## Fクラス

「うーす」

「おお、戻ったか大悟。こっちだ」

Fクラスの教室に戻ると、雄二がそう言っただけで俺を手招きする。秀吉と同志も一緒だ。だが何故か皆浮かない顔をしていたが、何かあったのか？

「大悟、身体は平気か？」

「おう。この通り手当てもバッチリよ」

「それは良かった。あの状態の姉上に連れ去られた時はもうダメかと思ったが、無事で本当に何よりじゃ」

「……………同志が生きていてくれて嬉しい」

なんて友達思いの心暖まる言葉なんだ。大悟さん泣きそうだよ。

「あり？　そーいや明久はどうした？　それに演技は成功したのか？」

「……………それがな、実は——」

「どうして瑞希ばかりいつもお姫様扱いなのよ！　じゃあウチはなんなの!?　男だと



でも思ってるの!?! どうしてウチにはいつもそんな態度なのよ!」

「べ、別にそんなつもりは!」

「瑞希が転校させられそうになったら、ウチが瑞希の両親に話をしに行くわ。だから、もう話しかけないで! アンタの顔なんて見たくもない!」

物凄い剣幕でそう明久にまくしたてた島田。それを見て『ああいうこつた』とアイコンタクトを送ってくる雄二。

はあ……やれやれ。こりやしばらくゴールは程遠そうだ。

## 第五十九問 エロゲと取引と殺人ゼリー

— side 大悟

「どうしよう。完全に怒らせちゃったよ……」

「そのようじゃな」

トボトボと肩を落として戻ってきた明久。

雄二から詳しい内容を聞くと、またもやコイツらは演技に失敗したらしい。

今度は島田も姫路もちゃんと決まった役を演じていたらしいのだが、肝心の明久が最後の最後で島田をほっぽって逃げ出してしまうという恋人同士では絶対にあり得ない行動をしたのが原因なんだと。コイツホント後でシバき回してやろうかな。

「明久。こうなるともうテメエは最早演技が上手い下手以前の問題だぜ。まさか自分に与えられた役目すら満足にこなせねえ……いや、それどころか途中で投げ出すとはな。それがどれだけ無責任なことか分かってんのかこの野郎、ああ?」

「うっ……」

俺が辛辣な言葉を浴びせると、明久は俯いて黙ってしまった。

少々言い過ぎだとは思ったが、島田の今の心情を考えればこれくらいは妥当だ。

「あの、岡崎君。あまり明久君を責めないであげて下さい。失敗してしまったのは明久君だけのせいじゃなく、私にも非があつて……」

「ちげえんだよ姫路。俺が言いたいののはな、演技の成功失敗どうこうじゃねえんだ。どうして自分がやらなきゃいけないことを最後までちゃんとやろうとしねえんだってことなんだよ。さつきの島田みてえに一生懸命やつてミスるならまだいい。だがな、今の明久はそれよりも更に下の下だ。俺達の期待や自分が持たなきゃならない責任感つてのをコイツは一氣にドブに捨てやがった。そんなクソみてえな真似されてイラつかねえ訳ねえだろ」

「それは……でも」

「姫路よ。何を言つても無駄じゃ。今回ばかりはさすがに大悟が正しいからの」

「……………正論」

「……………そう、ですよね」

俺の意見に秀吉と同志が賛同する。

それにより姫路もぐうの音も出なくなつたのか、口を閉じて反論を止めた。

「やれやれ……。明久、ほどぼりが冷めたら、後できつちりフォローしておけよ?」

「うん。そうするよ」

今の島田に声をかけてあれなのだ。ここでまた明久が余計な事を言うのは火に油を注ぐようなものだ、とても思っただらう。

「んで、こっからどうするよ？　このままじゃDクラスの前にBクラスが宣戦布告をしなきゃまずいぞ？」

「勿論このまま終わらせるつもりはない。ムツツリーニ。Bクラスの様子はどうか？」

雄二が隣に座るムツツリーニに話しかける。

「……………現在七割程度の補充を完了。一部では開戦の用意を進めている」

「そうか。予定よりも早いな。向こうも本気ってことか」

「……………休み時間もずつと補充をしていた」

そこまで時間を費やして補充試験を行っているのか。どうやらBクラスは俺達を倒すことになり躍起になっているようだ。いや、正しくは根本とBクラスの女子か。

だが、そうなる俺達に宣戦布告が来るのも時間の問題だな。

「まずはDクラスに仕掛ける前に時間稼ぎをする必要があるな。ムツツリーニ、悪いが須川達と組んでBクラスに偽情報を流してくれ」

「……………内容は？」

「Dクラスが試召戦争の準備を始めているって感じで頼む。その狙いがBクラスだという」

「……………了解」

「雄二、それって何か狙いがあるの?」

「ただの時間稼ぎだ。Dクラス狙われていると知れば、Bクラスは連戦を避けたいと考  
えるだろうからな。俺達への宣戦布告を躊躇うはずだ」

ほう、なるほど。確かにそれなら多少の時間稼ぎにはなる筈だ。いくらBクラスとて  
連戦になるのは避けたいだろうからな。様子見に徹する筈だ。

本当はCクラスが狙っているという話にしたかったらしいが、ヤツらは前の試召戦争  
でAクラスに負けており、宣戦布告の権利がないから無理なんだってさ。まあ仕方ない  
わな。

「んでムツツリーニ。そしたらお前には更に他のこともやってもらいたい。だからある  
程度の情報流布が終わったらそっちは須川に一任してくれ」

「……………わかった」

そのまま須川の所に向かった同志。先の試召戦争にて実績のあるあの二人のコンビ  
なら特に心配はいらないだろう。

「さて、次はお前らだ。秀吉、大悟」

「あん?」

「む。なんじゃ?」

雄二が今度は俺と秀吉の方を向いた。

「お前らにはDクラスの清水を交渉のテーブルに引っ張り出して貰いたいんだが、頼めるか?」

「交渉か……分かった。秀吉、お前はどうか?」

「ワシも構わぬが……交渉と言つてもどうするつもりじゃ?」

「簡単なことだ。清水を挑発して、敵意を煽る。向こうが乗ってきたら成功、そうでなければ失敗。それだけだ」

雄二は淡々とそう言っているが、これは結構な難関だ。ただでさえ演技に失敗して俺達に対し戦争の意思も薄くなりかつ不信任感を抱いているのに、そんなヤツらからわざわざ交渉がしたいと来られるのだ。当然そこに必ず裏があると考える筈だ。よほど清水がバカじゃない限り、俺達の要求に簡単に応じてはくれないだろう。

ま、そこら辺はなんとか言葉巧みに誘導してなんとかするしかないか。

「ふむ。清水を引っ張り出しての交渉ともなると……島田も連れて行く必要があるのじゃろう?」

「ああ。その方がより確実に挑発できるからな」

「大丈夫か? 今の激おこ状態の島田が同席したら更に溝が深くなりそうなんだが」

「その辺は俺がうまくやろう」

確かに雄二の口の回り様は友人の俺から見ても目を見張るものがある。絶対にとは断言しかねるが、少なくとも俺や秀吉達よりかはスムーズに話を進めてくれるだろう。

「うむ。ならばこちらは二手に別れるとしよう。ワシは島田をなんとかするゆえ、大悟は清水の方を頼めるかの？」

「おう、任せておけ」

「すまないな二人とも。それで交渉の場所と時刻だが、Dクラス近くの空き教室に放課後という感じで頼む。そのくらいの時間までならBクラスの動きを止めていられるかな」

「分かった（のじゃ）」

雄二の言葉を二つ返事で了承した。

よし、なら善は急げだ。さっさと向かうとするか。

## Dクラス

「どうもーこんにちは。お馴染みダイゴボックスです」

ガラガラと扉を開けて中に入る。

Dクラスは一般的な公立学校と同じような造りだ。前には壁一杯の黒板にちゃんと揃えられたチョーク。そしてまたごく普通の学生机に椅子。

なんだろう。Fクラスの設備が酷すぎるせいか、設備がとても充実してる風に見える。あのボロ小屋に長くいたせいで俺の思考が狂っているのか？

「あれ？ 兄貴じゃないか。どうしたんだ？」

「よう平賀。済まんがちよつと用があつてな、清水はいるか？」

「清水さん？ 彼女ならそこにいるぞ」

平賀が指差した先には、友達らしきヤツと一緒に楽しげに話している清水の姿があった。オレンジ色のドリルツインテールが特徴的の、同性である島田の事が好きなレズビアン系女子だ。

「……って、岡崎先生？ どうしたのです？ まだ依頼はしていない筈ですが……」



「いや、ちよつとお前に話があつてな。時間はあるか？」

「話……ですか……」

すると、清水は拳を口元に当てて何かを考えだした。やはり警戒されているようだ。

「……わかりました。いいですよ」

「すまんな」

俺は丁度近くにあつた椅子に腰掛ける。

「——んで、さつきから隣で俺をじつと見つめてるアンタはなんだ？」

「あつ、えつと……」

見ると、先程まで清水と親しげに喋っていた女子が俺にやけにキラキラした眼差しを送っている。初めて見る顔だが誰だ？

「あの……貴方があの有名なダイゴブックスの岡崎君……ですよね」

「有名かどうかは知らんがそうだ」

「や、やつぱり……！ 私、このDクラスの玉野美紀つて言います！ 美春ちゃんから貴方のお話がかねがね聞いていました。実は……私、ずっとダイゴブックスのファンでいつかは岡崎君に会いたいと思つていたんです！ 握手してください！」

「お？ おう……」

やけに興奮気味で俺の手を握る玉野と名乗つた三つ編みの女子。なるほど、ファンか

……これは中々に嬉しい。自分の手掛けた作品を好きになってくれた人がいるって事ほど、同人作家としてありがたいことはないからな。

「あの、もし良かったら私にも同人誌を書いて頂けないですか!」

「ほう、それはつまり依頼という訳だな。いいだろう。ダイゴブックスは君を心から歓迎しよう」

「ありがとうございます!」

新たな顧客ゲット。やったぜ（歓喜）

「……それで、話というのはなんでしようか。岡崎先生」

「おっと、すまねえな。んじや玉野とやら。いきなりで悪いんだがちよつとだけ席を外しといてくれないか? すぐ終わっからよ」

「え? あ、はい! わかりました!」

玉野はスクツと立ち上がり、そのまま俺達から離れていった。

アイツには悪いがこれで部外者はいなくなつた。ゆつくり話が出る。

「待たせたな。話というのは他でもない。実はな、明久がお前に話があるそうなんだ」

「……ブタ野郎が? 美春にですか?」

「おう。何を話すかは知らねえが、かなり真面目な顔をしてたから結構大事なことなんだろう」

「そうですか……」

再び考え込む清水。てつきり『お断りします』とバツサリ切り捨てられるもんだと思っていたが案外そうでもないようだ。

清水は先程までの俺達によるぐだぐだ演技を盗聴している。そしてその時に明久が島田から逃げたことも当然知ってる筈だ。だからおそらくそのことについて何か思う所があるのだろう。もし俺がその立場だったら真っ先に張本人である明久の所へ出向き、なんであんなふざけた真似をしたんだと問い詰めるくらいのはやるな。

そんなことを考えながら待っていると、清水がバツと顔を上げて言った。

「……わかりました。そのお誘いを受けましょう」

「お、いいのか？」

「ええ。それに美春としても先程のフザけた演技の事も含め、あのブタ野郎には言いたい事がありましたから。そちらがその機会を作ってくれるというのならありがたい限りです」

すんなり話し合い成功。よかったよかった。これで最初の難関は無事突破だ。

「すまねえな清水。わざわざ足労をかけるようで」

「いいえ、気にしないでください。それで、その話し合いというのはいつなんですか？」

「そうだな……なら場所は旧校舎の空き教室。時間は放課後でいいか？」

「わかりました。必ず向かいましょう」

「おう、なら俺はこれで戻るぜ。もうすぐ休み時間も終わりそうだしな。また依頼があればいつでも来いよ。玉野にもそう言っておいてくれな。そんじや」

俺はそう言つて、Dクラスを出ていった。

— Fクラス

「うーす。戻ったぞ」

「む、お帰りなのじゃ大悟」

「……………お帰り」

教室に戻ると、同志と秀吉の二人だけになっていた。既に二人は雄二から課せられた役目を終えていたようで、演劇の本を読んだりカメラの手入れをしたりと、それぞれ好きなことをして時間を潰しているようだ。

「その様子じゃと、清水との話し合いは成功したんじゃない」

「まあな。ところで明久と雄二がいねえな。どこに行ったんだ?」

「ああ、あやつらなら一緒にどこかへ出ていったぞい。なにやら姫路を追いかけるとか言っておったが」

姫路を追いかける? 一体何をやっているんだあの二人は?

まるでアイツがこれからヤバい事をしようとしてるみたいない方だな。何があ  
るってんだ?

———  
調理室

『あとは、隠し味にタバ———』

「これ以上は聞くな明久。食えなくなるぞ」

「待って! せめて最後に入れられたのがタバコなのかタバスコなのかだけでも確認さ  
せてえ〜〜〜!」

気のせいかな、嫌な寒気と刺激臭を感じた。

「……まあいい。なら俺ものんびりさせてもらおうとするか」

自分の席に戻り、鞆からノートパソコンを取り出す。

何をするか、勿論エロゲーに決まってる。

遂にきた……このゲームをプレイして実に三十時間以上。寝る間も惜しみ、課題もすつぽかし、更には優子の鬼伝すら全て無視した（後にボコられた）ほどの努力と度重なるパッドエンドやデッドエンドを乗り越え、もう少して全ての女の子とのいちやラブハッピーエンドルートや攻略できそうなどころまで到達した！ 全ヒロイン達の心からの笑顔を見る……それだけを支えに、俺は全身全霊をかけてこのゲームと向き合ってきた！ なんと少しでもトウルールエンディングまでたどり着いてやろうじゃねえか！ 力が漲る……心が滾る……！

「よし、やるぞ……！」

気合いを入れ、パソコンの電源を入れる。

そして外部の雑音をシャットアウトするためのイヤホンとゲームパッドを繋ぎ準備完了だ。ここから先は俺と画面の向こう側の彼女達との真剣勝負。何人たりともこの

領域に踏み込むことは許さない。

「待っている俺の可愛いレディー達……全員必ず快樂堕ちさせてやるからなっ！」

俺はそう心に誓いながらゲームを起動させ、二次元の世界へと意識を集中させた。

— side 明久

「はあ、はあ、はあ……。危ないところだった」

「まさか、鉄人が、あんなところにいた、なんて……」

色々あつて新校舎の三階で死闘を演じていた僕と雄二は、途中で現れた鉄人から逃げ

切つてFクラスの教室まで戻つてきていた。

大変だった。最初は雄二が何故か姫路さんに手製のゼリーを僕に作つてくれなんていう狂言から始まり、その後彼女の前代未聞の調理風景を見て絶望し、更には途中で会つた霧島さんから『寝ている雄二にキスをして一緒に寝た』という証言を聞き嫉妬と怒りを込めて雄二を始末しようとしたりと様々なアクシデントに見舞われたのだから。

「ふう……まあ、目的は達成したから、よしとしよう……」

「そ、そう……だね……」

ここでいう雄二の目的とは、わざと新校舎の辺りを暇そうにうろついで、BクラスとDクラスに僕らが点数補充をしていないのことをアピールし、Bクラスにはギリギリまで点数補充をしてもらい宣戦布告を送らせ、Dクラスには逆に点数補充をしていないことで簡単に潰せると思わせることだ。しかしその他にも雄二は何か考えがあるらしい。それはまだ教えてもらつてないけど。

ちなみに結果はさつき雄二が言った通り、僕らが最終的に騒いだことにより他クラスの皆がその様子を見て来ていた為、無事成功だ。

「なら次だ。ムッツリーニは戻つてきているか？」

「……………呼んだか」

雄二の呼び掛けにムッツリーニがすぐ答えた。更にその近くには秀吉と大悟もいる。



既に先に教室に戻ってきていたようだ。

「偽情報はどうだ？」

「……………首尾は上々」

淡々と答えるムツツリーニ。なんていうか、誇らないところがプロって感じだ。

「秀吉、大悟。お前らはどうだ？」

「うむ。少し手間取りはしたが、どうにか島田には応じてもらえたぞい」

「そうか。んで、大悟は？」

「……………」

「ん？ 聞こえないのか、大悟？」

「……………」

一向に返事が来ない。

何をしてるんだと大悟の方を見ると、ヤツは自分の席でノートパソコンとにらめっこしていた。耳にはイヤホンをつけ、手にはゲームパッドを持っている。ああ、なるほど

…………、

「アレはエロゲーに集中してる時の顔だね。あ、よく見たら泣いてる」

「うむ。先程からずっとあの調子じゃ。じゃが終わったらすぐ戻ると言っておったぞ」

「……………同志にとってエロゲーをプレイすることは人間が食事をするのと同義。むや

みやたらに邪魔はしない方がいい」

「なに？　　ったくあのキモオタが……まだ作戦の途中だろうが」

やれやれと溜息をつく雄二。

けどその後秀吉から、大悟も清水さんとの交渉には無事成功したということを知った。なるほど、だからああやって作戦中にエロゲーをやってる余裕があるのか。やっぱりやることはしつかりやるヤツなんだなあ。

「……まあいい。肝心の清水をなんとか動かさせたってんなら文句はねえ。大目に見てやるか」

「そうだね」

それに今邪魔したら殴られそうだし。

「……………それで、次の仕事は？」

「ああ。今姫路が戻ってくる。そうしたら次の行動に移ろう」

「ねえ雄二。わざわざ姫路さんに手料理なんて作ってもらってどうするのさ」

現在姫路さんは調理室にて例のゼリー作りに精を出している。この状況でそんなことをさせるなんて僕への嫌がらせだけとは思えない。

「姫路の料理は暗殺用の武器だ」

「本人が聞いたならショック不可避な発言じゃな」

全くだ。

「ちなみにその対象はBクラスの奴だ」

「Bクラス？ ということは代表の根本あたりかの？」

「いや、ターゲットは根本じゃない。今更アイツを暗殺したところでBクラスが止まるとは思えないからな。狙いはBクラスからDクラスに出されるであろう使者だ」

「「使者？」」

使者とはどういうことだろうか。

「ムッツリーニの偽情報でBクラスはDクラスに狙われているんじゃないかと思ってる。なら次にヤツらが起こす行動で最初に考えられるのはDクラスとの休戦協定だ。Bクラスもわざわざ手間のかかる無駄な争いをおこしたくはないだろうからな。そうなればBクラスからはその話し合いの為に使者が遣わされる。そいつを狙うんだ」

「なるほど。同盟に向かった使者が暗殺されたと知れば、BクラスはDクラスにより疑いの目を向けることになるじゃろうからの。そうすることで結果的に同盟の件を白紙にしてしまおうという魂胆じゃな」

「そういうことだ」

なんて卑劣なことを考える男なんだろう。今後は敵に回さないよう気をつけよう。

「けど、暗殺なら別に姫路さんの手料理じゃなくてもいいんじゃないの？ 暗殺が目的なら例の殺人兵器があるじゃないか」

「アレは確かに致死率100%だが悲鳴があがるからな。周りに気づかれる危険性が高い」

「口を手で押さえればいいじゃないか」

「アホか。アレは対象者が確実に吐いてしまう代物だぞ？ 口を押さえるというなら、お前はそいつの口から滝のように溢れ出るであろう吐瀉物を直に触れるのか？」

「ごめん」

それだけは流石に勘弁だ。

でも姫路さんの料理じゃなくても他に方法はあった気がする。

「気にするな。姫路の料理を選んだのは俺の趣味だ」

なんて心遣いの無い発言をするんだコイツは、と思っていると、

「え？ 坂本君、私の料理が好きなんですか？」

「ひ、ひめ、じ……っ？」

口は災いのもととはよく言ったもの。

雄二の発言は丁度教室に戻ってきた姫路さんに一言一句バツチり聞かれていた。

「良かった。そう言ってもらえると嬉しいです。けど、霧島さんに聞かれたら怒られちゃいますよ?」

「は、はは、は……」

「ウエルカム(グツ)」

「テメエ明久、そのムカつくほど爽やかな笑顔はなんだ……!」

切なそうに笑う雄二の肩に手を置いてキラリと笑う僕。やっぱり僕と雄二は一蓮托生。地獄の旅も二人仲良く道連れだね。

そしていっぱいあるからどうぞとバック入りのゼリーを渡してきた姫路さん。僕と雄二はひきつった笑顔を浮かべながらも感謝の言葉を述べてそれを受け取った。

「んじゃ、行くぞ明久、ムッツリーニ」

「了解」

「……………わかった」

僕らはそれぞれの武器を手に、再び新校舎の三階へと向かった。

『うぐっえぐっ……なんだこの感動的なラストはあ……!! まさか最後の最後であんな大どんでん返ししやがって、ひぐっ、涙が溢れて止まらねえよお……!!』

『あの、岡崎君。集中しているところごめんなさい。私さつきゼリーを作ったんですけど余ってしまいました、良かったら岡崎君もどうぞですか?』

『ああ……ずまねえ姫路。丁度泣きすぎて喉が乾いてたんだ。ありがたくだぐ。うう、やっぱりエロゲはさいこ——ンゴバアツ!!』

『えっ!? お、岡崎君!?! どうしたんですかっ!? 岡崎君!?!』

『大変じゃ! 心臓が止まっておる! 誰か急いでAEDを持ってくるのじゃー!!』

## 第六十問 暗殺と死にかけと巧妙な罠

——side 明久

(わ、本当に出てきたね)

(そのようだな)

階段の隅に隠れつつ、僕と雄二はBクラスの様子を伺っている。すると教室から一人の男子生徒が出てくるのが見えた。

(暗殺はうまくいくかな?)

(ムツツリーニなら間違いない。それに万が一の事があつた時に備えてアイツには例のイラストを渡してあるからな。それをバラ撒いて逃げるよう指示してある)

(そしたら暗殺どころかパンデミックレベルまでいくだろうね)

(そうだな。まあ見ていろ)

目をやると、使者と思われし男子がDクラスに向かって歩き始めている。

周囲にはちらほら人影が見える。どうやって目立たないように暗殺を実行するんだろう。

使者がDクラスにつくまで残り五メートル。だがまだ肝心のムツリーニは動いていない。

(雄二。本当に大丈夫なの？)

(大丈夫だ。ムツツリーニを信じろ)

残り四メートル。

(……………)

残り三メートル。

(雄二、もう間に合わ——)

残り一メートル、というところで何かが視界を遮った。

カツ

(え？)

目を凝らすと、壁にカッターが突き刺さったのが見えた。

しかもカッターの先にはなにやらイラストらしき物が貫かれている。大悟が用意し



たやつかな？

『なんだ、アレ……？』

『先に何か貼つてあるな』

『写真……いや、イラスト？』

周りにいた人達がそのカッターと写真に注目し始める。

そしてその最後尾には例の使者もいた。

『……………（ススツ）』

音もなくその背後に迫るムツツリーニ。誰もその様子には気づかない。

そして——

『……………（ガッ）』

『——つつつ?!?!』

暢気に写真を見ようとしていた使者をムツツリーニが羽交い締めにして口を押さえた。使者は突然の事態に驚いている。

『……………(グッ)』

『——っ！——っ！』

指の隙間から姫路さん特製のゼリーを押し込む。

どんな敵でも一撃で仕留める殺傷能力を持つ代物だ。当然そんな激物を使者が耐えられる訳もなく、

ゴクリッ

『……………(ググッ)』

『か……………は……………っ!! き……………貴様、ムツツリー……………』

そのまま——男はグツタリと泡を吹いて気を失った。

敵には一切の情も加減もしない。それが暗殺者の心得であり生き様。

(……………任務完了)

(流石だ、ムツツリーニ。惚れ惚れするような手際だった)

(……………この程度、何の自慢にもならない)

そうやってムツツリーニは使者の死体をBクラスに見えてDクラスには見えない所に押し込んで隠した。これなら別のクラスに見つけられて騒ぎになるなんてことはま  
ずないだろう。

(よし。ならもうここに用はない。教室に戻るぞ)

(そうだね)

三人で何事も無かったかのようにFクラスに続く渡り廊下を歩き出す。

『このイラストに描かれてるセーラー服の子、メツチャ可愛いな』

『ああ。それにこのクオリティーの高さは間違いなく兄貴の作品だな』

『でもなんかFクラスにいるバカに似ている気がしないか？』

『まあ、私はそれならそれでいいと思うわ。可愛いし』

『流石岡崎先生……なんて素晴らしいのかしら』

背中から聞こえてくるそんな会話がやけに気になった。

—— F クラス。

「ただいまー。秀吉、大悟。今戻った——」

『——!! ——!!? ——つつつ!! (ビクビクビク)』

『大変だ!! 兄貴の体温と心拍数が大幅に低下している!』

『それに身体の硬直と痙攣もやべえ! このままじゃホントに手遅れになっちまう!』

『し、しっかりしてください岡崎君っ! ああっ! 顔がみるみるうちに青くなって

いってしまいますっ! 更に口から大量の泡まで!』

『くっ……誰か急いで暖かい毛布と追加のAED、酸素投与の準備! そして大悟のパ

ソコンに入っているありとあらゆる二次元キャラクターの告白ボイスを耳元で大音量

で流すのじゃ! これは一刻を争うぞっ!!』

『『了解!!』』

『『……………』』

さつきの使者がホントに死んでいないか不安になってきた。

閑話休題。

全員で協力し、大悟をなんとか蘇生させてからしばらく。

Bクラスはどうやら僕らの思惑通り疑心暗鬼に陥つてるといふ情報が入ってきた。

「これで時間稼ぎは成功したのかな？」

「そう長い時間は無理だが、明日までならなんとかなるだろう」

僕らは雄二の席に集まって再びブリーフィングを行っていた。

例の暗殺の犯人が僕らFクラスだということは使者が通告しない限りはバレない。けどやがてあの使者が復活すれば何があつたのかを包み隠さず話すだろう。そうなればムツツリーニが流した偽情報の件も含め僕らの思惑が見破られることは確実だ。

つまり僕らに残された時間は明日の朝まで。朝にDクラスが宣戦布告をしてきてくれれば作戦は完了だ。

「大悟。さつきは聞きそびれたけど、清水さんとの交渉の件は？」

「あ？ ああ……それか。雄二に言われた通り放課後の空き教室で待ち合わせと言って

ある……おええ」

「大丈夫か大悟よ。まだ顔が青いぞい？」

「まだ吐き気と頭痛が止まんねえんだよコンチクシヨウ……」

頭を押さえ、気分の優れない表情を見せる大悟。

人間離れたした身体をしてるコイツでさえも全く敵わないとは……恐るべき姫路さんの料理の腕前。

「ところで雄二よ。清水を焚き付ける為の策はあるのか？」

「勿論だ。とっておきの策がある」

そう自信ありげに雄二は言う。

確かに罵倒や挑発はコイツの十八番だ。きつと清水さんをその気にさせてくれるだろう。

その後雄二は僕に、お前は余計な口を挟まないようにしろ、と言ってきた。なんでも僕と美波がいないと挑発が出来ないから同席させるが、下手なことを言われれば取り返しがつかないことになる可能性があるとのこと。

確かにその通りで、僕はさつきも自分の失言で美波も怒らせてしまったし、清水さんは僕に敵意を抱いている。そんな状況で僕がしゃべるのは禁忌に近い行動だろう。

だから僕はその場に同席して相槌でも打っておくことにしよう。後のことは雄二が

やってくれるっぼいし。

「一応大悟も構えていてくれ。清水が相手となればお前の存在が有利に働くからな」

「俺か……分かった」

清水さんは覗き騒動の際に大悟からキツイお仕置きを受けている。

一度そんな痛い目を見た清水さんは、自分に恐怖を受け付けた張本人である大悟の前ではあまり強くは出れない事が予想できる。つまり雄二は大悟をいざつてときのストッパーとして使うつもりなのだろう。

これなら話し合いの方はスムーズにいきそうだ。と思っていると、

「……………ただ一つ、気になることが」

突然ムツツリーニが口を開いた。

「……………根本がAクラスに何かの情報を流していた」

「根本君が？」

どうしてこの状況でAクラスを使うんだろうか。まあ、なにか変なことを企んでいるのは間違いないと思うけど……。

「あの陰湿野郎。一体何を考えてやがる。多くのクラスを巻き込んだ所でBクラスにメ

リットなんてないだろうに——」

バンツ！

「……………雄二……………っ！」

「大悟っ!!」

突然大きな音を上げて教室の扉が開かれる。

その向こうから現れたのはAクラスの霧島さんと木下さんだ。けど二人とも何か相当慌てているように見える。

「翔子？ そんなに慌ててどうした？」

「げっ、優子!? まさかまた俺を仕置きに来たのか!? けど俺は何もしてな」

「違うわよ! アンタら、こんな大変な状況なのに何してんのよ!!」

「は？」

「……………雄二も、どうしてまだ学校にいるの……………!」

「? お前は何を言っているんだ？」

大変な状況? まだ学校にいるの? 雄二の言葉通りこの二人は一体何を言っている

のだろうか?



「何って……知ってるでしょ！ 坂本君のお母さんと天ちゃんが倒れて病院に運ばれたって!!」

「……優子の言う通り。それなのに、どうして二人とも様子を見に行かないの……!?!」

「はあ?」

雄二と大悟が揃って間抜けた声を出す。

「おいおい……いきなり来たと思えば天が倒れた? 馬鹿言ってるじゃねえよ。アイツは産まれてこの方病気になんて一度もかかった事がねえヤツだぞ? 優子だって知ってるんだろ」

「落ちて着け翔子。こっちだったって大悟妹同様風邪すら引かない全身健康体だぞ?」

そう大悟と雄二が二人を宥めようとする。

だが、突然その二人は業を煮やしたようにそれぞれの手を取って強引に歩き出した。余程雄二のお母さんと天ちゃんが心配なのだろう。

「ほら、早く行かなきゃ!」

「……私達も、早く病院に……」

「お、おい優子! ちよつと止まれ! 一旦冷静になれってんだよ!」

「やめろ翔子！ 木下姉も落ち着け！ 俺達は今から大事な作戦が——」

「今はそんなこと言ってる場合じゃない！」

「あだだだだ！ だから大人しくなれ！ そもそもその情報どつからきたんだよオイ！」

「そうだ！ 大体俺達よりどうしてお前らが先に」

「いいからっ!!」

「だから俺達の話の話を聞——」

バンツ！

扉が強く閉められる。

抵抗も虚しく、雄二と大悟は二人にあつという間に連れ去られてしまった。

「……………」

呆然となる僕ら三人。

そんな中、ムツツリーニがポツリと呟いた。

「……………今の話はおかしい」

「え？ おかしいって、どういうこと？」

「……………普通、そういう話は最初に本人にくるはず」

そう言われてみればそうだ。

家族が倒れたなんていう非常事態が、先に身内であるはずの雄二や大悟を差し置いて第三者の霧島さんや木下さんに先にいくなんて普通に考えておかしい。

そしたら秀吉が連絡がつかなかったのではないかと、言ったがそれも変だ。二人ともずっと校内にいたのだから、先生達は校内放送などで呼べばいいのに、そんな放送は一度もなかった。

「それに……………雄二のお母さんや天ちゃんやんが突然倒れたっていうのもおかしな気がする」  
「同感じゃ。雄二の母親は分からぬが、天ちゃんに関しては持病があるなんて話は一度も大悟や本人から聞いたことがないからの」

秀吉の言う通りだ。

交通事故とかならともかく、家や学校で突然倒れるなんて、なんだか嘘臭い——

「……………待つて！ まさかさつきムツツリーニが言つてた根本君の流した情報つて！」

「……………多分、雄二の母親と天ちゃんが倒れたつていう偽情報」

「なんじゃと!」

や、やられた! 根本君の狙いは他のクラスを巻き込んで戦争を泥沼化させることじゃなく、霧島さんと木下さんを使つての二人の無力化だったのか!

これはかなりまずいことになった。清水さんを挑発する為の作戦は全部雄二任せだったつてのに、それに加えていざつてときの後ろ楯だった大悟まで……………! このままだと僕らは無策で交渉に挑むことになってしまう。

「ムツツリーニ、お主は雄二から何か聞かされておるか?」

「……………(フルフル)」

「そうか……………なら明久よ。雄二が大悟に携帯電話で連絡は取れぬのか?」

「ごめん……………僕ら三人とも携帯電話は修理中なんだ」

今さらながらに雄二の携帯をお茶に突っ込んだことと大悟の携帯を踏みまくつたことが悔やまれる。まさかこんなことになるなんて……………!

それにあの剣幕じや霧島さん達に連絡がついたとしても取り合ってもらえなさそうだし、そもそもそんな余裕があれば雄二や大悟が説得出来ているはずだ。

「確か……………ここから天ちゃんに通つてる学校は遠かったよね?」

「うむ。見積もつてもざつと数十分はかかるじやろうな」

「……………劉玄も確かそのくらい」

「そうだよね……………雄二の家もそれくらいかかるだろうし……………」

どう頑張っても二人が戻る前に交渉の時間になってしまいうだろう。

「秀吉、交渉の時間って遅らせることはできる?」

「無理じゃな。明日の放課後にするならば可能かもしれないが、放課後に何時間も待たせるなど取り合ってくれんじやろう」

「やっぱり、そうだよね……………」

クソ……………! やってくれたな、根本君……………!

「秀吉、ムツツリーニ。何かいいアイデアはない? こう、清水さんをうまく挑発できるような」

「なんとも難しいのう……………。今日のワシらは色々と動きすぎて警戒されておるじやろうからな。それこそこんな状態では雄二くらいしか挑発なぞ成功させられんじやろう」

「……………大悟もないし、お手上げ」

弱った。二人と同じで、僕だってなんの策もない。一体どうすれば……………。

「……………そろそろ、時間」

時計はもう授業終了時刻を示していた。交渉がもうすぐ始まる。

「……………どうする？」

ムツツリーニが訊いてくる。けど、

「どうするもなにも、雄二や大悟がいない以上僕らでなんとかするしかないよ」

「そうじゃな。ここまで来た以上は後には退けん」

残り時間は僅かだ。急いで用意をしないと。

こうして、僕らはクラスの命運を懸けた大事な交渉に、雄二と大悟抜きが無策で臨むことになってしまった。

—— side 大悟

「いででで！ だから止まれつつつてんだらうがコラ!!」

「ダメだ！ コイツら全く話を聞きやしねえ！」

俺と雄二はそれぞれ優子と霧島に手を掴まれ、殆ど引き摺られるように走らされていた。

先程から落ち着けやらよく考えろやらと色んな言葉を使って二人を諫めようとするが効果なし。それどころかシカトして耳を貸そうとすらしやがらねえ。このままじゃ交渉の時間に間に合わねえぞ……！

「クソ、こうなったら力づくで逃げ出すか……？」

「それが出来りゃあどつくにやってるだろうが……！」

あつ、それもそうか。

そうこうしている内に俺と雄二の家から一番近い病院が見える場所まで来ていた。おいおい、このままじゃ病院に恥かきに行くようなものじゃんかよ……と思っ

「あれ？ 大悟兄？」

不意に前から聞こえた俺の名前を呼ぶ声。見るとそこには——倒れて病院に運ばれたはずの天がこちらを見てキョトンとしていた。

それに思わず優子と霧島も足を止める。

「あれ、どうしたの天ちゃん？ この人達知り合い？」

「うん、私のお兄ちゃんとその同級生の人達だよ」

隣には友達らしきボブカットの同じ制服を着た女子中学生がいる。

おっほ！ あの子何気に俺のドストライクゾーンじゃねえか——つてそんなことを気にしている場合ではないか。

「え……!?! 天ちゃん！ どうしてここにいるの!?!」

「へっ？ ちよ、いきなりなに優子姉!?!」

バツと天の両肩を掴み、鬼気迫る表情で詰め寄った優子。

「だ、だって、天ちゃんが倒れて病院に運ばれたつて……!?!」

「お、落ちていてよ優子姉！ え？ 倒れた？ 病院？ なんのこと？」

「なんのことつて……？ それはこっちの台詞よ……」

互いに訳が分からず、頭に疑問符を浮かべている。その隣では霧島も自分が聞かされていたことと違つた為か、ポカンとしていた。

「つたく、こんなことだろうと思つたよ……」

「優子、そして霧島。いい加減そろそろ気づけ。お前らは騙されてたんだよ」

「だ、騙されてた……?」



「…………どういふこと？」

俺と雄二はその事をこと細やかに説明した。

そしたら二人はようやく分かつてくれたようで、俺達の事情に納得した表情を見せた。やれやれ……。

そもそもそんな不明瞭かつ具体性のない情報を鵜呑みにするんじやねえよと思う。しかもそれを吹聴してきた相手はあの卑怯・陰湿・高飛車と人間の嫌な性格が三拍子揃った根本だ。内容が内容とはいえそんな野郎の発言をすぐ信じないで欲しいものだ。

「ま、何にしろこれで助かったな。雄二」

「おう。けど、今から戻っても遅いか……」

ふう、と一息つく俺と雄二。

ここから学校まではそこそこ距離がある。恐らく走って戻ったとしても二十分はかかってしまう。それでは交渉の時間には確定で間に合わないだろう。

「取り敢えず根本の野郎には後日お礼参りをするとして、これからどうすつか……」

「どうもこうもねえよ。こうなつちまつたら後は明久達に任せるしかねえさ」

雄二の言葉に俺はそうだな、と返す。

正直不安要素しかない。秀吉と同志はあまり口八丁が上手くないし、明久に至っては清水と完全に敵対している。更にその場には島田も同席してることもあり、挑発どころ

かまともな話し合いになるのかどうかすら怪しいレベルだ。また昼間の演技同様グダになる可能性が高い。

ま……でもそれしか方法がないからそれにすぎるしかないんだがな。こうなったらもう腹を括って待つしかない。

「んじや、俺らは結果をのんびり待ちつつ飯でも食うとするか。折角だ、三人ともウチ来いよ。ご馳走してやるからさ」

「お、いいのか？ なら丁度腹も減ったことだし、お言葉に甘えようじゃねえか」  
「……雄二が行くなら、私も行く」

「なら私も御相伴に預かろうかしら。大悟の手料理が食べられるなら楽しみね♪」  
「あ、なら私も一緒に帰る！ どうせ友達を連れていくつもりだったし！」

てことで俺達はそのまま帰宅した。明久、頑張れよー。

## 第六十一問 第二次Dクラス戦 〔開幕〕

——side 明久

『我々Dクラスは、Fクラスに対して宣戦布告を行う！』

放課後の交渉から翌日。

朝のホームルームの終了直後にDクラスの男子がやって来て高らかにそう告げた。

「? なんじゃと?」

「おいおい、どうなつてやがる秀吉。昨日電話で聞いた時には失敗だつて言つてたじゃねえか」

「う、うむ。確かにそうだったはずなのじゃが……」

近くで秀吉と大悟がそう言いながら疑問符を浮かべている。

大悟はあの場になかったからともかく、秀吉は僕らの一連の流れを知っているため、驚くのも無理はない。

「ムツツリーニ。状況は分かるか?」

雄二がムツツリー二に尋ねる。

「……………昨日何があったのかはわからない。ただ、今日は朝から清水が興奮していた」

「清水が？ だとすると、挑発は成功していたんじゃないのか？」

「いや、昨日の結果を見る限りそんなことはあり得ないのじゃが…………。明久、お主、あの後に何か話しておったのか？」

「どうなんだ？ 明久」

「い、いや。別に」

「……………」

秀吉と大悟の探るような視線から思わず顔を逸らす。

この二人は妙なところで勘が鋭いから、下手な事を言おうものなら更に自分の首を絞めることになる。だからここは敢えて何も言わない方がいいだろう。

「…………まあいい。それよりもまずは目先の試召戦争だ。ここまでやってDクラスに負ければ何の意味もない」

「それにDクラスから宣戦布告を貰えたことでBクラスの件も一先ず解決したしな」

確かに、これでBクラスは僕らが戦争を終えるまで手出しは出来なくなつた。

試召戦争のルールでは一つの戦争が終わった後に点数補充をする時間が設けられる。

そうすれば仮にBクラスから宣戦布告をされたとしても万全の状態で臨むことが可能だ。まあ、Bクラスは前に僕らによって辛酸を舐めさせられてるから、準備が整った状態の僕らに対してそう簡単には攻めてこないと思うけど。

けど、まだ全てが解決したわけじゃない。ここからは点数の少ない状態でDクラスの相手をしなくてはならないという本命作業が残っている。

「それで雄二、作戦は？」

「考えてある。だが、その前に戦力の確認だ」

そう言つて、雄二は教壇に上がった。

「野郎ども、よく聞け！ これより俺達FクラスはDクラスとの試召戦争に突入する！」

Dクラスの宣戦布告でザワついていた教室が静まり返る。

そのまま続けて雄二が言ったのは『全員自分の今の点数を紙に書いて持つてこい』というものだった。僕らは先日の覗き騒動のせいで補充ができていない。その為姫路さんと美波以外で戦える人材がどれほどいるのか確認しておきたいのだろう。

クラスの皆が紙とペンを取つてそれぞれ書き出していく。

「そう言えば、ワシはあまり消費しておらんな」

「え？　そんなの？」

あれ？　でも最後の夜には秀吉は大悟と一緒に落合先生達と戦っていた筈だけど。

「うむ。よくよく思い返せばあの時は大悟一人で全員を倒してしまったからの。ワシは殆ど見ていただけなのじゃ」

「そうだったんだ」

確か相手は教師とAクラスの女子生徒含めて五、六人はいたはずなのに……それをたつた一人で倒すなんてヤバすぎる。やはり社会科目においてなら大悟は化け物レベルだと言わざるを得ない。

でも、それなら今は都合がいい。これで女子二人に加え秀吉もフルで戦える。

「よし、これで全員分揃ったな」

僕を含めたクラス皆のメモを受け取り、雄二はそれをパラパラと捲り皆に呼びかけた。最初は点数下位の十人に回復試験をそれぞれ数学、世界史、化学、保健体育と分けて受けさせるらしい。ちなみにうちの主砲の一人である大悟もここに振り分けられている。

それを疑問に思った僕は雄二に聞いた。なぜわざわざそんな細かく科目を分けるのかと。早く点数を補充するなら一括、特に採点の早い数学に揃えた方がいいのに。

「今回は勝つことよりも時間稼ぎが目的だ。戦術云々というよりは心理戦による睨み合

いが必要になる」

その状況で一つの科目だけを点数補充していたら、相手にこっちは準備が整っていないと教えてやってるようなものだ、と雄二は語る。

しかし僕らが点数補充をしていないのは相手にバレている。そんなことをしても向こうは警戒なんてしないんじゃないだろうか。雄二の言いたいことは分かるけどそれで相手が二の足を踏むとは思えない。

「そこを警戒させるのが作戦つてもんだろ。まあいいから見ている」

雄二が点数の書かれたメモを見ながらノートに布陣を書いていく。それを横から覗き込んでみると、

「あれ？ 僕は点数補充じゃないの？」

僕の配置は開戦直後の渡り廊下になっていた。どうやら防衛戦に参加させるようだ。

「お前はまだ点数が残っているからな。まずは戦死して点数がないやつから補充していく。ウチの最高戦力である大悟をここに入れたのもその為だ」

「そっか。僕は鉄人としか戦つてないから点数は残っているんだった」

「そういうこつた。それに、お前は特別な人材だからな」

「特別つて、いやあ、そんな……」

「なんだか結構な評価をされてるようで少しむずがゆい」

「今回の作戦でもお前は重要な役どころになる。キツいだろうが耐えてくれ」  
「了解。そこまで言われたからには頑張るしかないね」

プレッシャーには慣れてるけど、こうやって期待されてるのも悪くない。

——side大悟

キーンコーンカーンコーン……

戦争開始時刻である午前九時となった。

「開戦だ!! 総員! 戦闘開始!!」

『いよっしやあああーっ!!』

怒号と共に先行部隊が開幕ダッシュで現場を目指して走り出す。



雄二曰く、今回は防衛が主軸となるため、どんなに有利な状況でも決して深追いはしないのでひたすら防御に徹しろとのことだ。

こつちでまともに戦えるのは女子勢と秀吉だ。ただでさえ戦力差は歴然なのに下手に深追いすればすぐに返り討ちにされてしまうだろう。妥当な作戦だと思う。

「よし、それじゃあ補充試験を始めるぞ。該当する者は筆記用具を持ってそれぞれの科目を受けてくれ」

お、呼ばれたか。

そんじゃこつちも自分の仕事をこなすとしますか。俺はお気に入りのめるたんシャープペンシル（レモンの香り）と消しゴムを取り出した。

——— 回復試験開始

「……………」

世界史のテスト問題をスラスラとテンポよく解いていく。

ふむふむ。今回の問題は中世ヨーロッパからが殆どか。丁度いい。今度描こうと思っていたオリジナル同人誌の時代設定をこつちら辺にしようと思つて調べていたから難なく解くことができているぜ。

名前は……そうだな……『パンが無ければオトコ♂を食べればいいジャンイ♡♡♡  
フランス王女様が下々の民の為に肉便器になっちゃった♡♡♡』なんていいかもな。

——妄想タイムスタート

『オラア！ オラア！ 王女様の処女マ○コのナカに革命すんぞオラア!!』

『ああつ♡ ああん♡ らめええ♡ 革命されちやうく♡ 下々の汚ならしい極太チ○  
ポが奥まで入ってパンパン突いてくりゆうううううう♡♡♡ このままじゃ落城し  
ちやうのおおおおおお♡♡♡♡』

『とどめだつ!! 今こそ自由の為に勃ちあがれええええつ!! 民衆を苦しめた王女に厳  
正なる裁きを与えてやるんだよオ!! 俺達の怒りを思い知れ孕めオラアアアアア  
アアア!!』

『ああああああああつ♡♡♡♡ らめええええええええええ♡♡♡♡』

——妄想タイム終了

「………売れるな（確信）」

そうニヤニヤしていると、

『もう話しかけないでって言ったでしょ！ いいからこつちに来ないで！ ウチのことは放っておいてよ！』

後ろから島田の怒鳴り声と乱暴に扉を開ける音が聞こえた。

どうやら明久が性懲りもなく島田に話しかけたようだ。バカかアイツは。あれだけ昨日盛大にやらかしたのにそんなすぐ怒りが治まるわけがないだろうて。全くデリカシーのない野郎だ。

——— 回復試験中

「……うし、こんなもんだろ」

そうこうしているうちに俺はキリのいいところまで問題を解き終え、担当の田中に問題用紙を渡した。

「相変わらず解き終わるのがとても速いですね。岡崎君は」

「そうですか？ いつものことつすよ。んじや、採点の方よろしくお願いするつす」  
「分かりました。ちよつと待っていて下さいね」

田中はそう言つて俺の問題用紙を見始める。

この人は採点が遅いかわりに点数の付け方が他よりも全然甘い。多少のケアレスミスなら大目に見てくれるだろう。

俺は後を任せて席を立ち、雄二の所に報告に行った。丁度そこには姫路もいる。

「雄二、終わったぜ」

「お、そうか。ならお前と姫路にはしばらくここに残っていてもらう」

「おう。任せ——え？」

「えっ？」

率直にそう言われた。

「私達は何もしなくていいんですか？」

「そうだけ雄二。折角補充までしたんだから戦わせろよ」

姫路が首を傾げ、俺はそう反論する。

特に姫路なんかは全体的に点数も高いから、防衛戦において無敵に近い戦いが出来ると思うんだが。

「それは向こうだってそう考えるだろうな」

「??？」

やけに回りくどい言い方だ。

「いいか？俺達の目的は制圧じゃなくてあくまでも時間稼ぎだ。なのにわざわざそこ

に主戦力であるお前らを突っ込むなんて勿体無い真似はしない」

「でも、守るのが目的ならそれでもいいんじゃないですか？」

「拮抗状態を作るのには、何も戦力強化だけじゃない。向こうの戦力を少しずつ削っていくことも方法の一つだ。大悟。もしお前がDクラスの代表である平賀と同じ立場ならどう立ち回る？」

雄二が俺にそう質問してきた。

「そうだな……とりあえず姫路を警戒して自分の周りに壁をつくるかな」

前回は姫路がFクラス所属であることを知らなかったのと、俺達が近衛部隊を惹き付けていたという二つの要因があつてアイツらは負けた。

なら今回は前回同様人数で攻めるよりも外堀を固め、まず不意討ちを防ぐことに重点を置くと思う。

「そうだろ？ つまりそれが俺たちの狙いだ。姿の見えない姫路やお前を警戒させてクラス代表の防衛に戦力を割かせる。向こうの戦力が少なければこっちの戦力の消耗も少なくて済むからな」

「それなら、補充試験が出来ていない人達でもなんとか戦えますね」

「いざって時の防衛戦にもなるな」

「前に平賀は姫路に一杯食わされているし、大悟を侮って痛い目を見てるからな。面白

いように警戒してくれてるだろうさ」

ふーん、そういうことか。

普通ならともかく、今のこの状況だからこそ使える作戦だな。最も警戒すべき姫路は姿を見せず、かつ平賀は例の覗き騒動のせいで点数があまりない。これはもう完全に自分の首を取りにきてると考えるのが自然的だ。そうなれば向こうは俺達同様戦力になる女子生徒を側に配置する筈だ。

「ま、それだけじゃなくまだ手は打ってあるんだがな」

「ふーん。んじゃ俺と姫路は……」

「まあ、しばらく自由にしてていいぞ」

そう言って再びノートに視線を戻した雄二。

また前線で暴れられないのは残念だが、ここで俺一人文句を言っても仕方ない。言われた通りにしておこう。

「——つまりな、明久はラブコメの主人公と同じだ。ちょっとやそつとのアピールじゃ全くヒロインの好意に気づかん鈍感野郎なのだよ」

「そ、そうだったんですかっ!? た、確かに明久君はここぞという時に限って勘違いをすることが多いですけど……」

「残念だが、そういった主人公には全くと言っていいほど、自分が女の子に好かれているという自覚が無い。だから、その典型的ともいえる明久を振り向かせるとなると、今の姫路の恋愛レベルではハッキリ言って戦力不足。困難を極めると言ってもいいだろう」

「そ、そんなあ……」

「……だがしかあし!! だからといって攻略法が完全に失われたわけではない! お前にはその知識量を補えるだけのヒロインとしての基礎ステータスがちゃんと備わっているのだからなあ! だからしっかりとした手順を踏み、その場のシチュエーションに適応したアクションを適宜行えば、例え明久みたいな超絶高難易度野郎だろうといずれ墮とす事が出来るのだ!」

「お、岡崎君っ! それを是非教えて下さいっ! お願いしますっ!」

「よかろう! 大船に乗ったつもりで俺についてこい!」

「はいっ!」

姫路はメモとペンを持ち、前のめりになって俺の話当真な表情で聞いている。

そんな彼女に俺がこれまでの経験（二次元）とデータから編み出した明久攻略方『必殺奥義・ラブコメ主人公落城の計』を伝授していると、

ガラッ

「今帰ったよ」

「お、戻ったか明久」

丁度話題にあがっていた明久が帰ってきた。

すると、明久は俺と姫路を見つけるとこっちに向かって近づいてきた。

「あ。明久君?!? お、おかえりなさい!」

「無事だったみてえだな、明久」

「あれ? 二人とも教室にいたんだね」

「おう。雄二から俺達には待機命令が出るからな」

「ふうん。そうなんだ。それに随分楽しそうだったけど、何を話してたの?」

「ふえ!?! いえっ、その、なんでもないですよ!?! ね、岡崎君!?!」

「おっそうだな」

姫路が慌ててメモとペンを隠して誤魔化す。

分かつてはいたが、こんな最高のヒロインである姫路にここまで好かれてるコイツは



本当に幸せ者だな。まあ勿論ムカつくことはムカつくけど。

「それで明久。首尾はどうだ？」

「ああ。うん、一応言われた通りにしてきたけど……それより、そろそろ作戦内容を教えてよ」

明久が雄二に作戦の開示を求めた。

雄二はそれを承諾し、先ほど俺と姫路に話したことをそのまま明久に伝える。

今回の目的は制圧ではなく時間稼ぎであること。

主戦力である姫路を敢えて出撃させず、クラス代表の防衛に戦力を投入させてこつちの消耗を少なくさせること。この二つだ。

それに明久がなるほどと納得していると、ここから雄二は俺達にも伝えていないことを話し始めた。

「だが、それだけでは不十分かもしれないからな。更にダメ押しをしておいた」

「ダメ押し？」

雄二曰く、そのダメ押しとは同志にとある情報をDクラスに流していたということらしい。その情報とは『FクラスがDクラスとの開戦を望んでいた』というもの。

その話が伝わればDクラスは余計に俺達を警戒する。人間とは自分達に勝ち目がない限り無謀な勝負はしない生き物だ。つまりFクラスは何か自分達を討てる策があるのではないかと疑心暗鬼に陥り、手が出しづらくなると。

更に、俺が清水との話し合いを終え教室でエロゲーをしている間に明久と雄二はDクラス前をウロウロ歩いていたらしい。最初は点数補充をしていないとB、Dクラスにアピールするのが目的だったが、今となつては『どうして校舎が違うのにも関わらず吉井と坂本がいたのか。あれは本当は自分達を開戦に踏み切らせる為の芝居じゃないのか』という疑問の種になるのだと。

「偶然が二つ三つと重なるとは考えないのが人間だ。その向こうに何かあるんじゃないか、と疑問に思うのは当然だろうさ」

「「……………（ポカーン）」」

「ん？ どうしたお前ら？」

なんていうか、凄すぎて言葉が出ねえ。

「神童未だに健在と言えはそこまでだが……少なくとも普通じゃそこまで一手二手どころか四手ぐらいまで先を読む思考は持っていない。天才どころか最早奇才の域じゃないか？」

歴史上に「発明王」としてその名を残したトーマス・エジソンは『天才とは1%のひ

「らめきと99%の努力である」という名言を残したが……コイツを見てるとその言葉の真実味がぐらつきそうになってくるぜ。

「向こうは今頃開戦を後悔し始めている頃だろうな。得られるものは何も無い上に負ければ最低ランクの設備に格下げなんていうハイリスクノーリタンの戦いだ。何かきっかけがあればすぐにでも休戦に応じるだろうよ」

雄二がニヤリと白い歯を覗かせる。

「きっかけがあれば、ってことは、更にダメ押しをするんだね?」

「ああ。最後にもう一つ手を打つ。敵の頭を討つ為にな」

「敵の頭っていうと、Dクラスの平賀君? でも、そんなことができるなら休戦なんて――」

「いや違う。お前の相手は平賀じゃない」

平賀じゃないとなると、それ以外で考えられるのは……アイツだ。

そう言うのと、雄二は明久の目をしっかりと見て言い放った。

「明久。お前には屋上で清水との一騎討ちをしてみよう」

——side 明久

「こんなところに一人でいてくれて良かったです。貴方に話がありましたから」

僕が屋上で一人で待っていると、待ちわびていた相手の声が聞こえてきた。

良かった。本当に来てくれたみたいだ。間違いない。その姿はDクラスの清水さんだ。

「話って、何かな？」

歩み寄ってくる清水さんに問いかける。

「そう難しい話ではありません。要するに——白黒はつきりさせましょう、というだけですよ。幸いにも今は試召戦争の真っ最中ですし、わかりやすく決着をつけることが出来ずから」

清水さんの後ろには落合先生の姿が見える。

「どうやら準備は万端のようだ。」

「わかったよ。勝負だ、清水さん」

僕がそう言うと、清水さんは落合先生の方を向いて告げた。

「先生。召喚許可をお願いします」

「うん、分かった」

落合先生の許可の下、召喚フィールドが発生した。

「試召モンスター召喚」!!」

二人同時に喚び声をあげると、僕らの足元に幾何学紋様が現れた。

その中心から僕らの分身である召喚獣が姿を見せる。

僕らはそれぞれ召喚獣に構えを取らせながら睨み合い、お互いに隙を窺う状況が続く

中、

「……そう言えば、勝負を始める前に一つ確認しておきたいことがありました」

清水さんが僕に問いかけてきた。

「何かな？」

「昨日の話ですが」

「うん」

「あれは、この戦争を起こす為の狂言ですか？ あの交渉も、最後の言葉も」

「それは……」

即座に答えられず、言葉につまる。

今更何を言ったところで清水さんは信用してくれないだろう。昨日の演技も交渉も全て、僕らは美波を利用してDクラスを挑発しようとしていたのは事実なのだから。

「どうなんですか？」

「……………」

「そう、ですか……」

僕は返す言葉を持たない。

召喚獣にも動きがなく、しばらく沈黙の状態が続く。

清水さんは俯いて召喚獣から目を離している。

そうしていたのは、ほんの数秒程度だっただろうか。

「……………泣いて、ました」

不意に、清水さんが震える声で呟いた。

怒りを伴う、静かな口調だ。

「……………お姉さま、昨日走り去る時に…………泣いて、ました」

言われて、昨日のことを思い出す。

確かに昨日の交渉にて、美波は清水さんの言葉を聞いて涙を浮かべ走り去った。その

言葉とは——

『演技とは言え『好き』とまで言ってくれたお姉さまを放って姫路さんを追うなんて、普通は考えられません。もしかして、お姉さまのことを男だとも思っているんじゃないですか?』

僕はその台詞を一言一句忘れていない。

「きっかけは、美春の言葉です。…………でも、原因は、原因は…………っ!!」

清水さんが顔を上げた。

その顔は僕に対する烈火のごとき怒りが見て取れた。

「お前が……！ お前の様な男がいるから……っ！ お姉さまが——」  
「っ！」

「——お姉さまが、泣く羽目になるんです!!」

その言葉を合図に、清水さんの召喚獣が突っ込んできた。

——side 大悟

上から何者かによる喧騒が聞こえる。

どうやら予定通り、清水と明久が一騎討ちを始めた様だ。

「アイツらがおっ始めたようだな。よし、俺達も行くぞ。大悟、姫路」  
「おうよ」

「あっ、はいっ」



雄二の後に続いて俺と姫路も立ち上がり、教室を出ていく。

そして戦場となっている廊下をこつそりと通り抜け、屋上に続く階段へと向かった。

「けどよ、まさかあんな方法を考えるとはな」

「ん？ なにがだ？」

その途中で、俺は雄二にそう声をかける。

「確かに雄二の考えたやり方なら確実にDクラスが休戦に動いてくれるだろうし、清水も納得してくれるに違いない。けどよ、その代わりに明久がとんでもないことになるんだぜ？」

「そりやそうだな。けど元々この戦争の引き金を引いたのはアイツだし、俺達はいわばそれに巻き込まれた被害者といっても過言じゃない。そうだろ？」

「ふむ……それもそうか」

「ああ、だから明久には……自分のケツは自分で拭いてもらわねえとな」

そう言う雄二の顔は、いつも通り悪い事を考えている顔をしていた。

## 第六十一問 第二次Dクラス戦 〽終結〽

— side 明久

Dクラス 清水美春 112点

世界史 VS

Fクラス 吉井明久 41点

「どうしてお前のような下郎がお姉さまの傍にいますのです！ どうして気持ちを弄ぶ下衆がお姉さまと言葉を交わしているのです！」

「ぐっ……！」

駄々っ子のように振り回される清水さんの召喚獣の剣。

その一撃一撃全てが、僕の腕を痺れさせるほどに重かった。

「どうして、お姉さまを利用する為に平然と嘘をつく外道が友人面をして近くにいられるのです！」

清水さんの言うことは、何も間違っていない。

美波が泣く羽目になったのも。

僕らが美波を利用していたのも。

そして……故意じゃないとはいえ、僕が美波を傷つけてしまったことも、全て事実だ。今更それらを訂正するつもりもない。

でも、

「……確かに、僕は君の言う通り、人間として酷い男なのかもしれない……何を言ったところで薄っぺらい妄言に聞こえるかもしれない……けど！」

でも、それでも僕は……！

「たった一度だって僕は……嘘なんてついて……いない……！」

ガツ！

「なっ!!」

相手の剣を木刀で受け止める音が響く。

そして、僕の召喚獣は鈍い音を立てながらも、木刀で相手の剣を弾いた。

「僕みたいなバカにだって、言っつていい嘘と悪い嘘くらいわかる!! 昨日のあれは、紛れもない僕の本心だ!!」

そもそも僕は……あんな場面で嘘をつけるほど器用な人間じゃない!

「っ!! まだそんな戯れ言を……!!」

「戯れ言……そうだろうね。君にはそう聞こえても仕方ない。けど、例え君が何を言おうと、僕をどれだけ罵り、貶し、否定しようとも、僕の美波に対するこの気持ちは……絶対に揺るがない！」

剣を真正面から受けたせいで木刀が折れかかっている。

おおよそ三倍近い点数差がある相手と押し合ったせいでかなり消耗している。こんな状態で勝ち目なんてあるわけではない。

「と、と……とん美春の癪に障るブタ野郎ですね……貴方は!!」

「けど、負けるもんか……!!」

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚!!」」

「「えっ?」」

不意に屋上に響く召喚の声。

目をやると、そこには――

Fクラス 岡崎大悟 630点

世界史 &

姫路瑞希 338点

それぞれの召喚獣を携えた大悟と姫路さん。そしてその二人を従えた雄二の姿があった。

一気に混戦状態の廊下を抜けてここまで来たのだろうか。

「よお、楽しそうだな。俺達も混ぜてくれよ」

そう言つて不適な笑みを浮かべる大悟。

その横では姫路さんがゆっくりと前に出てきていた。

「岡崎先生……!?! どうしてここに、まさか……伏兵……!?!」

清水さんが驚愕した表情で大悟を見つめている。伏兵つてことは、まさか――一騎討ちに来た清水さんを二人がかりで潰そうとしているのか!?! そんなのあまりに卑怯すぎるじゃないか……!!

「雄二! 大悟! いくら大事な勝負だからって、そんなやり方は間違ってるよ! そ

れに姫路さんまで連れてくるなんて……!」

僕がそう訴える。しかし、

「悪いが、これは勝負じゃなくて戦争なんだ。俺にはクラスを守る義務がある」

「卑怯? 間違ってる? それがどうした。勝ったヤツが正義、負けたヤツは悪……そ

れが戦争つてもんだろ。あんまり甘えこといつてんじゃねえぞ、明久」

「ということですので……ごめんさいっ! 手加減は一切しませんからっ!」

そんな血も涙も無いような言葉が三人から返される。

すると、大悟と姫路さんの召喚獣は僕と清水さんを取り囲むように間合いを取った。学年トップクラスの成績を誇る姫路さん。社会科目においてだけなら右に出るものはいない程の点数を持つ大悟。そんな二人に清水さん一人が敵う訳がない。

「行くぞ、姫路!」

「はいっ!」

指示を受けた二人の召喚獣は、それぞれの武器である金棒と大剣を持ち直し、構えた。

「や、やめるんだ姫路さん！ 大悟——」

「やれ」

僕の制止が入る間もなく、大悟と姫路さんの召喚獣が一気に仕掛ける。

そして、金棒と大剣による最大級の威力を持つであろう攻撃が、巨大な衝撃と共に激突した。

ズガアンツ!!!

——僕の召喚獣に。

「……………え？」

頭が一瞬思考を放棄する。

そして、段々と状況を理解し始めた時、僕の全身に強大な何かが迸るのを感じた。

「いつつたあああああああああああああああああああああつっつ  
!!!?」

意識が混濁するほどの激痛……いや、最早“痛み”という概念を遥かに超越したような感覚が全身を暴れ回る。

それに耐えきれず、思わず地面に倒れてのたうち回る僕。

「このままいくぞ姫路！俺に合わせろ!!」

「分かりました！息を合わせましょうっ!」

すると、再び大悟と姫路さんの召喚獣が構えた。

え、ちよつと待っ——

「おりやあああああああああああああ!!!」

「やあああああああああああ!!!」

ズバグシャバキザシユドゴブシャゴトシユビボゴツ!!!

「あああああああああああああああ!!!? なんてえええええええ!!」



互いの得物が僕の召喚獣を前後ろからサンドバッグのように連続で殴り付け、斬りつける。僕の召喚獣は一方的にボコボコに打ちのめされていった。

当然、僕にもその衝撃や痛覚がフィードバックで来る為、その想像を絶する苦痛を否応なしに味わわなければならない。

な、なんで……特に姫路さん……！ どうしてこんな事を……!?

「こ、これも私と明久君の距離を近づける為なんです……鈍感なラブコメ主人公は正ヒロインに一度は酷くボコられる物だつて岡崎君が言っていたんです……！ 大丈夫……きつとうまくいきます……っ！」

姫路さんがボソボソ何か言っているようだが、痛覚によって僕の聴覚は殆ど機能していないようで、全然聞き取れなかった。

だが少なくとも、絶対に他人を傷つけるような真似をしない優しい姫路さんが自らこんな行動をするとは到底考えられない。ということは……あのバカ共に何か吹き込まれたかあっ！

「これでトドメだ！ 力込めろよお姫路いっ！」

「はいっ!! 岡崎君っ！」

「ま、待つて姫路さん！ 駄目だよ！ 君は騙されてる！ そんなキモオタの虚言に惑わされな——」

必死になって命乞いで言葉を放つ僕。

しかしながら僕の切なる願いは届かず、二人は全力で攻撃を叩き込んできた。

「はあああああああああああああああああつっつ！！！！」

グシヤア……

僕の召喚獣の頭部は金棒によって潰され、胴体は姫路さんの大剣によって貫かれていた。

「な、なし……て……？ 僕が、一体……何をした……と……？」

無惨な姿に変わり果てた自らの召喚獣の隣で、僕は痛みで意識を失いかけていた。そんな様子をずっと静かに見ていた雄二が口を開く。

「清水。この通り全ての元凶は粛清した。これで今回の件を水に流しては貰えないだろうか」

「……そうですね。まだまだ美春の怒りは収まりませんが……先生と姫路さんがそこま

でしてくれたのです」

彼女は大きな溜息をついて、

「この豚野郎を放課後まで補習室に軟禁すると言うのなら休戦を受け入れましょう」

「約束しよう。明久はこれで戦死したから補習室行きだ。あとは放課後になるまでそれぞれの教室で点数補充でもやって時間を過ごせばいい。その間コイツはずっと鉄人の餌だ」

な、なんという外道な取引なんだ……！

この痛みの上に、更に鉄人の地獄のフルコースを放課後まで受けていろつて言うのか  
!?

「……まあ、もしあの言葉が嘘だったとしたら、この程度では許しませんでした、今回はこの辺で勘弁してあげましょう」

その発言と共に、落合先生の召喚フィールドが消えた。

「よし！ それじゃ交渉も成立したし教室に戻るか。お前ら！ 引き上げるぞ！」

「うーい！ あーやつと終わった」

「そ、それじゃあ明久君。また後でっ」

「補習室で自分の過ちを反省し、たっぷり懺悔することですね」

屋上からぞろぞろと四人が去っていった。痛みを悶え苦しむ僕を置いて。

「ま、まさか姫路さんにまでやられるなんて……最悪だ……」

そう呟き、全身の突っ張るような痛みを耐えながら身を起すと、

P O N

「ん？」

突然僕の肩に手が置かれる感触がした。

その掌の大きさと強さに嫌な予感がしつつもゆっくりと振り向く。そこには――

「ウエルカム」

嫌な笑みを浮かべた鉄人の姿があった。

——— 放課後

——— side 大悟

「このクソ大悟！ よくもあんなにボコボコにしてくれたな！ しかも優しい姫路さんにまでバカな事吹き込みやがって！ 今度という今度は許さない!!」

「うるせえクソ明久！ もとはと言えばテメエが撒いた種だろうが！ むしろあの程度で済ませてやっただけありがたいがたく思いやがれバーカ！」

「なんだとキモオタコラ！」

「文句あんのか観察処分者コラ！」

補習室からボロボロになって帰ってきた明久がいきなり俺に掴みかかってきた。

どうやら俺と姫路にメタクソに叩きのめされたことを相当根に持っているようだ。

「まあまあ落ち着くのじゃ二人とも」

俺と明久の間に入り喧嘩を仲裁する秀吉。

それにより明久も少し冷静になったのか、俺の胸ぐらから手を離れた。ああもうやめ

なさいよ。せつかくのお気に入りに入りTシャツにシワがつくでしようが。

「……仕方ない。大悟とは後で決着をつけるとして……」

上等だコラ。

「四人とも、まだ帰ってなかったんだね？」

現在は授業時刻も全て終わり放課後。

勿論Fクラスの野郎共はとつと帰ってしまい、教室に残っているのはいつもの五人しかない。

「ああ。ちよつと気になることがあったからな」

「気になること？」

「うむ。何でも、ムツツリーニが面白いものを聞かせてくれるらしいのじゃ」

「同志が面白いって言うくらいだからな。期待が膨らむんじゃないか？」

隣では秀吉も雄二同様満面の笑みを浮かべていた。凄く楽しそうにしてやがる。

俺もまだ詳しい内容は知らないが、概要だけ聞くとメチャクチャ中身が気になることだけは間違いないだろう。

「……………明久も聞いていくといい」

そう言って同志は卓袱台の上に小型の録音機を置いた。

「面白いものねえ……。なんだろ？」

「まだムツツリーニも詳しく中身を聞いてはいないようだが、面白いことは間違いないらしい」

「……………保証する」

「(0°・▽・) w k t k」

自信満々に頷く同志。

じれつたいなあ、早く聞かせてくれよなあ〜頼むよ〜。

「ねえ、ところで中身はなにかな？」

「ああ。ムツツリーニ曰く、とある男女の会話らしいぞ」

「男女の会話…………？」

「ワシらが気になっていた一件の顛末がよくわかる会話じゃ」

そしてニコニコと笑顔で明久を見た俺達四人。

それを見て、ようやく明久も俺達が何か企んでいるのではないかと思ったようで、ただ表情が固くなった。

そんな中、同志がレコーダーのスイッチを入れて中身を再生した。

P i

『この話し合いに何の目的があったのかは知りませんが、美春はもう貴方を恋敵として認めるようなことはありません。お姉さまの魅力に気づかず、同性として扱うだけの豚野郎に嫉妬するなんて時間の無駄ですから。……お姉さまの魅力がわかるのは美春だけです』

レコーダーからは聞き慣れた女子生徒の声聞こえてくる。これは……、

「あれ？ この声って……」

「Dクラスの清水の声じゃな」

『……なんです？ 美春に何か言いたいことでもあるんですか？』

清水の声が続く。

うーむ、声色から察するにご機嫌ななめの様だな。まあ、状況が状況だったから仕方はないのか。そのまま静かに聞いていると、突然明久が狼狽え始めた。

「つて、ちよ、ちよつと待って！ この会話つてまさか！」

「ご名答。これは、お前と清水が昨日の放課後に何を話していたのか、その一部始終を録音したものだ」



「いやあああーっ!」

『うん。一つだけ。清水さんの誤解を解いておきたいんだ』

『誤解? 何がです? お姉さまと付き合っているというのが演技だという話なら既に知っていますけど?』

『いや、そうじゃなくて……その……美波の魅力を知っているのはキミだけじゃないって』

お、ここで明久選手! 負けじと清水選手に言い返したー!

「ちよちよちよちよつと! なんて物を再生してくれてるのさ! 冗談じゃない! 早く止め——」

「大悟、秀吉」

「ほいよー」

「了解じゃ」

「むぐっ!? んむーっ!!」

俺は明久を羽交い締めにして動きを封じ、秀吉が明久の口を手で塞いだ。

よし、これで邪魔が入らず静かに明久の言葉が聞けるな。おらわくわくすつぞお!

『何を言ってるんですかっ！　いつもお願いに悪口ばかり言つて、女の子として大切に扱おうともしないで！』

『うん。それは清水さんの言う通りかもしれない』

『だったら、お姉さまの魅力の何を知っていると云うんです！』

『確かにお姫様みたいに扱っているわけじゃない。男友達に接するみたいに雑な態度になつているかもしれない。けどね——』

『けど、なんですか？』

明久がこれ以上はヤバいと思つたのか、より一層激しく暴れる。

だが残念だつたな。貴様ごときのパワーでこの俺の自慢の逆三角形から逃れられると思うなよ。

そして、レコーダーからは——

『——けど、僕にとつて美波は、ありのままの自分で話ができ、一緒に遊んでいると楽しくて、たまに見せるちよつとした仕草が可愛い、とても魅力的な——女の子だよ』

「「「……………」」」

まさかの混じりっ気なしのド直球ヒロイン墮とし宣言。

いつもの明久からは考えられない程の男らしき溢れる言葉に、俺を含めた四人全員が驚いた顔をして明久を見つめていた。笑ってやろうと思ったのに、その気持ちは一瞬にして消え去ってしまった。

当の本人は恥ずかしさのあまり頭から湯気が出ている。

「な、なんていうかアレだな。反応に困るな……………」

「……………あ、ああ。意外だった……………」

「う、うむ……………もう少し婉曲に言ったものとはかり思っていたが……………」

「……………直球勝負」

明久を放すと、コイツはその場にドタツと膝をついて崩れた。

「き、聞かれた……………。よりもよってこの四人に……………」

相当キている様だな。

「明久。お前、意外と言う時は言うんだな」

「な、なぜかワシも鼓動が速くなって凄いのじゃが……………」

「……………男らしい」

「さすが明久。ラブコメ主人公としての能力がカンストしてやがるな」

「忘れろっ！ お前ら全員、さっきまでの記憶を一つ残らず消し去れえええっ!!」

そう言つて明久がやけくそ気味に拳を振り上げてきた。俺がそれをいなす構えを取ろうとすると、突然同志が何かの気配を感じ取つたらしく、廊下に飛び出していった。

「ん？ 急になんだつてんだ同志よ」

「……………油断した」

戻つてきた同志は苦々しくそう呟く。

話を聞くと、どうやら先程までの音声を誰かに聞かれてしまったようだ。わーお、なんて良くも悪くもナイスなタイミングだろうか。

それを聞いた明久は咄嗟に同志に詰め寄つた。

「ムツツリーニ！ 相手は誰!？」

「……………多分、張本人」

「「え」」

張本人と聞いて、明久はホツとした表情を見せる。

おそらく清水あたりだと勘違いしているのだろう。だが俺と雄二と秀吉は分かつてしまった。それは清水じゃない。ヤツがもうここにくる理由などないし、仮に聞いてい

たとしたら何かしらの行動を起こすだろう。ただ聞いてその場から逃げ去るなんて清  
水らしくない。

つまり、同志のいう『張本人』とは……………

「……………ああ、す、すまねえな明久。まさか聞かれているとは思ってなくてよ……………悪戯が  
過ぎたぜ」

「すまん明久。まさかこれほどの物とは思わなかった」

「すまぬ明久」

「……………ごめん」

「え？ どうして皆が頭を下げて謝ってるの？」

まさかアイツがまだ学校に残っていたなんてな……………全く気がつかなかった。

「まあ、別にいいよ。張本人が相手なら。それより、悪いと思うんなら美波との仲直りに  
協力してよ。アレ以来ずっと険悪なままなんだから」

「いや、それは多分大丈夫じゃろうな」

「そうだな。仲直りどころか……………」

「……………うん」

「よかつたな明久。またハーレムに逆戻りだ」

「へ？」

明久は分かかっていない。だがそれでもいい。

コイツが分かかっていなくても、向こうは明久の本心を知ることができた。それだけで、彼女の心にポツカリと空いた穴は塞がった。ならそれでいいじゃないか。ヒロインというのは一度や二度の傷を受けてようやく一人前なのだ。それは二次元も三次元も変わらない。

まあつまり……何が言いたいかというと……、

「姫路。お前の恋敵ライバルは一皮剥けたぜ」

——とある場所

「んむーっ！ んぐーっ!!」↑（猿轡&ロープで縛られた根本）

「いやはや、今回もまあやってくれたもんだねえ？ 根本くん？」

「さて、この野郎には邪魔をしてくれたお礼をたっぷりしてやらないとな」

「……お義母さんや岡崎の妹さんを利用するなんて……許せない」

「そうね。アタシも前々からコイツは気に入らなかつたし、遠慮も要らないわよね」

根本を取り囲むように立つ俺、雄二、霧島、優子の四人。

目的は勿論、このクズ野郎の抹殺だ。

「んぐ………！ んぐうーっ!!」

激しく抵抗する根本だが、猿轡のせいで言葉が出ていない。

さあ、早速始めようか。

「さて、お前にはこれから前回よりも更にレベルアップした仕置きを受けてもらうんだが……今回それを担当するのは残念ながら俺達じゃない」

「……!?!」

「ああ。丁度お前に会いたいという人達がいてな。話をしたら喜んで引き受けてくれた

よ」

「……既に待たせてある」

「でことで、早速呼ぶわね。どうぞー!」

ガチャリ

「あゝゝら♡♡ ようやく出番かしらあ♡♡ もう待ちくたびれちゃったわああん♡  
♡」

「私もうムラムラして我慢の限界なのよおゝゝ♡♡」

「それで大悟ちゃん? 例の恭二ちゃんはどこにいるのかしらああん♡♡」

扉を開けて現れたのは、俺と同志による共同作品である根本の女装写真集のファン達だ。ちなみに全員心は女性(♀)の筋骨隆々マツチヨマンである。

「……」

一気に顔が青ざめた根本。どうやらこれから何をされるのか察したようだ。

「大悟ちゃん。あの子、本当に好きにしちやっついていいのかしら?」

「遠慮なく骨の髄までタベちゃうわよ、私達?」



「いいですよ。これは悪いことをしたアイツへの仕置きなんで、手加減せずにバンバンやっちゃって下さい」

「ありがとう大悟ちゃん。それじゃ、これは約束のお礼よ。少ないけど、皆で美味しい物でも食べてくれるといいわ」

「毎度ありー」

ファンの一人から報酬金を受け取った。あとは彼ら……いや、彼女らに任せるとしよう。

「よーし、帰ろうぜ野郎共ー」

「はーい」

そのまま根本とファン達を残して俺達は立ち去る。

後ろで何かギャアギャアわめいているようだが、そんなにファンとの交流が楽しみなのか？ 喜んでくれているようで良かった良かった。

「それじゃあ……楽しいコトをしましょうね恭二ちゃああああん♡♡♡♡♡」

「……………っ!!!」

その後、根本恭二を見た者は誰もいないという……

---

学園長室

「失礼します、学園長」

「おや、来たね高橋先生。それで、例の企画はどこまで進んでいるんだい？」

「はい。既に如月ハイランドパーク及びテレビ局との打ち合わせ。参加者である生徒への支給品の準備。そして……アレの開発も完了しています。あと一日程あれば始められるでしょう」

「ご苦労。それじゃあ引き続きよろしく頼むよ」

「わかりました」

ガチャッ

「さて……いよいよ開幕さ。あのバカ共の存在とその有り余る行動力……大いに有効活用させて貰おうかね」

『文月学園×如月グループコラボ企画　　〵〵逃走中〵〵』

## 逃走中編

## 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 序

—— side 大悟

やあ読者の諸君。岡崎大悟だ。

突然なんだが、君達に一つだけ質問をしたいと思う。なあに、誰にでも答えられるような簡単な質問だから気軽に答えてくれ。それでは早速——

——君達は、“夏”に対してどんな印象を抱いているかな？

おっと、少し漠然としすぎてしまっただろうか。まあいいか。

夏と言えばなにか。ふむふむ……イベントが盛りだくさんの楽しい季節。ただ暑いだけの憎たらしい季節。女の子の露出が増える最高の季節……それぞれ色んな考えを持っていることだろう。ちなみに俺も最後の考えには賛成だ。なぜなら女子小学生も

薄着姿になり、その発展途上の身体を惜しげもなく晒すという至高にしてエロスの——  
—おっとそこの君、今すぐその持つている携帯電話を置くん。110番はしなくていい。

さて、話が少々脱線してしまっただが……そんな多くの意見が飛び交う中、この俺、岡崎大悟が夏に対して抱いている印象は……人間が最も活発化する季節なんじゃないかと思っている。

そう断言する根拠としては、前述にもあつた通り、夏には多くの野外イベントや行事が盛りだくさんだ。

海水浴、夏祭り、プール、避暑地でのキャンプ、甲子園、音楽フェスティバル、果てはコミックマーケットなど……他の季節に比べても圧倒的な数を誇っている。あとはそうだな……ちよつと微妙なラインだが学生なら部活動の引退試合なども含んでもいいかもしれない。

そして、そんな素晴らしいイベント達の立役者となっているのが、この夏という素晴らしい季節だ。別にこれらは夏じゃなくても十分楽しめるものばかり。しかしなぜ夏だけがこんなにもピクアップされるのか。うだるような暑さ、耳をつんざくような蝉の自己主張、そして燦々と照りつける太陽の輝き。これら全てはその特別な行事をより魅力的に引き立たせるスパイスなんだと思う。

家族、友人、恋人……そんなかけがえない人達との忘れられない思い出を作り、共有したい。外に出て、この時期ならではの熱気を感じ、賑やかな喧騒に顔をしかめながらも、焦がすような日差しを全身で浴びたい。止まらない汗を拭い、思いつきり身体を動かしたい。それこそが夏という季節を限界まで楽しむ為の方法であり、その延長線上として、前述のイベント達が存在しているのだろう。そりやあ普通の人間なら気持ちがいっつもより高ぶるのも無理はないだろう。

つまり、夏とは人間の心だけでなく、物事さえもそこに秘められている魅力や娯楽性を倍増させてしまう。まあ簡単に言うと『どんなイベントも夏にやれば楽しい』ってことだ。俺は今までずっとそう思っていたし、これからもその考えが変わることはないだろう。けど――

「うわあああああつ!! 見つかったああああー!!」

「つてオイ明久ア!! テメエなにハンター連れてこつちに逃げて来やがんだボケエエエエツ!!」

「つていうかそもそもハンター共速すぎだろおおおおいっ!!」

「ま、待つて欲しいのじゃああああー! ワシを置いていかないでくれえええーっ!!」

「……………捕まる訳には……………っ！」

「いやああああっ!! 来ないでくださいーっ！」

「うえええっ!? なんで前から来るのよおおーっ!?」

『……………(ドドドドド)』

——これに限っては、絶対違う。

『『逃げろおおおおおおーっ!!!』』

必死に逃げる俺達の後ろには、そんな俺達の気持ち嘲笑うかのごとく迫り来る黒い影……………またの名を——ハンター“狩人”。

さて、どうしてこんな事になってしまったのか……………。そう、事の発端はおおよそ今から数時間前、今朝のことまで遡る…………。

## 数時間前

「「??」」

いつも通りの平日。

俺はこれまたいつも通りのメンバー、相棒の木下秀吉とその姉、木下優子の三人で学校に登校していたのだが……、

「……なあ秀吉、優子。今日って学校休みだったか?」

「い、いいや。そんなことはないはずよ。でも……」

「これは一体……どうということなのじゃ?」

俺達はその光景を疑った。

なぜなら……いつもなら生徒達の姿が見える筈の校庭に、俺達三人以外の人間が誰一人として存在していなかったからだ。

「いやいや、普通の登校日でこれはおかしいだろ。……ハッ!? もしや何かの手違いでパラレルワールドに飛ばされたのか俺達ア!」



てことはどこかにこっちの世界の俺達がいるはず！

や、やべえ……確か同じ自分に出会っちゃまうと三日後に死ぬって言われてるよなあ……!? それにパラレルワールドの世界の人間ってのはほぼ全員が特殊能力を持ち、本来の世界の自分を殺そうとしているという設定が定石だ。この前やったギャルゲーも最終的にはヒロインが主人公を掛けてもう一人の自分と殺し合いを繰り返すというバトル展開になったんだよな……。

いやだ！ そんな方法で死にたくねえ！ 俺はまだやりてえことがいっぱいあるし、葉月ちゃんをはじめとした全世界のロリ達よりも先に逝くなんてまっぴらごめんなんだよお！

こっちなつたら……仕方ない。

「殺られる前にこっちの世界の俺を殺っちまえばいい……」

「さつきから何アホなこと言ってるのよ大悟。でもまさか、人影どころか気配すらないなんてね……」

「もしや、何かの事情で急遽休みになったののう?」

「だとしたらアタシ達か親に連絡が来るでしょう? それに他の人達は知ってるのにアタシだけ知らないってのもおかしいじゃない」

「むう、それもそうじゃの……」

事態がイマイチ飲み込めず、どうすればいいのか分からずにいる俺達。すると、

「おはようございます。お三方様」

「「？」」

不意にどこからか声を掛けられた。

良かった、俺達以外にも人がいたようだ。

なんだくやつぱりちゃんといるじゃねえかよ。そう安堵しつつ俺は声の聞こえた方向へと振り向く。しかし、

「岡崎大悟様、木下優子様、そして弟の秀吉様ですね？」

「？ お、おう。確かにそうだが……」

そこにいたのは、生徒でも教師でもない。

黒のスーツにワイシャツ、そしてこれまた黒いネクタイにサングラスといった、まるでSPのような格好をする一人の女性だった。

えっと……誰だコイツ？

「お待ちしておりました。早速ですがこちらを」

「いやいや、ちよつと待て。その前にアンタは誰だ？ 学校の関係者じゃねえだろう？」

俺はそう彼女の話を切って尋ねる。

するとこっちの予想よりも早く、彼女は俺達にこう返答してきた。

「私は今回のこのコラボ企画の運営に携わる如月グループのスタッフでございます。決して怪しい者ではございません」

「如月グループ?」

「コラボ?」

「スタッフ?」

そう淡々と告げられるも、益々訳が分からなくなる。なにいつてんだコイツは。

一応如月グループという名前だけは聞き覚えがある。なにせ俺や明久、そして雄二は清涼祭や如月ハイランドパークの件で散々引つ掻き回され、個人的に因縁があるのだ。その為あんまりこの会社にはいい印象を持っていないというのが俺の本心だ。

だがなぜそのスタッフが文月学園にいるんだろうか。それと彼女のさっきの『待っていた』という台詞はどういう意味なのだろうか。もしかして、この誰もいない状況と何か関係があるのか?

「そういうことですので、早速こちらを」

「あの……コラボって一体何の事ですか？ アタシ達何も聞いてないんですけど」  
「私の口から説明するよりも、こちらを読んでいただく方が早いかと」

「は、はあ……」

と、スタッフの女性はやや押し気味に優子に何かのプリントを渡してきた。  
それを隣で一枚受け取り、中身を確認する。えつと、なにになに……？

如月グループ主催特別コラボイベントのお知らせ

くく逃走中くく

くく史上最速のハンターから逃げ切れ！くく

今回、我が文月学園と如月グループ、

某テレビ局の三者による共同イベントを開催する事になりました。

そして厳正なる選別の結果

見事貴方はこのイベントの参加資格を取得しました。

真におめでとうございます

学園初の試みとなる本企画

どうぞ心行くまで楽しんで頂ければ幸いです。

【日時】 本日9：00〜終了時刻未定

【場所】 文月学園 如月ハイランドパーク 如月ドーム

【参加生徒一覧（クラス混合、五十音順）】

文月学園第二学年：岡崎大悟、木下秀吉、木下優子、霧島翔子、工藤愛子、久保利光、坂本雄二、島田美波、清水美春、土屋康太、姫路瑞希、吉井明久、etc……

※なお、本企画は後日某テレビにてオンエアされる予定なので悪しからず。

「……………」

「……………」

「……………」

沈黙する俺達三人。そして……、

「……………Really?…」

思わず口から出たのは、その一言だった。

「……んで、どう思うよ。これ」

俺達はあの後、女性スタッフの指示に従い体育館へと移動した。

そこには既に他の参加者も集められており、皆同様この企画について疑問を持っているようだ。

「どうもこうもねえ。あのババアと如月グループが組んでるとなりやあ、またなんか企みがあつて当然だろ」

「あ、やつぱり雄二もそう思うんだね」

そう訝しむ態度を見せるのは、俺の悪友でありFクラスのバカコンビ。坂本雄二と吉井明久だ。

それもそのはず。俺達はあのババアと如月グループには散々な目に会わされた記憶がある。怪しむのは至極当然な反応と言えるだろう。

「しかし、まさかその内容がこれほどとはもう……」

「……………大規模過ぎる」

秀吉と同志が先ほどスタッフから渡されたプリントを見つつそう呟いた。

——逃走中

おそらくこの日本で最も有名な鬼ごっこの名称だろう。

現在某テレビチャンネルにて不定期に放送されている特番の一つで、様々な場所を舞台に『ハンター』と呼ばれる存在から制限時間一杯まで逃げ続け、逃走成功者には賞金が与えられるという人気バラエティ企画だ。

しかし、ただ逃げ続けるわけではなく、途中で課せられる様々なミッションや自首制度。果ては裏切り者の登場などといった、視聴者を毎回楽しませてくれる要素も盛り込まれているのだ。

「どうやら、学園長もかなりこの企画には力を入れているようだね。ここに来るまでに数多くのスタッフらしき人物を見かけたよ」

「あ、久保君。久保君も参加者だったんだね」

「やあ吉井君。その通りさ。だから今日は一日、よろしく頼むよ」

「うん、こちらこそよろしくね」

同じく参加者である久保が、トレードマークであるメガネをクイツと釣り上げながらそう言った。

ところなしか、明久を目の前にして嬉しそうな表情だ。

「でもよ、ババアはなんでまた如月グループと組んでやがんだ？ 俺達と同じで連中のことはあのババアも良く思つて無えだろうに」

「確かに、大悟の言う通りだよね」

「そりゃあ、如月グループは文月学園の大手スポンサーの一つだからな。前回のウエディング体験しかり、世間体や学園ブランドを物凄く重視するかつ多額の資金援助を受けている立場上、そう易々と向こうが出してくる要求を断れる訳が無い」

「要は権力者の犬つてことか。あのババアめ……」

「しかも今回はテレビ局まで加わつておるらしいからの。益々学園長は協力せざるを得なかつたんじゃない」

「……………権力の前には逆らえない」

あんのババア……普段は俺達のことクソジャリとか呼んでるくせに、お偉いさんにはヘコヘコするイエスマンかよ。とことん癪に障るな。

恩が無けりやあ真つ先にぶちのめしていたところだ。

「それにしても、一体何をさせられるんでしょうか……………」

「ウチも同感。逃走中ってホントなんなのかしら？ こんな格好までさせて……」



「……私も、わからない」

「そう？　ボクは内容を知ってるから結構楽しみだけどね」

そんな俺達に対し、女子勢達が口々にそんなことを呟いた。

ちなみに俺達は今いつもの制服姿ではなく、スタツフから渡された企画専用の衣装に着替えていた。それぞれのイメージカラー（？）に合わせたTシャツにハーフパンツ。そして腰のポーチには携帯電話と謎の機械（？）があった。

ああ、もうこれ完全に逃走者のする格好だわ。

「え？　工藤さんと木下さん以外の三人は見たこと無いの？　逃走中」

「すみません。私、バラエティはあまり見る方では無くて……」

「ウチも、殆どドラマとかサスペンスとかなのよね」

「……私も」

「ちなみにボクはバラエティは結構好きだよ。アメ○ークとかロ○ハーとか」

「アタシも秀吉と一緒に色々見るわね。イツ○Q!とか有○の壁とか」

明久の質問にそう答えた姫路、島田、霧島の三人。

分からなくはない。島田は昨年までドイツにいたのだから日本のバラエティ番組にあまり馴染みが無さそうだし、姫路と霧島はキャラ的にそうだろうなとは思ってた。こ

の二人が部屋でテレビを見ながら口を開けて笑ってる姿はあまり想像が出来ない。

ま、逃走中については俺達が今説明せんでも後々発表されんだろ。

「それにこれって確かテレビ中継されるのよね？ どうしてそこまでするのかしら？」

「文月学園のPR……とかそういう目的でしょうか？」

「……如月グループが関わっているから、それだけじゃないと思う」

そう言えばそうだったな。ふむ、このメンツに加えて裏を引いているのがあのババアと如月グループ。そしてこの模様が全国に流れるということは……

「ふむ。つまり向こう側はハンターに無様に捕まる情けない雄二達を国民達に指差して笑って貰おうっていう魂胆なんだな」

「なるほど。明久達が呆気なく捕まる姿を画面の向こうから高らかに笑って馬鹿にしてやろうって考えか。そいつは傑作だ」

「そうだね。なんの見せ場もなく捕まって牢獄にブチ込まれる大悟達を見るのは実に愉快、痛快、爽快だもんね。その気持ちは凄いい分かるよ」

「「……………！！（ガンのくれ合い）」」

「たまに疑問に思うんだけど、アンタら三人って実は友達じゃないわよね」

なんて失礼な。そんなことは断じてない。

「何をバカなことを言いやがるんだ島田よ。なあお前ら？」

「そうだよ美波。僕らの友情は一生ものだよ」

「まったくくだ。俺達は決して崩れることのない永遠の信頼関係で結ばれているんだからな」

((——利用価値がなくなるまでは))

「今なんか心の声が聞こえたような気がするわ」

「豆腐よりも脆い友情じゃな……」

ああ素晴らしきかな漢の友情。

こんな固い絆で繋がれている俺らの姿は、自他共に認める本当のダチと言えるだろう。

俺は確信した。今回のこの逃走中において、コイツらは大いに活躍してくれるに違いないと。

((——囃として))

「またなにか心の声が聞こえたような気がしました……」

「最早豆腐を超えてゼリーやプリン並じゃな」

そこまですては無い。少なくともコンニャクくらいの固さはある筈だ。

なんて話をしていると、

《選ばれし逃走者の諸君。戦いの舞台へようこそ》

『！！！！』

突如どこからともなく体育館全体に響き渡る謎の声。  
どうやら壁のスピーカーから流れている様だ。

《これより如月グループ主催、文月学園共同コラボ企画『逃走中』を始める。まずは基本的なルール説明を行う。前方のステージに注目したまえ》

「ステージ？」

「……………」

その声に従い、前方にあるステージに顔を向けた俺達。

すると、一般的な学校でもよく鑑賞会や発表会などで使われるであろう大きなスクリーンが天井から降りてきた。

「あれは……スクリーンみたいだね」

「何が始まるんでしょうか？」

「ルール説明とかって言ってたけど……あ、なにか映ったわよ」

### 《ルール説明》

・これより君達12人は『逃走者』となり、『ハンター』と呼ばれる存在から制限時間一杯まで逃げ続けなければならない。

・ハンターに捕まればその場で失格。牢獄送りとなりゲームからリタイアとなる。

・見事逃げきった逃走成功者は、賞金として百万円を受け取る事が出来る。

・指定されたエリアの外に逃亡したり、ハンターへの妨害行為（暴力、取り押さえ等）は禁止。もしこれらを行ってしまった場合は問答無用で強制失格となる。

見た感じ、どうやらオーソドックスな逃走中のルールの様だ。

その中でも、俺達が特に注目する点としては、

「嘘!?! 賞金百万円!?!」

「百万円って……かなりのお金ですよ!?!」

「………凄い」

「へえ、さすがは如月グループ。随分太っ腹だね〜」

「学生のアタシ達にもちゃんと賞金って出るのね。意外だね」

そう、逃走成功時の賞金の額だ。

それを見て他のヤツら、特に姫路や島田は驚いた様子を見せる。無理もない。百万円なんて額、学生にとっては夢のような大金だ。

「ひゃ、百万円もあつたら、これまで欲しかったゲームや漫画も買えるし、普通どころか豪華な食生活にもありつけれるじゃないか……!」

「百万円か……最新鋭の防犯設備を揃えるだけじゃなく、ALOOKも雇えるな……」  
「……………最新の撮影道具が一式買える」

「百万円ともなると、使い道が多くて迷うのじゃ……」

もちろん俺達男子勢も興奮せざるを得ない。

しかし百万円か……それだけあれば現在絶版になってしまいプレミア価格と化したエロゲーをはじめ、まだ持っていないアニメBlu-rayBox、最新版のペンタブ、ゲーミングパソコン、未購入のアニメグッズ、フィギュア……全て一括で揃えられるじゃないか! ああ、想像しただけでヨダレがとまんねえぜうひひひひ……。

《そして今回の逃走中は特別ルールとして、ステージを二つに分けて行う。第一ステージの舞台となるのはここ、文月学園の敷地内全てだ》

「え？ 文月学園全部がステージになるの？」

「ほう。そりゃあ面白い」

「随分と壮大じゃのう」

「……………（コクリ）」

なるほどな。どうりで学校内に生徒も教師もいないわけだ。

しかし、まさか学園の敷地内全てを逃走エリアにするとはい。久保の言ってた通りババアもこの企画には本気の様だな。

そして、淡々と放送が続く。

《君達逃走者には、我々が指定したとある一ヶ所のルートを見つけて、この文月学園を脱出してもらう。制限時間は10分だ》

「10分？」

「結構短いですね……」

「へえ。最初からかなりトばして来るね」

「笑つてる場合じゃないわよ、愛子」

《そして、もし制限時間内にクリア出来なかった者は、その時点で強制失格とし、第二ステージに進むことは出来ない》

「失格だと？ そりやあまたハードだな……」

「いきなりキツイのが来たね……」

隣で明久と雄二がそう呟く。だがまさにその通りだ。

文月学園はたかが一教育施設のくせしてそれなりに規模があり、建物が旧校舎、新校舎などと幾つかに別れている。10分という限られた時間の中で、そこからたった一つの出口を探すとかなり骨がある作業だ。それに加えエリア内を徘徊するハンターに見つかからないように移動しなくてはならない為、逃走者は必然的に苦戦を強いられることになるだろう。

さすが逃走中。分かつてはいたがやることがえげつねえなあ……。

《それでは、これよりハンターを二体投入する、再びステージに注目したまえ》

シユウウウウ……バンツ！



「……」

放送の声がそう告げた途端、演出用のスモークが一気に噴出し、ステージを包み込む。皆の視線が一気に集中する中スモークを分けて現れたのは、電話ボックスぐらいの大きさをした二つの箱であり、それぞれその中には、

「あれが……ハンターっていうの？　なんだか怖いわね……」

「そうですね、美波ちゃん。私もちよつと不気味に思います……」

二体のハンターが、無表情で俺達の事を見下ろしていた。

上下黒のスーツにサングラスという見た目と、一切表情を崩さないまるでロボットのような顔つきは逃走者達に言い知れぬ恐怖感を与えていた。

初めて生で見えたが……うん。アレに追いかけるのはさすがの俺でも怖えわ。

「……きやー、怖いー」

「待て翔子、どさくさに紛れて俺に抱きついて来ようとするな。明らかにカタコトだし怖がつてないだろお前」

「……そんな事は無い。雄二は乙女心が分かってない。だからモテない」

「分かるかなんモン——ってだからって今度は腕を引つ張るんじゃねえ！ 胸に当たってんだろうが！」

「……雄二は冷たい」

こんな時でも霧島は相変わらずだなあ。そして後ろでは明久と同志が血の涙を流しながら『逃走中の前にコイツを殺す……！』って顔で睨んでやがる。全く喧嘩っ早いヤツらよ。三次元ごときでそこまで取り乱す事も無かろうに。

「木下さん。ゴメン。ちよつと開始前に身体を温めておきたいからエスカリボルグを貸してくれない？」

「アタシ？ 別にいいけど……はい吉井君」

「待て木下姉！ 今の状態のそいつにソレを渡すな！ 俺の命に関わる！」

ちよい待ち。そもそもなんで優子今エスカリボルグ持つてんの？

「ありがとう木下さん。お礼に良いことを教えてあげるよ」

「良いこと？ 何かしら？」

む、良いことはなんだ？ 俺も気になるぞ。

すると、明久は俺の方をチラ見して優子に言った。

「うん。実はこの間、木下さんに内緒で大悟が秋葉原で女性コスプレイヤーと仲良く会話をしてて」

「唸れ俺の黄金の両足！ 必殺高速エスケープ！（グシャツ）」

「へえく。ソウナンだ。教えてくれてアリガとう。吉井君（ゴゴゴゴ）」

「足首の骨がああああーっ!!」

駆け出した瞬間。俺の右足首がショットガンのような速さと威力で蹴り碎かれた。明久テメエ！ それ絶対優子には内緒だっただろうがあああ！

「大悟。アタシ何度も言ってるわよね？ アタシの知らない所で他のメス豚と喋ったら許さないって。どうして約束を守ってくれないのかな？ カナ？」

「メス豚だと!? 優子テメエ！ あの方はなあ！ コスプレ界限では知らぬ者無しと言わしめるほどの伝説の女性コスプレイヤー様なんだぞ！ そんな神に等しき存在である彼女を侮辱するのは俺が許さ（ベキヤツ）」

「質問にはキチンと答えなさい？」

残った左足首まで蹴り碎かれた。

なんて事を！ そうやって無抵抗の人間を痛めつけるなんて、かつての優子はそんな悪逆非道な人間じゃなかったのに！ チクシヨウ誰が！ 一体誰が彼女をこんな風にしやがったんだ！

「お主じゃろ」

「お前だろ」

「……岡崎だと思う」

「……同志で間違いない」

「岡崎ね。間違いない」

「あははっ、相変わらずだね。優子も岡崎君も」

「えっと……愛情にも色々な形がありますから、元気出してください」

皆ひびこや。

——  
閑話休題

《それでは、第一ステージを開始する。ハンター放出まで、残り十秒前、九、八……》

「えっ!? もう始まるんですか!?!」

「ま、待つて! ウチまだ心の準備ができて……」

「しかも十秒つて、全然猶予が無いじゃない!」

「と、とにかくここから離れるのじゃ!!」

「……………散会……………っ!」

ダダダダダッ

一斉にその場から走り出し、散り散りに逃げ出す逃走者達。

だが、俺はまだ動かない。何故なら俺には慌てなくても確実に逃げる事の出来る作戦を思い付いたからだ。

《六……五……四……》

「……む？ 明久、雄二。お前らは逃げないのか？」

「ああ。ついさっきいい作戦を思いついてな。これを実行すれば俺は安全確実にハンターから逃げられる」

「奇遇だね。僕も同じ事を考えていたよ」

「フツ……俺達、やっぱり似た者同士ってワケか」

「全くだな」

「そうだね」

《……三……二……》

やれやれ、俺も焼きが回ったもんだぜ。まさかこんなバカ共と同じ思考回路になっていたとはな。つくづく環境は人を大きく変えるものだ。

だが……丁度いい。全員が同じ考えだというのなら話は早い。

《一……》

「……………」

俺達三人はそれぞれの顔を見合わせ、コクリと小さく頷いた。そして下半身に深く力を込めながら姿勢を低くし、呼吸を整える。よし、準備万端だ。  
後はそのタイミングを……しっかりと見極めろ!!

《……ゼロ!》

「……だあつ!

バツ

「死に晒せえええーっ!!!」

ハンター放出と同時に、俺と明久と雄二はそれぞれめがけて拳を放っていた。

「テメエら! やっぱりそういうつもりでいやがったなこの野郎!」

「テメエらこそ卑怯な真似しやがるじゃねえか! この恥知らず共!」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるっ!」

コイツら! 真横にいる俺に蹴りを食らわせて気を失わせ、そこをハンターに狙わせ  
て自分は逃げようとするなんて、なんて人情の欠片もないゲス野郎共なんだ! ぜつ  
てえ許せねえ……! (※特大ブーメラン)

「上等だ！ ならハンターの前に貴様らを片付けてやらあ!!」

「それはこつちの台詞だあつ!!」

態勢を立て直し、間髪入れずに二人に掴み掛かる。

不意討ちが不発だった以上、この二人を沈めるには正面から正々堂々叩き潰すしかねえ！ だがコイツらは日に日に喧嘩の腕を上げていやがるから、生半可な攻撃は通用しない。

この勝負……一番最初にマウントを制した者が勝つ！

『あの、美波ちゃん。明久君達を止めなくてもいいんですか?』

『いいのよ瑞希。それよりもウチらが逃げ切る事が大事なんだから。バカはほっときましよう』

どっかからそんなやり取りが聞こえたような気がするがどうでもいい。それよりもまずはこのバカ共をひねり潰すのが先だ！

「くたばれカスや《二体のハンターが起動。そして真つ先に視界に捕らえたのは……岡崎大悟、吉井明久、坂本雄二の三人だ!》なにいいいいっ!?!」

一旦手を止めてステージの方に目をやる。

すると、放送の声の言葉通りハンターが二体とも俺達に向かってダツシユで迫ってきていた。

「クソっ！ これは喧嘩なんざしてる場合じゃねえぞお前ら！」

「分かってる！ ここはひとまずヤツらから逃げるぞ！ 続きはその後だ！」

「オーケー！ 一時休戦ってわけだね！」

『……………（ダダダダダ）』

背後から段々と聞こえてくる二つの足音に背を向け、俺達は急いで体育館を抜け出した。

さあ、恐怖の鬼ごっこの始まりだ。



## 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 壱

「いよいよ始まりましたね。学園長」

「ああ。さて、これからたつぷりと見せてもらおうかね……バカ達の一念を」

「ええ。私も少し楽しみです。彼らが一体、どこまでやつてくれるのか」

—— side 大悟

《残り時間、七分》

『……………（キョロキョロ）』

「チツ……………ここにもハンターがいやがるな」

一緒に逃げていた明久達と分かれて三階に上がり、周囲をよく見渡せる場所の影に隠れて様子を伺っていると、廊下を徘徊するハンターの姿を見かけた。

「まずいな……………これじゃあ下に降りれねえぞ」

今までは画面の向こうから見ているから分らなかったが、こうして実際に参加してみてわかった。ハンターの動きはマジで読めない。待ち伏せや連携などの小癩な手は使わないのだが、その代わりにどこからともなく不意討ちで現れる神出鬼没さと底知れずの持久力やスピードを兼ね備えている。最早ハンデどころの話じゃない。これらのことから、ヤツらの行動を予測するのは不可能と断言していいだろう。

しかし、ずっとこのまま隠れているワケにもいかない。制限時間が設けられている以上、こちらは否応なしに表に出て動かざるを得ない。でもそしたらハンターに見つかるリスクが高まる。

「こうなったら、多少のリスクを犯してでも窓から校庭に飛び降りるか……」

三階からの落下だ。着地に失敗すれば逃走どころの話じゃなくなり、俺はお茶の間にお届け出来なくなるくらいにグロッキー状態になるかもしれないが……。

「けど迷ってる暇は無え。よし、そうと決まれば——」

「あつ、岡崎君！」

「オウチツ!!」

思わず変な声が出た。誰だコノヤロウ！

「良かった。無事だったんですねっ」

「なんだ姫路か。脅かすんじゃねえよ……」

全く、この状況で背後から声を掛けるのは心臓に悪いからやめて貰いたい。大悟さんは見かけによらず繊細なんだからもっと丁寧に扱いなさい。

すると、姫路は申し訳なきように頭を少し下げた。

「ご、ごめんなさい。一人では心細かったのでつい声が出ちゃって……」

「まあいいけどよ。幸いハンターにもバレてねえみてえだし」

ハンターは一瞬こちらに視線を向けた様だが、すぐに何事も無かったかの様に搜索を再開していた。ほっ、危ねえ危ねえ……。

「ハンターがいるんですか？」

「ああ。たまに離れてはくれるんだが、そしたらまた別のハンターが来やがる。だからマトモに動くことさえ出来ねえんだ」

「そうですよね。私もさつき見つかってしまつて大変な目に合いましたし」

「ん？ そうなのか？」

「はい。そのせいで美波ちゃんともはぐれてしまいました……」

そう言つて姫路はしょんぼりと項垂れる。

詳しく話を聞くと、始まつてからしばらくは一番信用出来る島田と行動を共にしていたが、ハンターと遭遇してしまつたとのこと。

そしたら島田が『ウチがアレを引き付けて置くから、その隙に瑞希は安全な場所へ避

難して』と提案し、自らが囹となってハンターを遠ざけてくれたことで、自分はこうしてなんとか逃げられているらしい。

なるほど、それは確かに賢明な判断だ。いくら女性であろうとハンターはその手を緩めることはない。更にその脚力はアスリート並ときた。

そんな化け物相手に身体能力の低い姫路が正攻法で逃げ切れるのは最早不可能に等しい。だからこそ島田は、少しでも互いに生き残れる確率の高い方法を選んだのだろう。

「美波ちゃん……大丈夫でしょうか……」

心配そうに呟く姫路。その表情はどこか申し訳なさげだ。

おそらく自分のせいで島田に迷惑をかけてしまったとも思っているのだろう。私の足が遅いから、身体が弱いから……大方そんな理由だろうか。

そんな姫路に対し、俺はハンターを見張りながら言った。

「心配すんな。まだ確保情報が来てねえってことは島田は無事だ」

「え？」

逃走中では、もしハンターに確保された逃走者がいた場合は全員の携帯端末に一斉に確保情報が送信されることになっているか、今回の場合なら放送で発表される。

しかし第一ステージが始まってから確保情報どころか、まだ一件のメールも来ていな

い。つまり島田はそのハンターから逃げ切ること成功しており、現在もどのかでゲームを続行出来ていることになるのだ。

「それじゃあ、美波ちゃんは無事なんですね。良かった……」

心底安心したのかホッと胸を撫で下ろす姫路。

全く、こんな状況でも他人の心配をするとはな。その優しさが仇とならなきやいいんだが。

——すると、ハンターが廊下から立ち去ったのが見えた。

「よし、今だ。行くぞ姫路」

「あ、はいっ」

俺達はその隙に三階を脱出。そのまま正面玄関から外へ出て校庭へと急ぐ。

途中一度ハンターとすれ違いそうになるなどのアクシデントはあったが、咄嗟の判断で空き教室に隠れることで難を逃れた。

ただその時に間違えて教卓の下に二人同時に隠れてしまい、姫路と密着してしまうという、もしこれが二次元の女の子だったらうっぴよおーっ！ と狂喜乱舞するオイシイ展開もあった。

「すまねえ姫路……うっかりこんな所に」

「いえ、仕方ないですよ……でもちよつとここに二人はキツイですね」

「ああ。そうだよな——」  
むにゅっ……

「……………」

「岡崎君？ 急に黙りこんじやってどうしたんですか？」

「イヤ、ナンデモネエヨ？」

「あの、言葉がカタコトになってますけど……」

ちよつとだけ、同志の気持ちがあつたような気がした。

——校庭

「大悟、姫路！ お主ら無事じゃったか！」

「おお相棒。それに同志もいるじゃねえか」

「……………捕まつてなくて良かった」

「そちらこそ、無事で何よりです」

校舎から校庭に出ると、既に先に出て来ていたらしい秀吉と同志が駆け寄ってくる。

おそらく考えは一緒で、第一ステージ突破の為の脱出ルート探しだろう。

「それで秀吉。例の脱出ルートは見つかったのか？」

「うむ。それが正面入り口も裏口も全て閉まっている様なのじゃ」

「なんだって？」

「……………教師用の駐車場も確認してみたが駄目だった」

そう力なく告げる二人。

「そんな……………それじゃあ、学校から外への出入口は全て封鎖されているってことですか？」

「……………（コクリ）」

「チツ……………、そう簡単にはクリアさせねえってワケか」

てつきり脱出しろとかいうから、必然的にその内のどれかだと思っていたが……………今思えばその考えは実に浅はかだった様だ。

だいたいこのゲームの企画発案者はあのババアだぞ！あの性悪老人がそんな誰でも思いつくような場所をわざわざ脱出ルート選ぶわけが無えじゃねえか！

どうやら俺達はすっかり向こう側の思惑に嵌まってしまったようだ。クソツ！想像力が足りなかったぜ……………っ！

## 《残り時間、五分》

「……………もう時間がない」

「そうじゃの……………どうするか、大悟よ」

「どうするつたつて言われても……………出入口が全部違うとなると、あと脱出ルートになりそうな所なんて思いつかねえぞ……………」

「他にどこか、心当たりがある場所は……………」

「……………うーん……………」

俺たち四人は輪になって考えるも、一向にそれらしき場所は思いつかない。

このままではタイムアップとなり、第二ステージに進めなくなってしまう。

冗談じゃねえ！ こんな初手であつかりと敗北してたまるか！ 俺の事を待つてくれている二次元の女の子達の為にもなあ！

「……………このままこうしても仕方ない。かくなる上は……………」

俺はポケットから携帯電話を取り出す。

これは支給された物だが、逃走者全員の端末番号が入っており、いつでも連絡を取り





雄二の声に混じって明久の声も聞こえる。

「どうやら分かれて以降、ヤツらは行動を共にしている様だ。仲良しめ。」

「なんだ。明久もいたか。お前ら今どこにいるんだ?」

『今は新校舎の三階だ! 丁度三年のクラスの前あたりに——つておい! 前からも来てんじやねえか!』

『うわっ! 本当だ! 挟み撃ちにされちゃつてるよ雄二!』

『わかつてる! こうなりやあ仕方ねえ! てことで大悟! また後でかける!』

「え? おい、どうした? お前ら——」

ブツツ プー、プー……

「どうじゃった?」

「いや、それがなんか『後にしろ』とか『前からも来てる』とか言つてたぜ」

「……………言葉から察するに、二人はハンターに追われてる」

ああ、やつぱりそうか。

何かから逃げてたつぽいし、それで間違いないだろうな。

「しかも挟み撃ちとも言つてたから、アイツ多分ら二体のハンターに見つかったみてえ

だな」

「あれが二体同時にか……想像しただけでも鳥肌ものじゃな」

「……………恐ろしい」

「ハ、ハンターが二体ですか!? そ、それはさすがにあの二人でも逃げられないんじゃないじゃ……」

姫路が心配するのも無理はない。何故なら彼女は一度ハンターに追いかけられ、その恐さが身に染みて分かっているのだから。

俺と明久と雄二は普段から鉄人を相手に逃げ回っている為、追いかけてこには慣れてるが、今回はそれとは明らかに次元も格も遥か上だ。いくらあの二人でも逃げきるのは至難の業だろう。

「だが、今はヤツらを心配してる場合じゃねえ。まずは俺達が生き残ることが最優先だ」  
「うむ。言い方を変えれば、あやつらは今、全てのハンターを引き付けておいてくれるからの。ワシらにとっては絶好の機会じゃ」

「……………今のうちに、脱出ルートを探す」  
「でも、探すと言っても他にそんな所は……」

うーむ。そこが壁なんだよなあ。脱出しろって言われても出入口は全て封鎖されて

やがるし、かといって無理矢理出ていこうとすれば一発退場待ったなしだ。クソ……そんならどうやって脱出しろっていうんだ……？

——いや、待てよ。そういう確かさっきの放送じゃこう言ってたよな——

『我々の用意した脱出ルートを探しだし、この文月学園から脱出してもらう』

塞がれた出入口……そして文月学園からの脱出……学園からの脱出……学園……か  
ら？

——！　もしや、本当の脱出ルートってのは……！

「……………」

「大悟？　どうしたのじゃ？」

「……………」同志？」

「岡崎君？」

「……………」そうか、そういうことか！

「「「??？」」」

俺はポンと手を打つ。

ようやく合点がいった。くく……なるほどなあ。確かにあそこならその二つの条件を満たしている場所だし、そう簡単には見つけられない筈だ。

そりやそうだ。ここから脱出しろなんて命令を受けている状況の中、普通に考えたらあんな所に脱出ルートがあるだろうなんて考えつくワケがないんだから。

RPGでダンジョンを攻略するのと同じだ。外れ、もしくは《既に攻略済み》だと思いついていたルートが実は当たりルートだった。今回のミッションはまさしくそれを体現している。

あのババア……そして運営陣共。随分と小癪な手を使ってくれたなあ……。だが実に——面白い。

「…………お前ら、行くぞ」

「「え?」」

俺は身を翻し、とある場所に向かって走り出す。

「待つのじゃ大悟! 一体どこへ行くこうと言うのじゃ!」

背後から秀吉がそう聞いてきた。

俺はそのまま振り返らず、若干顔をニヤつかせて答える。

「何処へ行く？　んなモン決まってる——このクソツタレなゲームを突破する為の場所だよ！」

---

体育館

《残り時間、二分》

「よっしゃあ！　ビンゴだ！」

「なんと……よもやここにあったとは……！」

「……………予想外……………」

「はあ……はあ……考えも、しませんでした……………」

九分間の死闘の末、俺達はようやく脱出ルートを見つけられる事が出来た。

その場所とは——この逃走中の第一ステージが開始された体育館のステージ上だった。

「姫路、大丈夫か？」

「は、はい……………なんとか大丈夫です……………はあ、はあ……………」

「済まねえな。秀吉、悪いが肩貸してやれ」

「了解じゃ」

「す、すみません……………」

さつきまで俺達男子三人と同じペースで走っていた為、かなり苦しそうに息を切らし  
ている姫路。表情からも相当な疲労感があるのが見てとれる。

こつちも急いでいたとは言え、かなり無理をさせてしまった様だな。そこはちゃんと  
反省しなければなるまいな。

ちなみにその二次災害で走っている姫路のツインメロンが揺れに揺れてそれを見た  
同志が鼻血のシャワーで綺麗な虹を描いていた。まったく相変わらず自分の欲には忠

実な男よ。

『お疲れ様でした。岡崎大悟、木下秀吉、土屋康太、姫路瑞希。以上四名は第一ステージクリアとなります』

門の前に立っていたスタッフが俺達にそう言った。

それに俺はおう、とだけ返して門をくぐる。続いて姫路、秀吉、同志と続いた。

「ふう……なんとか第一関門突破だぜえ。やったよめるた〜ん」

ステージにドサリと深く腰を下ろした。

なんか、大して運動してない筈なのにどつと疲れが出た。逃走中……想像以上にハードだぜ……。まるで簡単に堕ちると高を括っていたメインヒロインが実はゲーム内きつての高難易度ルートかつ一回でも選択肢をミスったらバッドエンド直行と分かった時の緊張感と緊迫感がありやがる。

「しかし、よくこの場所が分かったのう、大悟よ」

「……………(コクコク)」

「私も同感です。岡崎君。どうしてこの場所が分かったんですか?」

三人が俺の近くに同じように座り込む。



幾ら考えても分からなかったのにも関わらず、どうやって体育館のステージという正解を導き出したのかが気になるのだろう。

まあ別に隠すものでも無いし、軽く説明してやるか。

「お前ら、この第一ステージで俺達に課せられたミッションはどんな内容だったか覚えてるか？」

「えーつと……制限時間内に用意したルートを使って文月学園から脱出しろ……でしたっけ？」

「そうだ。だが学園の出入口は全て封鎖されていて進めなかった。そんなの明らかにミッションの達成内容と矛盾しておかしいだろう？」

「確かにそうじゃの……脱出しろと言っておいて、その為の道が塞がれているのじゃかな」

「……………無理ゲーもいいところ」

「ああ。お前らの言う通りだ……あくまでも普通に考えれば……な」

「「普通に考えれば……？」」

敢えて含みのある言い方をする俺に、三人は首を傾げた。

「ああ。このミッションはあの放送の言葉をまんま鵜呑みにしてたら絶対にクリアできねえようになってたんだ。少し頭を捻らなきゃな」

そう言い、俺は人差し指で頭を軽くトントンと突く。

「大悟。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじやろう?」

「おっと、すまねえ」

同志と姫路も秀吉の言葉に頷いた。

さて、前置きはこのくらいにして本題に入ろう。

「あの放送じゃ『文月学園から脱出しろ』というのがミッションの内容だ。だがそれは『文月学園の校舎』を指しているのであって、『文月学園の敷地内全て』を指してたワケじゃないんだ。つまり本当のミッションは『文月学園の校舎から脱出せよ』だ。だが大抵の間人はその後者に気づかずひたすら出入口を探そうとしちまう。さっきの秀吉達みてえにな」

「確かに……脱出しろなんて言われたら、普通は敷地内全体から逃げるんだなと解釈してしまいますもんね」

「そう思わせるのが向こう側の狙いだっただよ。それなら出入口が封鎖されていても決して嘘は言っていないし、体育館に脱出ルートがあることの説明にもなるからな」

「なるほど。確かに言われてみればその通りじゃの。それにまさか最初のスタート地点がゴールだとは誰も思わんからのう」

「……………灯台もと暗し」

「ああ。つまり俺達はまんまと向こうの掌で踊らされていたってことだ」

俺の出した考えに、三人はうんうんと頷いた。

単純な結論から言えば、スタートした時点で俺達は第一ステージを半分クリアしていたのだ。後はミツシヨンの内容を冷静に分析し、その裏に隠された真意を見つけ出せる思考力と判断力が必要になるワケだ。

第一ステージからここまで頭を使わせるとは、さすがババア。学力至上主義を掲げるだけのことはありやがるぜ。

「ま、今となつては過程なんざどうでもいい。最終的にはこうしてクリア出来たんだからな」

はっはっは、と大口を開けて笑う俺。

「でも凄いですよ岡崎君。あの状況からそんな発想が思いつくなんて……坂本君に負けないくらい閃きました」

「うむ、さすがはワシの相棒じゃ。いざとなると本当に頼りになるのう」

「……………(グツ)」

尊敬に満ちた眼差しで俺を見る三人。

いや〜ダチと美少女二人にそこまで褒められると流石の俺でも照れちまうじゃねえかよう。はっはっは。

いやーすまん明久、雄二！ お前らの不幸を踏み台にして俺は今回主役になることが出来たぜ！ ご苦労ご苦労！ んじゃ、お前らの役目は終わりだから後はどうぞハンターに捕まってその不様な醜態を全国の視聴者様に晒してしまいやがれバーカ！  
アーホ！ 童貞！ Fクラス！

「……………半分は同志にも当てはまると思う」

記憶にございませぬ。

——その後、俺達に続き次々と逃走者達がミッションをクリアしていった。

「さて、無事に俺達三人は第一ステージを突破した。てことで——さっきの決着をつけるぞクソ野郎共！」

「ああ！ 今なら邪魔なハンターもいねえし、心置きなく殺り合えるしなあ！」

「上等だ！ 第二ステージに進む前にここで白黒はつきりつけてやる！」

《吉井明久、坂本雄二 ミッションクリア》

「ねえ大悟？ さつき姫路さんに聞いたんだけど、アンタさつき彼女と密着してたらしいじゃない。どういうことかしら？」

「……………（冷や汗ダラダラ）」

「怒らないから正直に感想を言ってごらん？」

「やはりおっぱいは正義だと思いまし（ペキャツ）」

「もう大悟したら。本当に冗談が好きなんだからつ。思わず顎骨をヘシ折っちゃったじゃない」

「……………優子、大胆」

「へえ……………ああいう愛情表現もあるのか。勉強になるよ」

「二人共!! 普通に見てないで助けてあげようよ！ 優子、それ以上は駄目だつてば！ 岡崎君の顎がとんでもないことになってるから！」

《霧島翔子、工藤愛子、木下優子、久保利光 ミッションクリア》

「み、美波。大丈夫……………？」

「ぜえ……ぜえ……大丈夫なワケ無いでしょ……。ホント散々な目にあつたわよ……！」

「大丈夫ですかお姉さま!! 一体誰が美春のお姉さまをこんな目に会わせたと言うのです!?!」

「アンタに決まつてるでしょうがああああつ!! なんでウチだけハンターと同級生の二種類から逃げ回らなきゃならないのよおおおつ!!」

「うげええええつ!! なんで僕うううう!?!」

「み、美波ちゃん! 落ち着いてくださいっ! それは明久君ですっ! サンドバッグじゃありませんっ!」

《島田美波、清水美春 ミッションクリア》

こうして、一人も欠けることなく全員が第一ステージを突破したのだった。

## 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 弐

『どうやら、第一ステージは無事全員がクリアしたようですね』

『ふん、当然さ。そうでなきやアイツらを選んだ意味が無い。それにさっきの第一ステージはあくまでも小手調べ……あの程度で躓くようじゃ、全てがレベルアップした第二ステージを生き残るなんてのは夢のまた夢つてもんだからね。それよりも、準備の方はどうだい?』

『はい。全て滞りなく完了しております。後は逃走者の到着を待つのみです』

『そうかい。なら、アタシも本格的に動こうじゃないか——さあジャリ共、覚悟しな。ここから先が、本当の戦いさね』

『では、私もそろそろ』

『ああ、よろしく頼んだよ』

## ——第二ステージ開始前。

移動した新エリア、如月ハイランドパークのスタート地点では、第一関門を突破した十二人の逃走者が集められていた。

「ははっ！ 次の舞台はここか。確かに逃走中を行うにやうってつけの場所だな」

「如月ハイランドパークを丸々なんて、さつきとは打って変わって壮大なスケールだね」  
「……………向こうの本気度が伺える」

「よっぼどこの企画を盛り上げたいんじゃない。じゃが悪くないの。自然とワシも胸——心が踊るわい」

「おう。正直あのババアの思い通りになるのは非常に気に入らんが、全ては賞金百万円の為だ。ここまでできたら最後まで逃げ切つてやろうじゃねえか」

それぞれやる気に満ちている逃走者達。

だが、一時の休息はここまでだ。何故ならこの後彼らは再び、この悪夢のゲームに囚



われてしまうのだから。

その事実を告げるように、どこからか放送が聞こえる。

《逃走者諸君。第一ステージ突破おめでとう。そしてこれより、第二ステージを開始したいと思う。そしてその舞台となるのはここ、如月ハイランドパークだ》

多くの客で賑わう遊園地、如月ハイランドパーク。

老若男女全ての人が楽しめるレジャーランドとして人気を博し、マスコットキャラクターのフィー、ノイン、アインちゃんを筆頭とした多くのキャラクターがゲストを盛り上げる。

「ね、ねえ。あれって、さっきもあつたハンターボックスよね?」

「はい……それも四つも……まさかいきなりあれが放出されるんですか?」

彼女らのいう通り、逃走者の前には、四体のハンターが閉じ込められたハンターボックスがある。だが何もそのまま放出されるわけではない。

——そして彼らはこれから、恐怖のオープニングゲームに挑む事となる。

《それではこれより、オープニングゲームを始める。全員目の前のハンターボックスに注目したまえ》

「……ハンターボックスの前に何かある」

「ホントだ。あれは……鎖だ。鎖がいつぱい箱から垂れさがつてるみたいだね」

そう。それが今回のオープニングゲームの内容だ。

逃走者とハンターボックスまでの距離はおよそ二十メートル。そしてハンターボックスの前の箱には、十二本の鎖がぶら下がっている。逃走者達はこれから、一人ずつ順番に前に移動し、そのうちの一本の鎖を引き抜かなければならない。

しかし、十二本のうち一本はハンターボックスのロックを解除する外れの鎖。これを引くと即ハンターが放出され、ゲームスタートとなる。

更にもその中の四本にはドクロマークがついており、これを引いてしまうと、残された逃走者達は二メートルずつ全身しなければならぬ。

「つまり、当たりの鎖を引けば安全に逃げられるってことなんですな」

「へえ、つまり外れを引かないだけの運が必要になるってわけね」

「ま、そういうことだ」

逃走者の全員が内容を理解したところで、早速オープニングゲームが始まった。

—— オープニングゲーム開始。残りの鎖、十二本

「それじゃ、最初はボクだねっ」

「愛子！ 最初から外れとか引かないでよね！」

「頼んだぞ、工藤」

「みるくたそならやってくれと信じているっ！」

「ダイジヨブダイジヨブ♪ それじゃ、行ってくるよ〜」

一人目に鎖を引くのは、Aクラスの工藤愛子。

勉強は勿論、自称『保健体育の実技』が得意だと豪語する彼女だが、果たして無事にゲームをクリア出来るのか？

ハンターボックスの前に立ち、鎖を見つめる工藤。

「うーん……それじゃあ、これにしよっかな！」

「愛子！ 何色にしたの!?!」

「うん！ ボクは緑でいくよー！」

「緑ー!?! なんてー!?!」

「なんか緑って安全そうな色だからー！ 多分ダイジヨブだよねっ！」

そう言つて工藤は、両手で緑の鎖を掴む。

もしこれが外れの鎖なら、ハンターが全て放出。一気に工藤に襲いかかることとなるが……果たして!!?

グツ

「……ちよつと不安だけど、いくよー！ ええいつ!!」

ガラんツ ジャラジャラジャラ

引いた鎖は……当たり。

工藤愛子、無事クリアだ。

「よしっ！ 成功したよー！」

「ホント!? 良かったあ〜……」

「さすがみるくたそー！ 俺達に出来ないことを平然とやつてのけるっ！ そこに痺れる憧れるうううっ！」

「ありがと♪ それじゃ、ボクは先に行くねー！」

当たりの鎖を引いた逃走者は、ハンターボックスから離れた位置でスタート出来る。皆に頑張つてねと手を振り、工藤は遊園地の中へと走つていった。

## —— 残り鎖、十一本

「……………次は俺の順番か」

「しくじるなよ！ 同志！（グツ）」

「ムツツリーニなら大丈夫だって信じてるからね！（グツ）」

「……………任せておけ。同志、明久（グツ）」

次に鎖を引くのは、Fクラス男子、土屋康太。

保健体育の科目では右に出るものはおらず、先程の工藤をも圧倒するほどの膨大な知識とその性格から「寡黙なる性職者<sup>ムツツリーニ</sup>」という異名を持つ彼だが、無事に成功し、ハンターから逃れることが出来るのか!?

「……………決めた。水色だ……………!」

「その理由は？」

「……………理由はない。ただ、俺の本能がこの色なら大丈夫だと告げて——」

「ムツツリーニ。今日水色の下着を着けているのは誰だ？」

「姫路」

「ふ、ふえっ!!? な、なんで知っていますかっ!!?」

「あれだろ。さつき一緒に走ってた時にシャツの襟から紐が見えてたからだろう同志

「？」

「そ、そうなんですか!? 土屋君っ!？」

「……………!! (ブンブン)」

「同志、感想を一言で述べよ」

「チラ見せは良い文明(グツ)」

「やっぱり見てたんじゃありませんかーっ!？」

「……………!! (ブンブン)」

速答。そして今更な全力否定。さすがはムツツリスケベを体現したような男。その異名は伊達ではないようだ。

「ねえ大悟? その言い方だとアンタも姫路さんの下着を見たって風に聞こえるんだけど? (ニッコリ)」

「記憶にごさいますせん(ポキッ)」

岡崎の手の甲の骨が砕かれたところで、ムツツリーニこと土屋が水色の鎖を握る。  
果たして、成功か? ハンター放出か?

「……………っ!!」

ガラランツ ジャラジャラジャラ

「……………任務、完了（ドヤツ）」

引いた鎖は……………当たり前。

土屋康太、クリアだ。

「……………それじゃあ、俺は先にいく」

「ああ、行ってこい。俺達もすぐに追いつくぜ」

「……………（コクリ）」

仲間達に別れを告げ、ムツツリーニは戦場へと駆け出した。

——— 残りの鎖、十本

「……………次は、私」

「頼んだわよ。代表」

「……………うん。頑張る」

三番目に鎖を引くのは、霧島翔子。

文月学園二学年主席という天才的な頭脳に加え、絶世の美貌を持つ彼女は、ハンターの恐怖を乗り越えられるのか!?

ゆつくりと、ハンターボックスの前まで歩く霧島。

「……それじゃ、これにする」

霧島が選んだのは……赤の鎖だ。

「ちなみに聞くけど、理由は？」

「……今日の星座占いでラッキーカラーが赤だった。それに……私が凄く好きな色でもあるから（ポツ）」

「ああ、だろうな（チラツ）」

「なんとなく予想はしておったわい（チラツ）」

「全く、代表はホント一途なんだから（チラツ）」

「良かったですね、坂本君（ニコツ）」

「そうよ坂本。こんなに女の子に愛されるなんてそうそうないことなんだから（ニコツ）」

「やめろ！ そんな温もりのこもった視線を俺に向けるんじゃないやねえ！ ついでに明久は血が滲むほど下唇を噛んで悔しがるな！」

「やっぱり貴様は……ここで殺すべき……害悪だつ!!（ギリツ）」

どうやら彼女は、坂本雄二にゾツコンの様だ。だが今は、色恋沙汰にうつつを抜かしている場合ではない。

宣言通り、赤の鎖を握る霧島。果たして……!?



『『……………(ゴクリ)』』

「……………えいつ!」

ガラランツ ジャラジャラジャラ

「……………良かった。外れじゃない」

霧島が引いた赤の鎖は——当たりだ。しかし……

「……………あつ。でも、ドクロマークが……」

鎖の先には、ドクロマークがつけられていた。

これで逃走者達は二メートル前進。ハンターボックスに近づかなければならない。

「……………ごめん」

「心配するな。そういうこともあるさ」

「そうよ。逃走中じゃよくある事だし、別に代表を恨みなんてしないから」

「……………うん。ありがとう、岡崎、優子」

霧島がその場から離れ、逃走者達は二メートル進む。ハンターボックスとの差は……

十八メートル。

「二メートル近づいただけでも結構変わるわね……」

「そうですね……」

距離が狭まったことで、ハンターの恐怖がより一層逃走者達に迫る。そしてこれから、連続してオープニングゲームに挑んでいく。

「……よし、これじゃっ！——良かった！ 当たりじゃ！」

「よおしいぞ相棒！ さすがは俺の将来の嫁さんだ！」

「それは婿の間違いじゃろう？」

「どっちも違うと思いますけど……」

「そもそも前提条件が間違ってると思うな？ 大悟？ 秀吉？」

「」

——四人目、木下秀吉 クリア

「……えいつ！ あっ、や、やりました！ 成功しましたっ！」

「良かったね、姫路さん！」

「ありがとうございます、明久君っ」

（……なあ雄二。もしここで姫路が失敗したら）

(……まあ、確実に姫路は脱落してただろうな)

——五人目、姫路瑞希、クリア

「ふう……これはかなり緊張するものだね。けど……(チラツ)」

「久保くん！ 頑張つてねー！」

「……彼が見ている前で無様な真似は出来ない。よし、いくぞっ！ ——はっ！ 良かった、外れではないようだ」

「久保君。セーフだったんだね！ 僕は信じていたよ。久保君ならやってくれるって」

「ほ、本当かい吉井君!? 信じていたよ……つまりそれは、遠回しに僕は君と両思いだという事を伝えているのか……!？」

「??？」

「……なあ、明久は久保の真意にマジに気づいてないのか？」

「……やめておけ。この世には知らない方がいいことだってある」

——六人目 久保利光、クリア

次々とクリア成功し、エリアへと散っていく逃走者達。

残る逃走者は……六人。外れの鎖を引いてしまうのは、一体どの逃走者なのか!? それともオープンングゲームをクリアし、全ての逃走者が安全に現在を始められるのか!?

——残りの鎖、六本

「次は私です! 見ていて下さいお姉さま! 貴女の美春が華麗に勝負を決めてくるところを!」

「だってよ島田」

「はいはい。どうでもいいからさっさと行つてきなさい美春」

七人目は、唯一のDクラスからの参戦。清水美春だ。

果たして、彼女は無事にオープンングゲームをクリアし、憧れの島田美波にいいところを見せられるのか!?

「……では、美春はオレンジ色にします!」

「理由はなんでだ?」

「はいっ! 今日のお姉さまの下着の色がオレンジ色だからですっ!」

「きやあああつ!?! なんでアンタがそんなこと知つてんのよーっ!?!」

「しかもそれは卸したての新品ものですよ!?!」

「美春ーっ!?!」

真つ赤な顔をして叫ぶ島田。

しかし、公衆の面前にも関わらず女性のトップシークレットなことを赤裸々に暴露するとは、清水美春……恐るべし女だ。

「いいから早く引きなさい！ これ以上余計なことをいう前につ!!」  
「分かりましたっ！ いきますっ!!」

鎖を握る清水美春。

果たして、ゲームクリアか？ それとも、ハンター放出か……!?

『………（ゴクリ）』

「………はあっ!!」

ガラランツ ズドオンツツ

「あ」

『『うわあああああーっつ?!?!?!?』』

清水美春が引いたのは——外れの鎖。

それによりハンターボックスの鍵が外れ、四体のハンターが放出。残った逃走者に一

齊に襲いかかる。

『『『………(ドドドドド)』』』』』

そしてハンター達の視界にとらえたのは――

「えっ！ ちよっ!?! いきなりですか!?! あっ!?! 待ってくださいお姉さまああーっ!!」

「ゴメン美春！ ウチにはどうすることも出来ないのっ！ 後は任せたわよ！」

「そんな殺生なあああー!!」

逃げ遅れた、清水美春だ……。

『『『………(ドドドドド)』』』』』

「いやああー! 来ないでくださいいいいいーっ!!」

『『『………(ドドドドド)』』』』』

「ああああああああああー!!」

PON……

《清水美春 確保 残り1人》

ハンター四体から狙われてしまえば、生き残る術は――ない。

大好きなお姉さまの前で、あえなく——撃沈だ。

「そ、そんなあああー!! まだお姉さまに良いところを見せれていないというの  
にいいいいーっ!!!」

プルルルルル……プルルルルル……

「あれ? 携帯がなってる。何だろ……うわっ! パーク入り口付近にて清水美春確保

!?! 早くない!?!」

「まあ、あの状態じゃ仕方ないわよね……」

「……………始まったか……………」

「どうやらオーピングゲームにやられたようじゃの。ということは、ハンターも放出  
されおったか……………」

「遂に、始まってしまったんですね……………」

四体のハンターから逃げた時間に応じて、賞金を獲得できる。それが——

## run for money 逃走中!!

「始まったな。欲望渦巻く地獄の鬼ごっこがよお……」

「出来るだけ人目のつかない遠くに行つた方がいいわよね……」

「……うわつ、あそこにハンターがいるじゃないか。ここは危なそうだな……」

『ようこそ！ 如月ハイランドパークへ！』

『ママー！ ぼくジェットコースターのりたーい！』

『あ、あそこでソフトクリーム売ってるよ！』

「結構人が多いな……これはしつかりと周囲を警戒しておいた方が良さそうだね」

『あつ、その綺麗なお姉さん！ アイスクリームはいかがですか!?!』

「……ごめんなさい。今、お金が無い」

「それにしても広いなー。さっきの第一ステージとは大違いだよ」

「ここ、如月ハイランドパークは、ジェットコースターや観覧車、お化け屋敷といった様々なアトラクションがあり、それぞれメインエリア、シテイエリア、ストーリーエリア



アの三つに分かれている。

更にその中の一つであるメインエリアには大きなコンサート会場があり、そこでは歌手やアイドルによるライブやアニメ、ヒーローショーなど様々なイベントが開催されている。

その広さは、第一ステージの文月学園よりも大幅に増加しており、東京ドームおよそ十個分の広さを持つ。

これから逃走者達は、この広大な場所を縦横無尽に駆け回り、ハンターから逃げなくてはならない。

「お、もう賞金が2万円になってるじゃねえか。コイツはモチベーションが上がるな」

賞金は一秒2000円ずつ上昇。

制限時間は90分。全ての時間を逃げきれば、合計180万円が手に入る。

「……………あれが、自首用の電話ボックスか」

「うーん……………自首か。本当は逃げきりたいところだけど、もしもの時にはそれもアリだよね」

更に、このゲームでは自首が可能。

エリアの二ヶ所に設置されている自首用の電話ボックスから申請すれば、その時間までの賞金を獲得できる。

ただし、エリアには四体のハンター。確保されれば即失格。賞金は——ゼロ。

「結構賑わってんだな……遊園地とはいえここまで人が集まるモンか？」

堂々とパーク内を歩く岡崎大悟。

かつては数多の不良達から『閻魔大王』という異名で恐れられるほどの喧嘩の腕前と、限界まで鍛え上げられた鋼の肉体を持つ男は、どのような逃走劇を見せてくれるのか？  
「つたく、こんな三次元のリア充ひしめく場所は好きじゃねえんだが——ん？」

『ママァー！ あたしメリーゴーランドのるー！』

『（こらこら、あまりはしやぐと転んじやうわよー』

『だいじょーぶー♪』

「……………ほう。悪くないな（ニタリ）」

道行く小さな女の子を見て、気持ちの悪い笑みを浮かべるリーゼント頭のロリコン。

どうやら、彼は平常運転のようだ。

「……………（キヨロキヨロ）」

一方、岡崎とは真逆にの茂みに身を潜めるムツツリーニこと、土屋康太。無闇に動かず、ハンターに気づかれるリスクを減らしているようだ。

「……………！（スツ）」

突然何かに気づき、携帯電話を取り出した。その視線の先には――

『ねえねえ！ アンタちよつと露出し過ぎじゃない？』

『そうかな？ 私はそうは思わないけど？』

『いやいや、絶対露出多いって！ 膝は股下まで出てるし上はへそ出しだし……特にこのことかさつ！』

『きやつ!? ちよ、ちよつとつ!? なんでいきなり胸なんか揉むなつての!』

「……………!!（ダラダラダラ）」

――二人組のセクシーな服装をした女性だった。

それをカシャカシャと素早く写真に修めるムツツリーニ。彼にはハンターの恐怖よりも性欲が勝っているようだ。

「……雄二、どこにいるの……？」

辺りを見回しながらそれぞれのエリアを回る霧島翔子。

どうやら、坂本雄二を探しているようだ。

「あつ、代表！　ここにいたのね」

「……優子」

そんな彼女の所に現れたのは……友人の木下優子だ。

「……雄二を探してた。どこにいるか知らない？」

「え、坂本君？　うーん……今のところは見てないけど……それにアタシも今大悟を探してるのよね」

「岡崎を？」

「ええ。オープニングゲームの時に別れてからそれつきりなの」

意中の相手を探す、恋する乙女の二人。

しかしエリアには四体のハンター……無闇に動けば彼らに発見されるリスクが高まる。捕まれば……搜索どころでは、無い。

『ほら！ 早くしないと始まつちやうよ！』

『ごめんごめん！ 待つて！ そんなに急かさないでつてば！』

「ん？ 何だろ？ やけに騒々しいけど……」

現在、如月ハイランドパークの中央エリアには多くのゲストが集まっていた。

『折角倍率五倍の壁を乗り越えて手に入れたんだ！ この一世二代のチャンス！ 精一

杯楽しもうぜ野郎共！』

『『『おうっ！ 隊長！』』』

「む？ どうやらコンサート会場に人が集まつておるようじゃの……すまぬがその方、この騒ぎは一体なんなのじゃ？」

『え!?! あなた知らないんですか!?! 今日如月ハイランドパークで行われるビッグイベントのこと?!』』

「ビッグイベントじゃと？」

『ええ！ 今日のはあのアニソンの女王こと——水樹カヤ様とL i N A様のスペシャルライブがあるんです!!』

## 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 参

今回の逃走中の舞台である如月ハイランドパーク。

そのメインエリアにあるコンサート会場では、とあるアニメイベントが行われていた……。

「会場にお集まりの皆さん！ お待たせ致しました！ ただいまより『魔法少女の弟子☆めるたん』『溶解！ 魔法少女ららこ』の声優陣による合同ライブイベント『Let's Magic Show TIME!!』を開催致します!!」

『『おおおおおーっ!!』『』』  
「私、今回の司会進行を務めさせて頂きます『魔法少女の弟子めるたん』のナレーション役、樋山理奈です！ よろしくお願いします!!」

『よろしくー!!』

『ひなりー!!』

『今日も可愛いよー!!』

「ありがとうございます！ それでは早速、両方の豪華声優陣に登場して頂きましょう!! まずは『魔法少女の弟子めるたん』の方々です!! どうぞーっ!!」

シユウウウウ……ガタンッ

「待たせたな！ 如月ハイランドパークに集まりし人間界の者達よ！ さあ、今こそ共に我が名を叫ぶのだ！ いくぞー！」

『『『イエイエイエイ!!』』』』

「炎上爆発！ 殲滅破壊！ 魔法のステッキで大変身☆ 我こそはゴッドウィザードの正当なる後継者！ その名も——魔法少女の弟子っ☆」

『『『めるたああああああんっ!!!』』』』

「はい、皆さんこんにちは！ 『魔法少女の弟子めるたん』のめるたん役の村中ゆりかです！ よろしくお願いします!!」

『『『うおおおおおおーっ!!!』』』』

アニメの有名台詞と共に現れた主役声優、村中ゆりかの登場により、一気にボルテージが沸き立つ会場のファン達。



そしてその後も次々と豪華な声優達が派手な演出を引つ提げ、ステージに立っている。

「どうもー！ めるたんのお姉ちゃんのあるたんを演じました桜アヤネですー！」

『『あやねるーんっ!!』』

「フツ……我が炎上魔法で貴様らも溶かし尽くしてやろうか!?! はい！ ということでめるたんの師匠の初代めるたん役でお馴染み、水瀬えりなです！ よろしくお願ひしますー！」

『『えりりーんっ!!』』

盛り上がるコンサート会場。

一方、そのステージの裏方では、彼女らのマネージャーや運営のスタッフが、何やら大慌てしていた。

「おい！ もうイベントは始まったぞ！ あの二人はまだ着いていないのか!?!」

「すみません！ それが、二人とも突然携帯が繋がらなくなつて！ こちらには間もなく到着する筈なのですが!」

「クツ……今回は如月ハイランドパーク開園以来の大型イベントだぞ！ しかもアニメのスポンサー様や芸能界の関係者も方々も多くお見えになってるんだ！ 絶対に失敗は許されない！ なんと少しでも間に合わせろ!」

「わ、わかりました！」

「どうやら、今回のイベントの主役級の二人の声優が遅刻してしまっている様だ。しかし、その二人は——」

『あ、あれ？　メインエリアってどっちだっけ？』 ↑水樹カヤ（演：水樹カヤ）

『まずいよ……携帯の充電も切れちゃってるし……早くしないと私達の出番が始まっちゃうー！』 ↑L i N A（演：L i N A）

コンサート会場の場所が分からず、パーク内で迷子になっていたのだった。

また、その一方で——

「……ああ、俺だ。予定通りに会場に到着した」

『そうか……！　それで、目的のヤツらは……!?』

「いや、まだコンサート会場には来ていない。どうやら入りが遅れているようだ」

『何だと!?　ケツ！　人気声優様は随分と身勝手だなあ。こんな大事なイベントに堂々と遅刻するなんてよお！』

「落ち着け。だからと言って作戦に支障はない。むしろこちらもそれ相応の“準備”が

あるから助かるくらいだ」

『す、済まねえ。つい感情的になった……つい昔の事を思い出して』

「いいってことよ。それじゃ、また何か進展があつたらかける」

『わかった、頼んだぞ』

「ああ」

ピッ

「さて、それじゃ依頼の仕事を始めるか—— // 水樹カヤ&LiNA暗殺作戦”をよお

……」

何者かの依頼により、二人の命を狙う暗殺者がいた。

この後、彼らの存在はゲームに大きな波乱を巻き起こす事となる。

『……さて、それじゃ早速、第一の試練を与えるとするかね。精々頑張つてクリアしてみるこつたい』

この様子を見ていたゲームマスターの藤堂カヲルは、目の前のパソコンの画面を操作し、第二ステージ初のミッションを発動。

コンサート会場に、ハンターが入った檻と二つの指紋認証装置が設置された。

プルルルル……プルルルル……

「……あれ？　なんか急に周りが静かになったな——ってうわっ!?　ビックリした！」

「……優子。携帯が鳴ってるんだけど……どういふこと?」

「落ち着いて代表。これは恐らく——ミッシヨンの通達ね。早速見てみましょう。えーと何々……?」

## 『MISSION①』

メインエリアのコンサート会場に10体のハンターが入った檻が設置された。残り75分になると檻が開きハンターが放出される。

阻止するにはコンサート会場にある指紋認証装置を使い、檻の鍵を閉めなくてはなら

ない。急ぎたまえ』

「……………なにいつ!? ハンター10体だど!?」

「いやいやいや! そんなの絶対に逃げ切れないよ!」

「……………鬼畜……………っ!?!」

MISSION

ハンター放出を阻止せよ!

現在、アニメイベントが開催されているコンサート会場の裏に、10体のハンターが入った檻が設置された。残り75分になると檻が解放され、ハンターがエリアに解き放たれ、その数は合計13体となってしまう。

阻止するには、檻の両隣にある二つの指紋認証装置からそれぞれ指定された指紋を認証させ、檻を封印しなければならぬ。

「ハンターが三体という今の状況でさえ厳しいのに……………更に追加なんてされれば最早絶望的だね」

「……………おのれババア長! 初っ端からやってくれるじゃないか……………っ!!」

「えっと、今の時間は……つてミッシヨンの制限時間10分位しか無いじゃない!? そんなの無理よ!」

いきなりの難易度に戸惑いを隠せない逃走者達。

しかし、ミッシヨンをやらなければハンターの数は大幅に増員されてしまい、ゲームクリアへの道が一気に狭まってしまふ。

果たして、ミッシヨンに動く逃走者は現れるのか!?

「えっと……私はどうすればいいんでしょうか……う?」

ゲーム開始から殆どその場から動いておらず、物陰に身を潜めている姫路瑞希。ムツツリーニ同様、ハンターに見つかるリスクを最大限少なくしているようだ。

「……あ! それなら、他の人に電話してどうするか聞いてみましょう。そうと決まれば……」

逃走者は持っているモバイルを使って、他の逃走者にいつでも連絡を取り合う事が出来る。

「……出てくれるかな?」

そして、姫路瑞希が電話をかけた相手は――

プルルルルル……プルルルルル……

「あれ? 携帯が鳴ってる……姫路さんから?」

――吉井明久だ。

『もしもし?』

「あ、明久君ですか? 私ですけど、今電話は大丈夫ですか?」

『うん。近くにハンターもいないし、大丈夫だよ』

「そうですか、それは良かったです。それで明久君。突然なんですけど明久君はミツシオンはどうしますか?」

『ミツシオン? 勿論やるに決まってるさ。さすがにハンターが10体も増えたら面倒だし、内容も指紋を認証するだけだから簡単そうだしね。ちなみに秀吉とムツツリーニも連絡したらやるって言ってたよ』

「そうなんですか。ちなみに明久君は今どこに?」

『えーつと……ここは多分ストリートエリアかな? もう少しでメインエリアにつくと

思うよ。姫路さんは？」

「私はシテイエリアにいます。観覧車の下の建物の後ろに隠れてるんです」

電話越しに、自分の居場所を吉井伝える姫路。

観覧車の場所からコンサート会場まではかなりの距離がある為、姫路がミッションに参加するのはリスクが伴う。

『そっか。なら姫路さんはそのまま隠れていた方がいいね。失礼な言い方になっちゃうけど、ハンターに見つかったら多分捕まっちゃうだろうし』

「そうですね。申し訳ないですがそうさせて貰います」

『うん。ミッションは僕らに任せてくれていいよ。それじゃ、また後でね』

「わかりました。それじゃあ」

ピッ

「やっぱり、明久君はとても頼りになりますね」

そう言い再び物陰に身を隠す姫路。

しかし――

『……………』



その背後から、ハンター……。

「でも、本当に賑やかですね。前に坂本君と岡崎君の件で行った時よりも全然人もいっぱいいますし……」

『…………… (テクテク)』

「それとも、皆さん今回の逃走中に合わせたエキストラなんでしょうか？」

『…………… (テクテク)』

ハンターの接近に全く気づく様子のない姫路。

そのまま段々と互いの距離が狭まっていき、そして——

『……………!! (ダッ)』

——見つかった。

「…………? 何か足音が後ろから——きゃあああああ!!?」

ようやくハンターの接近に気づき、慌ててその場から逃げ出す姫路。

しかし、相手はスプリンター並の体力と持久力を併せ持つ。そんな彼らから逃げ切る

のは容易ではなかった。

『……………! (ダダダダダ)』

「はあっ……………はあっ……………! ま、待って……………! は、速い……………!」

『……………! (ダダダダダ)』

「も、もう……………駄目で、す……………っ!」

P O N

《姫路瑞希 確保 残り10人》

「……………ご、ごめんなさい皆さん……………! つ、捕まって……………しまいました……………」

ハンターは神出鬼没。

いつ、どこから表れるか分からない。

プルルルルル……………プルルルルル……………

「ん? メールか……………うおっ!? 観覧車付近にて姫路瑞希確保だと!」

「残り10人……………嘘でしょ……………!?! 瑞希が捕まっちゃった……………」

「そっか……………。やっぱり姫路さんにはハンターは厳しいわよね……………」

「くっ……い！ 姫路さんにも容赦が無いとはさすがハンター……」

ハンターはエリア内をくまなく搜索する。

安全な場所など——一つもない。そして、例え相手が女性だろうと手加減もしない。

「……よし、ここだね」

いち早くコンサート会場についた久保利光。急いで中へ入ろうとする。

「これで後は指紋認証装置を探すだけ——」

『お待ち下さい。ここから先は関係者以外立ち入り禁止です』

すると、会場の入り口の前に立っていた警備員がスツと彼の道を塞いだ。

その先には二人の声優を待つマネージャーとハンターの入った檻。そして指紋認証装置が見える。

「すみません。僕はあの装置にだけ用があるんです！ 少しの時間で構いませんので通

して頂けないでしょうか!？」

『申し訳ありませんが、それは出来ません』

「そんな……! な、ならここに入るにはどうすればいいんでしょうか!？」

『ありません。ですのでどうかお引き取り下さい』

結局通ることが出来ず、追い返されてしまった。

このままでは、指紋認証装置に辿り着くことが出来ない。

「そんな……ならどうやってミッションをクリアしろというんだ……?」

「むう……。一刻も早くコンサート会場に向かいたいのじゃが……。あそこにハンターがおるのう」

一方、ミッション達成の為コンサート会場へ移動する木下秀吉。

しかし、彼の視線の先にはハンターがおり思うように前に進めない。更にエリア内は多くの客で賑わっており、それがハンターの存在をより気づきにくくしている。

『……………(キヨロキヨロ)』

「しかし、分かつてはおつたがハンターというものは未恐ろしいのう。あの無表情な顔で追いかけてくるのじゃから、人によってはトラウマものじゃな」

『……………』

「…………仕方あるまい。なら別の道から向かうとしよう。多少遠回りにはなってしまうが、ここで捕まるよりはマシじゃ」

ハンターを避ける為、そのまま真っ直ぐ進むのではなく、敢えて遠回りすることに決めた様だ。

しかしエリアには4体のハンター。無理に行動範囲を広げれば、彼らに見つかるリスクが高まる。果たしてその選択は吉と出るか、はたまた凶と出るか…………？

『あ、すみません！ その貴女！』

「む？」

突然二人組の女性客に話しかけられた。

「なんじゃ？ ワシに何か用かの？」

『はい。お願いがあるんですけど、あそこで写真を撮って貰えませんか？』

彼女が指差した方向には、連れらしき女性と如月ハイランドパークのメインキャラク

ター、フィーがいる。

「どうやら、友達同士で記念写真を撮りたいようだ。」

「うむ。それくらいなら別に構わんぞ」

『いいですか!?! ありがとうございます!』

そう言つてカメラを受け取ると、その女性はフィーの下へ向かった。

『『お願いしまーす!』』

「それでは撮らせて貰うのじゃ。はい、三、二、一……」

カシヤツ

「こんな感じでよろしいかの?」

『ありがとうございます! 助かります!』

「どういたしましてなのじゃ。それではワシはこれで——」

『あ、ちよつと待つて下さい! お礼といつてはなんです、これをどうぞ』

そう言つて女性が取り出したのは——文月バスの乗車ペアチケットだ。

『さつきアトラクションのくじ引きで当たつたんですけど、私達今日は自分の車で来ているので正直必要が無くて……よかつたら使つて下さい』

「む、よいのか？ ならありがたく頂戴するのじゃ」

そして女性達は手を振って去っていった。

「（……まあ、後々何かの役に立つじやろうし、大切に持つておくとするかの）」

---

「ええつと……コンサート会場つてこつちで合つてるよね？」

同じくミッシヨンに向かう、工藤愛子。

「正直ハンターに見つかかるかも知れないっている怖さはあるけど、それ以上にハンター  
10体の方がマズいでしょ」

どうやら彼女も、ハンターが増えることは避けたい様だ。

すると――

「あ、ねえねえ！ そのの貴女っ！」

「えっ？」

誰かに呼び止められた。

振り向くと、そこには赤い髪に黒メッシュをした一人の女性が困った顔をして工藤の方を見ていた。

「ボクに何か用ですか？」

「はい。いきなりで申し訳無いんだけど、コンサート会場つてどこにあるか知らないかな？ 私初めてで迷っちゃって……携帯も充電が切れちゃったし……」

「あ、そうなんですか？ 実はボクも丁度そこに行こうとしてるんですよ」  
「本当!? なら私も一緒に着いてっていい？」

「一緒にですか？ うーん……まあ今はハンターも見かけないし場所もさほど遠くないから……ダイジヨブだね。わかりました。いいですよ」

「あ、ホント!? ありがとう♪」

今なら問題ないと判断したのか、彼女の提案を呑むようだ。

「それじゃ早速行きましょうか。えーつと……」

「あ、まだ名前を言っただけじゃなかったっけ——私LiNAって言っただけ……知らない？」

「あ、そうなんですね。うーん……ボクはあまりアニメは見ないから分からないけど



……岡崎君に聞けばわかるかな」

「岡崎君？」

「はい。とつてもアニメ……というより二次元が大好きなトモダチがいるんですよ。でも今どこにいるんだろ？」

「……………(ズーン)」

「ほら大悟。時間が無いんだから早くミッション行くよ」

「……………知らん。もうミッションも逃走中も全部どうでもいいわボケ

……………(シクシク)」

「ハア……………」

地べたに体育座りで塞ぎ込んでいる岡崎大悟。

それを見て額に手を当てながらため息をつく吉井明久。二人は先ほど合流したのだが、岡崎の方がそれ以降ずっとこの調子なのだ。その理由は、

「……………こんな苦行を俺に課すなんて、神は俺に死ぬとでもいうのか……………」

そう。今日は超人気声優達によるアニメイベントが開催されている。

しかし彼らは現在逃走中を行っていると都合上、この特別イベントに参加はおろか観覧さえすることが出来ない。

そしてこの岡崎大悟。そのヤンキーな見た目に反して超がつくほどのアニメオタクである。三度の飯よりもアニメを愛し『二次元に生き二次元に死ぬ』を座右の銘とする彼にとって、自分の好きなキャラクターに命を与え、心から応援している声優達のライブに参加出来ないことがどれだけ悲しく、屈辱的なことであるかは想像に難くないだろう。

「確かに大悟の気持ちは分からなくも無いけどさ、だからって既に決まったことに対していつまでも落ち込んでいたってしょうがないじゃないか。君だってそれくらいわかるでしょ？」

「……………こんな仕打ちを受けるなら、いつそ道端に咲く一輪の花になりたい…………」

「駄目だ。完全に打ちのめされてる…………」

こうなってしまうては、彼を元の状態に戻すのは容易ではない。

しかしこのまま道の真ん中にいれば、やがてハンターに見つかり確保されてしまう。

「こうなったら、あそこの店員さんにハンマーか何かを借りてきて頭をブン殴って正気

を取り戻させるか……?」

そしたら放送出来なくなるのでやめてほしい。

「あ、アキ! ここにいたのね!」

そこに、島田美波も合流した。

「美波! 良かった、無事だったんだね」

「ええ、何とかね。それよりもアキ、ミッシェンのことなんだけど——岡崎は何があったの?」

「ああ、やっぱり気になる? それが——」

事の顛末を島田に話す吉井。

「……なんていうか、岡崎らしいわね」

「でしょ? それでさつきからずっとあの調子なんだ」

「うっひえひえ……どうせ俺は道端に落ちてる犬のウンコ以下の存在なんじゃない……  
(シクシク)」

自分を卑下し始める岡崎。彼らが思っていたよりもショックが大きい様だ。

「……仕方ないな。僕らだけで行こうか美波」

「え？ いいの？ 岡崎をあのままにして」

「しようがないよ。あの状態になった大悟は僕らじゃどうにもならないし、このまま時間ばかり食っていたらミツシヨンに間に合わなくなっちゃうしね。それに——」

「それに？」

「大悟がああしていればハンターを惹き付けてくれる。その間に僕は安全にミツシヨンに向かえるじゃないか（グツ）」

「やっぱりアンタらつて実は友達じゃないわよね」

「そんなことは無いさ美波。さつきも言ったけど僕らの友情は特別なんだ。この程度で崩れるような代物じゃないよ」

「アンタ、第一ステージで岡崎と坂本をハンターに突き出そうとしたじゃない」

「あれは正当防衛だよ」

「どれだけ自分勝手な脳味噌してんのよ……」

色々な意味で彼らの友情は特別な様だ。ああ素晴らしきかな男の友情。

「そう言うわけで、さつきとコンサート会場に向かうよ！」

「……分かったわよ。ごめんね岡崎。でもハンターが来たらちゃんと逃げるのよ」

二人はしょんぼりする岡崎を置いて、コンサート会場のあるメインエリアへと走り出していった。

一人残された……哀れな男。

「もう嫌だ……俺の人生はいつつもこんなんだ……畜生……チクシヨウツツ!!!」

悔しさと愛しさと切なさのあまり、とうとう泣き出してしまった岡崎。

しかし、ガタイの良いリーゼント頭の男が道の真ん中で体育座りをしながら声をあげて泣くという光景はなんともシユールなものである。

「KAYYA様……LINNA様……申し訳ございません……ですがもし叶うことなら、この末代までの屈辱的失態をどうか、貴女方の御前で謝罪させて下さ——」

トントン

「その君。ちよつといい？」

「ん？」

突然何者かに肩を叩かれた。

「なんですか……？　こんなゴミカスウンコナメクジ童貞クソ野郎である俺に何か用で

——

そう言つて顔を上げる岡崎。するとそこには——

「さつきから泣いてるみたいだけど……大丈夫？」

——水樹カヤが、岡崎の顔を覗き込んでいたのだった。

「……優子。あそこ」

「うん、あれがコンサート会場みたいね！」

続いて、木下優子と霧島翔子がコンサート会場に到着した。

「とつと指紋認証装置とやらに行きましよう！」

「……わかった」

「待つんだ。木下さん、霧島さん！」

先にコンサート会場に着いていた久保が、向かおうとする二人を止めた。

「え？ 久保君？ どうしたの？」

「……なにか問題？」

「ああ。どうやら僕らではコンサート会場には入れないらしい」

「はあ!? 中に入れない!? なんですよ!？」

「僕もあそこの警備員の方に理由を聞いてみたんだが、全く教えてくれなかったんだ」  
「そんな……じゃあどうすればいいのよ!？」

ハンターの放出を阻止するには、コンサート会場へ入り中にある指紋認証装置を起動させて、檻の鍵をロックしなければならぬ。しかし、コンサート会場の前では警備員が邪魔をして進むことが出来ない。

果たして、逃走者達はミッションクリアに間に合うのか!？」

## 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 肆

— side 大悟

もう嫌だ。なんで俺こんなことしてんの？

ババア主催の目的の分からん催し物に参加させられて。

こんな朝っぱらから黒づくめの集団から逃げさせられて。

あげくの果てには同じ会場でやってるのにも関わらず、アニソン界の女王と名高いお二方のライブを見ることが出来ない。

何なの神様？ 俺のこともしかして嫌いななの？

それか好きすぎて意地悪したくなる男子小学生的なヤツなの？ だとしたら気持ち悪いわボケ！

そうやって罪の無い若者を痛め付けて、どんだけサディスティックな性格してんだよコンチクショウ！

あーもういいわ。俺抜けるわ。



カヤ様とLINA様をお姿を見られないと分かった以上、もうこんなモンに真剣に付き合う意味はねえ。もうホント馬鹿馬鹿しい。

ミツシヨン？ ハンター放出？ 知るかんなもん。

放出でも何でもすればいいじゃない！

そしてこの俺をさつさと捕まえればいいじゃない！

あ、そうしょ。

ここから動かないでいればその内ハンターに見つかって捕まえてくれるでしょう。そしてさつさとエスケープしてやる！

おい！ どうせそこら中のカメラから見てんだろ！ 如月グループのお偉いさん共

！ スポンサー連中！

そして学園長！

よくもこの俺の純情を弄んでくれたな！ 悪いがもう俺はここから一步も動かかん！  
そして一切の抵抗もなくハンターに捕らえられてやるからな！

叩きたければ好きだけ叩けばいいじゃない！

俺はもうやる気ゼロだから知らん。

もうどうにでもなれバーカウニコウニコ!!

………つて、思ってたんだけどよ。

「………？ もしもーし、聞こえてないのかな………？」  
「………」

………はは、すげえや。

カヤ様のお顔がこんなにハッキリと映ってやがる。  
そうか。これがかの有名な走馬灯ってヤツなのか。

「おーい？」

ペチペチと頬を叩く走馬灯のカヤ様。

すげえな。皮膚の感触まで再現してくれんのかよ。

「ねえ、聞いてるー?」

鼻孔をくすぐるシャンプーのいい匂い。

おいおいマジか。走馬灯つてのは、ここまで人間の五感に刺激してくるものだったのか。

まるで本物のカヤ様が目の前にいるようで――

――  
「んん? 本物?」

「……………あの」

「あつ、やっと喋った。おーい、私の事分かる?」

「……………貴女はもしかして、本物のカヤ様……………?」

「え? うん。私は一応水樹カヤだけど……………本物つてどういうこと?」

「……………本当ですか?」

「うん」

「……………そうですか。本物のカヤ様でしたか……………、走馬灯じゃなかったんですかあ……………」

そっかそっかあ……」

「え、ええつと……大丈夫？」

.....

「◆? ♡ ▽? ◇ ♠? ●? ◁ !!? (ドバババババ)」  
「きやああああーっ!!? ちよ、ちよつと君ーっ!!?」

俺は口から体液という体液をブチ撒けながら果てた。

—— side 雄二&秀吉

「む、雄二ではないか！ 無事じゃったか！」

「ん？ おお、秀吉か。そっちも無事みてえだな」

運良く合流した、木下秀吉と坂本雄二。

「秀吉はミツシオンには行くのか？」

「うむ。多少のリスクはあるが、さすがにこんな序盤でハンター10体放出は避けたい

からの。このまま向かうつもりじゃ」

「そうか」

「雄二はどうするつもりなのじゃ？」

「もちろん俺も行く……、と聞いてえ所だが、今は様子見に撤することにする」

そう言つて物陰に身を潜める坂本。

それに続いて秀吉も後ろに隠れた。

「何故じゃ？ ミッション終了まで時間がそんなに無いのじゃぞ？」

「分かつてる。だが逃走中つてのはミッションの内容に一癖も二癖もあるのが大きな特徴だ。いくらまだ序盤とはいえ、そんな簡単な条件でクリア出来るとは到底思えねえんだよ」

「つまり……コンサート会場に行くだけじゃクリアにはならん可能性があるってことかの？」

「ああ。それにあのババアの事だ。絶対に何か仕掛けてるに違いない」

さすがはFクラスの知略派にして元神童。

即断即決を避け、冷静に物事を判断し、緻密に行動を取るようだ。

「まずは状況分析だ。この会場でミッションの他に何かイベントが起きている事を把握する。それがミッションクリアの鍵になる第一歩だからな」

「イベント……そういうえば、さつき通行人の方が気になることを言っておつたぞ」

「気になること？」

「うむ。なんでも今日はここでアニソン歌手のライブイベントがあるとかどうとか……」

「アニソンライブか……。あの<sup>バカ</sup>大悟が真つ先に食いつきそうな情報だな」

「うむ。確か名前は……水樹カヤとL i N Aじゃったかな……？」

秀吉の言う通り。

今日は如月ハイライトパークにて、水樹カヤとLINAによるアニソンスペシャルライブが開催される。

しかしその二人は現在、パーク内を迷子になっており、会場に辿り着けていない。

「水樹カヤとLINA……二人とも紅白にも出場しててくらい有名なアニソンシンガーじゃねえか」

「知つとるのか？ 雄二」

「ああ。ちよくちよくテレビにも出てるのを見るからな」

「そうなのか。ワシは大悟と違つてそういう事に疎いからよく分からんのじゃ」

「まあ、俺もあくまで人並みに知つてただけだ。こういうことはアイツの方が断然詳しいからな。だが二人のアニソンライブか……もしかしたらこのミツシヨンに関わつてるかもしれねえな」

「確かにその可能性はあるの——っ!？」

突然何かに気づき、急に黙り込む秀吉。

「あ？ 急にどうした秀吉？」

「……………(ヒョイ)」

そーと秀吉が前方を指差す。何があるのかと坂本がその方向に視線を向けると、

『……………(キヨロキヨロ)』

——周りを見渡している、ハンターだ。

雄二もすぐに声と物音を殺す。

「……………(ジーツ)」

物陰からハンターの動向を観察する二人。

ハンターと二人の距離は、およそ20メートル。

もし見つかってしまえば、逃げきるのはかなり困難となる。

(チツ、何してやがる。さっさと消えろってんだ……)

(気づかんでくれよ……)

『……………(テクテクテク)』

ここにはいないと思ったのか、別の場所へと歩きだすハンター。

上手く、切り抜けた様だ。

「……………行ったか」

「……………その様じゃな」



ハンターが完全に視界から消えたのを確認して、物陰から出てくる二人。

「すまねえな秀吉。助かったぜ」

「なに、礼などいらぬ。当然の事をしたまでじゃ」

ハンターは神出鬼没。

いつどこから現れるか、分からない。

「とりあえず、ワシは大悟に電話をかけてみるぞ。ヤツならワシらよりももつと情報を掴んでおるかもしれんからの」

「おう、頼んだ」

逃走者の中で、一番こういった事への知識が豊富な岡崎を頼ることに決めた秀吉。持っていた携帯電話から、彼の番号に着信を入れる。

しかし、

プルルルルル……プルルルルル……

「アツアツアツアツアツ……（ビクビクビク）」

「岡崎君つて凄く身体鍛えてるんだねー。まるでボディービルダーみたいでカッコいいと思うなー（ペチペチ）」

「ツツ!!? カヤ様の手が俺の筋肉に触れ……!!? アアアアアア……ツツ!!?（ブツシャアアア

ア」

「うえっ!? ま、また鼻血!!? ああ倒れた!? しっかりして! 岡崎くん!」

——彼は今、電話どころではなかった。

——side ムツツリーニ

「……………(ジー)」

アトラクションエリアのお化け屋敷近くにて。

坂本達同様身を潜めながらも、徐々にコンサート会場へと向かう土屋康太——もといムツツリーニ。

どうやら彼も、ミッションに参加する様だ。

「……………動くか」

人一倍警戒心の強いムツツリーニ。

その危機察知能力と動体視力は、ハンターにも引けを取らない。

「……………（キヨロキヨロ）」

入念に周囲を伺いつつ、ハンターがいないのを確認して着々と目的地のコンサート会場へと歩を進めていく。

すると、

「おい！ その坊主！」

「!？」

急に誰かに大声で話しかけられた。

驚きつつも声のした方を見ると、そこには迷子センターがあり中には一人の女性警備員がいたのだが、

「……………凜花さん？」

「あ？ なんてお前アタシの名前知ってんだよ。どつかで会ったことあったか？」

「……………？ いや、会ったも何も、同志の母親で」

「同志？ 母親？ 知らねえな。人違いかなんかだろ……。まあいいや。それよりもお前持ってねえ？」

「……………?」

「酒だよ酒！ いやあ警備の仕事つてずっと監視カメラ見張ってるだけだからマジで暇だからよ。酒でも飲まねえと退屈過ぎてやってらんねえのよ。てことで、持ってねえ

か？」

何故か彼女はベロンベロンに酔っぱらっており、傍らには大量の空の酒瓶が転がっていた。

仕事中にも関わらず飲酒とは、かなり不真面目な人のようだ。

「……………いや、持っていないです」

「んだよ、持ってるのかよ。使えねーな」

「……………す、すみません」

なんとも自分勝手な言い様である。

「んじゃしゃーね。ならちつと頼まれてくれねえか？」

「？」

「今から金渡すからよ。売店に行つて何本か酒買ってきてくれや。それも出来るだけ度数高めのやつがいい」

そう、エリアには一つだけ売店があり、ここではホットドッグやポップコーン、ジュースといった軽食は勿論のこと、マスコットキャラクターのグッズやパンフレット。果てはアルコール飲料まで置いてあるという完璧な品揃えなのだ。

場所は遊園地の入場口から向かって右側にあり、もし買いに行く場合はコンサート会場を一回通りすぎなければならない。

「……………いや、今はそんな事をしてる場合じゃない」

「えー、そんな冷たい事言わずに頼むよー」

「……………俺はミツシヨンがあつて」

「そんな事言わずに頼むよー（ガシツ）」

「……………ミツシヨンがあつて」

「頼むよー（グググ）」

「……………ミツシヨン」

「おい」

ギチギチギチ……………！

「このままハンターに取っ捕まるよりも怖い目に遭いてえのか temeエ…………（ギロリ）」

「……………つ、つ!?（バタバタ） は、はい…………、行つて…………ぎまずう……………！」

「おーそーか！ 行つてくれるか！ ありがとな！」

「……………ゲホツ、ゴホツ」

女性警備員に懇願（物理的に）され、お使いを引き受ける事にしたムツツリーニ。

しかし、何故無関係な彼女がハンターの存在を知っていたのだろうか？

「ほい、これで頼むな。アタシはこの迷子センターにずっといるから」  
「……………」(コクリ)「

「んじや頼んだぜ坊主！ さーて、それまでやることねえし一眠りすつか…………」  
椅子にもたれかかるように腰掛け、あつという間に眠りについてしまった。  
最早警備員としての仕事すらやるつもりも無いようだ。

「……………」  
そんな彼女の姿を見て、彼はポツリと呟いた。

「……………」同志も、苦勞が絶えないな…………」

—— side 明久

「ついた！」

「あそこがコンサート会場ね！」

なんとかハンターに見つかることなく、目的地のコンサート会場まで来ることが出来

た。

「吉井君！ 無事で良かった！」

「あ、久保君！ それに木下さん達も！ 皆こそ無事だっただね！」

「ええ、なんとかね」

「……うん」

仲間との再開を喜ぶ明久。

だがそんな事をしている場合ではない。ミッション終了まで、あと僅かだ。

「ねえ吉井君。島田さん。どこかで大悟を見なかつたかしら？ ずっと探してるのよ」

「……………さ、さあ？」

「あら、見てないの。全くどこに行つたのよアイツ。電話も全然出ないし……」

木下優子の質問に気まずそうに目をそらす明久と美波。

ライブが見れないことにいじけたので面倒だから置き去りにしてきた、とはさすがに言えないようだ。

「そ、そんな事よりアキ。早くミッションに行かなきゃ」

「ああそつか。指紋認証装置は……」

「いや、残念だがそれは不可能だ。あそこの入り口の警備員が邪魔をして入れないようになつていてね」

「え!? 警備員が入れてくれないって、どうして!？」

「それがその理由すら頑なに教えてくれないんだ。だから僕達もどうしていいか分からないんだ……」

「ええ……」

「いやいや、そんなのおかしいわよ! それじゃあどうやったってミッションなんてクリア出来ないじゃないの!」

「落ち着くんだ島田さん。君の気持ちは十分にわかっている」

状況の理不尽さに声を荒げる島田を久保が諫める。

ミッションクリアの為に、指紋認証装置を使いハンターボックスをロックしなければならぬ。

しかし、現在警備員が入り口を嚴重に固めているため通行は不可能。これではいたずらに時間ばかりが過ぎ、やがてハンター10体が解き放たれてしまう。

ミッション終了まで……残り1分。

「どうしよう、もう時間がない……そうだ! 木下さん! もう一度エス〇リボルグを貸してくれないかな?」

「え? いや、この状況で何に使うのよ吉井君」

「そりゃあもちろん力づくで通るんだよ」



「いや無理に決まってるでしょ。なにバカなこと言ってるのよ」

「大丈夫！ キチンと死なない程度におさええて殴るから！」

そういう問題ではない。

（けどどうする……。島田さんの言う通りこれでは確実にハンター放出は免れない。ヒントでもあればいいんだが……。さっきのメールにもそれらしき文面は無かったな。……いや、もしかしてもう既に、僕らが見落としているであろうヒントがどこかにあつたりするのか……？）

顎に手を当てて考え始める久保。  
すると、

「あ！ あそこだよ！ コンサート会場！」

「「ん?」」

遠くの方から誰かのそんな声が聞こえた。

見ると工藤愛子が一人の女性を連れてこちらに向かってきていた。

「工藤さん! 無事で——って、その人は?」

「ごめんね! 話は後でっ!」

「あのー、ごめんなさい! 遅れましたー!」

『あ! LIN Aさん! 良かった! 間も無く本番が始まりますので急いでくださいー!』

「はーい!」

すると、今まで頑なに退かなかった警備員がすんなりと道を開けた。そこを通りすぎる工藤愛子と彼女に手を引かれているLIN Aと呼ばれた女性。

それを見て他の逃走メンバーは驚きを見せた。

「えっなんで!?! なんで工藤さんは通れるの!?!」

「というかLIN Aって、あの超大人気アニソン歌手の!?! なんでそんな大物が愛子と

一緒にいるのよ!?!」

「……そういえば、さっきアニソンのライブがどうか言ってた」

「……なるほど。つまりさつき工藤さんと一緒にいたあの人がミツシヨン攻略に必要なだったんだね。まあいい、とにかく通れたのなら何でも構わない、工藤さん！ 急いで指紋認証装置を！」

「オツケー！ 任せといてよ！」

コンサート会場に入り、中を見回す工藤。

「ええと……指紋認証装置は……。あつ！ アレだね……。つてうわつ！ ホントにハンターが10体も入ってるよ……」

その視線の先には、二つの指紋認証装置と巨大な檻の中に仁王立ちで立っている10体のハンター。

その一切人間味を感じさせない雰囲気は見ていだけで恐怖がある。

「これが全部放出されるところだったんだね。そんなの考えたくもないなあ」

そう言いながら工藤は指紋認証装置に近づく。

そこには電光掲示板に『指紋ヲ認証セヨ』の文字と共に二人の人物名が記されていた。

『LINA』

『水樹カヤ』

「なるほどね。この二人の指紋が必要ってコト。でも水樹カヤって誰だろ……。？ まあいいや、LINAさん。ちょっとここに手を置いてもらっていいですか？」

「手を置く? うん、いいけどこれ何?」

「まあまあ。いいカラいいカラ♪」

「?」

不思議がりながらも装置に手を置くLINA。  
するとピーッピーッという読み取り音が流れ、

『指紋認証成功』

『ハンターボックス OFF』

「やった!」

装置にLINAの指紋を認証させたことにより、ハンターボックスの鍵が一つロックされた。

これで残す認証装置はあと一つ。ミッション成功か!? それともハンター放出か!?

# 幕間 俺とハンターと地獄の鬼ごっこ 伍

—— side 工藤

ハンターボックスの指紋認証装置にLINAの指紋を読み込ませ、一個目の鍵をロックすることに成功した工藤愛子。

しかし状況はさほど変わっていない。何故ならミッションクリアにはもう一ヶ所の装置も処理しなくてはならないからだ。

ミッション終了まで……残り30秒。

「うーん……、たどり着いたのはいいんだけどあと一つあるんだよね。……つてカウン  
トダウン始まつてるよ!? このままじゃ——」

「ねえ! 愛子さん!」

「はい?」

「ありがとね! あなたのおかげで無事にコンサートに間に合いそうだよ!」

「え? あつ、いいいえ。どういたしましてっ」

「あ、でもまだカヤが来てないみたい……どこにいるのかな?」

「カヤちゃんって、この指紋認証にある名前の人?」





「あつ！ LIN Aちゃん！ お待たせー！」

『あ！ 水樹カヤ様ですね！ お待ちして——』

「どけつつつてんだゴラアアああああ!!」

『ぎゃあああああーっ……!!』

「ええええええええーっ!?」

ヒュウウウウウウ……キラーン。

岡崎に勢いよく激突された警備員はどこかに吹っ飛んでいった。

「む？ 今何かにぶつかつた様な気がするが……まあいい。それよりもお待たせいたしましたカヤ様。無事コンサート会場に到着いたしました」

「うん。ありがとうね岡崎君」

「はううっ……!! 貴女様ともあろう御方が自分ごときめの名前を口にしていただき、あまつさえ感謝の御言葉まで与えられるなんて……不肖岡崎大悟、感謝光栄の極みっ!!」

——濡れるツ!!」

「う、うん……」

そう深々と彼女に土下座する岡崎。



ちなみにミツシヨン終了まで残り20秒。

「工藤さん……この人は？」

「あ、えつと……彼がさつき話した岡崎君です」

「え、嘘っ!? マッチョにリーゼントつて、私が想像してたイメージと全然違うんだけど……!?! アニメ好きなオタクですつていうからもっとそれっぽい感じの人だと思ってた……」

確かに知らない人が彼を見て、まずオタクだなんて思わないだろう。

「ええつと……岡崎君？」

「ん? 俺の名を呼ぶのは工藤——じゃなくて間違えた。みるくたそじゃねえか。こんなところで何をやっている?」

「そろそろその呼び方なんとかならないかな」

「わかった。みる工藤」

「優子に言いつけるよ」

「すんませんマジ勘弁してください」

さすがに彼女もエロゲーのキャラ名で呼ばれることに鬱陶しさを感じているようだ。

「何してるもなにも、ここがミツシヨンクリアの為の場所だからね。ほら、アレが指紋認

証装置」

「指紋認証装置か——つてありやあハンターじゃねえか!? うじゃうじゃいて気持ち悪っ!」

「岡崎君も早くカヤさんに指紋を認証してもらってきてね。じゃないとハンターが放出されちゃうからさ」

「すまねえ。カヤ様との至福の時間に頭がいつぱいでミツシヨンのことなんてすっかり忘れてたぜ。カヤ様。申し訳ございませんが再びお手数よろしいでしょうか? あちらの装置に認証を」

「認証?」

そう言つて岡崎と水樹カヤは指紋認証装置に向かう。

ミツシヨンは終了まで、残り10秒。

「さあ、こちらによろしく願います」

「ここに手を置けばいいんだね。こう?」

『指紋認証成功』

『ハンターボックス OFF』

「よっしゃあ! セーフ!」

制限時間ギリギリのタイミングで指紋認証に成功。

残る鍵がロックされ、これにてハンターの放出は完全に阻止された。

「やったね、岡崎君！」

「おう！」

そう言つてハイタッチをする工藤と岡崎。

同時にミッション成功のメールが全逃走者に送信される。

『MISSION 結果

岡崎大悟と工藤愛子の活躍によりミッションクリア。

ハンターは今まで通り4体のままでゲーム続行』

「ん？ メールだ……おっ！ ミッションクリアだつて！」

「……愛子、岡崎。凄い」

「ふう、なんとか最初の関門を切り抜けたようだね」

「……………さすが同志（グッ）」

「うう……ミツシヨンクリアは喜ばしいですけど、私も貢献したかったです……」  
 「お姉さまああ!! 美春を早く救い出してくださいませええええ!!」

ミツシヨン成功に多くの逃走者が喜びと安堵に満ちている（数名はそうでもないが）。しかしエリアには相変わらず4体のハンターがいる。ミツシヨンをクリアしたとはいえ、まだ油断は出来ない。

「岡崎君。私をここまで連れてきてくれてありがとうとねっ」

「なっ! ありがとうだなんて、なななな何を仰られられますかっ!? じ、自分は当然の事をしたまままま……!!」

「もー、そんなに畏まらないでっば。もっとフランクに接してくれていいんだよ? (ギョツ)」

「あっ——」

「◆♥☆▽◇♠◇??●!!!? (ドババババ)」

「ええっ!? ちょ、また出血!? 誰か! スタッフ呼んで!! 救急スタッフーっ!!」

……………本当に、油断が出来ない。

— side 雄二

「さて、これでしばらくミッションは来ねえだろうから、さつきより気兼ねなく移動できるぜ」

そう告げたのは文月学園のFクラス代表、坂本雄二。

その運動神経は岡崎大悟にも引けを取らず、またかつては「神童」と呼ばれていたほどの天才的な頭腦の持ち主。今回の逃走中における逃走成功者の有力候補だ。

「しつつかし、あのババアはホントになに企んでやがるんだ。こんな大がかりなイベントにわざわざ俺達を参加させるなんてよ。オマケにテレビ中継まで入れるとは…………」

「単なる学園の売名目的……………だけは考えられないな」

歩きながら顎に手を当てて考える坂本。

「どうやらこの企画自体に疑問を抱いているようだ。」

「……………まあいい。……………で色々考えても仕方ねえ。とりあえず必要分の金だけ貰ってさっ

さと終わらせよう」

「……となると、わざわざ時間いっぱい逃げ切る必要はねえか。このまま自首しちゃうのが俺にとつちや最善なんだが」

それはテレビ的につまらなくなるのでNGだ。

「いや駄目だ。金はかけられるだけかけねえと。アイツに生半可なセキュリティは通用しない」

「……………」

「窓はとりあえず全部特殊な防弾ガラスにするとして……………あとは警報器も欲しいな。ドアは勿論簡単にブツ壊せないように鉄製のオートロックか……………」

「……………」

「つたく、本当ならもつと別の使い方があったのによ。それもこれも全部翔子が手間をかけさせるからだよな」

「……………」

「しかも最近はお袋まで手籠めにしてきやがる……………。全く、話の通じない阿呆を二人も相手にすると本当に疲れ——」

「雄二」

「えっ」

振り向くと、いつの間にか雄二の後をついてきていた霧島翔子がいた。気のせいかな、少しだけ彼女の目が黒く濁っている様に見える。

「……………いつからいた？」

「…………『あのババアは』の辺りから」

「そうか」

「…………うん」

「……………」

「……………」

「翔子、二手に分かれよう。固まって行動してたらハンターに見つかりやすぎやあああああつ！」

「…………妻への隠し事は、許さない……………」

「待て待て待て！ 隠し事ってこれはれつきとした正当防衛だろ!? とうかそもそもはお前が勝手に部屋に侵入してくるからいけなああああああ！」

「…………旦那の生活を管理するのは妻として当然の役目。それを遮ろうとするのは浮気の

疑いがある」

「ねえよ！　一ミクロンもねえよ！　てか誰が旦那だああああ！」

『ママ、あの女の女の人なにしてるのー？』

『あらあら、仲睦まじいカップルで羨ましいわねえ。つい昔を思い出しちゃうわ。私もああやって夜中に布団の上で……ねえ貴方？』

『コラコラ、子供の前でそんな話はよさないか』

坂本の顔を握り潰さんばかりの勢いで驚掴む霧島。それを見てニコニコと微笑む一組の家族連れ。

……ふむ、最近の学生はこういった色恋沙汰にもとても積極的なようだ。彼女の坂本に対するこの行動も一つの愛情表現、ということなのだろう。

「これのどこが愛情表現!?　ただの一方的な虐待行為だろうがああああ！」

「……私から距離を置こうだなんて、そんな悪い考えを持つ雄二にはお仕置が必要」  
そのままずると彼を連れていこうとする霧島。

「どうやら人目につかない所で折か——失礼。お仕置きをするようだ。」

「おい馬鹿よせ！　こんな所で騒ぎを起こすような真似したらハンターに気づかれちま



うだろうが!」

「……大丈夫。雄二と一緒にならハンターも怖くない」

「全然答えになってねえ! 分かった! 分かった翔子! さっきの発言は取り消す!

取り消すから一旦落ち着いてだなへぶっ!」

「……くどい」

そのまま二人は、近くの茂みの中に消えていった。

しばらくすると、その奥から何かをポキッと折るような音と男性の悲鳴らしき声がこ  
だました、それは一体なんだったのだろうか……真実は闇の中である。

—— side ムツツリーニ

「……………どこだ」

エリア内をスタスタと小走りで移動しているムツツリーニ。

「……………酒は、他にどこに売っているんだ……(キョロキョロ)」

どうやら、先ほどの女性警備員から頼まれたお使いに向かっているようだ。

しかしむやみやたらに動けばハンターに見つかるとリスクが高まる。

「……………クソ、どうしてこんな目に…………」

そう苦言を呈すムッツリーニ。

現在彼がいるのはコンサート会場前の売店から遠く離れたシテイエリアにいる。

何故本来向かうべき場所に行かず、それと正反対な場所にいるのかというと、

「……………すみません。お酒をください」

「申し訳ありませんお客様！　お酒はもう切らしてしまっているんです…………」

「……………え？」

「実は…………先ほど女性の警備員の方が来店された時に『とりま酒をあるだけくれ！　え、

金？　じゃあ文月学園のツケで』って全部持って行ってしまっ…………」

「……………pardon?」

「警備員の女性がお酒をかつさらっていききました」

「……………つまりここにはもう？」

「ないです」

「……………(ポカーン)」

……………こうなっていたからである。

「……………なんで……………！ そういうことを、するんだ凜花さんは……………っ！（ギリギリ）」  
どうやら既に彼女がパーク内の酒を買い占めていたらしく、その事をすっかり忘れたままムツツリーニに酒を買ってくるよう依頼してしまったらしい。

なのでしばらくパーク内を探していたムツツリーニであつたが、やはり彼の言う通り、あそこの売店以外にはお酒は売っていないようだ。

しかも途中で数回ハンターに見つかるという災難にも見舞われ（距離があつたので捕まりはしなかつた）、

『……………！！（ダダダダダ）』

「……………っ、はあ、はあ……………！」

更には道行くお客さんにコンサート前の売店以外で酒が売っていないか尋ねてみたりもしたが、マトモな情報は全く得られないという始末なのだ。

「……………仕方ない。もう正直に事情を話すしか……………」

『酒が無かつただ？』

『……………はい』

『そうか。なら代わりにお前の脊椎をもらおう（ガシッ）』

「……………いや、駄目だ。そんな真似をしたら……死は、免れない……! (ビクビク)」

アルコールが切れて怒り狂った彼女によって首の骨を割り箸のように容易くへし折られる姿を想像して恐れ戦き、やっぱり頑張ろうと心に決めた。

「……………だが、どうすればいい。このままでは……」

一旦立ち止まり、方法を考え始めるムツツリーニ。すると、

「はあく………。どうしようかな、コレ……」

「?」

声に反応して視線をあげると、そこにはセーラー服を着た一人の中学生らしき女の子が困ったような顔で立ち尽くしていた。

「……………おい (チヨンチヨン)」

「ふえっ!? あ、あの……誰ですか?」

「……………陽向、何してる」

「確かに私の名前は陽向ですけど……どうして私の名前を知っているんですか」

「……………いや、知ってるもなにも……………いや、いい」

「？」

話しても無駄だと思っただのか、ムッツリーニは無理な詮索をやめた。

「それで、私に何か用ですか？」

「……………いや、別に用は——っ!? 待て、それは……………」

「あ、これですか？ あはは……………やつぱり気になりますよね」

彼女が重たそうに抱えていたもの——日本酒の一升瓶を見て大きく目の色を変えるムッツリーニ。

「実はさつきコンサート会場前の売店でくじを引いたらコレが当たったんですけど……………見ての通り私まだ未成年ですし、あいにく家族にもお酒を飲める人がいないので……………どうしようかと思って」

「……………くじ引き、そういえばあった」

そう、コンサート会場前の売店では現在くじ引きが行われている。

当たり賞品もマスコットキャラクターのぬいぐるみセットやアトラクションの優先パス、万単位の商品券など豪華揃いだ。

「はい。かといって捨てるのも勿体ない感じがするし……………」

「……………なら、俺に譲ってもらえないか」

「え？」

「……………今、どうしても酒が必要なんだ。頼む、陽向」

「……………」

彼女にそう頼み込むムツッリニ。

「……………わかりました。何があつたのかは知りませんが、いいですよ」

「！ すまな——」

「ただ！ さすがにタダというワケにはいきませんがね」

「……………何？」

すると、続けて彼女はこんな事を言ってきた。

「私、本当ならくじ引きでアインちゃんのぬいぐるみが欲しかったです。なのでもし貴方がそれを当てる事が出来たら交換でこのお酒を差しあげます」

「……………交換？」

「はい。どうしますか？」

「……………(ウーン)」

「……………わかった(コクリ)」

くじ引きというやり方上、確実に結果が出るワケではないしリスクも大きいが他に方法はない。

それに女性警備員からはかなりの額のお金を預かっているのでチャレンジに関しては問題ないし、あの大きさと更に高級そうなお酒なら彼女も満足してくれる事だろう。「交渉成立ですね。じゃあ私はここで待つていますので、もし当たったらもう一度ここに来てください。期待してますよ?」

「……………(コクリ)」

そう会話を終えると、ムツツリーニは再びメインエリアへと向かう。

果たして彼は、ハンターを上手く掻い潜り無事におつかいをクリアする事が出来るのだろうか。

——一方、コンサート会場では主役の二人が遅刻しかけるといいうアクションはあつたものの、イベントは順調に進んでいた。

「会場の皆様!! 大変長らくお待たせいたしました!! これより今回のメインイベント!! 水樹カヤ&LINAによる合同ライブを開催しまーすっ!!!」

『おおーっ!! 待ってましたーっ!!』

『もう興奮がおさえられねえよーっ!!』

『早く始めてくれえーっ!!』

「それでは、早速登場してもらいましょう!! どうぞーっ!!」

「じゃ、行こっか。カヤちゃん」

「そうだね。LINAちゃん」

シユウウウウウ……バンツ!

「残高溶解!」

「海面蒸発!」

「不思議なステッキ一振りで——魔法少女ららこになあれっ☆」

『『『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおーっ!!!』』』

「みーんなー!! お待たせー!!」

「たった一度の合同スペシャルライブ!! 最後まで全力で楽しんでいこうぜーっ!!」



『おおおおおおおおおおおーっつ!!!』

しかし、そんな盛り上がりの裏で――

「……クソ、クソツ!! 許さねえ……!!」

「手紙やプレゼントもたくさん送って、握手会じゃスタッフに止められようとも、俺の好きだっていう気持ちもこれでもかと伝えた。一生懸命に頑張ったのに……それなのに、お前らはそんな俺の好意を踏みにじりやがった!! 俺達三人は相思相愛な筈なのに……!!」

「ブチ殺してやる……!! お前らがわるいんだ……!! おれの怒りを思い知れ……水樹カヤ!! LIN A!!」

コンサート会場から離れた場所でスナイパーライフルを構える、一人の男。  
この後、二人に新たな災いが降りかかろうとしていた。

——  
???

『……へえ。序盤とはいえ、一人も脱落者を出さずにミッションクリアとは中々やるじゃないか』

『岡崎君と工藤さんは見事なフラインプレーでしたね。あの僅かな時間の中かつノーヒントで正解に辿り着いたんですから』

『いいじゃないか。これこそ逃走中の醍醐味ってやつさ』

『それで学園長。次のミッションはいかががしますか？』

『そうさねえ……二度続けて同じような内容じゃ芸がないからねえ……。よし、なら次はちよつとひねったミッションにしようじゃないか』

『ひねったミッション……ですか？』

『ああ。最近の逃走中じゃあまりやってるのは見かけないけど、アタシは結構好きでね。逃走者共が慌てふためく姿を見るのが楽しいのさ』

『さて、小童共……次はお前らの“信頼度”がどれ程のものなのかを、たっぷり見せてもらうからね』

そして、藤堂カヲルにより新たな通達が逃走者達に送られる。

「ん？ メールだ」

「まさか、もう新しいミッションが発生したとかじゃないでしょうね……」

「嫌な予感……」

『通達①』

君達逃走者の中に——裏切り者が紛れている。気をつけたまえ』

## 期末試験&amp;吉井玲襲来編

第六十二問 男の携帯電話はプライバシーの宝庫だ！  
誰も触れてはならぬ！！

—— side 岡崎大悟

「ねえ……どうして？ どうしてお兄ちゃんは私の言うことを訊いてくれないの……？  
そんなにあのアバズレ女の方が良いっていうの……？ もしそうなら……絶対に赦  
さない」

——脈が加速する。呼吸が酷く乱れる。全身がとてつもない悪寒と恐怖感で蝕ま  
れている。

かつての可愛らしかった妹の姿はどこにも無い。代わりに俺の目の前にいるのは——  
彼女と同じ姿形をした、狂気に取り憑かれし虚だ。

「違うよね……？ お兄ちゃんはあるな淫乱アバズレ女なんか惚れてないよね……私

……信じてるから」

↓『妹に賛同する』

『否定して本心を伝える』

「クソツタレ……………! ここで唐突な選択肢だと……………?!」

「ヤバイよ大悟兄……………私の第六感が告げている。ここでミスればバッドエンドどころかデッドエンドまっしぐらだよっ! 死に戻り確定だよっ!」

「……………どうする、同志……………? (ゴクツ)」

「分かっている。これまでの苦労を水の泡にするわけにはいかねえ。だからここは慎重に考えなきゃあな……………!」

そう言つてコントローラーを強く握りしめる。

大量の聖漫画&同人誌  
フィギュア書や偶像に囲まれた我がマイルームにて俺と妹の天。そして盟友にして同

志こと土屋康太、通称ムツツリニは窮地に立たされていた。

目の前にはデスクトップ型のパソコンがあり、画面の奥では返り血を纏い鉄パイプを持った女の子がこちらを無表情で見詰めている。そしてその下には二つの選択肢が表

示されていた。

そう、俺達三人は今、エロゲーの攻略の真つ最中なのである。

「やつぱりここは賛同じゃないかな……馬鹿正直に本心を言うよりは生存確率が高いと思う」

「……………いや、そうとも限らない（フルフル）」

「同志の言う通りだ。ヤンデレの実妹つてえのは他に比べてやけに勘が冴えてるからな……主人公の虚言くらい簡単に見破っちまうかも知れん」

「……………もしそれで嘘がバレれば、こちらに勝ち目は無い……………」

「逆効果の可能性も考えられるってこと？」

「……………（コクリ）」

「僅かな判断の過ちが時に命取りとなる事もある……気を付けろ、天」

「……………むう、分かった」

「分かってくれりゃいい。だがしかし……相変わらずこのメーカーの作品は攻略難易度が高いぜ……。だが、そうでなきゃクリアし応えがねえってモンよ……………！」

「……………右に同じ（コクコク）」

今日は待ちに待っていたエロゲーの発売日。その日は丁度日曜で学校が休みだったので俺と天は朝早くに家を出て店に並び、なんとか初回限定版（オリジナルグッズセット）を買うことが出来た。本当なら通常盤でもなんら問題は無いのだが、俺も天も二次元に関しては一切の妥協を許さない。常に全力であれ……それがオタクとしての当然の礼儀であり、またモットーなのだ。

そしていざ帰ろうとしたところで偶然にも同志に出くわした。奴もいつもの朝の“活動”を終えて帰宅する所だったらしく、聞くとこのあとは暇との事だったのでどうせならと思いつつ誘った。すると二つ返事でオツケーしてくれ、今に至る。

だがこの最新作のエロゲー。従来の作品に比べて難易度が尋常じゃないほど難しくなっている様で、ありとあらゆるエロゲーの女性達を墮としてきた俺でさえも手を焼いている。

これまでのテンプレを完全に無視したストーリー構成に細かく散りばめられた伏線の数々、そして一度選択肢をミスれば最初からやり直しという鬼畜仕様。どれをとってもこれまでのものとは一線を画していたのだ。

ちなみにスタートしてからもうかれこれ二十回以上は死んでいる。包丁で刺されたり学校の屋上から突き落とされたり口移しで毒薬を飲まされたり首を切られてポート

でヒロインと心中したりと……殺害方法のレパトリーも中々に豊富だ。ヤンデレ検定一級（自称）の俺から見ても中々に悪くない品数と言えよう。

「だからよ、まずは嘘偽りなく全てをさらけ出して妹の懐疑を解くべき——（ペラペラ）」

「でも、そしたらメインヒロインの幼馴染みの命まで——（ペラペラ）」

「………間違いなく、ただでは済まない」

「ヤンデレにとって隠し事や嘘は禁忌だぞ。それをするといいことは——（ペラペラ）」

「大悟兄は少しヤンデレに対しての既成概念に囚われすぎだよ。もうちよつと見方を変えたり視野を広く——（ペラペラ）」

「………このゲームのクリア条件は、まず主人公が生き残らなければ達成されない。本質を見誤るな、同志……」

「ぐっ……そりゃあそうだがよ……だがしかし——」

「いやそ（こ）は——」

「………敢えて俺は——」



中々意見がまとまらず、画面をストップさせたまま三人で熱い議論を交わしている  
と、突然俺の腹の虫が鳴る音がした。

「(グウウウウ)にしても腹減ったなあ……そういやもう夜か」

「え？ もうそんなにプレイしてたっけか？」

「……………気づかなかった」

時計を見ると午後の八時を少し過ぎた頃。確か家に帰ってきたのは朝の十時頃だったから、どうやら半日近くをエロゲー攻略に費やしていたらしい。我ながら恐ろしい集中力だ。

まあこんなのはいつもの事だから特にどうということは無いんだが。

「うし、そんじゃあ飯にするか。同志も食っていくだろ？」

「……………いいのか？」

「遠慮するな。二人も三人も作る量は大きくして変わらん」

「……………なら、お言葉に甘える」

「おう、任せろ。てことで天は手伝いな」

「りよーかい」

そう言つて天と同志を連れて一階のリビングに向かう。

さて……食材は何があつただろうか。確か昨日は買い物には行つてないからそこま  
で量が入つてはいないとは思うんだが。

「何作るの？ 大悟兄」

「そうだな。同志を長く待たせる訳にはいかんし、手軽に作れるモンでいいだろ」

頭の中で簡単かつすぐに食べられる料理を思い浮かべる。そうなる……焼きそば  
やパスタといった麺料理あたりにするか……？

そんなことを考えながらリビングのドアを開けようとする。その時、

「……？ おい、なんでリビングの電気点いてんだ……？」

「あ、ホントだ。お母さん消し忘れたまま出掛けたのかな？」

俺達の母さんは今日のように店が定休日の場合、基本的にリビングでグダグダしている  
か寝ているか酒を飲んでいるかの三択で過ごしている。

しかし母さんは昨日の夜からずっと出掛けている。まあいつもの通り地元のオッサ  
ン連中と居酒屋で飲んだくれてるんだろうが、したらその間にリビングに立ち入った  
人間は誰もいない筈なんだがな。俺達も帰つてからそのまま俺の部屋に向かつたし。

「つたく、出掛けるならこれくらい忘れんなっての」

「そうだね」

微かに違和感を感じたものの、特に気にする事も無く扉を開けた。

——ガチャリ。

「……………♪♪♪（トントントントン）」

——ガチャツ。

すぐに扉を閉めた。

うん、どうやら俺はかなり疲れが溜まっているようだ。だってキッチンで親友の姉らしき人物がエプロンをつけて鼻唄を歌いながら料理をしているという幻覚を見てしまったのだから。

「……………だ、大悟兄……………？ 今のつて……………もしかして優子ね——」

「違う。あれは俺達のゲームのやりすぎによる心労状態が作り出した幻だ。そうに違い

ない。なにせ戸締まりはしつかりしてる筈だからな」

「でも、なんか美味しそうな匂いまでする——」

「それはいわゆる幻臭というものだ。天、お前もかなり疲れているようだな」

「……………しかし、同志——」

「やめろ！ 俺は信じない！ 俺はこんなおぞましい光景が現実だなんて絶対に信じないぞー！」

そう自分に言い聞かせながら、念のために携帯を取り出して110番通報をしようとする。

『もうすぐ出来上がりね。ならそろそろ大悟達を呼びに行こうかしら』

何も聞こえない、幻聴だ。

『あ、でもその前に仕上げをしなくちゃね。えつと……』

幻聴だ。これは幻聴なんだ。

『あ、あった。これが無いと完成じゃないものね』

やめろ、何も聞こえない。これはただの幻聴で——

『大悟の分だけにこのアタシ特性の《自主規制》を入れて……♪』

「それだけはやめろおおおーっ!!」

誤魔化しきれなくなり、俺は勢いよく扉を開けて中に踏み込んだ。

「あら大悟。丁度良かったわ。ご飯が今出来たわよ」

「出来たわよ、じゃねえよ!! なんでテメエが俺ん家にいやがる!?! 玄関も窓も鍵が掛かってた筈だろ!?!」

「それなら前に凜花さんがくれた合鍵を使ったのよ。ほら」

「あ……ホントだ。確かにうちの鍵っぽいね」

「ふざけんなあの酒飲みババア!!」

母さん。俺は今生まれて初めて貴方に心からの憎しみを抱いているよ。

「こら大悟。そうやってお義母さ——凜花さんをババア呼ばわりしちや駄目よ。失礼じゃない」

「うるせえ! 勝手に人の家に不法侵入するヤツに失礼呼ばわりされる覚えはねえぞコラー!」

「それならアタシ達、相思相愛って事ね♪ 嬉しい♪」

「図々しい程ポジティブ思考回路!?! お前のそのあり得ない発想はどっから湧いてくるんだ!?!」

「あら? 確か貴方は土屋君だったかしら? 来てたのね」

「……………（コクリ）」

「話を聞けコラ！」

この野郎……！ いつもは至極真つ当な立ち振舞いをするくせになんでこういう時だけこんななるんだ……！ 料理の中に《自主規制》とかあの霧島でもやらねえぞ……猫被るのもホントいい加減にしてくれ！ そんなんだから弟の秀吉に可愛い女子生徒ランキングで負けるんだよバーカ!!」

「そんなふざけた事を言うのはこの口かしら？（ギユウウウウ）」

「ずびばせんでじだ……！」

もげる！ もげる！ 唇がピンチ力によって千切り取られるうううっ！

「……………ホント、優子姉と大悟兄って良くも悪くも似た者同士だよね」

「……………（コクコク）」

「そ、そうかしら？ ふふっ……ありがとう二人とも♪」

「……………お世辞に決まってんだろバカ（ボソツ）」

バキツ……！

☆

「……………うん、美味しいっ! 優子姉前より料理が上手くなったね!」

「……………相当な腕前」

「でしよう? これでもかなり練習してるんだから。まあ、まだ大悟や凜花さんには及ばないけどね……………はいダーリン、あーん♪」

「一人で食べるからそれは要らん。そしてダーリンと呼ぶな!!」

「……………同志……………裏切りか? (ギロツ)」

「馬鹿を言うな同志! 俺はずっと二次元一筋だぞ!」

「……………ならない」

結局、優子が作った晩飯を皆で馳走になることになった。

メニューは鳥の唐揚げや豚肉の生姜焼き、卵スープ、サラダといった特になんの変哲も無いものだが……………確かに旨い。

唐揚げは衣がサクツツと揚がっているし、生姜焼きは豚肉が柔らかくジューシーに仕上がっている。スープも卵はふわふわかつ出汁もしっかり出ていて、どこか優しい味わいだ。サラダもレタスやトマト、クルトン等でカラフルに仕上げ、見た目でも楽しませて

くれる。

コイツ……マジで料理の腕あげやがった。下手したら店で出せるかも知れん……。

「んで……わざわざ何しに来たんだけ」

唐揚げを白米と共に頬張りながら、俺は優子にそう尋ねる。

コイツの事だ。ただ手料理を作りにはわざわざ出向いてきたではあるまい。何か他に目的がある筈だ。

「うん。実はちよつと大悟に頼みごとがあつて来たのよ」

「頼みごとだと？ それだけか？」

「それだけよ？」

なんだそんな事か。

てつきりまた何か俺が知らぬうちにやらかしてお仕置きされるんじゃないかと思つたぜ。

「でもそれならわざわざ直接じゃなくてもいいんじゃないの？ 優子姉」

「それじゃ駄目よ。事前にアポを入れたら意味が無いもの」

「??？」

「どういう事だ？ 話があるならそつちの方が効率が良いだろうに……まあいい。一先ず聞いてみるとするか。」



そう思っていると、優子がこちらの方を向いて掌を差し出しながらこう言った。

「大悟。携帯電話を見せて？」

「は？」

思わず声が漏れる。

そんな事言われるとは思ってなかったからだ。なので一応聞き返す。

「なんでいきなりそんなこと言い出すんだ？」

「実は今日、代表と一緒に遊んでただけだね、その時丁度テレビを見てた時に気になる話題があったの」

「何だそれ？」

「浮気の痕跡は相手の携帯電話に残ってる事が多いんだって」

「そうか」

なるほど、そういうことか。つまり俺の浮気を確かめるためにその方法を使ってみよ  
うって魂胆か。相変わらずそんな大した根拠の無い安っぽい情報に感化されやすいヤ  
ツだ。まだまだ子供だな。

全く、優子が珍しく改まって頼みごとなんて言うから身構えていたのが馬鹿馬鹿しい

な。答え？ んなもん決まってるなあ。

「だから大悟。携帯電話を貸して♪」

「死んでも嫌だね（ブスリ）」

箸で目を刺された。

「あああああーっ!!? 目が、目がいつもの二割増しで痛えええっ！」

「大悟。もう一度言うわね。携帯電話を貸して♪」

「フザけんな優子テメエ！ またいつもの実力行使かコラア!!」

目を押さえてのたうち回りながら優子にそう抗議する俺。

この野郎！ 一切の躊躇い無く突きやがって！ 俺の目玉を何だと思ってるんだ畜生！ 悲しいやら痛いやらで涙が止まらない。

「だって、大悟が言うこと聞かないからつい……」

「にしてもいきなり箸で目え突くバカがいるか！ 危うく失明するところだったじゃねえか！」

「心配しないで？ アタシは愛する人が例え盲目になっても全然大丈夫だから♪」

「こっちは全く大丈夫じゃねえ!!」

前言撤回、やはりコイツは秀吉の皮を被った精神異常者だ！

「そこまで嫌がるなら仕方無いわね。無理矢理持つていくわ」

そう言つて優子が俺のズボンに手をかけた。

最悪だ! 今日によりによつて朝出掛けたままの格好だから携帯がポケットにそのまま入りっぱなしになつてやがる!

「そ、そうはさせせん! ようやく修理が終わつて戻つてきたばかりなのに、そう易々と取られるかつてんだ!」

「そう。ならばズボンごと奪つてやろうじゃない。いや、むしろズボンもアタシに寄越しなさい」

「なんでだ!? 携帯はまだしもズボンは要らんだろう!」

「そんな事無いわ。だってそのズボンには大悟の匂いがたつぷりと染み付いてるもの。それだけでアタシにとつては値打ちものなのよ?」

「全く理解出来んなあ! 第一、俺のズボンなんか持つてつて何するつもりなんだ!」

「そんなの……恥ずかしくて言える訳無いじゃない(ポツ)」

「コイツ変態だーっ!」

おのれ! 三次元のヤンデレとはここまで恐ろしいものだったのか! もしこれが二次元か葉月ちゃんのような純真無垢なロリッ子が相手ならお安いご用だったのに……っ!

そして隣では同志が鼻血を出して倒れてやがるしなあ！

「なら選びなさい。このまま携帯ごとズボンと奪われるか、大人しく携帯をアタシに見せてからズボンを渡すか」

「テメエ俺の事を明久レベルのバカだと思ってるだろ！　ちよつと言ひ方を変えただけで内容は全く一緒って事ぐらいすぐに分かるからな！」

「ああもう抵抗しないで！　ベルトが外れないでしよう！」

「それをさせない為に抵抗してるんだろが！」

そのまま軽い揉み合いになった。

優子はその華奢な身体（一部分含む）からは想像もつかない程の腕力で俺のズボンを脱がせようとしてくる。最早当初と目的が完全に変わっていた。

オマケに目も軽くイツていて、まるで気に入ったシヨタを犯す直前の女みたいなヤバい目つきになっていた。え？　例えが分かりにくい？　そんなバカな。

「も、もうちよつとで外れるわね……！　ハア、ハア……、ようやく大悟の匂いが手に入る……うふふふ……っ！」

「つておい!?　お前なんでパンツまで脱がそうとしやがる!？」

「大悟の匂い……癖になりそう……♪　はあつ、ううんつ、しゅきい……♪」

「や、やめろ！　分かった分かった！　携帯電話は渡すから！　だからズボンとパンツ

だけは勘弁してくれえええつ!!」

「大悟兄っ! ムツツリーニさんの出血が止まらないよおおっ!!」

「……………ツ! ツツツ!! (ドバドバドバ)」

### 閑話休題

「ほらよ。好きナだけ見とけ」

「ありがと♪」

大人しく降伏し、俺は優子に携帯電話を渡した。

流石の俺でも妹とダチの前でフル○ン姿は晒せないからな。苦肉の策だ。

「……………」

優子は慣れた手つきで俺の携帯を弄っている。

「どうやらメールや通話履歴、入っている画像なんかを見回っている様だ。プライバシーもへったくれも無い。」

「……………まあ、二次元のエッチな画像くらいなら見逃してあげるわ。ただこの女騎士×スライムってのはどうかと思うけど」

「わざわざ口にしないでくれ……」

性癖ダダ漏れじゃねえかコンチクシヨウ。

「……アタシよりも吉井君や坂本君の方が通話もメール也多いわね」

「それがどうした？」

「つまり、大悟の浮気相手はこの二人ということになるのかしら？」

「んなワケあるか！」

よりにもよつてあのカス共が浮気相手だと!? 気持ち悪いこと抜かすな!! 俺はずつと二次元一筋つて言ってるだろうがこのアホウが!!

「……まあ、でもこの二人なら特に問題は無さそうね……そうなるとやつぱり大悟と坂本君が攻めで吉井君が受けかしら……? (ブツブツ)」

今何かとんでもない発言が聞こえたような気がするが聞かなかつたことにしておこう。

その後もしばらく中身をチェックしていたが、結局浮気が疑わしき証拠は一つとして見つからなかつた様だ。

「良かった♪ これで安心したわ♪」

「当たり前だろう。第一浮気も何も俺は三次元の女に興味は無い。ましてやそれを写真に残すなんて愚行をする筈が——」

すると、突然俺の携帯の着信音が鳴った。

「あ、メールが来たわよ」

「そうか。なら返してくれ——つてもう読んでるのかよ」

こんな時間にメールとは何だろうか。ダイゴブックスへの依頼は基本的には対面もしくは電話でしか受け付けてねえし、秀吉はそもそも携帯を持たないし、ひよつとして迷惑メールあたりだろうか?

「ほれ、もういいだろ。さっさと携帯電話を返し——ん? 優子。急に能面のような顔になっているがどうした?」

「……大悟。今こんなメールが来たんだけど……何これ……?」

【Message From 小暮先輩】

岡崎くん。この前は初めてのお誘いありがとうございます。あのような日常では中々味わえないような刺激的な経験をさせて頂けて、私もとても楽しかったです。

またの機会がありましたら、是非また私を連れて行ってくださいませ♡

「フアツ!!」

「へえ……小暮先輩つて一体誰なのかしら? この文面からして女であることは間違いない無さそうだけど……(ゴゴゴゴゴ)」

「待て、違う!! 確かにこの人は女性だがお前の思っているような間柄ではない! ただイベントの売り子としてコスプレをして貰ったというだけで」

「問答無用よ。アタシに内緒で他の女と仲良くするなんて……絶対に赦さない……(ポキポキ)」

あれ、おかしいな? これと似たような光景をさつきまで見ていたような気がするぞ?  
?

「そ、天! 同志! 助けてくれ! このままじゃ俺がバッドエンドどころかデッドエントドを迎えてしま——つてアイツらどこ行きやがったああああっ!」

気がつくとりビングから二人の姿が消えていた。どうやら逃げられたようだ。

「大悟……それならアタシも今から刺激的な経験をさせてあげようじゃない……それも朝までたつぷりとね……(スツ)」



「おお……！ おお……っ！ ダメだ！ 落ち着け優子！ それ以上気を高めるなあっ！ やめろ優子！ 落ち着けえっ！」

「とりあえずまずは他の女を見るその両目からいくわね」

「やめろおおっ！ 死にたくなあい！ 死にたくなあああい！ 死にたくなあああい！ 死にた——」

「えい♪（ブスリ）」

「ああああああああああああああ……！！」

P i P i P i P i P i

【Message From 吉井明久】

明日、大悟の家に泊まってもいいかな？  
んだ。君と一緒にいさせてくれ。

明日の夜はちよつと……家に帰りたくない

## 第六十三問 些細な違和感ほど気にしがち

— side 明久

『雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちよつと……帰りたくないんだ』つと。よし。送信送信」

学校に向かいながら雄二にメールを打つ。本当なら今日は僕の家でゲームの再戦をする予定だったけど、昨日から姉さんが僕の家に戻ってきているという非常に厄介な事態になってしまっているのでもういいかない。

「はあ……まさか姉さんが帰ってくるなんて思わなかったよ……」

思わずそんな独り言が出る。

あんなおかしいな姉がいることは極力隠しておきたいし、何より僕自身が今日はあの家に帰りたくない。だからここは是が非でも雄二に頼み込んで家に泊めてもらいたいところだ。

「結局大悟は音沙汰無しか……」

実は雄二よりも先に大悟の方に今と同じメールを送っている。しかしこつちからは一向に返信が来ないまま今に至っている。いつもなら遅くても一時間以内には返して

くれるというのだ。

「何かあったのかな？」

そう思いながら学校に続く坂を登っていると、

「んむ？ 明久」

「あ。おはよう秀吉」

「おはようじゃ」

背中の方から聞き慣れた声が聞こえてきた。

見ると秀吉が小走りでこちらにやってくるのが見えた。

「あれ？ 今日は一人なんだね。大悟と一緒にやらないの？」

「それが迎えに行ったら家にいなかったのじゃ。何やら昨夜から病院に行ってるらしくての」

「病院？ あの頑丈な大悟が？ そりやまた珍しいこともあるね」

ひよつとしたらまた木下さんにボコられたりしたのかな（笑）

「うむ。そうじゃな……………それよりも明久よ」

「？ どうしたの秀吉？ 僕の顔をじつと見て」

秀吉が僕を観察するように見つめている。なんだろう？

「…………心なしか、いつものお主と何か違う感じがするのじゃが…………？」

「うえ!? き、気のせいじゃないかな? 何も変わったことなんてないよ?」

「普段と違って血色が良いように見えるのう」

す、鋭い……流石は演劇部に所属しているだけあって、なんて洞察力の高さなんだ。確かに秀吉の言う通り、今朝の僕は体に力が漲っていたりする。理由は今朝にちゃんと朝食を摂ってきたからだ。

姉さんの監視がある以上、今までから一変し、僕は規則正しい生活というものを演じる必要がある。なので僕は持っていた大量のゲームや本を売りさばいてまで生活費を捻出した。それも全て気ままな一人暮らしを継続させる為である。

「何か臨時収入でもあって朝食が摂れたのか?」

「ま、まあちよつと……たまには僕だって、ね」

「シャツもズボンもアイロンがかかっておるようじゃし」

「そ、それはホラ。今日は週の初めなんだから、それくらいは」

「……怪しいのう」

秀吉の隠し事を見抜かれてしまいそうなその目に耐え切れず、僕は思わず秀吉から逃れるように体ごと向きを変えた。

「ホントに何もないんだよっ」

「ならば何故ワシから目を逸らすのじゃ?」

「だから別に何も」

「ならばこちらを向いてもよからうに」

「ご、ごめん秀吉！ 僕ちよつと用事を思い出したから先行くねっ！」

秀吉を置いて校舎に向かって走り出した。

どうしよう。多分後で追及されるだろうし、それまでに何か言い訳を考えておかないとなあ……。

「……………」

——side 大悟

「……………」

「あ、気がついた？」

目を覚ますとそこは家ではなく、病院の一室だった。どうやら俺は昨夜優子にボコボコに痛め付けられたあと、そのまま意識を失ってしまったようだ。

隣には椅子に座った天が俺の顔を覗きこむように見つめていた。

「病院かあ。これで何度目だろうなこのパターン」

「ホント良かったよ。大悟兄に適合する血液型がすぐ見つかった」

「そうだな……え？」

俺輸血が必要なくらいやられたん？ それもう殺人未遂やん。

「もう身体は平気？」

「ああ。頭蓋骨にヒビを入れられたが大丈夫だ」

「それは世間一般的に大丈夫じゃないと思うけど……」

確かに。

「ごめんね大悟兄。アタシもムツツリニさんもアツサリ逃げちゃって」

「別に構わん。お前らがいてもいなくても俺の結末は変わらんかっただろうからな。にしても優子の野郎……俺を殺す気かってんだ」

全身がズキズキと痛む。目も霞む。まだ完全に回復はしていないようだ。

俺は二次元一筋だとあれだけ言い聞かせているのに聞く耳すら持たねえ……ホントにあのヤンデレには困ったものだ。

「……ねえ大悟兄」

「あん？」

「今更なだけどき、どうして大悟兄は優子姉と仲良く出来るの？」

制服に着替えていると、天が俺にそんな質問をしてきた。

「急にどうした？」

「だってさ、普通に考えたらおかしいもん。いくら優子姉がヤンデレだからってここま  
で酷い事されたら嫌いになってもおかしくないのに、ちつともそんな素振り見せない  
じゃんか」

「……………」

「ねえ、どうして?」

天が俺に心配そうな表情を浮かべる。

どうして俺が優子にここまでの仕打ちを受けているのにも関わらず、アイツと変わら  
ず友好関係を築いているのか……誰よりも俺を近くで見ってきた妹だからこそ、それが気  
になつてしまうのだろう。

俺は少しの間を置き、言葉を返した。

「……………償い、かな」

「償い?」

そう呟くと、唐突に脳内にかつての……二年前の記憶がフラッシュバックした。

その記憶は俺が最も忌み嫌うものであり……しかし同時に、絶対に忘れてはならない  
ものでもある。

「償いってことは、やっぱりあの日の事? でもアレは…………」



「ああ。でもアレは俺が悪いんだ。もつと俺が上手く立ち回れてたならよ……優子をみんなにも歪めちゃうことも無かった。本当ならアイツはもつと普通の男に恋をして、普通の恋愛が出来ていた筈なんだよ。けどその未来を……俺が奪った。なのに当の俺が何もしないってのは、あまりにも無責任過ぎるだろう」

「だから……繋がりやを切らないっていうの？」

「それが俺なりのケジメの取り方なんだよ」

優子を変えたのは他の誰でもない。俺自身だ。

だからこそ俺には、彼女がこれ以上自らの呪縛に苛まれ、ボロボロに壊れてしまわないうように見守っていく義務がある。

それだけが……俺がアイツにしてやれる唯一の罪滅ぼしだと思うから。

「あ、だからって優子の事が嫌いなワケじゃねえぞ。アイツもアイツで良いところはあるしな」

「だったらもう優子姉と付き合えば？」

「え」

「優子姉の好きって気持ちが大悟兄が受け入れちゃえばそれで丸く収まると思うけど。そしたらヤンデレ行為も少しはマシになると思うし、デメリットなんて無いじゃん」

「う……」

けどマジでそこが難儀なんだよなあ……。

優子が他の誰かに恋心でも持つてくれりゃあいいんだが、あの様子じゃ期待が持てそうにない……けど俺も三次元の恋愛なんてこれっぽっちもするつもり無いし……けど優子には普通の女の子に戻ってもらいたいってのもある……。

彼女とのケジメをつけるといつておきながら自分の考えも曲げたくない……なんとも自分勝手に矛盾した考え方だろうか、と自分でも思う。

「それは……無理だ」

「どうして？」

「えーと……ほら、俺が優子と付き合ったなどと周りに広まってみろ？ 次の日には愛すべきお兄ちゃんが挽き肉になっているかも知れないんだ」

「ふーん」

「そ、それに俺は二次元一筋の男！ 三次元との恋などもっての他よお！」

「……………ま、今はそういうことにしといてあげる」

やけに奥歯にものが挟まったような言い方をされた。

「……………でも安心した。やっぱり大悟兄は変わらないね」

クスクスと小さな笑みを溢し、天は言った。

「なに？」

「責任感があつて優しい。友達を見捨てない。自分が本当に守るべきものの為なら自分を犠牲にしても守る……まさに男の中の男だもん。妹であるアタシが言うのだから間違いないよ。優子姉が惚れるのもすつごい分かるな。にひひ」

「そんな事ねえよ」

「そんな事あるよ。だって少年院に入ることになったのだから、秀吉兄と優子姉を——」

「天」

俺は最後まで言葉を紡ごうとした天を手で制した。

「もう終わった事だ。これ以上掘り返さないでくれ」

「あ。う、うん……ごめん」

「分かれればいい。んじゃ俺学校行くわ」

「行つてらっしゃい」

着替えを終えてベッドから起き上がり、荷物を持つて病室を出た。

その去り際に天が後ろから声をかけてきた。

「大悟兄。なんでもかんでも一人で抱え込むのは駄目だよ？ もう大悟兄にはあの時と違つて信頼出来る人が周りにいっぱいいるんだから」

一人で抱え込むな、か。

「ああ、わかつてるよ」

俺はそう言い残し、病院を後にした。

やれやれ、妹には全部お見通しだなと心の中で思いながら。

「……………私も、そろそろ行かなきゃ」

—— F クラス

「おぎーす（ガラガラ）」

「あら岡崎君。こんな時間に登校なんて遅刻かな？」

「ま、そんなところです。すんませ——ん？」

「……………（カキカキ）」 ↑真剣にノートを取っている明久

「……………な。な……………」

「明久がちやんと勉強してやがるだとおおおおーっ!!? 世界の終焉の前触れかあああああーっ!!?」

「なんだと大悟コラアアアアアーっ!!」

——side 明久

まさか教師からだけじゃなく、大悟からも言われるなんて。そんなに僕が真剣に勉強してるのがおかしいんだろうか。

そんな態度に遺憾を思いつつ四時間目の授業道具をしまい、昼休みの用意をしていると、そこに美波がやって来た。

「アキ、何があったの？ 朝から様子が変みたいけど」

「別になんでもないよ。ちよつと真面目に勉強に取り組んでみようと思っただけで」

「アキ。おでこ出しなさい。今熱を測るから」

だからどうして皆似たリアクションを取るんだろう……？

すると美波が僕に手を伸ばしてくる。おでこに手を当てて熱を測る気なん——

「つて、これはダメだつ！」

「きやつ」

僕が突然飛び退いたせいで、美波が小さく悲鳴をあげていた。

「こらつ！ 何よそのリアクションは！ 折角人が心配して熱を測つてあげようとしたのに！」

「ご、ごめん！ 色々と事情があるんだ！」

「事情？ 何よそれ？」

美波はこちらに疑わしげな視線を送っていた。

弱った。全部を説明するとなると姉さんの存在もバレちゃうし、ここは話題を逸らした方がいいかもしれない。

「う……。えつと……。そ、それよりまずはお昼にしようよ！ 昼休みなんて短いんだからさー！」

用意しておいた昼食を匏から取り出して卓袱台の上に広げる。多少強引だけど、こうすれば美波もお昼にするだろう。

「え!? アキ、お弁当を持っているなんて一体どうしたの!？」

「ええっ!? 明久君がお弁当を!」

美波に加えいつの間にかやってきたのか、姫路さんの二人が驚いた顔をしていた。

「いや、そこまで驚かなくても……。僕だって人間なんだから、たまには栄養を摂らないと死んじゃうし」

とはいっても、仕送り直後の本当にごく短い期間だけだ。

「それはそうでしょうけど……。でも、今日はいつもと違いますか?」

「そうね。アキが食べるとしたら大抵は買ってきたお弁当なのに、今日は手作りみたいですわね」

二人がジロジロと僕のお弁当を見ている。

参った。そんなところまでチェックされているとは思わなかった。

「明久君。どうして今日は手作りのお弁当なんですか?」

「えっと、それは……」

「まさか、誰かに作ってもらったのかしら?」

美波の目がスツと細くなる。いけない。攻撃態勢だ。

身を守る為にもここは正直に答えよう。それにこれに関しては特に隠すべきこともないし。

「一応、自分で作ったんだけど」

「嘘ね」

「嘘です」

だというのに、全く信用してもらえなかつた。

「だって、アキに料理なんて出来るわけないもの」

「随分と上手なお弁当ですよ……。明久君の周りでこんなに上手にお弁当を作れる人っていうと」

「坂本か岡崎。もしくは土屋の内の誰かね」

なんだか会話がどんどんおかしな方向に向かっている気がする。

「やれやれ……。二人の想像に任せるよ」

「……」

『今日は……帰りたくないんだろ?』

『全く。困った仔猫ちゃんだぜ。お前は……』

「アキはもうそんなに汚れちゃってるの!？」

「信じたくないですーっ!」

「不潔だよ吉井君!」



「二人とも一体何を想像したの!? ていうかなんで久保君までいるの!？」

内容が気になるけれど、おそらく真実を聞いたら立ち直れないほどのショックを受けてしまいそうな気がする。

「そう言えば、今朝も坂本に『今夜は帰りたくない』なんてメールを送っていたわよね」  
「それにさつき岡崎君も『明久からこんなメールが来てた』って携帯を見せてくれました……」

「やっぱり、坂本と岡崎とアキって……」

やっぱり、何だと言いたいんだろう。

——放課後。

「雄二に大悟、ちよつといい?」

帰り支度をしている悪友達に声をかける。

「ん? どうした明久」

「何か用か？」

「今日なんだけどき、雄二か大悟の家に泊めてくれない？　それで、次の期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

——ザワツ

言った瞬間、教室にどよめきが広がった。

『おい……聞いたか、今の……？』

『確かに聞いたぜ。俄には信じがたいことだが……』

『まさか、アイツらがな……』

『ああ。まさかあの吉井に坂本。そして兄貴が……』

『『期末テストの存在を知っているなんて……』』

色々と言ってやりたいことはあるけど、今日は見逃しておこう。命拾いしたね、皆。  
「勉強を教えてほしいだど？」

「うん」

雄二は科目問わず全体的に出来るし、大悟は社会科目のみにおいてなら教師以上の知識を持っている。姉さんの件も踏まえた上で、今僕が勉強を教えてもらうにはうつつ

けの二人だろう。

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか」

「待って！ 僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ！ 分数の

掛け算だつてきちんと出来るからね!? 大悟じやあるまいし!」

「ちよ待てやコラア！ 俺だつて九九くらい言えるわバカ野郎!」

「 $9 \times 9$ は?」

「88!!」

「お前マジか」

僕以上のバカがそこにいた。

「ほらみろ！ 大悟なんかより僕の方がまだマシでしょ!」

「ああそうか。明久は三角形の面積の求め方に躓いているところだつたよな」

「(底辺)  $\times$  (高さ)  $\parallel$  (三角形の面積) ! これでしょ!」

「ガハハ！ やつぱりバカだなあ明久！ それは最後に2をかけるんだつつの!」

「よしよし、二人にしては良くできたな。あとは最後に2をかけるんじゃないやなく2で割ることを覚えたら三角形の面積が出せるようになるぞ?」

「……………」

……………。

「ふう、やれやれ……。雄二は人の揚げ足を取ることに関しては天才的だね」  
「全くだ。そこは評価に値する」

「凄え！ その返しは流石の俺でも予想外だ！」

ち、違う！ 今のは大悟のあまりのバカさ加減に当てられちゃっただけで、本当はきちんと解けるんだから！

「あの、明久君。岡崎君」

すると姫路さんが鞆を手に抱えてやってきた。

「なに、姫路さん？」

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど」

「言えるからね!? 大悟はともかく僕はちゃんと九九は言えるからね!」

「俺だつてさつきは勢いで言っちゃまっただけで本来ならちゃんと言えるわ!」

「岡崎君。8×8はなんですか？」

「66!!」

「あの……64ですよ？」

「……………姫路。いきなり引っかけ問題はずるいぜ」

「私何も騙そうとしてみせんよ!」

どうやら大悟の脳ミソは小学校低学年あたりで成長がストップしているらしい。

「しかし、急にどうしたのじゃ？ 明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

「……………明久らしくない」

「そうね。二人の言う通りだわ」

秀吉とムツツリーニ。美波までやってきた。僕が勉強をするって言っただけでどうしてこんなに人が集まるんだろう。

「それだけお前がバカだから」

「心を読むな！ バカ大悟！」

九九もろくに出来ないヤツに言われたくないね！

「あの、明久君。私で良かったら……一緒に勉強、しませんか？」

おずおずといった感じで姫路さんが手を挙げてくれた。

いつもならとてもありがたい話なんだけど、今日はちよつと事情が違う。だって、雄二や大悟の家ならともかく、

「姫路さんの家に泊めてもらうわけにはいかないしなあ……」

「え？ 明久君、私の家に来たいんですか？」

「あ、いやそうじゃなくて」

「そ、それなら、家に電話してお父さんにお酒を飲まないように言っておかないと……。」

その……、もし、ですけど、明久君がお父さんに大事なお話があるのなら、酔っぱらっちゃつてると困りますし……」

「大事なお話？ それって——はっ、まさか転校の話!? だとしたら今からでも説得に行くけど!」

畳と卓袱台程度じゃダメだったのか! せめてちゃんとした椅子と机を用意できていれば……!

「転向、ですか? 明久君のお家って、仏教じゃないんですか?」

「ほえ? 仏教? 何の話?」

「いえ、ですから、お家の宗教が違うことのお話を……」

「「??」」

なんだか、会話が噛み合っていない気がする。

「たまに姫路の思考回路って明久と同レベルになる時があるよな」

「アホの子キャラ……確かにラブコメにおいては主人公、ヒロイン共に備わっていてもおかしくない要素だな」

「朱に交われれば赤くなる、といったところじやろうか」

「……………似た者同士」

悪友四人がこつちちを見てボソボソ何かを言い合い、美波は知らない単語でも入ってい

たのか頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

「それはそうと明久。なんで俺や大悟の家に泊まりたがってるんだ？」

「自分の家になにか問題でもあんのか？」

「あー、えつと、実は」

「嘘をつくくな」

「急に勉強に目覚めて——つて、早いよ！ まだ何も言っていないのに！」

確かに嘘だけだ。

「まあ、次の試召戦争と夏期講習回避の事もあるし、勉強くらい教えてやらんこともないが」

「え？ ホント？」

「ただし、明久の家でだ」

「ええっ!? だっ、だだだダメだよ僕の家は！ 今日ちよつと、その、都合が悪くて！」

そしたら確実に姉さんの事がバレてしまう！ それだけはなんとしてでも避けないと！

「都合が悪いだと？ 何かあるのか？」

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日は俺と大悟とお前の三人でお前の家でスマ○ラをやる予定だつ

たろうが。改装業者なんて来るわけないだろ」

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「んなモン管理人にでも事情話して開けてもらえばいいだろ。お前ん家マンションなんだから」

「でもなくて、家が家事になっちゃって」

「火事にあつたくせに弁当を用意してYシャツにアイロンをかけてきたのか？ お前はどこまで大物なんだよ」

「あー、えーつと、他には他には……！」

「いい加減にしろ。お前の嘘は底が浅いんだよ」

ぐ……色々考えてみたけど、もう理由が思い付かない。

「明久よ。お主、何をそこまで隠しておるのじゃ？」

「うえっ!? いや、別に何も！」

「何かあるのか分かんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……。面白そうだな。確認に行ってみるか」

「必死になるところが益々興味をそそられるしな」

ニヤニヤといやらしい目で笑う雄二と大悟。

「……………家宅捜査」



「テスト期間で部活もないし、ワシも行ってみようかの」

「ウチも。何かアキの新しい一面が見られるかも知れないし」

ヤバイ！ どんどん事態が悪い方向に進んでいる！

「ダメだよ！ 本当に僕の家はダメなんだって！ その、凄く散らかっているから！」

「お片付け、お手伝いします！」

さ、流石は姫路さん……！ 天使のような優しさだ……！ けど今はその優しさが

返って僕を窮地に追い込んでいる……！

どうすれば——そうだ！ 女の子が触りにくいものが散らかっていることにすれ

ばっ！ となるとえーとえーと……アレだっ！

「散らかっているのは、2000本のエロゲーだから!!」

一時の静寂。こ、これはイケ——

「——片付けますっ!!」

「全部処分するから!!」

「……………任せておけ！（グッ）」

「明久……。お前ってヤツあそこまで……これは是が非でも見に行かなくっちゃあな！」

(ウルウル)

しまった！ 更に姫路さん達に火を点け、ムツツリーニと大悟の興味を煽る最悪の結果に!? 物凄い逆効果だ！

「よし、それじゃあ意見もまとまったことだし、明久の家に行くか」

「「「おーっ」「」」

「やめてーっ！」

ど、どうしよう……。。

## 第六十四問 吉井玲登場

——side大悟

「何があるんだろうな」

「ムツツリーニや大悟と違って明久は滅多に隠し事をせんからな。何があるのか楽しんじゃな」

「……………隠し事なんて何も無い」

「ちよつと待ってくれ。俺もか？」

「当たり前だろ」

「大悟は昔から秘密主義な所もあるからの」

「そんな…………」

明久の家に向かう道中。明久を除く面子はペチャクチャと楽しそうに会話をしながら歩いていていた。

ちよつと待ってくれ。同志はともかくどうして俺まで秀吉にそういう風に見られているのだ。非常に納得がいかないぞ。確かに色々と世間様に堂々と公表出来るようなアレやコレやソレなどの代物はいくつか持つてはいるがそれだけだ。俺はダチに対し

ては清廉潔白だと言うのに……!

しかもまさか、それを長年の付き合いがある秀吉から言われたのが更にダメージに乗せしてくる。

「そんな……酷いぞ相棒。お前が俺をそんな風に思っていただなんて……見損なつた!」

「……………同志を泣かせるのは許さない……っ!」

「な、何故じゃ! 何故ワシが責められておるのじゃ!」

「気にするな秀吉。バカの戯れ言だ」

「むう……」

その場に体育座りをして俺はシクシク泣き出す。クソオ! 雄二はともかく秀吉だけは俺の事を信用してくれていると思っていたのに、こんな仕打ちはあんまりじゃねえか! おお神よ! 俺が一体何をしたというのですか……。

すると流石に言い過ぎだと思つたのか、秀吉が申し訳なさそうな表情で俺の肩にポンと手をやる。

「わ、悪かつたのじゃ……だからそう泣くでない」

「なら責任とつて俺の嫁になれ!」

「何故そうなるのじゃ!」 そもそも嫁ではなく婿の間違いじゃろう!」

「それも違うと思うが」

「嫌だ嫌だ！ 俺は秀吉が嫁になって○○○して●●●からの□□□□□してフィニッシュは△△△△△△してくれと言うまで絶対にここを動かないんだよおおお!!」

「!? ○○○して●●●……っ! (ブッシャアアアア)」

「道の真ん中で何を言っておるのじゃお主は! ——っでどさくさに紛れてワシに抱きつくでないわー!!」

「うおおおおおおおーっ!!」

「おーいお前ら。茶番は早く終わせろよー」

### 閑話休題。

「でも、何でしょうね? 明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。あれだけ合宿でやらかしているのに、今更いやらしいものなんて隠したがると思えないし」

話は再び明久が何を隠しているのか、という話題になる。

俺達は一度覗き騒ぎを起こしてるからな。島田がそう思うのも無理はない。

「そうじゃな……。急に手作りの弁当を持ってきたこと、Yシャツにはアイロンがか

かつておったことなども合わせて考えると……」

「考えると？」

「女でも出来たか」

それはねえな。

「……………っ!?!」

が、女子の二人は分かりやすく驚いていた。

「あ、アキツ！ どういうこと!?! 説明しなさい！」

「む、むう……。明久に伴侶か」

「……………裏切りもの……………っ！」

「僕、何も言っていないんだけど……」

島田、秀吉、同志の三人がそれぞれ三者三様のリアクションを見せる。それに対し明

久は呆れた表情をして言葉を返した。

まあ明久に女、ましてや彼女なんて天地がひっくり返ってもあり得ない事だがもし仮にそれが事実であつたとしよう。そうなると……、

明久に女がいる。

←

だがブサイクな明久に彼女が出来るワケはない。

←

となると何かしら強引な方法を用いたに違いない。

←

違法性アリ

←

- ①弱味を握って脅迫
- ②力づくで無理矢理
- ③クスリで弱らせて
- ④催眠術

「明久。その方法は全部犯罪だぞ」

「何が!？」

やれやれ、いくら女に縁がないからって流石に犯罪行為にまで手を染めるのはいかがなものかと思うぞ。俺は。

なんて思っていると、後ろから姫路が優しい口調で言った。

「大丈夫ですよ。明久君が私達に隠れてお付き合いなんで、そんなことをするはずがあ

りませんよ。そうですよね。明久君……」

「あの、目が笑ってませんけど……」

姫路のヤンデレ度が1上がった。

もうコイツらそのままくつついちまえばいいのに。

☆

そうこうしているうちに明久のマンションに到着した。

「ほら明久。鍵を開けろ」

「イ……イヤだ」

まだ抵抗する気がコイツ。往生際の悪いヤツめ。

仕方ない。ここは例の秘密兵器を、と思っていたら雄二が言った。

「明久。裸Yシャツの苦しみ、味わってみるか？」

「……………涙目で上目遣いだとありがたい」

「あ、なら靴下は履いたままで頼む」



「ムツツリーニ！ ポーズの指定を出して何する気!? 大悟も意気揚々とスケッチブックを取り出して何する気!? 売るのが!? 僕の純情を売る気なの!?」

「お前は一部のマニア達から結構な需要があるからな。出せば確実に儲かる」  
「聞きたくないよそんな同人誌界隈の情報なんて！」

ちなみにそのマニアの内の一人はすぐ隣にいるぞ。

「土屋君、岡崎君。できればYシャツのボタンの上二つは開けておいてもらえるとありがたいです」

「了解」

「姫路さんもオーダー細かいよ!? わかったよ！ 開けるよ！ 開ければいいんでしょ！」

「ボタンを？」

「鍵を！」

「「えー」」

「そのバカ三人！ 露骨に不満げな顔をするな！」

折角次のイベントで売ろうと思ってたのに、実に残念だ。

そしてとうとう抵抗は無駄だと思ひ観念したのか、明久は家の鍵を開けた。

「それじゃ、あがつてよ」

何かを確認していたっぽい明久がそう言つて俺達を招き入れ、リビングへと繋がるドアを開け放つた。

さてさて、2000本のエロゲーはどこにあるのかなと心の中でワクワクしている  
と、

「……………」

目の前には、室内に干された女物の下着があつた。

「いきなりフォローできない証拠があーっ!？」

明久が慌ててその下着を取つて別の部屋にブチ込んだ。しかし時すでに遅し。その光景は俺を含む全員が見ていたワケで。

「これ以上ないくらいの物的証拠ね……………」

「そ、そうじゃな……………」

「……………殺したいほど、妬ましい…………!!」

最早この状況で言い逃れは無理だろう。

さようなら明久。お前のことは出来るだけ忘れないようにす——

「ダメじゃないですか、明久君」

「え？」

——ん？

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないませんか？」

「「コイツ認めない気だ！」」

姫路が若干の濁った目で、明久にそう訴えかける。

明久の近くに他の女性がいるという現実を受け入れたくないのだろう。姫路よ……お前はこの短期間でどれだけヤンデレとしてレベルアップしていくつもりなんだ。

「あら？　これは——」

すると姫路の視線が違う方に移る。その先にはリビングの卓上に置いてある正方形の物体だった。

「なんだこりゃ？」

「これは化粧用のコットンパフじゃな」

へー、そうなのか。でも化粧用ってことは女性が——

「いいえ。それはハンペンです」

「「ハンペン!?!」」

いや絶対に違うだろ——というツツコミを入れたいがあの天災的な料理の腕と知識を持つ姫路ならハンペンと化粧品を間違えてもおかしくない。

やっぱり姫路は普通の人間とは次元が違うようだ。てかエロゲは？ エロゲどこ？

「……………！これは…………」

「なんだ？ ムツツリーニ」

今度は同志がキツチンで何かを見つけたようだ。見に行ってみるとそこにあつたのは——やけにヘルシーな中身をした弁当だった。

姫路がそれに気づいて視線をやると、突然その場にへたりと座り込んでしまう。

「しくしくしく…………」

「うええっ!? どうして急に泣き出すの!？」

「もう、否定し切れません…………」

「ちよつと待って！ どうして女物の下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの!？」

キャパオーバーなんだろ。

「はあ…………。もうこうなったら仕方がないよね…………。正直に言うよ」

泣いている姫路を見てもう隠し通すのはやめようと思ったのか、明久が観念して真実を話し始めた。

「実は今、姉さんが帰ってきているんだ……」

「姉さん？ お前、姉貴がいたのか」

「ああ、そういう姉がいるって言ってたなお前」

「うん。まあね……けどその姉さんというのが、ちよつとアレな人で……色々減点とかもされるし……」

曰く、その人は恐ろしいほど常識が欠落しているらしい。なので一緒にいるのがとんでもなく苦痛で、何とかその姉と一緒にいなくていいように俺や雄二の家に泊まろうとしていたんだと。

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ……？」

「むう……。恐ろしくはあるが、気になるのう……」

「……………是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

明久にここまで言わしめるほどの存在に、他の連中は次々と興味を持ち始める。……だが身内に関する事となると……ちよつと変わってくるな。

「あー……、なんだ。お前ら、そういう下世話な興味は良くないぞ。誰にだって、隠しておきたい姉とか母親とか、そんなもんがあるモンなんだから」

「雄二の言う通りだ。身内の恥つてのは他人が思つてる以上に本人にとつちや恥ずかし

いものであることが大抵だ。だからこそ何よりも秘密にしておきたいんだよ」

雄二と俺で助け船を出してやる。うんうん、やはり同じ傷を持つもの同士は助け合わなくてはな。

けどなんで雄二まで助け船を出したんだろうか？ コイツにもそういった身内がいるのか？

「ゆ、雄二………！ 大悟………！ ありがとう——」  
ガチャ

『あら………？ 姉さんが買い物に行っている間に帰って来ていたのですね、アキくん』

………今までの流れブチ壊しじゃねえか。

………え？ 何このタイミング？

「うわわわわっ！ か、帰ってきた！ 皆、一刻も早く避難を——」

「明久君のお姉さんですか……？ ど、ドキドキします……」

「う、ウチ、きちんと挨拶出来るかな……？」

「ダメだ！ 会う気満々だ！」

皆がリビングの扉を見つめている中、僕はひたすら天に祈りを捧げる。

頼む、姉さん……！ 常識的な挨拶をして欲しいなんて贅沢は言わない……！ だか

らせて、せめてまともな服装を……！

緊張の一瞬の後、扉が開かれた。

「あら。お客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですが、ゆっくりして  
いって下さいね」

姉さんの格好は七分丈のパンツに半袖のカッターシャツ、その上に薄手のベストとい  
うごく普通なものだった。

普通の格好に普通の挨拶。ごくごく一般的で常識的な姉さんの振る舞いを見て、拍子  
抜けしたような表情をしつつ雄二達は挨拶を返した。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出  
来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

か、完璧だ……！ どこからどう見ても普通の姉だ。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

「……………土屋康太、です」

「岡崎大悟です」

「はじめまして。雄二くん、康太くん、大悟くん」

三人に笑顔で挨拶を返す姉さん。

ああ……なんて平和な光景なんだろう……。

(……………おい明久、ちよつとこつち来い)

(ん?)

大悟が僕に小声で話しかけてきた。

(どうしたの? 大悟)

(お前アレのどこが非常識な姉だよ。全然マトモじゃねえか。礼儀正しいし美人でグラマラスで色気もある。もうラブコメの姉キャラに必要な要素ほとんど揃ってやがるじゃねえか。ダイゴブックスの専属コスプレイヤーとしてスカウトしたいくらいだ。それなのに嫌がるとかお前だけ身内に求める理想高いんだこの贅沢野郎! ……)

いや、もしかしてアレか? ああ見えて実は実の弟であるお前を性的な目で見るような特殊性癖の持ち主だったりするのか……? そういう意味合いでの非常識なのか?



だとしたらもうコンプリートだぞ……)

(や、やだなあ。流石にそんなワケないじゃないか)

……多分。

(あはは……。でもふ、普通でしょ?)

(ああそうだよ普通だな! だからこそ納得いかねえんだよ! ふざけやがって……ア

レで非常識だつてんならウチの母親は……ウチの母親は一体なんなんだよつ!)

た、確かに凛花さんも本来の姉さんに負けないくらい相当なものだけど……。

(いいか明久! 非常識つてのはな! 三十路間近にも関わらず一晩中馬鹿な大学生みたいに呑み歩いて家に帰らず、朝方に近隣住民から酒臭い女がゴミ捨て場で爆睡しているとクレームを入れられ、最終的には警察のご厄介にまでなるようなダメ人間の事を言うんだよ!)

(わかったわかった! 謝るからそれ以上熱くならないで!)

(お前に分かんのか! その度に色んな人に頭を下げ、好奇の視線に晒されてるそのダメ人間を恥ずかしさと情けなさに耐えながら回収しに行かなくてはならない子供の気持ち……、俺と天の、気持ち……っ!)

大悟が悲痛な表情で嘆いているのをよそに、姉さんの挨拶は続く。今度は秀吉みたいだ。

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく——」

「ええ。男の子ですよね？ 秀吉くん」

「……………つつ!!」

秀吉が驚いた顔で姉さんを見上げた。

「わ、ワシを一目で男だとわかつてくれたのは、主様だけじゃ……!」

なんだかよくわからないけど秀吉が感動している。そんなに男と見抜いて貰えたのが嬉しいのだろうか、なんて思っていると姉さんが秀吉に優しく微笑みながら答えた。

「勿論分かりますよ。だって、うちのバカでブサイクで甲斐性なしの弟に、女の子の友達なんてできるわけありませんから」

なんて嫌な確信の仕方なんだ。

「ですからこちらの二人も男の子ですよね？」

などと、今度は姫路さんと美波の方に向かって失礼極まりない発言をした。

「ちよ、ちよつと姉さん!! 出会い頭になんて失礼なことを言うのさ! 三人ともきちんと女の子だからね!」

「明久! ワシは男で合つとるぞ?!」

「待てコラ明久! 秀吉は女の子なんかじゃねえ! 正真正銘の男の娘だ!」

「それも違う！ ええい大悟！ ワシは男の娘などではないと何度言えば分かるんじやお主はああーっ！」

「いでででで!! 事実なんだから仕方ねえだろう！ 髪を引つ張んな！ 髪をーっ！」

「こんな時代遅れの髪型などメチャメチャにしてやるのじゃああーっ！」

「お前ら本当仲良いな」

秀吉と大悟の平和なやり取りはどうでもいいとして、僕は姫路さん達が男の子だのたまつた姉さんの発言に真つ向から反論を呈した。

すると、そんな姉さんがゆつくりとこちらを向いた。あれ、なんか雰囲気か……。

「……………女の子、ですか……………？ まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

「あつ」

ぐあつ！ ま、マズい！ 女の子を家に呼んだことが気に入らないみたいだ！

手を繋ぐだけで不純異性交遊と見なすような厳しい人だ。きつと怒っているに違いない。

僕はなんとか弁明の為に事情を説明しようとする、

「……………そうですか。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

意外にも姉さんは僕を怒るどころか無視し、もう一度頭を下げて姫路さんと美波に謝

罪した。

あ、あれ……？

「どうかしましたか、アキくん？」

「い、いや……。姉さん、怒ってないのかな、って思ってた」

「？ あなたは何を言っているのです？ どうして姉さんが怒る必要があるのですか

？」

「え、あ、うん。そうだよね」

な、なんだ。僕の取り越し苦労か……。良かった……。まあ、女の子とはいえ友達が家に遊びに来るくらいは普通のことだもんね。確かに怒る理由はないよね。

内心ホツと胸を撫で下ろしていると、姉さんが笑顔のまま僕に告げる。

「ところで、アキくん」

「ん？」

「お客様も大変いらつしやるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者さんごっこは明日でもいいですよね？」

「!？」

ああそうか……。この人、きつと僕を自殺に追い込む気なんだ。

「ね、姉さん何言ってるの!? まるで僕が日常的に実の姉とお医者さんごっこを嗜んで

いるかのような物言いはやめてよ！ 僕は姉さんとそんなことをする気はサラサラないからね！」

「あ、明久君……。お姉さんとお医者さんごっこって……」

「アキ……。血の繋がった、実のお姉さんが相手って、法律違反なのよ……？」

「いやあああつ！ やっぱり誤解されてるうううつ！」

おのれ姉さん！ 直接暴力に訴えるならまだしも、周りにコイツはアブノーマルな状態だと思わせる事で僕を精神的に追い込むなんて陰湿かつ残酷なやり口なんだ！

もう姉さんにこれ以上余計なことを言わせないようにしなくては！

「姉さん！ お説教なら後からいくらでも受けるから、さっきの台詞を訂正してよ！」

「それよりアキくん。昨日渡していた姉さんのナース服はどこにありますか？」

「このタイミングでそんなことを聞くなあーっ!!」

「それと、不純異性交遊の現行犯として減点を150ほど追加します」

「150!! 多すぎるよ！ まだ何もしてないのに！」

「……『まだ』？ ……200に変更します」

「姉さんのバカあーっ！」

もう挽回が出来ないような点数になってるんだけど！

「……明久。お前も苦労してたんだな……」

「なんか……贅沢野郎とか好き勝手言つて、すまん。……さっきの全部訂正するわ」  
「……雄二、大悟……」

僕は生まれて初めて、この二人に心の底から癒された気分になった。

「……不純な同性の交遊ですか……。それなら許しましょう」

「そんなんじゃないからね!？」

「10点プラスしてあげますね」

「嬉しくないからあああーっ!」

「……明久。お前……」

「やめて! 二人ともそんなドン引きするような目で僕を見ないで!」

やっぱり、姉さんの思考は難解過ぎて理解出来ない。

### 閑話休題

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。お二人のお名前を伺つても宜しいですか?」

姫路さんと美波に詫びつつ、名前を尋ねる姉さん。

「あ、はい。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとは——」

チラツ

「？」

「——友達、です」

どうして一瞬言葉を区切ったのだろう。もしかしてクラス替えの時の挨拶みたいにサンドバッグなんて言う気だったりとか？

「瑞希さんに美波さんね。はじめまして」

終始笑顔で対応する姉さん。

やれやれ。こういうところはまともだから、逆におかしな言動がより信憑性を高めてしまう。本当に悩みの種だ。

そんな姉さんの手には、アサリやベーコンなどの食材がたくさん入った袋が提げられている。聞くと夕飯の買い物に行っていたらしい。

けれどそれにしては随分と量が多い。一家庭分にしてもまだ余るくらいだ。とても夕飯だけで二人で食べきれるような量じゃない。その事を姉さんに指摘すると、

「いいえ。その量で合っています」

と、少し不機嫌そうに口を尖らせて反論をしてきた。姉さんにしては珍しいリアクションだ。

さては、料理が苦手なくせに慣れない夕飯の買い物なんてしてきたもんだから、分量を間違えたな？ 凶星を指されて不機嫌になるなんて、あまり姉さんらしくないけど。

「折角皆さんがいらつしやつたことですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？ 大したもてなしはできませんが」

まるで最初からそのつもりだったと言わんばかりに皆を夕食に誘う姉さん。どうあつても分量を間違えたことを認めたくないらしい。

「それじゃ、ありがたく好意に甘えさせてもらおうとするかな」

「せっかく食材まで揃えて頂いたんだ。その心遣いには感謝こそすれど無下には出来ない。てことで俺もお願いします」

「……………御馳走になる」

「迷惑でなければワシも是非相伴させて頂きたい」

「ウチも御馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も…………」

「それは良かったです」

全員が首を縦に振って姉さんの提案に賛成の意を示す。今日は大人数での夕飯が決定した。

姉さんから材料の入った袋を受け取る。



「ではアキくん。お願いしますね」

「うん。了解」

「え？ アキが作るの？」

「うん。そうだけど」

そう言うのと、姫路さんと美波が驚きを見せた。なんでそこまで驚くんだろう。

「そう不自然なことでもないだろう？ 俺だつて料理くらい作るしな」

「……………紳士の嗜み」

「前にも言ったが料理上手はお兄ちゃん主人公としての基本ステータスだ。会得して  
て当然だろう」

「わ、ワシは、その…………あまり得意では…………」

雄二と大悟とムツツリーニの腕前は披露済みだから、それについては驚いていない  
みたいだ。

「大悟とムツツリーニはともかく、雄二はやっぱり家で夕飯作つて覚えたタイプでしょ」

「おう。その通りだが…………やっぱりってのはどうしてだ？」

「あはは。だって、雄二は家の中で一番地位が低そうだもん。大悟もそうかも知れない  
けど」

「？ お前は何を言っているんだ？」

雄二が僕の発言に疑問を投げ掛けてきた。

何を言っているんだ、なんてそんなの決まっているじゃないか。

「——夕飯って、家の中で一番立場の弱い人が作るもんなんでしょ？」

「……」

何故か皆から可哀想なものを見る目で見られた。

「母の方針で、我が家ではそういうことになっています」

「そ、そうなんですか……」

「アキのお母さんって、なんかパワフルな人っぽいわね……」

「普通は立場に関係なく、作れる人が作るもんなのじゃがな……」

「え!? 普通の家では違うの!? おのれ母さん! よくも今までずっと僕を騙し続けてくれたな!」

皆から指摘を受けて、母さんに言われていた事が世間一般と大きくずれていることに気づく。

おのれ……そんな嘘を物心つく前から吹き込んでまで息子を雑用係に仕立てあげてなんて、あの人は母親として僕のことを一体何だと思っているのだろうか。

やり方がやり方なだけに、ある意味姉さんよりも質が悪い気がする。

「——明久。お前のその気持ち、分かるぜ……痛いほどな」

「ああ——全くその通りだ」

「……うん。ありがとう……二人とも」

そんな僕に大悟と雄二が同情してくれた。

母親に難を持つ者同士。今だけはこの二人の存在が本当にありがたく感じる。

「んじゃ、先に夕飯の支度から始めるか。明久、手伝うぞ」

「俺にもさせてくれ。大人数で押し掛けたんだからそれぐらいはしねえとな」

「……………協力する」

「あ、うん。ありがと三人とも」

「あのつ、それなら私も」

「!!?」

「!!?」

「いや、コッチは僕達だけで大丈夫だよ」

「え、でも……」

「姉さん、その間姫路さん達を相手してあげて」

「はい。分かりました。よろしければアルバムでも見ますか？」

「え、いいんですか？」

「はい。恥ずかしい写真を」

「それはやめて！」

よし！　なんとか危機は回避したぞ！　ちよつとアルバムの件は気になるところだ

が、今はコツチの方が大事だ。

（（明久グツジョブ！））

三人が僕によくやったと目配せする。あ、危なかつた……。

ちよつと強引なやり方で姫路さんには悪いけど、これも皆に安全な夕飯を提供する為だからね。

「流石に……、ハンペンと化粧品を間違えられたら……な……」

全くだ。

## 第六十五問 宇宙一のバカ

— side 大悟

玲さん達女性勢をリビングに残し、俺達男子勢（秀吉は性別が秀吉なのでノーカン）は晩飯の準備に取りかかり始めた。

ちなみに本日の夕飯のメニューはパエリア。一般家庭で作るに於ては少々珍しい代物だが、どうやら明久曰く、玲さんの買って来た食材が全てパエリアを作る為のものだったらしい。

だとしても結構な量だ。まさか俺らが来ることを知ってたのか——と疑問には思ったが、

「姉さん料理音痴だから、間違えて買って来たんだよ」

と、若干の呆れ顔を浮かべた明久に言われた。

食材を間違えて買ったとかならまだしも、量をミスるなんてことがあるか？ と新たな疑問は浮かぶものの、これ以上他人のミスを詮索するのは野暮だなどと思い、俺は形だけ納得した様子を見せた。

「しかしまあ、スペイン料理とはな。お前の姉貴はてつきり日本食をご所望かと思った

が」

「二応、姉さんはなんでもいいって言ってたんだけどね」

「玲さんはパエリアが好きだったりするの？」

「うーん、そんな事は聞いたことないけどなあ……あまり食には興味のない人だし」

慣れた手つきでテキパキと下ごしらえを進めていく明久。

その手腕は俺から見ても見事なものだ。パプリカやタマネギは一寸の狂いもなく綺麗にカットされているし、エビ、アサリなどの魚介類はキッチンとした臭み抜きや砂抜きをしてから使用するといったことも心得ている。オマケに調理器具やキッチン回りなんかもちやんと消毒やメンテナンスがされていて衛生面もバツチリ。調理器具に至っては新品同様の仕上がりだ。

俺は料理には二次元同様一切の妥協を許さない。

それは食材の扱い方から始まり調理手順の正確さやスピードはもちろん、その時の行動のスムーズさや料理をするための環境がしっかりと整っているかも厳しくチェックする。それらが一つでも欠けているだけで、料理の完成度を大きく変えてしまうといっても過言ではない。なのでその内の一つでも俺の中の及第点を下回るようなレベルだと嫌な気持ちが生まれてしまい、モチベーションも大きく下がってしまうのだが——  
ここは完璧だ。何のストレスもなく料理に取り組める。

ちなみに明久と雄二はメインのパエリア。同志は付け合わせのサラダ。俺は食後のデザートを担当することになった。

「ところで明久。さつきふと思っただが」

「ん？」

「お前、姉貴に本当の生活態度を隠してるだろ」

「……よくわかったね」

「丸分かりだバカ」

むしろ隠してますと言わんばかりの違いだったからな。

「……………バレると、説教？」

「それだけだったらまだいいんだけど、」

「それ以外に何かあるのか？」

「うん。あまりにも生活態度が悪かったり、今度の期末試験である程度の点数をとれなかったりすると、姉さんがこっちに居座ることになっちゃうんだよ……」

マジか。思春期男子にとってそれはキツいな。

「そうか。だからあんなに勉強にやる気になっていたのか。ようやく合点がいった」

「……………納得」

「だから、余計なことと言わないでほしいんだ。学校の成績とか、僕の本当の生活とか、

……こ、この前の美波とのアレとか……」

「アレって、島田とのキスのこ——むぐつ」

明久が慌てて雄二の口を塞ぎ、小言で注意する。

（だからそういうのもマズいんだよっ！ 姉さんは不純異性交遊は完全アウトっていうお堅い人なんだから！）

（不純異性交遊ねえ……それってどのくらいの基準で決まるんだ？）

（異性と手を繋ぐのもダメなんだよ）

（それも束縛に近くね？）

女子とプールに行ったり女子風呂覗いて停学になったりしてることがバレたらコイツはどうなっちまうんだろうか。最悪死ぬんじゃないだろうか。

「なるほどな。まあ、お前の一人暮らしは俺や大悟にも都合がいいし、黙っててやるか」  
「……………協力する」

「困ってる時はお互い様よ。だから安心しな」  
「ありがとう、三人とも」

そう俺達に礼を言って安堵の息を吐く明久。

まあコイツにだってプライベートの時間があるし、それを他人に邪魔されたくない気持ちには痛いほど分かるからな。汲み取ってやるのがダチってモンだ。



「明久。冷蔵庫にあるモン適当に使うぜ」

「うん、いいよ。好きに使っちゃって」

「サンキュー」

冷蔵庫を開けると中にはそれほど多くはないがちゃんと食品が入っている。

こんな事は普通なら明久の家の冷蔵庫ではまずあり得ない。何故なら明久は親からの仕送りの殆どを娯楽に消費しており、生活費なんて雀の涙ほどしかない。なので普通の食事はパン粉をおかずにパン粉を食べたり塩水をおかずに水を飲むといった、異世界系の作品にいがちなクズ貴族に買われたり奴隷商に売り飛ばされた奴隷の女の子よりも下手したらひもじいんじゃないかねえかっていうレベルなのだ。

なんでその食生活で今生まで生存してれるのか甚だ疑問でしょうがねえが、まあ明久が死んだらこの物語終わっちゃうからな↑メタ発言。主人公補正がヒシヒシと働いてんだろう。あ、奴隷といえはラフタリアちゃんめっちゃすこ。

「……………同志は何を作る予定？」

隣でサラダ用の野菜を切っている同志が俺にそう尋ねてきた。

「材料は大方揃ってつから選択肢は様々なんだが……………どうせなら俺が一番得意とするものを作ろうと思ってるぜ」

「……………なるほど」

「まあ出来るのを楽しみに待つとけや」

早速調理に取り掛かるか。

使う調理器具を準備し、ボウルに人数分の材料を入れてから泡立て器で均一になるよう混ぜ合わせる。

デザートは他よりも繊細さがより一層求められるジャンルだからな。分量の的確さや火の入れ加減などが見た目や味の完成度に差が顕著に現れる。

そう、分かりやすく例えるなら幼女に接する時のような紳士的かつ慈愛に溢れた振る舞いがデザート作りでも求められるのだ。優しさ。丁寧さ。そして機敏に状態の変化を感じ取れるセンシビリティさ。つまり！

・デザート作りが上手い⇨幼女からの好感度が上がる⇨幼女にモテる!!↑（ここ最重要）

こういった式が成り立つ。

全国の幼女好きの諸君。これは我々の界限では基礎中の基礎の知識だから必ず覚えしておくように。後で抜き打ちテストするからな！

「あとは肝心の幼女が俺の目の前に現れてくれさえすれば……そうなりややっぱり葉月

ちゃんが第一候補だよな、あの純真無垢な姿と可愛さは正に幼女・オブ・幼女。もう人間国宝よろしく幼女国宝と呼ばれてもおかしくないだろう。ああ人よ、民よ、生きとし生ける全ての生命よ。さあ共に手を取り合い島田葉月ちゃんという幼女神を崇め讃えようじゃないか——」

「さつきからなに一人でブツブツ言ってるんだお前は」

「雄二。幼女はいいぞ」

「頭でも打ったかロリコン」

とまあそんな事を考えながら調理を進めていると、

『こちらが、アキくんが二歳の頃のお風呂の写真です』

『す、すつごく可愛いですっ!』

『うむ。愛くるしい顔をしているのう』

『素直そうで可愛いわね〜』

そんな声がりびングから聞こえてきた。そういえばさつき明久のアルバムがどうか言つてたから、それを皆で見ているのか。

『それでこつちが、アキくんが四歳の時のお風呂の写真です』

『あははっ。アキつてば、お風呂の中で寝てるわ』

『温かくて気持ちよかつたんですね』

『無邪気な笑顔じゃな』

シヨタの明久か……新しい層の顧客を獲得出来るかもしれんし、後で玲さんに写真を焼き増しして貰えないか頼んでみるか。

『そしてこつちが、アキくんが七歳の時のお風呂の写真です』

『小学生の頃ですね。懐かしいです』

『かなり背丈も伸びておるのう』

『だいぶ大きくなってるわね』

『更にこちらが、アキくんが十歳の時のお風呂の写真です』

『待った姉さん！ どうしてお風呂の写真ばかりなの!? そのアルバムは何の写真を集めてるのさー!』

『そして、これが昨晚のアキくんのお風呂の写真です』

『このバカ姉があーっ!! いつの間にそんな写真を!? さては着替えか! 脱衣所に着替えを持ってきた時かっ!』

『明久。鍋から目を離すな。吹きこぼれるぞ』

『もうそんなことはどうでもいい! それよりもあのバカの頭をフライパンでかち割つてやることの方が重要なんだ!』

『離せーっ! 雄二のバカーっ!』

「なあ同志。後で玲さんのところに交渉に行かないか？」

「……………了解（コクツ）。手札は？」

「明久のセーラー服（パンチラver）イラストだ」

「……………ならこの生着替え写真もセットで（スツ）」

「流石だぜ同志」

「……………知ってる（ニヤツ）」

「おいそこのエロコンビ！ 勝手に人の写真とイラストを取引材料に使うんじゃない！」

ふふ、これでまたラインナップが増えるぞ増えるぞ。

そうこうしている内に夕飯完成。

「皆、待たせたな。夕飯が出来たぞ」

出来立てホヤホヤのパエリアやサラダがテーブルに並べられる。

「あ、ありがとうございます……………（ポツ）」

「お、美味しそうですね……………（ポツ）」

頬を赤らめて明久の方をチラチラ見る姫路と島田。写真とはいえ好きな人の全裸姿を見てしまったのだから致し方ない反応だ。

「見たんだ！ やっぱり見たんだ！ 僕の恥ずかしい姿を皆で見たんだあああつ！」  
と言つて

「全く……アキくんは落ち着きがないですね」

「姉さんのせいでしょ！ 嫌がらせばかりして！ 姉さんは僕のことを嫌いなんだろう！？」

「いいえ。姉さんはアキくんのが好きですよ」

「えっ……………？」

「——一人の異性として（ポツ）」

「最悪だあああつ！」

やっぱりブラコンじゃないか（呆れ）。

あと玲さんその照れ顔可愛いんで自分、スケッチいいですか？

「日本の諺にこうあります……バカな子ほど可愛い、と」

「諦めろ明久。この人はお前を世界で一番愛しているぞ」

「それって、僕が世界一バカだと思われてるってこと!？」

「う、ウチだってアキのことを世界で一番バカだと思ってるから!」

「わ、私だって! この世界で明久君以上にバカな子はいないと確信しています!」

「やめて! 皆で僕のガラスのハートを傷つけないで!」

散々な言われようになり明久が目尻に涙を溜めて悲痛の叫びを上げる。もうやめて!

もう明久のライフは0よ! (笑)

全く豆腐メンタルなヤツめ。仕方ない、フオローしてやるとしますか。

俺は明久の肩に手を置く。

「大悟?」

「お前が世界一のバカだと? フツ、馬鹿馬鹿しい。そんなワケがないだろう。だから

そう悲しむこたあねえぜ」

「大悟……」

少しだけ顔を緩ませた明久に、俺は優しく微笑んだ。

「お前は——この世のありとあらゆるものを超越せし宇宙一のバカだ。だから自分に

自信を持って」

「うん。ありがとう大——つてうおおおいつ! 宇宙一つて益々悪化してるじゃない

か! 大悟貴様! 慰めると見せかけて更に傷を抉ってくるなんて君はなんて最低な

クズ野郎なんだ！」

「チツ、バレたか」

励まされるどころかより一層罵倒された事に気づいた明久が声を荒げる。

「そうか……明久のバカさはもうそこまでの境地に達していたのか」

「……………正に天上天下唯我独尊なバカ」

「そ、そうよねっ！ 確かに岡崎の言う通りアキは世界一じゃなくて宇宙一のバカだもんねっ！」

「そ、そうですよねっ！ 明久君ほどのおバカさんは宇宙のどこを探してもいませんもんねっ！ 私もそう思ってますっ！」

「アキくん。姉さんは宇宙一馬鹿な貴方のことを誰よりも愛していますよ」

「クソ！ もう皆なんて大嫌いだっ！」

うんうん。皆明久の事をちゃんと分かってくれたようで何よりだ。

「まあ、そんなどうでもいいことは置いておくとして」

「ど、どうでもいいんだ……。結構僕の名誉に関わる内容だったんだけど……」

「迷誉の間違いだろ」

「なんだと大悟コラア！」

「とにかく、冷めないうちに頂きましょう」



「頂きまーす」

不服そうな顔をする明久をよそに、俺達は目の前の料理に取り掛かった。ちなみに食後の俺手製のデザートはありがたいことに大絶賛の嵐なのでした、まる。

——そんなこんなで晩飯タイム終了。

「そろそろお勉強を始めましょうか」

さっさと後片付けを終えてリビングに再び集まる。そのタイミングで姫路が今日の集まりの本題を切り出した。

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

「ならばワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「……………同じく」

「そうだね。テスト前だからってわけじゃなくて、いつものように勉強を始めようか」  
Fクラスの面子とは思えない真面目な姿だ。

あと明久、お前は普段勉強なんてしねえだろ。見栄張るな。

「皆さんでお勉強ですか。それなら良い物がありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきましたね」

そう言つて玲さんがリビングを出ていく。

も、もしかして……とうとう2000本のエロゲーとご対面かつ！

「お待たせしました」

ワクワクして待っていると玲さんが戻ってきた。

「参考書というものなんですが、役に立つかもしれませんので」

【女子高生 魅惑の大胆写真集】

……………ああ、そっちか（悲）。

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがぁーっ!!」

玲さんが持ってきたのは一冊のエロ本（三次元）。

てつきりエロゲーを持ってきてくれると思っていたのが、一気にテンションがダダ下がった。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！ こんなもんが参考になるかーっ！ あと僕の部屋に勝手に入ったね!? あんなに入らないでって言ったのに！」

「いいえ。昨日、確かにアキくんは部屋に入って良いと言いました」

「それってもしかして着替えを取りに行くときのこと!? あの時の会話はこれが目的だったのか！ なんて陰湿卑劣迂遠なやり方なんだ！」

勝手に自分のプライベートルームに踏み入られたことに対して玲さんに猛抗議する明久。何があつてそうなったのかは知らんが、思春期の弟の部屋に自らの意思で突貫するとは容赦ないぜ玲さん。

「……どれどれ、一応見てみっか」

「……………確認（コクリ）」

「ちよつと大悟！ ムツツリーニ！ なに勝手に見てるのさー！」

俺と同志はそのエロ本を取ってペラペラと中身を拝見する。

中身はAV女優が際どい格好で際どいポーズをしているというごくごくありふれた内容だった。

……なんだこりやあ。

「ひでえなこりや。ポーズも表情もコスチュームの着こなしもまるでダメ。タイトルの女子高生らしさってモンがまるで伝わってこない。ただただ取り敢えず露出度高めの

服着さして胸と陰部晒しとけば男は食いつくだらうという制作者側の浅はかで傲慢で読者を舐め腐った考えが顕著に見て取れるぜ」

「……………カメラアングルも微妙」

「ふん。これじゃあ記載通りの金を払うに値しねえな。20点」

「……………15点」

「やめて！ 二人ともそんな真面目な顔で友達のエロ本を批評して点数をつけないで！」

「明久…………お前こんな低レベルなオカズでやってんのか？」

「……………少し見損なった」

「いいだろ別に！ あと大悟は女子のいる前でそういう卑猥な事を言うな！」

俺に言ってくればこんなモンよりもっと良質なオカズを用意してやれるんだがな。しかも全ページ高解像フルカラーに台詞付きだぞ。

「もういいわ。姫路、島田。お前らは見るかコレ？」

俺はエロ本を二人に差し出す。

「そ、それじゃあ、あくまでお勉強の参考書として…………」

「そ、そうね。ウチもちよつと勉強しておこうかな…………」

二人は少し恥ずかしそうな様子で受け取った。

「姫路さんに美波!? 無理に受け取らなくていいんだよ!」  
「……」  
「……」

「ちなみに他の参考書も確認したところ、アキくんはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」  
「姉さんも冷静に僕の性的嗜好に関する考察を述べないで!」

「知ってる。なぜなら明久の要望は殆どそういう系の女の子のエロ漫画だから。パ○ズリとか授○プレイとかメツチャ描いたわ。」

「てか玲さんの見つけた参考書ってワンチャン俺の作品だったりして。」  
「でもアキくん。どうしてその内の半分は二次元の女の子の本だったのでしょうか?」

俺のやったわ。

「……………(ジーツ)」

「アキくん? なぜ大悟君を睨んでいるのですか?」

明久の無言の視線が俺に刺さる。

「なんだよそのお前のせいだとも言いたそうな目は。こっちはただお前から希望されたものを提供しただけだろうが。」

「それで悪者扱いとかお門違いも甚だしいぜ。」

「お主ら、勉強は良いのか?」

秀吉が話を本題に戻す。

「そ、そうだよ！ 秀吉の言う通りだよ！ さあ勉強を始めるよ皆！」

「そ、そうですね。お勉強を始めましょうか。んしょ……つと」

すると、姫路は長い髪を後ろでまとめ始めた。そりゃ好きな人の好きな髪型がポニーテールだって知ったんだから、彼女の行為はなんらおかしな事じゃない。

しかし、そんな姫路の行為を恋のライバルは見逃さなかった。

「み、瑞希っ！ どうして急に髪をまとめあげてるのよっ!？」

「べ、別に深い意味はありませんよ？ ただ、お勉強の邪魔になるかと思って」

「それならウチがやってあげるわ！ お団子でいいわよねっ！」

「い、いえ。ポニーテールにしたいと」

「ダメっ！ お団子なの！」

「美波ちゃん、意地悪です……」

島田が思い通りにはさせるかとばかりに、姫路の髪を団子状にくくる。その表情は心なしか楽しそうだ。

——と、俺はふと大切な事を思い出した。

「そうだそうだ！ 明久！」

「？ どうしたの大悟？」

「2000本のエロゲーはまだか？」

「ええっ!? 2000本のエロゲーの話を本気にしてたの!？」

当たり前だ。その為に今日は来たようなモンだからな。

「さあ早く出してくれよ! もう話を聞いた時からワクワクとドキドキが抑えきれなかったんだよ! さあさあさあ!」

「いや、興奮してるとこ悪いんだけど……2000本のエロゲーなんてあるわけないでしょー!」

……あ??

「無い?」

「無い」

「一つも？」

「一つも」

「つまり全部真つ赤な嘘？」

「うん」

「……………」

俺は天井をゆっくりと見上げる。

そっかそっか……エロゲーは、無いのか。つまり明久は俺のことを騙していたんだな。なんだよ……2000本のエロゲーが、全部コイツの作り話だったなんてさ……そんなの、そんなのって——

「——明久」

「ならば死ね」

俺はスタンガンで明久に高速で突きつけた。



「危なっ!? いきなりなにすん——ってなんでスタンガンなんて持つてるの!」

「黙れよこのクソ外道……! 明久てめエ……! よくもそんな下らない嘘でこの俺の純情を弄び、貶めやがったなあ……! ふざけんよ……そしたら俺は……俺は……お前は俺がなんの為に今日ここに来たと思ってるんだア!!」

「勉強じゃないの!」

「んなワケあるかあ!! 100パーエロゲーの為に来たんじやボケエ!!」

目から溢れる悲しみと怒りの涙を手の甲で拭い、目の前の愚者を睨む。

もう絶対に許さん。例えお天道様が許してもこの俺が許さん。コイツは今ここで殺す。俺はスタンガンと拳を構えて戦闘態勢に入った。

「ちよ! 待つてよ大悟! 確かに嘘をついたのは悪かったけど、たかがエロゲーが無かったからってそんなに怒らなくてもいいじゃないか!」

「たかがだとオ……? 貴様ア……それは俺のみならず、エロゲーに対する侮辱かア……? よし、八つ裂きにして海に捨ててやる」

「み、皆助けて! 大悟を止めて!」

「それでは皆さん。まずは英語あたりから始めましょうか」

「宜しくお願いします」

「ちよつと皆! なに悠長に勉強を始めてるのさ! 見て! お願いだからこつちで線

り広げられてる状況に目を向けて！」

「明久。人間の腎臓と肝臓は結構高値で売れるらしいぜ」

「売る気!? 僕を始末した後には内臓を取り出して売る気なの!？」

「安心しろ。その金で俺は2000本のエロゲーを買う」

「そんな最低最悪な方法で自分の欲を満たそうとするな! 待つて! お願いだから落ち着いて!」

さて、話は終わりだ。

「それじゃあ——くたばりやあああああ——っ!!」

「待つてえええええええええ——っ!!」

その日の勉強会は、血みどろに染まった（主に明久の血で）。

## 第六十六問 V a m o s !!

—— side 大悟

明久の家での勉強会（十愚か者への肅清）を終えた次の日。

放課後の教室でいつものように雄二と駄弁っていると、明久がトテトテとこつちをやつて来た。

「雄二、大悟。今日も楽しく勉強会をしよう！」

「……明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「笑顔なのが更にキモさを加速させてるな」

「なんとでも言つてよ。今の僕には体裁を気にしてる余裕は無いんだから」

俺と雄二の煽りをそう軽くないはず明久。

まあ、今回の期末試験の結果で明久は折角の一人暮らしが終わるかどうかが決まっちゃうからな。オマケに同居相手はあのクセの強い玲さんときた。

イチイチ俺らの悪口なんかにつき合つてられないほど切羽詰まっているのだろう。

「ちなみに明久。もうてめエで分かりきつてると思うが次あんな下らねえ嘘を付きやがったら——」

指をポキポキと鳴らして威嚇する。

「わ、分かつてるよ。もうあんな嘘は——」

「——コイツで貴様をコロス（ペラッ）」

「天地天命に誓つてもう二度とあんな嘘はつきません！ だからその破壊力抜群のウイ  
ルス兵器を僕に見せないで！」

船越女史のリョナグロイラスト（獣＋触手＋拷問）を少しだけチラ見させると、明久  
は凄い勢いで俺に土下座した。よっほど精神的にクるのだろう。だが元はと言えばエ  
ロゲー20000本などという甘い誘惑で俺を騙したのが悪いんだからな。

今までは抑止力としてしかコレを所持していなかったが、これから明久が俺に何か不  
都合な事をやらかしやがったらドンドン使っていくことにしよう。

「なんじやお主ら。今日も明久の家で勉強会かの？」

鞆を持った秀吉もやって来た。相変わらずの可愛さだ。

「僕の家？ うくん……。今日からは姉さんが仕事でいないから、それでもいいんだけ  
ど……」

「けどっ。」

「今日は雄二か大悟の家にしようよ。たまには僕以外の家にも行ってみたいし、何より  
僕の部屋には参考書とかの勉強道具があまりそろってないし」

え、俺ん家か。

「いいよね、二人とも。昨日は無理を押し僕の家に来たんだし」

明久がそう念を押し聞いてくる。

確かに昨日は玲さんの事を知らなかったとはいえ、無理矢理押し入ったのだ。なら俺達の方も条件を揃えないと不公平だろう。

「どうする、雄二?」

俺は雄二の方に顔を向ける。

「俺は別に構わないが、お前の方こそ大丈夫なのか?」

「俺もダメってワケじゃないな。ただ店の方での物音やらが若干聞こえることはあると思うが」

「じゃあこうしよう。まずは俺の家に行って、もし何か理由があつてダメになったら大悟の家に行く。それでいいか?」

「わかった」

雄二の提案を二つ返事で承諾する。

「それならば、ワシも同行させてもらつていいかの? 一人では勉強をする気がおきんのじゃ」

「勿論オーケーだ。というか、どうせいつものメンツが来るんだろ? それならさっさ

としようぜ」

「そうだね。おーい、ムッツリーニ、姫路さん、美波ー！」

明久がまだ教室に残っていた三人を呼んだ。

「はい。なんででしょうか明久君？」

「何か用？」

「……………どっかに行くとか？」

「うん。今日は雄二か大悟の家でテスト勉強をしようと思うんだけど、良かったら——」

——電話だよお兄ちゃん♪ 電話だよお兄ちゃん♪

「むっ？」

急に俺の携帯が鳴った。見ると母さんからの電話だった。

「こんな時間に珍しいな、なんだ？」

着信ボタンを押して携帯電話を耳に当てる。

「もしもし？ 俺だけど？」

『おお大悟！ いきなりで悪イんだけどよ！ 今日寄り道とかしねエで真っ直ぐ帰っ

てきてくれ!』

「は? なんでだ?」

『それが他の従業員のヤツらが体調不良やら休養とかで来れなくなっちゃまってよ! これからピーク時だつてのに人手が足らねエんだ!! だから手伝え! 天にもそう言つとくからよ!』

「そうか。なら仕方ねエな。りよーかいよ」

『おう! 頼んだぜ——つておいそこのハゲ! ビール瓶はこつちだよ! その酒はアタシの晩酌用だから勝手に開けてんじゃ——』

通話を終えて携帯をしまう。

「どうしたのじゃ? 大悟よ」

「あー……悪い。今日はちつと勉強会は俺行けねえわ。なんかウチの店の従業員が穴開けちまつたらしくて、手伝わなきやならねえんだ」

「あ、そうなの? それは大変だね」

「確か岡崎君のお家は中華料理屋さんなんですよね?」

「おう、だからもう帰るわ。勉強会は俺抜きでやってくれ」

まあ別に俺がいなくなつたところで雄二や姫路がいるし、何の支障もあるまい。

鞆を持って教室を出ていこうとすると、

「待て。それじゃ今回は大悟の家にしらないか？」

そう雄二が言った。

「人手に困ってんだろ？ それなら俺達もお前の店の手伝いに協力しようじゃねえか」

「え、いいのかわ？」

「その代わり、勉強用のスペースを借りたい。あの店の広さならこの人数でも余裕で足りるだろ。どうだ？」

「まあ、閉店後なら問題ねエと思うが……俺としてはありがたい話なんだが、他の連中はいいのかわ？」

そう言うつて皆の方に視線を向ける。

すると皆は断るところか嫌な顔一つ見せず口々に言った。

「確かにいい考えだね。僕は全然構わないよ」

「他ならぬ相棒のピンチとあらば、ワシも喜んで協力させてもらうぞい」

「そうね。それに昨日はご飯まで御馳走になったんだし、そのお礼も兼ねてつてことで」

「凜花さんや天ちゃんにも会えますしね」

「……………任せておけ、同志」

チクシヨウ、なんていいヤツらなんだ。

ほんの少しだけ目頭が熱くなっちまったじゃねえか。



「なら頼もうか。母さんには俺から伝えておくぜ」

「よしっ！ そうと決まれば早速移動だ！ 凜花さんも首を長くして待ってるだろうか  
らなー！」

「「おー！」」

雄二の号令に全員が一丸で返す。

——ま、いいか。そこまでおかしな事にはならんだろ。

——side 明久

「「ここが俺の家だ」

学校から歩くこと約30分。

住宅街の一角にある大悟の家——もとい中華料理屋に到着した。

「「ここが岡崎のお店なの……？」

「と、とつても綺麗ですね……」

姫路さんと美波が店の外観を見て驚嘆している。

確かにそれは無理もない。玄関の門は提灯で明るくライトアップされ、龍や亀などの四獣を象った青銅の置物や装飾で飾り付けられている。更にその横にはガラス張りで様々な中華料理のサンプルが展示されている。

そして上の看板には赤い枠に店の名前である『中国料理 劉玄』という文字が大きく黄金に刻印されていた。それはまるで横浜にある高級中華料理屋みたいな煌びやかさだ。

「なに驚いてやがる。清涼祭の時も似たようなモン見ただろうが」

「そ、それはそうだけど……」

「お店はやっぱり高級なんですか？」

「いや、そんなことねえよ。値段もリーズナブルだし、学生の客も結構多い。見た目は母さんの完全なる趣味だな」

「趣味？」

「あの人は昔からなんでもかんでも派手なのが好きでな。だから店の外観も内装も豪華にしたかったらしくて、その結果こうなったんだよ」

なるほど、確かに凜花さんの性格なら納得だ。

でも、周りが一般住宅ばかりだからちよつと変に浮いちゃってるけどね。

「ワシは何度も来とるからもう見慣れたものじゃ」

「……………同じく」

「え？ ムツツリーニもよく来るの？」

「……………作戦会議によく使わせてもらってる。料理も美味しい」

料理はともかく、作戦会議って一体なんの作戦を会議してるんだろうか。

「ま、だからって気負いすることあねえ。ありふれた大衆食堂だからよ、お前らも全然普通にダチの家に来た感じ দিয়ে くれて構わねえから」

「うん。わかったよ」

ガチャ

大悟が玄関の扉を開ける。

「ただいまー。今帰ったぞ母さ——」

「「アウトオ!! セーフツ!! よよいのツ——」」

大勢の半裸の男達がバカ騒ぎをしていた。

——ピシヤツ

思わず扉を閉める僕。

「おい明久。なんで閉めんだよ」

「いや……なんか今、この世のものとは思えない幻覚が見えて……」

「なに言ってるんだお前」

「どうしたのじゃ、明久よ」

「入らないんですか？」

いや、入りたいのは山々なんだけど……、

「ね、ねえ……ウチにも今ちよつとだけ見えたんだけど、裸じゃなかった……？」

美波にも僕と同じものが見えたらしく、動揺した様子を見せる。

いやいや、そんなワケがない。アレは恐らく僕の精神的ストレスが引き起こした幻覚

症状に違いない。だってあんな驚天動地な光景が現実起こってるなんて——

「オラ、いつまでも突っ立ってねえで入るぞ」

「あ、ちよ——」

ガチャ

「「よよいのよいッ!!」」

再びさつきと同じ光景が目に入った。

「やっぱり現実じゃないかああああーっ!!」

そう叫んで僕はその場に膝から崩れ落ちる。

大悟の嘘つき! これのどこがありふれた大衆食堂なの!? これでどうやって友達の家に来たテンションでいろつていうのさ!!

「——ん? おお大悟!! やつと帰つて来たか!! それに秀吉達もよく来てくれたな!!」

「母さん。ただいま」

「お邪魔するぞい。凜花さん」

「……………同じく」

「そうか! んじゃ早速頼むわ! 男共は厨房で秀吉と女共はホールに回れ!」

「了解」

「ちよつと待つて! なんで三人は平然としてられるの!? 明らかに摩訶不思議な事が目の前で起こつてゐるのに!」

「!? 摩訶不思議……………?」

キョロキョロと周りを見回す秀吉と大悟とムツツリーニ。

「常連のオッサン達が楽しそうにドンチャン騒ぎしてて……」

「床には酒瓶がたくさん転がっておつて……」

「……………料理の良い匂いが漂つてる」

「……………」

「……………特に変わったことはねえぞ（ないぞい）（ないが）？」

「はいダウト！ 今言つたことムツツリーニの以外明らかにおかしいからね！」

もうこの決して一般的な中華料理屋では起こらないであろう珍妙不可思議な光景に何の違和感も感じていないらしく、三人は僕の言つた事に首を傾げた。

大悟やムツツリーニはともかく、比較的常識人の秀吉にまでそんな反応をされるなんて……………。

『よっしゃー!! 俺の勝ちじゃああああーっ!!』

『あーあ、今日についてねえぜ』

『全くだ』

ポロンッ

ポロンッ

ポロンッ

「ちよつとおおおおおおーっ!!?」

「きゃあああああーっ!!」

いきなりオジサン達が次々とパンツを脱ぎ、堂々と股間を晒し始めた。

それを見て絶叫する姫路さんと美波。女子が目の前にいるのになんて真似をしているんだこの変態親父達は!!

とにかく姫路さん達だけでもこの場から退避させないと!

「姫路さん! 美波! 急いで目を塞いで店を出るんだ! 雄二、ここは一旦逃げよう!」

「あ、ああ……さすがにコレは俺でも対処の仕様がな——」

ガシッ

ん?

「おい明久に雄二イ……なに勝手に帰ろうとしてやがんだ? 手伝うって約束だったよなあ……?」

いつの間にか背後に立っていた凜花さんが僕らを逃がさないよう、右腕を僕らの首に回し、もう片方の腕も反対側から組んでガツチリと掴まれた。ニコニコ微笑んではいるが目は全然笑ってないし威圧感が凄い。

「いや、あの、それは……」

「ちよつと俺達、野暮用を思い出して……」

「へエ〜……その野暮用つてのはアタシの店よりも大事なことなくかくそつかそつかく……」

ギチギチギチ……!

「——なあ、ところで知つてツか? 人間は頸動脈を絞められつと大体一分も掛からずに逝つちまうらしいんだよ」

「へ、へえ……」

「そうなんですネ……」

「——大人しく手伝うかアタシに絞め殺されるか選べ」

更に絞めが強くなる。

「ず、ずびばぜんでじだ……」

「分かりやいいんだ」

凜花さんの拘束が解かれる。

ほ、ホントに死ぬかと思つた……。お、脅しにしても加減が無さすぎるんだけど……。

『おや、君達は大悟ちゃんの友達かい?』

『ははは、はじめましての顔が多いじゃないか』

『どうだ? 挨拶代わりに俺達と一緒に野球拳をして遊ばないか?』

『赤い髪の子は中々良い肉付きをしているじゃないか』



『若いつてのはいいなあ』

ゾロゾロと半裸&全裸のオジサン達が僕らに近づいてくる。

僕は思った。バイオレンス映画とかでよくある大量のゾンビに襲われる時の感覚はこんな感じなのだろうと。

「み、美波ちゃん……!」

「いやあつ! こつち来ないでよ変態!」

姫路さんと美波が恐怖と不快感で泣きそうな顔になる。

男の僕でさえこの光景はキツイのだ。年頃の女子にはトラウマ必死だろう。

「なに!? 変態だと!」

「そんな不埒なヤツがいるのか! 一体どこにいる!?!」

「お前らのことだあああーっ!!」

僕と雄二のツツコミが同時にハモる。

お願いだから自分達の姿を客観的に見てよ!

「なんだ。もしかして君達は俺達が好きでこんな格好をしてると思ってるのか?」

「それは心外だな」

「え、違うんですか?」

「「否定はしない」」

じゃあやつぱり変態じゃないか……。

「まあ待ちたまえ。これにはちやんとした理由があるのだ」

「理由？」

一番前にいたスキンヘッドの筋骨隆々のオジさんがそう僕らに言う。

あの……説明の前にせめてパンツだけでも履いてくれませんかね。

「俺達はさつきまで普通に食事を楽しんでいたんだ。だが思ったよりも食ったり飲んだりし過ぎて金が足りなくなったんだ」

「はい」

「だが大人ともあろう俺達が無銭飲食などという非常識な真似が出来るワケがない。そこで話し合った結果、誰か一人がATMで金を卸して立て替えようという事になったな」

「はい」

「そしてその代表を誰にするかをジャンケンで決めようということになった」

「はい」

「そして今に至る」

「待て待て待て！ 一番大事な箇所が丸々飛ばされたぞ!?!」

「そもそもなんでジャンケンをするだけで全裸になる必要があるんですか!?!」

「何を言っている。野球拳なんだから服を脱ぐのは当たり前だろう?」

「アンタらは野球拳以外のジャンケンを知らないんですか(のか)!!」

まさかここまで倫理観と常識が欠落している大人がいるなんて……。

下手したら姉さん以上じゃないのか……?」

「まあまあ落ち着けやお前ら。ほら、これでも飲んでクールダウンしろ」

「あ、ありがとうございます……」

「い、いただきます……」

そう言つて凜花さんが水らしき液体の入ったコップを渡してくれたので、僕と雄二はそれを一気に飲む。

ふう……疲れた体に冷えた水分が気持ちよく循環し、喉にはアルコールの刺激が程よ

く――

「ブフウオツ!!」

同時に吐いた。

「うわっ! きつたねえ!」

「ゲホツ、ゴホツ……な、なんですかコレ! 明らかに水じゃないですよ!」

「何を飲ませやがったんだ!」

「焼酎」

「酒じゃないか（ねえか）！」

「度数25%なんて酒のうちに入らねえよ」

「んなワケあるか！」

度数25%で水って……考えがもう人間じゃない。

普段からこの人はどれだけ強い酒を飲んでいるんだろうか。

ガラッ

「ただいまー。お母さーん。大悟兄ー？」

「おう、お前も戻ったか」

「お帰りだ天。おめえもさっさと準備しろ」

「うん……あれ？　なんで明久さん達がいるの？」

扉を開けて入ってきたのは大悟の妹の天ちゃんだ。

「あ！　姫路さん！　美波さんも——え、何この状況」

「そ、天ちゃん！　これには色々な事情があつて」

「ひ、姫路さん達に全裸のオジサン達が群がってる……えっと、あの……姫路さんに島田さん？　その……そういうプレイはこういう公な場所じゃなくて、もつと人目につかない所でやるんですよ……？」

「「違うわよっ（いますっ）!!」」

「なにその盛大な勘違い!? 違うよ天ちゃん!? そんなアブノーマルな事を姫路さん達  
がしようとするワケないじゃないか!」

「で、でも大丈夫ですっ! こう見えてあたし性癖の理解は広い方ですから! 例え姫  
路さん達が『ああああんっ! しゅごいのおおおっ! オジさん達の濃厚ミルクが  
びゅっびゅっびゅびゅしちやつてるのおおーっ!! ドブドブって〇〇にブチ込ま  
れちやつてるのおおおーっ! 着床して受精確定でたくさん赤ちゃん出来ちゃう  
のおおおっ!!』とか言つて腰を振りまくり両手で高速ダブルピストンして溜まりに溜  
まった濃厚白濁液を体内外で受けて悦に浸るような特殊性癖持ちのドスケベ乱〇マニ  
アだったとしても全然平気で」

「可愛い顔でとんでもない発言をするなああああーっ!!」

「……………ちや、着床して、受精…………っ!? (ブッシャアアアア)」

どうして兄妹揃つてそういう発言が堂々と人前で吐けるんだ!

「なんだ明久。たかだかその程度のエロ表現で取り乱しやがって——童貞臭ばねえ  
ぞ」

「うるさいよ! あんな——」

「じゃあお前はこういうシチュエーションがいいんだ?」

「え? そ、そりやあやつぱり最初はお互いキスからじゃないかな」

「そっからは？」

「そ、そっから？ え、えーつと……………ちよつと深めなキスをして、そしたら僕が女の子の服を脱がしていつておっぱいを——つてなに言わせるんだっ！」

「エロ漫画の展開まんまじゃねえか中学生かよ（笑）」

「やっぱり童貞なんですね（笑）」

「シバく！ 頭から脳髓をブチ撒けるくらいシバき殺す！」

「やめよ明久！ 大悟はともかく天ちゃんに暴力は駄目じゃ！ だから椅子を振りかぶるのをやめい！」

「……………あ、明久君におっぱいを……………（ムラムラ）」

「……………ア、アキにディープキスを……………（ドキドキ）」

### 閑話休題

「てかアンタらさつさと服着て帰れ。もうすぐ他の客入れんだから。まだ飲み足りねえんなら家でやってな」

『ん？ そうか。それは済まねえ』

『女の子の前で裸を晒すなんて、少々配慮に欠けていたな』

凜花さんに従いようやく服を着始めたオジさん達。

あれだけ醜態を晒してるのに少々どころじゃ済まないと思うけど。

『んじや明日も朝仕事はえーし帰るわ』

『俺も朝イチで会議だわ』

『じゃ、また来るぜ凜花ちゃん』

『これ全員分の酒代な』

『おう、お粗末様』

そう言い残してオジさん達は店を後にした。

残ったのは僕らFクラスメンバーと大悟ファミリーだけだ。

「すまんな姫路、島田。ウチのバカな常連共が怖がらせたみてえだよ。大丈夫か？」

「い、いえ……辛うじて平気です」

「ウ、ウチも何とか……」

「ははは、それなら良かったぜ。アイツら酔っぱらうといつもあんな感じだよ。けど根は悪い連中じゃねえからそこは勘違いしないでくれな？」

「は、はい……」

「うし、オケ！」

凜花さんが笑いながら二人の頭を撫でる。

雰囲気といい言葉遣いといい、改めて見ても本当に年の離れたお姉さんにしか見ええない。それぐらい凜花さんは内外全てが若々しい。

「うし、んじや開店準備すつか。おら、大悟も天も着替えてこい」

「うーい」

「はーい」

「あれ？ まだお店は開いてなかったんですか？」

「ああ。ウチは昼間と夜の二回に分けてやってっからな。今は休憩時間で一般客は入れてねえ」

「え？ じゃあ今の人達は……」

「アレはただ仕事終わりに遊びに来ただけ」

酒飲んで野球拳で全裸になるまではしゃぐことを遊びのカテゴリーに入れていいものなのだろうか。

「お前らの服も用意してあつからな」

「お手伝いは何をすればいいんですか？」

「まあホールで客の注文取ったり料理運んだり、厨房でアタシと大悟のサポートに回ってもらおう感じだな」



「分かりました」

「へえ、でもそれだけなら結構簡単そうだね。ねえ雄二」

雄二に向かってそう言う。

「そうだな。まあ、忙しいつつつても文化祭の時と似たような感じだろうからな。上手くやってみせるさ」

「……………ほう？」

「ほー、大層な自身じゃねえか。気に入ったぜ。そういう小生意気な態度はアタシは嫌いじゃないからな。じゃあそんなお前らには——」

「——これから地獄を見てもらう」

——へ？

## ——劉玄夜の部、開店

『おねーちゃん！ こっち生ビール4つねー！』

『棒棒鶏と油淋鶏3つずつお願いよー！』

『おーい！ さつき頼んだ餃子と担々麺まだかー!?』

『芋焼酎お代わりー、水割りとロック二つずつねー!!』

『は、はーい！ 今行きまーすつ!!』

『棒棒鶏と油淋鶏3つずつじゃな！ 承りますぞいつー！』

『ああ姫路さん！ 逆です逆です！ そのオーダーはこっちの団体様ですよー！』

『あつ、ごめんなさー——きやあああつ!!』

ガツシヤアアアン!!

「ご、ごめんなさあああーいつー！」

## ——キツチン

「おら明久ア!! チンタラしてねえでもつと素早く包丁の手工動かさんかボケエ!!」

「す、すいませんつ!!」

「雄ニイ!! 揚げが遅エぞ!! タイマーが鳴ってからじゃなく鳴ったと同時に上げて皿

に移せ!! お前のポジションが一番サイクルが激しいんだからそれを頭に叩き込みやがれよ!!」

「お、おうっ!!」

「いいか! オーダーを受けてから最低でも10分以内に完成させろ!! ただしだからといって手抜きは許さん!! 1秒コンマでも遅れたりちよつとでも適当に仕上げたヤツは即ブツ殺す!!」

「「「はいつ!!」」」

「チツ!! 醤油が尽きかけてやがんな……おいムツツリーニ! テメエ今からダツシユでスーパーかどっか行って大至急醤油買ってきてくれ!!」

「はあ!? こんなクソ忙しい時に同志に買い出し行かせるだあ!? だからアレほど在庫確認怠んなつただろうが母さんよお!!」

「しゃあねえだろ! 昨日は二日酔いで頭回んなかったんだから! いいからとつと行つてこい!」

「チツ! 自分勝手なこと言いやがってアル中女が——」

ボゴンツ

「もういつペン言ってみろ」

「す、すみませんでした……（ピクピク）」

「……………行つてきます（ガクガク）」

（ず、寸胴鍋が宙を舞つた……）

『ああつ?! テメエが先にガンくれたんだろうが!』

『それはテメエの方だろうが! ブツサイクな顔面しやがつてよお!』

『『ああつ?!』』

「お、お客様! 落ち着いて下さい!」

「お、岡崎君つ! 大変です! あちらの団体様同士が喧嘩を始めて——つてあれ?」

「心配要らねえよ姫路。ホラ」

「テメエらなにウチの店で好き勝手暴れてんだクソ共があああーっ!!」

『おぶおおおつ!』

『ホゲエええつ!!』

『しかも何枚も食器割りやがつて! フザけんな弁償しろやボケナス! もしくはここ

で死ぬ!!』

「ちよちよちよお母さん!! やりすぎやりすぎ! 顔面エルボーからの裸絞めはさすが

にやりすぎだつて!」

「凜花さん！ やめるのじゃ！ 客の顔がえげつないくらい青くなって泡を噴き始めとるー！」

—— そんなこんなで営業終了

「……も、もう体が動かない……」

「ああ……。想像以上に、過酷な環境だったな……」

「……………疲労困憊」

「だから言つたろうが……地獄を見てもらうつてよ……」

「こんな激務を……あの人は毎日続けておるんじやのう……」

後片付けを済ませた僕達男子五人は、あまりの疲労で満身創痕状態になり、それぞれ壁にもたれかかったり床に倒れ伏したりしていた。

最初の頃はすんなりこなせると鷹を括っていたのだが、その目論みは大きく外れ、自分の予想を遥かに上回る程のお客さんの数と回転の速さで、約三時間ずっと忙しく動

いていたのだ。

秀吉の言う通り、こんな激務を毎日こなしている凜花さんは本当に凄い人だと思う。

「ハア、ハア……。だ、大丈夫ですか？ 明久君……」

同じく姫路さんが疲れきった様子で僕に駆け寄ってきた。

「う、うん。姫路さんこそ、大丈夫……？」

「は、はい。なんとか大丈夫で——あつ」

「もうフラフラじゃない瑞希。ほら、肩貸して」

「ごめんなさい、美波ちゃん……」

美波が姫路さんを支えてあげる。

僕ら男でさえこの様子なんだ。女子で尚且つ身体の弱い姫路さんには本当に地獄だったに違いない。

「大悟兄ー、あたしも抱っこしてー。いや、いつそのこと抱いてー」

「黙れボケナス」

「なんだとー！ それがいたいけな妹に対する兄貴の態度かこらー！ そんなんだからいつまでたつても童貞なんだよー！」

「なんだとー！ テメエこそ年齢〓彼氏いない歴の処女の分際だろうが！」

「バカめ！ 男の童貞と女の処女じゃ価値が全然違うんだよーバカー！」

あの兄妹は疲れてても平常運転なようだ。

「ハハハ！ どうだテメエら。これがプロの現場つてやつたぜ」

凜花さんが笑いながら僕らにそう話しかける。

その様子は開店前とほとんど変わっておらず、息切れ一つすら起こしていない。

この人にはスタミナという概念が存在しないのだろうか。

「まあひとまず手伝いごころうさん。おかげで助かったぜ。ほれ、しつかり水分は取りな」

「すみません……ぶはあつ」

「い、いえ。それじゃあ……」

「ああ、大悟から聞いているよ。ここを試験勉強に使わせてほしいってんだろ？ いいよ、

気の済むまで好きに使いな」

「「ありがとうございます」」

凜花さんにお礼を言い、僕らは本来の目的である試験勉強の準備にとりかかる。

折角こんないい場所を借りれるんだ。かなり疲労はあるけど休んでなんていられない。これも僕の自由気ままな一人暮らしを死守する為なのだから——





「「Piedra, papal, tijera!!!」」

「だらつしやあああああーっ!!! なんぼのもんじやああああああい!!!」

「くそおおおっ!! また俺の負けかあああああつ!!」

「どうしたどうしたあつ!!? この俺のご立派様を御披露目させれるヤツはもういねえのかああああああつ!!? (グビグビ)」

「馬鹿を言うな!! どうせ爪楊枝サイズだろお!! (グビグビ)」

「負かして確認してやるとするかのお!! (ゴクゴク)」

「……………覚悟しろ同志っ!! (グビグビ)」

「じゃあ次は僕が相手をしようじゃないか大悟お!! (グビグビ)」

「かかってこいや明久ああ!!!」

「がんばつれくららくい、明久きゆうん! (ゴクゴク)」

「負けんらいわよくアキく! (ゴクゴク)」

「がっはははは!!! やっぱり若いってのはいいなあ!! (グビグビ)」

「やっぱりFクラスの人達ってサイコーだねえーっ!! (グビグビ)」

狂宴は朝まで続き、次の日の学校は全員二日酔いで休んだ。

勿論無断外泊なので姉さんに点数を大幅に減らされたのは言うまでもない。

第六十七問  
アイニードエンジエエエエエエエ  
ルーツ!!

—— side 明久

翌々日の昼休み。僕らは皆で卓袱台をくつつけてお弁当を食べていた。

「姫路さん、美波。昨日は大丈夫だった？」

「それが……凄く怒られてしまいました……」

「ウチも……お酒の事はなんとかバレーずに済んだけど……」

「おかげで週末までの間学校以外は外出禁止にされてしまいました……」

姫路さんと美波がしゅんと俯く。まあ、そりゃあそうだよ。大事な娘が無断外泊をしたうえに飲酒までしちゃったんだから。

本来ならあの後は皆で勉強会をする予定だったのだが、どういうワケか気づいた時にはお酒片手にドンチャン騒ぎをしていた。しかも自分が思ってたよりも相当な量飲んだ。どうで次の日には全員揃って頭痛と吐き気と倦怠感に襲われ、学校を休む羽目になったのだ。

「あの時凜花さんがお風呂を貸してくれて助かったわ」

「じゃないと臭いが大変でしたもんね」

「本当にすまなかつたな二人共。あのバカ親を止められなくて」

そんな二人の様子を見て大悟が申し訳なきように深々と頭を下げた。息子という立場上、凜花さんの暴走を止められなかつた事に責任を感じているのだろう。

「い、いえ！ 岡崎君は悪くないですよっ！ それどころか私と一緒に両親に謝つてくれたじゃないですかっ」

「え、そうなの？」

「しかも瑞希のところだけじゃなくてウチの両親にもね。その上ご両親に心配とご迷惑をかけさせるような真似をしてすみませんでしたって土下座までしたんだから」

「へえ、やるじゃないか大悟」

「別に褒められるような事じゃねえよ。こつちに非があつたんだからそれを認めて謝罪する——んなモン子供でも理解出来るような至極当然な事だ。俺はただ通すべき筋を通したに過ぎない。それにあの人のやらかしで頭下げるのはもう慣れっこだね」

大悟の言葉に僕は流石だな、と心の中で感心する。

普段はどうしようもないキモオタのロリコンだがそういう面はちゃんと人間が出来ている。誤魔化しや言い訳をせず、キチンと謝罪と反省の意思を見せられる。口で言うのは簡単だけど、実際にそれを行動で示せる人間というのは中々いない。

僕もコイツのそういつた面はちゃんと見習わないといけないな。

「でもなあ……一つだけ残念な事があつたんだよな……」

「残念な事？ なにそれ」

「島田の家で土下座した時にな……葉月ちゃんが俺の頭を踏んでくれなかったんだよ。俺アてつきり『そんないけない大悟お兄様には葉月が生足でお仕置きしてあげます。ほーら？ ふーみつ、ふーみつ』っていう展開が来ると思つて内心ワクワクしてたんだぜ。ちなみに予想では靴下を脱いだばかりのムワつとした幼女の足の臭いが俺の鼻孔に良い感じな塩梅を与えて」

「うん、僕から聞いたいてなんだけどもう黙ろうか」

「岡崎。お願いだから人の妹で変な妄想しないで」

僕と美波が的確にツツコミを入れる。折角の良い話が台無しだよバカヤロウ。

「まあロリコンの戯言はさておき、今後は夕方以降にコイツの家には行かない方がいいな。理性が完全にブツ飛ぶレベルで飲まされるのはもうゴメンだ」

「人の切なる願いを戯言扱いするとは……まあいい。俺としてもその方がいいな。確かにあの時は俺含め皆イカれまくつた。特に姫路がな」

「え？ わ、私ですか？」

「ああ。まさかあそこまで人が変わるとは思わなかった。なんせ俺達が野球拳してる時に無理矢理乱入してきて、着てた制服を何の躊躇いもなく脱ぎ捨ててあんな冒険下着を

「いやあああーっ!! やめてください岡崎くんーっ!!」

「へぶっ!？」

「ああ、そういうえばそんなこともあったわね……。ウチもあの時の瑞希にはビックリしたわ」

姫路さんが恥ずかしさからかいきなり大悟にヘッドロックをかけ、教室の隅まで連れていく。もうすっかり彼女もFクラス色に染まってきたようだ。

ていうか姫路さんの下着だど!? なんて魅力的かつ男心を刺激するワードなんだっ！ 後でその話の続きを詳しく聞かせてもらおうとしよう。

「アキ。まさか岡崎にその時の話を聞こうなんて思ってたないわよね」  
「ううん全く微塵も思ってたないよ（汗）」

美波の目が攻撃色になったので、全力で否定の意思を見せる。

どうして僕の周りにいる女の子は皆妙に勘が鋭いんだろう。

「でもさ、雄二はあの後大丈夫だったの？」

「俺か？ 俺はそこまで二日酔いは平気だったぞ」

「いや、そうじゃなくてさ」

「なんだよ」

僕は雄二に言う。

「酔いが回ってたとはいえ、姫路さんと美波の前で堂々と全裸になった上に、最終的には女子二人と朝まで泊まり掛けで過ごしたことになるんだよ？ 霧島さんは怒らないの？」

「……………」

おお。ここままで『やってもうた』って表現は見たことがない。

「ま、まあ、大丈夫だろ。バレなければなんの問題も」

「…………雄二。今の話、向こうで詳しく聞かせて」

あ、霧島さんだ。

「まあ待って翔子。お前は勘違いをしている。お前の考えているようなことはなにも起きていないし、そもそもお前に俺が責められる謂れは無いと」

ガスッ

「……うん。言い訳は向こうでじつくりと聞かせてもらう」

ズルズルズル……ピシヤツ。

雄二&霧島さん退場。

「やれやれ、ヤンデレが近くにいる男は大変だな。油断も隙もあつたモンじゃねえ」

「あれ？ 坂本君はどこに行つたんですか？」

いつの間にか戻ってきていた大悟と姫路さんがそう口を溢す。

「そういう大悟こそ平気なの？ 昨日の事がバレたら」

「なにがだ」

「大悟だつて形式上は女子とお泊まりしたんだからさ、君の彼女の木下さんだつて霧島さんと同じくらい怒つてると思うけど」

「ハハハ、誰が彼女だブツ殺すぞこの野郎。それに心配ご無用。霧島と違って優子は母さんの性格と言動の悪さを知ってるからな。話せば分かってくれるさ」

「ああうん。それもあつただけどね」

「？」

「結果はどうあれさ、大悟が姫路さんと野球拳をしたつていう事実はあるワケじゃない。それつて木下さんからしたら大悟が他の女性の裸を見たがつてた、つていう捉え方にな



らない?」

「……………」

おお、雄二と全く同じ表情をしている。

「……ハ、ハハハ。悪い冗談はよしてくれよ明久。二次元ならまだしもこの俺が三次元の裸を見たがる? そんなの天地がひっくり返つてもあり得」

「へえ、昨日全く電話に出ないと思つたら、アタシに黙つてそんなことしてたのね」

あ、木下さんだ。

「優子。まずは落ち着いて話をしよう。昨日のアレは全てスピリタスという悪の酒がもたらした一種のマインドコントロール的なものであつて俺自身の意思では確実に無いということをまず理解してほし」

ゴスッ

「そうね。話ならお仕置きをした後にたつぷりとしようかしらね」

ズルズルズル……ピシヤッ。

大悟&エ○カリボルグを持った木下さん退場。

まさか全く同じ光景を立て続けに見せられるとは思わなかった。

「ふむ。こうなると放課後の勉強は厳しそうじゃな」

「そうね。瑞希も坂本も岡崎もいないとなると、教えてくれる人がいないもんね」  
「……………」（コクリ）」

雄二と大悟は僕の心に生きているけど、残念ながら心の中の二人は勉強を教えるてはくれない。

「それじゃ、勉強会は中止か……。弱ったな……」

「ごめんなさい。せめて私だけでもお酒を飲まないでちゃんとしていけば……」

「ああいや、姫路さんは全然悪くないよ」

むしろあの状況で素面でいろいろという方が無茶な話だ。

「……………吉井」

「吉井君」

「うわっ！」

不意に背中から声をかけられる。誰だ!?

「き、霧島さんに木下さんか。びっくりした……。どうかしたの?」

「……………勉強に困ってる?」

「あ、うん。そうなんだよ」

霧島さんのシャツについている赤い液体と木下さんの両手の指についている赤い液体と白いちっちゃな何かには目を向けられないようにする。

「……それなら、私達も協力する」

「え？ 協力って？」

「……週末に、皆で私の家に泊まりに来るといい。その時に出来る限り私と優子も勉強を教える」

「さつき代表とそういう話になったのよ。アタシは良い案だと思うけどね」

皆で——泊まり!? つまり遅くまで勉強できるってことか! しかも学年トップクラスの頭脳を誇る二人に教わって! それって凄いありがたいことじゃない!?

「いいの、二人ともっ?」

「……吉井にはいつかお礼をしたいと思っていた」

「吉井君には色々借りがあるもの。それくらいお安いご用よ」

これは助かる! テスト直前のスパートには、願ってもない最高の環境だ!

「皆で、ということとはワシらも良いのかの?」

「……勿論」

「週末ってことならウチも行けそうだし、お邪魔しちやおつかな。瑞希はどう?」

「た、多分大丈夫です。ダメでも、なんとか両親を説得しますっ!」

「……………参加する」

この場にいる全員が参加決定。これは良い週末になりそうだ。

「あ、あと雄二と大悟は参加できるのかな？」

「…………大丈夫」

「多分問題無いと思うわ」

「あ、そうなの？」

「…………その頃には、きっと二人とも退院してる」

「そっか。それは良かった——」



.....退院？

——そんなこんなで週末。

雄二と大悟が不慮の事故で入院してから三日後、あつという間に土曜日がやって来た。今日は霧島さんの家で泊まり掛けの勉強会だ。

出掛ける前に姉さんと諸々の事で軽い言い合いになってしまつて、あまり気分の良いスタートではないけど、そんな事は今の僕には大した問題じゃない。

早く忘れて今日は時間の許す限りまで勉強に専念するとしよう。

ピンポン

「……吉井。いらっしやい」

霧島さんの家に到着し、呼び鈴を鳴らすと私服姿の霧島さんが出迎えてくれた。

「お、お邪魔します」

あまりに立派な造りの家なので、無駄に緊張してしまう。

「……もう皆、大体揃ってる」

「あ、僕が最後なんだ」

先導してくれる霧島さんについていく。

凄いなあ……。こんなに長い廊下は見たことがない。

「ふえ〜。部屋がいっぱいあるね〜」

「……用途別」

目的に応じてそれぞれ部屋があるのか。

「それじゃ、あの本が並べられている部屋は」

「……書斎」

「あっちのスクリーンがある部屋は」

「……シアタールーム」

「あのパソコンとか机が置いてある部屋は」

「……岡崎の仕事部屋」

どうして霧島さんの家に大悟の部屋があるのか。

「……雄二の同人誌とかグッズを格安で売ってもらう代わりに、製作の為の部屋を一個貸してる」

「あ、そうなんだ」

雄二の同人誌なんて世界中探しても霧島さん以外に需要がなさそうだ。

「あの鉄格子のはまっている部屋は」

「……雄二の部屋」

今のはスルーしよう。

「……そしてここが、勉強部屋」

しばらく歩いたところで、霧島さんが立ち止まってドアを開ける。

ガチャ

『ムツツリーニ君は頭でものを考えすぎだよ！ 百聞は一見にしかずって諺を知らないのっ？』

『………充分なシミュレーションもなく実践に挑むのは愚の骨頂』

『そうやって考えてばかりだから、すぐに血を噴いて倒れちゃうんだよ！』

『………何を言われても信念を曲げる気はない』



『またそんなことばかり言って……!! このわからずやつ!!』

『……………卑怯な……………っ!! (ブシヤアア)』

……………あの二人、何やってんだろ……。

「明久。やっと来おったな」

「あ。秀吉。あの二人、何があつたの?」

「うむ。それが、『第二次性徴を実感した出来事は何か』という議論が高じてあんなつたようなのじゃが……」

「あのさ。その原因になつた議題がもう既におかしいと思うんだ」

どんな会話の流れからそんな議論が持たれるんだらう。

「明久君。こんにちは」

「ん。ああ、こんにちは姫路さ——」

「?」 どうかしましたか?」

いつもと違うポニーテール姫路さんの方を向いて、一瞬言葉を失つた。

す、凄く可愛い……!! どうしよう!!? なんて言つたらこの気持ちを伝えられるんだ

!!? 考えろ僕!

簡潔に分かりやすく、短くまとめて——よしっ。

「明久君？」

「今日の姫路さんは死ぬ！」

「えええっ!?!」

「ってバカあつ！ 僕のバカあ！ お前は一体どこの不吉な占い師だよ！」

「あの、明久君……。私、何か悪い相でも出ているんですか……?」

「……ごめん。気にしないで……。ちよつと不測の事態に対応しきれなかっただけなんだ……」

「は、はあ……」

「褒めるつもりだったのに、どうしてこんなワケのわからない発言になったんだろう。」

「アキ。朝から何を見てそんなにトチ狂っているのかしら?」

「あ、美波。やだなあ。僕は狂ってなんかいないよ」

「ふうん……。ウチには全然そうは見えなかったけど?」

「き、気のせいだよ」

「美波の視線が妙に鋭い。凄く機嫌が悪そうだ。」

「全く……。瑞希も瑞希よ。急に髪型を変えてくるなんてずるいじゃない。……ウチの方はどうしようもないっていうのに……」

「美波が親の敵を見るような視線で姫路さんの髪を見ている。」

二人ともお揃いの髪型で可愛くて、見ているだけで僕はどうしたらいいか……つてま  
ずい！ こんなことを考えているとまた頭がおかしくなる！

「それはそうと姫路さん。今日の泊まりの許可が下りて良かったね！」

これ以上墓穴を掘らない為に話題を変える。

「はい。良かったです」

姫路さんが嬉しそうに微笑む。

「ウチの方も今日はすんなりと出てこれて助かったわ」

「え？ 美波も何かありそうだったの？」

「ううん。ウチじゃなくて、葉月が、ね」

「葉月ちゃんが何か？」

「泊まりで勉強会なんて知られたら、絶対に『連れて行け』って駄々をこねるに決まっ  
てるわ」

「あはは。そうなんだ」

姉妹二人でお世話になるのが心苦しかったのかな？ 霧島さんはそんなこと全然気

にしないような気もするけど。

「でも、葉月ちゃんが来ないなんて大悟あたりが知ったらショック受けるんじゃないか  
な」

「ああ……、確かに。岡崎なら充分あり得そうね」

あの根つからの葉月ちゃん大好きなロリコン野郎の事だ。

悲しみとシヨックのあまりその場に深く泣き崩れる姿が容易に想像出来る。まあ葉月ちゃんの考えると来させなかつた美波の判断は妥当なんだけど。

「あれ？ まだ雄二と大悟がいらないね。あと木下さんも」

「んむ？ そういえば姉上共々朝から姿を見ておらんな」

こんな昼過ぎの集合なのに寝坊なんて、弛んでるんじゃないのか——

「……雄二を連れてきた」

ドサツ

絨毯の上に簀巻きにされた雄二が転がされる。

「ん？ 明久。どうしてお前たちがここにいるんだ？」

「……ああ、うん。霧島さんの厚意でね……」

「雄二よ。お主は今日の勉強会の話は霧島から聞かされておらんかったのか？」

「いや、何も聞いてない。いつものように気を失って、目が覚めたらここにいただけだなるほど。たまに週末に雄二に連絡がつかない時があるのはそのせいだったのか。」

「あれ霧島さん。大悟と木下さんは？」

「……多分。もうすぐ来る」

もうすぐ? どういうことだろう?

ガチャ

「お待たせ代表、皆。ほら大悟。キリキリ歩きなさい」

「……………」

続いて私服姿の木下さんに首輪、手錠、足枷を繋がれた大悟の登場。

目は虚ろで脱け殻みたいな顔だ。

「……………えつと、何があつたのかな?」

「まるで『ぬ』と『ね』の区別がつかないような顔をしておるのう」

FXで全財産溶かしたとかじゃないよね?

「ね、ねえ大悟?」

「はい。私は木下優子を愛してます」

「いやそうじゃなくて——」

「はい。私は木下優子を愛してます」

「いや——」

「はい。私は木下優子を愛してます」

「……………あ」

「はい。私は木下優子を愛してます」

「も、もう、大悟つたら……………大胆っ（ポツ）」

生気が一切灯らない声色で壊れた時計みたいに同じ言葉を延々と繰り返す大悟。

それを聞いて恥ずかしそうに顔を赤らめる木下さん。なんだろう、よくわからないけど背筋がとつても寒くて怖い。

「姉上……………今度は一体大悟に何をしたのじゃ？」

「何よ秀吉。別に変な事はしてないわ。代表に地下牢の部屋を借りて大悟を逃げられないように縛り付けて耳元でずっと愛の言葉を囁いていただけよ。『好き』『愛してる』つてずっとね」

「いや、それは最早監禁——」

「ん？ 何かお姉ちゃんのやることに文句があるのかしら？ 秀吉（スツ）」

「な、なんでもない……………じゃからそのエスカリボル〇はしまつてほしいのじゃ」

「それでいいのよ。だってこれは純粋な愛情表情なんだから。ね、大悟♪」

「はい。私は木下優子を愛してます」

こんなに狂気と欲望にまみれた愛情は他に無いだろう。

まさにヤンデレここに極まれり、といった感じだ。

「でも木下さん。いくらなんでも、この状態じゃさすがに勉強にならないと思うんだ」

「……優子。あまり岡崎を苛めちゃ駄目」

「なによ二人して。別に苛めてなんかかないのに」

「しょうがない。ここは僕が一肌脱いであげよう。」

「工藤さん、ちよつといい?」

「ん? なにかな吉井君?」

「近くにいた工藤さんを呼ぶ。」

「ちよつと大悟がこんな調子だからさ、工藤さんが声をかけて元氣をつけさせてあげてほしいんだ」

「ボクが? それは全然いいんだケド、ボクにそんなこと出来るかな?」

「いいや、これは工藤さんにしか出来ないんだよ」

「確か工藤さんは見た目とか声色が大悟の好きなエロゲーのキャラクターと瓜二つだつて言つてたからね。」

「精神が壊れかけてる大悟には充分過ぎるぐらいの回復力があるだろう。」

「えーと……確かそのエロゲーの名前は」

「……………青色スプラッシュサマーの柿崎みるく」

「そうそう! そんな感じの名前だ! でもなんでムツツリーニが知ってるの?」

「……………同志にゲームを貸してもらった。今のところ5作品中4作品目までクリア済み(グツ)」

僕としては5部作まであることに驚きだ。

とりあえずその名前をネットで検索してゲーム内でのキャラクターの特徴的な台詞を探す。えーと、どれにしようかな……あつ、これなんて中々刺激的で効果がありそうだな。

「じゃあこの台詞をお願いできるかな」

携帯の画面を工藤さんに見せる。

「どれどれ——えっ、ええ!? こ、これを言うのっ!? ちよ、ちよっとボクには恥ずかしいかなーんて」

「でもこのままでと大悟の精神は永遠に戻らないんだ。だから工藤さん、お願い」

「そ、それはそうかもだけど……」

「……愛子。お願い」

「だ、代表まで……も、もうっ! わかったよっ! でも一回! 一回だけだからねっ!」

渋々ながらも承諾してくれた工藤さんが大悟に近づく。

そして耳元に顔を近づけて小さく囁いた。



「……ね、ねえ岡崎君?」

「はい。私は木下優子を——」

「巨乳もいいケドお……ちつぱいの方がヘルシーで美味しいですよつ、センパイ♪」  
「!!?」

あ、目に生気が戻った。

「お、おお……!?!」

「あはっ、足○○されただけでももうこんなに先っぽビッシヨビッシヨにするなんてっ、センパイはとんだ変態さんですね。もうすぐにでもイっちゃいそうなんですねっ、センパイ♪」

「お、おお……おおおおお……!?!」

あ、筋肉の血行が良くなった。

「あっ! ああんっ! もっと! もっと激しく突いてっ、私の○○○○っ! センパイのロケット○○○○でっ、月の向こうまでっ、ブツ飛ばしてええっ、くださいっ!」

「おおおおおおおおおおおお!!!」

あ、顔色が綺麗になった。



そのまま工藤さんをみるくたそと勘違いして追いかけて回す大悟。  
なんていうか……工藤さん、ごめん。

「……ま、まあ一応復活したみたいだし、良かったね」

「いや、あれはワシにはむしろ悪化してるように思えるのじゃが……」

その後は木下さんが大悟をエス○リボルグでぶん殴って終了。

そのまま僕達は夕方まで勉強に取り掛かった。

# 第六十八問 ドスケベなことをするんでしよう!? エロ同人みたいに!

——side 大悟

「……そろそろ夕飯だから、別の部屋に来て」

霧島がそう俺達を促す。

気がつくと夕方の六時過ぎ。勉強会をはじめてからもう何時間と経過していたようだ。

その間俺は優子にずっとしごきという名の理数系科目のみの勉強をひたすら叩き込まれ、精神的に限界を迎えていた。

「あら、もうそんな時間なのね。じゃあ今日はここまでにしましょうか」

「も、もう無理だ……数字を見るだけで吐きそう……おええ」

「アンタって、本当に昔から理数系は地を這うレベルで不出来よね……」

当たり前だよなあ? (怒)

だってもう数学とか物理とか問題から意味が解らんもん。微分とか積分とか日本語としてワケがわからんし、証明問題とかもこの式が成り立つ理由を証明せよとか言われ

ても、証明ができるからそれを問題にしたらどうがよお作成者あ! てめえで正解分かってんだからワザワザそれを他人に押し付けるような真似やめてくれませんかねえ!

特になんなあのグラフ系の問題で出てくる点Pとかいうヤツ。ずっと動いてないと死ぬ病気にでも汚染されとんのか。もしくは回遊魚的か何かですか? マグロ? 点Pはマグロなの?

「そもそも理数系なんて将来何の役にも立たんから勉強する意欲がわかねえ。物理学者にでもなるワケじゃなし」

「そんな頭の悪い中学生みたいな言い訳しないのっ」

「いてえ」

優子にペチンと叩かれる。

「はあ……せめて二次元の女の子に教えてもらうんならやる気もあがるんだがなあ」

「それはアタシが役不足って言いたいのかしら?」

「はっはっは、優子が役不足? 何を馬鹿な事を言っただがる」

「え?」

「そもそも役不足云々の前に三次元ごときと二次元じゃ同じ土俵にすら立て——」

ドボゴツ

「お置きき、いる？」

「お前のこと言つたわけじゃねえのに（泣）」

優子にトゲバットでドツかれる。

最近俺のあばら骨も度重なる暴力で防御力が上がっているようだ。

「全くもう。なによ二次元二次元つて。そりゃあアタシだつて二次元の魅力は人並み以上に理解してはいるけど……ちよつとぐらいアタシに同じくらい欲情してくれてもいいじゃない。やつぱり媚薬でも盛つて今夜にこそ……」

「あ？ ちよつとぐらいなんだつて？」

「なんでもないわよつ。ま、とにかく今後アタシ以外の女に靡いたら許さないからね。ちゃんと肝に銘じときなさいよ」

そう言われてそっぽを向かれてしまった。

コイツはヤンデレなのかツンデレなのか複雑でよくわからん。

「うう……。活用形つてなんなのよ……。知らなくても生活には困らないのに……」

「全くじゃ……。能や狂言をやるわけでもあるまいし……」

島田と相棒は雄二に古典か何かを習っていた様だ。疲弊している様子が見て取れる。

「………生き残つた………」

「ムツツリーニ君。また後で、じっくりボクとお勉強しようね」

「……………断る」

なら俺が代わりにいこう。みるくたそとのワンツーマン保健体育とか最高かよグへへ。

「…………案内するから、ついてきて」

「「はーい」」

先導する霧島についていく。

しばらく歩いていっていると、徐々に鼻孔を擦る馳走の香りがしてきた。

この香りは…………ひよつとして中華か？

「…………この部屋」

霧島がそう言って扉を開けると、そこには大きなダイニングテーブルの上に、俺の予想通りこれでもかというほどの豪華な中華料理の数々が並べられていた。

「す、凄い…………っ!」

「わあ…………」

「これはまた、贅沢じゃな」

「アキがこんなの食べたら、慣れない味でお腹壊しちやいそうね」

「あははっ。本当だよ」

それぞれ色んな反応を示す中で、俺は特にこれといった目の前の料理達を見つめる。

ほう……、北京ダックにフカヒレの姿煮、などの高級食材が使われたものを始めとし、麻婆豆腐や青椒肉絲、回鍋肉に油淋鶏。デザートといった庶民的なものまで幅広く取り揃っている。

メインとそれを引き立たせるサブのバランスが非常に良い黄金比を保っていて、見ただけでも幅広い客層を喜ばせること間違いなしだろう。

「ほー。コイツは全部お前が作ったのか？ 霧島」

「……専属の料理人を雇っている」

さすがは金持ち。コックの腕もレベルが高いということか。

……ただなんだろう。こんなに完璧な布陣が揃っているのに何か足りないような気がしやがる……。あ、そうか。よく見たらアレが一個もないんだ。

「なあ霧島」

「……なに？」

「スピリタスが一個もないんだが？」

「……岡崎ってお酒、飲むの？」

「え？ いやだつてまずは飯を食う前にスピリタスのイツキ飲み対決から始まるだろ？」

「……そうなの？」



「大悟。気をしっかり持て。ここはお前の家じゃねえぞ」

「え——はっ!? そうかそうかつ! ここはウチじゃなくて霧島の家だったな! いかんいかん! 口が勝手に!」

いつも店で母さんや常連のオッサン達に飲ませられてるから、思わず中華料理を見ただけで条件反射でついそんな事を口走ってしまったぜ。

「そうか……今日は久しぶりにシラフで中華料理が食えるのか。なんだか感慨深いものがあるな。」

「そうか。今日は飯時に服を脱ぐ必要はないんだな……着衣で中華を食うのは久方ぶりだぜ」

「中華云々の前に普通はご飯の時に服は脱がないんだけどね」

「お前、相当あの母親に毒されてるな」

「ふっ、そんなの自分でもわかってら」

「……それにスピリタスって、確かアルコール度数が96%ある」

「消毒用アルコールより全然高いのよね」

「人間の飲むモンじゃないな。そんなモンを毎晩飲んでるとは」

「いや、母さんはそれを毎日朝のブレイクタイムと風呂上がりと晩酌に分けて飲んでる」

「人間じゃねえ……」

「さすが鉄の肝臓の持ち主よね……」

鉄どころかダイヤモンド並みの頑丈さだと最近は思っている。

「ところで、ここで食事を摂るのはワシらだけか？　霧島の家族はおらんのか？」

秀吉の言葉に俺も確かに、と頷く。ちよくちよく執筆でお邪魔しているが霧島の家族は見かけたことないな。

「翔子の家はそれぞれが自由に暮らしているからな」

「……うん。だから気兼ねしないで好きに過ごして欲しい」  
なんてうらやましい。

「……それじゃ、適当に座って」

「みるくたそ！　是非俺の隣にすわ——（ガシツ）」

「……大悟？　勿論こつちよね？（ニコニコ）」

「イ、イエスマム……」

そのまま優子の隣に座らされましたとき。チクシヨウ。

「「いただきまーすっ!」」

皆で手を合わせて、いよいよ楽しい夕食タイム。

「これはまた、絶品じゃな……」

「お、美味しいです……! うう……また食べ過ぎちゃいます……」

「……………鉄分補給」

「はい大悟口開けて。あーん?」

「やるわけねえだろバカ(パクジュワアア)ほっあああああつっあああーっ!!? ほごっつ  
ほごっつ小籠包が! 小籠包の熱々な肉汁が直に口の中にホグオあああああーっ!!?」

「翔子。なぜ俺に取り分けた料理だけ毒々しい紫色をしているんだ」

「……………おかしな薬なんて入ってない」

「ボク中華料理大好きなんだよねー」

「俺もみるくたそ大好きなんだよね(グサツ)おおあああああーっ!!? フォークが!

フォークの鋭利な部分が俺の目に深々とダイレクトアタックをおおおいーっ!!?」

まるで高級ホテルの貸し切り部屋で食事をしているようだ。美味しいし、楽しい。滅多に食べられない高級食材に舌鼓を打ち、勉強の疲れが癒される。

最後に締めとなるデザートのアタックの杏仁豆腐を味わっていると、霧島さんが雄二に話

しかけていた。

「……雄二」

「なんだ翔子？」

「……勉強の進み具合はどう？」

「まったくもって順調だ。心配はいらねえ」

「……本当に？」

「ああ。次のテストではお前に勝つちまうかもしれないぞ」

「……そう」

「そうしたら俺は晴れて自由の身だな」

そう楽しげに笑う雄二。すると霧島さんの目がスツと細くなった。

「……そこまで言うのなら」

「ん？」

「……勝負、する？」

「勝負だと？」

「……うん。雄二がどの程度でできるようになったのか、見てあげる」

「ほほう……。随分と上からの目線で言ってくれるじゃねえか」

あれ？ なんだか雄二が乗せられているような……。

「……実際に、私の方が上だから」

「くっ。上等だ! 勝負でもなんでもしてやろうじゃねえか! 本当の実力の違いってヤツを見せてやらあ!」

霧島さんって雄二の扱いが上手いなあ。

「……それなら、この後に出題範囲の簡単な復習テストで勝負」

「おうよ! 今までの俺と思うなよ!」

「……それで、私が勝ったら、雄二は今夜私と一緒に寝る」

「は?」

目が点になる雄二。馬鹿だなあ。きちんと聞いてなかったみたいだ。

要するに、雄二がテストで負けたら、あの美人でスタイルも良くてダイゴブックスのイラストモデル（一般&成人向け両方）においては姫路さんと1、2を争うほどの人気を誇る霧島さんと一緒に寝るって話なワケで、そんな羨ましいことが起こるのなら妬みで殺してやりたいなんて思っちゃうじゃないか。

「木下さん。食後に軽く雄二と外で野球をしたいからエスカ○ボルグを貸して貰えないかな? 勿論付着した汚れはちゃんと洗い落として返すからさ」

「別に良いわよ。勉強部屋にあるから取ってくるわね」

「待て木下姉! 今のコイツに凶器を渡すな! 俺の命に関わる!」

ちいつ！ 良い勘してやがる！

「……じゃあ代わりに、雄二が勝ったら吉井か岡崎と寝るのを許してあげる」

「驚くほど俺のメリツトがねえぞ!？」

「ちやつかり俺も候補に入れんのやめろや霧島ア！」

大悟はさておき、雄二は何バカなことを言っているんだ。僕だったら全力で0点を取りに行く条件だというのに！

「いいな。そういうの、面白そうだよ。ボクも何かやりたいなあ」

そう工藤さんが楽しみに言った。

「……愛子も勝負する?」

「それもいいけど、折角だからそのテスト——皆で受けて、その点数で部屋割りを決め

ようよ」

「?」

そう言つて僕に視線を向け、ウィンクをした工藤さん。これは……誘われてるっ!?

「なるほど。そうなると俺とみるくたそのラブラブ同室は確定だからあと残りの四くみ

べらぼっ!？」

木下さんに殴られて床に倒れ伏すキモオタを尻目に、僕は工藤さんに言った。

「よし工藤さんっ! 望むとこ——」

「だ、ダメですそんなことっ! 明久君にそういうコトは、えっと、その、まだ早いと思いますっ!」

「でも、保健体育のテストの為に吉井君がボクと実戦を経験しておくのはイイコトだと思おうよ?」

「ダメですっ! そんなのいけませんっ!」

「そうだ! みるくたその初めては明久じゃなくこの俺がもらほぶごおっ!」

木下さんに顔を蹴られて壁にめり込んだキモオタはさておき、

「保健体育のお勉強、ボクが吉井君に教えてあげたいな」

「ダメったらダメです! 絶対にダメですっ! 工藤さんと明久君が一緒に部屋なんて……何が起こるか分かりませんからっ!」

「ふーん。じゃあ姫路さんはボクと吉井君が二人きりだと何が起こると思ってるの力ナ?」

「えっ? そ、それは……」

ニヤニヤと楽しそうにからかう工藤さんと、それにたじろいでいる姫路さん。

「そ、そんなの……そんなの、決まってるじゃないですか——」

「ん、なあにかな？」

「——明久君に乱暴ドスケベするんでしよう!? エロ同人みたいに!! エロ同人みたいに!!」

「……………え？」

一瞬空気が静寂に包まれる。

「え、ちょ……姫路さん? 急にどうしたの——」

「私知ってるんですから! 岡崎君から借りた本とゲームで勉強したんですからっ!  
おそらく工藤さんは保健体育の実戦と称して、明久君をベッドに押し倒して○○○○し  
て♡♡♡♡♡♡して『ピーー』をして孕ませるつもりなんですよっ!!」

「……は、はあ!? ボ、ボクが吉井君に『ピーー』!!?」

突然の超ド下ネタ発言に慌てふためく工藤さん。自分の予想もつかない返しにどうして良いか分からないのだろう。しかし反対に姫路さんは止まらない。

「確か工藤さんは保健体育の実技が得意だっって言っていました! つまり工藤さんにとつて『ピーー』程度の行為なんてもうやり慣れているという事なんですよねっ!! で、で



もそんなの破廉恥です! 明久君にはレベルが高すぎますっ!!」

「そ、そんな事ボクしないよっ! ボクはただっ純粹に吉井君に保健体育の実戦をつ」

「嘘ですっ! そうやって私を安心させて裏では◆◆◆するつもりですっ!」

「ち、違うつてば!!」

「まさか▲▲▲▲▲▲ですかつ!?! でもそれはさすがに明久君の『検閲削除』が壊れちゃ

いますよ!」

「違——」

「も、もしかして…………… 両方!?! 両方なんですかつ!?!」

「……………」

「どっちなんですかつ!?! ◆◆◆ですか! それとも▲▲▲▲▲▲なんですかつ!?! は

たまた『検閲削除』責めなんですかつ!?! 答えてください工藤さんっ! さあっ!」

「う、うう……………」

「やめるんだ姫路さん! これ以上は工藤さんが耐えられない!」

さすがにこれ以上はまずいと思い、僕が彼女を急いで止めに入る。

見ると工藤さんは耳まで顔を真っ赤にし、プルプル震えている。いくらそういうエッチなことに関して寛容な工藤さんでもさすがに高難易度過ぎたようだ。

ちなみに隣ではムツツリーニが鼻血の海に沈んでいる。

「で、でも明久君っ！ このままだと明久君の大切な『ゴニヨゴニヨ』が！」

「やめて！ そんな死に往く仲間を引き留めるような悲しげな目で『ゴニヨゴニヨ』とかド下ネタを叫ばないでっ！」

クソっ！ 姫路さんをこんな風にしたヤツは僕の知る中で一人しかいないっ！

「オイコラバカ大悟!! 貴様なに姫路さんにエロゲーとかエロ同人誌とかなんてものを貸し与えてるんだ!! 純真無垢な姫路さんを汚そうとするんじゃない！」

「うるせえな。俺はただ愛情表現の多様さを伝えてやっただけだ。恋愛において持つておくべき必要な知識だからな」

「だとしたら知識の幅がおもいつきり偏ってるじゃないか! ◆◆◆とか▲▲▲▲▲

▲とか現実でやったらアウトなものばかりだし! 貸すにしてもせめて純粋なラブコメの少女漫画とかあったでしょよ!」

「アホか。あんなもん子供騙しのご都合主義の塊でしかねえよ。一昔前はそれで良かったかも知れねえがな、この多様化している現代においてはエンターテイメント的にも恋愛要素的にもオワコンだ。エロゲーとかエロ同人誌の方がよりリアリティでな恋愛が学べるんだよ」

「そんなワケないだろ! 第一どうやってエロから恋愛を学ぶのさ!」

「おい明久……テメエそうエロを悪モンだと決めつけやがんじゃないやねえ——」

バツ!

「恋愛の本質はな!! 純粋なスケベなんだよ!!!」

大悟が立ち上がって声高々に叫ぶ。

「人間は何故他者を好きになり、そして恋をして性行為に発展するのか! それは古来より人間に備わっている子孫繁栄の本能に基づいたもの……すなわち“性”理的現象の具現化なんだ!! スケベだとかエロいという曖昧な表現はそれを大衆向けに抽象化した言葉!! そしてエロゲー、エロ同人誌はその性的現象と人間の内なる欲望の詳細を事細やかに描き、また画面や紙を通して疑似体験することの出来るシミュレーション! いわば恋愛の教科書といっても過言ではないのだっつっつ!!! 分かるな?」

「「……………」」

……………どうしよう。意味が全く分からない。

前々から気が狂った頭のおかしいヤツだとは思っていたけど、よくもまあ女子のいる

前でエロゲーが恋愛の教科書とか常人には理解不能（ムツツリー二だけは確かにといった表情をしている）な戯言をどや顔で叫べるものだ……。さすがは羞恥心と倫理観の欠片もないキモオタと言わざるを得ない。

現に工藤さんはもう何も言わず恥ずかしそうに俯いている。あ、姫路さんが正気を取り戻したのか瞬間に顔がトマトの様に真っ赤になってる。

「……なるほど。愛は子孫繁栄の本能とエロ……（カキカキ）」

「翔子。あんなキモオタの言葉を真に受けてメモを取るな。この世で最も要らん知識だ」

それには僕も全力で同意する。

「……なんだテメエら。俺の話がまるで理解出来ないみたいな顔しやがって」

「まるでじゃなくて、普通に僕含めて皆理解出来ないんだよ」

「なんだと……？ 仕方ねえ。口頭の説明だけじゃイマイチイメージがしづらいだろうし、百聞は一見にしかずとも言うからな。優子、すまないが俺のバッグを持ってきてくれ」

「え？ ええ、分かったわ」

「霧島、この部屋にスクリーンのなものはあるか？」

「……今準備する」

そう言うと、木下さんは部屋を出ていき、霧島さんは部屋の壁にかけてあったリモコンらしきものを取ってピツとスイッチを押した。

すると天井から、学校にあるような巨大なスクリーンがゆっくりと降下してくる。

「はい、大悟」

「サンキュー」

木下さんからバッグを受け取ると、大悟は中からノートパソコンを取り出しスクリーンの再生機器にコードを繋ぎ始める。

「今からお前らにはこの大画面でとある愛情表現シーンを見てもらう。しつかりその目に焼き付けるように」

「ねえ、君はバカなのかい?」

「大丈夫だ。これは全年齢モードで恥部は完全に隠れてる仕様になってるモードにしておいたから女子でも安心して閲覧できる。間違いはない」

「いや、そういうことじゃなくてね、そもそも君のその発想が大きな間違いだということだ」

「よし、回線に問題は無さそうだな」

「話聞けよコラ!」

そもそもエロゲーなんだから恥部が隠れたぐらいじゃなんの意味もないだろ!

「よし、再生だっ！」

「……わかった」

霧島さんが再生ボタンを押す。

『俺はお前が……男でも構わない（クチュツ）』

『雄二……。実は僕も雄二の事が……（ジユポツ）』

——始まったのは、僕と雄二（らしき二人）が激しく愛し合ってる映像（秀吉のボイス付）。

「「……………」」

固まるボクと雄二。

『今日は……、帰したくないんだ』

『アーツ(♂)！』

「……………(カアアア)」

「……………(ドキドキ)」

「……………(ポツ)」

「……………(アワアワ)」

「……………いいじゃない(ニヤニヤ)」

赤面しつつ画面に釘付けになっている女子五人。

「お、おお……これは、自分で声を当てておいてなんじゃが……、なんと形容したら良いのか」

「……………筆舌に尽くしがたい」

困惑する秀吉とムツツリーニ。

「どうだ、中々良い出来だろう? これはとある顧客からの以来で作ったモンなんだがこれが思ったより好評だな。めでたく重版が決まったんだ。試写会も兼ねてお前らにはこれこそが本当の不純無き愛の形なんだぞという事を是非学んでほしいぜ! はっはっは!」

……………。

ガシッ

「ん？ どうしたお前ら。俺の肩をそんなに強く掴んで——」

「「……………!!!(ゴゴゴゴゴゴ)」

「やつ、やめろ！ 何をしやがるテメエら……っ!? さてはこの俺に乱暴する気だな  
……あつ！ あつ、あつ!? ふござつ!? エロ同人みたへぶつ!? やめろっ！ 俺は男な  
んかに殴られる趣味はなあびやああああああああああああああああああああ  
あああああ————………っ!!!?」

初めてだ。こんなにも殺意を込めて人を殴るのは。



## 第六十九問 Let's ガサ入れ

——side 明久

雄二と一緒に足腰立たせなくなるまで大悟を殴りつけた後、話し合いでテスト勝負はお風呂に入ってからという事になり、僕はそれぞれ着替えの用意の為に男女別々の部屋に分かれていた。

ちなみにあの動画ファイルはもちろんその場で削除させた。あんなものが学園で広まろうものなら僕の学園生活も男としてのプライドもズタボロになるからね。

「さて、行くか」

部屋に入って待つこと数分。雄二が立ち上がった。

「了解。覗きだね？」

「……………任せておけ」

「お主らはどこまでバカなのじゃ…………」

「顔面が痛え…………」

大悟の顔は僕らの怒りの拳によつて風船の様にパンパンと腫れ上がっている。見てとても痛々しいけど元はと言えば全部コイツの自業自得なので罪悪感とかは特に無

い。

「違うぞバカどもが。俺が行こうと言っているのは翔子の部屋だ」

「え？　なんで？」

「決まっている。さっきの話にあつた模擬試験の問題を盗み出す為だ」

相変わらず卑劣な男だ。

「けど、別に僕らは問題を盗む必要なんて無いんだけど」

「(コクリ) ……………それより、覗きが大事」

「そうだそうだ。それに俺にとって三次元版みるくたその裸より優先すべき事項などあるものか」

「お前ら、本当にそう思うか？」

雄二が得意のもつたいぶつた口調で確認してくる。

「何が言いたいのさ」

「まず明久。お前の家に帰ってきている姉貴は、何を禁止している？」

「え？　えーつと、『ゲームは1日30分』、『不純異性交遊の全面禁止』——つてヤバ

いっ!! すっかり忘れてたっ!!」

一緒に寝るなんてことになったら即死だ！　僕の一人暮らし的にも、生命的にも！

「あ。でもバレなければ」

「協力しなければ俺がバラす」

「外道っ！ この外道っ！」

わかっていたことではあるんだけど。

「次に大悟。お前は俺と同じ立場にいることを忘れるな」

「どういうことだ？」

「暴徒と化した木下姉に消される。間違いなくな」

雄二の言葉に大悟以外の四人がうんうんと頷いた。

「姉上の嫉妬深さは筋金入りじゃからのお。他の女性の裸なんぞ見た日には恐らく骨の一本や二本では済まんじやろうな」

「……………下手したら、再起不能にされる」

「何…………？」

「よく考えるんだ。最後に見る光景が三次元の女の裸になるんだぞ？ いくら推しのキャラと容姿が瓜二つといえどもお前にとつちや最悪だろう？」

「……………ふ、ふふふ。はっはっはっはっは！ 何を馬鹿な事を抜かしやがる！ いか!? みるくたその裸体を生で直に拝むことは我々青サマ（青色スプラッシュサマーの略）ファンにとつての長年の夢なんだよ！ そして俺は今、まさにその夢が現実のものとなるかどうかの瀬戸際に立っているんだぞ!? こんなビッグチャンスをよお！」

青サマファンとして逃せるワケねえよなあ!? その為に死ぬというのなら本望!! 喜んでこの命を捧げる所存だ!!」

声を荒げてそう力説する大悟。

よくわからないけど、取り敢えずなにがなんでも工藤さんの裸が見たいという熱意だけは伝わった。

「だから俺はみるくたその裸を覗く! 例え優子に手足をもぎ取られようとも!! 例え雄二が何をほぎこうとも——」

「そうか。それなら今の発言を木下姉だけじゃなく島田のこのチビツ子にもバラしてやろうか」

「私の発言が不適切かつ不謹慎であったことを誠心誠意深くお詫びいたします。大変申し訳ございませんでした」

「分かればいいんだ」

雄二に向かって綺麗な土下座を披露する大悟。おお……なんて華麗かつ俊足な手のひら返しなんだ。

流石は大悟。葉月ちゃんの名前が出た途端にこうも態度を変えられるなんて、ロリコンと呼ばれるだけに相応しい身のこなしだ。

「あとはムツツリーニ。お前も危険だぞ」

「……………どうして？」

「出血多量で死ぬ。確実に」

それは確かに。

「……………この俺が、死を恐れるとでも？（フツ）」

なんだ?! 無駄にカッコいい!

「だが、予想されるテストの順位を考えろ。上位の人間から相手を選んでいくとなると」  
「順位としては霧島さん、姫路さん、木下さん、工藤さん……つて感じだね」

「霧島が雄二を、姫路が明久を、姉上が大悟となると、工藤愛子は誰を選ぶかのう」

「工藤はムツツリーニを選ぶだろうな」

「……………」

「大悟。そんな悲壮感漂う目でムツツリーニと俺を交互に見るな」

どれだけ工藤さんと寝たいんだこのバカは。

「……………まさか」

「おそらくムツツリーニを出血死させて、保体の王者の座を奪うつもりじゃないか？」

「……………つ！ つくづく、卑怯な……つ！」

よくわからないけど、ムツツリー二と工藤さんとの間にはおかしなライバル関係があるみたいだ。

「……………あんなスパツツごときに、殺されるわけには…………つ！」

死ぬことじゃなくてスパツツで死ぬことが嫌らしい。何かトラウマでもあるんだらうか。

「というワケだ。お前ら協力してくれるな？」

「わかったよ。協力するよ」

「……………やむを得ない」

「……………背に腹は……………変えられん……………かつ！」

これはまさに命が掛かっている。協力せざるを得ない状況と言えるだろう。

「それならワシも協力しよう」

「え？ 秀吉が？ どうして？」

「どうしても、じゃ」

「??？」

まあ、協力してくれるなら助かるからいいけど。

「よし。そうと決まれば行動開始だ。翔子の口ぶりから察するに、テスト問題はアイツの部屋にある。そこに忍び込むぞ」

「「了解」」

——side 大悟

姫路達の姿が見えないのを確認し、俺達は忍び足で廊下を進む。

「「」だな」

「よし、さっさと済ませようぜ」

俺達に課せられた任務は霧島が持っている模擬試験の用紙の奪取だ。そして制限時間は女子勢が風呂から上がるまでの僅か数十分程度のみ。まあまあ厳しい条件下だが、ここまで来た以上やるしかねえな。

雄二がドアノブを掴んで捻る。

ガチャガチャ

「あれ？ 開かないね」

「どうやら鍵をかけておるようじゃな」

「自分の家で？ うーん……。何か大事なものでもしまつてあるのかな？」

「アイツが大事にしまつておくものなんて見当もつかんが……」

そう簡単にはクリアはさせてくれないってか。だがこの程度の関門ならなんの問題もあるまい。

「俺に任せな。こんなドアすぐにぶち破つてやる」

「待て待て。んな事したら音でバレるし、あとで弁償する羽目になるだろうが」

ドアを蹴破ろうと拳を構えたが、雄二に止められた。

「ムツツリーニ、いけるか？」

「……………少々時間をくれ」

すると懐からピッキング用の道具を取り出して、鍵穴に張り付き始めた同志。そのまましばらく待つっていると、

カチャカチャ……。カチャリ

「……………解錠成功」

「流石だムツツリーニ」

「惚れ惚れするような手腕だぜ」

「……………この程度、大したことはない（フツ）」

微笑を浮かべてサムズアップをする同志。



そのピッキング技術を一体どこで身に付けたのかが若干気になるところではあるが、  
ようやくこれの中に入れるな。

「これはまた、立派な部屋じゃな……」

「ひ、広いね……」

「これでプライベートルームだつてんだからヤベエよな……」

下手したらCクラスの教室ぐらいあるんじゃないかねえかというぐらいの広さを前にし、さすがに驚きを隠せない。

「よし、手分けして探すぞ。模擬試験の問題のようなものがあったら全て封を開けるんだ。それだけで言いがかりをつけられるからな」

「言いがかりだと?」

「つまり、霧島さんに問題を知っていたから不公平だ、なんていちゃもんをつけるワケなんだね」

「そういうことだ」

「なるほど」

相変わらずズル賢いことを考えさせたら一級品だぜ。

「俺は机の辺りを探す」

「それなら僕は棚の方から調べるよ」

「……………入り口から」

「ワシは窓の方から行こう」

「ベッド周りは俺に任せてもらおう」

そして四方八方に散り、それぞれのガサ入れが始まった。

俺の担当はベッド周り。うーむ……思春期女子の寝場所を勝手に漁るのは流石に罪悪感があるな……。いやいや！今はそんな些細な事を気にしてる場合ではない！

許せよ霧島！あとで雄二のエロイラスト格安で売ってやるからな！

「んーと……」

まずはベッドを確認する。掛け布団を捲ったり枕を裏返したり下を覗いたり……  
そこで見つけたのは、

『雄二の抱き枕』

『雄二のぬいぐるみ』

『雄二の抱き枕カバー（使用済み）』

『雄二の抱き枕カバー（未開封）』

『雄二の抱き枕カバー（未開封）』

『雄二×霧島の同人誌（60冊）』

『ウエディングプランナーの名刺』

『産婦人科医の名刺』

『調教師の名刺』

『オムツ（パ〇パス）』

『お尻拭き』

『哺乳瓶（雄二の名前が書いてある）』

『よだれ掛け（雄二の名前が書いてある）』

『おしゃぶり（未使用品）』

「チツ。さつきから関係のねえモンばっかだな」

「おい。その前にその奇々怪々なラインナップについて色々尋ねたいことがあるんだが」

「やれやれ、ここは収穫無しか。明久ー。そっちになんかあったかー？」

「待ってくれ！ 俺はもう何も見なかったことにするのは不可能なんだ！ せめてお前が関わっているであろう前半のヤツだけでも説明しやがれ大悟おおおっ！」

後ろでギヤーギヤー喚いている雄二を尻目に、俺は棚を担当している明久の所に行つた。

「うーん。こつちにも模擬試験っぽいものは見当たらないよ。大悟は？」

「こつちもだ。代わりにベビー用品ならいっぱい見つけたがな」

「……………ベビー用品？ えっと、なんで霧島さんがそんなの持つてるの？」

「知らん」

おそらく雄二を使って赤ちゃんプレイでもしようとしてたんだろう。

オムツや哺乳瓶まで用意するあたり、霧島の本気度の高さが伺えるな。

「……………オギヤる雄二（ボソツ）」

「やめろー！ 心底気持ちの悪い言い回しをするな！ そして明久もそれを聞いて吐きそうになってんじゃないやねえ！」

「いや……………だつて赤ちゃん姿の雄二とか誰得……………おええ」

俺も激しく同意だ。百歩譲って二次元でならまだしも、リアルでそんなものを見た暁には多大なる精神汚染によって半年間は眠れない日々が続くだろう。

「つか余計なモン見つけてねえで早く模擬試験を探せ！ ただでさえ時間がねえんだから！」

「へえへえ分かってますよ」

雄二に怒られてしまったので、俺は見つけた品々をそれぞれ元あった場所に戻す。

とりあえず霧島にはあとでソツチ系のエロアニメでも貸してやろう。なんて思って

いると、

「……………っ！（ブバアッ）」

「ムツツリーニ!？」

「どうした、同志!？」

突然同志が鼻血を吹き出して倒れた。なんだ!? 一体何を見たってんだ!?

「……………ブービー……………トラップ……………か……………」

「ブービートラップだと? どういう意味だ」

「……………気を、つけろ……………明久……………同志……………。工藤愛子は……………、俺達を、皆殺しに……………」

そう言って同志が視線を向けた先にあつたのは——綺麗に折り畳まれた女性物のパンティーだ。

嘘だろ……………? じゃあまさかあれは——みるくたその生下着かつ!!?

「ああ、いや。それで死ぬのはきつとムツツリーニだけなんだけどき……………」

「明久、待て」

「へ?」

俺は明久を制し、同志に尋ねる。

「同志。あれは間違いなく工藤のものなのか?」

「……………（コクツ） ……おそらく」

「……Really？」

「……………Really（コクツ）」

「なるほど。つまりみるくたその下着か……」

「——では、テイステイング宜しいか？」

俺はキメ顔で手を顔に当ててそう言った。

「おお……なんて躊躇のない変態宣言なんだ。あんな真剣な表情で、女子の下着を食べようとするなんて」

「……………さすがは、同志。俺達には……到底思考が及ばない」

二人が感嘆の言葉をあげながら俺を見る。

「ていうか大悟。君のストライクゾーンは二次元の女の子か幼女じゃなかったのかい？」

「安心しろ。これはあくまでも一般人としてのテイステイングだ」

「いや広すぎでしょ。君の一般人カテゴリー」

何を言うか。物事を知るにはまず己の肌身で感じた方が分かりやすいだろうに。

「あ、アレは……っ！」

工藤の下着を拝借しようとした時、突然後ろから雄二の慌てたような声が聞こえた。何だ？

「雄二、問題を見つけたの？」

「おお明久！ 大悟！ ちょうどいいところに来てくれた！ コレを取り出すのに協力してくれ！」

「なんだなんだ。何があるってんだ」

雄二が示した方には、壁に埋め込まれた分厚いガラス。その奥には一枚の婚姻届が入っていた。しかもご丁寧に霧島と名前と雄二の名前が記されている。あとは印鑑さえ押せば結婚成立な状態だ。

「いやいや、見るからに無理っぽいよ。それよりも問題を捜さない」と

「バカを言うな！ 俺がどれだけこれを捜していたと……！！ 翔子のヤツ、弁護士に預けたなんて嘘をつきやがって……！！ だから鍵なんてかけていやがったのか……！！」

「用意周到だな」

「くっ……！！ どうすれば取り出せる……！！ はっ、そうだ大悟！ お前の自慢のパンチでこのガラスをブツ壊してくれ！」

「はあ？ アホかテメエは。この分厚さのガラスがたかだか人間のパンチごときで割れ





——俺の拳が。

「ああああああつ!? 手が! 右手首から指先にかけての骨という骨が壮絶な痛みを伴いながら粉々にいいいいあああああ!!」

「やつぱり無理だったか。翔子のヤツめ、強化ガラスとは用意周到な真似を……」

「おいコラ!! やつぱりって何だやつぱりってテメエ!! こうなるってこと始めから分かってたんか! 俺のことを信用していたんじゃねえのかよ!」

「割れる方に信用していたワケじゃない!」

「フザけんなこのクソゲス野郎があああー!!」

クソオツ! 同人誌作家にとつて命ともいえる右手を平気で壊させるとはなんたる外道の極み! これで執筆活動に大きな支障が出たらどうしてくれるんだ畜生!

「雄二! やはりテメエとはここで決着をつけなきゃなら——」

「あれ? 皆何をしているのかな?」

「「「「え?」」」」

雄二を残った左手でブン殴ろうとしたその時、背後から声が聞こえた。振り向くと、そこには工藤がいた。

「うわあつ! 工藤さん!」

「いけない人達だね。女の子の部屋に忍び込むなんて」

「ば、馬鹿な!? もう風呂から出てきたってのか!」

「違うよ。下着、出したまま持つていくの忘れちゃったから取りに来たんだよ」

床に倒れ伏した同志の前に置いてある下着を指差して笑う工藤。

ぬかった……! まさかあの下着は単なる忘れ物だったのか……!

「マズい! 皆、ここは撤退しよう! 工藤さんが戻ってきたということは殺戮部隊も戻ってくる可能性がある!」

明久がそう言つて出口へ走り出す。

確かに、もしこんな光景を優子にでも見られたりしたら右手だけでは済まされないほどの大惨事が待ち受けている。最悪もう一度天国のばあちゃんの顔を見ることになるかもしれない。

「く……っ! こいつを目の前にして退くしかないとは……!」

「畜生! 俺なんてただ右手を怪我しただけじゃねえか……!」

苦虫を噛み潰したような嫌な気持ちになりながら、俺は同志を抱えて明久と同じように逃げ出す。

「また後でね。五人共」

## ——男子部屋

「うう……。作戦失敗だよ……」

「おうコラ雄二。この右手の借りは必ず返すかなクソ野郎……!」

「上等だ。こつちもあのグズ類の件でテメエには話が山ほどあるからなカス野郎……!」

「やめんかお主ら。何があつたのかは知らぬが、とりあえず胸倉を掴み合うのをやめい」  
結局模擬試験は見つけられず、無駄に時間を食つただけで終わった。

だが不幸中の幸いか、俺の右拳はバリバリに負傷はしているものの、かろうじてまだ再起不能には至っていなかった。良かった。

「これからどうしようか……」

「どうするもこうするも、一度見つかった以上は何もできないだろ」

「つまり、正々堂々テストの点数で勝つしかないのか」

「だよ。唯一助かる方法は雄二が勝つて一緒に寝る相手に僕か大悟を選ぶことだけど……」

「……その瞬間、俺達三人の内の二人が社会的に死ぬがな」

「ちなみに下回っていたら?」

「俺達三人の自由な生活が終わりを告げる」

「ほぼ詰みじゃねえか」

勝てばホモのレッテルを貼られ、負ければ俺と雄二はヤンデレ達に連れ去られ、明久は不純異性交遊禁止を破ったとして玲さんにボコされる。ここまでハイリスクノーリターンな勝負があるだろうか。どうあがいても絶望とはまさにこの事だ。

こうなつたらいつそのこと、この家から逃げてやろうか——

「お主ら、安心せい」

「む？ どうした秀吉」

「テスト問題ならば、それらしきものは軒並みワシが開封しておいたからの」

「「え？」」

間拔けな声をあげて秀吉を見る俺達。

「え？ いつの間に？」

「お主らが色々騒いでおる間に、じゃ」

「マジか！ よっしゃ！ 流石は俺の相棒だ！ やるときはしつかりやつてくれるヤツ

だな！ 俺あ嬉しいぜ！」

「む、むう……。大悟にそう素直に褒められると、少し照れるのお」

そうやって照れ臭そうに頬を掻く秀吉。ああもう一々仕草が可愛いじゃねえか畜生。

「でも、どうして秀吉は協力してくれたの？」

「確かに。お前にはあんまりメリットがねえだろ」

「ワシも色々と複雑での……」

遠くを見るような目をする秀吉。

「女子と同衾して、何も無くばワシは完全に女子扱いされるじやろうし、何かあれば問題になる。これほど割に合わん状況はあるまいて……」

「ああ……」

コイツもコイツで色々悩んでんだな。

ま、女子扱いに関しては仕方ないことだ。だってコイツは正真正銘の男の娘なのだから。むしろ男らしさなんて求める方が無謀というものよ。

### 閑話休題

「ところでお主ら。そろそろワシらも風呂に入つてこんか？」

「そうだね。そうしようか」

「霧島の家だ。風呂もさぞかし豪華なんだろうな」

下手したら天然温泉とかあつたりして。

「俺は正直風呂どころじゃないんだが……」

「まあ今は打つ手がないんでしょ？ 大悟でも破壊出来ないんじゃないでしょうか？ どうしようもないし、だったらとりあえずお風呂に行こうよ」

「そうだな。風呂で何か別の策でも考えるか」

「そうしなよ。それじゃ、秀吉はまた後でね」

「一人風呂をゆつくり楽しめよー」

ガシッ

「待ていつ」

「あ?」

いきなり秀吉が俺の腕を掴んできた。

「なんだよ。早く行ってこいよ」

「うむ。勿論すぐに行く。じゃが、何故お主らはワシと別行動を取ろうとする?」  
「?」

「何を言ってるのさ秀吉。だってお風呂でしょ?」

「うむ。風呂じゃ」

「だから、僕らは男湯で、秀吉は」

「ワシも男湯じゃ!」

「? 時間をずらして入ろうってこと? それなら少し待つてるけど」

「違うのじゃ! ワシもお主らと一緒に入るのじゃ!」

「……はあああああ!!」

秀吉の発言に思わず声を出して驚く俺と明久。

「秀吉!! お前どうした! どっかで頭でも打ったのか!」

「そうだよ秀吉! 一緒にお風呂だなんて、そんなのダメだよ!」

「ワシは正常じゃ! 今日という今日こそは、ワシをキチンと男として見てもらうからの!」

そう言つて掴む力を強くする秀吉。

「参った。こうなると秀吉は頑固になり中々折れない。だがだからといって『よし、わかった』とこっちが認める訳にもいかない。」

「秀吉! お前あの時の事を忘れたのか! 昔俺とお前の二人でスーパー銭湯に行った時の事をよお!」

「うぐつ……! そ、それは……」

秀吉が苦虫を噛み潰したような顔になる。

「え、どういふこと?」

「あれは俺達がまだ中坊だった時の話だ。俺と秀吉は遊んだ帰りに汗を洗い流そうと地

元のスーパー銭湯に行つたんだ」

「うん」

「しかしそこで秀吉が『ワシも男湯じゃ!』と言つて頑なにごねてな。仕方なく俺は秀吉を男湯に入れたんだ」

「それでどうなつたの?」

「二人揃つて出禁になつた」

「おお……それはなんとも災難だね」

俺は従業員や客から『女の子を無理矢理男湯に入らせようとした真性のクズ』と誠に遺憾な汚名を被せられ、秀吉は秀吉で『女の子なのに男湯に自ら入ろうとした常識知らずの痴女』という謎のレッテルを貼られた。

最終的には俺も秀吉も警察に補導されるといふ最悪な結末になつた。あの時の屈辱と羞恥心は数年経つた今でも忘れない。

「わかつたか秀吉! お前が俺達と男湯に入ることは社会的にも性別的にも不可能だといふことが!」

「あ、あの時は皆ワシが男じゃと言つても信用してくれんかつたから……。と、とにかく、お主がなんと言おうともワシは男湯に入るからのっ! 男同士の裸の付き合いじゃ!」



「だからお前は男じゃなくて男の娘だつてんだらうが！」

「ええい！ じゃからその訳の分からぬ性別にワシを入れるなど言うところが！ そして明久は裸と聞いて顔を赤らめるでないっ！」

「は、裸……」

秀吉の裸と聞いて妄想を膨らませた明久。気持ちには分かる。

「もうよい！ 話をしてても埒が明かん！ 実力行使じゃ！ 行くぞ大悟！」

「ちよつと待てよ！ だから俺とお前が一緒の風呂は——」

「へえ。二人で混浴だなんて随分と楽しそうな話をしてるじゃない。アタシも混ぜてよ」

ん？ どうして俺と秀吉はいきなり地べたに寝かされているんだ？ それに足首から鳴る骨の軋む音は一体？

「なあ秀吉。気のせいか俺の後ろからだならぬ妖気を感じるんだが」

「それは奇遇じゃな。実はワシも同じ気配を感じておった」

「さあ、行きましようか。たっぷり汗を流しておいた方がその後のお風呂はより一層気持ち良く入れるんだからね」

「いやいや、もう勉強でこれでもかかってぐらい疲れは溜まつてるからよ」

「そうじゃ姉上。じゃからこれ以上汗を流す必要はないかと」

「今から三人でソフトボールをしましょうか。ポジションはアタシがバッター。秀吉はキャッチャー。大悟はボール兼サンドバッグね」

「……………」

引き摺られながら声を殺して泣く俺と秀吉。

頼む誰か！ 誰でもいい！ 俺達を助けてく——

『まったく、戻ってきてみたら、よりによって木下とお風呂だなんて…………』

『工藤さんが忘れ物をしてくれてよかったです。後でお礼を言わないといけませんね』

『あは、あはは…………。二人とも冗談ばかり。本当は僕をからかっているだけでしょ？

ねえ、冗談だよね!? どうして二人ともこっちを向いてくれないの!? どうして僕の

手を嚴重に縛るの!? とにかく話を聞いてよ！ 誰か、誰か助けついでやあああーっ！』

『…………雄二』

『しよ、翔子!? お前いつの間に戻ってきていたんだ!?』

『…………婚姻届を盗もうとするなんて、許せない』

『ま、待て！ 話を聞け！ アレは盗難じゃなく正当な権利でぎやあああーっ！』

『ムツツリーニ君、起きて起きて』

『……………う……………う……………』

『えいつ（チラツ）』

『ぐぼあつ！（ブババツ）』

—— ああ。やっぱり、今回もダメだったよ。

## 第七十問 宴（オトリー）を始めようか

——side大悟

小一時間後、なんとか優子に解放された俺は、明久達のいる男子部屋には戻らずに、廊下の端っことで電話をしていた。

「——ああ。今母さんが挙げたとびきり強いヤツ全部持ってきてくれ。それと例のブツも頼みたい。アレがないと始まらねえからな」

『わかった。ちよつち荷物はかさばるが車使えば問題ねえ。飲み行くついでに寄つてやるよ』

「飲み行くつて……なら車使うなよ。飲酒運転で捕まるぞ」

『大丈夫。もう既に代行頼んだから』

「ならいいんだが」

電話の相手は母さんだ。

『にしても大悟にしちゃあ珍しいじゃねえか。お前が自分からこんな頼み事してくるなんてよ。どういった風の吹き回しだつてんだ？』

「まあな。けど今回はちよつとした事情があつてな。どうしてもこの方法が必要なん

だ。それに明日から土日で休みが続くから身体的負担についても懸念することはない」

『まー、お前らはある程度耐性はついてるから常人よりは平気だとは思うが……』

「それにせつかくのお泊まり会だ。記憶に残る忘れられねえような思い出にしたいだろ？ 特にアイツらには」

『ふーん……ま、いいわ。なんか後で面白い状況になったら教えてくれや。いい酒のツマミになりそうだ』

「ういよ。んじゃ待つてるから頼むな」

『おう』

そして電話を切る。

「よし、これで準備は万端だ……。あとは時を待つだけ、か」

——雄二、明久。さつきはよくも好き勝手ボコボコにした挙げ句データまで抹消してくれたな。おかげで顧客との取引が遅れてダイゴブックスの信用を損ねるハメになったじゃねえか！ こうなりや手段は選ばねえ……。テメエらが一体誰に喧嘩を売ったか……身をもって学ばせてやろうじゃねえか。

——岡崎家に伝わる“伝統儀式”を以てな!!

俺はそう心の中で叫ぶと、悪どい笑みを浮かべつつ、明久達の待つ部屋に戻るのであつた。

え？ そんなのただの八つ当たりじゃないのかって？ 知らんなあ!! 八つ当たり  
だろうがなんだろうが俺はこの手でヤツらに復讐してやらねえと気が済まねえんだ  
よお!!

—— s i d e 明久

「坂本雄二から始まるっ」(雄二のコール)

「「「イエーイ!」」」(僕ら四人の合いの手)

「古今東西っ」

「「「イエーイ!」」」

「一部生徒の間で噂になってる明久の恋人の名前っ」

……へ?

パンパン（手拍子） ↓雄二の番

「久保利光！」

「ダウト！ それダウト！ 久保君は男だから！」

パンパン（手拍子） ↓ムツツリーニの番

「……………」 【坂本雄二】

「嫌だあつ！ それはなんとなく出るなと思つてたけど改めて言われると凄く嫌だあつ！」

「俺だつて嫌だボケ！」

パンパン（手拍子） ↓大悟の番

「西村宗一」

「言つたあああつ！ このお題において一番名前が出てはいけないであろう人物の名前を何の躊躇もなく言つたあああつ！」

「だつてお前、一番鉄人と距離感近いし」

「好きで近くにいるワケじゃないつ！ 第一雄二はともかく、僕と鉄人がそんな関係にあるなんて思つてる人がいるわけ」

「「セーフ」」

「なんでさああああつ!?!」

パンパン（手拍子） ↓秀吉の番

「え、えつとえつと……ワ、ワシじゃ！」

「……………」

「あ、明久!? そこです黙り込んで頬を染められるとワシも困るのじゃが!」

パンパン（手拍子） ↓僕の番

「し、【島田美波】！」

「「「明久、罰ゲーム決定!」」」

「どうして!」

久保君や雄二、果ては鉄人でさえオーケーなのに、どうしてこの前キスをした美波がアウトになるんだ!? この問題、わけがわからなすぎる!

「さあ明久。くじを引くのじゃ」

「うう……。なんだか納得いかない……」

「安心しろ。お前以外の全員はきちんと納得している」

仕方がないので雄二が突き付けてくる袋の中に手をつ突っ込んで、その中から一枚だけ紙を掴んだ。

えつと、なにになに……



『オトリー』

……へ？

「お、俺の考えた罰ゲームが当たったな。残念残念」

「うん。それはいいんだけどさ、宴ってなに？」

大悟に罰ゲームの内容の意味を尋ねると、何故か彼はニヤニヤと不敵な笑みを浮かべ始めた。

「よし、んじや来るまで少し待つとくか」

「待つ？ 待つってなにを？」

「まあ何も聞かずに大人しくしとけや。もうすぐ配達人が到着すると思うからよ」  
「？」

大悟の言っている意味がわからない。

待つとくとか配達人とか、一体どんな罰ゲームをさせるつもりなんだろうか。そう思っていると、

コンコン

突然僕らの部屋の扉がノックされた。

「誰だ？ 女子のヤツらか？」

「いや違うな。どうやら噂をすれば来たようだ。開いてるから入っていいぜー」

ガチャ

「ういーす。邪魔するぜー」

「え？ 凜花さん？」

扉を開けて入ってきたのは、大悟のお母さんの凜花さんだった。

「よっ明久。しっかしここが霧島の家か。大悟から金持ちだとは聞いてたがメチャクチャ広えなオイ。しかも使用人みてえなヤツもいたしよー」

「いやいや、それよりも何故凜花さんがここにいるのじゃ？」

秀吉がそう訊くと、凜花さんは加えていたタバコを

「大悟から電話で頼まれてな。飲み行くついでに必要な荷物を持ってきたんだ」

「荷物？」

「ああ。アタシ厳選の最強の布陣だ、喜べ」

そう言ううと凜花さんは背中に背負っていた大きなリュックサックと肩にかけていたクーラーボックスを床に置いた。

置いた時に結構な重低音がしたから、中には相当な量の物が詰め込まれているよう

だ。

「もしかして、さっき言ってた罰ゲームの準備ってこれのこと?」

「ご名答。その通りだ」

「おいおい。罰ゲームだなんて人聞き悪いぜ。これは由緒正しき伝統的な儀式なんだぞ?」

「その儀式で毎回全員揃ってゲロ吐いて酔いつぶれてるけどな」

「いいんだよ。それが醍醐味なんだから」

……え? 酔いつぶれる?

「ちよつと待って大悟。凜花さん。酔いつぶれるって一体どういう——」

「ういしょつと」

僕の懸念をよそに、凜花さんは嬉々としてクーラーボックスとリュックを開けて中の物を並べ出す。

バーボン（アルコール度数40%）

ブランデー（アルコール度数45%）

テキーラ（アルコール度数40%）

泡盛（アルコール度数60%）

アナーキー（アルコール度数82度）

エバークリア（アルコール度数95%）

スピリタス（アルコール度数96%）

並べられたのは、程よく冷やされたお酒（全て度数40%以上）の数々と大きな壺瓶。そして人数分のジョッキグラス（明らかに日本のサイズじゃない）。

「……………」

「いいねえ。どれもこれもキンキンに冷えてやがる。俺が頼んでおいてなんだが、よくこんなに用意出来たな」

「ちようどまとめ買いたばっかだからな。こんくらいなら全然構わねえよ」

「……………」

……………。

「んじや用事も済んだことだし、アタシは帰るわ。楽しい夜を過ごせよ」

「おう、ありがとな母さん」

ガチャ バタン

そのまま凜花さんは部屋を去っていく。

「さ、これで準備は万端だ。待たせたな明久」

「……………」

そう僕に視線を向ける大悟。

……………フウ。なるほど。そういうことか。度数の高いたくさんのお酒。大悟が僕にやらせようとしている事が何となくだけど理解できた。

なら、僕が取るべき行動は一つだけだ。

テクテクテク（部屋の扉に向かう僕）

キィイ（扉を開ける僕）

ガシツ（開けた方の手首を大悟に掴まれる）

ギチギチ（その腕を勢いよく大悟に捻り上げられる）

ギユウウウウ（そのまま裸絞めをくらう）

「おいテメエ。なにナチュラルに逃げようとしてるんだア？ 罰ゲームって約束をつい

さつきしたばつかだよなア…………？」

「やめろ！ 放せ！ 僕には分かるぞ！ 貴様がやろうとしていることが罰ゲームの範疇を明らかに超えてる所業だつてことに！ ならそんなものにホイホイと乗っかってなるものかあつ！」

「黙れ負け犬。よくも一週間寝ずにかけて作った力作をブチ壊してくれたなあ……ええ？ テメエにはもう拒否権はねえんだ。だから大人しく言うことを聞きやがれ。それとも今ここで窒息死して三途の川を泳ぎてえか？」

「ぐう……！ このキモオタがあ……！」

必死に抵抗するも、大悟の豪腕にガツチリと首を固められてしまい、振りほどくどころか動かすことさえ出来ない。というかアレは大悟が100%悪いんじゃないか！ おのれ……！ 自分のした事を棚にあげてしかもそれを他人になすりつけるとか、なんて極悪非道なヤツなんだ！ 逆恨みも甚だしいっ！

クソっ！ 格なる上は……！

「……あつ！ あんなところに下着姿の女子小学生がつっ！」

「なにいつ!? どことどこどこどこ!!?」

バカが気を反らした隙に緩んだ腕の拘束から脱出する。

「なっ!? 明久テメエ！」

「バカめ大悟！ こんな幼稚かつ明らかな嘘に騙されるなんて貴様もまだまだ未熟だなっ！ てことでさらば」

ガシッ

「えっ!? なになに!?」

「……………ん？ どこへいくというのじゃ。明久？」

「……………逃げるのは、卑怯」

見ると、何故か秀吉とムツツリーニにガツチリと両腕をホールドされていた。

「え、ひ、秀吉？ ムツツリーニ？」

「ダメじゃろ？ ちゃんと罰ゲームは受けなくてはのおく……………ヒック」

「……………ルールは守るべし……………ヒック（コクリ）」

「ど、どうしたの二人とも。顔がやけに赤くて喋り方も変だよ？」

「なにがじゃ？ ワシはこの通りいつもどおりピンピンしておるじゃろうに……………ヒック」

「いやいや秀吉！ 明らかに様子がおかしいって！ 一体何があ——ん？」

コロコロ（空になった酒瓶）

「……………まさか」

「なんだか頭がフワフワするのう……………。それに気分が高ぶって止まらんなあアハハハハハっ!!（ゴクゴク）」

「……………おおらかな気分（ゴクゴク）」

「秀吉いいいいいいいつ!! ムツツリーニイイイ!!」

「逃がさねえと……言つたよなあ……?」

やりやがつたなこのバカ!! 秀吉達の飲み物に酒を混ぜて酔わせたのか! しかもこの酔い様、相当度数の強い酒を使つたに違いない!

「貴様! いくら僕を逃がすまいとはいえ、秀吉とムツツリーにこんな真似をして、酷いとは思わないのか!」

「上手く手籠められて良かったと思つている」

「なんて綺麗なクズ発言!!」

どうしてこんな外道畜生筋肉ダルマと僕らのアイドル的存在の秀吉が親友なんて間柄なんだ! 全く理解が出来ない!

「おーおー盛り上がつてんな。んじゃ、俺ちよつとトイレ行くついでにその辺ブラブラしてくるから」

そう言つて部屋を出ていこうとする雄二。

アイツ! もしかしてとぼつちりを食らうのを恐れて一人で逃げようとしているな!  
! だがそうはさせるものか!

「まあ、待ちなよ雄二」

雄二の肩を掴んで逃走を防ぐ。



「ハハハ、放せよ明久。罰ゲームを受けたのはお前だけだろう？ なら俺は関係がないじゃないか」

「何を言っているのさ雄二。僕らは運命共同体の仲じゃないか。それにあのデータを消させた件には君にだって責任があるよ」

「いいから放せよ。俺はお前の不始末に付き合うつもりはない」

「そんな寂しい事をを言わないでよ。せつかくのお泊まり会なんだから一人だけ除け者になんてなろうとしないでさ、皆で一緒に楽しもうじゃないか」

「……………いいから放せつつつてんだコラ」

「……………だから逃げんなっていつてんだコラ」

コイツ……………是が非でもここから脱出する腹積もりか。

「だが生憎そうは問屋が卸さない！ どうせ僕が助からないのなら貴様もろとも道連れにしてやる！」

僕はそう思い、雄二に向かって叫んだ。

「そっういえば雄二は、葉月ちゃんと付き合いはじめて今日で二ヶ月目だっけか——っ！！？」

「はっ!? テメエ何言つてふぐうううっ?!!」

「……………葉月ちゃんと……………なんだってえ……………?」

さつきと同じように大悟は今度は雄二の首を絞め始めた。瞬く間に顔色が変わる雄二。

「ま、待て大悟……………。今のはコイツのでつち上げた作りばなあああ……………」

「大悟。僕から提案なんだけど雄二も罰ゲームに加えてくれないかな? その後で葉月ちゃんを誑かした雄二を殺すなりなんなりしていいから」

「なるほど、確かにそうだな。いいだろう。なら雄二も強制参加だ」

雄二、罰ゲーム執行決定。

「さあ、これで雄二も状況は一緒だね。共に宴に興じようじゃないかっ」

「テムエ……………後で絶対殺してやるぞクソ野郎……………」

雄二が親の仇を見るような表情で僕を睨み付ける。

ああ美しきかな僕らの友情。幸も不幸もお互いで分かち合つてこそ、本当の友達といえるだろう。

「さて、始める前にまず俺が中身についての説明をざっくりとだがしてやろう。まずお前ら……………『オトリー』つつうものを知ってるか?」

「オトリー?」

聞いたことがない。

「オトーリとは沖繩の宮古島に伝わる酒宴の席で行われる風習でな。全員で輪になって口上を言い、同じ酒を飲むことで親睦を深めたり、人前で臆せず発言する技術を培うことを目的として行われるんだ」

「へー」

「だから今回はそのオトーリに習いつつ、岡崎家のやり方でこの同じ瓶壺の酒を飲もうと思う」

「せっかくのお泊まり会じゃからのう」

なるほど。同じ釜の飯を食べるみたいな感じなのか。

「だが、このオトーリというのは簡単そうにみえて案外難しい。何故なら使う酒は皆が満足できるようなものじゃないといけないからだ。そしてご存じの通り、全員の好みが一致する酒というものも中々無い。人間にはそれぞれ好き嫌いが存在するからな」

いや、ご存じも何も僕らまずお酒を飲める年齢じゃないんだけど。

「だがここで皆の感想が異なるのは寂しいだろ？」

「確かにそうじゃのう」

「……………思い出だから」

「そこで俺は思ったんだ。そんな状況で少しでも皆を満足させる為には——」

「——全員の意見が公平になるであろう、ひとまずキツイ酒にしたら大丈夫だ、と！」  
「公平の取り方がおかしいだろ!!」

大悟の妄言に思わず雄二とツツコミがハモる。

あたかも僕らが度数の高いお酒しか飲まないみたいなの言い方はやめろ！ いやそもそもお酒なんて飲まないし、飲めないから！

「それで、今からこの瓶壺を回してそれぞれ酒を注いでもらうんだが、その時なんでもいいから一言述べてくれ。口上というヤツだ」

「一言?」

「オトーリはまず一言述べてからやるらしいぞい。沖縄でいうなら『海の美しさと島人の優しさに感謝を!』とかの」

「へえ、詳しいね秀吉」

「中学の頃に大悟の家でオトーリをやった時に、凜花さんから教えて貰ったのじゃ……ヒック」

そんな前から今みたいに飲まされてたのか……。凜花さんの容赦が無さすぎる。

「さて、まずはこの俺が最初に真面目な話をさせてもらおう」

そう言うと、大悟はコホン、と咳払いをしてから話を始めた。

「この何十億という人間が共存するこの星のなかで、産まれも育ちも異なる俺達がこう

して出会えた事は正に奇跡に等しいことだ。そして俺は、そんなお前らとこうして同じ時に同じ場所に集い、同じ学舎に通い、同じ教室で勉学に励み、同じ壺瓶の酒を飲めることをとても嬉しく思う」

「大悟……」

「それに、こんなはみ出しものの俺と友達でいてくれてありがとうよ。明久。雄二。同士。そして俺の最高の親友の秀吉。この場にいる五人全てが同好の士であり、仲間だ」

「……」

「けど、時間は止まってはくれない。いずれ俺達は卒業し、それぞれの目標や夢に向かって分かれていかなくちやならない……だがっ！俺達が共に過ごした時間は失くなることなく、思い出として心の中にずっと残り続ける！」

「……」

「だから野郎共！今日という日をどうかこれからの人生における青春の思い出として！！永遠に忘れないでほしい！！俺達の友情……そして輝ける青春に、乾杯っ!!!」

ドバドバドバ ↑ スピリタス投入

「アホかあああああああああーっ!!!」

思わず叫んだ。

「何が青春の思い出だコラ!!」

「思い出以前に記憶すら残す気ないだろ大悟!!」

何の躊躇いもなく度数96%の酒を笑いながらブチ込む大悟に二人でそう文句を呈す。

「う、うう……。ワシも、ワシもお主らと過ごした日々は絶対忘れぬからのーっ!!」  
「……………俺達の友情は…………… 未来永劫っ!」

ドバドバドバ ↑ スピリタス投入

ドバドバドバ ↑ スピリタス投入

「待て秀吉! ムツツリーニ! なら何故それを注ぐ!? 言葉と言動が全く噛み合っていないぞ!」

「無いよね!? 絶対覚えておく気なんてないよね!」

どうやらアルコールのせい秀吉もムツツリーニも頭がおかしくなっている様だ。

まずい。このままだとあのを飲まされる羽目になってしまう! 格なる上は……………!

(なに食わぬ顔でお茶か水でも入れて!!)

(度数を下げて身体的負担を減らすっ!!)

(やるぞ明久)

（オーケー、雄二）

この場から逃げられない今、僕らが助かる道はそれしかない！

僕は雄二と互いに目配せをする。

「よし、次は明久。お前の番だ」

「分かった。今行くよ」

大悟に呼ばれたので、僕はこつそりとお茶のペットボトルを忍ばせ、酒の入っている瓶壺に近づき顔を覗かせる。

よし。この中に早速――

シユウウウウウ!! ↑ 揮発したアルコール

瞬間、僕の両目に焼けるような痛みが走った。

「目が!!? 目があああああああーっ!!」

「へぶっ!!」

あまりの痛みに目を抑えてよろける。その際に間違えて大悟の顔面を思いつきり頭突きしてしまった。

ダラダラと鼻血を出す大悟を見て、僕は急いで謝る。

「あつ！ ご、ゴメン大悟！ わざとじゃないんだ！」

「お、おほ……。あ、ああ。いやいや気にすんな」

「ハハハ。何やつとるんじゃ、大悟」

秀吉が笑いながら大悟にティッシュを渡す。

「え、お、怒らないの？」

「心配するでない。このくらいでキレルほど、大悟は短気じゃないからの。もう大悟？」

「あたぼうよ。こんなにかすり傷の内にも入らん」

そっか、それなら良かった。じゃあ気を取り直して……

「じゃあ僕のも入れさせてもらうね」

持っていたお茶のペットボトルの蓋を開けて中身を——

「おうコラ明久……！ テメエふぎけた真似してんじゃねえぞ……！」

——入れようとしたら大悟に手首を掴まれて凄いい剣幕で怒られた。

「頭突きは大丈夫なのに!？」

ちよつと待ってキレルポイントがおかしくない!? どうして頭突きはオーケーなの

にコレは駄目なの!? 優先順位を絶対に間違えてるよ！



——そんなこんなで全員に酒が行き渡り。

「よし野郎共。酒は持つているな？」

「うむ」

「……………（コクリ）」

「……………」

明らかに色、臭い、度数が人間の接種できるレベルじゃなくなつた酒（？）がたつぷりと注がれたビールジョッキを片手に、大悟が皆にそう告げる。

「どうしてこんなに限界まで注ぐ必要があるのさ……………」

「表面張力ギリギリじゃねえか……………」

「こんなの飲んだら確実に五臓六腑に異常をきたす。いや、最悪命に関わるぞ……………」

「こうなつたら、一か八かだ」

「？ 何かまだ策があるの、雄二？」

「ああ。多少強引ではあるが——酔っ払つたフリをして全部溢しちまうんだ」

なるほど。それなら何の怪しまれもせず危機を回避出来るってことか。さすがは

雄二。頭の回転が早い。

「そし、それでいこう」

「しくじるなよ明久」

「うん。雄二もね」

よし、やるぞで。

「おととつと。手が滑つ」「おいおい（パシッ）」「

「やべー、酔っちゃまったぜ」「溢れるぞい（パシッ）」「

「……………」

（ただの一滴も……、溢れていない……っ!!）

「まだ飲んでねえだろうに」

「雰囲気酔ってしまったのかのう?」

「……………気が早い」

雄二の立てた作戦、わずか2秒で終了。

クソっ！ まさかこんなにあっさり看破されるなんて……。僕の方はもう何も思い

浮かばないし、万事休すか……？

「……いやっ！ 待て明久！ これを見ろ！」

「え？」

雄二が驚いた様子で僕に見せてきたもの。それは携帯の画面だった。そこに映っていたのは——『猿でも分かる正しいオトーリのやり方』という記事だった。

「正しいオトーリのやり方って……これがどうしたっていうのさ」

「分からないのか。さつき大悟は岡崎家のやり方で飲むと言っていた。つまり公式のやり方をアイツに見せてやれば、このふざけた飲み方から逃れられる可能性があるってことだ」

「可能性って……大丈夫なの？」

「分からん。だが今は方法を選び好みしてる場合じゃねえだろ。少しでも助かる道があるならそれに懸けるだけだ。俺に任せろ」

どうやら藁にもすがる思いのようだ。

成功すれば確定で回避出来る、という事ではないから不安はあるが、雄二の言う通りこの状況から解放される為には四の五の言っではいられないのも事実。ここは彼に任せよう。

「おい大悟！ これを見ろ！」

「ん？」

・猿でも分かる簡単なオトリーのやり方

- ① 親が口上を述べてイツキ飲み
- ② その後、親以外の全員がイツキ飲み
- ③ それを見届け、親が再びイツキ飲み
- ④ 親が後口上を述べ、次の人に親を交代
- ⑤ ①から④を人数分繰り返す

「ほー。これが正しいオトリーのやり方か」

「ちゃんと正式な手順があつたんじゃのう」

「……………なるほど」

三人がまじまじと画面を見る。これは……もしかしていけるか!?

「ということは——最低でも一人ジョッキ7杯は飲む必要があるんだな（ドポドポドポド

ポ）」

「そうなるのであれば酒が足らぬのお（ドポドポドポド）」

「……………持ってきた酒全部入れるか（ドポドポドポ）」

パンパンパンパンパン!!（僕が雄二を往復ビンタする音）

「ま、待て明久……っ！ まさか……こうなる、とは……！ 思わなか、つたんだ……！」

雄二の弁明を無視し、僕はビンタを繰り返す。

ふざけるなバカ野郎！ 何が俺に任せるだ！ 助かるどころか余計に状況が悪化したじゃないかこの役立たず！

「クソ……。こうなったら………やってやるさ！」

「あ、明久……？」

逃げるのは不可能。策をいくら労しても状況は良くならない。ならもう僕らに残された道は……正々堂々戦うことだけじゃないか！

大丈夫。強い酒は学園祭の打ち上げや先日の大悟の家での勉強会で飲み慣れている。ということは僕の身体は常人よりアルコールに対する耐性が少なからずついているはずなんだ。乗り気れる可能性は……十二分にある！

いいだろう大悟。お望み通り貴様の戯れに付き合っつてやろうじゃないか！ だが僕は負けないぞ！ 酒を飲んでも飲まれないという強い精神力で耐えて見せるからなあっ！

——一方その頃、女子部屋では。

『あれ？ 私の髪留め、どこにいったんでしょう？ ここに置いておいたはずなのに』

『髪留めって、いつも瑞希がつけてるウサギの形をしたやつ？』

『はい』

『失くしちゃったの？ 姫路さん』

『そうかもしれない』

『……捜すの、手伝う？』

『あ、いえ。また明日の朝にお布団を片付ける時にでも捜すから大丈夫です』

『……わかった』

『そういえば、瑞希っていつもあの髪留めをしてるわよね』

『……思い出の品、だとか？』

『んつつつ。ボクの予想だと、好きな人からの贈り物って感じなんだケド？』

『へえ、だとしたらとってもロマンチックね』

『いえ。あれ自体は自分で買ってきた普通の髪留めです』

『あら……。予想がはずれちゃった』

『確かに、思い入れはありますけどね』

『え？ なになに？ 面白そう』

『残念ながら、それはヒミツ、です。それより、私は工藤さんのお話が気になります』

『え？ ボク？』

『そうね。ウチも気になるわ』

『ふふつ。二人とも、そんなにボクの日な話が聞きたいのかな？』

『違うわ。そっちじゃなくて』

『へ?』

『土屋君との関係、の方です』

『ふ、ふええっ!?!』

『……それは私も気になる』

『そういえば二人とも随分仲が良いものね。もしかしてそういう間柄?』

『な、何を言ってるのさ四人ともつ。ボクとムツツリー二君がどうこうだなんて、そんなことあるわけないじゃないっ』

『そうやって否定するところが怪しいですね』

『……いつもの愛子なら笑って受け流す』

『案外まんざらでも無いんじゃない? 愛子?』

『ち、違うつてば! ボクもムツツリー二君もそんな気は全然ないよっ』

『それはどうかしらね? 意外と男子部屋でも、土屋が似たようなことを言ってるかも知れないわよっ。』

『……お泊まり会の定番の会話』

『そうですね。きつと向こうの部屋でもこんな話をしているんでしょうね』

『ほらほら、向こうできつと土屋も尋問されているだろうし、素直に言っちゃいなさい』

『……言えば楽になる』



『話しちゃいましょうよ。ね?』

『だから、あんな頭でつかち、ボクは全く興味がなくて言ってるのに！ それにムツリーニ君だつてきつとボクと同じ考えだよ!』

『……なら、確かめてみる?』

『へ? 確かめてみるってどういうコト?』

『……こつそり男子部屋に行つて、何を話しているのか聞いてみる』

『へえ、それ面白いじゃない』

『もしそれで美波ちゃんの前想が当たつてたら、どうしましょうか?』

『したらもう相思相愛つてことだから、そのままくつついちゃえばいいんじゃないかしら』

『く、くつついちゃえばって優子! だからボクとムツツリーニ君は……』

『じゃ、そうと決まれば行つてみましょう!』

『『おー!』』

『ちよつとー! お願いだからボクの話聞いてつてば〜!』

——女子達。男子部屋に移動。

『じゃ、早速覗いてみましょうか』



「Unno, Dos, Tres, Fuaigoyoi!!!」

「……………」

「ウエー——イ!!! ガハハハハハ!!!」 ↑全裸

「いいぞお！ 明久あ！ 雄二い！ さすがは俺の見込んだ男達だあ！」 ↑全裸

「男らしい飲みっぷりにはまっこと惚れ惚れするのお！」 ↑ギリギリ下着姿

「……………負けて、いられないっ！」 ↑全裸

「……………な、な……………」

「……………ん？ どうした。何か用？」

「……………何でこうなってるのよおおおおお——！！！！」

——その後、バカ五人は飲み過ぎて吐いた。

## 第七十一問 終わりと始まり

酒と野球拳に溺れ、二日酔いに苦しんだ週末が過ぎ、いよいよ今日は期末テスト当日。俺はいつもの日課通り秀吉と待ち合わせして一緒に登校。特にテストの事について語ることはなく、雑談なんかをしつつ往路についていた。

「ういーす」

「おはようじゃ」

Fクラスの教室にやってくると、そこには雄二や島田、姫路といった当たり前のメンツが揃っていたのだが、その中に一つだけ普段と違う光景があった。

「紀元前334年、アレクサンドロス大王の東方遠征。紀元前330年、アケメネス朝ペルシアの滅亡。紀元前250年前後、パルティア王国の——」

明久が卓袱台に向かい、世界史の教科書を開いて勉強をしていたのだ。

「よお明久。オトーリは楽しか——」

「大悟。ちよっと話しかけないでもらえるかな。今はテストの為の復習に集中したいん

だ」

「お？ お、おう……分かった」

そうキツめにあしらわれてしまった。

見ると目の下のクマが酷く、やけに鬼気迫った表情をしてる。もしや夜通しで勉強してたんだろうか。確かに今はコイツには余裕なんて無い状況だが、そんなに急に真面目に取り組むなんてな。

何かあつたんかな？

「なあ島田」

「なに？ へんた——岡崎」

「ちよ待てや」

今変態って言いかけたなコラ。

「そりやそうでしょ。お酒は飲むわ服は脱ぐわバカ騒ぎはするわで……正直見ていられなかったわよ」

「待て島田。お前は盛大に誤解をしている。あれはキチンとした沖縄の伝統的な風習に基づいてやったものであり、決してバカ騒ぎなどではない」

「じゃあなんで服を脱いでたのよ」

「それは途中からジャンケンして負けたヤツがイツキ飲みしようという流れになって

な」

「……イツキ飲みはともかく、ただのジャンケンなら全裸になる必要ないじゃない」

「……??? 野球拳なんだから全裸になるのは当たり前だろう?」

「アンタの中のジャンケンは野球拳の一択しかないわけ!?」

「……??? 逆に聞くが、他になにがあるんだ?」

「なんでそんな純粹な目で聞き返せるのよ……とにかくこれからは野球拳以外のジャンケンも覚えなさい。いちいち全裸姿のアンタ達を見るコッチの身にもなつてよね」

「なんだと!? そしたらお前どのタイミングで俺達は服を脱げばいいってんだ!」

「だから脱ごうとするんじゃないわよ!! タイミングがどうかじゃなく服はずつと着てなさい!! というかお酒を飲むという考えをまずやめて! 未成年の飲酒も人前で全裸になるのも犯罪だから!」

島田にたくさん突つ込まれる。やれやれ、たかが酒の席での男のスッポンポンぐらいでそう騒ぐこともあるまいに。

まあそんなことはさておき、本題を聞こう。

「どうしたんだ明久の野郎は。まるで人が変わったみてえじゃねえか」

「それがウチにもさつぱり。朝からずつとあの調子なのよ。教室にもいの一番に来てたみたいだし」

「ふーん。そうなのか」

「あの後帰ってから何かあったのかしら……?」

「さあな」

心配そうに明久を見る島田。

夜通し勉強して一番早く登校か……てことは一睡もしないままテストに挑むつもりなのかアイツ。

一人暮らしが掛かった大事な勝負とはいえ、さすがにそれはストイックに根詰め過ぎだ。適度に睡眠は取らねえと集中力も下がるし注意も散漫になる。

アイツが今勉強してる世界史なんて暗記問題ばっかなんだから、集中力と注意力が他より重要になってくるというのに、あれじゃ逆効果にしかならねえだろうよ。

そう心の中で思っていると、教室の扉が開いて教師が入ってきた。

「はい、勉強道具をしまってください。一時間目のテストを始めますよ」

俺はすぐさま席に着き、筆記用具を取り出して準備をする。

アイツの事も気になるが、とりあえず今は自分の方に集中しねえとな。

——そんなこんなで時間が過ぎ。

——キーンコーン

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

テスト終了を告げるチャイムが鳴り響く。

周りが安堵の息を吐く中、俺も同じくふう、と大きく一息ついて壁に深くもたれ掛かる。

「おお……あんな短時間にこれだけ埋めれるなんて……相変わらず凄いな兄貴は」

俺の解答用紙を取りに来た須川が驚嘆の声をあげる。

「あたぼうよ。社会科目、特に世界史は俺の大得意科目だからな。これくらい容易い。次の試召戦争も任せときな。派手に暴れてやつからよ」

「おう。頼りにしてるぜ兄貴」

更に今回の問題作成者が難易度が優しいで評判の田中だったのも幸いし、自分でも驚くほどスピーディーに問題が解けた。

少なくとも見積もっても700点代は固いだろう。今までで一番の出来だったかもしれない。



ま、その代わり他が目も当てられないくらいゴミカスだったが。

やがて全員の解答用紙は教壇にいる鉄人の手に渡り、専用の封筒に入れられる。そして持つて鉄人は教室を出ていった。

ふと明久の方に目をやる。

「……………」

何か言いたげな表情で去り行く鉄人の背中を見ていた。

「おう明久。勝負の世界史はどうだった？ きちんと解けたのか？」

そんな明久のもとに雄二が近寄る。よし、俺もおちよくりに行こう。

「ああ、うん。今までで一番良くできたよ」

「そうか。それはつまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考える姿を笑いに來たつてのに」

「いいや、まだ分からんぜ。明久のことだから、解答欄が一個ずつずれるみたいな面白珍プレーがあるかもしれねえ」

「はは、さすがに僕でもそんなやらかしはしないよ」

「なんだ、つまらん」

俺達のイジリにそう微笑みながら言葉を返してくる明久。

まあ、仮にそうだとしたらこんな面白い事じゃ済まねえか。

「まあ、二日ほどイレギュラーな事はあつたが、それでもあれだけ勉強したんだ。点数が下がるわけがないよな」

「むしろ下がってたら奇跡だよな奇跡。ははははは」

「まったくだよ。やだなあ二人とも、あははははっ」

三人で朗らかに笑い合う。

ま、結果的には全員が幸せになつたんだ。明久らしい最後の最後で面白い展開にならなかつたのは少し残念だが、こういう何の変哲もないハッピーエンドな結末もたまにはアリかな……

——side 明久  
ああ、あのミス、やつちやつたなあ………。

世界史 一学期期末試験

クラス——紀元前

学生番号——334年

氏名——アレクサンドロス大王

さようなら。僕の一人暮らし。

——文月学園、理事長室

「……学園長。コレはなんですか？」

「そう非難がましい目をするんじゃないよ。ちよつとシステムの調整に失敗したただけじゃないか」

「……これのどこが、ちよつとですか」

「ちよつと見てくれが悪いだけさね」

「ほほう。そうですか」

「ああそうさ」

「……………」

「……………夏、だねえ……………」

「学園長。遠い目をしてても無駄です」

「はいはい、わかっているよ。それじゃ、復旧作業を進めるから手の空いている教師を全員連れてきな」

「それは構いませんが、コレが生徒に発覚したらどうするつもりですか？」

「さつきも言った通り、問題は見ただけだからね。ガキどもが騒ごうが、特に気にする必要もないさ。それに……………出来上がったコイツを試す丁度いい機会かもしれないさね」

「ということとは？」

「なるようになる、っただけさ」

「やれやれ……………これだから、この学校は……………」

???

「……!? 天、そいつあ本当か!?!」

「うん! さつき運営からのメールを何度も見返したけど間違いないよ!」

「マジか……。とうとう俺達もその領域に達する事が出来たのか……。憧れの壁を手にいれるなんてよお!! こんなに嬉しいことあねえ!」

「頑張ったもんね……。あたしも大悟兄も……。ぐすつ」

「ああ。だが天よ。喜んでばかりはいられねえ。なぜならこれは一流として認められた証であると同時に、この証に見合うだけのそれ相応の結果と技量が求められるつつうことなんだ。今以上に気を引き締めねえと駄目だぜ」

「うん、そうだね。分かってるよ大悟兄」

「よし、そうと決まれば準備を始めるぞ! 幸いコッチはテストも終わったことだしな

! 気兼ねなく取り組める!」

「オーケー大悟兄！ いよいよ始まるんだね……」  
「ああ。始まるな……」

「——俺（あたし）達の……、同人誌同人誌即売会即売会が!!」



## コミックマーケット編

### ようこそ、実力主義のお祭（コミケ）へ その1

—— side 大悟

「待ちに待った俺ア」

期末試験も終わったある日の昼休み。

俺は教室の一角で同志ムツツリニにそう告げた。

「もうすぐだぜ同志よ。俺達ダイゴブックスとムツツリ商会にとって最も熱かりし最大

最高の祭り——コミックマーケット同人誌即売会がよお！」

「……………（コクリ）。この日を、ずっと待ちに待っていた……………」

「去年はお前は残念なことに大敗を喫したからな。今回は抜かるなよ」

「……………無論だ。今年の俺に油断はない（キリッ）」

そう言つて拳をギュツと握り締める同志。その目からは夏の陽射しにも負けないくらい

のやる気と闘志の熱さを感じた。フツ、いい面構えをすんじゃねえか。

けどその気持ちは十二分に分かる。何故なら同志は去年のコミケでは初参加だった

為かちゃんとした事前準備が出来ておらずコスプレイヤーを見た瞬間鼻血を出して貧

血で即効救急車で運ばれちまったからな。その姿を写真に収めるところか記憶に留めておく事すら出来なかつた完全敗北。『寡黙なる性職者』エロを統べし者としてその悔しさと屈辱は正に筆舌に尽くしがたい程なのだ。だから今年には絶対に同じ轍は踏んでなるものかと思っているのだろう。

「……………去年の忘れ物は、必ずこの手でつかんでみせる」

「おう。その意気だぜ同志。俺もお前の大願が成就するよう精一杯フォローするつもりだ」

「……………ありがとう。同志」

「礼なんていらねえ。俺達……………仲間だろ？」

そう言つて俺と同志は拳と拳を突き合わせる。やはり持つべき者は心の友。

俺達の絆はそんじよそこらのヤツらでは足元にも及ばないくらい強固なものだ。例えるなら、サイモンとガーファンクルのデュエット！ ウッチャンに対するナンチャン！ 高森朝雄の原作に対するちばてつやのあしたのジョーつつう感じつすよオウウウ。

「んじゃ打ち合わせ始めっか」

「……………（コク）」

—— アイツらの言う“新時代”ってのはクソだ。

—— 海賊が夢を見る時代が終わるって……？

—— 人の夢は、終わらねエ!!

俺がこの世で一番大好きな言葉だ。

現在も連載が続いている超大人気漫画『ONE PIECE』。

それに登場するマーシャル・D・ティーチこと“黒ひげ”というキャラクターが、主人公のルフィ率いる麦わらの一味に言い放った一言なのだが、これがまあ名言中の名言なわけよ。

—— 人生は、夢があつてこそそのもの。夢があるから日々の生活を頑張れるし、人生を楽しく謳歌することが出来る。

そして夢に終わりはない。人の欲望に際限がないのと同じように。一個の夢を叶え

たらまた新しい夢が生まれ、それを叶えたらまた別の夢が……。そうして段々と道は続いていき、いつしかその夢の連なりは自分を人間的にデカくしてくれ、新たなステージへと導き続けてくれる。

終わりが見えないくらいデカイ夢を常に持ち続けて生きる事。それが『人の夢は終わらねエ』という事——最高にバカでカッコいい考え方じゃねえか。

けど最近の世の中は黒ひげのようなヤツがいなさすぎてマジでつまらない。夢を追えないどころか、夢を過小評価する連中が増えたからだ。

だってそうだろう。ちよつと夢物語を語っただけで、いい歳をしてだとか、子供みたいな事をとか、フザけた事を言っただけで現実を見ろだとか、そんな具体性も根拠も無い言葉で貶めてソイツの可能性を潰そうとする。

そのクセその夢が現実のものになった途端、今までとは打って変わって凄いだの頑張ったのだの、出来ると思っていたのだと掌を返して媚びへつらう。なんとも胸糞が悪く、皮肉で浅ましい。

黒ひげの台詞には、そんな時代に警鐘を鳴らすという作者の目的が込められていたのかもしれない。

そしてそんな時代だからこそ、俺は黒ひげのように夢を信じ、追い続けたい。

人の夢は終わらねエ……つまり、人は自分自身で夢を自分で終わらせちゃいけねエん

だと思う。周りの言葉にも時代の変化にも流されない。言いたいヤツには好き勝手言わせておけばいい。構ってるだけ時間の無駄だ。

俺は死ぬまでその気持ちを書き通す。例えばボケまくりの老いぼれジジイになろうとも、怪我や病気で身体がボロボロに朽ち果てる寸前になろうとも。

理解してくれる人間が誰もいなかろうとも。

決して自分を、この夢を追う気持ちだけは忘れたくないのだ。

だからこそ断言する。夢は自分を裏切らない。背を向けず夢に向かって挑み続けた者だけが勝利を手にするんだと。そう——俺が。

「同志。写真集の方の進捗状況はどうだ？」

「……………既に素材は揃ってる。あとは編集して脱稿するだけ。そっちは？」

「おう。コッチは完璧……………ついていてえところだが、全然進んでねえんだ。ストーリーとかページ数とかその他諸々で色々迷っててな……………すまん」

「……………気にするな。時間はかけるに越したことは無い。その苦労があつてこそ、良作が産まれるのだから（フツ）」

「すまん。期限までには間に合わせる。ちなみに部数はこれくらいを考えている（ピ

ラツ)」

「……………かなりの量だが、いけるか？」

「前回と違つて壁は使えるスペースが段違いで広いんだ。在庫もかなりの数を置くことが出来るし、人の行列が邪魔にならない分集客も見込める。それが壁サークルの大きなメリットなんだよ」

「……………なるほど。ちなみに、今年も同人誌と写真集のセットでいく？」

「いや、今回は同人誌と写真集をそれぞれ個別に。そしてその二つとキーホルダー、マグカップ、ブランケットにトートバッグをつけたスペシャルセットを販売しようと思う」

「……………大盤振る舞い（グツ）。オーケー」

「よし、あとは価格だな……。早く決めてツイッターで宣伝しねえと」

「……………毎回ここが悩みどころ」

「仕方ねえさ。値段設定でミスるワケにはいかねえからな。高すぎたら買ってもらえねえし、安すぎても利益が出ない。客を金銭的にもクオリティ的にも最大限満足させる商品を提供するのが俺達の役目だ」

「……………（コクツ）。その通り……………」

壁を手に入れ、大手サークルの仲間入りを果たしたように。  
その後話し合いは昼休みいっぱいまで続いた。

——それから時は流れ……。

——side 明久

「ねえ雄二」

「なんだ？」

鉄人の補習が終わった放課後。僕は教室に残っている雄二に話しかけた。

「なんか寂しいと思わない？」

「寂しい？ お前の顔面偏差値がか？」

「一発目の答えから失礼な事を言うね」

「ならアレか。お前の霊長類としてのスペックか」

「君は逐一中傷や罵倒と挟まないと人と会話が出来ない病気か何かかい？」

第一顔面偏差値なんてそっちだつて似たようなものじゃないか。自分を柵にあげて他人を貶すとかなんて不躰なヤツだ!

「冗談だ。んで、寂しいって何がだ?」

一通り僕を馬鹿にし終わつたところで、雄二が尋ねてくる。

「何がつて、最近の放課後だよ」

「教室? 放課後なんだから生徒がいないのは当たり前だろ」

「それはそうなんだけどさ。特になんだよ。見てよ。しばらく僕ら二人だけなんだよ?」

「なに?」

雄二が教室を見回す。

そう、普段なら僕と雄二以外にも秀吉、大悟、ムツツリーニの誰かしらがいて一緒に駄弁るのが日常の光景なのに、最近は僕ら以外誰も教室に残つておらず、閑散としてゐるのだ。

「確かに違和感が無いとは言えないな。だが別段おかしなことでもないだろ」

「でもさ、秀吉はまだしも大悟やムツツリーニが『じゃあね』とか挨拶もせず帰つちやうなんてちよつと変だなつて思うんだよね」

「まあ、確かにな」



秀吉は演劇部の部活があるからそういう事もあるかもしれないけど、ムッツリーニと大悟が僕らに何も言わずに帰ってしまうというのは雄二のいう通り少し違和感がある。いつもなら用事があつても『〇〇があるから帰る』と一言言ってくれるのに。しかも僕らが気づかない内に、だ。

「先週も遊びに誘つたら二人ともに断られちゃったしね。珍しいこともあるもんだよ」  
「そうか……………あ、そういうやさっきな」

「? どうしたの雄二?」

雄二が何かを思い出したのかポン、と手を打つ。

「関係あるかは分からんが、さつき姫路と翔子がアイツらと五人で話しているのを見たぞ」

「え? 姫路さんと霧島さんが?」

「ああ。あまり深くは聞いてなかったが『熱中症には気を付けろ』とか『夏だから露出は高めだな』とか言つてたぞ」

「へえ。露出つてことはまたコスプレでも頼んだりしてるのかな?」

「まあ、大悟とムッツリーニが絡んでるとなりや十中八九そうだろうな」

姫路さんと霧島さんと秀吉と大悟とムッツリーニか。随分と珍しい組み合わせだなあ。でも熱中症つてどういうことだろう。

——と、その中で僕も大悟とムツツリーニついてとある事を思い出した。

「そういえばさ、大悟とムツツリーニって最近変だよな」

「変？ アイツらに変人なのは昔からずっとだろ」

「いやそういう変じゃなくて、なんかこう……様子がおかしい、みたいなの」

「どういう事だ？」

僕は思っている事を雄二に話す。

「今日、須川君と大悟が話してたんだけどね——」

『兄貴。夏バテか？ 随分やつれてる気がするんだが』

「……へえ？ そうか……？ まあでも、確かに最近は生活リズムが狂っちゃまっているが

よ……（フラフラ）」

『何かあったのか？』

「まあ、ちつとやることがあつて中々寝てねえのよな……。ハハハ……（バタツ）」

『えっ!! おい兄貴！ しつかりしろ！ 兄貴いいっ!!』

「——つて事があつたんだよ」

「あの体力バカが夏バテ？ 珍しいこともあるもんだな」

「それだけじゃないんだよ。他にも——」

『土屋聞いてくれよ！ 実は昨日ネットサーフィンしてたらすげえエロサイトを見つけ  
たんだ！』

「……………そうか（カチカチ）」

『それでよ！ そこには色んなエロ動画があつてどれにしようか迷ってるんだ。だから  
土屋の意見を聞かせて「すまない」……………え？』

「……………悪いが後にしてくれ。俺には今そんなものに構っている余裕はない……………」  
『!?!』

「馬鹿な……………ムツツリーニがエロ動画をそんなもの扱いするだと……………!?!」

「ね？ おかしいでしょ？」

「ああ。確かにそれはおかしいな」

僕の証言に対して、雄二があり得ないといった表情を浮かべている。僕もその場にい  
たときはおそらく雄二と同じ顔をしていただろう。

大悟の夏バテも不思議だが、特に後者は明白だ。あの寡黙なる性職者との異名を持つ  
くらいエロへの執着心が強い男がそんな台詞を吐くなんて事はとんでもない事態なの

だ。例えるなら地球に巨大隕石が激突するくらいに匹敵する。

「夏バテ疑惑の大悟。エロに食いつかないムツツリーニ。そして姫路さん達の謎の会話……。一体僕らの周りで何が起こってるんだらう?」

「情報量が多すぎて逆に判断に困るな……」

「そうだね……」

そう二人で考えていると、

ガラツ

「……………確か、教室にある……答（フラフラ）」

「おいおいしつかりしてくれよなあ。頼むぜえ（フラフラ）」

おっ、噂をすればなんとやら。

教室の扉が開かれ入ってきたのは大悟とムツツリーニ——つて!?  
「うわっ!!? なんだお前ら!!?」

「どうしたの二人とも!? 死人みたいな顔になってるんだだけど!?!」

「あ? ……ああなんだ、お前らか。死人とは随分な言い草だな……」

「……………失礼極まりない……」

二人の顔を見て僕も雄二も驚きのあまり声をあげた。

目は虚ろでその下には酷いクマ。頬は痩せこけ顔色も悪い。足取りもおぼつかず特大悟はいつものオラオラとした覇気が全く感じられない。二人とも明らかに健康じゃないのが見てとれる。

「いや二人とも本当にどうしたのさ？ 明らかに体調も悪そうだよ」

「まあな。最近はいベントに向けてのサークル活動で忙しくてよ」

「イベント？」

「コミケだよ。正式名称はコミックマーケットってんだがな」

そう言うとお悟は大きなあくびをした。

コミックマーケット——前にテレビで特集されてるのを見たことがある。確か一年に二回開催される世界最大の同人誌即売会だったっけか。確かに

様々なアニメの同人誌が売られたり、レベルの高いコスプレイヤーがたくさんいたり、芸能人がお忍びで訪れたり、数日間で物凄い経済効果を叩き出したりと……とにかく日本が誇る最大最強唯一無二の伝統的文化に基づいたお祭りだ、なんて中継先のアンサーさんは褒めちぎっていたような気がする。

二次元信者の大悟とエロ写真収集のエキスパートであるムツツリー二にとってはコミケは絶対に外せないイベントということか。

「なるほどな。つまりお前らはそのコミケとやらの準備に追われてそんな調子になつて  
るのか」

「ご名答。俺達もサークルとして出店するからな」

「じゃあ、姫路さん達と話してたつていうのも?」

「アイツらには当日コスプレをして売り子をやってもらう予定でな。その段取りを確  
認していたんだ」

「……………(コクリ)」

「二人の様子が最近おかしいと思つたら、そういう事だつたんだね」

「黙つてて悪かつたな。けど俺も同志も今回のコミケには特に力を入れていてな。他の  
事なんざ気にする暇がねえんだ」

「……………年に二度しかないチャンス。負けるわけには、いかない…………」

二人の今にも倒れそうな身体状態と反比例するように、その目からは情熱と活力が  
漲っている。

混じりつけの無い本気だ。この二人は。

「サークル出店つてことは、大悟とムツツリーニは売る側なんだね」

「おう。ダイゴブックスとムツツリ商会の連携サークル『にじとさんじ』として壁サーク  
ル参加が決まっている。なんとか倍率の壁を乗り越えたぜ。壁だけに」

「……………（コクコク）」

「へえ、凄いいじゃないか」

サークル名が若干気になるところではあるけど。

「ちなみにそのコミケっていつなの？」

「次の盆休みに合わせて開催されっから、あと三週間くらいだ」

「結構迫ってるんだな」

「ああ。だから寝る暇すらない」

「ふーん。でも大悟もムツツリーニも商売事には慣れてるんだしさ、そこまで無理しなくてもいいんじゃないの？」

「あ？」

「……………なに？」

二人が僕をいきなり睨み付けてきた。

「おい明久。分かったような口を叩くんじゃねえ。いいか、コミケは日本…………いや、世界中から集まってくる何万人という客を相手にするんだぜ。年齢、性別、国籍、そして性的嗜好…………全てがバラバラだ。量も客のレベルもお前らの時とは雲泥の差だ。てことはそれ相応の事前準備が必然的に求められるってことなんだよ。侮るな」

「……………あまり舐めた口を聞かれると、困る……………（ギロリ）」

「げいごめん」

軽率な発言をした事を二人に謝る。

寝不足などで身体的にも精神的にも負担が募っている為か、大悟もムツツリーニもピリピリしているようだ。

「まあいい。そんなわけで時間がねえってことだ」

「……………（コクコク）」

「そうか。それはご苦労なこったな」

「そうだね。わざわざ貴重な休みを返上してやるんだからさすがだよ」

「ん？ 休みつていやあ、お前らはその日は暇なのか？」

「まあそうだな」

「さすがにお盆だと鉄人の補習もないしね。僕も特に予定はないよ」

「ほー……そうか……。予定がないのか……」

「……………」

（ニヤリ……………!!）

「？ 何で僕らを見てニヤニヤしているの？」



「いや別に」

すると顎に手を当てて何か考え出した大悟とムツツリーニ。

そして少しの間した後、二人で相槌のようなものを打った後、僕らに向き直ってこう言った。

「だったらお前ら。俺達と一緒にコミケに参加してみないか？」

突然の提案に「えっ」と変な声が出た。

「え、参加って……コスプレとかさせられるの？」

「んなワケあるか。参加つつつてもそんな難しい事じゃない。ただ一メンバーとして売り子とかその他諸々をして欲しいだけだ」

「……………人手はいくらあっても助かる」

「売り子って？」

「店番をしたり客を呼び込んだり、金の受け渡しをする仕事だ。まあ早い話が接客だな」  
大悟は続ける。

「もちろんタダとは言わねえ。やってくれんならバイト代も出そうじゃねえか」

「……………バイト代だと？」

「おう。その日の売り上げと利益の差額によつて多少変動はするが、仕事量に見合った額は出せると思うぜ」

つまりバイト代は完全歩合制つてことか。

自分が予想していた以上の額を貰える可能性もあれば、完全タダ働きになる可能性もある。大悟の『神の右手』に『無限の妄想力』とムツツリーニの写真技術ならある程度は売り上げが期待出来るけど、だとしても確実に儲けが出るとは限らない。だからまだ判断はしかねるな。

「ちなみに前回はどれだけ利益が出たんだ？」

ちようど気になっていたことを雄二が聞く。

「前回？　前は確か午前中のうちに完売してざつと——『ピーー』万くらいだったな」

「はあ!？」

思わず二人とも声が出た。

う、嘘でしょ!?! 『ピーー』万?!? 僕の予想を遥かに上回る額が大悟の口から放たれた。

一般的な学生のアルバイトで貰える給料なんて比較にもならない。『ピーー』万なんて最新のゲームソフトが余裕で何個も買えるレベルの金額だよ……!!

そういえばいつだかテレビの報道で大抵のサークルは殆どが趣味の延長線だから利益に関しては完全に赤字だつて言つてたのに……。流石は二次元と三次元の申し子にして文月学園の裏経済を支配する男達。ここまできると尊敬どころか畏怖の領域だ。

横を見ると雄二も驚きを隠せていない顔を晒していた。

「勿論交通費とか食費なんかの必要経費は俺達が持つ。あとオマケつてわけじゃないが色んなコスプレイヤーがたくさん見れる。噂だとコスプレ四天王？ とやらも来るらしいぜ。夏だから露出も多いし、控え目に言つてもエロい人ばかりだ。どうだ、悪い条件じゃねえだろ？」

「……………それも、夏コミの醍醐味（コクコク）」

「なるほどな……。よし、分かった。それなら俺もお前らの仲間に加えてくれ」

「え？」

珍しい。かなりの厚待遇とはいえ、あの面倒臭がりな雄二が自ら志願するなんて。

「ホントにやるの？ 雄二？」

「普段ならこんな明らかにめんどくさい事はゴメンなんだが……。それだけ利益があるなら実績としては申し分ないし、バイト代も相当期待が持てるからな。それに……。ちようど今纏まった金が必要でな」

「そうなんだ。何か欲しいものでもあるの？」

「ああ。入り用でな……自分の部屋に鍵をつけたいんだ。とびきり頑丈なヤツを」

脳裏に手錠を持った才色兼備な学年首席の女の子が思い浮かぶ。

自分の部屋に鍵をつけたい、というのは僕らの世代は誰もが一度は考えることだろうけど——雄二と同じ理由でそう考える人はあまりいないだろう。

「明久はどうすんだ？」

「うーん……。じゃあ僕も行くよ。姉さんもお盆は確か仕事で帰れないって言ってたから都合もいいし」

姉さんは僕に対して不純異性交遊を固く禁止している。

ただでさえコスプレ姿の姫路さんや霧島さん、秀吉が一緒なのに、夏コミなんていう比較的えちえちな格好をした女性がいっぱいいる所に行こうだなんて知られたら大目玉だ。

最悪五体満足では済まされなくらいの激しいお仕置きをされることだろう。本当にいなくて良かった。

「うし、決まりだな。じゃあ詳しい話と簡単な作業をこれから同志の家でするぞ。善は急げというからな」

「……………時間は一秒たりとも惜しい」

「わかった」

「うん」

そんなわけで話も纏まったので、僕ら四人はムツツリーニの家に向かった。

（……………ん？ 簡単な作業？）

しかしまだ、この時の僕らは知るよしも無かった。

印刷所に脱稿するまでの約一週間、ずっと夜遅くまでひたすら同人誌の原稿のアシスタントや写真集の画像編集作業をさせられるなんて事は。

（計画通り……………!!）

## ようこそ、実力主義のお祭（コミケ）へ その2

—— side 明久

「おはようございます。明久君」

「おはようじゃ。寝坊せずにちゃんと来たようじゃな、明久よ」

現在時刻は午前四時半。

朝方にも関わらず蒸すような暑さ漂う中、僕は待ち合わせ場所である最寄り駅のホームに向かった。すると先に姫路さんと秀吉が到着しており、僕に気づいて手を振つてきた。

「明久、こつちじゃ」

「おはよう姫路さん、秀吉。二人とも体調は大丈夫？」

「はい。今日の為に昨晩はいつもよりも早めに寝ましたからバッチリです」

「右に同じじゃ。それにワシは売り子として何度もコミケには足を運んでおるからの。もう慣れたものじゃわい」

「そっか。それならよかった」

いつもと変わらない様子の姫路さんと秀吉。

本当は二人ともまだ寝ていたいだろう時間帯。ましてや姫路さんなんて早起きが苦手云々の前に身体があまり強くない。多少なりとも無理はしている筈だ。それをわざわざ大悟とムツツリー二の為に嫌な顔一つせず付き合っているのだから本当に二人とも友達思いで優しい人だと思う。

高時給と女性コスプレイヤー見放題という下心タラタラな僕や雄二とは大違いだ。

「さて、これであと来てないのは……」

「雄二と霧島だけじゃの」

「え？ 雄二と霧島さんだけって、岡崎兄妹とムツツリー二がまだ来てないよ？」

「いえ、岡崎君達ならもう来ていますよ。今は皆の分の切符を買いに行ってくれていきます」

ということとは今日のメンバーは僕ら男子5人に姫路さんと霧島さん、天ちゃんを加えた8人か。いつものメンバーが勢揃いで——ってあれ？

「それだけ？ 他にも美波とか工藤さんとか木下さんはいないの？」

「はい。さつき木下君が挙げたメンバーで全員ですよ。お姉さんは分かりませんが、美波ちゃんと愛子ちゃんは家の用事があって来れないそうです」

僕の質問に即座に姫路さんが答えてくれる。

「そっか、二人とも来れないのは残念だね。なら秀吉はお姉さんについて何か聞いてる？」

「え？ あ、いや、その……、姉上は……。あ、あれじゃ！ こつちもどうしても外せない用事があつて来れないそうじゃ！」

「用事？ 何かあるの？」

「それはちよつと言えぬな。姉上にもほら、プライベートというものがあるからの。アハハ、ハ……」

（言えない……。姉上も別の日にサークルで参加するなんて口が裂けても……）

「へ？ 何か言つた？」

「い、いや！ 何でもないぞい！」

やけにぎこちない口調でそう言う秀吉。

なんだろう。これ以上の追及はしたらいけないような気がする。

その後は三人で他愛のない雑談なんかをして時間を潰した。

「……………おはよう」



「ようお前ら。ふああ……。ねみい……」

すると少しして霧島さんと雄二もやって来た。

こんな朝早くに起きる事に慣れていないのか、姿を見せるなり大きなあくびをする雄二はとても眠そうだ。まあその気持ちは分かるけど。

「待たせたな野郎共。切符買ってきたぞ」

と、今度は後ろから聞きなれた野太い声。

今回のコミケ参加の発起人である岡崎大悟とその妹の天ちゃん。そしてムツツリー二がいた。

「おはよう大悟、ムツツリー二、天ちゃん」

「おう明久。それに雄二も霧島も来たか。うし、どうやら全員揃ったみてえだな」

「……………全員集合、遅刻欠席者なし（コクリ）」

「おはようございませす皆さん。今日は一日よろしくお願ひしますねっ」

ペコリと僕らに挨拶をする天ちゃん。

その外見は大悟と血が繋がった実の妹とは思えないほど小柄で可愛らしい。美形で兄思い、性格も朗らかで優しいから非の打ち所がないように思えるのだが……残念な事に思考が兄と丸々一緒に現実世界の恋愛にほとんど興味が無く、二次元しか愛せないという大きな欠点がある。なので一度も彼氏がいたことがないらしい。宝の持ち腐れと

はまさにこの事だろう。

「霧島さんとは会うのは文化祭以来ですね。初めてのコミケは色々大変だと思えますけど、あたしも大悟兄もムツリーニさんもいますから一緒に頑張りましょうね。わからないことがあつたら遠慮なく聞いてください」

そう言つて優しく霧島さんの手を握る天ちゃん。

「……うん。こちらこそよろしく。天ちゃん」

「はいっ♪」

そんな天ちゃんに対し、少しだけ霧島さんの表情が解れた（気がした）。

面識も少なく、かつ霧島さんの様に喜怒哀楽がわかりづらい人にあそこまで気さくに話しかけるなんてこと、僕には中々出来ない。かなりのコミュニケーション能力の高さだと思ふ。

「んじや、集まったところでさっさと出発するか。大悟、切符をくれ」

「おうよ。他のヤツらの分もちやんとあるからな」

そして僕らは大悟から切符を受け取り、駅の改札を通つてホームへと向かい、乗る予定の電車を待つ。

まだ時間が早い為か、駅の構内はもちろんのこと、ホームで電車を待っている人はあまり見当たらない。ほとんど僕らの貸し切りのような状態だった。

「いつもは人混みで当たり前な場所なので、なんだか不思議と新鮮味を感じますね」

「あはは、確かにそうだね」

「……………（コクリ）」

「俺らもこんなゆっくりな出発は初めてじゃねえかな」

「確かに。今回は初めての人に合わせてるから大分遅めだね」

「え…………じゃあ二人は普段はもつと早い時間なの？」

「前泊」

「まさかの前日スタート!？」

「たりめーだろ。ただでさえ作業に終われて寝不足だったのに、夜明け前に早起きなんて出来るかよ」

「ホテル代とかで費用はかかっちゃいますけど、遅刻とか準備漏れのリスクが大幅に減らせるので、先に泊まっちゃった方が都合がいいんですよ」

さ、さすがは岡崎兄妹。二次元関連の事となると普段以上に本気のようなだ。

『間も無く、電車が参ります。お乗りの方は白線の内側までお下がりくださいー』

そうこうしている内に案内のアナウンスが流れ、電車がホームに到着した。

「うし、乗るぞ野郎共」

「うん」

大悟に続き、続々と乗り込む。

中は駅のホーム同様にほぼ閑古鳥状態で、空いている席の方が断然に多かった。さつきまで外が蒸し暑かった分、キンキンに冷えたエアコンの風が心地よい。

ちやうど対面式の四人掛けの席が二つ空いていたので、前に僕と姫路さん、大悟、天ちゃん、その後ろに雄二、霧島さん、秀吉、ムツツリー二が座った。

「岡崎君、しばらくはこのままですよね？」

「おう。乗り換えの駅につくまでそこそこ時間あるからな」

「各自適当にしていればいいですよ」

椅子に深くもたれかかる大悟と天ちゃん。

よく見ると二人とも目の下に酷いクマがあった。また徹夜で何かやってたんだろか。元々ブサイクな大悟はどうでもいいんだけど、天ちゃんは折角の可愛い顔がそのせいで勿体無くなっちゃってる。

「眠くもないし、何をしたいようかな」

狭い車内で出来ることなんて限られている。携帯ゲーム機をするって気分じゃないし、意外とすることがない。

向かい側に座っている雄二を見ると、僕と同じように

「雄二、何か面白いものはない？」

「鏡がトイレにあったぞ。存分に見てくるといい」

おいちよつと待てやコラ。

「それは僕の顔が面白いと言いたいのかな？」

「いや、違う。お前の顔は割と——笑えない」

「笑えないほど何!?! 笑えないほど酷い状態なの!?!」

「面白いと言ったのはお前の守護霊の事だ」

「守護霊? そんなものが見えるの?」

「ああ、見えるぞ。血みどろで黒髪を振り回している珍しい守護霊が」

「そいつはどう考えても僕を護っていないよね」

きつとそれは世間一般でいうところの背後霊と呼ばれる存在だろう。

「安心しろ。半分冗談だ」

「あ、なんだ。ビックリしたよ」

「本当は茶髪だ」

「そこは一番どうでもいいよね!?!」

多分、というか間違はなく冗談だろうけど、少し怖い。え、いやいやそんなまさか。本当に霊なんて憑いてるはずないよね。

……一応あとで塩でもかぶっておこう。

「大悟、何やってるの?」

「ん?」

目の前に座ってる大悟が、さつきからずっとひたすらにノートパソコンを弄っている。

「参加者とのメールでやり取りだ」

「やり取り?」

「私達のサークルは業界内で大手の扱いを受けているので、その影響なのか沢山他の参加者から連絡が来るんですよ。挨拶とか新刊の出来がどうかそんな感じのが」

「へえ、そうなんだ」

確かにこれまででかなりの売上をあげてると聞いてるし、現にこの二人の画力と物語を作る構成員、そしてムッツリーニの撮影技術の高さは僕も身をもって体感している。どちらもアマチュアの括りから完全に逸脱しているプロ顔負けの実力の持ち主達なのだ。人気になるのにも全然納得がいく。

「どんな感じで来てるの?」

「うわっ、凄い。沢山メッセページが来てるんですね」

隣で見ていた姫路さんが画面に映ってるメッセページの量に驚く。

『今回はよろしくお願いします!』

『あのダイゴブックス先生と隣の配置になれるなんて嬉しいです!』

『今回は絶対負けないわよお』

『ドスケベイラスト期待してます』

『先生のイラストが尊すぎて孕まされました。責任取ってください』

『天ちゃんください』

『死んでも絶対行きますからね先生!!!』

『夫がオオアリクイに殺されて体をもて余している人妻です。是非会いたいので連絡先を教えてください』

といった様々な内容の文章が並んでいた。

「でもそうやって一つ一つにちゃんと返してるなんてマメだね」

「当たり前だろう。同業者とのコミュニケーションはコミケ関係なくまず必要だからな。それに……」

「それに?」

「こうしてパソコンで先にやつちまえばいざ対面したときに必要最低限の会話で済むだ

ろう」

「そ、そうなんだ」

そういえば大悟はこんな見た目なのにかんりの人見知りだったつけ。

いくら共通の目的を持つ人とはいえ、いきなり初対面の人と話すのは彼にとってかなり高難易度なんだろう。

「大悟兄は生粋のコミュ障だもんね、昔から」

「私も岡崎君が転校してきたばかりの頃はかなり警戒されていたのを覚えてます。懐かしいですね」

「僕も最初は秀吉を介さないと目すら合わせてくれなかったよな」

「いやいや、得体の知れないヤツと目線合わせて素面で喋れるお前らのほうが異常だろうよ。それに姫路の時だって俺ア——」

「Verdammt!!!」

「ん?」

「Sie の子達に は魔法少女 が似合  
Magical Girl!」



「Sei <sup>バ</sup>kein <sup>カ</sup>Idiot! <sup>を</sup>Sie <sup>言</sup>mus <sup>う</sup>sein <sup>な</sup>en <sup>絶</sup>HaKa <sup>対</sup>ma <sup>に</sup>tra <sup>羽</sup>gen <sup>織</sup> <sup>袴</sup> <sup>だ</sup>」

急に後ろの方から大声で言い争うような声が聞こえてきた。

「何だろ、喧嘩かな?」

「かもな。だが外国語っぽいから何言ってるのかさっぱりわからん」

「随分熱くなってるみたいですけど……?」

まあしばらくすればおさまるだろう、と大悟が言う。

しかしその声達はおさまるどころか更に大きく激しく、罵倒らしき応酬を繰り返していく。また他のお客さん達も僕ら同様に気になっていようだった。

「つたく、朝からなに騒いでやがるんだ」

隣の雄二がチツ、と舌打ちを鳴らす。

「このままでと周りの人の迷惑になるし、軽く注意でもしておくか。行くぞ明久」

「うん、もちろん」

「えっ? 大丈夫なんですか? もし仮に危ない人達だったら……」

「大丈夫だ姫路。そうだったらそうだったで駅員にでも突き出してやりやいいし、万が一暴力でもふるってきたら最悪俺と明久と大悟でなんとかするさ」

「そうだよ姫路さん。だから任せておいて」

そして僕は席を立ち、その声のする方に向き直る。

僕らだつてある程度の修羅場はくぐり抜けているつもりだ。喧嘩している外国人を仲裁するなんてのはそんな僕らにとっては些事に等しい。造作もないことだと――

「そんなものを進めて嫌われたらどうする!!」↑魔法少女のコスプレをした筋骨隆々のおじさん

「D u n i m m s t h a s s e n !」↑魔法少女の台詞だ!

D u w e i t n i c h t s b e r F r a u e n !」↑女勇者っぽいコスプレをした筋骨隆々のおじさん

「W a r u m f r a g e n w i r s i e d a n n n i c h t e i n f a c h ?」

↑コスプレ姿の筋骨隆々おじさんズ

「……………」

無言で席に戻る。

「どうしたお前ら」

「言及するな。アレは関わらない方がいい」

「僕も同感だ。アレは僕らの手に負えるような相手じゃないよ」  
「は？」

驕っていた。まさかあんな強大な存在が僕らの前に立ちはだかるだなんて。

楽勝だなんて思っていた自分を恥じる。勝てるわけがない。所詮僕らはまだまだ井の中の蛙ということか。

「なんだよ。一体なにを見ブホッ！」

「よせ大悟。お前が見たら帰ってこれなくなる」

アレの方を見ようとした大悟に雄二がいち早く手で制した。

「何しやがる」

「いいから黙って俺についてこい。行くぞ明久」

「うん」

大悟を連れて僕らは一旦席を離れる。

何のことだか大悟はわかっていない様子だけどそれでいい。世の中には知らない方が幸せな事だつてあるんだから。

「おい、なんのつもりだ」

「黙つてろ。とりあえずここで息をひそめて静かにしてればヤツらは大人しくなる」

「そうだね。僕もその判断が一番正しいと思うよ」  
「そうなのか」

大悟をそう納得させ、僕らは車両の隅に身を隠す。流石に残ったメンバーの中であの奇々怪々な格好をした連中に首を突っ込めれる胆力の持ち主はいないはずだ……多分。そうしてしばらくたったのち、

シーン……

「お?」

「声がしなくなっただね」

「どうやら本当に大人しくなったようだな」

問題が解決したのを見計らい、席に戻ろうと立ち上がる。

「何で揉めてたんだらうね」

「さあな、だがこういうのは周りがどうこうするよりもひたすら耐えていた方がいいみたいだ——」

「……………」 ↑ 跪くマツチヨ魔法少女 (♂)

「……………」 ↑ 跪くマツチヨ女勇者 (♂)

「↑ドン引きする女子s & 秀吉

「……………」

再び席に戻る。

「どうした」

「……大悟、明久」

「あん？」

「今日俺達は三人でコミケに参加する。他にツレはいない。いいな？」

「了解」

「了解じゃねえよ。本当に何が起きてるんだ」

チクシヨウ！ 何なんだよアレは！ 彼らは一体さっきの喧嘩でなにをどう整理した挙句に、あんな摩訶不思議な行動に至ってしまったというんだ！

あれじゃあ解決どころか益々状況が悪化してるじゃないか……っ！

「よしお前ら、一旦車両を移動しようじゃないか」

「そうだね。この問題は解決にかなりの時間を有するみたいだか——」

ガシツ

「「ん？」」

「……………」（ニコニコ）↑僕の手を掴んで微笑む姫路さん

「……………」（ニコニコ）↑大悟の手を掴んで微笑む秀吉

「……………」↑雄二の掴んで微笑む（ように見える）霧島さん

何故か僕らの手を取って放さない女子達。そしてそのニコニコとした顔つきのまま、あの二人に

「「THIS IS MY LOVER」」

「「AHH!」」

「「!?!」」

そう言ってしまった。

「Das kann nicht ihr Freund sein, oder?」  
「まさか彼女らしくて出ないだろ、うな!!」  
「Wenn sie keine Jungfrau mehr ist,」  
「使えなくってマジメに魔が!」  
kann sie keine Magie mehr wirken!」

「ちよっ！ 待って待って待って!!」

鬼気迫る顔と声量で僕ら三人に詰め寄るおっさんズ。

外国語で何を言っているのかさっぱりわからないけど、少なくともメチャクチャ怒っていることだけは確かだ。だとしたらまずは一旦頭を冷やしてもらわなければならぬ。

「お、落ち着いてください！ ス、ストップ！」

「??」

「よくわかりませんが一応話は聞きます。聞きますから——」  
くるり

「——ここにいる岡崎大悟が」

「なんでだツツ!!」

——まあ、僕がやるとは一言も言っていないけど。

「頼んだよ大悟。君の力であるの二人をなんとかしてくれ」

「いやいやいやいや無茶言うんじゃないやねえよ!! 俺にそんな芸当が出来るわけねえだろうが！」

「どうして?」

「相手は初対面でしかも外国人だぞ!! 俺のゴミカスコミュカじゃあんなのどうしよう

もな——」

「……………」 ↑めるたんピンバツジ

「……………」 ↑めるたんストラップ

「……………」

「……………」

ガシッ！

——

「「H A H A H A !」」

大悟はその外国人二人と楽しそうに談笑を交わしている。

「これでよし」

「あの、岡崎君はあのままでいいんですか？」



「大丈夫じゃないかな。楽しそうだし」

「は、はあ……」

元々の席に戻り、平和の訪れにひと段落する。

あの様子だとうやら完全に意気投合したみたいだ。類は友を呼ぶとは正にこの光景を指すんだろうな。一時はどうなるかと思っただけれど、何事もなく終わってくれてよかったよかったです……、

「……………」

「ん？」

「あ？」

すると、外国人二人が僕と雄二をそれぞれ交互に見つめてきた。何かな？

「Wir m・ssen i h n l o s w e r d e n , o d e r ? (チツ)」

「ふむふむ、なるほど」

グッ

「OK. OK. I t h i n k s o . (ニコニコ)」

「oh…… (ニコニコ)」

「oh…… (ニコニコ)」

「G o f o r i t !」

「OK!! (ジャキツ)」

「待て待て待て!!」

「何の為の意気投合だったの!!」

再び僕らに向けられる二つの殺気。

さつきまで仲睦まじい様子で朗らかに会話していたじゃないか！ チクシヨウ！  
あのキモオタ何を吹き込みやがったんだ！

「G i a u b s t d u n i c h t , d a s s i e z u g u t f u r  
d i c h i s t ?」

「U d d u d e n k s t d u b i s t g u t g e n u g f u r s i  
e . . .」

「いや、その、えつと……ど、どうしよう雄二」

「ダメだ。俺も何を言ってるのかサツパリ分からねえ……」

ひ、ひとまず彼らの誤解を解かないと……！

(雄二、ここは大悟と同じ)

(そ、そうだな。下手な事言つて更にややこしくするよりはその方が賢明か)

そう耳元で囁き、彼らに向き直る。

「お………OK・OK」

「?」

「I think so!」

「!」

「OK・OK（ニコニコ）」

よ、よかった。どうやら僕らの気持ちを通じ——

ドンッ

「Trinken!」  
飲め

——ませんでしたよコンチクシヨウ。

ていうか大悟に比べて扱いの差が酷すぎる!

「おい大悟。頼む、通訳してくれ」

「ああ?」

「僕らに敵意は無いとあの二人に伝えてほしいんだ」

もう僕らで何を言っても無理みたいなので大悟に全てを委ねることにした。

「馬鹿か。そんなこと俺が出来るわけがねえだろ」

「どうして?」

「内容どころかアイツらが何語かも分かんねえのに」

「お前どうやって意気投合した!?!」

じゃあさつきまでののは全部ノリと雰囲気だけで会話してたってことなの!? 二次元が絡んではいへ、流石にコミュ障とは思えない程に適応能力が凄まじすぎるんだけど……。

(ど、どうしよう雄二。このままじゃ僕らあのお酒を飲まされる羽目になるよ)

(……しようがねえ。こうなりや力づくで黙らせるか——ん?)

(どうしたの雄二——ん?)

「…………… (ニヤニヤ)」

「…………… (ニヤニヤ)」

何故か僕らのことをまるで小馬鹿にするような視線を向けてくる。

そしてフウ、と息を吐き、言った。

「所 証 は 日 本 人 の 酒 の 強 さ  
こ の 程 度 の 酒 も 飲 め な い と は  
Ich kann nicht mal so Alkohol trinken」

「……………はっ」



「いやなんでだああツツ!!」

「ちよ、二人とも落ち着くのじゃ! 一旦冷静になれ!」

「そうですよ岡崎君、天ちゃん! それに今からお酒なんて飲んだらこの後が……!!」

「……こんな所で流石にそれはダメ」

「残念だが相棒、姫路、霧島。それは出来ねえ」

「ごめんなさい。このまま舐められっぱなしでいられるのも非常に癪なので、ここで白黒ハッキリつけさせてもらいます! ですので手出しは無用です!」

「いや、手出しがどうかそう言う場合じゃなくて!」

「かかってこいや!! この青二才風情があああ!!」

その後、目的の駅につくまでの間、見知らぬコスプレ姿の外人達VS岡崎兄妹による熾烈な酒飲み対決が行われることとなり、最終的に四人全員がスピリタスをがぶ飲みして電車内で吐くという最悪の結末で終わりを迎えた。

こんな調子でコミケ、上手くいくのだろうか……?」

二年生VS三年生 肝試し編

第七十二問 灼熱の攻防

——side 大悟

夏——それは俺達学生にとって待望の時期だ。

なぜならそう、夏休みがある。一ヶ月半という長期間学校に行く必要がなく、それぞれ自由に生活することが出来る学生にだけ許された最大最強の特権。この期間を利用して多くの学生達は様々な場所に足を踏み入れ、己の身で体感し、それらを思い出して記憶に残すのだ。

彼女を作つて海や山に出掛けたり、上の代が引退し、新生チームとなった部活動に一生懸命精を出したり、また敢えてどこにも出掛けず、エアコンの効いた部屋でゴロゴロしながらアイスを喰う。そんな多種多様のエンジョイの仕方——それが夏休みの醍醐味であり、魅力だと思つている。

そう。夏休みや学生にとっての天国であり、決して他者が犯してはならないものな筈

なんだ。なのに――

『――ここで元の高さを $h$ とした時、位置エネルギーが全て運動エネルギーに変換されたとすると、この時の速度 $v$ は重力加速度 $g$ と高さ $h$ にのみ依存する式となり――』

(……………!!!)

(大悟。歯軋りがうるさいぞ)

――というワケか俺達は、暑苦しい教室で鉄人の補修を受けていた。

(フザけやがって……折角の夏休みだつてのにやってられつかよこんなモン……!!)

(仕方なからう。ワシらFクラスは学力の面で他のクラスよりも圧倒的に遅れておる。だからこうして補修でもしないと釣り合いが取れんのじゃろうな)

(だからつて朝から夕方までみっちりつてのは厳しすぎんだろうが！ これじゃ普段と何も変わらねえよ！ うう、こんな不幸な俺をどうか助けてくれめるたあああん……)

苛立ちと悲しみで思わず卓袱台を叩き壊しそうになるが、なんとかこらえる。

ただでさえエアコンどころか扇風機すらない劣悪な教室なのに、現在やっている内容



が俺の大嫌いな物理科目。そしてとどめに補修をやっているのが暑苦しいほどの筋肉モリモリマツチョマン、西村教諭だ。

ここまで勉強に取り組む上で不向きな環境はないだろう。身体はともかく、精神的な方面がゲロを吐くレベルでキツすぎる。

もうダメだ、そう思い俺は秀吉に耳打ちする。

(もう限界だ……やるぞ相棒)

(やる? 何をじゃ?)

(決まってるんだろ——脱獄だよ。この最低最悪のクソゴミアルカトラズからな)

鉄人に気づつかれないよう、俺は声を最小限に抑えて秀吉にそう告げた。秀吉はそんな俺の発言に顔をしかめて答える。

(本気か大悟よ。もしバレたら鉄拳制裁じゃ済まないかもしれないかもしれんのじゃぞ)

(んなことは百も承知だ。だかもうこんな地獄を味わされる方がよっぽどうんざりだ。いくら俺達が最底辺のクラスだって、夏休みという学生にとつて数少ない貴重な時間までごっそり奪われていいはずがねえ。秀吉だってそう思うだろ?)

(それは……確かにそうじゃが)

(なんと言われようがやるぞ。このまま泣き寝入りなんざゴメンだ)

出来るか出来ないかじゃない、やるかやらないかなのだ。

失敗を恐れない強い心を持って行動した者だけが、新たな境地を切り開くことが出来るのである。全国の若人よ、今の俺の言葉、胸に一生刻んでおけ！

(まあ、無理にとは言わねえが……どうする)

(……そこまで言うのならわかった。ワシもお主に付き合おうではないか。旅は道連れ世は情け、さすがにこの暑さにはワシも耐えきれんと思つていたところじゃ)

(さすが相棒。そういうところ好きだぜ。さてあとは——おい、聞こえるか同志)

(…………?)

俺は近くの席に座る同志に声をかけた。

(…………何だ)

(手短に言う。逃げるぞ、準備しろ)

(…………本気か?)

(おうよ)

(…………時を知らせろ)

そう言つて互いに小さくサムズアップを交わす。

多くを語らずとも気持ちは一つで繋がっている。さすがは我が同好の志だ。

(しかし大悟よ、どうやって抜け出すつもりじゃ？ 鉄人の目を掻い潜るのは至難の

技じゃと思うが)

(それについては大丈夫だ。秀吉、ほれ)

(む?)

(じゃあ雄二、この人数なら全員で一斉に逃げるって作戦でどうかな)

(人海戦術か。単純だが、確実な作戦だな……。よし、乗った)

(みんなもそれでいいよね? 誰が捕まっても恨みっこなしってことで。問題がなければ小さく領いてもらえる?)

((了解))

そんな会話が聞こえてくる。

どうやら明久と雄二、そしてクラスメートの野郎共も俺達同様にここからの脱出を謀っているようだ。そして作戦はさつき雄二が言った通りに人海戦術。全員で一斉に脱出することで鉄人の意識を個々ではなく全体に集中させ、一人ひとりが捕まる確率を極力少なくしようという魂胆らしい。多少大雑把な作戦だが、今の状況ならそれが最適だろう。

(ヤツらに乗じて俺達三人も逃げるんだ。さすがの鉄人でも、四十九人もの人間を捕獲するのは物理的に不可能だからな)

(……今さらじゃが、このクラスは良くも悪くも結束力だけはピカイチなんじやのう)  
それが我がFクラスの売りだからな。しやあない。

(聞いてたな同志、鉄人が背を向けた瞬間が合図だ)

(……………心得た)

同志に脱出のタイミングを伝え、俺は鉄人の様子を伺う。

ヤツは今俺達の方を向いて教科書の内容を読んでいる。下手に動けば即死だ。勝負は一瞬、抜かるなよ……………!

『——つまり、物体の落下速度というものはその物体の質量に依存しないということになる。だが、理論とは違って現実には空気抵抗というものがある』

『……………』

『綿毛と鉄球が同様の速度で落下しないのはこの空気抵抗によるものが大きく、式に表すと——』

スッ

！ 鉄人が背を向けたぞ！ 今だ!!

(行くぞ同志！ 秀よ——)

「全員動くなあつ！」

「「——っ!!」」

腰を上げた瞬間、いつもより更にドスの聞いた鉄人の声が教室を支配する。

思わずそのままの姿勢で動きが止まった。

「貴様ら……。脱走とはいいい度胸だな。そんなに俺の授業は退屈か？」

背を向いたままの鉄人に凶星を突かれ、俺含む野郎共は生唾を飲み込む。

そんなバカな……コツチの行動が読まれていただど?! ヤツに感づかれるような兆候やヘマはなかつた筈なのに! クソツタレ! ヤツは見聞色の覇氣の使い手か何か!?

まずい、これじゃあ逃げるところの話じゃないぞ。ここからどう弁明するか、そう考えていると、

「そうか。お前らがそこまで退屈してるとは気がつかなかつた。これはつまらない授業をしてしまった俺の落ち度だな」

意外にも、鉄人はそんな返しをしてきた。

なんだ、怒ってねえのか? てつきりブン殴られんのかと思つたが。

「その詫びとして、俺から一つ面白い話をプレゼントしてやろう」

「お、面白い話？」

「ああ……。だが姫路、島田、木下は耳を塞げ」

そう言われ、不思議に思いながらも耳を塞ぐ三人。

なんだ、女共には聞かせられねえ話……猥談でもするつもりか？ いやいや、あの筋肉にステータスを全振りし、性に一切興味がなさそうなりアルゴリラーマン男に限ってそんなドスケベトークなんか出来るワケが——

「そう。あれは、十年以上前の夏——」

「——俺がブラジルの留学生とレスリングをやっていたときのことだ」

『『『うぎやあああああああああ————っ!!!』』』

——俺は恐怖のあまり絶叫した。

だが、鉄人は構わず話を続ける。

「相手は身長195センチ、体重120キロの巨漢、ジオルジーニョ・グラシエーロ。腕の太さが女性のウエストくらいはありそうな男だった。だが、俺とて負けはしない。188センチ、97キロの鍛えに鍛えた肉体でヤツと正面からぶつかり合い——」

「グオオオオオオアアアアアッッッ!!? クソがあア!! 頭が!! 頭が割れるように



『脳が、脳が痛えよっ!!』

『ママアーツ!!』

「——しかし、ヤツはレスリングと柔道を勘違いしていた。腕ひしぎを仕掛けてきたんだ。だがこの俺の自慢の上腕二頭筋には勝てるわけもない。汗にまみれ、血管を浮き上がらせながらも俺は腕を伸ばしきることなく抵抗し続けた。すると向こうはさすが俺の頭上にまわり、その分厚い大胸筋で俺の顔を圧迫しつつ上四方固めを——」

『ぐあああああ——っ!!』 い、嫌だ! 目を閉じたくない! 最悪のビジュアルが瞼の裏に張り付いて離れない!』

『起きねえ! 福村が起きねえよ! おい、しっかりしろよ!』

『おい! 兄貴と土屋がもう虫の息だ! 返事がねえ!』

『空気を! 新鮮で涼しい空気をくれ!!』

俺含め野郎共による阿鼻叫喚の嵐。

恐怖と絶望……そんな苦しみの感情がこの場を完全に支配している。

見てる余裕はないが、明久と雄二も同じくこの精神汚染攻撃に悶えているのだろう。

だが、鉄人はそんな俺達には目もくれず、お構い無しとばかりに語り続けている。あ、

悪魔だア……!!



(……ああ、もう無理だ。頭が痛え、吐き気もする……視界もぐらつくし、このままじゃ確実に意識トばすなあ……)

(……だが仕方ねえ。これが俺の、運命つてヤツなんだろう、な……)

そう自らの限界を悟った。最早、指一つすら動かない。

そして瞼を閉じ、真つ暗な闇の中に己の意識を沈ませ始める。すまねえな、秀吉、同志——

『……お兄ちゃん！ 大悟お兄ちゃん！』

なんだ。今微かにめるたんが俺を呼んだ様な……？

……いや、そんなわけねえか。どうせ幻聴か何かの類いだろう。

『……起きて！ 起きてよ、大悟お兄ちゃん！ 死なないで！』

「！」

いや！ 違う！ 幻聴なんかじゃねえ！

今この耳でハッキリと聞こえたぞ！ これは間違いないめるたんの声だ！

「め、める、たん……?」

『そうだよっ! 私だよ! しつかりして、大悟お兄ちゃん!』

「ど、どうして声が……?」

『魔法の国から直接私の声を届けてるのっ。大悟お兄ちゃんが大変なことになってるからいてもたつてもいられなくて!』

「こ、こんな俺の為にわざわざ、だど……!」

最高過ぎるじゃねえか。推しが自分の事を心配してくれるなんざ、めるたんファンとしてこんなにも嬉しい事はねえぞ……!

「めるたん……俺は」

『ごめんね。本当はそっちに行つて助けてあげたいけど、今の私の力じゃこんな事しか出来ないの……けど』

『私、信じてるから……。大悟お兄ちゃんは、あんなゴリラ魔人の卑怯な攻撃なんかには負けないっ! そう、お兄ちゃんは誰にも負けない……』

『——世界で一番、強いんだから!!』

「っ!!」

……そうだ。

俺はこんなところで死んでなんかいらねえ。

最後まで彼女の勇姿を……めるたんが一人前の魔法少女になるのをこの目でしっかりと見届けるまで、俺は何があろうとくたばるワケにはいかねえんだったな!

……ありがとう、めるたん。俺に大切なことを思い出させてくれて!!

「ぐ……ぐう……ぐおおお!!」

目を見開き、気合いを込め、重い身体を持ち上げようとする。だが、

「頭が……張り裂けそうだ……!!」

俺の意志とは裏腹に、身体が言うことを聞きやがらない。

クソお……何してやがるんだ!! 立て! 立ちやがれ!!

何をまたついてやがるんだ!! 苦痛ごときに怯んでんじやねえ!!

愛しのめるたんが俺なんかの為にあそこまでしてくれたんだぞ!! 本気で俺の事を信じて、あまつさえ涙まで流してくれたんだぞ!! そんな彼女の気持ちに伝えてやらないで、何が宇宙一のめるたんのお兄ちゃんだ!!! ふざけんじやねえ!!!

その言葉に嘘偽りがねえんだったらなあ……とつとと立ってっつてんだよおおおーっ!!

「う、うぐあアアああー……っ!! ハア、ハア……!!」

『っ!! あ、兄貴!?!』

『兄貴が、兄貴が立ったぞ!』

「」

気合いのこもった雄叫びをあげ、やっと立ち上がることに成功した。

だが現状はジリ貧だ。精神的ダメージによる消耗が激しく、少しでも氣い抜いたら確実にブツ倒れるのがわかる……だが、もうそんなハマはしねえ!

愛する幼女の涙……それが、俺の原動力なのだからなあっ!!

「俺の生き様……見てくれよ、めるたんっ!!」

スタ……スタ……

一步、二歩と出口に向かって歩を進める。

周りからは相変わらず悲鳴と怒号がけたたましく響いており、中には既に事切れて机に突っ伏している野郎までいる。クソツ、同志までもヤツの毒牙にかかってやがるじゃねえか……!!

(すまねえ同志、野郎共よ……だがお前らのその犠牲は無駄にはしねえ！ テメエらの分まで……俺は生き残ってみせる!!)

ガシツ

そして、扉の取っ手に手をかけた。

(勝った……！)

勝利を確信し、小さく微笑む。

長いようで短かった戦いももうすぐだ。もう俺を阻む壁は何もねえ。あとはこの扉を開け、持てる力の限りを使って逃げるのみ。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

ふふ、いいぞ、いいじゃないか。

今、俺の脳内にユニコーンの完全勝利BGMがフルサウンドで流れている。これはもう文字通り勝ち確。風は今、俺に向かって吹いている！

(クハハ！ 俺の勝——)

P O N

「ち？」

「堂々と正面突破とは大した覚悟だな、岡崎（ニヤリ）」

ドゴオオンツ!!

—— 悲しゝみの、向こうへと♪ 辿りゝ、着けるならゝ♪  
—— 僕はゝもう、要らないよ♪ 温もりも明日もゝゝ♪

## 第七十三問 召喚獸の変化

——side 明久

「——そして、制限時間いっぱいまで使った俺達の寝技の攻防は続き——ん？　なんだお前ら。もうダウンか？」

灼熱の最中繰り広げられた鉄人による悪夢のトークショー。

当然マトモに耐えられるワケもなく、クラスメイト達は卓袱台に突っ伏して気を失っていた。

なんとか大悟があと一步のところまでいったのだが、あえなく鉄人に確保され、脳天をカチ割らんとする威力の拳骨をくらって亡き者と化していた。

「やれやれ、仕方ない。十分間だけ休憩を入れるとしよう。脱走なんてくだらないことを考えた自分を反省するように」

そう言うのと鉄人は大悟を乱雑に投げ捨て、教員用の椅子に座った。

どうやら休憩時間は取っても教室から出ていく気はないらしい。僕らの脱走を警戒しての事だろうか？



「あの、明久君。何があつたんですか？ 皆さんとても苦しそうですし、岡崎君は西村先生に殴られてましたけど……」

姫路さんがクラスメイトと一体の屍を心配そうに見ている。

「えーつと、なんていうか言葉の体罰というか、精神攻撃を受けたというか……」  
「まったく、どうせくだらないことでしょ。脱走なんて考えたんだから、先生だつて怒つて当然じゃない」

隣では美波がため息でもつきそうな顔で僕を見ている。

「そうは言うがな、島田。俺と明久の席は脱走を考えても仕方がないくらい酷いもんだぞ。日当たり最高で風通し最悪のワーストポジションだからな」

「酷いって、どれくらい酷いんですか？」

「明久の成績くらいだ」

「人間の耐えられるレベルじゃないわね」  
なんてことを。

「もしくは酒の入った凜花さんだ」

「そ、それは思ったより酷いですね……」

うん、それは僕も否定しない。

実際僕らはその時のカオスっぷりをこの身で嫌というほど味わっているから。

「でも、確かにこの席は雄二の性格くらい酷いんだよ。さつきペンのアルミ部分に触ったら軽く火傷しちやったしね」

「火傷したの？ どれどれ？」

美波が自然な感じで僕の手を取ってくる。

最近の美波は、以前と比べても攻撃的な時と優しい時の差が大きい。何かあったのだろうか。

「なんじゃ島田。お主、随分と明久に優しいではないか」

「そうですね。美波ちゃんは今久君に近すぎますっ」

「べ、別にアキに優しいってワケじゃ……！ ただアレよ、アキが怪我してたらウチが殴る時に手加減しなきゃいけないからっただけで……！」

怪我しても殴ることにはわりはないんだ……。

「じゃがまあ、お主達の席は確かに暑いのも無理はないのじゃ」

「あれ？ 秀吉は脱走の話は聞こえなかったの？」

「いや、ワシはお主らとは別で大悟とムツツリー二の三人で脱走しようとしてたのじゃが、残念なことに残りの二人があんな感じになったから……」

「ああ、そうだったんだ」

そう言って秀吉が視線をある方向に向ける。

先にはピクリとも動かない大悟とムツツリーニがいた。

「大悟もそうだが、ムツツリーニの想像力は常人の比じゃないからな。さっきの恐ろしい話を聞いただけで鉄人とブラジル人の暑苦しいレスリングが脳内で鮮明な画像になって浮かび上がったんだろ」

そ、それはひとたまりもないな……。

「まあでも、僕はちよつと安心したよ」

「安心した？ 何をじゃ？」

「秀吉が脱走に乗り気だつて事だよ。ほら、秀吉つて僕らなんかよりは真面目なタイプだからもしかしたらつて思つて。やっぱり一緒につるんでるバカ仲間としては、五人の誰か一人でも欠けちやつたら寂しいじゃないか」

「！ そうじゃつたか……」

こういうことは姫路さんや美波は誘いにくい。

仲は良いけれど、バカ仲間とは違う気がするから。

「？ 秀吉、嬉しそうだね」

秀吉が若干、嬉しそうな顔を浮かべている。

「うむ。正直なことを言えば、バカ仲間と言つてもらえるのは嬉しいぞい。最近のお主はワシを女やら男の娘やらとして見ている節があるからの。外見が姉上に似ておると

「いう部分以外はいつでもいいのかと、少々気にしてきたところじゃ」

「? 秀吉もおかしな事を気にしているね」

「いや、最近のワシの扱いを鑑みれば決しておかしくはないと思うのじゃが……」

木下さんも秀吉は確かにそっくりだし、どちらも凄く可愛いけど……

「外見以外はもうでもいいなんて、そんなワケないじゃないか」

「じゃが、ワシは」

「秀吉が可愛いのは事実だけど、それだけでこうして一緒にいるのは違うよ。一緒に遊んだり、勉強したり、バカやったりしてき、その中で秀吉の良いところをいっぱい知っているから、一緒にいるんだよ。一番秀吉と付き合いがある大悟なんて、尚更そう思っているんじゃないかな」

「……………っ!」

見た目で友達を選ぶなんて、そんなのはおかしい事だ。

大悟はもちろんのこと、僕も雄二もムツツリー二も、そんな理由で秀吉と仲良くはしてないつもりだ。

昔、大悟からこんな言葉を聞いたことがある。

『秀吉は見た目こそあんなだが、中身は真正銘の漢だ。何があろうと決してブレねえ

芯をここに持つてる。メンタルも俺なんかより全然強えしな。それで何度アイツに助けられたかわからねえ。だからよ……マジでアイツと親友になれて幸せって思うんだ。俺は』

その時の大悟の表情は真剣そのものだった。

ヤツはつまらない嘘は決してつかない男だ。二人がこれまで親友として積み上げてきた信頼関係と、秀吉の人間性の良さがあつてこそ出た、心からの発言なんだろうと僕は思っている。

「ん？ どうしたの秀吉」

「こ、こつちを見るでないっ」

なぜだか秀吉は、隠れるように背を向けてしまった。

「瑞希……。木下つてずるいわよね……。女の子みたいに扱われてるくせに、こういう時だけ異性を感じさせないであんなこと言ってもらえるんだもの……」

「ですよね……。私、頑張ってるのが虚しくなってきました……」

姫路さんと美波はため息混じりに何かを愚痴りあっていた。

「それにしても暑いな……。さつきから全然汗が引かないぞ……」

「そうだよね……。こんな環境だと勉強する気なんてさらさら起きないよ」

「なによアキ。アンタ、この間の期末試験の時とはやる気が全然違うじゃない」

「この前のは姉さんを撃退する為だったから例外だよ。元々勉強はあんまり好きじゃない」

あのテストでやらかしてしまった結果、姉さんと同居する羽目になってしまった。自業自得とはいえ最悪だ……。

僕の自由は最早風前の灯火と言っていていいだろう。成績の事について何も言われない家族がいる雄二や大悟が羨ましい。

「それに、期末試験を頑張った理由はもう一つあるからね」

「理由って、試験召喚獣の装備のリセットの事ですか？」

姫路さんの言葉に僕はうん、と返す。

実は期末試験前に、色々あつて僕と雄二は学園長の部屋に行った……。というより間違えて行ってしまった。

その時学園長が、今回の期末試験は普段とは違って、成績によって召喚獣の装備が変更になる仕様にしたと言っていた。点数が高ければ高いほど強い武器や防具を手に入られるが、逆に低ければそれなりのものになってしまうのだ。

「僕や雄二の装備はめちやくちや弱いからね。せめて金属製の武器が欲しいよ」

武器が木刀なままなのはハッキリ言つて限界だ。

近くで見てる分、姫路さんや大悟の召喚獣が本当に羨ましい。

けど僕はよりにもよつてその大事な期末試験で記入ミスをやらかしてしまった。装備は多分そのままだろう。

「雄二はどうなのじゃ？ お主は振り分け試験よりも点数が上がつておるのじやろう？」

「ん？ そういやそうだな。あんま気にしてなかつたが」

雄二曰く、自分は前線に立つて戦う事がほとんどない分、自分の召喚獣の強さはさほど重要視していなかった。それよりも他の皆がもつと強くなつてくれた方が、確実に戦争の勝利へとつながる事になるから、らしい。

そう自然に思えるあたり、コイツはきつと根っからの指揮官タイプなんだろう。

「ワシも期末試験は出来が良かったからの。もしかしたら良い装備になつておるかもしれん」

「ウチも以前より問題文が読めるから、ちよつと強くなつてるかも」

「すいません……。私はあまり変わつてなかつたみたいですよ……」

「いやいや。姫路さんはあれ以上の成績になつたら凄すぎるつてば」

皆それぞれの結果に期待を持ったりそうでなかったりしている。姫路さんに関しては、今のままでも十分以上な点数だけど。

「——あ。なら今から召喚獣を喚び出してみようよ。皆がどんな装備になつてるのか気になるし」

「今から？」

「ほら、ちようどそこに鉄人もいることだし。ねえ雄二？」

「そうだな。次の戦争に備えて戦力の把握もしておきたいところだしな」

雄二の同意を得たので、僕は椅子に座る鉄人に呼びかけた。

「どうした吉井。お前が俺を呼ぶなんて珍しいな」

「すいません。お願いがあつたもので」

「お願いだと？」

「はい。ちよつと召喚許可を貰いたくて」

「……………」

僕がそう言うと、鉄人は困つたような表情を浮かべた。

「どうかしたんですか」

「いや、その何だ……。いいか吉井。お前は観察処分者だ。人よりもずっと力があり、し



かも物や人に触ることの出来る召喚獣を持っている。そんな危険なものをみだりに喚び出すことは感心出来んぞ。そんな余計なことを考えている暇があったら——」

ん？ なんだろう、この鉄人らしからぬ歯切れの悪い返答は。

いつもはもつと堂々とした発言をするのに。

「西村教諭。ワシらは別に悪巧みをしておるワケではないぞい。ただ、純粋に召喚獣の装備がどうなっておるのか気になるだけなのじゃ」

「あー……。しかしだな木下。試召戦争でもないのに召喚獣を喚び出すのはあまりいいことではないぞ」

「鉄人。どうしてそんなに召喚を拒むんだ。まさか、俺達の召喚獣に何か不具合でもあったのか？」

「いや、何もないぞ坂本」

「何も無いなら、別に喚び出しても問題はないんじゃないですか？」

「それにウチらの召喚獣ならアキと違って物に触れられないし、危険はないと思いますけど」

「……さて、授業を再開するぞ」

僕らを無視して教壇に戻ろうとする鉄人。

うん、これは確実に何か裏がある感じだ。

「ちよつと待て」

「なんだ、坂本」

「アンタがそこまで言うなら無理に召喚許可を取ることはしねえ。ただし、何が起きてるのはその口からハッキリ説明してもらうがな——起アウエイクン動つ」

雄二の声に反応して白金の腕輪が起動する。

試験召喚大会の優勝商品として雄二が手に入れたもので、機能としては、先生の許可がなくても召喚フィールドを展開することが出来る。

これで準備は整った。僕は早速、召喚呪文の「試サ獣モ召喚ン」と口にし、目の前に召喚獣を喚び出した。

のだが……、

「……あれ？」

「おいおい。明久にしちややけに贅沢な装備じゃねえか」

現れたのは、いつもの学ランに木刀ではなく、白銀の甲冑に自身の背丈程もある大剣を携えているという、ファンタジー系の漫画やゲームに出てきそうな騎士を思わせる姿と化した召喚獣だった。

またその召喚獣のサイズが、これまでは二頭身ぐらいだったのに今は僕と寸分違わぬくらいにまで大きくなっている。

「す、凄い！　なんだかかなり強そうに見えるよっ！」

「いやはや……。コイツは驚いたな。試召戦争が本物の戦争みたいになりそうじゃないか」

「そうじゃな。これならば本物の人間とさして変わらんじやろ」

皆が僕の召喚獣に対して思い思いの感想を述べる中、

「ああ……。クソ、頭痛え……。！」

気絶していた大悟が起きてきた。

「クソったれがあ……。っ！　せつかくめるたんがあんなに誠心誠意応援してくれたつてのにこの体たらくよお……。なんて俺は心底弱え男なんだよチクシヨウがつ！　こんなんじや今後、彼女に顔向けが出来ねえじゃねえかよ……。！」

「ちようどよかった。見てよ大悟！　僕の新しい召喚獣を！」

「……。あ？　なんだ明久うるせえな。今こっちは絶望にうちひしがれてんの——」

ガッ

「におつとつ」

ゴンッ

「あ痛つ、ちよつと大悟。急に何するの——」

ポロツ、コロコロコロコロ……

「——きゃ?」

何かにつまずいたのか、大悟がよろけた拍子に僕の召喚獣の頭を弾いた。すると、その叩かれた頭が首から外れ、畳の上に落下した。

「えっ」

「なっ……」

「きゃあああああ——っ!!?」

その光景に姫路さんと美波が悲鳴をあげる。

「えええっ!!? な、何これ!!? 僕の召喚獣がいきなりお茶の間にはお見せできない姿になっっているんだけど!!?」

「本当だな。待つてろ、今ホチキスを持ってくる」

「雄二、何を冷静に的はずれなことを言ってるのさ!!? そこは普通接着剤でしょ!!? ホ

チキスだと穴が開いて痛いじゃないか!」

「そういう問題ではないと思うのじゃが」

「……………」

「む? どうしたのじゃ大悟よ」

「……………秀吉。母さんと天の事、頼んだぞ」

「?」

P i P i P i

「……………もしもし警察ですか。友人を……………殺めました」

「いやいや違うよ!? 僕じゃないよ! 召喚獣! あれは僕じゃなくてデフォルメされ

た召喚獣だから!!」

「……………はい。そうです、即死です。エ〇フエンリートの感じで殺りました」

「やってないやってない! 確かに同じ首ちよんばだけど、あそこまでグロテスクではないから!」

「秀吉。こんな殺人犯と化した俺を……………親友と呼んでくれてありがとうな。俺はこれから二回目のお務めを果たしてくるからよ」

「何を一人で錯乱しておるのじゃお主は……………」

「ああ天に召します主よ……………。我が罪をお裁き下さい。そしてどうか、この愚かな私に

手を差しのべ、天国へとお導き下さい……Amen」

「違うつてば！ だから右手で十字を切りながら神に赦しを乞うな！」

——閑話休題

「んだよ。あれは召喚獣だったのか。ビックリさせやがつてよ」

僕は大有りに簡潔に事情を説明した。

目が覚めたばかりで寝ぼけていて、僕と僕そつくりになった召喚獣の区別がついてなかったらしい。

いや、だとしてもあんな簡単に小突いただけで人間の首が取れたって思うのは、早とちり過ぎると思うけどね。

「さて鉄人。これはどういうことだ。知っているんだろ？」

雄二がわざとらしく目を背けている鉄人に問いかける。

「……俺にはよくわからんが、今喚び出される召喚獣は化け物の類いか何かになってしまおうらしい」

「お化け、ですか？」

「お前らも知つての通り、試験召喚システムは科学技術だけで成り立っているワケでは

ない。幾ばくかの偶然やオカルト的な要素も含まれているんだ」

「??? つまり、どういうことですか?」

「あー……。要するに、だな……」

「調整に失敗した、と」

「……身も蓋もない言い方をするな」

雄二の台詞に仏頂面で答える鉄人。

僕の召喚獣を見る限り、どうやらその調整でオカルト部分が色濃く出ているのか。

「化け物ねえ……じゃあ明久のコイツは、首なし騎士……いわゆるデュラハンあたりをイメージしてんだな」

「うん、でもなんで僕の召喚獣はデュラハンなんだろう」

お化けなら日本の妖怪とかもたくさんいるのに。

「学園長の話を聞く限りでは、どうも召喚者の特徴や本質で決まるらしい」

「特徴や本質? てことはデュラハンと明久が何かしらリンクしてること事つすかね」

「そういう事になるな」

大悟と鉄人がそう会話をかわす。

ふむ、デュラハンと僕の似通ったところか。そうなると一つしかないな。

「なるほど。つまり僕がデュラハンに選ばれたのは、僕の騎士道精神が召喚獣に反映さ

れているんですね」

「おい明久。現実から目を背けるな」

「え？ 違うの？ そうなると他に考えられるのは……そうか！ 甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか——」

「頭がない〓バカだからだろ」

「ふむ、バカだからじゃな」

「……………バカだから、一択」

「バカで雑魚か」

「バカだからでしょ」

「言ったあー!! 僕が必死に目を逸らしていた事実を、姫路さん以外の皆が包み隠さず言ったあー!!」

しかも若干一人更に酷く罵倒してきやがった！

クソお……………まさか召喚システムそのものにまでバカ扱いされるなんて！ 真実は時として残酷だ……………！

「そう気に病むな明久。デュラハンはアニメやゲームじゃ敵組織の幹部とか結構強キヤ



ラとして扱われる事が多いんだ。そんな存在に選ばれるってのは考えようによっちゃ、ラッキーなことじゃねえか」

「大悟……」

「いくらお前の元の召喚獣は物に触ることしか能の無い、いてもいなくても大して戦力に影響を及ぼさないウンコ以下のクソ雑魚ナメクジつつう揺るぎようのない事実だとしても、ある程度のキャラクター補正はあるだろうぜ。うん、多分、きつと……」

「だからまあ、元氣出せ。ほら、飴ちゃんいるか？」

「大悟。慰めてるようで余計に傷口を広げるのはやめてくれないかな。あと飴はよろう」

最初の自己紹介の時といい姉さんの時といい、どうしてこのキモオタは素直に友達を励ます事が出来ないんだろうか。

あ、この飴コーラ味だ。

「じゃが、こうして見ると以前よりは強そうに思うがのう。装備も鎧に大剣じゃし」

そう秀吉がフォローを入れてくれる。

そ、そうだ。特徴や本質はともかく、強くなってる事は喜ぶべきだ。

「そうか？ 俺には強くなつたようには見えないけどな」

「む、なんだよ雄二。その言い方は」

横から雄二が水を差すような事を言ってきた。

「その取り外し出来る頭が問題だ。考えてもみろ。戦っている最中に頭が取れたらどうなる？」

「……狙われるね。絶対に」

「リンチ確実だな」

つまり、僕は頭が無防備の状態にならないよう、どちらかの手で抱えながら戦わないといけないことになる。

ただでさえフィードバック機能があるのに、そんな自分に不利すぎるハンデを背負わないといけないなんて、これじゃ強くなってるどころか大きなマイナスだ。というか、自分の頭が他人にボコされる姿とか悲し過ぎて見てられない。

僕らがそうやって話していると、他のクラスメイトが数人こちらにやって来た。

「吉井、さつきからなんか面白そうなことをやってるな」

「これ吉井の召喚獣か？ 特徴や本質がどうか言ってなかったか？」

「なるほど。だから吉井の召喚獣は頭がないのか」

「コイツらにだけは言われたくない。」

「そう言うならそつちも喚び出してみなよ。きっと僕のより酷い召喚獣が出てくるから」

「フツ、何をバカなことを言ってるんだ」

「俺たちがバカの世界チャンピオンであるお前に負けるわけないだろ？」

「俺の本質はなんといつてもジェントルマンだからな。きつと貴賓に溢れたエレガントな召喚獣が出てくるに決まってるさ。いいか、見てろよ——」

「「試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>つ!!」」

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

……ズズズズズ ↑ゾンビ登場

なるほど。根性が腐っているからか。

「こ、怖いです明久君……っ」

「あ、アンタ達！ その汚いものを早くしまいなさいよっ！」

自分の本質を汚いと言われた三人はお互いの肩を抱き合って泣いていた。

「しかしまあ、これはこれで面白いもんだな。お前ら三人はどんな召喚獣だ？」

「ふむ、なら試してみようかの」

「おう。どんな姿に変貌してんのか楽しみだぜ」

「……………うん」

「『試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚！』」

……………ポンツ　↑猫又登場（秀吉）

……………ポンツ　↑ヴァンパイア登場（ムツツリーニ）

……………ポンツ　↑鬼登場（大悟）

三人が詠唱すると、それぞれに応じた召喚獣が喚び出される。

まずは秀吉から見ていこう。

「へえ。秀吉は猫のお化けか。可愛いね。秀吉によく似合っているよ」

「どうやら秀吉の召喚獣は『可愛い』ってことらしいな」

「そりゃ、秀吉の特徴つつたらそれが一番妥当だろ」

「……………疑いの余地なし」

「う、うう……………遂に召喚システムにまでそんな扱いをされておるのか、ワシは……………」

「どうやらお化けと言っても怖いものだけじゃないみたいだ。」

次にムツツリーニの召喚獣を見る。

黒いマントを羽織った顔色の悪いタキシード姿の少年。うん、完全にヴァンパイアそのものだ。口元から牙も見えるし。

「確かにいつも血を欲しているイメージがあるからな」

「若い女が好きという点も酷似しておるし」

「吸血鬼か……。それなら隣にはセーラー服に銀の槍持った女子中学生の後輩が欲しいところだなあ」

「……………もちろん、その子のボイスは種〇梨沙」

うん、それ違う吸血鬼だね。第四真祖の方だね。

でもあのアニメ見てみたけど、どう考えても主人公の能力がチート過ぎると思うんだ。特にあの空間を食い破るヤツとか。

さて、最後に大悟の召喚獣だけ……………。

「こ、これが岡崎君の新しい召喚獣ですか……………」

「け、結構大きくて迫力あるのね……………」

「……………」というかおい、これ確実にあれだろ」

思わず大悟が呟いた。

恐ろしい顔つきに筋骨隆々な体と鯰髭。頭から生える双角。龍の鱗のような刺青。手には巨大な金棒を携えている。その姿はまるで、

「カ○ドウだね」

「ああ、カイ○ウだ」

「うむ、ほぼ○イドウじゃな」

「……………間違いなく、カイド○」

どう見ても某海賊漫画に出てくるアイツをリーゼント風な髪型にアレンジしたようにしか見えなかった。

多分これは日本の代表的な妖怪である鬼をモチーフにしているんだろうけど、ここままで露骨に寄せてくるとは驚きだ。

学園長つてもしかして、ワン○ース好きなのかな？

「まあ見た目はともかくとして、大悟が鬼つてのは普通に納得だな」

「そうか？」

「ああ、見た目の凶暴さとか、腕つぶしの強さとか。まさにお前の特徴そのものだ」

「……………カ○ドウにそっくりなのも、二次元が好きっていう影響かもしれない」

「それに鬼も○イドウも酒好きなイメージがあるからのう。これも大悟を表す特徴としてピッタリではないか？」

「ちよつと待て秀吉。それについては大きな誤解だ。酒は母さんとかに無理やり飲まされてるからそうイメージがついちまってるだけで、本来の俺の本質とは何の因果関係にもないワケで」

「大悟。頭にパツと思ひ浮かぶ酒はなんだ？」

「スピリタス」

「量は」

「樽」

「飲み方は」

「ストレート」

「全部即答じゃねえか……」

「完全に毒されておるのう……」

ふむ、つまるところ大悟の特徴は『見た目の凶暴さ』、『腕つぶし』、『二次元』、『酒』つてことになるらしい。あ、あとロリコンね。

最初の三つはともかく、召喚システムにまで酒の事を認知されてるなんて、コイツは普段からどれだけの量を飲まされているんだろうか。まあ、思い当たる節はいっぱいあ

るし、そもそもお母さんがあんなブツ飛んだ人だから仕方のない事なんだろうけど。

「……鬼なら萃香ちゃんみたいだな見た目の方がよかつたんだが」

それは絶対ない。

「うし。じゃあ後は女子勢だな」

「あ、はい。ならまずは私からやってみますね」

そう言つて姫路さんが立ち上がる。

優しい彼女のことだ。きっと天使とか女神が出てくるに違いない。

「対魔忍アサギとか出ねえかな」

「…………感度3000倍」

出てたまるか。

「それじゃいきます。……試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召<sup>モ</sup>喚<sup>ン</sup>っ」

……ボンツ ↑サキユバス登場



「ブフオオオーっ!!」

「きやあああーっ!! 見ないで! 見ないで! 下さあああーっ!!」

召喚獣を見た瞬間、噴水の様に鼻血を出した僕とムッツリーニ。

す、凄すぎる……。プールの時もそうだったけど、改めて姫路さんってとてつもないボデイの持ち主なんだと認識したよ。

「コイツはいいな。わざわざコスプレしてもらおう手間が省けた。姫路の体つきにサキユバスつてのは少しありきたりな気もするが、まあそこには目を瞑ろう。特にこのもふもふな尻尾は俺的にポイント高えぞ（カキカキ）」

「岡崎君!!」 だ、ダメです! こんな恥ずかしい格好をスケッチしないで下さいっ!」

「安心しろ。モデル費用はちゃんと払う」

「そういうことを心配してるんじゃないやありませんっ!」

さすがだよ大悟。

こんな時でも冷静さを失わず、僕ら消費者の望みを叶える為にすぐさま行動してくれている。これこそクリエイターの鑑だ。あとであのイラスト売ってもらおう。

「……………ナイス、同志（ダラダラダラ）」

ムッツリーニも同じことを思ってたみたいだ。

「にしても、随分と分かりやすい本質だな」

「そ、そんなっ！ 確かに私はちよつと太つてますけど、特徴になるほど大きくなつて……」

「よすんだ姫路さん！ それ以上言うとな特定の誰かを傷つけることに手首が捻れるうろううーっ!? うぎやあああああーっ!!」

「言いたいことがあるなら聞くわよ、アキ？」

いつの間にか美波に右手首を捻り上げられていた。

せ、折角気を使つて止めたのに……。

「全く。瑞希つてば、そんないやらしい身体つきをしてるからいけないのよ」

「はううっ！ 美波ちゃん、あんまりです……」

「その点、ウチにはなんの心配も要らないわ。とびつきり可愛いのが出てくる筈だから見てなさい——試<sup>サ</sup>獣<sup>モ</sup>召喚<sup>ン</sup>っ！」

ゴゴゴゴゴゴ…… ↑ぬりかべ登場

「……………」

(((((ダメだ……。

今笑ったら殺される……)))))

「  
「  
「  
「  
「  
「

## 第七十四問 貧乳と肝試しと新たなる能力

— side 大悟

「……ねえ、アキ」

「な、なにかな美波」

「この召喚獣、ウチに何を言いたいのかしらね？」

「な、なんだろうね……」

こちらを向かず、背中越しに明久にそう尋ねる島田。

やべえよやべえよ……なんか島田の全身から激おこファイナリックプンプンドリームのオーラめつちや出てるよ。背後に阿修羅的なヤツいるんだけど。

これ下手な事言おうもんなら確実にシバキ殺されてデッドエンドルート直行じゃねえか。

「……………」

明久が助けを求めるとような視線を俺達に向けてくる。

勿論目をそらす。わざわざ火の中に丸腰で飛び込むような愚かな行為に加担する必要は無いからな。

(お願い大悟！ なんとかいい誤魔化し方を教えて！)

そしたらよりよつてこの野郎、俺に耳打ちしてきやがった。

だが答えは変わらずノーだ。

(知るかよ。テメエでなんとかしろ)

(そんな薄情な事言わないで！ 僕らは一蓮托生、苦難も快樂も共に分かち合つてきた仲じゃないか！ どうかこの通り！)

(うるせえ。死ぬなら一人で勝手に死ぬ)

(くっ……ならいいさ！ もし僕の言うことを聞いてくれないのなら、貴様が女子小生に土下座してた時の事を葉月ちゃんに包み隠さず暴露する！)

(はあ!? ふざけんな！ そんな事したら、確実に葉月ちゃんから幻滅されちまうだろうが！)

(それが嫌なら僕に協力してもらおうぞ。君に残された選択肢は二つ。僕との友情を取るか……葉月ちゃんからゴミを見るような目で蔑まれるのを取るか！)

(ぐっ、このクソ野郎があ……っ！)

なんとという傍若無人で極悪非道なやり方をしてきやがるんだ。コイツには人の心つ

てモンがないのか!

だが、愛しの葉月ちゃんを引き合いに出されては仕方ない。彼女に嫌われることは死と同義だからな。受け入れる他あるまい。ただし明久、テメーは後で確実に潰す。

(じゃあねえな。じゃあ俺が特別に伝授してやるよ)

(ありがとう。でも僕から言っておいてなんだけど、大丈夫なのかい?)

(おう。島田を怒らせねえような発言をすりゃいいんだろ。んなもん簡単だろうが)

(簡単って、あのぬりかべと美波に共通する特徴なんて、真つ平ら以外僕には思いつかないんだけど?)

(だろうな。だから逆にこう言っただけだ)

(え?)

俺は明久にあるキャラクターの台詞を耳打ちで教える。

そもそも女にとつて胸が貧相つてのは世間一般的に見りやあマイナスポイント……コンプレックスの一つとして捉えられてるのは事実だ。大は小を兼ねるということわざがあるように、胸も無いよりはある方が女の魅力度はより増すだろうからな。姫路がいい例だ。おそらく島田もそう思っただけだ。ぬりかべに愛えられた召喚獣を見て怒りを募らせているのだから、ぬりかべに愛えられた

だが俺に言わせりゃあその凝り固まった固定概念そのものが大きく間違っているの

だ。胸がないからなんだというのだ。胸がないだけで女性の勝ちが決まるのか？ 違  
うだろう。そんなものはあくまでも女性の数ある魅力的な部分の内の一つでしかない。  
いや、むしろ貧乳であるからこそその魅力だつてあるんだ。島田はまだそれを分かつてい  
ないだけだ。つまり島田には、貧乳であることは決して「卑下」されるのではなく――  
「称賛」されることなんだと脳内変換させてやればいい。

(ほ、ホントにいける？ もつと怒らせちゃつたりしないかな？)

(案ずるな。女子つてのは二、三次元問わず自分の容姿を誉められりや嬉しいモンだ。  
それが例え自分にとっては耐え難いコンプレックスであろうとな。お前なら出来るさ)

(そ、そうかな)

(そうだと。あとは決して怖じ気づくな。弱気な発言や行動は相手に余計な不快感  
を与える。ドツシリとした態度で胸はつていけ)

(大悟……わかった。君を信じるよ)

(おうよ)

互いに頷いた後、明久は島田に向き直る。

そしてゆっくりと深呼吸をして、静かに言い放った。

「美波」

「うん」

「ひ——」

「ひ？」

「貧乳はステータスだ!!! 希少価値だ!!!!」

「……………」

「……………」

「……………アキ」

「……………なんだい？」

「床に這いつくばって歯を食いしばりなさい♪」



明久はいつもの十割増しでボコられた。

「どうやら島田には俺の想いは伝わらなかつたようだ。誠に遺憾である。」

「そうだ岡崎。お前に一つ報告事項があつたんだ」

「俺すか？」

急に鉄人が話しかけてきた。

「学園長がお前の事を呼んでいたぞ。せっかくだからこのまま学園長室に行つてこい」

「ええ……（困惑）」

「そんな露骨に嫌そうな顔をするな。何でも話したい事があるそうだ」

「なんだつてんだあのババア。わざわざ俺を名指しして呼び出して話したい事なんてよ。最近は何にやらかしかはしてない筈だが……。」

「まさかアレか？　ここんところダイゴブツクスの売上が良いからその噂を聞き付け

て自分にも何か同人誌を書いてくれとか言われるのか？　クツ、そうなるとうるさいな。個人的にはババアは人間として嫌いだ。だが客を性別や年齢で差別しない、例えば生徒だろうが教師だろうが客であれば平等に扱うことをモットーにしている以上、どうしても無下には出来ねえ……！　だが、あの学園長がどんなエロ同人誌を所望しているんだ……？　ハッ！　まさかそんな！

「……学園長つて、やつば高城さんの事が好きなんすかね？」

「……お前も段々、吉井と同じレベルの思考になつてきているな」  
実に心外だ。訴訟も辞さない。

——学園長室。

「で、何の用ですかい。学園長さんよ」

「どういふつもりだ学え——ババア」

「……アタシは岡崎だけを呼びつけたつもりなのに、なんで坂本までいるのかね」

俺は目の前の高級そうな椅子に偉そうに腰掛ける白髪のババアこと、学園長にそう尋

ねた。その雄二がいる。どうやら今回のシステムの調整について詳しい事をしてもらうつもりで俺に着いてきたらしい。明久は島田に処刑されてる最中なのでいない。

あ、ちなみに雄二の召喚獣は狼男だったぞ。特徴は野生だつてさ。

「断る。お前らみたいな人をババア呼ばわりするクソガキ共にわざわざ一から話す義務はないからね」

「そうか、それはすまなかつたなババア長」

「その呼び方は今までで一番酷いさね!?!」

本当に酷い言いようだ。愛しの高城さん（笑）が聞いたら泣いちやうかもなあ。

「んで、ババア。正直なところどうなんだ。きちんと復旧するのか?」

「はあ? 復旧? 何を言っているんだい。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」

「いや、明らかに調整失敗しているだろうが」

「いいや、違うね。アレはちよつとした遊び心さ」

「は?」

意味がわからず、間拔けた声を出す俺と雄二。

話を聞くと、どうやらこの調整は季節に合わせた夏仕様であり——現在企画しているイベント「召喚獣肝試し大会」に向けてのものらしい。

だがおかしい、普通ならそういうのはあらかじめ生徒や教師に説明しておくべきではないのか。俺達はもちろんのこと、鉄人でさえ調整の詳細は知らされていない様子だった。いくら学園のトップとはいえ、校内イベントの為にシステムの変更なんて大掛かりなことを独断で進めていいワケがない。

つまりこのババア……肝試しするのは建前でまた何か別に企んでやがるな。

「おい、だとしたらなんで俺の召喚獣がカ○ドウそつくりなんだ」

「おや、アンタなら喜ぶと思っただがね。ちようどアンタの腕輪の能力とドンピシャだったし。嫌いだったかい？」

「いいや、そんなことはねえけどよ」

「つーか大丈夫なのかよ勝手に使つて。文月のスポンサーの中に集○社とかいたらどうすんだよ、バレたらマジもんで怒られるぞ著作権とかそんなところで。多分土下座の一つや二つじゃ済まねえぞ。」

「夏休みでも投稿する可愛い生徒達への、アタシからのささやかなプレゼントさ」  
「プレゼントねえ……。ま、ババアがそう言うのならそういうことにしておくか」  
「ん？ なんだ雄二。お前にしちゃ、やけにあっさり納得するな」

悪知恵が働くコイツのことだ。もつと強く詰め寄るかと思つてたんだが。

「別にここでババアに『実は調整失敗だった』なんて言わせたところでメリットはないだ

ろ。だったら、学園長のありがたい心遣いに甘えさせてもらおうぜ」

「え、じゃあ本気で召喚獣使つて肝試しなんてするのかよ？」

「ああ。学園長もそれを踏まえた上でのプレゼントだつて言つてるんだろ？俺達に召喚獣の異変がバレた以上、世間体を考えると学校側も何もしないわけにはいかないだろうしな」

「？つまりどういうことだつてばよ」

「試験的なシステムという名目で召喚システムを運営している以上、学園側はシステムの調整を失敗したなんて易々と言えないんだ。隠しきれぬならそれでよかつたが、生徒にバレた以上はどうしようもないだろ？」

要するにスポンサーからのバッシングを避ける為に、わざわざ肝試しなんてものを計画していることにし、調整失敗をうやむやにしてやれつて魂胆らしい。

なんつーか、大人の世界つて色々めんどくせえな。いくらプロだからつて普通の人間なんだから一度や二度のミスくらいするだろうに。それを快く受け入れられないようじゃ、人の上に立つ資格なんて到底ねえと俺は思つてる。

「じゃあ、残り二日の補習期間は肝試しつてことでもいいんだな？」

「いいや、ただの肝試しなら却下さね。あくまでも学習意欲向上の為さ。見た目だけでワイワイ楽しむのは授業数にはカウントしないよ」

「それなら道中にチェックポイントでも作って、そこで勝負させるか。これなら互いに公平だろう？」

「そうさねえ……。ま、ルール次第によつては、認めてやろうじゃないか」

「よし、決まりだな」

満足そうに頷く雄二。

肝試しねえ……。召喚獣がメインとはいえ、あんま気乗りしねえクソイベだなあ。

「うし、話は終わりだ。教室に帰ろうぜ大悟」

「あー、俺はまだ学園長に用があるんでな。すまねえがもう少しここにいろわ」

「そうか。なら俺は先に帰るぜ。そろそろ明久の処刑も終わっただろうし、あんまり長いと鉄人の相手が面倒だからな」

「悪いな。俺もすぐ戻る」

そう言い残して雄二が学園長室から出ていく。

そして二人になり、俺は話を切り出した。

「んで、俺に対する用事つてのは？」

「ああそうだったね。だがその前に……。どうだいその腕輪の調子は？　もう半年近く経

てば慣れてきたと思うんだがね」

「腕輪？ まあ、確かに前よりは使いこなせてますよ」

そう言うて俺は右の手首に装着している腕輪を見る。これは試験のそれぞれの科目においてかなりの高得点をとった生徒にのみ支給され、召喚獣を強化出来るアイテムだ。ウチで言えば俺と姫路、ムツツリーニ、条件の例外として明久が所持している。ただし俺のだけはその中でも特別仕様になっていて、召喚獣を巨大な龍に変身させるという強大な力を備える反面、使用者の体力を奪い取り、とてつもない疲労感を与えるというフィードバック付きの代物だ。

本来であれば危険過ぎて実用はさせないつもりだったのだが、ちようど腕輪が完成したタイミングで『青少年育成プロジェクト』を知り、これはチャンスだと思つて参加し、当時模範囚であつた俺を少年院から引き抜いて文月に転校させたのだ。元々俺の噂を聞いていたババアは真つ先に俺にこう言つてきたのだ。『アタシの研究に力を貸してもらふよ』と。まあ早い話が人体実験である。人よりも体力に優れている俺を実験台とし、この腕輪を使わせて定期的にデータを採取する。当然拒否はさせない。何故なら自分俺に対して多大なる恩恵を与えているのだから。それがババアの描いた一連のシナリオだつたのだ。

「最初聞いた時はマジかつて思った。人のことモルモットにする気がつてな」

「アタシは純粋なボランティア精神であるプロジェクトに参加したワケじゃないからね。前歴持ちの途方にくれているガキに居場所を提供してやってるんだから、それなりに対価は求めてもバチは当たらないさ」

「今の言葉、スポンサーが聞いたらどう思うかね」

「それは言わないでくれよ。アンタは本来不可能だった高校生活を送れる。アタシは自分の研究成果を余すことなくこの目で見ることが出来る、実にWin—Winな関係だろう？」

まあ、その考えに否定はしない。

そのおかげで俺は相棒と再会し、明久達に会うことが出来たんだからな。その代償として実験台になるぐらいなら、お安いご用だ。

「それで、本題はなんすか？ いきなり呼びつけといて経過観察だけってことは無いんでしようよ」

「ああそうさ。実はね……また新たな腕輪を開発したから、そのテスターをしてもらいたいのか」

「新たな腕輪？」

そう言つてババアが机の引き出しから取り出したのは、ケースに入った青色の腕輪だ。



「これを俺につけろと?」

「そうさ。もちろんこれはアンタにしか使えない——召喚獣と生身で殴りあう事の出来る馬鹿力と喧嘩の腕をもつ人間にしかね」

「アンタ……知ってたのか」

ババアがからかう様な笑みを浮かべて俺にそう言った。

強化合宿の時、俺は女子達から覗きの冤罪をかけられ、真の覗き犯を暴く目的で雄二達と共に女子風呂に向かい、道中で行く手を遮る学年主任の高橋と対峙した。圧倒的な実力差を見せられ、万事休すに追い込まれた。

そこで俺はあえて召喚獣ではなく生身で高橋の召喚獣に挑み、最終的には他の教師に邪魔されて勝てこそしなかったものの、サシの戦いだけでいえば互角以上の結果を残せたのだ。

「高橋先生からその話を聞いた時は開いた口が塞がらなかつたよ。人間のパワーを遥かに上回る召喚獣、それも教師のに対して無策に拳で渡り合おうとするだなんてね。無謀もいいところさ」

「だろうな。けど俺アただ、ほんの少しでも勝てる可能性に賭けたつもりだ。点数的にも操作の技術的にもあの人には敵わなかつたからな」

「下手したら、怪我じゃ済まない可能性だつてあつたんだよ? それをわかつてるのか

い」

「ええ。でも俺にはそれよりも譲れねえモンがあつたんです」

「なんだい」

「男の尊厳と誇り。そして……ダチの名誉をこの手で取り戻すことだ。その為ならたかが怪我の一つや二つなんて、上等だつてんだよ」

「はんつ、アンタらしい実に愚直で青臭い考えだね」

「……………」

「……が、アタシは嫌いじゃないよ。そういう清々しいレベルで気持ちのいいバカはね」  
そう言つて、ババアはケースから腕輪を出して俺に手渡した。

それを受け取り左手首に嵌める。うん、着け心地は悪くねえな。

「折角だ。今この場で試してみておくれ」

「今だと？」

「ああ、特別にこの部屋にだけ召喚フィールドを展開するから、召喚獣を喚び出して腕輪の能力を使いな。やり方は元あつた方と同じ、能力の名称を口にすれば発動するようになる」

「わかつた。だかよ学園長、誤差動とかは大丈夫なのか？」

「それも兼ねての試運転さ。データ上は問題ないけど、まだ人間で試してないからね。」

心配ない、もし何か異常が発生したらすぐにフィールドを消して被害は出させないようにするよ」

「そうかよ。ならその辺は任せませ——試獣<sup>サモシ</sup>召喚<sup>モン</sup>！」

学園長室内に召喚フィールドが現れ、それに続いて俺は召喚獣を喚び出す。仕様変更とやらで百獣のカイド○そっくりと化した俺の分身を。

そしてババアがその新しい能力の名前を俺に伝えた。……おいおい、マジかよ。

「それじゃ、始めておくれ」

「おうよ。さて、どんなものか見せてもらおうじゃねえか。いくぜ——」

「——■■■■!!!」

俺はその技名を力強く叫ぶ。

すると、新しい腕輪が激しく光輝くと共に——能力が発動した。

——能力発動後。

「……………」

「——成功、と見てよさそうだね」

「……アンタ、マジでとんでもねえモン作りやがったな。確かにこの能力は危険過ぎて俺以外じゃ扱えねえつてのにも納得だ。というか俺でも使いこなすにはかなり時間がかかりそうだな。ったく、発明家つてのは昔も今も無茶苦茶しやがるんだな」

「それは誉め言葉として受け取っておくよ。それで……どうだい実際に使ってみての感想は？」

「感想？ そんなもん決まってるんだろ——」

「——最高に面白えな。コイツあ」

—— Fクラス教室

「たでーま戻りやしたー」

「大悟おおおおおおおーっ!!!」

「うおっ!?!」

新しい腕輪の試運転を終えて教室に戻る。すると入るやいなやいきなり明久に掴みかかられた。顔は島田に散々殴られたのか、アンパ○マンよろしくふっくら仕上がっている。

「お、なんだ明久。ブサイクな面が更に醜くなってんじやねえか」

「黙れカス！ 貴様よくも僕を騙してくれたな！ 何が女性はコンプレックスでも誉められたら喜ぶものだ!?! 全然真逆の結果だったじゃないか！」

「あんな嘘に騙される方が悪い」

「殺す!! 今日という今日こそは貴様をこの手で殺し尽くす!!」

どうやらさっきの事で相当お怒りらしい。

やれやれ仕方ないな。俺はそう思いとりあえず金ツチで俺を殴ろうとする明久を手に制す。

「まあそう怒るな明久。お詫びにこれでも見て頭冷やせ」

「なんだよ。今さらエロイラストなんかで僕を黙らせようっていうのか——」

ペラツ（船越女史の脱糞ア○ニーエログロイラスト）

サツ（素早く目を背ける俺）

ゲゴゴボガボボゴ（盛大に吐く明久）

白目を剥いて気絶する明久。

よし、これで大人しくなった。やはり船越女史の破壊力は絶大だな。

「何してる岡崎。早く席につけ、補習を再開するぞ」

「へーい」

俺は席に戻る。

……しっかし、肝試しなあ……。あんまりやりたくねえなあ……。

## 第七十五問 T O S A T U 行進曲 ♪

— side 明久

『おーい！ 誰かその釘をとってくれー！』

『暗幕足りないぞ！ 体育館からひっぺがしてこい！』

『ねえ、ここの装飾って枯れ井戸だけでいいのー？』

翌日、文月学園の新校舎では肝試し用の改装作業で大いに賑わっていた。

どうやら僕が美波に折檻を受けている間に雄二が学園長に話を聞きに行ってたらしい。例の召喚獣の妖怪化現象はこのイベントの為のものだったらしい。

「それにしても、まさかAクラスまで協力してくれるとは思わなかったよ」

「Aクラスとてワシらと同じ高校生じや。勉強ばかりでは息がつまるじやろうからな」「そりゃそつか。遊びより勉強が好きな高校生なんてそうそういないもんね」

肝試しに使う教室はAとDクラスだ。



折角やるなら、広さがあって涼しさを演出出来る教室を、と思ってダメ元で提案したんだけど、まさか本当に使わせてもらえぬとは。

秀吉の言う通り、いくら勉強熱心なAクラスでも限界があったのだろう。このイベントに対して真面目にかつ楽しく取り組もうとしているのが分かる。

けど、全員が全員そうじゃないようで、

「わ、私は出来れば、お勉強の方が……」

「だ、大丈夫よ瑞希。どうせ作り物なんだし、お化けはウチらの召喚獣なんだから、怖いことなんて何もないわ」

「それはそうですね、それでもやっぱり苦手です……」

あまり気乗りしていない様子の姫路さんと美波。

「図に乗るなよバカめ。俺の使うベヨネッタ姉さんに勝てるなど幻想も甚だしい」

「……………笑止。俺のメタナイトこそ絶対だ」

「ハッ！ 大悟もムツツリー二も須川も、戯れ言は俺のピカチュウを倒してからほざくんだな！」

「言つたな坂本！　なら見せてやる！　俺の操るゲーム&ウオッチの強さを！」

何故かAクラスのシステムデスクを勝手に使つてスマブラをやっている大悟、ムッツリーニ、雄二、須川君のバカ四人。

多分根っから肝試しに興味が無いんだろう。当の雄二もイベントの手回しだけはちゃんとして後は勝手にどうぞというスタンスらしい。にしてもやれやれ、アイツらは揃いも揃つて何を言つてるんだか。僕の使うフォックスこそ最強無敵であるというのに。まあ、アレはほつといていいかな。

「ア、アキはこういうの平気なの？」

「僕？　僕は特にお化けとかは大丈夫だよ。美波こそ、こういうのは苦手じゃないの？」  
「そ、そんなことないわよ！　ウチだつてお化けなんて、怖くも何ともないから目を瞑つていても平気なんだから！」

いや、目を瞑っている時点で苦手な証拠なんじゃ……。

よし、ちよつとからかつてみよう。

「そう言えば美波、噂で聞いたんだけど」

「な、何よ」

「この学校の建っている場所って、実はワケありらしいよ」

「わ、ワケあり……?」

「なんですか、それ……?」

隣の姫路さんも不安げにこちらを見ている。

「あははっ。それはね——本当にお化けが出るんだってさ!」

「きやあああああつ!」 ↑ 姫路さんの悲鳴

「いやあああああつ!」 ↑ 美波の悲鳴

ボキイツ……。

「みぎやあああああつ!」 ↑ 驚いた美波に勢いよくハグされ、頸椎に深刻なダメージを負った僕の悲鳴

まさかこんな形で反撃をくらうなんて。

文字通り痛いほどに美波の恐怖が伝わってきたよ。

「み、美波……。冗談だから、離れて——」

「……吉井」

「きやあああああ——っ!」

あわや腰骨が砕けようかという時、誰かに背後から話かけられる。

見ると、そこには学年主席の霧島翔子さんが僕の方を見て立っていた。

「だ、誰かと思つたら翔子ちゃんですか……。驚かさないでください……」

「……ごめん」

申し訳なさそうに謝る霧島さん。

「それで、どうしたの霧島さん。僕に何か用？」

「……あそこにあるロッカーを動かしてほしい。吉井の召喚獣なら出来ると思う」

そう言つて霧島さんがAクラスの教室の隅にあるとても大きなロッカーを指差した。確かにあれを人の力で動かすのは難しいだろう。

「うん、全然いいよ。それじゃ、召喚許可を」

「……もう、あそこにいる田中先生に頼んである」

「オツケー。んじゃ、試獣<sup>サツモ</sup>召喚<sup>モン</sup>っ」

美波に解放してもらい詠唱を口にする。

すると床に幾何学模様が描かれ、僕のデュラハンと化した召喚獣が姿を表した。いつもと違つて手足が長いから、こういつた作業の時は便利かもしれない。

「このロッカーをどければいいんだね？」

「うん」

召喚獣をロッカーの前に立たせ、両手でがっしりと掴ませて持ち上げる。

すると、その勢いで頭がコロリと落ちてしまった。

「……………っ!？」

姫路さんと美波が息を飲む。周りは肝試しの為に薄暗い状態だし、そうなるのも無理はないかな。

でも、やっぱりちよつとしたことで頭が外れちゃうのは不便だ。テープでも貼って固定しようかなとも考えたけど、そうなるのと召喚獣を消してまた喚び出す毎にテープを貼り直さなくちゃならないから手間がかかるし、首がついたままだと肝試しの意味がなくなってしまう。

うーん……やっぱりこのままでいいや。折角だから今しか味わえないこの感覚を楽しむとしよう。

「じゃあ動かすよ。——よいしょつと」

頭は床に置いておく。

あとはこのロツカーを適当な場所に——

ガンツ!

「!? 痛ツツ!! 何なに!? 急に頭から激痛がするんだけど!？」

「吉井明久……!!」　ブタ野郎の分際でお姉様からの抱擁を受けるなど言語道断……その大罪、死を以て償いなさい……!!」

見ると、僕の召喚獣の頭をDクラスの清水美春さんが思いつきり踏みつけていた。抱擁、とはさつき僕が美波に抱きつかれたことだろう。相当お怒りだ。

「し、清水さん。その足をどけて……!!」

「では今から学校の外に出て、トラックに五回轢かれてから諦めてください」

「五回轢かれる意味がない!」

どうあつても僕の死は免れないというのか……!!

『待て清水!　吉井の頭を渡すんだ!』

『それ以上は看過できねえな!』

そこに横溝君率いる仲間達が助けに入ってくれた。

「皆、ありがとう!　助かるよ!」

「ふん、邪魔をしないでください。このブタ野郎にはお仕置きが必要なんです」

『いいからそれを大人しく渡すんだ!』

『そうだ!　俺達に従え!』

『それはお前には預けておけねえ!』

「……邪魔をするな。と言ったはずですが……いいでしょう。なら吉井明久と一緒に貴方達もまとめて——」

『『お前は分かっているじゃない！ 俺達が本当の苛めを見せてやる！』』

……………えっ。

「……ほう、本当の苛めですか」

『そうだ！ 俺達はこれまで何回も吉井を酷い目にあわせてきた！』

『自慢じゃないが拷問や処刑の方法もお前よりは心得ている！ 安心して俺達に任せてくれ！』

「わかりました。そこまで言うのであればこのブタ野郎の頭を託しましょう」

まっつて清水さん！ 託さないで！ そんな極悪非道な連中に惑わされないで！

『感謝するぞ清水。それじゃあ行くぞ皆！ 女子に抱きつかれるという裏切り者への、

血の制裁を始めよう！ 試獣召喚っ！』

『『試獣召喚っ!!!』』

召喚フィールドにゾンビの大群が溢れる。

『よし、いくぞー。目指せオリンピック!! (ゴンツ)』

「なでしこジャパンっ!?!」

『よく言うだろ。友達はボールだ……っつてなあ!!』

「逆だよ！ それを言うならボールは友達じゃないのあだあつ!？」

『ま、俺達はお前を友達として認めてないがなあつ！（ゴンツ）』

「だったら蹴るなうぎやああつ!？」

『サッカーやろうぜ!!（ゴンツ）』

「いい加減にしろごおおつ!？」

僕の頭でゾンビ達がサッカー。これを地獄絵図と言わずしてなんと言おうか。

だ、誰か助けて……！

「待つんだ。それ以上吉井君を苛めるのなら、僕が許さない」

アレは……久保君！

まるでピンチの時に現れるヒーローのような颯爽とした彼の登場に、僕は心から安堵した。

「ありがとう久保君。助かるよ……!？」

「気にしないでいいよ吉井君。何故なら君のことは僕が守るから——いつまでもね」

いや、別に今だけでいいんだけど……。

「Aクラスの久保君……でしたか。美春達の邪魔をしないでもらえますか」



「そうはいかないよ清水さん、そしてFクラスの皆。君達が束になってこようとも、僕は一步も譲るつもりはない。守るべきものの為に……ね」

久保君と清水さんが同時ににらみ合い、やがて話し合いは無理だと悟ったのか、互いに召喚を開始した。

仕様によりどちらも等身大の姿になってるけど、何故か装備は全く同じだ。

「秀吉。あれは何の妖怪か分かる?」

「ふむ……、格好から察するに、迷ひ神あたりじやろうか」

「迷ひ神?」

「人間を迷わせる妖怪で、一説によると道に迷ってそのまま果ててしまい、成仏せず同じ道連れを探している人間の魂、と言われておるの」

つまり、妖怪の特徴としては人の道に迷ってしまい、他者を自分と同じところに引きずり込もうとするところか。

うーん、清水さんは思い当たる節があるから理解出来るけど、どうして真面目な久保君まで同じ召喚獣なんだろう?

「者共! 一斉に久保利光にかかるのです!」

『『『おおーっ!!』』』

「来るなら来い！ 僕は絶対に負けない！」

ゾンビ軍団&迷ひ神 VS 迷ひ神の戦いが始まった。

久保君の迷ひ神がゾンビの群れに襲いかかり、清水さんの迷ひ神率いるゾンビ軍団がそれに対抗して叩き、噛みつき、引つ掻く。

それによってゾンビの四肢がちぎれ、肉が飛び散り、緑色の汚い血があたり一面に飛び散る。その光景はまるでバイオハザードのラクーンシティを彷彿とさせた。

「「きゃあああああーっ！」」

姫路さんや美波はもとより、クラスにいた他の女子生徒達も悲鳴があがる。まあ、グロテスク過ぎて普通の女の子にはキツイよね……。

「あ、雄二テメエ！ それは俺が狙ってたスマッシュボールだぞこの野郎！」

「んなモン知るか！ こういうのは早い者勝ちなんだよ——つてうおおいムツツリーニ！ なんつうタイミングでスマートボム投げてください！ 解除されちゃったじゃねえか！」

「……………油断した方が悪い（ニヤリ）」

「人間の屑がこの野郎……………」

「いいな！ やっぱり戦いつてのはこうでなくっちゃ面白くねえ！」

向こうは向こうで別のことで盛り上がっているようだ。

『こ、こつちに来ないで！』

『大丈夫かミホ!? チクシヨウ、俺の彼女をよくもビビらせてくれたな！』

『彼女だと…………? コイツ今俺の彼女って言ったぞ！ 裏切り者だ！』

『『殺せええつ!!』』』

あつという間に広がる混乱の輪。

今やこの教室は阿鼻叫喚たよう妖怪&スマブラ大戦現場と化していた。さすがに騒ぎすぎだ、そう思った時、

バンツ！

「「お前らうるせえんだよ!!!」」

『『え?』』

いきなり誰かが大声で怒鳴り込んできた。

それにより全員（スマブラ連中は除く）がピタリと戦いと騒ぎを中断して、声のした方を見る。

「騒がしいと思ったらやっぱりまたお前か！ 吉井！」

「お前はつくづく目障りなヤツだな……！」

「あ、貴方達は！ —— あ、ああ……えつと、誰だっけ？」

「うおおい!!」

名前がすぐに出てこない。ええつと、顔は見たことあるんだけどな……。

「常村と夏川だ！ 名前くらいしっかり覚えとけ！」

「常村と夏川……、ああ。あの変た—— 変態先輩でしたっけ！」

「全然違えよ！ つうか今言い直そうとして途中でやめたよな！ お前俺達を心の底から変態だと思ってるのか！」

「いや全く。ブラジャーを頭に被ってた変質者ぐらいにしか思っていないですよ」

「なんでそういう事だけはしつかり覚えてやがんだ!? つうかアレは俺じゃなくてお前らのせいだろ!」

そうだそうだ。ようやく思い出した。

清涼祭で僕らの中華喫茶に根も葉もないクレームをつけて凧花さんにボコられ、Aクラスの妹メイド喫茶では大悟と雄二にボコられ、最終的には召喚大会の決勝で僕らに勝利をくれた二人組じゃないか。懐かしいなあ。

「それで常夏先輩。どうしたんですか?」

「テメエ……名前を覚えられないからつてまとめやがつて……!」

「さすがは吉井だ。脳みその容量がチンパンジーレベルだぜ」

なんて失礼な。

「つていうかお前らさつきからギャーギャー喧しいんだよ! 俺達への当てつけかコラ!」

「夏期講習に集中出来ねえだろうが!」

他の三年生達も「そうだそうだ」と騒ぎ立てる。

なんだか殺気立って見えるのは、受験勉強でピリピリしているからだろうか。そんな時にぎやあぎやあ騒がしくされたら怒るのも無理はない。ここは僕らに非があるのだから素直に謝っておくのが得策だろう。

「すみません。まさか上の階まで響いてるとは——」

「ああっ!! チクシヨウ!! 同志に復帰邪魔されたあ! 残りストックもう一機しかねえよ!」

「ムツツリーニ……テメエまさかこのゲーム、こつそりやりこんでやがったな!」

「答える必要は無い(キリッ)」

「クソオツ! 俺が一抜けかよ!」

……………。

「……まさか上の階まで響いてるとは——」

「よっしやあ!! ここからは三つ巴の戦いといこうじゃねえか雄二、同志! 泣いても笑っても勝者は一人だ!」

「……………受けて、立つ……………っ!」

「上等だ! 二人まとめて吠え面かかせてやるよ! 覚悟しやが——」

ブチッ

「いつまでやってるんじゃあああああつ！」

「「ああつ?!」」

召喚獣でバカ四人の方角に向かって全力タツクル。

システムデスクごとゲーム機をぶっ飛ばした。

「おい明久。いきなりなんてことしやがる」

「……………折角盛り上がったのに」

「男の勝負に横槍を入れるなんて無粋なヤツだな」

「黙れバカ共！ 呑気にゲームなんてやってる場合じゃないだろ！ 状況を見ろ状況を

!!」

「「状況?」」

僕の言葉に、ようやくコントローラーを置いて周囲の様子を見回す雄二、大悟、ムツ

ツリーニ。

「おい明久。なんで三年がこんなところにいるんだ?」

「それになんか揉めてるっぽいけどよ」

「……………何かトラブル?」

「実はかくかくしかじかで」

僕は三人に事の顛末を説明した。

「なるほどな。俺達のバカ騒ぎに怒って乗り込んできたと」

「そうなんだ」

「ハッ、そりやまた随分と酷い言いがかりじゃねえか」

「え？」

雄二の発言に首を傾げる。

「言いがかり？ どういうこと？」

「確かに俺達が騒がしかったのは認める。けどここは新校舎だ。古くてボロい旧校舎ならともかく、試召戦争という騒ぎを前提としてつくられた建物で、下の階の騒ぎ声程度が上の階の戸を閉めた教室にまで届くワケがない」

あ。言われてみれば確かに。

普通の学校でさえもそういう音が漏れにくい作りになってるもんね。

「？ つまりアレか。この三年共は難癖でもつけにきたのか？」

「だろうな。大方、その夏期講習とやらに飽きてフラフラしてるところで俺達二年が楽しそうに騒いでるのが気に入らなくて、八つ当たりしにきたってところじゃないか？」

「……………っ！」



「その反応、凶星みたいだな」

雄二がそう三年生に言い放つ。

常夏コンビや他の三年はバツが悪そうに目をそらした。

「それで、何か弁明はあるか先輩よお」

「ご、ごちやごちやうるせえ！ それじゃあ逆に言わせてもらおうが坂本！ お前らは迷惑極まりないんだよ！ 学年全体の覗き騒ぎに、挙げ句の果てには二年男子が全員停学だつて?! お前らのせいで俺達三年までバカだと思われたらどうしてくれんだ！ 内申に響くじゃねえか！」

「だいたいお前から二年は出来の悪い連中が多すぎんだよ。観察処分者にA級戦犯に元凶人のキモオタ野郎。学園祭で校舎を花火で破壊したのだからそのクズトリオだしな」

「だつてさ雄二、大悟。謝りなよ」

「は？ お前と大悟のことだろ」

「いいや違うね。明久と雄二が言われてんだらうよ」

「お前から三人ともだ」

「「嘘だツツツ!!!」」

「いや当然だろ」

「むしろお前から以外にいねえよ」

思わずひぐらしのレナちゃんみたいな反応をしてしまった。

待ってくれ。こんな人でなしとキモオタが僕と同列だつて？ 実に不愉快極まりな

い。どうやらこの先輩達、人を見る目はあまり無いようだ。

「フツ、やれやれこの俺も下に見られたものだ。こんなカス共と一緒にされるなんてよ」  
「分かるぜ。俺もお前らみたいながス共と一緒にされるとストレスで禿げそうになる」

「そうだよ。君達のような人間の底辺を体現したような存在と一律にされるとか、自分で頸動脈を切つて死にたくなるくらいの屈辱だよ」

「………!!! (ゲシゲシゲシゲシ)」

無言でガンを垂れ、それぞれの足の脛を蹴り合う僕ら。

ええい往生際の悪いヤツらめ！ どうしてそう自分達の事を素直に客観視出来ないんだ！ そんなんだからいつまでたつても他人からバカ扱いされるんだよ！ by

観察処分者

「美春もこのブタ野郎は気に入りませんね！」

いつの間にか近くに来ていた清水さんが僕にだけ蔑むような視線を送りつつそう言い放つ。うう、やつぱり嫌われてるなあ……。

「おお。その縦ロールは話せるみたいじゃねえか」

「黙らないブタ先輩。気安く話しかけないでくれますか。家畜臭いですっ！」

「いいぞ。もつと口汚く罵ってやるがいい清水」

「わかりました先生！ さつきから聞いていれば美春達人間様に対して日本語を使っているようですが、不敬も甚だしい！ お前らみたいなブタはこの吉井明久と一緒にさつきと人里離れた家畜小屋で屠殺されて出荷されて食卓で残されて最後には肥溜めに生ゴミとして捨てられるのがお似合いですね！ 分かりましたかこの人間の姿形をしたゴキブリ以下のキ○ガイブタ！ お前らといると鼻がもげるぐらい臭っせえんですよ!! はい！ 屠ー殺♪ 屠ー殺♪ 屠ー殺♪ (パンパン)」

「屠ー殺♪ 屠殺っ♪ (パンパン)」

「T、O、S、A、T、U、TOSATU♪ T、O、S、A、T、U、TOSATU♪ 屠ー殺っ♪ 屠殺屠ー殺、解体♪ 屠ー殺っ♪ 屠殺でグロテスク♪ (タンタンドンタン)」

「つ、ンメエら……!!! (ギリギリ)」

どこからか取り出したタンバリンを叩きながら、Va○i l l a のリズムでテンポよく常夏コンビをけなし尽くす清水さんと大悟。にしてもVa○i l l a って……また随分とマニアックな曲のチョイスだな……。確かにあの曲、不思議と一度聞いたら頭に残るけどさ。

『そうだそうだ！ さっさと帰れ！』

『何が先輩だ！ ただ一年早く産まれたっただけだろ！』

『失せろ！ 小暮先輩だけ連れてきてそれ以外は失せろ！』

『ンだと二年コラア！』

『覗き魔共が調子に乗りやがって！ 第一お前らなんか小暮は不釣り合いなんだよ！』

『礼儀つてもんを教えてやろうか！』

清水さんを皮切りに二年（主にFクラス）と三年が一触即発の雰囲気と化する。

ああ、これらまた一争い来そうだな。そう思った時、

「そこまでにしときな、ジャリ共！」

「——あ？」

「あ、学園長」

そこに現れたのは白髪 of 山姥——じゃなく学園長だ。

「なんだババア。何しに来やがった」

「学園長と呼びなクソガキ」

雄二の罵倒を意に介さず、学園長は続ける。

「やれやれ……。肝試しの準備がどこまで進んでるか様子を見に来てみれば……。本当  
にトラブルの絶えない連中だねアンタらは」

「トラブルつつうか、向こうが勝手に俺らに喧嘩売りに来ただけっすけどね」  
確かに。

「でも学園長！ コイツら先輩への態度つてもんがまるでなくて——」

「黙りな。夏期講習をサボって後輩の行事につまらない茶々を入れるようなヤツが偉そ  
うに態度がどうかかなんてほざくんじゃないよ」

「うぐっ……」

「人の事をとやかに言う前に、まず自分の行動を省みるこつたね。それが出来ないようじゃ、いざ大学生になった時に大きく恥をかくことになるよ」

『『……………』』』

一氣に押し黙る先輩方。

さすがベテランの教育者だ。言葉の重みが違う。

「…………けど、ずっと机に向かって勉強漬けで、鬱憤が溜まつてるのも分かるね。少しくらいは息抜きが必要だろう——よし、決めたよ」

「？」

「今回の肝試し、三年にも参加してもらおうじゃないか」

「はっ。」

『『えっ？』』』

突然の提案に、その場のほぼ全員が聞き返す。

「三年生にも肝試しに参加してもらおう…………ですか？」

「ああ。こんなところでつまらない小競り合いをして後々余計なトラブルを起こされても困るからね。だったら休息も兼ねて、そうした方が有意義に時間を使えるってものだろう」

そう言って学園長が常夏コンピに目を向ける。すると二人は心の底から嫌そうな表

情を見せて答えた。

「冗談じゃねえ。こんなクズ共と仲良く肩を並べて肝試しなんかやってられるか」

「だよな。胸糞悪い」

「悪いけどこれは決定事項さ。明日の夏期講習と補習の最終日は二・三学年合同の肝試しにするよ」

「な……………!?!」

「もちろん補習と講習の参加者は原則全員参加だよ。これはあくまでも授業の一環だからね。いいね。じゃあ、あとは頼んだよ」

そう告げると、学園長は満足したように颯爽と教室を出ていった。

「なんだか、どんどん面倒なことになってるね」

「全くだ。だがこうなったら仕方ねえ……………そういうワケでセンパイ。楽しくやろうぜ?」

「うるせえ! お前らなんざと仲良くするなんざご免だ!」

「だろ。俺達もアンタらは気に食わねえ——つてことで、こういうのはどうだ?」

「ああ?」

「驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負をする。適当な罰ゲームでもつけてな。これならわざわざ仲良くする必要も全くないし、手取り早く勝敗をつけられる。良い案だ

ろ？」

確かにそれなら無理して仲良くする必要はない。更に溝は深まるとは思うけど。

「それで、どっちがお化け役をやるかだが——」

「決まってる！ 当然俺達だ！」

「お前らにお灸を据えてやらなきゃならねえからな」

「ああ。別にそれで構わない」

「決まりだな。それで、ルールと罰ゲームの詳細は？」

坊主先輩が聞くと、雄二は制服の懐からプリントを取り出した。既に今回の肝試しのルールを考えておいてくれたらしい。

僕も常夏先輩同様、それを受け取って中身を確認する。

えーっと、どれどれ内容は——

くく肝試し、ルールくく

①原則二人一組で行動する。尚、一人になっても失格にはならない。

②二人のうちどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者ともに失格とする。

(悲鳴の大きさがマイクで拾える音声の一定値以上になった時点でアウト)

③チェックポイントはAくDの各クラスに一つずつ。合計四ヶ所とする。



④ チエックポイントでは各ポイントを守る代表者二名と召喚獣で勝負し、撃破でチエックポイント通過となる。

④ 一組でもチエックポイントを全て通過出来れば驚かされる側、通過者を一人も出さなければ驚かす側の勝ちとする。

⑥ 驚かす側の一般生徒はあくまでも驚かすだけにし、召喚獣でのバトルは行わない。

⑦ 立会人の教師は各クラスに一名ずつ配置する。

⑧ 通過の確認用として驚かされる側はカメラを用意する。

「へえ。結構凝ったルールだね。面白そうだよ」

「あとはこれに設備への手出しを禁止するって項目を追加する予定だ。ババアがうるさそうだからな」

確かに、それは僕も激しく同意する。

「坂本。このチエックポイント毎の勝負科目はどう決める？」

「それについては既にこっちの方で決めさせてもらった。安心しな、ちゃんと有利不利がないように、受験で使うであろう科目がほとんどになってる」

「そうか。それならいい」

「坂本よお。それよりさっさと負けた側の罰を聞かせろよ」

坊主先輩がいやらしい笑みを浮かべて言う。あの顔はなんとしても僕らをはめてやろうって顔だ。

「そうだな。じゃあ負けた側は二学期にある体育祭の準備や片付けを相手の分まで引き受ける、ってことでどうだ？」

「体育祭の準備と片付けだあ？　おいおい坂本。お前にしちや随分とヌルい提案じゃねえか。さてはテメエ、勝つ自信がねえな？」

確かに、雄二が提案したにしては簡単すぎる罰ゲームだ。てつきりもつと凄いなものを想像してただけだ。

「——ああ、俺も先輩と同意見だ」

「ん？」

すると、大悟が坊主先輩に乗っかる形で口を開いた。その事に雄二が少し驚いたような顔をして聞き返す。

「なんだ大悟。これじゃ不服だったのか？」

「いや不服も何も、その程度じゃ罰ゲームにならないだろって言ってるんだ」

「何だと？」

「いいか雄二。罰ゲームってのは互いが絶対にやりたくないと思わせるほどの『恐怖』

と「衝撃」を備えていることが必要だ。たかが学校行事の準備とか片付けのパシりぐらいじゃその条件をほとんど満たせていない。どうせやるんならよ……もつと徹底的にいこうぜ。ちよつと待つてろ。同志、悪いが運ぶの手伝ってくれ」

「……………もしかして同志。例のアレをここで使う気か？」

「おう。その方が罰ゲームとしては最高にハードで面白いだろ」

「……………確かに（コクリ）」

大悟とムツツリーニがそんな会話をしながら教室を出ていってしまふ。

なんだろうと疑問に思いつつ、しばらく待つていると、

ガラツ

「おまつとさーん」

「……………お待たせ」

ガラガラガラ

やけに大きな台車を押して二人が帰ってきた。

その台車の上には——一本の角ばった柱にレバーのついたメーター、それとハンマーのついた大きな振り子が装着されているという、見たことのない謎のマシンが乗っかっていて。なんだあれ……？

「……………初お披露目。心が踊る」

「俺もだぜ。てことで待たせたな野郎共。コイツこそ俺とムツツリーニで秘密裏に開発した最大最強の罰ゲーム装置。その名も——」

「——シャルピー衝撃試験マシンだ」

第七十六問 Shall we シャルピー?

—— side 明久。

『なんだありや……?』

『し、シャル、ピー……えっと、なんだって?』

『なんか凄そうな感じがするな』

『兄貴と土屋、何をするつもりなんだ?』

クラスメイトだけでなく、その場にいた皆がどよめきだす。

当然だ。いきなり教室を出ていったかと思えば、あんな仰々しい機械のような装置を携えて戻ってきたのだから。あまりにも予想外過ぎて困惑してしまうのも無理はない。

そんな僕らの雰囲気によそに、大悟が言う。

「さてまずお前ら。そもそもシャルピー衝撃試験つてものが何だかわかるか?」  
もちろんNO。聞いたことすらない。

「ふむ、シャルピー衝撃試験……確かフランスの技術者ジョルジュ・シャルピーによって考案された実験だ。角柱状の試験片に対して高速で衝撃を与えることで試験片を破壊し、破壊するために要したエネルギーと試験片の靱性を算出するというものだろうか？」

岡崎君

「ハハ、さすがだな久保。その通りだ」

隣にいた久保君の答えに僕は小さくおお、と声を漏らした。

さすがが学年次席。その称号を持つに相応しい博識っぷりだ。僕にはさっぱりわからないけど。

「そしてこれは今久保が説明したシャルピー衝撃試験を行う為の装置——を、俺同志の手で多少のアレンジを加えつつ、限り無く忠実に再現した代物になっている」

「……………出来映えはかなり、いいと思う（コクリ）」

「え？ これ全部二人で作ったの？」

「おう。製図から部品加工、組み立てその他諸々だ。ま、もちろん専門の人間から技術と知識をちゃんと教わってからだけどな」

「……………かなり頑張った」

自慢気にそう語る大悟とムツツリーニ。

職人氣質で手先が器用なのは知ってたけど、まさかこんな精密そうな機械を一から作り上げてしまう程に優れているとは思わなかった。

「でもさ、なんでこんなものを作ろうと思ったの?」

「そりゃあお前、俺達の活動を邪魔する輩の始m——(ゲフンゲフン)ものづくりへの探求心だ」

「……………みー、とうー(コクコクコクコク)」

「どうせそこまで言ったなら最後まで言い切りなよ。あとムツツリーニ。その相槌はタイミングが遅すぎて全く意味を為してないからね」

「……………?!?(ブンブン)」

うん。コイツらしい、キッチンとしたゲスな理由だった。

「おい岡崎。余計なこと喋ってねえでさっさと説明を続ける」  
「ん? おっと、そいつはすみませんね」

坊主先輩に言われ、大悟が再び皆に向き直る。

「まずこの装置の使い方だ。まずはコイツをな——」

大悟が説明を始めた。  
その使い方が、

①レバーを引き上げ、ハンマーを所定の位置に持ち上げる



②ハンマーを落下させる



③振り上がりの高さを測定する

こういう感じだ。

「——とまあこんな感じだ。試験片が無いだけでほとんど本家の使い方と一緒にだ」  
いや変わらないと言われても、そもそも本家を使った事がないんだけど。

「どうすか、先輩ら」

「思ったよりは単純なんだな」

「ああ。もっと複雑な使い方をすると思ってたが。中身は高校レベルの物理学と変わらねえな」



「一応目的は罰ゲーム用つすからね。わざわざそれに不必要な機能を付けるワケがねえでしょ。時間も予算もねえし」

あ、これポケットマネーで作ってるんだ。

「んで、コイツでどう罰ゲームをやるんだ?」

「まさかこれで仲良く物理のお勉強をしましょうってワケじゃねえんだろ?」

常夏コンビが大悟に次々と聞く。

対する大悟は、もちろんと返しコクリと頷いた。

「じゃあ実際にやってみるか——雄二、これを」

「ん?」

ポフツ

大悟が雄二に何かを投げ渡した。それは——枕サイズのクッションと紐?

「おい大悟。こんなもの何に使うんだよ」

「いいからそのクッションを腰に巻いてセンサーのあるあその位置に立て」

「?」

首を傾げながらも、雄二は大悟の言う通り、クッションを紐で腰の位置に巻き付けて

装置のハンマーとちょうど対面になる場所に移動した。

「立ったぞ。次はどうす——」

ガシヤン！

「——は？」

ガシヤン！ ガシヤン！ ガシヤン！

「「——へ？」」

急に装置から鎖のようなものが飛び出し、雄二の手足をガツチリと固定した。え、なにこれ？

「……………準備完了（コクリ）」

「悪いな雄二。ちよつとばかりし大人しくしてもらおうぞ」

「……………は？ おいちよつと待て大悟、ムツツリーニ！ なんだよこれ！」

「いやー、助かるぜ。実はまだコイツ作ったばっかでテストプレイしてなくてよ。どの

くらいまでの強さと速さまでなら対象物が耐えられるかとか、そういうデータも何も無く  
てよ。せつかくだからデモンストレーションも兼ねて今取らせてもらうぜ」

「……………一石二鳥」

「話聞けよコラ！ テメエら、俺に何をするつもりなんだ？」

「かなりたてる雄二を無視し、こちらに顔を向ける大悟とムツツリーニ。

その表情は怪しげな微笑を浮かべ、どこか楽しそうな目つきをしている。僕は知っているぞ……ああいう顔をする時の二人は——何かとんでもない悪巧みをしている  
とっ！

「さて先輩方。そして野郎共。本格的な罰ゲームの説明だ」

「お、おう」

「まず罰ゲームを受ける人間をこうして装置の前に立たせ、手錠と足枷でしっかりと固  
定する。絶対に逃げられないようにな」

なるほど。固定された雄二に腰回りのクッション。そして目の前にはとんでもなく  
重そうなハンマー。にしてもあのハンマー、あんなのが当たったらとんでもなく痛いだ  
ろうなあ……………ん？

………おい待てよ。嘘だろ。まさかアイツら………!

「そして罰ゲームを与える人間が装置のレバーを操作し、ハンマーを好きな高さまで吊り上げてロックをかけて固定する。そして最後に、レバーの先端についてるこのスイッチを押せばロックが解除され、ハンマーが重力に従って振り子のように落下する。するかどうか——」

「重力と質量と自由落下による加速によってパワーアップしたハンマーが——対象者の股間を直撃する（ニヤリ）」

『『『フザけんあああああ——っ!!!』』』

思わず僕と雄二、そして常夏コンビが同時に叫んだ。

やっぱりそうか!! さすがの僕でもこの条件下ならどんな罰が執行されるのかは容易に想像が出来た! コイツら、なんて恐ろしい事を考えやがるんだ………!!

「よし、説明も終わったし、早速テストを」

「待て待て待て!!! ちよつと待ちやがれ岡崎!!!」

「あ? なんすか。何か質問でも?」

「質問どころか文句しかねえよ!!! 岡崎テメエ! それはどう考えても罰ゲームの範疇を明らかにこえてんじやねえか!! あんなモン、人間の股間程度で受けられるワケがねえだろ!!!」

坊主先輩の言う通りだ。

あんなハンマーをマトモにくらおうものなら、睾丸どころか下半身の骨もろとも確実に粉砕されることだろう。

「大丈夫大丈夫。死にはしないから多分」

「……………仮に金玉が潰れても、激痛と恥辱と男としての尊厳を激しく失うぐらいで済む。どこにも問題はない」

「それが問題だつってんだよ!!! 万が一これのせいで股間が再起不能にでもなったらどうしてくれるんだ!!!」

「……………? (キョトン)」

「ハツハツハ——」

「——それがどうした？」

「うおおおい!!」

こ、コイツら……なんて澄んだ瞳を……!? 男にとつて最も大切な身体の部位を容赦なく奪い去ることに対して、なんの罪悪感も疑問も浮かんでいないというのか!? サイコパスだつてさすがにこんな悪逆非道じゃないぞ……!

「おい大悟! ムツツリーニ! さすがにこれに関しては俺もあのセンパイらと同意見だ! 芸人でももつと優しい難易度でやるぞ!」

「そうだよ大悟! これじゃ罰ゲームじゃなくてただの公開処刑だよ!」

「ハツハツハ。ノープロブレムだ。罰ゲームつてのはこれくらいのスリルがあるぐらいがベストなんだよ。それにな——」

「それに?」

「——どうせお前らに股間ツレを使う機会があるワケでもねえ(ニヤニヤ)」

「喧嘩売つてんのかゴラ」

これほどまでに僕の怒りと憎しみを呼び起こした発言が今まであっただろうか。

「んじや、これで罰ゲームはいいかい先輩方」

「フザけんな！ こんなモンやるワケねえだろ！」

「全くだ。イカれてるぜ」

「ふーん、そうか。ならいいぜ。その代わりアンタらが清涼祭で竹原とつるんで学園乗っ取るうとした事、包み隠さずバラさせてもらおうわ」

「……………証拠の写真と音声も、しつかり残ってる（スッ）」

「なっ!!?」

「あゝあゝ。かわいいそうだなアゝ。この時期にイ、そんな暴露されちゃったらア、内申どころの話じゃないなアゝwwwもしかして停学かあ？ いいや、最悪学校を辞めさせられちゃうかも知れないなアゝwwwそうなたらお先真つ暗だなアゝ人生台無しになっちゃうなアゝwwwだ、け、どおくもおくし罰ゲームの内容に賛同してくれるんならアゝ綺麗さっぱり、水に流しちやおつか、ぬあゝゝゝ!!?」

「……………同じく（フツ）」

「こ、このクズ野郎共がア…………!!」

大悟のウザい顔とバカにしたような言い方に青筋をピクピクと目尻に浮かべる常夏コンビ。

なんだろう。少しだけあの二人に同情の念を感じる。

「あとは明久と雄二。お前らだ」

「絶対に断る！」

誰が進んで金玉を犠牲にするものか！

「え、やらの？」

「やるワケないだろ！」

「……………本当に？」

「やらねえの？」

「しつこいな！ だからやらないうて——」

スツ↑（僕が凛花さんと野球拳をしてる時の写真（両方ともほぼ全裸））

スツ↑（雄二が天ちゃんといっき飲み対決をしてる時の写真（両方とも完全なる全裸））

「……………」

「『本当の本当の本当に？（ニヤニヤ）』」

「……………や、やり……………ます……………！！（ギリギリギリ）」



「よろしい」

口から血の味がするぐらい下唇を噛み、クズ二人に対しての怒りを抑える。

よし、コイツら後で絶対に惨たらしくシバキ殺してやる。

「よし。全員の了承も得たところで、早速俺達二年を使ってテストプレイに入るぞ」

「クソ、なんで俺らがこんな目に……!」

「そうだよ。せめて最後まで雄二の股間がもてば良いんだけど……」

「ああそうだな——っつてうおおい!? なんで俺が全部引き受けるみたいな感じに

言ってるんだ!? せめて全員で一回ずつだろ!」

そんなの決まってる。僕が受けたくないからだ。

それに雄二の方が僕よりも股間頑丈そうだし、いけるいける。

「ちなみにテスト回数は4回だ」

「え、そんなにやるの?」

「ああ、しっかりしたデータがほしいからな」

大悟いわく、こんな感じでいくらしい。

一回目：データが無い為、とりあえず一番高い位置から落とす。

二回目：一回目のデータと相手の反応を元にし、位置を下げて落とす。

三回目：二回目のデータも考慮した高さで落とす。

四回目：三度のデータを用いて、ギリギリの高さで落とす

ふむ、なるほど。ということはつまり……

((((——一回目は確実に死ぬ!!!)))

なんとしてでも一回目にくらくらうことだけは避けなければ!

「うし。じゃあ準備が出来てる雄二から」

「そうだね」

「……………わかった」

「待て待て待て!! 勝手に決めんな!」

雄二が手錠の鎖をガチャガチャと揺らしながら抵抗する。

「なら俺より三次元現実の女に興味の無い大悟の方が適任だろ!! 股間を失ったところで大して

現状は何も変わらねえ！」

「あ、それは確かに一理あるね」

「……………（コクリ）」

大悟を見る。するとヤツはやれやれ、といった感じで肩を竦めて見せた。

「何を馬鹿なこと言っているんだ雄二よ。いいか？ 俺の股間は大事なんだ」

「——俺をお兄様と慕う我がマイエンジェル葉月ちゃんの為にも」

「よし、コイツからにしよう」

「……………異議なし（コクコク）」

「犯罪に走る前に僕らの手で破壊しておくべきだね」

あんな可愛らしい葉月ちゃんの輝ける未来をこんな俗物によって汚されるなどあつてはならない。

社会と島田家の秩序と平和の為、コイツには今ここで男として死んでもらおう。

「よし、ムッツリーニ。鍵を外してくれ」

「……………ああ（ガチャガチャ）」

「助かった——よしお前ら、早速ロリコンを捕らえて処刑するぞ！」  
「や、やめろ！ 離しやがれ！」

「うるさい！ 誰がやめるかこの性犯罪者予備軍め！ 大人しく粉碎されるろ！」  
「それが世の為人の為ってモンだ！」

「いやだあああああつ！！！」

僕ら三人がかりで拘束しようとするも、大悟はやられまいと激しく抵抗する。  
クソつ、相変わらず力だけは強いなこのキモオタめ！

「ま、待てお前ら！ なら真つ先に明久をやるべきだと思っぞ！」

「あん？」

「……………その理由は？」

僕の方を見て大悟がニヤリと笑う。

ハッ、嫌な予感っ！ だがそうはさせるかっ！

「いずれコイツはその男根を使い、姫路と島田に手を出——」

「爆ぜろ!! (バチバチバチ)」

「あべらっ!?」

バタツ……

ふう、危なかった。

念のために改造済みスタンガンを下下くんから借りておいてよかった。

「さ、大悟も同意したことだし、実験に入ろうか (ズルズル)」

「お、おう」

「……………明久。存外に鬼畜」

ハツハツハ、気のせい気のせい。

そして大悟が気絶して動けなくなっている間に、所定の位置まで引きずってクツシヨ  
ンと手錠と足枷を装着させた。よし、これでオーケーつと。

「——っ！　おい、テメエら待て！　コイツを解きやがれ！」

チツ、目覚めてしまったか。けど残念、時すでに遅しだ！

「それじゃあ二人とも、実験の準備を急ぐよ！」

「おうっ！」

「待て！　いいから一旦俺の話を聞け！　実は俺は——」

「明久！　測定準備完了だ！　レバーの角度、高さ共に最大値にセット！」

「……………機材の不調なし。いつでもいける……………！」

「よしいくぞ、実験開始!!」

「おう!!　落下スイッチ——ON!!」

ポチツ

「やめろ！　よせ！　早まるなああああ!!!」



——一回目、測定終了。

「170度は高すぎたみたいだな」

「そうだね。もう少し低くしてやってみようか」

「……………（コクリ）」

「……!! ……!!」（ビクッビクッビクッビクッ）」

大悟の文字通り身体を張った犠s——測定のおかげで、中々に良い結果が取れた。

このデータを基準として今後は進めていこう。

「さて、次は誰がいこうか？」

「そうだな。なら——」

「ま、待ちや、がれ……！ テメエ、らア……！ （プルプルプル）」



「ん?」

あ、生きてた。

でも今までにないくらい表情が苦悶に歪んでいても痛々しい。いや実際かなり痛かったんだろう。ハンマーが股間に当たった瞬間グシャリっていう生々しい音もしてたし。

「どうしたの、大悟。キツイならそこで寝てて良いけど」

「いいや、その必要はない……それよりも、だ……次の……被験者は……俺に選ばせろ……!」

「なに?」

「俺にはその権利がある……! 次の実験台は——」

大悟が一点を見つめる。

その視線の先には——ツンと逆立った赤い髪が特徴の悪友がいた。

「——お前だアっ!!!」

「よし、任せた」

「なあああっ?!?!」

二番手は雄二で決定だ。

「待て待て待て!! あんなモン見せられてそんなすんなり出来るワケねえだろ! せめてじゃんけんとかくじ引きとかで後腐れなく決めようぜ!」

「なに言ってるのさ。偉大なる英霊の直々のご指名に背くななんて許されないよ」

「……………黙って従え。雄二に拒否権はない」

「このゲス野郎共があ!」

なんと言われようがこれはもう決定事項だ。

雄二には大人しく生n——いや実験台となつてもらおう他ない。

「大悟! 俺達友達だよな! 何とか言つてやつてくれ!」

「…………フツ、お前ならそうゴネると思つてたぜ雄二。安心しろ。実は今まで黙つていたんだが俺はな——とある物を持っている」

そう言つて大悟が取り出したもの、それはクリップで留められた髪の毛だ。

「本当のシャルピー衝撃試験の結果を纏めたレポートだ。特別にコイツを使つて雄二は測定しよう」

「え、そんなものあつたの?」

「ああ。大学の知り合いのツテを使つて入手したもので見ろ。計算式もバッチリこの通

り書いてある」

レポートを受け取って中身を拝見すると、確かにそこには難しそうな数字や記号を用いた計算式が羅列して書いてあった。

「どうやらコレは言葉通りの本物みたいだ。」

「つまりこの書いてある通りにやれば……」

「無事で済むってことか！ それは助かるぜ大悟！」

「……おう」

思いがけないブツの登場に、雄二が安心したような表情を浮かべる。

「なんだあ、雄二だけそんなもの使えるなんてずるいじゃないか。」

「そう思いながら、雄二を装置に拘束する。」

「このレポートだと、高さは138度っていう答えだね」

「……………このくらい？」

ムツツリーニがレバーをあげる。

「結構高えんだな」

「お、おい大悟。大丈夫なのか？ さっきと大して変わらない気がするんだが……」

「大丈夫だ。ちゃんと向こうの教授の添削も入ってるからな」

「そ、そうか。ならいいんだが……」

「じゃあいくよー。スイッチオン」

カチッ

「ちなみに雄二」

「あん？」

「このレポートなんだが……教授からの添削結果はこうなっている」

『大間違い!! 再提出!!』

「……………」

——二回目、測定終了。

「俺は正しいレポートだなんて一度も言った覚えはない」

「うん、確かに言っていないね」

「……………嘘はついていない」

「……………!!! (ビクッビクッビクッビクッ)」

測定の結果、二回目も一回目と対して変わらなかった。しっかりと股間から破裂音はしたし、雄二もちゃんと死にかけてる。

「それで、三回目の被験者はどっちだ」

「ムツツリーニからだよね？」

「……………いいや、明久に譲る」

「うう……………う……………！ テ、テメエら……………！」

よろよると雄二が立ち上がる。

「? どうした死に損ない」

「言い遣す言葉でもあるの?」

「んなワケあるか……! 大悟……そのレポート。俺に見せてみる……」

「これか。別に構わんぞ」

ほらよ、と言って大悟が雄二にレポートを渡す。

それを受け取った雄二は中身を見て、顎に手を当てて何か考え始めた。

「……なるほどな」

「どうしたの雄二。そんな難しい顔して」

「このレポートだが……計算式自体は間違つてはないみたいだ」

「え?」

「途中でミスしているだけで、それさえ修正すればちゃんとした答えが出る。それだから待つてろ。俺が一から解き直してやる」

「雄二。お前シャルピー分かるのか?」

「ああ。内容だけなら高校レベルの物理の問題だからな。楽勝とはいかないが俺でも解けるぞ」

そう言って持っていた紙に新しく計算式をスラスラと手早く書き始める。

すごいな。物理が苦手な僕には絶対に出来ない芸当だ。

「ところで、次は誰にすんだ？」

「ムツツリーニでいいだろ」

「……………!!? (ブンブンブンブン)」

全力で拒否を姿勢を取るムツツリーニ。

「駄目だよムツツリーニ。過去に散った英霊のご指名なんだから」

「そうだぞ同志。男なら潔く受け入れろ」

「……………や、やめろ……………！ 放せ……………っ！（バタバタ）」

早速僕と大悟でムツツリーニを装置に固定する。

雄二や大悟と違って小柄で非力だからとつても簡単だ。

「——出来たぞお前ら。正しい答えは1334度だ」

「わかった。高さを合わせる」

ガチャツ

「じゃあ、1334度始めるよー」

「おう」

「いつでもいいぞー」

「……………（ビクビク）」

「おいおい。そんなビビんなんてムツツリーニ」

「そうだけ。神童の知識を信じろ」

「いくよー、スイッチオン」

そう言うと同時に、スイッチを押す。

その瞬間ふと、雄二が作った計算式の答えが目に入った。

『101度』

……………あれ？

おかしいな。さつき雄二が言っていたのと全然違う値が記載されているぞ？  
見間違いかと思ひ、もう一度目を凝らして確認する。

『101度』



「……………(チラツ)」

現在の高さ……………134度。

(ゆ、雄二のヤツ……………平然と嘘を……………ツ!!!)

——三回目。測定終了。

「……!! ……!! (ビクッビクッビクッビクッ)」

「さあ明久。残るはお前だけだな」

「せつかくだから明久は133度あたりでいってみるか?」

「いやいやいや!!」

ズズズと迫ってくる二人に僕は必死で拒否の姿勢を取る。

今確信した。コイツらはもうデータの収集なんてどうでもよくなってる。確実に僕と僕の股間を沈めにかかってくるんじゃないかと。確かに。

「もう101度って答えが出てくるじゃないか! なのになんでわざわざ高くする必要があるのさ!」

「なんでってそりゃあ……決まってるだろ。なあ大悟」

「え?」

雄二が怪しい笑みを浮かべて言う。

「この問題にはな……最後に一つの係数をかける必要がある」

「ひ、一つの係数……?」

「そう——憎しみの係数ってヤツをな」

「さらばだっ!!」

こうなったら取るべき手段は一つ……逃げる!

こんなアホみたいところで僕の大切な遺伝子を失ってたまるか——

「どこへ行くんだあ……? 逃亡なんて重罪だぜえ……? (ガチャリ)」

ああクソっ! 大悟にいつの間にか先回りされて鍵をかけられている! ならば——

「た、助けて姫路さん! 秀吉! 美波——ってあれえ!?! なんていなくなってるの!?! とうか他の皆や常夏コンビも消えてるし!」

「ああ、もう放課後だからとくに全員帰したぞ。ここにはもう俺達四人だけの空間だ」  
「そ、そんな……! や、やめろ! 来るなクス共——」

ガシッ

「……………逃げさナイ。死ヌ時は……皆イツシヨ（グググ）」  
「ムツツリーニ…………!!」

「さあ、楽しい楽しい実験の再開といこうぜ明久ア…………!」

「まだまだ時間はたっぷりあるからなア…………!」

「いやあああ————っ!!! 誰か助けてえええええ————っ!!!」

僕の必死な叫びもむなしく、瞬く間に捕らえられ処刑台に固定される。

やがて——

2011 第七十六問 S h a l l w e シャルピー?



???

『あ、明久が泡吹いて死んだ!』

『……………やり過ぎたか』

『いや、まだ息はあるし金玉は辛うじて潰れてない! 教師連中に見つかる前に水でもぶっかけて起こすぞ!』

「うふふ……………。いつ見ても楽しい子達ですわ」

そう呟き、カタカタと自室のパソコンを操作する一人の少女。

高校生離れた凹凸のあるスタイルに口元の黒子がチャームポイントで、大和撫子を体現したような美貌をもつ女子生徒だ。

画面に映っているのは二年生が四人。何やら仰々しい機械を使ってバカ騒ぎをしている様子。教室にしかけておいた、とある後輩の男子生徒から購入した小型カメラを通じてこの光景を見ている。要するに盗撮だ。

「……むう。わたくしと話している時よりも楽しげではありませんか」

「女性の気持ちを弄ぶなんて、相変わらずいけない人ですわ。岡崎君……」

しかし、彼女はこんな後輩達の悪ふざけを見るためにわざわざ盗撮なんて真似をしているのではない。

その目的は……彼らの中にいるリーゼント頭と筋肉が特徴の男子生徒を眺める為に他ならない。年下だが、彼は彼女にとって特別であり、今の自分を形作ってくれた“恩人”とも呼ぶべき存在だ。それこそこうして犯罪まがいの行為に手を染め——異性としての感情を抱いてしまう程に。

「清涼祭の時は高城君の手前、大人しくしていましたが……わたくしこう見えてやる時はやる女ですよ？」

彼は間違いなく、自分のことなどこれっぽっちも覚えていないだろう。今の彼にとつて私は『高校の一先輩』程度の認識しかないワケだ。

けど構わない。彼が忘れていてもこっちはしっかりと覚えている。彼によって与えられたものは、色褪せることなくこの記憶の奥深くに鮮明に刻みこまれている。それだ



けで今は十分だ。

「岡崎君……やっぱり貴方は、わたくしの思った通り——あの頃から何一つ、変わっていない。見た目も中身も……何もかも」

「嬉しい反面ちよつぱり妬けてもしまいますが……まあ、それは追々気づいて頂ければよいこと。焦る必要はありませんわ」

「せっかくのこの機会……わたくしも思う存分、羽目を外させてもらいますわ」

そう言ってパソコンを閉じた。その瞳はトロンとして妖艶ながらも、どこか獲物を狙う獣のような鋭さも感じさせる。

そんな彼女の名前は——小暮葵。

文月学園の三年次席の才女にして——恋にときめく乙女である。

## 第七十七問 肝試し開始と不穏な気配

—— side 大悟

「こりやまた、随分と手が込んでやがるな……」

出来上がった肝試し会場を一見し、俺はそう言葉を漏らした。

罰ゲーム装置のお披露目から翌日。つまり今日は補習と夏期講習最終日を使って執り行われる二年VS三年の肝試し対決だ。

本当は俺達二年の内のみでやる予定だったのだが、急遽三年と学園側の介入により、学園全体を巻き込んだイベントになった。その為残りの会場の設営をあっちに一任したのだが……その出来映えは予想以上だ。

ボロボロの廃墟（を模した）内装は薄暗く、じつとりとした陰鬱な気配を漂わす。べつたりと生々しくつけられた血糊にお札、天井まで伸びた緑の蔦。またその嫌な雰囲気よりも強く出す為なのか、エアコンをガンガンに効かせていて、そのせいで少し肌寒い。

これら全てが良い塩梅で合わさっていて、まさにお化け屋敷特有の、今にも怨霊の一体や二体平気で飛び出してきそうなおどろおどろしさ。そして得体の知れない不気味さを全身で強く感じる。

よくこの短期間でこれだけのものを造り上げたものだ。そんなよそこの遊園地にあるヤツなんて目じやないほどの高水準な完成度だと感心せざるを得ない。

「うむ。ここまでやったとなれば、学園側だけでなく三年もかなり本気のようにやよつ。ほどワシらを怖がらせてそれを見て楽しみたいんじゃないのう」

隣に立つ秀吉も俺同様、感嘆の声をあげる。

まあ、確かにそれもあるんだろうが、何よりも負けた方は雑用＋シャルピー衝撃装置による股間粉碎というダブルパンチが待ってるからな。ここまで本気になるのも分かる。

「まあ、こんなものテキトーにやったりや終わんだろ。さっさと終わして帰ろうぜ」

「む？ なんじゃ大悟。あまり乗り気じやななさそうではないか」

「まあな。肝試しなんざ全く興味ねえし」

そう言つて大きなあくびをして見せる。

補習がサボれるから仕方なく参加してるだけで、本当は家でエロゲの続きやりてえんだ俺は。こうしてる間も画面の向こうで女の子達が今か今かと俺の選択肢を待ってる

んだよ！ 早くイチャラブベッドインしてえんだよ！

「大体こんなん子供騙しの作り物に過ぎねえ。だつたらんなモンにガチに怖がる必要も理由もないじゃねえか。馬鹿馬鹿しい」

「……………ほう？」

「な、なんだよ」

秀吉がニヤニヤしながら見てくる。

「違うじゃろ？」

「あ？」

「ワシには分かるぞ。大悟は肝試しにやる気がないんじゃなく、肝試しをやりたくないんじゃない」

「な、何言つてやがんだお前」

「しらばつくれるでない。だつてお主は——生粹のビビりじゃもんなあ？」  
「うっ…………」

秀吉のからかうような言い草に、俺は凶星を突かれ言葉に詰まる。

そう、認めたくはないがコイツの言う通り、俺は自他共に認めるビビりだ。こんなデカイ凶体しておきながら、ちよつとした物音や虫を見たり聞いたりするだけで声を上げて驚いちまう。肝っ玉がクソ雑魚なのだ。

そのせいで如月ハイランドパークではひでえ目にあつたんだよな……特に優子によつて。

「……ば、バカを言うなよ秀吉。確かに俺がビビりなのは不本意ながらちよつと認めるが、前よりは全然強くなつたぞ。絶対に」

「強くなつた、のう……（ニヤニヤ）」

「そ、その目は疑つてやがるな!? 言つとくがマジだぜ! たゆまぬトレーニングにより鍛え上げられた俺の心臓は、何事にも動じないまさに不撓不屈のものと成長し——」

「あ、足元にゴキブリがおるぞ」

「おじゃああツツ!!?」

物凄い早さで跳躍し、壊さんばかりの勢いで壁にもたれかかる。

無理無理無理無理無理!! ゴキブリが虫で一番苦手なのよおおおっ!!

「秀吉!! 殺虫剤だ!! 殺虫剤と新聞紙とゴミ袋を持つてこい! いいや持つてきて下さいお願いしましゅうううううー!!」

「落ち着け。冗談じゃ」

「いやマジでお願い……ええ? 冗談だあ?」

「うむ」

「な、なんだよもう……焦っちまったじゃねえか。やめろよ秀吉そういうの。寿命が縮むかと思」

「本当はその壁に二匹貼り付いとるぞ」

「いやあああああー……ツツツ!!!」（ガチャバタン！）

悲鳴を上げながらロツカーの中に逃げ込む。もう、ロツカー大好き。

「秀吉！ は、早くっ！ 早くそいつらを始末しろツツ!!」

「引っ掛かったな、これも冗談じゃ」

「な、なに……?!? 秀吉お前エ……一度ならず二度までも俺を騙したのか!!」

「あはははっ！ やっぱり昔と何も変わっておらぬではないか。相変わらずお主のビビり時の反応は見ていて傑作じゃのう」

ロツカーの外から秀吉がこちらに向かって手を叩いて笑う姿が見える。

それに対し激しく恥辱感を覚えた。おのれ秀吉イ、親友たる俺のことをまるでオモチャのように扱いやがって、この天使の皮を被った小悪魔めえ……！

「中学の頃はこうしてたまにお主をからかったものじゃのう。虫のオモチャをばらまいたり、水鉄砲を首筋に当てたり、音の鳴るビックリ箱を開けさせたり……その全てでもれなくお主は今みたいな反応をしてワシを笑わせてくれたのじゃ。いやはや懐かしい」

「やめろそうやって人の恥ずかしい過去をほじくりかえすのはア！ ……つたく、にし

てもよくそんな細かく覚えてるもんだなお前は」

「当たり前じゃろう？ たった一人の友達……いいや相棒との思い出は一つたりとて忘れる事などあるものか」

「！」

柔らかな笑顔を浮かべて言う秀吉にそうかよ、と素っ気なく返しながらロツカーを出る。でも少しだけ、気持ちが和らいだ。

中学の頃、それぞれに友達が全くおらず、本当の兄弟のように俺と秀吉は常日頃からずっと一緒に過ごしてた。見た目も性格も全く違うのにも関わらず、不思議と妙にウマが合う関係。こんなんで親友同士になれるのだから、人生というのは不思議なものだ。

特に初めて秀吉と言葉を交わした時の事は今でも鮮明に覚えている。互いに強烈なファーストコンタクトだったからな。それからの他愛の無い日常の数々。どれもこれも俺達が紡ぎあげてきた色褪せない良い思い出だ。

『どけ、秀吉!!』 コイツだけは……コイツだけは俺が!!! アイツを死ぬほど傷つけて……奪って……泣かせやがったこのクズ共を徹底的にブチのめしてやらねえと、俺の気が治まらねえんだよ!!!』

『いい!! もういいんじや……!!』 お願いだからやめてくれ……!! これ以上続けたら……本当に殺してしまう……!! そんなこと……ワシも姉上も望まない!!! (ポロ……ポロ……)』

——まあ、忘れたくても忘れられないクソツタレな記憶というのも、中にはあるんだがな。

ああ………ありや本当に、文字通り俺にとつても、アイツにとつても—— 〃黒歴史〃だったな。

(もう二度と……あんな思いは……!)

心でそう反芻し、思わず拳を握りしめる。

そんな俺を不思議に思ったのか、秀吉が俺の顔を覗き込むようにじいつと見てきた。

「……? どうかしたのか大悟よ。やけに難しい顔をしておるが」

「………はは、秀吉。お前も随分と、そんな風に心から笑えるようになったんだな



……良かった。本当に……」

「は？ いやいや、面白かったら人は普通笑うじやろうに。何を急に言い出すのじゃ？」  
「いや、なんでもねえ。それよりもさつさと待機場所に戻ろうぜ。確か俺達はFクラスだったよな」

「う、うむ。そうじゃな」

俺は踵を返して歩き出す。

そうだ、何をもう終わつた事を無駄にダラダラ考えているんだ俺は。余計に気分が悪くなるだけじゃねえか。もう俺も秀吉も……そして優子もあの時の記憶を必死に押し殺して今の新しく楽しい人生を一生懸命過ごしてるんだ。さすがに忘れるとまではいかないものの、無理に脳裏に意識してそれに付随した態度を見せたりして、コイツらの古傷を抉るような真似は絶対にしちやならない。

……昔の事だから、と簡単に割り切れたら、どれだけ楽なのだろうか。この心に深くのし掛かる重荷がどのくらい外れるだろうか。……いや、それは出来ない。そんなの無責任だ。バカな俺でもそれくらいは理解してる。手前のケツは手前で洗わないでどうるするんだって話だ。けど、それはあくまでも俺だけに留まらせることだ。二人にはもう二度と、過去の呪縛に巻き込ませない。巻き込んだじやならない。

……この「罪」を未来永劫、背負い込むのは俺一人がいい。

そう思いながら、Fクラスに戻ろうと――

『馬鹿だネ間抜けだネうつけものだネ！　まだあの女に誑かされてるみつともない頭悪

イ!!』

「!？」

不意に耳に響いた、妙に甲高い声。

思わず立ち止まり振り向く——が、そこには相棒の姿のみがあるだけだった。

「なんじゃ?」

「あ、いや、今なにか妙な声が……」

「声? ワシには何も聞こえなかったが……気のせいじゃろう?」

「でも確かに……」

キョロキョロと見渡すが、さっきの言葉の主らしき姿はない。

強いて挙げるなら、ふと視線をやった教室の奥の物陰にて、黒い布のようなものがヒラリとはためく様子が見えたのだが……おそらく風で浮いたカーテンか何かだろう。大したことじゃない。

「おかしな事を言っていないで行こうぞ」

「……そ、そうだよな。変なこと言ってますまん」

首を傾げながらも、秀吉の言う通り空耳なんだと思い、歩みを再開する。

……にしてもなんだったんだ、今の……騙されてるって、聞こえたような……?」

—— Fクラス。

『ね、ねえ……。あの角、怪しくない……。？』

『そ、そうだな……。なにか出てきそうだよな……。』

モニターから、最初にスタートした男女ペアの不安そうな様子が見える。

手には同志が手ずから用意した高性能カメラを携えていて、そこから俺達二年に映像と音声を送られてくる仕組みだ。同志曰くカメラを使う目的はキチンとチエツクポイントを通したかどうかの証拠を見る為と、それぞれに不正行為がないかの確認をする為らしい。

そして肝心な肝試しの組み合わせだが、これはどういうワケか男女ペアという決まりになった。俺はなんでだよ、と思つて立案者の雄二にその理由を問いただしたところ、

「特に深い理由はねえよ。俺はただ地獄の鉄人補習フルコースをサボリたかつただけだからな。それに男女ペアの方がイベントとして盛り上がるだろ」

「そうか———んで、本音は？」

「翔子にペアを組むように脅された腹いせに全員を巻き込んでやろうと思った」

との事だった。うん、なんとも雄二らしい私怨タラタラな理由だ。

まあ、年頃の異性で組ませてキャツキャやらせた方が絵面的にはいいよな。女同士ならまだしも大の男二人が作り物のお化けにぎやーとかうわーとか騒ぎ立てる様子とか誰得、って感じだし。オマケに吊り橋効果も期待出来るしな。

なので俺もその例に習い、ペアを組もうとしたのだが、

「おい相棒。組み合わせだがもちろん俺と組（ボキリ）——」

「あ、うっかり力を入れすぎて大悟の肩を脱臼させちゃったわ。大悟？ もちろんアタ

シと組んでくれるわよね？ ……ね？（ギチギチギチ）」

「ふあ、ふあい……………も、もちろんで、ひゅ…………」

「やった、嬉しい♪ さて…………と、というワケで秀吉。大悟を誑かした罰よ。歯を食い縛りなさい」

「何故ワシまで!? 姉上、それはさすがに理不尽極まりな（ボキリ）——ぐ、ふお…………!」

この有り様である。

クソ、優子といい霧島といいどうして俺の周りには暴力系ヤンデレしかいねえんだ!

もつとこう、ひたすら相手を敬ってベタベタ執着するだけのような正統派なヤンデレ  
はいないのかよ！

『そ、それじゃ、俺が先に行くから』

『うん……』

古めかしい洋館の廊下を思わせる内装の曲がり角を警戒しながら進んでいく。

「み、美波ちゃん……。あの陰、何かいるように見えませんか？」

「きき気のせいよ瑞希。何も映ってないわ。ねえ岡崎？」

「ま、まままま全くだな」

隣ではFクラス的女子勢が怖がりつつも手を取り合ってモニターを見ている。

気持ちはわかる、凄く。

「……………」

「大悟。怖かったらワシの胸に飛び込んできてもよいぞ。優しく抱き締めてやろう（ニヤニヤ）」

「……………は、はっ、誰が」

嘲るような声色と表情の秀吉にそう吐き捨てた。

男の娘の慎ましく何者にも犯されてはならない胸にダイブするなど、そんな不敬で恥ずかしい真似が出来るものか。

そして意を決したように、カメラの映像が急激に向きを変える。そこには……特に道があるだけで、何者もいなかった。

「な、なによ。何もいないじゃない……」

「良かったです……」

「お、俺は全くビビッてねえがな——」

『『ぎやあああああ——っ!!!』』

「『『きやあああああ——っ!!!』』」

映像の驚きの声に俺達三人の驚きの叫びがミックスされてこえました。

うおおい!! 急に大声あげんのやめろよ! なんだってんだよゴラア!!

「……………失格」

「うくん……。先発隊が一つ目の曲がり角でいきなり失格だなんて……。向こうも本気だね」

「だな。さすがは三年生といったところか」

「油断がならぬのう」

明久達が感心したように口々にそう言う。

え、なんでコイツらこんなにも冷静でいれんの？　心臓バグってんの？　驚きという感情を北極かどつかにぶん投げでもしてきたん？

その後も何組かがスタートしたのだが、全員が早い段階で失格していった。向こうは口裂け女やら生首やら貞子やらが暗闇の中から突然奇声と共に現れるという、オーソドックスながらも確実に相手を驚かせれる手法を用いてきている様だ。チクシヨウ、見てるコツチは心臓に悪いっつうんだよ……。

「最初は様子見と思っていたが、この感じだとそうも言っていられないな。あまり点数の高い連中が失格になりすぎるとチェックポイントが辛い」

「そうだね。向こうはチェックポイントには点数の高い人を置いてくるだろうし、僕らも出来るだけ戦力は温存しておかないと」

「んじや、コツチも手を打つか」

そう言うのと、雄二は次の指示を出した。

そして次に出陣するは、

『行ってくるぜー』



『カメラは俺が持つぞ』

我がダイゴブックスの超常連。須川と福村の非リア充コンビだ。

雄二曰く、まずはチエックポイントまでの道のり、三年側の驚かせてくる場所とタイミングを把握するため、あまりこういういったものの類いにビビらなそうな度胸のあるヤツを選定して行かせたらしい。

なるほど、確かにチエックポイントまで辿り着けないことには話にならないし、そもそもこれは俺達二年と三年の勝負で、勝つ条件が全てのチエックポイントの敵を倒してゴールすることだ。明久の言った通り、三年は当然勝つための人材をチエックポイントに置くだらう。Aクラスの常夏コンビはもちろんのこと、あとは小暮先輩……いや、最悪高城さんが待ち構えている可能性すらある。いくら明久の完全上位互換とはいえ、この学歴至上主義の文月学園において三年の首席に君臨するほどの秀才だ。苦手科目でも突かない限り、勝ち目は無いだらう。だからその為にも、こんな序盤も序盤で、ただいたずらに貴重な高得点保持者を使い続ける状況は全くもってよろしくない。雄二の考えは妥当な判断だらう。

『お。あそこだったか？ 何か出るって場所』

『だな』

そんな雄二の狙い通り、須川達は何の躊躇いもなく先に進んでいく。問題の曲がり角に到着、カメラを向けた途端、

「きゃあああああーっ!!!」

「ツツツツ……!!!」

生首&口裂け女のご登場。

声を出さずになんとか耐えた。

流石に何回も見せられた故、ある程度の耐性はあるみたいだ。……それでもギリギリだが。

落ち着け、落ち着くんだ岡崎大悟。急に出てくることにいつまでもビビってどうする。思いつくんだ。ドキドキ文芸部のビックリ演出でメンタルが死にかけてあの時の想像を絶するような苦行を……!

『おっ。この人、少し口は大きいけど美人じゃないか?』

『いやいや。こっちの方が美人だろ。首から下がなからスタイルはわからないけど、血を洗いながらしたら綺麗な筈だ』

が、そんな俺達とは裏腹に、須川達はなんとも無さそうな感じで相手の怪異を見定めている。す、すげえな……あんな急に現れて身動き一つしねえとは。

その後も進んでいた先々で、須川達は似たような反応を見せる。

『お？ この提灯のお化けだな。けど掴めないぞ？』

『召喚獣なら掴めるだろ。試獣召喚っ』

『おお、見ろよ須川。首吊り死体だ』

『結構出来がいいんだな』

『これが噂の貞子か。目は怖いが、スタイルと顔立ちは良さそうだな』

『後で兄貴に二次元のエロ可愛いイラストに起こして貰おうぜ』

ふむ、それについては厳正に検討するでしょう。

実際その手の怪異達をテーマにしたエロアニメやエロ漫画もあるからな。売上も見込めそうだな。

「な、なんでアイツらあんなに平気そうなのよ!? アキ達も怖くないの!? あんなにリアルなお化けなのよ!?!」

青くなつた島田がそう明久達に問う。

「うーん、別に命の危険があるわけじゃないからなあ」

「グロいものはFクラスで散々見ているしな」

「……………あの程度、度々殺されかけている明久達に比べれば大したことはない」

「姉上のエスカリボルグでの拷問に比べれば可愛いもんじゃ」

「全くだ」

俺もビツクリ演出がダメなだけでホラーやグロテスク自体はさほど苦手じゃない。エロゲーやアニメだってそういう表現や描写があるもの、いっぱいあるしな。Annotherとかにくにくとか。ただ夏花ちゃんのアナル浣腸液からの腹部破裂臓器ぶちまけ死亡シーン、あれはあかん…………。あかんのや…………。

「んむ？　　そういうえば雄二。お主、肝試しは極力男女ペアにするとおらんかったかの？」

モニターを覗く秀吉が雄二に聞いた。

「だいたいそうなるようにしてあるんだがな。俺達のクラスはほとんどが男だからどうしても数が合わないんだ」

「確かに、比率が男ばつかで女子が二人、秀吉が一人だからなあ」

「……………男があぶれまくる」

「…………ワシを男の括りから省いた理由については、後で詳しく聞かせて貰うからの、大

悟

「あ?」

秀吉がそう言つて俺をジト目で睨む。

ん? 俺なにか間違つた事言つたか?

『あー、畜生。なんでこの俺が須川なんかと……!』

『お前がモテないのが悪いんだろ』

すると、そんな文句を交えた二人の会話が耳に入ってきた。

まあ、女子との二人きりを楽しめると思つたのに、いぎ蓋を開けてみたらこのザマだからな。アイツらが不満に思うのも無理はない。

『何だと須川……? お前だつて、朝から二十人くらいの女子に声をかけて全滅していただろうが』

『ち、違う! あれは別に断られたわけじゃない! 向こうには向こうの事情があつただけで、お前のような生涯童貞男と違つて、俺がモテないわけじゃない!』

『お、俺だつてそうだ! 須川のような永世童貞野郎と違つて、俺はモテないわけじゃない! タイミングが悪いだけなんだ!』

『『ああ!? んだこの童貞が!!』』

「お、メーターが一気に真っ赤になったぞ」

「……………失格」

「アイツらは何をやってるんだ……」

言い争いの音量が規定値を超え、須川達はあえなく脱落した。

あーあ、せっかくチェックポイント直前のところまで行つてたのにな。ったく、凶星を突かれたからつてあんなにも分かりやすく、かつ過剰に反応するとはなんと無様で情けない。童貞と言われて取り乱すヤツあ、自分で童貞だと認めてる証拠だと言うのに。そんな簡単なことも分からずああして見栄っ張りに走るとは。やれやれ、これだからケツの青い童貞は……、

「いやお前も童貞だろうが」

黙れ雄二。俺の心を読むんじゃない。

「けど、須川君達のおかげで相手の仕掛けが分かったね」

「だな。後続の朝倉達もいることだし、チェックポイントまで行くのも時間の問題だろ」

雄二の言葉通り、須川達の少し後に出陣していったペアのカメラが大分先まで進んでいた。須川達同様、途中の驚かせてくる仕掛けにはあまりビビる様子を見せていない。俺だったら絶対最初の生首で一発アウトになる自信があるというのに。

さっきの須川達といいアイツらといい、今だけはアイツらのあの肝つ玉が羨ましく思うぜ。

『おお。チェックポイントか。結構余裕だったな』

『Bクラスの教室だけあって長い迷路だったけどな』

そうこうしている内にチェックポイントに到達。

そこには化学担当の布施と、三年らしき男女二人組が待ち構えていた。ようやくちゃんとした召喚獣を用いての戦いが見れるのか、そう思いながらヤツらの様子を見守る。

『『『試獣<sup>サ</sup>召喚<sup>モン</sup>つ』』』』

布施の召喚許可の下、それぞれの召喚獣が喚び出された。

Aクラス 近藤良文 326点

化学 &

## 大竹喜美子 263点

まずは三年の戦力たる点数が表示される。

「おいおい。んだよありや。どっちも点数普通に高いじゃねえか」

「うん。やつぱりAクラスの人をチエックポイントに置いてきたね」

「三年は予備校に通ってる連中も多いだろうからな」

表示された点数を見て、俺達は口々に言葉を漏らす。

流石に同志や姫路ほどまでイカれてるワケではないが、それでもAクラスに在籍する生徒としては十分に相応しいであろう高得点だ。大学受験の為に相当な勉強量を増やしたが故のところもあるのだろうが、だとしても300点オーバーなんてそうそう簡単に取れる点数じゃない。改めて最上級クラスの生徒と俺らのような底辺クラスの生徒の間の格の圧倒的違い……勉強に取り組む姿勢、壁の大きさを思い知らされた瞬間だった。

「これ、アイツらじゃ絶対勝てねえだろ」

明久や雄二に比べ日頃の接点が少ないとはいえFクラスのクラスメート。テストの点数を見なくても大体予測がつく。

ハッキリ言って相手が悪すぎる。勝つどころかろくに勝負になる可能性すら見えな



い。一方的な虐殺になること間違いなしだ。

いや、開始と同時に瞬殺されるなんてことも十二分にあり得——

Fクラス 朝倉正弘 59点

化学 &

有働住吉

---

『『ぎゃああああっつっ！』』

モニター越しにこだまする朝倉達の断末魔の叫び。

予想より酷かったな。試合開始どころか点数が全部表示される前にお亡くなりになられるとは。

「まあ、こんなもんだよな」

「そうだな。特に驚きはないな」

「チエックポイントは純粋な点数勝負だもんね……Fクラスじゃ到底勝てる訳がないよね」

一瞬しか見えなかったが、今の三年と朝倉達の点数差はおおよそ六倍近くあった。誰がどう見てもこちらの完全なる敗北だ。

けどこれでいい。アイツらを出陣させたのはチェックポイントの突破じゃなく、そこまでの道のりと向こう側の仕掛けを把握するためだからな。つまり仕事はキツチリとこなしてくれたってワケだ。

「よし、必要な情報は揃ったな。これで他のクラスの連中を送り込める確率は上がる筈だ」

そう言つて雄二が振り向き、再び待機している連中に向かって指示を出す。

「皆！ ここは一気に勝負を決めるぞ！ 今の連中に対抗できそうな点数のペアはどんな突入してくれ！」

ガタツ！

『『俺たちに任せとけっ！』』

「いやお前らは対抗できる点数じゃないだろ!!」

なぜか真つ先に自信満々な様子で立ち上がったFクラス連中。それに対して雄二が

思わずツツコミを入れた。

……まあ、なんだ。実力の有無はどうあれ、揺るぎない自信を持つのは良いことだ――

『やっぱりあの女、見てて鬱陶しい。××の癖にいい子ぶって嘘ばかり』  
『本当……アンタが死ねばよかったのに』

「っ!？」

突然、俺の耳に声が聞こえた。

まるで幼い女の子のような優しくとろけるような甘く澄んだ声色だ。だがその内容はとてもそれとは不釣り合いなほどに黒く、刺激的で、憎々しさが溢れている。

「……………!？」

「? どうかしましたか? 岡崎君」

「さつきからなにキヨロキヨロしてるのよ」

「いや、今耳元で声が出たんだよ。俺好みのキュートな少女ボイスの罵声が……」

「こ、声ですか? 私には聞こえませんでしたけど……美波ちゃんはどうですか?」

「ウチにもそんなの聞こえなかったわ。な、なによ岡崎。まさかアンタまでウチらのこと驚かそうっていうんじゃないでしょうね」

「いやいやちげえよ。俺は本当に聞こえて……」

「やめてよねそういうの。た、ただでさえこんな時なんだから……」

「そうですっ。あまり意地悪なことはやめてください」

「いやだからよ……」

そんなつもりじゃない、そう弁明しようとしたが島田と姫路の様子からこれ以上言っても無駄だと思いやめた。

(やつぱり気のせいかなあ)

それによくよく考えたらこんなところに少女なんているワケないじゃないか。現実を見るんだ俺よ。あれだ。最近エロゲのやりすぎで睡眠不足な日が続いてたからな。おそらく俺の少女に対する愛と慈しみの深さと連日の疲労感が合わさった結果、幻聴が聞こえてしまったんだろうな。

(しっかし、幻聴とはいえ物騒な事を吐くじゃねえか。幼女か……特に葉月ちゃんに死ねなんて面と向かって言われたら流石の俺でも立ち直れな……)

『大悟お兄様、葉月のことそういうエッチな目で見てたんだあ……うふふ、小学生相手に発情するなんて、どうしようもない変態さんなんですな……♪』  
『キンモーいつ♪ ばーか♪ ロリコンで変態な大悟お兄様なんてえ……死んじゃえ死んじゃえ、ですっ♪』

.....。

(.....最高じゃねえかツツ!!)

「うええっ?! ちょよ、ちょつと岡崎、アンタ大丈夫?」

「あの、岡崎君。は、鼻血が出ちゃってますよ?」

「……………一人とも。俺と一緒に幼女愛好家の道を極めないか？」  
「は？」

俺は笑顔で二人にサムズアップを送る。

結論：幼女（葉月ちゃん含む）の死ねは罵倒にあらず、むしろありがたいご褒美なのである。純真無垢な彼女達から発せられる棘のついた鋭い言葉の数々は、人類にとつてはむしろ原動力……タンパク質やビタミン、炭水化物のように、明日を力強く生きていく為の貴重な栄養源と言つても過言ではないだろう。その言葉を一つひとつ浴びるごとに心と下半身が固く熱く滾り、雄々しく清らかに立ち上がり、体の奥底からエネルギーが濁流のように押し寄せ、漲ってくるのだ。つまりそれは、人類にとつて幼女という存在が強大かつ必要不可欠であり、同時に世界秩序の維持と安寧へと導いてくれる平和の象徴を意味しており――

「それはお前だけだロリコン」

だから心を読むな、クソ雄ニコラ。